Saito, Mokichi
Kakinomoto Hitomaro

Ea:

AITO (MOKICHI)

MOTO NO HITOMARO.

C.C. P.333.



齋藤茂吉著

柿本人麿

評釋篇
卷之上

岩波書店刊行

自序

本卷は、「柿本人麿評釋篇」の上半をなして、萬葉集中、柿本朝臣人麿作歌、柿本朝臣人麿歌と題詞にある長歌短歌、右柿本朝臣人麿作、或云柿本朝臣人麿作と左注のある長歌短歌を評釋したものである。

附錄に、藤原宮之役民作歌、藤原宮御井歌一首幷短歌、日並皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十三首の評釋を加へた。此等は共に作者の不明なるものであるが、人麿と作歌的關係が存するだらうといふ說を顧慮したためである。

評釋の初の意圖は、總論篇所收の「柿本人麿私見覺書」といふ文章の終りに、短歌のみ若干首を選釋して附けるつもりであつたが、ついで增補の意欲を感じ短歌の全部を評釋しようと思ひ立つに至つた。それゆゑ私の爲した人麿短歌評釋は、昭和三・四年の交から五・六・七年あた

りに書いたものもあり、大多數は昭和八年の春から昭和八年歳末に至るまでに書き畢へて、直ぐ印刷所にまはしたものである。それから、初の評釋計畫は長歌全部を除去するつもりであつた。私はこれまで一篇の長歌をも作つたことがない、その力量を以て長歌を云々することは不可能だと思惟したからである。然るに土屋文明・武田祐吉二氏は、人麿を評釋するに長歌を除去してしまふことはその結果の薄弱なるべきを云はれたので、昭和十年七月下旬から長歌評釋に著手し、同年十二月三十日に書き畢へるに至つた。本卷の體裁が短歌評釋、長歌評釋と分離したるは是の由縁に本づいてゐる。長歌の評釋は、山田孝雄博士の萬葉集講義に負ふところが特に多い。

評釋は、題意、語釋、大意、鑑賞の四つに分けてゐるが、初期に書いたものにはさういふ區分が無く、かたがた體裁が統一してゐない。また私自身の好みとしては、寧ろさういふ區分を欲しないのだけれども、今は繁雜を避くべき區分の便法に隨ふこととした。

語釋には、能ふかぎり學說文獻の記載に努めた。これは一は萬葉學發展の徑路を追尋するこ

ともなり、一は先賢の學德を敬慕することともなるためである。從來の諸注釋書ややともすれば、この記載を怠つた觀があるのを見て、敢てこの實行を試みた。例へば、依羅娘子の歌の、『石川貝』は『石川峽』の意だとする說は、橘守部、近藤芳樹の順序に記載したるが如きである。そして、『東野炎』を『ヒムガシノヌニカギロヒノ』と訓ませた等、定說にまで善導した學者の名は、これを崇んで後進の心中に常住せしむべきだと謂つた如きである。併し參考した注釋書に限があり、雜誌所載の論文等に見落があることとおもふから補充せられむことを希ふ。

語釋に當つて、同語の用例を並べ記し、幾度か重複するのをも厭はなかつたのは、この評釋の目的を常に作歌實行の修練と分離せしめざらむと思つたためである。斯くのごとくにして、全貌極めて煩瑣繁縟のものになつたが、今や奈何ともなし難い。

大意の項は、必ずしも口語に直譯したものではなく、大體の意味を記すにとどめて置いた。短歌の部に於いてその傾向が著しいが、長歌の部では口語に直譯しようと試みたところが多いやうである。

鑑賞の項に於ては、鑑賞の記述は、願はくは人麿作歌衝迫の忠實な解明として役立たしめたいと欲したのであつた。けれども、これとて所詮一の我見に極まるべく、現代の一歌人が人麿の作つた古歌を對象として、放肆な一家の見を縷述したといふことになるのであらうか。

この評釋を爲したとき、殆ど盡く先進の學說から恩賴を蒙つた。從つて自力の新說といふやうなものは皆無だと謂つて好く、偶有るも皆覺束ないもののみである。さういふ風に私に影響を與へた先進の名はその個處個處に記して置いたが、なほ、鴨山考・辛乃崎考等の場合に盡力せられた人々の名をもその個處個處に記して置いた。その他種々の點について助力せられた先輩諸友のことはこれを補遺篇に纏め記して感謝せむとおもふ。

短歌評釋參考の項に、外國人の手に成つた外國語翻譯を記して置いたのは、他意あるのではない。本邦でも既に岡田氏宮森氏等の選譯が出版せられてゐるほかに、近く日本學術振興會第十七小委員會の英譯萬葉集が出でむとしつつあるので、其等に前行した外國人の翻譯を參考比較するもまた興味あることにおもひ、また翻譯歌に顧慮せられる人々の手數を省くうへにも役

立つこととおもつたのであつた。纂集につきては、佐佐木信綱（フイツマイエル・チヤンバレン・ピアソン・デイツキンズ）・河野與一（ピアソン・グンデルト）・藤森朋夫（ボノー）諸氏の好意に依り、家藏のもの（アストン・フロレンツ・ロレンツエン）をも引用した。その他は私の目が及ばなかつた。人麿の歌の『訓』が、總論篇所收のものと、この評釋篇所收のものと違ふところがある。これは、總論篇は概ね岩波文庫本新訓萬葉集に據つて記載したためである。併し、評釋に際しては新訓の説に從はなかつた箇處があるから、今後は評釋篇の訓に據つて總論篇の訓を直して置いてもらひたい。

人麿の歌を味ふに、歌のうへを慌しく驅歩し駈拔けては味ひ難いといふことがある。これは幾たびか低徊し、往反し、執著し、肉迫して味ふことが必要である。吾等が苦澁するやうなものではないが、人麿は作歌に際して全力を振つてゐる。ゆゑに鑑賞に際してその苦心の幾分にでも參ずることが必要である。吾等はこれまで餘り安易に歌の上を通過して來た。人麿を歌神と敬ひ歌聖と尊びながら、人麿の評價が常に動搖して止まなかつたのは鑑賞の覺悟がいまだ徹しないためであつた。若し人々が本卷の評釋の如き煩瑣繁縟なる記述の中に入りつつ、不意識

のうちに人麿に近づく積聚の力が養はれゆくだらうと想像することが出來るなら、現在の學界・歌壇にこの一巻の存在を認容してもらつてもいいやうな氣がしてゐる。

本卷の校正及び索引は山口茂吉・柴生田稔・佐藤佐太郎・鈴木三郎諸氏の盡瘁努力によつて成つた。特に校正は難澁であり、滿二ケ年の長きを費したものである。

斯く年月を費したから、前に書いた意見と現在の意見とでは幾分違ふところもあり、さういふ不滿足なところは改めて見たいとも思つたが、校正が終らうとする際に於てはそれがもはや面倒であるから元の儘放置することとした。昭和十二年三月吉日。齋藤茂吉識。

目次

人麿短歌評釋……一
〔卷一・三〇〕過近江荒都時作歌(一)……三
〔卷一・三一〕過近江荒都時作歌(二)……一三
〔卷一・三七〕幸于吉野宮之時作歌(一)……二二
〔卷一・三九〕幸于吉野宮之時作歌(二)……二九
〔卷一・四〇〕幸于伊勢國時留京作歌(一)……三八
〔卷一・四一〕幸于伊勢國時留京作歌(二)……四三
〔卷一・四二〕幸于伊勢國時留京作歌(三)……四七
〔卷一・四六〕輕皇子宿于安騎野時作歌(一)……五四

〔巻一・四七〕輕皇子宿于安騎野時作歌（二）……五九
〔巻一・四八〕輕皇子宿于安騎野時作歌（三）……六三
〔巻一・四九〕輕皇子宿于安騎野時作歌（四）……七一
〔巻二・一三二〕從石見國別妻上來時歌（一）……七七
〔巻二・一三三〕從石見國別妻上來時歌（二）……八一
〔巻二・一三四〕從石見國別妻上來時歌或本歌……八九
〔巻二・一三六〕從石見國別妻上來時歌（三）……九〇
〔巻二・一三七〕從石見國別妻上來時歌（四）……九四
〔巻二・一三九〕從石見國別妻上來時歌或本歌……九八
〔巻二・一六八〕日並皇子尊殯宮之時作歌（一）……一〇〇
〔巻二・一六九〕日並皇子尊殯宮之時作歌（二）……一〇二
〔巻二・一七〇〕日並皇子尊殯宮之時作歌或本歌……一〇七
〔巻二・一九五〕獻泊瀬部皇女忍坂部皇子歌……一〇九
〔巻二・一九七〕明日香皇女木瓲殯宮之時作歌（一）……一一四
〔巻二・一九八〕明日香皇女木瓲殯宮之時作歌（二）……一一七

〔巻二・二〇〇〕高市皇子尊城上殯宮之時作歌（一）……一二八
〔巻二・二〇一〕高市皇子尊城上殯宮之時作歌（二）……一三二
〔巻二・二〇八〕妻死之後泣血哀慟作歌（一）……一三六
〔巻二・二〇九〕妻死之後泣血哀慟作歌（二）……一三九
〔巻二・二一一〕妻死之後泣血哀慟作歌（三）……一四一
〔巻二・二一二〕妻死之後泣血哀慟作歌（四）……一四四
〔巻二・二一四〕妻死之後泣血哀慟作歌或本歌（一）……一四九
〔巻二・二一五〕妻死之後泣血哀慟作歌或本歌（二）……一五一
〔巻二・二一六〕妻死之後泣血哀慟作歌或本歌（三）……一五二
〔巻二・二一八〕吉備津采女死時作歌（一）……一五四
〔巻二・二一九〕吉備津采女死時作歌（二）……一六〇
〔巻二・二二一〕讃岐狹岑島視石中死人作歌（一）……一六五
〔巻二・二二二〕讃岐狹岑島視石中死人作歌（二）……一六九
〔巻二・二二三〕在石見國臨死時自傷作歌……一七二
〔巻三・二三五〕天皇御遊雷岳之時作歌……一八六

〔巻三・二四〇〕長皇子遊獵路池之時作歌……一九五
〔巻三・二四一〕長皇子遊獵路池之時作歌或本歌……二〇〇
〔巻三・二四九〕羇旅歌八首（一）……二〇二
〔巻三・二五〇〕羇旅歌八首（二）……二一〇
〔巻三・二五一〕羇旅歌八首（三）……二一七
〔巻三・二五二〕羇旅歌八首（四）……二二八
〔巻三・二五三〕羇旅歌八首（五）……二三四
〔巻三・二五四〕羇旅歌八首（六）……二四七
〔巻三・二五五〕羇旅歌八首（七）……二五六
〔巻三・二五六〕羇旅歌八首（八）……二六四
〔巻三・二五六〕羇旅歌八首（八）一本歌……二七〇
〔巻三・二六二〕獻新田部皇子歌……二七四
〔巻三・二六四〕從近江國上來時至宇治河邊作歌……二八二
〔巻三・二六六〕「淡海乃海夕浪千鳥」……二九三
〔巻三・三〇三〕下筑紫國時海路作歌（一）……三〇四

〔巻三・三〇四〕下筑紫國時海路作歌(二)……三〇八
〔巻三・四二六〕見香具山屍悲慟作歌……三一六
〔巻三・四二八〕土形娘子火葬泊瀬山時作歌……三二八
〔巻三・四二九〕溺死出雲娘子火葬吉野時作歌(一)……三三二
〔巻三・四三〇〕溺死出雲娘子火葬吉野時作歌(二)……三三五
〔巻四・四九六〕「三熊野之浦乃濱木綿」……三三八
〔巻四・四九七〕「古爾有兼人毛」……三四三
〔巻四・四九八〕「今耳之行事庭不有」……三四六
〔巻四・四九九〕「百重二物來及毳常」……三四八
〔巻四・五〇一〕「未通女等之袖振山乃」……三六一
〔巻四・五〇二〕「夏野去小牡鹿之角乃」……三六四
〔巻四・五〇三〕「珠衣乃狹藍左謂沈」……三六六
〔巻二・二〇二〕高市皇子尊城上殯宮之時作歌或書歌……三七一
〔巻九・一七一〇〕「吾妹兒之赤裳泥塗而」……三七五
〔巻九・一七一一〕「百傳八十之島廻乎」……三七七

〔卷九・一七六二〕詠鳴鹿歌……三七九
〔卷十五・三六一一〕七夕歌……三八一

人麿長歌評釋……三八三

長歌小感……三八五
〔卷一・二九〕過近江荒都時作歌……四二〇
〔卷一・三六〕幸于吉野宮之時作歌(一)……四五二
〔卷一・三八〕幸于吉野宮之時作歌(二)……四七七
〔卷一・四五〕輕皇子宿于安騎野時作歌……五〇四
〔卷二・一三一〕從石見國別妻上來時歌(一)……五一八
〔卷二・一三五〕從石見國別妻上來時歌(二)……五四四
〔卷二・一三八〕從石見國別妻上來時歌或本歌……五六八
〔卷二・一六七〕日並皇子尊殯宮之時作歌……五七六
〔卷二・一九四〕獻泊瀨部皇女忍坂部皇子歌……六一〇

〔卷二・一九六〕明日香皇女木瓰殯宮之時作歌……六二八
〔卷二・一九九〕高市皇子尊城上殯宮之時作歌……六六三
〔卷二・二〇七〕妻死之後泣血哀慟作歌（一）……七三八
〔卷二・二一〇〕妻死之後泣血哀慟作歌（二）……七六四
〔卷二・二一三〕妻死之後泣血哀慟作歌或本歌……七九八
〔卷二・二一七〕吉備津釆女死時作歌……八〇五
〔卷二・二二〇〕讃岐狹岑島視石中死人作歌……八二五
〔卷三・二三九〕長皇子遊獵路池之時作歌……八五一
〔卷三・二六一〕獻新田部皇子歌……八六四
〔卷九・一七六一〕詠鳴鹿歌……八七三
〔卷三・四二三〕石田王卒之時山前王哀傷作歌……八七八
附錄……八八三
藤原宮之役民作歌〔卷一・五〇〕……八八五

藤原宮御井歌〔巻一・五二―五三〕……九二二
皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十三首〔巻二・一七一―一九三〕……九五〇

索引

……一
事項索引……三
歌句索引……五三

人麿短歌評釋

【巻一・三〇】

ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ち兼ねつ

樂浪之　思賀乃辛崎　雖幸有　大宮人之　船麻知兼津

題意　過二近江荒都一時柿本朝臣人麿作歌といふ長歌の反歌二首中の第一首である。近江皇都は即ち天智天皇の近江の大津宮で、その宮城址は、(一)今の大津市南滋賀町元滋賀村字南滋賀（滋賀縣史・大津京阯の研究）。(二)大津市滋賀里町元滋賀村字滋賀里（木村氏・喜田氏）。(三)大津市錦織町元滋賀村字錦織（近江輿地誌略・米倉氏）。(四)崇福寺址滋賀里町山麓或は南滋賀町等のうち、南滋賀町説が有力である。そして皇都の範圍は、それから南へ延長し、西は比叡山麓から、東は湖畔に近い地方までひろがつてゐたらしい。そして、この歌は長歌も反歌も、持統三年頃、人麿の想像年齡二十七歳位の時の作としたから、比較的初期と看做し得るが、是等に前行した人麿歌集の歌をも念中に持ちつつ鑑賞してもいい訣である。

語釋　○**樂浪之**　ササナミノと訓む。ササナミは本來地名であるが、この初句は技法上は枕詞

の格に使つてゐる。ササナミは滋賀郡から高島郡にかけ湖西一帶の地を汎く斯く稱したものらしく、志賀、比良、栗林などに冠せるのはそのためである。古事記仲哀天皇の條に沙沙那美。應神天皇の條に佐佐那美。書紀神功皇后の卷に狹狹浪。欽明天皇の卷に狹狹波。天武天皇の卷に筱（此云佐々）浪などと書いてゐる。ササといふ語原は、浪の音を傳へるところに本づいてゐる。そして樂浪と書いてササナミと訓ませるのは、『萬葉集に、佐々那美といふに神樂聲浪と書るは此故事に因て、神樂に小竹葉を用ひ、其を打振音の佐阿佐阿と鳴に就て人等も同く音を和せて、佐阿佐阿と云ける故なるべし』（古事記傳）と云つてゐる如く、神樂の囃が佐佐または佐阿佐阿と云つたのから、借字して、神樂聲浪（萬葉卷七。一三九八）。神樂浪（卷二。一五四）。樂浪（卷一。三〇）と成つたものである。さて、ササは清んで發音してゐたのが平安朝ごろからサザと一音濁るやうになつたらしく、これも發音轉變の一例であるが、私は清濁のことは餘り嚴密には知らない。ただ萬葉時代に既にある人或はある地方ではサザ又はその中間音ぐらゐに發音してゐたかも知れないとも思ふのである。外國語のSの音またはZの音などにこの例が多い。小浪（卷三。三一四）も清んでササレナミと訓み、神樂波之志賀左射禮浪（卷二。二〇六）も清んでササレナミと訓んでゐる（代匠記等）が、沙邪禮浪（卷十三。三二二六）は濁つてサザレナミと訓むべき例であるし、また、この射字が既に濁音に用ゐてゐるから議論は無いのである

が、この卷二の音の續けかたに清濁音について何かの參考となるだらうと思つて引用した。併しササナミは從來の諸說に從つて置く。總論でサザナミと發音したのは皆新訓に從つたためである。それから、このササナミは本來は地名であるから、ササナミの地の志賀と續けたやうに解して差支ないことと上述の如くであるが、單に意味から行けば地名であり、手法から行けばミヨシヌノなどと等しく枕詞化してゐるのである。從つて、地理的な概念要素よりも、寧ろ音の要素が勝つ效果を有つてゐるのである。**〇思賀乃辛崎**　シガノカラサキ卽ち、志賀の辛崎である。滋賀郡の湖に出でてゐた處で、辛崎の松は有名だが、古はもつと深く入り込んでゐたかも知れない。**〇雖幸有**　サキクアレドと訓む。『日本紀ニ無恙トモ平安トモ書ル意同ジ。辛崎ハ昔ノマヽニ平安ニシテアレド』(代匠記精)。『何にてもかはらで有を、幸く有といへり』(考)等の解釋で大體わかる。昔に變らぬけれど、山川草木の自然界は昔のままに安らかに見ゆるけれどもぐらゐの意が籠つてゐる。然るに、拾穗抄に、『さきく、幸也。天智の都となる程の幸あれど』と解し、また、管見では、『から崎は幸アレドといふ心也』とし、僻案抄では、『崎はあれど』と解してゐる。皆不穩當だが、學者がいろいろ骨折つて解釋してゐるのは尊敬すべきだと思つて此處に抄出した。**〇大宮人之船麻知兼津**　大宮人の船待ち兼ねつである。『此待かぬるは、からさきが待かぬるにても侍るべし。心なきものにも、心あ

らするは、詩哥のならひなり』(代匠記初)。『大宮人ノ乘ツレテ遊ビナドセシ舟ノ、今ハマテドモヨセコヌヲ、辛崎ガ待カヌルトナリ』(代匠記精)。『待てども待てども待ち得ざるをいふ。兼(カネ)は集中に多く不得とかけり。しかあらむと心に欲(ネガ)ふことの、つひにその本意を得ざるをいふ』(古義)等で大體意味が分かる。待ち難い。待ち得ない。待ち堪へぬ。幾ら待つてゐても駄目であるなどと翻することが出來る。簡潔で働のある古代日本語の用法の一つである。さて解釋は右の如くであるが、春滿の僻案抄には、『船麻知兼津とは、人麻呂のまち兼けるにや。或説に辛崎の待兼る心といへり。しかりや』といふ問に對して、『しからず。辛崎情有て待と云べからず。まつは志賀津の人、大宮人の船を待也』と云つてゐる。僻案抄の説は承服し難いが、辛崎は非情のものだから、待つといふことが腑に落ちないと見立てたところに一つの解釋法があつたのである。

大意 一首の意は、樂浪(ささなみ)の志賀の辛崎は、元の儘で何の變が無く平安に存在して居る。そして古は大津宮廷に仕へた多くの大宮人等が此處に舟遊をしたのであつたが、今はその大宮所も荒れ果ててしまつて遊ぶ大宮人もゐなくなつた。志賀の辛崎が幾ら待つてゐても、永久に待ちかぬる。待ち堪へぬ。待ち甲斐が無い。といふほどの意である。

鑑賞 この歌は、詞の意味から行けば、第三句の、『さきくあれど』も、結句の、『船待ちかね

つ』も、普通、人間の場合にいふやうな表現法を取つてゐる。つまり一種の擬人法的表現であるから、現今の作歌意識から行けば、巧みに過ぐ、或は匠氣が有り過ぐと解せられるともおもふ。併し、かういふ擬人的技法、或はかういふ主觀的技法のみを抽象して考へると、この程度の擬人法乃至主觀的句法は漢詩にもなかなか多く、西洋の詩にもまた多い。その西洋詩から脈を引く日本現代の詩にもそれが多いのであるから、あへて人麿のこの擬人法のみといふわけではない。それから、人麿のかういふ技法は恐らく當時の新渡來の文學であつた、支那の詩の表現からの影響であるのかも知れないのである。それを、サキクアレドといひ、マチカネツと日本語を以てあらはしてゐるところに力量を認めることが出來ると考察すべきである。そして現在自分等がかういふ擬人的表現法を取る場合に、なぜ人麿の此歌ほどに行かないか、また後世の和歌の擬人法がなぜいけないかといふことを考へてもいいのである。それから、第三句でサキクアレドと字餘りにしてゐて、結句を、フネマチカネツと強く緊(しま)つた句で止めてゐるのも、實に自在で大きな力量を示すものである。眞淵の考では、第三句を、サキカレドと五音に訓んでゐるが、此處はやはり、六音にゆとりをつけて訓むのがいいやうである。本來第三句を字餘りとすると、弛む危險性が伏在してゐるのに、成功すれば却つて大きく、感動を籠める特徴を持つてゐる。そしてこの歌の場合は、結句の強い『かねつ』とい

ふのが大切な補助動力となつてゐるのである。この歌は約めていふと、全體としての效果は、切實沈痛で一點浮華の氣をも交へぬものである。そしてその根源を人麿の全力的作歌態度に歸著せしめることが出來るのであつて、その意力が、如上の諸要素（擬人的表現、第三句字餘り、四三調結句等）を統御しつつ、全體として作者さながらの響を響かせてゐる點を感得すべきである。かくの如くに至れば、『幸くあれど』の句ももはや甘味と通俗性とを脱してしまつてゐる。『舟待ちかねつ』でも亦さうである。

　サキクといふ語も、人間の場合に用ゐるのが主であるが、人麿の此歌の如くに天然にも用ゐてゐる。恐らく、當時の人にとつてはこの二つの區別はさう截然とついてゐなかつたとも考へられる。從つてそれを比較して見ることも亦有益である。

　磐代の濱松が枝を引き結び眞幸くあらば亦かへり見む（卷二。一四一）
　わが命し眞幸くあらば亦も見む志賀の大津に寄する白浪（卷三。二八八）
　言靈の幸はふ國と……直泊に御船は泊てむつつみなく幸くいまして（卷五。八九四）
　命を幸くよけむと石走る垂水のみづを掬びてのみつ（卷七。一一四二）
　白埼は幸く在り待て大船に眞梶繁貫きまた反り見む（卷九。一六六八）

春さればまづ三枝(さきくさ)の幸くあらば後にも逢はむ莫戀ひそ吾妹(わぎも)　（卷十。一八九五）

天漢(あまのがは)瀬ごとに幣(ぬさ)を奉る心は君を幸(さき)く來ませと　（卷十。二〇六九）

玉葛さきく行かさね山菅の思ひ亂れて戀ひつつ待たむ　（卷十二。三二〇四）

天地を歎き乞ひ禱み幸くあらば又かへりみむ志賀の韓埼　（卷十三。三二四一）

言幸(ことさき)くまさきくませと恙(つつみ)なく福(さき)く坐(いま)さば荒磯(ありそ)浪ありても見むと　（卷十三。三二五三）

敷島の日本(やまと)の國は言靈(ことだま)の佐(たす)くる國ぞま福(さき)くありこそ　（卷十三。三二五四）

幸(さき)くしもあるらむ如く出で見つつ待つらむものを　（卷十五。三六九一）

草枕旅ゆく君を幸くあれと齋瓮(いはひべ)すゑつ吾が床の邊(べ)に　（卷十七。三九二七）

かくの如く、兩方に使つてゐるが、人麿のこの用例はやはり特殊的なものと謂つていい。卷十三の長歌は人麿歌集から出でてゐるから、或は人麿が創めたもののやうな氣もしてゐる。人麿はサチハフなどといふ前例を踏みつつ、なほ自在の力量を示したものであつたのかも知れない。

結句で、『船待ちかねつ』と止めたのは、強い切實な句だが、この『つ』止めの結句は萬葉にも可なりある。併し調べて見るに、なかなか變化があつて一樣でないから、今參考のために次に抄して見ることにする。

淑人のよしとよく見てよしといひし芳野よく見よよき人よく見つ　（巻一。二七）

皇は神にしませば赤駒の匍匐ふ田井を京師となしつ　（巻十九。四二六〇）

山越しの風を時じみ寐る夜おちず家なる妹をかけてしぬびつ　（巻一。六）

越の海の手結の浦を旅にして見ればともしみ大和しぬびつ　（巻三。三六七）

この言を聞かむとならしまそ鏡照れる月夜も闇のみに見つ　（巻十一。二八一一）

妹がため玉を拾ふと紀の國の由良の岬にこの日暮らしつ　（巻七。一二二〇）

吾が屋前の花橘をほととぎす來鳴き動めて本に散らしつ　（巻八。一四九三）

妹が見て後も鳴かなむほととぎす花橘を地に散らしつ　（巻八。一五〇九）

霜雪もいまだ過ぎねば思はぬに春日の里に梅の花見つ　（巻八。一四三四）

山守のありける知らにその山に標結ひ立てて結の辱しつ　（巻三。四〇一）

水沫なす脆き命も栲縄の千尋にもがと願ひ暮らしつ　（巻五。九〇二）

明日香河行く瀬を早みはやけむと待つらむ妹を此の日暮らしつ　（巻十一。二七一三）

思ひつつ來れど來かねて水尾が埼眞長の浦をまた還り見つ　（巻九。一七三三）

雲の上に鳴くなる雁の遠けども君に逢はむと徘徊り來つ　（巻八。一五七四）

かくのごとくで、縦ひ、『つ』止めの歌であつても、上下の關係で、必ず人麿のこの一首のやうに切實に緊まつてゐるとは限らぬのである。この邊の關係は複雜でなかなか有益をおぼえる實例である。

それから、『かぬ』は下二段の動詞だが、これなども、他の用例と比較して見ると人麿聲調の特徴を感得することが出來るやうにおもふ。

世間を憂しと恥しと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば　（卷五。八九三）

繩の浦に鹽燒くけぶり夕されば行き過ぎかねて山に棚引く　（卷三。三五四）

白露に爭ひかねて咲ける萩散らば惜しけむ雨な零りそね　（卷十。二一一六）

藤原の古りにし郷の秋萩は咲きて散りにき君待ちかねて　（卷十。二二八九）

さを鹿の朝伏す小野の草若み隱ろひかねて人に知らゆな　（卷十。二二六七）

待ちかねて內へは入らじ白細布の吾が衣手に露は置きぬとも　（卷十一。二六八八）

物思ふと人に見えじとなまじひに常に思へり在りぞかねつる　（卷四。六一三）

御立せし島を見るとき行潦ながるる淚とめぞかねつる　（卷二。一七八）

眞木柱太き心はありしかどこの吾が心しづめかねつも　（卷二。一九〇）

山河の清き川瀨に遊べども奈良の都は忘れかねつも　（卷十五。三六一八）

萬葉に、あれだけ『つ』止の歌があるが、『かねつ』と止めたのは斯くの如くに尠い。憶良のも『飛びたちかねつ』と云つて、なほ、『鳥にしあらねば』と續けてゐるのだから、やはり、『かねつ』で止めてゐるのではない。

それから、第三句で字餘りにして、『幸くあれど』としたところは、感慨を籠らせ、輕く辷らないやうになつてゐる。そして、『小竹(ささ)の葉はみ山もさやに亂れども』とか、『さざなみの志賀(しが)の大曲(おほわだ)よどむとも』とかいふ技法に類似し、其處に潜勢を置いて、第四句から起す手法である。これは、輕くやると理に墮ちて、甘く思はせ振りになつてしまふ危險性を持つてゐること、此處に引用した、『ありしかど』『川瀬に遊べども』などは手近な例になるのであるが、人麿はさういふところにも、こだはらず、恐れず、自在に歌つて、如是の效果を得てゐるのだから、やはり驚くべき力量だとおもふのである。

それから、この歌の、カラサキ、サキクとサ音を重ねたところに契沖以來先進が既に注意してゐるが、これは、『ささの葉はみ山もさやに』などの場合と似てゐて、人麿の歌の一つの傾向と看做してもいい。さうすれば、初句の、ササナミノからの聯關とも考へることが出來、さういふ音で疊んで來て、オホミヤビトノで音の一變化を爲してゐる點をもまた味ふべきである。かういふ音律の變

化は、長歌の方で寧ろ目立つけれども、細かく吟味すれば短歌の方にも存在してゐるのである。

次に、天智天皇の大殯の時、舍人吉年の作歌に、『やすみしわご大王の大御船待ちか戀ひなむ志賀の辛崎』（卷二。一五二）といふのが額田王の歌と竝んで出てゐる。時代的には人麿に前行し、歌體も類似してゐるから、人麿はかういふ歌をも學んだのではあるまいかと想像してかまはぬ程である。

○

【卷一・三一】

ささなみの志賀の（一云。比良の）大曲よどむとも昔の人に亦も逢はめやも（一云。逢はむともへや）

左散難彌乃　志我能（一云。比良乃）大和太　與杼六友　昔人二　亦母相目八毛（一云。將會跡母戸八）

題意　これは反歌二首中の第二首である。

語釋　**○志我能大和太**　シガノオホワダ即ち志賀の大曲である。代匠記に、『ワダとは水の入込みきてまはれる所なり。七わだと曲れる玉のなど云ふもかよへり。蛇などの蟠ると云ふも此心なり。水のみわだともよめり。水うみの入りたる所にて廣所なれば大わだと云へり』と解釋し、考でも、

『神代紀に、わだのうらてふ事を曲浦と書しに同じく、和太は入江にて水の淀なり』と云つて居り、玉の小琴・略解・古義なども大體同說であるが、美夫君志に、この說を難じ、拾穗抄の說を引用贊成して、『此は拾穗抄に、志我大海、近江の湖也。此湖水の水は淀む事有とも、百の都人には又難レ逢となり。とあるぞよろしかりける。僻案抄にも大和太は大海といふに同じ。海をわたともいふは常の事也』と云つて居り、この第二の說と同說は僻案抄・燈・攷證・美夫君志・講義（山田氏）等である。第一說を支持する說として古義はなかなか委しく、『六ノ巻に、濱淸浦愛見神代自千船湊大和太乃濱。又和太とのみ云るは、書紀神武天皇ノ巻に、釣ニ魚於曲浦一。此ノ集三ノ巻に、吾行者久者不有夢乃和太湍者不成而淵有毛。七ノ巻に、夢乃和太事西在來寤毛見而來物乎念四念者（これは懷風藻には、夢淵とかけり）。和太とは、わだかまり曲るよしの名なるべし』などといひ、なほ說をなして、『海をいふ和多は、多の言いづくも淸音の字を用ヒ、曲浦をいふ和太は、太の言いづくも濁音の字を用たるにて、もとより淸濁の差別あれば、同言ならぬを知べし。さればなほ和太は、曲りて水の淀む處をいふ名なること知れたり』と云つてゐる。私は契沖等の從來の說に從ふもので、これは批評のときにその理由を云ふ筈である。なほ、渡は朝鮮語の水又は海のことで、ワタルといふ動詞はワタから來たのだといふ說もある。（林氏）〇**與杼六友**　ヨドムトモと訓む。『淀むとも』で、

淀むは流れないことで、『水は早く流れ過る物ながら、大わだに入曲りて淀むとも』（代匠記）。『思賀(シガ)の大和太(オホワダ)の、ありし世のまゝにて淀むともと云なり』『ありし世のまゝに變らず、淀みてあれども』『思賀の大和太の、ありし世のまゝに淀みてありとも』（古義）といふ意味である。即ち、私が口譯すれば、『現在かくのごとくに淀んでゐるが』といふ意味である。これは大切なことだから念を押して置く。然るに燈では、『たとひ此水のよどむ世はありともと、もとよりあるまじき事を設ていふなり。』とあるのを、美夫君志で賛成し、『これ等の説に從ふべし。本集巻二十四十九右に、爾保杼里乃於(ニホドリノオ)吉奈我河波半多延奴等母伎美爾可多良武己等都奇米也母(キナガガハハタエヌトモキミニカタラムコトツキメヤモ)とあるも、絶まじき河の水の絶る事ありとも、君にかたらん事はつきぬといふにて、ここと全くおなじおもむきの歌なり。合考すべし』（美夫君志）と云つて居り、講義もそれに賛成してゐるのである。古義や私のやうに解釋するためには、ヨドムトモでなくて、ヨドメドモでなくては叶はぬ。といふのかも知れぬ。これは文法上の常識であるが、もしもつと嚴格にいふなら、ヨドマムトモなどといはねばならぬ格である。この邊は人麿の他の用語例、『よしゑやし浦はなくとも』（巻二。一三一）等をも拾ふべきである。○**昔人ニ** ムカシノヒトニで、これはただ昔の人と云つてゐるが、大津朝廷の大宮人をさしていふのである。○**亦母相目八毛** マタモアハメヤモと訓む。また二たび大宮人に逢ふことがあるだらうか、決して二たびと

逢ふことは無いといふ意味である。『紫のにほへる妹を憎くあらば人嬬ゆゑに吾戀ひめやも』(卷一。二一)。『敷妙の袖交へし君玉垂のをち野に過ぎぬ亦も逢はめやも』(卷二。一九五)。『奥つ浪邊波立つともわが兄子が御船の泊浪立ためやも』(卷三。二四七)。『磐が根のこごしき山を越えかねて哭には泣くとも色に出でめやも』(卷三。三〇一)。『梅の花咲きて散りぬと人は云へど吾が標結ひし枝ならめやも』(卷三。四〇〇)等の用語例を參考とすべきである。この如き用例は萬葉にはなかなか多い。一云。『將會跡母戶八』は、『逢はむともへや』と訓み、稍急促した聲調となる。

【大意】一首の意は、近江の湖水が入り込んだ、志賀の大曲の邊の水が、大津の宮のあつた頃と同じく、何か去りがたい物戀しい心持に淀んで居るけれども、もはや大津の大宮人等が來て此處に舟遊をするやうなことは無い。志賀の大曲が大宮人を待つてゐる氣持だが、永久に逢ふことが無い、といふぐらゐの意味の歌である。

【鑑賞】この歌も前の短歌と同じく、自然を擬人化した句法であり、前の短歌は、『志賀の辛崎幸くあれど』といひ、この短歌では、『志賀の大曲よどむとも』と云つて、共に自然が主格のやうになつてゐる。それだから、前の短歌が主觀的であつた如く、この歌も亦主觀的である。そしてその主觀も、何か重厚な調べによつて統一せられ厭味でなくなつてゐるのに注意すべきである。前の短歌

は、第三句で、『幸くあれど』といひ、この短歌もやはり第三句で、『淀むとも』と云つて居り、この『ど』或は、『とも』に感慨のこもつてゐることに注意せねばならぬ。この種類の、『ど』或は、『とも』は動ともすれば歌を弱くする句法で非常にむづかしいところであるが、人麿は二つとも、『船待ちかねつ』、『亦も逢はめやも』の如き強く籠つた結句を以てそれを救つてゐるのに注意すべきである。それから、この種類の、『ど』或は、『とも』は其處で一寸休止する傾向があるから、第三句切の微かな傾向を示し、從つて上の句、下の句の成立をも暗指するものである。この歌はやはり萬葉集中の佳作で、人麿もせい一ぱいに歌つてゐるのである。悲痛な、人に迫る響は其處から來るのである。この反歌二首とも互に特色があつて、上下の差別をつけられない。そして、聲調について潜心學ばねばならぬ點を有して居る。

次に、此の第三句の、『淀むとも』は、現在淀んでゐる光景をも含めて居るのであつて、將來に縱ひ淀むことがあらうともなどといふのではなからう。前の歌でも、『幸(さき)くあれど』はやはり現在平安で幸(さき)くあれどといふのだから、この歌の場合も亦さうなのである。然るに、富士谷御杖の燈では、『この大和太(おほわた)の水はよどむ世なく、勢多(せた)のかたへ流るゝが故に、たとひ此水のよどむ世はありともと、もとよりあるまじき事を設ていふなり』とか、『此一首、表は、むかしの人にあはるまじき事い

ふも更なれども、此大和太(オホワタ)のよどむ世もあらば、あはれむやと、人の決定を待たる也。されど、もとあるまじき事どもを設出たる事を、ことさらに歌とよむべき事ともおぼえず。さればおもふに、此大和太(オホワタ)のよどむ世とてはあるまじければ、昔の人にあはむ事もまたあるべくもなき事をば、かくことごとしくよまれたるは、ひとへに、此大宮の荒廢をかなしめる情なる事、方(モ)もじにもしるし』云々（註。燈では亦母相目八方に據つてゐる）と論じ、美夫君志もそれに從つてゐるけれども、總じて燈の說は、理窟に墮ちて、直觀の愛すべき點がないとおもふが奈何に。それから、オホワタは大渡(オホワタ)の義にするのは別にかまはぬ、つまり、『曲浦ももとおのづからわたるに宜しきよりの名にもやあるらん』（美夫君志）でもいいのであるが、これをば、大觀した近江の湖水全體と觀立てて、勢多から宇治へ流るる云々といふのは、理窟だといふのである。ここは、大津の宮と關係あつた志賀の湖の一部、即ち現實の湖面をば、志賀のオホワダと云つたのだと解釋すべきで、ここで、ヨドムトモの現實感が活動して來るのである。つまり、ヨドムトモに、人戀しいやうな、係戀の感情が藏されてゐるのである。

そんなら、この、『淀むとも』に、『淀み居りとも』といふ意味があるかといふに、これは『とも』の用語例を調べればいいのである。つまり動詞の現在格終止段に續いた例があつて、本來、『とも』は未來のことに云ふ助詞であるけれども、それが現在から未來にかけて連續してゐるやうな用例が

あればいいのである。古事記の、『忍坂の、大室屋に、人さはに來入り居り、人さはに入居りとも』（神武天皇の條）といふのは、現在から未來へ續く意味で、純粹に未來ばかりではない。『倭方に、西風吹きあげて、雲離れ、離き居りとも、われ忘れめや』（仁徳天皇の條）は大體未來だけれども、全然現在を否定することの出來ぬ用例である。『八田の一本菅は獨居りとも、大君しよしと聞さば獨居りとも』（仁徳天皇の條）も參考となるだらう。

　そのほか萬葉なら、隨分澤山に用例があり、おほむね未來に關るものであるが、現在をも含めたものもあると思ふ。『縱しゑやし死なむよ我妹生けりとも斯くのみこそわが戀ひわたりなめ』（卷十三。三二九八）も、現在から未來にわたるトモである。『松浦河七瀬の淀は淀むともわれは淀まず君をし待たむ』（卷五。八六〇）は『縱ひ淀むことはあらうとも』といふ意味もあるが、『七瀬の淀』といふ語があるのだから、それについて考へれば、現在の『淀』をも含んでゐるのである。『霰降り遠津大浦に寄する波よしもよすともにくからなくに』（卷十一。二七二九）も序歌だが、大浦の寫象を顧慮すれば現在から未來に續く例である。『ぬばたまの夜霧がくりて遠くとも妹が傳言速く告げこせ』（卷十。二〇〇八）。『大舟に小舟ひきそへかづくとも志賀の荒雄にかづきあはめやも』（卷十六。三八六九）。『大野路は繁道の森徑しげくとも君しかよはば道はひろけむ』（卷十六。三八八一）。『鴉鳥のかつしか早

稻を饗すともその愛しきを外に立てめやも』（卷十四。三三八六）。『卯の花の咲く月たちぬほととぎす來鳴きとよめよふふみたりとも』（卷十八。四〇六六）などは皆參考例になると思ふ。

なほ、澤瀉氏の新釋を見たるに、『淀むとも。淀めどもといふに同じ。人待ち顏に淀んでゐるけれどもの意である。「ども」といふべきを、「とも」と云つたのは、「よしゑやし浦はなくとも、よしゑやし潟はなくとも」と云つて、「ないけれども」の意に用ゐたのと同じである』と解釋してゐるのは、愚案のための好參考であつた。

以上の二首について先師の委しい批評があるから煩を厭はず記して置く。『二首同巧同題の歌であるから合せて批評して置く。此の短歌二首はさすがに人麿の詩想を思はせる歌である。詞も整ひ内容も十分纏つて居る。作者の情調が能く整つた詞の上に現れて居る。二首の短歌は決して長歌の比ではない。擬人法の作物は、多くは才氣が目立つて拵物の厭味に陷るのが常であるが、此の二首の如きは才藻と情調と能く一致して、一首の全體は何處となく、作者の感動せる心のさまが現れて居る。擬人法だからとて、作者の胸に動いた心の調子が自然に現れて居れば、決して拵物の感じは起らぬ。此の二首の如きは能く擬人法の成功したものである。長歌の稍理智を含めるに反し、反歌の二首は全く理智を離れて現在の光景が感慨の主因となつて居るから、感じの纏りもよいのである。

技巧の上にも表現の上にも遺憾なく成功せる二首の如きは、正しく人麿の人麿たることを思はせるのである。乍併此の如く極端な巧者な作法は、其の弊を釀し易く、人麿其の人の如きも此の上手な手際が災して其の作風に幾分の匠氣を脱し得ざりしことを注意して置かねばならぬ』(左千夫、新釋)。かう云つて居る。そして、この短歌二首について、『理智を離れて現在の光景が感慨の主因となつて居る』と云つてゐるのは、長歌の方では、ただ、『春草の茂く生ひたる、霞立ち春日の霧れる』だけが現在の光景で物足りなくなつたので、この言をなしたものであらう。この言は、田安宗武が、長歌よりも短歌の方に感慨が籠つてゐると云つた評言と共に味ふべきものであらうか。

参考 ○古來風躰抄に、『さゝなみのしかのから崎さちはあれと大宮人の舟まちかねつ』。『さゝ浪の志賀の大わたよとむとも昔の人にまたもあはめやも』がある。○(三〇)ロレンツエン氏獨譯。(2) Wenn auch das Karasaki von Shiga (1) bei Sasanami (3) ruhig dalag, (4, 5) habe ich doch die Schiffe der Höflinge nicht erwarten können. ピアソン氏英譯。(3) Though (2) Karasaki in Siga (1) near Sasanami (3) lies calm and still (and the times are favourable) (5) Alas, I cannot expect the (pleasure) boats (4) of the courtiers! ○(三一)ロレンツエン氏獨譯。(1, 3) Sind auch (die Wasser) in der grossen Bucht von Shiga bei Sasanami still, (4) mit den Leuten der vergangenen Zeit (5) werde ich niemals zusammentreffen! ピアソン氏英譯。(3) Even if it is calm (stagnant, sluggish, UNALTERED) (2) the great bay (creek) of Siga (1) near Sasanami (5) Will there ever more be the meeting (4) of the people (courtiers) of olden times?

○

【巻一・三七】

見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまた還り見む

雖見飽奴　吉野乃河之　常滑乃　絶事無久　復還見牟

題意　幸二于吉野宮一之時柿本朝臣人麿作歌第一首（三六）の反歌である。持統天皇の吉野宮行幸は皆で三十一回（御在位中三十回、御讓位後一回）記載せられてゐるが、その中の持統五年の春夏時の行幸時と考へてゐる。なほ、天皇の吉野行幸につき、豐田八十代氏は、行幸は單に御遊覽のためばかりでなく、丹生神社御參拜をも兼ねられたものと解釋してゐる（萬葉集の基礎的研究）。この解釋は、氏の、『吉野離宮址は丹生川上にあつて、宮瀧ではない』（吉野離宮考。萬葉地理考收）と關聯して居る。そして吉野離宮考は反對說もあつて定說には到らない。

語釋　**○雖見飽奴**　ミレドアカヌである。この、『見れど飽かぬ』といふ如き用法は萬葉にはなかなか多い。そして相當に皆おもしろいところを見ると、當時の人々がこの言葉になかなかの必然

性を感じてゐたことが分かる。『霰うつあられ松原住吉の弟日をとめと見れど飽かぬかも』（巻一。六五）。『山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河内は見れど飽かぬかも』（巻六。九〇九）。『古の賢しき人の遊びけむ吉野の川原見れど飽かぬかも』（巻九。一七二五）などがある。**○常滑乃**　トコナメノと訓む。仙覺は、『トコナメトイフハ、ツネノ、ナメラカナルイハホ也』と云ひ、契沖は、『今按、第九にも妹が門入出見河の常滑にみ雪のこれりいまだ冬かもとよめるを以みれば、顯昭のいへるやうにやと思所に、第十一云。隱口の豐はつせぢはとこなめのかしこき道ぞこふらくはゆめ。此は川とも云はざればさらぬ山路にも人の踏むこと稀なる處は岩の上に苔などの生て上なめりすればそれを云か。又川と云はねど泊瀬川あれば水に付て云か』云々と解釋し、眞淵の解も大體それに同じく、『常しなへに絶ぬ流れの石には、なめらかなる物のつけるものなり。そを卽體にてとこなめといひなして事の絶せぬ譬にせり』と云ひ、雅澄も、『底滑の義なり』と解して、皆類似の解釋をして來たところ、井上通泰博士は、『案ずるにトコナメのトコはトコイハの略にて頂平なる岩の事なるべくナメは並なるべし。木曾川に寢覺の床とてあるも頂平なる岩なり。本集十一卷にコモリクノトヨハツセヂハトコナメノカシコキミチゾオコタルナユメといふ歌あり。さればトコナメは川中に頂いささか平なる岩を竝べて川を渡る料としたるなり。集中に又之をイハバシと云へり。畢竟飛石なり』（新考）と

して、トコナメは床竝で飛石のこととし、諸注釋書之を引用するに至つたが、常滑のまでは序詞で、下に『絶ゆることなく』に續け、然かも本文に常滑とあり、『常』の字があり、これは、『常にもがもな常處女にて』などの如く、又常花、常世、常宮、常闇、常葉などの常と考へらるべく、やはり床竝では無く常滑の義としたいのである。そして、常滑は抽象的だから、それを具象的な實物にしようとするなら、川邊の滑らかな岩石でも、川の中の水に濡れて滑かな石でも、或は山中の陰路のしめつてゐる苔道、石道でも通用が出來るのである。つまり愚案は仙覺、契沖說に還元するので、實物が苔の附いた水中の石か或は飛石かといふ具合に細かく極めずに、『滑』と『常』に重きを置いて考へるのである。卷九の妹門入出見河乃床奈馬爾（一六九五）は借字で、これもやはり、常滑ではあるまいか。また卷十一の隱口乃豐泊瀨道者常濟乃恐道曾戀由眼（二五一一）の濟も借字ではあるまいか。西本願寺本には滑とあるし、契沖は滑の誤と考へたが、古寫本には確かに濟と書いてゐるけれども、若しトコを石の義とせば濟にワタルの義があるからどうかと思ふが、ナメと訓みうるか否や疑問である。また、濟字にはウツクシキサマ（美皃）といふ意もあるので、或は滑字の語感と相通じて使つたのでもあらうか。なほ考ふべきであるが、この一首を解するうへでは常滑とし、吉野川にある滑かな岩の群を大體の寫象として受納れれば充分である。なほ、僻案抄ではイハナミ（岩

波）と訓み、『常滑の二字をいはなみとよむは、磐と云ふに常の字を書くは義そむくべからず』とも云つてゐる。そのほかの常滑の諸説は本書總論篇に摘記して置いた。○絶事無久復還見牟　タユルコトナクマタカヘリミムと訓む。幾度でも來て見たい。いつまでも忘れることがないの意である。『み吉野の秋津の川の萬世に絶ゆることなくまたかへりみむ』（卷六。九一一）。『いはばしりたぎち流るる泊瀨川たゆることなくまたも來て見む』（卷六。九九一）。『卷向の痛足の川ゆ行く水の絶ゆることなくまたかへり見む』（卷七。一一〇〇）など類似の歌が幾つかある。模倣され易い、或は傳誦され易い句法とおもふ。そして、このタユルコトナクの語は、巖石の永久感（視覺的）からの續けではなく、トコ（常）といふ語があるのでそれを序として續けたものである。無論ただの音のみの聯想でなく、視覺寫象も這入つてゐること前述の如くである。

大意　一首の意は、いくたび見ても飽くことのないこの吉野の宮は吉野の川にある常滑の石群の常恆に絶ゆることのない如くに幾たびも來てながめようといふほどの意である。

鑑賞　この歌は所謂序歌の形式で、人麿も好んで用ゐた技法の一つである。そしてこの歌の序は、『もののふの八十氏河のあじろ木に』といふやうな音調上卽ち聽覺上の序詞でなしに、もつと直接自然の光景に卽したもので謂はば視覺上の序詞と謂つていいのである。そして一首は極めて無理

なく整つた感じのいい歌で、特に一首中の句切がなく、一氣に押して來た、ノベツ調といふもので、そして結句で、『またかへりみむ』と結んだあたりはやはり旨いとおもふのである。かういふのを見ても人麿は達者な歌人で何でも樂々と歌ひおほせたと解釋されがちであるが、私はこれでも人麿はなかなか苦心をして作當時ではこれがせいいつぱいであつただらうとおもふのである。

伊藤左千夫明治四十三年にこの歌を評し、『此の短歌は、此の長歌の反歌としては無論あつた方が面白いけれど、長歌から引離して一首の短歌として見ると餘り價値のある歌では無い。着想に何等の實質が無く、只常滑の絶ゆることなくと、巧に詞を綾なしただけだ。殊に此の反歌で又「吉野の河の」と事新しく云ふのは少しうるさい。絶ゆること無くといふ詞を強ひて使つた趣もある。讀返して見れば見る程、内容の乏しい歌である。併し是れが人麿の歌であるから注文も高く非難も出るのであるは勿論だ』(左千夫、新釋)と云つた。先師の批評はかくの如くであるが、私は人麿のこの歌をまだまだ高く評價して居ることが分かる。結句の清澄な響は一首の大切な役目をなしてゐるが、『常滑』などと云つても、作者或は作者當時の人々にとつては、視覺上の寫象がもつと鮮明であつたに相違なく、この語は決して抽象的なものでなく具體的なものであつたと考へることが出來る。さうすれば、一首の中にあつてこの語は重い役目をなして居り、一首の内容もそんなに空虚といふ

わけではあるまいとおもふが、現代の吾々の環境なり感覺なりはもつと複雜になつてゐるために、この歌の内容不足を感ずるのではあるまいか。

常滑考證追記。 常滑については、前記の如くに解釋したが、文獻を見るに、德田淨氏は常滑は磐石で、水底にあつてもよし、外に露出してゐてもいい。東里村中川の常滑橋がその證據だとした。（國學院雜誌、昭和六年一月）。豐田八十代氏は、『滑（ナメ）といふは元來吉野地方の方言で、河底の石に著いてゐる水苔をいふのである。この地方の人は今もそれをナメといつてをる。常（トコ）はいつもかはらぬことで、いつ見てもそれが同じ狀態を呈してをるから常滑（トコナメ）といつたのである。然らば何故に特に吉野の川の常滑といつたかといふと、それはこの常滑が吉野川に言ひ難い一種の風致を添へてをるからである』『恐らくは人麿も同じ美感にうたれ、いつ來てもこの水苔が同じ狀態であるのを見て、いつもかはらぬ滑の意で、吉野の川の常滑といつたものに違ひないと思ふ』また、卷九『泉河の床奈（トコナ）馬（メ）にみ雪殘れり』の歌について、『いづみ川は今の木津川で、これも非常に淸らかな川であるから、處々に滑がついてゐる。それが冬の終りに水量の減じた爲に水面に露出し、その頂に殘雪のあるのを見て詠んだのである』と說明し、卷十一の、『泊瀨路は常滑のかしこき道ぞ』の歌につき、『泊瀨路といへば、今の櫻井町から、初瀨町に通ずる人道で、三輪山の麓をめぐつてをるのであるから、

昔は山水（ヤマミヅ）が處々に路上に濺ぎ、石に水苔のついた處が多かつたものと見える』と說明し、『常滑はやはり古來の多くの學者の唱へるごとく、河底の水苔であることが明になつたと思ふ』と云はれた。（萬葉集の基礎的研究。昭和九年十一月）。私のは河底の水苔とまでは細（こま）かくいはぬが、常に滑かな巖また石といふのは同じである。なほ、皇極天皇紀に、滑谷崗（なめはざまのをか）があり、尾張知多郡に常滑（とこなめ）町があり、肥後玉名郡に滑石（なめいし）村があり、出雲風土記、滑狹郷（なめさのさと）の條に、『郎詔、滑磐石哉（なめしはかも）』とあるのも參考となるだらう。

參考 ○田安宗武は國歌八論（臆說剩言）でこの歌に言及し、『とみにうちきゝたるほどは、よしのゝ景をほめて、且つ祝し奉るのみのやうに聞ゆれど、よく案じめぐらせば、すべて人の常に遠きにあそぶはよからぬ事なり。まして人君のかくあまたゝび行幸あれば、おほんたからもいたむべし。さるをその事もおぼさで、彼よしのゝ景を見あかんをかぎりにし給はんには、はてもなくおほんたからもいよ／＼いたむべし。すべて物ごとに程の有べき也、といへる心をふくめり。是等の歌、かたくなるかは、いとゆうにあれど、理り深くぞきこゆる』と云つた。それにつき賀茂眞淵が、再奉答書で、『すべらぎのつく／＼と唱へさせ給はば、かぎりあるいのちにてかぎりなき物をしたひ給ふことよなど、御心を興じ給ふことも侍りなん。此時しきりに御幸のありつれば、いさめ奉りし臣もありし事史にも見ゆれば、げにも諷人の常なれば、人萬呂もさる心にてよまれけんや。愚なる心にはいまださだかにさとり得侍らず。詩經などに何心有りとも見えぬ詩をも時を刺るなど古き註に書けるをおもへば、後に誦詠せん人の感ずる所によるべし』云々と云つてゐるが、眞淵は婉曲に宗武を導いてゐることが分かつて興味があるのである。

○

【巻一・三九】

山川(やまかは)もよりて奉(つか)ふる神(かむ)ながらたぎつ河内(かふち)に船出(ふなで)するかも

山川毛　因而奉流　神長柄　多藝津河内爾　船出爲加母

題意　同じく幸二于吉野宮一之時の第二の長歌（三八）の反歌である。前述のやうに、持統天皇の吉野宮行幸は前後三十餘度にわたつてゐるから、そのいづれだかは不明であるが、私は、土屋氏の萬葉集年表の頭註、『四年九月の紀伊行幸の歌につづけるに依り、又歌詞により、五年春夏の交の度の行幸なるべし』を參考して、大體持統五年、人麿の想像年齢二十九歳ぐらゐの作と考察した。

語釋　**〇山川毛**　ヤマカハモで、山の神も川の神もといふ意味である。長歌の方に、『山川も依りてつかふる神の御代かも』とあるのを此處に二たびしたのである。**〇因而奉流**　ヨリテツカフルと訓む。ヨリテは、相共にの意で、『天地も縁りてあれこそ』（巻一。五〇）の例がある。ツカフルは、これは舊訓に從ふのであるが、『大君のまきのまにまにとりもちて仕ふる國の年の内の事かたね持

ち』（巻十八。四一一六）など參考になる。代匠記、僻案抄、玉の小琴、燈、檜嬬手、古義等皆この訓に從ひ、考はヨリテツカヘルと訓んだ。然るに、攷證は、『今案に、奉流は、まつれると訓むべし。其故は、集中、奉の一字を、つかふと訓し事なければなり』と云つてゐるのは、元暦校本にヨリテタテマツル或はヨリテマツレルと訓み、古葉略類聚鈔にヨリタテマツルと訓んで居るなどに據つたものか。なほ、新訓ではヨリテマツレルと訓み、武田博士は、『帝徳に慕ひよりて獻上物をする義。マツレルは、上の奉御調とのマツルに同じで、獻つてゐるの意である。從來ツカフルと讀んでゐるが、奉をツカフと讀む例が他に無い』（新解）と云つてゐる。奉の字は、萬葉の用例はマツルの方が殆ど大部分で、『心をし君爾奉跡（マツルト・マタスト）念へれば縱し此頃は戀ひつつをあらむ』（巻十一。二六〇三）や『蜻蛉羽ににほへるころも吾は著じ於君奉者（マツラバ・マタサバ）夜も著むがね』（巻十。二三〇四）などもその例であるが、そんなら、ツカフの方は用例はどうかといふに、前出の巻十八の歌のほかに、恐也御陵奉仕流（カシコキヤミハカツカフル）山科乃鏡山爾（ヤマシナノカガミノヤマニ）（巻二。一五五）。黒樹取草毛刈乍仕目利（クロキトリクサモカリツツツカヘメド）（仕登母（ツカフトモ））（巻四。七八〇）。藥獵仕流時爾（クスリガリツカフルトキニ）（巻十六。三八八五）。王爾吾仕牟（オホキミニワレハツカヘム）（巻十六。三八八五）。多由流許等奈久都可倍追通見牟（タユルコトナクツカヘツツミム）（巻十八。四一〇〇）。古昔爾（イニシヘニ）君之三代經仕家利（キミノミヨヘテツカヘケリ）（巻十九。四二五六）等である。以上はツカフと訓んだ例であるが、奉字と合して、ツカヘマツルと使つた例がまた多い。奉仕之情違奴（ツカヘマツリシココロタガヒヌ）（巻二。一七六）。恐等仕奉而（カシコミトツカヘマツリテ）（巻三。二三九）。

和期大王之常宮等仕奉流（巻六。九一七）。船並而仕奉之貴見禮者（巻六。九三三）。城上宮爾大殿乎都加倍奉而（巻十三。三三二六）。水緒多要受都可倍麻都良牟大宮所（巻十七。三九〇八）。大皇爾都可倍麻都禮婆貴久母安流香（巻十七。三九二二）。萬代爾都可倍麻都良牟黒酒白酒乎（巻十九。四二七五）。橘宇受爾左之仕奉者卿大夫等（巻十九。四二七六）等である。次に、古事記や祝詞などの奉字の訓方は概ねマツル或はタテマツルであり、古事記仲哀天皇の條の『麻都理許斯、美岐叙、』の『獻り來し』の例の如く、獻つるをば單にマツルといひ、また此の萬葉長歌に、『山祇の奉る御調』とあるから、類推して行けば、短歌の方も直ぐマツレルと訓まねばならぬわけであるが、なほこの長歌には、『川の神も大御食に仕へ奉ると』といふのがあり、ツカフの語もあるのだから、奉字の用例からいへばマツレルだが、意味からいへばツカフと云へないこともないやうにもおもふ。特にツカヘ・マツルと連ねた例が萬葉にも斯く多いのだから、奉流をツカフルと訓んでは惡いだらうか。よつて試に書紀の用例を檢するに、書紀には、以ニ饒速日命一爲レ君而奉焉。（神武天皇紀）の奉をツカフと訓ませて居り、また奉レ與ニ一宵一（雄略天皇紀）を一宵ヲアタハシ給フニツカマツレリと訓ませ、從ニ遺詔一奉ニ皇太子一（清寧天皇紀）の奉をツカヘマツルと訓ませ、以ニ民地一奉（顯宗天皇紀）の奉をツカマツレと訓ませ、奉ニ天皇之闕一（欽明天皇紀）の奉をツカフルと訓ませ、永奉ニ天皇一（欽明天皇紀）の奉をツカヘムと訓ませ、奉ニ日神

祀一(用明天皇紀)の奉をツカマツラシムと訓ませてゐるから、紀の用字例を以て直ちに萬葉を律せられないとしても、これも奉をツカフルと訓むべき參考となるとおもふ。なほ、古事記の例は、仕奉(ツカヘマツル)。立奉(タテマツル)。貢進(タテマツル)。獻(タテマツル)。奉(タテマツル)。奉出(タテマダス)などで、乞レ水故奉レ水でも、タテマツルと訓んでゐる。祝詞でも、萬葉でもツカヘマツル(仕奉)と續けたのが多い。古語拾遺でも奉仕(ツカウマツル)。供奉(ツカウマツル)等である。併し、『やすみししわご大王のかしこきや御はか奉仕流(ツカフル)やま科の鏡の山に』(卷二。一五五)。『四月(うづき)と五月(さつき)のほどに藥獵(くすりがり)仕流(ツカフル)ときに』(卷十六。三八八五)や、また、『大王のまきのまにまにとりもちて都可布流久(ツカフルク)爾能(ニノ)』(卷十八。四一一六)などの用例があり、『奉仕』をツカフルと訓んだ例があるから、ここも奉一字でツカフルと敬語にせずに訓んだのである。〇**神長柄**　カムナガラと訓む。神さながらに、神に坐(いま)すままに、現神の儘に、神として、といふので天皇を讚へ奉つたのである。また、武田博士の新解には、『神樣の御意に任せて、この世は神の御靈の在りのまゝに動いてゆく。これを神ながらといふ。神のまゝにの義』と云つてゐる。此處の長歌の方に、『神ながら神さびせすと』ともあり、その他、『可武奈何良(カムナガラ)神さびいます奇魂(くしみたま)今の現(をつつ)に尊きろかも』(卷五。八一三)。『勤(いそ)はく見れば神ながらならし』(卷一。五〇)。『淨(きよみ)の宮(みや)に神(かむ)ながら太敷(ふとし)き坐して』(卷二。一六七)。『神ながら愛(めで)の盛に天の下奏(まを)し給ひ』(卷五。八九四)等用例が多い。〇**多藝津河内爾**　タギツカフチニと訓む。澤瀉氏の新釋に、

『水が激しく流れてゐる河內。河內は河につゝまれてゐるところ。宮瀧の東で、吉野川は南へ向ひ、村の南を西に流れ、村はづれで再び北に向ひ、村の東南西が川につゝまれてゐる形である』によつて、カフチといふ語原が分かる。懷風藻の丹墀眞人廣成の吉野の詩には、『長河渺漫作ニ廻流ニ』などとあるのも、寫生であらうか。なほ同じやうな用例は、『たぎの河內は見れど飽かぬかも』(卷六。九一〇)。『三吉野のたぎつ河內の大宮所』(卷六。九二一)など參考になる。『瀧の河內』、『瀧つ河內』と略似た助詞の使ひざまである。瀧は名詞だが、動詞になれば、タギツとなる。**〇船出爲加母**　フナデスルカモで、これは舊訓だが、眞淵の考で、フナデセスカモと訓み、『唯今船出し給ふを見奉るが貴きと申すなり』と云つてゐる。この眞淵の訓は、長歌の方で、神佐備世須等(カムサビセスト)とあるのに本づいてゐるだらう。このセスカモは考以來、燈・檜嬬手・古義・攷證・美夫君志・新考・講義・新釋等それに從つてゐる。私は一首の聲調のうへからの好みで、第二句をツカフルと訓み、結句を舊訓のまま、フナデスルカモと訓んでゐるのである。セスカモは敬語だから、その方がいいとも思ふが、私のは聲調の方からの選擇から來てゐる。武田博士はやはり、スルカモと舊訓に從つてゐるが、博士のは、『船出するかも』を群臣等の行爲と見立てての說である(後段參看)。

大意　一首の意は、山の神(山祇(やまづみ))も川の神(河伯(かはがみ))ももろ共に歸依して仕へ奉る現神(あきつがみ)として、

その神のままに、わが天皇（おほきみ）は、この吉野川の瀧の河内に、群臣と共に船出したまふのであるといふ意味である。

鑑賞 第二句は一首の聲調から見て、マツレルと訓むよりも、ツカフルと大きく流動的に訓みたく、從つて、結句は船出セスカモよりも船出スルカモと訓んだ方が強く緊張して居る。この邊になると寧ろ好みの訓といふことにもなる。古義では、『一二四三五と句を序（ツイ）でて意得べし』と云つてゐるが、第三句の『神ながら』は天皇に係る句法と解釋してよい。そこは科學的文章などと違つて、一種の暈（うん）を帶びてゐるのである。『神ながら』の次に、『わが天皇（おほきみ）は』の主格を補充して見れば、意味はよく分かるのである。

さてさう訓んでこの一首を味ふに、高古にして強く、純粹な音を傳へて濁聲を交へざる、澄徹渾一體といふ氣のする歌である。獻頌歌・應詔歌などと詮議云々すべき作歌動機を絶して、純粹なものになり切つて居る歌である。長歌も人麿長歌中の佳作であるが、この短歌はなほ優れたものである。それから不思議に加行の開口音を以て進行し、前半の、ツカフル、カムナガラあたりは特に流動的であつて、後半の、タギツ、カフチニ、フナデスルカモのあたりは、稍つまつて重く強く据ゑた形になつてゐる。それから、『神ながら』といふのを第三句に置いて、聲調の上下を變化統一して

ゐるのなどは、芭蕉が黄金をのべたやうな俳諧云々と云つたが、さういふ氣持をおこさしめる歌である。ある人は此の歌の如きを評して、内容の無い、特に社會的感覺のない、形式ばかりの歌のやうに評してゐるけれども、短歌の價値は何もさう細々したところのみに本づいて極まるものでないといふことは、憶良等の歌を見ても分かるのである。よつて鑑賞者は、社會上反逆者とか革命者とかいふ者の作でさへあればただ讃美し躁揚してしまふやうな輕薄な態度をやめて、かりに人麿のやうな位置に身を置くことを心がけつつ靜かにこの如き高格歌を味ふべきである。それから、懷風藻あたりになると、同じ吉野の作でも、『地是幽居宅。山惟帝者仁』と云つたり、『欲訪神仙迹。追從吉野潯』と云つたり、『神居深亦靜。勝地寂復幽』と云つたりしてゐる。徒に支那文學の影響などを云々することをやめて、同じやうな意嚮の作で、日本の歌としてあらはした人麿の歌句と、支那の詩の詩句と奈何の差別があるかを辨別すべきである。

賀茂眞淵この歌を評して、『大泊瀨の天皇葛城山の大御狩の時、一言主の大神の送り奉り給ひけん御いきほひを思ひあはせらる』（考）といひ、伊藤左千夫この歌を評して、『神も人も相和して遊ぶ尊き御代の有樣である。現實を能く理想化し、理想中に能く現實的光景を點じて來るのは、何時も人麿の慣用手段である。神の御代かもと、遠く遙けく云ふかとすれば、反歌に至つて、忽ち、たぎつ

河内に船出せすかもと、神々しい女帝の御振舞も目に見ゆる如く歌ふのが卽ちそれである』（左千夫、新釋）と云つてゐる。

武田博士の新解で、『宮殿にお仕へする人たちが、神意を受けて、激流ではあるが船出をすると感歎したのである。船出せすかもと、敬意を含めて讀み、天皇の御行動とする説もある。長歌に、上り立ち國見を爲せばとあるが天皇の御行動で、高殿から山川を觀望せられるのであるから、この反歌も、やはり位置を變へずに、臣下の船出するのが見えると解する方がいゝであらう。神ながらの意が本當に解けないから、この句を天皇の御行動とする説が出て來るのである』と云つてゐるのは一見識であるが、これは一首の聲調から見て、ただ群臣だけの行動ではない、天皇が群臣と共に船出し給ふ趣と解すべきで、此處は無論長歌の内容と幾分違つて、位置を變へたものと考察する方がいいやうである。

『神ながら』の用例は、天皇にも山にも國にも附いてゐるのは、神性、惟神といふ文字で書かれたものの示す如くに、既に、神として、神さながらにと、なつてゐることを示してゐるもののみである。その解釋も飯田武郷の、『其人其國其山を神と尊み崇め、卽て其物の神に坐隨ら（マシナガラ）、神の行事（フルマヒ）ある事に云る語』（書紀通釋）といふのも、武田博士の、『神ながらの國とは、神があつて、萬事神の意

のままに進行する國の謂である。神は全能ある人格神で、主神は一であるけれどもその各種の方面がそれぞれ異つた名によつて現はれ、また多數の御子神が出現を爲すものと解せられる』（神と神を祭る者との文學）もつまりは同じく歸著するやうに思はれる。よつて此の歌の『神ながら』は、天皇御躬に係つて、渾一體をなすものとしてかまはないとおもふ。文法的にいふと、『依りて仕ふる』が『瀧つ河内』に係り、『神ながら』が、『船出する』に係るやうであるが、これも、『わが天皇（おほきみ）は』を補充して解くと、皆その天皇に係る使ひ方で意味も明かになるのである。井上博士は、『山川モヨリテツカフルワガオホキミノカムナガラタキツ河内ニ船出セスカモといふべきワガオホキミノを長歌に讓りて省きたるなり』と云ふ具合に最初解釋したのであつた。（新考、大正四年版）併しこれは長歌に讓つたといふよりも、當時、省略して用ゐたもので、『立ちて見に來しいなみ國原』（卷一。一四）。『妹が結びし紐ふきかへす』（卷三。二五一）等の實例がある。

參考 ○（三七）ディッキンズ氏英譯。A joy for ever | to gaye on Yoshinu, | where glide the waters | in streamy flow unending | a land to gaye on ever. ロレンツェン氏獨譯。(3) Wie die ständige Glätte im Bett (2) des Yoshino-Flusses (4) ewig ist, möchte ich ewig (5) zurückkehren, um (Yoshino) zu sehen, (1) von dem ich meine Blicke nicht losreissen kann. ピアソン氏英譯。(1) Though I look and look I do not get enough of (2) Yosinu's river. (5) Would I could come back again (and again) to look at it (4) endlessly (3) as the eternal slipperiness (smoothness) (of the river-bed). グンド

ルト氏獨譯。Nie genug geseh'n | Yoshinu am schönen Strom! | Ewig, wie im Grund | Ewig grünt das Wassermoos | Kehr' ich wieder, es zu seh'n! ○（三九）ディツキンズ氏英譯。The streams and mountains | they throng to serve our Sovran | a very god she- | in Kafuchi land of waters | whereon she takes her pleasure. ロレンツエン氏獨譯。(3) O, in göttlichem Gepränge (5) macht (die Fürstin) eine Bootfahrt (4) im „Land zwischen den Strömen" am Wasserfall, (1) wo selbst Berg und Fluss (2) herbeikommen und dienen. ピアソン氏英譯。(1) Even (the Gods of) Mountains and Rivers (2) drawing near, serve (5) (Her) who does a boat-outing (3) worthy of a Deity, (4) in the river-surroundings near the Rapids!

○

【巻一・四〇】

英虞（あご）の浦（うら）に船乘（ふなの）りすらむをとめ等（ら）が珠裳（たまも）の裾（すそ）に潮滿（しほみ）つらむか

鳴呼兒乃浦爾　船乘爲良武　嬬等之　珠裳乃須十二　四寶三都良武香

題意　『幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌』三首中の一首である。書紀に、持統天皇六年三月丙寅朔辛未、天皇不レ從レ諫、遂幸ニ伊勢ニ云々。甲申賜ニ所過（スギマスシ）志摩（マノクニノ）ニ百姓男女年八十以上稻人（ゴトニ）ニ五

十束ヲとある。人麿はその行幸に供奉せずに京（飛鳥淨御原宮）に留まつてゐて、その行幸のさまをおしはかつて詠んだ歌である。私はこの歌を作つたときの人麿の假想年齡を三十歲位とした。卽ち比較上初期の作である。

語釋 **○嗚呼兒乃浦爾** アゴノウラニと訓む。阿虞の浦は和名抄に志摩國英虞郡にあるといふそのあたりの海濱であらう。舊本にこれが嗚呼見乃浦となつてゐるが、萬葉卷十五に、安胡乃宇良爾、布奈能里須良牟、乎等女良我、安可毛能須素爾、之保美都良武賀（三六一〇）といふ歌があつて、左註に柿本朝臣人麿歌曰安美能宇良云々とある。併し、安美能宇良といふ處は見當らないのに、持統御宇六年五月の紀に、御阿胡行宮時云々とあるから、嗚呼見乃浦は嗚呼兒乃浦の誤寫だらうといふ僻案抄の創見によつて、以來學界の定說となつたものであるが、山田博士の講義では、卷十五の歌の左注に柿本人麿集に安美能宇良とあつたといふことが明らかであるから、古くからさう傳誦されてゐたものと見えると云つてゐる。**○船乘爲良武** 『船乘すらむ』で、フナノリといふ熟語になつて居るが、船出するといふ語感を持つてゐるやうであり、ただ船漕ぎめぐるといふのではなく、出發といふ氣勢があるやうだから、『すらむ』といふ音調が利いてくるのである。『熟田津に船乘せむと月まてば潮もかなひぬ今は榜ぎ出でな』（卷一。八）。『百磯城の大宮人の飽田津に船乘しけむ年の

知らなく』(巻三。三二三)。『いづくにか船乘しけむ高島の香取の浦ゆ漕ぎ出來し船』(巻七。一一七二)。『さざなみの志賀津の浦の船乘に乘りにし心常忘らえず』(巻七。一三九八)。『柔田津に船乘せむと聞きしなへ何ぞも君が見え來ざるらむ』(巻十二。三二〇二)。『たなばたし船乘すらしまそかがみ淸き月夜に雲立ち渡る』(巻十七。三九〇〇)。『國々の防人つどひ船乘りて別るを見れば甚もすべなし』(巻二十。四三八一)などの用例が參考になるだらう。○**𡢳嬬等之** 『をとめらが』である。これは供奉の若い女官等を指すので、複數に云つてゐるところに注意すべきである。○**珠裳乃須十二** 『珠裳の裾に』で、美しい形容を附けて、タマ裳といつてゐる。巻十五の赤裳なども參考になり、紅色が主調をなしてゐたのかも知れぬ。『朝露に玉裳は濡づち夕霧に衣は沾れて草枕旅宿かもする逢はぬ君ゆゑ』(巻二。一九四)。『愛しきやし逢はぬ君ゆゑ徒らにこの河の瀨に玉裳ぬらしつ』(巻十一。二七〇五)。『をとめらが玉裳すそびく此の庭に秋風吹きて花は散りつつ』(巻二十。四四五二)などの用例がある。○**四寶三都良武香** 『潮滿つらむか』で、これは遊樂の樂しいさまを想像しての言葉とおもふが、わびしいさまに同情したのだといふ說もある。

大意 一首の意は、持統天皇の行幸に供奉して行つた、多くの若い女官だちが、阿虞の浦で船に乘つて遊樂する、その時に、あの女等の裳の裾が海潮に濡れるであらうといふのである。

鑑賞 この一首の氣持は、樂しい朗かな聲調で、さういふ若い美しい女等に對する親愛の情が充滿ちてゐるが、そのヲトメを複數に使つたのは、必ずしも人麿の情人一人を指すのではあるまい。季節は三月六日(陽曆三月三十一日)から、三月二十日(陽曆四月十四日)までに及んだ、陽春の盛りであるし、また、大和から海邊に行つて珍しがるヲトメだちのはしやぎ喜ぶ樣が目に見えるやうにおもはれる歌である。古義で、『女房はつねに籠中にこそ住ものなるに、たまたま御供奉て、心もとなき海邊に月日經て、あらき島回に裳裾を潮にぬらしなど、なれぬ旅路やなにこゝちすらむと想像憐みてよめるなるべし』と云つてゐるのは、次の歌(四二)の、『妹乘るらむか荒き島回を』といふのから思ひ及したものであらうが、これは必ずしもさういふ作歌衝迫に關聯せしめなくともいいと思ふのである。

さう解釋してこの歌を味ふと、豐朗とも謂ふべき歌として感ぜしめるものである。從つて再現して來る寫象も誠に美しく、一首のうちに、『らむ』といふ助動詞を二つも使つてゐながら、毫も邪魔にならぬのみならず却つて節奏的となり、その聲調のことを細かに吟味してゆくと、言葉を音樂的に驅使する人麿の力量の如何に大きいかが分かるのである。然も人麿は後代の私等の如くに慘憺と意識して手法を骨折るのでなく、ただ全力的に吟誦しながら推敲しつつ行つたものと思はれる。そ

れほど天衣無縫的なところがあるのである。或人は人麿をただの感覺遊戲の詩人だと評したけれども、佛蘭西の象徵詩をトルストイが評したやうな流儀で簡單に片づけてしまふのは間違つてゐる。人麿のものは常に人間的であり、如何なる場合にも眞率に緊張して、毫しでも輕く戲れ遊ぶといふやうな餘裕を見せてゐないところに、批評家は眼力をそそがねばならぬと思ふのである。

先師は、この歌を人麿の一人の愛人に對する憐憫の情を歌つたものとし、『能く考へて見ると決して解らぬ歌でもなく、美しい可憐な光景と、美しい戀情とを含んでゐる歌である。大體の心は、屢船などに御供して汐風の浪のしぶきに臣の少女の中にも相思ふ人などは美しい裳の裾に潮がみちて、さだめてわびしく苦しいことであらう。あはれなさまが眼に見えるやうぢやといふ如き意で、痛く情人を憐れがつた歌である。（中略）吾が情人一人に對しての歌と解するがよいのである。誠に穩かな敍事の間に深き思が包まれて品格のよい歌である』（左千夫、新釋）と評してゐる。情人一人に對した歌といふのは奈何と思ふが、『美しい可憐な光景』といひ、『深き思が包まれて品格のよい歌』といふ評は流石に適評だとおもふ。

集中、『黑牛潟潮干の浦をくれなゐの玉裳裾びき行くは誰が妻』（卷九。一六七二）。『をとめ等が玉裳裾びくこの庭に秋風吹きて花は散りつつ』（卷二十。四四五二）などがあつて參考となる。

なほ、巻十五には、『阿胡の浦に船乘すらむ少女らが赤裳の裾に潮滿つらむか』(三六一〇)として、左註に、『柿本朝臣人麿の歌に曰く、網の浦、又曰く、玉裳の裾に』とある。異傳の一つであらう。そして此一首のみが載つて居り、他の二首の無いのは、此一首が特に吟誦せられたことを示してゐるので興味がある。

○

【巻一・四一】

釵つく手節の崎に今もかも大宮人の玉藻苅るらむ

釵著　手節乃崎二　今毛可母　大宮人之　玉藻苅良武

題意　これは前の歌の續と看做していい。

語釋　○釵著　クシロツクと訓む。クシロは釧を正字とし、釵を別體としたのである。女が臂腕に纏つた寶飾で、一切經音義巻十九の環釧の注に、『上環臂釧也、或以二象牙一作レ環而以二七寶一鈿レ之或用二金銀一作レ如二環之象一、下川戀反釧亦環也皆臂腕之寶飾也』とある。委細は山田博士の講義を

精讀せられよ。用例は、『我妹子は久志呂にあらなむ左手のわが奧の手に纏きて去なましを』（卷九。一七六六）。『玉釧手に取持ちてまそ鏡直目に見ねば』（卷九。一七九二）。『玉くしろ纏き宿る妹もあらばこそ夜の長きも歡しかるべき』（卷十二。二八六五）。『玉くしろ纏き寢し妹を月も經ず置きてや越えむこの山の岫』（卷十二。三一四八）等が參考になる。さて、この歌の釵著は手に續けて枕詞の格に使つてゐる。

○手節乃崎二　タフシノサキニで、手節の崎は志摩國答志郡の崎である。卷九にも志摩國答志島とある。**○今毛可母**　『今もかも』で、『モ』は音調上强めたもので、『今カモ』或はもつと單純化して、『今カ』となる。そして、『ラム』と相照應するのである。『屋戸にある櫻の花は今もかも松風疾み地に落つらむ』（卷八。一四五八）。『今もかも大城の山に霍公鳥鳴き響むらむ吾無けれども』（卷八。一四七四）。『刺竹の大宮人は今もかも人なぶりのみ好みたるらむ』（卷十五。三七五八）などが參考になる。なほ、この句は舊訓ケフモカモであるが、代匠記にイマモカモと改めて以來諸注皆これに從つてゐる。但し新訓は、類聚古集に今日毛とあるにより、ケフモカモと訓んでゐる。これも捨て難い訓である。これの參考には、『名兒の海の朝けの餘波今日もかも磯の浦囘に亂れてあらむ』（卷七。一一五五）。『まそかがみ南淵山は今日もかも白露置きて黄葉散るらむ』（卷十。二二〇六）其他がある。**○大宮人之**　オホミヤビトノで、從駕の人を一般にさしてゐる言方である。古義に、『これまたひろく大宮

人をいふことなれど、このうちに必ずさす人ありてよめるなるべし』といつて居り、燈では、『從駕のをのこだちをさす也』『をのこたちのうへ也』と考へてゐる。左千夫は古義の如くに情人を主として考へてゐる。〇**玉藻苅良武**　タマモカルラムで、大宮人等が海濱に遊んで物めづらしく玉藻などを刈つて時を過ごす光景を想像してゐるのである。古義に、『海人こそ常に刈め、大宮人の刈らむは思ひがけぬわざなれば、いかにわびしくやあらむと、おもひやりたる意なり』とあるのは稍穿ち過ぎてゐるやうである。左千夫の說も同然である。美夫君志に、『此はただ宮人だちの濱邊を遊びありくことを形容したるにて、まことに玉藻かるにはあらず』と云つてゐるのはいい。

大意　一首の意は、今頃は志摩の手節(たふし)の崎で供奉の大宮人等が玉藻苅るさまなどに興じてそのわざなどをも試みてゐるであらう。といふぐらゐの意で、穿鑿すれば、玉藻苅る眞似などをしてもいいが、ここはもつと漠然と、玉藻苅るらむと想像したのである。

鑑賞　この歌は三首の中では一番簡單で、ことに初句に枕詞などを用ゐ、固有名詞が一つ入つてゐるので、主眼とするところは、『大宮人の玉藻苅るらむ』だけである。さういふ具合だから、この一句の效果が却つて揚がるわけにもなるが、稍味ひが足りないやうにも思へる。併し一面からいへば、人麿の歌は全力的に息張(いきは)つた歌が多いから、この一首などは人麿の歌の中では平淡で素直な

ものとして受取ることが出來るのである。無理のない、直く流露した歌と評することが出來る。この歌の、『大宮人の』の中の、『の』の使ひざまに注意すべく、私はこれと『は』との區別は、句調の上から來てゐると思つてゐるが、左千夫は、『は』といへば、大宮人が主になり、『の』といへば大宮人を餘所に言うた情味が十分に顯れてゐると解してゐる。この『は』『の』の研究は、山田博士の奈良朝文法史或は、京都大學から出てゐる雜誌國語國文の研究第二十二號に發表せられてゐる(佐伯梅友。萬葉集の助詞二種)。その結論も參考になるとおもふ。

伊藤左千夫この歌を評して、『人麿の當時の心持は一つには、情人が長い間の供奉の苦をあはれがり、一つには情人の歸りを待遠しがり、早く歸つてくれればよいが、どうしてこんなに長く歸らぬのか知らと云ふやうな、もどかしさの意味が十分にあるのである。そこで、此の歌も裏面に情人を待焦れてゐる情味が含まれてあるのである。中略艶曲溫柔少しも圭角なき詞の中に限りなき情趣が動いてゐる。如此作意は人麿にして始めて能くすべきことで、又實情に於て始めてなし得べきことだ。無量無限の蘊蓄ある大歌聖の面目を窺ふに足るものがある』(左千夫、新釋)と云つた。この左千夫の批評を讀むに、人麿を非常に褒めてゐる。そして此は明治三十七年十一月に發表されたものである。然るに左千夫は、『東の野にかぎろひの』あたりの歌をば寧ろ難じて、そしてそれは明治四十三年十

二月に發表せられたものである。左千夫の人麿の歌に對する態度は、かくの如くに時期によつて違つたことを知らねばならない。

○

【卷一・四二】

潮騒に伊良虞の島べ榜ぐ船に妹乗るらむか荒き島囘を

潮左爲二　五十等兒乃島邊　榜船荷　妹乘良六鹿　荒島囘乎

題意　この歌も前の歌の續きである。

語釋　**○潮左爲二**　シホサヰニで、契沖は、『鹽のあらきに云詞なり』といひ、眞淵は、『潮の滿る時、波の左和具をしほさゐといふ。ゐは和藝の約めなり』と云つて居り、御杖は、『爲は和藝の合音にて潮さわぎ也。潮のみちくる時、波のさわぐを云といふ說したがふべくや』といふのは眞淵に從つたのである。春滿は、『潮さわぎにて潮のさし來る時海の鳴を云』と云つてゐるから、眞淵の說も春滿に淵源してゐるのである。なほ山田博士は、「しほさゐふぐ」といふ河豚の一種について其

の意味を確めてゐる。卽ちシホサヰは潮サワギの意である。用例は、『潮さゐの浪をかしこみ淡路島磯がくりゐて』(卷三。三八八)。『牛窓の浪の潮さゐ島とよみよそりし君に逢はずかもあらむ』(卷十一。二七三一)。『潮干なばまたも吾來むいざ行かむ沖つ潮さゐ高く立ち來ぬ』(卷十五。三七一〇)などがある。シホサヰニの『に』は、時と狀態と兩方に係つてゐる。潮の鳴る時にといふぐらゐの意であらうか。

○五十等兒乃島邊 イラゴノシマベで、五十をイと訓じた例は古くからある。眞淵の考に、『いらごは參河國の崎なり。其崎いと長くさし出て、志摩のたぶしの崎と遙に向へり。其間の海門に神島、大づくみ小づくみなどいふ島どもあり、それらかけて、古へはいらごの島といひしか』と云つてゐる。山田氏の講義に、『伊良虞島は今三河國渥美郡に屬する伊良虞崎をいふなるべし。島とはいへど、これは半島の崎にして今日の所謂島にあらず、されど、今半島といふをも古は島といひしことは志摩の國卽ち島國なるが、それ卽ち半島なるにて知らるべし。この地三河國なれど、古來往々志摩或は伊勢の「いらご」と呼びなせり』『答志島と伊良虞岬との間は、所謂「いらごの渡り」にして距離三里、その間に大築海小築海神島の諸島あり』云々。人麿は大體、伊勢にイラゴといふ處があつて、崎も島もあるぐらゐの大體の氣持で歌つてゐるのである。ただ固有名詞を咏みこんでゐるのだから、大體の見當をつけておく必要があるのである。**○搒船荷** コグフネニで、搒は榜と書いた古寫本も

ある。美夫君志に搒は榜の省畫で、古へは木旁を扌と書いたものが多いといつてゐる。〇**妹乘良六鹿** イモノルラムカで、この歌のイモは從駕の女官を稍ひろくさして云つてゐるが、この親愛の語は、やはり人麿心中の女を暗指してゐるのである。契沖の代匠記に、『イモと云は、都(すべ)て女をさして云也』とあり、眞淵の考に、『人まろの思ふ人御ともにあるを云り。されど言のなみによりて妹といへる事もあれば、そは定めがたし』と云ひ、雅澄の古義に、『この妹は、從駕の女房たちのうちをさすなり』といひ、守部の檜嬬手にも、『みち潮のさわぐ比(ころ)しも、女どもが乘りありくらむ』といひ、山田氏の講義には、『この妹は必ずしも人麿の思ふ人をいへるにあらず。ただ車駕に供奉せる女官をさせるのみにて誰と定まれる人なきなるべし』と云つてゐるが、伊藤左千夫の新釋には、『人麿が其の情人である供奉の女の苦艱をあはれがつて詠めることが判然として居るのである』と云つて、此は情人と明快に云つてゐる。武田氏の新解には、『妹は婦人に親み呼び懸ける詞である。作者人麻呂の心に、特にある一人の妹と呼ぶべき人が、行幸の御供の中にあつたのであらう』と云つてゐる。これは私の說と一致してゐる。〇**荒島回乎** アラキシマミヲである。島回は從來シマワ(舊訓)。シママ(宣長)等と訓んでゐたのを、荒木田久老が信濃漫錄でシマミと訓んだのである。このミは礒ミ、浦ミ、隈ミなどのミで、めぐりの意味である。『春がすみ島回(しまみ)にたちて鶴が音の悲しみ鳴けば』(卷

二十。四三九八)。『島回(しまみ)には木ぬれ花咲き許多(ここはく)も見のさやけきか』(巻十七。三九九一)などの用例が參考になるのである。

大意 一首の意は、潮が滿ちて來て鳴りさわぐころ、伊良虞島(いらごじま)のあたりを榜ぐ船に、供奉のかよわい女等も乘ることであらう。あの島のあたりは荒浪が立つと聞いてゐるが、我が思ふ兒も難儀してゐないだらうか。といふぐらゐに取ればいい。

鑑賞 意味合はそのくらゐのものだが、この歌には濃厚な情味があつていい。特に人麿一流の聲調の潤ひがあり、取りすまして乾ききつてゐないのが特徴である。そして、『妹(いも)乘るらむか』の簡淨な一句が一首全體にひびきわたつて、何とも云へない感味を與へてゐる。萬葉末期のもののやうにこせこせと云つてゐずに、一氣に云つてゐるところは、人麿の手法であつたのだから、好まぬ人は好まぬが、好まぬからと云つて直ちに棄つべきものとも思へない。私の如きは、やはりこの歌も萬葉集から佳作を拔くとせば拔くべき歌だと思ふのである。それから、此歌の技法上からいへば、いろいろ注意することがある。初句で、『に』と云つて、第三句で、『に』と云つてゐる。これも後世の歌には稀であるのみならず、桂園調などの標準から行けば、『しらべ』が無いと云ふべき筈のものであるが、人麿のものになると、やはり不思議な調和を保つてゐるやうに感せしめる。それから、

『らむか』の『か』、結末の『を』などの使ひざまも、砕け易いところだが砕けてゐず、普通の人のあぶないところを平然として行つてゐて、思ひも及ばぬ成功を收めてゐる。これをば私は直ちに人麿の全力的な作歌態度に本づくものと解釋した。人麿は自ら其場にのぞまず、ただ思ひやつて詠んでゐるのだが、全體が生々としてゐて恰も現實界に直面して作歌したかの如き效果を表はしてゐる。ヲトメにしろ、イモにしろ、相交流する感味によつて、餘所餘所しいものではない。此處に三首の短歌があるが、第一首が一番よく、第三首、第二首の順序であらう。この三つはやはり連作の一態と考へていい。

上田秋成この歌を評し、『第三章（四二の此歌）にこそ、おのが心やりを述るが、朝臣のその世に秀たまへる手ぶり也。我かなしく思ふ子の、さるありその荒汐打よする遊びに、波にやとられんと心よわきさがのまゝに、濤れて浦洲やめぐる覽と思ひやり、打わびてよめるなり』（金砂三）と云つて居り、伊藤左千夫この歌を評し、『妹乘るらむか荒き島囘をと云つて、說明臭い事は少しも云はぬ。餘情限りなきものあるのも、此の邊の用意に依るのである。人麿の歌を見るもの殊に注意を要すべきぢや。中略大君の御供であるから苦しいなど思ふべきでないとか、女帝の御遊幸に供奉しての舟遊びなど必ず面白いに違ひないとか云ふ如き、淺薄な形式思想や小理窟などに拘泥せず、天眞の誠情

を歌うてゐるのである。これでなければ人を動かすことは出來ぬ。眞の歌とも云へぬ』(左千夫、新釋)と云つてゐる。

なほ、此處に短歌が三首あるについて、先進が言及して居られるから、序を以て手抄して置かう。『此三くさの初は宮びめをいひ、次は臣たちをいひ、其次は妹といへれば、人まろの思ふ人御ともにあるを云か。されど言のなみによりて妹といへる事もあれば、そは定めがたし。凡此人の歌かくならべよめるは、其歌、ことへわたして見るに面白き事あり』(眞淵、考)。『この三首がうち、第一、第三は、女房のうへなり。第二はをのこたちのうへ也。從駕の男女のうち、親屬かまたは親友なる三人に贈られたる歌なるべし。かくいづかたにも片つかず詞をつくる、倒語のいたり也かし。これ等を詞づくりのかがみとはすべきなり』(御杖、燈)。『要するに、此の三首の歌は相關連して見ねばならぬ歌で、今日の所謂連作の一種である。連作の歌といふものが如何に連想を助けて趣味を深くするかを察すべきである』(左千夫、新釋)。『以上三首人麿の歌なるが、三首個々の歌とは見えず。第一首は英虞、第二首は答志、第三首は伊良虞と近きより遠きに及ぼし、女官と官人とを交互によみ、自然に行幸の進みを想像せると共に供奉の人々の心持を思ひやりたるさまなど、三首相待ちて一團となれること著し』(山田氏、講義)。

島木赤彦氏は（四〇）の歌につき、『玉裳の裾にと如實に想像してゐるのは、その少女が人麿と相思の間であらう。さうすると、少女らのらは單に添へただけの詞である』（鑑賞及び其批評）と云つた。實際このヲトメラのラは愛すべき音調があるために附けたのがある。『處女(をとめ)らが奧津城どころ』（卷九。一八〇一）などである。また、『未通女(をとめ)等(ら)が袖ふる山の』（卷四。五〇一）などもさうだが、此處は複數に解して差支ないであらう。

参考 ○定家卿長歌短歌說に、『をみの浦にふなのりすらんあまとものたまものすそにしほみつらんか』。古來風躰抄に、『しほさゐにいとこの嶋へこく舟に妹のるらむかあらき嶋わを』を抄してゐる。○（四〇）ロレンツエン氏獨譯。(4) Wird in den Saum der schönen Kleider (3) der Mädchen, (1) die am Ufer von Ago (2) ins Schiff gestiegen sein werden, (5) die Seeflut hineingedrungen sein? ピアソン氏英譯。(5) Will the tide (seawater) have filled up (penetrated) (4) the hems of the beautiful clothes (3) of the girls (2) who will have done a boat-riding (gone on board) (1) in the gulf of Ago? ○（四一）ロレンツエン氏獨譯。(4) Werden die Höflinge des grossen Palastes (3) jetzt wohl (5) das Seekraut schneiden (2) am Kap von Tabushi? ピアソン氏英譯。(5) Will there be the cutting of fine seaweed (4) of the people of the Great Palace (3) nów? (2) near the cape of Tavusi (1) (minding of a bracelet wound round the wrist). ○（四二）ロレンツエン氏獨譯。(4) Wird meine Geliebte eingestiegen sein, (5) trotz der rauhen Inselbucht, (3) in das Schiff, (2) das an der Inselküste von Irago (1) im Meerestosen rudert? ピアソン氏英譯。(4) Will my love have embarked (3) on a boat rowing (2) from the island-coast of Irago (1) in the agitated sea, (5) the island-curve being so rough!

○

【巻一・四六】

阿騎の野に宿る旅人うちなびき寐も寝らめやも古おもふに

阿騎乃〔野〕爾　宿旅人　打靡　寐毛宿良目八方　古部念爾

題意　輕皇子宿二于安騎野一時柿本朝臣人麿作歌の短歌四首中の第一首である。反歌と同意義で、ここでは短歌と云つてゐる。輕皇子は即ち文武天皇で、持統十一年八月に即位せられたから、それ以前いまだ皇太子に坐した時の作である。追憶せらるる御父、日並知皇子（草壁皇太子）は持統三年に薨去せられた。この歌は持統六七年ごろ、人麿の想像年齢三十歳ごろの作と考へた。

語釋　**○阿騎乃〔野〕爾**　アキノヌニと訓む。安騎野は大和國宇陀郡にあり、今の松山町附近の野一帯を安騎野と稱したのであつただらう。**○宿旅人**　ヤドルタビビトと訓む。古義は『ヤドレルタビト』と訓んで、新考もそれに從つてゐるが、それでは調が少しつまるやうである。そこで伊藤左千夫は、『旅人を古義にはタビトと訓んであるが、是れは必ずタビヒトと讀まねばならぬ調子であ

る』（左千夫、新釋）といつて、ヤドレルタビヒトと訓んでゐる。それから、『宿る旅人』は、此處では輕皇子を始め奉り從駕の人々を皆指すので、人麿もその中に居たわけである。新考では『タビトは皇子御一人を指し奉るなり』と云つて居り、古義では、『旅人とあるは、從駕の人々を大かたにさして云る詞つきにて、これも實には、輕皇子をさし奉れるなり』と考へてゐる。〇打靡　ウチナビキと訓む。打ち靡きは、『寐』に續けた詞だが、此處は考の、『其なよゝかに臥さまをいふ也。惣ていはば身をなよゝかになびけ臥てねいられめやなり』に大體從ふべく、ただ『寐』の枕詞の格に使つたものであらうと思ふ。『息だにも未だ休めず年月もいまだあらねば心ゆも思はぬ間にうち靡き臥しぬれ』（卷五。七九四）、『荒磯やに生ふる玉藻のうち靡き獨や宿らむ吾を待ちかねて』（卷十四。三五六二）、『うつせみの世の人なればうち靡き床に反倒し』（卷十七。三九六二）等の作例を見れば、美夫君志の說のやうに、『今按るに打靡とは、輾轉反側するさまを形容したるものにて古を念ふあまりに、ふしまろびいねかへるさまをいふなり』とあるのも棄てがたいやうにもおもへるが、さうすればこれは、『寢らめやも』の方に強く懸かるやうな格になつて、直接、上の『寐』に懸からぬこととなるのではなからうか。そしてなほ他の例には、『水底に生ふる玉藻のうち靡き心は依りて戀ふるこのごろ』（卷十一。二四八二）『敷妙の衣手離れて玉藻なす靡きか寢らむ吾を待ち難に』（卷十一。二四八三）とい

ふのがあるのを參考すれば、『打靡き』に輾轉反側といふほどの強い意味がなく、又考の、『なよよか』といふのにもさう意味を強く取らずに、『寐』に續く寧ろ枕詞式のものとして解釋したならばどうであらうか。古義では、『草などのかたへになびきふしたるさまに、うちとけてねたるさまを形容る詞なり』と解いてゐる。**○寐毛宿良目八方**　イモヌラメヤモと訓む。『寐も寢らめやも』である。當時は、イヌヌルといふことを寢ることに云つてゐる。イは名詞でそれに奈行下二活用のヌといふ動詞を添へたものである。『白檀弓斐太の細江の菅鳥の妹に戀ふれや寐を宿かねつる』（卷十二。三〇九二）。『家おもふと寐を寢ずをれば鶴が鳴く蘆邊も見えず春の霞に』（卷二十。四四〇〇）。『眠をも睡ず吾が思ふ君は何處へに今宵誰とか待てど來たらぬ』（卷十三。三二七七）。『還りにし人を念ふとぬばたまのその夜は吾も寐も寢かねてき』（卷十三。三二六九）。『布留山ゆ直に見渡す京にぞ寐も寢ず戀ふる遠からなくに』（卷九。一七八八）。『色に出でば人知りぬべみ冬の夜のあかしも得ぬを寐も寢ずに吾はぞ戀ふる妹が直香に』（卷九。一七八七）。『この終夜に寐も寢ずに今日もしめらに戀ひつつぞ居る』（卷十七。三九六九）。『大和戀ひ寐の寢らえぬに情なくこの渚埼廻に鶴鳴くべしや』（卷一。七一）等。この用法萬葉に多い。ヤモは反語でこれは已然言を受けるものである。新考では、旅人を大勢だとせばイモネメヤモと云はねばならぬといふが、此處では、『ひとりかぬらむ』などのヌラムの已然形な

のであるから、複數でも客觀的にいふことが出來るのである。○古部念爾　イニシヘオモフニと訓む。『古おもふに』である。これは父の尊日並知皇子の御行跡のことなどいろいろと御追慕せられる輕皇子を中心として從駕の人々も昔の事をおもひ起せばといふ意味である。

大意　一首の意は、この阿騎野に今夜旅寐する人々はいろいろと古への事が偲ばれて安らかに眠りがたいといふのである。旅人といふうちには、輕皇太子もその群臣も、人麿も含まつて居り、古へといふうちには、日並知皇子尊に對する感慨が籠つてゐるのである。そして、結句は倒置句になつて、強い感慨を含ませてゐるのである。

鑑賞　ここはやはり、ヤドルタビビトであつて、ヤドレルタビビトではあるまい。それから、輕皇子を中心とする一行をば、『旅人』と稍客觀化してゐる敍法もこの歌の特徵で、長歌と少しく趣をかへてゐる點がある。それから此歌は、第二句で一寸息をつめて、第四句で一轉した氣持で一寸息をつめて、結句で据ゑてゐるが、結句の、イニシヘ・オモフニの聲調は、永歎のひびきがあつて奈何にもいい。この邊はおのづからに人麿的聲調を得たやうに思へるし、この長く餘韻を引く結句のまへに挿入せられてゐるものは、ヤドルタビビトとか、ウチナビキとか、または、イモヌラメヤモといふやうな比較的堅く且つ動くやうな音調の詞である。さういふところで微妙の調をとりつつ、

一首を構成してゐる聲調には如何にも人麿らしい大きな流動性を持つたものになつて出現してゐるのである。然も一首全體の意味合には、くどくどとしたところがなく、無ければならぬものだけに單純化してゐて、別に奇拔な點などの無いのが此歌の特徴である。短歌一首にあつては第三句は重要な役目をしてゐる場合が多い。そして此歌の第三句は、ウチナビキと置いて居る。この語は特別に人麿の發明でなく、當時の人々が普通に用ゐた言葉のやうであり、何がなし、枕詞ぐらゐの意味に用ゐた如くでもあるが、餘り意味が目だたなくて却つていい效果を得てゐる。約めていへば此歌は當然のやうな技法で別して奇拔な點はない。それにも拘らず棄てがたい感を以て迫つて來るのは、一首の聲調にあるべく、主に第四句・結句のひびきに本づくもののやうである。

先師伊藤左千夫は、此歌を評し、『此の短歌などもいづれかと云へば凡歌である。第三句「打靡(ウチナビキ)」の句などは云ひ過ぎて居る。寢る形容語と見るにしても、此の場合無要な形容の感がある。此の歌の内容から考へると、第二句の、「宿旅人(ヤドレルタビビト)」も餘り餘所餘所しい言方で面白くない。要するに一首全體が輪廓的になり過ぎて居る。感情の現れと云ふよりは他の感情を餘所から說明したに過ぎない感がある』(左千夫、新釋)と云つてゐる。先師は、當時の自分のつきつめた作歌態度から見て、かく不滿足を感じたのであつただらう。私は近代人であるから、天然・社會萬般に對する反應の爲方に

於て敢て人麿の後へを歩まうとはおもはぬが、人麿の歌の聲調には常にかうべを俯せねばならぬものである。人麿は言語の聽覺的要素に對する非凡な感覺を持つてゐた歌人であつた。

○

【巻一・四七】

眞草苅る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ來し

眞草苅　荒野者雖有　（黄）葉　過去君之　形見跡曾來師

語釋 **○眞草苅** マクサカルと訓む。舊訓のうちミクサを、考には『檜を眞木とほめいふ類にて、こはすゝき茅などの高がやをいふ』といつてゐる。古來、ミクサ（元、類）、マクサ（神、細、冷）と二とほりの訓があつた。そこで契沖も、『眞草、みとまと通ずる故に宜きに隨ひて讀なり』と云つてゐる。仙覺はミクサカルを是とし、『ミクサトイフハ、スヽキ也』と云ひ、山田博士もミクサカルを採用してゐる。**○（黄）葉** モミヂバノと訓む。これは『葉』一字であつたために、ハスギユクキミガカタミノアトヨリゾコシなどとも訓んでゐた。然るに、代匠記に、『葉過ユク。此は葉の字の

上に黄の字の落たるを强てかく讀たるなり。其故は第二卷に、黄葉(モミチハ)の過ていゆく。第九に黄葉の過ゆくこら。十三に黄葉の散て過ぬ。又黄葉の過てゆきぬと云云。皆一同に挽歌の詞也。其外挽歌ならぬにかくつゞけたる歌おほし。又第九に人丸集の挽歌紀國にての作に、鹽氣(シホケ)たつありそにはあれど往水の過ゆく妹がかたみとぞこし、是詞は少替て、意は今の歌に同じ。然れば、モミヂ葉ノ過ニシ君ガカタミトゾコシと讀べし。葉過ゆくもせはしく、跡の字の下によりと讀べき字もなし、必黄の字の落たるなり。紅葉も盛なる時あるに過としもつゞくるは紅葉は散むとて色付又惜めども脆く散物なれば、よそへて云なり。これより三首は人丸の私の心をよまれたるなるべし。日並皇子の御狩せし野なれば君が形見とはいへり』といふのを見れば明かである。〇**過去君之** スギニシキミガと訓む。此は契沖の上の文章でも明かであるが、考でも、『人の身まかれる事を譬て、黄葉の過去人(ニシ)といへる集中にいと多し』と云つて居り、又人麿の歌にも、『敷妙(しきたへ)の袖交(か)へし君玉垂(たまだれ)のをち野(ぬ)に過ぎぬ亦も逢はめやも』(卷二。一九五)といふ歌があり、また、妻の死んだ時の長歌にも、『奥つ藻の靡きし妹は黄葉の過ぎて去(い)にきと』(卷二。二〇七)云々といふのがあつて皆、死去したことに使つてゐる。このスグを死去の事に用ゐるについて、山田博士は、以下の如くに說いてゐる。『卷五の長歌「八八六」に、「伊奴時母能(イヌジモノ)、道爾布斯弖夜(ミチニフシテヤ)、伊能知周疑南(イノチスギナン)」と見え、又觀心寺阿彌陀佛造像記に、

「命過(イノチスギニシ)」といふ文字見え、最勝王經長者子流水品にその出典あり。又正倉院聖語藏御物維摩詰經卷下の奥書に、「于時過往(スギニシ)亡者穗積朝臣老」ともみえたるにて、「すぎにし」といふは死去せしといふ意なるをさとるべし。從來の諸家この意を明確にしたるを見ず』(講義)。

大意 一首の意は、草の茂つてゐる荒野だけれども、日並皇子尊の御獵のあつたところだから、その御形見(おんかたみ)とおもひ、なつかしく思つて來たのであるといふ意味である。

鑑賞 これも輕皇子をば稍客觀的にいひあらはして居り、日並皇子尊をも、『君』とだけ云つてゐるのは人麿自身に卽してゐるやうでもあり、輕皇子のことのやうでもある。古義で『おのがうへをのみいふがほにて、皇子の御うへをば、よそにしたるやうなる詞つきなれど、實は皇子の御うへを、いとほしみ奉れること上の歌のごとし』と云つてゐるのは、さういふ關係にあるからである。左千夫が、『餘所餘所しく』感じたり、或人が人麿を御用詩人だなどといふのは、この邊のことにも關聯してゐるとおもふ。併し、その時の人麿の側になつて見れば、長歌の皇子に卽して歌つたのとは、稍變化を求めた形跡があり、この歌の次の、『東の野にかぎろひの』のやうな歌もあるくらゐであり、やはりかう歌ふより途は無かつたともおもふのである。かく作歌の衝迫が分裂してゐるやうだが、よくよく味つて見れば、やはり人麿卽ち作者に卽してゐる氣持である。それだから、この歌

は輕皇子對日並皇子尊の史實を知らなくとも、人麿自身が誰かを追慕して來た歌としても味ふことの出來る歌である。そこに作者の衝迫を受取ることが出來る。

この歌も第三句で枕詞を使つてゐる。これなども現今の歌人の技法からすれば、實に無駄な空疎な感を抱かしめる。それよりも『君』をあらはすべきもつと切實な語を持つて來るべきだとおもふ。餘り安易に過ぎるとおもふのであり、筆者の如きも屢さう思つた一人である。けれども、第四句で、一轉化すべき主要句、『過ぎにし君』に飽くまで重力を持たせようとするには、第三句に枕詞を置くのも一つの手段であつた。さういふ點で、『もみぢばの』といふ枕詞は、當時にあつて既にさう強い意味が無く、やはり聲調のうへの用法であつたことが推するに難くはない。初句の、『眞草苅る荒野にはあれど』といふのは、長歌の方で、『眞木たつ荒山道を』と云つたのと同樣の技法で別に取りたてていふほどのものでなく、實際は冬野に雪でも降つてゐたとおもふが、さういふことをちつとも云つてゐず、大づかみだが、細部が目立たずに却つていい。一首は奇拔でないけれど、厭味なく大まかであつて、そして人麿らしく深部から來る一種の迫力を有してゐる。私見ではかういふ歌でも人麿は心を張つて眞率に歌ひ、相當に技法をも練つてゐると見るのである。

伊藤左千夫この歌を評して、『筆を採る直ぐに詠み得たと見ゆる淺薄な凡歌である。無くもがなの

感に堪へない。前歌に比して一層感情に乏しく、全首の語句を通じて何等の響も無い。單なる概敍の説明である。只さすがに句調が整うて居る爲に、讀者に厭はしの感を起さしめない。それが僅に此歌の價値であらうか。かういふ歌も佳い歌となると後進の人が、先入主に囚はれて、大いに人を誤るの恐れがあるのである』（左千夫、新釋）と云つた。先師の晩年はかく高いところを目ざしてゐたのであるが、私の現在はいまだ其處までには到つてゐぬ。よつて私は、この歌から力を感じつつなほ多くを學ばむと欲するものである。

○

【卷一・四八】

ひむがしの野(ぬ)にかぎろひの立(た)つ見(み)えてかへり見(み)すれば月(つき)かたぶきぬ

東　野炎　立所見而　反見爲者　月西渡

語釋　初句は、從來、『東野(あづまの)のけぶりの立てるところ見て』などと訓み、契沖も、『東野ハ阿騎野ニ近野ニヤ』と云ひ、カギロヒノタツヲケブリノタテルと訓んでゐるから、『皇子ノ出マス時ハ冬

ナレバ野ヲ燒烟ノミユルニツケテ』云々と解してゐるのである。併し、『又案ズルニ、東野ト書、西渡トカケルハ相對スル詞ナレバ、ヒムガシノノトヨミ、ニシワタルト字ノママニヨムベキニヤ。阿騎野ニシテアヅマノト云處タトヒアリトモヨムベカラズ』といふ疑問を提出し、なほ、『東ノ字ヲ義訓シテ、ハルノ野ノカゲロフタテルト點ズベキニヤ』といふ疑問をも提出してゐるのである。

春滿の僻案抄に、初句二句をアケガタニケブリノタテルトコロミテと訓み、『僻案に東の字をあけがたとよむは、日の出る方なれば、東は夜のあくるかたの義をとる。此歌の結句に、月西渡とかけるを、つきかたぶきぬと義訓を用ゐたれば、發句も義訓に東の字をかけるなるべし』といふ說を出してゐる。やはり一つの疑問の提出で有益である。賀茂眞淵は萬葉考ではじめてこの歌の初句第二句をヒムガシノ、ノニカギロヒノ、タツミエテと訓み、『東を一句とせし例、下におほし』といひ、頭註にて、『今本にあづまののけむりのたてると訓しは、何の理りもなく、みだり訓なるを、それにつき、あづま野てふ所有とさへいふにや、後人のいふ事はかくこそあれ』と云つてゐる。眞淵以後、大體この訓となつて今日に及び、この訓によつてこの歌を味ふやうになつたものである。山田博士もこの訓を評して、『このよみ方は眞淵翁の卓見の一と稱しつべし』(講義)と云つてゐる。

東野(ヒムガシノヌ)は東方の野といふことである。炎(カギロヒ)は陽炎で、この場合は曉の光が段々と增して來、東天が

赤くなり、次第に黄金色から白光に移りつついまだ日出前の光の動きを保つてゐる様をいふのである。カギロヒは古事記の、『かぎろひのもゆる家むら』（履中天皇の條）、萬葉の、『かぎろひのもゆる荒野に』（卷二。二一〇）などの用例があるのが參考になる。東天の光が雪の降つた野の上の空氣にも傳はつて何かいふにいはれぬ嚴かな光景として受取ることが出來る。卽ち、このカギロヒノタツは野に水蒸氣のたちのぼるのでなく、主に野の上の曉天に光のみなぎる有樣をいふのだとおもふのである。懷風藻には、『天漢曉光浮』といふのがある。支那流と歌の流と比較するのにいい例である。

大意 一首の意味は、阿騎野に宿つて、あくる朝、日出前の東天にすでに曉の光がみなぎり、それが雪の降つた阿騎野のすゑにもうつつて嚴かに動いてゐる、そのさまを相むかひ見て、さてその時西天をふりかへり見ると、月がもう入りかかつてゐるといふ歌である。それだからこの歌は敍景歌で、富士谷御杖の燈でいろいろ云つてゐるやうな面倒な意味は無いと考へていい。ただ一首全體のひびきとして、何かさういふものがやはり傳はつてくるのを、それを否定してはならぬのである。つまり、長歌の方の、『草枕旅宿りせすいにしへ思ひて』といふ氣持がこの歌の奥に流れてゐると感ずるのである。

鑑賞 大體この歌は敍景の歌であるが、事柄の細部を拔（ぬき）にして、極めて單純におほどかに歌つ

てゐるものである。それだから讀者の心にあらはれてくる寫象は、正岡子規が俳句寫生の方で唱へた『印象明瞭』といふものではないが、もつと全體として樣式化された大きなものである。『かへりみすれば』の語につき、先師伊藤左千夫は一種の厭味を感じ、俳優めくと評されたけれども、これは、第三句に『見えて』とあつて、第四句で『かへり見すれば』といふのだから、其處に同音の連續から來る調和が保たれてゐるのである。また、作者自身の行爲を歌に詠むときには、時に或は厭味を感ぜしめることがあるものである。戀歌のむづかしいのも其點で、例へば、『上眼（うはめ）をしつつ物おもふ』とか、『星空をしみじみ仰（あふ）ぐ』などの場合にも一種の厭味を感ずるから、先師が、『かへり見すれば』の語に厭味を感じたのもさういふ理由に本づくと思ふのである。併し總じて人麿の歌の特徵は一面からいへばさういふ細かいところに執せずに聲調の大調和を成就するのがその特色であり、特に、ヒムガシノといふやうな音を以て始まる歌だから、カギロヒノ、カヘリミ、カタブキヌなどといふ音を以て調和をとりつつ進んで居るのである。聲調は朗かで大きく豐かで、その奧に哀韻がこもり、哀韻は主として、『かへりみすれば月かたぶきぬ』の下の句（しもく）にあるごとくに思はれるとせば、意味のうへの、『かへりみすれば』に厭味を感ずるよりも、その聲調のひびきに顧慮すべきだと思ふのである。先師はこの歌は意味のみがあつて響が無いと云つたが寧ろその反對ではあるまい

か。またこれ以上に作者の主觀が露出したならばこの歌は面白くなくなるだらうとさへ思ふのである。

また、先師は、この歌の價値を相當に認めても、なほ稚氣を脫せないと云つた。又關谷眞可禰氏も、初句二句に句割があつて、調べが整つてゐない。そこで恐らく人麿の作ではあるまいと云つてゐる。併し、現在の私等から見れば、この、ヒムガシノ。ヌニカギロヒノ（句割れ）。タツミエテのところの句割があるために却つて平凡を破つて興味ふかくさへ感じてゐるのである。この初句第二句の訓は眞淵の訓だが、さういふ句割のあるために、或は訓が動搖するかも知れぬといふ學者もゐる。それはもつといい訓が出ればまたその時であるけれども、この眞淵の訓を以て味つても、先づ先づ充分に味ふことの出來る歌だと自分はおもつてゐる。

本來からゆけば、東天の陽炎を主として歌つて、西天の月などを詠まないのが常道だともおもふが、それは現今の藝術觀技巧觀で、人麿はさうむづかしく考へずにただ質實に全力をそそいで、この大景をいひあらはさうとしてゐるところに、犯すべからざる莊嚴な調べが出來たのではなかつただらうか。

『かぎろひの』といつて、『立つ』とつづけたのなども實に旨いとおもふし、それから第三句に

『て』でつづける句法は輕くなる傾向をもつて居て、後世の歌で幾つもその例を拾ふことが出來るのであるが、この歌の場合は、第三句で『見えて』といつて、第四句で『かへりみすれば』と云つたから、そこの小休止がまだまだ連續的となつて、後世の歌のやうに、上の句、下の句式に二分せずにしまつたのである。卽ち、輕く辷らずに濟んだのである。さういふ特徴を此歌は持つて居る。いづれにしても此歌は、大力量のある歌人が、句割をしたりなどして相當の滓を殘してゐる點でも、甘滑から脱して一種渾沌の調を成就して居るのである。

結句の、『月かたぶきぬ』といふのは、後になつても少しく踏襲されたけれども、いづれかといへばこの句は萬葉調であるから、實朝とか眞淵とかの歌にあるのは當然で、實朝の如きはこの結句を三首にも使つてゐる。俊頼の散木奇歌集は、もづの草莖。根白高萱を取入れた歌はあつても、『月かたぶきぬ』を結句に据ゑた歌は無いやうである。定家の拾遺愚草には、『影はるかなるあけがたの月』の句があつても、『月かたぶきぬ』の結句は無い。そして萬葉には、

君に戀ひしなえうらぶれ吾が居れば秋風ふきて月かたぶきぬ　（巻十。二二九八）

眞袖もち床うち拂ひ君待つと居りしあひだに月かたぶきぬ　（巻十一。二六六七）

ぬばたまの夜は更けぬらし玉くしげ二上（ふたがみ）山に月かたぶきぬ　（巻十七。三九五五）

あき風に今か今かと紐解きてうら待ち居るに月かたぶきぬ（卷二十。四三一一）

の四首がこの結句を有してゐるのは、萬葉調の特質を考へるうへに大切なことと思ふのである。即ち、萬葉調の特質は、根白高萱を幾たび用ゐても直ぐ萬葉調にはなり得ないのである。

この歌の、『東。野炎。立所見而。反見爲者。月西渡』の書き方は、人麿歌集の書き方に似て文字の數が少い。この人麿歌集の書き方は契沖以來先賢の注意したところであるが、これを標準として考へると、この一首などは人麿歌集からの選出だとも考へることが出來るのであるが、その前後の歌が必ずしもさうでないから一言で云つてしまふことは出來ない。

參考　○賀茂眞淵の考に、『曉東を見放れば、明る光かぎろひぬるに、又西をかへり見ては、落たる月有といふなり。いと廣き野に旅ねしたる曉のさま、おもひはかるべし』と解いてゐる。○富士谷御杖の燈には、カギロヒノタツミエテを、『これは、東野の民家などに、はやく起てたく火のほのかにみゆるを云。ある註に、此炎ここは明そむる光をいふといへるは後世心なり』といひ、この歌を評して、『この長歌短歌ともに、すべて詞づくり凡ならぬが中に、此歌ことに詞のいたりをきはめられたり。歌はかやうに、よまゝほしき事なり。たゞ夜のあくるさまをのみいひて、皇子はみねましつらむか。又今までもねられ給はぬか。とさま〲御心のうちをおもひやり奉られたる情、句々・言々の置ざまにてあらはにいひたるよりも、深く思はるゝぞかし。かく、事もなげによみふせられたる詞づくりに、かばかりの情こもりて、今みるにだに涙もさしぐまるゝは、ひとへに倒語の妙用なり。倒語のくしびなる事、おもひしるべし。上古の人の詞づくり、いづれとはなきが中に、此ぬしをばひじりとさへいふだに、よまれた

る歌どもなほ優劣あり。そのすぐれたるが中にも、此歌などは、此集中の王ともいふべしかし。』○關谷眞可禰氏の人麿考に云。『眞可禰按ふに、こは人麿の歌にあらざるべし。此歌第二句、「野に炎の」といふこと句をなさず。かかる詞萬葉にも往々見えたれば、後世この變體にならへる歌いといと多けれども、こは正格の詞にあらず。卽ち、（東の野に）（炎の立）といふべき詞なるに、（野に炎の）といひては句法亂れたり。凡そ人麿の歌多き中に、かかる調のあしき歌殆ど希なり。且つ萬葉の書風によれば、東乃野爾炎之などなくて叶はず。（萬葉二卷にも東乃多藝能御門爾などあり）。然るに、短歌四首中此の一首に限り、辭を略けるは蓋し人麿歌集中より出しものにはあらざるか。（人麿歌集の歌は概して辭を略けり）。同集中には偶かかる調のあしき歌も見ゆれど、そは皆他人の歌の入りたるにて、人麿の歌として見るべきものあらず。さらば此歌も同じ從駕の人のよめるが、人麿歌集中に入り、そを誤り傳へて、萬葉には反歌として載せしなるべし。この一首は人麿の歌としも思はれず、猶よく考ふべし。』○伊藤左千夫の評に云。『客觀的敍景の歌として、兎も角も成功した歌であらう。仔細に詮索して見れば飽足らず感ずるところがあるけれど、さう細かしい事は云はずとするも、第四の句、「顧みすれば」の一句は、俳優の身振めいて、此の歌の如き漠然たる大きな景色を描く句法としては、甚だ拙と云はねばならぬ。今一つ此の歌の大なる缺點は、作者の懷想の不明な點である。大野の曉天を眺めて其の光景に憧憬したのか、或目的を有した此の旅寢に時間の推移を嘆息したのであるか、主なる感じの判然せぬのが、讀者の感興を惑はせるのである。卓拔した詩才で一氣呵成に詠まれた歌であるから、大抵の讀者は先づ其の外形に眩惑されて終ふのであらうが、能く心を落ちつけて味うて見ると、話の意味は解つても、話す人の心持は判らぬといふ樣な感ある歌である。餘りに文章的に平面に記述されてあつて、作者の感情がどの句の隅にも現れて居ない。故に讀去つて、言語の意味を解する外に、何物をも感ずることが出來ない。要するに凡作とは云へないが、內部の組織に缺點が多く、稚氣を脫せぬ歌と云はねばならぬ。』（左千夫、新釋）。○井上通泰博士の新考に云。『ヒムカシノ空ニといはで、ヒムカシノ野ニといへるを思へばここのカギロヒはかの遊絲繚亂碧羅天な

ど云へる類にはあらで地中よりのぼる水蒸氣の陰なるべし』云々。

○

【巻一・四九】

日竝の皇子の尊の馬竝めて御獵立たしし時は來向ふ

日雙斯　皇子命乃　馬副而　御獵立師斯　時者來向

語釋　**○日雙斯皇子命**　ヒナミシノミコノミコト（講義等）と訓むのと、ヒナメシノミコノミコト（新訓等）と訓むのと二通りある。代匠記・考などはヒナメシと四音にし、古義ではヒナミノと矢張り四音にしてゐる。僻案抄にヒナメシノミコノミコトと訓んでから大體さういふ訓になつて今日におよんでゐる。**○馬副而**　ウマナメテと訓む。馬を竝べてで、皇子を中心として多勢騎馬して威勢よくの意味である。やはり巻一の、『たまきはる宇智の大野に馬竝めて朝踏ますらむその草深野』（四）から始まつた技法の如くであるが、同じ人麿の長歌に、『馬竝めてみ獵立たせる弱薦を獵路の小野に』（巻三。二三九）といふのがあり、また山部赤人の長歌に『馬竝めて御獵ぞ立たす春の茂野に』

（卷六。九二六）といふのがある。その他、『馬並めて今日吾が見つる住吉（すみのえ）の岸の黄土（はにふ）をよろづ世に見む』（卷七。一一四八）。『秋風は冷しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩が花見に』（卷十。二一〇三）などなほ用例がある。**○御獵立師斯**　ミカリタタシシと訓んだのは契沖で、『是をばタヽシヽとよむべし。み狩に立給ひし時と云ふなり。タチシヽとよむはわろし』と云つてゐる。非常に働きのあるいい句である。山田氏は、『この御獵は冬の鷹狩なるべし』と云つてゐる。**○時者來向**　トキハキムカフと訓む。キムカフと訓んだのも契沖で、『狩は冬に宜きに折節、薄おしなみ雪ふる比なれば、時はきむかふと云へり。第十九家持長歌にも、春過て夏き向へばともよまれたり』（代匠記）と云つてゐる。キムカフはその時になつたの意である。なほその歌の反歌に、『ほとゝぎす飼ひ通（とほ）せらば今年經て來むかふ夏は先づ喧（な）きなむを』（卷十九。四一八三）といふのがある。

大意　一首の意は、いよいよ御獵をすべき日になつた。御なつかしい日並皇子尊が御生前に群馬を率て御獵をなされたその時のやうに、いよいよ獵をすべき時となつたといふぐらゐの意であらう。『ほとほと夜あけむとする事を、前の歌にはよみ、此歌はやゝ朝となりてよめるなるべしといへり。此說しかるべし』（古義）といふのは當を得てゐるやうである。美夫君志に、『一首の意は、夜も明はてて、昔シ父ノ尊の御獵し給ひし、其時節は來たれども御父尊は再び來りおはします事のなき

を歎きたる也。時者の者のてにをはにて、さきこゆる也』といつてゐるが、そこまで露はには云はずに味ひたい歌である。

鑑賞 この歌も、餘り細部をこせこせと云はずに、おほやうに歌つて、勁健の響を漲らせてゐるのであるが、この歌の結句は前の歌の、『古おもふに』と同じやうに、流動句で非常に据わりのいいものである。つまり人麿の力量を遺憾なく發揮したものといふことになるのであるが、なほ、初句第二句の十二音をば、『日並の皇子の尊の』といふ固有名詞で費してゐる。これなども、難ずる人は、『やすみしし吾大王高照す日の皇子』式、或は、『もののふの八十氏河』式に取るかとも思ふが、實際、この十二音が餘り細部にわたらない固有名詞であるために、『馬なめて御獵立たしし』といふ句が、最も鮮明に再現されてくる意味の内容效果を持つに至つたのである。人麿をばただ腕まかせになぐり詠むやうに解釋するものもゐるけれども、私の如きは、一首の結果から見て、一氣呵成の作のごとくにして實に眞率な丁寧な作とおもふのである。人麿の作を通覽するに、重厚で輕薄の音調の無いのは實に不思議なくらゐであるが、この一首も亦その實例と看做すことが出來る。はじめの方は、『の』でつづけた句法だから、原作には、『日並の』のところに『の』があつたものと見える。それから、この歌の第三句の終が『て』であるのは、前の『東野炎』の歌の場合と同様である

が、前の歌と同じく、『時は來向ふ』といふ重く強く大きな句で結んでゐるのである。

このあたりの歌に餘り感服しなかつた伊藤左千夫が此一首を評して、『四首の短歌中此の一首最も優れて居る。同じく一氣呵成になつた作であるけれど、一首に背景も含まれ、時は來向ふの一句に、作者及び同じ境遇に居る人々と、時間の關係に、感情の動きが含まれてゐる。中略大野の曉天明け離れて、今に先考が馬を並べて此所に御獵立たした時になると、皇子を始め、附從の人々まで深き感懷に打たれたものと思はれる。此の歌は其の情緒を直截に歌うたものである。文章的敍述ではあるが、以上の如き大なる背景を有して居るから、少しも淺い平淡な感じがない。實に痛切にして壯快な感じの歌である。かういふ歌を無造作に作つて居るから、人麿は矢張り人麿であると云はねばならぬ』(左千夫、新釋)と云つてゐる。これは褒めたのであるが、左千夫は人麿を難ずるにしても、人麿をば萬葉集中の第一流の歌人と認容して置いての論だといふことを忘れてはならぬのである。さうでないと左千夫の人麿論に一つの錯覺が惹起され易いのである。

以上の短歌四首に就き、美夫君志には次のごとく綜括してゐる。『さて此四首の順序をいはば、はじめに荒野らの旅宿のくるしき事をいひ、次にさる荒野なれども、御父尊の形見なりとおもほして幸ませるよしをいひ、次に其夜のはやく明なむ事をおもふよしをいひ、次に夜も明はてて御父尊

の御獵し給ひし時の來たれるよしを述べたるなり』。

山田博士の講義に、『以上の四首順を逐ひて一の意を完成せり。そのさま恰も支那の律體の詩に似たり。故人那珂通高は之を絕句の起承轉結になぞらへて說けり。まことにいはれたる說なりとす。卽ち第一首は起句に當り、阿紀の野に旅宿する由をうたひて、先づその古を偲ぶ爲なるを提唱す。第二首は承句に當り、この野に來れる所以を明かにし、第三首は一轉して、その翌日の曙のさまを敍し、第四首に至りて、はじめてこの行の目的が狩にあり、その狩も、懷舊の情をはらさむが爲に行はるる由をいひて本旨を明にす。この故に四首相聯關照應して一篇の詠をなす。所謂連作の模楷實にこゝに存す。かくて又長歌の本旨もこの第四首に至りてはじめて明にせられたり。これは人麿の歌にても傑作と評すべきものなるべし』と云つてゐられる。なるほどこの四首は連作の體であるが、左千夫が連作論をなした時には、この一聯を勘定に入れなかつたが、今見ればやはり連作の一體と看做していい。ただその連作といふのも支那の詩などよりももつと自由で流動的で窮屈ではない。長歌の方で、『草枕旅宿りせす古(いにしへ)思ひて』と止めたから、短歌第一首も、『寐も寢らめやも古(いにしへ)おもふに』と止めた。そのあたりはうまい。ほか三首は、連作も起承轉結といふ程の意圖が目立たないのが詩よりも歌のいい點である。

参考 ○玉葉集には、『あづまののけぶりのたてる所見て顧みすれば月かたぶきぬ』を選び、○定家卿長歌短歌説には、『秋ののにやとるたひ人うちなひきいもねらめやもむかしおもふに』。『まくさかるあらのはあれとはすきさるきみかかたみのあとよりそこし』の二首を抄出して居る。○（四六）ロレンツエン氏獨譯。(2) Wird der Reisende, (1) der auf dem Felde von Aki sich ruht, (3) (auf sein Lager) hingestreckt, (4) tief schlafen, (5) wenn er vergangener Zeiten gedenkt? ピアソン氏英譯。(2) The traveller stopping the night (1) on the field of Aki (4) would he sleep (even) a sleep (3) stretched-out? (5) thinking of times gone by. ○（四七）ロレンツエン氏獨譯。(2) Trotzdem es nur ein rauhes Feld ist, (1) auf dem man Susuki-Gras schneidet, (5) bist du wahrlich hierher gekommen in dem Gedanken, dass es hier noch eine Erinnerung geben könnte (4) an den Herrn, der dahingeschieden ist, (3) wie bunte Herbstblätter fallen. ピアソン氏英譯。(2) Though it is but a wild plain (1) on which fine herbs are cut (5) You have come here thinking it a remembrance (souvenir) (4) of your August Father who has passed away (3) (as the maple-leaves)! ○（四八）ロレンツエン氏獨譯。(1) Am östlichen Felde (2, 3) zeigt sich die aufgehende Sonne, (4) und wenn ich zurückblicke, (5) neigt sich der Mond herab. ピアソン氏英譯。(3) There is visible the rising-up (2) of the sun-glow in the field (1) on the East-side, (4) and when I do a backglance (5) the moon declines to the West). ○（四九）ロレンツエン氏獨譯。(5) Jetzt kommt jener Zeitpunkt, (1, 2) an dem der Prinz Hinameshi, (3) die Pferde aneinanderreihend, (4) einst zur Jagd aufgebrochen ist. ピアソン氏英譯。(5) The time has come back (4) in which there has been the putting-up of the August Hunt (3) ranging the horses in order (2) of the August Prince (1) Vinami!

石見のや高角山の木の間よりわが振る袖を妹見つらむか

石見乃也　高角山之　木際從　我振袖乎　妹見都良武香

題意　柿本朝臣人麿從石見國別妻上來時歌二首并短歌といふ一聯中、初めの長歌の反歌二首中の第一首である。

語釋　**○石見乃也**　イハミノヤと訓む。このヤはよく場處・地名に附けて口調をよくする例である。繼體紀に、阿符美能野愷那能倭倶吾伊云々。萬葉卷十四に、美奈刀能也安之我奈可那流云々(三四四五)。**○高角山之**　タカツヌヤマノと訓む。この高角山の所在に就いて、井上博士の新考に、『されば今の高津は古の高角山にあらず。さらば古の高角山は今のいづくに當るかといふに國府より遠からず都濃を過ぎての山なるべければ恐らくは都濃に近き連山のうちなるべし。なほ云はば都濃といふ地名と高角山といふ山の名との間に關係あるべし』といつてゐる。これは、都農の郷(角

の郷)にある山、即ち『ツヌヤマ』で、高く目立つから、『高ツヌ山』と云つたもので、今の那賀郡嶋星山である。人麿時代には、海岸はもつと山の方に近寄つてゐて、國府からの道路は丁度この嶋星山の麓の小山を縫うて、江ノ川の岸に出て、舟で渡つたものらしい。美濃郡の高津町の高角山といふのは附會の說である。**○木際從** コノマヨリと訓む。考はコノマユモと訓んだ。これは或本の『木際從文』に據つて訓んだのだが、却つて口調がわるい。**○我振袖乎** ワガフルソデヲと訓む。人と別れる時、悲しい時、戀しさに堪へざる時などに袖を振つた用例がある。『玉桙の道行く人も一人だに似てし行かねばすべをなみ妹が名よびて袖ぞ振りつる』(卷二。二〇七)。『凡ならばかもかもせむを恐みと振りたき袖を忍びてあるかも』(卷六。九六五)。『倭道は雲がくりたり然れどもわが振る袖をなめしと思ふな』(卷六。九六六)。『妹があたり吾袖ふらむ木間より出でくる月に雲な棚びき』(卷七。一〇八五)。『汝が戀ふる妹の命は飽きたりに袖ふる見えつ雲がくるまで』(卷十。二〇〇九)などがあり、又文選劉鑠擬古詩に、眇々陵二長道一、遙々行遠之、回レ車背二京里一、揮レ手從レ此辭云々とある。**○妹見都良武香** イモミツラムカと訓む。これには兩說あるから後記する。『シホミツラムカ』(卷一。四〇)などと似て居り、人麿聲調の一傾向と看做すことも出來る。そのほか、『ぬばたまの黑髮敷きて長き夜を手枕のへに妹まつらむか』(卷十一。二六三一)。『風をいたみいたぶる浪の間無く吾が念

ふ君は相念ふらむか』（巻十一。二七三六）。『高圓の秋野のうへの朝霧に妻呼ぶ牡鹿出で立つらむか』（巻二十。四三一九）などの例がある。皆、結句の聲調を理解するのに役立つもののみである。

大意　一首の意は、石見の高角山の山路を來つつ、その木の間から振つたわが袖を、わが愛する妻が見たであらうか。こちらからは妻のゐる村里の見える氣持だが、或は向うからは見えなかつたかも知れないといふ氣持が交つてゐる。おぼつかないが、なつかしいといふ氣持である。

從來この歌につき、『木の間よりわが振る袖』と解すべきか、『木の間より妹見つらむか』と解すべきか二說があり、代匠記・童蒙抄・考・略解・古義・檜嬬手等盡く第二說を採つてゐるのは、代匠記が、『此歌下の句を打返して妹見つらむか我ふる袖をとなせば意注を待ずして意明なり』と云つたのに本づくらしく、童蒙抄でも、『なほざりに見ては、人丸の木の間より袖をふるを、妻のみつらむかとよめるやうにきこゆれども、さにはあらず、木間より妻の見るらんかとよみし歌也』等と云つて居り、先進盡くそれに贊成したのであつたが、井上博士の新考が、熊谷直好の說をも參考して、『此反歌は句のままに心得べし。卽人麿が高角山の木間より袖を振りて見せしなり』といふ說を出した。これは、講義も、『確證なき限りは穩かなる解し方とすべきものなりとす』と云つてゐるごとく、無理のない說とおもふから私も從つた。のみならず地理的に云つても、角の里を立つてこの角

の山の山腹を縫うて江ノ川の岸に來るのだから、どうしてもさう解釋しないと道理に合はぬのである。これは私等同志も以前からさう解してゐたが、文獻を諳んじてゐなかつたために實は契沖以來の第二説のあることを知らずにゐた有樣であつた。

鑑賞 この反歌は、人麿が石見から妻に別れて上來する時の長歌があり、海邊の敍景をいろいろ云つて、『いや遠に里は放りぬいや高に山も越え來ぬ夏草の思ひ萎えて偲ぶらむ妹が門見む靡けこの山』と結んで、さてこの反歌があるのである。反歌の方では稍別趣に變化を試みて、『我が振る袖を妹見つらむか』と結んだのは讀んで大に有益をおぼえる。反歌の方では、單純化して、『妹見つらむか』で統一せしめ、ほかの言葉はそれを中心として一つの諧調を保つてゐるものである。

この長歌の方の、『妹が門見む靡けこの山』といふのも、心の願望の行くままに歌つたもので、穿鑿する學者は、孔子の龜山操の、『予欲レ望レ魯兮。龜山蔽レ之。手無ニ斧柯一。奈ニ龜山一何』などを直ちに聯想してその模倣だとまで云つてゐるけれども、かういふ人間の感情は何も模倣によつてはじめて起るものではない。『三輪山をしかも隱すか雲だにも情あらなむ隱さふべしや』（卷一。一八）や、『妹が家も繼ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを』（卷二。九一）などの如き心的過程に本づくものである。ゆゑに物理的には山が靡かないので毫も差支はないごとく、『わが振る袖を妹

見つらむか』と云つても物理的に嚴重に、さう長く妻が人麿をながめてゐなくともいいのである。ただ人麿は高角山の山道を通りつつ、妻の里の方をかへり見て、感慨を漏らすのに、かういふ云ひ方をしたのである。卽ちかういふ云ひ方が文學として歌として奈何なるかといふことになるのであるが、距離の近い場合ならば無論腑に落ちる云ひ方であるから、その距離を延長して、氣持で歌つたものとせば、やはり心の自然的なあらはれだと謂ふことが出來る。この歌から學ぶのはさういふ無理のない言葉の運びにあるべく、現代の吾等ならば、『袖振る』などの代りに種々新しいことが這入つて來るわけである。

○

【卷二・一三三】
小竹の葉はみ山もさやに亂れども吾は妹おもふ別れ來ぬれば

小竹之葉者　三山毛清爾　亂友　吾者妹思　別來禮婆

題意　反歌二首中の第二首目である。

語釋 **○小竹之葉者** ササノハハと訓む。考・檜嬬手・攷證・美夫君志等從之。ササガハニ（代匠記）。シヌノハハ（童蒙抄）。ササガハハ（略解・古義）等の訓がある。古事記上卷に、訓二小竹一云二佐々一とある。神功皇后元年の紀に、小竹此云二之努一云々。萬葉卷一に、小竹櫃とある。和名抄竹類に、蔣魴切韻云、篠（先鳥反、和名之乃、一云佐々、俗用二小竹二字一謂二之佐々一）細竹也とあるから、小竹はシヌともササとも云つてゐるが、シヌは撓ふ意味から來た語だから、この歌の場合は第二句の『み山もさやに』に續くための聽覺上の語としてササと訓ずる方がいい。先進もさう論じてゐる如くである。古義では、卷二十の、佐左賀波乃佐也久志毛用爾（四四三一）。卷十九の、和我屋度能伊佐左村竹（四二九一）の例を引いて居る。

○三山毛清爾 ミヤマモサヤニと訓ずる。ミは音調上から山に附けたものである。古來美稱と云つてゐる。『み山には射目立渡し』（卷六。九二六）。『足引のみ山も清に』（卷六。九二〇）。『ゆふさればみ山を去らぬ布雲の』（卷十四。三五一三）。『梅の花み山としみにありともや』（卷十七。三九〇二）等の例がある。清爾は、音の響で、さわめく形容である。古語拾遺に阿那佐夜憩とあり、注に、竹葉之聲也とある。此處に引いた卷六の、『足引のみ山も清に落ちたぎつ芳野の河の河の瀨の』（九二〇）は瀧の音の形容であり、動詞となれば、『葦邊なる荻の葉左夜藝秋風の』（卷十。二一三四）。『小竹が葉の佐也久霜夜に』（卷二十。四四三一）などとなる。童蒙抄では、『さやにはあきらかに也』と注したのは、萬

葉の、『背(せな)のが袖も佐夜爾(サヤニ)振らしつ』(卷十四。三四〇二)。『雲雀あがる春べと佐夜爾(サヤニ)なりぬれば』(卷二十。四四三四)。『筑波嶺を淸(さや)に照らして』(卷九。一七五三) 等の例に據つたものと見えるが、この一首の解には穩當では無い。なほ、この『モ……ニ』といふ格は、『ぬなとももゆらに』(古事記上卷)。『足玉も手珠もゆらに』(卷十。二〇六五)。『いはもとどろに』(卷十四。三三九二) などと同じで、山田氏の講義に審かである。**〇亂友** 舊訓に從つてミダレドモと訓んだが、この訓には大體三とほりの說がある。第一。ミダレドモ說。『此ノ歌ノ中ノ五字、古點ニハ、ミダルトモトモ和ス。イササカアヒカナハズ。ミダレドモト和スベシ』(仙覺抄)。『舊本に從て、ミダレドモと訓べし』(古義)。そして古義では、古事記允恭天皇の條の歌に、加理許母能美陀禮婆美陀禮(カリコモノミダレバミダレ)とある例、萬葉卷十二の、松浦舟亂穿江之(マツラブネミダルホリエノ)(三一七三) の例、卷三の、苅薦乃亂出所見海人釣船(カリゴモノミダレイヅミユアマノツリブネ)(二五六) の例を引いてゐる。そして眞淵が卷十二の歌(三一七三) の亂字をサワグと訓んだにつき、『岡部氏が此ノ歌の亂をもサワグとよみて、今をサワゲドモとよむ證とせるは大しき非なり、三ノ卷ノ歌を以ても、必ズミダルとよむべきをしれ』と論じた。近く山田氏の講義で、『この亂字には「サワグ」「サヤグ」とよむべしといふ證古今に一も存せず』と云つて此說を支持した。第二。サワゲドモ、サヤゲドモ說。眞淵は、『亂は騷なり』とし、卷九の高島之の歌(一六九〇)。卷十二の松浦舟の歌(三一七三)を引いてゐる。檜嬬手はサヤゲドモ

と訓んで大體眞淵說に從つた。美夫君志は、『舊訓にミダレドモと訓るはわろし。又集中ところ〴〵に亂をマガフとよめれど此は上のサヤニをうけたるなれば必サヤゲと訓べき也。書紀神武紀に聞喧擾之響焉此云ニ左揶霓利奈離ニ云々。古事記中卷に久毛多知和多理許能波佐夜藝奴云々などもあり』と云つた。第三。契沖のマガヘドモ說。『六帖ワカルラムは一向に改たれば云に及ばず。古點ミダルトモは假令の意にて下句に叶はず。仙覺の今の點ミダレドモ尤當れり。今按マガヘドモと和すべし』（代匠記）と云つたのに、由豆流が贊成して、『舊訓みだれどもと訓るいと誤りなり。（中略）小竹の葉に風などのふき、み山の物しづかなるも、さやさやと鳴さわぎて物にまがへども』云々（攷證）と云つてゐる。第四。柿本集にミダルラム。新古今にミダルナリとあるが、これは論外である。以上の如くであるが、ミダレドモ。サワゲドモ。サヤゲドモのいづれかを取つて鑑賞していい。**○吾者妹思**　ワレハイモオモフと訓む。そしてこの第四句は、ワレハイモモフとせずに、一音餘してよむ方がいいとおもふ。童蒙抄でイモシヌブと訓み、『古印本共に、おもふとよみたれど、長歌にしぬぶらんとあるをとりて、上にもしぬの葉はとよみ出したれば、しぬとよまではかなふまじき故、いもしぬぶとよめるなり』と云つてゐるが、聲調が小きざみになつて人麿調でなくなる。**○別來禮婆**　ワカレキヌレバと訓む。別れて來て寂しいからといふ心が含まつてゐる。『難波潟こぎ出し船のはろばろに別れ來ぬれど忘

れかねつも』(卷十二。三一七二)などの例がある。

大意 一首の意は、このあたり一帶の山に茂つてゐる笹の葉に風が吹いて、ざわめき亂れてゐるこの寂しくもさわがしい山中を歩いて來ても、吾が心はそれに紛れることなく、ただ一向に、別れて來た妹のことをおもつてゐる、ぐらゐの歌である。『其み山さへさわがしくみだるれども、我は犯にし故郷を別て來ぬれば妻を思ふ意更に紛るる方なしとなり』(代匠記)。『こゆる山こぞりて、さゝ吹風のさやぐには、大かた物もまぎれ忘るべくかしましけれど、別れし妹こひしらは、猶まぎれずといふなり』(考)によつて、大體前賢の言葉をうかがふことが出來る。

鑑賞 此處に、『紛れることなく』といふ語を挿入して解釋したのは契沖に從つたので、先進殆ど盡く同樣であるが、實際は、『ども』には、それだけで既に強い感動が籠つて居るのだから、さういふ『それに紛れることなく』などといふ語を補充せずに、直ちに、『われは妹おもふ』と續けてその心持を感得するやうに練習する方がいいとおもふ。卷九に、『高島の阿渡河波は驟げども吾は家おもふ宿りかなしみ』(一六九〇)は全く類想の歌である。又源氏野分に、『風さわぎ村雲まよふ夕にも忘るゝまなく忘られぬ君』といふのも類想で、代匠記に既に引用してゐる。

海原を八十島がくり來ぬれども奈良の都は忘れかねつも (卷十五。三六一三)

ひさかたの天照る月は見つれどもあが思ふ妹にあはぬころかも　（卷十五。三六五〇）
あまざかる夷にも月は照れれども妹ぞ遠くは別れ來にける　（卷十五。三六九八）
むかひゐて一日も落ちず見しかどもいとはぬ妹を月わたるまで　（卷十五。三七五六）
高島の阿渡白波は動げども吾は家もふいほりかなしみ　（卷七。一二三八）
陸奥の眞野の草原とほけども面影にして見ゆとふものを　（卷三。三九六）
天漢瀬々に白浪たかけどもただ渡りきぬ待たば苦しみ　（卷十。二〇八五）

第三句に『ども』のある數首を此處に集めて見たが、極めて明快に解釋の出來るものから、稍朦朧としたものまである。併し其處で一たび感動を籠らせる句法であるから、作歌の稽古上參考になるもののみである。

さて右は、仙覺抄・古義・講義等に據つて第三句をミダレドモと訓んでの鑑賞であるが、かうすれば人麿一流の聲調として充分受取ることが出來る。サヤゲドモは寧ろ音が主で聽覺的であるが、ミダレドモは目の感覺が這入つて來て寧ろ視覺的と謂ふことが出來る。そして戀愛抒情のかういふ歌にまで強く響く聲調を以て歌ふのが人麿の個性で、何かすべすべしない原始的な或るものを傳へしめてゐるのである。古義でミダレドモと訓んだのは、文字の考證以外にその聲調に人麿的なもの

を感じつつさうしたのであつただらう。人麿の聲調はかかる抒情詩でも莊重に響かせるのだから、
甘美に通俗的に行くといふわけではなく、また、萬葉卷十四の東歌などにある戀歌の可憐素朴とは
別途にあるものとして鑑賞すべきものである。

次にこの歌の第三句を眞淵に從つて、サワゲドモと訓んで味ふことも出來る。考の頭注に、『さや
ぐはこゑ、さわぐはかたちなり』とあるが、此は心理的な解明でおもしろい。檜嬬手は眞淵のこの
聽覺說を採つてサヤゲドモと訓み、新訓もそれに從つたのであるとおもふが、ここは、笹の葉のミ
ダレル視覺的狀景、卽ち眞淵の所謂『かたち』と解してもいいのである。なほ、『此は上のサヤニを
うけたるなれば必サヤゲと訓べき也』(美夫君志)の如く、同音で續けるといふ考であらうが、併し類
音にしても幾分の變化があつた方がよく、サワゲドモとした方がよいやうにも思ふ。サヤニ・サヤ
ゲドモと續けると輕快になり過ぎるといふことも云ひ得るし、愚見によれば、サヤニ・サワゲドモ
でも幾分輕くなつたやうにおもふのである。つまり初句にササノハハといふ左行の音があるのだか
ら、ミヤマモ・サヤニ・サヤゲドモでは餘り同音が續き過ぎるやうである。さてサワゲドモと訓ん
でこの一首を味ふと、やはり相當の歌として受取ることが出來る。人麿のおもかげを彷彿とせしめ
ることの出來る歌である。いろいろの意味で高級な歌である。萬葉學者は常に學問的に穿鑿してそ

の究極に到るのであるが、作歌の稽古のための萬葉鑑賞者はいろいろの訓をも時には包容しつつ鑑賞することが出來る。それだけの自由を保持しつつなほ萬葉の歌に親しみ得る一つの例としてこの一首に逢著したのであつた。

次に、この人麿上來の道筋を、一般の學者は山陰道卽ち出雲路へ越させてゐるのであるが、豐田八十代氏及び私は備後路へ越させてゐる。大概の學者は、人麿上來の道筋は、出雲路を通る山陰道だとし、人麿は官人だから、官人は驛路を通過するので、間道を通過しないのが普通だから、備後へは出なかつたと論ずるのであるが、驛路を通過するのはその方が便利だからで、不便ならば、縱ひ驛路の制度が出來てからでも改良した程で、大同元年六月十一日の官符で、山陽道新任國司は無理に山谷嶮深の陸路を通過せずとも海路赴任していいと公布してゐるのがその證である。特に人麿時代には石見の驛制が未だ完成してゐなかつたのだから、官人と雖も上來の時には、便利な道筋を選んで備後に拔けたものであつただらう。さう見立てて、安濃郡大田から邑智郡粕淵へ行く途中、湯抱(ゆかかへ)あたりからの山を見れば滿山みな篠である。これは何處の山にも篠はあるわけだから、何の不思議がないと云へば云はれるが、試に汽車で出雲路へ拔けて海岸に近い山を見るに、決してさういふ篠でないことが分かる。また長歌の内容から推察して、その日のうちの詠歎だとせば、人麿は馬

で、邑智郡あたりの山中を通過してゐる趣と解すべきものである。

○

【巻二・一三四】

石見なる高角山の木の間ゆも吾が袖振るを妹見けむかも

石見爾有　高角山乃　木間從文　吾袂振乎　妹見監鴨

或本反歌となつてゐる。第三句、コノマユモ（代匠記）。コノマヨモ（古義）と訓んでゐる。神武紀に伊那瑳能椰摩能虚能莽由毛云々とある。

これは前の歌（一三二）と殆ど同じだが、初句『石見のや』が、『石見なる』となり、第三句『木の間より』が、『木の間ゆも』となり、第四句『吾が振る袖を』が、『吾が袖振るを』となり、結句『妹見つらむか』が、『妹見けむかも』になつてゐるのである。

此歌は恐らく、一三二の歌が原作で、それの變形傳誦であらう。そして、その變形の方が盡く通俗化されてまづくなつてゐる。かういふ部分部分の變形なので、歌の鑑賞にも作歌の稽古にも極め

て大切な適例であるが、萬葉の編輯當時既にかくのごとくになつて傳はつてゐたことは大に興味あることであり、また萬葉の編輯者が、必ずしもその一つに決定してしまはずに、異傳のものは異傳のままに採錄した態度は尊敬すべきであらうとおもはれる。從つて、同じ人麿の作（卷三。二四〇）の、『網に刺し』の解釋の時、攷證が、『先達やゝもすれば、文字を改めんとのみして、古書をたすくるわざをはからざるは、いかなる事ぞや、こはよくも思ひたどらざるより、いでくるわざなるべし』と警しめたのは、絕待ではないが大に當を得たものともなるのである。

○

【卷二・一三六】

青駒の足掻を速み雲居にぞ妹があたりを過ぎて來にける　一云。あたりは隱り來にける

青駒之　足掻乎速　雲居曾　妹之當乎　過而來計類　一云。當者隱來計留

題意 同じく從二石見國一別レ妻上來時の第二長歌（一三五）の反歌である。長歌は前の長歌（一三一）と同じ句もあるが、文句は大體違つてゐる。地名もいろいろ詠込んであり、『肝向ふ心を痛み、思ひ

つつかへりみすれど、大舟の渡の山の、黄葉の散りの亂ひに、妹が袖さやにも見えず』云々と云つて、前のよりも少しく細かく敍してゐるところがある。『さ寐し夜は幾だもあらず』といふのだから、別離の寂しさが利いてゐるのである。

語釋 **○青駒之** アヲゴマノと訓む。青駒は青毛の馬で大體黑に青の色調を帶びた馬と解していい。和名抄牛馬類に說文を引いて青白雜毛馬也とあるのは白の色調を帶びた解釋だが、卷二十の水鳥乃可毛能羽能伊呂乃青馬乎 云々（四四九四）ともあるから、鴨の羽のやうな色調の青駒もあるわけである。**○足搔乎速** アガキヲハヤミと訓む。足搔は、新撰字鏡に馬奔走皃、阿加久云々とあるから、馬の駈ける時の脚蹄の有樣に本づき、足搔くとなつたものである。**○雲居曾** クモヰニゾと訓む。雲居は天空のことで、遠く遙かにといふ形容に用ゐてゐる。卷十二に、雲居有海山越而伊往名者吾者將戀名後者相宿友（三一九〇）。卷一に、吉野乃山者影友乃大御門從雲居爾曾遠久有家留 云々（五二）。卷二に、時風雲居爾吹爾 云々（二三〇）とある。この『雲居にぞ』は下の『過ぎて來にける』に係るので、ゾの係で結んで居る。**○妹之當乎** イモガアタリヲと訓む。妻のゐるあたりを、妻の家のある角の里を、といふ意味である。**○過而來計類** スギテキニケルと訓む。遠く遠く來たといふ意味で、結びのことは前言したごとくである。一に云ふ。『あたりは隱り來にける』と

いふのは、言葉が精選されてゐないやうだから、原作ではあるまい。

大意 一首の意は、妻の家のあたりをもう暫し見たいのだが、乘つて居る青駒の驅歩(足掻)が速いので、もう見る隙もなしに遠く遠くに隔つてしまつた。といふのである。

鑑賞 この歌を讀むと初から終まで、感動のままに順當に句を運んで、新古今あたりのやうに屈曲してゐないことが分かる。またその句々が洗練を經、無駄を棄てた單純化がしてあるので、一つの言葉でも動かし得ないほどの力量を示してゐることが分かる。そして一首の歌柄が大きく強いから、まがふかたなき人麿の聲調だといふ氣味のする歌である。本來からいへば愛妻に別れて寂しむのだから、もう少しく新古今流に細味を要求する向もあると思ふが、人麿のものは依然として大きく強く行つて居り、第三句で、『雲居にぞ』といつて、結句で、『過ぎて來にける』と止めたあたりなどは、戀愛の悲哀といふよりも寧ろ莊嚴の氣に打たれるといつたやうな聲調である。そして此處が人麿一流で人麿調の本質なのだから、これを古事記の歌や、萬葉でも人麿以前のあるもの、東歌の一部の如き素朴純眞の歌調にのみ目安を置くとせば、人麿のものに一つの形式・型を感ぜないわけに行かない點もあるのである。けれども人麿は奈何なる場合でも眞率に眞心こめて作歌し、天皇・皇子を讃頌し奉る時でも、愛妻に別れて寂しむ時でも、殆ど生眞面目とも謂ふべき態度で一様

に作歌したのではあるまいかと思ふのである。

この一首には戀愛情調といふよりは寧ろ一種莊重の韻律のあることは既に前言した如くである。そして人麿作中の佳作として何人にも引目を感じない程度の歌として鑑賞し參考すべきものと思ふのである。青駒といふ色調のことを云つたのも具象的だが、第三句に、『雲居にぞ』と置いたのが非常に大きい。そして、『妹があたりを過ぎて來にける』と据ゑたのなども、實に旨いものだとおもふのである。

足搔を詠みこんだ歌では、『武庫河の水脈を早けみ赤駒の足搔く激に沾れにけるかも』（卷七。一一四二）。『赤駒の足搔速けば雲居にも隱り往かむぞ袖卷け吾妹』（卷十一。二五一〇）。『さわたりの手兒にい行き遇ひ赤駒が足搔を速み言問はず來ぬ』（卷十四。三五四〇）。『鸕坂河渡る瀨多みこの我が馬の足搔の水に衣ぬれにけり』（卷十七。四〇二二）などがある。

この歌に、『雲居にぞ』と云つてゐるが、これは角の里もとうに見えなくなつた氣持で、里程からいへば未だ石見の國にゐるのである。恐らく邑智郡あたりを通過しつつあるのであらう。この歌の長歌（一三五）やこの次の歌（一三七）を見ても、まだそんなに遠くないことが分かる。一云。『妹があたりは隱り來にける』も妻のゐる里が段々隔つて見えなくなつた氣持で、この歌の句と意味のう

への大差はない。ただ劣るのである。

○

【巻二・一三七】

秋山に落つる黄葉しましくはな散り亂れそ妹があたり見む　一云。散りな亂れそ

秋山爾　落黄葉　須臾者　勿散亂曾　妹之當將見　一云。知里勿亂曾

題意　反歌二首中の第二首である。

語釋　**○秋山爾**　秋山にで、これは長歌（一三五）の方で、『大舟の渡の山の黄葉の散りの亂ひに』といふのに相當する。**○落黄葉**　オツルモミヂバと訓む。この一首には、『落』と、『散』と二つ使つてゐる。『我背子がしめけむ黄葉地に落ちめやも』（巻十九。四二二三）。『わが手觸れなな地に落ちもかも』（巻二十。四四一八）。『ふる雪の降りは增すとも地に落ちめやも』（巻六。一〇一〇）。『尾の上の櫻の花は瀧の瀬ゆ落ちて流る』（巻九。一七五一）。『先づ咲く花の地に落ちめやも』（巻八。一六五三）などの例がある。ここは一般に秋山に落葉する黄葉のことで、下の『散』は眼前の黄葉の散る光景を

あらはさうとしたあらはし方である。古義では、チラフモミヂバと訓み、『花・黄葉の散るをオツルと云は古言にあらざるをや』と云つたが、山田博士は、古事記雄略巻の長歌、『秀つ枝の、枝の末葉は、中つ枝に、落ち觸らばへ、中つ枝の、枝の末葉は、下つ枝に、落ち觸らばへ、下枝の、枝の末葉は、蟻衣の、三重の子が、指擧せる、瑞玉盞に、浮きし脂、落ちなづさひ』云々といふ例を引いて、必ずしも古義の說の如くでない證としてゐる。〇**須臾者**　シマシクハと訓む。シバラクハ（舊訓）。シマラクハ（略解）。シマシクハ（古義）で、古義に從つた。〇**勿散亂曾**　ナチリミダレソと訓んだ。ナチリマガヒソ（代匠記）。ナチリミダリソ（考）。ナチリミダレソ（童蒙抄）等の訓がある。亂をミダレと訓んで、マガヒと訓まぬ例は、人麿の他の歌、『み山もさやに亂れども』（卷二。一三三）の時にも解明して置いた。禁止の、『ナ……ソ』の格で、その間にチリミダルといふ語が挿入せられた例である。一本にある、**知里勿亂曾**は、チリナミダレソで、『ナ……ソ』の間に亂一語を置き、チリを上に置いたのである。古語の用法の變化をおもふべきである。〇**妹之當將見**　イモガアタリミムで、妻の居る里のあたりを見たい、あたりを見よう、といふのである。このアタリと使つた例は、『海の底奥つ白浪立田山いつか越えなむ妹があたり見む』（卷一。八三）。『妹があたり繼ぎても見むに大和なる大島の嶺に家も在ましを』（卷二。九一）。『未通女等がはなりの髮を木綿の山雲なかがふり家のあた

り見む』(卷七。一二四四)。『上毛野伊香保の嶺ろに降ろ雪の行き過ぎ難ぬ妹が家のあたり』(卷十四。三四二三)。『細石に駒を馳させて心痛み吾が思ふ妹が家の邊かも』(同卷。三五四二)などである。

大意 一首の意は、この秋山に落つる黄葉よ。暫時亂れ散ることを止めよ。その間にも戀しい妻の住むあたりを見たいものだから、といふぐらゐの歌で、結句は止まつて意志をあらはしてゐるが、餘情をふくめて味つても差支は無い。

鑑賞 この歌も、むづかしくなくどちらかといへば平凡な歌であるけれども、作者の心持がいかにも自然に無理なくあらはされてゐるのが特徴で、また輕浮に墮らないところに人麿調のいいところが存じてゐる。併しかういふ發想の歌は、或意味では氣が利き大衆向の點があるので、民謠化する傾向を餘計に持つてゐるものである。ゆゑに類似模倣の歌がこの邊から出發して流傳せられるに至つたものとおもふが、そのいまだ民謠化せざる人麿的な個性の垢の附著した儘のものとして此一首を味ふべきである。『夕闇は路たづたづし月待ちて行かせ吾背子その間にも見む』(卷四。七〇九)。『たまさかに吾が見し人を如何ならむ縁を以ちてか亦一目見む』(卷十一。二三九六)など參考となるだらう。

參考 ○袖中抄、古來風躰抄に、『石見ノヤ高角山ノコノマヨリワカフルソテヲイモミツラムカ』を載せ、新古今に、『篠

の葉はみ山もそよに亂るなりわれは妹おもふ別れ來ぬれば』を載せてゐる。○（一三三）ディッキンズ氏英譯。From mid the wildwood | on Takatsunu hangeth in our Ihami | my sleeve in farewell wave I | O will she see my token? ロレンツヱン氏獨譯。(5) Die Geliebte wird wohl gesehen haben, (4) wie ich mit dem Ärmel gewinkt habe (3) aus der Lichtung der Bäume (2) des Takatsunu-Berges (1) ach—von Ihami ピアソン氏英譯。(5) Will my wife have seen (4) my sleeves that I waved (3) from among the trees (2) of mount Takatunu (1) in Ivami? ○（一三四）ディッケンス氏英譯。By soft winds ruffled | the sasa leaves are rustling | amid the still hills | but me the murmur mindeth | of the woe of parting rfom thee ロレンツヱン氏獨譯。(1) Obgleich von den Blättern des Bambusgrases (2) der Berg sogar raschelnd (3) rauschte, (4) sehnte ich mich nach der Geliebten; (5) weil ich vom Abschied kam. ピアソン氏英譯。(1) The leaves of the small bamboos (3) though they rustle confusedly (2) filling the beautiful mountain with their murmuring, (4) I remain silent and sad, thinking of my wife (5) as I have come here, leaving her behind! ボノウ氏佛譯。En vain, feuilles de bambous, | Vous faites par la montagne entendre | Vos bruissements: | Rien ne distrait ma pensée de celle | Dont je viens de me séparer! ○（一三六）ロレンツヱン氏獨譯。(4) Ich habe das Haus meiner Geliebten (3) schon in Wolkenferne (5) hinter mir gelassen, (1) weil mein Schecke (2) auf schnellen Füssen dahinrennt. ピアソン氏英譯。(2) The galloping (1) of my blue-black horse (2) being quick, (5) I have come (3) to the place where clouds linger (5) leaving behind (4) my wife's place. ○（一三七）ロレンツヱン氏獨譯。(2) Ihr fallenden Blätter (1) des herbstlichen Berges (4) fallt doch nicht so verwirrend her b (3) für eine kurze Weile, (5) ich möchte das Haus der Geliebten sehen. ピアソン氏英譯。(2) O, red leaves that fall (1) in the autumn mountains, (4) do not fall in confusion! (3) at least for a short time (5) I want to see my wife's house!

○

【巻二・一三九】

石見の海打歌の山の木の際より吾が振る袖を妹見つらむか

石見之海　打歌山乃　木際従　吾振袖乎　妹将見香

これは或本歌一首并短歌として載つたものの反歌一首で、前の、『石見のや高角山の木のまより』の歌と殆ど似てゐる。考には打歌をタカと讀み、『此打歌は假字にて次に角か津乃などの字落し事上の反歌もて知べし。今本にうつたの山と訓しは人わらへ也』と云つてゐる。打歌の山といふ山も高角山同様未詳であるが、あの邊を踏査してもさういふ類似の山はないから、これは眞淵の想像は或は當つてゐるかも知れない。つまり前の歌（一三二）が原作で此は變形して傳はつたものであり、從つて、高角山を打歌山と書いて、編輯當時既にさうなつてゐたと看做すべきである。

『石見の海、打歌の山』とつづけた具合も上手でなく、原作に劣るとおもふ。人麿のものは當時すでにかくの如くにして一二語ぐらゐの變形を以て流傳され、時には大衆向に通俗化され、民謡化

されつつあつたことを思ふと、人麿は當時、或は歿後になかなか有名であつただらうと想像することが出來る。

この歌の次に、『柿本朝臣人麿妻依羅娘子與二人麿一相別歌一首』として、『勿念ひと君は言へども逢はむ時いつと知りてか吾が戀ひざらむ』（一四〇）といふのが載つてゐる。結句は、歸り給はむ日が分かつてゐるのならば、戀ひ歎くこともないのであるが、それさへ分からないのだから、戀ひ歎かずには居られないといふ、極めて強く活いたいひあらはし方である。編輯者は依羅娘子が石見に殘つてゐて、人麿と別れる時の歌として此處に載せてゐる。併しそれは事實であつたかどうかは不明であるが、萬葉編輯と事實と合するとせば、娘子が石見にゐたこととなる。歌は相當のもので、この方は女らしい媚態哀調さへある。

然るに、この人麿の妻、依羅娘子は大和に居て、人麿が地方（石見あたり）に行く時などに、別を惜んでこの歌を作つたのだと解釋する說がある。さうすれば、人麿が石見から妻と別れて上來する時の、角の里に居た妻とこの依羅娘子は別人といふことになるのである。さうすれば、人麿の死んだ時に、挽歌を作つた依羅娘子は、大和に殘つてゐて作歌したこととなり、從來賀茂眞淵などの考へてゐたやうに、人麿は石見伊甘郷の國府で死に、それを大和に離れて住んでゐた依羅娘子が悲歎

することとなるのであるが、既に總論篇で論じたやうに、角の里の人麿妻と依羅娘子は同一人で、『勿念ひと君は言へども』といふ依羅娘子は角の里にゐて、人麿の上來を名殘惜しく思うて詠んだ歌とし、從つて、人麿の臨終に間にあはずに、『今日今日と吾が待つ君は』(卷二。二二四)と依羅娘子の詠んだのも、娘子は石見(國府或は角の里)にゐて詠んだこととなり、私の「鴨山考」が成立つこととなるのである。萬葉の編輯の具合も、『勿念ひと君は言へども』の歌を、人麿上來の歌の次に載せてゐるのは、その當時既に人々がさう思つてゐたやうに思へるのである。

○

【卷二・一六八】

ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも

久堅乃　天見如久　仰見之　皇子乃御門之　荒卷惜毛

日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌の反歌二首中の第一首である。日並皇子尊(草壁皇子)は持統三年に薨ぜられ、人麿の想像年齡二十七歲ぐらゐで、年次の明かな人麿の作として

は最初のものである。この長歌（一六七）は長いもので人麿も骨折つて作つて居り、『そこゆゑに皇子の宮人行方知らずも』といふので止めてゐるものである。

此反歌の意は、天を仰ぎ見るやうに尊び仰ぎ奉つた日並皇子が御かくれになつて、その御宮殿もだんだん荒れゆくのは、惜しく痛ましいことであるといふ意である。この場合の、御門は御殿といふぐらゐに意味をとればよく、門を以て全體を代表せしめたものと看做していい。

結句の『惜しも』と『も』で止める法は、萬葉短歌の一つの法で、感動を籠め、四三の調のやうであつて、然も据わりの比較的いいものである。『君が名はあれど吾が名し惜しも』（卷二。九三）。『住みよき里の荒るらく惜しも』（卷六。一〇五九）。『見まくほりわがする里の隱らく惜しも』（卷七。一二〇五）。『はな芒穗にいづる秋の過ぐらく惜しも』（卷八。一六〇一）。『照る月の高島山に隱らく惜しも』（卷九。一六九一）。『あたらしき山の荒れまく惜しも』（卷十三。三三三一）など例がなかなか多い。

この一首は意味も明快だし、線が太く、人麿一流の聲調だが、第二三句の、『天見るごとく仰ぎ見し』で單純化が行はれてゐるので、取りたてて內容に就いて云々することは餘り無い。つまり、この種類の歌はこれで完成してゐるので、どんな力量のあるものが作つても、このぐらゐのものだといふこととなるのである。そして中味が單純なだけ却つて眞率に響くし、挽歌の體を得たものとも

考へられる。また長歌の方で長々と云つたから短歌の方ではかう單純にいふのが却つて本格的だといふことも考へられるのである。

年次の明かな人麿作での最初のものだが、長歌といひこの短歌といひ、既にかくの如くに完成せられてゐるのを見れば、この以前の人麿の作といふものを想像するのに興味を向けられがちである。そして、その對象は自然、人麿歌集出といふ歌に向けらるべきは先づ當然であらうか。

○

【巻二・一六九】

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隱らく惜しも

茜刺　日者雖照有　烏玉之　夜渡月之　隱良久惜毛

反歌の第二首である。茜刺は、日の枕詞で、茜いろの光、即ち赤光といふところから、日に冠したものである。『あかねの急言あけにて、あけは赤なり。日はあかくさすものなればしかつづけしなり』(美夫君志)。烏玉之も赤、夜に冠した枕詞で、射干の黒色の實から淵源した枕詞である。夜渡

月之は、天空を運行する月のといふことで、卷二に、屋上乃山乃自雲間渡相月乃（一三五）といふ例もあるごとく、働いた自然的ないい表現だとおもふ。隠良久は良行四段活用の隠ルから隠ラクとなつたものである。『をとめのい隠る岡』（古事記雄略卷）。『青山に日が隠らばぬばたまの夜はいでなむ』（古事記上卷）などの例がある。

一首の意は、これは日を天皇に譬へ、月を日並皇子に譬へたもので、天皇は持統天皇だとする説は、恐らく童蒙抄あたりに源を置き、『是は日を天皇に比し奉りて、月を皇子になぞらへてよめる歌と見えたり』（童蒙抄）といふのから引いて、古義・新考・講義等皆その説に從つてゐる。然るに考に、『是は日嗣の皇子尊の御事を月に譬へ奉りぬ。さて上の日はてらせれどてふは、月の隠るゝをなげくを強むる言のみなり。かくいへるこころことばの勢ひ、まことに及人なし』『常の如く日をば天皇をたとへ申すと思ふ人有べけれど、さてはなめげなるに似たるもかしこし。猶もいはば此時天皇おはしまさねば、さるかたにもよくかなはざるめり』と云つた。略解・攷證・美夫君志等がそれに從つてゐる。

古義では、眞淵の説を駁するに際し、左註の、『或本、件の歌を以て後の皇子の尊の殯宮の時の歌の反とせり』をも參考し、『按ッに、此ノ歌は左註に云るごとく、まことに高市ノ皇子ノ尊の殯宮ノ時の

歌の反歌にぞあるべき。されば、日者雖照有(ヒハテラセレド)は天皇の御うへをたとへ奉り、月之隱良久(ツキノカクラク)は皇子ノ尊をたとへ奉れるなり。さなくては日者雖照有と云こと、無用言(イタヅラコト)になりて聞ゆるをや、高市ノ皇子ノ尊は朱鳥三年四月、日並ノ皇子尊の薨たまひし後、皇太子に立たまひしを、持統天皇十年七月に薨たまひしかば、日は持統天皇をたとへ奉れることをもしりぬ』と論じてゐる。註疏も新考も講義も、高市皇子とせずに日並皇子として、この古義の説を認容してゐる。

さて右の如く兩説があつて、意味の上からの吟味、即ち文章的に論ずれば、無論童蒙抄説の方が合理的であるが、この一首は恐らくは眞淵説の方が確かであらう。即ち、下の句の、『夜わたる月の隱らく惜しも』といふのが主であり中心點であり力點で、上の句は聲調の勢ひで、さう云つたものと解するのがいいのではあるまいか。つまり『月の隱らく惜しも』は日並皇子の薨去を惜しみ奉つたことは確かだが、上の句は必ずしもさういふ人事的關係を顧慮せずともいいのである。これは眞淵の追言の如く、『なめげ』とか、御即位事實とかを云々せずに理解が出來るとおもふのである。今でいふなら一種の象徴歌で、人麿は、さういふ時には天然に參入しつつ作歌の出來た歌人のやうに思へる。『天雲のいかづちの上に廬せるかも』（卷三。二三五）でも、『網にさしわが大王はきぬがさにせり』（卷三。二四〇）でも、表立つたものが鮮明に活躍して、背景の方は餘り目立たない。そこが人

麿の歌の一つの特色ともいふべきほどであるから、『いかづちのうへに廬せるかも』の歌の如きも、依然として現代にも活きてゐるのである。この歌の場合も、天空の月の沈むことが寫象として鮮明で、背景の日並皇子のことは長歌又は第一の反歌の方に任せた形である。それだから一首の意は、畫には天日(てんじつ)が照つてゐるが、夜の月の無くなるのが惜しく悲しい。といふので、全體が皇子の薨去を悲しむ心で、天皇のことが混入してゐない趣に解するのである。

古義では、『日は照らせれど』の句を天皇に譬へ奉るのでなかつたのならば、無用言(イタヅラコト)だと云つてゐるけれども、それは散文的な解釋で、さういふ論法で行けば、枕詞とか、序歌などの技法は理解が出來なくなつてくるわけである。

私は、眞淵の、『日はてらせれどてふは月の隱るるをなげくを強(ツヨ)むる言のみなり』と云つたのを甚だ興味を以て受納れたのであつたが、このたび契沖の代匠記を讀むに、『文章の隔句對の如く、茜刺に烏玉と對し、日はてらせれどに夜わたる月と對せるか。和語の對は痛く覿面には非ず。又思ふに其比對までの沙汰は有まじければおのづから然るや』と書いてある。この文の末の方に留目すれば眞淵の說もそんなに妄でないといふことを暗指してゐるやうにおもはれる。

以上の如く、史實的背景を差向き潛めて天然顯象の歌として、字どほりに味ふと、何か象徵的で、

天地創造のときのやうな、いまだ渾沌たりしときのやうな、何か渦まくものがあつて、いろいろな意味で有益をおぼえる歌である。

後、澤瀉氏の新釋を讀むに、『日は持統天皇をたとへた事になる。日並皇子の薨じ給うた時はまだ天皇は卽位して居られないからその場合だと右に引用した考の說の如く見るより仕様がない。』と云つて、眞淵の說を認容してゐる。また、鴻巣氏の全釋を讀むに、『皇子を月に譬へて、如何にも嚴かな堂々たる敍法である。日並皇子の貴さと、その薨去を傷む念とが、よくあらはされてゐる。日はただ、月の對照として出したもので、天皇を指し奉つたのではあるまい。天武天皇の崩後三年、天皇空位であつた間のことである』と云つて、やはり眞淵說に從つて居る。

參考 〇(一六八)ロレンツエン氏獨譯。(5) Ach, wie bedauerlich ist es, dass (4) der Palast des Prinzen verfallen wird, (3) zu dem man aufblickte (2) wie zum Himmel, (1) der wie ein Kürbis geformt ist. ピアソン氏英譯。(4) The Palace of the Prince (3) to whom we looked up, (2) as we look up to the (1) (Long-enduring) sky, (5) Alas how regrettable the fact is that it will fall into ruin! 〇(一六九)ロレンツエン氏獨譯。(1) Wenn auch die rotstrahlende (2) Sonne scheint, (5) so ist es bedauerlich, (3) wenn der die kohlrabenschwarze (4) Nacht durchwandernde Mond (5) sich verbirgt. ピアソン氏英譯。(2) Though the Sun (Empress Dżitô) shines (1) (radiantly), (5) O, how sad is the fact of the hiding (death) (4) of the Moon (prince Hinami) that crosses the night, (black as (3) the Nuba-berries)!

○

【巻二・一七〇】

島の宮勾の池の放ち鳥人目に戀ひて池に潜かず

島宮　勾乃池之　放鳥　人目爾戀而　池爾不潛

これは或本歌一首といふので、此は前の長歌の反歌では無からう。島の宮は日並皇子の御殿の稱である。島といふのは、庭に池島などを造つたのを島といふから島宮といふのはそれに本づいてゐる。この島宮は天武紀のはじめに見えてゐる。舍人等の歌の中にも、御立爲之島乎見時云々（巻二。一七八）。御立爲之島乎母家跡住鳥毛云々（巻二。一八〇）とある。マガリノイケは仙覺の新點だが、此はその御庭の池の名であらう。今、大和高市郡高市村の小學校の近くがこの池の址だらうと云はれてゐる。その池には多くの禽鳥を放ち飼ひにしてゐたものと見える。それが卽ち放ち鳥である。或は葬儀の時の放生だといふ說（古義）もある。『人目に戀ふ』といふ云ひ方は、『耳によく似ば』などと同じく、覺官的ないひ方だが、不思議にも親しい語感を有つてゐるものである。『道とほみ來じとは

知れるものからに然ぞ待つらむ君が目を欲り』（卷四。七六六）などの例がある。

一首の意は、島の宮の勾の池に放ち飼にしてゐる禽鳥等も、皇子が薨じ給うてからでもなほ人なつかしく思つて、水の上に浮いてゐて水に潜ることはないといふのである。『人目に戀ひて池に潜かず』といふいひあらはし方は、氣が利いてゐて然も切實である。何か哀韻のひびいて來るものがあつて、近代人などにも到底いへないといふやうなものを含んでゐる。『池に潜かず』といふ云ひ方にしても平凡のやうで決して平凡ではない。それから、放ち鳥といつた名詞なども、ただの水禽等などといふのとは語感も違ふし、何か籠つてゐる。

眞淵はこの一首を、舍人等の作の一首がはみ出したのだらうと云つてゐるが、舍人等のものは縱ひ人麿の補助があるとしても、人麿自身が代作したものと直ちに斷定してしまふことは少し勇猛過ぎると思ふから、私はこの一首を人麿作と想像して此處に評釋した。

併し、この舍人等の二十三首は、既に總論篇で云つたごとく、なかなか切實なところがあり、また作歌技巧の力量の點から云つても看過出來ないものであるから、そこで人麿補助說の想像も成立つのであるが、若し、『右或云柿本朝臣人麻呂作』といふ風の歌までをも、人麿の歌の評釋の中に入れて論及するならば、この舍人の歌なども附錄として一言すべき性質のものともおもふのである。

○

敷妙の袖交へし君玉垂のをち野に過ぎぬ亦も逢はめやも　一云。をち野に過ぎぬ

敷妙乃　袖易之君　玉垂之　越野過去　亦毛将相八方　一云。乎知野爾過奴

題意　これは、柿本朝臣人麿獻ニ泊瀬部皇女忍坂部皇子一歌一首并短歌の短歌の方である。泊瀬部皇女は天武天皇の御子で、忍坂部皇子と同母の御妹に當るから、御二人は兄妹の關係である。この歌の左註に、『右或本曰。葬ニ河島皇子越智野一之時獻ニ泊瀬部皇女一歌也。日本紀曰朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑淨大參皇子川島薨』とあるので、古義では、この詞書を、『河島皇子殯宮之時柿本朝臣人麿獻ニ泊瀬部皇女一歌』としてゐる。併しこの歌は、皇女の夫の君(川島皇子か)に對する挽歌の趣であるから、從つて御二人に自然關係があるといふことになるだらう。よつてこの題詞の御二人に獻じたといふ理由もどうにか分かる訣である。

語釋　○敷妙乃　シキタヘノは、妙は絹布類の總稱だから、それに敷の字を附けて一つの熟字

とし、それから轉じて衣、枕などの枕詞となつた。ここもやはり枕詞の格で、意味があるが、表立たずに籠らせ、音調を主としてゐる使ひざまである。**○袖易之君**　ソデカヘシキミと訓む。『袖指かはしてぬるなり』（代匠記）といふので意味がわかる。童蒙抄では、『ソデカヘシセナ』とも訓んでゐる。カフは波行下二段に活用した動詞である。『白妙の袖さし交へて靡き寢しわが黒髮のま白髮に』（卷三。四八一）。『敷妙の衣手易へて自妻と憑める今夜』（卷四。五四六）。『白妙の袖さし交へてさ寢し夜や常にありけるあしひきの山鳥こそは』（卷八。一六二九）。『あらたまの年は果つれど敷妙の袖交へし子を忘れて念へや』（卷十一。二四一〇）等の用語例がある。**○玉垂之**　タマダレノと訓む。これは玉垂の緒といふところから、ヲ音に係けた枕詞と見える。玉垂は頸飾などのことで特に服飾上の普通名詞になつてゐたかどうか。それが縱ひ無くとも形容として認容出來ないこともない。『玉垂の越の大野の』（卷二。一九四）。『玉垂の小簾の間とほし』（卷七。一〇七三）。『玉垂の小簾のすげきに』（卷十一。二三六四）など皆ヲ音に係つてゐる。**○越野過去**　ヲチヌニスギヌと訓む。コスノヲスギテ（舊訓）。ヲチノヲスギヌ。ヲチノスギユキ（代匠記初）。ヲチノスギユク（代匠記精）。スギニシ。〔ヲ〕スギヌ（童蒙抄）。ヲチノニスギヌ（考）。ヲチヌニスギヌ（古義・攷證・美夫君志・講義等）。ヲチヌヲスギヌ（新考）。ヲチヌスギユク（新訓・新解・全釋）等の訓がある。越智野は今の大和高市郡にあり、當時の葬

所であつたのであらう。一云、乎知野爾過奴は確かにヲチヌニスギヌと訓むべきであるから、この越野過去は、ヲチヌスギユクと訓むのかも知れないが、或は、これは書方が違つてゐるのみで訓方が同じであつたのかも知れぬから、越野過去をヲチヌニスギヌと訓んで惡いといふことはない。これは薨じて越智野に葬られたまふのをいふので、『スギニシ君ガ』(四七)の句を卷一で讀んだごとく、死んで行くことをいふのである。**○亦毛将相八方** マタモアハヌヤモ(舊訓)。マタモアハンヤモ(童蒙抄)。マタモアハムヤモ(考)。マタモアハメヤモ(玉の小琴。諸書從之)等の訓がある。二たび逢ふことがあるだらうか。いや二たび逢ふことはないといふ反語で、この言ひ方は萬葉に多いから、ほかのところで抄出した(十六頁參看)。

大意 一首の意。これは、『此二首によれば泊瀬部皇女は河島皇子の妃となりたまへると見えたる故、題注に忍坂部皇子には兼て奉るとは申き』(代匠記)に據つて大體の作歌動機としていいだらう。即ち河島皇子を越智野に葬りまつつた時に、皇女の御心になつて人麿の作つた歌と看ていい。敷妙の袖をお互にかはして契りたまうた皇子の君は、今は薨じたまひて、越智野に葬られています。ああ二たびお會ひになることがあるだらうか。もはや決して御あひになることはない。といふぐらゐの意味の歌である。

皇女に同情し奉つたところもあり、皇女の御氣持になつて咏んだところもあるが、人麿はさういふ場合にも心持が一如に同化してしまつて、自分で悲しむ氣持になり得る歌人であつたらしい。後世の批評家等は、人麿を代作歌人などといつて輕蔑するけれども、さういふ餘所餘所しいところのない熱烈眞率が人麿の歌全般を通じてうかがはれる核心的なものだといふのが新しい批評家等と愚見とのちがふ主な點であることは他のところでも既に云つた。この一首なども、非常に靜かな、悲しみの深い歌である。例によつて枕詞を二つも一首中に使つてゐるが、これがやがて單純化の效果を鮮明にし、悲哀の韻律を補助し、內容的には悲痛の心の集注を成就せしめてゐるのである。第一二句の、『敷妙の袖かへし君』で小休止があり、そこで咏歎を籠めてゐる。そして現世にあつての御契りのさまがこの二句に凝結されて無限の氣持をさへ藏してゐるやうに感せしめる。それから第三四句で、『玉垂の越野に過ぎぬ』といつてそこで切つてゐる。これはどうしてもここで切る句法であり、感慨がここで落著かなければならぬところである。もう過ぎてしまつた。もう現世には御いでにはならないといふのだから、ここに一たび休止を置いて深い深い歎息をすべきところである。そして結句で、『またもあはめやも』と云つたのなども、非常な力量で、これは獨立句としての重大な任務を持つて居り、感情としても自然であり、反語の內容も複雜沈痛で、何ともいへない

味ひを持つてゐるが、なほこの獨立句のことは人麿のほかの短歌の時にも言及した筈である。この一首をも、人麿作中の佳作として評價していい歌だとおもふが奈何であらうか。

武田博士の新解で、第四句をヲチヌスギユクと訓み、『越智野に葬つたことを、越智野を過ぎて、何方へか行かれるやうに歌つてゐる』と解したのは、まだ過ぎ行くといふ運動のつづいてゐる趣で、これも一つの解釋として味ふことも出來る。越野スギユクで、死んでもまた遠い處に行くやうな氣持で、生死の觀念がいまだ分離しない狀態である。これは人麿が妻を亡くした時の歌にも、また人麿の『鴨山の磐根しまける』(卷二。二二三)でも、かういふ狀態の名殘をとどめた言ひ方である。

なほ追記するに、島木赤彦氏は、『一首の情よく人生の根底所に潛入し得て、而かも現實の熱烈な執著から離れてゐないところ、宛らに生ける人麿の命(いのち)に面接するを覺えしめる程の歌であり、人麿作中の尤も傑出せるものの一つであらうと思はれる』(鑑賞及び其批評)と云つた。

參考 ○(一九五)ロレンツエン氏獨譯。(1, 2) Der Gemahl, mit dem du gegenseitig die vieltuchigen Ärmel umschlungen hast, (4) ist fortgegangen über das Feld von Wochi. (5) Wirst du je wieder mit ihm zusammentreffen? ピアソン氏英譯。(2) The Lord with whom you exchanged sleeves (1) (of spread out thin stuff), (4) has passed over the plain of Woti (3) (minding of a silk thread (*wo*), on which dew-pearls are strung). (5) How will you be able to meet Him again?

○

【卷二・一九七】

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水も長閑にかあらまし　一云。水の淀にかあらまし

明日香川　四我良美渡之　塞益者　進留水母　能杼爾賀有萬思　一云。水乃與杼爾加有益

【題意】明日香皇女木瓲殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌の短歌第一首である。明日香皇女は天智天皇の皇女で、文武天皇の四年夏四月薨ぜられてゐるから、作歌もその頃のものとおぼしく、人麿の作の中では中期（人麿想像年齢三十八歳）に屬するものと思ふ。明日香皇女が薨ぜられて城上の地に殯宮を設けて葬送の儀式のあつた時の作歌といふことになる。長歌（一九六）は明日香川のことを歌つてゐるのは、皇女の名に因んだものであり、又、『川藻の如く靡かひし宜しき君が朝宮を忘れ給ふや夕宮を背き給ふや現身と思ひし時に春べは花折りかざし秋立てば黄葉かざし敷妙の袖たづさはり』云々といつてゐるのは、皇女が現身であられた時、夫君と共々であつたことを敍してゐる。それから、『ぬえ鳥の片戀づま朝鳥の通はす君が夏草の思ひ萎えて』云々といふのは、夫君の悲歎の

さまを敍してゐるのである。そしてその夫君のどういふ君であつたかが未詳であるが、長歌ではさういふ具合に歌つてゐるのである。

語釋 **○明日香川** 飛鳥川で、單にアスカガハと云つて助詞などを云はぬ例である。**○四我良美渡之** シガラミワタシと訓む。シガラミは木竹の枝などを組んで杙にからみ流水を塞くものである。『明日香川瀬々に玉藻は生ひたれど水柵あれば靡きあはなくに』（卷七。一三八〇）といふのがある。**○塞益者** セカマセバと訓む。塞いたならばといふ意で、セクは四段に活用せしめる。關といふのも語原が一つで、『妹をとどめむ關も置かましを』（卷三。四六八）。『うつくしとわが思ふ心速河のせきとせくとも猶や崩えなむ』（卷四。六八七）。『佐保河の水を塞きあげて殖ゑし田を』（卷八。一六三五）などの例があり、なほ、『天の安河の水を逆に塞上げて、道を塞居れば』『卽ち海阪を塞きて返入りましき』（古事記上卷）などがある。**○進留水母** ナガルルミヅモ（舊訓）。ススムルミヅモ（代匠記）。ミナギルミヅモ（童蒙抄）等の訓がある。ここは舊訓に從つて訓んだ。**○能杼爾賀有萬思** ノドニカアラマシと訓む。平和に、安らかにあるであらうといふ意味である。『神の渡は吹く風も和には吹かず立つ浪も凡には立たず』（卷十三。三三三五）。『吹く風ものどには吹かず立つ浪ものどには立たず恐きや神の渡の』（卷十三。三三三九）などの例がある。

大意 一首の意は、この明日香川の流にしがらみを作つて水を塞いたならば、この急流も湛となつて和(のど)かになるだらうものを。そのやうに明日香の名に同じき皇女の御命をとどめ塞く方法だにあらば、こんなに悲歎にしづむこともなく心も平和であらうに。といふぐらゐの歌である。

鑑賞 やはり人麿の歌に、『天行く月を網に刺し』(卷三。二四〇)といふのがあつたが、かういふ發想の心理も詩文を理解するうへには、或程度までは作者の心に焦點を合せて味はねばならぬのであるが、かういふ主觀は既に原始民族の間にもあり、兒童の心理にもあらはれてゐるので、愈となれば淺いものだといふことになる。特に現代人のごとく、正岡子規の客觀主義とか、本邦自然主義運動などを通過したものには餘計に淺薄に響くとおもふのである。ただ、これを明日香皇女の薨去といふ史實を比較的奥に潛めて、明日香河の天然顯象の歌として味ふと無理なく受納し得るものとなる。作者自身も、露はには天然顯象として歌つてゐるのだから、先づ第一にはさうして味ふべく、然る後に、史實をも籠めて味ふといふのである。代匠記には、古今集壬生忠岑の、『瀨をせけば淵となりてもよどみけり別をとむるしがらみぞ無き』といふ歌を引いてゐる。同じ思想の歌だが、古今調の歌といふものは輕薄で所詮人麿の歌には及びがたいものである。この一首の如きは人麿の作でも究竟的に出來のいいといふ方ではないが、一たび古今集の歌などと比較すると、直ぐその差別が

わかるのである。つまりかういふ内容の歌になれば、飽くまで眞率な語氣の色調によつてその價値が極まるべきものである。

結句、一本の、『水の淀にかあらまし』といふのは、理に墮ちてまづい。ただの一音か二音の差別であるが、歌の價値からいふと餘程大きなものになるので、作歌修練上甚だ有益な例である。淀の入つた歌では、『明日香川川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき戀にあらなくに』（卷三。三二五）。『吉野なる夏實の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして』（卷三。三七五）。『言出しは誰が言なるか小山田の苗代水の中淀にして』（卷四。七七六）などの例がある。

○

【卷二・一九八】

明日香川明日だに（一云。さへ）見むと念へやも（一云。念へかも）吾王のみ名忘れせぬ（一云。御名忘らえぬ）

明日香川　明日谷（一云。左倍）　將見等　念八方（一云。念香毛）　吾王　御名忘世奴（一云。御名不所忘）

題意　短歌第二首である。

語釋　**○明日谷將見等**　『明日だに見むと』は、今日、今の現在は駄目だとしても、せめて明日（未來）なりとも御會ひ出來るのならば、といふ意で、ダニは俗のデモで、明日が主になつて居り、セメテ明日デモナリトといふ意味である。そこで、一本のサへといふのは、主點があつてその上にまたといふ意味になり、俗にマデといふことになるから此處には適當でない。**○念八方**　オモヘヤモと訓む。これは契沖の、『思はむやなり』の解釋以來諸注それに據つた。古義も、『八（ヤ）は後世の也波（ヤハ）と同じ』と云つてゐるたぐひである。然るに攷證ではこのヤを疑問と解し、『方は助字、おもへばやのばを略けるにて、や疑ひのや也。ばを略ける事はまへにいへり。やは疑ひなるによりて下を世奴（セヌ）とむすべり。一云、念香毛（オモヘカモ）とあるも同じ』（攷證）といふ説を出した。ついで新考で攷證と同説を出し、『オモヘヤモはオモヘバヤモにてモは助辭なり。オモヘバヤ御名ワスレセヌと照應せるにてヌはヤの結なり』（新考）と云ひ、講義でも同説で、『按ずるにこのオモヘは已然形の條件を示す形にして、ヤモは之をうけたる係詞なるが、モは意輕くして、ヤの疑の意が主となれるなり。さればこれは後世の語ならば、オモヘバヤといふに同じ關係にあるものなり』（講義）と云つた。それだから、一本の、『念へかも』といふのは殆ど同じ意味に解することとなること攷證の説の如くである。反語にする説では、この『念へやも』『念へかも』は、本來は疑問的係詞であるが、その疑問が強く

なり、切實になると、關係してゐる語を否定することになる。この場合にては、『明日だに・見る』を否定することになるから、結果は反語となるのである。『見むと念はむか、念はれず、それゆゑに』といふ句法になるのである。『失せさせ給へば、明日も見んとは頼(たの)まんやは』(代匠記初稿本)。『念へやもは、思はむやなり』(代匠記精撰本)である。私は、代匠記・古義の説にするか、攷證・新考・講義の説に從はうかと種々考へて居る。なほ、武田氏の新解・澤瀉氏の新釋・鴻巣氏の全釋等も、疑問の意に取ること攷證の説の如くである。**○御名忘世奴**　ミナワスレセヌと訓む。御名を忘れることをせず、御名を忘れかねてゐる。といふ意味だが、『思へやも』を反語として強く取ると、この場合は、意味も強くなり、強い感情を隨伴して居るのである。『いよいよ御名が忘れがたい』とか、『御名を御忘れ申しがたいといふのも寧ろ當然ではありませぬか。それほど悲しみ歎いてゐるのでございます』といふぐらゐの氣持を含んでゐるのである。文法的には、ヤモの係で、セヌで結んで居る形になつて居る。又、一本云の、『御名不所忘(みなわすらえぬ)』も、御名忘れぬであるから、意味は同一に歸著するのだが、ミナワスレセヌの方が直接で強い。ワスラエヌも普通の萬葉語だが、これは所動的でやや弱い。このワスレセヌといふ言ひ方は上代語として注意すべきものの一つである。

大意　一首の意は、若し第一説の、代匠記等の説に從ふと、明日香の皇女は御薨去になられて、

今はもうこの世に御いでにならぬ。併しそれでも、せめて明日でもなりと御會ひ奉ることが出來るかといふに、それも叶はず、明日も明後日も永久に御會ひ奉ることが出來ないとおもへば、餘計に御名を忘れ得ないのである。御名を忘れ得ずこのやうに悲しみ歎くのも當然ではなからうかといふ意味になるのである。代匠記精撰本の解に、『あすだにみむとは、アスは必明日(あす)にかぎりて云にあらず。今より後の意なり。念ヘヤモは、思ハムヤなり。歌の心は、水の流るゝ如く過(すぎ)ゆかせたまへる皇女をば、明日川(あすかがは)のあすさへ又も見奉らむと思はむや、思はぬものを。中々なる川の名に通ひて、御上の忘られ參らせぬ由なり』と解し、特に、『思はぬものを』と云つてゐるのは、この解釋の主眼である。それを承けて、古義では、『歌の意は、明日香川を明日さへもまた見むと思はむやは。又も見むとはおもはれぬことぞ。なぞといはば、明日香川をみると、皇女の明日香と申す御名がわすられねば、戀しき情(ココロ)にいよいよたへられぬ故にとなり』と解釋したのであつた。初句から二句への續きは、音調のうへの連續が主要部であるが、皇女の御名の明日香といふ御名も關聯してゐるのである。代匠記初稿本に、『あすか川といふ名は、あすさへ見奉らんやうにたのもしく聞ゆれど』云々といつてゐるが、これも或程度まで否定し得ない解釋である。

さて右の如く此一首を解したが、第二說の攷證等の說に從ふと、遠く荷田信名が、『その御名を忘

れぬは、あすも見奉らんとおもふか』（童蒙抄）といひ、そのほか、『一首の意は、皇女は今薨たまひて又と見奉る事はなるまじきを、それをば明日だに見奉らんと思へるにや、とにかくに皇女の御名を忘れかねつと也』（攷證）といふのや、『一首の意、わが明日香皇女は今は此世にましまさずといふ事なるが、せめて明日なりとも又も見奉ることもあらむとわが心の奥に思へばにやわれはわが明日香皇女の御名を忘れ參らすることのなきよとなり。卽ち今日は見え奉らずとしてもこの御名の如く或は明日になりたらば見え奉ることもあらむと思はれてその御名を忘れられぬとなり』（講義）といふ解釋、それから新考が古義の解釋を評して、『代匠記の誤を敷衍したるにて人まどはしなり』といふ文などがその主なるものである。

この歌に似た形の歌は、例へば、同じ人麿作の、『百重にも來及毳常念へかも君が使の見れど飽かざらむ』（卷四。四九九）の時にも同じ問題に逢著するのであるが、其等を綜合して考へると、一體、『明日だにせめて御逢ひ奉らむと思へばにや……御名忘れせぬ』と云つたり、卷四の場合ならば、『君の使に何遍でも來てもらひたいと思へばにや……君が使を見れど飽かざらむ』と云つたりするのは、實は少し物足りない點があるのである。これでは何の爲めに、『御名忘れせぬ』と云つたか、『見れど飽かざらむ』と云つたのか、理論では分かつても、感情の點・物足らぬところがある。そ

こで、此等の場合は、『御逢ひすることがいよいよ出來ないのであるから、餘計に御名も忘れられない。御名も忘れられず悲歎するのも當然ではあるまいか』と解し、卷四の場合ならば、『君の使が何遍も來るのなら、こんなに使を待ち焦れることもあるまいが、そんなに度々は來ないのではないか、來ないのだから、このやうに飽かないのである。飽かないのももつともではないか』と解釋して、作者がなぜ結句に、『御名忘れせぬ』『見れど飽かざらむ』と云はねばならなかつたかが理解出來るやうにも思ふのである。

ここにして家やもいづく白雲の棚引く山を越えて來にけり　（卷三。二八七）

士やも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして　（卷六。九七八）

これは直ぐ名詞から續いた例だが、前後の關係で、前のは疑問で後のは反語だといふことが分かる。併しこの反語も根源は疑問詠歎から來てゐるとおもふのである。なほ次の例を見よ。

さす竹の大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君　（卷六。九五五）

背の山に直にむかへる妹の山言聽せやも打橋わたす　（卷七。一一九三）

江林に宿る猪やも求むるによき白妙の袖纏きあげて猪待つ我背　（卷七。一二九二）

うつせみの世やも二行く何すとか妹に逢はずて吾が獨り宿む　（卷四。七三三）

白檀弓石邊の山の常盤なる命なれやも（反語）戀ひつつ居らむ（卷十一。二四四四）

今日今日と吾が待つ君は石川の貝に交りて在りといはずやも（反語）（卷二。二二四）

隱口の泊瀨をとめが手に纏ける玉は亂れてありといはずやも（反語）（卷三。四二四）

うつくしと吾が念ふ妹は早も死ねやも（願望）生けりとも吾に依るべしと人の言はなくに（卷十一。二三五五）

古のささきし我や愛しきやし今日やも（疑問係詞）子等に不知にとや思はえてある斯くぞ爲來し（卷十六。三七九一）

鳴る神のしばしとよみてさし雲り雨も降れやも（反語願望）君をとどめむ（卷十一。二五一三）

かういふ例である。これには、疑問で解釋のつくのもあり、反語のもあり、願望のもある。『早裳死耶』などは、『死ね』に『や・も』の添はつたものとし、『雨零耶』も、『降れ』に、『や・も』の添はつたものと解せば、命令的願望で極めて簡單だし、古代人は『やも』を、さう面倒に思はずに詠歎の添辭として使つたとも考へられる點もあるが、この場合でも、疑問・願望といふ順序を經たものと解釋してもいいのである。つまり願望でも疑問の要素が籠つてゐると考へるのである。ただ、『も』のある時には速く願望になることとは、もが、もがも、も・ぬかなどの場合と同じである。

次に、已然言を受けた『かも』の例、つまり一本に云、『念へかも』の例を少しく集めたが、これも、疑問として解釋していいのと、反語になつた場合とある。反語になつた場合は、意味が强まつて感情が逼迫してゐるのである。

鴨頭草のうつろひ易く念へかも〔疑問〕わが念ふ人の言も告げ來ぬ　（卷四。五八三）

里家はさはにあれどもいかさまに思ひけめかも〔疑問〕つれもなき佐保の山邊に哭く兒なす慕ひ來まして　（卷三。四六〇）

いかばかり思ひけめかも〔疑問〕敷妙の枕片去り夢に見え來し　（卷四。六三三）

冬ごもり春の大野を燒く人は燒き足らねかも〔疑問〕吾が情熾く　（卷七。一三三六）

朝に行く鴈の鳴く音は吾が如くもの念へかも〔疑問〕聲の悲しき　（卷十。二一三七）

山菅のやまずて君を念へかも〔疑問〕吾が心どのこのごろはなき　（卷十二。三〇五五）

みをつくし心盡して念へかも〔疑問〕ここにももとな夢にし見ゆる　（卷十二。三一六二）

たまかぎる日も累りて念戸鴨〔疑問〕胸やすからぬ戀列鴨〔疑問〕心の痛き　（卷十三。三二五〇）

戀ふれかも〔疑問〕胸の病める念へかも〔疑問〕心の痛きあが戀ぞ日にけに益る　（卷十三。三三二九）

今更に妹にあはめや〔反語〕と念へかも〔疑問〕ここだ我が胸おぼほしからむ　（卷四。六一一）

月易へて君をば見むと念へかも（反語）日も易へずして戀のしげけく（巻十二。三一三一）

右の歌の『念へかも』の大部分は、疑問で解釋の出來る例で、特にその疑問を否定して、いまだ反語としない場合であるが、最後のものは既に反語になつて居る。即ち、月が替つたら（來月になつたら）君に逢ふことが出來ると仰せられるのですか、そんなことは到底思はれない、思ひも寄らない。なぜといふに、月が替るといふどころではない、日も替らぬのに、明日にもならぬのに、こんなに君が戀しい。といふので、この場合の『念へかも』は、その上の『月かへて見む』が否定せられて、そんなことが思ひも及ばぬことだといふ反語になるのである。この一首は計らずも人麿の此一首を解釋するのに好い參考例になつて居る。古義では結句をば『しげけむ』と訓んだ。それでも同樣の解釋がつくのだが、古義では、この『かも』を單純な疑問として取扱つてゐるのが物足りない。これは男が女に別れる時に、來月になつたら二たび逢ひに來ようと云つたのに對して、女の答へたものらしい。古義のいふ如く、『待遠なるに堪がたからむと思ふより』といふのはその通りだけれども、『念へかも』をば、『念ひ得んや。念ひ堪へんや』といふやうに反語に解釋する方がいいのである。それゆゑやはり結句は、舊訓に從つた方がいいやうである。

以上の煩しい言說で、『念へやも』『念へかも』には意味が強まり、感情が切實になつてくると、

前後の言語と相照應して、反語として働く場合のあるといふことを證明し得たとおもふ。

ただ、『明日だに見むと念へやも』を反語とせば、それが下句にも影響して、『み名忘れせぬ』も反語となつて、『み名を忘れる』といふことになるから、文法的に具合が惡いといふことになる。今試に古今集の例を引くならば、

雪ふりて人も通はぬ道なれや跡はかもなく思ひきゆらむ　（凡河内躬恒）

風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり　（讀人不知）

かういふのは、疑問の『や』で、係詞となつてゐるから、その儘で下句も解釋が出來るのであるが、次の例の如きは第三句が反語で、結句が反語にならずに濟む例である。

浪のうつせみれば玉ぞ亂れける拾はば袖に儚なからむや　（在原滋春）

袂より離れて玉を包まめや是なむそれとうつせ見むかし　（壬生忠岑）

この二つは、問答歌で、忠岑の歌は、第三句が反語で、そこで切れてゐるので、結句まではその反語が影響せぬのである。この如き例は時代の下つた第三句切の歌にはあるが、その例を以て直に人麿のこの歌を律し得るか否かは極めないとしても、『念へやも』で一寸切れるとすると、結句の、『み名忘れせぬ』も反語にせず、この儘で味ふことも出來るとも思へるのである。

【鑑賞】第一の代匠記・古義の說に從つて解釋して味ふと、文法的には少し無理のやうだが、せめて明日でも御會ひ奉ることが出來ると思はれようか。それも出來ないのだから、いよいよ增して御名が忘れられない。といふので、この方が感情が自然で却つて切實に響くやうである。第二の童蒙抄・攷證・新考・講義の說に從ふと、この方は文法的には無理がない。そして明日にでもならば御會ひ奉ることもあるだらうと思ふからであらうか、皇女の御名をお忘れ申すことはないとなる。この方は古代らしく素朴で、心の內容も極めて單純だから、この方の解釋がよいかも知れぬともおもふが、明日せめても御會出來ると思ふからかと疑つて、み名が忘れられないといふのに、現代人の吾等には物足らぬものがある。餘り二つの關聯があつさりしてゐて、前の歌の、『塞かませば流る水ものどにかあらまし』などといふ、强い切實な言ひ方の歌と調和が取れないやうにも思ふのである。つまり、『その御名を忘れぬは、あすも見奉らむとおもふか』（童蒙抄）の中で、人が薨ずれば直ぐその名が忘れられるといふことが前提となつてゐる例が欲しいやうな氣がするのである。此處は、『名を忘る』といふ用語例を吾等はもつと調べる必要があると思ふのである。

【參考】○定家卿長歌短歌說に、『あすかゝはしからみわたしせかませはなかるゝ水ものとけからまし』。『あすかゝはあすたにみむとおもふやもわかおほきみのみなわすれせぬ』の二首選出してゐる。

○（一九七）ロレンツェン氏獨譯。(1) Hätte man den Asuka-Fluss (3) aufgehalten (2) und ein Wehr hinübergeführt, (5) so würde es ruhig gewesen sein, (4) das dahinfliessende Wasser! ピアソン氏英譯。(3) If we could have stopped (1) the Asuka-river (2) throwing a barricade across it (4/5) perhaps the flowing water too would have been at rest then! (If we could have checked the death of Princess Asuka, then we should have been at rest, but alas, it is impossible to stop the swift current of the river). ○（一九八）ロレンツェン氏獨譯。(2) Morgen werde ich sogar (1) den Morgenduftfluss, den Asukagawa, sehen, (3) so denke ich — ach (5) niemals vergesse ich den Namen (4) meiner erlauchten Fürstin. ピアソン氏英譯。(3) Alas how shall I feel (2) when I see, also to morrow (1) The Asuka river? (5) Ah, I cannot forget the august name (4) of my great Princess!

○

【巻二・二〇〇】

ひさかたの天(あめ)知(し)らしぬる君(きみ)ゆゑに日(ひ)月(つき)も知(し)らず戀(こ)ひわたるかも

久堅之　天所知流　君故爾　日月毛不知　戀渡鴨

題意 高市皇子尊城上(きのへ)殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌の、短歌二首中の第一首である。

持統天皇十年七月の紀に、庚戌（十日）後皇子尊薨とあるから、その時の作歌である。長歌（一九九）は全篇百四十九句の長篇で、高市皇子の御功績を敍事詩的に歌つて、『香具山の宮萬代に過ぎむと思へや天の如ふりさけ見つつ玉襷かけて偲ばむ恐かれども』で止めたものである。眞淵が、『其の長歌、勢は雲風に乘りて御空行く龍の如く、言は大海の原に八百潮の湧くが如し』と評したが、正にこの長歌の評として役立つ如くに思へる。意味の内容の如きものは、時代に應じて如何樣にも出來る。この強く大きな息は、非凡な體力と魄力の持主でなければ出來ない業である。ただ私は長歌を作り得ない歌人だから、長歌の評釋は斷念してしまつた。そして若し餘命があつたら、諸先賢の注釋に據つて勉强しようとおもふに過ぎない。

語釋　**○天所知流**　アメシラシヌルと訓んだ。アメニシラスル（舊訓）。アメヲシラスル（童蒙抄）。アメシラシヌル（考）等の訓があり、多く考の訓に從つた。『久方の天知らしぬれこいまろび』（卷三。四七五）といふ家持の用例がある。字義どほりに解せば、天を支配することだが、それはやがて薨去せられて天に止まり給ふことに使つてゐるのである。**○君故爾**　キミユヱニと訓む。キミユヱニ（舊訓）。キミカラニ（童蒙抄）。このユヱニは、下の戀ヒワタルカモに續くので、君アルガタメニ戀フル。つまり、君ノタメニ戀フル。君ヲ戀フルといふに落著くのである。「紫のにほへる妹をにくくあら

ば人嬬ゆゑにわれ戀ひめやも』（卷一。二一）。『大船の泊つる泊のたゆたひに物念ひ痩せぬ人の兒ゆゑに』（卷二。一二二）。『朝霧の鬱に相見し人ゆゑに命死ぬべく戀ひわたるかも』（卷四。五九九）。『朝ゆきて夕は來ます君ゆゑにゆゆしくも吾は歎きつるかも』（卷十二。二八九三）。『筑紫なるにほふ兒ゆゑに陸奥の香取をとめの結ひし紐とく』（卷十四。三四二七）。『ちりひぢの數にもあらぬ吾ゆゑに思ひわぶらむ妹がかなしさ』（卷十五。三七二七）などの用例がある。宣長が、『君なるものをといふ意なり。此こと上に委く云れど、こは人の心得誤ることとなる故に又云へり』（玉の小琴）と云つたが、適切でない。

○日月毛不知　ヒツキモシラズと訓んだ。ヒツキモシラズ（舊訓）。ヒツキモシラニ（代匠記初）。ツキヒモシラニ（略解）等の訓がある。月日の幾日經つたかも知らずに、時間の觀念もなくなつて、ひたすらにといふ意である。萬葉には、『月日』とも、『日月』とも書き、日月之長我如（卷六。九三三）。天地與日月共萬代爾母我（卷十三。三二三四）などの例もあるから、時間をあらはす時にも、日月と熟字にしたものと考へていいから、必ずしも眞淵の如くにツキヒとせなくともいいと思ふ。**○戀渡鴨**　コヒソタルカモと訓む。時の觀念をも忘れてただひたすらに戀ひなげく心持で、慕ひ偲びまつることを戀ふと云ふのである。この結句は萬葉には用例がなかなか多い。『あしひきの山下動み逝く水の時ともなくも戀ひわたるかも』（卷十一。二七〇四）。『沖つ藻を隱さふ浪の五百重浪千重しくし

くに戀ひわたるかも』（卷十一。二四三七）。『宮木ひく泉の杣に立つ民の息ふ時無く戀ひわたるかも』（卷十一。二六四五）。『をとめ等が績麻のたたり打麻かけ績む時なしに戀ひわたるかも』（卷十二。二九九〇）などがある。『渡るは上の諸歌にもある如く、多くの時間を經過してその事をつゞくるをいふ』（講義）のであらう。

大意 一首の意は、神去りて天にお上りになつた君（皇子）ゆゑに、（君をば）時の經つのも知らずに、長く長くお慕ひまうす。といふぐらゐの歌である。

鑑賞 長歌の大部分が敍事的に歌つたから、短歌の方は主觀的に大まかに云つてゐる。天といひ、日月と云つてゐるあたりは、少し單純化の足りないやうだが、さう氣になるほどでもなく、『ゆゑに……戀ひわたるかも』のところで一種の調べを成就してゐるやうである。ユヱニは戀フルの原因になつてゐる用ゐざまで、且つなかなかいい音調を有つてゐる。『日月も知らず』は、他のところで、宣長が、『不知等。しらにとと訓べし』と云つた態で、『日月も知らに』と訓んでもかまはない。この方が寧ろ連續的の音調をもつてゐる。日月も知らず戀ひわたるなどといふいひぶりも、凝つたいひぶりだが、人間に共通の心理がこもつてゐると見え、現代の人々が讀んでもあまり變にもひびかぬのである。この短歌一首も、長歌の方で非常に骨を折つたから、幾らか稀薄になつた傾き

が見える。

〔巻二・二〇一〕

○

はにやすの池の堤の隱沼の行方を知らに舍人は惑ふ

埴安乃　池之堤之　隱沼乃　去方乎不知　舍人者迷惑

題意　短歌第二首である。

語釋　**○埴安乃池之堤之**　埴安池は香具山の麓に近くある池で、その池の堤といふのである。卷一に、『埴安の堤のうへにありたたし』云々（五二）といふ歌もある。**○隱沼乃**　コモリヌノと訓む。舊訓カクレヌノと訓んでゐたのを、代匠記で、『隱沼は幽齋本に隨てコモリヌと讀べし。第十二に隱沼の下ゆ戀あまりと云歌の十七に再出たるに、許母利奴能とあれば、かくれぬも同意ながら古語に付べし』と云つた。コモリヌといふのは、河などの如く流水の見えない、籠る感じの語だから、必ずしも、『草などの多く生と茂りて隱れて水の流るゝ沼なり』（古義）の如くにカクレてゐなくともよ

く、寧ろ、『こは堤にこもりて水の流れ行ぬを舍人の行方をしらぬ譬にいへればこもりぬとよむ也』(考)といふ方がいいと思ふ。なほこの隱沼の用例の中には、『隱沼の下延へ置きてうち嘆き』(卷九。一八〇九)。『隱沼の下ゆ戀ふればすべを無み妹が名告りつ忌むべきものを』(卷十一。二四四一)。『隱沼の下ゆは戀ひむ著く人の知るべく歎せめやも』(卷十二。三〇二一)。『あぢの住む須沙の入江の隱沼のあな息衝かし見ず久にして』(卷十四。三五四七)。『隱沼の下ゆ戀ひあまり白波のいちじろく出でぬ人の知るべく』(卷十七。三九三五)。またこの歌と似たものには、『行方無みこもれる小沼の下思に吾ぞものおもふ此の頃の間』(卷十二。三〇二二)。また、『青山の石垣沼の水隱に戀ひやわたらむ逢ふよしをなみ』(卷十一。二七〇七)の歌や、或はこの卷の人麿長歌の、『玉かぎる磐垣淵の隱りのみ戀ひつつあるに』(二〇七)の歌などもよい參考歌である。『下に戀ふ』と續け、『あな息づかし』と續け、『水ごもりに戀ふ』と續け、『行方も知らに』と續けるのは、皆、隱つて、鬱結してゐる心持、流通せぬ心持から來て居り、元は實際の寫生から來てゐるのである。卷十二に隱沼の歌が三首ばかり並んでゐるが、その近くに、『石走る垂水の水の愛しきやし君に戀ふらく吾が情から』(三〇二五)といふのがある。この方は流水を寫生して活々とした光景から、『愛しきやし』と續けた例で、隱沼の場合と反對である。**○去方乎不知**　舊訓ユクヘヲシラズであつたのを、代匠記で、『不知はシラニとも讀べ

し』と云つた。この近くの長歌に、世武爲便不知爾（卷二。二〇七）とあり、『たちてゐて去方毛不知朝霧の』（卷十三。三三四四）。『さ夜ふけて由久敝乎之良爾』（卷十五。三六二七）などの例がある。人麿作の日並皇子挽歌にも、『そこゆゑに皇子の宮人行方しらずも』（卷二。一六七）とある。俗に云、爲方がない。途方に暮れてゐるといふぐらゐの意味で、『いさよふ浪のゆくへ知らずも』（卷三。二六四）などからの第二義轉化である。**○舍人者迷惑**　トネリハマドフと訓む。どうしていいか分からぬので、迷つて困り果ててゐるといふ氣持である。

大意　一首の意は、埴安の池が堤にかこまれて隱つてゐて水の流れゆく行方の分からぬごとく、皇子の薨去にあひまつつた舍人等も、どうしていいか分からずに、ただ途方に暮れて思ひ惑つてゐるといふ歌である。

鑑賞　『隱沼の』までは序で、『行方を知らに』は兩方の意味にかかつてゐる。前の歌は、神去りましたといふことから、天界のことをいひ、この方はもつと現實的な地上のものを機縁として歌つてゐる。前の歌は大づかみに概念的に歌つたが、この方は埴安池といふ實際の寫生から出發して、舍人のことにまで及んでゐる。二つは連作の形式でないから、別々に獨立したものだが、心持は無論共通してゐるのである。人麿の作歌態度は極めて自由で、かういふ場合にも、左千夫の唱へた連

作論の規則のやうな具合には必ずしも行つてゐないのである。

そしてこの方は舍人のことを云つてゐるが、高市皇子尊の舍人であらうから、東宮の舍人は定員六百人で、內舍人、大舍人に分かつてあつた。人麿は大舍人だつたと想像する（考）なら、自分のことを歌つたとも見えるが、もつと客觀的に舍人等のことを歌つてゐるやうに思へる。『ゆくへを知らに舍人はまどふ』の聲調は、主觀の淫傷がなくて却つてその趣を得て居り、寧ろ莊重と謂つていい。ただ內容は皇室に關するものだから、その自然的意圖から來る形式があり、また長歌の方で非常に骨折つてゐるから、この方は幾らか集注が不充分だといふこととなるのであらう。

参考　○（二〇〇）デイツキンズ氏英譯。Month, days unknowing, | to my lord my love still passeth | I know, who ruleth | in sun-bright heaven ruleth. ロレンツエン氏獨譯。(5) Ach — in Sehnsucht lebe ich dahin, (4) ohne der Tage und Monde zu achten, (3) um deinetwillen, (2) der du den Himmel regierst, (1) der wie ein Kürbis geformt ist. ピアソン氏英譯。(3) For the sake of my Lord (2) who has gone to rule over (1) (long-enduring) (2) Heaven; (5) Alas I pass the time longing for Him, (4) without knowing day or night! ○（二〇一）デイツキンズ氏英譯。There way they know not, | his servants wand'ring wildly, | amid the grasses | grow tall on Haniyasu, | the dike of Haniyasu. ロレンツエン氏獨譯。(5) Die Höflinge irren umher, (4) ohne zu wissen, wohin sie gehen sollen (1, 2, 3,) wie (die Wellen) des von Deiche des Sees von Haniyasu eingeschlossenen Gewässers. ピアソン氏英譯。(3) Like the marshy waters

(overgrown with weeds) and shut in (2) by the dyke of the pond (1) of Vaniyasu, (5) the servants err about, (4) without knowing where to go.

○

【巻二・二〇八】

秋山の黄葉を茂み迷はせる妹を求めむ山道知らずも（一云。路知らずして）

秋山之　黄葉乎茂　迷流　妹乎将求　山道不知母（一云。路不知而）

題意　柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌の一聯中、第一の長歌の反歌二首中の第一首である。長歌（二〇七）は輕の路の妻の里で逢つたことを敍し、遂に死んだことをいつて、『輕の市に吾が立ち聞けば玉襷畝火の山に喧く鳥の音も聞えず玉桙の道行く人も一人だに似てし行かねば術をなみ妹が名よびて袖ぞ振りつる』といふので結んだもので、情を籠めた哀ふかいものである。

語釋　**○黄葉乎茂**　モミヂヲシゲミと訓み、黄葉が茂きがためにといふ意味である。『山を茂み入りてもとらず』（巻一。一六）。『櫻花このくれ茂み松風に』（巻三。二六〇）。『樹立を繁み朝さらず』

(卷六。一〇五七)などの例がある。○**迷流** マドハセルと訓んだ。マドヒヌル(舊訓)。マドハセル(考)サドハセル(檜嬬手)。マヨヒヌル(略解)等の訓がある。新考は略解に從ひ、講義は考に從つた。ここのヌルの音調はどうも具合が惡い。それから此處は死んだ妻の事を、妻が山に迷つて彷徨する樣を想像したのだから、マドハセルでも理解が出來るのである。○**妹乎將求** イモヲモトメムと訓む。妻を搜し尋ねることで、『春されば妻を求むと鶯の木末(こぬれ)を傳ひ鳴きつつもとな』(卷十。一八二六)。『むささびは木末(こぬれ)求むとあしひきの山の獵夫(さつを)にあひにけるかも』(卷三。二六七)。『あま少女(をとめ)玉求むらし沖つ浪恐(かしこ)き海に船出(ふなで)せり見ゆ』(卷六。一〇〇三)などの例がある。○**山道不知母** ヤマヂシラズモと訓む。一本の**路不知而**はミチシラズシテと訓んだ。かういふ聲調の結句は、ユクヘシラズモ。タドキシラズモなどと同じく、或は人麿の好んで用ゐた聲調ともおもふ。『年魚釣ると立たせる子等が家道(いへぢ)しらずも』(卷五。八五六)。『浪の上に浮きてしをれば奧處(おくが)知らずも』(卷十七。三八九六)。『漕ぎにし船のたづき知らずも』(卷二十。四三八四)。『吾妹子に立ち別れ行かむたづき知らずも』(卷四。六六五)。『かけて榜ぐ船とまり知らずも』(卷六。九九八)。『君を相見むたどき知らずも』(卷十六。三八一二)などの例がある。

大意 一首の意は、わが愛する妻は、秋山の黄葉(もみぢ)の茂(しげ)きがため、その中に、迷ひ入つてしまつ

た。そして妻を尋ねんに、その道も分からない。といふ意味の歌で、死んで葬られたことを、黄葉してゐる秋山（此は秋の季で羽易山の墓地）に迷ひ入つて隱れてしまつた事として歌つてゐる。

鑑賞 かういふ云ひ方は、生死の觀念のいまだ全くは分離しない狀態の名殘でもあり、實生活には見えなくなつたが、自然に天然と同化してしまふやうな心持になり得るものとも思はれるし、また未だ山中にでも生存してゐるやうな愛惜の心も殘留してゐるといふこともあり、また死骸を肉體的にいはずに、幾分美化するといふことも愛妻のためならば自然な心のあらはれと謂つてもいいのだから、ここの解釋は民俗學的な死生理論等のみに囚はれてはならないのである。人麿にとつては愛妻の死を痛むのに、かういはねばならなかつた。それがやがて人間の共通心に愬ふるところがあると見え、やはり民謡化する傾向をもつてゐるのである。

『秋山の黄葉あはれとうらぶれて入りにし妹は待てど來まさず』（卷七。一四〇九。作者不詳）。『黄葉の散りなむ山に宿りぬる君を待つらむ人し悲しも』（卷十五。三六九三。葛井連子老）。『家離り坐す吾妹を停めかね山隱りつれ精神もなし』（卷三。四七一。家持）等の歌は、死んだ者が山中や荒磯などに隠れたやうな、未だ其處に居るやうな心持に歌つて居り、其處がやはり死んだ場處或は葬つた場處と關聯せしめてさういふ表現を採つて居る。

【巻二・二〇九】

黄葉の落りゆくなべに玉梓の使を見れば逢ひし日念ほゆ

○

黄葉之　落去奈倍爾　玉梓之　使乎見者　相日所念

題意　短歌第二首である。

語釋　**○落去**　舊訓に從つてチリユクと訓んだ。代匠記初稿本書入にチリヌルナベニとも訓んでゐるよし校本萬葉集に抄してゐる。新訓がそれに從つてゐる。**○奈倍爾**　ナベニで、に連れて、と共に、と同時に等の意で、『あしひきの山河の瀬の鳴るなべに弓槻が嶽に雲たちわたる』(巻七。一〇八八)のナベと同じである。**○相日所念**　アヒシヒオモホユと訓んだ。これは舊訓に從つたが、ミシヒシノバル(童蒙抄)。アヘルヒオモホユ(考)の訓がある。

大意　一首の意は、今は秋のすゑでしきりに黄葉が散つてゐる。かく黄葉の散りゆくを見るにつれて、妻の里からの使に接すると嘗てかの里で妻と相逢つた時の事が思ひ出されるといふのであ

る。

鑑賞 妻の死を知つて、嘗て現世に居つた時の妻のことをいろいろと追憶するところで、その中でも、相戀して逢つた時のことをおもふのは、これも極めて自然な心の動きであつた。そして、いろいろな複雑した心の内容を、『逢ひし日おもほゆ』の一句で云つてゐるのも簡潔である。短歌の妙味は、かういふ微妙な點に存するので、そして一首の重心はこの場合は大體この結句にあると謂つていい。重心が第四句にあることもあり、結句にあることもあつて、萬葉の短歌では重點は大體下句（しものく）にあるのが多く、この一首などは、黄葉と使者と生前歡會と三つの融合にあると謂つても、重點は、『逢ひし日おもほゆ』にあると看做すべきである。

参考 ○定家卿長歌短歌説に、『秋山のもみちをしけみ迷ぬるいもをもとめん山ちしらすも』。『もみちはのちり行なへにたまほこのつかひをみればあひし日おもほゆ』を選出してゐる。○（二〇八）ロレンツエン氏獨譯。(5) Ach — ich kenne den Bergweg nicht, (4) wo ich nach der Geliebten suchen möchte, (3) die sich verirrt hat, (2) weil die roten Blätter so dicht sind (1) auf dem herbstlichen Berge. ピアソン氏英譯。(4) I want to go and look for my love (3) who has lost her way…… (5) Alas, I do not know those mountain-paths! (2) as the red leaves (1) of the autumn-hills (2) are so dense. ○（二〇九）ロレンツエン氏獨譯。(1, 2) Weil ich zusammen mit den bunten Blättern, die herabgefallen sind, (4) den Boten mit Edelstein geschmücktem Adzusa-Stab sehe, (5) werde ich erinnert an die Tage, wo ich sie getroffen

habe. ピアソン氏英譯。(4) When I see the messenger (3) (with the gemmed catalpabranch) (whom she sent to me, so often), (2) together with the falling (1) of the autumn-leaves, (5) Alas, then my thoughts go to those days that we met together……

○

【巻二・二一一】

去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年さかる

去年見而之　秋乃月夜者　雖照　相見之妹者　彌年放

題意　これは人麿が亡妻を悼む第二番目の長歌（二一〇）の短歌第一首である。此第二番目の長歌といふのは、現世にあつた時の妻と二人で樂んだことを敍すると共に、『吾妹子が形見に置けるみどり兒の乞ひ泣く毎に』云々と遺兒のことを歌つてゐる。そして、『羽易の山に吾が戀ふる妹は坐すと人の言へば石根さくみてなづみこし』云々と歌つてゐて、前の長歌とは内容が違つてゐる。

語釋　**○去年見而之**　コゾミテシと訓む。去年見たのであつたの意。許序能秋安比見之末爾末

（巻十八。四一一七）などの例がある。○**秋乃月夜者雖照**　アキノツクヨハ。テラセドモ（舊訓）。テラセレド（考）の訓があり、略解・古義・攷證・美夫君志等は考に從つたが、新考・講義は舊訓に從ひ、『この巻にてテラセリといはむには照有とかきてあるべきなり』（講義）といつてゐる。前の、茜刺(アカネサス)日者(ヒハ)雖照有(テラセレド)（巻二。一六九）。　月讀之光者淸雖照有(ツクヨミノヒカリハキヨクテラセレド)（巻四。六七一）。　玉如所照公乎内等白世(タマノゴトテラセルキミヲウチヘトマヲセ)（巻十一。二三五二）などの例がある。併し、テラセドモは人麿の歌として不滿足のところがあるやうな氣がして、テラセレドに從つたが、二たびテラセドモに據ることとした。或は、『天離る夷(ひな)にも月は弖禮(テレ)禮杼母(レドモ)妹ぞ遠くはわかれ來にける』（巻十五。三六九八）の如くに、テレレドモと訓んでもいいかも知れぬ。併しこれとても、『有』の字を必要とするといふ論が成立しないことはない。○**相見之妹者**　アヒミシイモハにて、相共に月を見た妻はといふ意。『鞆の浦の礒(いそ)のむろの木見む每に相見し妹は忘らえめやも』（巻三。四四七）といふのがある。○**彌年放**　イヤトシサカル。彌(イヤ)はイヨイヨといふので、放(サカル)に續くので、いよいよ歲月が隔つてゆくといふ云ひかたである。『彌(いや)つぎつぎに知らしくる天の日繼と』（巻十九。四二五四）。『彌(いや)とほに偲びにせよと』（巻十九。四二一一）。『彌遠(いやとほ)に里は放(さか)りぬ益高(いやたか)に山も越え來ぬ』（巻二。一三一）。『かくしこそ仕へまつらめ愈遠長(いやとほなが)に』（巻十八。四〇九八）。『佐保河(さほかは)に鳴くなる千鳥何しかも川原(かはら)をしぬびいや川のぼる』（巻七。一二五一）などの用例がある。

大意 一首の意は、去年見た秋の月は去年の如くに照らしてあるが、相共にその月を見た妻はもはや死んだ。そして歳月はいよいよ隔つてしまふ。といふぐらゐの歌である。月が照るといはずに、月夜が照るといふやうないひ方も萬葉のいひ方でおもしろい。照レル月夜ニなども同じ例であり、『心ぐく照れる月夜に』（卷四。七三五）。『野べさへ清く照る月夜かも』（卷七。一〇七〇）など用例がなかなか多い。

鑑賞 この一首も一讀平凡なやうだが、心が自然に流露してゐてなかなかいい歌である。『見』の字を一首中に二つも入れてゐるが、毫もさういふことに懸念してゐない。つまり理窟で行かずに、その聲調もただ繰返して讀んで見て推敲したものであらう。『妹はいや年さかる』と直接つづけた具合も大に參考になる。この歌は亡妻の一周忌のときの歌だらうといふやうな說もあるが、必ずしもさういふ嚴重な事實を穿鑿しなくともいい。今秋の淸い月を見て亡妻を追憶悲歎するところで、それが腑に落ちればいいのである。作歌實行の方の吟味はそれで足りるのだが、併し、萬葉學の一般律から行けば、さういふことをも根掘り葉掘り穿鑿しても別にかまはぬといふことにもなるのである。

〔巻二・二一二〕

衾道を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし

衾道乎　引手乃山爾　妹乎置而　山徑往者　生跡毛無

題意　短歌第二首である。

語釋　**○衾道乎**　フスマヂヲと訓む。冠辭考にはじめは冠辭として說いたが、やがて、『今おもふに、こは冠辭ならで、ただ衾てふ地の道なる比企手の山といふならんか』と訂正してゐる。併し此處は他の人麿の技法からゆけば枕詞の格だとおもふから、やはり、衾といふ地名に本づいて、『衾手を引き手』と續かせたのかも知れない。道をテともいふから相通はせたのかも知れないが、冠辭考の第一說の如く衾手といふものが存在して居れば說が成立つ。併しその意味が分からなければ暫く枕詞として鑑賞すればいい。つまり、フスマを地名だとして、そのフスマに通ふ道といふ意味だが、それがすでに枕詞の如き格になつてゐるといふのである。**○引手乃山**　ヒキテノヤマ。これは

妻の葬所であらうから、長歌の羽易の山と同じ處、少くとも近處といふことになる。次に來る歌(二一五)に、引出の山となつてゐるところを見ると、萬葉當時既にさう明瞭にテデを區別して發音しなかつたのかも知れない。○妹乎置而　イモヲオキテと訓む。妻をば葬所に置いて、妻を葬つて、といふことである。○山徑往者　ヤマヂヲユケバと訓む。その引手の山の山道を行けばといふことである。○生跡毛無　イケリトモナシと訓む。舊訓イケリトモナシと訓んだのを、代匠記に、『落句は集中に多き詞なり。いける心ちもせぬなり。今按、第十九に伊家流等毛奈之と書たれば彼に准じて皆いけるともなしと點ずべきか』と云つたのに本づき、宣長も玉勝間で論じ、古義もそれに贊成したが、攷證・美夫君志・新考等でそれを駁して、イケリトモナシを復活せしめたが、山田氏の講義は二たび精細に論究してイクルトモナシといふ案を立てた。博士の說に據ると、『生をイケリとよむもイケルとよむも、卷一卷二を通じての記載例としては變例とすべきものなれば、しかよむべきものとは斷言すべからず。余はこれは一字のままの時に、普通の動詞として取扱ふものとし、トは名詞として取扱ふものとして、イクルトモナシとよむものならざるかと考ふるものなり。但しこれを以て斷言すべしとは信ぜず。試みに一案を立てたるまでなり』(講義)と云つてゐる。私祕かに思ふに、このトを名詞として利(本居說)或は、時・所(山田說)は少し窮してゐるやうである。宣長はトは

辭の登にはあらずと斷定してゐるが、若し辭だと假定すれば、宣長自身も、『もし辭なれば、いけりともなしといふぞ詞のさだまりなる』と云つてゐるのだから、辭とすればいいのである。この根據は誰かに賴むとして、私はこのトは名詞では無いやうな氣がしてならない。宣長は、萬葉では、『刀』字を辭には使はないと云つてゐるが、其も旣に破れてゐるのだから、もつと根據を求むる餘裕があると看做さねばならない。イケリトモナシと訓む時は、生は加行四段に活用し、良行變格に移行して、イケラム、イケリ、イケリの終止段から、トモといふ辭(助詞)に續いたと看るのである。『生キ在リ・トモ・ナシ』といふ格である。

やまとの國の鎭め十方います神かも寶十方なれる山かも　(卷三。三一九)
黑樹取り草も刈りつつ仕へめど勤しき汝と譽めむ十方あらず　(卷四。七八〇)
青山のそこ十方見えず白雲も千重になり來ぬ漕ぎたむる浦のことごと　(卷六。九四二)
君なくば何ぞ身裝餝はむ匣なる黃楊の小梳も取らむ跡毛もはず　(卷九。一七七七)
梅の花それ跡毛見えず零る雪のいちじろけむな間使やらば　(卷十。二三四四)
あしひきの山下動み逝く水の時友なくも戀ひわたるかも　(卷十一。二七〇四)
高麗錦紐解き開けて夕戸しらざる命戀ひつつかあらむ　(卷十一。二四〇六)

春日野の淺茅が原におくれゐて時ぞ友なしわが戀ふらくは（卷十二。三一九六）
馬の音のとゞ登毛すれば松蔭に出でてぞ見つる蓋し君かと（卷十一。二六五三）
左奈都良の岡に粟蒔きかなしきが駒はたぐ等毛わはそともはじ（卷十四。三四五一）
天ざかる鄙等毛しるくここだくも繁き戀かも和ぐる日も無く（卷十七。四〇一九）
うちなびく春等毛しるく鶯は植木の樹間を鳴き渡らなむ（卷二十。四四九五）

右のごとき用例がある。上に『とも』と云つて、下に否定の語を置く例が此處にもある。『あらず』『見えず』『念はず』『無くも』『知らざる』等である。そしてこれが、イケリトモ・ナシを理解し得る補助例となり得るとおもふのである。併し必ずしも否定語で續けずともいいといふ證據の例もあるのである。『しるく』『すれば』『なれる』等である。それから、『とも』の上に來るのは動詞ならやはり終止段であらう。『譽めむとも』『取らむとも』等である。その他は、名詞・代名詞・副詞等の用例があり、極めて自在で、そして比較的むづかしくなく腑に落ちるのが特色ではあるまいかと思ふ程である。

大意　一首の意は、引手の山の墓所に妻を葬つて、ただ獨りその山道を歩いてゆけば、生きてゐる心地もせず、この世の事でないやうな心地もする。といふぐらゐの歌ではなからうか。

鑑賞　一首はむづかしくなく、順當に心の動くままに咏んだものであるが、『妹を置きて』といふいひざま、それから直ぐ、『山路を行けば』と續けた具合は流石に旨いものである。結句は、イケリトモナシと訓むか、イケルトモナシと訓むか、イクルトモナシと訓むか、必ずしも一つに斷定し得ないが、この世に生きてゐる心地がしないといふ意味にかはりはなからう。またさう解するのが一番自然で無理がないやうに思へる。さうすればこの結句もやはり尊敬すべきである。『間使もやらずて吾は生友奈重二』(卷六。九四六)。『月の經ぬれば生友名師』(卷十二。二九八〇)。『時となく思ひわたれば生跡文奈思』(卷十二。三〇六〇)。『年の經ぬれば生跡毛奈思』(卷十二。三一〇七)。『見れど飽かぬ君におくれて生跡文無』(卷十二。三一八五)等を、宣長は皆イケルトモナシと訓んだけれども、これ等を皆イケリトモナシと訓んで味ふこととするのである。

參考　○定家卿長歌短歌説に、『こそ見てし秋の月よはてらせともあひみしいもはいやとをさかる』。『ふすまちをひきての山にいもをきて山ちをゆけはいけるけもなし』を選出してゐる。○(二一一)ディツキンズ氏英譯。The same moon 'tis | this autumn night illumeth | that shone a year gone, | but thee and me a year's space | that year agone divideth! ロレンツエン氏獨譯。(2) Wenn der Mond der Herbstnacht (3) auch scheint, (1) wie wir ihn im vergangenen Jahr sahen, (4) so trennt sich die Geliebte, mit der ich ihn betrachtete, (5) mit den Jahren immer mehr und mehr von mir. ピアソン氏英譯。(2) The autumnal moon (1) which we have seen last year, (3) though it shines unaltered, (4) alas! my wife

with whom I have seen it (5) will be farther and farther away from me each year. ○(二一二) ロレンツェン氏獨譯。(4) Weil ich den Bergweg entlang gehe, (3) nachdem ich die Geliebte zurückgelassen habe (2) auf dem Hikite-Berg, (5) ist mir, als ob ich nicht mehr lebte. ピアソン氏英譯。 (3) I have left behind my love (2) in the Vikite mountains (1) on the way to Vusuma, (4) and when I walk along the mountainpaths (5) it is as if I were not more alive.

○

【巻二・二一四】

去年見てし秋の月夜は渡れども相見し妹はいや年さかる

去年見而之　秋月夜　雖度　相見之妹者　益年離

これは或本の歌に曰くといふ長歌（二一三）の短歌三首中の第一首である。長歌は、この前の長歌（二一〇）に似てゐて最初の長歌（二〇七）とは違つたところが多い。『吾妹子が形見に置ける緑兒の乞ひ哭く毎に取り委す物しなければ』云々といふところもあり、『羽易の山に汝が戀ふる妹は坐すと人の云へば石根さくみてなづみ來し好けくもぞ無き現身と念ひし妹が灰にて坐せば』といふので結ん

である。かくの如く長歌の内容が違ふので人麿に別々の妻があるやうに考へたのであつたが、つまり、一番はじめの『輕の道』云々の方が一人の愛人で、第二の『現身とおもひし時に』の對象はまた別な愛人と解したのであるが、山田博士は、必ずしもさう解せなくともいいと論じた。さうすれば、人麿は同一の對象について、違つた長歌を作つたといふことになるのである。或はさうかも知れぬ。さういふことが幾らもあり得るからである。

この一首の第三句、『渡れども』は前の歌の第三句、『照らせども』と唯一句ちがふだけで、あとは全く同じである。恐らく前の歌は原作で、これは傳誦の際に變化したものではあるまいか。いづれにしても、『照らせども』は自然でよいが、『渡れども』の方は何だか不自然でまづい。『渡る』の例は、此處の人麿の長歌(二〇七)に、『渡る日の暮れぬるが如照る月の雲がくるごと』といふのがあり、卷三(三一七)に、『渡る日の影も隱ろひ照る月の光も見えず』云々といふ赤人の長歌がある。

これは人麿の歌の模倣であらう。

『月讀(つくよみ)のひかりは淸く照らせれど惑(まど)へるこころ堪へず念はゆ』(卷四。六七一)。『ぬばたまの其夜の月夜(つくよ)今日までに吾は忘れず間(ま)なくし念(も)へば』(卷四。七〇二)。『春日(かすが)山(やま)霞たなびき情(こころ)ぐく照れる月夜(つくよ)にひとりかも寢む』(卷四。七三五)等の歌は比較參考して好いものである。

○

衾路を引出の山に妹を置きて山路念ふに生けりともなし

衾路　引出山　妹置　山路念邇　生刀毛無

前の歌は、『引手の山に』であるのが、ここでは『引出の山に』となつて居り、『山路を行けば』が、『山路念ふに』となつてゐる。前の歌の方は、感情に無理が無く、自然に流露してゐるが、この方は何處か不自然で、取つて附けたやうなところがある。特に、『山路念ふに』などは、『山路を行けば』よりも感情の直接性が少いやうである。これも傳誦の際の變化であらうか。然るに萬葉の編輯者は毫もそれを輕蔑せずに、傳はつてゐる儘を此處に載せたのであるから、却つて比較鑑賞するのに有益となつたのである。『生刀毛無』は、『生跡毛無』とトの假名が違ふので、萬葉集總索引では、舊訓のイケリトモナシを改めて、イケルトモナシとしてゐるのは、橋本博士の所謂甲類のトだからであらうが、この歌は元來前の歌（二一二）の異傳だから、イケリトモナシとして置く方が好い。そし

て、何故、『跡毛』を『刀毛』と書いたかを追尋すべきである。二二七の生刀毛無參照

○

【卷二・二一六】

家に來て吾屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕

家來而　吾屋乎見者　玉床之　外向來　妹木枕

第三首の短歌である。**玉床**は舊訓タマユカであつたのを、考でタマドコと訓んだ。玉床の解につき、攷證で、『玉床とは愛する妹と宿し床なれば玉とほむる也。本集十廿九丁七夕の歌に明日從者吾玉床乎打拂公常不宿孤可母寐云々など見えたり』と云つた。それで大體の意味がわかるやうである。**外向來**は、ホカニムキケル（舊訓）。ヨソムキニケリ（童蒙抄）。ホカニムキケリ（考）。トニムカヒケリ（古義）等の訓がある。今、眞淵の訓に從ふ。**妹木枕**　イモガコマクラで、卷十一に、吾木枕蘿生來（二六三〇）といふのがある。

一首の意は、妻が亡くなつてから、日も經つた。家（妻の家）に歸つて來て見ると、嘗ては共に宿

た床に、妹の木枕がさびしくも、外の方を向いてゐる。實に寂しいといふのであるが、これは、どうも人麿の歌調らしくないやうな氣持がしてゐる。第四句、『外に向きけり』も少しく餘所餘所しくて、切實に響いて來ない。實際に見たままの、現實をあらはしてゐるから、却つていいわけであるが、やはり物足らぬ或物がある。

眞淵は、『人まろの歌は長歌より反歌をかけていひはつること上にいへるが如し。然れば此家に歸りて遂に無人を思ひ知しかなしみの極みを此歌にてつくせればこは必ずこれに添べし』(考)といつた。それから契沖は、代匠記で、『潘岳悼亡詩云。展轉眄二枕席一長簟竟(ワタテ)レ牀空(シ)。摠じて右の歌ども悼亡詩三首を引合てかなしびを思ひやるべし』と云つてゐる。かういふ先賢の說があるのだが、全體の聲調が少し輕くて、人麿のいつもの風格に似ない。これは細かく寫實風に歌つたためであらうか。

參考 ○(二一六)ディッキンズ氏英譯。I turn me homewards,| and round our chamber gazing | without the alcove | my eyes upon thy pillow | upon the pillow linger. ロレンツェン氏獨譯。(1) Ich komme nach Hause (2) und sehe unser Zimmer. (4) Da steht zur Seite gestellt (3) ausserhalb des Bettes der Verstorbenen (5) das Holzkopfkissen meiner Geliebten. ピアソン氏英譯。(1) When I came back again to our house (2) and glanced at our sleeping-room (5) Ah, the small pillow of my dear wife (4) has fallen outside (3) her bed……

○

【巻二・二一八】
樂浪の志我津の子らが（一云。志我津の子が）罷道の川瀨の道を見ればさぶしも
樂浪之　志我津子等何（一云。志我津之子我）罷道之　川瀨道　見者不怜毛

題意　吉備津采女死時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌といふのの短歌第一首である。吉備津采女は吉備の國から來た采女であつただらう。そして長歌には夫があることを咏んでゐるから、采女をやめてからの死去だらうか。そして歌によれば美人であつたと想像することが出來る。『若草のその夫の子は不怜しみか念ひて寐らむ悔しみか念ひ戀ふらむ時ならず過ぎにし子らが朝露の如也夕霧の如也』（二一七）と止めたものだが、餘り長くないが、句々緊張して哀韻限りなきものである。結びを、眞淵に從つて、『朝露のごとや。夕霧のごとや』と訓んで、作歌稽古の參考としてもかまはぬ。併し人麿のつもりでは、『ごと』と訓ませたのに相違ないが、『也』字を附して書いてあるのが面白い。感動を籠めたものとして書いてあるのである。

語釋 **○楽浪之** ササナミノと訓む。近江の地名だが、既に枕詞化した用法になつてゐる。これは人麿のほかの歌の處でも云つた筈である。**○志我津子等何**（一云。志我津之子我） シガツノコラガ（一云。シガツノコガ）と訓む。志賀津で、近江滋賀郡の津で今の大津あたりであらう。神樂浪之思我津乃白水郎者（卷七。一二五三）。神樂聲浪乃四賀津之浦能（卷七。一三九八）の例がある。現職の釆女には夫は無いから、此は釆女をやめ、結婚して近江の志賀津に住んでゐたものと思へる。（山田博士の講義に詳論がある）。子等の等は添へた音で、複數をあらはしてゐるのではない。一本の方は、『志賀津の子が』としてあるが、此處はやはり音不足でない方がいいやうである。子等は、親愛の感じがあり、志賀津にゐた彼の麗しい釆女であつた女といふ意味である。**○罷道之** マカリヂノと訓む。ユクミチノ（舊訓）。『官本更點云マカリヂノ』（代匠記注）。マカリヂノ（童蒙抄・考・略解・攷證・美夫君志・講義）。マカリニシ（玉の小琴・檜嬬手・古義・新考）等の訓がある。マカルは辭し去ることで、『憶良らは今は罷らむ子哭くらむそのかの母も吾を待つらむぞ』（卷三。三三七）。『もろこしの遠き境に遣はされ麻加利伊麻勢海原の邊にも奥にも』（卷五。八九四）。『わが背子しけだし麻可良婆しろ妙の袖を振らさね見つつ慕ばむ』（卷十五。三七二五）等の用例がある。さてこの歌の罷道の意味はどうかといふに、これは死んでこの世を去つて行く道、つまり死して行く路といふことである。そしてこれにも諸説があつた。『釆女朝勤の年限は

てて吉備津に歸へる道の事を云ひたる義と見えたり』(童蒙抄)。『葬送る道をいふ。紀に(光仁)、永手ノ大臣の薨時の詔に、美麻之大臣乃、罷道母宇之呂輕久意太比爾念而、平久幸久、罷止富良須倍之止詔と有は、黄泉の道をのたまへど、言は同じ』(考)。『前略罷は、玉篇に、罷、皮解切、休也。音疲、極也とあるにても、死てゆく道を罷道といふなるをしるべし。さてまかるとは、貴き所より賤き所へゆくをばいへるにて、中ごろより死る事を身まかるといふもこれなり。中略宣長云、道は邇の誤りなるべし、ここには、まかりぢにてはわろしといはれつれど、まかりぢにても意はよく聞ゆるをや』(攷證)。『罷は國語呉語に、遠者罷而未レ至、注に罷ハ歸也とあり。以呂波字類抄に、罷ハ歸也と見え、類聚名義抄に、罷シリゾク○マカル○マカデムなどあり。云々』(美夫君志)等の諸說があるけれども、大體考の說を引いた、攷證・美夫君志等の解說で意味が分かる。卽ち、現世を罷つて、遠く黄泉へ行く道、『釆女の死出の旅の道なるべき』(講義)といふのに落著くものと考へていい。○**川瀨道** カハセノミチヲと訓む。新訓に、カハセノミチハと訓んだのは、類聚古集にカハセノミチハミレハカナシモとあり、神田本にもさうあるからに本づくと思ふが、差當り、ミチヲに從つて置いた。さてこの川瀨道にも諸說がある。『川瀨の道は身を投むとて行しを云なるべし』(代匠記)。『釆女の本國にかへるさの道筋の名なるべし。中略しかれども川瀨の道とよみたれば通路の道の名なるべし』(童蒙抄)。

『大和國にして、何處の川かさしがたし』（考・攷證・美夫君志）。『常に其子のゆききせし道なれば、今日を限りとおもひなげくなり』（檜嬬手）。『カハセノ道は川瀬を渡りてゆく道なり。契沖の「身を投げむとて行しを云なるべし」といへるは非なり。采女は身を投げしにもあるべし。カハセノミチは送葬の道なり』（新考）。『新考に、川瀬を渡りてゆく道なりといへるをよしとす。その川を渡りて行く道はいづこなりけむ、今より知るべからねど、その葬地に行くに川瀬を歩渡（かちわた）りして行けることは想像せらる』（講義）等の諸説がある。長歌に、『時ならず過ぎにし子らが』とあるので、契沖以來入水説があるけれども、それは只今では到底不明であるから、これはせめて急死（急性疾患死）ぐらゐに考へて置きたい。次に川瀬道は川瀬を渡つてゆくのでも、川瀬に沿うて行くのでもよい。此處は前者と考へられる。『河道（かはぢ）にも見らは逢はなも』（卷十四。三四〇五）は河の中の道のつもりであり、『河副（かはぞひ）の丘べの道ゆ』（卷九。一七五一）は川に沿ふ道を示してゐる。それから、『細川の瀬に』（卷九。一七〇四）のごとくに、普通名詞から既に固有名詞（即ち地名）に轉じかけてゐたものかも知れない。さうすればこれは大和ではなくて近江でなければならぬ。大日本地名辭書に、八坂の東南一里犬上川の南畔の川瀬村を立ててゐるが、此は縱ひ後世のものとしても兎に角さういふ固有名詞の存在の可能性を示してゐる。備中哲多郡の川瀬川のごときも亦さうである。この歌の川瀬は今の川瀬村で

なく、もつと大津（志賀津）から近いところと想像せられる。そして此は實際にある道路で、其處を通つて葬りに行つたのであらう。それと同時に生前にその女の往來した道（檜嬬手）と考へても不合理ではない。そこで不怜といふ語も利くわけである。**○見者不怜毛**　ミレバサブシモと訓む。ミレバサビシモ（舊訓）。ミレバカナシモ（類聚古集・神田本・童蒙抄）。サブシモ（考）等の訓があり、諸家考の説に從つた。『見れば左夫思母』（卷一。二九）。『棹梶もなくて佐夫之毛』（卷三。二六〇）。『われは左夫思惠』（卷四。四八六）。『妻屋佐夫斯久おもほゆべしも』（卷五。七九五）。『待たすらむ心左夫之苦』（卷十七。三九六二）。『今更に逢ふべき由の無きが佐夫之佐』（卷十五。三七三四）等の例がある。その頃は、サビシといふよりも、サブシといつたことが分かるのである。

大意　一首の意は、吉備津から來て仕へてゐた美しい采女が、仕をやめて志賀津に住んでゐたのであつたが、急に死んだ。そして今葬られて黄泉の旅に立つけれども、川瀨を渡りつつゆくこの道が何とも寂しい、異樣に悲しくてならない。といふぐらゐの歌であらうか。

鑑賞　人麿はこの女の死を悔むのに、非常に意氣込み、餘所ごとではないやうな響を出してゐるのは、人麿はこの女が采女として仕へてゐた時に逢つてゐるだらうし、この女は恐らく美女として有名であつたのではなからうか。『まかりぢの川瀨のみちを』あたりの聲調は、實に不思議な哀

韻をこめて、惻々として人に迫つて來るものがある。人麿は作歌するときに、常にかくの如くものに同化し燃燒し得る素質を有つてゐた。デイオニゾス的な歌人と思ふのはその點である。或は、是等の歌も賴まれて作つたものか。さうすれば猶更にこの特色の鮮明な歌人と謂ふべきである。罷道（まかりぢ）といふ語なども、後代の學者の手を煩したが、これは現世に美しかつた若い女が、死んで遠く遠くに行つてしまふ、その面影が浮んでくるやうではあるまいか。そして、川瀨（かはせ）の道（みち）といふ語も、學者に面倒をかけたけれども、これも既に地名になりかけた、川瀨を渡つてずつと向うに行く心持で、その川の音さへ無限の哀韻としてひびくやうに感ぜられるのである。『古（いにしへ）に妹と吾が見しぬばたまの黑牛潟を見ればさぶしも』（卷九。一七九八）。『黃葉の過ぎにし子等と携（たづさ）はり遊びし磯を見れば悲しも』（卷九。一七九六）などを參考歌として掲げることが出來る。

これは既に云つたことであるが、人麿の歌調は强く雄渾なのがその總てだといふやうに思はれてゐるが、人麿の歌調には細微なところに說明し難い顫動があつて、それが內容に應じて、悲喜哀樂の神味を極めてゐる。含蘊無窮の音節などといふのは卽ちそれである。『川瀨の道を見ればさぶしも』でも、『遊びし磯を見れば悲しも』でも、ただの概念ではない。鑑賞者はそこに參入すべきである。

○

【巻二・二一九】

天数ふ大津の子が逢ひし日におほに見しかば今ぞ悔しき

天數　凡津子之　相日　於保爾見敷者　今叙悔

題意 短歌第二首で前の歌の續と看做していい。

語釋 **○天數** アマカゾフと訓む。これは舊訓に據つたが、アメノカズ（代匠記）。アマツカズ（童蒙抄）。ソラカゾフ（考）。ササナミノ。アマグモノ（古義）等の諸訓があり、略解・攷證・美夫君志・新考等は大體眞淵に從ひ、講義は舊訓に從つた。この意味にも諸説がある。『當家の流には、あまつかずとよみて、天數は大なるものといふ意にて、數大とうけたる詞と見る也』（童蒙抄）。『こは物をさだかにせで凡にそら量りするを、そらかぞへといふを以て、大津の大を凡の意にとりなして冠らせたり』（冠辭考）。『按ずるに、これは恐らくは天の星の數の事などをいへるにあらざるか。（中略）若し果して、天を以て天の星の意をも含めたりとせば星の數は多きものなれば、これにてオホの枕

詞とせしものならむ。然るときには、これはアメノカズにてもアマカゾフにても通せずといふべからず。然りとせば、そのよみ方は舊來のによりて改めざるを穩なりとすべし』（講義）。その他の說は面倒であるのみならず、不自然だから引用を罷める。この二說を參考すれば既に充分だとおもふからである。思ふにこの『天數』といふ枕詞は恐らく人麿の造語で、人麿はそんなに苦心せずに造つたものと想像するが、他に模倣者が無かつたので、ただの一例にとどまり、後世の學者にいろいろ難儀をかけた。仙覺なども、『サレバコノウタハ、海人サソフ、ヲフシツノコガトイヘル也』と云つて迷つてゐるのである。併し、人麿の身になつて見れば、そんなに面倒のつもりは無く、大體『天（あま）を數（かぞ）ふ』は、天の星辰を數ふ（見て目算する）。その星辰が多いからオホにかけたのである。『凡』でも、『大』でもなく、『多』のオホである。そんなら、アマからさういふ具合につづく例があるかといふに、あまざかる。あまとぶや。あまてる。あまづたふ。あまごもり。あまつどふ。あまさはり。あまそそり。あまつつみ。あまきらふ。等の例があるのである。それだから、『あまかぞふ』といつても毫も不自然では無い。ただ、これなどは枕詞として、大津（おほつ）に冠らせるにしても決して出來のよいものでは無い。人麿にしても決して自慢にはならぬもので、一寸心をひねつたばかりに、徒らに後世の學者を惱ましたこととなる。以上は人麿の造語としての論だが、文選あたりに、『天數』の熟語

が見つかればまた別物である。**○凡津子之**　オホツノコガと訓む。オフシツノコガ（舊訓）。オヨソツノコガ（代匠記）。オホツノコノ（童蒙抄）。オホツノコガ（考）等の諸訓がある。諸家が眞淵訓に從つた。これは、『大津の子が』で、前の歌の、『志賀津の子らが』と同じ意見である。**○相日**　アヒシヒニと訓む。アヒシヒヲ（舊訓）。アリシヒヲ（童蒙抄）。アヒシヒニ（考）の諸訓があり、略解・古義・檜嬬手・新考・講義等は考に從つたが、攷證・美夫君志等は舊訓に據つた。その采女と嘗て人麿が會つた時にといふ意で、これはどういふ時に會つたか分からぬが、恐らく女の采女仕官時代に會ひ、美女であつたために人麿の心にとどめてゐたものと思へる。**○於保爾見敷者**　オホニミシカバと訓む。このオホニの例もなかなかある。この長歌にも、『梓弓音きくわれも髣髴に見しこと悔しきを』（巻二。二一七）。この髣髴はホノとも訓んでゐるが、一訓としてオホの例を立てる。その他、『綠兒の泣くをも置きて朝霧の髣髴になりつつ』（巻三。四八一）。『朝霧の鬱に相見し人ゆゑに命死ぬべく戀ひわたるかも』（巻四。五九九）。『わが王あめ知らさむと思はねば凡にぞ見ける和豆香杣山』（巻三。四七六）。『人こそは意保爾もいはめ我がここだ偲ぶ川原を標結ふなゆめ』（巻七。一二五二）。『佐保山を於凡爾見しかど今見れば山なつかしも風吹くなゆめ』（巻七。一三三三）等である。ただぼんやりと、大凡に見過した、十分に見なかつたといふ意味である。**○今敘悔**　イマゾクヤシキと訓む。このやうな

用例は鑑賞のところに書いて置いた。

大意 一首の意は、機縁があつてその大津の婦に會つたのであるのに、その時にはただ何氣なく過した。沁々と話すこともなく、親しむこともなくてしまつたが、かう時ならず死するとおもへば、殘念でならないといふので、やはり戀愛に通ずる一種の氣持である。挽歌だが、さういふ人間的なところがあつておもしろいのである。

鑑賞 そこで、『凡に見しかば』といふ句も利いてくるので、餘所事でない眞實がこもつてゐるのである。『今なき人と聞けば、慕はれて疎略に打過しことのくやしきと也』（童蒙抄）の解は、味ひがある。『慕はれて』といつてゐるのも意味ふかく、實際さういふ氣持があるとおもふ。

『今ぞ悔しき』といふ如き用例は、萬葉にはほかにも、『葛城の高間の草野早領りて標指さましを今ぞ悔しき』（卷七。一三三七）。『春日野に照れる夕日の外のみに君を相見て今ぞ悔しき』（卷十二。三〇〇二）。『ぬばたまの夜見し君を明くる朝逢はずまにして今ぞくやしき』（卷十五。三七六九）。『旅行に行くと知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ』（卷二十。四三七六）等の例があるが、皆働いた語だから、結句として用ゐられたものであらう。

考に、『於保爾見敷者、心いれても見ざりしなり、さて是をばしかつといはでおほつといへるは、

下の言にひびかせんためか』と云つたのは、オホツ、オホニミシと調子をとるためかといふのである。シガツといはなかつたのは、言葉の變化のためで、必ずしも音調のためのみではなかつたかも知れない。この一首の聲調は、さう單純でなく、吟味してみればなかなか複雜してゐるところがある。祕かにおもふに、人麿が是等の歌を作るに氣乘がして、相當に苦心してゐたのではあるまいか。長歌の方の言葉のつづけ具合などにも著しくそれが伺はれるが、短歌の方でも、輕浮に流れないところがあつて、精神をこめたといふことを指示してゐる。

萬葉で、シカバと使つた例は、『あしひきの山道を指して入日なす隱りにしかば其思ふに胸こそ痛め』（卷三。四六六）。『珠くしげ見諸戸山を行きしかば面白くしていにしへ念ほゆ』（卷七。一二四〇）。『念ふにし餘りにしかば鳰鳥の足沾れ來しを人見けむかも』（卷十一。二四九二）。『くれなゐの濃染の衣色深く染めにしかばか忘れかねつる』（卷十一。二六二四）。『葛飾の眞間の手兒名がありしかば眞間の磯邊に波もとどろに』（卷十四。三三八五）その他がある。

參考　○和歌童蒙抄に、『サ、ナミノシカノツコラカマカリミチ（ミチノ）カハセノミチハミレハカナシモ』。定家卿長歌短歌說に、『さゝなみのしかつのこらかまかりちの川せのみちを見れはかなしも』。『あまつかすおふしつこしのあひし日をおほに見しかはいまそくやしき』。○（二一八）デイツキンズ氏英譯。Yon maid of Shigatsu, | Shigatsu in Sasanami, | she hath the

world left—; and by the stream to wander and think of her 'tis sad. ロレンツエン氏獨譯。 (5) Wie einsam fühle ich mich. (4) wenn ich den Weg am Fluss sehe, (2) auf dem das Mädchen aus Shigatsu (1) bei Sasanami (3) den letzten Gang angetreten hat. ピアソン氏英譯。 (5) Oh, how sad and lonely I am, when I look at (4) the road alongside the river, (2) where the girl of Sigatsu (1) of little rippling wavelets, (3) went to her last resting place! ○ (二一九) ロレンツエン氏獨譯。 (5) Oh wie traurig bin ich jetzt, (2) weil ich das Mädchen aus Ohotsu (3) am Tage, als ich ihr begegnete, (4) nur flüchtig gesehen habe. ピアソン氏英譯。 (3) On the day when I met, (2) the maiden of Ovotu (1) where little wavelets ripple, (4) I saw her only dimly, (5) Oh, how I regret it now!

○

【巻二・二二一】

妻もあらば採みてたげまし佐美の山野の上の宇波疑過ぎにけらずや

妻毛有者　採而多宜麻之　佐美乃山　野上乃宇波疑　過去計良受也

題意 『讃岐狭岑島視石中死人柿本朝臣人麿作歌一首并短歌』の短歌第一首である。狭岑島は昔は那珂郡、今仲多度郡鹽飽諸島の一つである。その島の磯などに溺死者があつたのを人麿も目撃

し感動して作つたものであらう。これで人麿がこの邊の島あたりにも旅行したことが分かる。

長歌は、讃岐を褒め、それから船旅のことを敍し、それから、『名ぐはし狹岑の島の荒磯面に廬して見れば浪の音の繁き濱邊を敷妙の枕になして荒床とより臥す君が家知らば行きても告げむ妻知らば來ても問はましを玉桙の道だに知らず鬱悒く待ちか戀ふらむ愛しき妻らは』（卷二。二二〇）で結んでゐる。前の挽歌などと、同工の點があるが、人麿はかういふ事件に遭遇して感動し、作歌衝動を受けた人であつたことが分かり、必ずしも人から依囑されて作つたものでないといふことも想像するに難くは無い。

語釋 **○妻毛有者** ツマモアラバである。若しこの男に妻もあるならば。此處に妻も一處に居るならばといふ意味である。**○採而多宜麻之** ツミテタゲマシと訓む。トリテタキマシ（舊訓）。トリテタケマシ（代匠記）。ツミテタゲマシ（考）。トリテタゲマシ（略解）等の訓があるが、今、考の訓に從つた。タグといふのは、下二段に活用し、喫飲のことである。『多義氏ましもの富の井の水』（上宮聖德法王帝說）。『神のみ酒を多義止いひけばかもよ』（常陸風土記）などの例がある。解釋は考・古義・講義等を讀むといい。『摘んで食べさせて呉れようものを』といふ意味である。**○佐美乃山** サミノヤマと訓む。これは狹岑の山と同義で、ネ音が添はつてサミネともいふのである。**○野上乃宇波**

疑 ヌノヘノウハギと訓む。これは略解に從つた。ノカミノウハギ(舊訓)。ノノベノウハギ(考)。ヌノヘノウハギ(略解)。ヌノベノウハギ(攷證)等の訓がある。ウハギは内膳式に蒿、和名抄に莪蒿(於八木)で、ヨメガハギ、ヨメナともいふ。『春日野に烟立つ見ゆをとめらが春野の兎芽子採みて煮らしも』(卷七。一八七九)といふ例がある。**○過去計良受也** スギニケラズヤと訓む。過ぎたではないか、と強く云つてゐるのである。時節が過ぎ、延び過ぎて食へなくなつてゐるではないかといふのである。『梅の花咲きたる苑の青柳は蘰にすべく成りにけらずや』(卷五。八一七)。『泊瀬女の造る木綿花み吉野の瀧の水沫に開きにけらずや』(卷六。九一二)。『この花の一瓣のうちは百種の言持ちかねて折らえけらずや』(卷八。一四五七)。『常人の戀ふと云ふよりは餘りにて我は死ぬべくなりにたらずや』(卷十八。四〇八〇)などがある。

大意 一首の意は、若し妻が一しよにゐるなら野の兎芽子(よめ菜)を摘んで食べさせようものを、あはれにもただ一人かうして死んで居る。そして野の兎芽子ももう季節を過ぎてこはくなつてゐるではないか。

鑑賞 これは、字面は兎芽子を煮て食用にすることだが、これは餓死をせしめないといふよりも、看護をする、世話をする、といふ方の氣持が主になつてゐる。結局同一に落著くがさういふ氣

持を主眼として、野の草を煮て食べさせるやうにする行爲を味ひたいのである。古歌にはかういふ覺官的なあらはし方が多いが、それを理解するうへの心の持ち方に、例へばこの歌ならば、饑餓感に重きをおくか孤獨感に重きを置くかといふことになる。饑餓感の方が原始的で直接だといへば極めて單純だが、人麿あたりになればもう一歩進んで孤獨感が強く働いて、かういふ表現法を採らせたのではあるまいかとおもふのである。極く些細のことで、頭の働く人には可笑しなこととおもはれるかも知れぬが、かういふ鑑賞の爲方も幾らか必要ではないかとも思へる。つまり童幼が人形に物を食べさせるのよりも、もう一歩進んだ作歌衝迫によつて、かういふことを云つたのではないかといふことになる。さういふ具合にこの歌を味ひたいのである。さうすればこの一首は、原始的で素朴だが、態とらしくなくなつて來て同感し得るといふことになる。眞淵の考に、『さて此臥て有あたりに兎芽子(うはぎ)多く生て、時過ゆけどつみて得さする人なしと、そこに有物もていへるに、所のさまさへ思ひとられてあはれなり』と評したが、これも或程度までいい評である。

略解に本居宣長の說を引いて、『トリテタゲマシは、死屍をとりあぐる事なり。タゲは髮タグなどのタグと同言なり。此死屍をウハギにたとへて、うはぎの時過ぐるまで、つみとる人も無きに譬へたるならむと宣長言へり』とあるのは、この歌を譬喩の歌と見たところに穿鑿する學者の習癖が出

てゐておもしろいけれども、感情の自然といふことに目をつけてゐないのが缺點である。『死屍をとりあぐることとなり』は常識的、散文的には合理的でも、詩的には合理的でない。つまりそんな散文的なことは人麿は云はないといふことになるのであるが、一面、『死屍をとりあぐる事なり』といふ解釋の爲方の背後には、孤獨感に同情するといふ心理が働いてゐる。解釋としては可笑しいものだが、さういふいいところもあるので、このたび種々前賢の萬葉注釋書をはじめて稍くはしく目を通して、苦心したものには何かがあるといふ感慨を深くしたのであつた。檜嬬手も攷證も美夫君志もこの宣長說に贊同してゐるのは、必ずしも宣長の名の貫祿に眩惑されたのみではなく、何處かに人情の自然に觸れたがためではなかつただらうか。

○

【巻二・二二二】

奥つ波來よる荒磯を敷妙の枕と纏きて寢せる君かも

奥波　來依荒礒乎　色妙乃　枕等卷而　奈世流君香聞

題意 短歌第二首である。

語釋 ナセルキミカモといふのは、講義に、『ナセルはナスの動作存在詞にして、ナスはヌの敬語として佐行四段活用に再び活用せしめしなり。その例は古事記上卷の歌に、多麻傳佐斯麻岐毛毛那賀爾伊波那佐牟遠。又卷十七、三九七八に、吾乎麻都等奈須良牟妹乎、などあるなり。そのナスよりアリに複合してナセリといへるがその語なり。されば寐たまひてある君かもといへるなり』とあり、審かである。敷妙のは枕の枕詞。『枕と纏く』は枕として纏くことで、枕纏くともいひ、手枕纏くなどともいふ。

大意 一首の意は、沖の方から荒浪の寄せてくる、荒磯に、その磯を枕として寐て居られる君かな。といふことで、かりそめに遭遇した死人に對して敬語を使つてゐる。これは當時の習慣であつただらう。もはや現世の人ではないから、遠い世界のもの、神に通じるやうな觀念からであつただらうか。この一首は、長歌の方で、『浪の音の繁き濱邊を敷妙の枕にして荒床により臥す君が家知らば行きても告げむ』云々といふのを繰返したやうなものである。併しそれを短歌にするとなれば、かういふ表現法をとるといふことになるので、この邊の關係は大に有益をおぼえしめる。長歌なら、『より臥す君が家知らば』云々と續けるところを、短歌なら、『寐せる君かも』の一句で結末とする。

枕詞を使つたり、『かも』を入れたり、一面は無駄なものをも使ふが、その他の意味の餘計なものを一切清算してしまつてゐる。短歌はそれでなければならぬことを示してゐるのである。

家人の待つらむものをつれもなき荒磯を纏きて偃せる公かも　（卷十三。三三四一）

汭潭に偃せる公を今日今日と來むと待つらむ妻し悲しも　（卷十三。三三四二）

汭浪の來寄する濱につれもなく偃したる公が家道知らずも　（卷十三。三三四三）

卷十三の、『備後國神島濱調使首見レ屍作歌一首并短歌』の短歌三首を此處に拔いたが、人麿の歌に非常によく似てゐる。ただこの方は通り一ぺんの概念で行つてゐるやうで、內容が人麿の歌ほど具象的でないと思ふが、いつの間にか、言ひ方に斯くの如くに型が出來てゐるのは、模倣が鋭敏に行はれることと今も古も變らぬことを證してゐる。

參考　○（二二一）ディツキンズ氏英譯。Dwelt his wife near, | upon Samine's hillside | fresh wild herbs would sie | have gathered for her husband | for yet the season lasteth ! | ロレンツェン氏獨譯。(1) Wenn deine Frau auch (hier in der Nä'he) wäre. so würde sie (4) die Uwagi auf den Feldern (3) des Samine-Berges (2) gepflückt und gegessen haben. (5) (Aber) sind nicht die Uwagi dahin gewelkt? ピアソン氏英譯。(1) If his wife were also here, (2) she would like to pick it up and gather it in her hands ...... (4) But the uvagi of the fields (3) in the Samine-hills, (5) have not they passed away already? ○（二二二）ディツキンズ氏英譯。Upon the shore-sands | whereon the waves are rolling | are over

rolling, | his pillow hath he made him, | belike, to take his rest. ロレンツェン氏獨譯。(5) Ach — der Herr, der dort geschlafen hat (1,2) und sich das wilde Ufer, wo die Meereswellen heranschlagen (3) zum vielfach geschichteten (4) Kopfkissen macht. ピアソン氏英譯。(5) Oh, you, who are sleeping (4) using as a cushion (3) (of spread out thin stuff !) (2) the rocky shore (1) where the waves of the open sea (2) keep approaching.

○

【巻二・二二三】

鴨山の磐根し纏ける吾をかも知らにと妹が待ちつつあらむ

鴨山之　磐根之卷有　吾乎鴨　不知等妹之　待乍將有

題意 この歌の詞書は、『柿本朝臣人麿、在二石見國一臨レ死時、自傷作歌一首』といふのであり、人麿の歌としては最後のものといふことになつてゐる。この詞書中に、臨レ死時といふことがあるから、『延喜式云、凡百官身亡者、親王及三位以上稱レ薨、五位以上及皇親稱レ卒、六位以下達二於庶人一稱レ死。これによれば人丸は六位以下なる事明けし』(代匠記)。『此端詞にも、又次にも死と書し

は、六位七位などの人なること知べし』（考）等と注して、人麿の傳を考ふる資料の一つとなつてゐる。なほ、考では元明天皇の『和銅二年に死したりといふべし』といつてゐるが、私は慶雲四年ごろの石見疫病流行時に死んだのではなからうかとも想像して居る。（鴨山考・鴨山考補註參考）

語釋 **○鴨山之** カモヤマノと訓む。鴨山は石見國の何處にある山かは、古來考證されてゐるが未だ不明である。併し、實際諸傳本に皆鴨山と書いてあるのだから、原作もさうであつたと看るべきで、さういふ山の名か土地の名かが實際あつたものと考へねばならぬ。鴨山の所在地に就いて古來の說を擧ぐれば、（一）國府若くは國府接近の山。國府にある墓地說。『岩をかまへて、中に死人を臥せて葬る故にかくよませ給へり』（代匠記）。『こは常に葬する山ならん』（考）。『石見の國府に近くてかも山は在べし』（上田秋成、金砂）『石水（イシカハ）は國府近邊ノ山間（ヤマノカヒ）の谷川なるゆゑに』（近藤芳樹、註疏）。武田博士もこの任地國府說である。然るに、この國府說では說明が付かぬ點があるので、從來、鴨山をば國府以外の地に求める說が多かつた。岡熊臣云。『サテ府務ノ官人ナラバ國府ニテ死スベキコトナリ。然ルヲ其歌ニ鴨山ノ岩根シマケルトアレバ、必其鴨山ノ邊ニテ死給ヘルハウタガヒナシ。サレバ先其鴨山ノ地ヲ論ズベシ』（人麻呂事蹟考辨）を初とし、古義・檜嬬手等、現代では井上通泰博士、山田孝雄博士等は、鴨山を皆國府以外の地に求めようとしてゐる。『恐らくは旅にて病に罹りて鴨

山の山べに』(井上、新考)。『いづれの人もその國府以外の地ならむと暗默の間に認めたる點に於て一致せり。これ自然の事ながら注意すべきことなり。』『かくて上の鴨山が國府以外の土地なることもよく考へらるるなり。鴨山の地今明かならずといへども、旅中に人麿が死せしことは略想像しうべし』(山田、講義)といふ文章を讀めばその趣が分かる。よつて、次に國府以外の鴨山の諸説を掲げよう。(二)高津鴨島説。これは美濃郡高津の海に鴨島があり、その山を鴨山と稱してゐたが、萬壽の海嘯で無くなつた。其處は繁華の地であつたし、船の往還順風半日に過ぎないから、海船鑑務の事などで人麿が此處に來てゐて病に罹つたのだらうと想像してゐる。この説では依羅娘子の人麿を悼む歌の中の『石川』といふのは、高津川に當るのである。此説は古老の傳説・柿本明神緣起・人丸事跡考・人麻呂事蹟考辨・石見八重葎・古義・檜嬬手・攷證・人麿考等が之に從つてゐる。(三)濱田城山説。那賀郡濱田町城山は龜山とも云ふが、これは鴨山の轉化だといふので、石見風土記・石見名所方角集・石見國名跡考・次田潤氏の萬葉集新講等は之に從つてゐる。この説では石川は濱田川に當るのである。(四)那賀郡神村説。故吉田東伍博士の大日本地名辭書の説で、神村は古は鴨村であつただらうといふのと、人麿の妻の里は都農郷(角の里)にあつたから、人麿終焉の地もその邊だらうといふのに本づいてゐる。鴻巣氏の全釋が之に從つてゐる。(五)那賀郡二宮村惠良説。惠良に

柿ノ本、スイトコ等の小字があるので、それと人麿終焉とが結付いてゐる。大島濤聲氏この說を支持してゐる。（六）邑智郡龜・濱原說。これは私の考で、これによると石川は江ノ川に當るのである。（齋藤、鴨山考・鴨山考補註參照）**○磐根之卷有**　イハネシマケルと訓む。これは磐を枕としての意で、卷二（八六）の、『かくばかり戀ひつつあらずは高山の磐根しまきて死なましものを』といふ歌を併せ考ふべきである。契沖この歌を解釋したとき、『石根を枕にしてなり。下の人丸の死に臨みてよまれたる歌にも此詞あり』（代匠記）といひ、眞淵も、『卷(まく)は枕にする事にて集中に多し』（考）と正當に解したが、『葬てあらんさまをかくいひなし給へり』（考）といつて、略解・攷證・檜嬬手等それに從つた。『岩根を枕にして死したるよし也』（檜嬬手）といふ解釋を見ても分かるが、これはやはり代匠記に、『岩をかまへて、中に死人を臥せて葬る故にかくよませ給へり』に本づくのである。それを眞淵が、鴨山の注の處で、『こは常に葬する山ならん』といつて墓地と見立てた。なほ童蒙抄では、『鴨山の岩根にまとはれ臥してわれはかく死するをも妹の知らずして』云々と解してゐる。然るに井上博士の新考に、眞淵の說を駁して、『もしカモ山ノイハネシマケルが鴨山に葬(カク)さるる意ならば今はまだ死にだにせざるなればイハネシマカムとこそいふべけれ。おそらくは旅にて病に罹りて鴨山の山べに假庵を作りて臥したりけむをカモ山ノイハネシマケルといへるなるべし。マケルは枕ニセルなり』

といつてゐ、山田博士の講義もそれに贊成してゐるが、單に字面のうへの解釋ならば、契沖以來大凡皆正當の解釋をしてゐるのである。例へば童蒙抄に、『先いづれも枕にしての意と見るべし』といひ、攷證に、『磐根を枕としてあるといふ意にて、卷(マキ)ては本(モト)はまとふ意なれどそれを轉じてやがて枕とする事をもいへり』といつてゐるたぐひである。ただ、兩說の差異の根本は一方（眞淵等）は、死んでゐる狀態。死んで葬られてある有樣を主として解し、一方（井上氏）は、病氣して臥してゐる有樣を主として寫實的に解するところに存じてゐるのである。併しこの歌の解釋としては、病臥を云つてゐるのは字面で、死を暗指し豫想し、病臥から死までを引きくるめた人麿の感慨として解釋すべきである。この場合、『今はまだ死にだにせざるなれば』といふ理論で解決するのは奈何とおもふ。特に他の用語例、『磐根四(イハネシ)卷手(マキテ)死奈麻死(シナマシ)物乎(モノヲ)』（八六）が既にあからさまに死をいつてゐるのを參攷せねばならない。それから、イハネシマケルといつて、イハネシマカムといはないのは、現實は病臥の狀態だから現在格を使つた。けれどもそれは『死の狀態』に連續すべき豫想をこめた感慨であることを知らねばならぬ。死の狀態を豫想するといふことは、冷い骸となつて橫はること、或は葬られることを幻相として豫感し得るといふことである。或は生時と死時との觀念がいまだ完全に分離しないおもかげを傳へてゐるのである。つまり、『鴨山の岩根にまとはれふして、われはかく死

する』（童蒙抄）とまでに解釋すべきものである。岡熊臣云。『故ニ歌ノ意モ予ヲ以テ見レバ鴨山遍キアタリニテ、ソノ病今々トナリ給ヘルマヽニ直ニ其ニ其山ヲ枕ニ卷テト作セ給ヘルナリ』（柿本人麻呂事蹟考辨）。樋口功氏云。『但し磐を枕にするといへば死者の狀でもなくては適はぬとも思はれるから、死後の狀を想ひやつて詠んだものとも解される。中略今現に鴨山に病臥しつつ其の山の土となるべきを想うての歌としても一向差支ない』（人麿と其歌）。〇**吾乎鴨** ワレヲカモで、カモは強めた係の助辭で、『ひとりカモ寢む』などと同じい。が、ワレヲカモの例はこの一つのみである。『妹が家に雪カモ降ると』（卷五。八四四）。『つむじカモい卷き渡ると』（卷二。一九九）等、集中に用例が多い。〇**不知等妹之** シラニトイモガと訓む。これは宣長の訓で、『不知等。しらにとと訓べし』（玉の小琴）に本づく。シラズト（舊訓）。シラズテ（神田本・細井本・童蒙抄等）等の訓があるが、皆味ふことの出來る訓である。古事記崇神天皇條に、『い行きたがひうかかはく斯良爾等（シラニト）みまきいり毘古はや』といふのがある。〇**待乍將有** マチツツアラムと訓む。第三句でカモの係にしたから、此處でアラムで結んだ。連體言の結である。

大意 一首の意。これは人麿が石見國の旅中にあつて、そしてその旅といふのは、或は國府の役人としての出張の如き旅であつただらうか、病に罹り死せむとして悲しみ詠んだ歌である。病に

罹つた場處は、鴨山といふ山の近くであるらしく、その山の在所は未詳であるけれども、國府でなく國府から十數里離れた、石川の峽（石川の貝）にある山である。私はそれを江ノ川沿岸の石見邑智郡龜・濱原・粕淵の津ノ目山だらうと考へた。その鴨山の巖を枕として死んで居る吾をも知らずに、吾が妻は吾の歸るのを待ち詫びてゐることであらう。いかにも悲しいことだといふ歌である。

鑑賞 家（國府の住處）を離れて、旅に病み、恐らく痢疫の如き流行病に罹つて、特に身分の低い官吏であつた人麿の感慨が死に臨んで極めて自然に流露したが、一首の中心が、『妻をおもふ』情の切實な聲調を以て統一せられてゐるのがその特色である。後世の臨終に近く詠む辭世といふ詩歌は、もつと哲學的であり宗教的であり、そして概念的であるのが多い。古代にあつても、例へば、隋の釋智命が臨終詩に、幻生還幻滅、大幻莫過身、安心自有處、求人無有人とある如きもまたそれである。死は生の終焉であるから重大に感ぜられて、臨終の有情の言ふ事が哲學的になり宗教的になり幽玄的になることもまた決して不自然ではない。けれども死に臨んで、『愛する妻をおもふ』といふことはまた極めて人間的で直接的で純粹である。萬葉の挽歌を讀めば、これに似た感慨のものが他にもある。『妻知らば來も問はましを』（卷二。二二〇）云々といふのはそれである。それからこの歌は、いつもの人麿のものに比して、威勢がなく、強く息を張らず、鋭く雄大と意圖せず、ありの

儘に流露せしめたもののやうに思へる。人麿は死に臨んで、歌を作るのにさう心を使ふ暇もなかつたのであらうから、此歌の如く平淡に歸するのも或は自然だらうとも思へるのである。一首全體として見れば、餘り骨折らずに出來たかとも思ふのである。ただ、『吾をかも、知らにと妹が』のところは、何か感情の渦を暗指して居ていいのである。シラズテイモガでも調子のとれないことはないが、シラニトイモガと訓んだ方がいい。ト助辭に、『ズシテ、ソシテ』といふ感じがあるので、そこの調子の渦が一首を浮泛ならしめてゐないのである。

人麿は死に臨んで先づ愛妻に心の向いたのは自然でもあり幸福であつたともおもふのである。それゆゑ、依羅娘子によつて、『けふけふと吾が待つ君は石川の貝にまじりてありといはずやも』（卷二。二二四）といふ歌をよまれてゐる。死後のことは人麿にはもはや分からぬが、若し輪廻囘歸の思想が成立つなら、やはり人麿は幸福であつたのではなからうか。遠い昔のアナクレオンの、『戀しないのもまた惡業だ』といふことも成立つのではなからうか。

この歌の結句と同じ結句を持つ歌は、『この月のここに來れば今とかも妹がいで立ち待ちつつあらむ』（卷七。一〇七八）。『往かぬ吾を來むとか夜も門閉さずあはれ吾妹子待ちつつあらむ』（卷十一。二五九四）などである。なほ類想の歌を少しく抄すれば次の如くである。

『秋山の黄葉あはれとうらぶれて入りにし妹は待てど來まさず』(卷七。一四〇九)。『福のいかなる人か黑髮の白くなるまで妹がこゑを聞く』(卷七。一四一一)。『ひとへ山隔れるものを月夜よみ門に出で立ち妹か待つらむ』(卷四。七六五)。『ぬばたまの黑髮敷きて長き夜を手枕の上に妹待つらむか』(卷十一。二六三一)。『逢はなくは然もありなむ玉梓の使をだにも待ちやかねてむ』(卷十二。三一〇三)。『旅にあれど夜は火燭し居る我を闇にや妹が戀ひつつあるらむ』(卷十五。三六六九)。『秋風は日に日に吹きぬ吾妹子は何時とか我を齋ひ待つらむ』(卷十五。三六五九)。『愛しけやし妻も兒どもも高々に待つらむ君や島がくれぬる』(卷十五。三六九二)。『黄葉の散りなむ山に宿りぬる君を待つらむ人し悲しも』(卷十五。三六九三)。『竹敷の黄葉を見れば吾妹子が待たむといひし時ぞ來にける』(卷十五。三七〇一)。『塵泥の數にもあらぬ吾故に思ひ佗ぶらむ妹が悲しさ』(卷十五。三七二七)。『春花のうつろふまでに相見ねば月日よみつつ妹待つらむぞ』(卷十七。三九八二)などがある。かう種々比較して見れば、人麿のものはやはり眞實の氣に充ち、またいまだ民謠化してゐない點のあることに注意せねばならぬ。

餘錄 この一首に就き、關谷眞可禰氏は、『此歌第四句、知らにと妻がといふこと句をなさず。前の輕皇子安騎野に宿りませる時、人麿歌の短歌の中に、東の野に炎のとあると同類なり。いかに

も不自然にして人麿の口調とは思はれず。且つ第二句も臨死ノ時の歌ならむには、岩根し將レ枕などあるべきに、枕有とあるも疑はし。さらば此歌人麿を鴨山に葬たる後に人麿の心に擬へて他人の作るにはあらざるか、猶よく考ふべし』（人麿考）と云つてゐる。これも一つの見識とおもふが、萬葉に人麿作と明記してあるのだから、人麿作と做してその出來不出來を論じていいとおもふが奈何に。もつとも、この歌の次の依羅娘子の二首、丹比眞人擬ニ柿本朝臣人麿之意ニ報歌、或本歌等の具合を觀察すれば、鬬谷氏の説も絶待に否定し得ない或るものを感ずることが出來る。今念のためにそれを次に記しておかうとおもふ。

柿本朝臣人麿死時妻依羅娘子作歌二首

今日今日と吾が待つ君は石川の貝に（一云。谷に）交りて在りといはずやも　（卷二。二二四）

直の逢は逢ひかつましじ石川に雲立ちわたれ見つつ偲ばむ　（卷二。二二五）

丹比眞人名闕擬ニ柿本朝臣人麿之意ニ報歌一首

荒浪に寄りくる玉を枕に置き吾ここにありと誰か告げなむ　（卷二。二二六）

或本歌曰

天離る夷の荒野に君を置きて念ひつつあれば生けりともなし　（卷二。二二七）

右の如き歌であるが、『石川』といふ川の所在に就ても從來諸說があつて解決がつかなかつた。それは、『石川の貝』の貝を貝殼と解釋すると、どうしても海濱の川でなければならず、それと、その次の歌の、『石川に雲たちわたれ』とは調和が取れず、さうかと思ふと、『荒浪に寄り來る玉』と云ふかと思へば、『天離る夷の荒野に』と云ふのだから、混雜してゐて、從來うまく解決がつかなかつたのも無理は無い。貝が貝殼だとするから、石川は、高津川になつたり、濱田川になつたり、下府川(齋藤の最初の考)に考へられたりしたのであるが、私は遂に下府川の最初の說を棄て、江ノ川說を新しく立つるに至つたのである。

それは、『石川の貝』をば、『石川の峽』と解釋する橘守部、近藤芳樹等の說に從へば、『石川に雲たちわたれ』は、山峽を流るる川に白雲の立つ趣で極めて自然に解決が出來ることとなる。マジリテは、『駒那倍手目裳春之野丹交 南若菜摘久留人裳有哉砥』(新撰萬葉卷上)。『いざけふは春の山べに交りなむくれなばなげの花のかげかは』(古今春下)。『野山にまじりて竹をとりつつよろづの事につかひけり』(竹取物語)などのマジルと同じで、入つてゐることである。私の鴨山考では、石川の峽は、粕淵から濱原あたりをかけての江ノ川の山峽といふことになるのであるが、あの邊の江ノ川のことを石川と云つただらうといふ私の說は、邑智郡川本・川下は往昔は『石川邑』と稱したといふ神社緣

起及び古老の傳說によつて、積極的な根據を得たものである。

そんなら、丹比眞人（名闕く）の歌に、『荒浪に寄りくる玉』といふのは、正しく海濱の歌であるが、これをどう處理するかといふに、丹比眞人のこの歌は遠く大和にゐて作つたもので、丹比眞人は、石見の地理を知らず、石見國府が伊甘といふところにあつて、海邊であるといふことぐらゐを聞いてゐたので、多分人麿が國府にゐて死んだのだらうといふ極めて簡單な想像で作歌して居り、そのとき依羅娘子が何處にゐたか、人麿との關係などの實際のことは全く分からずに、たまたま大和に屆いた依羅娘子の二首を聞きつつ、人麿のつもりになつて答へてゐるのだから、これは鴨山考を立つるに際して、邪魔にこそなれ、決して參考にはならぬのである。（ただ人麿が晩年國府にゐたことの有力な傍證となる）また、その次の歌、『天離る夷の荒野に』も全く空想の作歌らしいから、これも參考にはならぬ。從來の學者等は、鴨山考を立つるに、かういふ邪魔をも念頭に置いたから、正當な判斷が出來なかつたものである。

約めていへば、鴨山、石川の考證は、飽くまで人麿の臨終の歌一首と、依羅娘子の歌二首を根據として追尋せねばならぬ。私の鴨山考はさう思つて立てた說である。

人麿が石見で死した時に、妻の依羅娘子は石見にゐてあの挽歌を作つたやうに解したが、眞淵を

はじめその他の學者も娘子が大和に居たと解釋して居るし、また人麿を火葬にしたとも考へてゐる。荒木田久老の巻三(四二四)の解に、『巻ノ二に、けふけふとわが待君は石水の玉にまじりてありといはずやもとあるは、火葬せしその骨をいへる言と聞ゆれば』(槻落葉)と云つて居り、また、上田秋成は、『人丸死せられし使の都に聞えしかば打泣つつ、今日今日と待しかひもなくて、石川と云處の貝に交りて骨は朽給ふらん、さる悲しき使はきこえでもあれかしと云、又火葬は此頃專ら行はれしかば、あひ見ん事の今はせんすべなければ、せめて雲煙となりても空にかよひ來り給へかし。それをば見つつしのばんとや、思ひみだれてかくかひ有まじき事をもいひつつ心はやらんとす。寫出たるにだも涙はおとさるる也けり』(金砂)と云つてゐる。なほ、『雲たちわたれ』の歌は、娘子が大和から石見に下つて來ての吟だとも解してゐるのがある。『せめて石川の葬めし處に雲だに立わたれ。さらば煙の餘波とだにみつつしぬばむ。とよめるなり。當時既に都鄙ともに火葬の行はれし事知るべし。さて此歌は人麻呂死れりとききて依羅娘子の石見に下り來てよめるなり』(註疏)などがその一つであるが、娘子が大和にゐたとすると、種々解釋に無理が出來て來るので、やはり石見に居つたと想像する方が順當である。また『雲たちわたれ』を火葬の烟と見ずに、普通の雨雲と解釋する方が順當である。

次に以上の考は、人麿の『妻』或は、『依羅娘子』をば、正妻と見立てての論であつた。これは、總論篇で論じた時もさうであつた。然るに武田祐吉博士は新説を立てて、依羅娘子は、遊行女婦の類であつただらうと云つた。『わが解するところでは、依羅の娘子は、名を娘子と云へるにて知らるる如く、遊行女婦の類であつて、角(つぬ)の里に住み、人麻呂と親んだものであらう。さて人麻呂は國府にて病づき、鴨山はその墓地と思はれるが、娘子は人麻呂の病を看るべき地位に居なかつたものであらう』(上代日本文學史。第二編第四章)。若し、依羅娘子が遊行女婦のたぐひだとすると、考が少しく違つて來るが、これは、鴨山考補註の方で、愚見を述べて置いた筈である。

参考　○顯昭の萬葉時代難事に、『カモ山ノイハネシマケルワレヲカモシラステ妹カ待ツヽアラム。ケフ〳〵トワカヽツ君ハイシカハノカヒニマシリテ有トイハスヤモ。タヽニアハヽアヒモカネテムイシカハニ雲立ワタレミツヽ忍ハン』を抄出して居る。○(二二三)ディツケンス氏英譯。On the rocky heights | of Kamo's hill must rest, | belike, my body— | unknowing my sad fate | alas! doth she await me! ロレンツェン氏獨譯。(5) Die Geliebte wird beständig warten (4) ach, wohl weil sie nicht weiss, (3) dass ich (1, 2) mir gar die Felsen des Kamo-Berges zum Kopfkissen gemacht habe. ピアソン氏英譯。(5) Will she be waiting for me, (4) my dear wife who does not know (3) that I (2) will have used as a pillow, the high rocks (1) of the Kamo-mountain? ○依羅娘子の歌(二二四)をディツケンス氏は譯して、Each day, each day | I hoped to bid thee welcome | to thine own homeplace— | who now as the dead shells empty | of Ishi art men tell me. といひ、石

川の貝を貝殼として、the meaning of the *tanka* seems to be that death leaves the body a mere empty shell as it were—a Buddhist notion などと註してゐる。日本の學者がそんな事を敎へたものであらう。ピアソン氏英譯。(2) My Lord whom I expected (1) thinking always 'will he come to-day'? (5) Do they not say that he is (4) mixed with the shells (3) of the Isi river?

○

【卷三・二三五】

おほきみは神(かみ)にしませば天雲(あまぐも)の雷(いかづち)のうへに廬(いほり)せるかも

皇者　神二四座者　天雲之　雷之上爾　廬爲流鴨

題意 『天皇、御遊雷岳之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首』とある。天皇は持統天皇をさし奉ると考へていい。拾穗抄に、『天皇元正也』。代匠記に、『持統天皇なるべし』。童蒙抄に、『第二首目の歌にては女帝ときこゆれば持統の御事歟』『此天皇は先づ持統天皇と見るべき歟』。新採百首解に、『こは持統天皇の行幸なる時の歌なり』。槻落葉に、『持統天皇也』。攷證に、『この歌の作

者人麿をば、一二卷にみな藤原宮の下に出せしかばこの天皇も持統天皇とこそしらるれ』云々。天皇をスメラミコトと訓む理由は久老の槻落葉に委しい。『歌の題に天皇云云とあるは、皆その御代／＼の天皇を申奉る事なれば、おほきみとよむべきに似たれど、そは須米良美許登（スメラミコト）とよみて當代天皇を申奉る稱なり』と云つてゐる。雷岳は、イカヅチノヲカと訓む。現在飛鳥川の右岸の飛鳥村（あすかむら）字雷（いかづち）村の後方にある。從來、カミヲカともイカヅチノヲカとも訓んだ。カミヲカは眞淵考別記に神（カミ）岳（ヲカ）として記載し、『さて此山をここにも下にも神岳と書、又下に雷岳とも書たり。然ればいかづちのをかといふべくも思へど、古へ其御名をいはで神（カミ）とのみいひしは專ら雷のことにしあれば、右の二所に神岳と書しにも依て雷岳と有をもかみをかと訓なり』と云つて居る。攷證がこの說に從つたので、『考にここをもかみをかとよまれしをよしとす』といひ、委しく別論してゐる。檜嬬手も同樣である。併し新採百首解には、『雷岳（イカヅチノヲカ）は雄略紀に委し。雄略の御時より三諸（ミモロ）山をいかづちのをかといふ。又かみをかとも云。古は雷をさして神とのみいふなりければ是もいかづちの岳と云に同じ意なり』といふから、眞淵もこの期間には强ひて一つを主張してゐない。童蒙抄に、『いかづちの岳とも神岳ともいふ也』とあつて兩方に云つてゐる。拾穗抄にイカヅチノヲカと訓み、槻落葉イカヅチノヲカと訓み、『師の別記に詳なり』と云つた。此は考の說と違ふ。古義もこの訓を採用した。略解

では、『カミヲカと訓むべきなりと翁は言はれつれど、歌にイカヅチのウヘと有るからはイカヅチヤマと訓むべきよし宣長は言へり』といつてゐる。御遊はミアソビノ、ミアソビマス、イデマセル、イデマシシ、アソビマシシなどの訓がある。持統天皇が雷岳に行幸になつたとき、供奉した人麿が帝徳を讃美して作り奉つた歌である。

語釋 **○皇者** オホキミハと訓む。舊來スメロギハ、スメラギハ、スベラギハ等と訓んでゐたのを眞淵の考で、オホキミハと訓んで現在に及んだ。槻落葉には多くの例證をあげてゐる。その結論の一部を抄すれば、『今本これを、すめろぎとよめるはひが言にて、かならず於保伎美とよむべき例なり。おほきみとは當代天皇より皇子諸王までを申稱なり。』『須米呂岐とは、遠祖の天皇を申奉る稱なるを、皇祖より受繼ませる大御位につきては、當代をも申事のあると、天皇と書て須賣呂岐ともよむ例のあるによりて、後人ゆくりなく須米呂岐と申も於保岐美と申もひとつ言と心得て、大皇と書るをも皇と書るをも須米呂岐とよみ誤れるぞおほかりける。（中略）卷ノ六。八隅知之、吾大王乃、高敷爲、日本國者、皇祖乃、神之御代自、敷座流、國爾之有者』云々。**○神二四座者** カミニシマセバと訓む。天皇は現人神にましますからといふ意味で、卷一（二九）に人麿の長歌、『天皇之神之御言能』にもある如く、天皇を直に神といふのである。明津神吾皇之（卷六。一〇五〇）。また、宣命

に隨神、現御神などがある。同じ用語ある歌は下に一緒にして出して置いた。〇**天雲之、雷之上爾**　アマグモノ、イカヅチノウヘニと訓む。アマグモノは雷に續く語であつて、やや枕詞的傾向を帶びた表現法である。なほ『天雲』といふ語には、天雲近光而響神之（卷七。一三六九）。天雲之八重雲隱鳴神之（卷十一。二六五八）。天雲乎富呂爾布美安多之鳴神毛（卷十九。四二三五）などの例がある。雷岳に行幸になられたから、その名稱からの直接聯想が天空の雷電となつたもので、卽ち天皇の御能力の莊嚴偉大を讃美することとなつたものである。〇**廬爲流鴨**　イホリセルカモと訓む。舊訓イホリスルカモ。新考・講義・新訓・新解・澤瀉講義等從レ之。童蒙抄イホナセルカモ。新採百首解・槻落葉イホリセルカモ。略解・攷證・新講・豐田新釋・全釋從レ之。佐佐木博士の選釋は初版セルカモ。增訂版でスルカモに改めて居る。略解或說イホリセスカモ。古義・檜嬬手・新考・私解從レ之。『爲流の流は須字の誤にてセスなるべしと或說に云り。さもあるべきことなり』（古義）。『爲流を久老はセルとよめれどなほ舊訓の如くスルとよむべし。否爲須の誤としてセスとよむべし』（新考）を證とす。さて久老の槻落葉別記に、廬爲流を論じた箇所を抄すると、『正しくいほりせると訓證は、卷ノ七、舟盡可志振立而廬利爲名子江乃濱邊過不勝鳧。卷ノ九、山跡庭聞往歟大我野之小竹葉苅敷廬爲有跡者。卷ノ十、梅花令散春雨多零客爾也君之廬入西留良武と見えたり。さて須流は、卷ノ一、船

出爲鴨。卷ノ二。侍宿爲流鴨。同、宮出毛爲鹿。同、宮道敍爲。同、旅寢鴨爲流。この外須禮、須羅牟などいへるも同じ。是等の例をもて、集中を押わたして世流と須流との別ちをよくわきまへ知べし』云々である。萬葉には爲流をスルと訓む例の方が多いが、卷十六（三八一三）で、長欲爲と爲をセシと訓ませ、（一訓スル）、卷十三（三二二七）で、三諸乃神之帶爲明日香之河之と爲をセルと訓ませ、卷七（一一〇二）に、御笠山之帶爾爲流細谷川之。卷十三（三二六六）に、神名火山之帶丹爲留明日香之河乃。卷十（一八四二）に、山片就而家居爲流君等とあつて爲流をセルと訓ませ、なほ、卷一（三九）に、霧流。卷二（一九九）に、響流。卷十九（四一四二）に、張流の訓例があるから、盧爲流をイホリセルと訓んでも敢て不道理ではなからうとおもふ。特に卷十（一九一八）に、客爾也君之盧入西留良武とイホリセルといふ用語例のあるのも參考となるだらう。ここの盧は行宮の意味だが、或は離宮があつたのかも知れない。卷十三（三二三一）に、『月も日もあらたまれども久にふる三諸の山の礪津宮地』といふのに據つてわかる。けれどもこの歌の字面では行宮ぐらゐに解せらるべきものである。

大意　一首の意は、天皇は現人神にましますからして、今や天空に轟く雷の名を持つてゐる山のうへに行宮を御作りになつて御入りになり給うた。天皇は現身の儘すでに神にましますから、神の命を受けられた、神隨でましますから、その偉大萬能のゆゑに、かの天雲に轟く雷電の上に直ち

に行宮し給うた。といふぐらゐの意味である。

鑑賞 つまり天皇の行幸に供奉した人麿が、その行幸を讃美し奉るために、意識してかういふことを云つたものである。廬爲流はイホリスルともイホリセルともどちらにも訓めるが、現在格では餘り慌しく且つ音調は素朴だが野調に過ぐるので、イホリセルを採つた。セルとなれば既に行宮の完成をも暗指するのみならず、音調に落著があるやうに思へる。セスカモの方は未だ私の耳に馴致されないので採らなかつた。セスといふ音は少しくつまつて人麿の聲調と稍離れてゐるやうに思へた。此處はやはりスルカモか或はセルカモであらねばなるまい。

此一首は、雷岳といふ名前から、直ぐ聯想して、天雲の雷の上に、と咏んだものであるから、現代人にはその聯想の意圖が目立つて同情し難いといふことがあり、またマルクス學などの傳染を經たものは、人麿の作歌態度を阿諛と看做し御用歌人の職業的作歌などといふのであるが、さういふ程度の批評が幾らあつても決して邪魔にならないほどの勢をもつた歌だといふことを知らなければならない。

元祿の芭蕉は、日光に旅して、『あらたふと青葉若葉の日のひかり』といつたが、これなども日光からの聯想に過ぎぬやうだが、實質はさういふ處を既に超えてしまつてゐる。人麿のこの歌も亦さ

うである。人麿は、雷岳の行幸に供奉したから、天雲の雷の上にと云つたもので、作歌動機の表面は、懐風藻の序にも見えてゐる、『賢臣頌を獻ず』といふごときものであるが、内面動機は、人麿は心を引きしぼつてせい一ぱいの表現をして居る。ゆゑに當時の人々は寧ろかういふ聯想の手際をも喜んだものかも知れぬが、出來あがつた此一首は、字面どほりに、天皇が直ちに雷電の上に御いでになる趣として味ふやうに出來て居る。そして一首を貫く聲調は太く強く荒々しく、天地渾沌の相を暗指し、奥に動いてゐるものは何か知らん、創造的元力 (schöpferische Urkräfte) と謂ふやうなものを感ぜしめる。そしてこの勢は何から來るかといふに、人麿の眞率熱烈な態度から來るのである。それだから結果からいへば自然にさうなるので、人麿の死後かくのごとくに彼の作が鑑賞せられることさへ彼自身意識しなかつたに相違ない。そして作歌の態度はそれでいいのであつた。人麿のこの歌は多くの萬葉學者からも餘り同情を牽かれてゐないものであるが、私は祕かにやはり人麿のものでは優れた部類の中に評價し來つて現在に及んでゐるのである。

先進の評を此處で少しく抄しよう。眞淵云。『天皇は顯し神にます故に、雲の中の雷の上にみやゐせさせますとなり。岳の名によりてただに天皇のはかりがたき御いきほひを申せりける。さまはただ此人のはじめてするわざなり』(新採百首解)。由豆流云。『雷山を實の雷にとりなしてよめるは

歌の興なり』（攷證）等。近時、折口信夫博士評して、『そして都からやつと牛みちの飛鳥の神丘へ行かれた時も、人麻呂は帝王を頌する支那文學模倣とも言へば言はれさうな歌をこと〴〵しく作つてゐる』（古代研究國文學篇）と云つた。

次に、この一首は人麿の何時ごろの作かといふことも考に入るが、萬葉集年表では、『此の歌は藤原宮の宮地に行幸ありし持統四年の頃の作か』としてゐる。持統三年に人麿の年次明瞭な歌が始めて出てゐるから、先づ大體そのころのもの、即ち比較的若い時の作と考へていいとおもふ。次に、『大君は神にしませば』といふ句の入つてゐる歌を試に次に列記してみようとおもふ。

大君は神にしませば天雲の五百重が下にかくりたまひぬ　（巻二。二〇五）

大君は神にしませば赤駒のはらばふ田井を京師（みやこ）となしつ　（巻十九。四二六〇）

大君は神にしませば水鳥のすだく水沼（みぬま）を皇都（みやこ）となしつ　（巻十九。四二六一）

大君は神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも　（巻三。二四一）

大君は神にしませば雲がくる雷山（いかづちやま）に宮敷きいます　（巻三）

二四一の歌は別に一言するが、最後の歌は、この雷岳の歌の次に、『右或本に云ふ、忍壁皇子に獻れるなり、その歌に曰く』として載つてゐるものである。結句は、『敷（し）きませる大殿の上に』（巻三。二六

一）などにもある如く、御殿を作つて御いでになることである。この方は小さざみで力が弱い。また第三句の、『雲がくる』も決して上等ではない。卽ち、雷の上に廬せるかもの方が一段歌の位が上である。恐らくこれは別傳歌で原作はやはり前の歌であらう。また忍壁皇子云々といふ左注も、眞淵が指摘した如く、『端詞の誤りしもの也』といふのが正しいのかも知れない。

追記。花田比露思氏の萬葉集私解に、『その山に離宮があつたとは思はれない。喜田貞吉博士の言はるゝ如く、飛鳥淨御原の宮は、今の飛鳥小學校の附近であつたとすれば、そこがやがて雷岳の麓で地續きであるから、三諸の山の離宮所と言つても、それは必ずしも山上に離宮があつたと解すべきでなく、其山のほとりの離宮所と解すべきやうにも思はれる。又假に雷岳の上に離宮があつたとしても、それは極めて小さい御休憩所ほどのものであつたであらう。それを廬といふに差支はないと思ふが、併し私は、その廬すら、此歌の場合はどうでもいゝと思ふ。たゞ雷岳の上におはしますことを、「いほりせすかも」と詠んだと解しても差支ないやうである』。『あの低い丘を「天雲の雷」といひ、その上にいほりし給ふといふ所から「大君は神にしませば」と持ちかけたところは、實は打ち興じたユーモアだが、それがユーモアに聞えず莊重に響くのは、思ふに人麻呂の人柄が眞面メ一方であつたからであらう。斯ういふ點、靜かに味ふと面白い』とある。○なほ、私等（齋藤・藤森）は近時雷岳を實地踏査したが、藤原京址をこめた大和平野を眼下に瞰望し得る位置にあり、この歌の眞實性を理解し得た。

參考 ○（二三五）ロレンツェン氏獨譯。(1) Grosse Fürstin, (2) weil Du ein Gott bist, (5) bautest Du Dir Dein Haus (4) über dem Donner (3) der Himmelswolken! ピアソン氏英譯。(1) Our great sovereign (2) as She is a God, (5) Ah, She has made a temporary hut (4) over the thunder (3) of the clouds of Heaven.

【卷三・二四〇】

○

ひさかたの天行く月を網に刺しわが大王は蓋にせり

久堅乃　天歸月乎　網爾刺　我大王者　蓋爾爲有

題意 『長皇子、遊獵路池之時、柿本朝臣人麿作歌』の反歌である。長皇子は天武天皇の第四皇子で、靈龜元年六月に薨ぜられた。この歌、萬葉集年表に從つて、文武三年のところに配列した。長歌は遊獵のさまを敍して、『ひさかたの天見るごとく眞十鏡仰ぎて見れど春草のいやめづらしきわが大王かも』と長皇子を讃美して結んでゐるものである。そしてこの反歌が載つてゐる。

語釋 **○天歸月乎** アメユクツキヲと訓む。古點ソラユクツキヲ、濱成卿和歌式アマユクツキヲ等であるが、契沖云。『式の點よりは今のやまし侍らむ』。由豆流云。『歸をゆくとよめるは義訓也。本集四に、遊而將歸云々。九に、伊歸集云々ともありて、集中猶多し。廣雅釋詁一に、歸往也とあれば、ゆくとよまん事論なし』(攷證)。**○網爾刺** アミニサシと訓む。此は舊訓がさうで代

匠記も童蒙抄も其儘であつたのを、眞淵が網は綱の誤だから、ツナニサシと訓むといふ說を出し、宣長も久老も千蔭も雅澄も守部も皆其に從ひ近くは新考も其に從つた。眞淵の論據は、『蓋をば綱つけてひかへるものなればかく譬へし也。伊勢大神宮式の蓋の下に緋綱四條とあるこれ也。後撰集に、照る月を眞榊の綱によりかけてともよみつ』云々（考）で、これだけで見れば眞淵の說も正當であるやうに思へるのだが、岸本由豆流は舊訓の儘アミニサシと訓んでよいといふもつと有力な說を出した。由豆流云。『予案るに、本集十七に、保登等藝須、夜音奈都可思、安美指者、花者須具等毛、可禮受加奈可牟とあるは、ほととぎすの夜る鳴聲のなつかしき故に、網を張て、外へ飛ゆかざるやうに留めおかば花は散て過ぬとも、いつもなかましといへる意にて、安美指者は、網を張てほととぎすの外へ飛行を留むる意なれば、ここも網を張て天往月を留めて、君が蓋にしたまへりといふ意にて、網爾刺は天歸月を留めん料にのみいへるにて、蓋へかけていへるにはあらざる事、天歸月のゆくといふ言に心をつけて往を留めんがために網を張る意なるを、十七卷の、ほととぎすを留めんとて網をさせるに思ひ合せてしるべし』（攷證）。この方が眞淵說よりも確實だから私は其に從つた。さて、攷證の此說は確な善考證であるが、よく吟味すると、久老の槻落葉が既に疑問を眞淵說に挿んでゐるのである。ただ久老は其を徹底せしめることが出來なかつた。久老云。『さるを、おのれ

疑けるは、綱にはさすといふ言の集中にも何にも見えぬに。網にはさすといふ言のありて、巻十七に、ほととぎす夜音なつかし安美指者云々。同巻に、二上乃乎底母許能母爾安美佐之底安我麻都多可乎云々、とも見え、端書に、張二設羅網一とあれば、刺とはあみをはる事にて、ここも今本の字のままにて、蓋に網をはるにやとおもへりしかど、蓋に網はさらによしなければ、猶綱のあやまりとすべきなり』(槻落葉)とあるのは、結論まで辿り著いてゐて、綱說を脱却し得なかつたのは殘念であつた。併し考證も此處まで行つて居れば說のプリオリテエトは久老にあると謂つてもいい程である。なほ溯つて代匠記を見るに代匠記には、『菅家萬葉云、春霞網に張こめ花ちらば移ろひぬべき鶯とめむ』といつてゐる。久老說と由豆流說とはやはり遠くこのへんからの暗指を否定するわけには行かないだらう。此等の關係に興味があるから煩を知りつつ書きとどめるのである。**○蓋爾爲有** キヌガサニセリと訓む。蓋は、和名抄に、兼名苑註云、華蓋黃帝征二蚩尤一時、當二帝頭上一有二五色雲一、因二其形一所レ造也。和名岐奴加散。また、儀制令に、凡蓋、皇太子紫表蘇芳裏、頂及四角覆レ錦垂レ總、親王紫大纈、一位深綠、三位以上紺、四位縹、四品以上及一位頂角覆レ錦垂レ總、二位以下覆レ錦、大納言以上垂レ總、並朱裏總用二同色一とある。この儀制令にある蓋は四角のやうだが、古くは圓くあつたのが令の頃に四角になつたのかも知れぬ。また、周禮各官考工記に、輪人爲レ蓋、以象レ天云々。

晉書天文志に、天圓如ㇾ倚蓋ㇾ云々。器物總論に、蓋之爲ㇾ言、覆也、形圓象ㇾ天云々とあるから、漢土の蓋は或は圓かつたのかも知れぬ。さう攷證で論じてゐる。いづれにしても、月をそのまま蓋に見たててゐるのである。卷十九に、『わが背子が捧げて持たるほほ柏あたかも似るか青ききぬがさ』(四二〇四)の蓋は必ずしも圓いとのみはいはれないが四角でもない。よつてかういふところは感じで解釋しないと具合がわるいのである。

大意 一首の意は、皇子は神にましますから、かの運行し沈んで行く月をも、綱を張つて運行の出來ないやうにして、やがて其をその儘、御自らの圓蓋にし給ふのである。といふぐらゐの歌である。

鑑賞 長歌の方の結末の感慨が、この反歌まで延びて來てゐるのである。そして、皇子は月が出る頃まで遊獵したまうたのだらうといふ古義の說も、まんざらの穿ちのみではあるまい。日が暮れて既に大きな月が出てゐたと看る方が却つておもしろいのである。

さてかういふ發想は、大陸そのままの踏襲かどうかといふことになるが、いまだ調査が屆いてゐぬ。併し、網刺して何を逃がさないといふ發想ぐらゐは何も大陸渡來の思想の恩賴を必要とせぬし、縱しんば文選あたりに類似の句があるにしても、人麿が直ぐそれを模倣したなどとは謂へぬもので

ある。從つて人麿は漢文が出來て何でも漢文を模倣したなどといふことをも妄りに云々することは出來ないのである。

　次にこの歌は面白いか面白くないかといふ問題であるが、萬葉集の歌を好み、人麿の歌を尊敬するものでも、この歌はおもしろくないといふのが先づ一般的となつてゐる。そして其は一種の比喩だから、何處か遊戲の作爲が出てゐて眞實で無いといふのである。私の如きも實は今まで同じやうな感じでこの歌を味ひ、人麿のものでは寧ろ出來のわるいものの中に入れてゐたものである。そして、その評價は、長歌の方に、『猪鹿(しし)こそはい匍ひ拜(をろが)め鶉(うづら)こそい匍(は)ひもとほれ』などといふあたりは、ユーモアを漂はせてゐるのではなからうか。さすれば、『天ゆく月を網(あみ)に刺し』といふ發想も輕くユーモアを漂はしめたものと解釋することも出來ると思つたのであつた。

　然るに今更めて讀返してみるに、ユーモアなどでなしに人麿は極めて生眞面目になつて詠んでゐることが分かる。或人等は、かういふ種類のものになると、人麿は彼の力量に任せ口を突いて易々樂々と作りあげただらうと解釋するのであるが、愚見はさうではない。長歌の方でも、形式的な句の中に、『わかごもを獵路(かりぢ)の小野(をぬ)に』などといふ句を入れたり、『春草のいやめづらしきわが大王かも』などの句を入れたりして居るけれども、これは單に遊戲ではない。そこで私は、この一首の如

きをも、寧ろ人麿力量の多様性を指示するものとして愛惜したいのである。さう認容して置いて、さて靜かに一首の聲調を味ふときに、これまでの人麿の短歌になかつたものがこの一首にあり得るのである。第三句で、『網に刺し』と中止法をいつて、結句で、『蓋にせり』と止めてゐる。さういふ伊列の音を有つてゐて、一首は單純で大きく強いところがある。即ちやはり人麿一流のものである。心はいろいろ細かく働いてゐるが、表現してみれば單純化されて出てゆく、さういふ點で輕々に看過出來ない歌の一つである。

○

【巻三・二四一】

皇は神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも

皇者　神爾之坐者　眞木之立　荒山中爾　海成可聞

これは、『或本反歌一首』といふので、長歌と一しよにして味ふといふ意味になる。眞木の立つは、巻一に、『眞木立、荒山道を』(四五)とある如くである。マキは槇とか檜とかいろいろ説があるが、

一種でなく良材たるべき槇杉檜のたぐひを引くるめてマキといつたものかも知れない。眞木のたつ荒山中と口調に馴れて、稍枕詞に傾いたいひぶりになつてゐる。つまり皇子は、さういふ山林を拓いて其處に池を掘つたために、『海をなすかも』と云つたものと見える。攷證で結句を、『海なせるかも』と訓み、實際、獵路池などを掘つたのでなくて、神の如き御偉力で、山中をも海の如くにならしてしまふといふ意味だとしてゐる。『本集十三に、水戸（ミナト）成海毛（ナスウミモ）廣之（ユタケシ）云々とあるにても、うみなせるは、海のごとくなるといふ意なるをわきまふべし』と云つてゐる。併し此處は、獵路池の水の豐かに湛へてゐたのを以て、海を成すかもといひ、皇德を讃へたものと看るべく、池を其時是非鑿らずともよく、既に其處に存在して居つてもいいのである。さすれば攷證の說をもそれに包容することが出來るのである。卽ち、ウミヲナスカモと訓んでも、『かの獵路池の廣らかなるを、海の如くといふにて』といふ攷證の言を破壞せずに濟むとおもふのである。

この一首は、或本の反歌一首といふのだが、やはり同じ時出來た歌としても味ふことが出來る。そして、前の、『天ゆく月を網に刺し』などよりもずつと平凡で分かりよく、必ずしも人麿の力量を待つまでもないが、卷一の『まきたつ荒山道を』がやはり人麿の歌句だから、此處をもさう見たてて鑑賞すべきである。萬葉の歌はどんな平凡な歌でも棄てがたい如くに、この歌は棄てがたい。代

匠記に、『文選鮑明遠詩云、築レ山擬ニ蓬壺一穿レ池類ニ溟渤ニ』を引用してゐる。このへんの引用は何かの参考になるとおもふ。

参考 ○（二四〇）ロレンツエン氏獨譯。(4) Unser grosser Fürst (2) hat den Mond, der an Himmel entlang wandert, (1) der wie ein Kürbis geformt ist, (3) an Seile geknüpft (5) und zum Schutzdach gemacht. ピアソン氏英譯。(4) Our great Lord (3) has pierced with ropes (2) the moon that travels along the (1) long-enduring (2) sky, (5) and thus has made a silken sunshade of it. ○（二四一）ピアソン氏英譯。(1) Our Lord (2) As He is a God, (4) on the top of the wild mountain (3) where maki stand, (5) Lo! He has made a lake!

○

〔巻三・二四九〕

三津の埼浪を恐み隠江の舶よせかねつ野島の埼に

三津埼　浪矣恐　隠江乃　船公宣奴島爾

題意 『柿本朝臣人麻呂覊旅歌八首』とあつて、此歌はその第一首である。八首は連作的に統

一せられたものでなく、京から西方へ向ふ歌もあり、西方から京に向つて歸る歌もある。即ち人麿の往反の旅の歌を八首集めたものだが、やはり人麿の特色を發揮してゐるから、さういふ意味で八首が統一せられてゐると謂つてもいい。私は、此等の歌を、大寶のはじめごろから慶雲二年ぐらゐ迄の作と考へ、假りに慶雲二年のところに配列して置いた。さうすれば比較的晩年の作だといふことになる。童蒙抄で、『此八首の歌は、往來の旅の歌を載せられたりと見えたり。人丸の何國へ往來の時の事とも不レ知れ共、歌の趣を考ふるに西國筋へゆきかへりの時の歌と見えたり。もし石見國よりの上り下りの時の歌ならむか。八首の全篇をよく考ふるに二首並べあげたるは、往來のときの歌を並べ載せたるかと見ゆる也』といひ、石見といふことをも念頭に置いてゐる。また上田秋成も或る意味でさう想像してゐる（金砂）のは、人麿上來の道筋に關する私の說と關聯あるとも謂ふことが出來る。

語釋 **○三津埼** ミツノサキで難波の御津(みつ)である。御津は或は大津とも書き、難波三津浦などとも書いた。當時の要港であつたことが分かる。そして現在の大阪の一部だといふ考證がある。萬葉卷一の、『いざ子どもはやく大和へ大伴(おほとも)の御津(みつ)の濱松待ち戀ひぬらむ』（六三）の中の御津(みつ)と同じである。**○浪矣恐** ナミヲカシコミと訓む。浪が高く恐ろしい氣持である。ミはサニと普通云つてゐ

る。恐ろしく、恐ろしくして、ぐらゐに取つてもいい。浪が荒く高い有様である。『潮騷の浪をかしこみ淡路島磯がくりゐて』（巻三。三八八）。『荒磯越す浪をかしこみ淡路島見ずや過ぎなむ幾許（ここだ）近きを』（巻七。一一八〇）などの例がある。**〇隱江乃**　コモリエノと訓む。攷證に、『隱江は、隱沼（コモリヌ）、隱津（コモリツ）などと同じく、四方皆陸にてつゝまれこもりたる江をいへり。この三津の埼の海は、國圖もて考ふるに、和泉、攝津、淡路にてつゝめる江なればこもり江とはいふ也』とあるが、この隱江は大體の感じから來てゐるので、港の感じであらうと思ふ。**〇舟公・宣奴島爾**　舊訓フネコグキミガ、ユクカノジマニであつたのを、古義でフネヨセカネツヌシマノサキニと訓んだ。いまだ定訓を得ないから暫くこの古義の訓に從つた。古義では、原歌は、『船寄金津奴島埼爾』とあつたのだらうといふ條件の下にかう訓んだものである。けれどもこの訓には諸說があるから、念のため煩をいとはず書記すつもりである。契沖說、『舟コグキミは梶取を云べし。君臣に限らず賤しき業にも其事をつかさどるをばきみと云ふにや。和名云、漁父一云漁翁（無良岐美）、顯宗紀の宗壽（ムロホギ）の御詞には家長をイヘキミとよめり。今舟公とのみかけるは、榜と云字の落ちたるにやと思ふを、第十卷人丸集の七夕歌に、ふねこぐ人と云ふにも舟人とのみあり。摠じて人丸集の歌は殊に文字簡略にして讀加へたる事多し、第十一の相聞の歌など心を著くべし』（代匠記）。春滿は、『此歌文字の脫漏したる歟。異訓有べくも見え

ず、しばらくさしおきて異本をまつべし』（童子問）といひ、童蒙抄では、舟泊宿奴島爾とし、フネコギトメテヤドレヌジマニと訓んでゐる。眞淵云。『舟令寄、敏馬ノ崎爾　かくや有けん。今本にこの二句を舟公宣奴島爾と有て、ふねこぐきみがゆくかぬじまにと訓たるは、字も誤、訓もひがわざなり。此歌にふねこぐ君てふ言有べきにや。宣をゆくと訓べきや、此ぬしのしらべをもしらぬ人の強ごとなり。こは手をつくべきよしもなけれど、後の考の爲にもとて、右のごとく字も訓もなし試るのみ。猶よく心得たらん人正せかし』（考）。宣長云。『フネハモイツカ、ヨセムヌシマニ、と有けむを、八毛を公の一字に誤り、何時を脱し、寄を宣に誤れる也、はものもは助辭にてつねのこと也』（玉の小琴）。久老云。『こは脱語ありとみえて、よみ得ぬを、わが藏る古本には、島の字の下に、一字の闕字あり。故考るに、舟公は舟はんとありしを誤しものか。古くはもの草假字をんと書たり。宣は不通二字を誤りしものか。しからば、ふねはもゆかずとよむべし。さて島の下に埼の字を脱せるなるべし。猶よく考べし』（槻落葉）。つまり久老は、フネハモ・ユカズ・ヌシマノサキニと訓むのである。千蔭云。『今の訓よし無し。字の誤れるならむ。試に言はば、舟令寄敏馬崎爾なども有りけむ。さらばフネハヨセナム・ミヌメノサキニと訓むべし』（略解）。これは師の眞淵の訓に從つたものだらう。なほ、略解は宣長の說をも引用してゐる。雅澄云。『故レ案に、もとは舟寄金津奴島埼に

とありしを、金を公に誤、寄を宣に誤、又そを顚倒へ、また奴の上に津ノ字を脱したるなるべし。また荒木田氏、古本には島の下に一字の闕ありと云り。されば島の下に埼ノ字脱たるなるべし。さらばフネヨセカネツヌシマノサキニと訓べし。七ノ巻に水霧相奥津小島爾風乎疾見船縁金都心者念杼とあり思ヒ合スべし』（古義）。由豆流云。『予案るに、舟公は舊訓のまゝ、ふねこぐきみがとよむべし。こぐといふ言をよみ添るを、かたぶく人もあるべけれど、そは本集十に、天漢水左閉而照舟竟　舟人妹等所見寸哉云々とある、舟人をふねこぐひとにとよめるにてしるべし。こは集中添訓の一つの格なり。この事くはしくは下にいふべし。さてここは、人まろと同じごとく舟をならべてゆく旅人を、公とはさせるにて、舟こぐ君とはいへど、その人自ら舟をこぐにはあらず。そは本集九に、其津於指而君之己藝歸者云々。廿に安騰母比弖許藝由久伎美波云々とあるも、君とさせる人、自ら舟をこぐにはあらで、人にこがしむるをもこぎゆくといへるにて、ここもこがしめゆく君がといへるなるをしるべし。宣は言をのるに、のりたまふといふ字にて、のるといはん事論なく、ここに書るは借字にて乘なり』（攷證）。つまり攷證では、フネコグキミガ、ノルカヌシマニと訓むのである。井上博士云。『再案ずるに、隱江乃舟下而泊奴美奴馬爾の誤脱か。乃はニともよむべし。』（新考）。なほ守部は『舟八也何時泊奴島爾』と訓み、『「舟八也云云」此間の誤落よき程に考へ加へ後の定めを待つな

り』と言つた。（檜嬬手）。

右の如くである。諸先進が苦心してゐるのを尊敬せねばならぬから煩を厭はず手抄した。さて私自身の非力では奈何とも解決し難いけれども、祕かに思ふに、舊訓の、フネコグキミガユクカノシマニは調がつまり過ぎて面白くない。童蒙抄のフネコギトメテヤドレヌジマニは調べがくだけて第一萬葉調でない。況や人麿調をや。宣長の、フネハモイツカヨセムヌジマニも、調が小きざみで面白くない。久老のフネハモユカズ・ヌシマノサキニは稍いいが、ユカズのところがどうかとおもふ。由豆流のフネコグキミガ・ノルカヌジマニもこれも稍よく、訓の理由も、濫りに文字を改めたりせぬところが穩健であるが、これも調が堅くなり過ぎてゐるやうにおもはれる。さうすれば、眞淵訓の略解の、フネハヨセナムミヌメノサキニと、雅澄のフネヨセカネツヌシマノサキニとが殘るが、敏馬埼を黏出せしめることは奈何とおもひ、雅澄の訓に據ることにしたのであつた。この訓ならば、辛うじて人麿の歌調と看做すことが出來るのであらうとおもふ。

大意 さうすれば一首の解も古義に從つて、『野島の埼にいかで船をよせむとは欲(オモ)へども、御津埼の浪の荒くておそろしさに、風隱(カゼゴモ)り居る隱江(コモリエ)の舟を漕出して、なほよする事を得せずとなり』といふこととなる。一首に三津(みつ)があり、奴島(ぬじま)があるから、それから恐(かしこ)みがあるから、大體の補充によ

つて、辛うじてかく一首として獨立せしめることが出來た。

なほ一首解の文獻を少しく手抄するなら、『歌の心は三津の浪を恐れて漕出す入江にとまり居し舟人の今はにはよしとてや野島を指して漕行くらむとなり』（代匠記）。『歌の意は、みつのさきのなみあらくてかしこき程に、こもり江の舟もまづこぎとめて、ぬじまにとどまりやどれと、よめる歌とみる也。點本の通のよみにては歌の意如何とも不ㇾ聞也。しかれば此歌は西國より上れる時の歌と見るべき歟。若し脱字ありて別の意もあらば、他國へ下向の歌にもあらんか。此歌は如何にもと未だ決しがたき歌也』（童蒙抄）。眞淵云。『扨、三津より船びらきしつれども、沖の浪高き時は、牟古の浦間につきて敏馬の崎をさして行て、風をまもりて、淡路阿波明石などへこぐなり。且みぬめは名高き崎なれば、はやく漕行て見ばやてふ心にてもよみしなるべし。この所みぬめと有つらん事、次の歌をもておもへ』（考）。由豆流云。『一首の意は、三津の埼は浪の高く荒くかしこさに舟を榜しめゆく君が奴島の方を乘るかもといへる也』（攷證）。千蔭云。『是は西の國へ旅行くとて、難波の御津より船出せし日の歌なり。卷六、風吹けば浪か立たむと候ふにつだの細江に浦隱れつつと言へる類ひなり』（略解）などがある。

鑑賞 この歌はやはり、略解の云つた如く、西の方へ出帆する時の歌であらう。羇旅八首の歌

は、いろいろの狀態の歌があるから、この一首もかういふ風波の荒かつた時の作一首として認容し得る。フネヨセカネツがつまりそれである。しかし、古義の訓方にすると、內容が平凡單純になるし、舟公をフネコグキミとすると內容が複雜して來るが、聲調が莊重の度を失つて、寧ろ人麿調で無くなつてくる。そこで假に古義の說に從はねばならぬこととなる。結句は必ず『埼』字の脫漏であらう。ヌジマノサキニといふ四三調は、次の歌のフネチカヅキヌなどと共に、人麿的ないい句だからである。

參考 上田秋成は、この羇旅八首及び筑紫旅行二首をば、人麿が石見に往反した時の作だらうと論じてゐるが、私は人麿の上來の道筋を石見から備後路へ越えさせ、船で瀨戶內海を通らせてゐるのだから、期せずして秋成の說と一致することとなつてゐる。總論篇には秋成の說を抄記する機會を失つたので此處に參考として寫し取つた。『石見に下向の舟出、難波をたちてみぬめの浦を漕過、淡路の野島に泊りするを』云々。『難波を立出て和泉の灘をわたり、この泊には至るべし。石見は西北の國なれば、さる方へは舟をむかふべからず』。『この小序に人丸筑紫に下向の時とあるは、後の補ひのあやまれる也。筑紫にくだり給はば、かの國々の歌も多からんをふつに見えず。是は筑紫路も遠の御門と云詞章につきて、遠の御門とは筑紫を云と、なまさかしき人の書くはへし序也』（金砂三）。近時、舟公宣奴島爾の訓につき、生田耕一氏は、『舟なる公が宣も奴島に』。『舟なる公を置きて奴島に』。『舟なる公は急げ奴島に』の三つを改易訓として居り（萬葉集難語難訓攷）。井乃香樹氏は、『舟をこぐ公宣らめ奴島に』と改訓し（國學院雜誌、昭和八年七月）。吉田增藏氏は、『舟あらはにも乘るか奴島に』（文學、昭和八年四月）等の改訓の試みがある。

吉田氏の訓によれば、『人麻呂が淡路に渡らむとして三津の崎あたりの荒波をいたくかしこみ、一旦引返して舟がかりして、隱りたる隱江に繫げる舟を遂に意を決して、公然にも荒海を一氣に乘り切りつつ奴島に向ふ』意に解してゐる。この訓には文字の改變をみだりにしない特色があるし、何か調子の大きいところがある。『あらはにも』の語感さへ調和するなら、この訓はなかなか有力ではあるまいか。

○

【卷三・二五〇】

玉藻かる敏馬を過ぎて夏草の野島の埼に船ちかづきぬ　一本云。處女を過ぎて夏草の野島が埼に廬す我は

珠藻苅　敏馬乎過　夏草之　野島之埼爾　舟近著奴　一本云。處女乎過而夏草乃野島我埼爾伊保里爲吾等者

語釋　**○珠藻苅**　タマモカルで、敏馬に冠した枕詞である。海邊で藻を刈つてゐるところから、海邊の地名に冠せしめた。玉藻かる沖にしろ、玉藻かる敏馬にしろ、玉藻かる處女にしろ、はじめは寫生に本づいて出來たものだが、この歌に使用された頃には、もはや音調を主とした枕詞になつて居る。つまり人麿が好んで用ゐる技法の一つである。**○敏馬乎過**　ミヌメヲスギテと訓む。これは仙覺の訓で、『此歌、古點ニハ、タマモカルトシマヲスキテナツクサノノシマノサキニフネチカツ

キスト點セリ。又或本ニハ、第二句ハヤマヲスキテト點ス。共ニ不相叶、ミヌメト和スヘシ。ムトヌトハ同韻相通也』と云つてゐる。古義では、ミヌメヲスギと六言に訓むべしといつてゐる。これも一つの見識である。つまり『而』字がないからといふのと、古調に響くからといふのであり、理窟が悉皆無といふわけではない。敏馬は攝津武庫郡の地で、昔の菟原、八部二郡にわたる海邊で、現今の、神戸市の東部、灘區の岩屋、大石などの濱あたりである。小野濱から和田岬まで一帶の地である(折口、阪口)。萬葉のほかの處には、三犬女、見宿奴、美奴面などとも書いてゐる。なほ折口氏云。『舟旅の行路では、海邊の有力な神の鎭座する所の前をよぎる時、殊に注意するのが常であつたから、ここも敏馬の姫神のゐられた所の意味にとつてよからう。而もさうした旅に歌を奉る海邊の社は、大抵岬にゐられるのだから、敏馬の崎と見るのがよからう』云々。**〇夏草之**　ナツクサノで、これはヌにかかつた枕詞である。夏草は萎え伏すものだから、夏草の萎ゆといふところから、ナユの反ヌだから、野島のヌにかけたものである。この方は、玉藻苅るよりももつと純粹な枕詞の形式に使つてゐる。**〇野島之埼爾**　ヌジマノサキニである。野島は、次の歌に、粟路之野島之前乃とある如く淡路島についた小さい島である。野島之埼はその島の埼で、今の淡路津名郡野島村である。春滿はノジマガサキと訓み、『第四句野島のさきと點ず。よろしからず、のしまが、と點ずべし』

（童子問）と云つた。**○舟近著奴** フネチカヅキヌである。これには異訓が無い。

大意 一首の意は、〔玉藻を苅る〕敏馬の埼を通つていよいよ我等の船が、〔夏草の〕淡路の野島が埼に近づいた。といふのである。これは攝津の御津あたりから出帆して、西の方へ向ふ趣の歌である。

鑑賞 一首の趣向は極めて單純だが、それだから一首の聲調に破綻がおこらず、渾然とした調和が保たれ、やはり人麿作中の傑作の一つである。一首中に二つも枕詞を使つてゐるのなどは、或向では人麿の偏癖とおもふかも知れぬが、これが自然的に單純化の遂行をなしてゐるのである。『玉藻かる』も元は實際の藻を苅る行爲を寫生したのに本づき、『夏草の』もやはり寫生から出發したものであつただらうが、この歌の場合は、もはやさういふ明かな寫象を伴はない、主として聲調上の語として受取る方がいいのである。つまりこの歌の季は夏季で野島に青草の茂つて居ることなどは、眼前におもひ浮べないのである。鑑賞するにも寧ろあまり鮮明におもひ浮べない方がいいのである。冠辭考には、記の那都久佐能（ナツクサノ）、阿比泥能波麻能（アヒネノハマノ）（古事記。衣通王）といふ歌を引き、萬葉の夏草之（ナツクサノ）、念之奈要而（オモヒシナエテ）（卷二。一三一）を引いてゐるが、此の歌の場合は、『萎え』とつづけた『ぬ』でなく、『夏草之、野（ヌ）』と直ちにつづけて枕詞の格としたものかも知れない。この『の』は、『秋風の千（ち）

江の浦回の木積なす』（卷十一。二七二四）の格と同じで、はじめは寫生から出て、様式化して行つたものとも思へるのである。何しろこの歌では枕詞を二つ使つてゐるのである。そして奈行麻行多行左行などの一大諧調音を現出してゐる。

結句の、『船ちかづきぬ』も、實にたいした句で、どうしてかういふことが言へるかとおもふばかりである。この句には感慨を潛めてゐるが、感慨を毫も上べに浮ばせないで、ただの客觀的なあらはし方のやうに見せてゐる。然かもその二つの渾然たる融合成就は實に驚くべきで、古今集や、新古今集の技巧の發達などが云々せられたところで、かういふのに較べればそれは殆ど問題にならない程である。それから、萬葉の『ぬ』止めの歌は、『ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ』（卷一。四八）。『哭澤のもりに神酒すゑ禱ひのめどわが大王は高日知らしぬ』（卷二。二〇二）。『おほきみは神にしませば天雲の五百重が下に隱りたまひぬ』（卷二。二〇五）。『風をいたみ奥つ白浪高からし海人のつりぶね濱に歸りぬ』（卷三。二九四）。『一重のみ妹が結ばむ帶をすら三重結ぶべく吾が身はなりぬ』（卷四。七四二）。『松浦河河の瀬ひかり年魚釣ると立たせる妹が裳の裾ぬれぬ』（卷五。八五五）。『術も無く苦しくあれば出で走り去なと思へど兒等に障りぬ』（卷五。八九九）。『荒野らに里はあれども大王の敷き座す時は京師となりぬ』（卷六。九二九）。『朝霧の八重山越えてほ

ととぎす卯の花べから鳴きて越え來ぬ』（卷十。一九四五）。『うつせみの常の辭とおもへども繼ぎてし聞けば心まどひぬ』（卷十二。二九六一）。『草蔭の安努な行かむと墾りし道阿努は行かずて荒草立ちぬ』（卷十四。三四四七）。『さわたりの手兒にい行き遇ひ赤駒が足掻を速み言問はず來ぬ』（卷十四。三五四〇）。『沖邊より潮滿ち來らし韓の浦に求食する鶴鳴きて騷ぎぬ』（卷十五。三六四二）。『潮干なばまたも吾來むいざ行かむ沖つ潮騷高く立ち來ぬ』（卷十五。三七一〇）。『あらたまの年の緒ながく吾が念へる兒らに戀ふべき月近づきぬ』（卷十九。四二四四）。『天雲のそきへの極みわが念へる君に別れむ日近くなりぬ』（卷十九。四二四七）。『明日香河河戸を清みおくれゐて戀ふれば京いや遠ぞきぬ』（卷十九。四二五八）などの用例がある。そしてこの歌の參考になるものは、『月かたぶきぬ』。『濱にかへりぬ』。『高く立ち來ぬ』。『いや遠ぞきぬ』などであらうか。特に卷三の、『海人の釣船濱にかへりぬ』の句は、非常にいい句で、人麿の歌句と共に吟味していいものである。

古義で、第二句を、『敏馬を過ぎ』と六音に訓んだ。これも一つの訓として、この一首を味つてもいいと思ふ。『て』が這入ると、『の』とか、『に』などの天邇遠波が多いために少しく弛むやうにもおもへるから、六音に訓むとさういふところが緊るのである。併し、實際は人麿のものは、やはり『て』があるのであらう。人麿の聲調は、弛むやうにして大きく流動させて、結句で緊めるのが

その特色だからである。島木赤彦は、古義のこの六音の訓に贊成して、『六音である事は我々には非常に有難い句法である』（萬葉集短歌輪講）といつてゐる。

なほ參考文獻を追記するならば、童蒙抄に、『往來の歌を部類一つにあつめて、前の歌は上るときの歌、是は下る時の歌として載せたる歟。次第して見るときは、前の歌何とぞ外に誤字脱字あるべき也。下るときの歌と次第して見る義も、奥に到りていまだ支へあり。天さかるひなの長ぢの歌は、上る時の歌と聞ゆる也。されば往來の歌を一つに載せたると見ざれば不㆑濟也。上る時の歌と次第して見れば、奥の歌どもにては次第連續して淡路より播磨、播磨より津の國と次第すれども、此二首の歌不㆓連續㆒故不審おこれる也』といつて、この羇旅八首について考察してゐる。この疑問は自然でよい疑問である。

なほ、童子問に『野といはん冠句に夏草のとはよめるなるべし』と云ひ、童蒙抄に、夏草之(ナツクサノ)を解し、『野島(のしま)とうけん爲の冠句也。夏草に意は無し』と云つてゐる。然るに武田博士の、新解には、この『夏草之』の句を、『實景である』とし、『玉藻苅るといふ美しい句を以つて、敏馬を修飾し、夏草のといふ印象的な句を以つて、野島が埼を修飾し、よつて一首の光彩となしてゐる。一首の主題は、舟近づきぬにあるが、生き生きした力を與へるのは、夏草のの一句であらうと思ふ』と云つて

ゐる。これも一見識であるが、前に說明したごとく、『夏草の』の句は、童蒙抄で、『意は無し』と云つた程全然意味が無いのではない。『夏草の』といふ語を讀めば、それだけの寫象は大體として浮ぶのであるが、この場合には、現實の寫生的表現(吾等が現在行ふごとき手法)とは違ふものになつてしまつてゐるのである。つまり一言にしていへば枕詞として使つたといふことに歸著するのである。

この歌につき、一本云、處女乎過而(ヲトメヲスギテ)。夏草乃(ナツクサノ)。野島我埼爾(ヌシマガサキニ)、伊保里爲吾等者(イホリスワレハ)。といふのは、處女(をとめ)を地名としてある。處女は、敏馬の近くにある地名だらうと想像され、或は蘆屋處女の地で、今の蘆屋の地だともいふ。つまり處女塚のあるところである。代匠記には、『第九ニ葦屋處女墓ヲヨメル歌アリ。彼由緒ニヨリテ兎原郡葦屋浦ヲ處女トノミモイヘルナリ』と既に云つてゐる。『いほりす』は假廬(かりいほ)を作り、假廬(かりいほ)し念ほゆなどと同じく、旅の假廬である。歌は前の歌に比して劣る。おもふに、この歌は人麿の歌が傳誦されてゐるうちに、一二句變つて、民謠的にひろがつてゐたものと思はれる。この羇旅八首と似たものが卷十五にずらりと並んでゐるのは、つまり同じ徑路を經て、變化したものの如くに想像される。

參考 武田祐吉博士は、歌詞と食物との關係に注意し、人麿の歌に、藻を材料にしたのが澤山ある。海岸に行けば、『玉藻

かる斂馬』といふ。婦人を見れば、『玉藻なすよりねし妹』といふ。昔の大和人の副食物は野菜と共に海藻を澤山食つた。そこで、『人麻呂などもつまりは海藻を澤山食はされて居つたものであるから、おのづから海を見れば海藻の聯想が浮んで來る。婦人を見ればまた海藻の聯想が出て來ると云ふ譯である』(國文學研究、萬葉集篇)と云つてゐる。

○

【卷三・二五一】

淡路の野島の埼の濱風に妹が結びし紐吹きかへす

粟路之　野島之前乃　濱風爾　妹之結　紐吹返

語釋　この歌も西へ向ふ時の歌である。**○粟路之**　アハヂノと訓む。舊訓アハミチとあつたのを、契沖がアハヂノと訓んだ。代匠記に委しい。『此をばアハヂノと四文字によむべし。第六に赤人歌に淡路乃野島之海子乃云云』といひ、『仙覺いかで此點を破せられざりけむ不審なり』とまで喜んでゐる。童蒙抄ではアハヂナルと訓み、『これをあはぢのと四音一句によめる句例多き事なれど、之の字なければ四音にもよむべき事なれども、なるとよむ例あれば五音によむべき事なり』と云つ

てゐる。○**野島之前乃**　ヌジマノサキノと訓む。舊訓ノシマノサキノで、代匠記・槻落葉・古義・新訓・新解・新釋等皆、ヌシマノサキノと訓んだが、考でヌシマガサキノと訓み、略解・攷證・新考一部・全釋等がそれに從つてゐる。前は埼で、古事記に笠沙之御前、御津前などと書いてゐる。○

濱風爾　ハマカゼニと訓む。『濱風が吹いてゐるに、その濱風が』といふぐらゐの省略句法である。後段に論じて置いた。○**妹之結**　イモガムスビシと訓む。宣長は、『いもがむすべると訓べし』（玉の小琴）といひ、久老も、『巻二十に、兒等我牟須敝流とあり、むすびしとよむは非也』（槻落葉）といひ、雅澄も、『イモガムスベルと訓べし。ムスベルは結有なり（ムスビシとよめるはわろし）。廿ノ巻に、海原乎等保久和多里弖等之布等母兒良我牟須敝流比毛等久奈由米とあり』（古義）と云つたが、千蔭は、イモガムスビシと訓み、『集中に、イモガ結ビシと言ふ事多くて』（略解）云々と注し、由豆流は、ムスビシと訓むべきことを主張し、『結を、宣長はむすべると訓れしかど、ここは過去し事をいへるうへに、まへに引る歌にも、結爲、結之など書れば、舊訓のまま、むすびしと訓べし』（攷證）といひ、新考・新釋・新解等、皆ムスビシと訓んでゐる。これはムスビシと訓むべきで、聲調のうへからもムスビシの方がいいやうである。さて、『妹が結びし紐』といふのは、夫婦が暫し離れる時には互に下紐を結び交して、又逢ふまではあだし人に解かせないといふ習慣になつてゐる。『獨り寝

て絶えにし紐をゆゆしみと爲む術しらに哭のみしぞ泣く』（卷四。五一五）。『神さぶと否にはあらず秋草の結びし紐を解かば悲しも』（卷八。一六一二）。『吾妹子が結ひてし紐を解かめやも絶えば絶ゆともただに逢ふまでに』（卷九。一七八九）。『菅の根のねもごろ君が結びてしわが紐の緒を解く人はあらじ』（卷十一。二四七三）。『二人して結びし紐を一人して吾は解き見じただに會ふまでは』（卷十二。二九一九。古義は第二句をユヒテシヒモと訓む）などで分かる。

○紐吹返　ヒモフキカヘスと訓む。紐は、『此紐は旅衣の肩につけたる赤紐なりと見ゆ其よしは別記に委し』（考）といひ、千蔭は、『下紐又はいづれの紐とも無くて、旅行く時いはひて結ぶ事と見ゆ。ここは風吹返スと詠みたれば、下紐には有らで旅の衣の肩に付きたる紐なり』（略解）といひ、井上博士は、『赤紐は肩に縫ひ著けて前後に垂るるものにて、晴著の飾とおぼゆれば旅衣にはつくべからず、今の歌の紐はおそらく襟の紐ならむ』（新考）といつてゐる。もとは夫婦愛から來た下紐を結ぶ習慣で一つの咒の如き氣分も交つてゐるが、それが晴著のときの紐でも旅衣のときの紐でも結んでやつてもかまはぬのである。現代の仲好き夫婦間でネクタイを結びやり帶結を助けるやうなものである。この歌では、強い濱風に旅衣がひるがへる氣持として受取るべきである。紐の動くさまを聯想して愛人を慕ふ心情に及べばいい。折口博士は、『紐といふと、直に下紐の聯想をするのが常だ。だが、下紐そのものが既に下體部を覆ふものでなく、下袴につける紐

のことだ。紐と言へば、上袴にも又帶にもつけ、その外、袖・褄にもつける。一口に言へば、魂を結びこめる秘密の結び目を作つた緒である。この紐緒を取りつけてあると、魂は其人の身を離れないものと信じた。その魂は、元外來の威力の源なるものであつたが、信仰分化の結果、女性の魂を男性の身に固著させる方法と考へられる樣になつた。卽男女相別れる時に、女は自分の魂を男につけてやるのである。』（短歌講座第五卷）と說明してゐる。

それから、ハマカゼニといふこの『ニ』を氣にし、古義でも委しく辯じてゐる。これは後段に二たび論じよう。

大意　一首の意は、淡路の野島が埼までとうとう來たが、その强い濱風に、家を出るとき妹が結つてくれた旅衣の紐がかくも靡きひるがへることである。『また逢までは解じと妹が結びかためたる紐をさへに、うらめしく吹翻すとの旅情、いとあはれなり』（古義）といふ心を含んでゐる。

鑑賞　眞淵に從つてヌジマガサキノと訓むか、舊訓のままにヌジマノサキノと訓むかについて、これは、イモガムスビシといふ下句があつて、『が』音があるから、ここも、ヌジマガサキノと、『が』音とする方がいいと最初考へたのであつた。特に初句の四音に續けるためにはさうせねばならぬ。『の』とすると、餘り、『の』が續き、流動に過ぎて具合が惡いと考へたのであつたが、再考

して、やはり『の』で續けて來て、第四句の『妹が』の『が』で受けた方が聲調が自然だと思ふやうになつた。

それから、前言で一寸觸れた如く、第三句の、『濱風に』の『に』が氣になるために先進の間に研究があつた。雅澄云。『或人問。尾ノ句、紐吹返（ヒモフキカヘス）とあるからは、第三ノ句は濱風之（ハマカゼノ）とあるべき理なるに、濱風爾（ハマカゼニ）と云るは、事たがひたるやうに聞ゆるはいかにと云り。余答へけらく、上に云たる意を、よくよく味ふべし。もし濱風之（ハマカゼノ）といひたらむには、かいなでの歌よみの詞なるべし。爾（ニ）といひたるに深き味はあり。濱風に吹れて、もの心ぼそきだにあるを、その濱風が、妹が結べる紐を吹翻す、といへる深き情をもたせたるにあらずや、その深き情をもたせたるは、爾（ニ）の言にありて、あはれふかく、味かぎりなし。一わたりによみすぐしては、此朝ノ臣の歌の深情は知（ラ）れじをや』（古義）といひ、藤井高尙の、『家こひしさたへがたし、といふ餘意あらはれたり。此あはれなる餘意は、にのてにをはよりいできつるぞかし、云々』といふ文を頭註としてゐる。

井上博士の新考では、『三句と結句とうち合はず、卽ハマカゼニとあるを受けてはフキカヘサルといはざるべからず。古義及藤井高尙の歌のしるべにいへる所あれどそは牽强傅會の辯のみ。案ずるに古今集に、山かぜにさくらふききまきみだれなむ花のまぎれにたちとまるべく、とあると同じくて

一の格なり』といひ、武田博士の新解では、『三句濱風にと云ふ以上は、通例紐吹き返さると云ふべき語法である。濱風が主格ならば、吹き反すでよいが、濱風にといふによれば、吹き反すでは自他が整はぬのである。さりとて、吹き反ると云つたのでは、吹きが迷惑する。吹きかへさると云つては、間伸びがして、歌の調を成さぬ。簡潔に吹き反すと云つて意味が高調せられたのである。島木赤彥氏のいはゆる感情が熱すると文法を超越するといふことのよき例となるであらう』といひ、澤瀉博士の、新釋では、『濱風にと云つて、紐吹かへすといふのは無理ないひ方であるが、これは古義の如く解すべきもので、人麻呂の例の省略的句法の一つのあらはれと見てよい』云々。

大體右の如き文獻であるが、この『濱風に』は、『濱風ガ吹イテヰルニ、ソノ濱風ガ』。或は、『濱風ガ吹イテヰルニ、ワレハ』などの如く、『濱風が』若しくは、『我は』といふ主格を省く一つの省略法で、ここの主格は、『濱風が』にしてもいいと思ふのは、卷一に『袖吹きかへす明日香風』とあるにても分かり、この場合は、明日香風が主格となるのである。散文的文法で律すべきでなく、萬葉にも用語例が幾つかある。この『に』とか、『ゆ』とか、『の』とかには含蓄ある省略用法がゐるので、それが中世紀を經て、近代になると、俳句の方の切字の約束にまで發展變化して來てゐる。元來この天爾遠波(てにをは)をば、先進はそれほど疑問を抱かずに解釋して來た。例へば、『濱風の吹ひるが

へすと也』（拾穂抄）。『濱風の紐を吹返すに付て』（代匠記）。『濱風の荒きに吹返されて』（童子問）。『濱風の荒くはげしきままにとけやらぬ紐をも吹かへすにつけて』（童蒙抄）。『風の吹きかへすことよといへる也』（攷證）等といつて、毫も疑を存じてゐない。つまり、『に』をば、『の』（ガ、ハに通ふ主格の『の』）と解してゐる。それほど、この歌の『に』が自然に無理なく使はれてゐるのである。それだから、誰かが疑問を出さなかつたら、いろいろの說が出ずに濟んだかも知れない。第一作者自身の人麿がさう細かに氣にしつつ使つたものでなく、自然にかういふ具合になつたものである。言を換へれば、自然的『剛斷』の技法なのである。併しこれも日本語であるから、後代の私等は出來るだけ吟味して見ることもまた必要である。よつて以下少しく愚見を述べることにする。

この歌の、『濱風に』の『に』は、場處・位置・狀態をあらはす辭で、その下に續く動詞には、自動詞のこともあれば他動詞のこともある。『秋風に棚びく雲の絕間より』（新古今。卷四）といふのは自動詞の場合で、これは萬葉ならば、『秋風に川浪たちぬ』（卷十。二〇四六）。『秋風に白浪たちぬ』（卷九。一七五七）。『松風に池浪たちて』（卷三。二五七）。『朝なぎに來寄る深海松（ふかみる）』（卷十三。三三〇一。三三〇二）。『月讀の光に來ませ』（卷四。六七〇）。『朝なぎに梶音きこゆ』（卷六。九三四）。『朝なぎに水手（かこ）のこゑよびゆふなぎに梶の音しつつ』（卷四。五〇九）。『旦雲（あさぐも）に鶴はみだれ夕霧に蝦（かはづ）はさわぐ』（卷三。三二四）。『大船

の泊つるとまりのたゆたひに物念ひやせぬ人のこゆゑに』(巻二。一二二)。『このごろの曉露にわが宿の萩の下葉はいろづきにけり』(巻十。二一八二)の例は、自動詞の場合で、これだけでは不明なのもあるが、主格の出てゐるのもあり、主格を省略したのもある。併し人麿の、『袖ふきかへす』は他動詞だから直接の比較にはならぬが、『に』の用語例として大切である。

次に他動詞の場合がある。『上つ瀬に鵜川を立て下つ瀬に小網(さで)さしわたし』(巻一。三八)。『上つ瀬に石橋わたし下つ瀬に打橋わたす』(巻二。一九六)。『天の川安の渡(わたり)に舟うけて』(巻十。二〇〇〇)。『潮騒にいらごの島べこぐ船に』(巻一。四二)。『秋風に山飛びこゆる雁がねの』(巻十。二一三六)。『秋風に大和へ越ゆる雁がねは』(巻十。二一二八)。『紀の國の由良の岬(みさき)にこの日暮らしつ』(巻七。一二二〇)。『秋風の吹きくる宵に天の川白浪しぬぎ落ちたぎつ速湍(はやせ)わたりて』(巻十。二〇八九)などは、『に』を持つてゐる他動詞の場合で、皆目的格(オブゼクト)を示した例である。それから主格(ズブエクト)の語を示したのもあり、示さないのもある。『紀の國の由良の岬にこの日暮らしつ』では、『ソレハ』といふ主格を省いてゐるのである。『秋風の吹きくる宵に天の川白浪しぬぎ』では、これだけでは分からぬが、『もの念(おも)ふ人』といふ主格があるのである。『潮騒にいらごの島べこぐ船に』の、『こぐ船』は、『海人が榜ぐ船』の意で、主格が省かれてゐるのである。以上は、他動詞を續ける場合にも、主格を補充して、文法的に

完全になし得ることを證明したのである。

さて、次に、『袖カヘル』『袖カヘス』の場合であるが、『樂浪の比良山風の海吹けば釣する海人の袖かへる見ゆ』（卷九。一七一五）。『あまのがは霧立ちのぼる棚機女の雲の衣の飄る袖かも』（卷十。二〇六三）の、ソデカヘル、カヘルソデのカヘルは自動詞の場合である。然るに、『水莖の岡の葛葉を吹きかへし面知る兒等が見えぬころかも』（卷十二。三〇六八）は、カヘスが他動詞の場合で、『風が』が主格で、省略されてゐる。『婇女の袖ふきかへす明日香かぜ都を遠みいたづらに吹く』（卷一。五一）は、やはりカヘスは他動詞で、主格は明日香風である。そこで、『濱風に妹が結びし紐吹きかへす』の主格が何かといふに、最も自然な看方は、『濱風が』といふのが主格で、それが省略された技法といふことになるのではなからうか。契沖や、春滿や、由豆流などが、餘り意識せずに、『に』を『の』として解釋してゐるのは、『濱風』を主格と看てゐることが分かる。そして、私案では、『濱風に』は飽くまでも、强い濱風が吹いてゐる狀態をあらはして、直ちに、『濱風に』をば、『濱風が』に等しい用法だとは解釋しないのである。從つて、井上博士のあげた古今集の歌は時代が後れるから、寧ろ、『山風に』は『みだれなむ』につづけるつもりで使つたのではなからうかとさへ思ふのである。卽ち、これを、『一つの格』として片付けてしまはないのである。

これは前にも屢いつたごとく、人麿は第三句で一寸息を切る技法をよく用ゐてゐる。次に出てくる、『稻見の海の奥つ浪千重にかくりぬ大和島根は』の場合でもさうであるが、そこで、ここの『濱風に』の『に』も直ぐ、『妹が結びし』に續くのではなく、寧ろ『吹かへす』に連續するやうに考へねばならぬから、さすれば、『に』で一寸息を休め、『その濱風が』といふ主格の氣持を其處に含めたと解釋してはどうであらうか。

以上は、『妹が結びし紐吹きかへす』と訓むことを前提としての論であるが、若し、『妹が結びし紐吹きかへる』となれば、『紐』が主格になるから、平凡な文法論になつて議論はないが、如何にしても一首の聲調上不滿であり、『吹き』といふ動詞があるから、やはり、『かへす』となるところである。若し、萬葉集中の用例に、『かへす』と使つて、『かへる』或は、『かへされる』の意になるのがあれば、最も說明が簡單である。卷一の、『婇女の袖吹き反す明日香風』は、『婇女の袖を吹き反すべき筈の』、或は、『昔は婇女の袖を吹き反した筈の』の意がありとせば、『吹反す』の熟語には、さういふ自由な用法の餘裕があつたのかも知れない。これ等は世の專門家の敎をあふがねばならない。追記するに、折口氏は、『吹き飜る』とも訓み、なほ、『吹かれ飜る。これをふきかへすと訓むのも誤りではない。唯、吹きかへる儘にまかせるのを「吹きかへす」と云ふので、謂はば、吹きか

へさしめる事になるのだ』（短歌講座第五卷）と云つた。

この歌は、羇旅八首中では、先づ普通の出來と評していい。ただ一首が純粹に張つてゐて、小癪な溷濁音を交へてゐないのは他の歌と同樣である。それから、家戀し、妹戀しと主觀語をいはずに、『妹が結びし紐吹かへす』と事柄をいつたのが注意していい點で、平賀元義などは、この手法を悟入して行つた。『の』のつづけ方、『が』のつづけ方にも不思議ないいところがあり、結句の四三調は、『雲たちわたる』とか、『沫雪ながる』などと同じく、上等な結句だとおもふし、初句の四音の訓もやはり活きてゐることが此處で分かるのである。

参考　林古溪氏の「萬葉集外來文學考」を見るに、人麿の羇旅八首の評があつて爲めになつた。『人麻呂の、有名な「野島の崎の濱風に云云」の如きも、「臨レ風而嘆」を思ひ出す。イヤその前後の人麻呂の旅の歌は、どうも詩の影響を受けてをるものと思ふ。ただ痛切でないのが殘念である。それが卽ち、燒直し、直譯、人まねの證據なのである』。『一體、唐になると、行旅、遠別、征戍の詩によいのが澤山ある。人情の深奥をゑぐり出すからであらうし、社會の事情もさうさせねばならなかつたらうし、又情感を動かし易い點もあるのだらう。で、深刻でもあり熱烈でもある。日本の此時代の社會相は、支那とはまるでちがつて、平安豐樂であつたらう。（朝廷、吏員たちは）從つて强ひて筆先、口先に情感の動きを見せるだけで、實際には、感激はなかつたであらう。すれば、深みもなく熱もなく遊戲半分になつてしまつて、唐人の詩に見るが如き嚴肅性を失つてをることは已むを得ぬこと、又は當然の事情といふことになるのであらう』。『人麻呂の特色は矢張り長歌である。あの長いものを破綻なしに日本語でま

とめて一つの新しい時代を作つた。その點が實にえらいのである。それが歌の聖なる所以である。短歌の如きは、本色ではない。比べて見て非常に見劣りのするものである』。『私は、柿本人麻呂の短歌には敬服するものが少いと前にいつたが、羇旅八首について見ると、私は矢張り人麻呂よりも黒人の方が大きく立派だと思つてゐる。僻見でもあらう』。茂吉云。以上林氏の說を手抄したのは贊成せむがためではなく、一人麿の評價にもいろいろあるといふことを示したのである。

○

【卷三・二五二】

あらたへの藤江の浦に鱸釣る白水郎とか見らむ旅行く吾を　一本云。白栲の藤江の浦に漁する

荒栲　藤江之浦尒　鈴寸釣　白水郎跡香將見　旅去吾乎　一本云。白栲乃藤江能浦尒伊射利爲流

語釋　**○荒栲**　アラタヘノと訓む。荒栲は和栲などと並べて用ゐられて居り、栲は絹布の類を一般に指す名稱で、藤の皮で織つたものは、寧ろ麁布（荒栲）であるところから、荒栲をば藤に冠る枕詞としたものである。かくの如く枕詞ははじめは意味の概念を持つてゐるのだが、この作歌當時には、もはやその意味の上の聯想關係が稍薄れて、音調のうへでつづける習慣が既に成立つてゐ

ただらうとおもふ。**○藤江之浦爾**　フヂエノウラニと訓む。舊訓フヂエガウラニであつたのを、童蒙抄でフヂエノウラニと訓んだ。藤江の浦は、播磨國にある。和名抄郷名に、播磨國明石郡葛江布知衣とある。明石の西に接して、此地は淡路と最も近く相對つてゐるところである。『稻見野の大海の原の荒妙の藤江藤井の浦に鮪釣ると海人船みだれ』（卷六。九三八）また、『沖つ浪邊浪安けみいざりすと藤江の浦に船ぞとよめる』（卷六。九三九）などの例が參考になる。**○鈴寸釣**　スズキツルで、鱸を釣ることである。『鱸取る海人のともし火外にだに見ぬ人ゆゑに戀ふる此の頃』（卷十一。二七四四）といふのがある。**○白水郎跡香将見**　アマトカミラムと訓む。海人として私を看るだらう。海人と見まがふだらうといふくらゐの意である。代匠記に、『白水郎は此集に泉郎とかける所もあるは、人麻呂などの麻呂を麿と一字にも作りたるに同じきか。若は深く入つて潜するものなれば泉郎を引合て二字とせるか。日本紀にも二字なり。和名云。辨色立成云。白水郎和名阿萬。今按云、日本紀云、用ニ漁人二字一云用ニ海人二字一。』と注釋して居り、なほ、折口氏は、日本民族の主流以外の一種族で、主として海岸を移動したもの、天孫族以前に同じ方向から來たものと思はれる、一種の海岸漂流民で、古く海人部又海部、略してアマとも云つたと説明して居る。**○旅去吾乎**　タビユクワレヲと訓む。『旅する吾をば』といふので、この『を』は第四格即ち目的格の『を』として文法上解釋すべ

きである。併し、結句に、かくのごとく、『吾を』と据ゑると、そこに感動がこもつて冷靜な機械的な『を』でなくなり、『よ』に通ふ『を』の分子が出て來るのである。第四句で一段切つて、結句を据ゑたのは大體さうである。次に出てくる歌の、『榜ぎわかれなむ家のあたり見ず』でもさうである。つまり文法的には倒句だが、聲調の上からは据わる句だからである。

大意 一首の意は、ここの藤江の浦に鱸を釣つて居る漁師と自分を人々は見るだらうか、實は自分はこれから遙々と旅に出るのである、さういふ自分であるのに、といふぐらゐの意である。

鑑賞 此歌は羇旅の寂しさを歌つたものである。愛人と離れ、家郷を離れる寂しい感じである。契沖は、『歌の心は、此浦の面白さにながめをれば旅人とはしらで釣する海人とや人は見んとなり』と云つてゐるのも、旅人の難儀だといふ心持を暗指してゐるのかも知れぬ。なぜ、『海人とか見らむ』といふやうなことを云ふか。その心理は右の説明で盡きてゐるとおもふが、萬葉にはなほ次の如き用例があるから參考のために抜いて置く。

濱清み磯に吾が居れば見む人は白水郎とか見らむ釣もせなくに （卷七。一二〇四）

藤浪を假廬に造り灣廻する人とは知らに海人とか見らむ （卷十九。四二〇二）

網引する海人とや見らむ飽浦の清き荒磯を見に來し吾を （卷七。一一八七）

潮はやみ磯囘に居ればあさりする海人とや見らむ旅行く吾を（卷七。一二三四）

白妙の藤江の浦に漁する海人とや見らむ旅行くわれを（卷三。二五二 卷十五。三六〇七）

かういふのである。重出のゝ拔いて置いた。これで見ると、見物して歩く吾を、假廬作りをる吾を、旅行く吾をば、海人と思つて見るだらうといふのである。この、『海人とか見らむ』といふのは、『旅ゆく吾を』に續ける場合には一番自然だが、『海人とか見らむ』といふ句は通俗化し得る性質のものだから、かういふ模倣歌となつたものと見える。卽ちほかの模倣歌の場合は皆不自然で感心しないのである。想像するに、人麿の歌などが本となつてかういふ歌が通俗化されて出來たものの如くである。併しかういふ發想の爲方は漢詩などにもあるから、やはり人間共通の常識が入つてゐると謂ふべきである。

次に、結句の、『旅行く吾を』は、『旅行く吾を海人とか見らむ』とつづく文法的句法であるが、第四句で切つて、結句として獨立せしめた場合には、この『を』は詠歎の『よ』に通ふ性質を帶びて來ることを前言した。つまり、結句の、『にき』。『てき』。『なし』。『つつ』などでも感動を含み、『ねのみし泣かゆ相念ふ吾は』でも、『は』に感動がこもると私は說明するのであるが、その如くに、この歌の結句の、『を』も感動がこもるのである。なほ萬葉の用例を示せば次のごとくになる。

大君のみ言かしこみさし竝ぶ國にいでますや吾が背の君を（下略。卷六。一〇二〇）
泊瀬川白木綿花に落ちたぎつ瀨を淸けみと見に來し吾を（卷七。一一〇七）
むらさきの名高の浦の名告藻の磯に靡かむ時待つ吾を（卷七。一三九六）
さ寢かにば誰とも寢めど沖つ藻の靡きし君が言待つ吾を（卷十一。二七八二）
誰ぞ此の吾が屋戸に來喚ぶ垂乳根の母にころばえ物思ふ吾を（卷十一。二五二七）
あしひきの山より出づる月待つと人にはいひて妹待つ吾を（卷十二。三〇〇二）
いにしへに織りてし機をこのゆふべ衣に縫ひて君待つ吾を（卷十。二〇六四）
誰そ彼と我をな問ひそ九月の露にぬれつつ君待つ吾を（卷十。二二四〇）
しばしばも相見ぬ君をあまの川舟出はやせよ夜のふけぬまに（卷十。二〇四二）
ねもごろに思ふ吾妹を人言の繁きによりてよどむ頃かも（卷十二。三一〇九）
うるはしと吾が思ふ妹を山川を中に隔りて安けくもなし（卷十五。三七五五）

かういふ用例がある。一首一首少しづつの色調の相違があるが、大體に於て共通の點がある。そして、『旅ゆく吾を』や、『見に來し吾を』などとも共通の點がありとせば、その移行型を發見することも出來ようとおもふのである。古義では、『旅行く吾を』を解して、『旅行く吾なるものを』とし

た。單純な目的格でなく、感動を含ませた解釋の爲方である。井上博士の新考でも、『ワレヲはワレナルヲなり』とし、武田博士の新解でも、『旅する吾なるものを』とした。これは古義に從つたものであるが、この『旅行く吾を』と、『妹待つ吾を』とは、文法的にははじめは違つてゐたものと看做さねばなるまい。

この一首は、やはり西へ向ふ時の歌と思へるが、羇旅の歌の中には、かういふ情趣のものもあつてよいのであり、誰が作つても、この内容のものはこの程度のものとおもふ。人麿のやうな力量のあるものが詠んでもやはりこの程度のものである。ただこの一首の聲調であるが、これも萬葉調の人麿調だから、いつ讀んでも飽くことがない。私のごとき萬葉集の好きなものは、枕詞にも別して反感を抱くやうなことはなく、アラタヘノなどといふ音調からもいいひびきを感じてゐるものだが、これは萬人に強ふべきものでなく、所詮私事となるのである。この評釋の如きも私は私事として書いてゐるのである。

この歌は一本云。『白妙の藤江の浦に漁する白水郎とか見らむ旅ゆく吾を』とある。想像するに、いつのまにか一二句變更して流傳したものであらう。この方は、人麿のよりも劣る。『鱸釣る』は餘り細かいやうだが、實際を云つてゐるので、句が活躍してゐるのに、ただ『漁する』だけでは、

稍概念化して物足らぬこととなるのではなからうか。人麿の歌が當時既に有名で、その力量が當時の人をして讃歎せしめたものだといふことを想像することが出來る。

○

【巻三・二五三】

稻日野も行き過ぎがてに思へれば心戀しき可古の島見ゆ 一云。湊見ゆ

稻日野毛　去過勝爾　思有者　心戀敷　可古能島所見 一云。湖見

語釋 ○**稻日野毛** イナビヌモと訓む。稻日野は印南野ともいひ、播磨の印南郡の東部卽ち加古川流域の平野と加古・明石三郡に及ぶ大平野（阪口保・增田德二）と大體解釋していい。また萬葉の稻日都麻（印南都麻）について、明石郡藤江あたりから印南郡福江邊に及ぶ海邊で、稻日野は大體そのあたりの野と解してゐる（荒木良雄・增田德二）。卷七の、『印南野は往き過ぎぬらし天づたふ日笠の浦に波立てり見ゆ』（一一七八）の日笠の浦は印南郡大鹽村及曾根町附近（新考）の浦と大體見當が附くし、以上の考證を綜合すれば、稻日野は加古川の西方にも東方にも亙つてゐた野といふことにな

る。これは大切なことだから念を押して置く。然るに諸註釋書を見るに、加古川以東のやうに解釋したものが幾つかある。『今本郡（加古郡）より明石郡に跨る原野なり。中略南東は明石川に起り、北西は賀古川に至る、方三里許とす』（地名辭書）。『今の播磨印南郡から加古郡へかけての野、明石川から加古川に至る野を廣くさしたもの』（澤瀉、新釋）。『明石と加古川との中間の平野』（全釋）等を見れば分かる。これは續紀に、播磨國賀古郡印南野とあるのに據り加古川以西は印南野でない如くに思つたのであらう。この歌は人麿が筑紫（或は石見）の方から上京の途次に稻日野近くの海を航しつつ咏んだのだと私は考へるので、さうすれば、若し稻日野が加古川以東だとすれば歌の解釋上都合が惡いが、此處に記した近頃の考證だと、私の考が無理なく進み得るのである。〇**去過勝爾** ユキスギガテニと訓む。ガテニは橋本進吉博士の、「がてぬがてまし考」（國學院雜誌第十六卷九・十・十一、明治四十三年）に據るに、『がて』。『がつ』には否定の意がなく、『堪ふ』。『敢ふ』。『得』の意味の語である。それに、『ぬ』。『に』。『なく』が附いて、はじめて否定の意となる。そしてこれらは否定の助動詞で活用するのである。そこでこの場合は、行き過ぎ得ずに、行き過ぎ敢へずにの意で、稻日野もなかなか廣く、船の進行もはかばかしくない。稻日野にさしかかつてからの詠歎で、此處のガテニは、稻日野に心がひかれて去り敢へない、去り得ないといふ作者の主觀が主になるのではなく、稻日野が、廣々とし

て、まだなかなか通過しきれないといふ意味になる。これは後段にも再説するが、從來は、契沖以來、『印南野の面白くて過ぎ憂きに』（代匠記）。『名殘ををしむ情まことなり』（童子問）と解釋してゐたものである。久老は、カテニと澄んで訓み、『師の濁られしはあしし。必清べき證あり』（槻落葉）と云つてゐる。〇**思有者** オモヘレバと訓む。『心をし君に奉ると念へれば縱し此頃は戀ひつつをあらむ』（巻十一。二六〇三）。『われのみや夜船は榜ぐと思へれば沖邊の方に楫の音すなり』（巻十五。三六二四）。『またまづく遠をしかねて念へれば一重衣を一人著て寢る』（巻十二。二八五三）などの用例がある。

それから、この『思へれば』といふ語は、この三例がさうであるやうに『行き過ぎがてにオモヘれば』と續くのかと思つてゐた。つまり『過ぎ難いやうに思ふ』といふやうに考へたことがあつたが、これはさうでなく『行過ぎ敢へずにゐて、モノ思ヒヲルニ』といふことになり、ここの、『ば』は、『幾日もあらねば』は、『幾日もないのに』と等しいのと同じである。このオモフは、『行き過ぎ難くオモフ』と單純に解せずに、ココロニオモフ。モノオモフといふやうになる用例があるから序に書いて置く。『その雪の時なきが如その雨の間なきが如隈もおちずおもひつつぞ來しその山道を』（巻一。二五）。『おもひつつ來れど來かねて水尾が埼眞長の浦をまたかへり見つ』（巻九。一七三三）。『ふるさとは遠くもあらず一重山越ゆるがからに念ひぞわがせし』（巻六。一〇三八）などの用例は幾分參考

になるだらう。つまり、其の物其の處に關聯して心に物おもふことを、ただ『おもふ』といふので、これも日本語の一つの用法と思ふ。また、ガテヌ、ガテニは、ガテニスルなどのほかは、小休止となる場合が多い。キミマチガテニ。マチガテナクニなどの如く、またマチガテヌカモなどの用例が其を示してゐる。これも此歌のオモフが直ぐ續かずに、其處に瞬時の小休止を考へ得るのはそのためである。なほ、『おもひつつ、寢も宿がてにと、明しつらくも、長きこの夜を』(卷四。四八五)の例が好い參考例だとおもふ。**○心戀敷** ココロコホシキと訓む。ココロコヒシキ(舊訓)。ココラコヒシキ(童子問)等であつたのを、古義で、『ココロコホシキと訓むべし。五卷に、毛々等利能己恵能古保志枳。又故保斯苦阿利家武。書紀齊明天皇大御歌に、枳瀰我梅能姑褒之枳舸羅儞などあり』と注した。この、『こころ戀しき』と續ける用ゐ方は萬葉でも少いから珍重すべきである。**○可古能島所見** カコノシマミユと訓む。可古は播磨國加古郡にあるが、今の加古郡加古川町は明治二十二年迄印南郡に屬してゐた。そこで此歌の加古も印南野のうちにあつたことが想像せられるので(藤本)、書紀には鹿子水門といふ名稱をも記してある。これは島ではないが倭島などの例のごとく島といつてゐる。なほ久老は、『播磨國に可古郡の名もあれば、さもあるべく誰もおもふめれど、心に戀しむかことといふことのあるべくもあらねば、可古は必ず阿古の誤なるべくおもひて私に改めつ』(槻落葉)とも

解釋したが、併しこれには贊成者はなかつた。守部なども、『是を阿古と改めたるは誤なり』（檜嬬手）と云ひ、攷證には、『島にはあらねど、船にありて海上より望見て島のごとく見ゆれば、島といへる事この下に大和國を倭島（ヤマトシマ）といへるにしるし。さてこの可古の島を、久老は阿古能島の誤りとして說あれど、例の古書を改めまほしくするの誤りなれば用ふべからず』と云つた。新考には、『案ずるに今高砂といふは加古川の河口のデルタなり。是いにしへのカコノシマの變形したるものならむ』とある。なほ近頃の調査によると、高砂か（阪口）或は高砂の西南方十粁の上島（カミシマ）か（增田）であらうと云つてゐる。本書では高砂ぐらゐと見當をつけて解釋した。○**一云湖見**　この湖字は流布本に潮とあるのを契沖が幽齋本に湖字とあることを注意した。萬葉卷十九に枚乃湖（ヒラノミナト）。卷十七に、居多云湖（オナノミナト）とあるのを引いて攷證でもさう直して論じてゐる。なほ、古寫本中、類・神・西・溫・矢・京にも湖になつてゐる。新考に、『潮は播磨風土記、日本靈異記などにもミナトに借りたり。さて可古ノミナトは加古川の河口なり』とある。

大意　一首の意は、播磨のこの廣々とした稻日野（いなびの）あたりの海を航してゐるに、舟行がなかなかはかどらず、ものおもひしてゐるに、やうやくにして戀しい加古（かこ）の島が見える。といふのである。

鑑賞　この歌は、京から離れる氣持の歌か、京に近づきつつある歌か、つまり往（ゆき）の歌か反（かへり）の歌

かといふことが問題になるが、これは一首の感じの上のみならず、廣い印南野の中に加古川があるといふ地理的關係からも歸路（京へ上る）の歌のやうに思へるのである。古義では、『ここの前後の歌を見るに西國へ下る時の歌にて』というて、下向の歌、往の歌と解して居り、澤瀉・鴻巣諸氏もさうであるが、契沖以下の諸書では私の解釋の如くやはり歸路（京へ上る）の作と見てゐるやうである。武田氏（新解）もさうである。

次に、この歌は、海路の作か陸路の作かといふことになるが、稻日野も行き過ぎがてにといふ言葉から見ると陸路の感じであるが、加古の島見ゆといふのを見れば海路の感じである。また一首全體の氣持はやはり海路の感じである。嘗てアララギで輪講した時には、種々參考書を見て、陸路の作としたと記憶してゐるが、その後海路の作だと思つて鑑賞して來た。そしてこのたび參考書を見たるに、眞淵の考に、『さて此歌は此國に名細く面白き所多きを船にて見放つつ通るさまなり』と言つて居り、攷證に、『この稻日野のまへの海を船にてゆくに、そのけしきのおもしろさに行過がたく思ひて見ればといふ意也。ここは船にて行也。陸をゆく事と心得誤る事なかれ』と云つてゐるのを知つた。なほ武田博士の新解には、『稻日野も行き過ぎがてにといふを見れば、陸行の作と思はれるが、稻日野について漕ぎ上つた時の舟行の作と取れぬこともない。いづれにしても、稻日野の屬す

る印南郡よりも、賀古郡の方が京に近いのだから上京の時の作と思はれる。但、前に筑紫に下る時の作があり、この次のも下る時の作と思はれるから、何かの行き違ひがあらうも知れない』と云つて居る。

次に、『稲日野も行き過ぎがてに』について、兩說あることを前言したが、なほ論ずるならば、第一の說は從來の說で、契沖が、『印南野の面白くて過ぎうきに又かこの島も見ゆれば彼へも早く行きて見まくほしければ彼方此方に引かるる心をよめり。稲日野をといはずして野もといへるは可古の島も見ゆと云ふ心を兼ねたり』（代匠記）と云つたのを始め、『稲日野も行過がたきに、をしむさへ有に』（童子問）。『いなみの景色のおもしろきによりて、旅行の愁情を忘れて行過がたく思ふと也』（信名、童蒙抄）。『名細く面白き所』（眞淵、考）。『過行むと思へどもおもしろくして過行難くおもふよしなり』（雅澄、古義）。『そのけしきのおもしろさに行過がたく思ひて見ればといふ意也』（由豆流、攷證）等がそれであり、なほ、井上氏、澤瀉氏、鴻巣氏、次田氏、土屋氏等みなこの說に從つてゐる。第二の說は武田博士の、『上京の旅であるから早く行きつきたいとも思ふ。稲日野の變化のないのに忘屈した心である』（新解）の如きがそれである。

私も、『行き過ぎがてに』をば、船の進みの遲く捗々しくない氣持に解し、『播磨の稲日野あたり

をもなかなか早くは通過し得ずに心もとなく思つてゐたに、やうやくにして戀しい加古が向うに見えて來た』といふ具合に釋いてゐた。つまり武田博士と殆ど同じ解釋であり、海上舟行の作とせば、契沖などの、『面白いから』云々といふ解釋よりも、心理上自然だと思ひ、さうして鑑賞して來た。

併し此處で、契沖說をも大切に顧慮しながら、以下に少しく論述することにする。由來、この『行き過ぎ兼ぬる』といふ用語例には萬葉以下の歌集にも二とほりあつて、一つは難澁なために、行過ぎ難いといふのと、一つは心の執著があつて行過ぎ難いといふのである。

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ（卷二。一〇六）

縄の浦に鹽燒くけぶり夕されば行き過ぎかねて山に棚引く（卷三。三五四）

東路の手兒の呼坂越えかねて山にか宿むも宿はなしに（卷十四。三四四二）

かういふのは、歩行が難澁な狀態をば、『行過ぎがたく』といふやうに表はしてゐる例である。『筑波嶺の嶺ろに霞ゐ過ぎかてに息づく君を率寝てやらさね』（卷十四。三三八八）。『上毛野伊香保の嶺ろに降ろ雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり』（卷十四。三四二三）などは、兩方に意味がかかるやうだが、やはり第二の方に分類していいやうである。第二の方といふのは次の如き例である。

妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨も零らぬか其を因にせむ（卷十一。二六八五）

妹が門去（ゆ）き過ぎかねて草結ぶ風吹き解くな又顧みむ　（卷十二。三〇五六）
磯の浦に來寄る白浪反（かへ）りつつ過ぎがてなくは誰にたゆたへ　（卷七。一三八九）
君がため浪の玉敷く三津の濱行き過ぎがたしおりて拾はむ　（新拾遺、卷九）
過ぎがてに見れども飽かぬ玉津島むべこそ神の悳とめけれ　（玉葉、卷十五）
振りはへて人も訪來ぬ山里は時雨ばかりぞ過ぎがてにする　（千載、卷六）
過ぎがてに覺ゆるものは芦間かな堀江の程は綱手ゆるべよ　（後拾遺、卷九）
打まねく氣色ことなる花薄行き過ぎがたく見ゆる野べかな　（續古今、卷四）
過ぎがてに野中の清水影見てももと住馴れし方ぞ忘れぬ　（續千載、卷八）

此等の用例は、明かに、心に執著があつて、行過ぎがたい意である。古今集以後にこの用例は增加したが、萬葉にもこの如き用例のあることは、右のとほりである。

次に、そんならば、萬葉の歌に、風景に心の執著のあるのがあるか奈何といふに、これは可なりある。『梓弓引豊國の鏡山見ず久ならば戀しけむかも』（卷三。三一一）。『皆人の戀ふるみ吉野今日みれば諸（うべ）も戀ひけり山川清み』（卷七。一一三一）。『かたかひの河の瀬清くゆく水の絕ゆることなく在り通ひ見む』（卷十七。四〇〇二）はじめ、可なり多い。また、海や浦に關係ある歌で、さういふのがある

かといふに、『若狹なる三方の海の濱清みい往き還らひ見れど飽かぬかも』(卷七。一一七七)。『凡にぞ我は思ひし乎不の浦の荒磯のめぐり見れど飽かずけり』(卷十八。四〇四九)。『思ひつつ來れど來かねて水尾が埼眞長の浦をまた還り見つ』(卷九。一七三三)。『眞楫ぬき船し行かずは見れど飽かぬ麻里布の浦にやどり爲ましを』(卷十五。三六三〇)などの例がある。なほ次の二例がある。

大埼の神の小濱は狹けども百船人も過ぐといはなくに(卷六。一〇二三)

まそかがみ敏馬の浦は百船の過ぎて行くべき濱ならなくに(卷六。一〇六六)

この二つは、二つとも海に關係した歌であり、『過ぐ』をば、そこに心の執著なしに通過してしまふ意味に使つてあるので、その反對になれば、神の小濱も、敏馬の浦も佳景の場所で、ただは通り過ぎ難い處だといふことを示してゐるのである。

また、『家にして吾は戀ひむな印南野の淺茅が上に照りし月夜を』(卷七。一一七九)なども、印南野を旅して、その風光を心に止めた歌であることがわかる。また、『播磨國印南郡に幸せる時の歌』(卷六。九三五)もあり、山部赤人の作歌一首(卷六。九三八)には、印南野のことをも歌ひ、『浦をよみ諸も釣はす濱をよみ諸も鹽燒く在り通ひみますも著し淸き白濱』と云つてゐるのは、風光を褒めて歌つてゐるから、どちらかといへば人麿の此歌を契沖說を以て釋く參考となる歌である。然るに、そ

の赤人の歌つた長歌の反歌には

印南野の淺茅おしなべさ宿る夜の日長くあれば家し偲ばゆ　（卷六。九四〇）

明石潟汐干の道を明日よりは下咲しけむ家近づけば　（卷六。九四一）

といふのがある。これは印南野の廣々としたところも表はれてゐるし、幾日も宿に寢て家郷を念ふ情が出てゐる歌で、人麿の歌を第二の説（武田・齋藤等）を以て釋く參考となる歌である。九四一の歌も歸路の歌で、やうやく家郷に近づきゆく心持が出てゐる歌である。

右に記した如く、萬葉には兩説に參考になる歌があるのである。併し兩説のうち第二説、卽ち舟上の旅のはかどらない、物憂い寂しい時に、向うの方に加古の島が見えたときの嬉しい心持の歌だと解する方が、歌が一段と優れてゐるやうに思ふのである。さうすれば、『念ふ』といふ語も含蓄があつていい。また、『行き過ぎがてに』の句も、單に『面白くて去り難い』といふやうな觀念的なものでなく、實際の旅の客觀性も籠つてゐて具象的なのがいい。ただ、『印南野も』の『も』が、『心戀しき』に繫つて、『印南野もまた心戀し』だとする説もあるけれども、この場合の『も』は意味を輕くとるべく、『足引のみ山も淸に落ちたぎつ。……百磯城の大宮人もをちこちにしじにしあれば』（卷六。九二〇）。『筑波根の岩もとどろに落つるみづ』（卷十四。三三九二）の『モ』ぐらゐの、慣用口調と

取つてはどうであらうか。若し稍強く『も亦』の意に取るとしても、長い舟路を來て、印南の海も亦と解すれば別に解釋が難儀ではない。そこで私は本書に於ても第二説を以て評釋することにしたのであつた。（併し、印南野を單に『面白い』ために過ぎ難いなどとせずに、オモフをばココロニオモフと解し、去りあへぬ心、執著の心、『印南野ヲ見捨ムナゴリヲ思フ』（代匠記）といふ、戀愛の情調に通ふやうな心として解すれば、やはり味ふことが出來るので、作歌實行のための鑑賞といふ點から行けば、第一説もまた大切にして好いといふことになる。）

この一首の聲調は、依然人麿流の息の長い特徴を持つて居り、第三句で、『思へれば』といつたのは、『幸くあれど』。『よどむとも』。『みだれども』。『入らむ日や』などの傾向と同一揆である。世の平凡な歌人が單純に模倣すればあぶないところを、人麿は毫も恐れずに自在一氣にうたひあげてゐる。特に、下句の、ココロコホシキ・カコノシマと類音でつづけて來て、ミユで止めたあたりは、いかにしても大歌人の面目である。歌聖などといふことは偶像禮拜ではもはや始末がつかぬ。如是實作に面と向つてのうへの尊敬でなければならぬ。そしてこの下句が一首の中心點をなすのであるから、上句は意味もおのづから輕く、聲調もまたこれに應じて加行の音なども下句ほどには多く入つてないのである。亡友島木赤彦は、『山さへも見えずなりつる海なかに心こほしく雁のゆく見ゆ』（太虛集）といふ歌を作つたが、この下句のココロコホシク・カリノユクミユは、まさしく人麿から學んでゐるのである。晩年の赤彦はかくのごとくにして人麿を理會し人麿と同化しつつあつた。一首

の音などにかういふ剖析をすれば極めて機械的になるが、剖析を試みればかういふ結論になるのであらう。實際の作歌に際しては、さういふことを念々に意識して作歌するのではなく、もつと有機的に行ふのである。

仙覺抄に、『コヽロコヒシキトハ、コヒシキナリ。モノヲ云ニ、コヽロト云コトバヲ、イヒソフルコトモアリ。コヽロヨシトモ、コヽロウシトモ、心カナシトモイフガゴトシ』とある。萬葉には、『梅の花今さかりなり百どりの聲の古保志枳春來るらし』（巻五。八三四）。『行く船を振り留みかねいかばかり故保斯苦ありけむ松浦佐用比賣』（巻五。八七五）。『荒磯邊に著きて榜がさね杏人の濱をすぐれば戀しくあるなり』（巻九。一六八九）などがあるけれども、『心こほしく』と續けたのはないから注意せねばならぬ。『往さには二人吾が見しこの埼をひとり過ぐればこころ悲しも』（巻三。四五〇）。『浪の上に浮寢せし夜何ど思へか心がなしく夢に見えつる』（巻十五。三六三九）。『うららに照れる春日に雲雀あがり心かなしも獨しおもへば』（巻十九。四二九二）などの如く、『心かなし』と續けたのもあるのを參考とすべきである。

追記。花田比露思氏の私解に、この歌の、行き過ぎ難いといふのは印南野の風景のためでなく、『平素近江朝廷の末路に多大の同情を寄せ、天智天皇をも窃かに偲びまつるの心を抱いてゐた彼れ人麿は、必ずや此の御歌あるによつて稻日野に愛着を

持ち、行き過ぎ難く思つたのではあるまいか』といひ、當時の印南野は、今の加古郡に近い明石郡の海岸だと考へ、『天智天皇の御歌(中大兄三山歌)によつて思出多き稻日野！　その稻日野のほとりを、空しく行き過ぎたくないと思つてゐるので、その稻日野のある可古の陸地すら心戀しく思つてゐたが、その可古の陸地が見えた！　見えて來！』と譯して居る。

○

【卷三・二五四】

ともしびの明石大門に入らむ日や榜ぎ別れなむ家のあたり見ず

留火之　明大門爾　入日哉　榜將別　家當不見

語釋　**○留火之**　トモシビノと訓む、明石へ係る枕詞で、冠辭考に、『こは燈火の明しとつづけたり。同じ卷に、座待月、開乃門從者といへるがごとし。此ともしびの明しとつづけたるぞ、人麻呂ぬしの比の口つきなめり』とある。久老は、『留を、ともしとよむは事遠し。とまりといふ訓をかりたらば、とまり火とよむべし』といつたが、攷證でそれを難じて、『留を、ともしと讀むべきこと論なく、ともり火といふ事あるべからず』といつてゐる。**○明大門爾**　アカシオホトニと訓む。大

門をば古點セトニと訓んであつたのを仙覺は、『此歌古點には、トモシヒノアカシノセトと和せり。セトとは、おほくは迫門とかきてよめり。せはき所と聞へたり。大門と書てセトと和すべからず。仍今アカシノナタと和する也』と云つてゐ、代匠記にもそれを引用してゐる。然るに拾穗抄では還元してアカシノセトニを採つてゐる。代匠記初稿本には、『もしこれは水門とかきて、みなとにや』と云ひ、春滿の童子問には『僻案には大の字は傳寫の誤りにて水の字なるべし。水と大とは眞にても字形誤りやすく、艸にても水大相近ければ、水門にてミトとよむべし。是古語古訓なれば、人麿の歌多く古語あれば也』といひ、童蒙抄では、それを踏襲してアカシノミトニと訓み、これは、『大門をなだとよむべき義、證例も不レ見』といひ、大は水の誤寫として、『大の字の誤字と見て水門（みと）とは訓ずる也。水門（みと）はみなとと云義にて、衆船のあつまりよる處也』と云つた。眞淵の、考では、アカシノオホトニと訓んでゐるが、冠辭考では、『大門は、筑紫の橘の小門（ヲト）をば乎登と訓たるに對へて、これをおととよむべきなり。小の假名は乎（ヲ）なり。大の假名は於保（オホ）なるを略きて於（オ）といふのみ（中略）且つこの大門は海門をいふ』と云つてゐる。略解で、アカシノオドニと訓んでゐるのは、この冠辭考を參照したものと見える。然るに久老は槻落葉でアカシオホトニと訓んで、現在それに從ふものが多い。久老は、『師は、橘小門（ヲト）にむかへて、大門はおととよむべくいはれしかど、おほととよむ方勝れ

り』と冠辭考の師の說を難じてゐるけれども、その實は考のアカシノオホトニと訓んだのから影響を受けたものである。卽ち師の說を繼承してただノの字一つ減じただけである。併し久老の訓は好い訓であるから、煩しいが徑路を書記したのである。追記。校本萬葉を見るに、代匠記初稿本の書入に、アカシオホトとあるといふから、考がそれを見たのかも知れぬ。**○入日哉** イラムヒヤと訓む。これは舊訓イルヒニヤと訓んでゐたのを本居宣長がイラムヒヤと訓んだ。それを久老が、槻落葉で紹介し、『是は本居氏のよみなり』と明記したから、古義なども『本居氏のイラムヒヤとよめるに從べし』と云つた。なほ、攷證では、『宣長云。いらんひやとよむべし。明石の門に入らぬ前には、海上なれば大和の家の方も見えしが、この門へ入ては、見えぬやうになりなむといふ也。』と云つてゐる。宣長のイラムヒヤと訓んだのは實にいい訓だが、よく吟味すると、眞淵の考の、『船こぎ入なむ日にやなり』といふ文から暗指を得てゐると愚考するのである。この『や』は疑問の助辭で、下の『わかれなむ』に照應するのであるが、響の上からは、其處に詠歎の含蓄があるのである。なほ、眞淵の新採百首解にはイルヒカナと訓んでゐたが、古寫本では神田本にさう訓んでゐる。**○榜將別** コギワカレナムと訓む。これは舊訓もさうである。然るに、童蒙抄では、コギワタルラムと訓んで、『古鄕のかたをも詠めやり來りしも、見えずなりて、こぎわたるらんとの意なるべし。然ど

も此句少六ヶ敷聞えがたし』と云つてゐるが、なほ、榜將別といふ字があるからして、『詠めやりし古郷の家のあたりも見えずなりて、こぎわかるるといふ義と釋し侍れど、實意はしかとすみがたき歌也』と云つて解釋に困難してゐる。併し、これは普通に解釋して、故郷の山々と榜ぎ別れるであらうといふこと、つまり、今まで見えてゐた故郷の方の山々などの見えなくなるであらうといふのである。**○家當不見** イヘノアタリミズと訓む。これはイヘノアタリミユ（舊訓）。イヘノアタリミデ（仙覺。考從之）。イヘノアタリミズ（拾穗抄）。『不見をミユと點せるは傳寫の誤なるべし』（代匠記）。『仙覺本云、ミデ。官本又點同之。別校本、ミズ』（代匠記註）。イヘアタリミエズ（略解の引ける宣長の說）。イヘノアタリミユ（古義）。宣長の玉の小琴に、『家のあたり見ずは、四の句の上へ移して見べし』とあるによつて、槻落葉なども、暗に玉の小琴に從つたやうな形になつてゐるが、宣長の獨創ではなく、**拾穗抄**では明かに、イヘノアタリミズと訓んで居り、解釋にも、『旅懷斷腸すべきに家のあたりも見えず』と云つて居り、また、代匠記では、『不見をミユと點せるは傳寫の誤なるべし。右の二つの點に從ふべし』と云つてゐるのみならず、代匠記の小注に、別校本ミズと明記してあるのである。それから、略解が、宣長の說として引いた、『家當不見は、イヘアタリ見エズと訓みて、さて四の句の上へうつして見るべしと言へり。然なるべし』といふのは玉の小琴の文章そのままでな

いから、宣長との問答に據つたものででもあらうか。玉の小琴の文には、明かにイヘノアタリミズとなつてゐるからである。家のあたり見ずとは、故鄕、即ち大和のかたを指して家のあたりといひ、故鄕は見えないといふ意味である。○さて此の語の訓の經過を所緣として、文獻記載について一言いひたきは、この文獻のプリオリテエトの記載はなかなかむづかしいことである。井上博士の如き精到な學者でも、このイヘノアタリミズを宣長の初訓と看做して『宣長のミズとよみて』と云つてゐるのを見ても分かる。

大意 一首の意。この歌は家鄕から西の方へ向つて船で旅する時の歌である。明石の海門を通過するころほひには、いよいよ家鄕の山々とも別れることとなるであらう。そのころには家鄕の大和ももはや見えずなるのである。ぐらゐの意味である。『入らむ日や』と疑問格にいつたのは、『わかれなむ』と未來格にいつたのと、聲調上對應してゐる。

鑑賞 この歌も內容は非常に單純で、聲調で統一してゐるのだが、感慨さながらに調子が出てゐてたぐひ稀なる歌である。眞淵のいはゆる、心ひたぶるなるときは言葉多からずで、材料をごたごたさせずに、これだけ重厚に調べあげてゐるのは實に偉いのである。それから一首の聲調は人麿一流の波動を打たせたもので、『入らむ日や』といつて、『榜ぎ別れなむ』とつづけ、ラムとナムと

二つ云つてゐるのなども人麿的な大きい調子である。それだから、かういふ訓點をして呉れた先進の學者に私等は感謝せねばならぬのである。なぜかといふに、かう訓んではじめて人麿的な歌になるのであり、若し、『ともしびの明石の瀨戸に入る日にや榜ぎわかれなむ家のあたり見で』と訓んだり、『ともしびの明石の灘に入る日かな榜ぎ別れなむ家のあたり見ゆ』とでもしたなら、到底この如き鑑賞は出來がたいと思ふからである。

この一首は、第三句の、『入らむ日や』で一寸息を休めるのではなからうか。『や』は疑問の意味だが、そこで感慨がこもるやうに私等には響く。そこで息を瞬間休めて、また、『榜ぎ別れなむ』で二たび息を休めて居る。そこに感慨が籠つてゐるのだから、この休止は極めて自然的である。それから結句では、『家のあたり見ず』で止めてゐる。この止めなども私等には非常な力量として感ぜられる。その訓もまた、『家のあたり見ず』でなければどうしてもいかぬほどの据わりのよいものである。本居宣長は、この結句を、『家のあたり見ずは、四の句の上へうつして見べし』と云つたにつき、現在に至る全部の學者がそれに從つてゐる。併しこれは意味合の關係でさういふので、聲調のうへからいへば、結句はこの儘の結句として据ゑねばならぬのである。意味の解釋と聲調の吟味の差別は其處に存じてゐる。意味の方面からのみの解釋では、『野守は見ずや君が袖ふる』などの倒句の必

然的存在までには解明が行屆かないのであるが、聲調の方からゆけば、『君が袖ふる』はその儘にして鑑賞せねばならぬので、それを動かしたりして小癪なことをしてはならぬのである。その如くに、この歌の、『家のあたり見ず』の句はその儘にして、『ず』に重量と感慨とを籠らせて鑑賞せねばならぬ。この『ず』を、『ずに』または、『ずして』などと直して、その方に心が向くともはや正しい鑑賞は出來ない。ゆゑにこの歌の結句の『ず』は、一首の最後に据ゑて飽くまでも味はねばならぬ。さすれば、この『ず』は聲調の上からは、そこで休止するのである。さういふ安定の調子なのである。今試みに、萬葉集短歌の『ず』止めのものを拾つて見ると次のやうなものがある。

島の宮勾の池の放ち鳥人目に戀ひて池に潜かず　（卷二。一七〇）

須磨の海人の鹽燒衣の藤ごろも間遠くしあれば未だ著なれず　（卷三。四一三）

夏麻引く海上潟の沖つ洲に鳥はすだけど君は音もせず　（卷七。一一七六）

立ちて坐てたどきも知らに思へども妹に告げねば間使も來ず　（卷十一。二三八八）

奥山の木葉がくりて行く水の音聞きしより常忘らえず　（卷十一。二七一一）

古への神の時より逢ひけらし今こころにも常忘らえず　（卷十三。三二九〇）

荒雄らを來むか來じかと飯盛りて門に出で立ち待てど來まさず　（卷十六。三八六一）

二上の峯の上の繁に籠りにしその霍公鳥待てど來鳴かず　（卷十九。四二三九）

我が妻はいたく戀ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘られず　（卷二十。四三二二）

我が兄子が宿のなでしこ日並べて雨は降れども色も變らず　（卷二十。四四四二）

以上の例は、ずつと意味も連續的であるから、結句の『ず』をば第四句の上に持つて行つて意味を取る必要は無い。この種類の結句の『ず』は、この儘据わつてゐるのである。

橘の蔭ふむ路の八衢にものをぞ思ふ妹に逢はずて　（卷二。一二五）

妹があたり今ぞ吾が行く目のみだに吾に見えこそ言問はずとも　（卷七。一二一一）

海の底沖漕ぐ舟を邊に寄せむ風も吹かぬか波立てずして　（卷七。一二二三）

十二月には沫雪ふると知らねかも梅の花咲く含めらずして　（卷八。一六四八）

數多あらぬ名をしも惜しみ埋木の下ゆぞ戀ふる行方知らずて　（卷十一。二七二三）

秋風の千江の浦回の木積なす心は依りぬ後は知らねど　（卷十一。二七二四）

潮滿てば水沫に浮ぶ細砂にも吾は生けるか戀ひは死なずて　（卷十一。二七三四）

かういふ種類のものである。是等は、『て』、『ど』『とも』などを附し、意味の上からいへば、第四句の上に持つて行く句法であることが明かである。それだから、『ず』とはつきり据ゑたものに較べ

れば据わりが悪いのであるが、それでもなほこれはこれで結句としての貫祿を備へて居るのである。第四句で切つて、結句が意味の上から第四句へかへる例として右の數首を揭げた。然るに、萬葉集中に次の二首がある。これは人麿のに類似してゐる。

吾が屋外に植ゑ生したる秋萩を誰か標刺す吾に知らえず（卷十。二二一四）

眞木柱ほめてつくれる殿のごといませ母刀自面がはりせず（卷二十。四三四二）

これらは、意味の上からは第四句の上に持つて行つて解釋してもよく、又『ずして』として解釋してもいいのであるが、聲調のうへからは、この儘獨立したものとして充分受取ることの出來るものである。それよりも人麿の歌の場合にはもつと獨立的な結句として感ずることが出來る。

それから、初句の、『ともしびの』といふ枕詞であるが、これなども嚴格な意味からいへば言語の聯想による一種の遊戲から出發したものであるが、さういふことは餘り氣にせずに、心を向けないと鑑賞が出來ない。『もののふの八十氏河の』の場合でもさうだが、『旅にして物戀しぎの鳴くことも』（卷一。六七）。『吾松椿吹かざるなゆめ』（卷一。七三）などの言掛なども、現代人の考に據つてのみ氣にすれば到底鑑賞が出來ないことになる。私のごときは、『ともしびの』からは、燭火の寫象を得ずに、音樂的要素として受取ることに馴れて、今ではさう氣にしなくなつてゐるのである。

略解云。『此歌までは、西へ行く度の歌にして、次の二首は歸る時の歌なり。又下に人麻呂筑紫へ下る時の歌とて載せたるは、此時も同じ旅なるを、後に聞きて別に書き入れたるにや、又こと時にや、知られず』と云つてゐる。

○

【卷三・二五五】

天ざかる夷の長路ゆ戀ひ來れば明石の門より倭島見ゆ　一本云。家門のあたり見ゆ

天離　夷之長道從　戀來者　自明門　倭島所見　一本云。家門當見由

語釋　**○天離**　アマザカルで、ヒナに係る枕詞である。眞淵の冠辭考に、『天とともに遠放て見ゆるよしにて、天放るとは冠らせたり、さかるとは、ここより避り離れて遠きをいふ』に歸著する。古義の、『天に離る日の意』といふのはどうかとおもふ。『天ざかる夷つ女の』（神代紀）。『天ざかる夷にはあれど石走る淡海の國のささなみの大津の宮に』（卷一。二九）。『天ざかる夷に五年すまひつつ京の風俗忘らえにけり』（卷五。八八〇）。『あまざかる夷にも月は照れれども妹ぞ遠くは別れ來にける』

（巻十五。三六九八）などがある。空と共に遠く離れる、空の遠き如くに遠いといふ感じの語である。家さかる。里さかる。國さかるなどといふ、『さかる』の用例がある。**○夷之長道従** ヒナノナガヂユと訓む。夷は京に對して、鄙又は田舍を差していふので、この歌を作つたころには、必ずしも西國或は北國と限らずに、一般の邊土を差したものと見える。ここでは筑紫をヒナと云つてゐるのである。古義に、『そもそも比那とは皇都をさかりたる地をなべていふ名にはあらずして、方土につきていひし名なり、その方土に就ていひしとは、畿内近國をさかりたる、西方北方の國を比那といひ、東國をば阿豆麻といひしことにぞありける』と云つてゐるが、この歌を作つたあたりは必ずしもさうではあるまい。巻一の、『あまざかる夷にはあれど』は近江をさして云つてゐるのでも分かる。安房國に朝夷郡といふのがあるが、古義ではこれをも常の例と違ふと辯解してゐる。それから夷の語原だが、眞淵は、『ひなは田居中なり。そのたゐなかの上下を略き、且ゐとひを通はせてひなといへり』（冠辭考）。また、『比那は日之下てふ言なり。何ぞといはば、神代紀に、避奈菟謎といへるは、天よりして下つ國の女をいふなり』（考別記）などと云つてゐる。この語原のことは專門家に聽くべきである。長道で、長き道、遠い道、遠いところといふ具合になる。ここは、遙々榜ぎのぼる海路のことである。久老の槻落葉に、『神代紀に、長道磐神とあるを、古事記には、道之長乳歯とあれば、

ここもながちとよむべけれど、集中假字書には、長手(ナガテ)、奈我底(ナガテ)、など書て一ト所も、ながちと書たる事の見えねば、ここも、卷十五に、奈我道(ナガチ)とあるも、奈我底とよむべきにこそ。かしこけど、藤原の永手と申、御名をもおもへ』と云つてゐる。併し、古事記に『ミチノナガチ』があり、萬葉卷二十にも『道の長道(ながち)』とあるから、此處でもナガヂと訓んでも必ずしも不合理とは謂へないし、此處はナガヂと訓んだ方が一番聲調の上からもいいやうである。特に萬葉の例は、『飫宇(おう)の海の潮干の潟の片念(かたもひ)に思ひや行かむ道の永手を』（卷四。五三六）。『ぬばたまの昨夜(きそ)は還しつ今夜(こよひ)さへ我を還すな道の長手を』（卷四。七八一）。『國遠き道の長手をおぼほしく今日や過ぎなむ言問(ことど)ひもなく』（卷五。八八四）。『常知らぬ道の長手をくれぐれと如何にか行かむ糧米(かりて)は無しに』（卷五。八八八）。『な去(ゆ)きそと還りも來やと顧みに行けども滿たず道の長手を』（卷十二。三一三二）。『君がゆく道の奈我氐(ながて)を繰り疊ね燒き亡ぼさむ天の火もがも』（卷十五。三七二四）などで、ミチノナガヂと續けたのは稀である。卷二十に、『橘の美衣利(みえり)の里に父をおきて道乃長道は行きがてぬかも』（四三四一）があるのみである。これは句調のうへからの自然的實行である。他の例では、チとチと重なつて具合が惡いといふところから來てゐるのかも知れぬ。卷二十のは、ナガヂと訓むとせば、長道ハのハ音で調和をとつてゐるのである。人麿の此歌の場合は、ヒナノナガヂであるから決して不諧調音ではないのである。○從　ユで

ある。これは舊訓ヲで、ヒナノナガチヲと云つてゐたのを、契沖が、『今按、從はゆともよむべし』と云つた。このユはヨリといふ意味で、注意すべき古語の一つである。時代を經るとこの用法を忘れてしまつた。それだけ却つて言語の感覺が粗になつたと謂ふべきである。これは支那文學の方にも當嵌まることとおもふ。**○戀來者** コヒクレバと訓む。戀しくおもひつつ來れば、家路戀しく思ひつつ來ればといふことである。外面は天然を戀ふるやうに見えるが、これは女を戀ふると同源だから、家郷を戀ふといふのは、戀しい女をも含んでゐるのである。併し、かく簡單な使ひざまも特色があるから後說するつもりである。この使ひざまは中世あたりには直ぐには腑におちなかつたと見え、コギクレバとも訓じてゐる。これなどはなかなか面白いことである。**○自明門** アカシノトヨリである。明石(あかし)の門、明石の海門、明石の海峽、明石の海といふことになる。後に筑紫の旅の歌があるから、これもそのあたりの歌であらうか。**○倭島所見** ヤマトシマミユで、これは大和が見えるといふことである。地理上の嚴格な地名でなく、畿內、南海道の方の陸の見えたのを倭島見ゆといつたものと見える。代匠記に、『倭島はたゞ大和の國なり。大和は伊駒山のつゞき南北に亙て見ゆべきにあらねど、そなたを見やるほどになれる心を、歌の習なればかくはよめり』と云つてある結末のところはなかなか味ひのある言葉である。

大意 一首の意は、遠い邊土の筑紫の方から長い海路を來、家郷戀しく思ひつづけて來たのであつたが、明石の海門に來かかると、はや向うに大和が見え出した。なつかしいといふ意を含んでゐる。

鑑賞 此歌は、向うから家郷（大和）へ向つての歸路の歌だとおもふのに、古義ではさうでなく解してゐる。『西國の方へ下るにつきてよめり、と思へるがゆゑに、なほその意にとけり』と云つてゐる。卽ち古義の解は、『歌の意は、夷の長道を、家路戀しく思ひつつ來れば、明石の門の口よりその戀しく思ふ倭の方の遙に見ゆるが、程なくそれも見えずなりなむか、とおもふが、いとど名殘惜き事となり』といふのであつて、藤井高尙の歌のしるべの歸路の說を引いて駁してゐるのである。併しこれは契沖も既に、『此歌は筑紫より上らるる時の歌なるべし』（代匠記）と云ひ、春滿も『此人麿の八首の歌は一時の歌ともみえず、石見へ上下の歌をもまじへて八首の中に入たるなるべし。さみれば前のあかしの水門の歌は、石見へ下向の時の歌、此の明門より倭島みゆとよめる歌は、石見より上京の時の歌と見るべし。その證據は歌詞の中におのづからそなはれり』（童子問）と云つてゐるのだから、それに相違ないのだが、雅澄の如き眞面目な大家もそれに顧慮する機會を得なかつたのであつたらうか。

自分は以前からこの歌を愛誦し、人麿の作中にあつてもこの一聯（連作でないが）の歌を傑作として受けいれてゐたほどである。今誦んで見ても一首の調べが莊嚴で、人間對自然の究竟の響がびんびんと響いてくるやうな歌である。五句の中で主觀的な語は、『戀ひくれば』だけで、あとは言語の響のなかに主觀を籠らせてしまつてゐる。而して天然の描寫は奈何してゐるかといふに、その細部（デタイルス）は既に簡淨化して一讀すればただのつへりとしたもののやうに成つて居るが、その天然細部の微妙な點は、餘響のごとく或は暈のごとくにして、句々の中から滲み放射してゐるのである。おもふに人麿は言語の音樂的要素について極く鋭敏な感覺を持つてゐた歌人ではなかつただらうか。そして人麿の歌から餘響・餘韻の微妙なものを享受しながら、その聲調の大きく丈高きさまは、人麿其物の正直強健な肉體をも思はしめるもので、普通の歌人なら、『ゆ』、『ば』、『より』、『ゆ』あたり、特に第三句の『ば』あたりで弛（たる）むところを斯くまでに緊張せしめてゐるのは、その肉體をも籠めた全力的な作歌態度に歸著せしめねばならぬのである。いづれにしても、峻嚴、莊重、遒潤、雄大、明朗などといふ文字を以て辛うじてこの歌の感を彷彿せしめることが出來るに過ぎない。

それから、この歌の主觀句、『戀ひ來れば』は特殊的であるのは、家郷を戀ふる、その中には人間が含まつてゐると云つても、言葉の上からいへば『倭島を戀ふる』こととなつて特殊になるのであ

る。他の例では、『布留山ゆ直に見わたす京にぞ寐も寢ず戀ふる遠からなくに』(卷九。一七八八)。『吉野川河浪高み瀧のうらを見ずかなりなむ戀しけまくに』(卷九。一七二二)。『荒磯邊に著きて榜がさね杏人の濱を過ぐれば戀しくあるなり』(卷九。一六八九)などの用例は親しい女に關係があるが、直接には山川の自然が戀しいやうに云つてゐるのである。この歌のすぐ前の、『稻日野も行き過ぎがてに思へれば心戀しき可古の島見ゆ』(卷三。二五三)といふ人麿の歌も參考歌になるとおもふ。

次に此歌には『從』と、『自』とを一首中に二つ使つてゐる。ユはヨリの意味があるが、これは大體ヨリの意味を心に持ちながら、直ちにユとして鑑賞する練習をせねばならぬ。ユは、ヨリ、ユリ、ヨ、ユと當時同じ意味に使つてゐるが、語感と音調の關係から、そのいづれかを選んで使つてゐること此の歌が示す如くである。そして、ユは、『田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は零りける』(卷三。三一八)。『春草を馬咋山ゆ越え來なる雁の使は宿過ぐなり』(卷九。一七〇八)。『葦北の野坂の浦ゆ船出して水島に行かむ波立つなゆめ』(卷三。二四六)などの如く運動の語に續くことの多いのは、一音で便利のためとも思ふが、これは時間、空間を比較的多く含めるやうに使つてあるのが多い。『古へゆあり來にければこごしかも巖の神さびたまきはる幾代經にけむ』(卷十七。四〇〇三)。『未通女らが袖振山のみづ垣の久しき時ゆ思ひき吾は』(卷四。五〇一)。これは時間的であるが、

『名ぐはし吉野の山は影面(かげとも)の大御門ゆ雲居にぞ遠くありける』（巻一。五二）などは空間の方である。また、『繩の浦ゆ背向(そがひ)に見ゆる奧つ島榜ぎ回む舟は釣爲すらしも』（巻三。三五七）。『印南都麻辛荷(からに)の島の島のまゆ吾家(わぎへ)を見れば青山の其處とも見えず白雲も千重になり來ぬ』（巻六。九四二）などの用例があるから、人麿の此歌の、『明石の門より倭島見ゆ』も是非ヨリでなければならぬといふことはないのである。つまり、ユ、ヨリの區別は、意味よりも音調のうへの關係に本づいてゐることが分かる。なほ此考はもつと用例を多く集めて補充すべきである。久老の槻落葉別記に、ヨリ、ユ、ヨを論じ、ヨリを省いてヨとなり、轉じてユとなつた。ヨリとは、『此方(こなた)より彼方(かなた)までをいひ、彼所(かしこ)より此所(ここ)までをいひ、それよりこれ、古(いにし)へより今(いま)、今より後までをいふ』のである。然るに、さういふ意味でなしに、『ただ輕く爾(に)といふ助辭(てには)に似たるあり、また遠(を)に通ふもあり』と云つてゐるから、從つてユもヨも同樣と看ていい。私などもそれに氣附いて嘗て記述したことがある。併し、ユはニ或はヲそのものではない。ユはやはりユとしてその時々の色調に就いて細かに觀察すべきである。なほ、古義でも、このユを論じ、『長道從(ナガヂユ)の從(ユ)はいとかろくて、長道をといふ意なること上に云る如し。從(ヨリ)レ彼(カレ)、從(ヨリ)レ此(コ)、此の從(ヨリ)とは異なれば、從(ユ)の言にさのみ泥むべきにあらず』云々と云つてゐる。古來、この『ユ』をば非常に輕く見てゐる學者がやはり居るのである。

【巻三・二五六】

飼飯の海の庭よくあらし苅ごもの亂れいづ見ゆ海人の釣船

飼飯海乃　庭好有之　苅薦乃　亂出所見　海人釣船

語釋　**○飼飯海乃**　ケヒノウミノと訓む。飼飯海は、越前に氣比があるからそれだらうといふ說もあり、然し羇旅八首は京と西國への旅次であるから、越前ではなく攝津、和泉、或は淡路だらうといふ說があつたが、現在の說は、淡路三原郡松帆村の大字笥飯野の海といふことになり、卷十二の、『飼飯の浦に寄する白浪しくしくに妹が容儀は念ほゆるかも』（三二〇〇）も、その邊と考へられて居る。併し、從來種々の說があつたから書いて置く。荷田信名の童蒙抄に、『飼飯は越前なるに、此歌の次に入る事五文字心得がたし。一本歌に、武庫とよめるはここの歌の次に相叶へり。攝津國泉川の浦の内に飼飯といふ處あれば、若し其處を略してけひとよめる歟』といつて居る。又、岸本由豆流の攷證に、『越前國敦賀郡に、笥飯といふ地名見えて、書紀持統紀、延喜神名式、雜式などに

出たれど、右七首によめる地名、次もて見るに、ここに越前國地名あるべきいはれなし。されど、考には、一本の武庫之海とあるを取、久老は淡路に飼飯野といふ地ありと、吾友度會正柯いへり。さてはこの飼飯は越前にはあらぬにや云々といへり。予思ふに、名所同名ある事は常の事なれば、攝津播磨など同名あるにもあるべし。又試にいへる事あり。いかにとなれば、和泉國日根郡に吹飯浦あり。こは名高き所にて吹飯と飼飯ととなへもちかく、本集十二に飼飯之浦と吹飯乃濱との歌を並べ載たるを見れば、飼飯、吹飯同所にはあらざるか。この上の歌よりの海路の次も歸路に和泉國へかかるまじきにもあらねば、路の次もたよりありておぼゆる也。されど、こころみにいふのみ』云々といつてゐる。かうして見れば現今は調査も便利になり萬葉地理學も進歩したのである。○**庭好有之** ニハヨクアラシと訓む。庭は、『ニハは地上でも海上でも平なる面をいふ』（新解）。『こは今も海邊などの人はいふ言にて、海上浪たたず、おだやかに平らかなるをいへり。本集此卷に、安倍而榜出牟爾波母之頭氣師云々。十一に庭淨奥方榜出海舟乃云々などあるも同じ』（攷證）等によつて大體を理解することが出來る。アラシはアルラシの發音便利上の省略で、その他の例はこの歌の異傳の『武庫のうみの庭よく安良之』（卷十五。三六〇九）は最もよい例であり、なほ、『わが旅は久しく安良思此の吾が著る妹が衣の垢づく見れば』（卷十五。三六六七）などがある。童蒙抄ではニハヨカル

ラシと訓んだ。**○苅薦乃**　カリゴモノと訓む。ミダルにかかる枕詞で、眞菰を刈つていまだ束ねぬうちの亂れてゐる様から來てゐる。『かりごものみだれておもふ』（卷四。六九七）。『かりごものみだれて妹に』（卷十二。三一七六）。『かりごもの思ひみだれて』（卷十一。二七六五）など參考になる。なほ、童蒙抄では、カルカヤノと訓み、『かるかやはみだれとつづく後々の歌にも證例多ければ、かやとよむ方然るべし。その上薦はすゞ、かやとよむが古訓也』と說明してゐる。**○亂出所見**　ミダレイヅミユと訓む。舊訓ミダレテイデミユであり、その他、ミダレヅルミユ（考）。ミダレイデミユ（槻落葉）。ミダレイヅルミユ（略解）。ミダレイヅミユ（古義）。ミダレテイヅミユ（攷證）等の諸訓があるが、古義の訓に從つた。古義では、『出字、類聚抄に而と作るはわろし』と注意してゐる。なほ攷證では訓の振假名は、ミダレイヅミユ（古今書院刊本）だが、その下の注に、『かくの如くよむべし。そはこの歌を十五に重出して、美太禮氏出見由云々とあればなり』とことわつてあるから、攷證ではミダレテイヅミユとテを入れるつもりではなかつただらうか。この邊のところ、校本萬葉の記載稍不備である。**○海人釣船**　アマノツリブネと訓む。和名抄に、豆利布禰とあり、釣をする小漁舟のことである。『風をいたみ奥つ白浪高からし海人の釣舟濱に歸りぬ』（卷三。二九四）。『磯ごとに海人の釣舟泊てにけり我が舟泊てむ磯の知らなく』（卷十七。三八九二）。『濱べより我がうち行かば海邊より迎へ

も來ぬか海人の釣舟』（卷十八。四〇四四）などの例がある。

大意 一首の意は、向うの飼飯の海の方を見ると澤山の魚釣舟が出るのが見える。海上が和いでゐるらしい。といふのである。ラシは推量であるけれども、現在、海上の和いでゐるさまが大體わかつてゐて云ふのである。『なるほど海上も和ぎだな』といふぐらゐに解していいのである。

鑑賞 この歌もまた相當にいい歌で、何處か調子の鋭いところ大きいところがあり、單純化しながら急所を突いて印象を鮮明にしてゐる。卽ち、『かりごもの』には元は意味があつたのだが、枕詞となれば樣子が違つて來てゐる。そこで第三句にこの枕詞を置いて意味内容の單純化を行つてゐるのである。一首の客觀的中味はそれゆゑ、『亂れいづ見ゆ。あまの釣舟』にあるのだけれど、『あまの釣舟』などいふことは古今集以下でも云つてゐるのだから、この一首の主眼は、やはり第四句の、『みだれいづ見ゆ』にあつて非常にいい句である。第四句で現實の景を『みだれ出づ見ゆ』と切れる句でいひ、結句を名詞止めにしたから、第二句では、『には好くあらし』といふやうな音調の句を置いてゐるが、これもなかなか旨い。人麿のものは、どちらかといへば一氣に流動せしめる所謂のべつ調が得意なのであるが、必ずしもさうでなく、この一首の如くいろいろ聲調に變化があり得るのである。私等が今難儀して實行しようと努めてゐることを、人麿はいかにも自然に樂々と爲上

げてゐるやうにおもへる。

このミダレといふ動詞の音調は特色があるが、多くは戀のために思ひ亂れるやうに用ゐてゐる。これも亦自然で、試に用例を示すなら、『かりごもの亂れて思ふ』（卷四。六九七）。『刈りのみ苅りて亂りなむとや』（卷十一。二八三七）。『朝霧の亂るる心言にいでて』（卷十七。四〇〇八）。『山菅の亂れ戀のみせしめつつ』（卷十一。二四七四）。『過ぎにし戀い亂れこむかも』（卷十二。二九二七）。『亂るる時に戀ひずあらめやも』（卷十二。三〇八一）。『繼ぎなむものを亂れ始めめや』（卷十四。三三六〇）。『みだれて妹に戀ひぬ日はなし』（卷十二。三一七六）。『苅ごもの亂れて思ふ言つげやらむ』（卷十五。三六四〇）などである。併し次の數首は、天然現象の場合に使つて居り、中には稍象徴的のものも交つてゐる。

小竹の葉はみ山もさやに亂れども吾は妹おもふ別れきぬれば　（卷二。一三三）
引き放つ箭のしげけく大雪の亂れて來たれ從服はず立ち向ひしも　（卷二。一九九）
矢釣山木立も見えず降りみだる雪に驪うつ朝樂しも　（卷三。二六二）
あしひきの山にも野にも御獵人さつ矢たばさみみだりたり見ゆ　（卷六。九二七）
名兒の海の朝けのなごり今日もかも磯の浦回に亂れてあらむ　（卷七。一一五五）
今日もかも沖つ玉藻は白浪の八重折のうへに亂れてあらむ　（卷七。一一六八）

青柳の糸の細しさ春風に亂れぬい間に見せむ子もがも （卷十。一八五一）

阿保山の櫻の花は今日もかも散り亂るらむ見る人なしに （卷十。一八六七）

然とあらぬ五百代小田を苅り亂り田廬に居れば京師し思ほゆ （卷八。一五九二）

古義で、この歌を評し、『ただ目に見たるけしきを、そのまゝに云るのみなるに、今も打誦るに、そのさまおのづから目ノ前にうかびつつ、見るやうにおぼえて、且つ家路を戀しく思ひて、倭の方を見やりたる意言外にあふれたり』といつてゐる。この歌は、船の上から飼飯の海上を見たものか、陸から海上を見たものか、西へ向ふ歌か、歸路の歌か、さういふことは歌の上からは不明である。特に飼飯海を越前だとすると、陸にゐて詠んだやうにも思へる。併し、大體この飼飯を淡路と看、八首をば大體に於て海路の歌とせば、やはり船上から飼飯の海を見た趣に解していい歌である。稍日野の歌を船上からの歌とせば、この歌も船上からの吟としてもいいやうに思へる。それから、別に主觀句の徴すべきものが無いから往きの歌とも歸路の歌とも分からない。ただ淡路の飼飯に近づいた時の歌として味つていい。つまり、近づいた時か離れた時かといふやうな穿鑿は、大體は近づいた時といふ感じがするが、その客觀的條件をこの歌に強要してはならぬのである。

○

武庫の海の庭よくあらし漁する海人の釣船浪の上ゆ見ゆ

武庫乃海　爾波好有之　伊射里爲流　海部乃釣船　浪上從所見

○前の歌の後に一本云として引かれた歌である。第二句、舊本『舶爾波有之』であるが、神田本に『爾時好有之』とあるのを參照して、ニハヨクアラシと訓んだが、古來諸訓があつた。フネニハナラシ（舊訓）。トマリニハナラシ（代匠記）。フナニハナラシ（玉の小琴）。フナニハヨラシ（檜嬬手）。フネニハアラシ（古義）等である。併し古義では、『此句十五に載たるに爾波余久安良之とあるは理たしかなるに似たり』と注意してゐる。もつとも、代匠記で既に、『今此舶の字用なきに似たれば、古本泊にてトマリニハナラシなりけるを誤て舶に作りたるにや。仍第十五新羅使の誦せる古歌を考ふるに、爾波余久安良之とありて、注に人麿歌曰とて初のけひの海とよめる歌此第二句を殘して引きたれば彼を證とすべし。泊に作るとも非なり。』といつてゐるから必ずしもトマリニハナラシと訓

むのでもない。契沖はニハヨクアラシと訓みたいらしいのである。○浪上從所見　ナミノウヘユミユと訓む。童蒙抄では、ナミノヘニミユと訓み、『浪のうへに見ゆるなれば海上荒く波高き故、あまのつり舟も浪の上に漂はせると也』といつて居り、略解では、ナミノヘユミユと訓んでゐる。なほこのユの解釋につき、これは既に引用したことであるが、久老は、『浪乃上從(ナミノウヘユ)のゆは、輕く用ひて、爾(ニ)の助辭(テニハ)に似たり』といひ、雅澄も、『浪の上に見ゆるなり。從(ユ)は爾(ニ)といはむが如し』といつてゐる。併しこれは飽くまで、ユはユとして味ひたい。攷證には、『從(ユ)はよりの意にて、一首の意は、武庫の海の日よりよくして、けふは船を出すによき日ならんかし。いさりをする海人の釣船どもの、浪の上より見ゆと也』と云つて居る。ここは、『浪の上より見ゆ』と截然といふから誤解が來るが、ユの例を澤山に集めてそれから感得する方がいい。○武庫乃海　攝津の武庫である。飼飯といふ處が餘り明瞭でなかつたので、眞淵などはこの武庫說を主張して居る。眞淵云。『今本ここに飼飯(ケヒ)海とあるはよしも無き誤なり。卷十に此歌を誦たるに武庫能宇美能と有こそよろづかなへれば依ぬ。さてけふは都に近づけるに、見る每によろこばしく、海の面さへなぎて武庫のあたりに到たるここちしらる』(考)と云つてゐる。然るに契沖は卷十五の歌から一說を立ててゐる。『又今按、珠藻苅敏馬乎過と云歌より此方、稻日野毛去過勝爾と云歌の注を除て、一本云とある四首の注は、後人第十五

を見て意を得ず此に注せるか。其故は新羅の使或は句を替へ、叉飼飯海などは時に叶はねば武庫の海と改め、第一のあみの浦と云ふも其定に安胡乃宇良爾と誦しける故に、彼卷に柿本朝臣人麿歌曰とて一々に注せり。彼時に叶へて假に誦したるを以て、撰者何ぞ此に注せむや。君子これを思へ』(圏點茂吉)。契沖の説は興味ある一つの見識である。

さて、この一首、『いさりする海人(あま)の釣舟浪のうへゆ見ゆ』のところは、棄てがたい味ひがあり、調の延びた大きい點、それから、ナミノウヘユといふ云ひ方は、作歌上大に參考となるのであるが、『みだれいづ見ゆあまの釣舟』と比較して見るに、やはり到底及ばないのではあるまいか、卽ち、飼飯海の歌は原作で、武庫乃海の歌は契沖の言のごとくに、『時に叶へて假に誦した』もので、稍民謠風に傳誦され、變化して行つたものではあるまいかとおもふ。かういふ點から見ても、人麿の當時に於ける歌人的位置、民衆の間に於ける人麿の評判といつたものを想像することが出來るわけである。

參考 ○『アマサカルヒナノ長道(ナカチ)ヲコヒクレハアカシノトヨリヤマトシマミユ』(袖中抄)。『天さかるひなの長路をこきくれば明石のとより大和しまみゆ』(詞林采葉抄)。○『ケヒノウミノニハヨクアラシカリコモノミタレテミユルアマノツリフネ』(和歌童蒙抄。顯昭古今註)。○(二四九) ロレンツエン氏獨譯。(1, 2) Weil die Wellen am Kap von Mitsu furchtbar sind, (3,

4) kann das Schiff aus verborgenem Hafen sich nicht nähern (5) dem Kap von Nujima. ピアソン氏英譯。(2) The waves being awful (1) at the cape of Mitsu, (4) the boat (3) hidden in the gulf (4) cannot approach (5) the cape of Nuźima. ○(三五〇) ロレンツェン氏獨譯。(2) Über Minume, (1) wo man das Seegras mäht, (5) nähert sich das Schiff (4) dem Kap von Nujima, (3) auf dessen Feldern das Sommergras wächst. ピアソン氏英譯。(2) Passing Minume (1) where fine weed is reaped, (5) the boat has approached (4) the cape of Nuzima (3) minding of drooping summer herbs. ○(三五一) ロレンツェン氏獨譯。(1, 2) Am Kap von Nujima auf Ahadji (4) wird das von meiner Geliebten geknüpfte Band (3) vom Strandwind (5) aufgeweht. ピアソン氏英譯。(5) In the strong wind of the sea-shore (2) at the cape of Nuzima (1) in Avadi (5) the sash (4) bound by my wife (5) is blown over. ○(三五二) ロレンツェン氏獨譯。(4) Man wird mich wohl für einen Fischer halten, (3) der Suzuki-Fische angelt, (2) am Ufer von Fudjie, (5) mich, der ich auf Reisen bin. ピアソン氏英譯。(4) Would they consider me as a fisherman (3) angling perch (2) in the bay of Vudźiye (1) minding of coarse hempen cloth? (5) I who am travelling! ○(三五三) ロレンツェン氏獨譯。(2, 3) Während ich glaubte mich schwer trennen zu können (1) von Inabinu, (5) zeigt sich die Insel Kako, (4) nach der mein Herz verlangt. ピアソン氏英譯。(3) Whereas I thought (2) it would be difficult to pass away from (1) Inabi-nu, (5) already the island of Kako is visible, (4) for which my heart longs so much. ○(三五四) ロレンツェン氏獨譯。(3) Zur Zeit, wo wir hineinfahren werden (2) in die grosse (Meeres) enge von Akashi, (5) sehe ich wohl die Umgebung des Hauses, (4) von dem wir fortrudernd Abschied genommen haben werden, nicht (mehr). ピアソン氏英譯。(3) The day I shall enter (2) the big strait of Akasi, (1) minding of flaring lights, (4) Ah, I shall have separated myself, rowing (from my dear wife) (5) and will

see no more the neighbourhood of my house. ○ (二五五) ロレンツェン氏獨譯。(3) Ich komme sehnsuchtsvoll (2) den langen Weg von Lande her, (1) das himmelweit von der Hauptstadt entfernt ist, (4, 5) da zeigt sich von der Enge von Akashi ab die (heimatliche) Insel Yamato. ピアソン氏英譯。(3) As I come, longing (for my family) (2) on the long way in the country (1) as far away as Heaven (from the capital), (4) from the strait of Akaśi (5) the land of Yamato is visible. ○ (二五六) ロレンツェン氏獨譯 (1, 2) Die See des Meeres von Kehi scheint ruhig zu sein, (4) man sieht sie herauskommen, (3) durcheinander gewirrt wie geschnittenes Gras, (5) die Angelboote der Fischer. ピアソン氏英譯。(2) It seems that the surface of the water (1) of the Sea of Kevi (2) is calm and fine. (4) Disorderly (3) like confusedly fallen masses of reaped reeds (4) one can see them coming out (in the open sea) (5) the angling boats of the fishermen.

○

【巻三・二六二】

矢釣山木立も見えず降り亂る雪に驪うつ朝樂しも

矢釣山　木立不見　落亂　雪驪　朝樂毛

題意 『柿本朝臣人麻呂獻新田部皇子歌一首并短歌』の反歌である。私はこれを大寶元年のと

ころに配列して見た。

語釋 ○**矢釣山** ヤツリヤマである。古點イコマヤマであつたのを仙覺がヤツリヤマと訓んだ。『是ヤツリ山ナルベシ。第二卷ニモ、ヤツリ河トヨメリ。山河替レリトイヘドモ、其所是ヲナシキヲヤ』と云つた。大和國高市郡に八釣村がある。又顯宗天皇紀に、召二公卿百寮於近飛鳥八釣宮一卽天皇位とある。代匠記に、『古事記には八瓜(ヤツリ)とかけり。或者云。八釣宮は山田村と大原の中路、大原より四町ばかり北に當りて俗にやどり村と云此なりといへり。然れば其邊の山なるべし』といひ、又槻落葉には、『皇子の御殿をそこに造らししとみえたり』とある。○**木立不見** コダチモミエズと訓む。木立、森林も見えなくなるまでの意である。○**落亂** フリミダルと訓む。これも古來諸訓があつた。チリミダレ(古點)。チリマガフ(仙覺)。フリマガフ(代匠記)。チリミダル(代匠記別訓)。チリマガフ。フリミダレ(童蒙抄)。フリミダル(略解)。フリミダル(古義)。フリミダル(檜嬬手)等である。『落亂はフリマガフともチリミダルともよむべし』(代匠記)。『散りまがふとも降りみだれともよめり。何れにても同じ意なれば、好む所に從ふべし』(童蒙抄)。『フリマガフ。落をふるとよむは、卷二に落雪(フルユキ)とあるより集中いと多し。亂をまがふとよむも例多し。卷五に烏梅(ウメ)の波奈知利麻我比多流(ハナチリマガヒタル)と見えたり』(槻落葉)。『落は集中ふるともちるともよめれど、雨雪にはふるといひ花にはちるとい

ふ事常なればここはふるとよむべし。亂をまがふとよめるは義訓なり』(攷證)等の注がある。〇雪驪　佐佐木博士の新訓に從つて、ユキニコマウツと訓んだ。これも古來難訓の一つとして諸說がある。古點ユキノウサギマであつたのを仙覺がユキモハダラニマキテクラクモと訓んだ。なほ仙覺は、異本にユキハダラナルアシタタノシモと訓んだのを擧げてゐる。契沖は、初稿本に、『ユキモハタラノアシタタノシモとよむもたがふまじ』と云ひ、精撰本にユキニクロコママキテクラクモと訓んだ。『今按上句古點はイコマヤマコダチモミエズチリミダレなりけるを今の如く改められたるは仙覺の功なり。ハタラはまだらなり。下句は新古の點共に意得がたし。先づ古點に驪をウサギマとよめるは思ふに驪の字誤れる歟。次に新點にハタラとよまれたるは如何なる字書によられたるか。和名云、毛詩注云、驪(音離、漢語抄云、驪馬、黑毛馬也、)純黑馬也。又說文にも馬深黑色と注す、はたらはまだらなれば、馬斑毛など云注あらばこそハタラとは和せめ、集中に雪をハタレ、ハタラなどよめる事多ければ推量にて點せられたるにや。今按ユキニクロコママキテクラクモと和すべきか。水碧鳥逾白と云ふが如く、雪の白妙なるにあひて黑駒のいとど黑く見えむに騎てまゐで來むは眞ありぬべし』(代匠記)。春滿は、『驪は說文にも馬深黑色とあれば、くろうまとか、こまとかはよむべし。はだれといふは雪の一部なれば、雪の一字をはだれとよみ、驪の一字をくろこまとよむべけれども、猶異訓有べき歟』(童子

問)といひ、信名は、ハダレノコマノ、マツデクラクモと書し、クロコマと訓むべきをいひ、『鸝は異本驪に作るを是とすべし。驪は說文云、馬深黑色と注せり。禮、檀弓云、夏后氏尙レ黑、大事歛用レ昏、戎事乘レ驪云云、字書にも馬純黑色と注せり。然れば是はくろこまと詠むべきなり。人丸の歌に、いそげ黑駒などとも詠めれば、人丸黑馬を好みて乘られたると見えたり。』(童蒙抄)と云つた。眞淵は、ユキニキホヒテと訓み驪は躧の誤とした。『今本驪とあるは黑馬の事なればかなはず。一本鸝と有もよしなし。仍て躧ならんか。こはから文に(漢書)躧レ履起迎。注履不レ著ニレ跟曳之而行也言ハ甚遽(イソグ)也といへれば、雪のふるにいそぎきほひて參たる意をしらせて、躧の字を書しならん歟』(考)。久老もこれに從つた。『楫取魚彥が本に躧に作れるよし、信濃人永井幸直(サチナホ)いへり。こは師の考にや。また古本にしか爲(カケ)る本あるにや』(槻落葉)。守部もそれに從ひ、井上博士の新考もさうである。千蔭は驪は駁の誤としハダラと訓み、師說を引いてゐる。雅澄はこれから暗指を得て、ユキニサワギテと訓んだ。『故案に、驪は驟字の誤なるべし。驪と驟とは草書の體かりそめに見別がたく、甚まぎらはしければ、誤りたるものなるべし。驟ノ字ハ佐和久(サワク)と訓て、集中に甚多く用ひたり。されば雪驟はユキニサワキテと訓べし』(古義)。秋成は、ユキハ、ハダラノ、アシタタノシモと訓み、『さて矢釣山は木立も見えず降かゝるは、はだらに面白しと云也』(楢の杣)と云ひ、由豆流はユキモハダレニ、ユ

キモハダラニと還元し、眞淵、久老等の說を否定し、『例のわたくし事なれば用ひがたく、よくよく考ふれば、猶印本に驪とあるぞ正しかりける。いかにとなれば、字鏡集に、驪カラスマダラノウマとよみて、はだれとまだらと一つ言なれば、驪ははだれの借字なる事明らけし』(攷證)と云つた。なほ近藤芳樹は、『雪にあゆめる』(注疏)と訓んで居る。〇**朝樂毛**　アシタタヌシモと訓む。これも諸說があつた。アシタタノシモ(古點)。マキテクラクモ(仙覺)。アシタタノシモ(代匠記初)。マキテタノシモ(代匠記初書入)。マキテクラクモ(代匠記精)。マウテクラクモ(童蒙抄)。マキリクラクモ(考)。マキリタヌシモ(槻落葉)。アシタタヌシモ(略解)。マキラクヨシモ(古義)。マキリクラクモ(檜嬬手)。

大意　一首の意は、矢釣山に、茂つてゐる樹立も見えないほどに、さかんに雪が降つてゐる、その朝に、黑毛の馬に乘つて驅步することのいかに樂しいことであらうか。といふほどの歌である。

鑑賞　この短歌は、人麿が、新田部皇子に獻つた長歌の反歌で、長歌は、『やすみしし吾大王高耀る日の皇子敷きいます大殿の上にひさかたの天傳ひ來る雪じもの往きかよひつついや常世まで』といふ短いものだが、なかなか佳い長歌である。この程度の長さのものになれば、人麿も言語を愛惜して使ふので、その力量があらはれて來る。『天傳ひくる雪じもの』といつて、直ぐ、『往きかよひつついや常世まで』といつた具合など、非常に象徵的で、平凡な歌人に決して追從を許さな

いものである。

長歌では主に雪のことをいひ、それも非常に單純な中味にしたが、短歌の方では、もつと客觀的な内容を盛つてゐる。矢釣山を點出し、林の見えなくなるほどの大雪をいひ、驪を點出せしめてゐる。これは、長歌の方で、『やすみしし吾大王高耀る』といふやうに儀容をただしたから、短歌の方では、自由に客觀を盛り得たのである。そしてこの一首は不思議にいい歌である。私は平常餘りこの歌に氣がつかなかつたが、『もののふの八十氏河』の歌の近くにあるので、數年前からはじめて注意してゐたのであつた。然し第四句の訓に諸説があり、面倒なやうな氣がして放任してゐたところ、評釋しつつ味つてみると、また新しい感味が出てくるやうにおもへるのである。一首が陰鬱でなく強く大きく行つてゐるのは、人麿一流のものだが、それにしても、『矢釣山木立も見えず降りみだる雪』といふ寫實は、單純で然かも急所を突いてをり、實に旨いものではあるまいか。どうしても名人の力量ではあるまいか。ミダルといふのは、前に、『みだれいづ見ゆあまの釣舟』のところで少しく言及したが、心ゆくばかりに使つてゐる。參考歌として、『河の瀨の激つを見れば玉をかも散りみだしたる川の常かも』(卷九。一六八五)。『もみぢ葉の散りみだれたる神名火のこの山べから』(卷十三。三三〇三)などがある。

雪驪を『打』を補つて、『雪に駒うつ』と訓んだが、この歌の直ぐ次ぎに垂麻呂の歌、『馬莫疾、打莫行、日並べて見ても我が行く志賀にあらなくに』といふのがあり、また家持の歌に、『千鳥鳴、佐保乃河門之、清瀬乎、馬打和多思、何時將通』(巻四。七一五)。『馬並底伊射宇知由可奈思夫多爾能伎欲吉伊蘇末爾與須流奈彌見爾』(巻十七。三九五四)といふのがある。その千鳥鳴の歌の轉載が、『千鳥なく佐保の川瀬の清き瀬を駒うちわたし何時か通はむ』(新勅撰)である。なほコマウチワタスの用例は、『旅人もみなもろともに朝たちて駒うちわたすやすの川霧』(玉葉)。『このほどは駒うちわたす山川も木の葉の底に聲むせぶなり』(新續古今)などである。

佐佐木博士の、『驪ウツ』といふ訓は、誠に好訓と思つてそれに從ひ、勝手に理由をも附したのであるが、みだれ降る雪の中に黒馬を活動せしめた狀景は心ゆくばかりである。

ついで、生田耕一氏の萬葉集難語難訓攷を見るに、「雪驪朝樂毛の古訓と古文の復活」の一考證があり、その結論として、

甲、類聚古集の本文と朱訓とを配合せしめて得たる

矢釣山(又は矣駒山)木立も見えず落り舞ふ雪に驟く朝樂しも

乙、神田本の本文と細井本の主訓とを配耦せしめて得たる

矢釣山（又は矢駒山）木立も見えず落り亂れ雪驪なる朝樂しも

の二つの可能の最大なるを說き、生田氏は甲訓に從ふとしてゐる。そして、高田忠周氏の、『按スルニ驟ハ會ナリ。多キ意ナリ。此字疑クハ驟馬ノ疾走ナリ、故ニ晋語多而驟立云々』（漢字詳解）を參考としてゐる。

なほ、吉田增藏氏は、『ユキニウマナメマヰリクラクモ』と訓み、驪に兩馬の義があるので、『馬並め』とし、『人麻呂が雪の日に其の友達と馬打竝めて親王の矢釣山の山居に參じたる感興を詠みいでたるものなるべし』（文學創刊號、昭和八年四月）と解してゐる。この訓も、なかなか善く、人麿調といふことが出來る。そこで、此處は、ウマナメ・アシタタヌシモでもよし。また、ウマナム・アシタタヌシモでもいいのではあるまいか。

武田博士は、『フリミダリ、雪ノサワゲル、アシタタヌシモ』と訓み、サワゲルは雪の盛に降る形容としてゐる。また、この矢釣山は古寫本（細井本）には駒の字になつて居り、伊駒山だらうとせばその方が新田部王に關係が密接のやうである云々。（普及版校本萬葉集三、月報參照）

參考 ○（二六二）ロレンツエン氏獨譯。(4, 5) Wie schön ist es lärmend dahinzugehen im Schnee, (3) der wirr herabfällt, (1, 2) dass man die Bäume des Yatsuri-Berges nicht sehen kann. ピアソン氏英譯。(2) Even the up-standing

trees (1) of Yatsuri-yama (2) cannot be seen, (so densely) (4) the snow (3) falls in confusion; (5) How good it is, to walk in this snow-storm (4) singing and being noisy!

○

【巻三・二六四】

もののふの八十うぢ河の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも

物乃部能　八十氏河乃　阿白木爾　不知代經浪乃　去邊白不母

『柿本朝臣人麿從二近江國一上來時至二宇治河邊一作歌一首』といふ題がある。即ち、人麿が近江から大和へ上つて來たとき、宇治河の邊に至つて詠じた歌である。網代木は魚を捕るための網代の木の杭のことで、そこに白波が一時音たててたゆたへる趣である。

この歌は、『もののふの八十氏河の』は、『物部の八十氏』のウヂと宇治河のウヂと同音だから兩方に言掛けて序歌の形式を取つたものである。それだから、この序歌の技巧をばどうしても邪魔にする鑑賞者にとつてはこの歌はさう高く評價されないものかも知れない。併しさういふ意味合の穿

鑿をば奥の方にひそめて、試みにこの一首を一首全體として幾度も幾度も吟誦するなら、窒滯なき流動的な聲調の中に、不思議にも具象的な要素が具はつて居り、宇治河の網代木にさかまく白波が眼前に彷彿として現出して來るのである。この種類の具象性といふことは實行的には大切なことで、決して容易な業ではない。例へば藤原定家あたりのものと此歌とを比較すればその差別がよく分かるので、定家の幽玄は態と意識してさうした點もあるとおもふが、いかにも朦朧として印象明瞭でない。それから人麿の此歌は一氣に歌つた流動的な聲調であるにも拘はらず、奥に沈痛のひびきを籠らせて、輕浮に辷つて行かない。その遒錬渾淪の氣を思ふべきである。世のある一部の歌評家は人麿のこの力量の發露の張りきつて居るところにのみ感じ入つて、この沈潜の奥ふかきを感じないのではあるまいか。『いさよふ浪のゆくへ知らずも』の結句の如き、實に自然の實相に觀入して、眞實無量の句である。契沖は、『人の世の生住異滅の四相の中に暫く住するよと思ふに、程なく異相に遷され行くを、水の網代木にふれて暫しやすらふと見ゆるが、やがて流過ぐるに感じてよまれたり。第七に同じ人、みなわの如し世の人我は。又みなわの如く世をば我見るとよめるに合せて見るべし。論語云、子在二川上一曰、逝者如レ斯不レ舍(トドメ)二晝夜一。去邊(ユクヘ)は六帖にも袖中抄にもよるべとあれど、今の點に從ふべし』(代匠記)と解してゐる。つまり大陸思想に通ずるものがあると看做してゐるので

ある。人麿時代には既に大陸思想が知識階級の中に浸潤してゐたことは別のところにも記載したごとくであるが、人麿はこの歌を作るに際して佛敎思想を明かに意識して使つたと看做さない方がいい。實際この一首に流れてゐる哀韻は、佛敎の無常觀のこゝろを聯想せしめるけれども、眞に自然に觀入するものは、既成佛敎思想の豫備概念などは無くとも、おのづからその無常相に到り著くべきものであつて見れば、人麿の歌の結句もやはり眞劍な自然觀入の當然の結果だと解釋する方がいい。もう一度語を換へていへば、この歌の作歌動機は、外來の佛敎的思想或は老莊的觀相にあるのではなく、目前の宇治河の白浪にあるのだといふことをよくよく吟味せねばならぬのである。

文選所收陸機の歎逝賦中、『悲夫。川閱ㇾ水以成ㇾ川。水滔滔而日度』といふのがあるが、その『水滔滔として日に度る』の句、それから、懷風藻所收藤原萬里の五言仲秋釋奠。『運冷時窮ㇾ蔡。吾衰久歎ㇾ周。悲哉圖不ㇾ出。逝矣水難ㇾ留。玉俎風蘋薦。金罍月桂浮。天縱神化遠。萬代仰ニ芳猷一』中の『逝いて水留め難し』の句などは人麿の、『いさよふ波のゆくへ知らずも』に似て居り、これは支那傳來の句法だから人麿のもさうだらうぐらゐに類推されがちだが、此處のところをさう安易に處理してしまふのは間違だといふのである。

賀茂眞淵は、『けふはことごとしきも明日（あす）しらぬ人の世にとれるならん。かの忽に荒らされし近江

の宮所を見、悲て歸る時なれば、ことにはかなき世の中をおもふべし。卷八に卷向之、山邊響而往水之、三名沫如、世人吾等者ともよみつ。さてゆたかにして雄々數、直くしてあはれふかきはこの人の歌なり』(考)と云つてゐる。眞淵は、近江の舊都を見て來た後の歌といふ豫想があるのでかういふ批評をしてゐるのであり、稍豫想し過ぎたともおもふけれども、評中の、『ゆたかにして雄々しく』といひ、『直くして哀ふかし』といふのは、流石にいい評で、私等が骨折つていふ批評も遂に眞淵のこの簡淨な評言の範圍内にあるもののみに過ぎない。眞淵の評の意味は、豐潤な太い朗かな調べのものは動ともすれば浮滑に流れ易いが、人麿のものは豐潤であつて且つ切實峻嚴だといふ意味であらう。著實で眞率一點張のものは動もすれば堅くなるところを、人麿のものは眞率で且つ無限の哀韻を持つてゐるといふ意味であらう。

正岡子規がこの歌を評して、『此歌萬葉時代に流行せる一氣呵成の調にて少しも野卑なる處は無く、字句もしまり居り候へども、全體の上より見れば上三句は贅物に屬し候』(歌よみに與ふる書)と云つた。明治和歌革新時代に於ける子規の考からゆけば當然かうなるのである。なほ子規は或る人々の質問に對して增補して云つた。『もののふの歌たけ高く詠まれたる由は前にもいへり。吾等は人丸集中に此たけ高き歌あるを喜ぶなり。萬葉集中に此たけ高き歌あるを喜ぶなり。日本文學の中に

此たけ高き歌あるを喜ぶなり。然れども此歌は趣向の最簡單なる者なり。簡單に傾きたる和歌の中にても殊に簡單なる者なり。其たけ高きも此簡單なる處にある者なれど、さて之を手本として歌を作らんには、さらでも陳腐なる歌のいよいよ陳腐ならん事を恐るるなり。此歌の如き調に倣ひたるは後世にありては戀歌に最も多し』（全集第六卷、「人々に答ふ」）とも云つてゐるけれども、要するに、『上三句は贅物に屬し候』といふのが子規の本音である。つまりさういふ技巧は一種の巧みに過ぎず、無駄だからもつと客觀的の表現法を取れといふ意見である。當時子規は、『萬葉の趣向は眞淵の歌の如く變化少き者にあらざるなり』（全集第六卷、「萬葉集卷十六」）とも云つた如く、なるべく一首の趣向の變化を求め、一首の客觀内容を豐富にしようとする、新派和歌の考を以て人麿の歌をも律しようとしたのであつた。

併し、子規のこの考は晩年には動搖したごとくであるが、晩年の子規は、蕪村の、『五月雨や大河を前に家二軒』の方が、芭蕉の、『さみだれを集めてはやし最上川』よりも進歩的だと評したほどであるから、或は依然として悟入せずにしまつたかも知れぬが、この人麿の技法は、決して動かない驚くべき力量の發現である。即ち、上二句をば序歌の形式にし、實際の物象を寫さないために却つて下の句の具象的表現が效果的になつたと解釋することも出來るのである。また、人麿の時代に既に、上二句の如き表現法では物寫象の再現をばさう要求せずに下の句にその主點を置く傾向があつ

たことが分かる。戀歌の序歌の形式なども元は同一の要求に本づいたものに相違ない。つまり、『もののふの八十氏』などと云つても、其處からはそんなに視覺寫象なり、社會概念なりを要求せなかつたのではなからうか。そして、モノノフノヤソといつてゐるうちに、一團とした象徴的な或るものを意識したぐらゐではなかつただらうか。（これは眼で讀まずに口誦を以て傳へる事にも關係がある。）それはさもあれ、現代の吾等の鑑賞には、さういふ意味のことは奥に潜めて鑑賞することが出來る。

この歌は人麿のどういふ時期のものかといふに、賀茂眞淵は、『こは大和國藤原の都へ上るとて、宇治を經るなり。さて此人近江大津の宮の時、そこに生れたる成べし。よりて大津の宮のふるされしを悲しめる歌も多きならん。且ここに初めて上るにはあらで、藤原の都に仕るほど歸寧の暇か告暇などにて、下りて今のぼるならんとみゆ』（新採百首解）。『近江の宮は古鄕と成ぬ。さて後いつばかり見つるにや。歌の次でを思へば、朱鳥二三年のころにや』（考）。土屋文明氏は萬葉集年表に於て、『年次未詳なれども文武四年に關係ある歌に介在せり。恐らくその前後なるべし』として配列したが、昭和八年アララギ安居會では、此歌をもつと早期のものとし、持統三四年頃に溯つて考へた。持統三四年頃遷都せんとして處々地相を見しめたことがある。難波地方などを見しめた。近江を見しめた記事は無いが、それと想像して、人麿は公の旅行をしたのかも知れぬと云つてゐる。關谷眞

可爾氏はこれをもつと時期をはやくし、持統元年頃とし、『恰も天武天皇崩御の後、持統天皇の御代藤原へ遷都前とあらたまりし時にあるべく直に召されて官は東宮舍人として草壁皇子尊に仕へ奉りしなるべし』と考へてゐる。私は大體萬葉集年表に從ひ、大寶元年に配列し、人麿の想像年齡三十九歲ごろの作と考へた。

なほ、この歌を新經濟史觀から觀察した說もあつたが、それは網代を作るための勞働に觸れたぐらゐにとどまり歌全體としての說ではなかつた。『此有名な歌も一般にはただ敍景詩として取扱はれてゐるが、私達の側から觀ると、勞働分配をいくらでも示すところの社會學的徵證の一つとなつて來る。河川の堰には灌漑用と漁撈用と二つあつたが、シガラミといふのが前者に當り、アジロギといふのが後者に當つてゐるやうである』（西村眞次博士）といふ如きその一例である。

『もののふの八十氏』について、眞淵は、『物乃部（モノノフ）は武（タケ）き人をいひて、宇治（ウヂ）とつづけたるは、稜威（イツ）の意。卽（チ）ちはや人（ビト）、宇治（ウヂ）の渡（ワタリ）と日本紀にも集にもよめるに同じ』と云つたのに對し、久老は、もののふといふのは必ずしも猛人（タケキヒト）ではなく、『朝廷に仕奉人等、その職役の連（ムレ）ありて、八十の氏々多ければ、八十氏河（ヤソウヂカハ）ともつづけ、また氏（ウヂ）とのみもつづけたり』（槻落葉別記）と云つた。近時、折口博士は、外から災を與へる靈魂がモノで、そこで、『物部は、外から災する恐しい力を持つた靈魂を、追ひや

る部曲と解するのが本義であらう』。この部に屬するものが澤山あつたから、八十物部といふと解釋してゐる。（古代研究、民族學篇）。

人麿の歌調の高朗・雄大・莊重なのは、時開二置醴之遊一。當二此之際一。震翰垂レ文。賢臣獻レ頌。雕章麗筆云々といふやうな作歌態度に出るからであると解釋する傾向もあつた。『天雲の雷の上に廬せるかも』（卷三。二三五）などばかりを凝視してゐると或はさういふ解釋の傾向も可能であらうが、この『もののふの』などの歌になると解釋がむづかしくなつて來る。人麿は獨詠しても如是の歌調をなすのだからである。これは羇旅八首中の、『ともしびの明石大門に入らむ日や榜ぎわかれなむ家のあたり見ず』（卷三。二五四）の歌を以てもその證據とすることが出來る。併し、人麿は是等の歌をも獨詠はせずに、同行の旅人に示しつつ、その旅人等の氣持をも含めた、普遍性乃至社會性を暗指するものだから、おのづからかういふ莊重な歌調となるのだといふ解釋も出來ぬことはなく、この考を押ひろめれば、出雲娘子、吉備津采女、狹岑島死人等の挽歌も、やはり、代作或は注文によつて作歌したやうにもなり、想像が極めて放恣になり得るのだけれども、熟考すればこの考には無理があつて、解釋のつかぬことになつてくるので、私は、これを人麿本來の歌調と看做し、人麿の作歌態度の眞率な本質に歸著せしめて解釋して居るのである。

荷田春滿云。『只僻案には論語の聖語によらず、標題と合せて、此歌を僻べき。是人麿の本意ならん歟。されば此歌は晝夜を不レ舍の義にはあらず。人丸近江國にも寄寓せられたると見えて、從近江上來とあれば、大和國へ上り來れるなるべし。その路なれば宇治河邊にて不知代經浪を見て、身上に比して去邊しらずもとよめる實意なるべし。冠句に物乃部能とよめるも身上に比する歟。故に人倫の冠句を置て、身上を網代木にいさよふ浪のごとく我身此すゑの落著をもしらず、旅寓の題を詠じ給へるとみる也。此外の意は有べからず。强て義を求めばいか樣にもいふべけれども、題によりて歌は心得べき事なれば、旅行の意趣を全とすべし。前後旅行の歌なれば、只宇治河の邊にての詠ならば子在川上曰の題にも通じ見るべし。しからざれば旅情の題と見る也』云々（童子問）。

荷田信名云。『歌の意は、近江より大和へ上り來れる折しも、宇治川を經て通れるに、川中の阿代(あじろ)に波のいざよふ景色を見て、その當然の風景をよめる也。下の意には人丸任國に從ひては、彼方此方と轉變する、身の上のうちつきどころも不レ定事など感慨して詠めるにてもあらんか。孔子の逝川の歎意を含みて詠めるなどいふ說もあれど、それは推量の義にて、當然の標題にも不レ見事也。歌は只輕く當然の實事を詠ぜられたる義と見るべき事也』云々（童蒙抄）。

荒木田久老云。『いさよふ波の、ゆく方(へ)しらずなるに、人の世にふるほどの、數(ハカ)なきをおもひよせてよめるなるべし』云々（槻落葉）。

上田秋成云。『網代木に堰るゝも漏てゆくには、さりげなく流るゝを面白く見て、さて行邊しらずもとは感ずる也』（楢の杣）。『孔子立二于川上一、悠哉々々、逝者如レ斯晝夜不レ舍と云しに似たり。詩句を國語に訓めば詞の長くなるを、是は本の句十七字の文裝を去(きり)、末(すゑ)十四字に意相同(あひおな)じきは御國の靈語の妙用、あやしくもたふとかりけり』（金砂三）。『いさよふ水の行へしらずもと云に思ひは盡たり。故に上句十七言はたゞ文裝をつらねて意を害せじとす。比興の體を宗とすれば、詞章幽艷にして高調し、意志をく

はしく云解くには、かへりて志情を淺からしむ。後の世の煩ひは是也。歌は言を永くすると云には、詠吟の調を專ら先務とすべし』（金砂六）。

橘守部云。『彼の近江宮より世の盛衰變易を嘆息せられたるなり。すがた高く意味深くすぐれたる歌なるべし。かく見れば此物乃部能八十氏は少し下へかかりて、心しらひあるにやあらん。誠に其心以て解かば、一首の意は、こたび大津ノ宮の荒れたる跡を見、百官も其半ば忽ちに滅び失せたるを見れば、物部の八十氏と別れたる氏々の人とても、宇治川の網代の杙にしばしいざよひ滯るばかりの世の中にして、つひの行くへは知りがたきわざなるよ、といふなり。もし初句は枕詞の意ならば、除きて心得なん』云々（檜嬬手）。

武田祐吉氏云。『この歌、人麻呂が、川中の波を見て、あとからあとから流れ來て、流れ去つて行く方を知らないのを面白がつて、童心に詠んだ作か、又は何等かの寓意のある作かといふことが問題になる。寓意と云へば、まづは無常を喩へたものであらう。人麻呂集所出の歌に、「卷向の山邊とよみて行く水の水沫の如し、世の人吾等は」（卷七、一二六九）の如きもあつて、人麻呂の作品にも、大陸傳來の無常思想が入つてゐないとも云はれない。』云々（新解）。

鴻巢盛廣氏云。『去邊白不母（ユクヘシラズモ）といふ句には、敍景以外に感傷的な氣分があり、又近江國から上つて來た時とすると、近江の舊都が荒廢した狀況を目のあたりに見て、世の變轉の激しいのに驚いた彼は、ここにいさよふ浪に感慨を托して、詠出したとも考へられるのである。予は後說を採らうとおもふ。網代木にいさよふ浪を見て感慨に沈んだのは、いかにも多感の詩人らしい』云々（全釋）。

澤瀉久孝氏云。『宇治河の作を單なる敍景の作だと解する人があるが、私は到底その說に從ふ事は出來ない。上代の人は現實的であつたといふ。現實に卽すればこそ過ぎにしものへの愛着が深まり、無常を觀ずる心のいよいよ切なるものがあるのである』

(人麻呂歌集講話)。

土田杏村氏云。『人麿の歌として有名のものであるが、この歌の底には逝く水止まらずといふことの詩想が潜むに相違ない』(上代の歌謠)。

林古溪氏云。『これらは佛敎思想のやうにいつてをるが、さうではない。實は支那思想である。人命朝露の如しとか、霜の消ゆるが如しとか、波の行方知れぬが如しなどは、どうも日本的ではない。已にいつた「薤上の朝露何ぞかはき易き」である。これから色色の語句が出て來てをる。佛敎思想の影響とは思はれぬ。老莊の思想が變態的にあらはれたのであらう。中略 但、萬葉詩人は概して口まねにすぎないかとも思はれる。卽ち痛烈と深刻とが無いからである。考へると、感激性の無い詩を作ることは、明治大正昭和に限つたことでなく、萬葉時代に、已にその大家に於て、始まつてゐる』(萬葉集外來文學考)。

長谷川如是閑氏云。『淺薄な、概念的な、然し幽玄らしく見える、かの有名な、武士の八十氏河のあじろ木にただよふ波の行衞知らずも、式の態度と、環境も體驗もなしに、自由自在にいかなる歌をも詠み得る』云々(改造)。『例の、もののふの八十氏河云々の歌のやうに、當時の外來思想の技巧的表現に過ぎないものもあるが』云々(短歌研究)。

その他の批評文獻等は、總論篇、人麿文獻集を參照せられよ。

參考 ○此歌は古今和歌六帖・柿本集・新古今・夫木和歌抄・和歌童蒙抄・袖中抄・奥義抄・古來風躰抄・和歌色葉抄・歌林良材集・詞林采葉抄その他にも載つてゐる。『モノノフノヤソウチカハノアシロキニタヽヨフナミノユクヘシラスモ』(和歌童蒙抄)。『モノヽフノヤソウチカハノアシロキニイサヨフナミノヨルヘシラスモ』(古今和歌六帖・袖中抄)。『ものゝふのやそうちかはのあしろ木にいさよふなみのゆくゑしらすも(古來風躰抄・奥義抄・夫木和歌抄)。○ロレンツエン氏獨譯。(2,3,4) Die Wellen, die vor dem Holz (des Rahmens) der Fischfangkörbe des Udji-Flusses sich stauen, (5) wissen nicht, wohin sie

gehen sollen. ピアソン氏英譯。(4) The waves (2) of the Udi-gava (1) minding of all the families of warriors (4) are obstructed (3) by the poles attached to the fishing basket (5) and know not even where to go!

○

【巻三・二六六】

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ

淡海乃海　夕浪千鳥　汝鳴者　情毛思努爾　古所念

題意 『柿本朝臣人麻呂歌一首』といふ題がある。前に近江の舊都を歌つた歌があるが、あれと同時ではあるまい。兎に角此處に一首の作が拾ひあげられてゐるのである。眞淵は人麿の生地を近江と考へてゐるから、『ここに生れしゆゑにことに侍りけん』と云つてゐる。私は大寶元年ごろの作（人麿の想像年齢三十九歳）として配列して見た。

語釋 ○**淡海乃海** アフミノウミと訓む。舊訓アフミノウミと六音に訓んでゐた。それを眞淵はアフミノミと五音に訓んで現在に及んでゐる。『淡海の海を神功紀にも、阿布彌能彌といひて古

の例なり』(新採百首解)といひ、槻落葉・略解・古義・攷證等も皆眞淵に從ひ、現代でもさう訓んでゐる學者が多い。併し私の好みで舊訓に從つて、アフミノウミと訓んだ。『鯨魚取、淡海乃海乎』(卷二。一五三)また、『我妹子爾、相海之海之』(卷十三。三二三七)は、アフミノウミヲ、アフミノウミノと訓まなければ調を成さない。卽ち當時既にアフミノウミと云つてゐたことがわかる。それから、『淡海、奥島山』(卷十一。二四三九)。『近江海、奥滂船』(卷十一。二四四〇)。『淡海海、奥白浪』(卷十一。二四三五)。『淡海海、沈白玉』(卷十一。二四四五)。『淡海之海、奥津島山』(卷十一。二七二八)。『近江海、八十之湊爾』(卷三。二七三)。『淡海之海、浪恐登』(卷七。一三九〇)。『近江之海、湖者八十』(卷七。一一六九)。『近江之海、泊八十有』(卷十三。三二三九)。『淡海之海、邊多波人知』(卷十二。三〇二七)などの例では、時にはアフミノミと訓み、時にはアフミノウミと訓んでいいのではあるまいか。『ウ』音の省略の如きは、發聲學の原理から行けば、直ぐ解釋がつくべく、人麿のこの一首の場合の如きは、『ウ』音を發音して、ゆつくり讀むべき性質のものとおもふが奈何。**○夕浪千鳥**　ユフナミチドリと訓む。夕の浪に群れ鳴いてゐる千鳥のことを省略して複合名詞としたもので、人麿の造語である。この語について先進の解釋及批評を拔いて置く。『夕浪千鳥とは夕浪につれて立さわぐ千鳥なり』(代匠記)。『夕浪のたちて、千鳥のなく當然をよめる也。夕浪の立ちてその姿のものさびしき折

ふし、また千鳥の泣く聲の相まじはりて、一方ならぬ景色の義を、夕なみ千鳥とは詠める也』(童蒙抄)。『うるはしきことばなり』(考)。『ゆふ波にさわぐ千鳥を、やがて夕浪千鳥とよまれたるは、人まろならではよみ得じものを』(槻落葉)。『夕浪の上に來鳴千鳥なり。そをやがて夕浪千鳥とは眞にいはれたるかな』(古義)。『夕べの浪に立さわぐ千鳥を、やがて一つの語として、夕浪千鳥とはいへる也。さて千鳥は、古事記上卷歌に、和何許々呂宇良須能登理敍、伊麻許曾婆知杼理爾阿良米云々。書紀神代紀御歌に、播磨都智耐理譽云々。本集此卷に、河原之乳鳥汝鳴者云々。七に佐保河爾鳴成智鳥云々などありて、集中猶いと多し。こは千鳥とて一つの鳥の名にはあらで、小さき鳥のいくつともなく群とぶをいへるにて、春來鳴くいろいろの鳥をさして百千鳥といへるが如し。さるを一つの鳥の名の如くするはいと後の事也。これを宣長が新撰字鏡、和名抄などにのせずとて疑はれしはいかが。一つの鳥の名にあらざれば、もとより載ざるいはれなるをや』(攷證)等がある。千鳥のことを由豆流がかう説明してゐるが、これは種類はあつても現在動物學者の謂ふチドリと解していい。そこで、濱つ千鳥。夕浪千鳥の語が活きてくるのである。記紀萬葉のチドリは今でもさう解していい。モモチドリとチドリを一しよにしてはわるいだらう。近時、萬葉集と漢文學との交渉を調べる學者が輩出したが、土田杏村氏は、この『夕浪千鳥』も、黒人の『棚無小舟』も、漢字の修

辭から思ひついた、漢語風の造語だと解してゐる。**○汝鳴者** ナガナケバと訓む。汝が鳴けばといつて、千鳥に對つて呼びかける句法で、親しい切實な感情を含んでゐる。他の用例を示せば、『飫宇の海の河原の千鳥汝が鳴けば吾が佐保河の念ほゆらくに』（卷三。三七一）。『あしひきの山ほととぎす汝が鳴けば家なる妹し常に思ほゆ』（卷八。一四六九）。『ほととぎす間しまし置け汝が鳴けば吾が思ふこころ甚も術なし』（卷十五。三七八五）などがある。**○情毛思努爾** ココロモシヌニと訓む。舊訓ココロモシノニとあつたのを春滿がシヌニと訓んだ。『僻案の訓は、こころもしぬにむかししのばるとよむ也』（童子問）。『此しぬにといふ事、此集中また古今集にても不レ濟事也。諸抄の說は物悲しき事、又はしげきことに云ひなせり。然れども語釋にも不レ合、歌の意にも不レ合說どもも也。このしぬにと云ふは、しどろにと云ふ義也。物の亂れ合ひて、しどろもどろなどいふ義にて、此歌の意夕波の立音に千鳥の鳴く聲相交はれば、心も一方ならず靜かに、あなたこなたに亂るゝばかりに、過にし方の事を慕ひ思ふとの義也。古今集の歌に、菅の葉しのぎといふも、しぬにといふ義にて、それも葉のみだれてしどろになりたることをいふたる義也。情毛思努爾は心もしげくといふ義といへる說あれど、しげくといふ義いかんとも不レ合事也。心のしげきといふ事は、いかゞしたる事ならんや。しどろといふ義なれば、いづれの歌にてもことごとく濟也』（童蒙抄）。眞淵云。『心もしぬにとは、心

の愁へしなゆるをいふ。後人、しのとしじとを同じことゝ思へるは誤れり。小竹をしぬといひ、すすきのしのなどの類はしなえるなり。』（考）。『心もしなへさまにてふことなり。集中に草木の靡きしなへるによせて、心もしぬにとも、しのぶともたゝいひ、人の姿をも立しなふなどよめる、人の情にては常は平らに、いかれる時はたち、愁ふる時はなよなよとしなへたるとなり。然るを物の繁きことを、しゞといふを、草木のうへにいふ時まぎるれば、しのをも、繁き事と、おもへる人多き、古語をよくみぬゆゑなり』（新採百首解）。久老云。『しぬは、師説に、しなえうらぶれ、などいへる、しなえに同じきよしいはれしかど、卷十に朝霧に之怒々にぬれて喚子鳥三ふねの山ゆ鳴渡る見ゆ、とある志怒々は、今俗言にしとしとぬるる、しみじみぬるるといふと同意に聞ゆれば、しぬゝは則しみゝとひとつ言にて、こゝも心もしみゝと心得べき也』（槻落葉）。雅澄云。『情も靡やぎてといふ意なり。（中略）心も靡やぎて、眞にしか思ふよしにて、心も思努に思ふとはいふなり』（古義）。大體は語原は眞淵説に從つていいだらう。情萎えて、沁々と心愁へて、といふ意味である。**○古所念** イニシヘオモホユと訓む。舊訓同じ。類聚古集ムカシオモホユ。信名の童蒙抄ムカシシノバル等の訓があつた。『磐代の野中に立てる結松こころも解けずいにしへ思ほゆ』（卷二。一四四）。『たまくしげ見諸戸山を行きしかば面白くしていにしへ念ほゆ』（卷七。一二四〇）。『澁溪の埼の荒磯に寄する波いや

しくしくにいにしへ思ほゆ』（卷十七。三九八六）などの用例がある。一體、『おもほゆ』といふ語は据わりのいいものだから結句に用ゐられた。

大意 一首の意は、淡海の海に、その海の夕ぐれの浪に、千鳥が群れ啼いてゐる。千鳥らよ、汝等が斯く鳴くを聞けば、眞から心が萎れて、昔の榮華の様が思はれてならない。といふのである。

鑑賞 この歌はやはり人麿一流の、流動性を持つた聲調であるが、『もののふの八十氏河』の歌のごとくに一氣連續のものでなく、もつと曲折し、休止し、轉回しつつ、複雜にして遒潤沈厚な調べをなしてゐるのがこの一首の特徴である。そしてこの音調は心の動きさながらに産出されたものだといふことに注意せねばならぬのである。その關係が非常に自然で、いささかの遊戲分子がなく、飽くまで人麿の作歌態度を示してゐる歌である。特に、この歌は、『もののふの八十氏河の』の歌と共に、獨咏歌であつて、恐らく意圖して第三者に示さんがために作つたのではあるまい。そこで、しつとりとした無限の哀愁の調べが沁みいでて來るのではないかと思はれるのである。これは、『雷のうへにいほりせるかも』の歌などと比較して味ふと大に有益だとおもふのである。

初句で、『淡海の海』と云つて、助詞を省いてゐる。これは純音樂的な見地から行けば別に何でもないが、短歌聲調の論から行けば、この名詞だけにしたといふことは、一時そこで瞬間息を休める

のだから、調が重くなる。即ち人麿の歌に多い枕詞で起す手法の初句と違ふのである。そして、第二句で、『夕浪千鳥』といふ非常に單純化し壓搾した、名詞ばかりの造語を持つて來てゐる。そしてやはり第二句で瞬時息を切るのである。これは名詞で助詞が一つも無いからである。助詞を補充するだけの瞬間の休止があるわけである。この第二句の複合名詞の關係があるから、初句をアフミノウミと六音に訓まねばならぬのである。その方が歌の調べが諧調を得て大きくなる。

初句、第二句で息を休め、そこに感情を籠らせながら、第三句で、『汝が啼けば』と云つた。これは千鳥に向つて呼びかけるので、ただの客觀的敍法とは違ふのである。特に、『汝』といふのは萬葉では常に親しい切實な感情をあらはす時に用ゐる語であるから、人麿の感情が極めて切實であることを示して居り、それが態とらしくなく自然に流露した。そして第四句に續くのであるが、それも輕く滑かに續かずに、重く吃りながら續いて行くのである。そして第四句の『心もしぬに』といふ語は、一首中の重大な句で、そこに主觀句の中心を置き、それを第四句で一轉するやうにして（人麿の歌にこれが多い。かへり見すれば月かたぶきぬ等參看）そして結句で据ゑてゐるのである。この結句は、萬葉では稍陳腐の感がある程だが、安定の感ある据わりのいいものである。

短歌は連續的聲調を保つべきだといふのは、私の短歌聲調論結論の一つであるが、それでもその

間に、瞬間的の休止を常に論じてゐること如是である。そしてこの一首の句が五つとも、盡く重く切實で、一つ一つの貫祿を持つてゐるやうにおもへる。新古今あたりの甘滑に失した聲調の歌とこの歌の聲調とを較べるなら、その差別が顯著で、この歌の聲調のいかに渾厚痛切であるかといふことが分かる。『野守は見ずや君が袖ふる』（卷一。二〇）の一首も、句が盡く重い役目を持つてゐたが、この歌と共に味ふべきものとおもふ。それから音の要素についての分析であるが、これなども實にいいものを持つてゐるのである。アフミノウミユフナミチドリでも、同音を柔かく疊んで來て、『チドリ』とつづけたあたりの具合は、どうしても音に對して非常に鋭い感覺を持つてゐるものでなければ不叶底のもののやうに思へる。ナガナケバの『バ』。ココロモシヌニの『ニ』の助詞の具合など、いろいろと剖析して鑑賞していい歌である。要するにこの一首は、人麿のものとしても注意すべきものであり、萬葉集の歌としても注意せねばならぬ一首である。

『夕浪千鳥』といふごとき壓搾した複合名詞は、獨逸語などならば極めて容易であるが日本語ではさう容易ではない。それにも係らず人麿はかういふ造語をしてゐるのである。なほ、かういふ名詞的表現の注意すべきものは、青垣山とか青香具山とか豐旗雲とか岩垣紅葉とか根白高萱とか足柄小舟、棚無小舟。眞熊野小舟とか、藻臥束鮒とかいろいろある。その中にあつても人麿の造語は注

意すべきものである。或人は、この造語も、また一首全體が支那文學の影響だと說くのである。或はさうかも知れぬが、それならば猶人麿をば尊敬せねばならぬとおもふのである。なぜかと云ふに、かくの如くにして日本語が豐富になつて行つたからである。次に、『心もしぬに』の用語例を少しく書記さうとおもふ。

ゆふ月夜こころもしぬに白露の置くこの庭に蟋蟀鳴くも　（卷八。一五五二）

海原の沖つ繩苔うち靡き心もしぬに思ほゆるかも　（卷十一。二七七九）

（上略）かりごもの心もしぬに人知れずもとなぞ戀ふる氣の緒にして　（卷十三。三二五五）

あらたまの年かへるまで相見ねば心もしぬに思ほゆるかも　（卷十七。三九七九）

（上略）ほととぎす啼きしとよめばうち靡く心もしぬにそこをしもうら戀しみと（下略）　（卷十七。三九九三）

（上略）雲居なす心もしぬに立つ霧のおもひすぐさず行く水の音も淸けく（下略）　（卷十七。四〇〇三）

夜くだちに寢ざめて居れば河瀨とめ心もしぬに鳴く千鳥かも　（卷十九。四一四六）

梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしぬに君をしぞおもふ　（卷二十。四五〇〇）

このなかには、『心もしぬに鳴く千鳥』といふ具合に用ゐたのもあつて參考になる。つまり作者自身の、『心もしぬに』と、客觀界の生物無生物にもそれが移入して、『心もしぬに鳴く千鳥』といふやうになり得るのである。次に、重複を厭はず、『汝が鳴けば』といふ句の入つた歌を抜けば、

飫宇の海の河原の千鳥汝が鳴けば吾が佐保河の念ほゆらくに　（巻三。三七一）

あしひきの山ほととぎす汝が鳴けば家なる妹し常に思ほゆ　（巻八。一四六九）

ほととぎす間しまし置け汝が鳴けば吾が思ふこころ甚も術なし　（巻十五。三七八五）

かういふ用例をも念頭に置きつつ、人麿の歌の、『汝が鳴けば』を味ふと、妙味の程度もまた分かつて來るやうに思へる。それから、『ささなみの志賀の辛埼』（巻一。三〇）や、『ささなみの志賀の大曲』（巻一。三一）とこの歌とを比較すると、巻一の歌の方は、巻三の歌よりも鋭い聲調が無いだらうか。私は好みから云へば、巻一の方を好むけれども、力量の點からいへば巻三の此歌も決して劣るものでなく、豐かに重厚に沈潜せしめる點では此方が却つて優つてゐるぐらゐだから、共に大切にして鑑賞すべきものだとおもふ。

上田秋成は、『心も忍びにとは今の朝庭をはゞかりたる也。調高く意旨は眞情に此朝臣の妙處擬ひて學ぶべき風體也』（楢の杣）と評した。佐佐木信綱博士評云。『一首を打誦して見ると、一句悠容な

調を以て起して、二句名詞のみを連ねた簡勁な句を承け、さて轉じて汝がなけばと呼びかけ、末二句殊に結句の切迫なる調子に、感情の切なる趣が十分に表はれてゐるところに、まことに無限の妙味がある。もとより人麿その人に、かくの如き技巧の考があつたのではない。自然の情調がさながらに現はれたもので、ここに萬葉の歌の價値があり、また人麿の大きいところがある。なほ「夕波千鳥」の句法は、草深百合、青香具山の類で、萬葉集の修辭の一の長所を示すものである』（增訂萬葉集選釋）。

參考 ○古來風躰抄に、『アフミノウミタナミ千鳥ナカナケハ心モシノニムカシ思ホユ』。和歌童蒙抄に、『アフミノウミユフナミチトリシハナケハコ、ロモシノニイニシヘオモホユ』。袖中抄に、『アフミノウミユフナミチトリナカナケハコ、ロモ思努（シス）ニイニシヘオモホユ』を選出してゐる。○ロレンツエン氏獨譯。(2) Chidori-Vögel auf den Abendwellen (1) des Meeres von Afumi! (3) wenn ihr singt (5) erinnere ich mich vergangener Zeiten, (4) dass das Herz mir bricht. ○ピアソン氏英譯。(2) Tsídori on the evening-waves (1) of the lake of Avumi (3) as you sing, (5) I think of ancient times (4) with a desolate heart. ○フロレンツ氏獨譯。Wenn ihr, Chidori | Des Abends auf den Wellen | Des Sees von Ômi schreit, | Weckt ihr im trüben Herzen | Erinn'rung alter Zeiten. ○ボノウ氏佛譯。Au large du lac d'Ômi, | Sur les vagues du soir, pluvier, | Quand tu cries, | Dans mon coeur comme flétri, | Du temps jadis il me souvient.

【巻三・三〇三】

名ぐはしき印南の海の沖つ浪千重に隠りぬやまと島根は

名細寸　稲見乃海之　奥津浪　千重爾隠奴　山跡島根者

○

題意　これは、『柿本朝臣人麻呂下筑紫國時海路作歌二首』の中の第一首目である。筑紫は、筑前筑後を合せた筑紫で、後世九州全體を筑紫といつたが、當時はその邊を代表として筑紫と云つたものである。海路は瀬戸内海であらう。時代を假に大寶二年のところに配列した。上田秋成は此二首をも、人麿が石見へ行つた時の歌だらうと想像してゐる（金砂）こと既に記した如くである。

語釋　**○名細寸**　ナグハシキと訓む。昔はナニタカキなどと訓んだ本もあつた。クハシは、古事記に、細、微など、書紀に妙の字、萬葉に細、麗、妙、吉などと書いてある。細かに至らぬ所のない意で、花ぐはし、香ぐはし、うらぐはし、くはし妹、くはし女などのクハシはこれと同義である。ナグハシは名細しで、名高い、有名といふ意味になるのである。『名ぐはし吉野の山は影面の

大御門ゆ雲居にぞ遠くありける』（卷一。五二）。『名ぐはし狹岑の島の荒磯面に廬りして見れば』（卷二。二二〇）などの用例がある。併しもうこの邊になれば、意味よりも音調で續けた點が多いのであらう。久老の槻落葉に父の說として書いた、嘗む細しといふのは感心しない說である。〇**稻見乃海之**　印南ノウミノで、播磨國印南郡の海である。大和から筑紫へ下つたときに播磨のあたりを通過したところである。〇**奧津浪**　オキツナミと訓む。沖邊に立つてゐる浪で、この第三句で一寸息を休むのである。〇**千重爾隱奴**　チヘニカクリヌと訓む。奧つ浪が千重に立つて居るそのなかに隱れた意である。舊訓カクレヌとあつたのを、久老がカクリヌと訓んだ。『かくりぬとよみては、沖つ波のかくるゝ事と聞ゆれば、かくしぬとよむべきにやとおもへど、さてはいやし。千重に立へだつ沖つ波に、倭島根は隱りぬといふ意なれば、かくりぬとよむべき也。卷五に、許奴禮我久利底とあり』（槻落葉）とある。井上博士の新考に、カクシヌと訓み、『沖つ浪が千重に大和島根をかくすこととして隱奴をカクシヌとよむべし』と云つてゐるのは、第三句の息の休むところに留意せずに、散文的の文法に泥んだのではなからうか。武田博士は新解で、『沖邊に立つ浪、その浪を呼びかけて、感歎の意を寓してゐる』と云つてゐるのは、第三句で一寸休むのを認容してゐる說でいい。ただ、『呼びかける』といふのは少し强過ぎるとおもふ。〇**山跡島根者**　ヤマトシマネハと訓む。大和の方の、遠

く島のごとくに見えるのをいふのである。根は山嶺をいふといふが、この根は木の根などから來た語感の接尾語で、ここは大和島といふことである。やはり人麿の歌に、『天ざかる夷の長道ゆ戀ひ來れば明石の門より大和島見ゆ』（卷三。二五五）とあるのを參考とすべきである。『海神の手に卷かしたる珠襷かけて偲びつ大和島根を』（卷三。三六六）。『海原の沖邊に燭し漁る火は明かして燭せ大和島見む』（卷十五。三六四八）など參考になる。

大意 一首の意は、佳い名の、有名な、印南の海を漕いでくると、沖の方に白波がしきりに立つてゐる。そしてその白波の千重に立つてゐるそのなかに、大和の家郷の山々がもう見えなくなつてしまつた。といふほどの意であらう。千重の波が大和島根を隱したといふのではなく、文法的にも、第三句『沖つ浪』で一寸息を切つて、その沖つ浪の千重に立つてゐるなかに大和島根が隱れたといふことになる。カクルはこの場合は良行四段活用の自動詞である。

鑑賞 初句は意味よりも音調に重きを置いてゐるが全然意味のないことはない。名ぐはしといふ語から來る感じは、親しい愛のこもつたものである。それから、第二句、第三句と連續して行つて、第三句で一寸息を切つた。これは謂ゆる三句切とは違ふのだが、一寸息が切れるからおのづからこの句に感慨が籠るのである。萬葉にこの手法が可なりある。そして第四句から新たに起る趣の

ものである。『かへり見すれば月かたぶきぬ』の歌などもつまりそれである。第三句で一寸息をついて、第四句で、『千重にかくりぬ』と止めた、この第四句、特に、『千重に』が上下の兩方にかかつてなかなか重い役目を果して居り、結句は意味の上からいへば倒句になつてゐるのである。『千重にかくりぬ』といふ句は、意味からいつても音調からいつても、何しろ非常にいい。人麿のものは、どちらかといへば客觀的の中味が勘いといふので、ただ腕にまかせて調子で咏んでしまふやうにのみ解し勝であるが、一首の中にあつて、かういふ句を決して逸してはゐないのである。カクリヌのヌは完了の意だが、やはり感情を含んでゐる。結句の『大和島根は』の『は』も、單純な第一格ではなく、やはり感情を含んだものである。旅の歌で、ただ平氣で咏んでゐるやうに見えても、莊重のひびきの底に何か哀愁の心を暗指してゐて、好もしい歌である。そしてその主因は第四句の、『千重にかくりぬ』にあるだらう。それを剖析すれば、『沖つ浪千重に立てり。その浪の千重立つなかに』といふ具合のを、韻文的に含蓄をこめてかく表現してゐるその手腕を注意すべきである。亡友古泉千樫が、この一首を評して、『一句一句言語が透徹して力がある。青波が幾重にも立ち重なつて我が大和は遠く見えなくなつたと云ふ。遙けき旅路の感のよく現はれた歌である。』が自分はこの歌を誦する毎に一種の力強さを感じる。共に旅にありながら作者の强大なる呼吸が面に觸るるので、

かういふ人と一緒ならどんな旅でも平氣であるといふやうな感じがするのである。三句、沖つ浪と切つて、直ちに、千重にかくりぬと續けたところ、異常なる感情の振動が脈々として讀者の血管に波打つて來る』（アララギ萬葉集短歌輪講）と云つてゐる。

○

【巻三・三〇四】

大君（おほきみ）の遠（とほ）の御門（みかど）とあり通（がよ）ふ島門（しまと）を見（み）れば神代（かみよ）しおもほゆ

大王之　遠乃朝庭跡　蟻通　島門乎見者　神代之所念

題意　前の人麿の作二首中の第二首目の歌である。

語釋　**○大王之**　オホキミノと訓む。天皇をさし奉る。舊訓スメロオノ、スメラギノ、スメロギノ等。代匠記で、官本云亦云オホキミノと注し、發句オホキミノとよむべし。と云つたのからこの定訓になつた如くである。**○遠乃朝庭跡**　トホノミカドトと訓む。舊訓トヲツミカドト等ともある。これは、京（みやこ）から見て遠（とほ）い天皇の御門（ごもん）といふ意味で、朝庭と書いてあるが借字で、本來の御門（みかど）と

いふ意味に使つたものである。攷證で、『遠は、都より遠きよし、朝庭とは、もと御門の意にて、天皇の大御門をいふ』云々といふのに當る。古事記などに、四面門（ヨモノミカド）。四面門祭（ヨモノミカドノマツリ）。御門巫（ミカドノミカムノコ）。御門之神（ミカドノカミ）などの用例があり、古語拾遺にも、守衞殿門（トノミカドヲマモラセ）の例があり、祝詞にも、『御門の御巫の稱辭竟へたてまつる。皇神等の白さく、櫛磐間門命、豐磐間門命と、御名は白して、稱辭竟へ奉らば、四方の御門に、ゆつ磐村の如塞りまして、朝は御門ひらき奉り、夕は御門閉て奉りて、』云々とある御門に當る。そして此は、さういふ御門といふ氣持からすべて云つてゐるのである。トホノミカドの萬葉の用例は、『大君の遠のみかどとしらぬひ筑紫の國に泣く子なす慕ひ來まして』（卷五。七九四）。『食國の遠のみかどに汝らし斯くまかりなば平けく吾は遊ばむ』（卷六。九七三）。『大君の遠のみかどと思へれど日長くしあれば戀ひにけるかも』（卷十五。三六六八）。『すめろぎの遠のみかどと韓國にわたるわが背は』（卷十五。三六八八）。『大君の遠のみかどぞみ雪ふる越と名に負へる天ざかる鄙にしあれば』（卷十七。四〇一一）。『大君の遠のみかどと任きたまふ官のまにまみ雪ふる越に下り來』（卷十八。四一一三）。『すめろぎの遠のみかどとしらぬひ筑紫の國は賊守る押への城ぞと』（卷二十。四三三一）などがある。このトホノミカドの解は、代匠記あたりで、『太宰帥などのみならず、およそ國司の府中に在て君命を行ふを云べし』と云つたあたりに源を發

し、『遠の朝庭とかけり、朝庭は内裏なり、しかれ共、遠國といへ共此秋津島のうちは、皆わが君のしきます國にして朝庭の心なり』（管見）。『御食國をば惣てみかどといへり』（考）。『遠の朝廷とある、太宰府にの意なるべし』（古義）。『筑紫太宰府は天皇の遠き朝廷ぞとて』（攷證）などと解し、皆太宰府のことだと解したのが多い。私等も萬葉集を輪講した時それに據つて文獻を記したことがあつた。その時故古泉千樫は、古義の説を引用しつつ、『然し自分はどうも島門を直ちに大君の遠の御門と解したいやうに思ふ。此歌を讀むと島がみな生命あるもののやうに思はれる。島々は皆大君の遠の御門として侍座して居るのである』（アララギ萬葉集短歌輪講）といふ新説を出した。これは大正四年二月であつた。私等もそれに贊成したので、故島木赤彦も萬葉集の鑑賞及び其批評を書いたとき、それに及ばんとしつつ千樫の説を忘却して、『遠のみかどは九州太宰府を言ふ』といふにとどめた。これは逆行であつた。ついで井上通泰博士は、萬葉集新考で、『シマト卽トホノミカドならざるべからず。否シマトは島と島との間なる船路なるべければ、シマトにトホノミカドのあるべきならねど少くともシマトは其トホノミカドの入口などならざるべからず。さればここはシマトといへるは筑前の内海のうちならざるか。題辭に海路作歌とあるには拘はるべからず』と云つた。それは大正五年五月であつた。ついで昭和三年三月に新考を補訂したときには、『筑前の内海のうちならざるか』をば、

『福岡灣内ならざるか』と直した。ついで武田祐吉博士は萬葉集新解で新考の說を贊成し、『新考にいふシマト卽トホノミカドといふ說は、見つけどころである』といひ、『ミカドの原文に朝庭と書いてあるのは、借字であつて、却つてミカドの原義にあてはめて可なるものであらう。而して他のトホノミカドの語を使つた例にしても、越の國、筑紫の國、いづれも帝國の入口にも比すべき處、韓國またわが外門として、古人の意のあるところを汲むべきである。なまじひに一度朝庭の字を宛てたるよりして、誤解を生じ來つたものと考へられる』（新解、遠乃朝庭考說）と云つた。これは昭和五年四月である。さうして見ればこれらの說のプリオリテエトは古泉千樫にあるのだが、學界では誰一人問題にしないので此處で明かにして置く。それからこの『御門』はどの邊かといふに、これは福岡灣か瀨戶内海か、さうはつきり極めずに味へる歌である。併し光景を再現せしめる必要がありとせば、寧ろ瀨戶内海あたりの島々の多いところを想像していいとおもふ。〇**島門乎見者** シマトヲミレバで、島門の門は、水門（みなと）、迫門（せと）、などの門で、島と島の間で、門のやうな氣持を形成してゐるところであらう。それを見ればといふ意味である。〇**神代之所念** カミヨシオモホユと訓む。舊訓カミヨシゾオモフで、童蒙抄に、カミヨシシノバル、又カミヨシオモハルとも訓んだが、代匠記に、『所念は今按オモホユと讀むべし』とあるのが定說となつた。これは、此等の島島、海峽を創造したまう

た、神代のことが聯想されるといふ意味である。久老が、この神代を解して、『ここの神代も、はじめて太宰府を置れたる御代をいふ也』といふのは間違であらう。○蟻通　アリガヨフで、蟻は借字で、『在り通ふ』の意である。この世にありつつ、引きつづき、ひとも我も通ふといふ意である。童蒙抄に、『昔より今に存在してあるつくし故、あり通ふと也』『その昔より今にあり來れる海路の嶋々水門』と解してゐるのは、どうであらうか。萬葉集中に、『あり立たし』。『あり待つ』。『ありふる』。『あり渡る』などの用例がある。

大意　一首の意は、天皇の遠い御門（どもん）とも看做すべき、この島島の横はつてゐる海門を、人も吾も通ふが、その海門を見ると、それを創造したまうた神代のことが思はれる、聯想せられるといふのである。

鑑賞　かういふ思想の歌は、『大君は神にしませばあまぐもの雷（いかづち）のうへにいほりせるかも』（巻三。二三五）などの歌とおなじく、當時の人麿の心境を理解し得なければおもしろくない歌であらうとおもふ。つまり近代人として生活し、近代の旺盛な自然科學に浸り、近代の宗教觀をのぞき、或は權威（アウトリテート）を認めない思想をもつてゐるものにとつては、『大王の』などといふと態とらしく響くかも知れない。けれども人麿のものを味ふのには、先づ人麿に心の焦點を置いて、先づ心靜かにこの一

首を讀みかへして見ねばならぬ。さうすれば、現代人などにはをかしいと思はれるこの一首の思想は、當時の人麿は非常に眞率になつて歌つてゐるのだといふことが分かる。それだから一點も浮華に漂動するところが無い。これが此一首が、尠くも眞面目に歌を鑑賞しようとする人々に、反感を持たしめない根本因だとおもふ。

それから聲調の點になると、第一句から第五句まで、休止がなくて連續して行つてゐる。上の句は、流動的で流れてゐるやうな調子である。下の句の方は稍締つて厚く鈍くなつてゐる。この關係は人麿のほかの歌にあつたが、細かく吟味すればなかなか有益だとおもふ。句と句との續け具合に、の、と、を、ば、し、などの按配は、弛んでゐるやうでさうでないところがある。

この歌は、客觀的内容は尠く、寫象にのぼつて來るものは、島門だけである。それであるから若しこの一首からさういふ具體的なものを要求すると失望するのであるが、この一首は、作者の咏みあげようとした衝迫が特獨の聲調となつて響いてくるところにこの歌のいいところがあるので、何かしら莊嚴な聲調をこの歌から感得すればそれでいいのである。全體が濃厚な繪具で塗りつぶしたやうなところがあり、前の歌が比較的光景のことを云つてゐるのと相待つて、棄てがたい。平凡だが棄てがたい。特に、第三句の、『ありがよふ』などは相當に骨を折つたのではないかとおもはれる。

『ありがよふ』の例は、『やすみしし吾が大王のあり通ふ難波の宮は鯨魚取り海片附きて』(卷六。一〇六二)。『ありがよふ難波の宮は海近み漁童女等が乘れる船見ゆ』(卷六。一〇六三)。『あまのがは安の川原の在り通ふ年のわたりにそほ船の艫にも舳にも』(卷十。二〇八九)。『逢はむとは千度おもへど在り通ふ人目を多み戀ひつつぞ居る』(卷十二。三一〇四)などである。これで見ると、意味よりも寧ろ句調、音調で行つてゐるところがある。枕詞への移行型のやうなところがある。人麿が元來、音樂的(聽覺型)な歌人だから、この一首の、『ありがよふ』も亦さういふ傾向が保持されてゐるのである。

　この歌の、『遠の御門と』の、『と』は、トシテ、ニシテ、ト看做スベキ、トスベキ、トシテ其儘などの意味になるかも知れない。細かいことは專門學者に聽くことにし、類似の用例を拾ふと次の如くである。『今日よりは顧みなくて大君のしこの御楯といで立つ吾は』(卷二十。四三七三)。『大君の命にされば父母をいはひべとおきてまゐできにしを』(卷二十。四三九三)。『山川の淸き河内と御心を吉野の國の花散らふ秋津の野邊に宮柱ふとしきませば』(卷一。三六)。『外に見し眞弓の岡も君ませば常つ御門と宿直するかも』(卷二。一七四)。『御立たしし島をも家と住む鳥も荒びな行きそ年かはるまで』(卷二。一八〇)。『湯はしも多にあれども島山のよろしき國とこごしかも伊豫の高嶺の』(卷三。三二二)。『蜻蛉島大和の國は神柄と言擧せぬくに然れども吾は言あげす』(卷十三。三二五〇)。『よろづ

世の語らひぐさといまだ見ぬ人にも告げむ音のみも名のみも聞きて羨しぶるがね』(巻十七。四〇〇〇)。『高御座あまの日嗣と天の下しらしめしけるすめろぎの神の命の』(巻十八。四〇九八)。『うつせみの世のことわりと益良夫の引のまにまに級ざかる越路を指して』(巻十九。四二二〇)。『住吉にいつく祝が神言と行くとも來とも船は早けむ』(巻十九。四二四三)。『しらしくる天の日嗣と神ながらわが大君の天の下治め賜へば』(巻十九。四二五四)。『たうだきて事無き御代と天地日月とともに萬代にしるしつがむぞ』(巻十九。四二五四)。『すめろぎの敷きます國と天の原石戸を開き神上り上り坐しぬ』(巻二。一六七)。『ひさかたの天つしるしと水無川隔てておきし神代し恨めし』(巻十。二〇〇七)。『高御座あまのひつぎとすめろぎの神のみことの聞し食す國の眞ほらに』(巻十八。四〇八九)などの、『と』である。なほ、『戀すれば安からぬものと玉の緒の繼ぎてはいへど處女らが心を知らに』(巻十三。三二五五)。『さ夜中と夜は更けぬらし鴈が音の聞ゆる空に月渡る見ゆ』(巻九。一七〇一)などの、『と』も同じ源泉と同じ語感を持つてゐるのではあるまいか。以て作歌上の參考とすべきであるが、現代の私等が使ふとなれば餘程注意し、自分の體內をくぐらせたうへに用ゐるべきだとおもふ。

參考 ○(三〇三) ロレンツェン氏獨譯。(2, 3) In den Wellen der Tiefsee des Meeres von Inami, (1) das wohl berühmt ist, (4) verbirgt sie sich tausendfach (5) die Insel Yamato ピアソン氏英譯。(4) In the thousand folds (3) of the

open-sea waves (2) of the (1) famous (2) Inami sea, (4) they are hidden. (5) Alas, the peaks of Yamato! ○(三〇四)

ロレンツエン氏獨譯。(4) Wenn ich die Engen zwischen den Inseln sehe, (3) die ich wieder und wieder durchfahre (2) mit dem Ziele: nach dem ferngelegenen Regierungsgebäude (1) des Kaisers, (5) kommt mir das Götterzeitalter in den Sinn. ピアソン氏英譯。(4) When I look at the straits between the isles (3) through which I continually pass (2) thinking of the ancient Palaces (1) of the Emperors, (5) then I can not help thinking of the time of the Gods.

○

【巻三・四二六】

草枕旅のやどりに誰が夫か國忘れたる家待たなくに

草枕　羇宿爾　誰嬬可　國忘有　家待莫國

題意　これは、『柿本朝臣人麻呂見香具山屍悲慟作歌一首』といふのである。この歌を大寶元年のところに配列して見た。頼まれて作つたものか、獨詠的のものか。一首は後者の色調である。

語釋　**○羇宿爾**　タビノヤドリニと訓む。羇は他の本に覊とある。旅中にあつてといふ意味で

ある。**○誰嬬可** タガツマカと訓む。これは誰の夫であらうかといふ意味で、嬬字は借字で、『誰嬬と書たれど、端作に見嬢子屍と云はざれば男子なるべし。第二に、吉備津采女が死せるを慟む歌に、夫をつまと云へるにも此字を借て書けり』（代匠記）。『こは女にはあるべからず、嬬は例の借字なり』（考）。等に據つて明かである。**○國忘有** クニワスレタルと訓む。此處でクニといふのは本郷の事である。故郷のことである。考卷十四の頭注に、『國とは本郷を云なり。古今集已來は本郷をふるさとといへり。集にはふるさとといふは皇居の跡をいへり』とある。これは槻落葉の注と同じである。比等能宇宇流、田者宇恵麻佐受、伊麻左良爾、久爾和可禮之弖、安禮波伊可爾勢武（卷十五。三七四六）。吾屋戸爾、鳴之雁哭、雲上爾、今夜喧成、國方可聞（卷十。二一三〇）。燕來、時爾成奴等、雁之鳴者、本郷思都追、雲隱喧（卷十九。四一四四）。和我勢古我、久爾弊麻之奈婆、保等登藝須、奈可牟佐都奇波、佐夫之家牟可母（卷十七。三九九六）等の例がある。即ち、クニワスレタルは、本郷（家郷、故郷）を忘れたのであらうか、といふ疑問で、連體言にしてゐる。上にカの係でタルで結んだ。そして此處で一たび休止がある句法である。**○家待莫國** イヘマタナクニと訓む。イヘマタナクニ（舊訓）。イヘニマタマクニ（童蒙抄）。イヘマタマクニ（考・槻落葉）。イヘマタナクニ（玉の小琴・略解・古義）。イヘニマタナクニ（攷證）等の諸訓があり、新考・新訓等も眞淵訓に從つてゐる。莫字

が眞字になつてゐる（類聚古集・古葉略類聚鈔・神田本・細井本二・活字無訓本二）のがあるので、童蒙抄以來それに據るものが多い。『莫の字、古一本に眞の字に記せり。尤可なり』（童蒙抄）。『家にの爾を略てよむは例あり。眞を今本に莫とあるは誤なり。一本による。さて、待むのむを延（のべ）て、まくにといふなり。或人莫とあるによて云は、ひが事なり』（考）等に據つてその意圖が分かる。卽ち眞淵の解釋は、『家に待たむに』（家に妻が待つて居るだらうに）といふ事になる。また、井上氏は、『家は上にワガノレル馬ヅツマヅク家コフラシモとある家にて家人の事なり』（新考）と解してゐる。この方は、『家人が君を待たむに』といふ語法になる。次にもう一つの說がある。それは本居宣長を首唱とするものである。『家待莫國。師說に莫は眞の誤として、家またまくに也といはれき。十一卷廿丁に、今だにも目な乏しめそ云々久家莫國（ヒサシケナクニ）、この莫も一本に眞とあれば、師說は論なく宜きが如くなれども、十四卷十丁に、をつくばのしげきこのまよ立鳥のめゆかなを見むさね射良奈久爾（ザラナクニ）、是もさねざるにの意也。十五卷三十二丁に、思はずもまことありえむやさぬるよの夢にも妹が見え射良奈久爾（ザラナクニ）、是も見えざるに也。十七卷廿二丁に、庭にふる雪はちへしくしかのみに思ひて君をあが麻多奈久爾（マタナクニ）、是も我待に也。此外もあれど、右なるは殊に論なき例也。又がてと云も、がてぬと云も同じ意に落るをも思ふべし。いねがてと云も、いねがてぬと云も同きが如し。然（しから）ば、またなくにと云て、待（また）むにと云ことになるべき

也』（玉の小琴）といふ說である。つまり、宣長の考では、家待莫國は、家待眞國と訂正せずに、イヘマタナクニと訓んでも、『待たむに』となるから差支がないといふのである。意味の上からいへば兩說は同一に落著くのである。この說は略解・古義・攷證・新考に隨行せられた。

大意　さて一首の意は、いづれの說に從つても、結句は、『家待眞國。家に待たむ』（眞淵說）。『家待莫國。家待たむ。家人は待ちつつ居らむ。家に妻の待たむに』（宣長說）といふことになる。一首の意は、『誰女の夫の、本國を忘れて、旅宿に死たるにかあらむ、かくともしらで、家人は、今日か明日かと歸り來む日を、待つゝ居らむものを』（古義）といふことになる。

以上は諸先進の說を綜合して一首を解釋したのであり、一首もそれで味ふことが出來るとおもふが、『莫』を活かして、なほ諸先進の解釋以外の一說として以前から考へてゐたのに、今度少し理由を附して書いて置かうとおもふのである。以下は其の愚案である。

從來、『鹽津山うち越え行けば我が乘れる馬ぞつまづく家戀ふらしも』（卷三。三六五）の結句を、家人がこの作者（旅人）を戀ふらしといふやうに解した。これは奧義抄の說に本づくらしく、槻落葉に、『奧義抄に、旅人を家にて戀る妻あれば、乘馬つまづきなづむといへり。』といつてゐる。代匠記初稿本も、童蒙抄も、考も皆この說に本づいて解釋してゐる。そしてこの歌に類似した歌は、『來

る路は石踏む山の無くもがも吾が待つ公が馬つまづくに』(巻十一。二四二一)は、意味が明快である。その他、『妹が門出入の河の瀬をはやみ吾が馬つまづく家思ふらしも』(巻七。一一九一)。『白妙ににほふ信土の山川に吾が馬なづむ家戀ふらしも』(巻七。一一九二)の二首だが、萬葉人は、さういふ一種の信仰を以て、これ等の『馬つまづく』を作つたかどうかは疑問であり、奥義抄の如き中世紀の萬葉學で全體を律するのは危険のやうにおもへるのみならず、この『家おもふ』。『家こふ』といふ句法は、どうも、『家を思ふ』。『家をこふ』といふ句法で、『家が思ふ』。『家が戀ふ』と解するのは不自然だとおもふのである。これは『戀ふ』といふ動詞と、『思ふ』といふ動詞の用語例を見れば分かるので、『戀ふ』は、誰に戀ふ。誰を戀ふ。誰ゆゑ戀ふといふ。それが省略されてゐてもさういふ意味になる。それだから、『家戀ふらしも』は『家を戀ふらしも』となるのである。『思ふ』の場合でも、『吾は妹おもふ別れ來ぬれば』(巻二。一三三)の好例があり、『妻放り家道おもふに生ける術なし』(巻十三。三三四七)の好例がある。

次に、『家人に戀ひすぎめやも』(巻四。六九六)。『家人の使なるらし』(巻九。一六九七)。『家人の春雨すらを間使にする』(巻九。一六九八)。『家人は路もしみみに通へども吾が待つ妹が使來ぬかも』(巻十一。二五二九)。『志珂の浦に漁する海人家人の待ち戀ふらむに明し釣る魚』(巻十五。三六五三)。『家人

の齋ひ待たねか（中略）家人は待ち戀ふらむに』（巻十五。三六八八）。『石田野に宿する君家人のいづらと我を問はば如何にいはむ』（巻十五。三六八九）。『家人は歸り早來と伊波比島齋ひ待つらむ旅行く我を』（巻十五。三六三六）等の歌では、『家人』と明瞭と云つてゐる。これを一考せねばならぬ。もう一度いへば、『家戀ふらしも』の意味は、若し、『家人が君を戀ふらしも』といふつもりなら、『家』などといはずして、『家人の』『家人は』と云ふ方が自然だらうといふことになる。これが、『家戀ふらしも』をば、『家を戀ふらしも』と愚考する一つの旁證とならないだらうかとおもふのである。

次に、『待つ』といふ動詞の例だが、これも『誰が誰を待つ』といふのが順序である。『玉手さし交へあまた宿も寐てしかも秋不待登毛』（巻八。一五二〇）。『天の河打橋わたせ妹が家道やまず通はむ時不待友』（巻十。二〇五六）のやうな場合でも、秋ヲ待たずとも。時ヲ待たずとも、といふのを省略してゐるのである。『山たづね迎へか行かむ待爾可將待』（巻二。八五）でも、『君を』といふことが省略せられてゐるので、句法が自然である。然るに、若し、待莫國をマタマクニと訓んで、『家待たまくに』をば、『家人が君を待たまくに』といふ具合に解しようとしても、それは『待つ』といふ動詞の性質上不自然で無理な解釋となりがちである。そこで、此處の、『家待たまくに』は、『家を待たまくに』といふ語法にする方が順當である。『家人等をば此の病死した人が待たまくに』といふやう

に解するのが自然だといふことになつてくるのである。

さて、『家待たまくに』といふのを、右の理由で『家を待たまくに』と解せなければならぬとして、この『家を待たまくに』といふ語法は、この歌の場合には無理である。卽ち、『死んだ旅人が家人を待つであらうに』といふのはこの歌一首の場合には、意味の上からも不自然で且つ不合理である。そこで此處は、上に、『國忘れたる』と否定的に云つてゐるのだから、結句もやはり、『待たなくに』と否定的に云ふべきところと思ふのである。

そこで、若し此が、家待莫國で、イヘマタナクニと訓み、『この死んだ人が家人を待たない』と解すれば、語法としても無理でなく、一首の歌としても腑に落ちるのではあるまいか。卽ち、一首の意味は、『かうして異鄕で旅をして、一體誰の夫であらうか。家鄕をも忘れてゐる、そして家人等の來るのをも待たずに。』といふやうに解釋するのである。第四句で、『國忘れたる』と一寸休止を置き、結句で、『家待たなくに』と据ゑたのは、獨立句のやうで、微妙なところで、第四句に照應し連續してゐるのである。或は第四句へ再び戻る聲調でもある。そしてこの技法は、他の例から類推しても人麿的であつて旨いとおもふのである。

家待莫國の中の「莫」とあるのは、西本願寺本・溫故堂本・大矢本・京都帝國大學本・細井本一・

活字無訓本一・活字附訓本等である。さすればそれを全然棄て去るのも奈何かと思ふのである。そこで私は、愚案として二たび『莫』を復活せしめて、解釋したいのである。さうすれば、『家を待たなくに』即ち、『家を待たずに』といふ具合に解釋するのである。

『みすず苅る信濃の眞弓引かずしてをはくる業を知るといはなくに』（巻二。九七）。『礒の上に生ふる馬醉木を手折らめど見すべき君が在りといはなくに』（巻二。一六六）。『相見ぬは幾久もあらなくに幾許吾は戀ひつつもあるか』（巻四。六六六）。『ささなみの大山守は誰が爲か山に標繩結ふ君もあらなくに』（巻二。一五四）。『三笠山野邊ゆ行く道許多も荒れにけるかも久にあらなくに』（巻二。二三四）などの、『なくに』から類推して、『家待たなくに』を理解し得る。なほ、『道の知らなく』。『知るといはなくも』などの用例も參考とすることが出來る。『庭に降る雪は千重しく然のみにおもひて君をあが待たなくに』（巻十七。三九六〇）の例などは最もいい例である。

愚案は、宣長の説や攷證の説に一致するやうだが、さうでなく、宣長は、『家待たなくに』を『家待たむ』と解し、攷證も、『待たんにといふ意になるべきなり』『家に妻の待たんにといへる也』といふのであり、古義なども、『麻久と云べきを奈久と云るなり』とし、『家人は今日か明日かと歸り來む日を待つつ居らむものをとなり』といふのだから、イヘマタナクニと訓んでゐても、結局は眞

淵等の解釋と同一に歸するのだから、私の說とは違ふのである。愚案は、『マクニ』と、『ナクニ』とは違つた意味に解してゐるのである。この歌の『ナクニ』をば、『零雪者、安幡爾勿落、吉隱之、猪養乃岡之、塞爲卷爾』（卷二。二〇三）のマクニと同一には解せないのである。

追記　以上の愚案を書いて、計らずも、卷三の、『鹽津山打越えゆけばわが乘れる馬ぞつまづく家戀ふらしも』（三六五）の、代匠記精撰本の注釋を見るに、次の如くに云つてゐる。

『馬ゾツマヅクトハ、彼モ故郷ヲ戀テ心ココニアラネバヤ、ツマヅキハスラントナルベシ。離騷曰、忽臨睨二夫舊郷一、僕夫悲余馬懷、蜷局顧而不レ行。第四ニ、此人或女ニ替テヨマレタル歌ニ、立テツマヅクトアルモ此心ナリ。第七第十三ニモ馬ノツマヅクトヨメルハ同意ナルベシ。一說、旅行人ヲ家ニテ戀ル妻ノアレバ、乘馬ノツマヅキナヅムトイヘリ。本文ナドアル事ニヤ。サラズハ此等ノ歌ヲシカ意得テイヘルカ。家人ノ戀ラシニハアラズ。家ヲ戀ラシナリ』

この解釋は實解であつた。『家人の戀ふらしにはあらず。家を戀ふらしなり』と結論してゐるのは、契沖は正しい解釋をしてゐるのである。然かも此は、代匠記初稿本ではこの正解をせずに、『しかれば家人のわれをこふらしといふ心なり』とのみ云つてゐるのを、精撰本では、ただ一說として擧げ、正しい自說を云つて居る。これは契沖の正しい見識であつた。この『鹽津山』の歌をかく正しく解

釋した前賢があつて見れば、それから導かれくるから、人麿の、『草枕』の歌の結句の愚案は正解といふことになるのではあるまいか。契沖は、然るにこの歌を解した時に、『家マタナクニハ、家人ノ待ンニト云意ナリ』（代匠記精撰本）と解してしまつた。これは逆行とも謂ふべきで、折角前に正解をしてゐても、この歌への應用が不充分であつたものと見える。契沖が斯く解してしまつたから、眞淵でも宣長でも誰でも、多少の異同を混じつつ、結局は契沖説に隨行してしまつたのである。よつて試みに愚案を此に述べることにしたが、如是のことは私自身秘かに味ふための説で、これを萬人に强ひようとは思はぬ。

追記　試に眞淵の考の鹽津山の歌の解をみたるに、『こは馬も故郷戀る事と一わたりにては思はるるを、後世のことわざに家人のいと戀れば旅にて馬のつまづくてふをも思ふに、家に戀ふらしといふべきを所を略たるならん』と云つてゐる。眞淵も一度びは、『馬も故郷戀る事』といふところまで行著いたのだが、後世の諺と、先進の注釋に邪魔せられて正解を得ずにしまつたものである。

追記　萬葉に次の如き用例があつて、迷ひ易いから少しく解析を試みようと思ふ。

「衣手の名木の河邊を春雨に吾（われ）たち沾（ぬ）ると家念（いへおも）ふらむか　（卷九。一六九六）

家人の使なるらし春雨の避（よ）くれど吾を沾（ぬ）らす念（おも）へば　（卷九。一六九七）

玉藻かる辛荷の島に島回する鵜にしもあれや家念はざらむ　（卷六。九四三）

第一の歌は、第二の歌と聯關して名木河旅行三首の中だが、結句は、『家念ふらむか』は、『家が家人等が』

作者の事を念ふらむか』となるので、人麿の場合と少しく違ふのである。卽ち、『吾たち沾るといふ

事を、家人等が念ふらむか』であるから不思議はないのである。外形が全く同じでも、前後の關係

で實は同一ではないのである。第三の赤人の作の結句、『家念はざらむ』は、正しく、『家を念はざ

らむ』で、『家が念はざらむ』ではない。此處の關係をよく鑑別せねばならぬ。

うちはなひ鼻をぞ嚏つる劒だち身に副ふ妹が思ひけらしも　（卷十一。二六三七）

ぬばたまの黑髮しきて長き夜を手枕の上に妹待つらむか　（卷十一。二六三一）

この二つはいづれも妹が主格で、自分が目的格になる。『妹が吾を思ひけらしも』『妹が吾を待つら

むか』となるから、助詞を省いて主格となる例もあるけれども、この例で直ぐ人麿の歌を律するこ

とは出來ないのである。

鑑賞　人麿がよく、屍を見て作歌してゐるが、これも想像を逞くすれば、賴まれて、さう

いふ屍を葬る時の儀禮のやうなものに役立たしめるために作歌したとも解釋することが出來るが、

詞書の、『香具山に屍を見、悲慟して作れる歌』を正直にそのまま解釋すれば必ずしもさうではある

まい。私の想像の馳騁はそんなことをも無限に爲し得るが、これは無闇に爲すべきことではない。そしてやはり人麿が藤原京にゐて、香具山のあたりを行過ぎて、この行旅死者を見て作歌したものと解釋していいであらう。

この一首では、『國忘れたる』といふ句と、『家待たなくに』といふ句とは、兎も角も中心句をなしてゐる。併し、現代の人々には、云ひ方が常套的で、或は空々しく感ぜられないこともない。特に、初句から第二句にかけて、『くさまくら旅の宿（やどり）に』といふのなども、常套手段に聞こえるのであるが、かういふ發想なり云ひ方なりは當時にあつては、新鮮なものであつたのかも知れない。また、此處でもまた生死の差別がさう明瞭でないやうな云ひ方をしてゐる。これなども自然科學の洗禮を受けた現代人には、直ぐこのまま受納れることが出來まいから、心の焦點のあふまで暫時の忍耐を必要とするのである。

參考　○（四二六）フイツマイエル氏獨譯。In dem Nachtlager der Reise | des Pflanzenkissens | wer ist die Gattin wohl? | Von dem Reiche vergessen, | das Haus auf sie wartet nicht.　ロレンツエン氏獨譯。(3) Wessen Gemahl hat wohl (2) auf der Reise rastend (1) auf Graskissen (4) seine Heimat vergessen? (5) Während man ihn zu Hause erwarten möchte.　ピアソン氏英譯。(3) Whose husband will this man be who (4) has forgotten his native place (2) during a night-stay (1) on his grass-as cushion journey? (5) Would not his family be waiting at home though!

【巻三・四二八】

隱口の泊瀨の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ

隱口能　泊瀨山之　山際爾　伊佐夜歷雲者　妹鴨有牟

○

題意　『土形娘子火葬泊瀨山時柿本朝臣人麻呂作歌一首』である。火葬はヒハフリと訓む。土形娘子の傳は未詳である。應神天皇紀に、『大山守皇子是土形君、榛原君、凡二族之始祖』と見えてゐる。和名抄に、遠江國城飼郡土形（比知加多）とある。この鄕の名に因る氏であらうかといふ說がある。考に、『此娘子は采女なる歟』とあるから、若し采女とせば遠江の土形の鄕から來たものであつただらう。火葬は文武天皇の四年三月僧道昭を火葬にしたのに始まるから、さうすれば、この歌はそれ以後の作に屬する。火葬のことは、續日本紀に、『文武天皇四年、三月己未、道昭（道照）和尙物化、天皇甚悼二惜之一、遣レ使弔二賻之一、（中略）時七十有二。弟子等奉レ遺二火葬栗原一、天下火葬從レ此始而也』とあるのが卽ちそれである。それから火葬が急にひろまつて、持統天皇崩御の時にも大寶三年十二

月、飛鳥岡で火葬し奉つた程である。併し木村正辭博士は少しく異見を持つて居り、（美夫君志別記）火葬は道昭の死よりももつと早くからあつたのではなからうか。卷七の、『玉梓能妹者珠氈足氷木乃清山邊蒔散染』（一四一五）は火葬の灰を蒔いたので、なほ其處に火葬の歌二首あるといつて居る。そして、道昭の記事につき、『史に天下火葬從レ此而始也といへるは其正式の例文なるを知るべき也』と云つてゐるのであるが、此も一說として參考とすべきで、また、喜田貞吉博士も、『實際上我が邦に於ける火葬が、道昭和尚をもつて始とするものであつたとは思はれない。既に大寶令には、行軍の際兵士死する事あらば、副將軍以上は是を本國に送り返す、其の以下の者は其の死處に於いて屍體を燒き埋めよと云ふ事がある。又東國人が防人として九州に送られた場合、若し途中で其の身死すれば、處に從ひ、棺を給うて燒き收めよと見えて居る』（本邦古代墳墓の沿革）と云つて、火葬が道昭遷化の以前からあつたと考へて居る。これを或程度迄信じ得るとせば、人麿の妻の死んだ年月は、もつと遡り得るので都合が好いのである。併し差向き續日本紀の記事に據つて、私はこの歌を大寶元年のところに配列した。

語釋　○**隱口能**　コモリクノと訓む。泊瀬にかかる枕詞であるが、古事記允恭天皇の條の歌に、許母理久能波都世能夜麻能といふのがあり、萬葉卷一の歌にも隱國乃泊瀬乃川能とあり、延曆の太

神宮儀式帳にも、許母理國(コモリクニ)とあるから、隱り國(こもくに)の意味で、さういふ地勢に本づいた語で、それから枕詞に變化したものであらう。**○泊瀨山之山際爾**　ハツセノヤマノヤマノマニと訓む。ハツセは現在の初瀨町あたり一帶をさして云つたものであらう。山際(やまのま)は山と山との間をいふ。舊訓ヤマノハニと訓み、僻案抄にヤマノカヒなどと訓んだこともある。マと訓んだのは眞淵であらう。**○伊佐夜歷雲者**　イサヨフクモハと訓む。『谷に火葬する烟の其山のかひに立もさらず居も定めぬ雲の如く見ゆるをかく云なり』(考)で大體の意味が分かる。イサヨフの例は、ほかの歌の處でも注した筈だがなほ少しく書くと、『山のはにいさよふ月のいでむかと我が待つ君が夜は更(くだ)ちつつ』(卷六。一〇〇八)。『山の端(は)にいさよふ月を出でむかと待ちつつをるに夜ぞくだちける』(卷七。一〇七一)。『山の端(は)にいさよふ月を何時とかも吾が待ち居らむ夜は更けにつつ』(卷七。一〇八四)。『青嶺(あをね)ろにたなびく雲のいさよひに物をぞ思ふ年のこのごろ』(卷十四。三五一一)。『一嶺(ね)ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲のよそり妻はも』(卷十四。三五一二)などの例がある。**○妹鴨有牟**　イモニカモアラムと訓む。その娘子が今や烟となつて立ちのぼつてゐるのであらうといふ意味である。

大意　一首の意は、今、泊瀨の山の山の間にゆるく動いてゐる雲、卽ち火葬の烟の今や立ちのぼつてゐるのは、娘子が烟となつて立ちのぼつてゐるのであらう。あの烟が卽ち娘子であらう。美

しかつた娘子が、あの烟と化してしまつたのである。といふぐらゐの歌である。

鑑賞 この歌は、現在火葬の烟の立ちのぼるのを見て作つてゐるが、かういふ思想の歌は他にもあるので、『きのふこそ君はありしか思はぬに濱松の上に雲と棚引く』(卷三。四四四)。『つぬさはふ石村(いはれ)の山(やま)に白妙にかかれる雲はわが皇(おほきみ)かも』(卷十三。三三二五)などがさうである。かういふ生死の境の連續、山間に入つて行つたり、山峽に交つたり、山の巖を枕としたり、白雲となつたりするやうな趣の歌を其儘現代の歌の手本とするわけには行かぬ。併し關東大震災の如き大事件に逢遇するときには、何とか表現せねばならぬ強い衝迫を感ずるのであるから、さういふ時に、古代人の心境に辛うじて接觸し得るのである。そしてかういふ思想をば單に漢文學或は佛教の方の言ひまはしの模倣と言つてしまはれない力をも感ずることが出來るのである。

また、『こもりくの泊瀬の山に霞立ち棚引く雲は妹にかもあらむ』(卷七。一四〇七)といふのがある。此はやはり挽歌に分類してあるが、人麿歌集に出づとはことわつてゐないけれども、人麿のこの歌が傳誦されてゐる間に變化したものだといふことを想像することが出來る。そして、原作の、『山のまに』が、『霞立ち』と變化し、『いさよふ雲は』が、『棚引く雲は』に變化してゐるのである。この變化の結果を觀察すると、歌はいい方に變化せずに惡い方に變化してゐる。そして成るべく分かり

易いやうに、普通の人にも腑に落ちるやうに、通俗化し、大衆化してゐる。一口にいへば民謠的になつてゐる。土屋文明氏は之を「民謠化」といふ語であらはしてゐるが、人麿を歌聖だなどといふやうになるのも、かういふ大衆化から來ることが多いのである。たまたま此處に異傳の一首を得て、鬱憤を漏らすこと如是である。

参考 ○フイツマイエル氏獨譯。Die in Komori-ku | an der Bergscheide | des Berges Fatsu-se | hin und wieder ziehende Wolke | wird die Schwester wohl sein. ロレンツエン氏獨譯。(3, 4) Die Wolke, die in dem Bergzwischenraum (2) zwischen den Bergen von Hatsuse. (1) dem verborgenen Lande steht, (5) wird wohl die Geliebte sein! ピアソン氏英譯。(4) The cloud drifting aimlessly (3) among the hills of (1) (hill-surrounded) (2) Hatsuse-Mountains, (5) could it be my dear Lady?

○

【巻三・四二九】

山の際ゆ出雲の兒等は霧なれや吉野の山の嶺に棚引く

山際從　出雲兒等者　霧有哉　吉野山　嶺霏霺

題意 『溺死出雲娘子火葬吉野時柿本朝臣人麿作歌二首』の第一首である。出雲娘子の傳は不明だが、これも出雲の國から來た采女といふ意か、或は泊瀨の黒崎・出雲あたりの出身か。或は氏か、姓氏錄卷十二に、『出雲宿禰、天穗日命子、天夷鳥命之後也』とある。溺死は入水であらうか。これも大寶元年作として配列して置いた。頼まれて作つたものか、獨咏歌か。

語釋 **○山際從** ヤマノマユと訓む。これは『際ユ出ヅ』と續けたので、枕詞にも似て居り序歌の傾向をも帶びてゐる。併し景色的にも意味が全然失はれてはゐない。これで見ても、『從』といふ助詞は、單純に、『爾』と同じだなどと云つてはならないのである。『田兒の浦ゆうち出でて見れば』（卷三。三一八）といふのは卽ちそれである。**○出雲兒等者** イヅモノコラハと訓む。ラは添へた親愛的な音で、複數ではない。これは人麿のほかの歌の場合にも云つた。**○霧有哉** キリナレヤと訓む。霧であるからだらうか。霧であらうかといふことで、火葬の烟を霧といひ、娘子が烟と化し、霧と化してゐることをあらはしてゐる。『打麻を麻績の王あまなれや伊良虞が島の珠藻苅りをす』（卷一。二三）。『潮滿てば入りぬる磯の草なれや見らく少く戀ふらくの多き』（卷七。一三九四）。『足柄の箱根の嶺ろの和草のはなつつまなれや紐解かず寢む』（卷十四。三三七〇）などの例がある。**○嶺霏霺** ミネニタナビクと訓む。契沖が霺を霞の誤だとしてそれに從つた諸家が多い。これらは專門家

が考證してくれるだらう。タナビクは『タ靡(ナビ)ク』意である。『天雲もいゆきはばかりたなびくものを』（巻三。三二一）。『秋津野にたなびく雲の過ぐとはなしに』（巻四。六九三）などの例がある。

大意 一首の意は、文字どほりに云へば、出雲娘子(いづものをとめ)は、霧だからであらうか、今吉野山の嶺にたなびいて居るといふのである。

鑑賞 この云ひ方は非常に單純化したのであるが、今現在は火葬のための烟が吉野の或處に立ちのぼつてゐるのである。それは現世にあつたときの美しい體はもはや彼の烟になつてゐるといふ當時の人の云ひ慣はしが、歌になればかく深い感慨になつてゐるのである。その烟をば、今度は二たび誇張して、吉野の山の嶺にたなびく霧といつて表現してゐるのである。その邊の關係は、かう分析して觀察すれば階段があるのだけれども、人麿のは直ちにかういふ具合に表現してしまふのである。前の歌の、『いさよふ雲は妹にかもあらむ』でも、此の、『霧なれや吉野の山の嶺にたなびく』でも、二つの事柄を直接な聯想によつて結びつけてしまふ、單純・素朴な手法だが、却つて厭味でない。ただ現代人が直ちにかういふ心持になれないといふだけである。

娘子は采女だつたとせば生前は美しかつたに相違ない。それがどうして溺死したか不明だが、不慮の溺死といふよりも、自殺と考へる方が自然である。歴史小説風にゆけばさうである。嚴格な考

證學者は一切かういふ範圍までは來ないが、鑑賞者の主觀はもつと奔放たる權利があるからそこまで主觀が恣になつても決して不合理ではない。この娘子の入水は戀愛の事柄に本づくだらう。人麿はこの時には相當の年齡に達してゐた筈だが、多感な人麿はかういふ事件にも深く感動して作歌してゐるのは、大に興味あることとおもふのである。それゆゑ人に頼まれて作歌したのかといふ想像も成立つのであるが、しかし此は讃岐狹岑島で作つた歌などと共に、人に頼まれて作つてゐるのではあるまい。さういふ點も亦おもしろいのである。

○

【卷三・四三〇】

八雲刺す出雲の子等が黒髮は吉野の川の奧になづさふ

八雲刺　出雲子等　黒髮者　吉野川　奧名豆颯

題意 短歌の第二首である。

語釋 **○八雲刺** ヤクモサスで、これは出雲にかかる枕詞で、八雲立と八雲刺と同じことだと

攷證は論じてゐる。その證として、刺並之國爾出座云々（巻六。一〇二〇）とある刺並は、立ち並ぶ意であり、指並隣之君云々（巻九。一七三八）とあるのも、立ちならぶ意だといふのを引いてゐる。このサスは、光サス、影サスなどのサスと同じく、雲の起るさまをいつたものであらう。**〇奥名豆颯**　オキニナヅサフと訓む。オキは岸から離れた遠くの意で、川でも海でもオキと稱へてゐる。海洋でもオキといひ、吉野川ぐらゐでもオキといふのはをかしいけれども、古人はさう嚴密にはかういふ物理學的地文學的のことは考へてゐない。ナヅサフといふのは、此處では水に浮ぶことだが、ナヅサフは、水に浮ぶことにも、底に沈むことにも、或は渡ることにも、總べて、物に接觸し、著き、沈み、融合するやうな意味に使つてゐる。ナヅムなどは似た語感に本づいてゐるのではあるまいか。古事記雄略天皇の條に、『ありぎぬの三重の子がささがせる瑞玉盞に浮きし脂、落ち那豆佐比みなこをろこをろに』とあり、萬葉には、『浦回を過ぎて鳥じもの魚津左比ゆけば』（巻四。五〇九）。『牛留鳥の名津匝來むと立ちてゐて待ちけむ人は』（巻三。四四三）。『海原の遠き渡を遊士の遊ぶを見むと莫津左比ぞ來し』（巻六。一〇一六）。『暇あらば魚津柴比渡り向つ峯の櫻の花も折らましものを』（巻九。一七五〇）。『船人も水手も聲よび鳰鳥の奈豆左比行けば』（巻十五。三六二七）。『行く河の清き瀬毎にかがりさし奈豆左比上る』（巻十七。四〇一一）。『島つ鳥鸕養伴なへかがりさし奈津左比行けば』（巻十九。四一

五六)。『叔羅河奈津左比泝り』（巻十九。四一八九）等の例がある。

大意 一首の意は、『かの娘子が死屍の水に浮て黒髮の流れたるを見て詠るにて、吉野の川の奥にうかべりとなり』（攷證）といふので大體わかる。

鑑賞 この歌は、作者が眼前に娘子の溺死體を見たやうにあらはしてゐるが、これは人から溺死體のありさまを聞いて、それをも寫象に髣髴せしめて作歌してゐるのであらう。『黒髮は吉野の川の奥になづさふ』と云つても、死の重大事件に同情して歌つてゐるのだが、歌柄が殘酷でなく、すさまじくなく、寧ろ何となく美しい感じである。これは前の、『吉野の山の嶺にたなびく』でもさうだが、溺死體の醜いさまでなく、美しい肉體が淸い川の深いところに浮んでゐるやうな感じである。娘子が生前美しかつたことは、人麿のこの感慨でも想像が出來、また死者に對する當時の人の觀念をもほぼ推知することが出來るとおもふのである。

參考 ○（四二九）フイツマイエル氏獨譯。An der Bergscheide | die Kinder von Idzumo, | mögen sie Nebel sein? | Auf den Berggipfeln | von Josi-no breiten sie sich. ロレンツエン氏獨譯。(2) Ist das Mädchen von Idzumo (1) wo die Wolken zwischen den Bergen heraufsteigen (3) zu Nebel geworden? (5) Sie breitet sich aus über den Gipfeln (4) der Berge von Yoshino. ピアソン氏英譯。(2) Is it the girl of Idzumo (3) that long-drawn haze? (1) From among the mo-

untains (5) she is stretched out on the high peaks (4) of the Yośinu Mountains. ○ (四三〇) フイツマイエル氏獨譯。 Die acht Wolken steigen! | Der Kinder von Idzumo | schwarzes Haupthaar | ist mit des Flusses von Josino | Bucht innig vertraut. ロレンツエン氏獨譯。 (3) Das schwarze Haar (2) des Mädchens von Idzumo, (1) wo die vielen Wolken aufsteigen, (5) schwimmt in Mitten (4) des Flusses von Yoshino. ピアソン氏英譯。 (3) Ah, the black hair (2) of the girl of Idzumo (1) (where many clouds rise up) (5) floats in the midst (4) of the Yośinu river.

○

【巻四・四九六】

み熊野の浦の濱木綿百重なす心は念へど直に逢はぬかも

三熊野之　浦乃濱木綿　百重成　心者雖念　直不相鴨

題意　『柿本朝臣人麿歌四首』とある第一首である。この四首は、これまでの人麿の作と違つて、戀歌であり同じやうな情調で四つが大體統一せられてゐるから、ある意味で連作とも謂ふべきものである。

語釋　**○三熊野之**　ミクマヌノと訓む。ミはミ吉野などのミで添へた音である。マ熊野などともいふ。從前美稱也と注してゐる。熊野は伊勢か紀伊かといふ說があつたが、此は紀伊の熊野で、紀伊國牟婁郡にある。試に代匠記（精）を讀むに、『三熊野は、綺語抄には紀伊國と云ひ、童蒙抄には是は伊勢に三熊野の浦と云浦の有なり。大饗の時は鳥の足裹む料に伊勢國三熊野の浦へ濱木綿を召すと云とあり。顯昭も此定にて道命阿闍梨の紀伊國の三熊野にて濱木綿をよまれたる歌をも引ながら會釋を設て伊勢なりと存ぜらる。今按伊勢の熊野いと名高からず。歌に讀ても聞えずや。又大臣の大饗に鳥の足包む料とかやは後代の故實も侍るべければ、往古の歌の證とは成がたき事も有なむ。紀伊國なるは名高き上、道命も彼處に到てよまれ、仲實朝臣も同じ定にて、又此歌を本歌としてよめる人々も皆さこそは思はれたらむなれば聞馴たる所とすべし』と議論してゐる。仙覺抄にも『ミクマ野ノウラハ伊勢國也』とある位であり、單純なことでも、諸說があるから却つて面倒で、前說に囚はれて正說を得ない例は單に萬葉學のみではない。新說を易々として出すことを謹むべきはこの三熊野の一例を以ても推すことが出來るのである。**○濱木綿**　ハマユフで、文珠蘭、俗に濱おもとといふ多年生植物である。『綺語抄云、濱木綿は芭蕉葉に似たる草の濱に生るなり。童蒙抄には、莖の皮の薄くて多く重なれるなりと注し、袖中抄には、葉の重なりたるなり。多く重なりたれば八

重ともよみ百重ともよむなりといへり』(代匠記精)。『こは後に濱おもとてふものにて、其莖をへぐに幾重ともなく重なるものなり。色白きものなれば、眞木綿に向へて濱木綿とは名づけたるなり。こはやごとなき御說もていふなり』(考)。これにて大體わかる。考の語原說のやごとなき云々は田安宗武の說であらう。**○百重成** モモヘナスと訓む。舊訓モモヘナルであつたのを契沖がさう訓んだ。『百重成は、今按百重ナスとも讀べきか。假て書字なれども、もゝへなると云は、もゝへにあると云べきを、爾阿を反て約むれば奈と成故に、他處に用たる所、假令百重爾有、百重有、百重在、百重爾在、かやうにかけり。モモヘナスとよみても物を思ふ心の重々をなすにて、モモヘナルと云に替る處なけれど古語の意を顯はすなり。集中を解見たまへらむ人はげにもとや思はれ侍らむ。第十二にも腰の句に百重成とある歌侍れどもモモヘナルと點せり』(代匠記精)。濱木綿の莖の皮が幾重にも幾重にもなつてゐるごとく、深く深く君を戀しく思つてゐるがといふ意味で、これは序歌の形式である。この『百重なす』は、莖の皮といふよりも寧ろ、葉の重り合ふ狀態と解釋する方が自然のやうである。なほこの植物は、蕾などの狀態にもさういふ百重なすの感じを有つてゐるところがある。**○心者雖念、直不相鴨** ココロハモヘド、タダニアハヌカモと訓む。心は君を思へども、まのあたり現實に逢ふことは出來ないといふ意味である。タダニといふのは、直接といふのと、唯それ

のみといふのと、語原は一つで分化したのであらうか。卷二（二二五）の、直相者相不勝。卷四（六九七）の、亂而念君之直香曾。卷五（八九四）の、御津濱備爾多太泊爾。卷六（九七七）の、直超乃此徑爾師弖等は、直接の意であり、卷三（四六〇）の、徘徊直獨而。卷四（七一〇）の、直一目相三師人之等は、唯それのみのタダである。

大意　一首の意は、紀伊の熊野の濱に生えて居る濱木綿の葉の具合が幾重にもなつてゐるごとく、百重にも幾重にも吾が心は君を戀ふるのであるが、悲しいことには、まのあたり逢ふことが出來ないといふのである。

鑑賞　濱木綿の葉に譬へた序歌の形式だが、これは音調よりも寧ろ意味の方で、この序歌の形式は、氣が利いてゐる心の働きだから、男女間の贈答には適當であつたのであらうし、女人を納得させ、互に甘美な心になつて相融合するためには、かかる形式もある程度までの效果があつたものである。併しかかる作歌實行が時を經るに從ひ、獨咏的な象徴的氣分をも出すことも出來るところから、古事記などの歌謡以來の覺官的な傾向とも相融合して、獨咏的な戀歌の場合にも、かういふ技法を用ゐるやうになつた。そして中心點が下の句の方にあり、この歌の場合なら、『心は念へど直に逢はぬかも』で、これに心が集注されるから、却つて效果的になり得る特徴を持つてゐる。こ

の序歌の形式は、非常な勢力で擴がり、萬葉にも實に多く、後世の戀歌といへばこの譬喩的序歌の形式が大部分を占めるやうになつた。

人麿の此一首も、さういふ譬喩的な意圖から成つてゐるが、極めて自然で、毫も斧鉞の痕が見えず、申訣に作つたといふやうな痕が見えず、何處までも大きく豊かに莊重に行つてゐる。『ただに逢はぬかも』にしても、强い句である。一面からいへばこの歌には、素朴、可憐なところが尠いといへば云へるけれども、かういふ歌はかういふ歌で、その極致を示してゐるのである。そして、一般化し得る內容を有つてゐるから、民謠化し大衆化して模倣歌が續出するに至るのである。

參考歌、『吾が戀は夜晝わかず百重成すこころし念へばいとも術なし』(卷十二。二九〇二)。『靑旗の木幡の上を通ふとは目には見れども直に逢はぬかも』(卷二。一四八)。『安太人の魚梁うち渡す瀨をはやみ意は念へど直に逢はぬかも』(卷十一。二六九九)。『大船のおもひ憑みし君が去なば吾は戀ひむな直に逢ふまでに』(卷四。五五〇)。『直に逢ひて見てばのみこそたまきはる命に向ふ吾が戀止まめ』(卷四。六七八)等がある。

附記。土屋文明氏は、萬葉集目安補正の說を參考し、この歌の、『浦の濱木綿百重なす』は、植物の葉でなく、海の寄せる浪の浪頭を木綿花に見立てたものであらうといふ說を立てた。(國文雜誌、昭和六年十二月)。

○

【巻四・四九七】

古にありけむ人も吾が如か妹に戀ひつつ宿ねがてずけむ

古爾　有兼人毛　如吾歟　妹爾戀乍　宿不勝家牟

題意　短歌第二首である。

語釋　**○古爾有兼人毛**　イニシヘニアリケムヒトモと訓む。昔の人達もといふところをかう延ばして云つてゐる。此は句調の好いためかも知れない。萬葉にも數例ある。『古にありけむ人の倭文幡の帶解き交へて廬屋立て妻問しけむ』（巻三。四三一）。『いにしへにありけむ人の求めつつ衣に摺りけむ眞野の榛原』（巻七。一一六六）。『古にありける事と今までに絶えず言ひ來る勝鹿の眞間の手兒奈が』（巻九。一八〇七）。『古にありけるわざのくすはしき事と言ひ繼ぐ血沼壯士菟原壯士の』（巻十九。四二一一）等である。**○妹爾戀乍**　イモニコヒツツと訓む。この『に』の助詞に注意していい。『妹に戀ひつつ』『妹に戀ふれば』の例と共に、『妹を戀ふれば』があり、『妹をおもひて』がある。そし

て、『妹こふるかも』『妹こひむかも』とある時には、『妹に（を）こふるかも』『妹に（を）こひむかも』といふ具合になるのである。**〇宿不勝家牟**　イネガテズケムと訓む。舊訓はイネガテニケムであつたのを契沖がイネガテズケムと訓んだ。『不勝は今按ガテズと讀べし。上にも云如く、イネアへズと云に同じ。若ガテニと今のまゝに讀ば、不知をシラニとよめるやうに、ガテズをガテニと云へるなり。宿難（イネガテ）に紛るべからず』（代匠記精）と云つた。萬葉の例を見るに、ガテニといふ例が幾らもあるが、ガテニ・ケムと續いたのは無いやうであるが、ガテズ・ケムと續いたのがあるから、これは契沖の訓がいいやうである。『春されば我家の里の河門（かはと）には年魚兒（あゆこ）さばしる君麻知我弖爾（マチガテニ）』（卷五。八五九）。『鶯の麻知迦弖爾（マチガテニ）せし梅が花散らずありこそ思ふ子がため』（卷五。八四五）。『赤駒が門出をしつつ伊氏可天爾（イデガテニ）せしを見立てし家の兒らはも』（卷十四。三五三四）。『筑波嶺の嶺ろに霞居（かすみゐ）須宜可提爾（スギガテニ）いきづく君を率寢てやらさね』（卷十四。三三八八）。『待難丹（マチガテニ）わがせし春をかけまくもあやにかしこし言はまくもゆゆしからむと』（卷六。九四八）。『敷妙の衣手離れて玉藻なす靡きかぬらむ吾を待難爾（マチガテニ）』（卷十一。二四八三）等であるが、ガテニ・ケムは見當らぬ。これはもつと精細に調べる筈だがまだ手が屆かぬ。これに反し、ガテズ・ケムの例は、『松反（まつがへ）りしびにてあれかもさ山田の翁（をぢ）が其の日に母等米（モトメ）安波受家牟（アハズケム）』（卷十七。四〇一四）。『時々の花は咲けども何すれぞ母とふ花の佐吉低己受祁牟（サキデコズケム）』（卷二十。

四三二三)。ズケリ。ズキ。ズケムの例は他に例がある。そこで、ガテニケムの例が二三見當るまで契沖に從つて置くのである。

大意 一首の意は、かうして戀に惱んで、夜も寐ねかねて居るが、古人と雖いまの吾の如くにやはり妹のために戀ひ惱んで夜も碌々眠られずにゐたのであつただらうか。ひとからも同情してもらひたく、ひとにも同情して自分の苦しみを諦めるといつた調子の歌である。

鑑賞 この歌は極めて樂に咏んでゐるやうだが、何處か、自然で同感せしめられる聲調を有つてゐる。奇でないが、自然な心の流露で却つて好いとも思ふのである。人麿の歌には强い雄大な歌と共にかういふ種類のものもある。卷七(一一一八)に、『古にありけむ人も吾がごとか三輪(みわ)の檜原(ひはら)に挿頭(かざし)折りけむ』といふのがあつた。この方は『葉を詠ずる』と云つて二首あるが、やはり相聞情調の歌である。どちらが原作で、どちらが傳誦の中に變化したのかよくは分からないが、人麿歌集から資料を取つて人麿作として萬葉集に入れたことをも絕待に否定は出來ないだらうから、ひよつとせば、『挿頭ををりけむ』の方が原作であるのかも知れない。『いねがてずけむ』といふ句も萬葉によくある句で、無理が無いが、少しく樂に行つて居り、『挿頭折りけむ』の方は兎も角も稍具體的であり、音調も淸楚である。私の如き本來歌を好くもの、特に萬葉の歌を好くものは、かういふ歌のど

ちらをも棄てずに置かうといふ氣になつて居る。

初句の、『古にありけむ人も』の句につき、信名の童蒙抄に、『古詠の風體時代の差別个樣のところにて知るべし。今時の歌には古の人もとよみて、有けんの詞は無用の詞なり。中略然るをかく丁寧に古詠はつらねしとなり』といつてゐるのは注意がやはり細かいのである。

○

【卷四・四九八】

今のみのわざにはあらず古の人ぞまさりて哭にさへ泣きし

今耳之　行事庭不有　古　人曾益而　哭左倍鳴四

題意 前のつづきの歌である。

語釋 『此は、上の歌とみづから問答して、心を寛め慰むるなり。文選嵇康養生論云。以レ多自證、以レ同自慰。古今集云、何かその名の立つことの惜からむ知て迷ふはわれ一人かは』(代匠記精)といふ注釋がある。哭左倍鳴四、は舊訓ネニサヘナキシを、略解でナキサヘナキシと訓んだ。萬葉には、

『五月蠅なす騒ぐ兒等を棄てては死は知らず見つつあれば心は燃えぬ彼に此に思ひわづらひ禰能尾志奈可由』（卷五。八九七）。『慰むる心はなしに雲がくり鳴き往く鳥の禰能尾志奈可由』（卷五。八九八）。『あかねさす晝は物思ひぬばたまの夜はすがらに禰能未之奈加由』（卷十五。三七三二）。『天雲の退部の限この道を行く人毎に行き寄りてい立ち嘆かひある人は啼爾毛哭乍』（卷九。一八〇一）。『磐が根の凝しき山を越えかねて哭者泣友色にいでめやも』（卷三。三〇一）。『おもひいでて哭者雖泣著く人の知るべく嘆かすなゆめ』（卷十一。二六〇四）などの例がある。人麿の場合は、『さへ』が加はつてゐて強めてある。『のみ』と助詞の入つてゐる用例は萬葉にはなかなか多い。これも強めた語だが句調がいいので多く用ゐられたものと見える。古今集以後にも、この用ゐざまが殘つて傳はり、ネニナク、ネヲナク、ネヲバナクなどといふ具合になつて歌の中に詠まれて居る。

大意 一首の意は、かうして戀のために苦しみ歎いてゐるのは、現在の吾のみではあるまい。昔の人々はもつともつと、苦しみ歎いたものである。さう思つてせめてもの慰にしてゐる心持である。

鑑賞 この歌も、作歌心の眞實の動きが見えてゐて好いところがある。内心の滓が殘つてゐて、未だ民謠的に浮遊してしまはない好いところを保留してゐる。第四句の、『人ぞまさりて』も強く、

結句の、『哭にさへ泣きし』も、何處か切實でいいところが殘つてゐる。苦しみ歎いてゐるばかりでなく、聲さへ立てて號泣したといふところに、感動の强いものが存在してゐる。

卷一(一三)の、古昔母然爾有許曾といふのをはじめ、前の歌のところで引用した、イニシヘの歌例に於て分かるやうに、過去を追懷し現在の心境と相較べつつ情感を漏らす手段である。大伴旅人の、酒を讃ずる歌の中に、『いにしへの七の賢しき人等も欲りせしものは酒にし有るらし』(卷三。三四〇)とある如きも亦同樣である。

〇

【卷四・四九九】

百重にも來及かむかもと念へかも君が使の見れど飽かざらむ

百重二物　來及毳常　念鴨　公之使乃　雖見不飽有武

題意　前の續である。

語釋　**〇百重二物**　モモヘニモと訓む。『百重とは使の百度も重なり來るなり』(代匠記)。**〇來**

及毳常 キシカムカモトと訓んだ。キヲヨベカモト（舊訓）。キシケカモト（代匠記）。キカヨヘカモト（改訓抄）。キオヨベカモト（童蒙抄）。シキシケガモト（考）。キタリシケカモト（玉の小琴）。キシカヌカモト（古義）。略解・攷證等は宣長に從ひ、新考は古義に從ひ、愚案はキシカムカモトと訓んだ。愚案の理由は後に記すべく、先づ前賢の說を記すに、契沖云。『今按、キシケカモと讀べきか。及をシクとよむ事、第二に但馬皇女の御歌に付て釋しつ。集中にヲヨブとよめる事すくなし。古語ならぬにや。前の使のまだ歸らぬに後の使の來る意なり』（代匠記）。眞淵云。『來及を今本に伎於與倍と訓しは字に泥るなり。記（仁德）天皇聞下其太后自二山代一上幸上而使三舍人名謂二鳥山一人送二御歌一曰、夜麻斯呂邇、伊斯祁登理夜麻、伊斯祁伊斯祁とよませ給しによるに、ここも斯祁斯祁とよむべし』（考）。宣長云。『二の句、キタリシケカモと訓べし。シケカモは、及カシとねがふ意に聞ゆ。常は次の句の頭へつくべし』（玉の小琴）。雅澄云。『キシカヌカモトと訓べし。及は彌頻々に重る意なり。志加奴といふは、奴は（不ノ字の意にあらず）希望ノ辭の禰の轉れるなり。有レかし、逢ヘかしと望ふ意を、有奴可毛、逢奴可毛など云る例にて、こゝの意をわきまへつべし』（古義）。○**毳常** カモトと訓ず。毳は哉の借字である。和名抄に、野王曰、氈ハ毛席撚レ毛ヲ爲レ席也、和名賀毛。字鏡に毾㲪ハ加毛とある。助詞の『かも』の代りに、毳といふやうな面倒な字を書いてゐるが、當人は存外無造作に心に浮ぶままに

書いたのかも知れぬ。漢字の使用法がそれだけ自由で、日本語を漢字に當ててどしどし使ふだけに進歩してゐた。ナポレオン、ゲエテを漢字で書き、西洋藥品を殆ど盡く漢字で書いたのと同一であり、漢譯聖書が西洋名を漢字に當てたのと同じである。**○公之使乃** キミガツカヒノと訓む。この公は作者が人麿だとせば、女（妹）のことでなければなるまい。實際萬葉の例は、キミといふのは女が男に對した場合が多いが、男が女に對してキミといつた例も存在してゐる。この『公』の字では確かでないが、『君』の字を用ゐたものに、明かにさういふ場合を發見することが出來る。『手弱女に吾はあれども引きよぢて枝もとををにうち手折り吾は持ちてゆく公之頭刺荷』（巻十三。三二二三）は、女が男に云つてゐる。遊行女婦蒲生娘子の歌に、『雪の島巖に殖ゑたる瞿麥は千世に咲かぬか君之插頭爾』（巻十九。四二三二）。この方は女が男にいつてゐて、君の字を書いてゐる。『相見ては面隱さるるものからにつぎて見まくの欲しき公毳』（巻十一。二五五四）も、女が男にいつてゐると看ていい。『朝づく日むかふ黄楊櫛ふりぬれど何しか公見不飽』（巻十一。二五〇〇）も亦女の歌である（古義）らしい。この方は公の字を書いてある。然し、『うつたへに籬の姿見まく欲り行かむといへや君乎見爾許曾』（巻四。七七八）の如き歌は、大伴家持が紀女郎に贈つた歌であつて、明かに男が女に對してキミと言つてゐる場合である。**○雖見不飽有武** ミレドアカザラムと訓む。幾度見れども飽かな

いのであらうよといふ意味であるけれども、この一首の場合は、意味が強くなつて、『飽かざらんや』となり、『飽かないのも無理ではありますまい』とまで意味が強くなつてゐる。この結句の、ザラムで止めた萬葉の歌の中には、輕い疑問の儘に止まつたのもあり、意味が強くなつて、反語の場合もあるから、これ等は纏めてこの歌の私解のところに解くつもりである。眞淵は、飽カザラムがをかしいと云つて、『雖見不飽有哉』としたが、原文通りでなくなつた。

大意 【私解】。この歌の第二句の『來及毳常』の訓は上記の如く種々あるが、試に愚案は、キシカムカモト（來及かむかもと）と訓んだ。これは願望の意と云ふよりも、未來推量の意としてかまはない。それから、『及』は加行四段活用の動詞である。古事記仁德條に、『夜麻斯呂邇、伊斯祁登理夜麻、伊斯祁伊斯祁、阿賀波斯豆麻邇、伊斯岐阿波牟迦母』の中の、イシケ、イシキの活用は四段である。それから萬葉卷二（一一五）の、『おくれゐて戀ひつつあらずは追及武道のくまみに標結へわが背』の、及武も四段に活用してゐる。また、『吾背子に吾が戀ふらくは夏草の苅りそくれども生及如』（卷十一。二七六九）。『かし布江に鶴鳴きわたる志珂の浦に沖つ白波多知之久らしも』（卷十五。三六五四）。『住吉の岸の浦みに布浪之しくしく妹を見むよしもがも』（卷十一。二七三五）。『庭にふる雪は知敝之久然のみに思ひて君を吾が待たなくに』（卷十七。三九六〇）などには、意味の色調に幾分づつの

差別があつても、大體が同じであり、動詞の連用言から續いて、『追ひ及く』『立ち及く』の如くにもなるから、人麿の歌の場合にも、『來及く』と訓んでいい。

次に、『かも』に就いて、願望、咏歎などいろいろ説があるが、これは疑問・咏歎の二つに大體區別していい。元は咏歎のみであつただらうが、人麿ごろには大體二つにしていい。願望といふのは、この二つから派生せらるべき場合で、この二つで大體説明の出來るもののみである。『三笠の山に月も出でぬかも』(卷十。一八八七)なども、疑問・咏歎が強まつて願望となるので、この『三笠の山』の歌の場合に特別に『かも』に願望の本意があるのではない。さうして見れば、人麿の場合にも、普通に續けた『かも』と解すべく、從つて、『來及かむかも』と普通に平凡に訓むべく、シケカモとか、シカヌカモとか訓むのは、少し無理があるのではあるまいかと思つて、愚案は、ただ普通にキシカムカモと訓んで見た。このカモは願望などでなく、『來及かむか』といふ疑問であつて、おのづから未來推量になるのである。『使が何遍も何遍も來て吳れるであらうかと』といふことになる。已然言につづけた『かも』の例は、次に出て來るから、其處で論じよう。

次に、第三句の『念へかも』といふ句であるが、これは、『來重なれと思へばにや』(代匠記)。『念へばかも』『來よかしと思へばにや』(古義)。『使ノ來レカシト心ニ願ヘバニヤアラム』(新考)といふ

やうに普通解してゐる。つまり、疑問として取扱つてゐるのである。それから、『明日香川明日だに見むと念八方（念香毛）吾が王の御名忘れせぬ』（巻二。一九八）の場合の、『念へやも』も、念へバニヤと解し、已然言から受ける係詞のヤで、モはそれに添はつたものと解してゐる。『念へかも』も同様の已然言から續いた疑問の係詞だと解してゐる。（山田博士の説に委し）。これは既に評釋した歌だが、言語を字義どほりに解せば、疑問の係詞に相違がない。けれども、この『やも』、『かも』の疑問の使ひざまは、實際の作例に當つて見ると、單純な疑問よりも、餘程強くなつて、反語となり得る程度まで行つてゐるのではなからうかとおもはれるほどである。少しく煩しいけれども次に少しく解析を試みよう。先づ結句の、『ざらむ』の例について種類を云はう。

な念ひと君はいへども逢はむ時何時と知りてか吾が戀ひざらむ（巻二。一四〇）

荒津の海潮干潮みち時はあれどいづれの時か吾が戀ひざらむ（巻十七。三八九一）

これをよく見ると、心配するなと仰せられるけれども、何時でもお逢することが出來るのならば、こんなに苦しんで戀しく思ふことは無くともいいのであるが、何時お逢ひすることが出來るか分からぬのではありませぬか。さうすれば、こんなに強く戀しくおもつて、愬へ申上げるのも當然ではありませぬか。戀せずに諦められませうか。といふ意が含まれてゐる。これは人麿の妻依羅娘子が

人麿と別れる時の歌である。そして、『逢はむ時』と未來になつてゐて、『何時と知りてか』といふ疑問詞になつてゐるのを注意すべきである。その次の歌は、形が稍似てゐるが、少しく趣が變つてゐる。これは海潮の滿干は間歇的であつて時間が定まつてゐる。然るに私の戀はさういふ間歇的ではなく、『どういふ時に一體君を戀しく思はない時がありませうか』『何時でも何時でも戀しくおもふのであります』といふのである。言語を文法的にその儘にいへば、『どういふ時に戀しく思はないのであらう』といふ疑問に過ぎないのだが、感情の眞意はもつともつと強いのである。つまり、後世いふ『ざらんや』といふ意味まで強まつてゐて、單純な疑問ではなくなつてゐる。私が普通この評釋の文中反語と解するのは、さういふ感情を解釋してゐるのである。次に、結句の『ざらむ』に『あれや』の附加してある例を少しく吟味することとする。

玉藻苅る辛荷(からに)の島に島回(しまみ)する鵜にしもあれや家念(も)はざらむ（卷六。九四三）

大船の香取の海に碇(いかり)おろしいかなる人か ものおもはざらむ（卷十一。二四三六）

卷六の赤人の歌の第四句は、『鵜にあればか、然らば』。鵜であるとするか、そんならといふ意味にとつていい。これも從來、契沖は願望で無いと論じ、雅澄は願望だと論じ、願望だといふ證として、『石倉(いはくら)の小野(をぬ)ゆ秋津(あきつ)に立ちわたる雲にしもあれや時をじ待たむ』（卷七。一三六八）を引いてゐる。そし

て皆アレカシの意だとして、願望の意に解してゐる。これは願望の意味に解すれば至極單純だが、これも元來は疑問と咏歎の混合で、雲であるとすれば、そんならと云ふ意味に解していい。願望の意味はそれから導かれると考へていい。或は願望といふよりも寧ろ意味を反す表現と解した方がいいかも知れぬ。然しそれも、その根本は疑問で、『鵜にしあればにや、もの思はざらむ』が、文字どほりだが、『鵜にしあればにや』を否定するから反對になる。鵜であるとするか、さうでないからといふので意味が反對になる。『鵜で無いのだから、家郷を念ふことも當然だ』といふ意味に落著くのである。雲だとするか、さうでないから反對の意味になるのである。つまり、『雲だとすれば時を待たう』といふのだが、『雲であり得ないから、時などを待つて居られない。待遠しくて待遠しくて溜らない』といふ意味になるのである。その次の卷十一の歌も、やはり『か』の疑問で續けて、一體どんな人が斯ういふ苦しい場合に歎かない人が居るだらうか。さう疑問を置いて、さういふ人は居ないと否定するから、反對になるのである。

『鵜にしもあれや』『雲にしもあれや』の場合は、上に『も』があるので其他の場合と違ふかとも思つたことがある。『あぶり干す人もあれやも沾衣（ぬれぎぬ）を家には遣らな旅のしるしに』（卷九。一六八八）。『あぶり干す人もあれやも家人の春雨すらを間使（まつかひ）にする』（卷九。一六九八）の場合は『も』のある場合

だが、これも、『かういふ場合に沾れた著物を火で干して呉れる人がゐるといふのか。それは居ない』となるから、結果は反對の意味になるが、本は疑問である。前の方は、誰も濡れた著物を干してくれる人がゐない。それだから家にこの濡れた著物を記念に送らうといふのであり、後のは、著物を干してくれる人がゐない。それだのに、また家人等は春雨をまでも使によこして自分を濡らすと云つてゐるのである。『しづたまき賤しき吾がゆゑ丈夫の爭ふみれば生けりとも逢ふべくあれやしじくしろ黄泉に待たむと』(卷九。一八〇九)。これは『も』のない場合だが、やはり反對になつてゐる。この『生けりとも逢ふべくあれや』でも、生きてゐて逢ふのが順序だらうか。いやさうでないとなるから反對になる。一旦疑問にしてそれを否定するから自然に反對の意味になるのである。

古りにし人にわれあれやささなみの故き京を見れば悲しき　(卷一。三二)

ももしきの大宮人はいとまあれや梅を挿頭してここに集へる　(卷十。一八八三)

しましくも獨あり得るものにあれや島の室の木離れてあるらむ　(卷十五。三六〇一)

あはしまのあはじとおもふ妹にあれや安宿も寢ずて吾が戀ひ渡る　(卷十五。三六三三)

出で見つつ待つらむものを世のなかの人の歎は相思はぬ君にあれやも　中略　雲離れ遠き國邊の露霜の寒き山邊にやどりせるらむ　(卷十五。三六九一)

是等の例は、大體、疑問として解釋がつくもののみである。はじめの四首などは純粹に疑問で解釋がつき、いまだ反語的にならぬものである。その次の、『相思はぬ君にあれやも』も疑問（常に咏歎を交へるのが原則である）でその儘解釋がつくのである。卷一の、『うつそをみのおほきみ白水郎なれや伊良虞が島の珠藻苅りをす』（卷一。二三）でも、これは疑問でいまだ反語的にならぬもので、白水郎だからか。といふことになる。『古りにし人にわれあれや』と同じである。是等は否定を前提とする必要がないから從つて意味が反對にはならぬのである。この微細の點に注意すべきである。

明日香川明日だに見むと念へやもわが王のみ名忘れせぬ（卷二。一九八）

朝づく日向ふ黄楊櫛ふりぬれど何しか公が見るに飽かざらむ（卷十一。二五〇〇）

以上の如くに辨じて來て、この二首に到著したのである。この卷二の歌は、人麿の歌で既に評釋したものだけれども、これも第三句の、『念へやも』は疑問から出發して、それが否定されて反語的になつたものである。明日香皇女をば、明日でもせめて見奉ることが出來るといふのならば、今かうして御名も忘れずに悲しみ歎く必要もなく、御名も忘れて心和かにあり得るのだけれども、明日も明後日も永久に見奉ることが出來ないのだから、御名も忘れずにかうして慟哭してゐるのである。といふ意味になるのである。『ワスル』といふ語の用例は萬葉に隨分多い。『眞木の葉や茂りたる

らむ松が根や遠く久しき言のみも名のみも吾は忘らえなくに』（巻三。四三一）などの例は參考になるのである。『念へや』を單純に文字どほりに解して、『念へばにや……御名忘れせぬ』（思つてゐるからであらうか。そのために御名を忘れないのである）と解しては作歌の衝迫心が非常に弱くなつてしまふのである。『見むと念へや』と疑問を出して、その『見むと念ふ』が否定されるから、反對となる。そこで、結句の『み名忘れせぬ』が強く肯定せられることとなるのであらう。『見得むと念ひ得るにや。いや其れは出來ない。それだから』とつづくのである。その次の巻十一の歌は、結句に、『飽かざらむ』があるから此處に參考に有つて來たものだが、『隨分年久しく交つて古くなつたが、それでも飽きない。どうして飽きないのだらうか。いつ見ても可哀いく麗しい』といふ意が籠つてゐる。この歌は、『朝にけに見まくほりするその玉をいかにしてかも手ゆ離れざらむ』（巻三。四〇三）といふのと殆ど句法が同じで、『ナニシカ……ザラム』『イカニシテカモ……ザラム』となつてゐる例であり、第三句の『念へかも』。結句の『ざらむ』を理解するのに大切だから、引用したのである。

　百重にも來及かむかもと念へかも君が使の見れど飽かざらむ（巻四。四九九）

そこで此の人麿の歌に來たのだが、以上のやうな徑路を辿つて來て、この一首を解すれば次の如く

になる。戀しい君からの使が幾度も幾度も、追つかけ追つかけ、來るだらうといふことは思へるだらうか。若しそんなに度々來る可能性があるなら、こんなに使の者を見て喜ぶ筈はないのである。またそんなに喜ばなくともいいのである。然るに、そんなに追つかけ追つかけ君からの使は來ないではないか。來る見込が無いではないか。それだからして、こんなに君の使の來るのを喜ぶのである。といふ意味の歌である。そして、戀人に對つて、使の來ることの少いのを怨んで愬へて居るのである。そして、この歌の場合は、『念へかも』が疑問で、その上の、『來及く』といふ氣持が否定せられて、『來及かず』といふ意味となり、結果は反對の意味になるのである。『カモ……アカザラム』の關係が此歌でも解明がついたと思ふ。先進の解釋がまちまちで不安を感じたので、僭越だとは思つたが訓詁の領域にまで入つたのであつた。

以上の如くに愚案を書いたが、試に前賢の注釋を次に列記して參考にする。『君が使の日に百度も來重なれと思へばにや、絕ず來れども猶心に飽足らずあるらんと、吾ながら餘りなる心をよめるなり』（代匠記）。『幾度も幾度も來りませとねがひおもふから、その使の來たるを見れどあかぬとの歌なり』（童蒙抄）。『使の幾度も來よかしと、心に思へばかも、來れど來れど使を厭かず思ふと言ふなり』（略解）。『間繁く百遍にも重々に繼て來よかしと思へばにや公が使の愛しく鳴呼見れど飽かずあ

るらむとなり』(古義)。『君が使の何度もいくたびも來り繼(つげ)よとおもへばかも君が使の見れどあかざらんとなり』(攷證)。『オヒカケオヒカケ使ノ來レカシト心ニ願ヘバニヤアラム。カクシバシバ來ル君ノ使ノナホ見レドアカヌといへるなり』(新考)等である。

參考 ○(四九六) フィツマイエル氏獨譯。An der Bucht von Mi-kumano | die Baumwolle des Meerufers | hundertfach entsteht. Denkt auch das Herz an sie, | sie kommt gerade nicht entgegen. („Die Baumwolle des Meerufers' ist der Name eine Pflanze) ロレンツェン氏獨譯。(4) Obgleich mein Herz sich nach Dir sehnt (3) hundertfach wie das Hamayū (1, 2) (aufgeschichtet ist) am Ufer von Mikumanu (5) kommen wir nicht unmittelbar zusammen — Oh! ○(四九七) フィツマイエル氏獨譯。In der alten Zeit | waren die Menschen, die es wohl gab, | auch so wie ich. | Indess sie die jungere Schwester liebten, | konnten sie wohl nicht schlafen. ロレンツェン氏獨譯。(1, 2) Werden auch die Menschen vergangener Zeiten (3) wohl so wie ich (4) in beständiger Sehnsucht nach der Geliebten (5) schwer haben schlafen können? ○(四九八) ロレンツェン氏獨譯。(2) Es ist nicht etwas, das nur der jetzigen Zeit angehört, (3, 4) Menschen vergangener Zeit haben sogar, mich darin übertreffend. (5) mit lauter Stimme geweint. ○(四九九) ロレンツェン氏獨譯。(3) Oh weil ich sehnsuchtsvoll denke: (1, 2) „Ach möchte er doch hundertfältig kommen" (5) werde ich mich nie satt sehen (4) an deinem Boten.

○

をとめ等が袖振山の瑞籬の久しき時ゆ思ひき吾は

未通女等之　袖振山乃　水垣之　久時従　憶寸吾者

題意　『柿本朝臣人麻呂歌三首』と題した第一首である。

語釋　○**未通女等之**　ヲトメラガと訓む。これは、下の『袖』に續けたのである。○**袖振山乃**　ソデフルヤマノと訓む。これは振山と云はむための序で、一種言掛けの技法である。『もののふのやそ宇治川の』といふのと同じで、かういふ技法は萬葉には他にも例がある。例へば、『梓弓引豐國の鏡山見ず久ならば戀ひしけむかも』（巻三。三一一）。『韓衣著奈良の里の山齋松に玉をし付けむ好き人もがも』（巻六。九五二）。『吾妹子に衣春日の宜寸河よしもあらぬか妹が目を見む』（巻十二。三〇一一）等である。萬葉には言掛の技法は古今集以後ほど多くないが、少しはある。人麿のものに一つでもあることは、人麿のものに枕詞が多く、序詞が多いのと共に、人麿は技の達者であつたこ

とを示すといつてもいい。振山は大和國山邊郡、石の上に布留御魂社（官幣大社石上神社）がある。そこである。現在の丹波市町大字布留で、つまり神社があるといふことが分かれば、下への續きが分かるのである。○**水垣之久時從**　ミヅガキノ、ヒサシキトキユと訓む。神社の御垣を美稱して、瑞垣といふのである。このミヅといふのは、草木などの若々しいのを形容してゐる。みづ木、みづ枝などいふ語がある。その神社の瑞垣が久しいから、久しといふのに續けた。卷十三に『楉垣の久しき時ゆ戀ひすれば吾が帶ゆるぶ朝夕ごとに』（三二六二）といふのがある。そして、『みづ垣の』までが、序詞の形式になつてゐる。○**憶寸吾者**　オモヒキワレハと訓む。君の事を思つてゐた。君をば戀してゐた。といふのである。萬葉では、この『おもふ』といふ語を非常に澤山使つてゐる。

蜻蛉羽の袖振る妹を珠くしげ奥に念ふを見たまへ吾君（卷三。三七六）
相念はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額づく如し（卷四。六〇八）
春なれば宜も咲きたる梅の花君を思ふと夜寐も寢なくに（卷五。八三一）
さを鹿のこころ相念ふ秋萩の時雨の零るに散らくし惜しも（卷十。二〇九四）
心には千遍念へど人に云はず吾戀孋を見むよしもがも（卷十一。二三七一）
留りにし人を念ふに蜻蛉野に居る白雲の止む時もなし（卷十二。三一七九）

大意　一首の意は、今はじめて君をおもふのではない。もう久しいまへから戀しく思つてゐる。といふ意味の歌に過ぎぬ。

鑑賞　一首の意味の内容は、『久しき時ゆ、念ひき吾は』だけなのに、上にいろいろ附加へて、意味と調子の補充をして居る。これは、一首を構成するうへの一つの手段にもなるが、相手のものに特殊の感情を傳達し得るための技巧とも看做すことが出來る。併し、かく實用的に解釋する以外に、構成された一首の歌として見るときには、實に莊麗ともいふべき一形態として現出してゐるのである。或は中止のない大きいゆらぎを持つた諧調音として受取ることの出來るものである。人麿の短歌には、既に評釋した如く種々のものがあり、この一首も一標本として役立つだけの價値を有つて居るものである。そして、意味のうへで、枕詞・序詞の形式に同情し得ないものにはかういふ種類の歌は理解し難いのだから、かういふ歌に向ふ時には幾分心の準備を必要とするのである。

をとめ等が績麻の絡垜打麻懸け績む時なしに戀ひわたるかも　（巻十二。二九九〇）

たらちねの母が養ふ蠶の繭隱りいぶせくもあるか妹に逢はずて　（巻十二。二九九一）

春日野に照れる夕日の外のみに君を相見て今ぞ悔しき　（巻十二。三〇〇一）

梓弓末の腹野に鳥獵する君が弓弦の絶えむと念へや　（巻十一。二六三八）

あしひきの山田守る翁が置く蚊火の下焦れのみ我が戀ひ居らく（卷十一。二六四九）

これらはその數首に過ぎぬけれども、大體の傾向が分かる。そしてこの種の技法は萬葉にもなかなか多く、後世になると戀歌にこの種の手段がひろがつて行つて居る。

○

【卷四・五〇二】

夏野行く牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて念へや

夏野去　小牡鹿之角乃　束間毛　妹之心乎　忘而念哉

題意　前のつづきである。

語釋　この歌は、『束の間も妹が心を忘れて思へや』といふ意味だけで、上の句は序詞の形式を用ゐて居る。夏季の鹿の角は未だ短いから、その短い期間といふのに懸けてゐる。『大名兒彼方野べに苅る草の束の間もわれ忘れめや』（卷二。一一〇）。『くれなゐの淺葉の野らに苅る草の束の間も吾を忘らすな』（卷十一。二七六三）などの例がある。

『忘れて念へや』は、『忘れて念はむや、念はず』となるから反語となる。『大伴の美津の濱なる忘貝家なる妹を忘れて念へや』（卷一。六八）。『思ひより見よりにものはありなむを一日の間も忘れて念へや』（卷十一。二四〇四）。『妹が袖別れて久になりぬれど一日も妹を忘れておもへや』（卷十五。三六〇四）。『越の海の信濃の濱を行き暮らし長き春日も忘れておもへや』（卷十七。四〇二〇）。『垂姫の浦を漕ぐ船梶間にも奈良の我家を忘れて思へや』（卷十八。四〇四八）などの例がある。このオモヘヤは、已然言に附いたもので、以上の例では一首の結句に使はれて居る。そして反語だといふことも明かであり、かういふ慣用になつてゐたといふことも明かだが、反語になるその元はやはり疑問ではあるまいか。即ち、『忘れて念へや念へやも念へかも。忘れて念はず』となるのではあるまいか。そこで、意味が強くなり、強い感情となるのである。實際、結句としては好い效果を有つてをり、人麿の好む、強く据わりのいい結句である。次に、『忘れて念ふ』といふ使ひ方も當時の用法だが、『須磨の海人の鹽燒衣のなれなばか一日も君を忘れて念はむ』（卷六。九四七）といふのがある。

【巻四・五〇三】

珠衣のさゐさゐしづみ家の妹にもの言はず來て思ひかねつも

珠衣乃　狹藍左謂沈　家妹爾　物不語來而　思金津裳

〇

題意 前の歌のつづきである。

語釋 **〇珠衣乃** タマギヌノと訓む。衣の美稱として珠を添へたものである。巻十四に、『ありぎぬのさゑさゑしづみ家の妹に物言はず來にて思ひ苦しも』(三四八一)といふのがあるから、古義は珠衣は蟻衣の誤だとし、蟻衣は織衣の借字だとして、委しい論議をしてゐるが、此處は珠衣でも解釋が附くから、强ひて改めない。**〇狹藍左謂沈** サヰサヰシヅミと訓む。サヰは、シホサヰなどのサヰで、音を立てることである。サヤサヤ、サワサワ、サヱサヱなどの擬音語と同じである。この語は、契沖ははじめ、『サヰサヰは、狹はそへたる詞、ヰはアヰの上略にて唯藍の事なり』(代匠記)とも解したのであるが、眞淵はサヰサヰは佐恵佐恵の意だし、物の音のサヤグのだと云ひ出して、諸

家が多くそれに從つて居る。そしてこれは『沈む』に續けてゐるのだが、これはどうして、サキからシヅミと續けたか、即ち、サキサキといふ物音がシヅムといふに至るまでの必然的徑路はどういふ具合になるかは未考だが、結論はただ『沈み』と云はむための序になつて居る。『沈み』は、心が沈み、心が沈鬱になつて。といふ意味にならねばならぬ。從來、『妻が歎き騷ぐを鎭めんとて』（略解）。『家ノ妹がさわさわといひさわぎあへるを、おししづめてといふ意なり』（古義）などと解して居り、さう面倒に解してゐるから、攷證の如くにシヅメと訓み、『しづめといふぞ本語なるべし』などといふに至るのである。併し、此處の言葉の順序から行けば、人麿（作者）の心が沈み歎くといふ具合にならねばならぬところである。併しなぜ作者は、『珠衣のさゐさゐ』などといつたのだらうか。さういふことを云つてゐるうちに暗々裏に妹のことを意識して使つてゐるのだらうか。細かく詮議すれば、それをも全然否定することが出來ないやうでもある。第三句の『家の妹に』への續きであるが、これも、言葉どほりに行けば、『わが心沈みて、家の妹に』となるのだが、人麿のものには省略の句法が間々用ゐられてゐるから、『沈』と『家の妹』が直ぐ續いてゐるところを見れば、『心の沈んでゐる家の妹』といふ意味をも含ませたと解しても通らぬことはない。併し、本來シヅミと訓めば、人麿の心の沈むのが主眼で、妹の方が從屬的といふことになるだらう。嘗てこの歌に迷つて、シヅ

ムと訓んだことがあつた。さうすれば、妹の心がシヅムであるから直ぐ解釋が附くし、シヅムと現在にいつてもさういふ例もあるのでかまはぬけれども、下の句の、『もの言はず』といふ句が、自分の心が沈んでゐるから、もの云はぬのか、妹の心が沈んでゐるからものいはぬのかと詮議すると、自分の心が沈んでゐるからもの云はぬと解釋するのが自然で無理が無い。さう考へて、このシヅムと訓んだのを棄てたのであつた。特に、この歌に非常に似てゐて、且つ柿本朝臣人麻呂歌集に出づといふ左註のある卷十四の、『安利伎奴乃、佐惠佐惠之豆美、伊敝能伊母爾、毛乃伊波受伎爾氏、於毛比具流之母』(三四八一)の歌には、『之豆美』と假名書にしてあるから、シヅムと訓む說は穩當でないと思つたのであつた。**○物不語來而** モノイハズキテと訓む。心が鬱してゐたので、別の言葉などいろいろ云ひたいことも云はず來てといふ意味である。『水鳥の立たむよそひに妹のらに物いはず來にて思ひかねつも』(卷十四。三五二八)といふのがあり、類似して居る。**○思金津裳** オモヒカネツモと訓む。思ひ堪へ難い。俗にいふタマラナイといふので、簡潔でいいあらはし方である。『あらひ衣取替河の河淀のよどまむ心思ひかねつも』(卷十二。三〇一九)。『我妹子に戀ひし渡れば劍刀名の惜しけくも念ひかねつも』(卷十一。二四九九)。『戀ひつつも居らむとすれど木綿間山隱れし君を思ひかねつも』(卷十四。三四七五)。『朝夕に哭のみし泣けば燒刀の利心も吾は思ひかねつも』(卷二十。四四七九)

などの例があり、一首一首少しづつの色調の變化があるので參考になるもののみである。

大意 一首の意は、妹と別るるに臨み、妙に自分の心が沈鬱して、云ひたいことも云はずに別れて來たが、今となつては實に堪へがたい。といふほどの歌である。『珠衣のさゐさゐしづみ』は、シヅミといはむがためだが、衣ずれの音のさゐさゐとしてゐるのが靜まることから、しづみに續けたので、自分の心の沈鬱してゐることの中に妹の心も沈鬱してゐることも暗指してゐるのである。ここは妹の騷ぐのを押しづめるまでの面倒なことではないやうに解釋したい。

鑑賞 この場合に、シヅムといふ動詞を使つたのは注意に値するが、これも當時の用語例があるのである。『古りにし嫗（おむな）にしてや斯（か）くばかり戀に沈まむ手童（たわらは）の如』（卷二。一二九）『吾が袂まかむと念はむ丈夫は涙にしづみ白髮生ひにたり』（卷四。六二七）などの例がある。卷四の訓には異訓もあるが、さしあたり一説として掲げる。

追記 校本萬葉集を見て、管見には、サキサキシヅムと訓んでゐることを知つた。先賢は私等の苦心する事は既に苦心してゐるのであつた。それから管見を讀んで見るに、管見の說といふものは、契沖の代匠記の先蹤をなすもので、ヰといふのは藍のことであり、『衣を藍にそむるを度々其藍入たる器におししづめて染むれば色のこくなるなり。しかれば藍といふを相見るといふ心によせて家の

いもに相見るたびたびに思ふ色の増といふ儀なり』といふのである。なほ荷田信名の童蒙抄に、この歌を解釋する處で、『諸抄の説は、きぬのおとなひ、サエサエ・サハサハとする、その音の居しづまりたる妹(いも)にといふ、無理おしの説なり』と評し、『いかにとも此さゐさゐ沈の事不レ濟なり』といひ、『もし後賢の高案あらばそれに從ふべし。先此歌は何とも解釋なりがたき歌なり』と云つてゐる。

卷十四（三四八一）の歌卽ち東歌の左註には、『柿本朝臣人麻呂歌集の中に出づ。上に見ゆること已に記せり』とある。また、この卷四の歌の、『珠衣乃、狹藍左謂沈』が、『安利伎奴乃、佐恵佐恵之豆美』と假名書にされて居る。これ恐らく、この歌が原歌で、それが東國に流傳せられて行つてゐたのが、かういふ形式に書かれたものであらう、と想像することが出來るとせば、人麿の影響が民謠的にひろがつたことにもなるのである。

參考　○（五〇一）ロレンツエン氏獨譯。(5) Ach ich, der ich mich sehne (4) seit langer Zeit, so lang (3) wie der Tempelzaun dasteht (1, 2) auf dem Winkeberg, wo liebliche Mädchen mit dem Ärmel winken. ○（五〇二）ロレンツエン氏獨譯。(5) Vergesse ich je (4) das Herz der Geliebten (3) auch nur einen Augenblick, von einer Spanne (2) wie die Länge des Geweihes der Hirsche, (1) die auf dem sommerlichen Felde gehen. ○（五〇三）ロレンツエン氏獨譯。Um (das Klagen, das da klang wie) (1, 2) das Rascheln gewebter Kleider, zu beruhigen, (4) bin ich hierher gekommen, ohne mich auszusprechen (3) mit der Geliebten— (5) unerträglich ist meine Sehnsucht.

【巻二・二〇二】

○

哭澤の神社に神酒すゑ祈れどもわが王は高日知らしぬ

哭澤之　神社爾三輪須惠　雖禱祈　我王者　高日所知奴

題意　この一首は、巻二（一九九）の高市皇子尊城上殯宮之時の長歌の短歌二首に續いて、或書反歌一首として出てゐるものであるが、また、左註には、右一首類聚歌林曰、檜隈女王怨泣澤神社之歌也。案日本紀曰十年丙申秋七月辛丑朔庚戌後皇子尊薨とあるものである。ほかの例に據ると、短歌は二首のが多いから、その點だけでも人麿の歌（反歌）でないやうにも思へる。また歌の内容から云つても、左註の方が正しいやうにおもふのである。或はこの頃同時に作られたこの一首が、或本には人麿の歌の中に紛れて記入されたものかも知れない。いづれにしても山上憶良の類聚歌林にはさうなつてゐたので編者はさう書いたのである。

代匠記精に、『歌ノ心、歌林ノ説實ナルベシ。檜隈女王ハ考ル所ナシ。皇子ノ妃ナルベシ。今按、

持統天皇ノ四字ハ後人ノ私ニ加ヘタル歟。其故ハ、上ニ日並皇子薨ジ玉ヘル時、舎人ドモノヨメル歌ノ後ノ註ニモ、右日本紀曰、三年「丑云々。今モ亦同ジカルベシ。況ヤ日本紀私記云。師説神武等諡名者、淡海御船奉勅撰也。カヽレバ日本紀ニ神武天皇等トアルハ後人ノ註ナリ。家持ト御船ト同時ノ人ナレバ、旁撰者ノ意ヲ得テ加ヘタルニハアルベカラズ』云々とある。

檜隈女王の事は不明であるが、續日本紀天平九年二月の敍位に從四位下檜前王を從四位上に敍せられることがあり、それが女子の列の部にあり、檜前は卽ち檜隈だから、同一人であらう。ただ同一人としても天平九年には六十歳位になつてゐる筈である。この考證は山田氏の講義に見えてゐる。

語釋 **○哭澤之神社爾**　ナキサハノモリニと訓む。哭澤の神の社にの意。哭澤の神は、古事記神代卷に、『而哭時、於ニ御涙ニ所成神ハ、坐ニ香山之畝尾ノ木本ニ、名泣澤女神』とあり、日本紀卷一に、『而哭泣涕焉。其涙墮而爲レ神、是卽畝丘樹下ニ所居之神、號ニ啼澤女命ニ矣』とある神である。卽ち、伊邪那美命が火の神をお生みになつて、神去り給うた時、伊邪那岐命が泣きたまうた、その御涙から成られた神が、この哭澤の神である。この神は現在磯城郡香久山村木之下に、稻田の間に一つの神の森をなしてゐる畝尾都多本社が卽ちこの神社であらう。神社をモリと訓む例は、卷七(一三四四)に、卯名手之神社之菅根乎。卷十二(三一〇〇)に、卯名手乃杜之神思將御知とある二例を比較す

れば分かる。なほ卷七（一三七八）に、木綿懸而齋此神社可超の例がある。神社のある處が森で、森が既に神坐となつたといふのであらう。さういふ代匠記の言は平凡だが穩當であらう。〇**三輪須惠**　ミワスヱと訓む。神酒を据ゑてといふ意。神酒をもつた甕をば供へ奉ることである。卷十三（三二二九）に、五十串立神酒座奉神主部之といふのがあり、味酒がミワ（三輪、三輪山等）の枕詞となつたのも同じ理由であらう。またスヱといふ語も、卷三（四二〇）に、枕邊爾齋戸乎居。同卷（三七九）に、齋戸乎忌穿居。卷十三（三二八四）に、齋戸乎石相穿居等の例がある。『齋戸は即ちその神酒を盛れる甕なるべし。これに、ほりすゑといへるにて、その地上を穿ちて底の安定なる位置をつくりしことを知るべし』（山田氏、講義）によつて、ホリスウといふ云ひ方の理由が分かるとおもふ。〇**雖禱祈**　イノレドモと訓む。祈り奉るけれどもの意。舊訓イノレドモ。代匠記クミノメド。玉の小琴コヒノメド。古義ノマメドモなどの諸訓がある。イノルの例は、卷二十（四三九二）に、阿米都之乃以都例乃可美乎以乃良波加。同卷（四三七〇）に、可志麻能可美乎伊能利都都。卷六（九二〇）に、天地之神乎曾禱。卷十三（三二八七）に、乾坤乃神乎禱而吾戀。同卷（三三〇八）に、天地之神尾母吾者禱而寸。卷十九（四二三六）に、和禮波雖禱卷而寢之。卷二十（四四〇八）に、須賣可未爾奴佐麻都利伊能里麻宇之弖等の例がある。

〇**我王者・高日所知奴**　ワガオホキミハ・タカヒシラシヌと訓む。皇子が神上りまして、天を領し

たまうたといふ意、薨去せられたといふ意に落著くのである。舊訓タカヒシラレヌであつたのを、童蒙抄でタカヒシラシヌと訓み、諸家多く之に從つた。この場合のシラスは四段に活用せしめる。

大意 皇子の御命が永久に榮えませと、哭澤の神社に神酒を奉つて祈り申したけれども、その甲斐もなく神去りたまうたのは悲しい極であるといふやうな意である。『歌ノ心ハ、皇子ノ煩ハセ給フ時、ナホラセタマハムコトヲ祈テ、ナキサハノ神社ニ神酒ヲ奉リ、誠ヲイタセシカヒナク神サラセシメ給フガ恨メシキト神ヲ恨ルナリ』（代匠記精）といふのは、左註に重きを置いての解釋であるが、ここはさう瞭然としなくとも解釋の出來る歌である。

鑑賞 哭澤の神に長生或は平癒について禱るといふのは、恐らく作歌當時の習俗であつて、それは伊邪那岐（いざなぎ）命が伊邪那美（いざなみ）命を悲しみ慟哭せられたその涙が成られた神が、即ち哭澤の神であるから、その神に長生・平癒を禱るといふことになつたものであらう。そこで、人麿の作でなしに、『檜隈女王泣澤神社を怨む歌なり』といふ別傳もあつたわけであり、やはり高市皇子を悲しみまうした歌だといふことは大體間違がないやうにおもへる。

前の二つの短歌の聲調に比して、少しく細かいやうだが、下の句などには切實な點があつて、人麿をしのばしめるやうなところもある。そこで縱ひ、人麿自身のものでなくとも、幾分人麿の手が

入つてゐる點がないとも限らない。『わが王は高日知らしぬ』などのところが卽ちそれである。一つには、『天知らしぬる』といひ、ここでは、『高日知らしぬ』と云つてゐるのである。

○

【卷九・一七一〇】

吾妹子(わぎもこ)が赤裳(あかも)ひづちて植(う)ゑし田(た)を苅(か)りて藏(をさ)めむ倉無(くらなし)の濱(はま)

吾妹兒之　赤裳泥塗而　殖之田乎　苅將藏　倉無之濱

左註に『右二首或云柿本朝臣人麻呂作』とあるその第一首である。倉無之濱は豐前國中津の濱で今龍王濱と稱してゐる。

代匠記に云、『此歌は、上はことごとく倉無の濱と云はむ料にて、あはれ倉無の濱やとほむる意なり』云々。古義に云。『今按(フ)に、此は倉無之濱(クラナシノハマ)を、をかしくつゞけなしてよみて見せよなど、人のいひたる時の興に、よめるにもあるべし。さなくては、倉無の濱と云こと、その濱の用なければ、何の爲によめりとも知がたし』云々。

古義がこの歌の作歌動機まで考へたのは無駄ではない。ただ、この一首は、契沖のいふごとく、『あはれ倉無の濱や』といふのだから、旅中の作と解することも出來る。人麿の作とせば、人麿は九州に旅行したことがあるから、そのころに知つた地名であらう。そして倉無といふ地名そのものに興味を有つたために、かういふ序の形式を取つたものであるが、同時に景色に感心したことをも想像することが出來る。この地名は後世の歌の名所と謂ふほどまでは發達しない時代だから、恐らく實地に踏んでの作だらうと想像せられるのである。

この歌の、『吾妹子が赤裳ひづちて植ゑし田を苅りて藏めむ』といふ序は、理窟で行つて居り、機智で行つてゐるから、後世の吾等がそれを眞似ることはどうかと思ふが、古歌として鑑賞する場合に、この序は矢張り相當におもしろいのである。理で行つてゐるが、若い健康な妻が働いて植ゑた田云々といふところなども、何處か具象的に響くものがあつていい。人麿の歌に老境の歌が無いと眞淵も注意してゐる如く、人麿にはまだ新鮮な氣持が失はれずにゐたものと想像することが出來る。しかしこの歌を人麿の作と假定しても、さう出來のいい歌ではない。人麿歌集の歌、或はその他の讀人不知の歌にも、この歌よりいいのが幾らもあるのだから、人麿の特徴を持つ歌風の歌として直ぐ取あげることの出來ないものに屬してゐるだらう。

百傳ふ八十の島廻を榜ぎ來れど粟の小島し見れど飽かぬかも

百傳　八十之島廻乎　榜雖來　粟小島志　雖見不足可聞

左註に、『右二首或云柿本朝臣人麻呂作』とあるその第二首である。初句、舊本百傳之とあるが藍紙萬葉に據つて百傳とし、第四句、小島者とあつたのを類聚古集に據つて小島志とした。此は白文萬葉集の意見に本づいた。粟の小島に就き、諸抄では、神代紀の淡洲、ある書の淡路洲、伯耆風土記の相見郡粟島等を考へてゐる。眞淵は、和名抄に阿波板野郡小島(乎之萬)と見ゆ、紀伊國粟島にあらず、と云つてゐるが、吉田氏の地名辭書には讃岐國木田郡庵治村の海上にある大島だらうと云つて居る。

百傳ふは八十への枕詞の格に使つてゐ、八十は澤山のといふ意味であり、島廻は島のまはりをいふのだから、つまり島といふ意味に落著く。澤山の島々を漕ぎめぐつて見たが、この粟の小島は實

に景色がいい。幾たび見ても飽かない。去るのが惜しくもあるといふ底意をも籠めてゐる。普通の旅行の歌で、さう骨折つたものでなく、ただ厭味なく自然に流露してゐるのを學ぶべきである。

結句の、『見れど飽かぬかも』は萬葉にはなほ用例があるけれども、何處かいいところのある言葉と見えて、現在にも活かし得る表現法である。

霰うつあられ松原住吉の弟日をとめと見れど飽かぬかも（巻一。六五）

山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河内は見れど飽かぬかも（巻六。九〇九）

若狹なる三方の海の濱清みい往き還らひ見れど飽かぬかも（巻七。一一七七）

吾妹子が業と造れる秋の田の早穗の蘰見れど飽かぬかも（巻八。一六二五）

古の賢しき人の遊びけむ吉野の川原見れど飽かぬかも（巻九。一七二五）

秋田刈る假廬の宿にほふまで咲ける秋萩見れど飽かぬかも（巻十。二一〇〇）

白露を玉になしたる九月のありあけの月夜見れど飽かぬかも（巻十。二二二九）

あをによし奈良の都にたなびける天の白雲見れど飽かぬかも（巻十五。三六〇二）

大宮の内にも外にも光るまで零らす白雪見れど飽かぬかも（巻十七。三九二六）

秋風の吹き扱き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも（巻二十。四四五三）

〔巻九・一七六二〕

明日のよひ逢はざらめやもあしひきの山彦響め呼び立て哭くも

明日之夕　不相有八方　足日木之　山彦令動　喚立哭毛

○

この歌の左註に、『右件歌或云柿本朝臣人麻呂作』とあるものである。この歌は、『詠鳴鹿歌一首并短歌』の、『三諸の神奈備山に立ち向ふ三垣の山に秋萩の妻をまかむと朝月夜明けまく惜しみあしひきの山びことよめ喚び立て鳴くも』の反歌になつてゐる。

一首の意は、今夜あのやうに牡鹿が妻を戀ひて鳴いて居る。山に反響するまでに鳴いて居る。あのやうに鳴いてゐるのだから、明日の夜には必ず妻に逢ふに相違ない。といふ意味で、自分の身に即せしめつつ鹿の鳴くのを聞いてゐるところである。初句第二句で、『明日のよひ逢はざらめやも』と反語で強く云つたのが無理にひびかないところにこの歌の力量が存じてゐる。また第二句で、『やも』と云つて、結句に、『哭くも』と据ゑてゐるが、この同音が耳觸りしないのも注意すべきである。

『響め』は他動詞に使ひ下二段に活用せしめたものであらうから、其處にも言葉に一種の强みが出て來て居るやうにおもへる。『玉の緒を沫緒に搓りて結べれば在りて後にも逢はざらめやも』（卷四。七六三）。『あしひきの名におふ山菅おしふせて君し結ばば逢はざらめやも』（卷十一。二四七七）。『天地の神を禱りて吾が戀ふる公い必ず逢はざらめやも』（卷十三。三二八七）。『命をし全くしあらばあり衣の在りて後にも逢はざらめやも』（卷十五。三七四一）等の結句が參考になる。

秋萩の散りの亂に呼び立てて鳴くなる鹿の聲の遙けさ　（卷八。一五五〇）

山彥の相響むまで妻戀に鹿鳴く山べに獨のみして　（卷八。一六〇二）

この頃の朝けに聞けばあしひきの山を響もしさを鹿鳴くも　（卷八。一六〇三）

君に戀ひうらぶれ居れば敷の野の秋萩凌ぎさを鹿鳴くも　（卷十。二一四三）

夜を長み寐の寢らえぬにあしひきの山彥響めさを鹿鳴くも　（卷十五。三六八〇）

かういふものは、同じやうな氣持で、同じやうな看方で同じやうな技巧で歌つてゐる。そしてかういふことを繰返してゐるうちに稀薄になり平凡になつてしまふのであるが、さういふ民謠化し平凡化したものでも萬葉集の歌は何處か棄てがたい面白いところがある。この人麿の歌といふのも、旣に民謠化してゐるけれども、初句第二句あたりの云ひざまには諳記で作つてゐない、强いところ

があつて其處に性命を感ずるのである。

○

【巻十五・三六一一】

大船に眞楫しじ貫き海原を榜ぎ出てわたる月人壯子

於保夫禰爾　麻可治之自奴伎　宇奈波良乎　許藝弖天和多流　月人乎登祜

『七夕歌一首』といふ題があり、『右柿本朝臣人麿歌』といふ左註がある。結句、乎登祐とあつたのを契沖が、『祐は書生の誤なり祜に改たむべし』と云つて居り、白文萬葉集も西本願寺本に據つて祜と改めた。代匠記にも官本祐作レ祜と注してゐる。

この歌は七夕歌とあるが直接七夕の歌といふよりも、天空に月が照つて居り、そこに雲が動き、雲が月光に照らされて海の如くに見えるによつて、月を月人壯子として、月が天の海に大船で漕ぎ渡る壯子の趣の歌にしたものである。それだから海のことを云つてゐるが實は天空の歌なのである。

『大船に眞楫繁貫き大王の命かしこみ磯廻するかも』（巻三。三六八）等用例が可なりある。大船に左

右に澤山の楫を貫いて漕ぐさまをいふのである。さて、この歌は天空の雲と月との歌だが、天平八年の夏六月に新羅國へ派遣された使どもが當所誦詠古歌の一つとしてこの歌を誦したのは、海上の夜であつたから、丁度海の事も字面にあるから誦詠歌としてこの歌をも選んだものらしいのである。それだからこの歌は、『天の海に雲の波立ち月の船星の林に榜ぎ隱る見ゆ』（人麿歌集出。卷七。一〇六八）などと趣向の似たものと考へていいだらう。月人壯子は、『天漢舟こぎわたる月人壯子』（卷十。二〇四三）。『いつまでか仰ぎて待たむ月人壯子』（卷十。二〇一〇）。『天の海に月の船うけ桂梶かけて榜ぐ見ゆ月人壯子』（卷十。二二二三）などの用例がある。古義に、『歌の意は、海ノ上に浮べる月ノ光を、大船に楫貫て、海原をわたる人に見なして云るにて』云々と、海上に月の映つてゐる趣の歌に解し、略解も、『海の月を詠める歌なるを後に牽牛の事と思ひて七夕歌と添書せるにや』と云つてゐるのは感心しない。

この一首は取りたてていふ程の歌でなく、人麿の歌とせば出來が好くないから、初期のものか、或は人麿の作では無いやうに思へる。眞淵などは初から問題にしなかつたらしかつた。併し人麿作と左註にあるからさう思つて鑑賞したのである。

人麿長歌評釋

長歌小感

一

私は短歌一首を連續的聲調と考へて居るものだから（齋藤、「短歌聲調論」「萬葉短歌聲調論」）、短歌よりも長い形式の長歌をば連續的聲調として論ずるのは當然のこととおもふが、これは單に短歌聲調論からの推論でなしに、記紀萬葉の長歌を一通り見渡しての結論である。

長歌が、個人發生的であらうが社會發生的であらうが、長い形式にするには、その間に聲調の調和と抑揚と變化と緊張とを保ちつつ續けて行くのであるから、自然に繰返しとか對句とかいふやうなものが出來て來る。

この繰返しは、記紀の歌について見れば、『や雲たつ』の短歌をはじめ隨處に出て來る。そしてその繰返しつつ進行して行く樣式は、例へば、

遠々し　高志の國に
賢女を　有りと聞して
麗女を　有りと聞して
眞聘に　在り立たし
聘に　在り通はせ

の如くに、はじめは、『聞して』を繰返して調子をとり、次に『立たし』と云つて今度は、『通はせ』と云つて變化して、新に言葉を起してゐる。どう起してゐるかといふに、

大刀が緒も　未だ解かずて
襲をも　未だ解かねば
處女の　寢すや板戸を
押そぶらひ　吾立たせれば
引こづらひ　吾立たせれば

といふ具合に、繰返しつつ、變化せしめる手法で、實に自然に行つてゐて旨いものである。そしてこの繰返しの法は、人間表出運動の自然的なあらはれであるから、同じやうな事が佛典などにもよく出て來る。例へば手近な佛說阿彌陀經あたりを見ても、切りのところで、『成就如是、功德莊嚴』

を三度も繰返したかとおもふと、今度は、『福德因緣、得生彼國』とし、『應當發願、生彼國土』と云つて、今度は、『一切諸佛、所護念經』をば數回繰返すといふ具合である。そしてこの手法は人麿の長歌にもよくあり、期せずして一致してゐるのである。

侍へど　侍ひ得。ね。ば。
春鳥の　さまよひぬ。れ。ば。
嘆も　いまだ過。ぎ。ぬ。に。
憶も　いまだ盡。き。ね。ば。

右のやうな繰返しと變化の具合とである。かういふ所謂『對句』のことは小國重年の分類法と橘守部の分類法と鹿持雅澄の分類法等とに據つて後段に記して置いた。

次に長歌は對句の無い場合でも、種々の助詞、助動詞、それから動詞の諸段階、それから枕詞、序詞、それから省略法などによつて、言葉を續け進行せしめてゐるものである。その連續進行の有樣は誠に自然且つ巧妙であつて、單純な公式的法則などを以て律せられないものである。また必ずしも五音、七音でないものでも連續しないやうでゐて、なかなか微妙なる關係を以て連續してゐる。そこで、長歌は音樂に譬へれば、單聲樂的よりは複聲樂的であり、獨奏樂的よりは合奏樂的であり、

單器樂的よりは交響樂的であるから、上に說いたやうな技法は、要するにさういふ音樂上の效果を全うせむがための自然的實行だと謂ふことも出來る。

藤原京の柿本人麿の長歌は一つの制掬的なものであるが、これを以て支那の詩の模倣であると論ずる人が近時なかなか多くなつて來た。併し人麿ぐらゐの力量のものになると、それに働きかけた要素も決して單元的でないのであるから、さう單純な模倣呼ばはりはどうか知らんと自分はおもふ。

○古事記雄略條

纏向の　日代の宮は
朝日の　日照る宮
夕日の　日かげる宮
竹の根の　根だる宮
木の根の　根ばふ宮
八百土よし　伊杵築の宮
眞木拆く　檜の御門
新嘗屋に　生ひ立てる

百だる　槻が枝は
秀つ枝は　天をおへり
中つ枝は　東をおへり
下枝は　鄙をおへり
秀つ枝の　枝の末葉は
中つ枝に　落ち觸らばへ
中つ枝の　枝の末葉は
下つ枝に　落ち觸らばへ

かういふ繰返しと變化とは、草卒に考へれば文選の賦あたりの影響と直ぐ考へるかも知れないが、必ずしもさう單純に片付けるわけには行かない。從つて人麿は漢文が能く出來どしどしそれを作歌に應用し得たやうに解釋するのも、人麿のためにあへて不名譽といふことにもならぬけれども、愚見では、人麿の歌といふものはそんなに模倣のみによつて出來たものでないといふことになる。

次に、長歌はかくの如くに『連續聲調』であつて、繰返しがあり、對句があり、序詞があり、枕詞があり、等々のために、その意味の內容は比較的單純である。この點につき、田安宗武が國歌八

論（土岐善麿校訂改造文庫参照）で云つてゐる。『意の深き淺きは詞の長き短きによるべからず。既に長歌と反歌とをあはせ見るに、多くは長歌よりは反歌のかたに感情のこもれるをもて知るべし。ここに論せしは、詩と歌とはその體格の各別なるものなれば、歌を詩の如くに作りたらんには、よのつねの物がたりのごとくなるべし。また詩の意を歌のすぢにていひかなへんには、意味の深く長き事さらに詩には及ぶべからざる故に、さはいひし也』と云つて居るのは、流石に長歌の本質を道破したものといふことが出來る。そこで、長歌を論ずるに際し、これの內容を論議するにその標準を支那の詩を以て律し、或は近代西洋詩を以て律するといふことは困難であり、また時によつては間違つた判斷に導かれ易いのである。また實作者としての覺悟も、縱しんば近代的內容を盛るにせよ、その內容の單純化、精煉といふことに用意を拂ふことが大切である。萬葉卷三（三一七）の山部赤人の不盡山の歌は內容を單純にしたために、却つて無名氏（或は高橋蟲麻呂）の不盡山の歌（同卷。三一九）よりも上位に位するのは、內容が精煉され、調がくだけない爲である。赤人の歌の方は、連續句で進行して來て、『雪は降りける』で切つたかと思ふと、直ぐ、『語り繼ぎ言ひ繼ぎ行かむ』と云つて小休止を置いた。そのために、『雪は降りける』が切れずに連續聲調の效果をなすのである。然るに、無名氏の方は、『靈（くす）しくも、います神かも』で切つて、『石花海（せのうみ）と、名づけてあるも、その山の、包める海ぞ』で切つて、

其間は長過ぎるから連續の邪魔をして居る。また、『やまとの國の、鎭とも、坐す神かも、寶とも、なれる山かも、駿河なる、不盡の高峯は、見れど飽かぬかも』といふのでも、『かも』の使ひざまが旨くないために聲調がくだけた。この一比較例でも長歌のどういふものだかが分かるのである。

卷十（一九三七）の『鳥を詠める』といふ古歌集にあるものは、簡潔で、省略句法があり、繰返しもあり、愛すべき長歌である。卷九（一七五五）の霍公鳥を詠んだ歌もまた同樣で、人麿のものほど感慨が目立たず素朴でなかなかいい。そのほか、卷一（一）の雄略天皇御製。（二）の舒明天皇御製。（三）の中皇命の歌。（二五）の天武御製。（一三）の中大兄三山歌。そのほか、卷十三の、（三二六八）とか、（三二八〇）とか、算へ來ればまだ幾首かあつて、比較的短くて、渾然としたもののみである。長歌形式のいいところが此等の歌に遺憾なくあらはれてゐる。

卷九（一七四〇）の水江浦島子を詠める長歌は、敍事詩で長いものだが、これは流石に碎けてゐない。全篇の終まで緊張して讀ませるのは、作者の感興が横溢してゐるためであらう。同卷（一八〇七）の眞間娘子を詠める歌。同卷（一八〇九）の菟原處女の墓の歌等も、物語で内容が相當に複雜してゐるにも拘らず、終まで連續せしめて居るのは、なかなかの力量のある人の作だといふことを思はしめる。（作者は、高橋蟲麻呂であらうか）それでも矢張り材料本位を感ぜしめるので、文學としての價値からいふと、同じ作者

のものでも却つて卷九（一七三八）の珠名娘子を詠める歌などの方が優れてゐる。これは同じ長歌でもこの歌の方が比較的短く、内容が煩瑣でないためである。この珠名娘子の歌は、人麿の長歌などと違つて、波動的でなく、素朴のやうで巧なところがあり、切れてゐるやうで切れず、成功して居るのは、餘り長くしなかつたためであらうか。

卷五（八九二）の「貧窮問答の歌」は、憶良の力量を以てしても、連續の具合にまづい點がところどころにある。それに調が乾燥してゐて、珠名娘子の歌にある如き潤ひがなく、またその素朴もないといふところが目につく。（八九四）の「好去好來の歌」でも、『幸はふ國と、語り繼ぎ、言ひ繼がひけり、今の世の、人も悉』の『言ひ繼がひけり』の切れなどは如何にも具合が惡いのである。（八九七）の「老身重病年を經て辛苦す及び兒等を思ふ歌」でも、『厭けく辛けく、いとのきて、痛き瘡には』云々といふあたりは、自然的に連續してゐる聲調ではない。恐らく憶良は支那語の聲調に馴致して日本語の聲調のいいところを忘れてしまつたのではなかつただらうか。憶良には類聚歌林の編纂があるくらゐだから、和歌をも相當に勉强したに相違ないが、日本語の聲調を悟入するに邪魔したものが何か憶良の教養にあつたに相違ない。旅人の歌調と憶良の歌調の相違もまた其處に本づくのではなからうか。同じ憶良の長歌でも、卷五（八〇二）の長歌には長歌本來のいいところが出てゐるの

である。『何處より、來りしものぞ』の句なども、態とらしい句であるにもかかはらず、全體としては態とらしく響いて來ない。これこの歌は短く、內容がごたごたしてゐないためである。

以上を以て、長歌の本質の好いところは何處にあるかといふ點に就いての愚見の一端を述べたつもりである。人麿は長歌を作るに際して、さういふ點に顧慮し種々工夫したことが明かである。そして從來の歌謠から一歩出た新境を拓くに當つて、その連續聲調を奈何にして遂行するかについて骨折つたことも また明かである。そしてその中には枕詞があり、對句があり、後世歌格研究者によつていろいろと分析せられたものが含まつて居るのである。次に、小國重年、橘守部等によつて研究せられた部分を抄記して、愚見の參考とする。

二

小國重年の「長歌詞珠衣」では長歌をば、大・中・小といふ具合に分類してゐる。

小長歌　七句から十五句までの長歌
中長歌　十六句から五十句までの長歌
大長歌　五十一句からもつと句數の多い長歌

この分類の根據とするところは、ただ便利だといふのにあり、一種の約束であるけれども、この約束を守るときには一つの便利な分類だと云つていい。

次に、重年は、『對句』に就いて考察して、其にも命名分類して居る。對句の定義として、『對句てふことは、彼れとこれとをむかひ合せたる詞をいふ。それがなかにしも、おなじ詞をむかへたると、物ことにして詞をのみむかへたるとあり』と云つて居り、橘守部の定めた定義よりも簡素である。

一　句　對

「おぎそ山　「朝つゆのごと　「いそひ居るかも
「みぬの山　「夕ぎりのごと　「むかひ居るかも

二　句　對

「くにはらは・けぶりたちたつ　「大みやは・こゝときけども
「うなはらは・かまめたちたつ　「大とのは・こゝといへども

「あけくれば・なみこそきよれ　「しらくもの・たなびく國の
「ゆふされば・かぜこそきよれ　「あをぐもの・むかふす國の

四句連對

「うらなしと・ひとこそみらめ「よしゑやし・うらはなくとも
「かたなしと・ひとこそみらめ「よしゑやし・かたはなくとも

ときなくぞ・雪はふりける　そのゆきの・ときなきがごと
まなくぞ・雨はふりける　そのあめの・まなきがごと

くにはしも・おほくあれども　山なみの・よろしきくにと
さとはしも・さはにあれども　川なみの・たちあふさとと

六句連對（二句連對三對）

おきつなみ・きよすしら玉　もとむとぞ・きみがきまさぬ　ひさならば・いまなぬかばかり
へつなみの・よするしら玉　ひりふとぞ・きみはきまさぬ　はやからば・いまふつかばかり

さかしめを・ありときかして　さよばひに・ありたたし　大刀がをも・いまだとかずて
くはしめを・ありときこして　よばひに・ありかよはせ　おすひをも・いまだとかねば

○この如き連接法で、八句連對、十句連對も出來るのであるが、實際はさういふものは比較的少く、長いものは『長對』を以て連續せしめて居る。

十句連對

おもふそら・やすからなくに　あをなみに・のぞみはたえぬ　かくのみや・いきづきをらむ
なげくそら・やすからなくに　しらくもに・なみだはつきぬ　かくのみや・こひつつあらむ

さにぬりの・をぶねもがも　あさなぎに・いかきわたり
たまきの・まかいもがも　ゆふしほに・いこぎわたり

四句長對

「尾花ちる・しづくの田居は・かりがねも・寒くき鳴きぬ
にひはりの・とばのあふみも・秋風に・しら波たちぬ

「あめつちは・ひろしといへど・あがためは・せくやなりぬる
ひつきは・あかしといへど・あがためは・てりやたまはぬ

○この格法の實例がなかなか多い。

五句長對

「こなみが・なこはさば・たちそばの・みのなけくを・こきしひえね
うはなりが・なこはさば・いちさかき・みのおほけくを・こきだひえね

○この奇數對句の實例は少い。

六句長對

「玉ぼこの・道ゆく人は・おのがゆく・道はゆかずて・よばなくに・かどにいたりぬ
さし並ぶ・隣の君は・あらかじめ・おの妻かれて・こはなくに・かぎさへまつる

「春さりて・ぬべをめぐれば・面白み・われを思へか・さぬつ鳥・きなきかけらふ
秋さりて・山べをゆけば・なつかしと・吾を思へか・天雲も・いゆきたなびく

十句長對

「ぬばたまの・くろきみけしを・まつぶさに・とりよそひ・おきつとり・むなみるとき・はたたぎも・
そにどりの・あをきみけしを・まつぶさに・とりよそひ・おきつとり・むなみるとき・はたたぎも・

これはふさはず・へつなみ・そにぬぎうて
こもふさはず・へつなみ・そにぬぎうて

二句對・四句對の聯接

┌ながちちに・にてはなかず┐┌卯花の・咲きたるぬべゆ・飛びかけり・きなきとよもし
└ながははに・にてはなかず┘└橘　の・花をゐちらし・ひねもすに・なけどききよし

┌思ふそら・やすからなくに┐┌きぬこそは・それやれぬれば・つぎつつも・またもあふといへ
└歎くそら・やすからなくに┘└たまこそは・をのたえぬれば・くくりつつ・またもあふといへ

二句對・六句長對の聯接

┌もゝきなす・山はこだかし┐┌うぐひすの・きなく春べは・いはほには・山下ひかり・にしきなす・
└おちたぎつ・せのとも清し┘└さをしかの・つまよぶ秋は・あまぎらふ・時雨をいたみ・さにづらふ・
　花さきをり
　黄葉散りつつ

八句長對・二句對の聯接

┌かぎろひの・春にしなれば・かすが山・みかさのぬべに・さくらばな・このくれがくり・かほどりは・
└つゆじもの・秋さりくれば・いこま山・とぶひがをかに・はぎのえを・しがらみちらし・さをしかは・
　まなくしばなく┐┌山みれば・山もみがほし
　つまよびとよむ┘└里みれば・里もすみよし

三並對

うたびとと・わをめすらめや
ふえふきと・わをめすらめや
ことひきと・わをめすらめや
けふけふと・あすかにいたり
たてども・おきなにいたり
つかねども・つくぬにいたり

右の如き、聯接命名のほかに、重年は、二句對句の中間に四句長對句をはさみてよめる格。六句長對句を二つ重ねたる下に二句對句をおきてよめる格。二句四句と長對句の格。二句對句と二句四句の長對句と重ねたる格。四句六句と長對句の格。六句四句と長對句の格。四句六句長對句と二句對句と重れる格。二句對句と十四句十二句の長對と重れる格。四句六句の長對と八句十二句の長對と重れる格。十八句十二句の長對句の格。十句八句長對と六句八句長對と二句對と三ッ重りたる格。三並對句と二句對句と重れる格。三並對句と四句長對句と重れる格等の場合を考察してゐる。なほ重年は、それ等の廣義に於ける對句といふもののほかに、『重ね詞』、『序詞』の種々の格をも分類して居る。

要之、長歌の句の進行する狀態は、右に於ける如き對句の組合せに因つたものの多いのは事實である。そして、對句に枕詞・序詞を配し、さういふものの入つて居る全體として考察し、重年は、次の如くにも長歌を分類して居る。

枕詞をおかずしてよめる歌の格。同二句對句を一所おきてよめる歌の格。同二句對句を二所におきてよめる歌の格。同二句對句を三所におきてよめる歌の格。同四句連對句を一所おきてよめる歌の格。同初句に二句對句をおきてよめる歌の格。同初句に二句對句をおきまた中間に二句對句をおきてよめる歌の格。同うちかへしてよめる歌の格。同二句對句または四句連對をおきてうちかへしてよめる歌の格。同四句連對句一所二句對一所おきてよめる歌の格。同二句對句と長對句と重ねてよめる歌の格。同初句六句連對句をおきてよめる歌の格。同六句長對句をおきてよめる歌の格。同三並對句と二句對句とかさねてよめる歌の格。同終句に一句對をおきてよめる歌の格。同終句に三句長對句をおきてよめる歌の格。枕詞をおきて對句をおかずしてよめる歌の格。同二句對句を一所おきてよめる歌の格。同二句對句を二所におきてよめる歌の格。同四句連對句一所おきてよめる歌の格。同初句に二句對をおきてよめる歌の格。同うちかへしてよめる歌の格。同二句對句と四句六句との長對句とをおきてよめる歌の格。同四句連對句と六句連對句とをおきてよめる歌の格。同二句對句二所四句連對一所おきてよめる歌の格。同四句長對句一所二句對句七所おきてよめる歌の格。同初句に二句對句をおき終句に一句對句をおきてよめる歌の格。同初句に二句對句をおき中間に四句連對句をおきてよめる歌の格。同初句に四句連對句をおきてよめる歌の格。對句をおかずして重ね詞をおきてよめる歌の格。對句と重詞とをおきてよめる歌の格。重詞をおきてうちかへしてよめる歌の格。同初句に二句對句をおきてよめる歌の格。同二句對句を二所におきてよめる歌の格。同初句に四句連對をおきてよめる歌の格。同初句に六句連對句をおきて

よめる歌の格。同二句對句を一所おきてよめる歌の格。また一の格。對句をおかずして序詞をおきてよめる歌の格。二句對句と序詞とをおきてよめる歌の格。四句連對と序詞とをおきてよめる歌の格。初句に二句對をおきて又中間に二句對句と序詞をおきてよめる歌の格。連對句一所二句對句二所と序詞とをおきてよめる歌の格。四句連對句と二句對句と序詞とをおきてよめる歌の格。初句に六句連對句と序詞とをおきてよめる歌の格。長歌のなかになかばにて切るゝ一の格。

重年は右の如くに分類して居るが、斯く一々命名して居れば無限に續く訣で、單純化を歸趣とすべき分類研究の本旨にもとるといふことも出來る。併し當時にあつては分類研究の方法がいまだ幼稚であつたのだから、忍耐して重年の努力を尊敬しつつ讀むべきものである。

橘守部の「長歌撰格」は、重年のとはまた別途に出でた歌格の研究である。『守部つら〳〵、いにしへの雅樂譜、また神樂、催馬樂等の、古き節付の本につきて、年來考へ合せけるに、上つ代の長歌は、當昔の雅樂の、大かたの曲調に隨て直に歌ふべくしらべなしつれば、やがて其うたを歌舞の時に、ものゝねに合せてうたふとも、よくその樂曲の音調に協ひて、殊更にぬきさしなどはせずて、そのまゝに諷ひて合しなり。』といひ、また、『其神たちのよみ給へると云ふにもあらず。たゞ古くより、雅樂寮に、八千矛舞など云曲ありて、其曲にうたひ傳へたりし事、彼久米舞などの曲に准へ

てしるし。凡そ古事記書紀に載せたる、古き代の歌どもは、皆雅樂寮にうたひ傳へたるを、彼書撰べりし時獻らしめて錄されたる事、既に先注どもに云るがごときなり。右等の歌の次々に、某曲（ナニブリ）、また上歌（アゲウタ）、志都歌（シヅウタ）、志良宜歌（シラケウタ）、片下（カタオロシ）、返歌など云ことを添たるも此故なり。然るにその時、長歌のみうたひしまゝを奉りて、片歌、短歌、旋頭歌等は、皆ふしに添たる調べどもを省きて出せる、是本ト短歌は、口誦のみの物にして、殊に國史の上には、うたふ爲に載するにあらざればなり』といふのが、長歌に、『詞（コトバ）の美麗（アヤ）』のある主な原因だとして居る。

そして、その詞の美麗（アヤ）(綾)を成す要素として、枕詞とか、序詞とか其他種々考へてゐるが、守部は、『疊句』といふものを考へてゐる。この疊句は、重年などの謂ふ、『對句』に當るのだが、守部は對句とは謂はず、『疊句と云は、同語を重ねてしらべたるをいふ。また同じ事を少しづゝ詞をかへていへる事も常多し。そは殊に雅びて聞ゆ。世に是を對句とおぼえたる人もあれど、こゝの歌なるは猶皆疊句の例にして、對句にはあらず。漢國の詩文辭に、ことさらに物二つを取合せて、必しも反對していへる類とは同じからず。』といふので、『さかしめを・ありときかして、くはしめを・ありときこして』といふの類で、『左右もはら同ことにして、實は一句づつにて事たりたるを、次の句どもは、只重ねてしらべをたすけたる也』と説明して居るし、漢詩にある、潮聲蓮葉雨・野色稻花

風などとは違ふのだと守部は云ふのである。なほ守部は疊句に幾つか分類をしてゐる。

疊句

もとべには　いくみ竹おひ
すゑべには　たしみ竹おひ
たままきの　あぐらにたゝし
しづまきの　あぐらにたゝし

聯疊　疊句をもて、章段なしたるを云。たゞ疊句のおほきを云にはあらず。

上つ瀬に　いぐひをうち
下つ瀬に　まぐひをうち
いぐひには　かがみをかけ
まぐひには　またまをかけ
またまなす　あがもふいも
かがみなす　あがもふつま

隔對　章句を隔てて對せるをいふ。

時なくぞ　雪は降ける
間なくぞ　雨は降ける

その雪の　時なきがごと
その雨の　間なきがごと

招　應　彼事を招き出むとして、先づ此事をいひ、此事より卽て彼事に相應じゆく所のあるを云。

ぬばたまの　黒きみけしを
まつぶさに　とりよそひ
おきつとり　むな見るとき
はたゝぎも　これはふさはず

喚　響　響の聲に應ずるがごとく、そこゝの句に、其事どものひゞきあひたるを云。

やすみしし　わが大王の　ゆふされば　めしたまふらし　あけくれば　とひたまふらし……あら
たへの　衣のそでは　ひるときもなし

首　尾　初めいひ出たる言どもの、いたづらにならざるやうにとぢめたるを云。

みよしぬの　みみがのみねに　時なくぞ　雪は降ける
間なくぞ　雨は降ける
その雪の　時なきがごと
その雨の　間なきがごと　くまもおちず
もひつゝぞ來る　その山路を

變疊　或は半句と一句とを重ね、或は一句と一句半とをかさねて、上を合せ下を活かしつゞけたる類をいふ。

やまがたに　まきしあたねつき
　そめきが汁に　しめごろもを
　　まつぶさに　とりよそひ
　　　おきつとり　むな見るとき
　　　　はたゝぎも　こしよろし

對句　（茂吉云）これは守部の謂ゆる狭義の對句の意で、他物をとりあはせて一對にいへるを云。併し上代の歌句には意識してさうしたのは少いから、對句といふのも、實は疊句の一種と看做すべきものである。

「あをなみに　望はたえぬ　　「ゆくみづの　かへらぬ如く
「しらくもに　涙はつきぬ　　「ふくかぜの　見えぬが如く

調段　上つ代の歌は、一篇の上を二段にも、三段にもうたへる事ある、其句どもの段をはじめとして、又或は物の非レ一をいひつゞくるとて、そのをちをちに、句段をなせるたぐひをいふ。

こやせば　川藻の如く　なびかひし　よろしき君が』
あさみやを　忘れ給ふや

ゆふみやを　そむき給ふや　うつそみと　おもひし時に』

春べは　花折かざし

秋たてば　黄葉かざし　しきたへの　袖たづさはり』

かがみなす　見れどもあかず

もちづきの　いやめづらしみ　おもほしし云々』

守部説明して、『これらは、その事物をあやにつゞけたるが、其事其物の多端なるにひかれて、おのづから段をなせるなり。故その段、おほくは一首のはじめ、また中間までにありて、その句々、或は隔疊となり、或は變疊となれる、是もひとつのあやにぞある』と云つてゐる。

以上の如く、守部の分類の方は、意味の要素に本づき、重年の分類の方は、音の要素に本づいた點が多い。それゆゑ、守部の「長歌撰格」には、『詞のあや』の要素として、連實、光彩、數量、方邊等を考へ、それを一々長歌について標點を打つてゐる。これも寧ろ意味の要素に重きを置いてゐることが分かる。併し、歌の聲調は、單に音の要素のみを以て論ずることが出來ず、必ず意味の要素をも取入れて論ずべきものだから、重年の分類も守部の分類も共に參考として長歌聲調の理會に役立たしめねばならぬ。

また、鹿持雅澄の「永言格」では、雙句（二句づつ雙べ云る例、四句づつ雙べ云る例、六句づつ雙べ云る例、八句づつ雙べ云る例、十句づつ雙べ云る例、廿八句づつ雙べ云る例）。括句（句を三重に括（クサ）り云る例。これは例へば、青山にぬえは啼き。さぬつとりきぎしはとよむ。にはつとりかけはなく。の如くである）。獨句（句を雙べずして一首をととのへたる例）。短句（五言位を三言、四言、七言位を三言、四言、五言、六言）。長句（五言位を六言、七言、七言位を八言、九言）。結尾（五言七言、五言、七言、七言。七言三つ）。體格（七句、九句、十一句、八句、十句、十二句、十三句、十九句等）。發端（端に言をまうけて譬をとる。その譬へたるものを主とする等）。裝飾（端文（ハシカザリ）序詞をおく種々例）。疊句（章中に五言を重ぬ。七言を重ぬ）。補語（語を補つてはじめて理會出來る例）。照略（言を照らして略く）等種々の分類がある。その雙句等の大體は重年や守部等の分類と大差ないが、雅澄は、長歌の中に、省略（照略）技法のあることに注意し、また句と句との間に、『意を含ませて』云々と説明して居るところがあつて、大體に於て私の連續聲調の考と相似た點のあることを注意したのであつた。精細のことは「永言格」を讀むべきである。

三

歌の聲調は主に音律に懸るから、音樂的要素として聽覺に屬する論を立てるのが普通であるが、

古來歌を論ずる場合に、視覺上の『形態』に見たてて論じたものがある。中世歌學などに、『さま』といふのは卽ちそれである。長歌の本態は元來『連續』聲調のもので、特に人麿の長歌にそれが顯著であるけれども、それでもやはり其を一つの形態に見立てた論がある。橘守部の「長歌撰格」等がその例で、守部は支那の詩をも形態的に見立てて其と比較してゐる。

○詩、關雎

關々雎鳩在二河之洲一　窈窕淑女君子好逑
參差荇菜左右流レ之　窈窕淑女寤寐求レ之
求レ之不得
寤寐思服悠哉
悠哉輾轉反側
參差荇菜左右采レ之
參差荇菜左右芼レ之　窈窕淑女琴瑟友レ之
窈窕淑女鐘鼓樂レ之

○詩、漢廣

南有二喬木一不レ可レ休息（思）

漢有二游女一不レ可レ求思
漢之廣矣不レ可レ泳思
江之永矣不レ可レ方思　翹々錯薪　言刈二其楚一　之子于歸　言秣二其馬一
漢之廣矣不レ可レ泳思
江之永矣不レ可レ方思　翹々錯薪　言刈二其蔞一　之子于歸　言秣二其駒一
漢之廣矣不レ可レ泳思
江之永矣不レ可レ方思

○柿本朝臣人麻呂過二近江荒都一時作歌

たまだすき　うねびのやまの　かしはらの　ひじりのみよゆ　あれましし　かみのことごと
つがのきの　いやつぎつぎに　あめのした　しらしめししを
　　　　　そらにみつ　やまとをおきて
　　　　　あをによし　ならやまをこえ　いかさまに　おもほしめせか
あまさかる　ひなにはあれど　いはばしる　あふみのくにの　ささなみの　おほつのみやに
あめのした　しらしめしけむ　すめろぎの　かみのみことの　おほみやは　ここときけども
　　　　　　　　　　　　　　おほとのは　ことといへども
　　　　　　　　　　　　　　はるくさの　しげくおひたる
　　　　　　　　　　　　　　かすみたち　はるびのきれる

ももしきの　おほみやどころ　みればかなしも

なほ皦稲綺道秀の「長歌軌範」では、この長歌を次の如くにその形態を考慮してゐる。

(第一段)
たまだすき　うねびのやまの
かしはらの　ひじりのみよゆ
　あれましし　かみのことごと　つがのきの　いやつぎつぎに　あめのした　しらしめししを

(第二段)
そらにみつ　やまとをおきて
あをによし　ならやまをこえ
　いかさまに　おもほしめせか　あまさかる　ひなにはあれど
　　いはばしる　あふみのくにの
　　ささなみの　おほつのみやに
　　　あめのした　しらしめしけむ

(第三段)
すめろぎの　かみのみことの
　おほみやは　ここときけども
　おほとのは　こことといへども
　　はるくさの　しげくおひたる
　　かすみたち　はるびのきれる

（第四段）ももしきの　おほみやどころ　みればかなしも

（第一）□□□□』（第二）□□□□□』（第三）□□□（第四）□□（十九句）
□□□□□』

なほ、近代の西洋の詩には、意識してかういふ形態を形成せしめてゐるのがある。その標本として、獨逸のホルツの詩及び伊太利のマリネッティの詩を次に載せる。

ホルツの詩の方は、中央に基線を置いて、左右に擴がり、一行一語のこともあれば、二語のこともあり、三語四語といふやうな具合にして行を進め、詩全體として觀れば、一つの視覺的形態になるやうに工夫して居る。この詩はその一例に過ぎないが、ホルツの詩には、かういふ意識した細かい工夫が至るところにある。改行の具合なども、意識した改行であつて、これは改行に因らなければ、眞の鑑賞が出來ないほどの必然性を有つてゐるのである。マリネッティの詩も、同樣に意識した、語の配列であり、改行も決して濫りにしてゐるのではない。マリネッティの詩は、なほ、活字の大小等にも顧慮し、種々の符號等をも相交錯せしめて、一つの形態を形成せしめようと意圖してゐる。（マリネッティに就いては山宮允氏の論文がある。）

PHANTASUS

Sieben Billionen Jahre vor meiner Geburt
war ich
eine Schwertlilie

Meine suchenden Wurzeln
saugten
sich
um einen Stern.

Aus seinen sich Wölbenden Wassern,
traumblau,
in
neue,
kreisende weltenringe,
wuchs
stieg, stiess,
zerströmte, versprühte sich—meine dunkle Riesenblüte!

⁘

An einem ersten, blauen Frühlingstag,
in einer Königlich preussischen, privilegierten Apotheke zum Schwarzen Adler,
bin ich geboren.

Vom nahen Georgenturm,
über den alten Markt der kleinen, weltentlegenen Ordensritterstadt,
zwischen dessen buntlich rundholprigem pflaster
noch Gras wuchs,
durch die geöffneten Fenster,
läuteten
die Sonntagsglocken.

Niemand—, ahnte ” was.

Zu Mittag
gabs Schweinebraten und geschmorte Backpflaumen,
zum Kaffee schon
war ich
da.

Noch heut,
so oft sies mir erzählt,
lacht
meine Mutter!

⁘

mollezza
ondulazioni
del paesaggio
inghirlandato
di convogli
30000 carri
colmi
munizioni
buoi
bufali neri

treni
militari
tetti
dei vagoni
irti
di soldati
affanno
delle
locomotive
sputacchi
di vapore
vagoni
zeppppi di carri
imbottttiti d'artiglieri

corna
ondeggiamenti
STOP
avanti

rrrrantolo
d'un vagoooone
sotto
cannnnone
d'assedio
che lo monta
limite
del carico
13125 Kg.

併し日本の長歌は、一つの連續聲調のもので、古來、別行に書かずに、連續的に書いたほど、休止が少いのである。そして縱ひ意味のうへ、或は文法のうへで切れることがあつても、その休止の時間は甚だ短いものであるから、別行に書く必要がなかつたものである。それが記紀の中にある長歌には、幾らか休止の時間が長く、改行にしてもいいやうなものがあることはある。例へば、古事記神武條の、『みつみつし、久米の子が、くぶつつい、石つつい持ち、撃ちてし止まむ、みつみつし、久米の子らが』などの『撃ちてし止まむ』の處がそれである。併し吟味すればやはり連續的で、卽ち、『みつみつし、久米の子らが』を繰返して連續せしめてゐるのである。書紀繼體卷の、『庭つ鳥、雞は鳴くなり、野つ鳥、雉は響む、はしけくも、未いはずて、明けにけり、吾妹』の『響む』と『はしけくも』の間の休止の時間は短い。

書紀推古卷の、『萬代に、かくしもがも、千代にも、かくしもがも、千代にも、斯くしもがも、恐みて、仕へまつらむ、拜みて、仕へまつらむ、宴坏まつる』の、『もがも』又は、『まつらむ』の處で切れてゐるけれども、それでも、同じ語を繰返して、連續聲調を形成して居る。卽ち休止の時間が甚だ短く、改行の必要が無い程である。

同紀の聖德太子の、『しなてる、片岡山に、飯に飢て、臥せる、其旅人あはれ。親なしに、汝生り

けめや、さすたけの、君はや無き。飯に飢て、臥せる、其旅人あはれ』の如きは、必ずしも五音七音でないから、ぽつりぽつりとした歌調で、『あはれ』のところ、『君はや無き』のところで休止があるのである。併し、これも語部などが少し節をつけて語つた時には、やはり休止が短く、殆ど連續聲調として語つたのであつただらう。

萬葉卷十三(三二六八)の、『三諸の、神奈備山ゆ、との曇り、雨は降り來ぬ、雨霧ひ、風さへ吹きぬ』の『降り來ぬ』の處で切れてゐるが、これは、『吹きぬ』と『ぬ』を繰返して連續せしめてゐる。同卷(三二八〇)の、『わが背子は、待てど來まさず、天の原、ふり放け見れば、ぬばたまの、夜もふけにけり、さ夜ふけて、嵐のふけば』では、『來まさず』で切れたが、直ぐ『ふり放け』といふ行動を敍して續け、『夜もふけにけり』で切れたが、直ぐ、『さ夜ふけて』と、『夜』を以て連續せしめて居る。つまり、聖德太子の片岡山の歌のやうな、不定型らしい、ぽつぽつした歌調が、定型となり、明かに連續聲調になつて居るのは、長歌の本質が、さういふものなのだからである。

その本質的特徴は人麿の長歌に至つて異常の發達を遂げた。それであるから、人麿の長歌をば視覺形態的に觀察するのは稍當を失するものともおもふのであるが、若し形態として觀察するなら全體として、行と行との間は常に線を以て連續してゐるものとしての形態と觀ねばならず、私が評釋

中、形態を云々したのもさういふ意味で云つてゐるのである。

四

人麿長歌の聲調が、流動的な一大連續調であることは屢云つた如くであるが、賀茂眞淵も人麿の長歌を評して、『そのなが歌、いきほひは雲風にのりてみ空行龍の如く、言は大うみの原に八百潮のわくが如し』と云つたのは、人麿長歌の波の如くに進行する聲調を理會して居るがためである。

橘守部が、山上憶良の七夕歌（卷八。一五二〇）を評して、『このうた、こゝろことばあやありて、集中七夕の歌にしては、めにつくばかりなりけれど、かばかり長きつゞきの中に、變轉せるところもなく、只二句づゝの疊對のみならべたる、すこしうるさくあきたきこゝちす』と云つたのも、長歌に對する守部の考を示したことゝなる。なほ守部は、『此ぬしの歌は一體ありて、詞遣ひはひとふし雄々しくきこえたるもあれど、句格にとりては、やゝ漢めきてくだりたるがおほかるは、はやく寧樂朝となりては、歌のおとろへたる故なるべし。故萬葉集中にしては、作者しられざるふるき代の歌と、次には柿本山部ノ大人をおきては、ほかにとるべきも見えず。かの聖武天皇の、節刀使に酒をたまふ大御歌などは、ふるき代よりの形につきてよませたまへるなれば、其世にあはず、古雅なる

ところのきこゆるなり。遣唐使餞別のうたのたぐひにも、此たぐひこれかれ見ゆ。かの家持卿などは家集を傳へて、歌のおほかればこそあれ、すべて風調はいたく荒びてくだれるがおほかり。たゞ長歌のみやびは記紀にしくべきものぞなき。其すぐれたるにいたりては、二聖といへどもはるかにおよばず。ひとの國にくらぶべき物もなく、ひとり天地の間に高く秀たるもの也。あふぐべし。貴ぶべし』（長歌撰格）とかうも云つてゐる。守部は人麿の長歌を尊敬しつつ、なほ人麿以前の記紀の長歌に心を寄せて、『二聖といへどもはるかにおよばず』といつて居るのは、守部の見識として注意すべきものにおもへる。

人麿の長歌があれほど長くて破綻を來さないのは、全體が緊張して弛緩しないためであり、その作歌覺悟の全力的なためである。そしてその技法が爛熟したなどと評せられても、その根本に眞率素朴な點があつて、常に大乘藝術として缺けてはならぬ點を保つてゐるためである。

一體、素朴とか原始とかいふことは、藝術技法の手加減を謂ふのではない。もつと根源に參入すべきものであるから、人麿のものが人麿以前の活潑素朴なる要素を持つて居ると理會することも當然であり、守部が人麿以前の長歌を尊敬してゐるのもまた當然と云はなければならないのである。

人麿の長歌に價値のあるのは一面は長歌聲調の本質に隨順したためであり、人麿以後、家持以後

長歌の衰へたのは、その呼吸力に於て、その緊張度に於て不足して行つたためである。緊張度の衰へたことは、表現の方面からいへば、『連續的表現法』が駄目になつたためだといふことも出來る。續後紀の興福寺大法師の、『ひのもとの、やまとの國を、神ろぎの、小彦名が』云々の長歌につき、守部が評して、『ながきあひだに長短、活轉もなく、招應首尾等の心しらひもなく、おぼつかなきつづけどもおほし。只五七の調をうしなはざると、かたなりながらも、まれ〳〵あやしき疊對のまじりたるのみぞ、いにしへのおもかげなりける』と云つたのは、要するに、對句活轉招應首尾云々は連續表現の手法といふことに歸著するのである。

ついで、古今集の長歌になれば、貫之の、『ちはやぶる、神の御代より、くれたけの、世々にも絶えず、あまびこの、音羽の山の、はるがすみ、思ひみだれて、さみだれの』云々。忠岑の、『くれたけの、よゝの古ごと、なかりせば、いかほの沼の、いかにして、おもふこころを、のばへまし、あはれむかしへ、ありきてふ、人まろこそは、うれしけれ』云々といふ、弛みに弛み、處々で切れて、連續的表現がなくなつて、長歌は加速度を以て衰微して行つた。これは人麿以前の根源に復活することを知らなかつたためである。

德川になつて、本居宣長の、『かぞふれば、みやこわかれし、としもはや、十とせにみつの、春が

すみ、又たちかへり、めぐりきて、うしの車の、わがとしも』といふやうなものになつてしまひ、全部たるんでしまつた。守部が評して、『そも〳〵かくては、後世の陋き謠曲物、淨瑠璃の道行と云もののつゞけめきて、うちよむにだに恥かしく、かたはらいたきこゝちぞせらるゝ』と云つたやうなものになつてしまつた。

守部が眞淵門下の長歌を評したするゐに、『そも古典の埋れて、學のわざのたゞ絶にたえてし世こそはあらめ、賀茂ノ大人のさばかりいにしへに心深められて、各其敎へをうけ、萬葉集の優れたる事を口には常にさとしながら、猶かくざまにつゞくるを、よしとのみおもひたるはいかにぞや。』と云つてゐるのを見ても、長歌の到底萬葉に及びがたいのを示してゐるのである。

長歌の歌格研究者等は、熱心に古代長歌の分析的研究をしたが、微妙な點になると、單なる法則では律せられず、長歌歌人といふものは無くなつた。辨玉でも、胤平でも長歌を得意としたがやはり力の弱いものであり、根岸派の歌人等は數名長歌を好くしたに過ぎず、左千夫も節も晩年には長歌から遠ざかつた。

さうして見れば、人麿の長歌といふものは、異樣の力を持つてゐるのに相違ない。意味内容などといふものは、時代によつて如何樣にも變化し得るものである。人麿は彼の時代の内容を以てし、

それに調和を保つて、種々の工夫を編みつつ、縦横に彼一流の表現を遂げてゐるのである。

終りにここの餘白に近藤（田中）芳樹の古風三體考の文を抄記する。『もとより長歌は、短歌をのべたるものにしあれば、同躰なることといふもさらなれど、短歌は五句に限れるがゆゑに、その格もおのづから正しく、第三句にて切るやうの變調も、やゝ後にぞ出來にたるを、長歌は、句數定まりなきものゆゑに、その躰もしどけなく、神代のはじめより、變調ありきつるなり。然れども萬葉集中二百六十首の長歌の中に、變調はわづかに二十四五首の外はあらぬをもて、正調は五七五七と展轉相望（ツラネモテユキ）て、終を七言一句に結（トヂ）むるものなること、短歌の躰におなじきを知るべし』云々。

參考書

小國重年「長歌詞之珠衣」。橘守部「長歌撰格」。中村知至「長歌規則」。鹿持雅澄「永言格」。西田直養「萬葉集長歌格」。近藤芳樹「古風三體考」。碬稻綺道秀「長歌軌範」。土田杏村「國文學の哲學的研究」。久松潜一「長歌の本質」（國語と國文學、昭和二年四月。上代日本文學の研究收）。藤田德太郎「萬葉集の韻律」（萬葉集講座第二卷。昭和八年四月）。其他。

○

【卷一・二九】

玉襷　畝火の山の　橿原の　日知の御代ゆ（或は云ふ、宮ゆ）　生れましし　神のことごと　樛の木の　いやつぎつぎに　天の下　知らしめししを（或は云ふ、めしける）　天にみつ　大和を置きて　あをによし　奈良山を越え（或は云ふ、そらみつ大和を置きあをによし平山越えて）　いかさまに　念ほしめせか（或は云ふ、おもほしけめか）　天離る　夷にはあれど　石走る　淡海の國の　ささなみの　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　此處と聞けども　大殿は　此處と言へども　春草の　茂く生ひたる　霞立ち　春日の霧れる（或はいふ、霞立ち春日か霧れる、夏草か繁くなりぬる）　百磯城の　大宮處　見れば悲しも（或はいふ、見ればさぶしも）

玉手次　畝火之山乃　橿原乃　日知之御世從（或云自宮）　阿禮座師　神之盡

樛木乃　彌繼嗣爾　天下　所知食之乎（或云食來）　天爾滿　倭乎置而　青丹吉
平山乎越（或云虛見倭乎置青丹吉平山越而）　何方　御念食可（或云所念計米可）　天離　夷者雖有　石走　淡
海國乃　樂浪乃　大津宮爾　天下　所知食兼　天皇之　神之御言能　大
宮者　此間等雖聞　大殿者　此間等雖云　春草之　茂生有　霞立　春日
之霧流（或云霞立春日香霧流夏草香繁成奴留）　百礒城之　大宮處　見者悲毛（或云見者左夫思母）

題意　過二近江荒都一時柿本朝臣人麿作歌といふ題がある。近江都は天智天皇の近江大津ノ宮で、天智天皇は、六年三月、後飛鳥岡本ノ宮から此大津ノ宮に移りたまひ、十年十二月崩じ給うた。壬申亂後、天武天皇元年に都は二たび大和の飛鳥淨御原宮に移つた。この長歌を持統天皇の三年己丑の作とせば、壬申の歲から計算して十八年目に當るわけである。この歌を大體この年次と想像したのは、眞淵の、『さて後いつばかり見つるにや。歌の次でを思へば朱鳥二三年のころにや』（考）といふのに從つた。さすれば人麿にとつては寧ろ初期の作で、私は人麿二十七歲ぐらゐの作と想像して居る。假に持統十年までとして壬申から計算しても二十五年目に過ぎないのだが、戰亂後の荒廢がひどかつたものと見える。

語釋　**○玉手次・畝火之山乃**　タマダスキ・ウネビノヤマノと訓む。タマダスキはウネビの枕詞として用ゐて居る。襷は頸(うなじ)からかけるから、ウの同音なるウナからウネにつづけたものであらう。契沖云、『玉手次ハ、玉ハホムル詞、玉手繦(タマタスキ)ナリ。采女(ウネメ)ハ青衣ヲ著テ、領巾(ヒレ)、手繦(タスキ)ナド懸テ御膳ニ供奉スレバ、玉手繦懸ル采女ト云意ニツヾクルナリ。采女ト畝火ト殊ナルニ、カク取成(ナシ)テツヾクルハ事ノ本(モト)アリ。』(代匠記惣釋枕詞)。春滿云、『玉手次は、玉をかざりにつけたる手繦を云。此手すきは、官女のかける手すきにして、賤女のかくるたすきにはあらず。よりてうね美の冠辭とす。うねひは采女と音かよへばいふ也。采女のたすきをかくることは日本紀に見へたり』(僻案抄)。眞淵云、『こは荷田在滿(アリマロ)がいへる、襷を纏(ウナゲ)るとつづけつらん。神代紀に、其頸(ソノミウナジニ)所嬰(ウナゲル)五百箇(ユツ)御統(ミスマル)之瓊(ノニ)、また、乙(オ)登多奈婆多廼(トタナバタノ)、汙奈餓勢屢(ウナガセル)、多磨廼彌素磨屢廼(タマノミスマルノ)云云とあればなりと。げに餓勢(ガセ)の反解(ゲ)なれば汙奈餓(ウナガ)勢屢(セル)を汙奈解留(ウナゲル)ともいひ、又其奈解(ナゲ)の反は禰(ネ)なれば、うなげをうねともいひて約言の例かなへり。是によるべし』(冠辭考)。雅澄云、『把襷頸根結(タバタスキウナネムスビ)と云ならむ』(古義)。芳樹云、『さるは襷(タスキ)を頸根(ウナネ)に結ぶよしにて頸根(ウナネ)とは項(ウナジ)より肩をかけていふ詞なり。襷はもはら肩にかくればかくいへるなり。さてウナネを約ればウネ。ムスビを約ればミとなれり。ミとヒとは親くかよへば玉手次畝火といへるものなり』(註疏)。山田博士の講義も契沖説を顧慮しつつ大體在滿の説に從つてゐる。ウネビノヤマは

畝傍山で、高市郡畝傍町（元、白橿村）にある。

○橿原乃・日知之御世從（或云自宮） カシハラノ・ヒジリノミヨユ（或云。ミヤユ）と訓む。句の意味を約めていへば、『神武天皇の御時代から』といふことになる。橿原は神武天皇が畝傍山の東南橿原の地に皇居を定め給うたのでさう云ふのである。ヒジリは聖帝の意で、古事記にも、『故稱二其御世一謂二聖帝世一也』とも書いてある。どうして聖帝のことをヒジリといふかといふに、眞淵は日知の義だとし、宣長は、日知の意だが、『日の如知』、即ち日月の如き徳を以て天下を知しめす意だとし、『皇國の元よりの稱にはあらじ、聖字に就て設けたる訓なるべし』（古事記傳）と云つた。多くの學者がそれを踏襲したが、山田博士も、『按ずるにこれは聖の義訓にして、皇國の古言にあらざるべし』（講義）といひ、ヒ音の義は靈妙の意味でそのヒを知るといふ尊稱であらうといふ木村正辭の説（美夫君志）に留意してゐる。なほ柳田國男氏は眞淵の説の如くに、『日を知る人』の義だが、支那の『日者』と等しく卜筮家の意であるとし、南方熊楠氏もそれを敷衍して説明してゐる。（續南方隨筆）。それから普通の辭書も『日の吉凶を知る人の意』として解釋するやうになつた如くである。古事記に聖帝。日本紀に聖、聖人、大聖、先聖、聖皇、聖王、大人、蓬仙、仙衆、神仙、眞人、明聖、聖主等の熟語を書いてヒジリと訓んでゐる。『從』は、ヨリ、といふ意味で、ユ、ヨ、ユリ、ヨリ皆同じ意味である。

○阿禮座師・神之盡　アレマシシ・カミノコトゴトと訓む。『生れ給うた天皇の盡くが』といふ意味である。カミは現神にまします天皇といふ意味で、神代紀に、『然後神聖生ニ其中ニ焉』。また萬葉卷三（三七九）に、天原從生來神之命。卷四（四八五）に、神代從生繼來者。卷六（一〇四七）に、阿禮將座御子之嗣繼等があり、『神のことごと』といふやうな表現の爲方は、卷三（三二二）に、『敷座國之盡、同卷（四六〇）に、憑有之人乃盡等を見ても分かる。

○樛木乃・彌繼嗣爾　ツガノキノ・イヤツギツギニと訓む。樛の木の枝が次々に繁くひろがるによつて、その如くに益々つぎつぎと續けたので、御歷代の天皇がといふ意味に落著く。契沖云、『トカノ木ハ能生茂ル物ナル故ニ、第三卷ニモミモロノ神ナミ山ニイホエサシシ、ニ生タル都賀乃樹ノイヤツキ〳〵ニト云々。其外ニモカクツ、ケヨメル事多シ。古クハマカリ木ノト點セリ。是ハ詩ノ周南ニ南有ニ樛木一トイヘル注ニ木下曲曰レ樛トコレニヨレリ。然レトモマカリ木ハ彌ツキ〳〵ノツツキニ詮ナキ上ニ、集中ノ例右ニ引カ如シ』（代匠記）。山田博士に據るに、樛は朻と同字で高き木の枝の下勾せるを云ふ。そして和名のツガに相當する漢名がないので、松柏類中にあつて枝の下勾するツガに樛の字を當てたのであらうと云ふ。なほ、都賀乃樹、刀賀乃樹とも集中に見え、ツギツギの枕詞とした例は、卷三（三二四）に、五百枝刺繁生有都賀乃樹乃彌繼嗣爾。卷六（九〇七）に、四時

爾生有刀我乃樹能彌繼嗣爾。巻十九(四二六六)に、八峯能宇倍能都我能木能伊也繼繼爾などで、すでに常習慣の如き姿にもなつてゐる。

○天下・所知食之乎　アメノシタ・シラシメシシヲと訓む。天下を統治し給うたのをといふ意味である。天下と書いてアメノシタと訓む例は、巻五(八七九)に、阿米能志多麻乎志多麻波禰。巻十八(四一二二)に、安米能之多四方能美知爾波。巻二十(四三六〇)に、阿米能之多之良志賣之伎等。巻二(一六二)に、清御原乃宮爾天下所知食之等用例が多い。靈異記に、宇阿米乃志多。日本紀竟宴歌に、阿馬能芝多等がある。アメガシタと云ふのは後世である。『あめが下かさめの山の草木まで春の惠みに露ぞあまねき』(夫木集。隆博)。『さして行く笠置の山を出でしよりあめが下にはかくれがもなし』(太平記。後醍醐天皇)等がある。所知食之乎の訓は舊訓シラシメシシヲ。古寫本中シロシメシシヲ(元・古・神・細・冷)と訓んだのが多いので、僻案抄それに從つてシロシメシシヲと訓み、同訓もまた多い(考・略解・燈・檜嬬手・美夫君志・註疏等)。然るに攷證で、『考には、しろしめしと訓れしかど、舊訓のまゝ、しらしめしとよむべきなり。そは、本集十八二十丁に、安麻久太利之良志賣之家流、須賣呂伎能云々。又二十二丁天下志良之賣師家流云々などあれば也。しらしめしゝは、しりましましゝをつゞめたるなり。りまの反、らにて、しらしましゝなるを、まをめに通はして、しらしめしゝとはいへる也。延喜祝詞式に、所知食、

古語云ニ志呂志女須一とあれど、此集より後の物なれば、こゝにはとらず』といひ、山田博士の講義も大體それに據り、集中の例は皆シラシメスで、シロシメスといふのが無いことを證してゐる。**○或云。食來**　メシケルと訓むべく、眞淵がシロシメシケルと訓み、この方が優れてゐるとして『一本まさりぬ』（考）と云ひ、略解・檜嬬手等もそれに從つた。併し此處は下への連續句法であるから矢張り、シラシメシシヲを採る方がいい。古鈔本ではメシケリ（西・細・溫・矢・京）とも訓んでゐる。

○天爾滿・倭乎置而　ソラニミツ・ヤマトヲオキテと訓む。大和（やまと）を後（あと）に置いてといふ意味である。ソラニミツはヤマトの枕詞に使つてゐるが、普通古事記、日本紀等にある例はソラミツで、神武紀に、及レ至下饒速日命、乘ニ天磐船一、而翔ニ行大虛一也、睨ニ是鄕一而降上之、故因目レ之、曰ニ虛空見日本（ソラミツヤマトノ）國（クニ）一矣云々とある如く、滿は見の借字で、空（そら）で見る意とせば、ソラニミツでも意の通せないことはない。眞淵は、ソラミツに改め、古義・註疏もそれに從つたけれども古鈔本が皆『天爾滿』であるから、ただの一例だけれども一つの用例として役立つのであらう。攷證では、『天にて見つといふ意とすれば、爾の字ありてもきこゆ』と云つてゐる。次に、オキテといふ語は、捨置て（考）。とどめおく（古義）。とどめおく（檜嬬手）。さて置て（攷證）。とどめおく（美夫君志）。捨置て（註疏）。後にして（講義）等の諸註で大體分かる。卷一（四五）に、太敷爲京乎置而（フトシカスミヤコヲオキテ）。卷一（七八）に、飛鳥明日香能里乎置而伊（トブトリノアスカノサトヲオキテイ）

奈婆等の用例がある。なほ、眞淵はヤマトヲオキを可としたが（考）、宣長はヤマトヲオキテを採り（玉の小琴）、諸家多くこれに從つた。

○青丹吉・平山乎越　アヲニヨシ・ナラヤマヲコエと訓む。奈良山を越えてである。アヲニヨシはナラの枕詞で、古へ奈良に顔料にする好い青土を出したので、『青土ヨ・シ奈良』と續けたものであらう。ヨは呼びかけの辭、それにシを添へて强めたもので、『麻裳ヨ・シ紀人』、『玉藻ヨ・シ讃岐』などと同じ用法である。ナラに續けたのは、顔料にするために訓熟すからで、土地を平すといふのではなからう。青土、阿乎爾（常陸風土記）。青土（賦役令）等の用例によつても大體分かる。古來諸説があつた。青瓊吉。青土吉。青丹吉。青瓷吉。青幣吉等の説である。契沖云、『袖中抄云。萬葉抄云。アヲニヨシナラトハ、奈良坂ニ昔ハ青キ土ノ有ケルナリ。ソレヲ取テ繪カク丹ニツカヒケルニ、ヨカリケルナリ。サレハ、カクヨメルト云々。今按、此説近シ。中略集中ニ、多ク青丹吉トカキ、第十三ノ六葉ニ、緑青吉平山過而トアレハ、青丹トハ、緑青ヲ云ト知ラレタリ。中略玉藻吉讃岐、眞菅吉宗我ノ河原ナト云如ク、古シヘ、奈良ヨリヨキ緑青ヲ出シタル歟。サテカクハツヽケ來レルナルヘシ』（代匠記）。眞淵云、『依て心をひそめて考るに、先阿乎爾の爾も、八百丹の丹も借字にて、爾は土の古語なり。八百は多き數なり。杵築は土を平し堅むるわざなれば、平すてふも同じ理に落めり。

中略然れば阿乎爾と、彌百土と同じ語なり。中略かかれば阿乎爾與志奈良は彌百土平すてふ意なりと覺ゆるなり。中略與は呼出す辭、志は助辭のみなり』（冠辭考）。宣長云、『那良の枕詞にて靑土よし也。靑土は色靑き土なり。明ノ宮ノ段ノ大御哥に、和邇佐能邇袁云々とあるも、眉畫の料なれば靑土なるを思ふべし。中略余志を吉の義とせるがわろきことは冠辭考に辨へられたるが如し』（古事記傳）。雅澄云、『靑土黏しといふ意なり。中略曰㆓埴安㆒とあるも、埴黏といふ由なるをも思ひ合すべし。中略眉畫繪畫には、靑土を黏して用ふるゆゑに、其靑土を黏す奈良とつゞけしなるべし』（古義）。

ナラヤマは、山田氏云、『古の平城京の北に横たはれる低き連山にて平城京より近江に行くにはこの山を越えて、山城相樂又は木津に出づるものなるが、このときもその道筋をとられしこと歌の意にて著し。さてその相樂に出づる道は歌姬村の地にかかりて行くを以て今歌姬越といふ。今の奈良坂といふ地は佐保山のうちにして古の大路にはあらず』（講義）。澤瀉氏云、『昔の奈良の都の北に、東西に連つてゐる山で、東は今の奈良市の北から、西は西大寺邊の北までを廣く奈良山と云つたものらしい。そして當時の奈良山越は大極殿址の北にあたる今の歌姬越と云はれてゐる。しかし實際はも少し東によつた道ではないかと思はれる』（新釋）。辰巳氏云、『奈良山といふのは今の奈良阪以西一帶の山彙を申し、佐保・佐紀兩山も亦その一部にはいつてゐるものであります。當時の旅

人はこの山を越えて、山城に出たもので、その通路としては、東に奈良山越があり（奈良街道）、西に歌姫を過ぎる郡山街道があり、その中間には別に關西本線にそうて通ずる小徑があります。この三通路は當時の主なる街道であつたものと見られるのであります。而して、當時もつとも旅人に主きをなされてゐたのは今の郡山街道（古の奈良路）であります』（大和萬葉地理研究）云々。奥野健治氏の萬葉大和志考には、平城坊目考に據つて、不退寺法華寺等より以北の地だとして、佐保山等を含ませてゐない。**○或云。虚見・倭乎置・靑丹吉・平山越而**　一傳の歌句で、ソラミツ・ヤマトヲオキ・アヲニヨシ・ナラヤマコエテと訓ませるので、意味が同じだが、前のと二つ竝べて鑑賞すると有益である。眞淵の如き先進もこの方を採用し、また、宣長も、『本に平山乎越とあるよりは、一本に平山越而とある方宜し。倭乎置而の而文字は、猶必有べき也。此而文字なくては、いとわろし。而の重なるは古歌古文の常也』（玉の小琴）と云つてゐるが、どちらかといへば、却つて本文の方が聲調自然である。

○何方・御念食可〔**或云所念計米可**〕　イカサマニ・オモホシメセカ〔或云。オモホシケメカ〕と訓む。どう思召しになられたのであらうかといふ意である。卷二（一六七）に、何方爾所念食可神風乃伊勢能國者（イカサマニオモホシメセカカムカゼノイセノクニハ）。卷二（一六二）に、何方爾御念食可由縁母無眞弓乃崗爾（イカサマニオモホシメセカツレモナキマユミノヲカニ）。卷二（二一七）に、何方爾念居可栲紲之長命乎（イカサマニオモヒヲレカタクナハノナガキイノチヲ）。卷三（四六〇）

に、何方爾念鷄目鴨都禮毛奈吉佐保乃山邊爾。卷十三（三三二六）に、何方御念食可津禮毛無城上宮爾等の例がある。契沖云、『イカサマニオホシメシテカト云ニヨリテ見レバ、此帝都ヲ遷シ給フ事ヲ少謗レルカ。民ノネガハザルコト題ノ下ニ引ル天智紀ノ如シ。摠ジテ都ヲ遷ス事ハ古ヨリ民ノ嫌ヘル事ナリ。史記殷本紀曰、盤庚渡河南、復居二成湯之故居一、廼五遷無二定處一、殷氏咨胥、皆怨不レ欲レ從。況ヤ上ニ引ケル孝德紀ニイヘルゴトク、豐碕宮ヲバ嫌ヒ給テ、倭京ニカヘラセ給フベキ由奏請シタマヒナガラ、御ミヅカラハ又アラヌ方ヘ都ヲ移サセ給フ。不審ノ事ナリ。又按ズルニ第二第十三ニモイカサマニ思食テカト云ヘルハ、只御心ノハカリガタキヲ云ヘリ。殊ニ今ノ帝ハ大織冠ト共ニ謀テ蘇我入鹿ヲ誅シ給ヒ、凡中興ノ主ニテマシマセバ、七廟ノ中ニモ大祖ニ配シテ永ク御國忌ヲ行ハル。智證ノ授決集モ菅家文草ナドニモ見エタリ。シカレバタヾ御心ノハカリガタキ故ニモ侍ランカ。此二句ハ所ヲ移シテ、天ニミツヤマトノ上ニ置テ見ルベシ』（代匠記精）。恐らく作者の心持もこの邊にあるだらうか。守部が、『こは何と思食ての事なりけむと云ひて、下に其御心得違ひを咎めたる意あり』（檜嬬手）と云つたのは、稍强過ぎる言方のやうである。

○天離・夷者雖有　アマザカル・ヒナニハアレドと訓む。田舍の地ではあるがといふ意である。アマザカルはヒナへ續ける枕詞であるが、家離る、年離る、里放るなどの如くに、離れ隔る意で、

アマザカルは天の遠い如くに遠く隔るといふところからヒナに續けた。それが枕詞になつてしまへば、近江のやうに都からそんなに遠くない處でもアマザカルといふのである。これは大體眞淵の冠辭考の說であるが、古義では、『天に離る』意だとしてゐるが、よく吟味すれば結局同じこととなるのであらうか。またヒナといふのは、都に對して田舍をば一般にさう云ふのである。東國をアヅマといひ、西國をヒナといつた例（古事記雄略條）もあるが、さう嚴重な地理的區別はなく、『されば夷も或は古くは東國のアヅマに對して西國をさししが本義なりしならむも後には汎く田舍といふ意に用ゐたるならむ』（講義）と解していい。古義では東方の國を阿豆麻とのみ云ひ、西方北方の國を比那と云つた說を保持して、諸例を擧げてゐる。さて、さう解するとせば、近江をば夷といふのは合理的でないといふので、大神ノ景井の說に從つて、不字を補ひ、夷者雖不有とし、『比那といふほどの國にはあらざれども、いかで近江ノ國には天ノ下しろしめしけむといふ意になりて、一首の意もよく聞え、比那といふことの例にもたがふことなくして、おもしろし』と云つてゐる。卷四（五〇九）に、天佐我留夷乃國邊爾。卷五（八八〇）に、阿麻社迦留比奈爾伊都等世周麻比都都。卷六（一〇一九）に、天離夷部爾退古衣。卷十五（三六九八）に、安麻射可流比奈爾毛月波弖禮禮杼母等例が多い。

○石走・淡海國乃　イハバシル・アフミノクニノと訓む。近江の國の意である。イハバシルは、

巻七（一一四二）の、石流垂水水平結飲都。巻八（一四一八）の、石激垂見之上乃左和良妣乃等の例があり、そしてなぜ近江（淡海）に冠せたかといふに、『石バシル合水』の意か。なほ、古義では溢水の意味から同音の淡海に冠せたのだと云つて居り、その前に契沖は、『石ヲ走ル水ハ沫トナレバ、其意ニテ淡海ニモツヅクルナルベシ』とも云つてゐるが、溢水説ももつと用例が欲しい氣持がするのである。然るに眞淵は、これをイハバシノと訓じて、石橋之間の意で、淡海に冠せたのだとし、巻十一（二七〇一）の、明日香川明日文將渡石走遠心者不思鴨。巻七（一一二六）の、年月毛未經爾明日香河湍瀬由渡之石走無。巻七（一二八三）の、橋立倉椅川石走者裳。壯子時我度爲石走者裳などをその證例として居る。併し巻一（五〇）の、藤原宮之役民作歌に磐走淡海。巻七（一二八七）に、石走淡海とあるので、芳樹は、『イハバシルと訓て、こは勢田より流れ宇治に落る所、水の勢ひ激しくしてここを鹿飛といへり。一面の巖にてその上を水の走る狀石走るといひつべし。この所湖の尻にて水の増減なからしむる要なる所なれば、ここを淡海の枕辭とせしものなるべし』（註疏）と云つてゐる。これは、春滿の、『或説に石はしる近江とつゞけるは、水海の水終に勢多より出て、田上を過て宇治にながれ下る。石をはしりてながれ行ば、かくはよめるにこそといへり。此説はより所有ことなれば、しばらく此説にしたがふ。猶正義有歟』（僻案抄）に本づいてゐるらしい。

○樂浪乃・大津宮爾　ササナミノ・オホツノミヤニと訓む。樂浪の大津の宮で、天智天皇の皇都をいふ。これは近江の地名に本づき、枕詞の如き聲調に使つたものなることは既に短歌の評釋の處で述べて置いた。淡海、大津、志賀、平山、連庫山などに續けたのは、ササナミの中にある地名だからで、ササナミノ故宮、ササナミノ國都美神などと續けたのも其處の土地を意味するからである。

○天下・所知食兼　アメノシタ・シラシメシケムと訓む。天下を統治し給うたのであつたらうところのといふ意味で、ケムは過去を想像する助動詞である。これは次の句の天皇に續くのであるが、契沖が、『此處句絶ナリ。イカサマニオホシメシテカト云ヲ受故ナリ』と云つたのを、燈・檜嬬手・美夫君志等が踏襲したが、古義でその連續句法だといふことをいひ、講義でそれに贊成してゐる。新考では、『辭は切れ、意はつづけり。俗語にて釋くにはソノといふ語を加へて釋くべし』と云つて居る。此處は無論連續句法である。

○天皇之・神之御言能　スメロギノ・カミノミコトノと訓む。天皇の神の尊ので、現神にましました天智天皇のといふことになる。この天皇といふ文字は、萬葉ではスメロギ又はスメラミコトと訓み、スメロギは原來は皇神祖、皇御祖を申奉るので、あるが、轉じて歷代の天皇、現在の天皇までをも兼ね籠めて用ゐるやうになつてゐる。卷二(二三〇)に、天皇之神之御子之御駕之。卷三(四四三)

に、皇祖神之御門爾外重爾立候。卷六（一〇四七）に、皇祖乃神之御代自。卷七（一一三三）に、皇祖神之神宮人冬薯蕷葛。卷十一（二五〇八）に、皇祖乃神御門乎懼見等。卷十八（四一二二）に、須賣呂伎能之伎麻須久爾能。卷十九（四二六七）に、須賣呂伎能御代萬代爾。卷二十（四四六五）に、須賣呂伎能可未能御代欲利等の用例によつて知ることが出來る。なほ萬葉では、皇・王・大皇・大王・大君等はオホキミと訓ませて居る。この實例は古義に委しい。ミコトは御事の意で、命或は尊の文字を當て、敬語である。

○大宮者・此間等雖聞　オホミヤハ・ココトキケドモと訓む。宮城（天智天皇の皇居）は此處にあつたのだと聞くけれどもの意。ミヤは御屋でそれに大の尊稱を附したものである。卷二（二三八）に、大宮之内二手所聞。卷六（一〇四七）に、萬世丹榮將往迹思煎石大宮尙矣。卷十七（三九二六）に、大宮之宇知爾毛刀爾毛。卷六（一〇五〇）に、刺竹乃大宮此跡定異等霜等の例がある。

○大殿者・此間等雖云　オホトノハ・ココトイヘドモと訓む。宮殿は此處だと云ふけれどもの意。殿は和名抄に、唐令云、殿、宮殿ノ名、和名止乃とあるので明かである。この二つは對句で、大津に來て皇居舊跡は此處だと吾は聞くけれども、また皇居舊跡は此處だと人が云ふけれども、といふ使ひざまである。卷二（一九九）に、大殿乎振放見乍鶉成伊波比廻。卷三（二六一）に、高輝日之皇子茂

座大殿於（イマスオホトノノヘニ）などの例がある。

○春草之・茂生有　ハルクサノ・シゲクオヒタルと訓む。春草が繁茂してゐる趣である。春草は舊訓ワカクサであるが、代匠記（精）でハルクサとも訓んだ。『春草ヲ若艸トヨムハ義訓ナリ。第八ニハワカナヲ春菜トカケリ。字ノマヽニモ讀ヘシ』と云つてゐる。古寫本中では元・冷・古・神・西・細はハルクサで、京は一訓としてワカクサを記入してゐる。これは支那でも春草離々などの熟字があるからハルクサで好い。また本居宣長はハルクサシと訓んだ（玉の小琴）が、これは下をシゲクオヒタリと訓むつもりだから、それでは調を亂すのである。次にシゲクオヒタルも、シゲリヲフナル（元）。シゲクヲフナル（神・冷）。シゲクタヒタル（古）。シゲリオヒタル（細）等の訓もあつた。また、宣長は、『はる草し、茂く生たりと訓べし。之はやすめ詞也』（玉の小琴）と云つたが、タリでは具合が悪い。特に宣長は、『春日のきれる百磯城云々と續けて心得べし。春艸云々と霞立云々とを同意に並べて見るはわろし』などと云ふのだから益具合が悪い。この邊になると流石の宣長も古調を解せなくなつてゐる。

○霞立・春日之霧流　カスミタチ・ハルビノキレルと訓む。霞が立つて春日が朦朧と曇つて見える趣である。キリは景行紀に、『峯霧（キリ）谷曀（クラシ）』とあり、源氏物語に、『目もきりて』とあるごとく、四段

活用の動詞だが有リ(ア)といふ良行變格に移つて活用してキレリ、キレル等と云ふのである。それから、『春草の茂く生ひたる。霞立ち春日の霧れる』と共に連體形を据ゑて調子を取つてゐるので、長歌特有の『連續』情調を成就してゐるのである。舊訓カスミタツであつたのを、攷證で、『この霞立(カスミタチ)は枕詞にあらず。舊訓、霞たつ春日のきれるとあれど、霞立はきれるといふへかゝる詞なれば、霞たちとよまでは解をなさず』と云ひ、講義もそれを認容した。新考は霞立を春日の准枕詞としたが、これは前の句と對句で、二つとも枕詞ではないやうである。**○或云。霞立・春日香霧流・夏草香・繁成奴留** カスミタチ・ハルビカキレル・ナツクサカ・シゲクナリヌルと訓む。眞淵は、この方を採用し、『夏草歟生しげりて隱せると疑ふ也。』といひ、古義も同意してゐる。攷證では、『本文のまゝにても意明らかなるを、あながちに或本をとられしはいかゞ』と云つてゐる。或本のは、調子に一種の特色があるが、やはり本文の方が優れてゐる。それから、この或云の句を眞淵が採用して、『世に名高き此宮どころは、まさにこゝぞと聞、こゝぞといへども、更に春霞か立くもりて見せぬ、夏草歟生しげりて隱せると疑ふ也。春霞と云て又夏草といふは、時違ひつと思ふ人有べけれど、こは此宮の見えぬを、いかなることぞと思ひまどひながら、をさなくいふなれば、時をも違へておもふこそ中々あはれなれ。後のものに日は違ひながらよめるといへるもこれに同じ』(考)といつて

ゐるが、古義が賛成したのみで、宣長以下賛成してゐない。左千夫などは、『頗る淺薄なひねくりと云はねばならぬ』(左千夫、新釋)とまで云つたものである。もつとも春滿の僻案抄で、『定本の句と異本の句とを優劣を辨へば、定本の句まさるべし』と云つて居るのを眞淵は輕々に看過したのであつただらう。

○百磯城之・大宮處　モモシキノ・オホミヤドコロと訓む。宮城の場處といふ意である。第四格だから、宮城のあつた舊跡をばといふやうになる。モモシキは大宮の枕詞で、百(モモ)は百鳥(モモトリ)・百草(モモクサ)の如く澤山のといふ意。磯(シ)は石で、城(キ)は宮城であるから、多くの立派な石を以て築いた城といふ意から枕詞となつた。古事記雄略天皇の御製に、『毛々志紀能淤富美夜比登波(モモシキノオホミヤヒトハ)云々』とある。

○見者悲毛　ミレバカナシモと訓む。見れば悲しもで、實に悲歎すべき光景だといふ意味である。カナシは嬉しくも愛しくも悲しくも切に心に感ずることをカナシといつたのであるが、此處は悲哀のカナシである。この例は萬葉にはなほ多い。順直で好い音調を持つてゐるからであらうか。**○或云。見者左夫思母**　ミレバサブシモと訓む。卷三(二六〇)に、竿梶母無而佐夫之毛(サヲカヂモナクテサブシモ)の例がある。いづれでも鑑賞出來るが、悲毛(カナシモ)の方が直接でいいやうである。僻案抄にも、『定本の悲毛、悲歎あらはれて感慨ふかくきこゆべし』といつてゐる。

大意 畝火ノ山の橿原の宮に、皇居を定め給うた、神武天皇の御代から、歴代の天皇が盡く、次ぎ次ぎに大和をば皇都の地と定められたまうたのに、どういふ御考にあらせられたか、その大和を後にし奈良山を越えて、そのころまだ田舍であつた、近江國の樂浪の大津宮に、皇居を御遷しになつて、天下を治め給うた天智天皇の、皇居の址は、此處だと聞くけれども、宮殿の址は、此處だと云ふけれども、今はただ春草が生ひ茂り、春の日が霞みわたつてゐるのみで、昔のさまが何もなくなつてゐる。その大津宮の址に立つて見て居れば、如何にも悲しい。

鑑賞 過二近江荒都一といふのだから、作者の人麿が何かの事で近江に行つて、其處を通つた時、或はたづねた時の歌のやうである。僻案抄に、『標題に過近江荒都時とあれば、過の字によるに、一時の感慨によめる歌とみへたり』と云つてゐるのは妥當であらう。一首の趣は、獨語的色調を帶びてゐるが、一方その聲調の莊嚴で形式的なところを見れば、或は或方に奉つたもののやうでもある。この近江大津宮の荒廢は當時人心感動の對象となつたものの如く、黒人の作に矢張りこの舊都を歌つたもののあるのはその證據である。

この長歌も人麿の他のものの如く、波動的連續の句法を以て進行して居るのであるが、それでも部分部分の屈折あり、休止あり、變化あり、反覆あり、そして一つの形態をなしてゐるとも看做す

ことが出來る。そして、小國重年の「長歌詞珠衣」に據ると、初句廿六句、次二句對、次終句七句、合三十七句、中長歌といふことになる。

玉だすき　畝火の山の　橿原の　ひじりの御代ゆ
あれましし　神のことごと　
樛の木の　いやつぎつぎに　天の下　知らしめししを
いかさまに　思ほしめせか　天離る　夷にはあれど
天の下　しらしめしけむ　天皇の　神のみことの

天にみつ　大和をおきて
青丹よし　奈良山を越え
石走る　淡海の國の
樂浪の　大津の宮に
大宮は　ここと聞けども
大殿は　ここと云へども
春草の　茂く生ひたる
霞立ち　春日の霧れる
百磯城の　大宮處―見れば悲しも

長歌の形式は、一つの波形線の如くに連續した聲調として論ずべきことは屢云つた如くであるが、これを視覺的な一つの形態と想像するならば、右の如きものにも思へるのである。或は見樣によつてはまたほかの形態をも考へることが出來、固定したものでないから、鑑賞者は一定の拘束なくし

て或る形態を畫き得るのである。

この一首は、神武天皇の古へから、歷代の天皇が皆大和に皇居を定め給うたのに、天智天皇は、天離る夷である大津宮を皇居と定め給うた。そのことをば咏ぜんとして、ただ、『いかさまに思ほしめせか』の一句で現はしてゐる。この近江遷都につきては後世の注釋家は契沖はじめ日本紀の文を引き、『イカサマニオホシメシテカト云ニヨリテ見レバ、此帝都ヲ遷シ給フ事ヲ少謗レルカ。民ノネガハザルコト題ノ下ニ引ル天智紀ノ如シ。摠ジテ都ヲ遷スコトハ古ヨリ民ノ嫌ヘル事ナリ』（代匠記精）といひ、春滿も『天智帝の志賀都のわづかに御一代にて荒廢したれば、迁都の叡慮を少諷刺したる意有るべし。其情句體の上におのづからそなはれり。もと此遷都は天下の百姓不願して諷諫の者多。童謠もおほかりしよし、日本紀にみへたれば、紀文と此歌の詞とを引合せて眼をつくべし』（僻案抄）といふのであるが、人麿のこの一首は飽くまで謹嚴眞率で、毫末も輕佻浮薄の點の無いことを注意すべきである。由來、諷刺比喩の心裏には雋鋭な穿鑿と同時に蔑視の要素を交へてゐるから、イロニイは其處から生じ、從つて輕佻の語氣を伴ふのは自然の道理とおもふのであるが、人麿の、『いかさまにおもほしめせか』の語氣には少しもその輕佻を見出すことが出來ない。僻案抄で、『これただ表には帝都の元由をいひつゞけたるのみに聞ゆれども裏には』と云ひ、『少諷刺したる意有る

べし』と云つてゐるのを否定する訣ではないが、人麿の歌の語氣には世に謂ふ諷刺などの語氣が少しもない。これ飽くまで眞率なりし人麿の性格を暴露するものであつて、心情が自然に露呈する抒情詩のおもしろい點もここに存じてゐるのである。また、當時の人心には日本紀に書いてあるやうなことが流傳されつつあつて、人麿もさういふことを聞及んでゐたとしても、人麿自身には敢てそんな細々(こまごま)した事件に執著せず、ただ、『いかさまにおもほしめせか』の一句に全心を集中してゐたのかも知れない。這般のことになると末世の歌學者などが輕々しく忖度するを許さない境地であるのかも知れぬ。

次に、この一首で、眼前現實の有樣を寫してゐるのは、『春草の茂く生ひたる、霞たち春日の霧れる』だけである。これとても詩的な選擇が加はつてゐるのかも知れず、支那文學流の國破山河在、城春草木深（杜甫）などの句があるとも考へられる。けれども實際この句の技巧的動作の本は何であらうとも、これだけの現實的な句を得たことが矢張り人麿の力量をおもはしめるのである。現代の詩人・歌人が大津舊都址に立つたとしたなら、もつと細かに寫生するに相違ない。そしてその效果は、人麿のこの長歌と較べてどちらが優れてゐるか、これも輕々しくは論斷が出來ない。

實際的寫生句は右の如くに僅かで、あとは歷史的事實をば一種の感慨を以て敍べてゐるのだから、

この長歌の中味(内容)は存外單純である。内容的にいへば、前の大部分は謂はば序幕のやうなもので、主眼は終の方の、五六句にあるのである。この内容の存外單純な事實は、既に賀茂眞淵、田安宗武なども論じて居るところであるが、長歌の本態といふものが、實用的にもまた作歌動機的にも禮讃・讀經などと共通な點があるものだとせば、中味の單純になるのは自然的な順序なのかも知れない。さうすれば、かういふ表現の技法を發明した點でやはり人麿は特筆すべき歌人だと云はなければならない。

そして、さういふ中味(内容 方面よりも、一首を通ずる聲調の、莊嚴にして流動的な、連續波動的な、息も切らずに續けて來て、中の小休止のところで、沈痛の心を暗指してゐるあたり、これは眞率にして全力的な態度からでなければ決して出來ない所業である。『玉だすき、畝火の山の、橿原の、聖の御世ゆ』と云つて、『の』を四つも續けて『ゆ』と云つてゐる。この『ゆ』は意味からいへば無論連續句であるにも拘はらず、『の』で續けて來た音が其處でかすかに息を休める效果となるのである。それから、『生れましし神のことごと樛の木の、いやつぎつぎに、天の下しらしめししを』がまた一連續の聲調で、『を』で息をかすかに休めるのである。そして本來意味の上からいへば、其處に、『いかさまに思ほしめせか』といふべきところを、『天にみつ大和をおきて、青丹よし奈良

山を越え』の次に置いてゐる。これはこの一つの連續聲調と、次の連續聲調、『天離る夷にはあれど、石走る淡海の國の、さざなみの大津の宮に』云々といふのとの間に挿入して、其處で感慨を籠らせて、輕佻にならないやうにおのづからなつてゐるのである。意味上は無論續くが、ここの『に』で一たび息を休めて、二たび、『天の下しらしめしけむ、天皇（すめろぎ）の神の尊の、』とつづけ、『大宮は此處と聞けども、大殿は此處と云へども』と對句でつづけ、そして、『春草の茂く生ひたる、霞たち春日の霧れる』と對句でつづけ、此處で、感慨の息を休めて、『百磯城の大宮どころ、見れば悲しも』と結んでゐるのである。それだから、この長歌の聲調は西洋の詩、特に近代自然主義以後の詩のやうな切れ切れな、訥々とした聲調のものでなく、一つの連續音樂と看做してもいいものである。そして、この長歌などは事柄はいろいろの事を云つてゐるが、一つの感動で統一してゐると謂つてもいいものである。

結句の、『悲しも』につき、燈の說は後に抄記した如くであるが、美夫君志でそれを祖述し、『此歎辭の毛をば富士谷成章のサテモと譯したるはよく當れり。さてここは悲シイサテモマアといふ意なり』云々。

先師伊藤左千夫は、萬葉新釋をなしつつ此歌に逢著したとき、柿本人麿論を發表して文彩餘りあ

つて質是れに伴はざるもの多き事云々と云つたのであるが、此歌を評しても、『言語が徒らに豐富で、內容は甚だ貧弱なものである。暗雲と枕詞を使用してゐるが、其の枕詞が殆ど虛飾的に配列されてある感がある。虛飾的言語が多過ぎる爲に、作者の嘆息した情意の動きを感ずること甚だかすかなのである』と云つて、句々を分析して細かに右の結論を證明してゐるのである。そして先師は人麿の長歌は到底雄略天皇や額田王などの長歌には及びもつかないものであり、語調に力がなく、細く弱く、調子に勢も響もなく、贅語が多く、春草の云々の句でも、荒都の形容としては餘りに平凡であるといふやうな論法で批難して居るのである。先師の晚年は歌に對する標準が益々高く、聲調の響を欲すると共に虛飾を脫して原始的質實を求めたのであるから、自ら作歌せんとするならばこのやうな人麿的表現では物足らなかつたものに相違ない。卽ち左千夫の人麿長歌評は左千夫の作歌態度を投影したものに他ならないのである。

併し私は未だ先師程の域に達せざるのみならず、長歌を作り得ない力量程度にあるものである。また鑑賞するに際しても、ある程度までは人麿に同化し、時代の背景と作歌衝迫の奈何とに顧慮しつつ、物言つてゐるのであるから、私の鑑賞は寧ろ讃美に傾いて、先師の如く批難には傾いてゐないのである。また、この長歌には幾つも枕詞を用ゐ、幾つか對句を用ゐてゐるが、これがやがて人

麿調の長歌を成就した所以でもあり、當時傳はつてゐた經典の句の繰返しなどと共に、これを古事記の歌謠の素朴、雄略天皇長歌の質實、萬葉卷十三中の一二の長歌等を論ずる標準を以て論ずるのは、稍的を外れた論斷だとさへ思つてゐるものである。枕詞は人麿當時既に表象的性質の朦朧となつたものが多いのであるから、それを一々氣にして邪魔にするやうでは、雄略天皇の、『虛みつ大和の國はおしなべて』云々の句さへ味ふことが出來ないといふことになる。

約めていはば、人麿作のかういふ長歌は、その音樂的象徵の特色を受納れ、その波動的進行に沒入しつつ鑑賞すべきものなのである。さうしてはじめて、人麿的技法と共にその全力的躍動を味ひ得るのである。實際萬葉にも長歌を作つた歌人が幾人もゐたが、赤人でも家持でも、人麿を模倣しつつつひに如是の聲調には及ばずに終つてゐる。私はこの長歌を以て人麿壯年の力量を發揮したものとなすものである。『玉襷畝火の山の』以下の句も、無用空虛のやうであるが、全體の效果からいへば決してさうでなく、それ等から浮ぶ寫象群と、傳達し來る韻律と相俟つて、渾一體をなすもので、さういふ意味で全體が一つの寫生になつてゐるといふことも出來るのである。卽ち、『玉襷畝火の山の』云々の句も、眼前の故京址と離すことの出來ない緊密な表現だからである。而して、全體が纖巧窒礙を脫して、雄渾圓融に到つたもので、まさしく『力全うして苦澁せず』の境界だと謂

ふべきである。よつて先師の謂ふ『虚飾』云々を私に強ひてはならない。

『春草の茂く生ひたる』から支那の詩を聯想したが、なほ、『麥秀漸々兮。禾黍油々兮』(箕子)。『仲宣樓頭春色深』(杜甫)。『映堦碧草自春色』(杜甫)。『霧暗烟濃草色新』(李白)。『闔閭城外草連天』(許渾)。等があり、その他流石に詩には例が豐富であるが、比較すると人麿の歌の方が素直である。なほ、『大宮人の船まちかねつ』の短歌を味ひつつ、劉禹錫の有名な詩句、『山圍ニ故國ー周遭在。潮打ニ空城ー寂寞回』を聯想することも出來る。

古りにし人にわれあれやささなみの故き京を見れば悲しき (卷一。三二)

ささなみの國つ御神のうらさびて荒れたる京見れば悲しも (卷一。三三)

神さぶる磐根こごしきみ芳野の水分山を見ればかなしも (卷七。一一三〇)

黄葉の過ぎにし子等と携はり遊びし磯を見れば悲しも (卷九。一七九六)

年の經ば見つつ偲べと妹が言ひし衣の縫目見れば哀しも (卷十二。二九六七)

朝鴉早くな鳴きそ吾背子が朝けの容儀見れば悲しも (卷十二。三〇九五)

あしひきの八峰の雉なき響む朝けの霞見ればかなしも (卷十九。四一四九)

意味の細かい色調になると幾分づつ違ひがあるが、かういふ具合に、『見ればかなしも』が短歌の結

何に使はれてゐる。

参考 ○【萬葉集僻案抄】に云。『此歌はじめには、神武天皇のひじりの徳ましましける叡慮に、倭國を皇居の地とはじめて定め給ひし時より、相つぎ〳〵て、久しき帝都の國なりし倭をすてゝ、近江國に遷都し給ふことを、はかりがたきよしにいへり。これただ表には帝都の元由をいひつゞけたるのみに聞ゆれども、裏には神武天皇の徳を稱美して、皇都の國久しく相つゞきたるに、天智帝の志賀都のわづかに御一代にて荒廢したれば、遷都の叡慮を少諷刺したる意有るべし。其の情句體の上におのづからそなはれり。もと此遷都は天下の百姓不願して諷諫の者多。童謠もおほかりしよし、日本紀にみへたれば、紀文と此歌の詞とを引合せて眼をつくべし。されば表には遷都を思召立けるは、凡慮のはかりがたく、さるゆゑこそあるらめとおもふよしに詠り。次には、近江國、天さかるひなにて有けれども遷都已後は大宮大殿相そなはりて、天下をしろしめしたれば、一度都とにぎはひさかへし意を含みて詠り。しかれども、終りには、天智天皇御一代にて、皇居うつりかわりて、大宮大殿も皆絶はてゝ、其所の名のみのこりて、者の草おひしげり、皇居の跡ともみへず。只春日のおぼろけなるを大宮所のあとに見れば、感慨堪がたくて、悲もと、悲嘆したる意也。此の長歌、句の相とゝのひ、首尾かけ合て、一首の中に、盛衰興廢のあたりにあらはれて、感慨の情きはまりなき也。』○【萬葉考】に云。『大宮處。見者左夫思母。その宮殿の見えぬは疑ひながら、見るに、うら冷(スサ)ましく物悲しき也、佐夫思は集中に、冷、不樂、不怜など書つ、然れは後世もの閑けき事にさびしと云は轉したる也、今本、見レ者悲毛と有もさる事なれど、猶一本による、何ぞなれば、此宮の無こと猶うたがひて長哥にはいひ、反哥にいたりて思ひしれる意をいへれば、こゝは只佐夫(サブ)しと有ぞよき、下の此人の哥にも此さまなるあり、巧みの類ひなきもの也』。○【萬葉集燈】に云。『此歌、表は神武天皇以來、御世〳〵大和國にのみ天下しろしめしたれば、たゞその古きあとにしたがはせ給ふべきを、いかやうにおぼしめしたればか、ひななる近江

國に遷都したまひけむ凡慮のはかり知がたさに、その大宮みむとおもへど、聞あやまりか。いひあやまりか。此大宮のみえぬは、春草しげく霞きりわたる故ならむ。いとも〳〵くちをしき事や。と此大宮のみえぬをかなしみたるによみふせられし也。されど、さるくちをしさばかりの事、歌によむべき理なく、大かた、神武天皇以來の事をいひ、その大宮のみえぬ事をなげかれたるさまを思ふに、初國このかた皇居し給ひし地をかへさせ給ひ、しかも、その大宮の今あともなくなれるは、ひとへに此帝の御心がろくおはしゝゆゑなるべし。もし、御世〳〵の御あとに隨ひ給ひて、倭におはしまさば、かく荒廢する事もあらじか。とくちをしく思ふ心あきらか也。されど、此　帝をあはめたてまつるにおつべきが故に、かく遷都し給ひし御心、凡慮のはかりがたきに、その大宮のみえぬくちをしさを詞とせられたる、めでたしともよの常なり。終に毛もじをおかれたるは、この情を思ひ入らせむがため也。古人の脚結の用ひざま、これにてもよく〳〵味はひしるべし。』　○【萬葉集美夫君志】は、僻案抄を引いて次の如く云つてゐる。『實に此の說の如しよく〳〵味はふべきなり、史學者等閑に見過す事勿れ。』　○【伊藤左千夫の萬葉集新釋】の此歌に對する評は既にその一部を抄したが、なほ補遺するならば、『人麿は言語の綾を悅ぶの弊に陷り、淺薄な形式趣味に憧憬した跡があると見ては居つたが、是程に言語を亂用して居るとは思はなかつた。つまり言語を綾なす技巧が其の弊を導いたのである』。『感慨の動因が餘りに平凡過ぎる。人麿の識力も疑はれるのである。全篇を通じて理想の見るべきなく、感情の表現も甚だかすかである。從て首尾一貫せる強い調子がない。無駄な飾詞が多くて精神が乏しい。前に云へるが如く、文彩餘りありて質是れに伴はざるの感あるものである。然かも此の一篇の如きは、其の文彩も趣味的成功したものではない。』

反歌

【三〇】樂浪之(ササナミノ)　思賀乃辛崎(シガノカラサキ)　雖幸有(サキクアレド)　大宮人之(オホミヤビトノ)　船麻知兼津(フネマチカネツ)

【三二】左散難彌乃　志我能一云比良乃大和太　與杼六友　昔人二　亦母相目八毛一云將會跡母戸八

（三〇）は三頁に評釋了。崎字古寫本（元・類・冷・文・神）に碕とある。（三一）は一三頁に評釋了。

○大津京址　は、短歌評釋の部で説明したが、此處でなほ繰返すならば、『大體、現在の大津市南滋賀町（元、滋賀村大字南滋賀）の地に當る』やうである。從來諸説があり、（一）大津市南滋賀町説（滋賀縣史、大津京阯の研究 肥後和男氏）。（二）大津市滋賀里町（元、滋賀村大字滋賀里）説（木村一郎氏・喜田貞吉氏）。（三）滋賀村崇福寺説並に錦織説（滋賀村は昭和七年大津市に編入）の如くであるが、第一説が最も眞に近いとせられて居る。次に**志賀の辛崎**は現在の下阪本村の湖濱にある。右、藤田・北村二氏の報告に據る。

参考　一部分は既に短歌評釋の時に抄したが、巻十三（三二四〇）の歌（訓は新訓に據る）に、

大王の　命恐み　見れど飽かぬ　奈良山越えて　眞木積む　泉の河の　速き瀬を　竿さし渡り　ちはやぶる　宇治の渡の　瀧つ瀬を　見つつ渡りて　近江道の　相坂山に　手向して　吾が越えゆけば　樂浪の　志賀の韓埼　幸くあらば　また還り見む　道の隈　八十隈毎に　嗟きつつ　吾が過ぎ往けば　いや遠に　里離り來ぬ　彌高に　山も越え來ぬ　劒刀　鞘ゆ拔き出て　伊香胡山　如何にか吾が爲む　行方知らずて

反歌

天地を歎き乞ひ禱み幸くあらばまた還り見む志賀の韓埼

といふのがある。そしてその左註に、『右二首。但この短歌は、或書に云ふ、穗積朝臣老佐渡に配せられし時作れる歌なり』とあ

るのを見れば、或は長歌もさうであるのかも知れない。そして、卷三（二八八）に次の一首がある。

穗積朝臣老歌一首

吾が命し眞幸くあらばまたも見む志賀の大津に寄する白浪

といふのがあつて、左註に『右、今案ずるに、幸行の年月を審にせず』とあるが、土屋氏の萬葉集年表に、元正紀の、『養老六年春正月癸卯朔、壬戌（廿）、正四位上多治比眞人三宅麻呂坐誣告謀叛、正五位上穗積朝臣老指斥乘輿、並處斬刑、而依皇太子奏、降死一等、配流三宅麻呂於伊豆嶋、老於佐渡島』を引いて、『左註に幸行云々とあれど蓋し此時の歌なるべし』と云つてゐる。此等を綜合して、この歌は人麿の近江舊都の歌と、石見から上來の時の歌の句とに似てゐることを考慮すると、人麿の歌が後進によつて學ばれ模倣せられたことが分かる。特に流罪になつて行く時に人麿の歌を模倣して作歌してゐるなどは興味あることである。今は、人麿の歌が他に及ぼした影響を系統的に調査することをやめて、心づいたその一端を此處に示すのである。

卷二（一五二）に天智天皇大殯の時、舍人吉年の、『やすみししわご大王の大御船待ちか戀ひなむ志賀の辛埼』といふ歌は人麿の此處の短歌に似て居るが、人麿よりも時代が早いので問題にすることが出來、當時の人麿がいまだ少年であつただらうと想像しつつ、なほ、額田女王の、『斯からむと豫て知りせば大御船泊てし泊に標繩結はましを』（卷二。一五一）とか、同じ額田女王の、『黄葉をば取りてぞ賞ぶ、青きをば置きてぞ歎く』（卷一。一六）。『奈良の山の山の際にい隱るまで道の隈い積るまでにつばらにも見つつゆかむをしばしばも見放けむ山を情なく雲の隱さふべしや』（卷一。一七）などの歌調に想到することが出來る。

卽ち是等の歌は人麿の歌に前行したものであるから、人麿の歌の發育史に向つて働き掛けたものと考へることが出來る。總論篇で既に言及したごとく、人麿の歌の發育に作用した要素は多種多樣であらうけれども、そのうち先進の作歌がまた大切な要素の一つとなつてゐねばならぬのである。今はその一端に觸れたに過ぎないが、總論篇ではもつと廣く論じた筈である。

人麿に前行したものはさういふ具合だが、人麿の歌が後進に働きかけた部分も多いとおもふので、これにも少しづつ觸れたいともおもふのである。卷十三には、『隱口の長谷の山青幡の忍坂の山は』（三三三一）の如き雄略紀の御製そつくりのもあるから、時代は相錯落してゐるが、人麿時代より下つたもののもあること此處に記述した如くである。

卷十九（四二六六）の家持の歌に、『あしひきの八峯の上の樛の木のいや繼繼に松が根の絶ゆること無く』。卷二十（四四六五）の家持の歌の句に、『秋津島大和の國の橿原の畝傍の宮に宮柱太知り立てて天の下知らしめしける皇祖の天の日嗣とつぎて來る君の御代御代隱さはぬ赤き心を皇へに極め盡して仕へ來る祖の職と言立てて授け給へる子孫のいや繼ぎ繼ぎに見る人の語りつぎてて聞く人の鑑にせむを』。卷三（三二四）の赤人の歌に、『つがの木のいやつぎつぎに玉葛絶ゆることなく在りつつも止まず通はむ明日香の舊き京師は山高み河とほじろし春の日は山し見が欲し秋の夜は河し清けし朝雲に鶴は亂れ夕霧に蝦はさわぐ見る毎に哭のみし泣かゆいにしへ思へば』等の歌は皆人麿の影響とは云へぬが、一部的の影響を考へてここに載せて見た。

また、人麿の歌の影響といふ訣ではないが、同じ舊都を咏んだもので、鴨足人の香久山の歌の中に、『天降りつく天の香具山霞立つ春に至れば松風に池浪立ちて櫻花木の闇茂に奥邊には鴨妻喚ばひ邊つ方にあぢむらさわぎ百磯城の大宮人の退り出て遊ぶ船には楫棹も無くてさぶしも漕ぐ人無しに』（卷三。二五七）の歌や、田邊福麿集にある、『春花のうつろひ易り群鳥の朝立ちゆけばさす竹の大宮人の踏みならし通ひし道は馬も行かず人も往かねば荒れにけるかも』（卷六。一〇四七）や、その反歌の、『立ち易り古きみやことなりぬれば道の芝草長く生ひにけり』（一〇四八）。『馴著きにし奈良の都の荒れゆけば出で立つごとに嘆きしまさる』（一〇四九）などと、人麿のこの歌とを比較すれば、その魄力の點に於て既に大きい差別のあることを認めねばならぬのである。そして深入をするに從つて人麿が益々鮮明になるのを覺えるのである。

【巻一・三六】

やすみしし　吾大王の　聞し食す　天の下に　國はしも　多にあれども　山川の　清き河内と　御心を　吉野の國の　花散らふ　秋津の野邊に　宮柱　太敷きませば　百磯城の　大宮人は　船竝めて　朝川渡り　舟競ひ　夕川わたる　この川の　絶ゆることなく　この山の　いや高からし　珠水激る　瀧の宮處は　見れど飽かぬかも

八隅知之　吾大王之　所聞食　天下爾　國者思毛　澤二雖有　山川之清河內跡　御心乎　吉野乃國之　花散相　秋津乃野邊爾　宮柱　太敷座波　百磯城乃　大宮人者　船並氐　旦川渡　舟競　夕河渡　此川乃絶事奈久　此山乃　彌高良之　珠水激　瀧之宮子波　見禮跡不飽可聞

題意　幸二于吉野宮一之時柿本朝臣人麿作歌といふ題がある。天皇は持統天皇であらう。寛永本には『歌』の文字が無いが、諸古寫本に『歌』文字があるので補つた。目錄には、『作歌二首幷短歌二首』となつてゐる。『吉野宮』のことは、澤瀉氏の新釋に記載しあるのを此處に引用する。『吉野離宮址は今の吉野郡中莊村字宮瀧の地である。吉野川の北岸、後を山に圍まれ、川を距てゝ喜佐（きさ）谷と相對す。この作の行幸は、持統天皇の行幸である事は察せられるが、何年の幸だかわからない。天皇は特に御旅行を好み給うたやうで、伊勢、三河、紀伊などあちこちへの行幸の記事が見えるが、とりわけ吉野へは度々の行幸があり、持統三年正月から十一年三月まで、九年間に三十一回の記事が書紀に見えてゐる。その間、年に三四回、多い年は五回に及んで居る。吉野への道はたしかでないが、飛鳥から東南に飛鳥川をさかのぼり、栢の森、芋ケ崎を越えて上市に出で吉野川に沿うて至つたものかと思はれる。或は今日の如く、巨瀬（こせ）から六田（むた）に出て吉野川を溯つた事もあつたであらう』云々。古義では春の行幸の時と想像し、眞淵もさう大體想像してゐたやうにおもはれる。それはハナチラフの句からの想像らしいが、燈には、『三年八月の幸の時にやありけむ』と云つてゐるのは、秋野の草花と見立てたためでもあらうか。なほ守部は、『此歌鵜川などありて、秋と聞ゆれば、紀に四年秋八月乙巳ノ朔戊申とある度なるべし』（檜嬬手）と云つて居る。これはハナチラフを秋

の花と解し、鶉川を考慮に入れて解したためであらう。土屋氏の萬葉集年表に、『いづれの行幸か未詳といへども、四年九月の紀伊行幸の歌につづけるに依り又歌詞により、五年春夏の交の度の行幸なるべし』とあるのも、ハナを春の花と見立てたのであるだらうか。私は萬葉集年表に從つて、持統五年の作として總論篇に配列したのであつた。

右の吉野離宮を宮瀧とする說は、眞淵の考にも、『此宮は吉野の夏箕川の下、今は宮瀧といふ川曲（クマ）の上方（ベ）に、宮瀧てふ村ある所なり』とあるし、大和志に、麻志口村・大瀧村・宮瀧村・下市村等を擧げて居つたのを、吉田東伍博士が宮瀧說を新しく唱へて、諸家が概ね其を認容してゐるのであるが、昭和三年に森口奈良吉氏が、丹生川上說を唱へ、豐田八十代氏が精しく考證して、その說を認容した（吉野離宮考。萬葉地理考附錄。）。この說に據ると、雄略紀の小牟漏岳（ヲムロガタケ）が丹生川上の小村（ヲムラ）にある山で、秋津野は川上社の北方高地（海拔二〇五六尺）の小野萩原の地で、『秋津野に朝ゐる雲』。『秋津野にゐる白雲』の歌を證としてゐる。また、丹生川上に三船山があり、喜佐谷がある。また、人麿の歌に關聯しては、『人麿の歌に、舟なめて朝川渡り、舟ぎほひ夕川渡るといふのは、朝夕に川を渡つて離宮に奉仕するさまを歌つたもので、地域の狹いために從駕の人々が離宮の對岸に假やどりをしてゐたことがわかるのである。宮瀧のやうに方三四町もある場處であるならば、何故に對岸に假やどりをしたかといふ

説明は全く出來ないと思ふ。從つてこの歌は、吉野離宮が丹生川上のやうな狹隘な地にあつたといふ一の證據となるのである』といふのである。そして、萬葉時代の吉野離宮は丹生川上だが、應神・雄略二帝の宮址は宮瀧にあるのではないかと想像して居る。

昭和五年八月アララギ同人が、宮瀧から丹生川上の方まで實地踏査した。昭和九年八月土屋氏と私とが二たび丹生川上を通つて見た。そして、大體宮瀧說に從つて歌を味ふが、豐田氏の說も棄てずに、常に參攷することに努めて居る。

語釋 **○八隅知之・吾大王之** ヤスミシシ・ワガオホキミノと訓む。わが天皇がといふ意味である。ヤスミシシといふ枕詞は、舊說『八方を知し食す義』。『ヤスミトイフハ、八島也。シヽトイフハ、始ノシハ、シロシメスコトバ、次ノシハ、コトバノタスケ也。コレ我國ノ國主、大八島ヲムケタヒラゲテ、シロシメス詞也』(仙覺抄)。『八方ヲ知シメス君ト云意ニ、ヤスミシラシト云良ヲ略セルナリ』(代匠記)。『集中に安見知之ともかけるがある、これ正字にて安らけく見そなはししろしめし賜ふ』(考)。『しは爲の意にて安見を爲賜ふと云ことなり』(古事記傳)。『下のしは所知の意にて天ノ下を安けく見所知よしの稱言なるべし。(中略)しは卽チ所知また御宇の字の意なること明らかなり。(中略)此御名のしと八隅知之の之とまたく同意なるべくおぼゆればなり。』(美夫君志)『八隅を知らしめ

すと賛辭を冠らせたるなるべし』(研究と釋義)。『冠辭考古事記傳等によりて「安み知らす」の義なる由に略定まれるやうなり。されど「しし」といふことの語格未だ完全なる說明を得たることなし。さればなほ未決の問題たるなり』(講義)。以上を約めれば、八隅を統べる意と、安泰に統べる意との二つに歸著するが、八隅を統べるといふのは、支那風の解釋だと宣長は云つて居る。ワガオホキミノは、槻落葉に、萬葉で和其、和期と書き續日本紀にも和己於保支美とあるから此處もワゴオホキミと訓むべしといふ說を出し、古事記傳もそれに言及し、美夫君志も用例の多いといふのを根據としてそれに賛成してゐるが、古義に、卷十八に和我於保伎美可母、卷二十に和我於保伎美加母とあるのを證としてワガオホキミの訓を主張し、(講義同說)また、古事記景行條の歌に、『夜須美斯志、和賀意富岐美』とあり。日本紀仁德卷の歌に、『夜輸瀰始之、和我於朋枳瀰波』。同雄略卷の歌に『野須瀰斯志、倭我飫裒枳瀰能』ともあるから、ワガオホキミと訓んでいいといふのに從つた。

○所聞食・天下爾　キコシヲス・アメノシタニと訓む。統治し給ふこの天下にの意。所聞食はシロシメス、キコシメス等の訓のあつたのを考でキコシヲスとした。『企許斯遠周久爾能麻保良敍』(卷五。八〇〇)。『可未能美許登能伎己之乎須久爾能麻保良爾』(卷十八。四〇八九)等の例がある。もつとも、考に、『天下の事を聞しめす也。惣て身に著るを、をすともめすとも云』とある如く、キコシメ

スでも間違ではなく、『難波宮者杼己之米須四方乃久爾欲里』（卷二十。四三六〇）。『難波乃海於之弖流宮爾杼許之賣須奈倍』（卷二十。四三六一）等の例がある。

○國者思毛・澤二雖有　クニハシモ・サハニアレドモと訓む。よき國は多くあるけれどもの意。シモは特に取り出でて强めいふ助辭で、『時者霜何時毛將有乎情哀伊去吾妹可』（卷三。四六七）。『藤原王都志彌美爾人下滿雖有君下大座常』（卷十三。三三二四）の例がある。サハは澤山といふことで、『湯者霜左波爾雖在島山之宜國跡』（卷三。三二二）。『高山者左波爾雖有朋神之貴山乃』（卷三。三八二）。『京思美彌爾里家者左波爾雖在』（卷三。四六〇）等の例がある。

○山川之・清河内跡　ヤマカハノ・キヨキカフチトと訓む。山川の美しい河内だとしての意。カフチは河のめぐつて居るところ、即ちカハウチの約である。國の河内も和名鈔加不知と注して居る。『於知多藝都吉欲伎可敷知爾』（卷十七。四〇〇三）。『三吉野乃清河内之多藝津白波』（卷六。九〇八）。『立名附青墻隱河次乃清河内曾』（卷六。九二三）等の例があり、なほ、『河内』といふ語が入つて居ずに山河の風光をあらはしたものに『夜麻加波乃佐夜氣吉見都都美知乎多豆禰奈』（卷二十。四四六八）。『白栲爾丹保布信士之山川爾』（卷七。一一九二）。『夜麻河泊能杼欲吉可波世爾安蘇倍杼母』（卷十五。三六一八）等の例がある。

○御心乎・吉野乃國之　ミココロヲ・ヨシヌノクニノと訓む。ミココロヲはヨシヌの枕詞として使つて居り、拾穗抄に、『御心よく思召との心にて吉野の枕詞也』といひ、代匠記に、『心ヨシトツヅケテ云リ』と云ひ、冠辭考に、『こは天武天皇の、良と能見て吉といひしとよませ給ひし如く、この吉野をよしと見そなはして、御心を慰め給ふてふ意にていひかけたるなり』と云ひ、そして、書紀に、御心廣田、御心長田などとあるのと同樣の續けざまであらうとし、燈に、『これは御心のよきといふを、かく乎もじをおかれたる也。しかるを、乃もじをはたらかせて、乎とよまれたる也』とし、古義の枕詞解には、『天皇の大御心よ善と稱奉れる謂にてつゞけたるならむか。さらば乎は余といはむが如くなるべし』と云つた。然るに美夫君志では、『こは御心をよすといふ意のつづけにて其寄をよしといひ下したるなり。』といひ、講義もそれに從つてゐるが、この解釋の方が理論上『を』を說明するのに道理に叶つてはゐるが、心持は後世的のやうだから、私は寧ろ從來の『御心を良し』の說をば穩當のやうに思ふのである。『吉野の國』は、吉野の地域を意味する。クニの語は諸義あるが此處は、境をたてて人の住む地の區域をいつた。熊曾國。春日倶爾。難波國。泊瀨國。鈴鹿國等の例は皆それで、なほ紀には、地、土、部内などをクニと訓ませてゐる。

○花散相・秋津乃野邊爾　ハナチラフ・アキツノヌベニと訓む。くさぐさの花の咲散る秋津の野

にの意。此處のハナは契沖は、『草花ノ散野ヘトツヅケタリ』(代匠記精)といつて草花にして居り、守部も、『是も枕詞ながら秋の花どもの散るにかけたれば猶活きてあり』(檜嬬手)と云つてゐるが、眞淵は、『其所の物もてかざりとする事もあれど、こは猶時のさまをいひしものぞ』(考)と云つて、暗に櫻花の散ることを云つてゐる。雅澄は、『吉野は眞純と花に名ある地なれば即チ花散相てふ詞もて彼處の秋津野の枕詞とせるなり』(古義)といひ、左千夫もこれを襲いで、『瀧の都のあたりに殊に櫻が多かつたものであらう』(新釋)と云つてゐるが、私は大體代匠記說に從つて置いた。春滿は、『花散相の三字は雪のふる貌を義を取てかけるとみへたり』(僻案抄)といつてゐるが、これはどうか知らんとおもふ。チラフはチルの延言。講義には、『チラフはチルの繼續作用をいふ爲にハ行四段に轉じ活用せしめしものにして、萬の花の次々に開きては散りする秋津の野といふなり』とある。『波奈知良布己能牟可都乎乃乎那能乎能』(卷十四。三四四八)。『毛美知婆能知良布山邊由許具布禰能』(卷十五。三七〇四)。『安伎波疑能知良敝流野邊乃波都乎花』(卷十五。三六九一)等の例がある。秋津は吉野離宮のあつたところに相違なく、宮瀧及びその附近の地で、同所吉野川兩岸の平地であらう。今の大字御園の小字秋戶、下津野あたりだらうといはれてゐる(澤瀉、山田、山本、辰巳、奧野)。然るに守部は倭名勝志に從つて、木綿川は西河の枝川だといふ說に從ひ(檜嬬手)、豐田八十代氏は吉野離宮の位置を丹生川の峽谷と考

へてゐるから（萬葉地理考附録吉野離宮考）吉野郡小川村字小村あたりとなしてゐる。

○宮柱・太敷座波　ミヤバシラ・フトシキマセバと訓む。宮殿を御營みになつて御いでになればの意。宮殿の柱は太く高きが好く、日本紀神代卷にも、『其造宮之制者柱ハ則チ高ク板ハ則チ廣ク厚ク』とあるのによつて明かである。古事記上卷に、於二底津石根一、宮柱布刀斯理、於二高天原一、氷椽多迦斯理云々。萬葉に、眞弓乃崗爾宮柱太布座（卷二。一六七）。鹿脊山際爾宮柱太敷奉（卷六。一〇五〇）。長柄之宮爾眞木柱太高敷而（卷六。九二八）。祈年祭祝詞に、宮柱太知立云々。大祓祝詞に、下津磐根爾宮柱太敷立云々。シクはシルと同意の語で、領す、統べるといふ意である。天皇之敷座國等（卷二。一六七）。日之皇子茂座大殿於久方天傳來（卷三。二六一）。皇神祖之神乃御言乃敷座國之盡（卷三。三二二）。大王之敷座時者京師跡成宿（卷六。九二九）。天乃日嗣等之良志久流伎美能御代御代之伎庥世流四方國爾波（卷十八。四〇九四）等の例がある。

○百磯城乃・大宮人者　モモシキノ・オホミヤビトハと訓む。御所に奉仕する群臣がといふ意味で、これは前の長歌で既に解釋した。百磯城之大宮人乃退出而遊船爾波（卷三。二五七）。百礒城乃大宮人毛越乞爾思自仁思有者（卷六。九二〇）。百石木能大宮人者常將通（卷六。九二三）。百礒城之大宮人之玉桙之道毛不出（卷六。九四八）。百礒城乃大宮人四朝入爲良霜（卷七。一二一八）。百礒城之大宮人者暇有

也（卷十。一八八三）。百礒城之大宮人者天地與日月共（卷十三。三二三四）。毛母之綺能於保美夜比等爾可多利都藝底牟（卷十八。四〇四〇）等用例が多い。

○船並氏・旦川渡　フネナメテ・アサカハワタリと訓む。船を並べて朝に川（吉野川）を渡りの意。ナムは馬數而朝布麻須等六（卷一。四）。船並而仕奉之貴見禮者（卷六。九三三）。吾日乃皇子乃馬並而三獵立流（卷三。二三九）。友名目而遊物尾馬名目而往益里乎（卷六。九四八）等のナムに同じい。古寫本の訓は、フナナラヘ（元）、フネナメム（古）、フナサラヘ（神）等であり、略解にフナナベテとも一考して居る（校本萬葉）。なほ、未渡朝川渡（卷二。一一六）。佐保河乎朝川渡（卷三。四六〇）等の例があり、素朴で且つ働きのある云ひさまである。

○舟競・夕河渡　フナギホヒ・ユフカハワタルと訓む。舟を競うて夕に川（吉野川）を渡る意。舟競は古鈔本には、フナクラベ（元・古・神・細）。フナヨソヒ（文）等の訓があり、また僻案抄にフナクラべを採つてゐるが舊訓の儘でいい。布奈藝保布保利江乃可波乃美奈伎波爾伎爲都都奈久波美夜故杼里香蒙（卷二十。四四六二）云々とある。夕河渡は舊訓ユフカハワタリであるのを宣長がユフカハワタルと訓んだ。朝と夕と對句をなしてゐるので、朝獵爾今立須良思暮獵爾今他田渚良之（卷一。三）。朝獵爾鹿猪踐起暮獵爾鶉雉履立（卷三。四七八）とあるのと同じである。

○此川乃・絶事奈久　コノカハノ・タユルコトナクと訓む。此川（吉野川）の絶ゆることなくの意。この川の永久なるごとく宮殿の永久を祝す心である。三吉野之秋津乃川之萬世爾斷事無又還將見（巻六。九一一）。泊瀨河絶事無亦毛來而將見（巻六。九九一）。與之努河波多由流許等奈久都可倍追通見牟（巻十八。四一〇〇）。此河之絶事無（巻六。九二三）。此河能多由流許等奈久（巻十八。四〇九八）等の例がある。

○此山乃・彌高良之　コノヤマノ・イヤタカカラシと訓む。宮殿に添ふ山が益々高くあるの意。ラシは現在の推量を表はしてゐる。前に川と云つたから此處で山と云つた。この山の彌高く永久なるが如くに此宮殿の榮も永久だと現實的に推量してゐるのである。イヤの用例に、不盡能嶺乃伊夜等保奈我伎夜麻治乎毛（巻十四。三三五六）。天地之彌遠長久思將往（巻二。一九六）。春之雨者彌布落爾梅花未咲久（巻四。七八六）等がある。この句は、元暦校本・類聚古集・古葉略類聚鈔・冷泉本・神田本等に、『良之』が『思良』となつてゐて、古葉略類聚鈔で、イヤタカシラスと訓んでゐる。新訓・新解が其を採用し、『以下數句の原文、もとは彌高良之珠水激瀧之宮子波とあつて、イヤタカカラシイハハシルタキノミヤコハと讀んでゐた。然しながら、このいや高からしでは、この山のやうにいよ／＼高くあるさうなの意になつて、宮殿の生長をほめたやうな心もちになつて、變である。幸元暦校本等に、良之を思良に作つてゐるので、彌高思良珠をイヤタカシラスと讀み改めた。珠をスと

讀むは、波太須珠寸（卷八、一六三七）があり、地名の珠洲がある。タカシラスは山を受けて、高く立派に御座遊ばされるの意で、連體言である。すなはち、この山の高いやうに、いよ／＼高く御占據遊ばされるの義である。高知らす瀧の宮處と續くのである』（新解）と說明してゐる。珠にスの音あるのは、能登の珠洲海なども同じである。古義も、古寫本に注意したが從はなかつた。『之ノ字、古寫本に思と作り、類聚抄には、高の下に思ノ字ありて、之ノ字はなし。さて珠ノ字を此ノ句へ屬て、イヤタカシラスとよめり。いかがなり』（古義）と云つてゐる。これは、次の長歌に、高殿乎高知座而とあるし、卷六（九二三）の赤人の歌にも、高知爲芳野宮者とあり、（一〇〇六）の赤人の短歌にも、高所知者山河乎吉三とあるから、此處もイヤタカシラスと訓んで鑑賞しても好い。作歌の手本とするにはいづれも有益である。ただ、そのうちいづれを餘計に取るかといふこととなるのである。

○珠水激・瀧之宮子波　イハバシル・タギノミヤコハと訓む。瀧のこの離宮はの意。珠水激瀧の訓は、舊訓タマミヅノタキ。僻案抄イハナミノタキ。考イハバシルタキ、（「瀧は石上を玉水の激るものなれば、意を得て珠水激と書つと見ゆれば此三字もいはばしると訓べきなり」（冠辭考））古義オチタギツタキ（珠は隕の誤寫で隕田寸津の例を證とした）等。攷證は眞淵訓に從ひ、『感心すべし』といひ、略解・燈・檜嬬手・美夫君志・註疏等それに從つてゐる。講義では、『イハバシルといふ訓は實に奇想天來といふべきものなれど、しかよむべき證を見ず。中略但し卷十五（三六一七）に伊波婆之

流多伎毛登杼呂爾鳴蟬乃とあるなどによりて、いはばしるをたぎの枕詞とする例の存するを見る。この故に姑く眞淵の說に從ふべし』（講義）と云つて居る。新訓・新解は前言の如く珠を前句につけて水激瀧をミヅハシル・タキと訓み、『水の奔流する意で、實景である』（新解）と解したが、此處は實景から來て意味が明かでも、既に幾分枕詞化して居ると解すべきである。瀧之宮子は瀧の宮處で、吉野川の激流に近いからさう云つたものであらう。そして、石走多藝千流留泊瀨河（卷六。九九一）。伊波婆之流多伎毛登杼呂爾鳴蟬乃許惠乎之伎氣婆（卷十五。三六一七）といふ例があるから、眞淵訓も直ぐに否定は出來ない。また、古義の訓にすれば、山高三白木綿花落多藝追瀧之河內者（卷六。九〇九）。於知多藝都吉欲伎可敷知爾（卷十七。四〇〇三）といふ用例があつて、參考となる。なほ、楢の杣では、『吾は玉ちらふ瀧とよまばやと思ふ』と云つてゐる。ミヅハシルといふ他の用例は萬葉には無い。ただ、瀧至八信井上爾（卷七。一一一三）が幾らか參考になるであらうか。

○見禮跡不飽可聞　ミレドアカヌカモと訓む。いくら見ても飽かない意。讃美の意に用ゐる當時の人の發明表現で、平凡だけれども自然で無理がないいい言葉である。短歌評釋の方に多く例を引いて置いた。

大意　〔八隅知之〕わが天皇（持統天皇）の統治し給ふ天の下（日本の國）には、國（景勝の地）は誠に多くあるけ

れども、山と川とを以て遶らされて居る佳境だと、〔御心乎(みこころを)〕吉野の國（地方）の、いろいろの花が咲き散る、秋津野(あきつぬ)のうへに、太い柱を立てて離宮をお營みになると、〔百磯城乃(ももしきの)〕大宮人たちは、船を並べて朝に川（吉野川）を渡り、舟を競うて夕べに川（吉野川）を渡つて往反する。この吉野川の水が永久に絶えない如く、この山が益高きが如く、離宮は御榮えになることである。〔珠水激(いはばしる)〕この瀧の離宮は、幾ら見ても飽くことがないことである。

鑑賞　この長歌は持統天皇が吉野離宮に行幸あつたとき、供奉した人麿が作つたもので、恐らくは奉つた頌歌ででもあらうか。

この長歌を形態的に觀察すると大體次のやうなものになるともおもふ。そして、小國重年の長歌詞珠衣に據れば、『初句十六句、次四句連對、次終句三句、合二十七句、中長歌』といふことになる。

八隅しし　わが大王の　聞しをす　あめのしたに　國はしも　さはにあれども
山かはの　淸き河內と　御心を　吉野の國の　花ちらふ　秋津の野べに　宮ばしら　太しきませば
百磯城の　大宮びとは　船なめて　朝川わたり　┐此川の　絶ゆる事なく　石ばしる　瀧の京は
　　　　　　　　　　　船ぎほひ　夕川わたる　┘此山の　彌高からし
――見れど飽かぬかも

はじめに吉野離宮は景勝の地にあることを敍べ、そこに宮殿が出來て、奉仕する大宮人の狀態を敍してその盛大なありさまを表示し（第一段）、さてその山川の淸く永久なる如くこの離宮も榮えるといふ讃美の言葉を以て結んでゐる（第二段）。

かくいろいろの事を云つてゐるやうで、實際の内容は案外單純な爲めに却つて或批評家からは平凡視せられるくらゐである。併しさういふ具合にある情調のもとに統一集注せられてゐる點が、却つて一首全體を莊嚴重厚にしたのではないかとも思へる。

形態のところで既に云つたが、對句（四句連對）で變化を求めてゐるのであるが、對句だから内容から謂へば却つて單純になつてゐることにもなる。單純であるから、細部の破綻がなく、瑕の無い璧の如き觀を呈するに至るのであり、それに人麿一流の流動的聲調が遺憾なきまでに發揮せられて居りながら、言葉を惜んで饒舌を奥に潜めたところがあつて、風格の高い渾整の一體として成就せられたものである。

個々の歌句に就ていへば、『花ちらふ秋津の野べに』がいい。ハナチラフといふ語は以前から心を牽かれてゐたものだが、今更めて味つても、この音調に無限の味ひが籠つてゐるやうに思へる。このハナチラフは、アキツノヌに續けた形容詞で、稍樣式化した語である。そんなら、このハナはど

ういふ花かといふに二とほりの説がある。一つは契沖・守部等の野に咲散るくさぐさの花のこととする説、一つは雅澄等の櫻花説である。これは枕詞だとせば大様にハナの象徴として役立てばいいのであるからどちらでも鑑賞の出來るわけであるけれども、この詞を作つた時の作者がどういふ寫象に本づいてこのハナチラフといふ語を作つたであらうか。卷十四(三四四八)の、『花散らふこの向つ峯の』といふ何から考へれば山の花だから櫻の花のやうにも思はれるし、この人麿の歌を模倣した赤人の長歌(卷六。九二三)に、『春部者花咲乎遠里』とあるのも、櫻の花らしく思はれるので、私にも確かな判斷は出來ない。先師伊藤左千夫は雅澄に從つて櫻花と解釋してゐるのは、左千夫の新釋は大體古義のみを基本として評釋したからであつただらうか。私は以前から代匠記の説が頭に殘つて居るので、秋津の野べまでの枕詞としてハナは野に咲くいろいろの花のやうに思へて爲方がないのでさうして味つてゐるのである。懷風藻の、『秋津秋氣新』は類音の連續だが、いくらか秋の花を暗指してゐるのかも知れない。山田博士の講義もまた契沖説であつた。次にチラフといふ語感につき左千夫は、『散るといふのみでは稍說明に近いが、散らふと云へば幾分か形容の意味にもなつてくる。詞柄が悠長に品良くなる。何となく花が散りつつあるさまが現れて時間のある感があるのである』(左千夫、新釋)と云つてゐるのはいい解釋である。

次に、『船並めて朝川渡り、舟競ひ夕川渡る』の對句は、實際の寫生句を單純化し、様式化してゐるから、おつとりと平凡のやうであつて、複雜な具象的な味ひを持つのである。一つは船並めてといひ、一つは舟競ひといつてゐるのなども、人麿の力量としては容易に出來たのかも知れぬが、私等が行るとすると決して容易な業ではない。朝川、夕川などといふ語にしても、朝の川、夕の川といふ語感もあるのだから、『朝に夕に』といふ副詞的の語感をも合せ考へると誠に味ひ深い語となるのである。『未だ渡らぬ朝川わたる』でも、朝の川と解して好く、また朝に川を渡るとくだいて解釋しても好い。歌の言語として勉強するには、朝の川、夕の川と名詞として味ふ方が却つて直接でいいやうである。夕波千鳥などの語と一般でなかなかいい。

河内といふ語なども、吉野川の流にめぐらされてある場處といふ意で、實に働いた言葉である。既に短歌の部でも引用したが、懷風藻の丹墀廣成の詩の中にある、『長河渺漫作ニ廻流ニ』。藤原宇合の詩の中に、『河廻桃源深』とあるのは卽ち河内の描寫である。また紀男人の作中に、『千尋素濤逆析レ流』といふ句もあつて鑑賞の參考となる。

『船並めて朝川渡り、舟競ひ夕川渡る』の句は、離宮に供奉した官人等が奉仕するさまの表現であるが、これは單に、今の語感の、『勤務』のみの事ではなく、『遊覽』の意味も含まつてゐるので

はなからうか。これは、懐風藻にある詩（後出）にも、時代が違つても、『彈レ琴與レ仙戲、投レ江將レ神通』（高向諸足、從二駕吉野宮一。）。『仙槎泛二榮光一、鳳笙帶二祥煙一』（伊與部馬養 從レ駕應レ詔）とあるし、なほ單に吉野川に遊ぶの詩には、『欲レ知二歡宴ノ曲一滿酌自忘レ塵』（大津首）とあり、下の歌（三七）に、『たぎつ河内に船出するかも』とあつて、この歌は單に勤務の意味ではないからである。今諸注釋書の說を檢するに、『旦夕をいへるは、川のかなたにやどれる人々の、川をわたり來て、旦となく夕となく、此ノ離宮へいそしくつかへまつるさまを云』（古義）。『供奉の宮人等我おくれじと、船並べ競ひて、朝川夕川をわたる』（檜嬬手）。『此離宮へ川をわたり來て、朝夕いそしくつかへまつるをいふ』（燈）。『臣だちの朝夕に分番交代して競ひ勤むるをいふ』（美夫君志）と云つてゐる。皆勤務の心持である。然るに伊藤左千夫は、『御所のあるために賑かに榮ゆるさまを形容したのである』。『泰平の天子に奉仕する、行宮の諸官人等が往來頻繁、輯睦歡呼の狀を只此の六句で歌ひ得て居る』（左千夫、新釋）といひ、山田博士は、『大宮人のここにて朝夕にこの川を渡りて奉仕せしさまをいへるなるが、又時々舟遊をもせしことをいへるならむ』（講義）と云つてゐるのは、從來の說より一歩出でたものである。

この長歌に就き先師は、『幾度讀返しても飽かない歌である。感嘆の至情が自然に漲り溢れて、想は秀句に依て活躍し、詞は妙想に依て光彩を增す。流に任せて下る舟の如く、風に從て飛ぶ雲の如

く、聊かの滯りも障りも無い無限の味ひを感ずるは、品質と調理と兩善相和して融合を極めて居るからである。貴族的文彩的詩人たる人麿の、最も得意とする好詩題であるから、精神自ら奮ひ、妙想靈技、意のままに動いたのであらう。蓋し此の長歌及び次の長歌と二篇の如きは、人麿の作品中最も優秀なるものである。如何なる天才と雖も其の天才の適する所に向つた時に、始めて遺憾なく天才の光が現はれるのだ。人麿の天才は泰平を歌ふに適した積極的詩人の方であつたらしい』（左千夫、新釋）と云つた。近江荒都を過ぎた時の人麿の歌をあれほど批難した先師は、この歌をば口を極めて賞讚してゐるのであるが、私は二つの長歌の間にそんなにひどい差別は無いとおもふものである。

約めていへば、この一篇の長歌は、抒情詩だから内容も面倒でないが、純粹で、磨いた玉の底照りするやうな趣がある。或は神完渾雅の聲樂に接する如き趣ともいふことが出來る。實際この長歌は意味の内容からいへば文選收錄するところの賦とか頌とか賛とかいふほどにも行かず、盛唐詩人のものは無論、西洋の詩、近時本邦の新體詩程にも行つてゐない。併しさういふ中味を求むることの間違つてゐること、芭蕉の俳句中にマックス・シュチルネルの思想を搜求めることの間違つてゐるのと同じであるから、さういふ鑑賞の態度は棄てねばならない。そして、『船なめて朝川渡り、舟ぎほひ夕川わたる。この川の絕ゆることなく、この山のいや高からし、いはばしる瀧の宮處（みやこ）は見れど

飽かぬかも』だけにでも、既に端嚴渾雅の響を聽かねばならない。また後代の歌人はその聲調をこの邊から學ぶべきで、さういふ點からいふと、『いや高しらす』よりも、『いや高からし』の方が好く、『みづはしる』よりも、『いはばしる』の方が好い。私は、神乃命乃高所知布當乃宮者(カミノミコトノタカシラスフタギノミヤハ)（卷六。一〇五三）。和期大王乃高知爲芳野宮者(ワゴオホキミノタカシラスヨシヌノミヤハ)（卷六。九二三）等の例をも傍に置きつつ、高思良珠(タカシラス)の訓をも尊重してゐて、なほ高良之(タカカラシ)の訓を保存するのはそのためである。『いや高からし、いはばしる瀧の宮處』の方が、『いや高しらす、みづはしる瀧の宮處』よりも口調が好いとおもふのである。『高しらす』は縱ひ一語と看ても、『高からし』よりも寧ろ二つに分裂するに傾く語だから、私にさう感ぜしめるのかも知れない。

『高良之』を認容して、タカカラシと訓むとせば、『珠水激』をば、眞淵訓に從つて、イハバシルと訓むこととなるが、飽明遠の詩に、『荷生淥泉中。碧葉齊如規。廻風蕩流霧。珠水逐條垂』云々といふのがあつて、これは蓮の葉の上の水玉を云つてゐるのだが、湍水の水玉をも『珠水』と云つても不思議ではない。また、激は說文に、水礙(シ)衺疾(ジヤシツシテ)波(ウツ)也とあり、また詩の疏に、水急而飛揚ともあつて、多くの白い珠水が激して飛躍するさまで、伊波婆之流多伎毛登杼呂爾(イハバシルタキモトドロニ)のイハバシルに該當すると云へないことはない。石走垂水之水能(イハバシルタルミノミヅノ)（卷十二。三〇二五）。石流垂水水乎(イハバシルタルミノミヅヲ)（卷七。一一四二）。石激垂(イハバシルタル)

見之上乃左和良妣乃（ミノウヘノサワラビノ）（巻八。一四一八）等の用語例があるのだから、『珠水』の『激』することを、イハバシルと訓んでも不合理では無いとおもふのである。珠水の用例は韓偓紅の作にもあるがやはり水の玉といふ意味の如くである。併し、珠沫、珠流、珠飛の熟語には水の急流にも用ゐてゐるから、それをも顧慮して好い。流孕玉圓波産珠飛（王掛）などの如きである。なほ、杜甫の詩に、疊壁排霜劍、奔泉濺水珠云々といふのがある。稍時代が下ればこの種類の用語例がまだあるであらうと想像し得る。

反歌

【三七】雖見飽奴（ミレドアカヌ）　吉野乃河之（ヨシヌノカハノ）　常滑乃（トコナメノ）　絶事無久（タユルコトナク）　復還見牟（マタカヘリミム）

右二二頁に評釋了。

参考　○この長歌は飽くまで吉野離宮を讃美したものであるが、富士谷御杖の燈で次のやうなことを云つてゐる。『此歌、表は帝のこゝにしも御心をよせさせ給ふもことわりや。とこの吉野の絶勝の地なる事を感歎したるによみふせられたる也。されど、この地を賞歎するばかりの事がらを、古人こと〳〵しく歌によむものにあらねば、必別に情ある事しるし。（中略）此吉野にしも數度幸したまふは、たゞ此勝地を賞したまひての事なれば、ひとへに御みづからの御心をやらせ給はむ爲ばかりなる事しるし。しかるに、

そのたび／＼費も多く、かつ從駕の人々おほせ事なればやむごとなしとはいへど、各家をさかり勞もすくなからず。又幸のたぐひには、その國の守・國民までも加恩はありといへども、國守・國民にいたるまで、そのたび／＼役せらるゝのみならず、心をも勞し費も多きに、帝は、まのあたり臣民のいそしみをみそなはして、さる事あらむともおぼしめさず、いよ／＼幸もたびかさなるべきをわびしくおぼゆるより、大かた、此芳野の勝地なるさへ、うらめしきまでにおぼゆる心をば述べられたる也。臣民うらめば帝の御德もそこなはれたまはむがかしこさに、諫をも奉らまほしき心なるべし』と云つた。それについて美夫君志評して、『燈には歌の意をあらぬ事に解き曲げたり。これのみならず、燈に歌の意を解けるには、牽强附會の說多し、ゆめまどはさるゝ事勿れ』と云つた。燈の說は、眞面目になつて云つてゐるのであるから、なほ滑稽の感がある。これを見ても、一首の歌を味解するといふことも決して容易のわざでないことが分かるのである。

○常滑乃。これに就いては既に短歌の部で評釋したが、此處で少しく追記して置く。短歌の評釋は既に校了になつたから、長歌の部に入れたのである。仙覺抄には、『ツネノ、ナメラカナルイハホ也』といひ、略解には、『トコナメは常しなへにいつも變ることなく滑らかなる由なり。それをやがて體にトコナメと言ひなして、事の絶えせぬたとへにとりて、瀧の都を幾返りも見むとなり』とある。略解の說は、『常』に重きを置いた抽象的な說で、苔のついた巖石を云々してゐない點は、稍予の說に似てゐる。次に佐佐木博士の萬葉集の綜合研究中の此歌の解（昭和十年九月、短歌研究）には、『要之、なほ未決乍ら、穩かな程度から言へば、藻苔說が最も穩やかであらう。それで自分は、姑くこの說に從うておく。トコナメのトコは藻苔說ならば常の義であり、岩石說ならば床の義であるが、この場合は單に次の絶事無久の句を引き出す爲にトコといふ音だけが必要であつたと見るべきで、トコナメの單語的語義乃至其の語の內容をなす物質の性狀の如きは、問題では無かつたのである。卽ちトコナメといふ物質に就いては、必ずしも恆久性を要求してをらぬと思はれる』とあつて、『トコといふ音だけが必要であつたと見るべきで』といふところも予の說

に似て居る。また、大村光枝の萬葉集誤字愚考には、『愚按ニ乃ハ尓ノ誤ナラズヤ、とこなめ（常並）にトアリテ事モナカラム』とある。これは『常並』説であるが、やはり『常』に重きを置いて居る。巻六（九二二）、笠金村の、『皆人乃壽毛吾母三吉野乃多吉能床磐乃常有沼鴨』の床磐は、代匠記に、『床磐ハ床ハ假テカケリ。マコトハ、常磐ナリ。古以反吉ナレバ、約メテトキハト云モ同ジ』とあるごとく、『常』と『常』と相聯關せしめたものであるが、實物としては、代匠記に、『磐石ノ堅クシテ動カヌ如ク』とある如く、堅い巖石を寫象としたものかも知れない。

○吉野離宮。 吉野離宮址に就いて、豐田氏の丹生川上説をこの評釋中に記して置いたが、昭和十年八月、「續吉野離宮考」と、「宮瀧説について」の二論文の寄贈を忝うして其を讀んだ。そして氏の通信によつて、氏の丹生川上説は、井上（通泰）博士・佐佐木博士・新村博士・吉澤博士・五十嵐博士・荻野仲三郎氏・松岡静雄氏等の諸學者の賛同を得つつあるといふことを知つたが、佐佐木博士の短歌研究所載の評釋を讀むに、宮瀧とも無ければ丹生川上の峽谷とも無い。ただ、『秋津は離宮附近の地名とも考へられるが、また、他の歌に徴すれば、離宮所在の地名とも考へられる』とあるのみである。

○懷風藻 の中の吉野に關係あるものを左に抄出する。詩人の發想に於て人麿の歌を解するのに參考になるとおもふのである。

贈正一位太政大臣藤原朝臣史（年六十三）。 五言。遊二吉野一

飛レ文山水地。命レ爵薜蘿中。漆姫控レ鶴擧。柘〔○群本作坧。異本作洛〕媛接莫レ通。煙光巖上翠。日影滘〔○群本作浪〕前紅。翻知玄圃近。對翫入レ松風。夏身夏色古。秋津秋氣新。昔者同二汾后一。〔異本作皇紛〕今之見二吉賓一。靈仙駕レ鶴去。星客乘レ査逡。渚性抔〔異本作臨〕流水。素心開二靜仁一。

從四位下左中辨〔○群本作弁〕兼神祇伯中臣朝臣人足（年五十）。 五言。遊二吉野宮一〔○群本有二首字〕

惟山且惟水。能智亦能仁。萬代無埃所〔○群本作垈〕。一朝逢二拓〔異本作異〕民一。風波轉入レ曲。魚鳥共成レ倫。此地即方丈。誰說二

桃源賓一。

仁山狎二鳳閣一。智水啓二龍樓一。花鳥堪二沈翫一。何人不二淹留一。

大伴王。五言。從二駕吉野宮一應レ詔〔群本有二首字〕

欲レ尋二張騫跡一。幸逐二河源風一。朝雲指二南北一。夕霧正二西東一。嶺峻絲響急。谿曠竹鳴融。將レ歌二造化趣一。握レ素愧二不工一。

山幽仁趣遠。川淨智懷深。欲レ訪二神仙迹一。追二從吉野潯一。

大宰大貳正四位下紀朝臣男〔目錄作雄〕〔年五十七〕。七言。遊二吉野川一。

萬丈崇巖削成レ秀。千尋素濤逆析〔○群本作折〕流。欲レ訪二鍾池越潭跡一。留連美稻逢二槎洲一。〔○群本注。美稻一作茅渟〕

同人。五言。扈二從吉野宮一

鳳蓋停二南岳一。追尋智寺〔○群本作与〕仁。嘯レ谷將レ猻〔○群本作孫〕語。攀レ藤共許レ親。峰巖夏景變。泉石秋光新。此地仙靈宅。何須二姑射倫一。

正五位下圖書頭吉田連宜〔年七十〕。五言。從二駕吉野宮一

神居深亦靜。勝地寂復幽。雲卷三舟谿。霞開八石洲。葉黃初送レ夏。桂白早迎レ秋。今日夢淵淵。遺響千年流。

從五位下陰陽頭兼皇后宮亮大津連首〔年六十六〕。五言。和下藤原太政遊二吉野川一之作上〔仍用二前韵一〕

地是幽居宅。山惟帝者仁。潺湲浸レ石浪。雜沓應レ琴鱗。靈懷對二林野一。陶性在二風煙一〔○群本作堙〕。欲レ知二歡宴曲一。滿酌自忘レ塵。

正三位式部卿藤原朝臣宇合〔年三十〔○群本作卅〕四〕五言。遊二吉野川一

芝蕙蘭蓀澤。松柏桂椿岑。朝隱蹔投レ簪。野客初披レ薜。忘レ筌陸機海。飛レ繳張衡林。淸風入二阮嘯一。流水韵二嵆琴一。天高槎路遠。河廻桃源深。山中明月夜。自得二幽居心一。

從三位兵部卿兼左右京大夫藤原朝臣萬里（注。萬里一本作麻呂）。五言。遊二吉野川一

友非二千レ祿友一。賓是飡レ霞賓。縱歌臨二水智一。長嘯樂二山仁一。梁前招吟古。峽上簧聲新。琴樽猶未レ極。明月照二河濱一。

從三位中納言丹墀眞人廣成。五言。遊二吉野山一

山水隨レ臨賞。巖谿逐レ望新。朝看度レ峰翼。夕翫〔○群本作亂〕躍レ潭鱗。放曠多二幽趣一。超然少二俗塵一。栖二心佳野域一。尋二問美稻津一。

同人。七言。吉野之作

高嶺嵯峨多二奇勢一。長河渺漫作二廻流一。鐄地超レ潭豈〔異本作異〕凡類。美稻逢レ仙月氷〔○此二字、群本作同洛〕洲。

從五位下鑄錢長官高向朝臣諸足。五言。從二駕吉野宮一

在昔釣レ魚士。方今留レ鳳公。彈レ琴與レ仙戲。投レ江將レ神通。拓〔○恐柘之誤〕歌泛二寒渚一。霞景飄二秋風一。誰謂姑射嶺。駐レ蹕望二仙宮一。

皇太子學士從五位下伊與〔○群本作与〕部馬養（年四十五）。五言。從レ駕應レ詔〔○群本有一首字〕。

帝堯叶二仁智一。仙蹕玩二山川一。疊嶺杳不レ極。驚波斷復連。雨晴雲卷レ羅。霧盡峰舒レ蓮。舞レ庭落二夏槿一。歌レ林驚二秋蟬一。仙槎泛二榮光一。風笙帶二祥煙一。豈獨瑤池上。方唱白雲天。〔○一本作篇〕

【巻一・三八】

○

やすみしし　吾大王の　神ながら　神さびせすと　芳野川　たぎつ河内に　高殿を　高しりまして　登り立ち　國見をすれば　疊はる　青垣山　山祇の　奉る御調と　春べは　花かざし持ち　秋立てば　黄葉かざせり（一に云ふ、黄葉かざし）　遊副川の　神も　大御食に　仕へ奉ると　上つ瀬に　鵜川を立て　下つ瀬に　小網さし渡す　山川も　依りて奉ふる　神の御代かも

安見知之　吾大王　神長柄　神佐備世須登　芳野川　多藝津河内爾　高殿乎　高知座而　上立　國見乎爲波　疊有　青垣山　山神乃　奉御調等　春部者　花挿頭持　秋立者　黄葉頭刺理（一云黄葉加射之）　遊副川之神母

大御食爾　仕奉等　上瀬爾　鵜川乎立　下瀬爾　小網刺渡　山川母
依氏奉流　神乃御代鴨

題意　第二の長歌で、推察するに前の長歌（三六）と同じ時に作つたものであらう。『疊はる青垣山』とあるから、晩秋から冬にかけてのものでないといふことをも略想像が出來るが、春の花、秋の黄葉を云つてゐるのは言語の綾とも謂ふべく、人麿は詩思醞釀し、澎湃として漲つてくる時には、一首だけでは足りずに、二首にも三首にも作ることがある。意識して内容の變化を行ひつつ作歌すること、この場合を見ても分かるのである。

語釋　**○安見知之・吾大王**　既出。

○神長柄　カムナガラと訓む。神にましますにの意。短歌の部に既出。

○神佐備世須登　カムサビセストと訓む。神さながらの特色を帶びさせたまふとての意。舊訓カミサビであつたのを略解でカンサビと訓んだ。カムサビ（燈・檜嬬手・古義等以下同之）。萬葉には兩方書いてあり、可美佐夫流伊古麻多可禰爾（巻二十。四三八〇）。可牟佐夫流安良都能左伎爾（巻十五。三六六〇）の例がある。併し、カムサブルの方が大部分を占めて居り、可武奈何良可武佐備伊麻須（巻五。八一

三)。伊久與乎倍弖加可武佐備和多流(卷十五。三六二一)。志滿乃己太知母可牟佐飛仁家理(卷五。八六七)。可牟佐備底多底流都我能奇(卷十七。四〇〇六)等の例がある。サビは少女さび、翁さび、男さび、夷さび、山さび等のサビで、『宮ビ夷ビナド云ヒ、少女サビ男サビトモイヘル如ク心得テ、サテ歌ニヨリテ替ル心ヲ知ベシ。ヲトメサビハ、ヲトメタテ、ヲトメフリ、ヲトメメキトイハムヤウナレバ、今モコレラニ准ジテ見ルベシ』(代匠記精)。『佐備とは、もと然貌の約まれる言にて、神佐備は神とまして、その神とますふるまひを爲給ふ詞なり。古事記に、勝佐備とあるも、勝ほこりたるふるまひをし給ふをいふ』(古義)。『思ふに佐は發語、備はひなび、おきなびなどのびと同じく、ぶる意なるべし。されば神さぶるともいへり』(攷證)。『その意は、すさびの意の獨立の動詞とは異にしてその事物相應の狀態に振舞ふことをあらはすなり』(講義)。『神さびは、神としての性質を發揮すること』(新解)。『それらしい振舞をする意の接尾語』(澤瀉、新釋)等にて大體わかる。また、『此佐備は進みの意にて、心ずさみなどいひて、なぐさみといはんが如し』(考)。『進む事にも、荒れ冷る事にも、舊冷る事にも通用す』(檜嬬手)といふ說もあり、美夫君志ほぼ同說。『進みて事を行ふ意』(新考)。

○多藝津河內爾　タギツカフチニと訓む。瀧の河內にといふのに略同じい。この場合のツは四段活用の連體段から續けた動詞の例でなくて、ノに似た助詞である。『沖つ白波』などと同じく、卷六

（九〇八）に、三吉野乃清河内之多藝津白波。卷六（九二一）に、三吉野乃多藝都河内之大宮所の例があり、ノに似た助詞の證として、卷六（九〇九）に、瀧之河内者雖見不飽香聞がある。また、動詞の場合の例としては、落多藝都湍音毛清之（卷六。一〇五三）。石走多藝千流留（卷六。九九一）。落多藝知流水之磐觸與杼賣類與杼爾（卷九。一七一四）などがある。

○高殿乎・高知座而　タカドノヲ・タカシリマシテと訓む。高き樓殿にいまして高く大きく占め給ふ意。古事記仁德條に、高臺・臺上、繼體條に高堂等とあるのをタカドノと訓み、日本紀には樓・壇又は觀をもタカドノと訓み、樓閣・高樓・壇場・臺宇・樓臺・樓上等の用字がある。續日本紀に、大寶元年六月丁巳、宴二於西高殿一云々。和名鈔居處部に、樓辨色立成云太加止乃、樓太賀度能。靈異記卷中第五訓釋に、樓閣多加度野とある。タカシリは高知で、高く知り領し給ふこと。古事記上卷に於二高天原一冰椽多迦斯理而とあり、萬葉には、都宮者高所知武等（卷一。五〇）。和期大王乃高知爲芳野宮者（卷六。九二三）。吾皇神乃命乃高所知布當乃宮者（卷六。一〇五三）。吾大王乃神隨高所知流稻見野能（卷六。九三八）等の例がある。

○上立・國見乎爲波　ノボリタチ・クニミヲスレバと訓む。高殿に上りまして國中を見そなはしませばといふ意。卷一（二）に、天乃香具山騰立國見乎爲者。卷三（三八二）に、國見爲筑羽乃山矣。

卷十（一九七一）に、雨間開而國見毛將爲乎。卷十三（三三二四）に、遠人待之下道湯登之而國見所遊等の例がある。古義では、『國見爲賜へればといふ意に、國見勢須禮婆などとあるべし』と云つてゐる武田博士の新解では、『國見ヲ爲セバ』と訓み、動詞爲の敬語法、爲すの已然法に、助辭バの附いたものとしてゐる。

○疊有・青垣山　タタナハル・アヲガキヤマと訓む。重疊せる、青い垣のやうに圍める山といふ意。疊有の訓は、古鈔本中、カサネタル、カサナレル。僻案抄にタ、ナアルまた、有は著の誤にてタ、ナヅクと訓み、古義これに從つた。タタナヅクの用例は卷六（九二三）に、立名附青墻隱河次乃清河內曾。卷十二（三一八七）に、田立名付青垣山之。古事記景行條に、多多那豆久阿袁加岐夜麻碁母禮流夜麻登志宇流波斯。日本紀景行卷に、多多儺豆久阿烏伽枳夜摩許莽例屢夜摩苫之于漏波試等がある。併し、古寫本以來皆疊有と明かに書いてあるから、タタナハルと訓んで置く。類聚名義抄に委をタタナハルとよんで居るから、タタナハルといふ語は當時からあつたものと見ていい（攷證・講義參照）。契沖は禮記の主佩垂則臣佩委の委をタタナハルといふ證とし、また、武田博士は疊は今は麻行に活用してゐるが、『君が行く道の長手を繰りたたね』があるから、古くは奈行に活用したもので、從つてタタナハルといふのがあつたと看ていいと云つてゐる。青垣山は出雲風土記に八雲立出

雲國者我靜坐國靑垣山廻賜而。また、八十神者、不レ置ニ靑垣山裏一とあり、活(はたら)きのある造語で、靑香(あをか)具山(ぐやま)などと共に不滅のものと謂つていいであらう。舊訓アヲガキヤマノであつたのを宣長は、『乃』の必要なきことを云つた。

○山神乃・奉御調等　ヤマツミノ・マツルミツギトと訓む。山の神が獻ずる貢物としての意。山神は山祇で、山を支配する神である。古事記上卷に、生ニ山神名大山津見神一とある。書紀神代卷、一書に、山神等號ニ山祇(ヤマツミ)一とある。奉はマツルで、卷二（一九九）に、神宮爾裝束奉而(カムミヤニヨソヒマツリテ)。卷三（四四三）に、一手者和細布奉(ヒトテニハニギタヘマツリ)。卷六（一〇二二）に、恐乃坂爾幣奉(カシコノサカニヌサマツリ)。卷十八（四一二二）に、萬調麻都流都可佐等(ヨロヅツキマツルツカサト)都久里多流(ツクリタル)等の用例がある。タテマツルと訓ませるところに立奉などと書いてゐるから、奉はマツルと訓んでいい。舊訓にタツルと訓んで居るのは、大神宮儀式帳に、佐古久志侶伊須々乃宮仁御氣(サコクシロイススノミヤニミケ)立止(タツト)。萬葉卷六（一〇五〇）に、宮柱太敷奉(ミヤハシラフトシキタテ)の奉をタテと訓んだなどの例があるからである。併し此處は代匠記で、『タツルハタテマツル也。別ノ校本ニマツルト點ズ。此ニ附べキカ』と云つたのに從つて、マツルと訓んでいい。從つて卷六の太敷奉をもフトシキマツリと訓むこととなる。御調は古事記に調(ミツキ)、御調(ミツキ)等と書き、書紀には調、調物、調賦または賦、苞苴等と書いてゐる。此處のトはトテといふ意味のト助詞である。

〇春部者・花挿頭持　ハルベハ・ハナカザシモチと訓む。春（春方）には花をば頭に挿して、即ち春咲く花をば山神が頭に挿持つてゐる御調としたのである。春部者、舊訓ハルベニハであつたのを、眞淵が四音に訓んで、春方の義とした。べは場所、方向、時にも使ふ。山べ、海べ、行へ、古、夕べ等がさうである。但し、春べとは云ふが、夏べ秋べ冬べと云はないのは、春べは春方ではなくて春榮を約めたのだらうと宣長が玉の小琴で云つてゐる。古義、檜嬬手、美夫君志等がそれに從つてゐるが、大體眞淵の說が好い。

〇秋立者・黃葉頭刺理　アキタテバ・モミヂカザセリと訓む。秋が來ると黃葉を頭に挿しといふ意。卷二（一九六）の、人麿作に、春部者花折挿頭秋立者黃葉挿頭。卷五（八三二）に、烏梅能波奈乎利弖加射世留母呂比得波。卷七（一一一八）に、彌和乃檜原爾挿頭折兼。卷八（一五八三）に、君之黃葉乎挿頭鶴鴨等の例があるが、これが後儀式となつた。西宮記卷八臨時宴遊に、挿頭花事、藤花、大嘗會及可レ然時、帝王所ニ刺給一也挿左方、祭使幷列見之時、大臣藤花云々。其納言者、用ニ櫻花一、參議者、用ニ山葺ニ皆挿右方云々。服飾管見等の記述は稍相違を見る。**〇一云。黃葉加射之**　モミヂバカザシと訓む。考では、『あしからず』といひ、講義ではこの方を好しといつてゐる。

〇遊副川之神母　ユフカハノカミモと訓む。ユフ川の神もといふ意。此處に恐らく『朝川』『朝川

之』などの脱語があるのであらうか。ユフ川は仙覺が『ヨシノニアル川ノ名也。カシコニハ、湯川(ユカハ)トイフトカヤ。コレオナジコトカ』と云つたのを契沖も眞淵も參考とした。なほ眞淵は、卷八の、結八川内(ユフバガフチ)といふのはそれかといひ、多くの注釋書がそれに從ひ、守部は倭名勝志に據つて、木綿川は西河の枝川也といふのに從つてゐる。僻案抄には、『前の長歌に、旦川夕川の句あれば、此遊副川も夕川とみへたり。僻案に此句の上に五言の一句有べし。脱せるべし』と云つて『阿佐川也(アサカハヤ)』を補充してゐるが、餘り贊成者がなかつた。美夫君志は、『夕川の意とするはわろし』と斷言してゐる。近時武田博士は、『元暦校本には、遊を逝に作つてゐるから、これによつて讀み改める。宮殿の前を流れる吉野川を、逝き副(ユソ)ふ川と云つてゐる』と解した。この訓は古葉略類聚抄のユキソフカハノとあるのに從つたものである。澤瀉氏の新釋も元暦本の文字と古葉略類聚抄のユキソフカハノといふ訓とに據つて同樣に訓んでゐるが、人麿の聲調に似ない語である。そこで、二たび僻案抄の說を顧慮するやうになるが、井上博士の新考にも、恐らく落字あるべしといひ、景樹のユフ川ノ川門ノ神モ。ユフ川ノカハセノ神モ。芳樹のユフカハ、カハノカミモの訓を顧慮し、『ユフ川ノカハセノ神モ』を採用してゐる。

○大御食爾・仕奉等 オホミケニ・ツカヘマツルトと訓む。大御食(おほみけ)卽ち天皇の御饌に(として)具

へ奉るためにの意。大御食は大御身・大御手などと同じ使ひざまで、古事記垂仁條に、立二其河下一將レ獻二大御食一之時其御子詔言。萬葉卷二十（四三六〇）に、於保美氣爾都加倍麻都流等。日本紀推古卷に、訶之胡彌弖兎伽陪摩都羅武。烏呂餓彌弖兎伽陪摩都羅武。宇多豆紀摩都流等がある。

○上瀬爾・鵜川乎立　カミツセニ・ウカハヲタテと訓む。上つ瀬に・鵜川を立てである。このツはノに通ふ助詞で、前言した『多藝ッ河内』のツと同じである。古事記允恭條に波都勢能賀波能、賀美都勢爾、伊久比袁宇知、斯毛都勢爾、麻久比袁宇知。萬葉卷九（一七六四）に、天漢爾上瀬爾珠橋渡之。卷十三（三三三〇）に、長谷之川之上瀬爾鵜矣八頭漬等がある。鵜は古事記・書紀・萬葉に見え、また古事記では島つ鳥鵜とも使つてゐる。和名鈔羽族名部に、辨色立成云大曰二鸕鷀一（盧茲二音日本紀私記云志萬豆止利）小曰二鵜鶘一（啼胡二音俗云宇）とある。鵜川は鵜を馴らして川に放つて魚を捕らしめる業をいふ。タテは宣長は、御獵立、射目立などの如くに、鵜川をする人共を、立するのをいふといひ、山田博士もそれを認めてゐる。なほ岸本由豆流は、卷十六（三八八〇）に、高杯爾盛、机爾立而、母爾奉都也にあるやうに、『物を居置意にて、置くといふがごとし』（攷證）だと云つてゐる。卷十七（三九九一）に、伎欲吉勢其等爾宇加波多知。卷十七（四〇二三）に、夜蘇登毛乃乎波宇加波多知家里。卷十九（四一九〇）に、和我勢故波宇河波多多佐禰。卷十九（四一九一）に、鸕河立取左牟安由能等が參考になる。

○下瀬爾・小網刺渡　シモツセニ・サデサシワタスと訓む。下の方の瀬に小網を差し渡す意。巻九（一七一七）に、淵瀬物不落左提刺爾。巻十九（四一八九）に、平瀬爾波左泥刺渡早湍爾波水鳥乎潜都追などがある。小網は、文選注云纚所買反說佐天網如二箕形一狹レ後廣レ前名也とある如く、絲網でもよく、簡單なのは樹枝等を以て組んで作ることもある。サ手網サは發語の略だらうと大槻氏は云つて居る。この『刺渡』を普通サシワタシと訓んで居るが、古義でサシワタスと訓み、『サシワタスと訓べし。是にて一首の一段なり（サシワタシとよみて、下へつゞけて意得るはわろし）』と云つてゐる。併し古義では、黄葉加射之の方を採用して、『舊本に、黄葉頭刺理とありて一ニ云黄葉加射之と註せり。一ニ云のかたよろしければ用つ。黄葉かざし小網さしわたすと結めり。語ノ勢味ふべし』と云つてゐるが、愚見は、モミヂカザセリ——サデサシワタスとするか、モミヂバカザシ——サデサシワタシとするか、いづれにかにするのである。

○山川母・依氏奉流　ヤマカハモ・ヨリテツカフルと訓む。山の神（山祇）も河の神（河伯）も共共に天皇に仕へ奉るといふ意。依氏奉流の訓、舊訓ヨリテツカフル。古寫本中、ヨリテタテマツル（元）。ヨリタテマツル（古）。ヨリテマツル（神）等で、諸注釋本で、ヨリテツカフル（代匠記・僻案抄・略解・美夫君志・註疏・左千夫新釋・新考・講義・澤瀉新釋等）。ヨリテツカヘル（考）。ヨリテマツレル（攷證・新訓・新解・全釋等）等の訓があるが、ツカ

フルの訓につき、講義は、卷十八(四一一六)の、於保伎見能末伎能末爾末爾等里毛知氏都可布流久爾能を用例とし、マツレルといふ訓につき、攷證は、『今案に、奉流は、まつれると訓べし。其故は集中奉の一字を、つかふと訓し事なければ也』といひ、新解は、『マツレルは、上の奉る御調とのマツルに同じで、獻つてゐるの意である。從來ツカフルと讀んでゐるが、奉をツカフと讀む例が他に無い。また一首のうち、同一の字を別樣に讀むことは、なるべく避けた方がよいと思ふ』といつてゐる。私はどちらに訓んで味つてもいいが、短歌の方でツカフルと訓んで鑑賞して置いたから、ここもツカフルと訓んで置いた。

○**神乃御代鴨**　カミノミヨカモと訓む。現神即ち天皇の御聖世よといふ意味である。卷六(一〇五三)に、吾皇神乃命乃高所知。卷七(一一三三)に、皇祖神之神宮人冬薯蕷葛。卷二十(四四六五)に、須賣呂伎能可未能御代欲利などの參考例がある。

大意　〔安見知之〕吾が天皇が、神さながらの、現神としての御振舞をなさるとて、吉野川の激ち流れる、川筋にめぐり圍まれてゐる、謂はば河内に、宮殿を御造營になり、高く大きく領し給うて、それにお上りになり、國原を展望なさると、垣のやうに幾重にも疊まつてゐる青い山々の、山の神たちが、天皇に獻上する貢物として、春には春の花を頭に插し持ち、秋には黃葉を頭に插し、

（一云、挿して居る）また、遊副川の川の神（河伯）たちも、天皇の御饌に奉らうと、上の方の川瀬には鵜を使つて魚を捕へ、下の方の川瀬には小網を差し渡して魚を捕へる。かくの如くにして、山祇、河伯も共々に帝徳を讃へ慕うて仕へまつらうとしてゐる、現神にまします天皇の統べたまふこの盛世を尊び讃へる。といふぐらゐの意であらうか。

鑑賞 これは前の長歌と同時に作つたものであらうが、前の長歌と稍内容が變つてゐる。前の歌は大まかで形式的で、離宮のある瀧の河内と秋津の野べのことから、群臣の舟漕ぎ通ふさまを敍して、宮殿を讃美してゐるが、この長歌の方は内容がもつと細かく、高殿の上から國原を展望する趣にし、山の神と河の神が御調と御饌を奉る趣にして、一方は春の花秋の黄葉を頭に挿し、一方は川に鵜川を立てたり小網を渡したりしてゐる。そして山祇河伯も共になつて、『よりて奉仕る神の御代かも』と結んでゐるので、内容としても當時は新しかつたものであらうと思はれる。かういふ技巧は模倣され繰返されて人々は左程にも思はなくなつたらしいが、やはり人麿の獨創を默殺するわけには行かない。

代匠記初稿本に支那の文獻中、文選班固東都賦曰、山靈護ㇾ野屬御方神、雨師汎灑風伯清ㇾ塵。同寶鼎詩曰、嶽脩ㇾ貢兮川效ㇾ珍。揚雄甘泉賦曰、八神奔而警蹕兮、振殷轔而軍裝、蚩尤之倫帶二干將一

而秉レ玉戚兮。顔延年詩、山祇蹕二嶠路一水若警二滄流一などを引用して居り、また西都賦には、禮二上下一接二山川一といふ句もあり、魯靈光殿賦には、神之營レ之瑞二我漢室一永不レ朽兮といふ句があるので、かういふことは、支那の模倣であるか、或は日本在來の考であつたか、にはかに斷ずることは出來ないが、私説には、これは在來からあつた本來の考と支那渡來の思想と混合したものと看做していい。日本紀に山神等號二山祇一とあるし、諸處の神社にさういふ神の存在を傳へた名が存じて居る。それゆゑ、かういふ技法をも、人麿がただ支那文學の模倣をしつつ饒舌してゐると速斷してはならぬのである。前出の顔延年の詩にも、『徳禮既に普洽し、川岳徧く懷柔す』とあるが、これが直ちに、『山川もよりてつかふる』の粉本だと速斷してはならぬといふのである。川岳は山川の神の意で、前出の山川もまた山川の神を意味して居る。

この歌の結句の山川母依氏奉流の奉流を、ツカフルと訓むのは、『山川モ依テツカフルトハ山神河伯モ帝徳ニ歸シテ仕フマツルナリ』（代匠記精）と解するためであるが、攷證でマツレルと訓み、新解の如く、『獻上物をする義』とすると意味が具體的になるけれども、そのために氣魄が狹くなつて歌柄を小さくするので、私はやはりツカフルといふ聲調を尊んでそれに據つてゐる。攷證で、奉字をツカフルと訓ませた例が萬葉に無いから、これはマツレルと訓むべきだと云つて居りながら、反歌

の山川毛因而奉流を、ヤマカハモ・ヨリテツカフルと訓んでゐるのはをかしいと思ふ。前をマツレルと訓むならば、新解の如くに反歌の方もマツレルと訓む方がいい。

安見しし　吾がおほきみの
かむながら　神さびせすと
芳野川　たぎつ河内に
たかどのを　高知りまして
のぼり立ち　國見をすれば
疊はる　あをがきやま
やまつみの　まつる御調と
春べは　花かざし持ち
秋立てば　黄葉かざせり
〔朝川〕遊副（ゆふ）川の神も
おほみけに　仕へまつると
上つ瀬に　鵜川をたて
下つ瀬に　小網さし渡す
やまかはも　依りて奉ふる　――神の御代かも

本來からいふと、皆連續句法で行くから、モミヂカザセリでなく、モミヂバカザシとし、サデサシワタスのところもサデサシワタシといふのが順當なのであるが、一首を形體として看るときに、若しモミヂカザセリを採るならば、やはりサデサシワタスといふ方が好いかも知れないのである。ヤマカハモヨリテからは新たに起る氣持だとせば、その前で切る古義の説（古義に云。刺渡はサシワタスと訓べし。是にて一首の一段なり）

が或は好いとも思ふが、一首の聲調からいふと、サデサシワタシ――ヤマカハモと續ける方が具合がいい。此處の關係がなかなか微妙で私にも未だ好くは分からない。先師は、專ら古義に據つて評釋したが、モミヂバカザシとし、從つて、サデサシワタシと連續聲調を採用して居る。また、山田博士も講義に於て、モミヂバカザシ――サデサシワタシを採用してゐる。聲調のうへからは、その方がいい。

先師この歌を評し、『前篇に於ても極力稱讃した如く、此の二篇は實に人麿一代の傑作である。思ふに人麿一生中最も得意の時期で、而かも年齒猶壯にして、從て意氣旺なりしものありしか。一篇の落想用語頗る放膽である。些末の點には一向注意せざるものの如きも、全篇の上には却て自然の統一を見るのである。思想格調が悉く興國の氣泰平の象である。室内に坐し机邊にあつて詠唱すべき歌ではない。高天の下に立ち大地を踏み、靜かに朗誦幾遍せば、何人と雖も、云ふに云はれぬ尊い感に打たれて、神の御世と云ふことを思はずには居られまい。山川も依りて仕ふる神の御代かも、の嘆唱はどうしても神の聲である。全く人間を超絶した響である』と云つて居る。

本歌の結末は、『山川も依りてつかふる神の御代かも』で、これが全體の骨髓をなしてゐるが、その莊嚴の聲調は、『いはばしる瀧の宮處(みやこ)は見れど飽かぬかも』と同樣のもので、殆ど間隙をつくる油

斷のないものである。さういふ點でも、『依りてまつれる』の訓よりも、『依りてつかふる』の訓を採つたのであつた。そしてその結末に到るまでの句々は高朗整齊のうちに、變化があり繰返しがあり、頭韻があり脚韻があり、吟味すればするほどその微妙な點を發見するが、吾人はさういふ理論的穿鑿よりも、吟誦の反覆によつて悟入することを努めようとして居るのである。例へば、『かむながら、かむさびせすと、芳野がは、たぎつかふちに、高殿を高しりまして』あたりでも、これだけの同音の繰返しがあり、『登りたち、國見をすれば、たたなはる』。『青垣やま、やまつみの、まつるみつぎと』。『春べは、花かざしもち、秋たてば、黄葉かざせり』あたりでもさうである。そして、これは一つの波動的連續聲調を成就せむがための、自然的技法で、佛敎の經典などの技法と好一對なのである。即ち、斯くしなければ連續が好く出來ず、中途で弛んでしまふのである。現に古今集以後の長歌が弛んで、ぽつりぽつりと切れてばかり居るのは、この自然的技法が實行されなかつたためである。さういふ點を人麿が發明實行して、後進の金村でも赤人でも家持でも盡くこの手法を模倣してゐるのである。

然かも一篇を貫く氣魄は飽くまで眞率で、中腰で物いふやうな態度は微塵もない。そして、全體が一種の渾暈を帶びたやうな樣式化で、不用意に讀むとただ空想を以て作つてゐるやうに見えなが

ら、『登り立ち國見をすれば』といひ、『疊はる青垣山』といひ、『春べは花かざし持ち秋たてば黄葉かざせり』といひ、『上つ瀬に鵜川を立て下つ瀬に小網さし渡す』といつて、寫生をしてゐるのである。人麿の歌の强みは、この根源に寫生が存するに本づくと云つてもいいほどである。懷風藻の、『夏身夏色古、秋津秋氣新』と、『春べは花かざし持ち、秋たてば黄葉かざせり』は、類似してゐるが同じではなく、詩の方がやはり形式的である。『夕翫躍レ潭鱗』や、『琴瀾躍ニ錦鱗ニ』の方が、『上つ瀬に鵜川を立て、下つ瀬に小網さし渡す』よりも形式的で、寫象としても瞭然としない。人麿のものは、ただ形式的であるやうに見えてゐて、まことは寫實である。山祇とか川の神とかいふと現代人には現實感として接觸して來ないのだから、これは人麿當時の人間心理に立入つて、現身の人間と活々と交感してゐる山祇・河泊として受納れるだけの用意を以て、鑑賞の準備の一つとしなければならない。統一せられた大體の寫象群を受納れつつ、そして、一篇から傳はつてくる莊嚴妙音に耳を傾けなければならないのである。

参考　養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首幷短歌

瀧の上の　三船の山に　瑞枝さし　繁に生ひたる　栂の樹の　いや繼ぎ繼ぎに　萬代に　斯くし知らさむ　み芳野の　蜻蛉の宮は　神柄か　貴かるらむ　國柄か　見が欲しからむ　山川を　淸み淸けみ　諾し神代ゆ　定めけらしも（卷六、九〇七）

反歌

毎年に斯くも見てしかみ吉野の淸き河内の激つ白波　（卷六。九〇八）

山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河内は見れど飽かぬかも　（卷六。九〇九）

或本反歌曰

神からか見が欲しからむみ吉野の瀧の河内は見れど飽かぬかも　（卷六。九一〇）

み吉野の秋津の川の萬世に絶ゆることなくまた還り見む　（卷六。九一一）

此等の歌は人麿の芳野宮の歌と、讃岐狹岑島の歌（卷二。二二〇）とに似てゐる歌句がある。また、神龜元年（萬葉集年表に據る）の、暮春之月幸芳野離宮時中納言大伴卿奉勅作歌（卷三。三一五）、『み吉野の、芳野の宮は、山からし、貴くあらし、川からし、淸けくあらし、天地と　長く久しく、萬代に　變らずあらむ、いでましの宮』の中にも幾らか似た趣がある。

神龜二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首幷短歌

あしひきの　み山も淸に　落ちたぎつ　芳野の河の　河の瀨の　淨きを見れば　上邊は　千鳥數鳴き　下邊は　蝦妻呼ぶ
百磯城の　大宮人も　彼此に　繁にしあれば　見る毎に　あやに羨しみ　玉葛　絶ゆることなく　萬代に　斯くしもがも
と　天地の　神をぞ禱る　恐かれども　（卷六。九二〇）

反歌二首

萬代に見とも飽かめやみ吉野のたぎつ河内の大宮どころ　（卷六。九二一）

皆人の壽も吾もみ吉野の瀧の床磐の常ならぬかも　（卷六。九二二）

次に、山部赤人作歌の、『やすみしし　わご大王の　高しらす　芳野の宮は　疊づく　靑墻ごもり　河次の　淸き河内ぞ　春べは

花咲き撓り　秋されば　霧たちわたる　その山の　いや益益に　この河の　絶ゆることなく　百礒城の　大宮人は　常に通はむ』（卷六。九二三）等を見るに、やはり人麿の歌の影響を認容し得るのであつて、金村の反歌二首特に、『瀧の床磐の常ならぬかも』は、人麿の、『見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む』の影響があると感じ得るほどである。想像するに金村・赤人の頃となれば、人麿の歌は既に文字に記されて吟誦せられ流傳せられてゐたものと思へる。

卷十八（四〇九八）、爲幸行芳野離宮之時儲作歌一首并短歌を天平感寶元年家持作（萬葉集年表に據る）とすると、やはりこの歌も人麿の歌の影響を認めることが出來る。此は實作の觀點に居れば重きを置かねばならぬ事柄である。

反歌

【三九】山川毛（ヤマカハモ）　因而奉流（ヨリテツカフル）　神長柄（カムナガラ）　多藝津河內爾（タギツカフチニ）　船出爲加毛（フナデスルカモ）

右日本紀曰、三年己丑、正月天皇幸吉野宮、八月幸吉野宮、四年庚寅、二月幸吉野宮、五月幸吉野宮、五年辛卯、正月幸吉野宮、四月幸吉野宮者、未詳知何月從駕作歌。

右二九頁に評釋了。この歌の『奉』をツカフルと訓んだに就き、主に書紀の訓に從つてその根據としたが、なほ、色葉字類抄（黑川本）には、『仕』をツカフマツルと訓み、『事・侍・奉・貫・承』に已上同と注してあり、『仕』、『事』はツカフルと當然訓み得るを以て、それと同訓たり得る、『奉』

をツカフルと訓んでも差支ない訣である。なほ、伊呂波字類抄（日本古典全集本）には、『仕』をツカフと訓み、『事』、『奉』、『使』等を同訓としてあるから、當然、『奉』をツカフルと訓んでいいこととなる。若しツカフルと訓み得るなら、マツレルと訓むよりも一首の聲調が一段優れたものとなることと、既に三三頁で云つた如くである。

附記　『遊副川之神母』の解釋のとき、舊訓に從つて、ユフカハノカミモと訓んで置いたが、僻案抄の說に從つて、或は、『阿佐川也』または、『朝川』といふ脫字があるのではなからうかといふ推測もあつたのである。併し、前後の關係から見て、その下の方に、『上つ瀨に鵜川を立て、下つ瀨に小網さし渡す』といふ對句があるのだから、そしてまた直ぐに、『山川もよりて奉ふる』と續くのだから、此處で、『あさ川』、『ゆふ川』と對句にするのは技法としてはまづいのである。特に前の『山神』のことを敍したところには對句的のものは無い。さうすれば此處は、『朝川』などの語は無い方が却つていいのかも知れない。

次に、『山神』の方の表現を注意すると、『疊はる青垣山』となつて居るから、この『川之神』に前行する句も、大體それに相對立するやうなものであるのが自然である。つまり『遊副』の文字が、『疊有青垣山』といふ文字に大體相應ずるものでなければならない。そして脫字でなしに、それを

訓むとせば、どう訓むべきか、古葉略類聚抄の『ユキソフ』といふ訓は、脱字説からは免れ得るが、ユキソフカハノカミモといふ調べは少しくくだけて居る。これは無根據の説のやうであつて實は大切なことである。そこで、この夏私訓を立てて、それに少し理由を附したから次に書き記すこととする。

愚案では、『遊副』だけで、『メグレル』、或は、『ユキメグレル』或は、『ユキメグル』と訓んだ。さうすれば、川の形容、特に吉野川の形容としては先づ好い。それから、遊の字にはメグルの訓もあり、伊呂波字類抄にもさう訓んでゐる。またユクの訓があり、倭訓類林にも載せて居る。それだから遊を逝と直す必要はない次に副の字は析也。剖也で、古い和訓にはワカツともあり、萬葉のソフ、サヘなどの意に使つたのは、支那でも同じく轉義なのである。即ち、析（サク・ワク）は本義だから、副の字は、詩の不レ坼不レ副などとも意が似て、山間の谿巖をばわけて流れる川に使つても不思議ではなく、遊副の文字は、ユキ・ワク、メグリ・ワクの意味になり得るのである。それを日本語の歌語とする場合にはメグルとかユキメグルとかに落著くのである。或は、字面からいへば、記紀、萬葉、皆ソフ、ソヘ、タグヒ、ナメ、サヘなどで、この遊副もユキソフである。そのユキソフを日本の歌語にすれば、ユキメグルとなると説明してもよい。山に副（そ）うて流れる川は、即ち山をめぐり流れる川といふことに

なるのである。また、聲調方面から謂つても、一方は、『疊はる青垣山、山神の、奉る御調と』で一方は、『ゆきめぐれる、川の神も、大御食に仕へ奉ると』となり調が破れない。『めぐれる、川の神も』、或は、『ゆきめぐる、川の神も』でも調を保ち得るが、やはりユキメグレルの方がいいやうである。或は世副流（二六五九）の如きを根據として、どうしても副をソフと訓むとせば、ソヒメグレルでもよい。

　疊はる、青垣山、山神の、（五音・六音・五音）

　ゆきめぐれる、川の神も、（六音・六音）

かうなるのであるが、この五七調でない例は、同じ長歌の中にも、『春べは』（四音）。『鵜川を立て』（六音）などがあり、前の歌にも、『あめの下に』（六音）とあるからさう不思議ではない。

それから、萬葉にさういふ類似の表現があるかといふに、卷十七（三九八五）に、伊美都河泊伊由伎米具禮流多麻久之氣布多我美山者。卷六（九三一）に、四良名美乃五十開回有住吉能濱。卷九（一七四五）に、三栗乃中爾回有曝井之不絶將通（略解及宣長訓）等の例がある。特に（三九八五）の歌は大伴家持が射水郡二上山を詠じたもので、今新訓に據つて書下せば、『射水河、い行き廻れる、玉くしげ、二上山は、春花の、咲ける盛に、秋の葉の、にほへる時に、出で立ちて、ふり放け見れば、神故や、許多貴き、

山故や、見が欲しからむ、皇神の、裾廻の山の、澁溪の、埼の荒磯に、朝なぎに、寄する白波、夕なぎに、滿ち來る潮の、いや增しに、絕ゆること無く、古ゆ、今の現に、斯くしこそ、見る人ごとに、懸けて偲ばめ』といふのであつて、祕かにおもふに、家持はこの歌を作るのに人麿の吉野の歌を學んだごとくである。さすれば、家持は人麿の歌の、『遊副』をば、『ユキメグレル』と訓んでゐたかも知れないので、聯想は稍放恣になつたが、文藝上の影響とか模倣とかいふことは、心理的に這般の境界に立入つて論ずべきものであるから、家持のこの一例は、計らずも、『遊副』を、『ユキメグレル』と訓んだ根據の一つとなり得たものとおもふ。なほ、懷風藻所載の丹墀眞人廣成の吉野之作中に、『高嶺嵯峨多二奇勢一、長河渺漫作二廻流一』とあるが、その『作二廻流一』が卽ちユキメグレルで、『遊副』に當るので、義訓の一例である。『レル』の如く助詞を書かない例は人麿歌集などにもあるとおもふし、右、私訓として兎に角記し置くのである。序に云、卷九（一七三七）に、大瀧乎過而夏箕爾傍爲而淨河瀨見河明沙。同卷（一七五一）に、島山乎射往廻流河副乃丘邊道從。卷十四（三四三五）に、伊可保呂乃蘇比乃波里波良。卷十一（二六三五）に、劒刀身爾佩副流大夫也があり、出羽國、山本郡坐に副川神社といふのがある。ユキソフカハと訓む方の說に何かの參考となるだらうか。

私訓は右の如くであるが、森本治吉氏に新意見のあることを聞いたのでたづねたところが、昭和

十年十二月十三日返書を得たから、主眼點だけを補記する。森本氏は、『逝副、川之神毛』をば、ユキソヘル・カハノカミモと訓むので、この長歌の構成上から看て、疊ハルとユキソヘルと對句し、青垣山と川之神と相對してゐて、ユフ川說に比して整然としてゐる。なほいふと、疊ハルは靑垣山の修飾語、ユキソヘルは川の修飾語にて、修飾語と修飾語との相對である。又、靑垣山、川之神はそれぞれ下文の主語であるから、主語と主語と相對せる構造である。その意味は、『山に添ひ流るる（流れたる）』といふので、『靑垣山は……秋立てば黃葉かざせり。その山に流れ添へる川の神も大御食に云云』となる。『ユキソヘル』は唯、川の樣を描けるに止まりて、宮殿と川との關係ではあるまい。『大王の御笠の山の帶にせる細谷川の音の淸けさ』の如くに山と川との關聯の句であらう云云。右森本氏の說で、構成上から對句的に見立てたところは愚見と一致し、必ずしも宮殿に添ふとせないところもまた同樣である。

ついで十二月二十四日、幸田露伴博士を訪うたとき、この訓につき敎をあふいだところが、翁は翌日直ちに筆をとつてその考證を記しおくられた。（アララギ二十九卷の三昭和十一年三月號）今此處にその結論のみを抄記する。○『此歌芳野宮のめでたきをたたへて、山川も依りて奉る神の御代かも、ととぢめたるなれば、其前に當りて、山の美しく、川の宜しきを、相對へて云へり。たたなはる靑垣山より、黃葉か

ざせりまでは山を云ひ、遊副川のより、小網さしわたしまでは川を云へるにて、さて其後に、山川も依りて奉る、と雙紋一結の道を取れるなれば、川のこと云出づるに當りても、たたなはる青垣山、山神の奉る御調と、と山のこと云出でしが如くに、それに打對ひて、言辭も音調も相應はしきやうにあるべきところなり。然るに古讀の如くに、遊副川の、神も、大みけに仕へまつると、とあるのみにては、言辭の足らぬはさもあらばあれ、音調甚だしくくだけてほとほと節奏をなさず』。○遊副を音讀にする時には、やはり古讀のユフと讀むよりほかにない。義に據るときには、副は判なり、分なり、剖なり、析なり、籀文は𠛬に作る。刀を以て物を剖つが其本義であるが、之を副すれば一物は二となるので、副貳の義は之から生ずる。さて萬葉の副の訓を檢するに、ナメ、サヘ、ソヘ、ソフの四讀が可能であるが、これからは好ましい新讀は得難い。次に、游は說文に旌旗之流也とあつて、風に從ひて靡くものの行きつ止まりつするが如きが遊である。アソブ、ユラグ、ユク、遊動、遊行箏の義が之から生ずる。よつて、遊副、川之神母としてナビキソフ・川ノ神モと訓んではどうか。『なびきそふ川の神も、とは卽ち芳野宮を繞るが如く纏くが如く流るる美しき川を、なびきそふとは云へるなり』。○然るに、萬葉に、遊をナビクと訓んだ例は一つもない。そこで、これを強ひてナビキソフと訓むのは、『好みて小慧を用ゐ、自用自足の念のみの强からんは、もとより心はづかし

きことならずばあらず』。次に、然らば萬葉の輾轉書寫の間に、爛脫訛誤あつたことについて、遊副川の上に五音若くは四音の一句あつたのが脫落したものと想像するときには、或は、シラガツクであらうか。『白香付は、ゆふの冠辭にして、集の卷三、大伴坂上郎女祭神歌に、白香付木綿取付而の句あり、卷十二に、しらがつく木綿者花かもの句あり。白香付遊副川之神母、とありたらんには、たたなはる靑垣山の山づみも、とある前句に相對ひて、ただ遊副川之神母とあらんよりは、情姿も貧しからず、句調もいきほひありて、山川母依氏奉流と綴ぢめたる末の句にも、ひときはふさはしきやう聞ゆと思はるれど、如何にや』。○併し、白香付の三字が一字も殘らず脫漏したと考へるのは、餘りにも傳寫の人々を輕しめた考である。そんなら、遊副川を固有名詞とする考は古からあるが、それにしても遊副川は必ず芳野川でなければならず、『芳野川の流の一所』をユフカハと云つたとしなければならない。そしてユの本義は動搖滾沸で、ユフ川の本義は沸上るやうに水のたぎり流るる稱であらうから、さういふ意味でユフカハと訓んでいい。なほ遊副川はユフハガハとも訓み得る。萬葉に副をハと訓んだ例がないが、副と同義同聲の字の判をハと訓んで居り、卷七に、吾紐を妹が手もちて結八川又かへり見む萬代までにといふのがある。元曆校本萬葉にユフヤガハと訓ませてゐるが、どうであらうか。家隆卿の歌の、夏くれて流るるあさのゆふは川たれ水上に御祓し

つらむもユフハガハである。○上のユフハガハの本義をなほ顧慮して、白香付の如き冠辭を加へるならば、オチタギツ遊副川(ユフカハ)ノ神モ。となるだらうか。或は、遊副川之(ユフカハノ)、川之(カハノ)神母(カミモ)などの如きものででもあつただらうか。或は遊副川、川之神母と書き、ユフハガハ・カハノカミモででもあつただらうか。○以上を約めていへば、(一)ナビキソフカハノカミモ。(二)シラガツク・ユフカハノカミモ。(三)オチタギツ・ユフカハノカミモ。(四)ユフハガハノカミモ。ユフカハノ・カハノカミモ。ユフハガハ・カハノカミモ等の諸訓となる。

その後漢魏詩集などに就て、『副』の用字例を見たが、副レ君、副レ公などでソフの訓に當り、副斥はワカツの訓に當つたが、なほ、庾信碑文に、『遞參三事、歷副六卿』とある、これもソフの訓に當るものであつた。

漢魏叢書の散文方面に於ても、出言以副情。情行合名副之。天之副在乎人。以此見人理之副天道也。與人相副。亦言副貳也等の用例であつた。

【巻一・四五】

やすみしし　吾大王　高照らす　日の皇子　神ながら　神さびせすと
太敷かす　京を置きて　隱口の　泊瀬の山は　眞木立つ　荒山道を
石が根の　楉枝おしなべ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さり
くれば　み雪降る　阿騎の大野に　旗薄　篠をおし靡べ　草枕　旅宿
りせす　古思ひて

八隅知之　吾大王　高照　日之皇子　神長柄　神佐備世須登　太敷爲
京乎置而　隱口乃　泊瀬山者　眞木立　荒山道乎　石根　楚樹押靡
坂鳥乃　朝越座而　玉限　夕去來者　三雪落　阿騎乃大野爾　旗須爲
寸　四能乎押靡　草枕　多日夜取世須　古昔念而

題意 輕皇子、宿二于安騎野一時、柿本朝臣人麿作歌といふ題で、其時人麿は供奉したものであることが分かる。此歌について居る短歌四首は既に評釋した。輕皇子（河瑠皇子）は卽ち文武天皇にまします。輕皇子の御父は天武天皇皇太子草壁皇子（日並知皇子）御母は元明天皇である。草壁皇子は持統三年四月に薨去せられた。輕皇子は持統天皇十一年二月丁卯朔壬午、皇太子に立ちたまうた。此歌は皇子が未だ皇太子に立ちたまはぬ以前の事柄であるだらう。安騎野は大和國宇陀郡、今の松山町附近の野を云つたもののやうである。私はこの一聯をば、土屋氏の萬葉集年表の、『日並皇子の薨去は持統三年なれど卷一に於ける歌の順序を考ふるに六年又は七年頃の作なるべし』といふ注によつて、持統六年に配列し、人麿三十歳位の時の作と想像した。

語釋 **○八隅知之・吾大王** ヤスミシシ・ワガオホキミと訓む。此は輕皇子を申した。皇子を大王と申した例は、卷二（一九九）に、高市皇子を吾大王皇子之御門乎。同卷（二〇四）に、弓削皇子を安見知之吾大王。卷三（二六一）に、新田部皇子を八隅知之吾大王高輝云々とあらはしてゐるので明かである。

○高照・日之皇子 タカテラス・ヒノミコと訓む。高照らす（枕詞）日の神の御末にまします皇子（輕皇子）といふ意である。この高照は舊訓タカテラスで、代匠記も、『高照ス日ハ日神ナリ』と云つてゐるが、

僻案抄で、タカヒカルと訓み、考・略解・古義・檜嬬手・攷證・註疏等の諸註釋書それに從つたが、燈で、『此集中高光とかかれたる所はさもあるべし。すでに、日神の御名を天照大御神とも申せば、たかてらすともよむべきなり』といひ、ついで美夫君志で、『此照は天照大御神の照と同じくて氏流を敬語に氏良須といふなり』と說明し、新考でも、『テラスはテルの敬語にてタカテラスは卽アマテラスといふに同じ』といひ、講義等もそれに從つた。序に云。美夫君志は燈を踏襲してゐるにも拘らず、それを明言しない。燈の缺點を指摘する時には彼此いふが、たまに燈の善說があつてもそれを知らん振するのは卑怯である。その點に於て、新考の、『燈同說』と注して居るのは態度がいい。

○隱口乃・泊瀨山者　コモリクノ・ハツセノヤマハと訓む。隱口は泊瀨の枕詞で古事記允恭條の歌に、許母理久能波都世能夜麻能とある。隱國の意味で、泊瀨はさういふ地勢の處であるからその枕詞とした。泊瀨は今の大和磯城郡初瀨町から朝倉村にかけていふ。卷三（四二四）に、隱口乃泊瀨越女我手二纏在。卷七（一〇九五）に、隱口乃始瀨之檜原。卷十三（三三一〇）に、隱口乃泊瀨乃國爾。同卷（三三一一）に、隱來乃泊瀨少國爾等の例がある。

○眞木立・荒山道乎　マキタツ・アラヤマミチヲと訓む。舊訓マキタテル、僻案抄マキノタツと訓んだのを、考でマキタツとした。マキは眞木卽ち太い立派な木といふ意味であるが、檜や槇には

さういふ特色があるから後世その名が限局するに至つた。併し、當時は一種に限つたものではなかつただらう。和名鈔に、柀(マキ)を今案又杉ノ一名也。見爾雅注と注し、古義などでそれを誤として居るけれども、恐らくは杉をもマキといつたことがあると看做していいであらう。卷一(五〇)に、眞木(マキ)佐苦檜乃嬬手乎(サクヒノツマデヲ)……眞木乃都麻手乎(マキノツマデヲ)。卷三(二四一)に、眞木之立荒山中爾(マキノタツアラヤマナカニ)。卷六(九一三)に、三芳野之眞木立山湯(ミヨシヌノマキタツヤマユ)。卷八(一六五九)に、眞木乃於上零置有雪乃(マキノウヘニフリオケルユキノ)。卷十三(三二九一)に、三芳野之眞木立山爾(ミヨシヌノマキタツヤマニ)。卷十四(三四六七)に、於久夜麻能眞木乃伊多度乎等杼登之氐(オクヤマノマキノイタドヲトドトシテ)等の例がある。『荒山道乎』をば古義で、『本居氏の、こゝをアラキヤマヂとよめるはわろし』とことわつて批難してゐるが、宣長が何處でさう訓んだか不明である。ただ玉の小琴で、『此乎(ヲ)は初瀬の山は荒き山路なる物ヲと云意のヲ也』と説明してゐるに過ぎぬのである。略解でも、アラヤマミチヲと明かに訓んで居る。荒山道は深山の荒き道で、ヲはナルモノヲといふ意味である。

○石根・楚樹押靡　イハガネノ・シモトオシナベと訓む。未定訓。石根(イハガネ)は岩が根にて、岩石が地についてある意。卷三(三〇一)に、磐金之凝敷山乎(イハガネノコゴシキヤマヲ)。卷七(一三三二)に、石金之凝木敷山爾(イハガネノコゴシキヤマニ)。卷十三(三三二九)に、石根之許凝敷道之(イハガネノコゴシキミチノ)。卷十五(三六八八)に、伊波我禰乃安良伎之麻禰爾(イハガネノアラキシマネニ)等がある。楚樹は流布本禁樹と書いてあり、フセギと訓んでゐる。代匠記に、『フセ木は臥木也。禁ノ字ハ禁防ノ

心、字ヲカリテ書リ』といひ、僻案抄では、イハネセク・コダチオシフセと訓ませたが、考で『今本、楚を禁に誤りたり』といひ、シモトと訓んだ。そして、『しもととは繁本(シゲモト)の略にて、弱(ワカ)き木立の茂きをいふ。本とは木の事也。さて其茂きわか木どもを、百千の御とも人の押なびかして越るさまをしらせたり』といひ、古義では大體それに據つたが、禁樹は禁杖の誤寫で、やはりシモトと訓ませ、或は繁樹の誤寫でシゲキだらうとも云つてゐる。攷證は眞淵説を大體踏襲増補し、『さて、しもとは、本集十四(二十四丁)に於布志毛等(オフシモト)、許乃母登夜麻乃麻之波爾毛(コノモトヤマノマシハニモ)云々とありて、書紀景行卷に、茂林。雄略卷に、弱木林をしもとはらとよみ、靈異記、延喜臨時祭式齋宮等に楉、新撰字鏡に棫、桗などの字、皆しもとゝよめり』と云つた。檜嬬手も美夫君志も註疏もその他の註釋書も眞淵説に從つてゐるが、講義では、説文に、『楚叢木也一曰荊』とあるのを引用增補したが、楚樹をシモトと訓むことに未だ疑問もあり、さう訓んで此歌をよく解し得るかについても疑問があるが、『されど、よき考説の出づるまで姑く之に從ふ』と云つてゐる。なほ、正宗敦夫氏は、サヘギと訓んだ(昭和七年アララギ)。

○坂鳥乃・朝越座而　サカトリノ・アサコエマシテと訓む。朝に山坂を越え給うての意。坂鳥乃(サカトリノ)といふ朝越(アサコエ)にかかる枕詞は、鳥は朝早く渡るものだからさう續けたもので、萬葉にただ此一例あるのみである。冠辭考に、『さて坂路は凡は山のたわにあり、鳥も專らその邊を飛こゆる物なれば坂鳥

といふ。巻十三に、『鳥網張坂手（トナミハルサカテ）とよみしを思へ』とあるが、座光寺爲祥の和歌詞謁には、坂鳥のサカは鶏冠（トサカ）のサカ、雉などの冠（サカ）といふ意味で、冠鳥（サカトリ）は卽ち野雉のことだと說いてゐる。なほ、朝越座而につき、山田博士の講義に、『推古天皇十九年五月五日の菟田野に藥狩せさせ給ひしとき、雞鳴時（アカトキ）を以て藤原池ノ上に集り、會明（アケボノ）に往くと日本紀に見ゆるを以て推すに、當時のいでましは未明に都を立ちて往きませる例なりしを見る。されば朝越座すといふことは言の形容にあらずして事實たるなり。平安朝頃にも夜半に京を立ち、卽日奈良に赴ける記事あり』といふ解說があつて有益である。この『坂鳥乃』の例は他に無いが、巻九（一七八五）に、朝鳥之朝立爲管羣鳥之群立行者（アサトリノアサタチシツツムラトリノムラダチユケバ）。巻六（一〇四七）に、村鳥乃旦立往者（ムラトリノアサタチユケバ）。巻十四（三五二三）に、佐可故要氐阿倍乃田能毛爾（サカコエテアベノタノモニ）等の例がある。

○玉限・夕去來者　タマカギル・ユフサリクレバと訓む。夕（ゆふべ）になるとの意。玉限は舊訓タマキハルであるのを、管見にカゲロフノと訓み、代匠記でもその長流の訓を傳へ、さう改めてゐる。『夕トツヅケタルハ、此虫夕暮ニ殊ニ飛カフ故ナルベシ』といひ、また若しタマキハルと訓むとせば、『今ノ點ニツカバ玉キハルハ物ノ限リアルヲ云詞ナレバ、夕ハ一日ノ限リナレバカクツヾクルナルベシ』と云つた。眞淵は考でカギロヒノと訓み、玉蜻夕去來者佐豆人之（カギロヒノユフサリクレバサツヒトノ）。玉蜻磐垣淵之（カギロヒノイハガキフチノ）等の例をも參考とし、古義・檜嬬手・攷證・註疏等それに從つた。然るに雅澄は別に玉蜻考に於てタマカギル

と訓み、玉蜻をもカギロヒと訓まずにタマカギルと訓むべきことをいひ、美夫君志これに和し、講義・新解等がそれを認容するに至つた。そして、巻十一(二三九四)に、朝影吾身成玉垣入風所見去子故とある玉垣入を、巻十二(三〇八五)に、朝影爾吾身者成奴玉蜻髣髴所見而往之兒故爾と記し、また靈異記に、多萬可妓留波呂可邇美縁而とあるのを證とした。カギルはカガヤクの意で、玉耀る卽ち玉の美しく耀くので、夕の光の枕詞としたもののやうである。伴信友の玉蜻考(比古婆衣巻四)。鹿持雅澄の玉蜻考(枕詞解附錄)。木村正辭の玉蜻考及び補正(美夫君志別記附錄)等參照。

○三雪落・阿騎乃大野爾　ミユキフル・アキノオホヌニと訓む。雪降る頃の寒い安騎の大野にの意。この語は單に安騎野の枕詞にしたのか、或は實際の寫實的句かといふに、代匠記に、『ミユキフルアキノ大野ノトハ反歌第三ニヨルニ此時節ナリ』といひ、考に、『此時冬也』と云ひ、檜嬬手に、『只輕く置ける也。此の日雪の零りしにもあらず。雪のよく零る處と云ふにもあらず、昔より雪中の鷹狩をよくする大野なる故における也』といひ、美夫君志に、『三雪落は今現に降にはあらず、ひろき野の、ことに寒きさまをおもはせたるなり』と云つて居る。落をフルと訓む例は、巻一(二五)に、時無曾雪者落家留。巻二(一〇三)に、吾里爾大雪落有大原乃古爾之郷爾落巻者後。巻三(三一九)に、落雪乎火用消通都。巻四(五二〇)に、久堅乃雨毛落糠。巻八(一六五一)に、沫雪乃比日續而如此落

者。卷十（二二六九）に、暮立之雨落毎。卷十一（二六八一）に、出乍其見之雨落久爾等とある如くである。

○旗須爲寸・四能乎押靡　ハタススキ・シノヲオシナベと訓む。幡薄や篠などを押し靡けての意。薄は萬葉に、波奈須爲寸（卷八。一六〇一）。波太須珠寸（卷八。一六三七）。波太須酒伎（卷十四。三五〇六）。婆太須酒吉（卷十七。三九五七）などと書き、日本紀神功卷に、幡荻穗出吾也とあり、萬葉卷三（三〇七）、卷十（二三一一）には、皮爲酢寸と書いてある。旗のやうに動き靡くのでかういふ造語を作つたものと見える。四能は普通小竹に當ててゐるが、小竹芽乃などの用例から見れば、蘆、荻、薄等の總稱であつたらしい。この事は講義もさう解說して居る。

○多日夜取世須・古昔念而　タビヤドリセス・イニシヘオモヒテと訓む。旅泊し給ふ、古昔を懷ひ偲びつつの意。セスはスの敬語。古昔念而にはムカシオモヒテ（舊訓）。ムカシシヌビテ（僻案抄）。イニシヘオボシテ（考・攷證）。イニシヘオモヒテ（略解・檜嬬手・美夫君志・註疏）。イニシヘオモホシテ（古義）等の訓がある。いま略解の訓に從つた。御父日並知皇子が嘗て此處に獵し給うた事を追懷し偲び給ふ趣の句である。

大意　〔八隅知之〕わが輕の皇子、〔高照〕天津日嗣の御子が、神さながらの、神の御行動を爲たまふと、立派な宮殿のある飛鳥の淨見原の都を御出發になり、〔隱口乃〕泊瀨の山は、槇・檜のやう

な太木が繁茂し、人も通はぬ荒山道であるのに、そこの岩根を踏み、荊・叢木（卽ち楚樹）を押分け、〔坂鳥乃〕朝に山を越えさせ、〔玉限〕夕方になれば、雪の降りさうな寒い安騎の大野に到著せられて、そこの薄・篠・荻の類を敷きつつ旅泊をなされます。御父君の過去の御行跡を追懷し御偲びになつて。といふぐらゐの歌である。

鑑賞 この長歌も、内容が單純で、おほまかで、形式的に出來てゐる。特に、『八隅しし、わが大王、高照らす日の皇子、神ながら、神さびせすと』あたりは、形式的常套手段と謂つても好い程で、單に寫實の細かいところばかりをねらふ作者にとつては、贅物のやうにも思へるところであるが、全體を一つの言語象徵として進行せしめるには、この冒頭の句々もまた必要であつて且つ大切だといふことになる。それから、『太敷かす京を置きて』より以下、旅のことを敍し、道中のことをいひ、朝立つて夕に著き、寒い野に旅寢したまふ迄のことを極く簡潔に歌つてゐるが、これも意味本位といふ點からいへば極めて平凡で取りたてて云ふ程のものではないけれども、長歌形式の本質は連續的進行性のものとして人麿が發展せしめたのであるから、さういふ觀點からいへば、事柄を時間に隨順して、推移的に敍して行つた技法は、極めて自然的で、却つて好い効果を齎したと謂ふことも出來るのである。

さういふ平凡單純な事を云つてゐるが、さて現在私等が自分でかういふ長歌を作るつもりで吟味する段になると、なかなか暗指に富んだ重厚・簡淨・緊切な歌語の多いことに氣がつくのである。枕詞でも、對句でも、ただ漫然と暗記的に使つたとせずに、顧慮して造語しつつ使つたとせば大に參考になるわけである。例へば、隱口（こもりく）といふ枕詞を泊瀨（はつせ）の地勢を知りつつ味ひ、荒山道を味ふのに、眞木立（まきた）つといふ如き簡淨の一語を念中に置きつつ味ふといふことになれば、平凡のやうに見える語句も平凡ではなくなつて來、また、『坂鳥の朝越えまして玉かぎる夕さり來れば』といふ對句でも、この二つの枕詞に矢張り妙味があるので、それから、アサコエマシテと云つて、ユフサリクレバと變化せしめ、類似の音を繰返しつつそこに微妙の變化を試みてゐるあたりは、經典音誦などの場合と等しく甚だ重要視したいと思ふのである。それから、其處で聲調が稍小きざみになつたから、二たび大きく、『み雪ふる安騎の大野に』と續け、息（いき）を延ばして置いて、また、『旗薄、しのを押なべ草枕旅やどりせす』と稍壓搾したやうな聲調になつてゐるのである。この邊のことは說明などをすれば厭味に陷つてしまふが、實際は如是にして分析したいのである。そして、結句は、『いにしへ念（おも）ひて』といふ主觀句で、これが一つの長歌を結んで居るわけであるから、後世の歌の主觀句などと違つて、簡潔・質實な重い句で結んでゐるのである。そして切實流動の聲調のうちに、不思議な澄

響を藏してゐることを聽漏らしてはならない。

それから、この長歌の内容は約めていへば寧ろ客觀的寫生的で、主觀の味ひの歌句はどつちかといへば、長歌よりも寧ろ短歌の方に讓つた姿である。かういふ點も人麿は或は不意識に自然に心持を流露せしめたものかも知れないが、後代の吾等はそれを一つの力強い表現技法として受納れるべき性質のものである。

やすみしし　わがおほきみ　かむながら　かむさびせすと
たかてらす　ひ の み こ　ふとしかす　みやこをおきて
こもりくの　はつせのやまは
まきたつ　あらやまみちを
いはがねの　しもとおしなべ
さかとりの　あさこえまして
たまかぎる　ゆふさりくれば
みゆきふる　あきのおほぬに　はたすすき　しのをおしなべ
くさまくら　たびやどりせす
――いにしへおもひて

大體このやうな形態のやうである。連續聲調の長歌でも、小休止を考慮しつつ形態を想像すれば

このやうになるかも知れない。長歌詞珠衣に據ると、初句二句對、次十句、次二句對、次終句七句、合廿五句、中長歌といふことになる。

この歌は、皇子に隨行した時の作で、旅行のわびしさと寂寥の氣分が漂つて居り、そして故日並知皇子を偲ぶ輕皇子の御心と同化したやうな一種の情調で統一せられてゐる。そしてこの長歌一首と短歌四首とを合せて一つの總體があるので、これもまた大に注意すべき點である。そして、以上を約めていへば、この長歌は短いだけ、渾然と緊切して居り、人麿作歌中の佳作の一だと謂ふべきである。短歌一聯も亦同樣である。

先師の此歌に對する批評を讀むに、最初此歌をただ一氣呵成に無造作に作つた淺い歌のやうに思つたが、反覆吟誦してゐると、『相並んだ句々が皆一調子に强い響を持つて、全篇に一種物を押分けて行くやうな勢を現して居る。張りつめた調子が全體を纏めて響いて居る』といひ、『内容の稀薄な事此の位の歌は少ないと思ふ程であるに係らず、何回讀んでも厭にならない。人を飽かせない刺戟が何處とも知らず籠つて居る。平凡な詞を平凡に感ぜしめない生氣がある。かういふ意味に於て集中珍らしい歌である』と云つてゐる。先師はこの歌を褒めてゐるのである。これは先師の晩年の批評に屬してゐる。

先師は長歌を作つたはじめの頃は、人麿をしきりに模倣し、人麿の長歌の如きものを作りたいと念じて居た。然るに晩年萬葉卷一の長歌を評釋して人麿の長歌に云ひ及ぶ頃は、人麿の長歌の技法に缺點を覺え、それを批難してゐること既に前言した如くである。併し先師の言說を能く注意するに、批難してゐるうちに感心して居り、感心してゐるかと思ふと批難してゐる。即ち鑑賞標準が動搖常ないのである。この長歌を褒めたかと思ふと、もう次の短歌を批難し、數首の短歌は人麿がただ技倆に任せて詠みなぐつたもので失敗の作だとまで云つてゐるのである。けれども人麿ほどの多力者が、同一動機の場合の作歌で直ぐ失敗したり直ぐ傑作になつたりする筈のものではない。長歌だけが傑作でその反歌が失敗の作だなどといふやうなことは考へられない。このことは短歌の評釋の折にも言及したかとおもふ。

そこで、先師の如き優れた作歌力量のあるもので、且つ俊秀な鑑賞眼を持つてゐるものでも、人麿の作に對するときには、その鑑賞がかくの如く動搖してゐるのである。和歌を眞に鑑賞することの如何に複雜でむづかしく且つ興味ふかいものだかといふことは、これを見ても分かるのである。

参考　この長歌に前行したものを想像するとせば、卷一（五）の軍王の歌、『わが大王の行幸の山越の風の獨居る吾が衣手に朝夕に還らひぬれば丈夫と思へる吾も草枕旅にしあれば思ひ遣るたづきを知らに網の浦の海處女らが燒く鹽の念ぞ燒くる

吾が下ごころ』といふのに何か相通ずるものが無いだらうか。人麿の歌の發育史のうちに、この歌の如き要素が入つて居ないであらうかと思ふことがある。それから後進の作に想到すると、卷三（四四三）の大伴三中作中、『現身の惜しきこの世を露霜の置きて往にけむ時ならずして』といふ長歌の結びと似たところは無いであらうか。内容が違ふが語氣が似て居ると思ふことがある。それから、卷八（一四五三）の笠金村が入唐使に贈つた歌の、『うつせみの命かしこみ夕されば鶴が妻喚ぶ難波潟三津の埼より大船に眞梶繁貫き白浪の高き荒海を島傳ひい別れ行かば』云々と事件推移を敍するところに何か類似の點がないであらうか。

短歌

〔四六〕阿騎乃野爾　宿旅人　打靡　寐毛宿良目八方　古部念爾

〔四七〕眞草苅　荒野者雖有　〔黄〕葉　過去君之　形見跡曾來師

〔四八〕東　野炎　立所見而　反見爲者　月西渡

〔四九〕日雙斯　皇子命乃　馬副而　御獵立師斯　時者來向

右五四頁、五九頁、六三頁、七一頁に評釋了。

【巻二・一三一】

石見の海　角の浦回を　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと（一に云ふ、磯なしと）　人こそ見らめ　よしゑやし　浦はなくとも　よしゑやし　潟は（一に云ふ、磯は）　なくとも　鯨魚取り　海邊をさして　和多豆の　荒磯の上に　か青なる　玉藻奥つ藻　朝羽振る　風こそ寄らめ　夕羽振る　浪こそ來寄れ　浪の共　彼より此より　玉藻なす　寄り寝し妹を（一に云ふ、はしきよし妹がたもとを）　露霜の　おきてし來れば　この道の　八十隈毎に　萬たび　かへりみすれど　いや遠に　里は放りぬ　いや高に　山も越え來ぬ　夏草の　思ひ萎えて　偲ぶらむ　妹が門見む　靡けこの山

石見乃海　角乃浦囘乎　浦無等　人社見良目　滷無等（一云、礒無登）　人社見良

日能咲八師　浦者無友　縱畫屋師　滷者（一云礒者）無鞆　鯨魚取　海邊乎指而　和多豆乃　荒礒乃上爾　香青生　玉藻息津藻　朝羽振　風社依米　夕羽振流　浪社來緣　浪之共　彼緣此依　玉藻成　依宿之妹乎（一云波之伎余思妹之手本乎）露霜乃　置而之來者　此道乃　八十隈毎　萬段　顧爲騰　彌遠爾　里者放奴　益高爾　山毛越來奴　夏草之　念之奈要而　志怒布良武　妹之門將見　靡此山

題意　柿本朝臣人麿從㆓石見國㆒別㆑妻上來時歌二首并短歌の第一首目の長歌である。これは既に總論篇で論じた如く、人麿が晩年石見那賀郡の國府の官吏として赴任して居たと考へ、（人麿の官は古くから掾目などであつたらうといはれ、土屋氏は或は介ぐらゐであつたかも知れぬと云つてゐる。）その頃に婚した第二の妻依羅娘子（よさみのをとめ）と別れる時の歌であらうと想像して居る。そして、どういふ用で京へ上來したかといふに、多分朝集使としてであつただらう。朝集使は畿内は十月一日、地方は十一月一日の官會に間にあふやうに上來するのであるから、延喜式の、石見の行程上廿九日下十五日といふのを考慮に入れると、十月一日過ごろに出發することとな

る。そしてその行程は山陰道を通過する計算であるが、私は人麿の上來は未だ驛路制の完備しなかつた頃と考へ、人麿を備後から瀬戸内海を通過したやうに想像するのだから、さうすれば出發はもつと後れても好い訣である。兎に角、この長歌に據ると、黄葉の散り亂れる季節であつたことが分かる。そして、その年代を私は大體慶雲元年、人麿四十二歳ぐらゐの作と考へて置いた（總論篇九五頁）。

次に、この『妻』といふ文字のことも既に總論篇で論じたが、なほ少しく記述するならば、代匠記精撰本に、『妻、釋名云。士庶人曰レ妻、妻齊也、夫賤、不レ足二以レ尊稱一、故齊等言也。和名云。白虎通云、妻（西反、和名米）、者齊也。與レ夫齊レ體也。』といふ引用があり、この妻の文字を嫡妻と解釋して居り、山田博士の講義にも、『妻は字義によれば、齊也とありて、嫡妻にのみ用ゐるべき字にして、妾をも妻とかくことは、この時代既にあるべきにあらず。考及びその説に贊せる諸家の説强言なりとす』と云つて之を認容してゐるが、眞淵の考で既にこの『妻』をば妾と解し、略解の、『これは嫡妻には有らざるべし』といふのを始とし、その他の諸注釋書も眞淵に從ふものが多い。そして、『妻』の解釋についても、『古へは凡て嫡妻をはじめて、妾またかりに通婚せしをも總ては米と稱しことなれば、妻と書しこそ古へのさまなれ、後ノ世の風にのみ拘泥てなあやまりそ』（古義）。『古へは夫婦たがひにつまといひ、又かりそめにかよふ女をも、つまといへる事、常の事也。書紀景行

紀に、弟橘姫の事をいへる所に、日本武尊の妾とかかれしを、後に日本武尊の、吾嬬者耶（アカツマハヤ）とのたまひ、これを古事記には、日本武尊の后とせり。かく定まれる事なく、いろ〳〵に書るを見ても、古へは今の如くたしかに定れる事なきをしるべし』（攷證）。『正辭云、後に誤れるならむといへる〇注。眞淵の言はわろし。古へは嫡妻をも妾をも妻といひしにて、後世の如く、きはやかに區別せざれば、誤にはあらず。猶下文柿ノ本ノ朝臣人麿妻死之後、泣血哀慟作歌とある所にもいふべし』（美夫君志）。『人麻呂の嫡妻のことは下にいへり。かゝればこの妻とあるは妾なるを妻妾の別（ケヂメ）を立ず共に妻といへるは古様なり』（註疏）等である。なほこの長歌の『妻』と依羅娘子が別人だといふのは、柿本朝臣人麿妻依羅娘子與二人麿一相別歌（巻二。一四〇）をば、大和に殘つてゐて詠んだのだといふ從來の說に從ふとどうしても別人となるのであるが、私は諸家（山田博士等）の說を參考して同一人と考へること總論編（五九頁以下「人麿の妻」）に記述した如くである。なほ、眞淵はこの女を、嫡妻でなくて、『そのころ通ひそめし女ならむ』といふ根據の一つとして、『石見に別れしは、久しく戀し女に逢初たる比故に、深き悲しみはありけむ。嫡妻はむつまじき事なれど、常のこゝちには、かりそめのわかれを甚しく悲しむべくもあらず』（考別記頭注）と云つて居る。

語釋 〇**石見乃海・角乃浦囘乎** イハミノミ・ツヌノウラミヲと訓む。石見の海にある角（ツヌ）の浦（ウラ）

一帯をばといふ意味である。石見乃海は舊訓イハミノウミであつたのを、考でイハミノミと訓み、紀に阿布彌能彌（アフミノミ）とあるのを例證とした。諸注釋書もそれに從つて居る。石見の海は一般には石見の國の海で好いが、此處は國府のあつた伊甘から都農、江西、江ノ川川口あたりまでの一帯の海のことで、つまり當時の國府の人々の頭に這入り易かつた範圍の海を謂ふのである。角（ツヌ）は舊訓ツノで、和名鈔に石見國那賀郡都農（都乃）とあり、石見風土記に、角驛郡家正北二百歩依角大臣坐故云角野（イ津）とあるところであるが、人麿時代の發音はどうであつただらうかといふに、卷三（二七九）の、角松原を卷十七（三八九九）では、都努乃松原（ツヌノマツハラ）と書き、古事記仲哀條に高志前之角鹿といふ地を應神條には都奴賀（ツヌガ）と書いてゐるから、古は角をツヌと云つてゐたことが分かる。また、農をヌの音に書いたのは、卷五（八八二）に、阿我農斯能美多麻多麻比弖（アガヌシノミタマタマヒテ）等いろいろある（攷證及び講義參照）。浦回は舊訓ウラワで、それに從ふ注釋書もあり、略解ツヌノウラマヲ。招解ツヌノウラヘヲ等の訓もあるが、槻落葉・檜嬬手・古義等でウラミと訓んだ。浦は和名鈔に、四聲字苑云浦（傍古反和名宇良）大川旁（カタハラノ）曲渚船隱レ風所也とある。角（つぬ）といふ場處も、現在の都野津あたりを中心とし、二宮村・川波村の方までをも含んで居り、海は現在よりももつと入込んだ場處もあつただらうと想像せられる。つまり高角山（たかつぬやま）と考へられる島星山（しまのほしやま）は現在よりももつと海に近かつたと想像するのである。石見國明細書留といふ寫本に濱田の記事があり、『往古は雲

州よりの往來は、下府より產湯、布子谷、福浦、祇園町より河原町邊へ往來候而、三重の番所の向を步行渡りにて、一町田日用町へ往來ありし由、往古此邊迄も潮みち來り濱邊なりし由』といふのが參考となり得る。また、現在の砂丘の具合などによつても想像し得るが、これは地理專門學者の調査を大切とする。

○浦無等・人社見良目　ウラナシト・ヒトコソミラメと訓む。浦（入江・灣・港）が無いと人々は見るであらうの意。舊訓ウラナミであつたのを考で斯く訓んだ。浦は外海に對つて裏の意で汭江のことである。この邊の海は現在の下府村からかけて唐鐘（唐金、床の浦）赤鼻の邊から、大崎鼻の小突起があるのみであとは極めて平凡な海であるから、當時も今と多少の變化はあつても大體さうであつた模樣である。人社見良目の社をコソと訓む例は、姓の古曾部も日本紀に社戶と書き、比賣古曾も和名鈔に姬社と書いてある。見良目は見ラメで、今ならばミルラム。ミルラメと活くところの古格の一つで、上一段の見の連用段からラムに續けてゐるのである。卷二（一四五）に、鳥翔成有我欲比管見良目杼母。卷五（八六二）に、比等未奈能美良武麻都良能。同卷（八六三）に、伊毛良遠美良牟比等能等母斯佐。卷八（一四三二）に、吾背兒我見良牟佐保道乃。とあるのによつて明かである。

○滷無等一云礒無登・人社見良目　カタナシト一云イソナシト・ヒトコソミラメと訓む。滷（潟・干潟）が無いと人々が見るだらうの意。滷は玉篇云、滷音魯。鹹水也。又云、潟齒亦切。或滷字。和名鈔に云、文選海賦云、海濱廣

潟、思積反、與レ昔同、師說加太云々。つまり干潟の變化に富んだ光景・現象の無いことを云ふのである。然るに、眞淵・雅澄・山田博士等の一考に、日本海海岸では古から十三潟、象潟、八郎潟、河北潟等の潟は大海近き湖水、一種の鹹湖であるから、潟無しといふのは、さういふ『いとめでたき處』卽ち佳景の鹹湖のやうな處がないといふ意味もあらうか云々。要するに、當時の國府海岸から江ノ川へかけて海岸が極めて平凡だから、さう云つただけであらう。

○能咲八師・浦者無友　ヨシヱヤシ・ウラハナクトモと訓む。縱ひ浦は無くともの意。卷十一（二三七八）に、吉惠哉不來座公。卷十一（二六五九）に、縱咲八師世副流君之。卷十一（二八〇〇）に、縱惠也思獨宿夜者。卷十二（二八七三）に、縱咲也思戀而毛將死。卷十三（三三二五）に、吉咲八師浦者無友。卷十五（三六六二）に、與之惠也之比等里奴流欲波。卷十七（三九七八）に、與思惠夜之餘志播安良武曾などがある。さてこの語の夜志といふのは阿那邇夜志、波之吉也思等のヤシで、このヤはヨに通ふ詠歎の助詞にシの附いたものである。次に與思惠といふのは、卷十一（二五三七）に、心者吉惠君之隨意とある如くヨシにヱ（寂しゑ。待たむゑ。苦しゑのゑ）の添はつたものであり、ヨシはその儘に任せて置く意。たとひその儘に置いてもといふことになるので、後世のヨシヤはこれから來たものであらうか。（攷證・美夫君志・講義參照）。無友は舊訓ナクトモであつたのを玉の小琴でナケドモと訓み、檜嬬手・美夫君志等がそれに

從つたが、今は代匠記・考・古義等の如くに舊訓に據る。

○縱畫屋師・滷者一云礒者無鞆 ヨシヱヤシ・カタハ（一云イソハ）ナクトモと訓む。縱ひ干潟は無くともの意。一云礒者（イソハ）無鞆（ナクトモ）。礒、磯が無くともで、都野津邊の海では今でも磯が無い。また前の滷無（カタナシト）等のところも一云礒無登（イソナシト）とあるのも亦同様である。さて、どうしてかういふことを云つたかといふに、『人ハ浦モナク、潟モナシト見ルトモ、吾タメニハ故郷ニシテ妻トタグヒテスメバ、浦ナシ滷ナシトモ思ハズ、住ヨシトナリ』（代匠記精）といふ解釋が參考となる。契沖は石見を人麿の故郷と考へてゐるからかういふのであるが、此處は必ずしも故郷とせずとも、愛妻のゐるところだから、自然的感情の流露として受取り得るのである。

○鯨魚取・海邊乎指而 イサナトリ・ウミベヲサシテと訓む。いさなとり（枕詞）海べを指しての意。ずつと下まで連續句である。海の枕詞となつたイサナトリは、日本紀允恭卷に、異舍儺等利宇彌能（イサナトリウミノ）波麻毛能（ハマモノ）。萬葉卷十七（三八九三）に、伊佐魚取比治奇乃奈太乎（イサナトリヒヂキノナダヲ）とある。海邊乎指而は舊訓ウナビヲサシテであり、代匠記・考・檜嬬手・新考等其に從ひ、卷十四（三三八一）に、奈都蘇妣久宇奈比乎左之（ナツソヒクウナビヲサシ）氐（テ）。卷十五（三六二七）に、波麻備欲里宇良伊蘇乎見都追（ハマビヨリウライソヲミツツ）。卷五（八九四）に、大伴御津濱備爾（オホトモノミツノハマビニ）等の例を引くが、古義・攷證・美夫君志・註疏・講義・新訓・新解等はウミベヲサシテを可とし、卷十八（四

〇四四）に、宇美邊欲利牟可倍母許奴可。書紀竟宴歌に、佐々奈美乃與須留宇美倍爾とあるのを證とし、卷六（九五四）に、朝波海邊爾安左里爲。卷十五（三五八〇）に、君之由久海邊乃夜杼爾。卷十九（四二一一）に、離家海邊爾出立等とある海邊をウミベと訓んでゐるのをも參考としてゐる。なほ木村正辭の萬葉集字音辨證に論が載つてゐる。

〇和多豆乃・荒礒乃上爾　ワタヅノ・アリソノウヘニと訓む。渡津の礒の上にといふ意。和多豆は舊訓ニギタヅで、仙覺の訓であるが、玉の小琴に、『石見國那賀郡に、渡津村とて海邊に今もあり。是也。此句四言に訓べし。多豆の二字を音に書たれば、和も字音に書ることしるし。然るにニギタヅとしも訓るは、伊豫の熟田津のことを思ひて風と誤れるものなるを、今迄其誤を辨へたる人なし』と云つてゐる。これが正しく、島星山の麓あたりを通つて、今の江津（郷津）邊から江ノ川を渡舟し、（徳川時代には玉江の渡と云つた）そして渡津に行つたものの如くである。ニギタヅ説は考・檜嬬手・攷證・美夫君志等であり、宣長のワタヅ説に從ふのは、古義・註疏・新考・講義等である。荒礒は荒き礒の意（代匠記・考・古義・攷證・美夫君志等）とするのと、現礒の意（講義）とする説とある。ここは、平凡に『あらいその、らいの約利なれば、ありそとよむ』（考）に從ふべきか。卷十四（三五六二）に、安里蘇夜爾於布流多麻母乃。卷十七（三九五九）に、古之能宇美乃安里蘇乃奈美母。卷十七（三九八五）に、之夫多爾能佐吉乃安里

蘇爾。巻十八（四〇四九）に、乎不乃宇良能安利蘇野米具利等の例がある。

○香青生・玉藻息津藻　カアヲナル・タマモオキツモと訓む。か青である玉藻沖つ藻の意。カアヲのカはカグロシなどのカと同じく語調の上の接頭辭である。タマは所謂美稱にて、感動を籠めるためによく用ゐる。オキは沖で、邊に對してゐる。日本紀に、憶企都茂播陛爾播譽戻耐母とある。このあたりの句も下の妹の形容に使つてゐるのである。

○朝羽振・風社依米　アサハフル・カゼコソヨラメと訓む。朝鳥の羽音の如く風が吹いて來ようの意。『和名ニ、鳥ノ羽振ニ、翥ノ字ヲ出セリ。ハブクト云モ同ジ詞ナリ。風ノ海水ヲウチテ吹來ル音ハ、鳥ノ羽ヲ打テ振フ様ナレバ喩テカクイヘリ。鄧璞ガ江ノ賦ニ、宇宙澄宗、八風不レ翔。此翔ノ字ヲ用タルモ此意ナルベシ』（代匠記精）。『羽振は風浪のたつを鳥の羽振に譬ふ』（考）。『羽振とは鳥の羽振を云ふと同じく、風の浪扇ぎて搖ひ動かすを云ふ。神武紀に、乘ニ龜甲一打羽擧來人云々。これらの羽振に朝夕をそへて、四句一聯に文なせる也』（檜嬬手）。『羽は扇る意の古言と見ゆ』（古義）。『羽振は風波の發りたつを、鳥の羽を振にたとへたる也。』（攷證）等にて大體の諸説を知ることが出來る。古事記（中卷）に、振浪比禮、振風比禮。萬葉卷六（一〇六二）に、朝羽振浪之聲𪗱。卷十九（四一九二）に、羽觸爾知良須藤浪乃。同卷（四一九三）に、霍公鳥鳴羽觸爾毛落爾家利。同卷（四一四一）に、

三更而羽振鳴志藝等の例が參考となる。風社依米の訓、略解カゼコソヨセメと訓み、新考もそれに從ひ、古義カゼコソキヨセと訓んで居り、古義では、卷十三（三三一八）の、奧浪來因白珠。卷十五（三六六一）の、可是能牟多與世久流奈美爾等を證例としてゐる。併しここは依をヨルと訓むべき順序になつてゐると考へるのでさう訓んだ。

○夕羽振流・浪社來緣　ユフハフル・ナミコソキヨレと訓む。夕の鳥の羽ぶくが如くに浪が來寄るの意。これも下の妹まで續くので、寄るといふのに到るのである。この夕をユフと訓んだが、山田博士は朝に對しては夕といふのが習慣だと云つてヨヒハフルと訓んだ。なるほど、安沙余比。安左欲比と熟字になり、朝暮、朝夕と訓んでゐるが、安佐麻毛利由布能麻毛利爾（卷十八。四〇九四）。安佐左良受安比底許登騰比由布佐禮婆手多豆佐波利底（卷十七。四〇〇六）といふから、ユフハフルと訓んだ。また來緣を捃解にキヨセと訓んだが、此處も前言の理由で舊訓に從つた。

○浪之共・彼緣此依　ナミノムタ・カヨリカクヨリと訓む。浪と共に、浪に連れてあちらに寄りこちらに漂ひといふ意。ムタは何ノムタ。何ガムタと使つてゐる。卷十五（三六六一）に、可是能牟多與世久流奈美爾。同卷（三七七三）に、君我牟多由可麻之毛能乎等の例があり、彼緣此依は、やはり人麿の歌、卷二（一九四）に、玉藻成彼依此依があり、なほ、卷十七（三九九一）に、可由吉加久遊岐見都

禮騰母。巻二(一九六)に、夕星之彼往此去とあるなど參考となる。さて此句は下の妹の行爲を表はさむための誘導表現であるが、古義ではさうでないと做し、カヨリカクヨルと訓み、『しばらく此處にて絕て心得べし。こをカヨリカクヨリと訓て、妹がよることゝするはひがことなり。こは玉藻のよる事を云るなれば必スかよりかくよるとよむべきなり』と云つて居るのは穩當でない。

○玉藻成・依宿之妹乎　タマモナス・ヨリネシイモヲと訓む。玉藻の靡き寄る如く枕詞寄り共に寢た戀しい妻をといふ意。玉藻成は、なほ巻十一(二四八三)に、玉藻成靡可宿濫和乎待難爾。巻十九(四二一四)に、玉藻成靡許依臥などの例もある。**○一云。波之伎余思・妹之手本乎**　ハシキヨシ・イモガタモトヲと訓む。愛きよし妹が袂をであるが、直接に妹をと云はずに、妹が袂と云ふのは間接的で、却つて續きが惡いやうである。

○露霜乃・置而之來者　ツユジモノ・オキテシクレバと訓む。露霜が草の上に置く如く枕詞妻をば石見の角の里に殘し置き來ればの意。ツユジモノといふ枕詞は、『露ノ霜ニ成程ナレハ露霜ト云。霜ニモ成ハテズ、猶露ニテ又露ニモアラヌ程ナリ』(仙覺抄)。『露霜ハ、今按、露ト霜トニハアラズ。露結テ霜トナル故ニ、寒ク成行比ノ露ヲ霜ヲ呼加ヘテ云ナリ。其證ハ露霜トツヾケテヨメル歌アマタアル中ニ、第七ニ詠露ト題シテ天之露霜トヨミ、第十ニモ同題ニテ、露霜置寒毛時者成爾家類可

聞トヨメリ。然レバ霜ヲ濁テヨミテ一種トスベシ』(代匠記精)で大體分かる。宣長は玉勝間で、ツユジモといふのは單に露のことだと考證してゐるが、これはさう單純に公式的に行かず、仙覺・契沖説へ還元すべきである。そのオクといふ語の同音で妹をオクと續けたものである。巻一(二九)に、倭乎置而とあるのは既に評釋した如くである。なほ、巻十四(三五二七)に、伊毛乎於伎氐伎努可母。同巻(三五六七)に、於伎氐伊可婆伊毛婆摩可奈之。巻十五(三六三四)に、古非思吉伊毛乎於伎弖伎奴。巻二十(四三八七)に、阿夜爾加奈之美於枳弖他知枳奴とある等用例が多い。

○此道乃・八十隈毎　コノミチノ・ヤソクマゴトニと訓む。上來の道筋の至るところでの意である。巻一(七九)に、川隈之八十阿不落萬段顧爲乍。巻十三(三二四〇)に、道前八十阿毎嗟乍吾過往者の例がある。

○萬段・顧爲騰　ヨロヅタビ・カヘリミスレドと訓む。幾遍も幾遍も振かへつて見るけれどの意。巻一(七九)の例のほか、巻二十(四四〇八)に、與呂頭多比可弊里見之都追波呂波呂爾和可禮之久禮婆の例がある。幾たびもといふところをヨロヅタビといつて當時の人は心持を表はしてゐる。

○彌遠爾・里者放奴　イヤトホニ・サトハサカリヌと訓む。益々遠く里は離れて行つたといふ意。里者放奴は、古鈔本中(元・神)サトハハナレヌ。或は(西・細・矢・京)サトハサカリヌと訓んでゐる

のがある。代匠記はサトハワカレヌ。童蒙抄サトハサカリヌであるのを、考でもサトハサカリヌと訓んで、諸注釋書それに從つた。『放奴の二字に、はなれぬさかりぬ兩點あれども、遠さかるの義なればさかりぬとよむべし』(童蒙抄)。卷七(一二二九)に、奧方莫放狹夜深去來。卷十八(四一〇六)に、放居弖奈介可須移母我等の例があり、なほ、卷二十(四三九八)に、伊也等保爾國乎伎波奈例伊夜多可爾山乎故要須疑がある。

○益高爾・山毛越來奴　イヤタカニ・ヤマモコエキヌと訓む。益々高い山をも越えて來たの意。

益高爾は舊訓マスタカニ。童蒙抄イヤタカニ。考マシタカニ。『古本印本ますたかにといふ點はあし。前のくにいや遠とあれば、こゝもいや高にとよむべし』(童蒙抄)。『此類の益の字をマスとも、マシとも訓るは皆誤也。イヤと訓べし。益をイヤと訓證例ば、此卷四十丁に去年見而之云々相見し妹は益年さかる。七卷廿三丁に佐保川爾云々益河のぼる。十二卷三十三丁近有ば云々こよひゆ戀の益まさりなむ。是等也』(玉の小琴)。卷十三(三二四〇)に、道前八十阿毎嗟乍吾過往者彌遠丹里離來奴彌高二山文越來奴といふのがある。

○夏草之・念之奈要而　ナツクサノ・オモヒシナエテと訓む。夏草の萎える氣持に(枕詞)思ひ煩ひ萎えくづほれてゐるの意。夏草之をシナエの枕詞にするは、冠辭考に、『こは夏草はまだ弱ければ、な

よゝかにうなだるゝを、人の物おもひする時のさまにたとへたり。』とあるにて明かである。なほ、宇知萎は也行下二段の動詞で、卷十（二二九八）に、於君戀之奈要浦觸吾居者。卷十九（四一六六）に、宇歎之奈要宇良夫禮之努比都追等の例がある。然るに、卷三（二九一）に、眞木葉乃志奈布勢能山。卷十（二二八四）に、秋芽之四搓旦將有妹之光儀乎。卷十三（三三三四）に、春山之四名比盛而。卷二十（四四四一）に、多知之奈布伎美我須我多乎等とある例は波行四段の動詞で、古義では、『二樣に活用く言なり』と云つてゐるが、この二つは別な動詞である。（攷證・講義參照）。

○志怒布艮武・妹之門將見　シヌブラム・イモガカドミムと訓む。吾を戀ひ偲ぶであらう妹が家を、吾は見ようといふ意。卷七（一一九一）に、妹門出入乃河之。卷十一（二六八五）に、妹門去過不勝都。卷十四（三三八九）に、伊毛我可度伊夜等保會吉奴等の例がある。

○靡此山　ナビケコノヤマと訓む。靡いて動け、靡き伏せ、この山よといふ意。卷十二（三一五五）に、惡木山木末悉明日從者靡有社妹之當將見。卷十三（三二四二）に、奧十山三野之山靡得人雖跡如此依等人雖衝等の例がある。この技巧につき、孔子の龜山操に、予欲レ望レ魯兮。龜山蔽レ之。手無二斧柯一。奈二龜山一何といふのがあり、文選吳都賦に、雖レ有二石林之岝崿一、請攘レ臂而靡レ之。とあるので萬葉の歌も其等の影響だと說く人もある（林氏等）。

大意 伊甘の國府を發ち、角の里にゐる妻に別れて上來する趣の歌と想像していい。石見の角の浦一帶は、よい浦（入江・灣）が無く、またよい潟（干潟・鹹湖）が無いと人々は云ふであらう。縱ひ好い浦がなく、好い潟が無くとも、わが愛する妻のゐる邊であるからなつかしい處である。その角の浦の海邊を通つて來て、江ノ川を渡り渡津といふところの荒磯のうへに生える青い藻、沖の藻が、朝夕吹く風に連れて浪が立つて、その浪のまにまに、あちらに動きこちらに靡くごとくに、吾に靡き寄つて共に寐た妹をば後に殘して京に向ふ旅路にのぼれば、戀しさに道筋の至るところで幾たびも幾たびも振返つて見るけれども、益々遠く里は離れ、益々高い山をも越えて來て、もう妹のあたりは見えなくなつてしまつた。あの角の里には夏草の萎えるやうに吾身上を思ひ煩つてゐる妹が居ることであらう、その妹の家の門を見ようとすれば、彼の高い角の山が邪魔になつて見ることが出來ない。あの山よ、靡き伏して、見えるやうにせよといふぐらゐの歌である。

鑑賞 この長歌一篇は、共に寐た戀しい妻を後に殘して來たが、もう妻の家郷も見えないほど遠く來た。あの邪魔する高角山よ、靡き伏せよ。『妹が門見む靡けこの山』といふのが眼目で、ほかの種々の句は、妹の事と、『靡けこの山』とを云はむがための誘導句と看做すべきである。さてこの長歌を讀み味ひて見るに、濃厚に纏綿たる情緒が全體に漲つて居り、現在の私等には實に不思議

なくらゐである。この歌をば私は慶雲元年ごろ、人麿四十二歳ぐらゐの歌と想像して居るから、未だ五十歳にならずとしても人麿晩年の作と考へていい。それに斯く甘美な戀愛心を以て充滿してゐるのだから、眞淵なども、これは嫡妻ではなくて妾であつただらうと想像して、『久しく戀し女に逢初たる比故に、深き悲しみはありけむ。嫡妻はむつまじき事なれど、常のこゝちには、かりそめのわかれを、甚しく悲しむべくもあらず』（考別記頭注）と云つたのである。もつとも、この妻といふのは、依羅娘子（よさみのをとめ）だとせばあのやうに切實な歌を作る女性であり、また次の長歌にあるやうに、親しんでから未だ間も無い程のことが分かるから、感情も新鮮であり、感情が燃えつつあつても、毫も不思議ではないと解釋していいであらう。それにしても全體の妻に對する感情が濃厚で、語句の斡旋にも全幅の精神を打込んでゐるやうに見える。そこで後世人の心理を標準として律するならば、誇張に過ぎるとまで解釋せられるとおもふのであるが、一面からいへばさういふ點が私の興味を牽くので、人麿の全力的な作歌態度が自然此處にも出てゐるのである。

『寄り寢し妹（いも）を』と云はむために、『いさなとり海邊をさして、和多豆（わたづ）の荒磯のうへに、か靑なる玉藻奧（おき）つ藻、朝羽（あさは）ふる風こそ寄らめ、夕羽（ゆふは）ふる浪こそ來寄れ、浪の共（むた）か寄りかくより、玉藻（たまも）なす』といふやうな長々しい歌句を前驅せしめてゐる。これをば簡潔・蒼古なる人麿以前の長歌を標準と

して論ずる時には、無駄な冗漫な空空しい技巧と看做す人もあるらしいが、作者自身になつて見れば、愛する妻のためにこれだけの歌句を必然として要求したと解することも出來る。はじめの方の、『潟は無くとも』から、直ぐ、『鯨とり海邊をさして』と續けたあたり、それから直ぐ、『和多豆の荒磯の上に』と續けたあたりは、なかなか簡潔で省略の句法とさへ思はれる程だから、それ以下の、『よりねし妹』に前驅した句の長々しいのは、決してただの冗漫でなくて、意識した强い衝迫に本づいたものだといふことが分かる。

それから、全體として、切實・純粹に響く聲調で統一せられてゐるのもこの長歌の特徴であるから、『夏草の思ひ萎えて偲ぶらむ妹』などと云つても、生々とした人麿の息を感じ得ること、西洋人男女相愛行爲を映畫で見る如き順直を感じ得るのである。さう思ふと、臨レ死時の歌などと共に、棄てがたい人間性の露呈して居る歌だとおもふのである。

次に結句であり、一篇の眼目である、『靡けこの山』は、山が靡き伏せ、横に移動して低まれといふことで、これも誇張心の一つであるが、卷一(一七)の『情なく雲の隱さふべしや』などの發露と共に、心を据ゑて鑑賞すれば相當に受納れることの出來る句である。荷田信名云。『その當然の山也。したひおもふ情の切なるあまりに、なびくべき山にはあらねど、なびけと下知したる也。業平

の山の端にげていれずもあらなんといへる意とおなじ雅情也。時代の口風にて當今はなびけこの山とは、つまりたるやうなる終の句なれども、これらは時代の風也。今時は不レ可レ好終句歟』(童蒙抄)。

賀茂眞淵云。『古郷出てかへり見るほどの旅の情、誰もかくこそあれ、物の切なる時は、をさなき願ごとするを、それがまゝによめるはまことのまこと也。後世人は此心を忘れて、巧みてのみ哥はよむからに、皆そらごとゝなりぬ。さて、巻三、靡(ナビ)けと、人はふめども、かく依(コレ)と、人は衝(ツケ)ども、こゝろなき山の、奥磯(オキツ)山、三野ノ之山とよめるは、いと古への哥也。巻五、悪木(アシキ)山、こずゑこと〲、あすよりは、なびきたれこそ、妹があたり見んてふは、今をとれるか』(考)。この二つの評はなかなか興味あるので、童蒙抄では業平の歌と同一に評價したのみならず、この結句はつまつてゐて、今時は不レ可レ好終句歟と云つてゐるのは、信名は萬葉調の歌を稽古しないから、眞の妙味は分からないのである。これに反し眞淵の方は正當の判斷をしてゐるのは、眞淵は萬葉調の歌を作らうと努力してゐたからである。眞淵は恐らく業平の歌と同列には置かないであつただらう。實際、業平の、『飽かなくにまだきも月の隱るるか山の端逃げて入れずもあらなむ』は、意味の內容は相似かも知れんが、『山の端逃げて』といふ句の遊戲的・間接的・弛緩的なるに反して、『靡けこの山』といふ句は眞率的・直接的・緊張的であることを眞に吾等は悟入せねばならぬ。

それから、この歌の參考部に記載したごとく、土田杏村氏、林古溪氏等は、この長歌はその構想も技法も支那文學の模倣として論じて居るのであるが、これは既に總論篇でも論じたごとく必ずしも、漢文學の模倣・影響とは限らぬといふのが愚見である。

次にこの一篇の聲調のことを云へば、一篇は途中で繰返しの變化起伏があるが、一つの線を以て譬へうる連續聲調であり、ぽつりぽつりと切れるやうな詩とは全くその趣を異にしてゐるものである。併し、種々の寫象を含んで居る點と、繰返しの變化のある點とで、一篇を一形態と看做すならば大體次の如きものになるのではなからうか。

いは見の海　つぬの浦回を
　浦なしと　人こそ見らめ
　潟なしと　人こそ見らめ
　　縱しゑやし　浦はなくとも
　　縱しゑやし　潟はなくとも
いさなとり　海べをさして
　和多豆の　荒磯のうへに
　か青なる　玉藻おきつ藻
　　あさ羽振る　風こそ寄らめ
　　ゆふ羽振る　浪こそ來寄れ
なみのむた　かよりかくより　玉藻なす　より寢し妹を

つゆじもの　置きてしくれば
　このみちの　八十隈毎に
　よろづたび　顧みすれど
　　いや遠に　里はさかりぬ
　　いや高に　山も越え來ぬ
夏草の　おもひ萎えて　偲ぶらむ　妹が門見む――靡けこの山

私は假に右の如き形態を考へたが、橘守部は長歌撰格で次のやうに想像して居る。（訓は長歌撰格の儘）。

石見の海　つぬの浦回を
　浦なしと　人こそ見らめ
　潟なしと　人こそ見らめ
　よしゑやし　浦はなけども
　よしゑやし　潟はなけども
　いさなとり　海びをさして　和多豆の　荒磯の上に
香青なる　たま藻
　おきつ藻
　　朝羽ぶる　風こそよせめ
　　夕羽ぶる　浪こそきよれ
　　　浪のむた　彼（カ）より
　　　此（カク）より

たま藻成　よりねし妹を　露霜の　おきてしくれば　この路の
八十隈おちず
萬段　顧すれど　いや遠に　里はさかりぬ
いや高に　山もこえきぬ　夏草の　思ひしなえて　しぬぶらん
妹が門見む　なびけ　此山

なほ守部此歌を解析して、『此歌、浦なし云々、瀉なし云々は、海びをさしていひ出ん爲なり。又玉藻おきつ藻云々は、より寢し妹といはん序ながら、全くの序にもあらず。皆其上に來る、路すがらの物もて、巧にいひなせるものなり。さて一篇のうへを、海里山とついでゝしたてられたれば、即その海里山が此歌の招應首尾にぞありける』と云つた。

それから、繰返しでも、少しづつ變化を試みてゐる點に注意すべく、『浦なしと人こそ見らめ、瀉なしと人こそ見らめ』。『風こそ寄らめ、浪こそ來寄れ』。『里はさかりぬ、山も越え來ぬ』等である。佛足石歌の結句の繰返しでも、美阿止都久留(ミアトツクル)、伊志乃比鼻伎波(イシノヒビキハ)、阿米爾伊多利(アメニイタリ)、都知佐閇由須禮(ツチサヘユスレ)、知々波々賀多米爾(チチハハガタメニ)、毛呂比止乃多米爾(モロヒトノタメニ)の如く結びで繰返して居るが、結句で据ゑる場合でもかういふ繰返しの技法が成立つのだから、連續の場合には猶更效果的だと謂つていい。そして、『見らめ』、『放りぬ』のところで文法的には切れるが、二たび『見らめ』、『越え來ぬ』で繰返してゐるの

だから、つまりは、切れずに連續聲調となるのである。

それから、この長歌は、これだけの句で成立つてゐるが、意味の内容は單純で、それゆゑに戯曲的發展は無いが、そのかはり却つて象徴的效果を齎してゐる。現代の寫實から見れば何と云つても古調で、様式化の莊重が籠つて居る。併し人麿はただ空に憑つて言語を驅使してゐるのかと云ふにさうではない。人麿は實際を歌つてゐるのである。石見の海、角の浦囘、和多豆、その荒磯に生ふる玉藻、沖つ藻、風によつて立つ海波、海波によつて靡く玉藻、さういふ材料は靡き寢た妹を云はむがためのただの技巧的材料の如くに見えて居りながら、實はさうでなく、やはり實際の寫實から來てゐるので、そこから象徴的效果が由縁して居り、人麿の作歌技倆の强味もそれに本づいてゐるのである。また、『靡けこの山』といつても、實在の山が考察せられ、角、高角山、渡津等の地理をも考察することが出來るといふ特色があるのである。吾人は、後世の題詠の作と、此等の作との間の差別を瞭然と區別せねばならぬ。様式化され、象徴的であつて、なほ作者の息吹、肉體を活々と感ぜしめる點は、中世の幽玄體などの空中に漂ふココロに過ぎないのと大に差別があるのである。

【一三二】石見乃也　高角山之　木際從　我振袖乎　妹見都良武香

【一三三】小竹之葉者　三山毛清爾　亂友　吾者妹思　別來禮婆

或本反歌

【一三四】石見爾有　高角山乃　木間從文　吾袂振乎　妹見監鴨

右七七頁、八一頁、八九頁に評釋した。

參考　○上田杏村氏は、この長歌は遊仙窟の一部的模倣だとして、次の文を引用して居る。『下官不忍相看、忽把十娘手子而別。行至二三里、廻頭看數人猶在舊處立。余時漸々去遠、聲沈影滅、顧瞻不見、惻愴而去。行到山口、浮舟而過、夜耿々而不寐、心煢々而靡託。既悵恨於啼猨、又悽傷於別鵠。飮氣呑聲、天道人情、有別必怨、有怨必盈、去日一何短、來宵一何長、比目絶對、雙鳧失伴。日々衣寛、朝々帶緩、口上唇裂、胸間氣滿、涙臉千行、愁腸寸斷、端座横琴、涕血流襟、千思競起、百慮交侵。獨顰眉氷結、空抱膝而長吟。』（國文學の哲學的研究第二卷、文學の發生。二三九頁。昭和三年）これで見ると、成程似たところがあり、高角山の道を通つて、また舟で河を渡るところなどは、一讀模倣のやうであるが、山も河も石見に實在してゐたのだから、これをば模倣といふ點を餘り強調すると判斷が間違ふとおもふ。遊仙窟に就いては幸田露伴翁が明治四十年に論ずるところがあり、その萬葉集・和名鈔・和漢朗詠集等との交渉について考證せられたが、『唐史鷟の傳に記す、新羅日本の使至る。必ず金寶を出して其の文を購ふと、山上憶良の壯時や唐に使す。憶良遊仙窟を將來すとは云ふべからざるも、年代相當るを以て考ふれば、蓋し憶良若く

は憶良の前輩の遊仙窟を傳へたる自ら明らかなり』（全集第九卷）と云つてゐる。また山田孝雄博士も、大體同一の意見である。（醍醐寺本遊仙窟解題）。さうすれば人麿が遊仙窟に親しんで作歌の結構までをも模倣するといふのは、時代が符合しない。遊仙窟の著者の張文成（張鷟）は大體則天武后時代に居り、玄宗の時に歿した（四庫全書簡明目錄）のであり、また、傳に開元の文字が出て來るのだから、縱ひ容齋四筆に天授二年の文字があるにしても、其時、既に遊仙窟が世に出で、特に人麿の愛讀書の一になつてゐたかどうか、疑はざることを得ないのである。また人麿在世中、遊仙窟が渡來したと假定しても、それが一般に流布し、身分低き人麿にまで及んだか、これも大に疑はざることを得ない。近時支那文學と萬葉集との關係について考へることは、一つの流行の如くであり、土田杏村氏の如き才士がいちはやく人麿の石見から上來する時の歌を以て、遊仙窟の模倣だといふに至つては稍輕薄の譏を免れることが出來ないであらう。少くとも私はさう斷ずる。なほ云はば、『玉藻なす寄り寢し妹』は、必ずしも、『腰支一遇勒心中百處傷若爲得口子』云々の模倣でなくともよく、『さ寢し夜はいくだもあらず』云々は、必ずしも『別時終是別春心不値春』の模倣でなくともいいといふのである。

○林古溪氏は、萬葉集外來文學考（昭和七年）に於て、この長歌は、法華經の三變土田の話、或は文選二十三の潘岳悼亡の影響を考へ、『ますらをと思へる吾も敷妙の衣の袖は通りてぬれぬ』は、『悲懷感レ物來、泣涕應レ情隕』と、そつくりだと云つて居る。私は總論篇で既に云つた如く、人麿は讀經禮讚の音聲律に感染してゐたかも知れぬが、法華經見寶塔品あたりを選んで自分の歌の模倣に資したかどうか、これも疑はざることを得ない。また、『丈夫とおもへる吾をかくばかり戀せしむるは苛くはありけり』（卷十一。二五八四）とか、『君に戀ひわが哭く涙しろたへの袖さへぬれて爲む術もなし』（卷十二。二九五三）とかあつて、必ずしも、佛典や支那の古詩の影響を必要としない。

○卷十三（三二四〇）の長歌の中に、『道の隈八十隈毎に嗟きつつ吾が過ぎ往けばいや遠に里離り來ぬいや高に山も越え來ぬ』と

いふ句があつた。また、同卷（三二二五）に、『隱口の長谷の河は浦無みか船の寄り來ぬ磯無みか海人の釣爲ぬよしゑやし浦はなくともよしゑやし磯は無くとも』云々といふ句があり、なほ、同卷（三二五八）に、『松が根の待つこと遠み天づたふ日の闇れぬれば白木綿の吾が衣手も透りてぬれぬ』といふのがあり、兎に角人麿の歌句に似てゐる。この影響は速斷は出來ないが、歌の力量から見て、卷十三の歌の方が人麿の歌の影響だと大體看做して大きな誤謬がないやうである。さうして見れば、人麿の歌といふものは、同時代或は後れた時代の歌を作る人々によつてどう評價せられてゐたかといふことが略想像するに難くはないわけである。

また、卷二十（四三九八）の家持作中に、『顧みしつついや遠に國を來離れいや高に山を越え過ぎ蘆が散る難波に來居て』云々といふのもあり、この家持の歌などは、種々の要素の影響があるといつても、人麿のこの歌の影響もあるらしいのである。同卷（四四〇八）の家持作中、『玉桙の道に出で立ち丘の崎い廻む毎によろづ度顧みしつつはろばろに別れし來れば思ふそら安くもあらず戀ふるそら苦しきものを』などは、憶良の影響もあるが、人麿のこの歌の感化もあり得る。なほ卷十三の類似句に就いて補充するならば、卷十三（三二四三）に、『處女等が麻笥に垂れたる續麻なす長門の浦に朝なぎに滿ち來る潮の夕なぎに寄り來る波のその潮のいや益益にその浪のいや重重に吾妹子に戀ひつつ來れば阿胡の海の荒磯の上に濱菜つむ海人處女ども纓せる領巾も光るがに手に纏ける玉もゆららに白妙の袖振る見えつ相思ふらしも』があつて、一三八の歌に參考になる。卷十三（三二七六）の、『百足らず山田の道を浪雲の愛し妻と語らはず別れし來れば速川の行くも知らに衣手の反るも知らに馬じもの立ちて蹟く爲む術のたづきを知らに物部の八十の心を天地に念ひ足らはし魂相はば君來ますやと吾が嗟く八尺の嗟』も何となく一三一の歌を聯想せしめる。卷十三（三三〇二）の、『紀伊國の室の江の邊に千年に障る事無く萬世に斯くしあらむと大舟の思ひたのみて出で立ちし淸き渚に朝なぎに來寄る深海松夕なぎに來寄る繩苔深海松の深めし子らを繩苔の引かば絶ゆとや里人の行きの集に泣く兒なす行き取りさぐり梓弓弓腹振り起し志之岐羽を二つ手挾み離ちけむ人し悔しも戀ふらく思へば』は一三五をおもはしめる。

○

つぬさはふ　石見の海の　言さへぐ　韓の埼なる　いくりにぞ　深海
松生ふる　荒磯にぞ　玉藻は生ふる　玉藻なす　靡き寐し兒を　深海
松の　深めて思へど　さ寐し夜は　幾だもあらず　延ふ蔓の　別れし
來れば　肝向ふ　心を痛み　思ひつつ　かへりみすれど　大舟の　渡
の山の　黄葉の　散りのまがひに　妹が袖　さやにも見えず　嬬隱る
屋上の一に云ふ、室上山　山の　雲間より　渡らふ月の　惜しけども　隱ろひ來れ
ば　天づたふ　入日さしぬれ　丈夫と　思へる吾も　敷妙の　衣の袖
は　通りて沾れぬ

角鄣經　石見之海乃　言佐敝久　辛乃埼有　伊久里爾曾　深海松生流

荒礒爾曾　玉藻者生流　玉藻成　靡寐之兒乎　深海松乃　深目手思騰
左宿夜者　幾毛不有　延都多乃　別之來者　肝向　心乎痛　念乍　顧
爲騰　大舟之　渡乃山之　黃葉乃　散之亂爾　妹袖　淸爾毛不見　嬬
隱有　屋上乃（一云室上山）山乃　自雲間　渡相月乃　雖惜　隱比來者　天傳
入日刺奴禮　大夫跡　念有吾毛　敷妙乃　衣袖者　通而沾奴

題意 長歌第二である。同じ時、同じ作者によつて歌はれたもので、一つものの異傳でなく、作者が意識して内容を少しく變へて作つて居るもののやうである。

語釋 **○角鄣經・石見之海乃**　ツヌサハフ・イハミノウミノと訓む。〔つぬさはふ（枕詞）〕石見の海のといふだけの意である。鄣は金澤本元暦本神田本に障に作つてゐるが、美夫君志に障鄣は通用字也と説明して居る。ツヌはツタ即ち漢名絡石で、またツナともいふ。卷六に石綱（イハツナ）とあるのを契沖が石絡石（イハツタ）と説明してゐる。ツタ（蘿、蔦）は岩石に纏はりて生えるから、蘿這石（ツタハフイハ）と續けたもので、ツヌ・ツナ・ツタは通音だと説明して居る。サは接頭辭で、それにハフ（這ふ）といふ動詞の附いたものだとしてゐる。日本紀仁德卷の歌に、菟怒瑳破赴以破能臂謎餓（ツヌサハフイハノヒメガ）。同繼體卷の歌に、都奴娑播符以（ツヌサハフイ）

斯(簸)例能伊開能。萬葉卷三(二八二)に、角障經石村毛不過。同卷(四二三)に、角障經石村之道乎等の例がある。石見之海は、國府あたりの大體の海と解釋していい。前の長歌の時は音數の關係からイハミノミと訓んだが、此處はイハミノミノとしてもよいが音數の關係から六音にせずにイハミノウミノと七音に訓んでもよくはあるまいか。つまり一樣にかかはらぬのである。

○言佐敝久・辛乃埼有　コトサヘグ・カラノサキナルと訓む。コトサヘグはカラに係る枕詞であるから單に『辛の埼なる』といふだけの意味である。この枕詞は、言騷ぐ外國人といふ意味で、韓或は百濟などに冠せた。卷二(一九九)に、言左敝久百濟之原從。卷十六(三八八六)に、佐比豆留夜辛碓爾春ともある。辛乃埼は、石見風土記に可良嶋秀ニ海中一因レ之可良埼トモ云、度半里嶋二而（有松芽四邊海草蚫蛤在）とあり、古義にも、『石見國邇摩郡託農浦にありと國人云り』といひ、現在も邇摩郡宅野村の近くの海に韓島があるので、大體それだと想像し、諸參考書皆同じであるから私も總論篇でさう書いて置いた。そして人麿が上來の時、その邊から東へ折れたと解したのであるが、「安藝より石見を通過する道の記」(鴨山考補註篇に收む)には、高田山・唐山・唐金などの地名が見え、この文は吉田桃樹の槃游餘錄の文と大同小異で、唐金は今のタウガネと云つてゐるが、もとはカラカネと云つたかも知れず、また、文中カラヤマといふのがあるのだから、そのあたりにカラと關聯した地名があつたと想像して

よく、若し唐鐘浦の千疊敷のあるあたりの埼・巖石等が人麿時代のカラの埼だとせば、國府に近く、古への伊甘郷内であり、前の長歌（一三一）では角の浦をいひ、此長歌では唐鐘浦あたりを歌つたのだとすると却つて腑に落つるので、邇摩郡の韓島邊だとすると少しく北方過ぎるやうにもおもふ。有福村に大津村・姉金村があつたのを明治二十一年合して大金と名づけた。それから田野村と千金村とを合して金田村にした。また島星山の南方に谷金村がある。卽ちカネのついた村があつて、アニ或はチ或はタニと和訓であるから、唐金もカラカネと和訓した時があつたに相違ない。槃游餘錄の唐金（地名辭書の訓に據る）が卽ちそれである。また、唐金といふ姓氏があるによつて、カラカネと訓めないことがないことも分かる。また古事記の思金神なども參考になるだらう。そこで想像するに、人麿時代の伊甘郷の一部に歸化族などの部落があつて、それが今の唐鐘を暗指するとせば、千疊敷・疊ケ浦・赤鼻あたり一帶のうちの埼を、當時カラノサキと云つたかも知れない。從來の萬葉學では誰一人これを云つてゐないから、一つ愚案を提出して置くのである。

補記。唐山は今の地圖では不明だが、大日本風土記（寫本、帝國圖書館藏）の第三十二册、出雲石見隱岐等を見るに、それにも、『高田山の裾より、唐山、都野津、加久志、江津、玉江渡（巾四百九十間。山々水落合海入）渡津（是より海邊に出）加戸、鹽田、淺利』等とあるから、カラヤマといふ山が近くにあつたことが分かる。少くともカラといふ音を傳へたものがその邊にあるのである。〇唐金が、カラカ

ネであつたのが、中途からタウガネに變じたらしいと考へ得る旁證としては、湖尻（ウミシリ）がいつのまにか湖尻（コジリ）と云ふやうになり、嶋星山（シノホシヤマ）を石見風土記の一本には嶋星山（トウセウサン）と傍訓がしてあるのも參考となるだらう。また高田はカウダと云つて居る。（神田（カンダ）の轉といふ說もある）二宮村をニコウムラと字音でよんでゐるのも皆同じである。○文政十一年編の、國郡全圖の石見の部を見るに、都野・波子の近くの海に、『カラノ浦』と書いてある。餘り精密でない地圖だが、兎に角、この『カラノ浦』といふ記入が、仁萬・宅野あたりでなく、下府・都野の方に近くあるのは興味あることである。○なほ附記するに、川波村では目下小字にも『唐山』又はその類似の名は見つからない。○實用帝國地名辭典に、高田山は鷹起山といひ、石見の星高山の異名として居る。これはなほ調査すべきである。

○伊久里爾曾・深海松生流　イクリニゾ・フカミルオフルと訓む。海にある巖石に深海松が生えるといふ意。伊久里は海中の石といふ意で、日本紀應神卷の歌の由羅能斗能斗那訶能異句離珥を釋日本紀で句離謂レ石也、異助語也と解したので、多くの注釋書がそれに據つた。袖中抄に、『船路には石をくりとも云り』と云ひ、仙覺抄に、イは發語クリハ石ナリ。山陰道ノ風俗、石ヲハクリト云ナリと云ひ、代匠記には仙覺抄をも引用し、『今ノ世ナベテクリ石ト申ハ、チヒサキヲ申セバ、栗バカリノ石ト云心ニヤ。山陰道ニハ大小ヲ問ズ皆クリト云ニコソ』と云つて居り、宣長は、古事記の斗那加能伊久理爾の解で、『伊久理は海なる石なり。此は海上に出たる大なる岩なるべし』といひ、なほ注して、『小きに限らぬ事を知ルべし。又海ハ底なる石を云と云も非なり。此の歌も、底なる石に

ては叶はず、右の萬葉の歌に、海底とよめるは、ただ奥の枕詞にて、伊久利へ係れることには非ず、海底なるをも、又上へに出たるをも云ひ、又小きをも云、大きなるをも云名なり』（古事記傳）とも云つた。近時山田孝雄博士は、イクリは海中の石だとし、奈何なる海中の石かといふに、日本地誌提要に、山陰道其他日本海沿岸地方に、暗礁の名に何繰と唱へてゐるのが載つてゐる。出雲に入道繰、十良繰、松島繰、横繰、清水繰等。伯耆に和田繰、重繰礁等。丹後に三礁。能登に淺栗、目繰、大繰等。佐渡に魚繰。羽前に邪魔繰、西道繰。羽後に三栗等。よつてイクリといふのは船路の語で、暗礁のことだと結論してゐる（伊久里考。文化第十七號奈良）。ついで、アララギ會員齋藤孝治氏の調査に據るに、越後中頸城郡八千浦役場所藏の專門漁業に關する互換契約書中の沖合字名表には、何グリ、何クリといふのが澤山あつて、クリには船路上の海中の岩と漁場を示標する海中の岩との別があり、また暗礁の場合と海上から露出してゐる場合（三ツぐり等の場合）と二とほりあることが分かつた。また、日本地誌提要の暗礁の記載中にも、『水面ヲ出ル三尺』（出雲の入道繰の場合）とか、『水面ヲ出ル二尺』とかあるから、海上から見えてゐてもクリといふことが分かる。人麿時代の用例は皆暗礁であつたかも知れないが、今の用例をも參照して兩方の意に解して『海中の岩』として置く。用例は、巻六（九三三）に、淡路乃野島之海子乃海底奥津伊久利二鰒珠左盤爾潜出があり、日本紀の既出のほかに、古事記仁徳天皇條に、由

良能斗能斗那加能伊久理爾布禮多都那豆能紀能のあることも既に云つた如くである。ミルは水松・海松と書く海藻である。深い海に産するといふ意味で、フカミルと稱するのであらうか。延喜式諸國例貢御贄の中に、深海松・長海松といふ名がある。卷五(八九二)に、美留乃其等和和氣佐我禮流。卷六(九四六)に、三犬女乃浦能奥部庭深海松採浦回庭名告藻苅深見流乃見卷欲跡。卷十三(三三〇一)に、伊勢乃海之朝奈伎爾來依深海松暮奈藝爾來因俣海松。同卷(三三〇二)に、朝名寸二來依深海松夕難伎爾來依繩法等の例がある。

○荒礒爾會・玉藻者生流　アリソニゾ・タマモハオフルと訓む。荒磯には玉藻は生ふるである。講義に、『上のいくりに對していへるものと思しく、一は暗礁一は現磯と相對せしめしものと見えたり』とあるのはこの場合よく當嵌まるやうである。イクリが前述の如く海水から露はれてゐてもよいとしても、此處の用例は深海松と玉藻との對稱であるから、海中の巖の義であるやうである。

○玉藻成・靡寐之兒乎　タマモナス・ナビキネシコヲと訓む。玉藻が靡くがやうに、愛しきさまに、自分と共に寢た妻といふ意。卷三(四八一)に、白細之袖指可倍氏靡寢吾黒髮乃。卷十一(二四八三)に、玉藻成靡可宿濫。卷十二(三〇七九)に、海若之奥津玉藻之靡將寢等がある。『兒』は一般に男女ともに親しみ呼ぶ稱で、卷四(五三二)に、打日指宮爾行兒乎眞悲見。卷五(八四五)に、知良須阿利

許曾意母布故我多米。卷七(一四一四)に、薦枕相卷之兒毛。卷十一(二四一〇)に、袖易子少忘而念哉。卷十四(三四二七)に、筑紫奈留爾抱布子由惠爾等の例があり、此處では、『妻』を指して居る。

○深海松乃・深目手思騰　フカミルノ・フカメテモヘドと訓む。深海松の(枕詞)深く妹をば戀ひ思ふけれどもの意。フカシといふ音と意味で續けた枕詞の例である。卷十三(三三〇一)に、深海松乃深目師吾乎。同卷(三三〇二)に、深海松之深目思子等遠がある。舊訓フカメテオモフトであつたのを考でかく訓んだ。

○左宿夜者・幾毛不有　サネショハ・イクダモアラズと訓む。共に寢た夜は幾夜でも無いの意。舊訓サヌルヨハであつたのを古義で斯く訓んだ。『略解などに、舊本に從てサヌルヨハとよめるは今少しわろし』(古義)。また舊訓イクバクモアラズであつたのを古義で斯く訓んだ。そして、卷五(八〇四)に、佐禰斯欲能伊久陀母阿羅禰婆。卷十(二〇二三)に、左尼始而何太毛不在とあるのを證とした。玉の小琴では、卷十七(三九六二)に、年月毛伊久良母阿良奴爾を證として、『是に依て訓べし』としイクラモアラズと訓み、略解・山田博士これに從つた。

○延都多乃・別之來者　ハフツタノ・ワカレシクレバと訓む。妻と別れて來ればの意。冠辭考に、『こはつたかづらのかた〴〵へはひわかるゝを、人にわかれ行にかけたり』とある。卷十三(三二九

〕に、延津田乃歸之別之數惜物可聞。卷十七（三九九一）に、波布都多能由伎波和可禮受。卷十九（四二二〇）に、波布都多能和我禮爾之欲理等の例がある。

○**肝向・心乎痛**　キモムカフ・ココロヲイタミと訓む。肝向（枕詞）心が痛くしての意。舊訓キモムカヒであつたのを管見でかく訓み、代匠記でも、『肝向ヒト點ゼルハ叶ハズ。向フト改ムベシ。古事記下、仁德天皇ノ御歌末云。岐毛牟加布許々呂袁陀邇迦、阿比淤母波受阿良牟。此ヲ證トスベシ』と云つた。これがココロの枕詞となつた理由は古事記傳三十六に、『腹中にある、いはゆる五臟六腑の類を、上代には凡て皆伎毛と云しなり。さて腹中に多くの、伎毛の相對ひて集り在りて凝々し、と云意に、許々呂とは連くなり』と云つてゐる。卷九（一七九二）に、肝向心摧而珠手次不懸時無の例があり、なほ、代匠記に、『憂アル時ニ心ト肝トノ二ツヲ痛マシムル心カ』といつて、文選の痛哭摧ニ心肝一。遊仙窟の心肝恰欲レ摧を引用して居る。

○**念乍・顧爲騰**　オモヒツツ・カヘリミスレドと訓む。妹をば念ひながら幾たびも振かへつて見るけれどもの意。此處のオモフは、『妹を念ふ』ので、『心を痛み念ふ』と續くのではない。卷四（四八五）に、夜者夜之明流寸食念乍寢宿難爾登。卷一（二五）に、隈毛不落思乍敍來其山道乎。卷十（二〇七四）に、天漢渡湍毎思乍來之雲知師逢有久念者等がある。カヘリミの例も萬葉になかなか多く、卷

九(一七三三)に、水尾崎眞長乃浦乎又顧津。卷二十(四四〇八)に、與呂頭多比可弊里見之都追等が參考になるだらう。

○大舟之・渡乃山之　オホフネノ・ワタリノヤマノと訓む。大舟の枕詞渡村にある山のといふ意。舟で渡るといふので、ワタリの枕詞とした。ワタリの山は既に總論篇に說いた如く江ノ川を渡つたところの那賀郡渡津村附近の山をいふのである。然るに邑智郡江ノ川沿岸に『渡』といふところがあるので、眞淵が國人にその名を聞いて其處だらうといひ、古義にも、『岡部氏、府より東北、今道八里の處に在よし云り。國人に聞に、邑智郡今の渡村廿南寺の山、これなりと云り』と云つたが、守部の檜嬬手にそれを否定し、『邑智郡に今渡村矢上村あれど、それは安藝・備後の方へ出る間道にて、古代の驛路に非ず。人麻呂大人此度の歸京、たとひ朝集使にまれ、任限にまれ、國府を立ちて、邇摩郡・安濃郡を歷て、出雲路の方へ出て上るべきなれば、今那賀郡江の河近邊に八神村あり。道のつゞきに山も多かれば、此處とすべし』と云つた。或は島星山だらうといふ說(大日本地名辭書)もあるが、當らない。これは實地に踏査すれば、やはり渡津村附近の小山つゞきだといふことが分かる。

○黃葉乃・散之亂爾　モミヂバノ・チリノマガヒニと訓む。亂れ散る黃葉にまぎらはされての意。散之亂爾は舊訓チリノマガヒニ。古鈔本中チリシミタレニ(元・神)。チリノマカイニ(細)。チリノミタ

レニ（温）等。古義ではチリノミダリニと訓んだ（新訓・新解同訓）。檜嬬手・攷證・美夫君志・註疏・新考・講義等皆舊訓に從つた。卷五（八三八）に、烏梅能波奈知利麻我比多流。卷十五（三七〇〇）に、毛美知葉能知里能麻河比波。卷十七（三九六三）に、春花乃知里能麻可比爾。同卷（三九九三）に、乎布能佐伎波奈知利麻我比等の例がある。

○妹袖・清爾毛不見　イモガソデ・サヤニモミエズと訓む。妹が袖卽ち妹がよく見えないといふ意。妹が袖と云つたのは、反歌の、我振袖乎の句と同じく、妹の方でも袖を振るのであらうから自然にさういふ表現になつたものであらう。ミエズのところは小休止のやうだが、やはり下に連續する句法である。卷三（三七六）に、秋津羽之袖振妹乎。卷四（五〇一）に、未通女等之袖振山乃。卷六（九六六）に、余振袖乎無禮登母布奈。卷十八（四一二五）に、牟可比太知蘇泥布利可波之。卷二十（四四二三）に、安之我良乃美佐可爾多志弖蘇埿布良波等の例がある。

○嬬隱有・屋上乃（一云室上山）山乃　ツマゴモル・ヤガミノヤマノと訓む。嬬ごもる（枕詞）屋上山のの意。嬬隱といふ枕詞は、妻を率て隱る屋といふ意味で屋に續けた。卷十（二一七八）に、妻隱矢野神山露霜爾爾寶比始。日本紀武烈卷に、播屢比能倘須我鳴須擬逗麼御暮屢鳴佐褒鳴須擬とある。屋上山は代匠記は備前赤坂郡の八上などを考へ、考では『渡山と同じ程の所といへり』といひ、檜嬬手は八神

村の山を考へ、豐田八十代氏は那賀郡淺利村の北の室上山（小富士）であるといひ（心の花十九の三）、山田博士は日本地誌提要の『高仙山（タカゼン）又屋上山ト云那賀郡淺利村ヨリ十三町五間』を引いてゐる。實際に當つてみると屋上山はこの高仙山、淺利富士、小富士などといふ山であることが略想像せられ、淺利の停車場に近づくころ、また過ぎてからも暫時のあひだ見える形の好い山で、次の句の月のことを參照すればこの山だらうといふ想像もつく。また現在の八神村はどういふ名稱かといふに、この屋上山から來た名かも知れない。昭和九年七月濱田の大島幾太郎翁に逢つたとき、この山の形は富士山に似、家の屋根に似てゐるのでヤガミノヤマと云つたものだらう。また見樣によつてはこの山は八神村と淺利村の中間にあるのだから、八神村に關聯せしめて說明してもいいだらうと云はれた。邑智郡の矢上に關聯せしめる說もあるが、それは間違であることは既に總論篇で云つた如くである。**○一云。室上山**といふのはやはりヤガミノヤマと訓むので、同一の山であらう。一つの傳本にかう書いてあつたことが分かる。萬葉集の編輯は丁寧で一々棄てずに收錄して居る點が興味あるが、若しムロカミヤマと訓ませるのならば、この山は不明といふこととなる。

○自雲間・渡相月乃　クモマヨリ・ワタラフツキノと訓む。雲間を經て照りつつ移りゆく月のといふ意。次の『惜しけども隱ろひ來れば』といふ句へ序詞的に續けて居る。卷二（一六九）に、夜渡（ヨワタル）

月之といふ人麿の句がある。ヨリは其處からといふ意で、運動を表はす用言に續き、本來はさういふ意味であつたのが、稍分化して、其處を通過する意味に使つたと解釋してはどうだらうか。卷十（一九五九）に、霍公鳥指春日而從此鳴渡。卷二（一一二）に、三井能上從鳴渡遊久。卷十五（三六二七）に、宇良未欲理許藝弖和多禮婆等がある。ワタラフはワタルからハ行四段活用につづけ、繼續の狀をあらはすこと既に花散ラフの條下で說明した如くである。美夫君志に、『しか緩言にいへるは、ワタルと全く同意にはあらず、此は月の漸々に空を過ぎ行くをいふ也』と云つてゐる。卷十二（二四五〇）に、雲間從狹徑月乃。卷九（一七〇一）に、鴈音所聞空月渡見。卷十（二二二四）に、鴈鳴乃所聞空從月立渡。卷二（二〇七）に、度日乃晩去之如。卷三（三一七）に、度日之陰毛隱比。卷六（九八三）に、天原門度光見良久之好藻等の參考例がある。この句は、玉の小琴に、『屋上の山のと切て、隱ろひくればと云へ續く也。惜けども屋上の山の隱れて見えぬ由也。さて雲間より渡らふ月のと云二句は、只雖惜の序のみ也。纔なる雲間をゆく、間の月は惜きよしの序也。若此月を此時の實の景物としては、入日さしぬれと云に叶はず。此わたり紛はしゝよく辨ふべし』といひ、講義に、『以上は次の句を導く爲の語の上の序にして實景にあらず』と云つてゐる。次の句の、『天傳ふ入日さしぬれ』を參照すれば、さういふ結論になるとおもふ。實際人麿は聯想の趣くところに從つて如是の表現を採

つてゐる。前出の卷二（一六九）の、茜刺日者雖照有烏玉之夜渡月之隱良久惜毛の解釋に參考になる表現法である。

○雖惜・隱比來者　ヲシケドモ・カクロヒクレバと訓む。惜しいけれども段々隱れて來ればの意。雖惜は舊訓ヲシメドモであつたのを代匠記でヲシケレドトモ讀べシといひ、略解でヲシケドモと讀み、檜嬬手・古義・攷證・美夫君志・新考・新訓・新解・講義等それに從つた。卷五（八〇四）に、多摩枳波流伊能知遠志家騰。卷十七（三九六二）に、多麻伎波流伊乃知乎之家騰。卷十四（三四二一）に、和我倍爾波由惠波奈家杼母。卷四（五五三）に、天雲乃遠隔乃極遠鷄跡裳。卷十七（三九八一）に、夜麻伎弊奈里底等保家騰母があるから、ヲシケドモと訓んでもいいであらう（攷證・講義參考）。隱比來者は、舊訓カクロヒクレバであつたのを、古義でカクロヒキツツと訓んだ。カクロヒといふ例は、卷三（三一七）に、度日之陰毛隱比照月乃光毛不見。卷十（一九八〇）に、霍公鳥隱合時爾逢有公鴨。卷十一（二六六八）に、二上爾隱經月之雖惜等がある。ここのバは、條件を示すのでなくて同時に起る事を下に云つて、と共に、さうしてゐるといふやうな意味に使ふのである（講義）。來者は行者と同じやうな意味で、卷一（七〇）の、倭爾者鳴而歟來良武は鳴而行良武の意味だといふのと同じで、ただ語感が違ふのである。卷十（一九三七）に、明來者柘之左枝爾。卷十五（三六二五）に、安氣久禮婆於伎爾奈都

佐布。同卷(三七一六)に、安麻久毛能多由多比久禮婆等いろいろある。

○天傳・入日刺奴禮　アマヅタフ・イリヒサシヌレと訓む。天傳ふ(枕詞)入日の光差しぬればといふ意。卷三(四六〇)に、晩闇跡隱益去禮將言爲便將爲須敝不知爾。同卷(四七五)に、久堅乃天所知奴禮展轉埿打雖泣將爲須便毛奈思。卷五(九〇四)に、靈剋伊乃知多延奴禮立乎杼利。同卷(七九四)に、宇知那比枳許夜斯努禮伊波牟須弊等がある。宣長の詞玉緒に、これは、『長歌のなかばに在て、事の他へ轉る際にいふ一つの格にて、下へばを加へて、れば、せばと見ればよく聞ゆるなり』といひ、井上博士の新考には、『ヌレはヌレバの略にはあらず、一つの辭にてヌルニ又はヌレバといふに當れり』と云つてゐる。その根源はいづれでも、ヌレバの意に落著く。なほこの語法は、(一九九)の條にも説いた。バ或はドのある例は、卷二(一八八)に、旦覆日之入去者。卷四(六一六)に、君爾不相而年之經去禮者。卷十五(三六〇四)に、妹我素弖和可禮弖比左爾奈里奴禮杼等がある。

○大夫跡・念有吾毛　マスラヲト・オモヘルワレモと訓む。丈夫と自ら思つてゐる吾もといふ意で、このマスラヲの使ひざまも種々の語感があるやうである。此處は強い男のつもりの自分もぐらゐの意であらう。卷一(五)に、大夫登念有我母草枕客爾之有者。卷二(一一七)に、大夫哉片戀將爲跡嘆友鬼乃益卜雄尙戀二家里。卷十(一九三七)に、大夫之出立向故郷之神名備山爾。卷十二(二八七五)

に、天地爾小不至大夫跡思之吾耶等があり、少しづつ感じが違ふ。

○敷妙乃。衣袖者・通而沾奴　シキタヘノ・コロモノソデハ・トホリテヌレヌと訓む。敷妙の枕詞衣の袖は涙のために通りて沾れぬといふ意。卷七〔一一八六〕に、海未通女等之袖通沾西衣。卷十〔二三一七〕に、袖副沾而可通將落雪之。卷十一〔二五四九〕に、敷妙木枕通而袖副所沾。卷十三〔三三五八〕に、吾衣袖裳通手沾沼。卷十五〔三七一一〕に、和我袖波多毛登等保里弖奴禮奴等母。卷十九〔四一五六〕に、服之欄毛等寶利氐濃禮奴等の例がある。

大意　〔角鄣經〕石見の海の〔言佐敝久〕辛の埼工くの伊久里即ち海中の巖には深海松が生えて居る。また、其處の荒磯には玉藻が生えて居る。〔玉藻成〕その玉藻が浪に靡くが如くに、自分に靡いて來て共に親しみ寢た妻をば、〔深海松乃〕深く心に思ふけれども、共に寢た夜は未だ幾夜でもないのに、このたび上京することとなつて、〔延都多乃〕別れて來ると、〔肝向〕心が痛く悲しく、妻の方を幾たびも振返つて見るが、〔大舟之〕渡の山の黄葉が散り亂れるのにまぎれて、吾を見おくる妻の振る袖も見えず、〔嬬隱有〕屋上の山の雲間を通り照つた月が移りつつまた隱れる如くに、いかにも惜しいが、妻の居る方も見えなくなつて來れば、そのうちに〔天傳〕日も西に傾いて入日がさすやうになつた。さうすれば、益々悲しくなつて、丈夫だとおもふ吾も、涙が流れて、〔敷妙乃〕衣の袖も

透つて沾れた。

【鑑賞】この長歌は前の長歌と同じ動機で作つたものだが、幾らか模樣を變へて居る。これはただ趣味的・詩的に變へたのでなくて、作者自身になつて見れば、いろいろの事が云ひたかつたに相違ない。併し長歌には長歌の體があつて、さう濫りに詰込むわけにも行かぬから、二首にして云ひ方を變へたものであらう。かういふ作歌の爲方を人麿は愛妻の挽歌の場合にも實行してゐる。妻の死を悲しんだ時にも二首も作つてゐるのは大に興味ある點で、人麿は決して申訣に作歌するやうな歌人でなかつたことを證據だてて居るのである。

前の歌は、いろいろと戀しい妻の形容をして來て、『夏草のおもひ萎えてしぬぶらむ妹が門見む靡けこの山』で止めてゐるが、この歌も戀しい妻の來歴をいひ、共に寢てからいくらにもならずに別れて來て、もう見ることが出來ないほどに遠く離れてしまつた。そこで、『丈夫とおもへる吾も敷妙の衣の袖は通りて沾れぬ』で止めて居る。同じく切實な氣持を表はしてゐるのだが、云ひ方が違つてゐる點が參考になるのである。前の歌では、『より寢し妹』をいふために形容澤山に骨折つて居り、この歌では、やはり、『靡き寢し子』と云つてゐるが、『さ寢し夜は幾だもあらず』のところに力を入れて前の歌よりも細かくなつてゐる。前の歌で、『露霜の置きてし來れば』といへば、この歌で

は、『はふ蔦の別れし來れば』と云つて居る。前の歌では、『此道の八十隈毎に』で濟ませてゐるが、此歌では、渡の山だの屋上の山だの月だの夕日だのといろいろ云つてゐる。前の歌は單純で樣式化圖案化が遂げられてゐるが、この方はいまだ寫實の趣がその特徴をなしてゐる。

そして、これは前の歌の場合もさうであつたが、實際の地名を咏込みながら、道中の經過をも示して居りながら、それをば一つの主觀のうちに溶け込ませてゐる點と、繰返しや枕詞使用の連續によつて一種の聲調を倣しつつ、寫實ともつかず單なる主觀ともつかぬ一つの渾厚な統一體を提供して吳れて居るのである。

この歌の內容は、單純化すれば、『靡き寐し子を、ふかめて念へど、さねし夜はいくだもあらず、別れし來れば、心を痛み、念ひつつ顧みすれど、妹が袖さやにも見えず、かくろひくれば、丈夫とおもへるわれも、衣の袖は通りて沾れぬ』に歸著する。それをいろいろに形容を附して複雜にしてゐる。やはり單器樂でなく交響樂の趣である。

前の歌の、『靡けこの山』にせよ、『敷妙の衣の袖は通りて沾れぬ』にせよ、現代の五十歲を過ぎた吾等にはもはや稍誇張に響くことを免れないが、人麿の心境は映畫などで見るまざまざとした歐羅巴男女の所做に似た點があり、支那山水畫などの幽淡靜寂趣味では律せられないものが存じてゐる

ことを感得せねばならぬのである。かういふ點で遊仙窟的と謂へば謂へるが、その遊仙窟の單なる模倣でないことは既に前言したごとくである。

この歌も波動的に進漸する連續聲調で、大休止といふものが無いのである。併し前の歌で一つの形態を想像したから、この歌をもその形態を想像するならば次の如くであらうか。

つぬさはふ　いはみのうみの　ことさへぐ　からのさきなる
いくりにぞ　ふかみるおふる
ありそにぞ　たまもはおふる
たまもなす　なびきねしこを
ふかみるの　ふかめてもへど
さねしよは　いくだもあらず
はふつたの　わかれしくれば
きもむかふ　こころをいたみ
おもひつつ　かへりみすれど
おほふねの　わたりのやまの
もみぢばの　ちりのまがひに
いもがそで　さやにもみえず

つまごもる　やがみのやまの
くもまより　わたらふつきの
をしけども　かくろひくれば
あまづたふ　いりひさしぬれ
ますらをと　おもへるわれも
しきたへの　ころものそでは
とほりてぬれぬ

この歌の方は、前の歌に見るやうな對句らしい對句は、『いくりにぞ深海松おふる、荒磯にぞ玉藻はおふる』だけである。その他は、對句的傾向を示してゐるが純粹の對句ではない。『玉藻なす靡き寐し子を、深海松の深めて思へど』の如きが卽ちそれである。また、直接的對句でなく句を隔てて對句的になつて居るのがある。例へば、『わかれしくれば』、『かくろひくれば』の如き、『ふかめてもへど』、『かへりみすれど』の如き、『いくだもあらず』、『さやにも見えず』の如き、『わたりの山の』、『やがみの山の』の如き、句を隔てたものである。それから、『はふつたの別れしくれば、肝むかふ心をいたみ』のところの、『ば』、『み』の具合なども、繰返しの傾向があつて變化を試みてゐるのである。この歌が前の歌と右の如き差別があるといふことが、やがて前の歌よりも内容が細か

く感せしめ、寫實的要素の多いことをおもはしめる所以でもある。

この歌にも枕詞が十ばかりある。純粋の枕詞でなく、枕詞的使用法のも勘定してさうである。また、この歌の中の取立てて注意すべき句といふのは、『さねし夜はいくだもあらず』と、『あまづたふ入日さしぬれ』であらう。そしてその使ひざま、前後句との關係については、流石に人麿らしい特色を感せしめるものがある。『丈夫とおもへるわれも』といふやうないひ方は現代の吾等には直ぐそのまま受納れがたくなつてゐるが、當時にあつては、マスラヲといふ語感が何か新鮮な肉體感を具備して居つて、いろいろ微妙な人間の感情と相關聯せしめることが出來たもののやうである。

さて、この歌は、どの邊の光景であるかといふに、短歌にあるやうに、『青駒の足掻を速み』であるから或場所から黒色の馬に乘つたことが分かる。それから季節は前の歌と同じく黄葉の散り亂れる頃で、それから江ノ川を渡つて、今の渡津・淺利あたりを過ぎ、屋上の山卽ち高仙山が歌はれて居り、辛埼が現在の宅野村韓島邊の埼だとせば、そのあたりをも過ぎて、愚見では東に道をとり、（若しカラノサキが國府近くの唐金近くの埼だとせばもつと南方から東へ折れる）或は現在の粕淵・濱原あたりで一夜を明かして作つた趣のものではないかと想像せられる。入日が差して來る趣が歌はれて居り、月光の事が前後して單に言語の綾に過ぎぬやうに用ゐられてゐるが、これも實際月が照つてゐたので材料としたやうにも思はれる。また、

短歌の方の『笹の葉はみ山もさやに』の歌に就き、古は石見の山の笹の多かつたことを記してゐるが、今でも大田・粕淵間の湯抱(ゆかかへ)あたりの山でその趣を見ることが出來る。これに反して出雲路へ向ふ汽車沿道では、現在はさういふ趣を見ることが出來ない。人麿時代と現在とでは無論同一でないが、天然物の模樣はそんなに變るものでなく、高角山の島星山は千五百年の年月などで犯されることなくあのやうに聳えてゐるのを見れば、笹と雖大體同一論法に入れることが出來るのである。橘守部は、『國府を立ちて、邇磨(摩)郡・安濃郡を歴て、出雲路の方へ出て上るべきなれば、今那賀郡江(ゴウ)の河近邊に八神(ヤカミ)村あり、道のつゞきに山も多かれば、此處とすべし。さて地理に就きて考ふるに、此歌も、上の歌と同じ府を立ちし日によみたるなり。もし其夜旅宿などにて、思ひ續け給ひけんとも猶其日の事を今一日(首(?))よまれしなり』(檜嬬手)と云つてゐて、出雲路を通過せしめてゐるのは從來の諸說に同じいが、旅の第一日の旅泊で作歌した趣に解してゐるのは面白い。それから、歌でみると、隨分遠くに來たやうに歌つてゐるが、よく吟味するとさう遠くなく、國府或は角の里から十四五里位の氣持だといふことが分かる。その點もまた面白い。

序に云。契沖が、屋上(やがみ)の山(やま)に就て考へたとき、『やがみといふ所の備前にありといへばそこにや』(代匠記初)『或者ニ尋ルニ、備前赤坂郡ニ、八上ト云所有ト申キ。此ニ依テ和名ヲ考ルニ、ケニモ赤

坂郡ニ宅美（ヤカ）アリ。流布ノ本、注ヲ失ヘル故ニ、初ハエヨマズ侍リキ。カヽレバ備後備前海路ノ次ナリ』（代匠記精）と云つてゐるが、契沖はヤガミを備前の地名と看做してゐるから、人麿上來の道筋を出雲へ取らせずに、備後備前海路と考へてゐる。契沖が驛路の制を無視する筈はないのになほこの道筋を想像したのは甚だ興味あることで、おのづから私の説を支持する一説となつて居るのである。

辛崎追補　辛崎は今まで邇摩郡宅野（タクノ）の海岸といふことになつてゐたが、私は、此歌の構造から見て宅野の海岸とすると少し北方に片寄り過ぎるやうにおもひ、今の唐鐘の浦（床の浦）あたりだらうと考へたことと上の如くであるが、この考は私よりも先きに既に考へついた人がある。それは石見八重葎の中の、小篠大記の説であつて、『辛ノ崎ハ、今ノ唐鐘ナランカ。唐ノ嶺ナド云シヲ訛（ヨコナマリ）シテ唐鐘ト云ヘルナランカ。古ヘヨリ山陰道ノ往來ノ道ノ濱邊ナリ。伊久里ハ日本書紀應神天皇ノ卷ニ白羅海中ノ石ト云ヿ古來ヨリ傳ヘナレバ、辛ノ崎ノ伊久里ハ今ノ唐鐘浦ノ千疊敷トイヘル岩ナリ。是ナランカ。千疊敷ハ又ハ疊ケ浦トモ云。皆俗稱ナリ』といふのである。これで見ると元祿年間の槃游餘錄の影響のやうにも思はれるが、小篠大記は石見の學者だから必ずしもさうではあるまい。また八重葎の成つた文化十四年頃までには唐嶺（カラノミネ）に類した名の山のあつたことが想像せられ、從つて槃游餘錄の唐山（カラノヤマ）もその名が確かにあつただらうと推測し得るのである。此は愚案を支持するのに大切な

資料だから追補した。

参考　巻五（八〇四）の山上憶良の歌の中に、『さ寝し夜の幾許もあらねば』といふのがある。これも人麿の歌の影響と考へて悪いかどうか。巻十（二〇二三）の、『さ宿そめて幾何もあらねば白妙の帯乞ふべしや戀もすぎねば』といふのはやはり人麿歌集より出でたものである。

反歌二首

【一三六】青駒之　足掻乎速　雲居曾　妹之當乎　過而來計類　一云。當者隱來計留

【一三七】秋山爾　落黄葉　須臾者　勿散亂曾　妹之當將見　一云。知里勿亂曾

右九〇頁、九四頁に評釋した。

○

【巻二・一三八】

石見の海　津の浦をなみ　浦無しと　人こそ見らめ　潟無しと　人こそ見らめ　よしゑやし　浦は無くとも　よしゑやし　潟は無くとも　勇魚取り　海邊を指して　柔田津の　荒礒の上に　か青なる　玉藻奥つ藻　明け來れば　浪こそ來寄れ　夕されば　風こそ來寄れ　浪の共　彼寄り此寄る　玉藻なす　靡き吾が寝し　敷妙の　妹が袂を　露霜の　置きてし來れば　この道の　八十隈ごとに　萬度　かへりみすれど　いや遠に　里放り來ぬ　いや高に　山も越え來ぬ　愛しきやし　吾が嬬の兒が　夏くさの　思ひ萎えて　嘆くらむ　角の里見む　靡けこの山

石見之海　津乃浦乎無美　浦無跡　人社見良目　滷無跡　人社見良目
吉咲八師　浦者雖無　縱惠夜思　滷者雖無　勇魚取　海邊乎指而　柔
田津乃　荒礒之上爾　蚊青生　玉藻息都藻　明來者　浪己曾來依　夕
去者　風己曾來依　浪之共　彼依此依　玉藻成　靡吾宿之　敷妙之
妹之手本乎　露霜乃　置而之來者　此道之　八十隈毎　萬段　顧雖爲
彌遠爾　里放來奴　益高爾　山毛越來奴　早敷屋師　吾嬬乃兒我　夏
草乃　思志萎而　將嘆　角里將見　靡此山

この歌は前の歌（一三一）と大體同じく、句がところどころ違つて居るだけである。『或本歌』とある如く、萬葉編纂のとき、かういふ傳本もあつたのを、丁寧にその儘保存したものである。それだから、人麿が石見から上來する時の歌でも數種の本を參考したといふことが分かるから、當時既に幾つも書寫され、或は口誦によつて傳へられてゐたと考へることが出來る。

一三一の歌

石見乃海・角乃浦囘乎

一三八の歌

石見之海・津乃浦乎無美

和多豆乃・荒礒乃上爾
朝羽振・風社依米・夕羽振・浪社來緣
玉藻成・依宿之妹乎 一云、波之伎余思妹之手本乎
益高爾・山毛越來奴・夏草之念之奈要而

柔田津乃・荒礒之上爾
明來者・浪己曾來依・夕去者・風己曾來依
靡吾宿之・敷妙之・妹之手本乎
益高爾・山毛越來奴・早敷屋師・吾嬬乃兒我・夏草乃・思志萎而

右の如くであるが、左註に、『右歌體雖同句句相替因此重載』とあるとほり、萬葉の編纂者は丁寧にこの異本の歌を保存してゐるのは、好い態度であるが、作歌手本として看る吾等の態度からすれば、この異本は惡本だといふことが分かる。前の歌（一三一）と比較して、なかなか劣つて居り、意味も分かり易く常識的に直してあり、當時既にかういふ狀態で流傳せられたとせば、一云。或は或本歌といふのは、作者が二通りにも三通りにも作つて傳へたといふよりも、筆寫或は口誦流傳の際に間違つた場合の方が多いと看做さねばならぬ。さう考へて來れば、萬葉集の研究に、眞淵の如き態度に出るのも亦一方嚮であつて、一言にしてそれを批難し否定するやうでは、決して萬葉學は進步し得ない。恰も好い實例に逢著したから、愚見の一端を吐露し置くのである。

〇津乃浦乎無美　ツノウラヲナミと訓むより途はないが、考で、『こは津能乃浦囘乎の能と囘を落し、無美はまぎれてこゝに入たる也』と云つたのは流石に卓見である。檜嬬手・古義も亦それに從

ひ、眞淵の態度を常に批難してゐる美夫君志でも、『しかなるべし』と云つた。文獻學的には時に斯る句を保存して置いてもいいが、歌として味ふ時には、この儘では意味をなさない。契沖が、『上ニ角乃浦回ト云所ノ名ニハアラデ、大舟ナドアマタ泊ル浦トナル浦ノナシト云心ナルベシ。若然ラズバツノ浦ヲナミト云コト不審ナリ』と云つて、不審をいだいたのは當然と謂ふべきである。

○柔田津乃・荒礒之上爾　ニギタヅノ・アリソノウヘニと訓む。このニギタヅも、原作の和多津（ワタヅ）をば、地理を知らぬ流傳者が卷一（八）の熟田津（ニギタヅ）などの聯想からニギタヅと訓んだものらしく、實際に和田津（ワタヅ）（渡津）がある以上は、この柔田津（ニギタヅ）は棄てる方がいい。地理を知らない者の證には、角（つぬ）の浦を直ちに間違へて、ただ津乃（つの）などとしてゐるのでも明かである。新考に、『柔田津は底本の和多豆に當れり。されば底本の和多豆は之と相照してなほニギタヅとよむべきかといふにおそらくは和多豆をニギタヅと誤り訓みて柔田津と書きたるならむ』と云ひ、講義も、『和をニギとよむによりて卷一の地名に附會して後人の書き改めしものなるべくして人麿の原本にはあらざるべし』と云つてゐるのは正しいと思ふ。

○明來者・浪己曾來依・夕去者・風己曾來依　アケクレバ・ナミコソキヨレ・ユフサレバ・カゼコソキヨレと訓む。卷二（一五九）に、八隅知之（ヤスミシシ）我大王之（ワガオホキミノ）暮去者（ユフサレバ）召賜良之（メシタマフラシ）明來者（アケクレバ）問賜良之（トヒタマフラシ）。卷六（九一

三)に、開來者朝霧立夕去者川津鳴奈辨。卷十(一九三七)に、明來者柘之左枝爾暮去者小松之若末爾。卷十五(三六二五)に、由布佐禮婆安之敝爾佐和伎安氣久禮婆於伎爾奈都佐布。卷十九(四一一七)に、曉來者出立向暮去者振放見都追等の例があつて、萬葉では對句的に多く用ゐられてゐる。それだけ平易に常識的になつてゐるので　朝羽振風社依米・夕羽振浪社來緣には到底及ばない。人麿が苦心をして使つた歌句を、傳へるものが平凡に直して傳へるのだから、その間の消息をば吾人はもつと重大に考へる必要があるのである。卽ち、傳へるものはなるべく記憶し易いやうに、傳へる者等が自身に卽して傳へたい傾向を有つものだといふことを知らねばならぬのである。なほ、クルとユクとの問題だが、卷七(一一九八)に、曉去者濱風寒彌。卷十三(三三一二)に、野干玉之夜者昶去奴等があつて參考になる。

○靡吾宿之・敷妙之・妹之手本乎　ナビキワガネシ・シキタヘノ・イモガタモトヲと訓む。靡き吾が寐し敷妙の妹が袂であるが、言葉がたどたどしてゐて、まづいこと甚だしく、到底玉藻成・依宿之妹乎の簡淨なる句には及びもつかない。特に『妹之手本乎』といふ句は、『一云、妹之手本乎』から取つて來たものらしく、前の歌は、『寄り寐し妹を』とただ妹と云つてゐるのに、妹が袂をといふ餘計なものを取つてゐるあたりは一段の通俗化をしてゐるのである。

○早敷屋師・吾嬬乃兒我　ハシキヤシ・ワガツマノコガと訓む。卷七（一三五八）に、波之吉也思吾家乃毛桃。卷十二（三一四〇）に、波之寸八師志賀在戀爾毛。卷三（四五四）に、愛八師榮之君乃伊座勢波。卷八（一六一九）に、愛哉師妹乎相見爾。卷十一（二三六九）に、早敷八四公目尙欲嘆等がある。

反　歌

【一三九】石見之海　打歌山乃　木際從　吾振袖乎　妹將見香

右歌體雖同句句相替因此重載

右九八頁に評釋した。

この反歌の方に、『打歌山乃』とあつて、諸寫本皆さうであり、ウツタノヤマノと訓み、代匠記初稿本で、『長門より石見へ濱つたひに行道に、長門のうちに、うたといふ所あるよし申き。そこなどにもや侍らん』と云ひ、童蒙抄で『うつうた山ともよまんか。いまだ不ㇾ考』などと云つたのを、考で、『此打歌は假字にて、次に角か津乃などの字落し事、上の反哥もて知べし。今本にうつたの山と訓しは人わらへ也』と云ひ、諸書これに從ひ、美夫君志も、『必角ノ字ありしなるべし』といひ、

新考も、『打歌(タカ)の下に都濃(ツヌ)をおとしたるか』と云つて眞淵に從つて居る。また古義では『打歌』は『竹綱』の草書を見まがへたとしてタカツヌヤマと訓ませたのは結果は同じである。ただ講義では、『諸說皆得心しがたし。强ひて說を立てても今の分にては明かにあらぬ事なれば、そのままにて姑く舊訓に從ひおくべし』と云つてゐる。

○

【一四〇】勿念跡(ナオモヒト)　君者(キミハ)雖言(イフトモ)　相時(アハムトキ)　何時(イツ)跡(ト)知而加(シリテカ)　吾(ワガ)不戀有牟(コヒザラム)

この依羅娘子の柿本朝臣人麿妻依羅娘子與人麿相別歌一首、『勿念跡君者雖言』の歌につき、童蒙抄で、『これは人丸何方へぞ任におもむきしとき、わかれをかなしみて、妻のよめるなるべし。尤此時は倭にすめる妻ならん』といひ、『任國などのわかれならば、先は六年の間は相別れんこと、人の生死ははかりがたければ、如レ此いつとしりてかとはよめるなるべし』といひ、考には、『こは右の假(カリ)に上りて又石見へ下る時、京に置たる妻のよめるなるべし。かのかりに上る時石見の妹がよめる哥ならんと思ふ人のあるべけれど、さいひては前後かなはぬ事あり』といひ、檜嬬手・攷證・古義・

美夫君志・註疏・新考・新講・新釋・全釋等それに從つてゐる。然るに講義・新解等は、この石見で別れた妻が卽ち依羅娘子だとし私もそれに從つてゐる。講義には、『これは上の歌のつづきに置けるによりて、なほ石見國に留り殘れる妻の歌とせざるべからず。』『その歌の趣にてはその墓地を明かに見知りての詠と思はるれば、この依羅娘子が石見に在りしことを思ふべきなり。』『上に人麿の妻に別れてよめる歌をあげたるに對して、ここにその妻の詠をもあげたるなり』と云つてゐる。なほ依羅娘子に就いては總論篇にも述べて置いた。

【巻二・一六七】

天地の　初の時し　ひさかたの　天の河原に　八百萬　千萬神の　神集ひ　集ひ坐して　神分り　分りし時に　天照らす　日孁尊一に云ふ、さしのぼる日女の命　天をば　知らしめすと　葦原の　瑞穂の國を　天地の　依り合ひの極　知らしめす　神の命と　天雲の　八重かき別きて一に云ふ、天雲の八重雲別きて　神下し　坐せまつりし　高照らす　日の皇子は　飛鳥の　淨の宮に　神ながら　太敷きまして　天皇の　敷きます國と　天の原　岩戸を開き　神上り　上り坐しぬ一に云ふ、神登りいましにしかば　わが大君　皇子の命の　天の下　知らしめしせば　春花の　貴からむと　望月の　滿はしけむと　天の下一に云ふ、食國　四方の人の　大船の　思ひ憑みて　天つ水　仰ぎて待つに　いかさまに　思ほしめせか　由縁もなき　眞弓の岡に　宮柱　太敷きまし　御

○

殿を　高知りまして　朝ごとに　御言問はさず　日月の　數多くなり
ぬる　そこ故に　皇子の宮人　行方知らずも（一に云ふ、さす竹の皇子の宮人ゆくへ知らにす）

天地之　初時之　久堅之　天河原爾　八百萬　千萬神之　神集　集座
而　神分　分之時爾　天照　日女之命（一云指上日女之命）　天乎波　所知食登　葦
原乃　水穗之國乎　天地之　依相之極　所知行　神之命等　天雲之
八重掻別而（一云天雲之八重雲別而）　神下　座奉之　高照　日之皇子波　飛鳥之　淨之
宮爾　神隨　太布座而　天皇之　敷座國等　天原　石門乎開　神上
上座奴（一云神登座尒之可婆）　吾王　皇子之命乃　天下　所知食世者　春花之　貴在
等　望月乃　滿波之計武跡　天下（一云食國）　四方之人乃　大船之　思憑而
天水　仰而待爾　何方爾　御念食可　由縁母無　眞弓乃崗爾　宮柱
太布座　御在香乎　高知座而　明言爾　御言不御問　日月之　數多成
塗　其故　皇子之宮人　行方不知毛（一云刺竹之皇子宮人歸邊不知爾爲）

題意 日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌といふ中の長歌である。題意は既に短歌評釋の時にも記述したが、此處でも簡單に云ふと、日並皇子尊(ひなみしのみこのみこと)は卽ち草壁皇太子。天武天皇第一皇子。文武天皇(輕皇子)の御父。天智天皇元年御出生。天武天皇十年二月皇太子。持統朱鳥三年四月乙未(十三日)薨去、御年二十八。日並皇子といふ御名は書紀になく、續紀文武天皇の卷に日並知皇子尊とある。これは御謚で、すでに持統天皇の御世に奉られたものである(伴信友、長等の山風附錄)。殯宮はアラキノミヤ或はオホアラキと訓む。殯宮之時といふのは御喪之時の意味で崩御又は薨去後、本葬を營むまで姑く喪屋に斂めて、朝夕饌を供へ又は近臣の仕侍する間で、上代は一周年の期間であつたのが漸々期間が短くなつた。この歌の頃は期間が短かつたのであらう。眞淵は、その頃は既に天皇以外の葬には殯宮は無かつただらうと云つてゐるが(考頭注)、宣長は必ずしもさうでなく、萬葉に殯宮時とあるのを見ると縱ひ特別の宮は立てられなくとも殯宮がなかつたとは云ひ難いと云つてゐる(古事記傳)。ただ期間が短く場處も葬處と一處になつてゐただらう。それゆゑ、墓所と殯宮と一處になつてゐるのである(美夫君志別記參考)。

語釋 **○天地之・初時之** アメツチノ・ハジメノトキシと訓む。天地開闢の時に當つての意

古事記に、天地初發之時とあり、萬葉にも、卷十九（四二一四）に、天地之初時從。卷十（二〇八九）に、乾坤之初時從等があり、また假名でアメツチと續けて書いた例には、卷十五（三七四〇）に、安米都知能可未奈伎毛能爾。同卷（三七五〇）に、安米都知乃曾許比能宇良爾。卷二十（四四九九）に、安米都知乃可未乎許比能美。卷五（八一四）に、阿米都知能等母爾比佐斯久等があり、なほ卷十三（三二八八）に、玄黃之神祇二衣吾祈等がある。初時之は、舊訓ハジメノトキシ。考ハジメノトキノ。玉の小琴ハジメノトキシで（『時之は本の儘に訓べし。トキノと訓はわろし。』）、諸書宣長に從つたが、講義は眞淵訓を認容し、これは下へ續く句法で、卷二（一六一）に、向南山陣雲之青雲之。卷三（三七二）に、春日山乃高座之御笠山爾。卷十三（三三二九）に、白雲之棚曳國之青雲之向伏國乃。同卷（三三三一）に、走出之宜山之出立之妙山叙などの例と同樣だとした。それから、古鈔本中（神・類・金・）には『之』がなく、ハジメシトキ（神）ハジメノトキ（西）の訓があるので、新訓・澤瀉新釋等はハジメノトキと訓んでゐる。

○**久堅之・天河原爾**　ヒサカタノ・アマノカハラニと訓む。久堅之枕詞天の河原にの意。この枕詞は既に記したが、久しく堅しといふ說（契沖・春滿）。匏形說（眞淵）。日刺す方說（久老）。日離る方說（藤原武良由）。提勝間之說（雅澄）日擴り騷ぐ方說（高橋殘夢）等の說がある。天河原爾はアメと云はずにアマといつてゐるのは習慣で、萬葉卷十五（三六五八）に、安麻能我波とある。卷十八（四一二六）に、安麻能我波波志和

多世良波。巻二十（四三〇八）に、安麻乃可波弊奈里爾家良之。同巻（四三一〇）に、安麻能河波伊之奈彌於可婆等の例がある。

○**八百萬・千萬神之**　ヤホヨロヅ・チヨロヅガミノと訓む。多くの神々のといふ意。古事記にも、八百萬神共咲とあり、鎭火祭祝詞にも、八百萬神等乎生給比氐。萬葉巻六（一〇四七）にも、天下所知座跡八百萬千年矣兼而定家牟といふ例がある。

○**神集・集座而**　カムツドヒ・ツドヒイマシテと訓む。諸神が神集をし給うての意。舊訓カミアツメアツメイマシテであるのを、代匠記精でカムツドヘニツドヘイマシテと訓み、考でカムツマリツマリイマシと訓んだが、玉の小琴に、『此神集の集は古事記に、都度比と訓註あれば動かぬ言也』といひ、略解・檜嬬手・古義・攷證等皆カムツドヒツドヒイマシテと訓んだ。古事記上巻に、是以八百萬神、於天安之河原、神集集而（訓集云都度比）高御産巣日神之子思金神云々とある。ツドヒは四段自動詞、ツドヘは下二段他動詞である。此處は自動詞の場合である。萬葉巻二十（四三二九）に、夜蘇久爾波那爾波爾都度比。同巻（四三八一）に、具爾具爾乃佐伎毛利都度比等とある。他動詞の例は大祓祝詞に、『八百萬神等乎神集集賜比』。萬葉巻三（四七八）に、八十伴男乎召集聚率比賜比とある如きである。

○神分・分之時爾　カムハカリ・ハカリシトキニと訓む。神の議を議り給うた時にの意。此處の句、舊訓カムハカリハカリシトキニ。代匠記カムハカリニハカリシトキニ。カムワカチニソカチシトキニ。童蒙抄カンクバリクバリシトキニ（伴信友・新考同說）。古義カムアガチアガチシトキニ（新訓同訓）等の諸訓がある。檜嬬手・攷證・美夫君志等カムハカリハカリシトキニと訓み、字鏡集に、『分』をハカルと訓んだ例を引いて居る。『分』は分別する、判定する、議する等の意で、ハカルと訓んだものであらう。古事記上卷に、八百萬神議。大殿祭祝詞に、以天津御量氏事問之磐根木根立。大祓祝詞に、神議議賜氏、我皇御孫命波。遷却祟神祭祝詞に、神攘攘平氣武止、神議議給時爾、諸神等皆量申久等とある。『神分々之時爾モ、カムハカリニハカリシトキニトヨムベシ。（中略）今按、分ノ字、々書ニ別也判也トアリテ議也トイハザレバ、カムワカチニワカチシ時ニト點ヲ改タムベキカ。但分別シテ議定スレバ、往テハ同ジ心カ』（代匠記精）。『某々の神は某々の地を所知めせと差班ち配り賜へるこゝろなり。六卷藤原宇合卿遣二西海道節度使一之時の歌に、山乃曾伎野之衣寸見世常伴部乎班遣之云々、とある班に同じ』（古義）。

○天照・日女之命（一云指上日女之命）　アマテラス・ヒルメノミコトと訓む。天照らす日霎の命即ち天照大神を申奉る。テラスはテルの敬語。日女之命は舊訓ヒナメノミコトであつたのを代匠記でヒルメノミ

コトと改めた。日をヒルと云ふは、夜をヨルといふのと同じだと講義で云つて居る。書紀神代卷に、於是共生二日神一、號二大日孁貴一。大日孁貴、云二於保比屢咩能武智一、孁音力丁反、一書云、天照大神、一書云、天照大日孁尊 此子光華明彩、照二徹於六合之内一云々。**〇一云。指上・日女之命**　サシノボル・ヒルメノミコトと訓む。意同じ、タカテラスとサシノボルとの差別であるが、この方が通俗化して居る。

〇天乎波・所知食登　アメヲバ・シラシメストと訓む。天をば卽ち高天原をば支配し給ふとての意。天乎波は、舊訓アマツヲバ。童蒙抄ミソラヲバ。考アメヲバ。古義アメヲバ。所知食登は、舊訓シロシメサムト。考シロシメシヌト。玉の小琴シロシメスト（檜嬬手・古義・美夫君志・新考等）。講義シラシメスト。萬葉卷十八（四〇九四）に、之良志賣之家流。卷二十（四三六〇）に、之良志賣之伎等。古事記上卷に、其御頸珠之、玉緒母由良邇、取由良迦志而、賜二天照大御神一而詔之、汝命者所二知高天原一矣、事依而賜也。故其御頸珠名謂二御倉板擧之神一。次詔二月讀命一、汝命者、所二知夜之食國一矣、事依也。次詔二建速須佐之男命一、汝命者、所二知海原一矣、事依也云々とある。トといふ助詞はトテといふ意味で、萬葉卷一（八）に、熟田津爾船乘世武登。同卷（一三）に、高山波雲根火雄男志等。同卷（五〇）に、食國乎賣之賜牟登等の例がある。

〇葦原乃・水穗之國乎　アシハラノ・ミヅホノクニヲと訓む。この日本の國をといふ意で、古事

記上卷に、天照大御神之命以、豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者、我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知國、言因賜而、天降也云々とある、この水穗は瑞穗の借字で、肥饒豐富の國土には稻麻、竹葦の類が繁茂してゐるので、葦原と冠せたものであらう。契沖は、『天地開闢の初め、物しも多かる中に、其狀葦牙の如くなる物の生て、すなはち國常立尊と云神となれるは、我朝の濫觴なれば、葦原の名は是を根とする歟』(代匠記)といひ、宣長は、高天原から國土を見おろすと、葦原の繁茂してゐるやうに見えるから、かく冠らせたのである、卽ち、『大御國の號にして、もと天神の御代に、高天原より云る號なり』(古事記傳)と云つて居る。萬葉卷十八(四〇九四)に、葦原能美豆保國乎安麻久太利之良志賣之家流須賣呂伎能の例がある。

○天地之・依相之極　アメツチノ・ヨリアヒノキハミと訓む。天と地と二たび合ふ極限まで、卽ち無窮時までの意。舊訓ヨリアヒノカギリであつたのを、管見・代匠記でヨリアヒノキハミと訓んだ。萬葉卷一(五〇)に、天地毛緣而有許曾。卷六(一〇四七)に、天地乃依會限萬世丹榮將往迹。卷十一(二七八七)に、天地之依相極玉緖之不絕常念の例がある。代匠記に、『天ハ地ヲツ、メバハテハ依相ナリ』とあり、考に、『既天地の開分れしてふに對へて、又より合ん限りまでといひて、久しきためしにとりぬ』とある。契沖のは、天と地と相依る光景上からの解釋であり、眞淵のは、天と

地と分かれた天地創造のことを念として解いて居るのであるが、つき詰めれば、天地創造の思想も地平線光景の實際に本づくのだから、この二つの解釋は同一に歸著するのである。

○所知行・神之命等　シラシメス・カミノミコトと訓む。無窮の皇位にまします神としての意。天孫瓊々杵命を申しあげる。舊訓シラシメス。考シロシメス。玉の小琴シロシメセ。『所知行は、シロシメセと訓も宜しかるべし。命等の等は、八百萬神の議りてかくの如く定めたる由也、上の所知食登と云る、登とは意異也』（玉の小琴）。併し此處は、シラシメスと連續句にすべきところである。

○天雲之・八重搔別而（一云天雲之八重雲別而）　アマグモノ・ヤヘカキワキテ（一云、アマグモノヤヘグモワキテ）と訓む。天の雲の幾重にも重なつてゐる雲をかき分けての意。古事記上卷に、押二分天之八重多那雲一而、伊都能知和岐知和岐弖、於二天浮橋一宇岐士摩理蘇理多々斯弖、天二降坐于竺紫日向之高千穗之久士布流多氣一云々。書紀神代卷下に、且排二分天八重雲一云々。大祓祝詞に、天之八重雲乎、伊頭乃千別爾千別弖、云々。萬葉卷二（二〇五）に、天雲之五百重之下爾。卷十一（二六五八）に、天雲之八重雲隱等の例がある。別而をワキテと訓んだのは以上の例にあるごとく、四段活用の動詞としたためで、新考・全釋・新訓・新解・總釋等同訓である。

○神下・座奉之　カムクダシ・イマセマツリシと訓む。神（天孫瓊々杵命）をば此の國土に下しお

かせ給うたの意。神下、舊訓カミクダリ。代匠記カムクダリ。考カンクダリ。檜嬬手カムクダシ。新考・講義等は檜嬬手に從つた。座奉之は、舊訓イマシツカヘシ。考イマシマツラシ。玉の小琴イマセマツリシ。檜嬬手・古義・攷證・新考・講義等は玉の小琴に從つた。奉レ令レ座といふので、萬葉卷十五（三七四九）に、比等久爾爾伎美乎伊麻勢氐（ヒトクニニキミヲイマセテ）とあるのを宣長は證例にした。なほ、卷十二（三〇〇五）に、高高爾君乎座而何物乎加將念（タカダカニキミヲイマセテナニカオモハム）がある。

○高照・日之皇子波・飛鳥之・淨之宮爾　タカテラス・ヒノミコハ・アスカノ・キヨミノミヤニと訓む。高照らす枕詞日の皇子、即ち此處は天武天皇を申奉る。『日（ひ）の皇子（みこ）』は既に解した如く、代々の天皇から皇太子皇子までをも稱へる。飛鳥之淨之宮は即ち天武天皇の飛鳥の淨御原宮である。この、『高照日之皇子』の解釋に二とほりあつて、代匠記で、『日ノ皇子ハ、此亦日竝ノ御事ナリ』と云ひ、玉の小琴・略解・攷證・美夫君志・講義・總釋（屋土）等も亦同說である。然るに、考では、『天孫の日嗣の御孫の命、今の天皇天武を申せり。さてその天皇崩ましては、また天に歸り上りますよしをいはんとて、先天孫の天降ませし事をいへり。かゝる言の勢ひ此人のわざ也』といひ、古義でも、『こは天武天皇を指シ奉れるなり』といひ、註疏・新考等もそれに從ひ、近時澤瀉新釋・全釋・新講等もまた同說である。なほ解釋については鑑賞の條でも再說した。

○神随・太布座而・天皇之・敷座國等　カムナガラ・フトシキマシテ・スメロギノ・シキマスクニトと訓む。神さながらに、貴くおごそかに飛鳥の浄御原宮に於て天下を統治したまうたが、そのうち、この天下は本來現神天皇の統治したまふところであるとして思召されての意。この句は下に天武天皇の崩御のことを云つてゐるのだから、之だけを挿入句として、此現世の國は、一般に現神天皇の統治していますところであるから、天武天皇はこの國土を神去り給ひ、天へのぼりますといふ下の句に續くのである。考・古義では此敷座國をば崩りまして天ノ原を敷座國とするやうに解したが、これは一般に現の天皇を申し奉るので、新考に、『歷代の天皇の御事なり』といつて居るとほりである。然るに、前の『日の皇子』を日並皇子とする說は、この句を、日並皇子の薨去のことを敍する準備句と解して居る。卽ち、講義に、『日並知皇子尊は、「此國は今飛鳥の清御原にます天皇の所知す國なり」として天の石門を開き給ひて天に登り給ひぬとなり』と云つてゐるごとくである。フトシクに就き、美夫君志に、『今考フるに、萬葉二三十五右に、水穗之國乎神随太敷座而云々、又一二十一左に、太敷爲京乎置而云々、又二二十七左に、飛鳥之淨之宮爾神随太布座而云々などある例を思ふに、宮柱布刀斯理も、其主の其ノ宮を知リ座スを云フなり。布刀も右の萬葉に、柱ならで、國を知リ座スにも云へれば、ただ廣く太きにと云フ稱辭なり』とある。

○天原・石門乎開・神上・上座奴（一云神登座尒之可婆） アマノハラ・イハトヲヒラキ・カムアガリ・アガリイマシヌと訓む。天の石門を開いて、御のぼりになられた。卽ち崩御したまうたといふ意。高貴の人の死をば、神となつて天にのぼり給ふやうに思ひ、さう表現したもので、古事記日本紀で崩の字をカムアガリと訓ませてゐる。此處は天武天皇の崩御をカムアガルと申した例である。古事記傳卷三十に、『阿賀理てふ言の意は、まづ天皇の崩すを神上と申す。こは底津根國黄泉國に幸すと申すことを忌憚て、其ノ反を以て天に上座と申しなせるもの也』と云つてゐる。これは古代人の死後の歸著すべき觀念をあらはす爲方であるが、黄泉も底津根も天上も皆さうであつて、『反』を云つたのだと單純には考へられないものである。『天の原石門』の石門は、古事記上卷に、天之石屋戸。萬葉卷三（四一八）に、豐國乃鏡山之石戸立。同（四一九）に、石戸破手力毛欲得とあるのを參考として好い。この『開』字を玉の小琴で、『閉』の誤とし、イハトタテと訓み、略解にも紹介したが、此處は原字の儘でいい。イマスの例は、古事記中卷に、佐々那美遲袁須久須久登和賀伊麻勢婆夜。萬葉卷二（二一〇）に、鳥白物朝立伊麻之弖。卷十九（四二四五）に、船騰毛爾御立座而。卷二十（四四四〇）に、夜敝也麻故要氐伊麻之奈婆といふイマスの例がある。なほ、宣長は、『上に神下、座奉之と云ると相照して見べし。神代紀に此葦原の中國を、しろしめせとて、天より下し奉りし、日の御子に

ませども、其蘆原の中國は、今の天皇の所知食國として、御自は又天に登り玉ふと云也。かく云なせるも、人麻呂の歌の妙なる巧にして、古今に及ぶ人なき所也。能々味ふべし。さて、上にまづ天をば日女の命のしろしめすと云置たるは爰の要也。皇子の命は葦原の中國をこそ所知食すべけれ、天原は日女命の所知食せば、登り玉ふべき所には非ざるを、其蘆原の中國は、今の天皇の遠く長く、所知食す御國なればとして、天原には上り賜ふと也。さて斯の如く云るに、當代の天皇の御代の遠長かるべきことを、ほぎまつる意も自こもれるは、是又妙なる巧也』（玉の小琴）と云つてゐる。つまり日並皇子の薨去のこととして説明して居るのである。（イマスの引用例に、敬語と、ユクの意味の區別がある。今一處に引いて置いた。）〇一云。**神登・座尒之可婆**　カムノボリ・イマシニシカバと訓む。神のぼり坐(いま)しにしかば、崩御せられたからといふ意である。

〇吾王・皇子之命乃・天下・所知食世者　ワガオホキミ・ミコノミコトノ・アメノシタ・シラシメシセバと訓む。日並皇子尊が天武崩御のあとを襲いで御卽位になり天下を御治めになるならばといふ意。講義に、『これこの尊皇太子として天下の政事にはあづからせ給ひつれど、卽位なくして薨せさせ給ひつればかくいへるなり』と云つてゐるので明かである。『吾王(わがおほきみ)、皇子之命(みこのみこと)』と云つて、此處から、日並皇子の事を敍して居るのである。

○春花之・貴在等・望月乃・滿波之計武跡　ハルバナノ・タフトカラムト・モチヅキノ・タタハシケムトと訓む。春花の如く貴からうと、滿月の如く盛であらうとの意。『春花』は一般に春咲く花で、櫻の花をはじめ色々あつて好いわけである。貴在等は舊訓カシコカラムト。代匠記初タノシカラント。考メデタカラント。玉の小琴タフトカラムト。『たふとからむとと訓べし。たふときと云ことは、古はめでたきことにも多く云り。貴の字に拘りて、只此字の意のみと思べからず。』（玉の小琴）。古寫本では、京都大學本で、タフトクアレト。タフトカラムトの二つを赭色で附加してゐる。古事記上卷に、然ニ我王ニ而甚貴云々。また、斯良多麻能伎美何余曾比斯多布斗久阿里祁理。萬葉卷三（三四二）に、貴物者酒西有良之。卷五（八〇〇）に、父母乎美禮婆多布斗斯。同卷（九〇四）に、世人之貴慕七種之寶毛。同卷（八一三）に、伊麻能遠都豆爾多布刀伎呂可儛。卷十七（三九二三）に、布流雪乃比加里乎見禮婆多敷刀久母安流香。卷十九（四二六六）に、惠良惠良爾仕奉乎見之貴左。催馬樂に、安奈太不止、介不乃太布止左也等とある。滿波之計武跡は、舊訓ミチハシケムト。代匠記タヽハシケムト。『第十三ニ高市皇子ノ薨ジ給ヘルヲ慟ミ奉ル歌ニ、十五月之、多田波思家武登トヨメルニ合テ、此ヲモ、タヽハシケムトヨムベキカ』（代匠記精）。靈異記の訓注に、『偉。タヽハシク』とあるから、タヽハシは偉大・具足・盛榮などの感じの語と見える。この語の考證は山田博士の講義に精しい。

○天下一云食國・四方之人乃・大船之・思憑而・天水・仰而待爾　アメノシタ・ヨモノヒトノ・オホフネノ・オモヒタノミテ・アマツミヅ・アフギテマツニと訓む。天下の萬民が皆皇子尊をば大船の如くに依賴し奉り旱に天の雨水を仰ぎ待つ如くに御期待申上げてゐたのにの意。大船之は、意味の明かな枕詞の格に使つてゐる。萬葉卷二(二〇七)に、大船之思憑而。卷四(五五〇)に、大船之念憑師。同卷(六一九)に、大船乃憑有時丹。卷五(九〇四)に、大船乃於毛比多能無爾。卷十三(三三〇二)に、大舟乃思恃而。同卷(三三二四)に、大船之憑有時爾等の例がある。天水も、意味の明かな枕詞の格に使つてゐる。卷十八(四一二二)の、安麻都美豆安布藝弖曾麻都といふ家持の歌は、天平感寶元年の旱の歌で、この場合は、實際の雨水にこの枕詞を其儘應用したのである。文選、相如難蜀父老檄に、擧踵思慕若枯旱之望雨云々。史記晋世家に、孤臣之仰君、如百穀之望時雨云々とある。**○一云。食國**　ヲスクニと訓む。或は人麿が斯くも作つたものであるか。考にヲスクニノと訓み、『天下と有はよろしからねば』と云つてこれを取つてゐるが、歌全體が大きく響かせてあるから、天下の方が却つていい。

○何方爾・御念食可・由緣母無・眞弓乃岡爾　イカサマニ・オモホシメセカ・ツレモナキ・マユミノヲカニと訓む。どう思召になられたのであらうか御由緣も無い寂しいこの眞弓の岡にといふ意。

由縁母無は、舊訓ユヱモナキ。代匠記ヨシモナキ。玉の小琴ツレモナキ。萬葉卷三(四六〇)に、都禮毛奈吉佐保乃山邊爾。卷十三(三三二六)に、津禮毛無城上宮爾といふ例がある。由縁・所由などと書いてある如く關係・縁故といふ意味に落著くべきか。卷四(七一七)に、都禮毛無將有人乎。卷十(三二四七)に、吾者物念都禮無物乎。卷十九(四一八四)に、都禮毛奈久可禮爾之妹乎。同卷(四一九八)に、都禮母奈久可禮爾之毛能登などの例がある。眞弓岡は現在、高市郡阪合村大字眞弓一帶に低い丘陵が南北に續き、南は佐田岡に連つてゐる。上古は眞弓・佐田共に眞弓と呼ばれたらしく、佐田岡は眞弓の一部分と考へていい。日並皇子の薨ぜらるるや、眞弓岡檜前川の西の岡地に殯宮を營み、後佐田岡に葬られたのである。其皇子の陵墓のある佐田岡は、現在は越智岡村佐田でなく越智岡村大字森にある(或は阪合村大字越ともいふ)。(辰巳・奥野・大井・阪口) 延喜式諸陵寮式に、眞弓丘陵岡宮御宇天皇在大和國高市郡兆域東西二町南北一町陵戸六烟とあるのは卽ち此處である。

○宮柱・太布座・御在香乎・高知座而　ミヤバシラ・フトシキマシ・ミアラカヲ・タカシリマシテと訓む。宮殿の柱を太く莊嚴に營みたまひ、殯宮をば立派に高壯に敷きたまうてといふ意。萬葉卷一(五〇)に、都宮者高所知武等神長柄所念奈戸二とある如く、アラカは宮殿・皇居のことであるが、此處は殯宮のことになるのである。宮柱云々も本來は皇居の宮殿の事であるが此處では殯宮の趣に

使つて居る。神武紀に、宜下恢二廓皇都一規中摹大壯上。神代紀に、逆二剝斑駒一投二入之於殿内一。崇神紀に、天皇乃沐浴齋戒、潔二淨殿内一……有二一貴人一對二立殿戸一。垂仁紀に、天皇立二於大殿前一云々とある。なほ祝詞に、皇御孫命乃瑞乃御舍仕奉氏。古語拾遺の瑞殿の注に、美豆乃美阿良加とある。

○明言爾・御言不御問・日月之・數多成塗　アサゴトニ・ミコトトハサズ・ヒツキノ・マネクナリヌルと訓む。朝毎に、群臣にむかつて御言のたまふこともなくなつて（薨じ給へば）、月日も段々經過してしまつたといふ意。數多は日數の多くなつたといふことで、萬葉卷九（一七九二）に、不遇日之數多過者。卷十二（二八九二）に、不相數多月之經去者。卷十七（四〇一二）に、可良奴日麻禰久都奇曾倍爾家流。卷十九（四一六九）に、朝暮爾不聞日麻禰久といふ用例がある。ナリヌルで一段切れて休止となり、次の句から新に起して居る。併し、その休止は例によつて、さう長くはない。直ちに、『そこゆゑに』を以て連續せしめて居る。當時の官人の伺候は大體卯の刻（午前六時）で、退朝は巳の刻（午前十時）、おそくも午刻（午前十二時）であつた（山田博士の講義參照）。『朝毎に』といふ句は此處で明瞭になつて來る。

○其故・皇子之宮人・行方不知毛（一云刺竹之皇子宮人歸邊不知爾爲）　ソコユヱニ・ミコノミヤビト・ユクヘシラズモと訓む。それだから春宮に仕へた官人がおしなべて行くべきところを知らないで途方に暮れるとい

ふ意。其故のソコと使つた例は萬葉卷二（一九四）に、所虛故名具鮫魚（兼）天。卷三（四六六）に、曾許念爾曾己所痛。卷八（一六二九）に、其故爾情奈具夜登。卷十九（四一五四）に、曾己由惠爾情奈具也等。卷十七（四〇〇六）に、則許母倍婆許己呂志伊多思等の例がある。皇子之宮人とは、春宮傳をはじめ舍人・馬部に至るまで一般奉仕の者をいふ。行方不知毛は、短歌の評釋の時にも既に云つたが、卷二（二〇一）に、やはり人麿の、『去方乎不知舍人者迷惑』といふのがあり、卷三（二六四）に、不知代經浪乃去邊白不母。卷七（一一五一）に、因來浪之逝方不知毛などの作例があつて參考となる。このユクヘシラズモといふやうな表現は、自然現象で行先が不明で果敢ないといふ氣持と同じく、人間有情でも、歸著するところを知らない、俗にいふ途方に暮れるといふ意味になるのである。〇**一云**。**刺竹之・皇子宮人・歸邊不知爾爲**　サスタケノ・ミコノミヤビト・ユクヘシラニスと訓んでゐる。シラニスは『知らに』に『す』の添はつたものである。代匠記に、『ヨルベシラニスハ、ヨルベシラズスルナリ。シラズヲシラニト云ハ古語ナリ。日本紀ノ歌ニモ續日本紀ノ宣命ノ詞ニモアリ』といひ、攷證に、『これも意は、本書とかはる事なけれど、句のつゞき、本書のかたまされり』と云つてゐる。いかにもその通りであるが、鑑賞上からは斯く比較の出來るのは大に有益である。

大意　天地開闢の初に、〔久堅之〕天の河原に、八百よろづ千よろづの數多の神々が、神集をし、

神議をし給うた時に、天照大神即ち大日孁命は、天上を支配なさることとし、地上の葦原の瑞穂の國即ちこの日本をば、天地が二たび合ふ無窮の時まで、即ち天地のあらん限り、支配なさるべき御方として天孫瓊々杵命を、天雲の八重雲の中を押し分けてこの日本の國土に天降らしめたまうた。そして代々天皇がこの國土を統治遊ばされたが、その皇統の〔高照〕日の皇子にまします天武天皇は、飛鳥の淨御原の宮殿で、神としての御威力を以てこの代を御治めになられて居たが、この地上の國は現の天皇が統治したまふところだからと仰せられて、御身みづからは天の石門を御開きになり天上に御のぼりになられてしまつた、即ち崩御になつた。』（以上一段）

そこで、わが御仕し奉る日並皇子尊が御位に即かれて天下を統治し給ふならば、〔春花之〕春の花のやうに麗しく立派で、〔望月乃〕十五夜の滿月のやうに盛大であらうと天下萬民が、〔大船之〕大船のやうに依頼り奉り、〔天水〕旱に雨を仰ぎ待つやうに御期待申上げてゐたのに、どう御思召になられたものか、御由縁もない寂しい眞弓の岡にかくも大きく殯宮を〔宮の柱を、皇居を〕御營みになつてしづまりたまひ、そしてもはや群臣にむかつて御言宣ふこともなくなつて、月日も段々と經過してしまつた。それゆゑに春宮に仕へ申した官人どもが皆々歸趨することを知らず、途方に暮れて居る。』（以上二段）

鑑賞　この歌は、日並皇子尊の殯宮に際して作つたもので、獨咏的に感慨を漏らしたといふよりも儀式的な動機も交つてゐるのだから、構想措辭の具合がおのづからその特徴をあらはしてゐる。先づ皇子の薨去を悲しむのに、天地開闢から說きおこして、神の集會から、瓊々杵命の降臨、歷代天皇の統治に及び、飛鳥の淨御原で天武天皇の崩御までを敍して來て一段落としてゐる。以上は過去である。それから日並皇子の御人格を暗指し、萬民期待の心を云つて、現實に逢遇した殯宮の有樣を云つて、『皇子の宮人行方しらずも』といふ感慨を以て結んで居る。

そして、『皇子の宮人』を代表した心持で歌つてゐるのだから、餘計に莊重、雄大、眞率で、輕佻の分子などは微塵もないのみならず、人麿はこの長歌を作るのになかなか骨折つたやうにおもへる。試にこの長歌から、『天』の語の入つてゐる語を拾ふなら、天地の、天の河原、天照らす、天をば、天地の、天雲の、天の原、天の下（二箇處）、天つ水など、十箇處ばかりになるわけである。これなども不意識の裏にこの結果を來したものであらうとおもふ。

この長歌は天地開闢から其時現在までの敍述であるが、內容が存外單純で、あとは言語の綾を以て纏めてゐる。そこで左千夫の、『文彩餘りあつて質是れに伴はざるもの多き事』といふごとき批評も出で來るのだが、愚見の一端に據れば、さういふ或人々から技巧のための技巧と目せられてゐる

長々とした句の連續があるために、『朝ごとに御言問はさず、日月の數多くなりぬる、そこ故に皇子の宮人、行方しらずも』といふ肝腎の句が却つて精彩を放つてくるとも謂へるのである。この理論は既に前の歌の時にも云つたことだが、人麿はこの呼吸を體得しつつあつたやうである。

また、皇子の薨去を敍したり、殯宮のありさまを歌ふにせよ、なかなか簡潔である。見樣によつては一種の樣式化せられてゐるといふことも出來るほどである。若しかういふ場合に近代文學的に寫實的にこまごまに敍したとしたならば、全體は纖細なものになつて莊重の味を削減したかも知れないのである。

この歌は、持統三年己丑の作で、年代明記の人麿作の最初のものであり、私は其時の人麿の年齡を二十七歲ぐらゐと想像したのであつたが、人麿は既にかくの如き堂々たる作をしてゐるのである。併し、忽然としてこの力量が現出したのではあるまいから、祝詞とか佛敎經典とか古歌謠とか漢文學とかが、その發育史の要素として考察せられるであらう。

眞淵は、この時人麿が皇子の舍人であつたらうと想像し、他の人は口調から云つてさうでないといひ、他の人は宮廷歌人の類だつたと論じて說はいろいろあるが、廣義に取つて、『皇子の宮人』の一人であつたことだけは確からしい。それ以上のことは、想像をもつと細かくして、この歌を觀賞

する部類に屬してゐる。

この歌の中の『高照らす日の皇子』をば、天武天皇の御事とするか、日並皇子尊の御事にするか兩說があることは既に語釋の條で言及ぼした如くであるが、兩方の說とも皆相當に有力であり、また、童蒙抄のごとく、『天武の御事とも見え、また日並皇子の御事とも見ゆる也。いづれに見ても同事の意なるべし』といふ說もある。

【第一說】日並皇子尊の御事とする說は代匠記・玉の小琴・略解・攷證・美夫君志・長等の山風・講義・總釋(屋上)等である。玉の小琴・略解では、この句は下の『天の原石門を開き』に續く句法だとして居り、講義でも、『文意は、この「は」より數句をへだてて、「天原石門乎云々」につづくべきなり』と云つてゐるが、『高照らす、日の皇子』と、『吾王、皇子の命』とが、兩方とも日並皇子尊のことだとすると、

『高照らす日の皇子は飛鳥の淨の宮に神ながら太しきまして天皇の敷きます國と天の原石門を開き神上り上りいましぬ』

『吾王皇子の命の天の下しらしめしせば春花の貴からむと望月の……いかさまに思ほしめせか由縁もなき眞弓の岡に宮柱ふとしきまし御あらかを高しりまして』

この二つが二つとも日並皇子尊の薨去のことを詠んだとせねばならぬ。卽ち丁寧に薨去のことを繰返したこととなるのである。併し一篇の長歌の構造からいへば、天地の初からいひ起して、神集、神議、天孫降臨、代々天皇の統治といふ具合に運んで居るのだから、皇子尊だけの薨去を、これだけの句の數を費して二度繰返して咏むといふのは、少し丁寧過ぎ諄過ぎると思ふのである。

然るに、『高照らす日の皇子』云々の方を、天武天皇の崩御のこととし、『吾がおほきみ皇子の命』云々の方を日並皇子尊の薨去のことだと解せば、歴史上の事實にもあふし、歌の句の順序にも叶ふし、『高照らす日の皇子』と、『わがおほきみ皇子の命』とを二つに解釋し、對立せしめることが出來て、無理が尠くて濟むのである。そこで私は契沖以來のこの日並皇子說を捨てたのであつた。

本居宣長云。『凡て高照日の御子と申すは、御代々々の天皇皇太子皇子を申す稱也。かくて爰は、大方は右の如くにて當代の天皇をも、こめて申ながら、日竝皇子の命を主として申せる也。さて神下云々より引續けて申せるは、凡て皇孫はいく萬代を經坐しても、神代に天降ましたる御孫の命と、一體にまし座が故也。さて日之皇子波と云るにて句を切べし。こは下の天原石門乎云々へ續きたり。飛鳥へ續けては見べからず』(玉の小琴)。

伴信友云。『日の皇子とは、日ノ神の御裔と申事にて、天皇はさらなり、なべての皇子にも申せる例あれど、此歌なるは、天地之初時之云々と、日嗣の尊き由來をねもごろに述ひつゞけて、高照日之御子と稱へ申せるに

て、すなはち日並知皇子をさし申せるなり。其は此皇子は御父天皇の皇太子と坐ながら、天皇の崩後、いまだうけばりて、御位に卽給はず、なほ皇太子と申て、御母皇太后ぞ、天皇のごとくにておはしましけるを、その皇太子の舍人ときこえたる人麻呂が、殊にいふがひなく思ひ奉れる眞心より、かくはよめりとぞきこえたる、すべて今こゝに擧る歌ども、みな其宮の舍人などの歌ときこゆるを、この意を得てよみあぢはふべし。』(長等の山風附錄三)

土屋文明氏云。『この前後は學者の議論の多いところである。卽ち第一說は「高照す日の皇子」以下「太敷きまして」までを日並の皇子の御事とし、「天皇の敷きます國と云々」を此の世は天皇、卽ち持統天皇の治められる國として、皇子は天上に神上りますと說くのであるが、それは如何にも辻褄が合はなすぎる。母帝に此の國をおいて神上るといふのは、亡き皇子を悼む詞として不穩當なばかりでなく、在す母帝に禮を缺くこと大ではあるまいか。第二說は「高照す日の皇子」以下「神上り上り坐しぬ」までを天武天皇の御事として、天武天皇が崩御になつた、よつて其の後を日並皇子が治められたならと續くので、一應理路は立つのであるが、「天の原岩戶を開き神上り上り坐しぬ」といふ句はどうしても現前の皇子の薨去を悼む句としなければ生きて來ない。又此の「神上り上り坐しぬ」があるから次の句の起されて來る勢が生ずるのである。その點では第一說の方が賴るべきであると思ふ。そこで私は「高照す日の皇子」から「神上り上り坐しぬ」までを日並皇子の御事と見たいと思ふ。「飛鳥の淨の宮に神ながら太敷きまして」は天皇の御事の如く、皇太子には不釣合の如く見える

が、巻一(四五)の歌にも輕皇子に對して同じ樣な句が用ゐられて居るから、かかる言ひ方は天皇には限らぬことと見えるに加へて、日並皇子は後に岡宮御宇天皇と諡せられたのみならず、當時にも、日並知御宇東宮と記された程であり、持統天皇は皇子の薨ぜられた翌年卽ち天皇の四年正月にはじめて卽位されて居るのであるから、法理制度の問題としては兎に角、當時の國民は皇太子卽ち天皇と感じその區別などせずに尊んで居たのではないかと思ふ。皇居は天武天皇崩御の後も明日香淨原宮であり、神器もそこに安置されたであらうから、「明日香の淨みの宮に」云云といふ句も極めて自然であり、次の「天皇の敷きます國と」の天皇を日並皇子にあてることも少しも不合理とは考へずに、作者は用ゐたのであらう。』(萬葉集總釋)

【第二說】 次に天武天皇の御事と解するのは、考・古義・檜嬬手・註疏・新考・澤瀉新釋・全釋・新講等である。考では、『上の天孫の日嗣の御孫の命、今の天皇天武を申せり。さてその天皇崩ましては、又天に歸り上りますよしをいはんとて、先天孫の天降ませし事をいへり。かゝる言の勢ひ此人のわざ也』と云つてゐる。ただこの說に從ふと、『天皇(すめろぎ)の敷きます』のところが天皇といふ語が重複するし、また日(ひ)の皇子(みこ)といふ語は皇太子をも稱し得るから日並皇子尊の御事にもなるといふので、そこに解釋上の不自然があり、古來註釋家の間に說が分かれたのであるが、此處は、『天皇(すめろぎ)の敷座す國と』をば、一般に現(うつつ)なる歷代の天皇の統治し給ふ國といふ具合の插入句と看做せば、解釋が自然

に樂(らく)に出來るのである。さうして、『高照らす日の皇子』（天武天皇）。『天皇(すめろぎ)』（歷代の一般の現身の天皇）。『わがおほきみ皇子(みこ)の命(みこと)』（日並皇子尊）の三つが無理なく解釋が出來るとおもふので私は考以下の天武天皇說に從つたのであつた。私もはじめは攷證・講義・總釋等に據つて日並皇子說として解釋したのであつたが、歌を熟讀したうへ改說したのである。この第二の說とすると、

高照らす、日の皇子は、飛鳥の、淨の宮に、神ながら、ふとしきまして。――飛鳥の、淨の宮に、神ながら、ふとしきまして。――すめろぎの、敷きます國と、あまの原、石門(いはと)を開(ひら)き、神上(かむあが)り、上(あが)りいましぬ。

といふやうになるので、『飛鳥の淨の宮に神ながら太敷きまして』といふ句は天武天皇にも卽くし、また淨御原の宮で統治し給ふ現の天皇にも卽く句である。これは人麿一流の不卽不離の省略句法で、この呼吸に留意せず散文的にのみ解釋しようとすると時々迷ふのである。もう一度云へば、『天武天皇は、飛鳥の淨御原の宮で御治めになられて、御いでになつたが、さてそのうち、この飛鳥の淨御原の宮は現身の天皇が統治したまふところだから、その天皇に統治を任せて、御自身は天上にお上りになり、崩ぜられた』といふ具合になるのである。從來、『神ながら太しきまして』の句が上に附くのか下に附くのか解釋し得ず、迷つたものであるが、これは省略句法で兩方に懸つて、融合(フェルシュメルツェン)してゐるのである。萬葉技法の一つでもあり、人麿技法の一面でもある。この融合技法を理會しな

いから、宣長の如く、『高照らす日の皇子は飛鳥の淨の宮に神ながら太敷きまして天皇の敷きます國と天の原岩戸を開き神上り上り坐しぬ』に就き、『日之皇子波と云るにて切べし。こは下の天原石門乎云々へ續きたり。飛鳥へ續けては見べからず』(玉の小琴)などと云ふに至るのである。ここは、『日之皇子波』から次の、『飛鳥之』云云の句へ連續してゐること、上に說いたごとくである。

次に、この長歌には、連續の具合に、不卽不離の省略法が行はれてゐるので、從來解釋に迷つた。例へば、『神下し座せまつりし』から、直ぐ、『高照らす日の皇子は』に續いたところは、天孫瓊々杵命の御事をいつてゐるのに、突如として現代の天皇、天武天皇或は日並皇子尊のことに云ひ及ぶのだから、新考では、『マツリシにて一段をいひ收めたりとしてはタカテラス云々の出方俄なり。日ノミコハのハの言もおちつかず。云々ナル日ノミコハなどあるべき語勢なればなり。中略おそらくはイマセマツリシの次にスメロギノ神ノ御世ヨリツガノ木ノイヤツギツギニ天ノ下シロシメシ來テヤスミシシワガオホキミなどいふ句のありしが落ちたるならむ』といふ句脫漏說を提出してゐるのであるが、これは韻文の省略技法を念中に置いて味へば、さう無理をせずに解釋が出來るのであつて、檜嬬手に、『全、瓊々杵尊の天降りの狀なるを、直に日之皇子に安く云ひ移せる、妙とも妙と賞すべし』と云つてゐるのに贊成して間違は無い。

この省略的句法は、そのほかにもある。例へば、『神下』をばカムクダシと訓ませたのは、守部の訓に據つたものだが、美夫君志では、舊訓以來のカムクダリと訓み、『但し此をイマセマツリシと訓メば、神下(カムクダリ)は、カムクダシといふべきが如くなれども、神下(カムクダリ)は、御自らの上につきていふ言なれば此にて暫く句を切ッて心得べし。之(シ)は過去のシなり。』といひ、新考では、『カムクダシとよまではイマセと對せず。マツルはクダシにもイマセにもかかれり。イマセマツリシは、スヱ奉リシなり。さてこのイマセマツリシといふ句、格は次なるタカテラス日ノミコにつづきたれど意は切れてつづかず』といひ、講義では、『ここは神の御はからひとして皇孫を此國に下し給ひしなればカムクダシとよむべきなり』と云つて、この他動的なカムクダシの訓を支持してゐるのであるが、この訓だとすると、直ぐ下に續いてゐる、『高照らす日の皇子は』の句に對して不自然である。そこで、美夫君志では、理窟の上ではカムクダシだが、天孫御自身の天降だからカムクダリと訓まねばならぬといひ、また、下の句、『高照らす日の皇子は』への續きに散文的に見れば腑に落ちないところがあるから、イマセマツリシで切れて、シは過去のシだといふ如き苦しい解釋をしたり、新考の如くに、句が脱漏したのだらうと想像するやうになるのだが、この邊の技法も、韻文特有の省略技法を顧慮すれば解釋がむづかしくなくつくのである。芭蕉の俳諧とか西洋近代詩の技法などを參照すれば、人麿が

古代に如是の技法を用ゐたのは寧ろ感心していいのである。

(1)あめつちの　はじめのときし
ひさかたの　あまのかはらに
やほよろづ　ちよろづがみの
かむつどひ　つどひいまして
かむはかり　はかりしときに
あまてらす　ひるめのみこと
あめをば　しらしめすと
あしはらの　みづほのくにを
あめつちの　よりあひのきはみ
しらしめす　かみのみことと
あまぐもの　やへかきわきて
かむくだし　いませまつりし
たかてらす　ひのみこは
あすかの　きよみのみやに
かむながら　ふとしきまして
すめろぎの　しきますくにと
あまのはら　いはとをひらき
かむあがり　あがりいましぬ

(2)わがおほきみ　みこのみことの
あめのした　しらしめしせば
はるばなの　たふとからむと
もちづきの　たたはしけむと
あめのした　よものひとの
おほふねの　おもひたのみて
あまつみづ　あふぎてまつに

(3)いかさまに　おもほしめせか　つれもなき　まゆみのをかに　みやばしら　ふとしきまし
みあらかを　たかしりまして
あさごとに　みこととはさず
ひつきの　まねくなりぬる
そこゆゑに　みこのみやびと――ゆくへしらずも

初句第二句、『天地之初時之』は、神田本、金澤本、類聚古集には、『之』が無く、ハジメシトキ(神)、ハシメノトキ(西)と訓んで居る。新訓では、『之』の無いのに從つて、ハジメノトキと訓んだ。次に、『之』があるとして、舊訓ハジメノトキシであるのを、考がハジメノトキノと訓み、講義・新釋・新講・總釋等がそれに從つた。

次に玉の小琴がハジメノトキシを認容し、檜嬬手・古義・美夫君志、註疏・新考・全釋等がそれに從つた。『之』が無い聲調も、『天をは、しらしめすと』、『日月の、まねくなりぬる』などの破調もあるから肯定してもいいが、やはり五七の正調だと假定すれば、私はやはりハジメノトキシと訓む方に傾いて居る。これは、後に續く、『河原に』、『いまして』、『はかりし時に』などの一瞬息（いき）をつめる具合と調和せしめるためである。

それから、斯くの如く、句の終末にある助詞の音を注意すると、河原に。はかりし時に。仰ぎて待つに。知らしめすと。神の命と。敷きます國と。滿はしけむと。いませまつりし。あがりいましぬ。しらしめしせば。太敷きまし。太敷きまして。高知りまして。まねくなりぬる。行方しらずも。等をば按配しつつ一つの連續聲調を築きあげた點をば、繰返し吟誦しつつ味ふべきである。

それから、『の』や『を』や『て』などの使ひ方が、連續的波動的進行の效果をもたらす樣に使つてゐて、ぽつりぽつりと切れてゐない。卷一（一）の、籠もよ。み籠もち。などの聲調と大に違ふのである。それは、殯宮にのぞんで、聲をあげて讀みあげ、人々に聽かせたといふ點も、かういふ歌調の生ずる一原因であるが、一面は、根本に横はる人麿的傾向の聲調なのである。一首は莊嚴で豐大で重厚で、浮華輕薄の口吻が毫末もない。

この長歌の、莊重な儀式的な詞句の中にあつて、『春花の貴からむと、望月の滿はしけむと』の句は、一つの變化でもあり實質でもあつて、注意すべき句である。この句から、『夭夭たる桃李の花、灼灼として輝光あり』（阮嗣宗）を聯想したり、『文は春華の若く、思は涌泉の若し』（曹子建）を聯想したりすることが出來、また、『皎皎天月明』（謝惠連）。『灼として明月之光を流すが若し』（何平叔）を聯想することも可能であるが、そのために、人麿の力量を評價する眼光を濁らせてはならない。また、

『天つ水仰ぎて待つに』の句も、旱天に甘雨を待つの氣持で極めて自然であるが、文選に、『祁祁たる甘雨、百穀蓁蓁』。『雲飛揚して雨滂沛たり、于に胥德ありて萬世に麗し。』『桑梓繁蕪し、大雨時に行く』。『施は春風よりも暢び、澤は時雨の如し』。『旱天豐澤を降し、百卉葳蕤を挺んづ。』などとあり、語釋の條に引用した二文の如きものがあるからと云つて、直ちに漢文の影響と看做すことが出來ない。

檜嬬手に、マネクナリヌレと訓んで古義はじめ其に從つたが、かくナリヌレバの意味にすると、ソコユヱニといふのに續きが惡いから、此處はマネクナリヌルで一寸休止を置く方がいいやうである。『そこゆゑに、皇子の宮人行方知らずも』といふ結びは、奇は無いが、平常にして切實である。特に、『ゆくへ知らずも』の一句に力が籠つてゐるのをおもへば、『いさよふ浪の行方しらずも』の句も決して支那文學の模倣などによつて得たものでないといふことが分かる。

儀容を正して莊重に言つて來て、後半の現實を敍述してゐるところから、滲みいでる哀韻は、私の力では說明しにくいほどの細かさがあり、微妙な點がある。卽ち、概念的には簡單だが、聲調をも籠めた本態・實質としては無限に複雜なのである。これは次の反歌二首についても同樣にいふことが出來、既に短歌の評釋で說いたごとくである。

参考 巻十八（四一〇六）の家持の歌に、『春花の盛もあらむと待たしけむ時の盛ぞ離り居て嘆かす妹が何時しかも使の來むと待たすらむ』がある。また、巻十三（三三二六）に、『磯城島の大和の國にいかさまにおもほしめせかつれも無き城上の宮に大殿を仕へ奉りて殿隠り隠りいませば朝は召して使ひ夕は召して使ひつかはしし舍人の子らは行く鳥の群がりて待ち在り待てど召し賜はねば劍刀磨ぎし心を天雲に念ひ散らし展轉びひづち哭けども飽き足らぬかも』があり、人麿の歌に類似の句法のあると共に、『舍人』の語のあるのも興味があり、『皇子尊の宮の舍人等慟傷して作れる歌二十三首』（一七一以下）の歌と暗默の關聯を語つて居るやうにもおもへる。つまり、其等は人麿の代作といふよりも人麿の手の入つて居るといふ意味になるであらう。また、同巻（三三二九）には、『あらたまの月の易れば爲む術のたどきを知らに石が根の凝しき道の石床の根延ふ門に朝には出で居て嘆き夕には入り坐戀ひつつぬばたまの黑髮敷きて人の寢る味寢は宿ずに大船のゆくらゆくらに思ひつつ吾が寢る夜らは數みも敢へぬかも』といふのがある。

反歌

【一六八】久堅乃　天見如久　仰見之　皇子乃御門之　荒巻惜毛

右一〇〇頁に評釋終了。

【一六九】茜刺　日者雖照有　烏玉之　夜渡月之　隠良久惜毛

右一〇二頁に評釋終了。

或本歌一首

【一七〇】島宮(シマノミヤ)　勾乃池之(マガリノイケノ)　放鳥(ハナチドリ)　人目爾戀而(ヒトメニコヒテ)　池爾不潜(イケニカツカズ)

右一〇七頁に評釋終了。

【巻二・一九四】

飛ぶ鳥の　明日香の河の　上つ瀬に　生ふる玉藻は　下つ瀬に　流れ觸らふ　玉藻なす　か依りかく依り　靡かひし　嬬の命の　たたなづく　柔膚すらを　劒刀　身に副へ寐ねば　ぬばたまの　夜床も荒るらむ（一に云ふ、かれなむ）　そこ故に　慰めかねて　けだしくも　逢ふやと念ひて（一に云ふ、君もあふやと）　玉垂の　をちの大野の　朝露に　玉裳はひづち　夕霧に　衣は沾れて　草枕　旅宿かもする　逢はぬ君ゆゑ

飛鳥　明日香乃河之　上瀬爾　生玉藻者　下瀬爾　流觸經　玉藻成　彼依此依　靡相之　嬬乃命乃　多田名附　柔膚尚乎　劒刀　於身副不寐者　烏玉乃　夜床母荒良無（一云何禮奈牟）　所虚故　名具鮫魚(兼)天　氣留(田)

敷藻　相屋常念而（一云公毛相哉登）　玉垂乃　越乃大野之　旦露爾　玉藻者埿打
夕霧爾　衣者沾而　草枕　旅宿鴨爲留　不相君故

題意　柿本朝臣人麿、獻二泊瀨部皇女忍坂部皇子一歌一首并短歌といふ題がある。泊瀨部皇女と忍坂部皇子は共に天武天皇の御子で、皇子の方が兄君に當つて居る。天武紀に、宍人臣大麻呂女、擬媛娘、生二二男二女一、其一曰二忍壁皇子一、其二曰二磯城皇子一、其三曰二泊瀨部皇女一、其四曰二託基皇女一云々とある。

さて長歌の内容を讀むに、御夫婦の中の夫の君の薨去を悲しんで、それに同情して人麿が作つてゐる趣の歌である。併しどういふ御方の薨去を悼んだのか題詞だけから見れば不明であるが、左註に、右或本曰、葬二河島皇子越智野一之時、獻二泊瀨部皇女一歌也。日本紀曰、朱鳥五年辛卯、秋九月己巳朔丁丑、淨大參皇子川島薨とある。川島皇子は天智天皇の皇子で、さうして泊瀨部皇女は川島皇子の妃であるから、若し左註に據るとせば、この川島皇子の薨去に對する挽歌を妃の泊瀨部皇女に獻り、同時に妃の御兄君の忍坂部皇子にも示し申さうとしたものだといふことになる。これは御兄弟の御間柄であつて見れば、御二人に獻ずるといふことはそんなに不合理ではない。

代匠記初稿本に、『人丸、皇女の御なげきをおもひやりて、いたみ奉られけるなり。忍坂部(オサカベ)ノ皇子へ奉らるゝ心は、歌に見えねど、共に天武の御子にて、御母は宍人臣(シシウトノオム)大麻呂の女、擬媛(カヂヒメ)ノ娘(イラツメ)同腹の御はらからなれば、兼て忍坂部皇子へも奉られけるなるべし』と云つてゐる。然るに眞淵は、『こは河島皇子の薨給へる時、其御妻(ミメ)泊瀨部ノ皇女に獻る哥にして、此皇女の御兄、忍坂部皇子に獻るよし有べき事なく、哥にもたゞ御夫婦(メヲト)の常の御有様をのみいひて、かの皇子の事はなし。仍て考るに、こゝは亂れて河島云云の十一字は落ち、忍坂部ノ皇子の五字は、次の明日香ノ皇女ノ木𥑎ノ殯ノ宮云云の端詞に有しが、ここに入し物なり』として、『葬二河島皇子於二越智野一之時、柿本朝臣人麻呂獻二泊瀨部皇女一哥』と改めた。檜嬬手・古義も大體それに從つた。併し攷證は、『みだりに意改せん事をはばかりてしばらく本のまゝにておきつ』といひ、美夫君志は、『各本皆此の如くなれば、しばらく本(モト)のまゝにておきつ』といひ、講義は、『然れども、古來かくありて、その事情詳かならずして、或本に左注の記せる如き事ありたればこそ左注も記せるなれ。されば、今更左注を本に立つることはかへりてさかしらなるべし』と云つた。

語釋 **○飛鳥・明日香乃河之** トブトリノ・アスカノカハノと訓む。古事記履中天皇條に、爲二祓禊一、而明日參出、將レ拜二神宮一、故號二其地一謂二遠飛鳥(トホツアスカ)一也。また、天武紀十五年に、（秋七月己亥

朔）戊午、改レ元曰二朱鳥元年一〔朱鳥此云阿訶美苔利〕仍名レ宮曰二飛鳥淨御原宮一とあり、契沖は、この飛鳥をトブトリノと訓むべきかと云つてゐる。また、アスカは古くは明日香と書いてゐたのが、淨御原宮頃から飛鳥とも書いた。『其時マデハ明日香トノミ書ケルヲ、思召ス所アリテ、朱鳥ト改元セサセ給フニ付テ、飛鳥ヲ新ニアスカト義訓シテ名付サセ給フニ依テ』（代匠記精）。次に、反對に、飛鳥をば、字どほりに讀めば、トブトリであるから、さうも誰かがはじめて訓んだに相違ない。それがいつのまにかアスカの枕詞となつたものであらうか。明日香川（あすかがは）は、大和高市郡の川で、畑村から發する稻淵川と多武峯から發する細川とが合し、つひに大和川に入るもので、萬葉集でも萬葉以後でも和歌に關係の多い川である。

○上瀬爾・生玉藻者　カミツセニ・オフルタマモハと訓む。舊訓ノボリセであつたのを代匠記でかく改訓した。川の上流といふ意で、古事記允恭條に、許母理久能（コモリクノ）、波都勢能賀波能（ハツセノカハノ）、賀美都勢爾（カミツセニ）、伊久比袁宇知（イクヒヲウチ）、斯毛都勢爾（シモツセニ）、麻久比袁宇知（マクヒヲウチ）云々とある。玉藻のことは卷二（一三五）に既に云つた。

○下瀬爾・流觸經　シモツセニ・ナガレフラフと訓む。下つ瀬に流れ觸らふの意。流觸經は舊訓ナガレフレフル。古寫本中、ナカラフルフル（西）、ナカラフレフル（溫）。注釋書では、考ナガレフラヘリ。玉の小琴ナガレフラハヘ（檜嬬手・攷證・美夫君志・註疏同訓）。摺解ナガレフラヘ。古義ナガレフラフ（新訓同訓）、又は

ナガレフラバフ(新考同訓)。講義ナガレフリフル。そして山田博士は、『ここに余は、この觸經の二字は、フリフルといふ語をあらはす爲の借字と思ふ。その義は、觸にも經にもあらずして、振の字の義の動詞を重ねて、ふりふるといへるなりと思ふ。その意は左に振られ右に振られ、ゆら〳〵と水流のままに靡きふることを重ね言としていへるならむと考ふ』といひ、古義では、『ナガレフラフと訓べし。フラフはフルの伸りたる言にて、その緩なるさまを云なること、上にたび〳〵云る如し。經をフの借リ字に用ひたること、集中にいと多し』と云つてゐる。私は一音足りないが古義訓に從つた。萬葉卷十七(三九九一)の、宇麻奈米底宇知久知夫利乃之良奈美能安里蘇爾與須流(ウマナメテウチクチフリノシラナミノアリソニヨスル)などが幾らか參考となるだらうか。なほ春日政治氏は、天長五年加點の成實論に「觸」の字をフラバヘと訓んでゐるのを根據として、ここの「觸經」もフラバフと訓むべきであらうと說かれたが(成實論天長點續貂。國語・國文昭和八年一月號)、かくの如くフラバフと訓めれば聲調上も好都合である。

○靡相之・嬬乃命乃　ナビカヒシ・ツマノミコトノと訓む。靡(なびか)ひし夫(つま)の命(みこと)の意。ナビカヒは波行四段に活用せしめて繼續狀態を表はしてゐる。嬬乃命乃、舊訓イモノミコトノ。古寫本中、ツマノイノチノ(神)、ツマノミコトノ(溫)等。代匠記にツマノミコトノと訓み、『嬬ヲイモト點ゼルハ誤ナリ。ツマト和セルヲ正義トス。此嬬ハ假テカケリ。注ニ依テ河島皇子ノ御事ナレバ、正シクハ夫ノ

字ヲ書ベシ』と云つて居る。命は、父の命、母の命、弟の命、妹の命などといひ、敬ひいふ語である。古事記上卷に、伊刀古夜能伊毛能美許等中略和加久佐能都麻能美許登云々。萬葉卷十七(三九六二)に、波之吉與志都麻能美許登母。卷十八(四一〇一)に、波之吉餘之都麻乃美許登能云々とあるは、女性を指してゐる。此歌の場合は、川島皇子といふことを念頭に置けば夫の命であるが、さもないと女性と解していい句である。

○多田名附・柔膚尚乎　タタナヅク・ニギハダスラヲと訓む。疊著く枕詞柔かく美しい膚すらもの意。タタナヅクといふ枕詞は、疊なづくの意で、古事記景行條に、多多那豆久阿袁加岐夜麻碁母禮流夜麻登志宇流波斯。萬葉卷六(九二三)に、立名附青墻隱河次乃清河內曾。卷十二(三一八七)に、田立名付青垣山之隔者などとある如く、ものの重なつて豐かな感じ好い態をなしてゐる場合に用ゐてあるから、同じ心持で、豐滿の感じの女の和膚に冠らせたものであらう。攷證に、『和らかなる單衣などの、身にしたしく、疊り付を、妹が膚の和らかになびきたたなはれるにたとへていへる也』といひ、美夫君志も全くそれに從つてゐるが、單衣云々といふ說明が少し煩瑣である。代匠記精に、『和ナル膚ノタヽマレツクナリ。タヽナハルト云詞、源氏枕草子ニオホシ。』と云つて遊仙窟の細々腰支參差疑ニ勒斷一を引いてゐる方が寧ろ簡明である。柔膚尚乎は舊訓ヤハハダスラヲ(註疏・新訓・檜嬬手同訓)。

久老ニコハダスラヲ（攷證・美夫君志同訓）。古義ニギハダスラヲ（新考・講義・全釋同訓）等の訓がある。卷一（七九）に、柔備爾之家乎擇。卷三（四八一）に、丹杵火爾之家從裳出而とあるのや、その他、和布、和魂、柔田津などの例があり、なほ古事記の白丹寸手、青丹寸手は書紀に白和幣、青和幣と書き、古語拾遺に種レ麻以爲二青和幣一の和幣に注して古語爾伎弖とある、そのニギも同じ意味である。スラは一事を强めて他を類推せしめる助詞である。卷三（三八二）に、雪消爲山道尙乎名積叙吾來並二。卷五（八九二）に、寒夜須良乎。卷六（九九五）に、草木尙春者生管。同卷（一〇〇七）に、不言問木尙妹與兄有云乎。卷七（一二八五）に、春日尙田立羸公哀。卷九（一六九八）に、春雨須良乎間使爾爲。卷十（二〇〇一）に、從蒼天往來吾等須良汝故。卷十一（二五五三）に、夢耳見尙幾許戀吾等。卷十七（三九六九）に、麻須良和禮須良余能奈可乃。卷十五（三六二五）に、可母須良母都麻等多具比弖。卷十七（三九六二）に、安良志乎須良爾奈氣枳布勢良武などとある用例を參照せよ。

○劒刀・於身副不寐者　ツルギタチ・ミニソヘネネバと訓む。劒刀を身に副ふの枕詞にしたのは刀は常に身に佩いて居るものだからである。萬葉卷十一（二六三五）の、劒刀身爾佩副流大夫也、卷四（六〇四）の、劒太刀身爾取副常夢見津等は未だ意味の殘つて居る例であり、卷二（二一七）に、劒刀身二副寐價牟、卷十一（二六三七）に、劒刀身副妹之、卷十四（三四八五）に、都流伎多知身爾素布伊母

乎等とあるのは枕詞の例である。於身副不寐者は共に身を並べて寐ないことで、『夫君の薨まして後に、皇女の御獨ねをいふ』(考)。『川島皇子薨じたまひてより、泊瀬部皇女、御ひとりねなるを、かくいへり』(攷證)等にてその意味が分かるが、此邊だけを抽出して味へば、男性が女性に對していふ語氣のやうでもある。

○烏玉乃・夜床母荒良無一云何禮奈牟　ヌバタマノ・ヨドコモアルラムと訓む。烏玉乃枕詞夜床も荒るらむである。ヌバタマノといふ枕詞は既出の如く、射干の實の黑色なるに本づく。夜床は書紀仁德卷に、瑳用廼虛烏那羅陪務耆瀰破とあり、萬葉卷十八(四一〇一)に、奴婆玉乃夜床加多左里とある。荒良無の荒は、荒るの意で、卷一(三三)に、荒有京見者悲毛。卷二(一六八)に、皇子乃御門之荒卷惜毛。同卷(二三四)に、己伎太久母荒爾計類鴨。卷三(四四〇)に、在京師荒有家爾。卷六(一〇四七)に、人裳往莫者荒爾異類香聞等と同語原である。考に、『古へは、旅行しあとの床をあやまちせじと謹む也、死たる後も一周はしかすれば、塵など忌みてはらはねば、荒らんといふ也』と云つてゐる。檜嬬手で、『荒とは疎く放るをいふ。靈床などの荒れたるを云ふにはあらず』と云つてゐるが、攷證でそれを稍ひろめて、『疎く遠ざかる意にて、家のあるゝ、庭のあるゝなどいふも同じく、こゝは皇子おはしまさずして、夜の床も、疎くあれぬらんとなり』と云つて居る。**○一云。何禮奈牟**　カレナムと訓

む。離れなむである。類聚古集・神田本に何字阿とあるから、アレナム、荒れなむである。考(略解同説)ではアレナムと改めて居る。恐らく阿が原字であるだらう。

○所虚故・名具鮫魚(兼)天　ソコユヱニ・ナグサメカネテと訓む。其故に慰め兼ねてである。ソコユヱは既に注した。名具鮫魚天は舊訓下の氣留まで續けてナグサメテケルと訓んでゐるが、略解で、久老の説として魚は兼の誤で名具鮫兼天だとし、諸家それに從つた。萬葉卷十一(二八一四)に、吾戀者名草目金津。卷六(九六三)に、吾戀之千重之一重裳奈具佐末(米)七國。卷十五(三六二〇)に、故悲思氣美奈具左米可禰氏等の例がある。ソコユヱニは人麿は既に前の長歌にも用ゐて居り、一旦、アルラムで小休止をして、これで二たび續けて居るのである。

○氣留(田)敷藻　ケダシクモと訓む。蓋しくも、恐らくの意、舊訓前の句とつづけてケルシキモで意味不明であつたが、略解に、『久老云、魚は兼の誤、留は田の誤にて、なぐさめかねてけたしくもと訓べしといへり。しかあらたむれば、或本の公もあふやとと有にもよくつづけり』と云つた。以來諸家それに從つた。これは古寫本(金・類)には留が田に爲つて居るから確説と言つていい。なほ、代匠記精で、既に、『此下ニハ今按數句ノ脱タルカ。敷藻相屋常念而。此敷藻ハケタシクモノ上ヲ脱セルカ。相ノ字ヨリ下ハアフヤト思ヒテト七字一句ナルベシ』と云つてゐる。萬葉卷四(六八〇)

に、蓋毛人之中言聞可毛。巻七(一一二九)に、蓋毛琴之下樋爾嬬哉匿有。巻十(二一五四)に、蓋毛秋野之芽子也繁將散。巻十二(三一〇五)に、蓋雲吾戀死者誰名將有裳。巻十七(四〇一一)に、氣太之久毛安布許等安里也等などの例がある。

○相屋常念而〔一云公毛相哉登〕 アフヤトオモヒテと訓む。逢ふやと思ひてである。舊訓は前からの續きで、シキモアフヤト・オモヒテであつたのを代匠記で前記の如く考へ、略解でかく改めた。考では念の下に愛也師などの脱漏ありとし一云を取つてハシキヤシキミモアフヤトとした。古義では常の下に御の脱ありとしアフヤトオモホシテと訓んだ。略解の説が一番無理がない。恐らく本當であらう。そして久老の説も根源は代匠記まで溯るのである。**○一云。公毛相哉登** キミモアフヤトと訓む。キミモといふこと贅で旨くない。考でこれを採用し、『これは獨ねして君しのぶ悲みのやらんすべ無さに、前々敷氈と並敷て、ともねしつつ御心をなぐさめし妻屋ぞとおもひて、御墓屋に行てやどりなん。君にも逢なんとて行給ふと云也』と云つた。これは敷藻相辭冠屋常念而と訓んだために如上の言をしてゐるのである。

○玉垂乃・越乃大野之 タマダレノ・ヲチノオホヌノと訓む。玉垂の枕詞越智の大野のである。タマダレノは冠辭考に、『さて玉は緒を貫て物に掛垂て餝にする物なれば、玉だれの緒といひかけたる

なり。中略萬葉卷十二に、眞玉就、越乞兼而とつづけたるなどをもて、越智とよみて、緒の一語にかかる事を知るべし』。魚彥の楢の嬬手に、『玉に緒をつらぬきてたるるをいふ』とあるのを山田博士の講義が認めて、筑後の高良玉垂神社に想到し、服飾に及んで、『若服飾とせば、支那にいふ玉佩といふものをさすにあらざるか』といつてゐる。越智野は今の大和高市郡越智岡の大字越智及北越智あたりである。其處に皇子の墓處があつたものと見える。大井氏云、『越智岡は東は眞弓佐田の連岡となり、西は曾我川に至り極めて低い丘陵地であつて、曾我川を境として西方に平野展け新澤村領に屬してゐるが當時の越智野である。而して越智野は少くともこの平野のみとは考へられず東方越の丘陵地を主としたものと思はれる』(萬葉集大和歌枕考)。

○旦露爾・玉藻者埿打　アサツユニ・タマモハヒヅチと訓む。朝露に玉裳は濡れよごれといふ意。玉藻は玉裳の借字で、皇女の服裝をほめてかく云つた。山田博士は、ヒヂは濡れる義、ヒヅチは埿に染み漬る意と、二つを區別して解釋してゐる。萬葉卷二(二三〇)に、白妙之衣埿漬而立留。卷三(四七五)に、展轉埿打雖泣將爲須便毛奈思。卷七(一〇九〇)に、吾妹子之赤裳裾之將染埿。卷九(一七一〇)に、赤裳泥塗而殖之田乎。卷十三(三三二六)に、展轉土打哭杼母飽不足可聞。卷十五(三六九一)に、安佐都由爾毛能須蘇比都知由布疑里爾己呂毛弖奴禮弖。卷十七(三九六九)に、波流佐米爾爾保比

比豆知底等の用例がある。埿は、書紀神代卷上、訓注に、埿土此云二于毘尼一云々、和名鈔水土類に、泥。孫愐云、土和レ水也。奴低反（和名比知利古 一名古比千）云々とある。

○夕霧爾・衣者沾而　ユフギリニ・コロモハヌレテと訓む。衣は沾れての意。これは前の句の對で、一つはヒヅチといひ、一つはヌレといつてゐるが、前出の用例にもその對句的表現があるのである。川島皇子の薨去は、朱鳥五年辛卯秋九月といふのだから、ここで夕霧といふのは秋霧だといふことが分かる。萬葉卷九（一七〇二）に、妹當茂苅音夕霧來鳴而過去。卷二十（四四七七）に、由布義理爾知杼里乃奈吉志佐保治乎婆等の例がある。

○草枕・旅宿鴨爲留・不相君故　クサマクラ・タビネカモスル・アハヌキミユヱと訓む。御薨去になられて逢ひがたい君ゆゑに、かくのごとく寒い荒野のうへに旅寐したまふのである。ここのカモは疑問に起つて咏歎に落著くのである。考に、『古へは新喪に墓處を作りて、一周の間人をして守らせ、あるじもをり〳〵行てやどり、或はそこに住人も有し也』とあり、頭注に、『紀に（舒明）蘇我氏諸族等、悉集爲二嶋大臣一造レ墓而、次二于墓所一、爰摩理勢臣、壞二墓所之廬一云々、此外にも紀にあり』とある。古義では、爲留は爲須だらうといつてゐる。それは不敬だから、萬葉卷三（二三五）の雷之上爾廬爲流鴨も爲須鴨だといふのと同一論法である。このユヱは既に云つたが、卷十五（三

五八六)に、和我由恵爾於毛比奈夜勢曾。卷十一(二三九五)に、行行不相妹故久方天露霜沾在哉などのユヱと同じである。

大意 〔飛鳥〕明日香川の上流の方に生えて居る玉藻は、下流の方へ流れて行つて互に觸れあふことが出來るものを、〔玉藻成〕玉藻が靡きあひ寄りあふ如くに、靡き寄りあつた夫の君の、〔多田名附〕あの豐かな和膚すらをも、もはや〔劒刀〕身に副へて寐ることが叶はぬから、〔烏玉乃〕夜の床もおひおひと疎く荒れるであらう。(一云、離れ寂しくなるであらう。)それゆゑに心を慰めかねて、ひよつとせば夫の君にお逢ひすることもあるだらうと、(一云、君も逢ふだらうと、)〔玉垂乃〕越智の大野に慕ひゆき、そこの朝露に裳の裾が濡れよごれ、夕霧に衣服が濡れてまでも、〔草枕〕旅寐をして御いでになるか。逢はれない夫君ゆゑに。といふぐらゐの意味である。

鑑賞 明日香川の玉藻の靡くことと、上流の方の玉藻は下流の方へ流れて來て、そこの玉藻と觸れあふことが出來るといふやうなことを云つて、皇子と皇女とは二たび觸れあふことが出來ない趣に導き出してゐるのであるが、前の歌の時にも云つた如く、實際の事柄を持つて來てゐる。卽ち明日香川にしろ、其處に生えてゐる玉藻にしろ、その玉藻の具合にしろ、實際の觀察をして居つて、その實物を使つてゐるのである。

『玉藻なす、か依りかく依り、靡かひし、嬬乃命乃、たたなづく、柔膚すらを』をば、全體の長歌を綜合せず、左注の川島皇子云々といふことを知らずに、これだけの句を抽出して味ふと、男が女に對して歎く歌の趣に響く。特に、原文には、『嬬乃命』と書いてあつたり、『たたなづく柔膚すらを』などとあるのを讀むと、女性の豐麗な體膚を聯想するほどに官能的である。

併し、これをば作者が皇子の御體として詠じたとせば、そこが現代の吾等にも注意すべき點があるので、人麿は、皇女と亡き夫君の皇子との御關係をば、直ちに男女の相寐る全體として感じてゐるから、縱ひ皇子の御身であつても自然に、『たたなづく柔膚すらを』といふやうな句になつたと解釋することも出來るのである。

また、『玉藻なすか依りかく依り靡かひし嬬乃命のたたなづく柔膚すらを』までは、皇女の御身のこととし、『劍大刀身に副へ寐ねば』は皇子の御身のこととして解釋することも出來る。つまり、さういふ御行爲も、御本人同志が表現するのでなく、第三者の人麿が客觀の位置に居て詠ずるのだから、さういふ不意識の表現も可能だといふことにもなる。これは或る時浮んだ私の小感だが、棄てずに書記して置く。

その次の、『そこ故に慰めかねて』以下は、まがふかたなき皇女の御身の上を詠じて居り、切實な

感情をば、極めて自然な聲調であらはして居る。『そこ故に、慰めかねて、けだしくも、逢ふやと念ひて』のところは、稍小きざみに堅く切迫した聲調であるのに、それに續く、『たまだれの、遠智の大野の、朝露に』はのびのびとした連續的聲調で、聲たてて歎き擧げるごときひびきである。さういふ點は人麿一流でいかにも旨い。

それから、『逢はぬ君ゆゑ、旅宿かもする』と云はずして、『旅宿かもする。逢はぬ君ゆゑ』と結んでゐる。反る句法だが、この、『逢はぬ君ゆゑ』といふ句は据わりが好いばかりでなく、柔かき中に感慨を籠らせる響を持つて居る。人麿は其處を生かしてゐる。

全體として、前の日並皇子尊殯宮之時の歌などとちがひ、もつと短く、聲調も雄大莊嚴でないが、また極めて平凡なことを云つてゐるに過ぎぬが、惻惻として迫つてくる哀韻はこの歌をして優秀ならしめて居る。私は長歌を作ることが出來ぬが、學べばかういふところから學ぶであらう。

ただ人麿一流の枕詞の多いのは、どう學ぶべきかいまだ決定しない。例へば『草枕』と附けたり、『劒刀』と附けたりするところは、いまだよく分からない。しかし、『たたなづく』、『たまだれの』のところは、どうしても缺くべからぬものであるから、さうすれば相待上、『劒刀』も、『草枕』も自然に附くべきものかも知れない。

かういふ人麿聲調と、試に憶良あたりの、『石木をも、問ひ放け知らず、家ならば、形はあらむを、恨めしき、妹の命の、吾をばも、如何にせよとか、鳰鳥の、二人竝び居、語らひし、心背きて、家離り坐す』（卷五。七九四。訓は新訓）の聲調と比較すると、その特色がはつきりとして來る。憶良の方は、堅くて、詰まつてゐる。枕詞などは甚だ尠い。同じ挽歌でゐながら、かういふ差別がある。人麿の歌調には、暈があつても、その進行の具合は憶良のものなどに較べると實に朗朗として、振幅の大きい波動をおもはしめる。

皇女に獻る歌に、『たたなづく、柔膚すらを、劒刀、身に副へ寐ねば、ぬばたまの、夜床も荒るらむ』といふことを咏じてゐる。これも現代の吾等が若し皇女に獻る歌を作るとせば、かういふことは云ひ得ないのである。この覺官的表現について、現代一般人は心の焦點を極めなければ鑑賞は困難に相違ない。徳川時代にあつてさへ、眞淵・雅澄あたりでも、『不敬』などといふ思想が先入してゐたために、正當の鑑賞の出來なかつた場合がある。文選卷第十五の古詩の中に、文綵鴛鴦を雙ぶ。裁ちて合歡被となす。著するに長く相思を以てし、縁するに結びて不解を以てす云々の句がある。この方は綺麗でむづかしく云つてゐるが、人麿の歌の方はもつと直接で素朴である。ただ男女相合して綿々の情を托するに於ては同様であるからついでに書いた。

後記。 以上を評釋しをはつた後、武田博士の新解を見るに、嬬の命について、『妻の命は、この歌を獻つた皇女をいふ』といひ、身に副へ寢ねばについて、『皇子は薨去せられて、妻の命の柔膚をも身に副へては寢ず、ただ獨御墓の中に寢るよしである』といひ、夜床も荒るらむについて、『薨去せる皇子の寢床を推量して、妻を伴はねば、荒涼として居るならむの意』といつてゐる。博士の說は私が鑑賞の部で一言したのに符合するのである。つまり、『玉藻なすか依りかく依り靡かひし嬬乃命乃たたなづく柔膚すらを』までは皇女の御事とし、『劒刀身に副へ寢ねば』を皇子の御事とした解釋である。なほ、博士は柔膚をヤハハダと訓んで居る。

參考 古事記木梨輕太子の歌に、『隱國の泊瀨の川の上つ瀨に齋杙を打ち下つ瀨に眞杙をうち齋杙には鏡をかけ眞杙には眞玉を掛け』云々といふのがあり、それが萬葉卷十三（三二六三）にもある。また卷十三（三三三〇）に、『隱口の長谷の川の上つ瀨に鵜を八頭潜け下つ瀨に鵜を八頭潜け上つ瀨の年魚を咋はしめ下つ瀨の鮎を咋はしめ』云々といふのがあり、人麿の卷一（三八）の、『上つ瀨に鵜川を立て下つ瀨に小網さし渡し』は、或はかういふ前蹤を考察し得るのかも知れない。さすれば、この歌の、『上つ瀨に生ふる玉藻は下つ瀨に流れ觸らふ』なども幾何かの關聯は否定出來ない。次に、卷九（一七六四）の、『ひさかたの天の河原に上つ瀨に珠橋渡し下つ瀨に船浮け居ゑ』云々。卷十七（三九〇七）の、『泉の河の上つ瀨にうち橋わたし淀瀨には浮橋わたし』云々とどういふ關係になるだらうか。なほこの言葉の吟味は、人麿の歌（一九六）とも關係があるから、重複して記述して置いた。

反歌一首

【一九五】敷妙乃(シキタヘノ)　袖易之君(ソデカヘシキミ)　玉垂之(タマダレノ)　越野過去(チヌニスギヌ)(スギユク)　亦毛将相八方(マタモアハメヤモ)　一云、乎知野爾過奴(ヲチヌニスギヌ)

右或本曰、葬河島皇子越智野之時、獻泊瀬部皇女歌也。日本紀曰、朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑淨大參皇子川島薨。

右一〇九頁に評釋了。

○

【卷二・一九六】

飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 石橋渡し（一に云ふ、石浪） 下つ瀬に 打橋渡す 石橋に（一に云ふ、石浪） 生ひ靡ける 玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる 打橋に 生ひををれる 川藻もぞ 枯るれば生ゆる 何しかも わが王の 立たせば 玉藻のもころ 臥せば 川藻の如く 靡かひし 宜しき君が 朝宮を 忘れ給ふや 夕宮を 背き給ふや 現身と 思ひし時に 春べは 花折りかざし 秋立てば 黄葉かざし 敷妙の 袖たづさはり 鏡なす 見れども飽かず 望月の いやめづらしみ 思ほしし 君と時時 幸して 遊び給ひし 御食向ふ 城上の宮を 常宮と 定め給ひて あぢさはふ 目言も絶えぬ 然れかも（一に云ふ、そこをしも） あや

に悲しみ　ぬえ鳥の　片戀つま（一に云ふ、しつつ）　朝鳥の（一に云ふ、朝露の）　通はす君が　夏草の　思ひ萎えて　夕星の　か行きかく行き　大船の　たゆたふ見れば　慰むる　情もあらず　そこ故に　術知らましや　音のみも　名のみも絶えず　天地の　いや遠長く　偲び行かむ　み名に懸かせる　明日香河　萬代までに　愛しきやし　わが王の　形見にここを

飛鳥　明日香乃河之　上瀬　石橋渡（一云石浪）　下瀬　打橋渡　石橋（一云石浪）　生靡留　玉藻毛叙　絶者生流　打橋　生乎爲禮流　川藻毛叙　干者波由流　何然毛　吾王乃　立者　玉藻之如許呂　臥者　川藻之如久　靡相之　宜君之　朝宮乎　忘賜哉　夕宮乎　背賜哉　宇都曾臣跡　念之時　春部者　花折挿頭　秋立者　黄葉挿頭　敷妙之　袖携　鏡成　雖見不猒　三五月之　益目頰染　所念之　君與時時　幸而　遊賜之　御食向　木瓲之宮乎　常宮跡　定賜　味澤相　目辭毛絶奴　然有鴨（一云所己乎之毛）　綾

爾憐　宿兄鳥之　片戀嬬（一云爲乍）　朝鳥（一云朝露）　往來爲君之　夏草乃　念之萎
而　夕星之　彼往此去　大船　猶預不定見者　遣悶流　情毛不在　其
故　爲便知之也　音耳母　名耳毛不絶　天地之　彌遠長久　思將往
御名爾懸世流　明日香河　及萬代　早布屋師　吾王乃　形見何此焉

題意　明日香皇女木瓲殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌といふ題がある。明日香皇女は天智天皇の皇女で、續日本紀、文武天皇四年の條に、『夏四月癸未、淨廣肆明日香皇女薨、遣レ使弔ニ賻之一、天智天皇女也』とあるから、この歌は文武天皇四年夏の作だといふことが分かる。總論篇で、文武天皇の四年、人麿の想像年齡三十八位の處に配列して置いた。

『木瓲』は、眞淵の考、由豆流の攷證、山田博士の講義等に據つて、キノへと訓み、即ち城上で、和名鈔の大和國廣瀨郡城戸、現在の北葛城郡（舊廣瀨郡）馬見村大字大塚の城上岡（六道山畑地俗稱シンヤマ）に當つてゐる。（大和志料、吉田、辰巳、澤瀉、山田、奥野、阪口）即ち明日香皇女が薨ぜられて、城上の岡に殯宮を設けられた時（即ちこの場合は葬儀である）の歌だといふことが分かる。

さて、この歌の内容によると、御夫婦のなかからひを詠じてゐるので、眞淵は、忍坂部皇子をばこ

の皇女の夫君と想像し、この歌をば忍坂部皇子に獻じたのだらうと云つた。併し、攷證も美夫君志も、『これいかにもさる事ながら、みだりに改るを憚りて、しばらく本のまゝにておきつ』といひ、講義は、『かくの如き態度を以て萬葉集を說き、それを基として時勢を論じ、文化を談ぜむとするは大膽とやいはむ。妄斷とやいはむ。驚くべきことなりとす』と云つた。

語釋 **○石橋渡** 一云石浪 イハバシワタシと訓む。石橋は川の中に石を並べて、それを踏んで渡るのをいふ。自然にある、いはゆる飛石を人工的に改良したものである。下に玉藻の生ふるといふ句のあるのは水中の石だからである。舊訓イハハシワタシ。古鈔本中、細井本イシハシワタシと訓み、神田本には漢字の左にイシハシワタシと書いてある。代匠記では、『イシハシワタシトヨムベシ』といひ、考以下は舊訓に從つた。イハハシと訓む理由は冠辭考以下、諸注釋書、特に古義・攷證・講義等に委しい。萬葉卷七(一一二六)に、明日香河湍瀨由渡之石走無。同卷(一二八三)に、橋立倉椅川石走者裳壯子時我度爲石走者裳。卷十(二二八八)に、石走間間生有貌花乃花西有來等の例がある。和名鈔に、石橋に伊之波之の訓があるが、單にこれを以て律することが出來ないから、舊訓どほりのイハバシといふのに從つた。**○一云。石浪** 浪は借字にて石並卽ちイシナミと訓み石橋と同樣の意味である。卷二十(四三一〇)に、安麻能河波伊之奈彌於可婆都藝弖見牟可母とあるから、イシナミ

と云つたことが分かる。これもイハナミと云つてもいいのかも知れないが、イシナミと假名書にしてゐるところを見れば、古代人はただ一様にのみ云はずにもつと自由であつたのかも知れない。

○打橋渡　ウチハシワタスと訓む。打橋渡すである。舊訓ウチハシワタシであつたが、古義で、『ウチハシワタスと訓べし』といひ、美夫君志でも、『舊訓にはワタシとあれど、此はワタスと訓べし』といひ、註疏・新考・講義等それを認めた。捃解にもワタスと訓んでゐることは校本萬葉で知ることを得た。『打橋』の意は板丸太などで簡單に作つた橋である。既に諸注釋書に委しいが、講義に、『按ずるに、これはなほ打橋の義なるべく、その橋は、高橋、浮橋、石橋などに對していへる語にして、板なり、材なりをば、彼方の岸と此方の岸とに打渡してかけたる橋をいふなるべし。これに對して、水中に石を置くを石橋といひ、水面に材木又は船を浮かべてつくれるを浮橋といひしなるべく、その打橋の岸の極めて高きにかけたるが高橋なるべきなり』とあるのは精しい。日本紀神代卷に於㆓天安河㆒亦造㆓打橋㆒。同天智卷童謠に、于知波志能都梅能阿素弭爾（ウチハシノツメノアソビニ）。萬葉卷四（五二八）に、打橋渡（ウチハシワタス）須奈我來跡（ナガクト）念者（オモヘバ）。卷七（一一九三）に、事聽屋毛打橋渡（コトユルセヤモウチハシワタス）。卷十（二〇六二）に、天河打橋度（アマノガハウチハシワタス）公之來爲（キミガコムタメ）。同卷（二〇五六）に、天河打橋度（アマノガハウチハシワタセ）。卷十七（三九〇七）に、泉河乃可美都瀨爾（イヅミノカハノカミツセニ）宇知橋和多之（ウチハシワタシ）等の用例がある。

○生靡留・玉藻毛敍・絕者生流　オヒナビケル・タマモモゾ・タユレバオフルと訓む。舊訓オヒナビカセルであつたのを、代匠記オヒテナビケル。考オヒナビケルの改訓があつた。玉藻モゾは玉藻モマタぐらゐの意で、ゾの係となる。卷二（二一〇）に、吉雲曾無寸（ヨケクモゾナキ）。同卷（二一三）に、好雲叙無（ヨケクモゾナキ）。卷十一（二五五〇）に、立念居毛曾念（タチテオモヒヰテモゾオモフ）。卷十三（三三〇五）に、汝乎曾毛吾丹依云（ナヲゾモアニヨストフ）、吾川毛曾汝丹依云（アヲモゾナニヨストフ）等の例がある。タユレバオフルは、玉藻が一たび無くなつても二たび生えることが出來るといふ意。

○打橋・生乎爲禮流　ウチハシ・オヒヲヲレルと訓む。打橋に生ひ撓れてゐるといふ意。舊訓ウチハシ・オフルヲスレル、代匠記ウチハシ・オヒヲセレルであつたのを、考でウチハシニ・オヒヲヲレルと訓んだ。そして、爲は烏の誤だとした。併し美夫君志で、爲の儘でヲの音のあることを證明した。童蒙抄で、『師案、生の字靡の訛、爲は烏の誤りにて、なびきをゝれるとよむ也』とあるから、考の訓も師の訓であつたのかも知れない。意味はタワワ・トヲヲなどと同じく、撓ふばかり、なびく、繁り、澤山になどの意味があり、此處は玉藻が多く生えて靡きゆらぐさまに使つてゐる。また宣長は、ヲヲリはワワリにて、萬葉卷五（八九二）の、布可多衣乃美留乃其等和和氣佐我禮流（ヌノカタギヌノミルノゴトワワケサガレル）のワワケ。卷八（一六一八）の、秋芽子乃宇禮和和良葉爾置有白露（アキハギノウレワワラハニオケルシラツユ）のワワラハ等をその證とし、『わゝ〳〵と繁生てあるを云也』と說明してゐる。いづれにしても、良行四段の動詞にヲヲルといふのがある

ことが確かにて、實例は、卷六（九二三）に、春部者花咲乎遠里。同卷（一〇一二）に、春去者乎呼理爾乎呼里。同卷（一〇五〇）に、巖者花開乎呼理。同卷（一〇五三）に、巖者山下耀錦成花咲乎呼里。卷十（二二二八）に、芽子之花開乃乎再入緒見代跡可聞。卷十三（三二六六）に、春去者花咲乎呼里。卷十七（三九〇七）に、春佐禮播花咲乎乎理等である。又卷三（四七五）に、山邊爾波花咲乎爲里。卷八（一四二一）に、春山之開乃乎爲里爾。卷九（一七四七）に、小鞍嶺爾開乎爲流櫻花者。同卷（一七五二）に、坂上之踏本爾開乎爲流櫻花乎等は、この人麿の歌に於けると同樣『爲』をヲと訓ませてゐる例である。

○川藻毛叙・干者波由流　カハモモゾ・カルレバハユルと訓む。川に生える藻も枯るればまた生えるといふ意。草木のカルも河池などのカルも同一語原だから、ここに干を用ゐたのも道理だと講義に說いてある。また生をハユといふこと、萬葉卷六（九四〇）に、家之小篠生とあつて借字でやはりハユと訓ませてある。なほ、卷十四（三四九二）に、楊奈疑許曾伎禮婆伴要須禮の例がある。モ・ゾは既に說いたが、人麿の歌にこの例の多いのは注意すべきである。

○立者・玉藻之如許呂　タタセバ・タマモノモコロと訓む。御立になれば玉藻の如く（モコロは如しに當る）といふぐらゐの意。立者は舊訓タチタレバ。代匠記タタセレバ（美夫君志同訓）。考タタスレバ。略解タタセバ（註疏・新考・新訓・新解同訓）。山田氏タテバ。玉藻之如許呂云々は舊訓タマモノゴトク・コロフセバと次

の句にかけて訓んでゐたが、如字が金澤本に母とあるので、山田孝雄（アララギ第十四卷一號、萬葉訓義考）・橋本進吉の二博士がそれをモコロと訓んだ。また山田氏は、『如一字にてはその義を示し、許呂はその下部の音を示したりと見て、モコロとよまれざるにあらず』と云つてゐる。下には如久と書いてあるから、如許呂のコロは如久のクの如くに音を表示したとせば原文の如字を其儘認定してもいいやうである。萬葉卷十四（三五二七）に、於吉爾須毛乎加母乃母己呂。卷二十（四三七五）に、伊波妣等乃和例乎美於久流等多多理之母己呂等の例がある。

○臥者・川藻之如久　コヤセバ・カハモノゴトクと訓む。臥し給へば川藻の如くである。舊訓コロフセバ。新考コヤセバ（新訓・新解・新講・全釋・總釋等同訓）講義フセバ。前にタタセバと訓んだから、此處もコヤセバの訓に從つた。つまり敬語にした。推古紀廐戸皇子の歌に、斯那提流箇多烏箇夜摩爾伊比爾惠弖許夜勢屢諸能多比等阿波禮。萬葉卷三（四二一）に、高山之石穗乃上爾君之臥有。卷九（一八〇七）に、奥津城爾妹之臥勢流。卷十三（三三三九）に、占裳無偃爲公者。同卷（三三四二）に、偃爲公矣今日今日跡等の例がある。

○靡相之・宜君之　ナビカヒシ・ヨロシキキミガと訓む。互に御むつまじく親まれた・立派な背の君がといふ意。考に、『此宜とは皃などの足ひそなはれるをいへり』といひ、古義に、『何事も御

心のまゝに、打あひかなひたるよしなり』といひ、攷證に、『よろしは物の足りそなはれるをいへる言なり』と云つてゐる。この君を童蒙抄では夫君のことだといひ、古義では忍壁皇子だといひ、講義では、『この君は蓋し、明日香皇女の背の君をさし奉れるならむ』といひ、美夫君志・新解・全釋・新講等皆同様に解し、澤瀉新釋では、『單に君とある場合は男をさすが普通である』と云つて居る。日本紀雄略卷に、伊底拖智能與盧斯企夜磨（イテタチノヨロシキヤマ）。應神卷に、豫呂辭枳辭摩之魔（ヨロシキシマシマ）。萬葉卷六（一〇五〇）に、山並之宜國跡（ヤマナミノヨロシキクニト）。卷十八（四一一一）に、神乃御代欲理與呂之奈倍（カミノミヨヨリヨロシナベ）。卷二十（四三一五）に、仁保比與呂之（ニホヒヨロシ）伎多加麻刀能美夜（キタカマトノミヤ）等の用例がある。然るに、この、『宜しき君』を女性卽ち皇女だといふ説がある。代匠記の、『起立坐臥皆シナヤカカナル御貌ヲホメマツルナリ』といふ文の前後の關係を綜合すれば、契沖は、この『君』を皇女と解釋して居るやうである。また、考で、『貞などの足（タラ）ひそなはれる』云云といふ口氣を見れば女性に解してゐたらしい。また、檜嬬手は明かに、『君は卽ち皇女也』といひ、次に近藤芳樹の註疏は、『されば上に玉藻と川藻とを以て序としたるは、こゝに玉藻の如く川藻の如く靡相之宜君之（ナビカヒシヨロシキキミガ）といひ下さん爲にて、ナビカヒは御夫婦ともに靡きあひて睦じきなり。宜キとは何事も取よろひてあかぬことなきを云ふ詞にて、靡き合玉ひて睦じくせさせ玉ひし皇女がといへるなり。上に吾王（ワガオホキミ）といへるは皇女なること辨をまたず。こゝの宜君（ヨロシキキミ）は皇子にやといふ説もあれど、

芳樹思ふに猶皇女なり。もし之を皇子とする時は下の朝宮夕宮は皇子の忘れ玉ひ背き玉ふことゝなるをや。忘れ玉ひ背き玉ふ皇女の現身にて坐すべき宮をすてゝ、幽宮(ヨミ)にいでませるゆゑにいへるにあらずや。よく／＼思ひ辨ふべし』といひ、井上博士の新考に、『ナビカフは前にも云へる如くナビキアフにて、かたみによりそふことなり。ヨロシキキミ之の君も亦皇女なり。(芳樹同說)。上にワガオホキミノといひたれば、再キミ之とはいふまじきなれど、かく打返していふは一つの格なり。畢竟まづワガオホキミノといひ、さて立歸りて、云々ノ君之といへるなり。ヨロシキは眞淵の云へる如く容貌の具足せるをいふ。君之の之は、上に君乃とあるに對照してノとよむべし』と云つてゐる如くである。愚見は種々考へたすゑに第一說に從つた。なほ鑑賞の部にも補足する筈である。

○朝宮乎・忘賜哉・夕宮乎・背賜哉　アサミヤヲ・ワスレタマフヤ・ユフミヤヲ・ソムキタマフヤと訓む。前の、『何しかも』を受ける句法で、夫君の居られる朝の御殿をどうして忘れ給ふのや(御いでにならぬのにや)、夫君の居られる夕の御殿をどうしてお見棄てなさるのや(御いでにならぬのにや)といふ意である。そしてこれは皇女の夫の君が朝夕宮殿に居られても妃の皇女が薨ぜられたのを云つてゐるのである。朝宮と云つたから、夕宮といひ、忘(わす)ると云つたから背(そむ)くと云つて調子を取つてゐる。それだから朝宮の方が主である。卷一(三)の、朝獵爾(アサカリニ)今(イマ)立須良思(タタスラシ)暮獵爾(ユフカリニ)今(イマ)他田渚良之(タタスラシ)の句法と似て

ゐる。朝宮は、萬葉巻十三（三二三〇）に、石走甘南備山丹朝宮仕奉而（イハバシルカムナビヤマニアサミヤニツカヘマツリテ）といふ例がある。代匠記に、『朝宮夕宮ハ、後ニ朝庭夕庭トヨメル類ニテ朝夕ニツケテ景趣アル宮殿ナリ』といひ、古義に『朝夕の宮』と解し、美夫君志に、『朝夕常にましますす宮』と解し、新解・新釋・新講・全釋も大體同樣で、夫君が朝夕居給うた御殿といふやうに解した。從つて、其處に皇女も共に居られたぐらゐに解し、それが薨ぜられて居られないことを、夫君の朝宮を皇女が忘れ給ひ、夫君の夕宮を皇女が背き給ふ（去り給ふ、棄て給ふ）といふやうに敍してゐるのである。また、檜嬬手は、『君』を皇女とする說だが、『朝宮夕宮とは、常に皇女の御方よりあした夕べに、大君の宮に出でゝ、みけしきを伺ひ給ふ禮儀（キヤコト）あるを以てなり』といひ、講義は、『さて夫君に朝夕に仕へたまふことをいへるなるべし』。『朝夕に夫君に宮仕へたまふことをいへるなり』と云つて居る。『夫君に仕へる』といふ意味がやはり含まつてゐるであらうが、ただ『宮仕』といふこと、或は、『伺ひ給ふ禮儀』といふことを餘り重く取りたくないのである。そこで私は、『御いでにならぬ』ぐらゐに口譯して置いた。『朝夕の御殿を去りたまふ』ぐらゐの意でいいとおもふ。次に、『君』を男性に取る說のうち、『君が』の『ガ』を第一格と解して、古義では、『朝夕の宮事を執賜はぬぞといふ意なり』と云つてゐるが、此は贊成出來ない。次に、給フヤのヤは疑問だが輕く寧ろ咏歎の方に傾いてゐる。

以上で意味の上の一段落をなして、其處で小休止がある。

○宇都曾臣跡・念之時　ウツソミト・オモヒシトキニと訓む。皇女が此世に御いでになつた時にの意。舊訓オモヒシトキノ。考オモヒシトキニ。拈解オモヒシトキ。此處はやはり、オモヒシトキニのニがある方が調をなすやうである。その次が、ハルベハと四音だからである。考に、『顯の身にておはせし時といふのみ。念の言は添ていふ例、上に見ゆ』といひ、講義に、『語釋としてはなほ、思ふの意あるべし。卽ち皇女が現身としておはししをば、傍人よりは事實上現身なりと思ふ事當然にして、うつそみにおはししといへば客觀的の事實をいひ、うつそみと念ひしといへば、傍人の主觀的の語となる』とある。講義の説明は細かい。萬葉卷二(二一〇)に、打蟬等(ウツセミト)念之時爾(オモヒシトキニ)取持而(トリモチテ)吾二人(ワガフタリ)見之(ミシ)とあるのも人麿の歌句である。このオモフの語注意していい表現法の一つである。

○春部者・花折挿頭・秋立者・黃葉挿頭　ハルベハ・ハナヲリカザシ・アキタテバ・モミヂバカザシと訓む。春部者は、春の頃にはの意。秋立者は秋になればの意で、立秋を譯してさう云つたのから始まるだらう。萬葉卷一(三八)に、春部者(ハルベハ)花挿頭(ハナカザシ)持(モチ)、秋立者(アキタテバ)黃葉頭刺理(モミヂカザセリ)といふ類似の例がある。皇女の生前の御事を敍したものである。なほ卷十九(四一四五)に、春設而(ハルマケテ)如此(カク)歸等母(カヘルトモ)秋風爾(アキカゼニ)黃葉山乎(モミヅルヤマヲ)不超來有米也(コエコザラメヤ)とあるのもやはり對立の手加減が加へられて居る。

○敷妙之・袖携　シキタヘノ・ソデタヅサハリと訓む。敷妙之は枕詞、妙は總て絹布の類を云ひ、敷く絹布類といふ意味から、衣・枕・袖等に冠らせるのである。携りは、携へといふのが原で、一處に、共になどの意で、良行四段に活用する。此處は袖をつらねるといふ意で、睦じい様をあらはしてゐる。萬葉巻五（八〇四）に、余知古良等手多豆佐波利提。同巻（九〇四）に、伊射彌余登手乎多豆佐波里。巻九（一七四〇）に、細有殿爾携二人入居而。巻十（一九八三）に、妹與吾携宿者。巻十七（三九九三）に、於毛布度知宇麻宇知牟禮底多豆佐波理伊泥多知美禮婆。巻十八（四一二五）に、多豆佐波利宇奈我既利爲底。巻二十（四四〇八）に、之路多倍乃蘇涅奈岐奴良之多豆佐波里和可禮加弖爾等等がある。

○鏡成・雖見不猒　カガミナス・ミレドモアカズと訓む。鏡成といふのは見るの枕詞で、鏡の如く見ると續けた。ミレドモアカズは萬葉に甚だ多い表現で、『見れど飽かぬかも』といふ短歌の結句だけでもなかなか多いのである。古義ではミレドモアカニと訓んだ（新訓・新解同訓）。また長歌軌範でも、『鏡なす見れどもあかに』と、『望月のいやめづらしみ』と音響法で、同韻の方がよいとして、アカニ訓を踏襲してゐる。このあたりは、皇女とその夫君との關係の情緒纏綿たるところを敍してゐるのである。見れどもあかずといふのは、皇女の飽かぬことが主であるが、お互にといふ意も含まつ

てゐると解していいであらう。

○三五月之・益目頰染　モチヅキノ・イヤメヅラシミと訓む。望月の如く彌めづらしみである。メヅラシはめでたし・愛すべしといふ意である。三五月は支那人の造語で、三五は十五であるから十五夜の月の義訓である。劉孝綽の林下映月詩に、明明三五月、垂影當高樹。無名氏の古詩に、三五明月滿、四五蟾（文選作詹）兔缺。元帝の登顏園故閣詩に、高樓三五（一作月）夜、流影入丹墀。沈約の昭君辭に、惟有三五夜、明月暫經過。王僧孺の月夜詠陳南康新有所納に、二八人如花、三五月如鏡。徐陵の關山月に、關山三五月、客子憶秦川。張正見の和陽侯送袁金紫葬に、唯當三五夜、攏月暫時明。王褒の詠定林寺桂樹に、年至長新圍、月輪三五映。荀仲擧の銅雀臺に、誰堪三五夜、空對月光圓などの例がある。メヅラシミには、萬葉卷十（一九六二）に、霍公鳥乎八希將見今哉汝來の例があり、なほ、メヅラシの例は、卷三（三七七）に、恒見杼毛目頰四吾君。同卷（二三九）に、春草之益目頰四寸吾於富吉美可聞。卷六（一〇五九）に、開花之色目列敷。卷七（一一四六）に、目頰敷人乎吾家爾。卷十八（四〇五〇）に、米豆良之伎吉美我伎麻佐波。卷十九（四二八五）に、大宮能内爾毛外爾母米都良之久布禮留大雪等の例があり、また、『ミ』のある類似用法のものには、卷四（四九四）に、人乎許曾戀之益者恨三念。卷十一（二六一四）に、眉根掻下言借見思有爾。卷十六（三七九一）に、春避而野邊尾回者

面白見我矢思經蚊。同巻（三八二〇）に、構屋之形乎宜美諾所因來。巻三（三八二）に、不見而往者益而戀石見等の例がある。

○所念之・君與時時・幸而・遊賜之　オモホシシ・キミトトキドキ・イデマシテ・アソビタマヒシと訓む。舊訓オモホヘシを、考でオモホシシと訓み、舊訓キミトトキドキを、考でキミトヲリヲリ（略解同訓）と訓んだが、古義で舊訓を好いとした。舊訓ミユキシテであつたのを、考でイデマシテと改めた。此處のオモホシシは前のに續くので、皇女がさう思はれたの意である。また下の句は、皇女が夫君と共に御出遊になつた意である。トキドキと使つた例は、書紀允恭巻の歌に、宇彌能波摩毛能余留等枳等枳弘。萬葉巻二十（四三二三）に、等伎騰吉乃波奈波佐家登母。巻十一（二四五七）に、木本時依來我念人等とあるたぐひである。

○御食向・木瓲之宮乎・常宮跡・定賜　ミケムカフ・キノヘノミヤヲ・トコミヤト・サダメタマヒテと訓む。城上の宮をば永久の御墓陵と定め給うての意。御食向といふ枕詞は、供へる御食卽ち御饌には、飯をはじめ肴には種々あるから、それに向ふ意で、粟・葱・蜷等に冠らせたものであるから、ここのキも從來は酒の意だとしたが、古義では葱或は葱の韲の意だらうと云つた。常宮は永久の御殿卽ち御墓陵として鎭まり給ふ意である。萬葉巻二（一九九）に、朝毛吉木上宮乎常宮等高之

〔定〕奉而。卷六（九一七）に、安見知之和期大王之常宮等仕奉流左日鹿野由といふのがある。

○**味澤相・目辭毛絶奴**　アヂサハフ・メゴトモタエヌと訓む。あぢさはふ（枕詞）目言も絶えぬ、即ち、御目にかかることも、物申上げることも出來なくなつたといふ意である。この枕詞は冠辭考で、味鳧といふ鳥が群れるから、ムレの約メに冠らせたのだと云つて居る。目言の用例は、萬葉卷四（六八九）に、海山毛隔莫國奈何鴨目言乎谷裳幾許乏寸。卷十一（二六四七）に、東細布從空延越遠見社目言踈良米絶跡間也等がある。また味澤相の例は、卷六（九四二）に、味澤相妹目不數見而。卷十一（二五五五）に、味澤相目之乏流君今夜來座有。卷十二（二九三四）に、味澤相目者非不飽携不問事毛苦勞有來などである。

○**然有鴨**（一云所己乎之毛）**・綾爾憐**　シカレカモ（一云、ソコヲシモ）・アヤニカナシミと訓む。然あればかも、心切に哀しみ悲しみの意。然有鴨は舊訓シカアルカモ。略解シカレカモと訓んだ。一云の、ソコヲシモは、それをばといふ意で稍通俗化してゐる。憐は舊訓カシコミ。古鈔本中アハレフ（神・細）。カナシミ（西）で、代匠記はカナシミと訓み、美夫君志はカナシモと訓んだ。

○**宿兄鳥之・片戀嬬**（一云爲乍）　ヌエドリノ・カタコヒツマ（一云、シツツ）と訓む。鵺鳥は鵼子鳥、虎鶫で、ひいひいと長く引いて啼く聲が哀調があるので、片戀に冠らせた。片戀嬬は片戀をしてゐる夫の意で、

婦は借字である。皇女が亡くなられたので殘つた夫君が徒らに片戀をして歎かるる趣である。一云の片戀シツツの方は例の如く通俗化せられて分かりよいが、本文の方が確かな技法である。ことに片戀夫と名詞にしたところが上代言語の一つの特色でもある。片戀の枕詞としては、萬葉卷三（三七二）に、容鳥能間無數鳴雲居奈須心射左欲比其鳥乃片戀耳爾は容鳥に關係し、卷八（一四七三）に、霍公鳥片戀爲乍鳴日四曾多寸といふのは杜鵑に關係してゐる。古鈔本中、神田本の朱書にカタコヒノツマとあり、なほ西・細・溫がカタコヒノツマと訓んでゐる。『ノ』の入つて居るのも一つの味ひである。攷證ではカタコフツマとも訓んだ。

○朝鳥一云朝露・往來爲君之　アサドリノ一云、アサツユノ・カヨハスキミガと訓む。亡くなられた皇女を慕ひ通ひたまふ夫君がといふ意。朝鳥といふ枕詞は、萬葉卷九（一七八五）に、朝鳥之朝立爲管群鳥之群立行者などとある如く、朝鳥は塒を立つて行くから、さう冠らせたものであらう。なほ、卷三（四八一）に、朝鳥之啼耳哭管雖戀とあるのは、啼に鳴くに懸けた例である。**一云**。**朝露**は、古鈔本では、霧（金・類・神・西・細・溫・矢・京）であるから、恐らく霧であらう。それでも技巧としては上手でない。

○夕星之・彼往此去　ユフヅツノ・カユキカクユキと訓む。夕星は古寫本中神田本・溫故堂本にユフホシノと訓んだ。此は卽ち金星で和名鈔天部に、兼名苑云、大白星、一名長庚、暮見二西方一

爲長庚〈此間云由不豆々〉。毛詩に、東有啓明西有長庚とある。金星は朝は東に見え、夕は西に見えるから、彼往此往に冠らせた。萬葉巻五（九〇四）に、夕星乃由布弊爾奈禮婆。巻十（二〇一〇）に、夕星毛往來天道。巻十七（三九九一）に、可由吉加久遊岐見都禮騰母等の例がある。

○大船・猶預不定見者　オホフネノ・タユタフミレバと訓む。大船は萬葉巻二（一二二）に、大船之泊流登麻里能絶多日二。巻十一（二三六七）に、大舟之由多爾將有人兒由惠爾。巻十九（四二二〇）に、於保夫爾能由久良由久良耳等とある。猶預不定は古寫本中神田本ヤスラフ。舊訓タユタフである。以上の四字をタユタフと訓ませたのであるが、タユタフの例は、巻四（五四二）に、今者不相跡絶多比奴良思。同巻（七一三）に、吾背子之情多由多比不合頃者。巻七（一〇八九）に、海原絶塔浪爾立有白雲。巻十一（二六九〇）に、妹者不相猶預四手。同巻（二七三八）に、大船乃絶多經海爾重石下。同巻（二八一六）に、天雲之絶多不心。巻十二（三〇三一）に、天雲乃絶多比安心有者。巻十五（三七一六）に、安麻久毛能多由多比久禮婆。巻十七（三八九六）に、家爾底母多由多敷命などがある。

○遣悶流・情毛不在　ナグサムル（オモヒヤル）・ココロモアラズと訓む。慰むる心もないの意。遣悶流は舊訓オモヒヤル（代匠記・童蒙抄・考・攷證・美夫君志・講義）であるのを、略解（宣長説）にナグサモル（檜嬬手・同訓）と訓み、古義にナグサムル（註疏・新考・新解・新訓・新釋・全釋・新講・總釋等同訓）と訓んだ。講義などの説を約めれば、元來遣悶といふの

は支那の熟語で、その義をとれば、ナグサムルとも訓めるが、萬葉巻一（五）に、思遣鶴寸乎白土。巻二（二〇七）に、吾戀千重之一隔毛遣悶流情毛有八等などがあり、思遣、遣悶をオモヒヤルと訓めるし、また假名書の例に、巻十七（四〇〇八）に、和賀勢故乎見都追志乎禮婆於毛比夜流許等母安利之乎といふのがあるのが最も積極的な例だとしてゐる。なほ、巻十二（二九四一）に、念八流跡状毛我者今者無といふ例がある。次に第二のナグサムルと訓む方では、巻五（八八九）に、奈具佐牟流許許呂波阿良麻志。巻十三（三二八〇）に、名草武類心乎持而。巻十七（三九六九）に、奈具佐牟流許己呂波奈之爾。巻十八（四一一三）に、奈具佐無流許己呂之奈久波。同巻（四一二五）に、那具左牟流許己呂波安良牟乎等の例があり、特に前の例の中、巻二（二〇七）の、人麿作『吾戀千重之一隔毛遣悶流情毛有八等』と同じ句が巻四（五〇九）に、『吾戀流千重乃一隔母名草漏情毛有哉跡』となつてゐるので、この説の積極的な證據として居る。私はしばらく第二説に從つたが、兩方ともいい訓である。

〇其故・爲便知之也　ソコユヱニ・スベシラマシヤと訓む。それ故に、爲る術を知らうか知らないといふ意である。其故は既出（一六七）。爲便知之也は舊訓スベモシラシヤ。代匠記スベモシラジヤ。考スベシラマシヤ（略解・攷證・美夫君志・講義同訓）。玉の小琴セムスベシラニ（古義・檜嬬手同訓）。講義は、訓にいまだ疑問もあり、誤字のことも考へられるが假りに考の訓に從ふと云つてゐる。ソコユ

エニの語は前の長歌の時にも既に說いたごとく、連續せしめるための人麿の工夫した一表現法であらう。

○音耳母・名耳毛不絕　オトノミモ・ナノミモタエズと訓む。せめて皇女の御噂だけでも、御名だけでも、絕えず偲びたいと下へ續く意である。萬葉卷二（二〇七）の人麿の歌に、梓弓聲爾聞而（中略）聲耳乎聞而有不得者。卷十一（二八一〇）に、音耳乎聞而哉戀。卷十七（四〇〇〇）に、於登能未毛名能未母伎吉底。卷十八（四〇三九）に、於等能未爾伎吉底目爾見奴布勢能宇良乎等の似た表現の例がある。『君の御噂君の御名のみをも絕えず』（講義）にて大體分かるとおもふ。

○天地之・彌遠長久　アメツチノ・イヤトホナガクと訓む。天地の悠久なるが如くいよいよ久しくの意。この「之」について、講義で、『ここの之は蓋し主格にして、天地の彌遠く長くなるべく、その天地の彌遠長くといふ全體を以て修飾格に立てたるものなるべく思はる』と云つてゐる。私は、この「之」をば必ずしもさうでなく解して來、「之」には下の修飾語と上の主格とを連結すべき、兩方の要素を含むと解して來た。それだから、『天地の如く悠久』とも解して來た。その點は融合的であつて必ずしもはつきりと極めなくともいいやうにおもふ。

○思將往・御名爾懸世流・明日香河・及萬代　シヌビユカム・ミナニカカセル・アスカガハ・ヨ

ロヅヨマデニと訓む。御墓ひ偲び行かむ。明日香といふ御名にして居られる明日香河、萬代までに(結句の形見にここをに續く)といふ意である。思將往は舊訓オモヒユカム。考でシヌビユカムと訓んだのに從つた。萬葉卷二(四六四)に、秋去者見乍思跡妹之殖之。卷十一(二七五四)に、小竹之眼笑思而宿者。卷十二(三〇九六)に、猶戀久思不勝烏。卷十三(三三六八)に、眞神之原從思管還爾之人等は思をシヌブと訓ますべき例である。懸世流は懸くの敬語で、同じ名稱を附けてゐるの意。『名に負ふ』などと似てゐる。卷三(二八五)に、妹名乎此勢能山爾懸者奈何將有。卷十(一八一八)に、子等名丹關之宜朝妻之。卷十四(三三六二或本歌)に、和須禮遊久伎美我名可氣氐。卷十五(三七六五)に、麻蘇可我美可氣弖之奴敝等等の例があり、卷十六(三七八七)の、妹之名繫有櫻花開者の繫有も講義では或はカカセルと訓むのではなからうかと云つて居る。

○早布屋師・吾王乃・形見何此焉　ハシキヤシ・ワガオホキミノ・カタミニココヲと訓む。愛きやし、即ち愛し奉るべき、皇女の、形見にここをしようかナアといふ意。ハシキヤシの用例は、萬葉卷七(一三五八)に、波之吉也思吾家乃毛桃。卷八(一六一九)に、愛哉師妹乎相見爾。卷十一(二四二九)に、早敷哉相不子故。卷十二(三一四〇)に、波之寸八師志賀在戀毛爾有之鴨。卷十三(三三七一)に、愛八師君爾戀毛我之心柄。卷十六(三七九一)に、端寸八爲今日八方子等丹等がある。形見何此焉は舊

訓カタミカコ、モ。代匠記にカタミカコ、ヲ（童蒙抄・考・攷證・新訓・新解・全釋・總釋同訓）と訓み、略解では何を荷の誤とする宣長の説に據つてカタミニココヲ（檜嬬手・古義・美夫君志・註疏・新考・講義・新釋同訓）。なほ美夫君志では支那に何荷通用音の例を示し、澤瀉氏は、巻七（一二九〇）の、妹與吾此何有跡莫語之花（イモトワレトココニアリトナノリソノハナ）の『何（ニ）』と、巻一（二三）の、射等籠荷四間乃珠藻苅麻須（イラコガシマノタマモカリマス）の『荷（ガ）』が通用されてあることを證明した。特に、何といふ字は本來はガといふ音に使つてゐるから、若し何をニと訓むことが出來れば好都合だと講義に云つてゐるから、訓證の方から行けばカタミニココヲとなるのである。併し、音調の上からいへば、カタミニココヲの方が弱くてカタミカココヲの方が強くて、結句としての效果は寧ろカタミカココヲの方にある。

また、巻九（一八〇四）に、蜻蜓火之心所燎管悲悽別焉（カギロヒノココロモエツツナゲクワカレヲ）の『を』は強い詠歎の意をこもらせてゐるから、やはりそのやうに、『形見かここを』の『を』を、單に第四格の『を』、『をば』としてしまつては物足りない。此處はやはり、詠歎の『を』に解すれば、なぜ作者が、結句としてかういふ『を』を使つたかが分かるのである。カタミニココヲと訓む方で、『飛鳥川をば、萬代までもかはらぬ吾皇女の形見にして慕ひ奉らむとなり』（講義）。『飛鳥川を、萬代までも、わが皇女のおかたみとして、こゝをお偲び申さう』（新釋）と解し、カタミカココヲと訓む方で、『形見であることかなと嘆息したのである。ココヲは更に川を指示して意を強める。明日香川を皇女の御形見としてお慕ひ申しあげ

ようとである』(新解)と解してゐる。そして意味は結局同じところに落著いてゐる。この微細の國語學的解釋は未だ私にはよく出來ないから、しばらくカタミニココヲと訓み、カタミカココヲをも側に置いて鑑賞しようといふのである。

大意 〔飛鳥〕明日香川の上流の瀬には飛び石を渡し(置き)、下流の瀬には假橋を渡す(造る)。その飛び石に生ひて靡いて居る玉藻は絶えたかと思ふとまた生える、假橋に生ひ繁つてゐる川藻は枯れたかと思ふとまた生えるのに、どうしてわが皇女は、皇女がお立ちになればその玉藻のやうに、お臥りになればその川藻のやうに、靡き寄り親まれたところの、あの立派で尊い夫の君の居られる朝の御殿をお忘れになつて、薨去なされたのであらうか。夕の御殿を御見棄になつて、薨去なされたのであらうか。悲しくも計りかねる御事である。

この世に皇女御在世の折は、春は花を折りかざし、秋は黄葉を挿頭にせられて、〔敷妙之〕互に御袖をつらね、〔鏡成〕鏡のやうに見ても見飽かず、〔三五月之〕滿月の如くにますます立派だとお思ひなされた、夫の君と一しよに御出遊なされし、〔御食向〕城上の宮をば、今日は永久の墓陵と定め給うて、〔味澤相〕もはや御目にかかることも物申上げることも叶はぬやうになつた。

さういふ次第ゆゑ、夫の君は、切に悲まれ、今は〔宿兄鳥之〕ひとりの片戀夫の御ありさまで皇女

をお偲びになりながら、城上の宮に〔朝鳥〕お通ひになる御姿が、〔夏草乃〕夏草の萎れるやうにしをれ〔夕星之〕夕星のめぐるやうに往來なされ、〔大船〕ふらふらと逡巡沈思なされる御有様をお見うけ申すと、吾々とても心を慰めかね、爲すべき方法も分からぬ。そこで、せめては皇女の御噂だけなりとも、御名だけなりとも、天地の遠く久しい如くに、遠く久しく何時までも偲び奉らう。そして皇女の御名につけられたところの明日香川をば、萬代までも、吾が皇女の御形見として慕ひ奉らう。あゝその御形見か。此處よ。

鑑賞　この長歌の内容は、明日香川の瀬の石橋と打橋のことをいひ、そこに生ふる玉藻は枯れてもまた二たび生えることをいひ、然るにその玉藻の如くに靡き寄られた夫の君が實に立派な御方であつたのにも拘はらず、それをも見すてて永遠に御かへりにならぬことを云つて一段落としてゐる。次に第二段は、皇女生前に、夫君と圓かに睦まれたことをいひ、然るに今は悲しくも墓陵に鎭まり給うたことを云つてゐる。次は第三段で、あとに殘つた夫の君の悲歎の御事を敍し、それに同情する人情に托して、せめて名のみなりとも偲び奉らう、明日香皇女と御名につけられた明日香川を永遠に記念し奉らうといふのを以て結んでゐるのである。眞淵は、『初めを明日香川もておこして、こゝにかくいへる巧み此人のてぶり也』と褒めてゐるが、實際人麿がさういふことを意識して作つ

たものと見える。

そして以上の如き三段の構成は、謂はば一つの理論の如きもので、當時にあつては一つの進歩した文學的方嚮であつたに相違ない。この歌を鑑賞するには、先づさう心を据ゑて味ふことが大切である。卽ち人麿時代の風潮を念頭に置いて吟味することとなるのであつて、この歌の思想を現代の吾等の標準を以てすれば極めて幼稚單純なものに過ぎぬけれども、若し當時の人麿がこれだけの構成をしてゐるから、現代に復活せしめたなら、どういふ構成をするだらうかと想像することも亦可能なわけである。

それから、漫然として讀過すると、以上の三段の構成はただ空に憑つて、理窟上こね上げたやうに取られがちであるが、皇女の薨去は初夏の候であるから、それを目中に置くと、川藻のことを云つたり、夏草のことを云つたりしてゐるのは、作者はおのづから實際を歌つてゐるといふことに氣附くのである。これは石見から上來する歌の時にも言及したが、さういふ寫生的實行があるために、現代の吾等の心にも蘇るものがあり、同感し得るものがあるとおもふのである。

それから、この歌で氣の附くのは、夫婦間の情味をば挽歌で歌つてゐる點であつて、然かもその表現がみづみづしく官能的である點が私などの大に注目してゐるところであり、前に西洋映畫云々

と云つたことが此處にも當嵌まり得る。『立たせば玉藻のもころ臥せば川藻の如く靡かひし宜しき君』といひ、『鏡なす見れども飽かず望月のいやめづらしみ思ほしし君』といふあたりは、この歌にあつて注意すべき表現特徴だとおもふ。

『片戀づま』といふ語も味ふべき語であり、古鈔本に、『片戀のつま』と訓んでゐるのも棄てがたい好い語である。『よろしき』、『めづらしみ』などといふ表現は、現代では既に一般化し通俗化してゐるので、もはや人麿時代と同じ語感を感じ得ない憾がある。當時にあつては現時吾等の感得して居るのよりもつと複雜な情調をこれらの表現から感得したものの如くである。

前に、玉藻のことを云つたり、川藻の生えることを云つたり、また『立たせば玉藻のもころ臥せば川藻の如く靡かひし』といふところを見ると、どうしても女性卽ち皇女の御事のやうに見える。然るに、『川藻の如く靡かひし、宜しき君が朝宮を忘れ給ふや』と續けてゐるので、其處に解釋上の分裂があるのである。卽ち、一つは、『君』といふ語は一般に男性に使ふ場合が多いから、この場合も皇女の背の君、配偶者と解するのであるが、その上の、『川藻の如く靡かひし』を男性の行爲と解しては腑に落ちない點があるのである。そこで第二の說が發生する。契沖・眞淵もこの說らしく、守部の檜嬬手には『君は卽皇女也』と明かに書いて居り、註疏に、『ナビカヒは御夫婦ともに靡きあ

ひて睦まじきなり。宜キとは何事も取よろひてあかぬことなきを云ふ詞にて靡き合玉ひて睦じくせさせ玉ひし皇女がといへるなり』といひ、新考に、『ヨロシキキミ之の君も亦皇女なり（芳樹同說）。上にワガオホキミノといひたれば再キミ之とはいふまじきなれど、かく打返していふは一つの格なり』といつて居るのは卽ちそれである。つまり、一つの說では男であり、一つの說では女なのである。

この分裂は、『靡かひし』と、『宜しき君』との連續の具合によること、前の歌（一九四）の場合に似てゐるのである。併し、此處の『君』は前後の關係から、どうしても君卽ち皇女の配偶者のやうである。そんなら、上の『川藻の如く靡かひし』の句はどうなるかといふに、これは皇女の御事になる。そして、一たび『川藻の如く靡かひし』と皇女の御事を敍して來て、突如として男、卽ち背の君の御事となるところに、人麿一流の省略技法があり、融合（フエルシユメルツンク）があるのである。その場處で、夫婦が互に睦み合ふといふ具合に、女が男の方へ移つて、融合するのである。諸注釋書でも、例へば攷證などで、『皇子皇女御夫婦のなからひ御むつまじく中略離れたまはず、靡き居給ひしと也』と折角云つて居りながら、いまだ自然に解釋が附かなかつたのである。

此處の句法を、もつと分かり易く分析すれば次の如くになるかとおもふ。

何しかも、わが王（皇女・女性）が、靡かひし、宜しき君（背の君・男性）の』（第二格）朝宮を忘れ給ふや。』

となる。もつと單純化すれば、『何しかも、王が、背の君の朝宮を忘れ給ふや』となり、その『君』の說明として、『わが王の、靡かひし』といふ具合になり、また、その『靡かひし』の說明として、『立たせば玉藻のもころ臥せば川藻の如く』と云つてゐるのである。さう解釋すれば存外簡單であり、井上博士のやうに、『わが王の』と、『宜しき君が』とは、同一人で、繰返しの句法だとせずともいいのである。また、井上博士說は、『ヨロシキ君ノ』と訓ませて、『ワガ王ノ』に相對せしめてゐるのは、實に用意周到である。併し、『君ガ』と訓むにせよ『君ノ』と訓むにせよ、これを博士の如く第一格と解することは如何であらうか。

なぜ右の如きことを云つたかといふに、人麿の長歌の技法は、散文的常識を破つて、自在に省略融合の手段を成就してゐるといふことを注意せむがためであつた。

なほ、『春べは花折りかざし、秋立てば黃葉かざし』は皇女の御事のやうであり、『敷妙の袖たづさはり』は御二人の事に相違ないが、『鏡なす見れども飽かず』のところは皇女の形容のやうでもあるが、下につづく、『望月のいやめづらしみ思ほしし』を見れば、皇女が夫君のことを『望月のい

やめづらしみ思ほしし』と云ふやうに聞こえるのである。その次の、『君と時時いでまして』の句を見れば、正しく『君』は夫君のことに相違ない。夫君だとすれば、『鏡なす見れども飽かず、望月のいやめづらしみ思ほしし』はどうしても、夫君の形容といふことにせねばならぬが、愚見によれば、その邊は人麿一流の省略融合があるので、形容の如きも兩方へ滲透してゐると解釋するのである。

それから、終の方の、『音のみも名のみも絶えず天地のいや遠長く偲び行かむ』までは順當に分かるが、『み名に懸かせる明日香河萬代までに愛しきやしわが王の形見にここを』のところがさう明快には行かない。これが卽ち融合技法があるからである。

偲び行かむ。み名に懸かせる明日香河〔を〕、萬代までに、偲び行かむ。愛しきやしわが王の形見〔として〕偲び行かむ。その王の形見に〔か〕。ここを。

これだけの散文的文をば、あれだけに壓搾單純化して、韻文的效果を得てゐるのである。或は、『明日香河ヲバ』とせずに、『明日香河ハ』と第一格にすれば、

明日香河は、わが王の形見に。ここを。

卽ち、『形見に、嗚呼ここの河よ』といふやうにも取ることが出來る。兎に角、この邊の技巧は何か渾沌たる渦があり、常識的に平凡明快では無い。

この歌は前の泊瀬部皇女に獻つた歌と云ひ方が似てゐるが、あれよりも複雜で、骨折つてゐるやうに見える。そして言語と言語の繋がりに濃厚なところがあり、常識的に平板でない省略融合の技法があるので、潛心して味はないと味ひ難い點もある。併しそれだけ、輕く辷つて行かないので、挽歌としての切實眞率な效果を持つて居るのである。

この長歌を若し文武四年の作とせば、人麿の作歌では寧ろ晩期の方に這入る部類かも知れない。さうすれば相當の力量を考へていいのだが、人麿は決してなぐり咏みをしてゐないことも分かるのである。總論篇で、人麿の歌には『渾沌』が藏せられてあり、響が重厚切實で、『纖弱に澄まずに濁つて居る』と謂つたのは、比較的晩年作のこの歌の如きに據つても證明することが出來る。

この歌は皇女の殯宮時に作つたものだが、皇女を悼み奉るのに、不思議に夫君（背の君、配偶者）の事が出て來る。然かも、既に屢云つた如く、言葉の具合が皇女とも就かず夫君とも就かぬやうなところがある、『川藻の如く靡かひし宜しき君が』と云つたり、『望月のいやめづらしみ思ほしし君と時々』と云つたりしてゐる處が即ちそれである。然かもその夫君を讚美し、『宜しき君』といひ、『鏡なす見れども飽かず、望月のいやめづらしみ思ほしし』といひ、夫君を極力描寫してゐると同時に、情緒纏綿たりし趣を寫してゐる。して見れば、この夫君は恐らくは皇族の御方であつたに相

違ない。特に、朝宮、夕宮の文字は縦ひ言語の綾があるにしろ、矢張り御殿と解すべきである。眞淵が前の歌の題の中の忍坂部皇子云々をこの歌の題に持つて來たのは大膽過ぐることには相違ないが、一首を讀んでの感がさうであつたと看るべきである。それから、『夏草の思ひ萎えて夕星のか行きかく行き』あたりの句を見ればその夫君に非常に作者の人麿が同情し、『慰むる心もあらず』云々と云つてゐる態度は、或はその夫君に獻じた歌らしいといふところがある。眞淵が獻ニ忍坂部皇子ートし、『此長哥に、夫君のなげき慕ひつゝ、木のべの御墓へ往來し給ふさまをいへるも、上の泊瀨部皇女の乎知野へ詣給ふと同じ様也。然れは此端にそのかよはせる皇子の御名を擧べきに、今はこゝには落て、上の歌の端に入し也』云々と云つた態度は後世の嚴格な考證學者の一擊に會つたが、一たび訓詁考證の域を通過して、鑑賞の部に入るときに、人々はもつと自由な心の狀態に居ることが出來る。卽ちこの歌の中の皇女の對者の『君』といふものを想像し、假定し、或は特定の名を附して歌を味ふことも亦可能である。詩歌の鑑賞と歷史の穿鑿との違ふ點は其處にも存じてゐる。眞淵が、この歌を評し、『初めを明日香川もておこして、こゝにかくいへる巧み、此人のてぶり也』といつてゐるのは、これも證據なき、『人まろ大舍人にてかゝる皇子たちの御ともをもせしならん』といふ事を腦裏に浮かべつつ味はつたからであつただらう。鑑賞の妙味は、時にはかういふ放奔な態度

にあることをも知らねばならない。

次に、長歌軌範に大體據つて、この歌の形態を考察すると、次のごとくになる。

（第一段）

とぶとりの　あすかのかはの
　　かみつせに　いはばしわたし
　　しもつせに　うちはしわたす
　　　　いはばしに　おひなびける　たまももぞ　たゆればおふる
　　　　うちはしに　おひををれる　かはももぞ　かるればはゆる

（第二段）

なにしかも　わがおほきみの
　　たたせば　たまものもころ
　　こやせば　かはものごとく
なびかひし　よろしききみが
　　あさみやを　わすれたまふや
　　ゆふみやを　そむきたまふや

（第三段）

うつそみと　おもひしときに
はるべは　はなをりかざし
あきたてば　もみぢばかざし
しきたへの　そでたづさはり
かがみなす　みれどもあかず
もちづきの　いやめづらしみ
おもほしし　きみとときどき　いでまして　あそびたまひし
みけむかふ　きのへのみやを　とこみやと　さだめたまひて
あぢさはふ　めごともたえぬ』

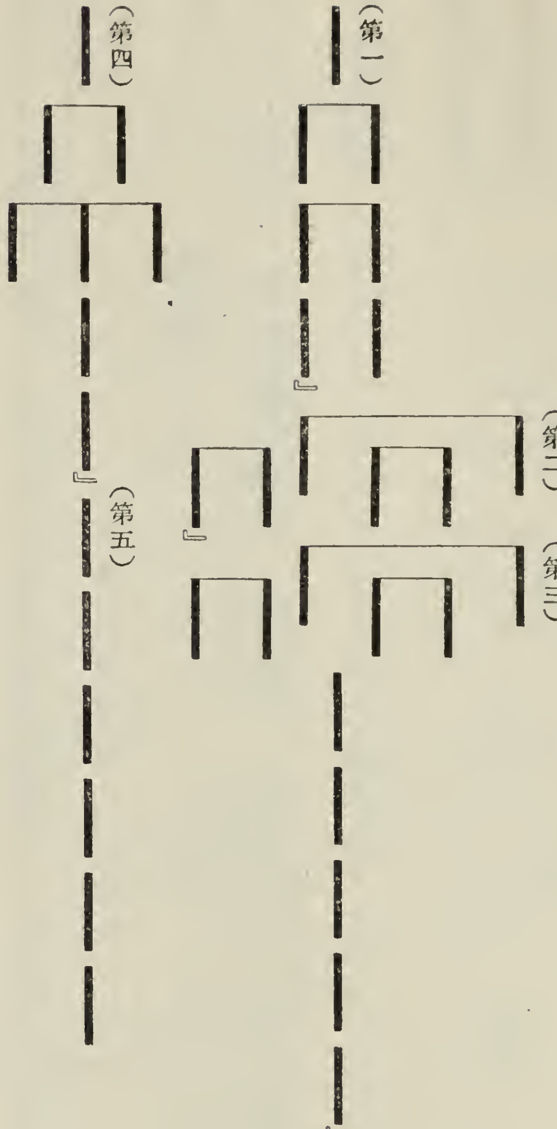
（第四段）

しかれかも　あやにかなしみ
ぬえどりの　かたこひづま
あさどりの　かよはすきみが
なつくさの　おもひしなえて
ゆふづつの　かゆきかくゆき
おほふねの　たゆたふみれば
なぐさむる　こころもあらず　そこゆゑに　すべしらましや』

（第五段）

おとのみも　なのみもたえず　あめつちの　いやとほながく　しぬびゆかむ　みなにかかせる

あすかがは　よろづよまでに　はしきやし　わがおほきみの　――かたみにここを



参考　巻十七（四〇〇〇）の家持作に、『清き瀬に朝夕ごとに立つ霧の思ひ過ぎめや在り通ひいや毎年に外のみもふり放け見つつ萬代の語ひ草と未だ見ぬ人にも告げむ音のみも名のみも聞きて羨しぶるがね』といふのがあるが、これは一九六、一九九あたりの歌句、即ち、『音のみも名のみも絶えず』。『天のごとふり放け見つつ玉襷かけて偲ばむ恐かれども』などの影響である。また、巻三（四三一）の山部赤人作『葛飾の眞間の手兒名が奥津城を此處とは聞けど眞木の葉や茂りたるらむ松が根や遠く久しき言

のみも名のみも吾は忘らえなくに』の中にも、『言のみも名のみも』云々といふのがある。卷十三（三三三〇）に、『隱口の長谷の川の上つ瀬に鵜を八頭潜け下つ瀬に鵜を八頭潜け上つ瀬の年魚を咋はしめ下つ瀬の鮎を咋はしめ麗し妹にあゆを惜しみ投ぐる箭の遠離り居て思ふそら安からなくに嘆くそら安からなくに衣こそは其れ破れぬればつぎつつも又も逢ふと言へ玉こそは緒の絶えぬれば括りつつまたも逢ふと曰へまたも逢はぬものは孋にしありけり』とあるのは、種々の要素があつて、單に人麿的とのみいふことが出來ないが、人麿のこの歌らしいところもある。そして古事記の歌だの、憶良あたりと通ふ歌句もあり、稍細かいし、簡淨と謂ふわけには行かない。

短歌二首

【一九七】明日香川　四我良美渡之　塞益者　進留水母　能杼爾賀有萬思 一云水乃與杼爾加有益

右一一四頁に評釋了。

【一九八】明日香川　明日谷 一云左倍　將見等　念八方 一云念香毛　吾王　御名忘世奴 一云御名不所忘

右一一七頁に評釋了。

○

かけまくも　ゆゆしきかも 一に云ふ、ゆゆしけれども 言はまくも　あやに畏き　明日香の　眞神の原に　ひさかたの　天つ御門を　かしこくも　定めたまひて　神さぶと　磐隠ります　やすみしし　吾が王の　きこしめす　背面の國の　眞木立つ　不破山越えて　高麗劍　和蹔が原の　行宮に　天降り坐して　天の下　治め給ひ 一に云ふ、拂ひ給ひて 食國を　定めたまふと　鳥が鳴く　吾妻の國の　御軍士を　召し給ひて　ちはやぶる　人を和せと　從服はぬ　國を治めと 一に云ふ、拂へと 皇子ながら　任し給へば　大御身に　大刀取り帶かし　大御手に　弓取り持たし　御軍士を　率ひたまひ　齊ふる　鼓の音は　雷の　聲と聞くまで　吹き響せる　小角の音

も（一に云ふ、笛の音は）　あたみたる　虎か吼ゆると　諸人の　おびゆるまでに（一に云ふ、聞き惑ふまで）　捧げたる　幡の靡は　冬ごもり　春さり來れば　野ごとに　著きてある火の（一に云ふ、冬ごもり春野燒く火の）　風の共　靡くがごとく　取り持てる　弓弭の騷　み雪降る　冬の林に（一に云ふ、木綿の林）　飄風かも　い卷き渡ると　思ふまで　聞の恐く（一に云ふ、諸人の見惑ふまでに）　引き放つ　箭の繁けく　大雪の　亂れて來れ（一に云ふ、霰なすそちより來れば）　從服はず　立ち向ひしも　露霜の　消なば消ぬべく　去く鳥の　競ふ間に（一に云ふ、朝霜の消なば消ぬとふに現身と爭ふはしに）　渡會の　齋宮ゆ　神風に　い吹き惑はし　天雲を　日の目も見せず　常闇に　覆ひ給ひて　定めてし　瑞穗の國を　神ながら　太敷き坐して　やすみしし　吾大王の　天の下　申し給へば　萬代に　然しもあらむと（一に云ふ、かくもあらむと）　木綿花の　榮ゆる時に　わが大王　皇子の御門を（一に云ふ、さす竹の皇子の御門を）　神宮に　裝ひまつりて　つかはしし　御門の人も　白妙の　麻衣著て　埴安の　御門の

原に　あかねさす　日のことごと　鹿じもの　い匍ひ伏しつつ　ぬば
たまの　夕になれば　大殿を　ふり放け見つつ　鶉なす　い匍ひもと
ほり　侍へど　侍ひ得ねば　春鳥の　さまよひぬれば　嘆も　いまだ
過ぎぬに　憶も　いまだ盡きねば　言喧ぐ　百濟の原ゆ　神葬り　葬
りいまして　麻裳よし　城上の宮を　常宮と　定めまつりて　神なが
ら　鎭りましぬ　然れども　わが大王の　萬代と　思ほしめして　作
らしし　香具山の宮　萬代に　過ぎむと思へや　天の如　ふり放け見
つつ　玉襷　かけて偲ばむ　恐かれども

挂文　忌之伎鴨（一云由遊志計禮杼母）　言久母　綾爾畏伎　明日香乃　眞神之原爾
久堅能　天津御門乎　懼母　定賜而　神佐扶跡　磐隱座　八隅知之
吾大王乃　所聞見爲　背友乃國之　眞木立　不破山越而　狛劒　和射
見我原乃　行宮爾　安母理座而　天下　治賜（一云拂賜而）　食國乎　定賜等

鳥之鳴　吾妻乃國之　御軍士乎　喚賜而　千磐破　人乎和爲跡　不奉仕　國乎治跡（一云掃部等）　皇子隨　任賜者　大御身爾　大刀取帶之　大御手爾　弓取持之　御軍士乎　安騰毛比賜　齊流　皷之音者　雷之　聲登聞麻低　吹響流　小角乃音母（一云笛乃音波）　敵見有　虎可叫吼登　諸人之　恊流麻低爾（一云聞惑麻低）　指擧有　幡之靡者　冬木成　春去來者　野毎　著而有火之（一云冬木成春野燒火乃）　風之共　靡如久　取持流　弓波受乃驟　三雪落　冬乃林爾（一云由布乃林）　飄可毛　伊卷渡等　念麻低　聞之恐久（一云諸人見惑麻低尒）　引放　箭繁計久　大雪乃　亂而來禮（一云霰成曾知余里久禮婆）　不奉仕　立向之毛　露霜之　消者消倍久　去鳥乃　相競端爾（一云朝霜之消者消言尒打蟬等安良蘇布波之尒）　渡會乃　齊宮從　神風爾　伊吹惑之　天雲乎　日之目毛不令見　常闇爾　覆賜而　定之　水穗之國乎　神隨　太敷座而　八隅知之　吾大王之　天下　申賜者　萬代　然之毛將有登（一云如是毛安良無等）　木綿花乃　榮時爾　吾大王　皇子之御門乎（一云刺竹皇子御門乎）

神宮爾　裝束奉而　遣使　御門之人毛　白妙乃　麻衣著　埴安乃　御門之原爾　赤根刺　日之盡　鹿自物　伊波比伏管　烏玉能　暮爾至者　大殿乎　振放見乍　鶉成　伊波比廻　雖侍候　佐母良比不得者　春鳥之　佐麻欲比奴禮者　嘆毛　未過爾　憶毛　未盡者　言左敝久　百濟之原従　神葬　葬伊座而　朝毛吉　木上宮乎　常宮等　高之〔定〕奉而　神隨　安定座奴　雖然　吾大王之　萬代跡　所念食而　作良志之　香來山之宮　萬代爾　過牟登念哉　天之如　振放見乍　玉手次　懸而將偲　恐有騰文

題意　高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌といふ題がある。皇子尊は皇太子であるから尊といふので、高市皇子は、持統天皇三年四月草壁皇太子薨去の後に皇太子となられた御方で同四年七月に太政大臣に任ぜられ（以二皇子高市一爲二太政大臣一）、同月の詔に皇太子の爲めに云々とあるのはこの皇子の事であらう（別爲二皇太子一奉レ施二於三寺一安居沙門三百二十九口一）。そして持統十年七月十日（庚戌）に薨去したまうたの

である。城上殯宮は、延喜式の三立岡墓（高市皇子在大和國廣瀨郡兆域東西六町南四町無守戸）とあるところで、今の北葛城郡（舊廣瀨郡）馬見村三吉字大垣内の三立山といふ地に當るといはれてゐる。そして明日香皇女の殯宮のあつた城上岡の北方約半里の地點に當つてゐる。然るに廣瀨社記には、『城戸郷河合村』とあるし、折口博士は、高市郡飛鳥村木部であらうと考へて居る。博士云。『當時特別の事情のない限り、諸皇子の常在處は、都の附近であつたので、飛鳥に近い木部に殯宮を造られたのはあるべき事である』（萬葉集辭典）。なほ奥野氏云。『此の場合上記廣瀨郡以外に、或は高市・城上・十市等諸郡にも同名地ありしと見て不都合なきが如し。城於道は高市又は十市郡中の城上への往還、又は云ひ得べくんば城上郡への通路か。木上宮。不明。恐らく上記の一に在りしなるべし』（萬葉大和志考）。

語釋 ○**挂文・忌之伎鴨**（一云由遊志計禮杼母） カケマクモ・ユユシキカモ（一云、ユユシケレドモ）と訓む。挂の字は掛・懸と通用し、詞に懸けていふ意である。カケマクモは、カケムコトモといふ意になる。『天皇詔旨勅久、汝藤原朝臣乃仕奉狀者、今乃未爾不在、掛母畏支天皇御世』（續日本紀。文武天皇、慶雲四年四月）。『闕母威岐藤原宮御宇倭根子天皇（中略）闕母威岐近江大津宮御宇大倭根子天皇』（同。元明天皇、慶雲四年七月）。『掛母畏岐我皇天皇爾授奉』（同。聖武天皇、神龜元年）等の用例があり、萬葉集には、人麿のこの用例についで、掛卷母綾爾恐之言卷毛齋忌志伎可物（卷三。四七五）。掛卷毛文爾恐之吾王皇子之命（卷三。四

七八)。決卷毛綾爾恐言卷毛湯湯敷有跡(卷六。九四八)。挂卷毛文爾恐山邊乃五十師乃原爾(卷十三。三二三四)。挂纏毛文恐藤原王都志彌美爾人下滿雖有(卷十三。三三二四)。可氣麻久母安夜爾可之古志可武奈我良和其大王乃(卷二十。四三六〇)などの用例がある。次にユユシは『忌』又は『齋忌』の字の示す如く『忌み憚る』意があり、畏しなどと同じく、『畏れ多い』などといふ意味に落著くのである。雄略天皇の御製に、美母呂能伊都加斯賀母登賀斯賀母登由々斯伎加母加志波良袁登賣(古事記)などの例もある。山田博士に從ふと、これはユムといふ動詞があつて、その語幹のユをユユと重ねて、形容詞としたものである。(講義卷第二)。カモは感歎の助詞である。ゆゑにこの句は、『言葉に出していふも畏れ多いことである』といふ意味に落著くのである。ただ、是等の句に續く、『かしこし』といふ語と同一でないからその區別をしつつ觀照すべきである。一云の、**由遊志計禮杼母**は、ユユシキカモよりも、間が延びてまづい。

○言久母・綾爾畏伎 イハマクモ・アヤニカシコキと訓む。言に出して申すも、誠に畏れ多いといふので、アヤはアナなどと同じく感歎詞で、應神紀に穴織を雄略紀に漢織と書いてあるのを見てもアナ・アヤの通じてゐたことが分かる。アヤはその感歎詞から副詞になつたものである。是等の句は前の句と意味の上では大差は無いが、語感と音調が違ふので感情表現の進行上、この差別を

必要とするのである。次に、このカシコキは連體形であるから、文法的には下に續く、つまり、明日香乃眞神之原に續くやうに考へられるが、此處は、前の句の、『ゆゆしきカモ』と云つて小休止を置いた程度に小休止があると考ふべきである。卽ち、『かしこきカモ』とあつてもいいのであるが、前の句でカモと云つたから此處では云はないのである。そこで、ここの連體形は、普通散文の文法的に、『かしこき明日香の眞神原』と續くのとは違ふと思ふのである。そしてこの技法は、人麿の模倣をした、家持の歌の、掛巻母綾爾恐之言巻毛齋忌志伎可物（巻三。四七五）を參考とすべく、家持の方が却つてまづいことを知らねばならない。長歌の技法は總じて連續の句法で進行してゐるのであるが、その間に、大小の休止を認容せねばならぬこと如是である。次に、なぜこの『掛けまくもあやに畏し』といふ如き表現法を取つたか、そして他の歌人も其を踏襲するに至つたか。それについて、佐藤仁之助翁の說がある。翁の說に據るに、もとは決して御名敬避のことはなかつた。その證は、祝詞に、『御名者白而辭竟奉者』。『御名者白氐』等と盡く云つて、決して、『掛巻母畏支』とは云つてゐない。それがかういふ表現をするやうになつたのは、種々周圍の狀態と大陸文化の踏襲とに因るといふのである。翁云。『以上の例證に就いて見れば、大化改新の際、前代より神名や王名を濫用して私に事物の名に掛け、又甚しきに至つては奴婢の名に神名王名を掛け、之を他の賄

賂に贈つて神名を穢汚するに至つたから、斷然之を禁じて、一切諱み避ける事に定められたのである』。『要するに、カケマクモカシコキの一句は孝德天皇大化改新に當り多く唐制に準據して古來の風習を一變したる結果、王名を名に負ふことを名譽としたる風習は、急轉して之を諱避するが禮法に合ふものとすることとなりて、新に此の風習を生じて天皇卽位の詔書にも用ゐらるゝことゝなりてより、後世は必ず此の一句の神若しくは天皇の上に冒らせることとなりて今日に及べるものとすべきである。(中略)諱名の風習は斷じて我が邦固有の風習でないことは、大略これで了解されると信ずる』(掛卷母畏支考。古語の新研究收)。人麿の歌の句は、尊上に對して申上ぐべき自然の聲としても鑑賞の出來ないことはないが、その背景に、翁の說のやうな根據があるならば、なほ味ひを深めることとなるのである。

○明日香乃・眞神之原爾　アスカノ・マガミノハラニと訓む。飛鳥は大和高市郡にあるが、あの邊の廣き地で、その中に眞神原があつたのである。大口能眞神之原爾零雪者甚莫零家母不有國(卷八。一六三六)。三諸之神奈備山從登能陰雨者落來奴雨霧相風左倍吹奴大口乃眞神之原從思管還爾之人家爾到伎也(卷十三。三二六八)などの例がある。崇峻紀に法興寺を造つた記事があり、飛鳥眞神原と名づけた記事がある、その法興寺は中大兄皇子が蹴鞠をし給ひ、鎌足が靴をささげたといふ寺で有

名である。

○久堅能・天津御門乎　ヒサカタノ・アマツミカドヲと訓む。ヒサカタノは天にかかる枕詞で、久しく堅し。匏形（ひさごかた）。日刺方（ひさすかた）。日離る方（ひさかた）。日の住む方。日幸方（ひさちかた）。幽冥（あめ）の潜み隠れて目に見えぬ方。提勝間（ひさかたま）。日擴り騒ぐ方等種々の説がある。眞淵の匏形（ひさごかた）の説は、禮記の、大報レ天而主レ日也、掃レ地而祭ニ其質一也。器用ニ陶匏一以象ニ天地之性一也といふのをも證とし、有力な説である。ミカドは御門（ミカド）で、朝廷をミカドといふのと同じである。さて、このアマツ・ミカドの解釋に三説ばかりある。一つは眞淵等の説で、神上（かむあがり）のことと解し、『神あがりと言ふに均しく崩り給ふ事を言ふ』（略解）といふので、檜嬬手もそれに從ひ、幽冥宮のことと解してゐる。第二は、天武天皇の御陵と解するので、『此は御陵を、皇居の御門に准へて天津と云り』（古義）といふ如き解釋で、攷證も、美夫君志も註疏も大體同説である。併し、突詰めればこの第一第二の説は同一説に歸著することとなるのであり、考で、『天武天皇の御陵の事を先いへり』といふので分かる。然るに、眞神の原を御陵だとすると、日本紀・延喜式所載の御陵の場處と合致せぬので古來諸學者の考證があつた。眞淵は、『さてこゝには明日香の眞神の原とよみたるを、紀には大内てふ所と見え、式には檜隈大内ノ陵と有は、本明日香檜隈はつゞきてあり、大内はその眞神原の小名と聞ゆ。然ればともに同じ邊にて違ふにはあらず』（考）

といひ、略解・攷證・美夫君志・註疏等もさういふ記載をしてゐる。井上博士は、『今の歌にも明日香ノ眞神ノ原とあれば眞神ノ原は大内陵とは同郡ながら檜隈（ヒノクマ）にはあらで飛鳥（アスカ）にあるなり。中略 大内陵の地は檜隈の北端にて飛鳥の西隣に當れば古は此地をかけて明日香の眞神ノ原といひしを後に檜隈に屬せられしならむ』（新考）といふ說を出してゐる。第三は、喜田博士の考で、この『御門（みかど）』といふのは御陵の意味ではなく、天武天皇の皇都の地（飛鳥淨見原宮）だといふのである。喜田博士云。『普通の解釋に、右の眞神の原以下の句を以て、天皇の山陵を說けるものとなし、隨つて眞神の原を山陵の地として居るが、是は甚しく實地を間違つて居る。飛鳥の眞神の原は、日本紀に崇峻天皇元年、初めて法興寺を造つたとある土地で、今の大字飛鳥の地卽ち之に當る。其の法興寺は今の安居院（あんごゐん）卽ち俗稱飛鳥大佛の地たること疑ひを容れない。然るに、天武天皇の山陵は檜隈にあつて、檜隈大内陵と稱し、飛鳥とは山を隔てて西南に當る。隨つて此の眞神の原に山陵の在るべき筈が無い。此歌は、飛鳥の眞神原に天津御門を定めましました、天武天皇を述べ奉つたので、天皇の淨見原宮が、此眞神の原にあつたことは、之によつても察せられるのである。而して小字石神、小字ミカドは、所謂眞神の原に營まれたる法興寺と相接近したる土地にある。淨見原宮が此の地方に在る事は殆ど疑を容れない事だと思ふ』（歷史講座。帝都）といひ、山田博士もそれを紹介し大體認容しても居り、ま

た、『或は眞神原といふは、喜田氏が考へられてあるよりは廣き區域にして、今の上居の邊をも包含せしか。いづれにしても、大内陵をさせりといふは當らざるべし』（講義）と云つてゐる。なほ、澤瀉氏は、喜田氏の說に贊成し、この句と次の句との連接について、『これは語句のつゞきが少し無理なので、眞神の原を山陵と解したく思はれるのであるが、こゝの句を前にあげた日並皇子の薨じられた時の歌の句と對照して見ると、「あすかの眞神原にひさかたの天つみかどをかしこくもさだめたまひて」は前の歌の、「あすかのきよみの宮に神ながらふとしきまして」に相當し、いづれも天皇が皇居においでになる事を申したので、その次の、「神さぶと岩隱ります」は、前の歌の、「すめろぎのしきます國と天の原岩戸を開き神上り上りいましぬ」に相當し、こゝは天皇がおかくれになつた事を申したのである。前の歌では句のつゞきに誰も不審を感じないのであるが、今の場合は、「かしこくもさだめたまひて」と、「神さぶと岩がくります」とのつゞきが突然であるために、「さだめたまひて」で句を切つて、解釋すべき事に氣がつかなかつたのである』（新釋）といつてゐる。これで大體の見當がついたことと思ふ。

○懼母・定賜而　カシコクモ・サダメタマヒテと訓む。恐れ多くも飛鳥の眞神原に宮殿を定め給うてといふ意。この句をば直ぐ下の神佐扶跡（カムサブト）云々に續けて、『是より下七句は天武天皇の御陵の事を

先いへり』（考）。『天武帝の御陵を、眞神原に定め奉るを、天つ宮殿を、かたじけなくも定めたまふとは申せるなり』（攷證）等といふが、これは次の句との間には休止があるので、この定賜而までは、天武天皇の宮都のことを云つてゐるのである。また事實から云つても、天武天皇崩御のとき、朱鳥元年九月飛鳥淨御原宮の南庭に殯宮をまうけ翌持統天皇元年十月に大内陵を築きはじめ、二年十一月に大内陵に葬奉つた。その大内陵は卽ち檜隈の地で、飛鳥の眞神の原とは違ふのである（前の句の注釋參照）。

○神佐扶跡・磐隱座　カムサブト・イハガクリマスと訓む。神として御陵墓の中に隱れ靜まり給ふ意。舊訓カミサブト・イハカクレマス。略解カムサブト（古義・檜嬬手・攷證以下同訓）。攷證イハガクリマス（古義・檜嬬手等同訓）。神佐扶は神としての御行動をなし給ふことで、既に卷一（三八）に、安見知之吾大王神長柄神佐備世須登云々とあるのと同じである。磐隱座は陵墓の中に隱ります義で、陵墓には石棺石廓を築くからである。『陵にまれ墓にまれ土を掘て築て作れる故に磐隱座とはいへり。本集九（卅三丁）に、磐構作冢矣云々とあるを見べし。鎮火祭祝詞に、石隱坐氏云々とも見えたり』（攷證）。隱をカクリ（四段活用）と訓むことは、古事記下卷の歌に、美夜麻賀久理弖。書紀推古卷の歌に、夜須彌志斯和餓於朋耆彌能訶勾理摩須阿摩能椰蘇訶礙とあるのが證である。なほ石隱の用例は、萬葉卷三（四一八）に、鏡山之石戸立隱爾計良思雖待不來座等がある。

○八隅知之・吾大王乃・所聞見爲・背友乃國之　ヤスミシシ・ワガオホキミノ・キコシメス・ソトモノクニノと訓む。天武天皇の統治したまふ、大和からは北の方に當る國（卽ち美濃國）のといふ意。舊訓キカシミシであつたのを、代匠記でキコシメスと訓んだ。攷證では舊訓を踏襲して、『考にここをもきこしめすとよまれしは誤り也』と云つてゐるが、卷一（五〇）に、食國乎賣之賜牟登。同卷（五二）に、見之賜者とあり、なほ、卷二十（四三六〇）に、伎己之米須四方乃久爾欲里。同卷（四三六一）に、於之弖流宮爾伎許之賣須奈倍等の例がある。背友は、背ッ面の義で、山陽をカゲトモ。山陰をソトモと云つたから、帝都ある大和から見て、北の方をばソトモと云つた。此處は美濃國を指すので、以下壬申亂のことを敍しようとしてゐるのである。卷一（五二）に、青菅山者背友乃大御門爾宜名倍神佐備立有の例がある。

○眞木立・不破山越而　マキタツ・フハヤマコエテと訓む。木立深き不破山を越えての意。眞木は既出の如く檜槇の類の太く好い樹を云ふのである。卷一（四五）に、眞木立荒山道乎。卷三（二四一）に、眞木之立荒山中爾等がある。舊訓マキタテルであつたのを、考でマキタツと訓んだ。不破山は美濃國不破郡の山を云つたもので、今の伊増峠だらうと云はれてゐる。伊増峠は不破郡今須村から關ヶ原へ出る山道である。天武紀に、元年六月辛酉朔丙戌、發ニ美濃師三千人一得レ塞ニ不破道一、於レ是

天皇美雄依之務ニ、既到ニ郡家ニ、先遣ニ高市皇子於不破ニ、令レ監ニ軍事ニ云々。丁亥、高市皇子遣ニ使於桑名郡家ニ、以奏言、遠ニ居御所ニ、行レ政不レ便、宜レ御ニ近處ニ、即日天皇留ニ皇后ニ而入ニ不破ニ云々。そのときに不破を越えたまうたのをいふのであらう。

○狛劔・和射見我原乃　コマツルギ・ワザミガハラノと訓む。狛劔（枕詞）和蹔の原のといふ意。狛劔は即ち高麗劔で、劔の柄の頭に鐶が附いてゐるから、ワザミのワに冠らせる枕詞にしたのである。東大寺獻物帳に高麗樣大刀といふのがあり、その註に環頭とあるのを以ても分かる。高麗劔は當時珍重したものだから自然にかういふ表現となつたに相違ない。和射見我原は、關ヶ原といふ説（上田秋成膽大心小錄・大日本地名辭書）と、青野ヶ原だといふ説（伴信友長等の山風）とあるが、山田博士の講義では天武紀の記事に據れば、關ヶ原・野上と和射見原とは別の地だといふことが分かるので、野上・關ヶ原説よりも青野ヶ原説の方が眞に近いと云つてゐる。野上は關ヶ原の東北隅、今の關ヶ原村大字野上であり、青野ヶ原はその野上の東方に當る地である。卷十（二三四八）に、和射美能嶺往過而零雪乃。卷十一（二七二二）に、吾妹子之笠乃借手乃和射見野爾吾者入跡とあるワザミも同地であらうか。

○行宮爾・安母理座而　カリミヤニ・アモリイマシテと訓む。行宮は和名鈔に日本紀私記云、行宮（賀利美夜、今案俗云頓宮）とある、文選注に行宮天子行幸所レ止處也とある如く、假の御處である。卷一に、石湯

行宮。阿胡行宮。卷六に、朝明行宮。河口行宮。狹殘行宮等がある。安母理は天下の約で、『こは天皇皇子などを神にたとへ奉りて、京よりこの鄙に下り給へるを天降りませりとは申せる也』(攷證)に據る。卷三(二五七)に、天降付天之芳來山。同卷(二六〇)に、天降就神乃香山。卷十三(三二二七)に、葦原笑水穗之國丹手向爲跡天降座兼。卷十九(四二五四)に、國看之勢志氏安母里麻之掃平。卷二十(四四六五)に、多可知保乃多氣爾阿毛理之等の例がある。さてこの行宮云々はどういふことかといふに、考に、『和蹔に高市皇子のおはして近江の敵をおさへ、天皇は野上の行宮におはしませしを、其野上よりわざみへ度々幸して御軍の政を聞しめせしこと紀に見ゆ。ここには略きてかくよめり』とある如く、時々和蹔原にいでましたことを、行宮云々と云つてゐるので、紀に、『戊子、天皇往㆓於和蹔㆒檢㆓校軍事㆒而還。己丑、天皇往㆓和蹔㆒命㆓高市皇子㆒號㆓令軍衆㆒、天皇亦還㆓于野上㆒、而居之云々とある如く、實際の行宮が野上にあつたことは明瞭である。講義にも、『されば、ここはその和蹔の原に屢天皇の出でまししが故に、特に行宮を營まれずありしかど、なほそこを行宮と見てかくいへるならむ』とある。

○天下・治賜(一云拂賜而)**・食國乎・定賜等**　アメノシタ・ヲサメタマヒ(一云、ハラヒタマヒテ)・ヲスクニヲ・サダメタマフトと訓む。天武天皇が天下を治め、動搖を安定になさらうとなされての意。治賜。舊訓ヲサ

メタマヒシ。代匠記初ヲサメタマヒ又はヲサメタマフ。代匠記精ヲサメタマフ。略解ヲサメタマヒ。食國乎。舊訓ヲシクニヲ。考ヲスクニヲ。定賜等。舊訓シヅメタマフト。童蒙抄サダメタマフト（考同訓）。此處は一般的に天下を治めたまひ、天皇の治めたまふ國を平定したまふとの意になるが、天武天皇が天下を安定にし給ふとての意に落ちつくのである。

○鳥之鳴・吾妻乃國之・御軍士乎・喚賜而　トリガナク・アヅマノクニノ・ミイクサヲ・メシタマヒテと訓む。東國の軍勢を動員したまうての意。トリガナクはアヅマの枕詞で、雞は夜明けを見て啼くからアに冠らせたといふ説（仙覺抄・冠辭考）。『さは鷄が鳴ぞやよ起きよ吾夫（アヅマ）』の意とする説（古義）。曉雞の啼く時に東の方から赤くなるから東方に冠らせたといふ説（福井氏枕詞の研究と釋義）。第一と第三とが同じに落著くべく、大體それでいい。ただ用例は皆アヅマに懸けたもののみだから、大體福井説の方がいいであらうか。アヅマは畿内以東の諸國で、近江、美濃、尾張などをもさう云ふことがある。イクサは軍士、軍人衆等すべて戰鬪し得る人々をいふので、卽ち軍勢のことである。古事記上卷に、黃泉軍（ヨモツイクサ）。書紀神武卷に、女軍（メイクサ）、男軍（チイクサ）。萬葉卷六（九七二）に、千萬乃軍（チヨロヅノイクサ）。卷二十（四三三一）に、多家吉（タケキ）軍卒（イクサ）等の例がある。天武紀に、遣二山背部小田、安斗連阿加布一發二東海軍（ウミツミチ）一。又遣二稚櫻部臣五百瀨、土師連馬手一發二東山軍（ヤマノミチ）一云々とあるのは卽ちこれで、また、『何が故にかく美濃國を以て軍事行動の

中心とせられしかといふに、一は近江國への東國よりの通路を扼する軍事上の必要もありしなるべきが、その基は美濃國安八磨郡に天武天皇の皇子たりし時よりの湯沐邑ありて、その經濟上の根據地にして、且つ地の理もよかりしが爲なるべし』（講義）によつて御行動を説明し得る。このことは故田口卯吉博士、土屋文明氏等も觸れてゐる。

○千磐破・人乎和爲跡　チハヤブル・ヒトヲヤハセトと訓む。從はぬ兇徒をば平定せよとの意。チハヤブルは上二段の動詞で、猛威力を振ふといふ意から神にかかる枕詞にもなるのであり、此處は元の意味で使つてゐる。日本紀卷二の一書に、有殘賊强暴横惡之神と訓ませたのがあり、古事記には同處を道速振荒振國神とも書いてゐる。此處は天武天皇の側からいへば、『官軍に不奉仕て、猛く烈き人を云り』（古義）といふこととなる。ヤハスは四段活用の語で、卷二十（四四六五）に、麻都呂倍奴比等乎母夜波之。大殿祭祝詞に、言直和志古語云夜波之坐氐などの例がある。天武紀に、若有不服色卽殺之云々といふのに當る。

○不奉仕・國乎治跡一云掃部等　マツロハヌ・クニヲヲサメト一云、ハラヘトと訓む。服從せぬ國を治めよとの意。マツロハヌは古事記に不伏、書紀に不順等と書き、天皇に歸順せないことをいふ。古事記中卷に、令和平其麻都漏波奴人等云々とあり、なほマツロフの例をいはば、書紀雄略卷御製に、波賦

武志謀、飫宴枳瀰儞摩都羅符云々。萬葉卷十八（四〇九四）に、麻都呂倍乃牟氣乃麻爾麻爾。同歌に、祖名不絶大君爾麻都呂布物能等。卷十九（四二一四）に、八十伴男者大王爾麻都呂布物跡。卷二十（四四六五）に、麻都呂倍奴比等乎母夜波之などがある。國乎治跡は舊訓クニヲオサムト。代匠記シラセト。略解ヲサメト。○一云。**掃部等** 治むは平靜にすること。掃ふは掃除することだから、一云の方が順當でなくて旨くない。

○皇子隨・任賜者 ミコナガラ・ヨサシタマヘバと訓む。皇子でましますから天皇が軍事を委任したまへばといふ意。皇子隨。舊訓ワカミコノ・ママ。代匠記ミコノママニ。童蒙抄ミコナガラ（考・略解・古義以下同訓）。任賜者。舊訓ニタマヘバ。代匠記精ヨサシタマヘバ（講義・新講同訓）。童蒙抄マカセタマヘバ。考マケタマヘバ。略解マケタマヘバ（檜嬬手・攷證・美夫君志・新考・新訓・新解等以下同訓）。古義マキタマヘバ。代匠記精に、『今按、此句ハ日本紀幷此集後ノ歌トモニ依ニ、ミコノマニヨサシ給ヘバトヨムベシ。マニハマヽニナリ。ヨサスハマカスルナリ、軍事ヲ授タマフ事前ニ引紀ノ如シ』と云つた。講義は代匠記の訓を最も善いとして認め、ヨスといふ四段の活用をヨサスと敬語にしたもので、續紀の第五十一詔に、大政官之政乎波誰任之加母罷伊麻須とあり、古事記神代條に、於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神修理固成是多陀用幣流之國賜天沼矛而言依賜也とあるのを證とした。皇子隨のナガラは神隨

のナガラで、皇子にましますままに、皇子にまします故にといふ意で、これは講義の説に從ふべきである。此處は天武紀上に、『既而天皇謂二高市皇子一曰、其近江朝左右大臣及智謀群臣共定レ議、今朕無二與計レ事者一、唯有二幼少孺子一耳、奈之何。皇子攘レ臂按レ劒奏言、近江群臣雖レ多、何敢逆二天皇之靈一哉、天皇雖レ獨、則臣高市頼二神祇之靈一、請二天皇之命一引二率諸將一而征討、豈有レ距乎。爰天皇譽之携レ手撫レ背曰、愼不レ可レ怠、因賜二鞍馬一、悉授二軍事一。皇子則還二和蹔一、天皇於玆、行宮興二野上一而居焉。此夜、雷電雨甚云々といふに該當する。そして何故に、皇子隨と云つたかといふに、古は軍國の大權は天皇自ら之を掌握し給ひ、時に皇后・皇子に委ね給ふこともあるのだから、高市皇子も皇子でいます故に當然の事として、皇子に任し給うたのである（講義に據る）。なほ、略解の訓のマケタマヘバと訓む時に、マケの例は、卷三（三六九）に、物部乃臣之壯士者大王任乃隨意聞跡云物曾とあるが、任乃隨意を舊訓ではヨサシノママニと訓んだ。卷十七（三九五七）に、大王能麻氣乃麻爾末爾。同卷（三九六九）に、於保吉民能麻氣乃麻爾麻爾があり、古義のマキの訓の例は卷十八（四一一三）に、末伎太末不官乃末爾末。同卷（四一一六）に、於保伎見能末伎能末爾末爾がある。

○大御身爾・大刀取帶之・大御手爾・弓取持之　オホミミニ・タチトリハカシ・オホミテニ・ユミトリモタシと訓む。高市皇子の御身に大刀を佩きたまひ、御手に弓を持ちたまひてといふ意である。

舊訓には帶之の訓がないが、西本願寺本等數種の古鈔本には、タチトリハカシと訓んだのがある。考にタチトリオバシと訓ませたが、日本紀景行卷に、多智波開摩之鳴とあり、萬葉卷五(八〇四)に、都流岐多智許志爾刀利波枳。卷二十(四三四七)に、奈我波氣流多知爾奈里弖母。同卷(四四五六)に、多知波吉氐可爾波乃多爲爾とある如く、ハクといふ方がいい。

○**御軍士乎・安騰毛比賜**　ミイクサヲ・アトモヒタマヒと訓む。皇子が部下の軍勢を誘ひ率ゐたまひといふ意である。アトモフとは、『誘ひいざなふ』といふのが本意で、それから、雇ふ、率ゐるといふ意味が出て來る。卷九(一七八〇)に、三船子呼阿騰母比立而喚立而三船出者。卷十七(三九九三)に、阿麻夫禰爾麻可治加伊奴吉之路多倍能蘇泥布理可邊之阿登毛比底和賀己藝由氣婆。卷二十(四三三一)に、安佐奈藝爾可故等登能倍由布思保爾可知比岐乎里安騰母比弖許藝由久岐美波。卷九(一七一八)に、足利思代榜行船薄高島之足速之水門爾。卷十(二一四〇)に、璞年之經往者阿跡念登夜渡吾乎。卷九(一七五九)に、其津乃上爾率而未通女壯士之等の例がある。

○**齊流・皷之音者**　トトノフル・ツヅミノオトハと訓む。軍勢を整頓する軍皷の音はの意、齊流をトトノフルと訓んだのは仙覺である。トトノフは本居説に從つて、『呼び立る意なり』として解釋してゐたが、なほ、代匠記の、『軍衆ヲト、ノフル鼓ナリ』。童蒙抄の、『軍列を立て前後左右の備へ

をととのへる』。考の、『紀に天武鼓吹を調練せさせらる丶事見え』の如き説があり、古い辭書の類に、整・齊・調・節等の文字を當ててゐるが、山田博士は其等の用例をも參考して、『然れば、ここの、ととのふるは、軍隊進退の節度を示すことをいふと考ふべきなり。これを外にしてここの場合を釋せむとするは誤なり』と結論してゐる。講義（第二、四六二頁）を見よ。皷は此處のは軍旅に用ゐる大皷で、和名鈔に大皷（和名於保豆豆美）とあるものである。軍防令に、凡軍團各置皷二面・大角二口・少角四口等と見えてゐる。トトノフの例は、巻三（二三八）に、網引爲跡網子調流。巻十（二一四二）に、左男牡鹿之妻整登鳴音之。宣命第九詔に、上下乎齊倍和氣弖などがある。

○**雷之・聲登聞麻低**　イカヅチノ・コヱトキクマデと訓む。雷の鳴る如くに響きわたる趣である。西本願寺本にはナルカミと訓んで居り、和名鈔神靈類に、兼名苑云、雷公、一名雷師（雷音力廻反和名奈流加美一云以賀豆知）とあるから、ナルカミでもイカヅチでもいいのであるが、イカヅチの方が此處の調にかなつてゐる。巻三（二三五或本歌）に、雲隱伊加土山爾宮敷座。巻三（二三五）に、天雲之雷之上爾。佛足石歌に、伊加豆知乃比加利乃期止岐などとある。

○**吹響流・小角乃音母**（一云笛乃音波）　フキナセル・クダノオトモ（一云、フエノオトハ）と訓む。フキナスのナスは鳴ラスといふの古言だと講義で説いてゐる。古事記上巻に鹽許袁呂許袁呂邇畫鳴而とあるその自注に、

訓レ鳴云ニ那志一とあるによつて明かである。なほ、古事記上卷に、遠登賣能那須夜伊多斗遠。日本書紀繼體卷の歌に、須衛陛鳴壓府曳儞都俱唎府企儺須。萬葉卷十一（二六四二）に、時守之打鳴鼓等であり、從來は、『吹ならせるの、らを略ける也』（攷證）等と說明してゐたが、ナスが古く、ナラスは後だといふのである。なほ、新考では流を衍としてフキナスと訓み、新解・新訓ではフキトヨムルと訓んでゐる。小角は軍用の笛の一種で、獸角を以て作つたものか。和名鈔に、大角波良乃布江 小角久太能布江とある。

○敵見有・虎可叫吼登　アタミタル・トラカホユルトと訓む。怒つた虎の吼える如くの意。此處のアタミは麻行四段活用の動詞で、アタムの連用形である。新撰字鏡に、『快於高反去懟也、强也、心不服也、宇良也牟、又阿太牟、又伊太牟』とある。ここは憤怒する意味である。これをば、『敵をば見たる虎』（代匠記・童蒙抄・考・略解・檜嬬手等）と解するのは不適當である。萬葉卷六（九七一）の、賊守筑紫爾至、卷二十（四三三一）の、筑紫國波安多麻毛流於佐倍乃城曾等等につき、攷證で、『本は、あだみ、あだむとはたらく語なるを、體語として一つの名とはせる也』と說明せる如くである。虎といふ獸は當時の日本に居ないから、人麿のこの處も直ちに支那文學の影響だと論ずる說もある。實際當時の人は虎の實物は見ず、卷十六（三八八五）に、韓國乃虎云神乎生取爾とある程度で、同卷（三八三三）の、虎爾乘古屋乎越而靑淵爾なども空想であつ

ただらう。けれども和名鈔に、虎（乎古反 止良）とあり、古事記の序文にも、虎ニ歩於東國一とあり、また、虎に關聯した人の名がなかなか多いところを見ると（鴨山考補註篇參考）、當時の人々にも山獸之王たる虎が、渡來人の話により文書により繪圖等によつて、既に常識化されつつあつたものと思考して大體間違は無いとおもふ。

○諸人之・協流麻低爾（一云聞惑麻低） モロヒトノ・オビユルマデニ（一云、キキマドフマデ）と訓む。萬人の驚き失神するほどにの意。卷五（八三二）に、母呂比得波家布能阿比太波多努斯久阿流倍斯。同卷（八四三）に、毛呂比登能阿蘇夫遠美禮婆。卷十八（四〇九四）に、吾大王能毛呂比登乎伊射奈比多麻比があり、佛足石歌に、知知波波賀多米爾毛呂比止乃多米爾といふのがある。協は靈異記上卷に、脅オビユとあり、新撰字鏡に、協（今作脅虛業反 怯也於比也須）とあり、オビヤスはオビユの他動詞である。强く驚愕する狀態をあらはす語である。

○指擧有・幡之靡者 ササゲタル・ハタノナビキハと訓む。高く捧げた幡の靡くさまはの意。舊訓サシアグル。考ササゲタル。高くささげ持つことである。卷十九（四二〇四）に、吾勢故我捧而持流保寶我之婆の例がある。幡は一般に旌旗のことをいふ。軍防令の義解に、『幡者旌旗惣名也。將軍所レ載曰ニ纛幡一、隊長所レ載曰ニ隊幡一、兵士所レ載曰ニ軍幡一也とある。

○冬木成・春去來者・野毎・著而有火之（一云冬木成春野燒火乃）　フユゴモリ・ハルサリクレバ・ヌゴトニ・ツキテアルヒノ（一云、フユゴモリハルヌヤクヒノ）と訓む。春になると、野毎に附いてある火がといふ意で、春の野火が枯草を燒き拂ふさまに譬へたのである。さて、古事記の序文に壬申役を敍し、『皇輿忽駕淩ニ渡山川一、六師雷震三軍電逝。杖矛擧レ威猛士烟起。絳旗耀レ兵、凶徒瓦解、未レ移ニ浹辰一、氣沴自淸とあり、また書紀天武卷上に、恐下其衆與ニ近江師一難上レ別以ニ赤色一著ニ衣上一とあるから、赤旗、赤標を用ゐたことが分かり、それを以て一部、春の野火に譬へたものの如くである。伴信友は、天武卷の文章をば、『後漢書光武紀なると同じければ、其文によられたるにてもあるべけれど』（長等の山風附錄）と評し、また、井上通泰博士は、この絳旗（赤旗）を以て、漢書哀帝記の、『高祖感ニ赤龍一而生自謂赤帝之精』とある如く、天皇御自ら漢高祖に擬したまうたからだと考證して居る。これは神經の活いた考證であるが、赤旗は、古事記淸寧天皇條に、物部之我夫子之、取佩於ニ大刀之手上一、丹畫著其緒者、載（栽）ニ赤旛一、立ニ赤旛一、見者五十隱、山三尾之竹矣（本）訶岐苅云々とあり、靈異記にも、小子部栖輕が雷を捕へた時の文に、栖輕奉レ勅、後宮罷出、緋縵著レ額擎ニ赤幡鉾一乘レ馬云々とあり、宮内省式にも、供奉雜物、皆駄擔上、竪ニ小緋旛一以標幟ともあるから、色彩鮮明で覺官的な赤色を用ゐたのは、必ずしも漢高祖から來てゐるのでなく、寧ろ實戰的效果から割出したものと看做して

いいだらうか。鈴木重胤も、此等の記事を參照しつつ、『上古は專ら赤旗を用ひたりしなるべし』（日本書紀傳）とまで云つて居る。序云、古事記の赤幡につき宣長は、『幡は借字にて赤服（アカハタ）なり。帛絹布の類、織たる物を凡て波多（ハタ）と云』とも釋いてゐるが、その次の立二赤旛一の赤旛は旌旗のことである。なほ增補するに、絳旗を赤旗だといふは、新撰字鏡に、絳（ハノ）古向反、緋、大赤繒と注し、繒疾陵反、平旌也、麾也、旌麾二字繒也とあるを以ても明かである。

○風之共・靡如久・取持流・弓波受乃騷　カゼノムタ・ナビクガゴトク・トリモテル・ユハズノサワギと訓む。舊訓ナビクガゴトク。考ナビケルゴトク。舊訓トリモタル。考トリモテル。舊訓ユハズノウゴキ。代匠記ユハズノサワギ。弓波受（ユハズ）は耳端（ユハズ）、弭で、弓の上下の端をいふ。和名鈔弓の條に、釋名云、弓末同レ彇（音蕭由。美波受）。弓の弦の鳴る響をば、弭の響といつたもので、詩的表現の一つである。騷をサワグと訓むことは、代匠記に、『今、按、サハギト讀ベキカ』に從つたが、舊訓ウゴキである。卷三（三二四）に、夕霧丹河津者騷（ユフギリニカハヅハサワギ）。卷九（一七〇四）に、細川瀨波騷祁留（ホソカハノセニナミノサワゲル）とある、騷をサワグと訓み、卷三（四七八）に、五月蠅成騷騷舍人者（サバヘナスサワグトネリハ）とある騷騷をサワグと訓ませてゐるのは、當時の支那のこの熟字の騷に據つたものであらうが、原來、騷字は、說文に馬疾步也。玉篇に奔也とあつて、サワグの訓は無い。支那には騷馬などの熟語がある。

〇三雪落・冬乃林爾（一云由布乃林） ミユキフル・フユノハヤシニ（一云、ユフノハヤシ）と訓む。雪の降る冬の林にの意。これは軍勢を譬へたので、攷證に、『人ごとに持る弓弭の、枯木のさわぐに似たれば、冬の林に風のわたるがごとく見なしたるなり』とある。ミは美稱の接頭辭だが、このあたりではもはや輕く口調的に一般化せられてゐたのであらう。み山、み空、み雪等皆同様の用法である。卷七（一三四九）に、三雪零大荒木野之。卷十（二三一三）に、卷向之木志乃子松二三雪落來。卷十七（四〇一一）に、美雪落越登名爾於弊流。卷十八（四一一一）に、美由伎布流冬爾伊多禮波等がある。

〇飄可毛・伊卷渡等 ツムジカモ・イマキワタルトと訓む。旋風が卷き起つたかとの意。飄をツムジと訓むのは、新撰字鏡に、飈飆颷飃四形作、俾遙反、暴風豆牟志加世云々。和名鈔に、文選詩云迴飈卷二高樹一（俾遙反和名豆无之加世）飆名苑注云、飆者暴風從レ下而上也云々とあり、また、文選長笛賦注に、猋與レ飈同云々。禮記月令釋文に、猋本又作レ飄云々とあるから、飄飈猋三字は通用したもので、ツムジカゼのことである。書紀神功卷に、飄風忽起、御笠隨レ風云々とあり、延喜式神名帳に、出雲國意宇郡波夜都武自和氣神社とあるのを、文德實錄に速飄別命とあり、なほ神名帳に出雲郡都武自神社、出雲風土記に、島根郡波夜都武自神社がある。後世、『つじ風』といふのは都武自の訛略である。伊卷の伊は發語で、い行く、い寄る、い隱る等と同じである。

○念麻低・聞之恐久一云諸人見惑麻低尒**・引放・箭繁計久**　オモフマデ・キキノカシコク一云、モロヒトノミマドフマデニ・ヒキハナツ・ヤノシゲケクと訓む。……と思ふまで、聞くのも恐ろしく、引き放す弓矢が繁くしての意。聞之恐久は聞くことが恐ろしくの意であつて、聞くといふ四段活用の連用段から、名詞として乃に續けたので、この乃の用法は萬葉にほかの用例もあり、卷十(一八一八)に、子等名丹關之宜朝妻之片山木之爾。卷十七(三九九一)に、許己婆久毛見乃佐夜氣吉加。卷十八(四〇八九)に、春佐禮者伎吉能可奈之母。卷二十(四三六〇)に、夜麻美禮婆見之等母之久可波美禮婆見乃佐夜氣久等がある。箭繁計久は弓の矢の亂射のさまである。玉篇に、箭矢也とある。ケクの例は、卷五(八九七)に、世間能宇計久都良計久。卷五(九〇四)に、安志家口毛與家久母見牟登。卷十五(三七四四)に、乎之家久母奈思。卷十七(三九五七)に、孤悲之家口氣奈我枳物能乎。卷十八(四〇九二)に、伊登爾多家口波。卷十八(四〇九四)に、宇禮之家久伊余與於母比弖等の例で明かである。聞之恐久は、一本に、**諸人見惑麻低尒**とあるので、眞淵は『見』の方を採用して見之恐久としたが、古義等でそれを否定してゐる。

○大雪乃・亂而來禮一云霰成曾知余里久禮婆　オホユキノ・ミダレテキタレ一云、アラレナスソチヨリクレバと訓む。大雪が亂れ來れば。大雪の亂れ降る如くに箭が亂れて來ればの意。宣長が、『きたればといふべきを略きて、きたれと云は、長歌の中に殊に一ノ格なり。すべて上と下と、事の轉ずる所の境には、如此いふ古の長

歌の常なり。師ノ考に、者は補て、クレバと訓れたるは中々にわろし』と云つたのに就き、雅澄は、『者はいはでも、もとよりしか聞ゆる古語なれば、ことさらに略きたるものにはあらず』と云つた。この已然形でつづけるのは一つの格で注意すべきものである。卷一（五〇）に、八十氏河爾玉藻成浮倍流禮其乎取登。卷二（一三五）に、天傳入日刺奴禮大夫跡念有吾毛。卷三（四六〇）に、隱益去禮將言爲便將爲須敝不知爾。同卷（四七一）に、山隱都禮情神毛奈思。同卷（四七五）に、久堅乃天所知奴禮。卷五（七九四）に、宇知那比枳許夜斯努禮。同卷（九〇四）に、靈剋伊乃知多延奴禮。卷十七（三九六九）に、伊多豆良爾須具之夜里都禮。卷十八（四〇九四）に、金在等麻宇之多麻敝禮。卷十九（四一六〇）に、語續奈我良倍伎多禮。同卷（四二一一）に、露霜之過麻之爾家禮等の用例があつて注意すべきである。さてこれは、攷證に、『こゝは、人ごとに、引つゝはなつ矢のしげきが、大雪のふりくるごとく、亂れくと也。矢の羽は白羽なりけん。されば、雪とは見なしたる也。古事記中卷に、射出之矢、如葦來散云々。書紀欽明紀に、發箭如雨云々など見えたり』とある如き意味になる。白羽の矢は少し細かく解析し過ぎたが、全部否定は出來ないだらう。高市皇子の軍の奮戰の有樣を敍したもので、天武紀元年七月二十二日の條に、『時大友皇子及群臣等共營於橋西、而大成陣不見其後、旗幟蔽野埃塵連天、鉦皷之聲聞數十里、列弩亂發矢下如雨』云々といふのに相當するとこ

ろである。次に、キタルといふ表現につき、古義に、『こは御方の箭の事をいへるなれば、亂而行(ミダリテユケ)れといふべきやうなれども、こゝは敵方になりて、しか云るなり、一ノ巻に倭者鳴而歟來良武(ヤマトニハナキテカクラム)と云る歌の來(ク)と意味ひとし、相照(ス)べし。』とあるのは注意が周到で好い。ただ、巻一の歌でも同じやうに、當時は、來(ク)も行(ユク)も同じに使つた。來(ク)といふのはつまり行(ユク)なので、『鳴きてか來らむ』は、『鳴きてか行くらむ』の意味だから、『亂れて來(きた)れ』は、『亂れて行けれ』といふ意味にもなるが、そのあたりの事は餘り物理學的に取扱はずに、弓矢の雙方から亂射されて雪の降るやうに見える氣持を大切にして理會すべきである。**○一云。霰成・曾地余里久禮婆**　アラレナス・ソチヨリクレバと訓むことは前に言つた。霰の如く其方(そち)より來ればの意。曾地(ソチ)は、彼所此所(ソチコチ)などの用例で理會が出來る。古義に、『この一本はおとれり』といひ、攷證に、『これもあしからず』と云つてゐるが、この句は弱く、こせこせして、『大雪の亂れて來れ』の緊張した句には到底及ばない。かういふ比較が自然出來るといふことは大に有益である。このアラレは天然現象としては當時の人の心を牽いたものと見え、巻二十（四二九八）に、霜上爾安良禮多婆之里(シモノヘニアラレタバシリ)。巻十（二三三八）に、霰落板聞風吹寒夜也(アラレフリイタモカゼフキサムキヨヤ)。同巻（二三一二）に、我袖爾雹手走(ワガソデニアラレタバシル)等の諸例がある。

○不奉仕・立向之毛　マツロハズ・タチムカヒシモと訓む。降服せず抵抗したものもといふ意。

『立ち向ひし』は名詞の如く用ゐてある。ムカフは對ひあふ。向ひ行く。對ひ鬪ふ等の種々の色調があるが、この場合には、卷一（六一）に、大夫之得物矢手插立向射流圓方波。卷九（一八〇九）に、入水火爾毛將入跡立向競時爾。卷二十（四三三一）に、安豆麻乎能故波伊田牟可比加弊里見世受弖。同卷（四四三〇）に、阿良之乎乃伊乎佐太波佐美牟可比多知とある等が參考になる。

○露霜之・消者消倍久　ツユジモノ・ケナバケヌベクと訓む。露霜の消える如く、命が消えるならば消えよといふ意、命を惜しまずにといふことになる。消はキエの約言で、卷五（八四九）に、由吉波氣奴等勿。卷五（八八五）に、朝露乃既夜須伎我身。卷十七（四〇〇四）に、氣受氐和多流波等があり、ケナバケヌベクの用例には、卷十一（二四五八）に、朝霜消　消　念乍。卷十三（三二六六）に、朝露之消者可消戀久毛がある。**○一云。朝霜之・消者消言尒**　アサシモノ・ケナバケヌトフニと訓み、朝霜の消ゆる心に續けたのであるが、本文の句の方が優つてゐる。

○去鳥乃・相競端尒　ユクトリノ・アラソフハシニと訓む。行く鳥の（枕詞）爭ふ如くに、いきほひ鬪つて居る間にの意。去鳥乃は爭の枕詞で、『こは群りて飛ゆく鳥の、おのれおくれじとあらそひつつ行を、多くの軍人どもの先を爭ひて向ふに譬へたり。』（冠辭考）によつて大體その意味が分かる。この用法は恐らく人麿の造語であらう。相競は戰鬪のさまをいふ。端はアヒダに、戰鬪してゐるウチ

ニなどの意である。ハシは、物の末端の意、卽ち端、嘴、初などから、轉じて、物の兩端を連絡する意味に用ゐた。橋、階、箸、梯、艀、柱などが卽ちそれである。此處はその第二の意味に當る。巻十四(三四〇八)に、和爾余曾利波之奈流兒良師安夜爾可奈思母。同巻(三四九〇)に、比等目乎於保美奈乎波思爾於家禮。巻十九(四一六六)に、宇知歎之奈要宇良夫禮之努比都追有爭波之爾許能久禮罷四月之立者といふ例があり、また、姓氏にも間人王、間人連老、間人宿禰大浦がある。共に間の意に使つて居る。○一云。**打蟬等・安良蘇布波之尒** ウツセミト・アラソフハシニと訓み、現身として鬪ふ間にの意である。この方は意味があり過ぎて却つてまづいやうである。

○渡會乃・齊宮從 ワタラヒノ・イツキノミヤユと訓む。伊勢渡會郡の大御神を齋き祀つて居る宮卽ち皇太神宮からといふ意。渡會は和名鈔に伊勢國度會(和多良比)。皇太神宮儀式帳に、天照坐皇大神乃、伊勢國度會郡宇治里、佐古久志留伊須々乃川上爾御幸行坐時云々。齊宮は卽ち齋宮であつて、齊を齋に通用したものである。舊訓イツキノミヤ(代匠記・略解・檜嬬手・攷證・美夫君志・新考・講義・新解・全釋・新講等同釋)。考イハヒノミヤ(古義・註疏・新訓・總釋同訓)であるが、古義では大神宮の坐す宮を齋宮と申し、齋王(皇女)の坐たまふ宮を齋宮と申して、文字は同一だが訓を異にして區別したことを古語拾遺と書紀の文の區別によつて證してゐる(『雄略天皇紀にも、稚足姫皇女侍伊勢大神祠とある、この祠をイハヒと訓來れるをも思ふべし』『書紀には、齋宮を五十鈴川上に興給へる趣にいひ、拾遺には、其祠を伊勢國五十鈴川上に立て、さて皇女の居給ふために、

斎宮を興たるよしにいへる、五十鈴川上といふことの、おきどころ別なるに、心をつけて思ひ辨ふべし』）が、古事記上卷に、阿曇連等之祖神以伊都久神也とあつて、古事記傳に、伊都久は齋なりとあり、萬葉にも卷十九（四二四一）に、春日野爾伊都久三諸乃梅花。同卷（四二四三）に、住吉爾伊都久祝之神言等などの例は齋内親王の坐しし宮の意味ではないから、必ずしも古義の説ばかりでは解決がつかない。併し、一方には書紀卷二神代卷下に、次生兒號ニ彥火々出見尊一、亦號火折尊、齋主、此云ニ伊幡毗怒志一とあり、是時齋主神、號ニ日齋之大人一、此神今在ニ乎東國檝取之地一也とあるに當る。祝詞には、香取坐伊波比主命とあり、なほ、今以ニ高皇產靈尊一、朕親作ニ顯齋一（顯齋、此云ニ于圖詩怡破毗一）とあつて、皆イハヒと訓んで居り、書紀では齋宮をイハヒノミヤと訓んだのが多い。『興ニ齋宮于五十鈴川上一』。『更造ニ齋宮於小山田邑一』等の例が皆それである。そこで、この人麿の歌の場合も、どちらにも訓み得るのであるが、古事記にイツク・カミ。萬葉にイツク・ハフリの訓證があるのだから、今は舊訓に從つたのである。

○神風爾・伊吹惑之　カムカゼニ・イフキマドハシと訓む。神風で息吹き惑はしで、神風が吹いてよく物が見えぬやうに敵の目を惑はしである。神風は、舊訓カミカゼ。考カンカゼ。略解カムカゼ。神の吹かせたまふ風で、風は天津神の御息といふことから、神風の息といひ、伊勢の枕詞等ともなつた。それだから、伊吹は息吹で、古事記上卷に、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、多紀理毗

賣命云々。書紀神代卷に、一書に、我所レ生之國、唯有二朝霧一而薫滿之哉、乃吹撥之氣、化爲レ神、號曰二級長戸邊命一亦曰二級長津彦命一、是風神也云々。大祓祝詞に、氣吹戸座須、氣吹戸主止云神、根國底之國爾、氣吹放氐牟等の例がある。書紀の文では、既に引用した如く、『此夜雷電雨甚。則天皇祈之曰、天神地祇、扶レ朕者雷雨息矣』あたりの文と類似して居る。美夫君志に、『此御軍の時は、人麿朝臣は未だいと若きほどにて、其事をまのあたり見しにはあらざめれど、其頃人々のいひはやせる實事なるから、殊更によみ入れたるものにて、此靈驗ありし事疑なき也』と云つてゐる。

○天雲乎・日之目毛不令見　アマグモヲ・ヒノメモミセズと訓む。天雲は下の句の覆にかかつてゐる。日之目は太陽のことをいふので、目に見える太陽の面、太陽の姿といふことで、卷四(七六六)に、然曾將待君之目乎保利。卷十二(三〇一二)に、因毛有額妹之目乎將見などの『目』は『所見』の約だと解してゐる。つまり、天空に雲がかかつて太陽の面を見せないといふ意である。

○常闇爾・覆賜而・定之・水穗之國乎　トコヤミニ・オホヒタマヒテ・サダメテシ・ミヅホノクニヲと訓む。常闇は、常に闇黑といふこと、晝夜の分なき闇黑といふことで、書紀神代卷に、六合之内常闇而不レ知二晝夜之相代一云々。又一書に、天下恆闇無二復晝夜之殊一云々。萬葉卷十五(三七四二)に、安波牟日乎其日等之良受等許也未爾伊豆禮能日麻天安禮古非乎良牟等の例がある。覆賜而は上

からの續きで、其處で意味が一段切れて休止があるとすれば分かり好い。そして平定なされたこの瑞穗の國卽ち日本國をばといふ具合に起して居る。『天雲を、日の目をも見せず、覆ひ給ひて、常闇になしたまひて』となり、やはり人麿一流の流動的渾沌調で、散文的語の配置と違ふのである。ゆゑにかういふ場合は、この儘で理會し味ふやうに修練せねばならぬ。定之は舊訓シヅメテシであつたのを、考でサダメテシと訓んだ。このサダムの屬する主格は天武天皇か高市皇子かいづれかであるが、此處はおほどかに、天皇の側と解すべきか。すれば無論高市皇子も含まつて居るのである。常闇爾覆賜而のところ、武田博士の新解に、『皇子の軍の勢力によつて天日をも覆うての意である。壬申の亂の戰中、急に暴風吹き來つて、叢雲忽ち起り、天日をも蔽ひ隱した事實があつたのであらう。雲を以つて天日を隱すといふこと、正義の軍の敍述としては適切でない。天日を以て弘文天皇に譬へ、雲霧にも譬へつべき不義の戰を起してこれに打ち捷つた意を寓するものとも、言はばいふべきものであるが、個人としての私の追憶でなく、皇子の殯宮で歌はれたものとしては、さる意に解することは出來ない』と云つてゐる。

〇神隨・太敷座而　カムナガラ・フトシキマシテと訓む。神として統治し給ふ意で既に註した。その主格は天皇であらう。さて、この句の主格を代匠記では持統天皇を申奉るといひ、略解では、

『天皇の御事なり』といひ、古義ではフトシキイマスと訓み、『下五句は天皇の御事を云ひ、攷證・美夫君志等は天武天皇より持統天皇までを申奉るといひ、『此間に、崩御即位のことをいはでは、語足はずといはむか、されど此歌は、高市皇子尊のことを主とよめるなれば、さることまでを、猶こまかにいはむは、かへりてくだ〳〵しく聞ゆるをや』（古義）と云つた。然るに講義では、高市皇子尊のことだとし、前の人麿作の輕皇子の御事を、『神ながら神さびせすと太敷かす』と歌つてゐるのがその證だとしてゐる。予は例の省略融合句の理論で移行した句と考へるから、天皇（天武・持統）の御事と解しておく。新考にも、『ミヅホノクニヲの下に天皇ガといふことを略したりと見るべし』と云ひ、新解にも『この二句は天武天皇の御事を云つたものと思はれる。しかし主格を略したのは、少し唐突の感を起させる』と云つてゐる。なほ後考を要する。

○吾大王之・天下・申賜者　ワガオホキミノ・アメノシタ・マヲシタマヘバと訓む。天皇持統の治め給ふ天下の政をば、高市皇子が執奏し給へばの意。申賜といふのは天皇に奏上することで、此處ではつまり、皇子が政を執りたまふことである。古事記中卷に、大雀命執二食國之政一以白賜云々。萬葉卷五（八七九）に、余呂豆余爾伊麻志多麻比提阿米能志多麻乎志多麻波禰美加度佐良受弖。同卷（八九四）に、神奈我良愛能盛爾天下　奏多麻比志家　子等撰多麻比天勅旨　載　持弖とあつて、二つとも

天下の政を執奏する大臣の意味だから、此場合も、高市皇子の執政のことを云つて居ると解すべきである。ただ、此處の、『吾大王』をどう解するかといふに二つの説がある。第一は持統天皇を申奉るといふ説（古事記傳・註疏・新考・講義・新解・新釋・全釋・新講等）である。【第一説】の契沖は、『神ノマニハ、帝ヲ云事サキノ如シ。是ハ先帝ヲ申奉テ、下ノ八隅シ、吾大王ハ、當帝ニワタレリ。天下申賜ヘバトハ、第五第十九ニモ此詞アリ、事ヲ奏シテ勅ヲウケテヨキニ執行ナフヲ云』（代匠記精）と云つてゐる。當帝とは卽ち持統天皇を指し奉る。なほ眞淵は、『天皇の敷座天下の大政を、高市皇子の執申し給へばといふ也。此あたりはことば多く略きつ』（考）と云つて居り、『このあたりはことば多く略きつ』と云つたのは流石に鋭敏である。なほ童蒙抄には、『これは天皇をさしていふたる事也。高市皇子をいふにはあらず』（童蒙抄）と云つてゐる。私は種々考慮したすゑにこの第一説に贊成した。卽ち、この『吾大王』をば持統天皇として、『持統帝をさし奉り、持統帝の、しろしめす天の下の政を、高市皇子の申給へばといふ意也』（攷證）と解する方が無理が無いと思つたのである。ただ、『吾大王之』から、直ぐ、『天の下奏したまへば』に續けて、その間に省略があり、散文的にいふと、不足なので、説が分かれるのである。高市皇子尊といふ主格は、後の句の、『吾が大君皇子』に籠らせてゐると解してもいいのである。つまり、『やすみ

しし吾が大君の天の下』の大王(おほきみ)と、『吾が大君皇子(みこ)の御門』の大王(おほきみ)とは區別されてゐるのであると解釋したいのである。持統三年四月に皇太子草壁皇子が薨ぜられ、四年七月庚辰、以二皇子高市一爲二太政大臣一云々とあるを以て、その時から政を執り給うたのである。此處の、『吾大王之』の『之』は第二格所有格の形で、其處に意味を含める『ノ』の場合と解すべく、卽ち意味は、天皇の統御(シラシメ)し給ふ天下、その天下の政を皇子が執り申し給ふといふ具合に解すので、『之』をば第一格の『ガ』と解して直ぐ申賜に續けるやうにはしないのである。右に反して、【第二說】は、宣長の古事記傳に、『此オホキミは高市皇子尊を申せり』と云ふのを始め、註疏に、『八隅知之吾大王之(ヤスミシシワガオホキミノ)は高市皇子をさす。さるは定まりし天下を天武天皇の神隨(カムナガラ)ふとしりましてその後吾大王(ワガオホキミ)高市皇子の天下の政をたすけ申し玉へばといふことなり』。『天下申賜者(アメノシタマチシタマヘバ)は、天下の政を皇子の執行ひ奏(マチ)し玉へばなり。實(マコト)は天武の御世に高市の政申し玉ひし事はみえず。持統紀四年七月庚辰に以二此皇子高市(チ)一爲二太政大臣一とあるよりこそ、天下申賜(アメノシタマチシタマフ)ともいふべければ太敷座而(フトシキマシテ)を天武の御事としては齟齬(タガフ)やうなりといへる人もあれど、こは歌をしらぬ人の說なり。太敷座而の詞の下に、天位(アマツヒツギ)を持統に傳へ玉ひ、つひに此皇子の政とり玉ふ如くなれるまでの事をおほく含めたるにて歌の文章とことなる處はこゝにあるなり』と云つた。此處でも散文と違ふ句法のあることを說いたのは注意すべきである。次に井上博士は、

『オホキミノを天皇の御事とせば、オホキミノ天ノ下とつづけて天皇ノ天下ヲ高市皇子ガ治メタマヘバと見ざるべからず。而してかく見ればフトシキマシテといふ句のをさまる處なくなるなり。（中略）案ずるに座而はなほマシテとよむべくヤスミシシワガオホキミは高市皇子とすべく、ミヅホノクニヲの下に天皇ガといふことを略したりと見るべし』（新考）といひ、これも省略を認容して居る。次に山田博士も以上の説を大體認めたが、博士は眞淵の省略語説を否定し、『自家撞着の説を略語ありといふ事にて糊塗せむとしたりと考へらる。』（講義、以下準之）といひ、井上博士の省略語説に對しても、『按ずるに、これら略語ありといふ事は全く首肯せられざる説なり』といひ、また、註疏でも例證とした如く、日並皇子尊殯宮之時、輕皇子宿二于安騎野一時の人麿の歌を證として、太敷座も八隅知之吾大王も皇太子の場合に使つてゐることを强調してゐる。そして、『而してこれ皆人麿の作なり。されば、これより上の五句すべて高市皇子の事をいへるにて天皇にはかゝはらぬ事なりと見て差支なき筈なり。然るを同じ人の作歌の用語例を檢せずして、その時々の思ひなしによりて或は皇太子にかゝるとし、或は皇太子にかゝらぬとせるが故に、かく簡單なる事に惑をも起せるなり』と云つてゐる。併し私は思ふに人麿の歌に省略法を否定するのは間違で、これは屢說明して來た。次に人麿は日並皇子や輕皇子の場合に太布座や八隅知之吾大王と使つたといふが、人麿は天皇の場合にも

八隅知之吾大王叉は太敷座と使つてゐる。即ち持統天皇が吉野宮に行幸の時の長歌が最も積極的な例である。さうすれば一般的の語の解釋の場合には（藤原宮之役民作歌（卷一。五〇）藤原宮御井歌（卷一。五二）の用語例参照）一般的の心理に随順するのが順序である。然るに、日並皇子の場合は、皇子をば唯一の對象として歌つてゐるのだから自然にさうなるのであるが、此歌の場合は歴史を咏込みつつ高市皇子のことを云はうとする、その中途にある句なのである。それだから、同じ歌の中に、前の方にも八隅知之吾大王は天皇のことを明かに指して居り、天皇のことをも咏込んでゐるのである。其處を看過してはならない。また同じ省略法を認める近藤芳樹の註疏でも、その省略をば私が説明したやうにしなければ不徹底である。以上説明が煩瑣になつたが、これまで大學者が惑つた句だから、一言費したのである。

○萬代・然之毛將有登　ヨロヅヨニ・シカシモアラムトと訓む。萬代の後までも、斯のやうにかはりなく政を御執りになることであらうとの意。この句は明かに高市皇子の方に移行して居ることが分かる。萬代とだけ書いて『ニ』の字を略した例は、卷六（九二一）に、萬代見友將飽八（ヨロヅヨニミトモアカメヤ）がある。なほ、卷三（四七八）に、天地與彌遠長爾萬代爾如此毛欲得（アメツチトイヤトホナガニヨロヅヨニカクシモガモト）。卷六（九二〇）に、萬代爾如是霜願跡天地之神乎曾禱（ヨロヅヨニカクシモガモトアメツチノカミヲゾイノル）等の例が參考になる。**○一云。如是毛安良無等**　カクモアラムトと訓む。意味はこの方が分かりよいが、本文の句の方が重厚の調である。萬葉の例は、『シモ』と云つてゐる方が多い。

○木綿花乃・榮時爾　ユフハナノ・サカユルトキニと訓む。木綿花のめでたい如くに天下（御世）がめでたく榮ゆる時にで、その意味の中には無論、宮廷または皇子も含まつてゐるのである。ここの意味は單に皇子の御身の上のみのことではない。木綿花乃は榮の枕詞に使つた。木綿は栲又は穀の木の皮の纖維を以て織つた白布を謂つてゐるが、時にはその白布とする原料たる栲そのものを云ふ場合もある。木綿花はその白布を以て造つた造花だといふのである。木綿を咏込んだ歌に、卷六（九〇九）に、山高三白木綿花落多藝追。同卷（九一二）に、泊瀨女造木綿花三吉野乃瀧乃水沫。卷七（一一〇七）に、泊瀨川白木綿花爾墮多藝都。卷十三（三二三八）に、淡海之海白木綿花爾浪立渡等がある。木綿花の解は大體右のとほりだが、豐田八十代氏（萬葉集の基礎的研究）と彌富破摩雄氏（萬葉集纉攷）は綿の木の果實が裂けて綿毛の吹出したもの、卽ち綿花を指すものだといふ說をたててゐる。榮の例は、卷六（九九六）に、天地之榮時爾相樂念者。卷十九（四二五四）に、酒見附榮流今日之安夜爾貴左。卷二十（四三六〇）に、母能其時爾佐可由流等岐登。古事記上卷に、阿佐比能恵美佐迦延伎弖。如二木花之榮一榮などがある。ここのサカユルは主格は何かといふに、攷證に、『榮は、皇子のさかえ給ふを、木綿花にたとへて、木綿花のごとく榮るといへるなれ』云々といひ、註疏にも、『皇子の御齡の盛なるにたとへいへり』といひ、美夫君志も同說で、つまり皇子御一人に譬へたこととしてゐる。然るに、古

義に、『佐迦由流（サカユル）とは、繁榮の義のみならず、物のめでたくうるはしく、はえ〴〵しきをいふ詞にて、酒見附榮流（サカミツキサカユル）とも、咲榮流（エミサカユル）とも云るにて、其（ノ）意をさとるべし。さてこゝは、木綿花のうるはしくはえ〴〵しきを、やがて皇子（ノ）尊の御世の榮にかけていへるなり』とあり、『皇子尊の御世の榮』と解した。新考で、『シカシモアラムトはカヤウニアラウト思ウテといふことにて世の人の思ふ心なればサカユルトキニも世の人の事とせざるべからず』といひ、講義も、皇子尊のみに解するのを否定して『吾等が將來を期待して樂み榮えてあるその時にといふ意なり』と云つた。併しこの『榮』は單に『世の人』といふ意味では徹底しない。やはり、古義のやうに、『皇子尊の御世』として、朝廷も皇子も含めなければならぬのである。『榮』の例は、卷十八（四〇九七）に、須賣呂伎能御代佐可延牟等（スメロギノミヨサカエムト）の如く御代に關したのもあれば、卷三（四五四）の、愛八師榮之君乃（ハシキヤシサカエシキミノ）の如く、個人の場合もあり、卷六（九九〇）の、神佐備立而榮有千代松樹乃（カムサビタチテサカエタルチヨマツノキノ）。卷十三（三三〇五）の、茵花香未通女櫻花盛未通女（ツツジバナニホヘルヲトメサクラバナサカユルヲトメ）。卷十九（四二四一）の、梅花榮而在待等（ウメノハナサカエテアリマテ）は、花などに關聯せしめて使つて居る。さうすれば、この歌のサカユルを、必ずしも、『世の人』の榮ゆる意味のみにせずともよいとおもふ。

○吾大王・皇子之御門乎　ワガオホキミ・ミコノミカドヲと訓む。高市皇子の御殿をの意。此處の吾大王は高市皇子を申す。御門（ミカド）は皇子のおいでになる宮殿のことである。前の日並皇子尊殯宮之

時の歌にも、吾王(ワガオホキミ)皇子之命乃(ミコノミコトノ)とあつて、吾大王といふのは皇子を敬つてかく呼び申したのである。御門をば古義等で、『殯宮の御門なるべし』と云つたが、さうではあるまい。〇一云。**刺竹・皇子御門乎**　サスタケノ・ミコノミカドヲと訓む。刺竹は枕詞として使つて居る。記紀に、伊久美陀氣(イクミダケ)、以矩美娜開(イクミダケ)などあり、竹をくむ。刺竹は立竹で、キミはクミの轉で、キミに冠せたから、そのミ音で、ミコ、ミヤ等に冠せたのだらうといふ説がある(冠辭考)。

〇**神宮爾・裝束奉而**　カムミヤニ・ヨソヒマツリテと訓む。皇子が薨じ給うたから今迄の御殿をば殯宮の裝束にかへ奉るのをいふ。舊訓カザリマツリテであつたのを、略解でヨソヒマツリテと訓んだ。古事記書紀では裝束をヨソヒと訓み、古事記上卷に、麻都夫佐爾登理與曾比(マツブサニトリヨソヒ)。萬葉卷三(四七五)の、安積皇子薨之時の歌に、白細爾舍人裝束而(シロタヘニトネリヨソヒテ)。卷十二(三一一二)に、衣乎取服裝束間爾(コロモヲトリキヨソフマニ)。卷二十(四三三〇)に、奈爾波都爾余曾比余曾比弖(ナニハヅニヨソヒヨソヒテ)。卷二(一五八)に、山振之立儀足山清水(ヤマブキノタチヨソヒタルヤマシミヅ)。卷十四(三五二八)に、水都等利乃多多武與曾比爾(ミヅトリノタタムヨソヒニ)等は同じ語原で意味の諸變化ある例である。ヨソフは、俗にいふ支度又は設備などいふ意味で、必要の事をとりしたたむることで、カザルとは違ふ(講義)。

〇**遣使・御門之人毛**　ツカハシシ・ミカドノヒトモと訓む。皇子が御在世の時御召使ひになつてゐた御殿の人々もといふ意。流布本の『便』字を古寫本によつて『使』に更めた。遣使の舊訓タテ

マダス。童蒙抄ツカヘリシ又はツカハセシ。考ツカハセル。宣長が古事記傳でここをツカハシシと訓むべきを言ひ、略解がこれに從つた。遣使は、使ハ（四段活）シ（敬語の助動詞）シ（時の助動詞）で、使ひ給うたの意となる。卷十三（三三二六）に、朝者召而使、夕者召使、遣之舎人之子者。卷六（九七一）に、伴部乎班遣之等の例がある。御門之人は宮殿に仕へた人のことだが、考に、『卷十四、みこの御門乃五月蠅なすさわぐ舎人はとよみしかば、專ら御門守舎人をいふ也』とあるので、古義・攷證・美夫君志等がそれに從つてゐる。

○白妙乃・麻衣著　シロタヘノ・アサゴロモキテと訓む。白い麻布の素服を著てといふ意。妙は布の總稱で、白妙の麻衣は白い麻の衣服をいふ。白の麻衣は平服としても著たが、祭祀の場合には特に用ゐた。考・略解・攷證・美夫君志等はこれを喪服だと解し、古義に、『素服を服てと云ッなり』といひ、註疏に、『素服を著てといふに同じ。（中略）素服は喪中の禮服、喪服は喪中の常服なるを知るべし。（中略）さればこゝの白妙乃麻衣もたゞ御送葬の供奉のときの衣のみとおもふべし』とあり、講義に、『喪服は一般に墨染の麻布なりしを見るべし。然るにこれは白妙の麻布といへれば、喪服にあらぬは明かなり。この白き麻布の衣は所謂素服にして元來神事の服なるが、送葬の時に喪服の上にも着たるものなり。又喪にあらぬ者にても葬儀の事にあづかる人はこの素服をきたり。これを後世に當

色といへり。この素服は卽ちここに白妙の麻衣といへるものなるべし』とある。書紀孝德卷、大化二年詔に、其葬事帷帳等用二白布一云々とある。卷十三(三三二四)に、大殿矣振放見者白細布飾奉而內日刺宮舍人方雪穗麻衣服者。卷三(四七八)に、憑有之皇子乃御門乃五月蠅成驟騷舍人者白栲爾服取著而等の例がある。

○埴安乃・御門之原爾　ハニヤスノ・ミカドノハラニと訓む。皇子の御殿の門近くの埴安の原にといふ意。埴安は天の香具山の麓で埴安池のあつた處で、そこに御殿があつた。御門之原は、その御殿附近の原をいふ。攷證では卷一(五二)の、麁妙乃藤井我原爾とあるを以て、『御門之原は藤井が原をいへるなるべし』と云つてゐるのは稍ちがふので、埴安の宮殿は藤井が原卽ち藤原宮の東方に當るのである。

○赤根刺・日之盡・鹿自物・伊波比伏管　アカネサス・ヒノコトゴト・シシジモノ・イハヒフシツツと訓む。赤根刺(枕詞)、終日、鹿自物(枕詞)匍ひ伏しての意。赤根刺といふ枕詞は既出の如く太陽の色の赤いところから日の枕詞とした。日之盡は、舊訓ヒノツクルマデ。代匠記精ヒノコトゴト。童蒙抄ヒノクルルマデ(考・略解)。卷二(一五五)に、夜者毛夜之盡、晝者母日之盡。同卷(二〇四)。卷三(三七二)にも同様の例がある。鹿自物は鹿のさまして、卽ち鹿の如くにてで、匍ふの枕詞としたもので

ある。書紀武烈巻の歌に、斯々貳暮能瀰逗矩陛御暮黎云々とある。伊波比の伊は接頭辭で、波比は匍である。古事記上巻に、化二八尋和邇一而匍匐委蛇。萬葉巻三（二三九）人麿の歌に、四時自物伊波比拜鶉成伊波比毛等保理。四巻（三七九）に、十六自物膝折伏。また、書紀天武巻に、十一年九月辛卯朔壬辰、勅曰レ今以後跪禮匍禮並止レ之、更用二難波朝廷之立禮一云々とあるを以て、攷證では、『匍匐は禮なるをしるべし』と云つて居り、なほ續日本紀文武天皇の慶雲元年正月の條に、辛亥始停二百官跪伏之禮一とあるから、其頃までは未だ跪伏の禮が行はれてゐたやうである。

○大殿乎・振放見乍・鶉成・伊波比廻　オホトノヲ・フリサケミツツ・ウヅラナス・イハヒモトホリと訓む。高市皇子尊の御殿（東宮）をば仰ぎ見つつ、幾度も其處を往反して歎き悲しむ意。振放見は、久堅乃天見如久仰見皇子乃御門之（巻二。一六八）などと同じく、そんなに遠くない處だが、尊みかしこんでさう云つたのである。廻をモトホルと訓むは、新撰字鏡に邅字、遶字、繞字をモトホル・モトホリと訓ませてゐるので、廻字をもモトホルと訓んでいいわけである。古事記中巻の神武御製歌に、波比母登富呂布志多陀美能伊波比母登富理云々。續日本紀、神龜六年八月詔に、恐古士物進退匍匐廻保理白賜比受被賜久者云々。萬葉巻三（二三九）に、鶉成伊波比毛等保理恐等仕奉而。同巻（四五八）に、若子乃匍匐多毛登保利。巻四（五〇九）に、磐間乎射往廻。巻九（一七五一）に、島山

乎射往廻流等の例がある。

○雖侍候・佐母良比不得者　サモラヘド・サモラヒエネバと訓む。伺候してはゐるが、それにも堪へかねての意。舊訓サモラヘド・サモラヒエネバ（代匠記・考・略解・攷證・新訓・講義・新解。新釋・全釋・新講等同訓）。童蒙抄は者は煮の誤としてサモラヒエヌニと訓み、玉の小琴は者は天の誤としてサモラヒカネテと訓み（略解・檜嬬手・美夫君志等同訓）。古義は者は弖の誤として同訓（註疏同訓）。『祇候スレドモ御在世ノ時ニ替テ悲ニ堪ヌナリ』（代匠記）。『悲に堪かねて、在もあられねば也』（考）。『物さびしく在つかぬこゝちすれば』（攷證）。『皇太子の御宮に伺候してあれど、伺候する詮もなき事なればといふなり。カネテとする諸家の說、解釋としても無理なり』（講義）。『悲痛の餘、侍候するにも堪へかねて』（新解）。『伺候してゐるが、じつと伺候してゐる事も出來ず』（新釋）。この『得』の例は、人麿の例で、卷二に、聲耳乎聞而有不得者（二〇七）。世間乎背之不得者（二一〇）。世中背不得者（二一三）等があり、なほ、卷四（五四三）に、之加須我仁默然得不在者。卷九（一七八七）に、冬夜之明毛不得乎。卷十三（三二七二）に、嗟空過之不得物乎等がある。

○春鳥之・佐麻欲比奴禮者　ハルトリノ・サマヨヒヌレバと訓む。春鳥之（枕詞）悲歎呻吟すればといふのに當る。春鳥之は舊訓ウグヒスノ。新撰字鏡に鶬をウグヒスと訓んで居り、代匠記に、『春鳥ト

カケルハ、和名云、陸詞切韻云鸎烏莖反、楊氏漢語抄云、春鳥子、宇久比須春鳥也。カヽレバ撰者ノ義訓ニハアラズ』と云つてゐるのは、ウグヒスノと訓んだ證據となるのであらう。考でハルトリノと訓み、『是をうぐひすと訓はせばし。集中には、はる花、はるくさ、はるやなぎなど、のを省きていへる多し』と云つた。諸家皆考の訓に從つた。攷證では之をモヽトリノと訓み、『案に、もゝとりと訓べき也。いかにとならば、漢土にても春鳥といふは春來鳴くいろ〳〵の鳥のことにて、中國にもゝとりといふによく當れり』と云つた。サマヨフは、代匠記に、『神代紀ニ愁吟ヲサマヨフトヨメリ。吟呻スルヲ鶯ニ喩ルナリ』と云つてゐる。新撰字鏡には、喍・呻をサマヨフと訓み、類聚名義抄には、吟・呻・喍・懊をサマヨフと訓んでゐる。春鳥が呻吟するやうに呻吟する、卽ち悲歎して聲を出す有樣をサマヨフといつてゐるのである。卷九(一八〇四)に、葦垣之(アシカキノ)思亂而(オモヒミダレテ)春鳥能(ハルトリノ)鳴耳鳴乍(ネノミナキツツ)。卷二十(四四〇八)に、春鳥乃(ハルトリノ)己惠乃(コエノ)佐麻欲比(サマヨヒ)の例がある。

○嘆毛・未過爾　ナゲキモ・イマダスギヌニと訓む。皇子薨じまして、其嘆も未だ過ぎやらぬにといふ意。卷八(一四三四)に、霜雪毛(シモユキモ)未過者(イマダスギネバ)不思爾(オモハヌニ)春日里爾(カスガノサトニ)梅花見都(ウメノハナミツ)。卷九(一七〇三)に、秋山黃葉(アキヤマノモミヂ)片待時者(カタマツトキハ)雖過等(スギネド)がある。

○憶毛・未盡者　オモヒモ・イマダツキネバと訓む。嘆きの思も未だ盡きぬにといふ意。古事記

上卷、八千矛神御歌に、於須比遠母伊麻陀登加泥婆。萬葉卷四（五七九）に、奉見而未時太爾不更者如年月所念君。卷五（七九四）に、年月母伊摩他阿良禰波許許呂由母於母波奴阿比陁爾。同卷（八〇四）に、佐禰斯欲能伊久陀母阿羅禰波。卷八（一四七七）に、宇能花毛未開者霍公鳥佐保乃山邊來鳴令響等が參考になる。右と形が似て居つて、普通の『ネバ』は、卷十八（四一二五）に、安吉爾之安良禰波許等騰比能等毛之伎古良の場合の如きもので、二つの間には幾分の差別がある。

○言左敝久・百濟之原從　コトサヘグ・クダラノハラユと訓む。言左敝久（枕詞）百濟の原から、そこを通つての意。舊訓にクダラノハラニとあつたのを、考でクダラノハラユと訓んだ。『クダラノ原ヲ經テナリ』（新考）。『ユはその經過し行く地點を示すに用ゐたり』（講義）。百濟之原は今の大和北葛城郡、百濟村大字百濟の地で、飛鳥京から城上の殯宮に行くには其處を通過したものであらう。卷八（一四三一）に、百濟野乃芽古枝爾の百濟野も同じ處であるやうである。書紀舒明卷に、十一年秋七月詔曰、今年造作大宮及大寺、則以百濟川側爲宮處云々。十二年冬十月、徙百濟宮云々とある。

○神葬・葬伊座而　カムハフリ・ハフリイマシテと訓む。舊訓タマハフリ。代匠記カムハフリ。舊訓イマシテ。新考イマセテ。神葬は、攷證に、『天皇にまれ皇太子にまれ崩給ふを神になりませるよしにいへるは、上に神宮爾裝束奉而とある所にいへるごとくなれば神葬とは申すなり。』とあるに

よつて大體が分かる。葬は放の意だと宣長が云つてゐる。古事記傳卷廿九に云。『さて此の葬は波夫理と訓べし。次なる大御葬も同じ。此は御屍を送遣奉る儀を云へればなり。凡て波夫理とは其ノ儀を云り。さて然云意は遠飛鳥宮段歌に意富岐美袁斯麻爾波夫良婆。續紀卅一の詔に、彌麻之大臣之家内子等乎母波布理不レ賜失不レ賜慈賜波牟云々などある波夫流と本同言にて放るなり。葬は住なれたる家より出して野山へ送りやるは放かし遣る意より云るなり』云々。卷十三（三三二四）に、朝裳吉城於道從角障經石村乎見乍神葬葬奉者とある。次に座而は在の敬語で、講義に、『皇太子薨ぜられしが、朝廷よりこの皇太子を葬りましましてといふ事なり』とある如くである。イマス（四段活）の例は、萬葉卷二（一六七）に、神集集座而。卷十九（四二四五）に、船騰毛爾御立座而等の如く、この歌の場合と同じものもあるが、なほ形が等しくて卷三（三八一）に、好爲而伊麻世荒其路。卷四（六一〇）に、彌遠君之伊座者有不勝自。卷五（八九四）に、佐伎久伊麻志弖速歸坐勢等のごとき例がある。これは『行く』といふ意味があつて單純な敬語でないから一言を費すのである。新考のイマセテの訓は、犬雞隨筆の『伊座而を諸本イマシテと訓り。此訓惡し。イマセテと訓べし。令レ座テの意なればなり』といふ說を參照とした。なほ井上博士云。『又思ふに伊座而は奉而の誤にてハフリマツリテなるか。本集十三卷にも神葬葬奉者とあり。シヅマリマシヌもサダメマツリテと自他相かなは

ぬこゝちすれど、こはサダメマツリテの下にて主格のかはれるなり。即人が定めまつりて皇子がしづまりましぬるなり。テの前後にて主格のかはれる例は、上にも天皇の瑞穂國をふとしきまして皇子の天の下を申し給ふをカムナガラフトシキマシテヤスミシシワガオホキミノ天ノ下マヲシタマヘバといへり』と云つてゐる。ここのイマセテの訓には賛成しないが、『主格のかはる』といふ説は、私の省略句法の一種類で、細かい觀察だと謂つていい。

○朝毛吉・木上宮乎　アサモヨシ・キノヘノミヤヲと訓む。木上宮は城上殯宮を指すので、延喜式に三立岡墓とあるところだといふことは既に述べた。朝毛吉は舊訓アサモヨヒであつたのを、僻案抄でアサモヨシと訓んだ。キにかかる枕詞で、卷四(五四三)に、麻裳吉木道爾入立眞土山。卷七(一二〇九)に、麻毛吉木川邊之妹與背之山。卷九(一六八〇)に、朝裳吉木方往君我信土山越濫今日曾等の用例がある。

○常宮等・高之奉而　トコミヤト・サダメマツリテと訓む。永久の宮殿即ち御墓と定めまつりての意。高之奉而は、舊訓タカクシタテテ。童蒙抄では之は久の誤とし、タカクシタテテと訓み、『高くあがめ奉りて』の意だとし、考は、高知座而の誤としタカシリマシテと訓み、御在香乎高知座而を類例とし、玉の小琴は、『定を高之の二字に誤れる也』とし、サダメマツリテと訓み、常宮跡定

賜(タマヒテ)を類例とし、略解はタカクマツリテと訓み、宣長說に對しても、『さもあるべし』といひ、攷證は奉をタテと訓み、之を知の借用として、タカシリタテテと訓み、講義は、『誤字ありといふ確證出づるまでは吾人はタカクシマツリテとよむべきものと認む。意は城上の地に殯宮を高く作り奉りてといふなること著し』と云つた。今しばらく意味の分かり易く順當なのによつて宣長訓に從つて置いた。朝廷が定めまつるといふ意になるのである。

○神隨・安定座奴　カムナガラ・シヅマリマシヌと訓む。神として永久に鎭座し給うた、卽ち殯宮を營み奉つたことである。舊訓シヅマリマシヌ。神田本サダマリマシヌ。考シヅモリマシヌ。玉の小琴其を評して、『古言めきては聞ゆれど證例なきこと也』といひ、古事記傳にも同樣の評がある。古義も、『岡部氏考(ノ)にシヅモリマシヌとよめるはいかにぞや。大神宮儀式帳にも、志都眞利(シヅマリ)とありて、シヅマリといふこそ、むかしより定まりたる正しきいひざまなれ。そも〳〵近世(キ)の古學者の徒、古書のうへにて、ことに耳なれぬ訓をし、また自己(ミヅカラ)の歌文などにも、いとあやしき詞を用ひて、ひたすらにふるめかして、人の耳を驚かさむとかまふるは、いともいともそこぎたなきわざにして、中中に識者のわらへとなるものぞかし』などと云つた。なほ、古事記傳十一に、『鎭(シヅマル)とは、他處に遷往(ウツリイデ)坐(マサ)ずて、其處に留りたまふ意に云言なり。志豆麻理(シヅマリ)と登杼麻理(トドマリ)と通へり』とある。以上で、高市皇

子尊の薨去までを敍した。

○雖然・吾大王之　シカレドモ・ソガオホキミノと訓む。然れどもわが高市皇子尊がといふ意。雖然は、併しそれにも拘らずといふ意があり、前にも例があつたが假名書の例は、卷十五（三五八八）に、波呂波呂爾於毛保由流可母之可禮杼毛。卷十八（四〇九四）に、御調寶波可蘇倍衣受都久之毛可禰都之加禮騰母等とある如くである。

○萬代跡・所念食而・作良志之・香來山之宮　ヨロヅヨト・オモホシメシテ・ツクラシシ・カグヤマノミヤと訓む。萬代に變ることなく御念になつて作り給うた香來山の宮殿がといふ意で、所念をオモホスと訓む例は、卷一（五〇）に、高所知武等神長柄所念奈戸二があり、オモホスといふ假名書の例は、卷十五（三七三六）に、等保久安禮者一日一夜毛於母波受弖安流良牟母能等於毛保之賣須奈がある。香來山の宮は前言した如く、埴安の御門の原に近く、香具山に關聯した地位にあつたことが分かる。攷證に、『香來山のほとりなれば、香具山の宮と申しゝ也』とある。

○萬代爾・過牟登念哉　ヨロヅヨニ・スギムトオモヘヤと訓む。永久に、無くなつてしまふとは思へないといふ意。過は此處は無くなる。消え失せる、廢絶するぐらゐの意で、物象の通過するにも過といひ、人間の死去するにも過といひ、物の消滅するにも過といふ。卷四（六九三）に、秋津野爾

多奈引雲能過跡者無二。卷一（四七）に、（黄）葉過去君之形見跡曾來師。卷二（一九五）に、玉垂之越野過去亦毛將相八方等があり、あとの二つは人麿の歌である。過牟登念哉につき、代匠記に、『一轉シテ後代マデ御名ノ朽失ズシテ慕ヒ參ラセムコトヲ云テ一篇ヲ收拾セラル』といひ、考に、『過失めやてふ也。萬代とほぎ作らしゝ宮なれば、失る代あらじ。是をだに御形見とあふぎ見つつあらんと也』と云つてゐる。いひ方が少しづつ違ふが結局、皇子が失せ給へども、永久に失せざるものを暗指せる句である。なほ攷證に、『過は、たゞ過ゆく意にはあらで、いたづらにすぎんと思へや、いたづらに過んとは思はざりしをと也』とあるのは、やや趣を異にした解である。また、『萬代爾』から過ぎむと念へやといふ反語に直ぐ續くのではなく、萬代爾のところで息の休みがあるものである。韻文の技法は正に如是のものなのである。山田博士の講義に、『前後のつゞき、言たらずして、かた言のやうに見え、無理なるやうなれど、古はかかるいひざまもせしならむ』と云つてゐる。博士は文法的にも嚴密に論ずる傾向であるが、計らずも人麿の省略的表現法を此處で肯定してゐるのである。

○天之如・振放見乍　アメノゴト・フリサケミツツと訓む。天の如く仰ぎ尊み見つつの意。卷十三（三三二四）に、君之御門乎如天仰而見乍雖畏思憑而があり、天之如といふ句は萬葉にこの二つのみである。他に卷二（一六八）に、久堅乃天見如久仰見之。卷三（二三九）に、久堅乃天見如久眞十鏡

仰而雖見といふ表現が同じく人麿によつて爲されてゐる。なほ、卷十三（三三二四）に、天原振放見管珠手次懸而思名。卷十七（四〇〇〇）に、布利佐氣見都々余呂豆餘能可多良比具佐等とあるのなども類想といふことが出來る。

○玉手次・懸而将偲・恐有騰文　タマダスキ・カケテシヌバム・カシコカレドモと訓む。玉手次（枕詞）心にかけて永久に偲び奉らう。恐多い事だけれどもといふ意である。舊訓カケテシノバム。考カケテシヌバナ。略解カケテシヌバム。卷一（六）に、家在妹乎懸而小竹櫃。卷三（三六六）に、珠手次懸而之努櫃。卷九（一七八六）に、留有吾乎懸而小竹葉背。卷十二（二九八一）に、懸而偲相人毎。卷十三（三三二四）に、珠手次懸而思名。卷十五（三七六五）に、麻蘇可我美可氣弖之奴敝等。卷十七（三九八五）に、見流比登其等爾加氣底之努波米等の例がある。恐有騰文は舊訓カシコケレドモ。考カシコカレドモ。攷證に、『本は、かしこみ恐るゝ意なれど、そを轉じて、ありがたくかたじけなき意にて、ここは俗言にて恐れおほきといふこゝろとして、おそれおほけれども、心にかけて忍び奉らんとにて』と云つてゐる。卷十（二二四九）に、山邊庭薩雄乃禰良比恐跡のカシコシはオソロシの意味が強いが、卷七（一三六九）に、響神之見者恐不見者悲毛。同卷（一三三四）に、奥山之於石蘿生恐常はその中間位であり、卷十三（三三二四）に、珠手次懸而思名雖恐有とあるのや、卷五（八一三）に、可既麻久波阿夜

爾可斯故斯とあるのは、オソレ多イといふ意味で、此歌の場合と同じ例である。

大意 言葉にかけて申さむも憚り多く、言葉に出し申さむも誠に畏れ多いことであるが、飛鳥の眞神の原に、〔久堅能〕帝都の宮殿を定め給うた天武天皇が、今では神として磐門の中に即ち御陵墓の中に隠れ靜まり遊ばされて御いでになるが、〔八隅知之〕その天武天皇が壬申の年に、天皇の統治したまふ大和から北に當る國（美濃國）の、眞木の木立深き不破山を越え給ひ、〔狛劍〕和蹔が原の行宮に御下りになり、天下を治め、國土の動搖を御安定なさらうと、〔鳥之鳴〕東國の軍勢を御召集になり、從はぬ兇徒をば鎮めよ、服從せぬ國をば平定せよと、皇子でまします高市皇子に軍のことを委任したまへば、皇子は乃ち、御身に大刀をお佩きになり、御手に弓をお執りになつて、部下の軍を統率し、御出動なされば、隊陣を整へる大鼓の音は雷の如くにとどろき、吹き鳴らす小角（笛）の音は、怒つた虎が吼ゆるかと思はれ、人の心を戰慄せしめる程に鳴り響き、また高く押立てて行く赤色の旌旗の靡きは、恰も〔冬木成〕春の野を焼き拂ふ野火の如く、また兵士の持つてゐる弓の弦音は、雪の降る冬の林を飄風が吹き捲く如く、聞くも恐ろしく、引き放つ矢の繁き有樣は、恰も大雪の亂れ降る如くに亂れ飛び來れば、降服せず抵抗した者どもも、〔露霜之〕死なば死なんと身命を擲つて、〔去鳥乃〕いきほひ闘つてゐる間に、渡會に齋き祀つてある伊勢皇太神宮から吹起つた神風

は、敵軍の目を惑はし、天雲を以て日の光を見せぬまでに、暗く空を覆つて、斯くして御平定になつたこの瑞穂の國、日本國を、神のまゝに現つ神なる天皇卽ち、天武天皇、持統天皇と御統治になり、〔八隅知之（やすみしし）〕その持統の御世に高市皇子が太政大臣として天下の政を奏上し給へば、實に萬代の後までもかはらず政を御執りになることであらうと思はれ、〔木綿花乃（ゆふはなの）〕木綿花（ゆふはな）の榮ゆる如く御世が榮えてゐた時に、思ひもまうけず、高市皇子の御殿をば、殯宮の裝束にかへ奉つて、今まで御召使ひになつてゐた御殿の人々も、喪中の禮服なる素服の白い麻の衣を著て、埴安の御所の附近の原に、〔赤根刺（あかねさす）〕日の暮れるまで〔鹿自物（ししじもの）〕鹿のやうに地にひれ伏し、〔烏玉能（ぬばたまの）〕夜になれば御殿を仰ぎ眺めながら、〔鶉成（うづらなす）〕鶉の匍ひ歩くやうに幾度も其邊を往反しつつ歎き悲しんで、伺候してはゐるが、それにも堪へかねて、〔春鳥之（はるとりの）〕春鳥のなくやうに歎息呻吟すれば、その歎きも未だ過ぎやらぬのに、悲しい思ひも未だ盡きぬのに、はや〔言左敝久（ことさへく）〕百濟の原を通つて御葬儀を執行したまひ、〔朝毛吉（あさもよし）〕城上の宮〔三立岡墓〕を永久の御殿卽ち御墓と定めまつりて、其處に神として永久に靜まりたまうた。

然しながら、わが高市皇子尊が、それにも拘らず、永遠に變ることなく思召されて作り給うた香具山の宮殿は、萬代の後までも搖ぐことなく、滅することがない筈だから、せめてこの御殿を、天の如く仰ぎ尊み見つつ、皇子の御事を〔玉手次（たまだすき）〕心に懸けて、永久に偲びお慕ひ奉らう。畏多いこと

だけれども。

鑑賞 萬葉集中にあつても一番大きい長歌で、意味の內容も複雜して居るが、大體次の如くに內容を整理して見ることが出來る。

I かけまくも、ゆゆしきかも、言はまくも、あやに畏き、明日香の、眞神の原に、ひさかたの、天つ御門を、かしこくも、定めたまひて、神さぶと、磐隱ります、

II (a) やすみしし、吾が大王の、きこしめす、背面の國の、眞木立つ、不破山越えて、高麗劍、和蹔が原の、行宮に、天降りいまして、天の下、治め給ひ、食國を、定めたまふと、鳥がなく、吾妻の國の、御軍士を、召し給ひて、ちはやぶる、人を和せと、從服はぬ、國を治めと、皇子ながら、任し給へば、

(b) 大御身に、大刀取り帶かし、大御手に、弓取り持たし、御軍士を、率ひたまひ、齊ふる、鼓の音は、雷の、聲と聞くまで、吹き響せる、小角の音も、激怒みたる、虎か吼ゆると、諸人の、おびゆるまでに、捧げたる、幡の靡は、冬ごもり、春さり來れば、野毎に、著きてある火の、風の共、靡くがごとく、取り持てる、弓弭の騷、み雪降る、冬の林に、飄風かも、い卷き渡ると、思ふまで、聞の恐く、引き放つ、箭の繁けく、大雪の、亂れて來れ、

從服はず、立ち向ひしも、露霜の、消なば消ぬべく、去く鳥の、競ふ間に、渡會の、齋宮ゆ、神風に、い吹き惑はし、天雲を、日の目も見せず、常闇に、覆ひ給ひて、定めてし、

III (a) 瑞穗の國を、神ながら、太敷きまして、やすみしし、吾大王の、天の下、申し給へば、萬代に、然しもあらむと、木綿花の

榮ゆる時に、

(b)わが大王、皇子の御門を、神宮に、裝ひまつりて、つかはしし、御門の人も、白妙の、麻衣著て、埴安の、御門の原に、あかねさす、日のことごと、鹿じもの、い匍ひ伏しつつ、ぬばたまの、夕になれば、大殿を、ふり放け見つつ、鶉なす、い匍ひもとほり、侍へど、侍ひ得ねば、春鳥の、さまよひぬれば、嘆も、いまだ過ぎぬに、憶も、いまだ盡きねば、言喧ぐ、百濟の原ゆ、神葬り、葬りいまして、麻裳よし、城上の宮を、常宮と、定めまつりて、神ながら、鎭まりましぬ、

Ⅳ然れども、わが大王の、萬代と、思ほしめして、作らしし、香具山の宮、萬代に、過ぎむと思へや、天の如、ふり放け見つつ、玉襷、かけて偲ばむ、恐かれども。

内容から觀れば、大體右の如くに分類することが出來る。聲調からいへば一大連續の息吹の如きものでも、内容にはおのづから區分があるのはやはり人間心理の自然である。その内容を今一度繰返していへば、

(I)全體の冒頭、天武天皇の御登極から崩御までを數句であらはした。十二句。

(Ⅱ)壬申の變の敍述

(a)天武天皇の御行動から戰爭の序曲、廿四句。

(b)高市皇子の御奮戰の有様から戰爭の終局に至る、五十一句である。

(Ⅲ)高市皇子殯宮の敍述

(a)壬申平安後の新帝都から、皇子の奏政。十一句。
(b)皇子の薨去のこと。殯宮、萬民悲歎のこと。三十八句。以上、客觀的記述の部分。
(Ⅳ)作者の感慨。全體の結び。十三句。以上主觀的部分。合計百四十九句。

かういふ具合である。卽ちもつと單純に分類すれば、前の大部分の客觀的、敍事詩的部分と、後の結びの主觀的、抒情詩的部分との二つから成立つてゐるので、これはこの長歌に限らず、總じて人麿の歌がこの傾向があり、人麿長歌の技法としては常套手段と謂つてもいいものである。

ただこの長歌は、既に評釋した人麿の長歌にあつたやうな、私的情緒、『靡き寐し兒を』云々といふことでなしに、極めて公的であり、歴史的事實を背景として、規模宏大、殯宮の有樣もまた單數的個人的でなく、複數的國民的に大きく歌つてゐる。從つて、私的な閨房の情を敍せず、亂軍激鬪の場面を現出せしめて、これが、人麿のものとしても珍らしく、また萬葉集中にあつても實に群を拔いて、高峰聳立のやうな感をいだかしめるものである。

この長歌の戰爭記述の內容から、天武紀の記述を聯想すると、元年秋七月庚寅朔。辛亥、男依等到瀨田。時大友皇子、及群臣等共營於橋西、而大成陣不見其後、旗幟蔽野、埃塵連天、鉦鼓之聲聞數十里、列弩亂發、矢下如雨、其將智尊率精兵、以先鋒距之、仍、切斷橋中、須容

三丈一、置二一ノ長板一、設有下踊ル板度者上乃引レ板將レ墮、是以不レ得二進襲一、於是有二勇敢士一曰二大分君稚臣一、則棄二長矛一以重二擐甲一拔レ刀急踏レ板度ル之、便斷二著レ板綱一以被レ矢入レ陣、衆悉亂而散走之不レ可レ禁、時將軍智尊拔レ刀斬二退者一而不レ能レ止、因以斬二智尊於橋邊一、則大友皇子、左右大臣等僅身免以逃之、男依等卽軍二于粟津岡下一、是日羽田公矢國、出雲臣狛、合共攻二三尾城一降之、壬子、男依等斬二近江將犬養連五十君、及谷(ハザマ)ノ直鹽手(チ)於粟津市上、於是大友皇子走無レ所レ入、乃還(リテル)隱二山前(ヤマサキ)一、以自縊焉、時左右大臣、及群臣皆散亡、唯物部連麻呂、且一二舍人從之、云々。

かういふ資料は、日本書紀の撰述がいまだ無かつたころでも、傳誦として、或は記されて、當時の人にも分かつてゐたものであつて人麿はそれを使つたのであらう。併し、人麿はその急所急所をのがさずに取納れて、歌句として用ゐてゐる手腕に注意せねばならぬのである。

井上通泰博士は、『吹きなせる小角(くだ)の音もあたみたる虎か吼ゆると諸人(もろひと)のおびゆるまでに捧げたる幡の靡(たびき)は冬ごもり春さり來れば野(ぬ)ごとに著きてある火の風の共(むた)靡くがごとく』云々の歌句は、戰國策卷五にある、『ココニ楚王雲夢(ウンボウ)ニ游ブ。結駟千乘、旌旗天ヲ蔽フ。野火ノ起ルコト雲蜺ノ若(ゴト)ク、兕虎(ジコ)ノ嗥ユル聲雷霆ノ若シ』といふ文章、劉向(キヤウ)の說苑卷十三にある、『其年共王（楚王）江渚ノ野ニ獵ス。野火ノ起ルコト雲蜺ノ若ク、虎狼ノ嗥ユルコト雷霆ノ若シ』といふ文章などの影響だらうと說

いた（萬葉集雜攷）。併し、愚見では、人麿長歌の句は直接に戰國策のこの文章の模倣ではなく、人麿の歌の發育史のうちには漢文もあり佛敎の經典もあり祝詞もあり先行した歌謠もありといふ具合で、文選あたりの文句とても既に幾分づつ常識化せられつつあつたのではなからうか。例へば文選東都の賦にある、『羽旄霓ヲ掃ヒ、旌旗天ヲ拂ヒ、猋猋炎炎トシテ、光ヲ揚ゲ文ヲ飛バシ、燗ヲ吐キ風ヲ生ジ、野ヲ欱ヒ山ヲ歕キ、日月モ之ガ爲ニ明ヲ奪ハレ、丘陵モ之ガ爲ニ搖震ス』などといふ文章でも人麿の長歌に似て居ないことがないからである。なほ、この長歌の漢文學の影響に就いて、林古溪氏も、『此雄篇は疑もなく、規範を支那の詩賦に求めたものである。此の、支那のものを自由に驅使してをるところに、柿本人麻呂の手腕を十分見ることが出來るのである』（萬葉集外來文學考）と云つて、井上博士の掲げた戰國策の文章のほかに、私が此處に引いた文選東都賦、文選七、司馬相如子虛賦、文選五十六、曹植の王仲宣誄を引き、楚辭、揚子雲の羽獵賦にも言及してゐる。

また、人麿のかういふ長歌に前行したものは、先づ純抒情詩の部類に屬するもので、かういふ歷史、戰爭の事實等を咏んだものはない。然るに人麿はさういふ事柄をば韻律化して咏んでゐる。かういふことは、語部などの口から韻律的調子で語りいでられたかも知れず、古事記の素材をなしたやうな、事柄とその音調、例へば、『次に成りませる神の御名は』で續けたり、『次に』、『次に』で

續けたり、『御頭には大雷居り、御胸には火雷居り、御腹には黑雷居り、御陰には拆雷居り』の如くに續けたり、『天照大御神の左の御角髪に纏せる八尺勾璁の五百津の美須麻流の珠を乞度して瓊音も瑲々に天の眞名井に振すすぎて、さ嚼に嚼みて吹棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は』と續けたりする、事實を敍するのに、かういふ聲調を以てする技法、または、『内はほらほら、外はすぶすぶ』と云つたり、出雲風土記の、『霜つゞらへならへならに、河船のもそろもそろに』と云つたりする、さういふ技法、または祝詞の、『天の壁立つきはみ、國の退立つかぎり、靑雲の棚引くきはみ、白雲の向伏すかぎり、船舳の至り留る極み、馬爪の至り留る限り』あたり、或は、『手肱に水沫かりたり向股に泥こかりよせて、取り作らむ奧つ御年を、八束穗のいかし穗の』あたりの聲調等は、大體人麿の歌の發育史のうへに働きかけてゐるとおもふが、それが人麿獨特のものになつた。そしてその獨特のものにするには、人麿の新工夫がなかなか多く、例へば枕詞の使用法の如きでも、人麿に至つてはじめて使はれたものがなかなか多い。それゆゑ人麿に先蹤はあつても、人麿のこの榮譽を減却せしめることにはならぬのである。

つづめて云はば、語部の物語ともつかず、文選ともつかず、戰國策ともつかず、佛教經典ともつかぬものが、兎に角此處に現出してゐるのである。文選の何々賦といふやうに長々しくむづかしく

なくも、兎に角此處にこれだけの內容を盛り込んだ空前の長歌といふものが出來て居るのである。そしてこれが家持あたりの努力でさへ模倣しきれなかつたことを後代の吾等は知らねばならぬのである。

單に事柄本位の敍事詩的見地からすれば、人麿のこの長歌より複雜なものは支那文學などにも幾らもあるが、この長歌には日本語の長歌としてなければならぬものを具備せしめ、同時にそのために事實の單純化が行はれて居る。事實の報告よりも、響として傳へて居るのだから、人麿は彼一流の力をば其處に注ぎ、從つて省略融合の法を隨處に行つて居るのである。

その省略融合の技法は人麿の他の長歌を評釋した時にも言及したが、例へば次の如きものである。

定めたまひて【省略】神さぶと磐隱ります【省略】やすみしし吾が大王の。

皇子ながら任し給へば【省略】大御身に大刀取りはかし。

常闇に覆ひ給ひて【省略】定めてし瑞穗の國を神ながら太敷き坐して【省略】やすみしし吾大王の

【省略】天の下申し給へば。

かういふ、簡潔技法があり、散文的に解釋しようとせば、そこに語句を補充せなければならぬのである。從來前賢の說の一致せぬ點のあつたのは、この省略融合の技法について餘り念頭に置かなか

つたためである。これが西洋近代の詩の如く改行してぽつりぽつりと書くのならば、この省略技法は誰もあやしまぬのだが、連續句法を特色とする長歌だから、前賢といへども迷つたのであつた。

聲調から云へば、この長歌は一大連續聲調であり、初の十二三句を過ぎて、前半の大部分を占める敍事詩的個處は、文法的に云つても終止句なき連續で、然かも句々緊張して平鈍遲礙することなく澎湃たる海波のごとき勢ひを示すものである。これは佛教經典の誦稱の場合の連續狀態などとも類似して、息が長く、閉塞し詰るといふことはない。之に反して、後半の主觀的抒情詩的個處は文法的に云つても休止がある。卽ち感動の切實なるがために、ところどころで窘迫して、咽に息が詰る、聲を呑むといふやうな場合に似てゐるのだから、自然に句が切れて、休止がある。『過ぎむと思へや』といつて、また、『玉襷かけて偲ばむ』といつてゐる。この邊の關係が實に微妙で何とも云へないところがある。特に、『かけて偲ばむ』と結んで、『恐かれども』と反るやうな氣味合に使つて居るけれども、これは重大な獨立句として役立たせてゐること、前の長歌の場合と同樣である。

この聲調の連續を成就せしめるために、動詞の連用段、連體段、助動詞、それから枕詞、名詞といふ具合に使つてゐること勿論であるが、助詞としては、の、に、を、と、て、ば、は、ゆ、等を相交錯せしめて自在無礙に使つてゐる手際は實に驚くべきである。然かもそのあひだに對句を挿入

しつつ調子をとり、『鶉なすい徊ひもとほり、侍へど侍ひ得ねば、春鳥のさまよひぬれば、嘆もいまだ過ぎぬに、憶もいまだ盡きねば』云々と云つたやうな具合になつて居る。この調子は轉ずる調子で、重々しい波動調とも稍違ふものである。『齊ふる、鼓の音は、雷の、聲と聞くまで、吹きなせる、小角の音も、あたみたる、虎か吼ゆると、諸人の、おびゆるまでに、捧げたる、幡の靡は、冬ごもり、春さりくれば、野ごとに、著きてある火の、風の共、靡くが如く、取り持てる、弓弭の騒、み雪ふる、冬の林に、飄風かも、い卷わたると、思ふまで、聞のかしこく、引き放つ、箭の繁けく、大雪の、亂れてきたれ』といふ風に、良行の音を多く重ねて、動運進嚮の趣を形成し、加行の音を連ねて勁健に爲上げてゐる。さうかとおもへば、『萬代と思ほしめして』といひ、『萬代に過ぎむと思へや』と云つて新なる調子を形成してゐる。これ等は自分で作歌するつもりになつて味ふと、なかなかの手際であつて、輕々に看過の出來ないといふことがわかる。然かもかういふ分析は、作歌に際して公式的に概念化すると困るのだが、さうでなく作歌しつつ自然にかういふ聲調を悟入するやうに修練し、修練に際して如是の分析の結果をしじゆう顧慮するやうにすれば、分析的研究も亦決して無用ではなくなつて來るのである。

小國重年の長歌詞之珠衣には、この長歌を解析して、初句二句對、次十八句、次二句對、次四句、

次二句對、次二句、次二句對、次二句、次四句六句長對、次八句十二句長對、次卅八句、次四句六句長對、次四句、次二句對、次終句二十三句、合百五十一句、大長歌。と云つてゐる。（一云、諸人の・見惑ふまでにを算入したからで、實際は百四十九句である。）なほ、『上件二首の長歌の格は、大長歌にのみかぎりて、外によみし例なし。是は柿本の朝臣の歌のみこの格をよめり。大長歌をよまむとおもふ人は、よく此格の詞つゞきのさまを味はひてさとるべし。まことや、かゝる長歌は、上手のうへのわざになん』と評して居る。今形態的に看れば次の如くになるだらうか。

かけまくも　ゆゆしきかも
言はまくも　あやに畏き
明日香の　眞神の原に　ひさかたの　天つ御門を　かしこくも　定めたまひて――神さぶと　磐がくります
やすみしし　吾が王の　きこしめす
背面の國の　眞木立つ　不破山越えて
高麗つるぎ　和蹔が原の　行宮に　天降りいまして
あめのした　をさめたまひ
をすくにを　定めたまふと
鳥がなく　吾妻の國の　御軍士を　召し給ひて
ちはやぶる　人を和せと
まつろはぬ　國を治めと
皇子ながら　任し給へば
大御身に　大刀取りはかし
大御手に　弓取り持たし
御軍士を　率ひたまひ
齊ふる　鼓の音は　雷の　聲と聞くまで
吹きなせる　小角の音も　あたみたる　虎か吼ゆると　諸人の　おびゆる迄に

捧げたる　幡(はた)の靡(なびき)は　冬ごもり　春さりくれば　野ごとに　著きてある火の　風のむた　靡く
がごとく
取り持てる　弓弭(ゆはず)の騒(さわぎ)　み雪ふる　冬の林に　飄風(つむじ)かも　い卷き渡ると　思ふまで　聞の恐く
引き放つ　箭の繁けく　大雪の　亂れて來(きた)れ
從服はず　立ち向ひしも　露霜の　消なば消ぬべく　去(ゆ)く鳥の　競ふ間(はし)に
渡會の　齋宮ゆ　神風に　い吹き惑はし　天雲を　日の目も見せず　常闇に　覆ひたまひて
さだめてし　瑞穗の國を　神ながら　太敷き坐して
やすみしし　わがおほきみの
あめのした　まをしたまへば
よろづよに　しかしもあらむと
木綿はなの　さかゆるときに
わが大きみ　皇子の御門を　神宮に　装(よそ)ひまつりて
つかはしし　御かどの人も　白妙の　麻(あさ)ごろも著て
埴安の　御門の原に
あかねさす　日のことごと　ししじもの　い匍ひ伏しつつ
ぬばたまの　夕べになれば　おほとのを　ふりさけ見つつ　鶉なす　い匍ひもとほり
さもらへど　さもらひ得ねば　嘆(なげき)も　いまだ過ぎぬに
はるとりの　さまよひぬれば　憶(おもひ)も　いまだ盡きねば
言喧(ことさへ)ぐ　百濟(くだら)の原ゆ　神葬(かむはふ)り　葬(はふ)りいまして　麻裳(あさも)よし　城上(きのへ)の宮を　常宮(とこみや)と　定めまつりて　神ながら　鎭りましぬ

然れども　わが大王の　萬代と　思ほしめして　作らしし　香具山(かぐやま)の宮――萬代に　過ぎむと思へや
天のごと　ふり放(さ)け見つつ　たまだすき　かけて偲ばむ――恐(かしこ)かれども

私は大體右の如くに形態を考へたのであるが、長歌軌範の評をも參考のために次に記載することとした。

此作以二七十五句五段一成。萬葉集中唯一大篇、莊重而雄偉、然富二變化一、神施鬼設、不レ可二端倪一、第一段、冒頭聯二提掛まくも言まくも二語一、作二同意對一、莊重若篇固宜レ然、次乃連山對一次、同意對二次、點綴取レ法、避二調之平板一、以敍三先帝在時皇子專任二軍旅一、堂々正言、可レ敎二人正一レ襟、第二段、變形對五行、分二說皷角旗弓矢五器一、敍二皇子征戰之壯一、張翼無レ不レ到、是本篇骨髓、第三段、一跌抑レ之、用二對句一僅一次、餘以二長竿體一、敍二皇子之大功一、壯絕淋漓、言極痛快、而末頃點二出木綿花の榮ゆる時に一句一、以爲二後案一、是一葉報レ秋法、第四段、復揚レ波鬧レ之、敍二皇子殯宮之哀一、乃二句對三句對、一句對二次、又二一句對、層波重瀾、昂低調レ節、全段以二對句一形、末塡二一句一爲二關鍵一、永二喟歎聲一、第五段、敍二皇子之宮一、及二於自己悲痛一、小對一次、寄二情於低徊一、以結二通篇一、何等大布置、何等大結構、讀來文勢雄、如二天馬行一レ空、宏辭邁語、雲湧波逐、變幻卷舒、巨觀神躍、凡有二此神巧一、人麻呂朝臣之所三以度二越千古一、得レ可レ知矣。離騷云、操二吳戈一兮被二犀甲一、車錯轂兮短兵接、

旗蔽ㇾ日兮敵如ㇾ雲、矢交墜兮士爭ㇾ先、壯烈痛絕、中間相類。

右の如くであるが、從來歌格研究者の分類は、必ずしも同一ではないが、先づ大同小異と看做すことが出來、その形態の整正、結構の妙に就いて驚歎して居るのである。

大雪乃(オホユキノ)ミダレテキタレの句の強い響に就いては、既に總論篇にも云つたが、眞淵の考で、『亂而來禮者(ミダレテクレバ)』だとし、『かく樣に者を略く例は多かれど、こゝはくればといひて聞るを、わざと略きて、きたれとよむことやはある。故に者(バ)は落し物とす』と云つてゐるのは、眞淵の眼力の平常に似ず出來が惡い。此處は、ミダレテキタレと強く響かすところである。かういふ語格は既に語釋で說明したが、繰返して記せば、

『あまづたふ入日さしぬれ』（卷二。一三五）。『晚闇(ゆふやみ)とかくりましぬれ』（卷三。四六〇）。『ひさかたの天知(あめし)らしぬれ』（卷三。四七五）。『たまきはる命(いのち)たえぬれ』（卷五。九〇四）。『うちなびき臥(こや)しぬれ』（卷五。七九四）。『いたづらに過(す)ぐし遣りつれ』（卷十七。三九六九）。『金(くがね)ありと奏(まう)したまへれ』（卷十八。四〇九四）。『かしこくも遺(のこ)し給へれ』（卷十八。四一一一）。『かたりつぎながらへきたれ』（卷十九。四一六〇）。『露霜の過(す)ぎましにけれ』（卷十九。四二一一）。

等であつて、大に參考になり、下の句への連續の具合を細かに吟味すれば愈有益である。イリヒサ

シヌレも人麿の句だが、實に精徹の境である。なほこの長歌の中には、抽出して吟味すべき歌句は幾つかある。例へば、『眞木たつ不破山越えて』でも、『ととのふる鼓の音は』でも、『あたみたる虎か吼ゆると』でも、『冬ごもり春さり來れば野ごとに著きてある火の風のむた靡くがごとく』といふ流動聲調句でも、『春鳥のさまよひぬれば』でも、『嘆もいまだ過ぎぬに憶もいまだ盡きねば』でも、終末の、『香具山の宮萬代に過ぎむと思へや天の如ふりさけ見つつ玉襷かけて偲ばむ』でも、皆丁寧に吟味して、はじめてその力量を知り得るものである。是等は現代の吾等ならば、決して上の空などで出來るものでなく、精力をひきしぼつてはじめて辛うじて出來る程度のもので、それほど大力量のこもつてゐる句である。

私は漢詩のことはつひに理會し得ずにしまふと思ふが、幸田露伴・鈴木虎雄の諸先生から杜甫の詩の聲調の精切、廣大熾盛を聽き、神融躡飛動の句に緣つて人麿を聯想し、『白樂天の詩の如きは、我我は之を圓轉流麗と稱するは、その句意のうつりゆき滑かなるを以てしかいふなり。杜甫の如きは然らず、そのうつりゆきは極めて急角度の屈折をなすものなり』（鈴木、杜少陵詩集總説）といふ評語を想起し、また、蘇峰先生の、杜甫秋興八首評中、『其の變化、開闔の端倪す可らざる、劔士の双刀を舞はすが如し。唯だ觀客をして目眩し、神悸せしむるのみ。由來格法、律調の、嚴密なる束縛の裡にありて、

此の如き、大自在力を逞うし來るもの、是れ實に彼が詩人としての天賦による乎、素養による乎、將た兩ながら其の宜きを得たるが爲め乎』(杜甫と彌耳敦)とあるのを想起するものである。さうして見れば杜甫の詩にも人麿の長歌のやうな技法の存在してゐることが分かる。ただ、詩と歌との本態に順つて差別があるといふことになるだらうか。

この長歌は約めていへば、氣魄雄壯、詞盛(さかん)である。眞率精切にして虛浮平鈍でない。讀者の精神を搖蕩せずんば止まないのはそのゆゑであり、人麿の全力的作歌態度がここに遺憾なく發揮せられたのである。また人麿はこの長歌を作るのに緊張慘憺したから、奥底の方に聲調の澁つてゐるところがある。併し其の點がやがて陰影となつて滲み出でて却つて全體としての效果を强めてゐるのかも知れない。上代人の素朴といふこと、小味な精練といふこと、定家流の幽玄といふこと、近代人の感覺といふこと、さういふことを標準としてこの長歌を味ふと、種々邪魔されて眞に味ひ得ないこととなる。先師の如きでさへ相待的な『素朴』とか、『流露』とかいふことにこだはつて、逆行した貌になつたやうであつた。併し先師は、鑛毒被害、雪中行軍將卒凍死、雨中統監、月島丸遭難、二荒山の紅葉の如き堂々たる人麿ばりの長歌を作つた後、程經てからの結論であり、私のは一首の長歌をも作り得ない程度の結論であるから、そこに程度の差別がおのづから存じてゐるのかも知れ

ない。約めていへば、人麿に對する尊敬の情は私の方が先師よりも大きい如くである。これはただ空漠たる結論でなく、私の現在の『力の程度』に本づくものかも知れないのである。

なほ云はば、この長歌の前言した如き『力』は、單にこの長歌の形態の雄大、結構の複雜のみに本づいてゐず、人麿渾身の心力を捽ましめた應報と謂ふことが出來る。その證據には大伴家持にはあれほどの長篇があつてもつひにこれほどの響をば傳へ得ないのを見ても分かる。これは家持の作歌態度が熱心でなかつたといふのではない。人麿の心力が畢生であつたといふことになるのである。

終りに試に古人の評を引くならば、『以上百四十九句、集中第一ノ長篇ナリ。人麿ノ獨歩ノ英才ヲ以テ、皇子ノ大功ヲ述テ薨去ヲ慟奉ラルレバ、誠ニ不朽ヲ日月ニ懸タル歌ナリ』（代匠記）。『此歌大段は四つ、句は百四十餘ありて、この人の歌の中にも秀たり。後の世人は、かゝる歌の有をもしらぬにや。ひと度見ば庭すゞめおどりがり、わたのいさなのいさみつべし』（考）。

參考 巻十三（三三二四）の長歌、『かけまくも、あやにかしこし、藤原の、都しみみに、人はしも、滿ちてあれども、君はしも、多く坐せど、行き向ふ、年の緒長く、仕へ來し、君の御門を、天の如、仰ぎて見つつ、畏けど、思ひたのみて、何時しかも、日足しまして、十五月の、滿たはしけむと、吾が思ふ、皇子の命は、春されば、植槻が上の、遠つ人、松の下道ゆ、登らして、國見あそばし、九月の、時雨の秋は、大殿の、砌しみみに、露負ひて、靡ける萩を、玉だすき、かけて偲ばし、み雪ふる、冬の朝

は、刺楊、根張梓を、御手に、取らしたまひて、遊ばしし、我が王を、煙立つ、春の日暮、まそ鏡、見れど飽かねば、萬歳に、斯くしもがもと、大船の、たのめる時に、妖言に、目かも迷へる、大殿を、ふり放け見れば、白妙に、飾りまつりて、うち日さす、宮の舍人も、一に云ふ、は 栲の穗の、麻衣著るは、夢かも、現かもと、曇り夜の、迷へる間に、麻裳よし、城上の道ゆ、つぬさはふ、石村を見つつ、神葬り、葬り奉れば、往く道の、たづきを知らに、思へども、しるしを無み、嘆けども、奥處を無み、御袖の、行き觸りし松を、言問はぬ、木にはあれども、あらたまの、立つ月ごとに、天の原、ふり放け見つつ、玉だすき かけて思ばな、かしこかれども。反歌。（三三二五）つぬさはふ石村の山に白妙に懸れる雲は吾王かも』といふ歌があつて、この人麿の歌と內容が非常に類似してゐる。又この人麿の歌の中に、『侍へど、侍ひ得ねば、春鳥の、さまよひぬれば、嘆も、いまだ過ぎぬに、憶もいまだ盡きねば』といふ句がある。これらは、古事記神代の條の、『遠々し、高志の國に、賢女を、有りと聞かして、麗女を、有りと聞こして、眞聘に、在り立たし、聘に、在り通はせ、大刀が緒も、未だ解かずて、襲をも、未だ解かねば』や、神武の條の、『人さはに、來入り居り、人さはに、入居りとも』や、景行天皇の條の、『あらたまの、年が來經れば、あらたまの、月は來經ゆく』などの歌調の影響に相違ないのであるが、人麿のこれらの調は、後進例へば山上憶良の、『同輩兒と、手携はりて、遊びけむ、時の盛を、止みかね、過し遣りつれ、蜷の腸、か黑き髪に、何時の間か、霜の降りけむ、紅の、面の上に、何處ゆか、皺か來りし』『飼ひ乘りて、遊び歩きし、世間や、常にありける』（巻五。八〇四）などの句に働きかけ、同じ對句でも、少しづつ變化があり、また大伴家持の、『宿る夜おちず、夢には見れど、現にし、直にあらねば』（巻十七。三九七八）といふやうな聲調に働きかけたものと推測し得るであらう。巻十八（四一二五）の家持の歌の中に、『慰むる、心はあらむを、何しかも、秋にしあらねば、言問の、ともしき子ら、現身の、世の人我も、此處をしも、あやにくすしみ、往き更る、毎年ごとに、天の原、ふり放け見つつ、言ひ繼ぎにすれ』とあるのも、この歌からの幾分の影響を推察せしめる。

短歌二首

【三〇〇】久堅之　天所知流　君故爾　日月毛不知　戀渡鴨

右一二八頁に評釋了。

【三〇一】埴安之　池之堤之　隱沼乃　去方乎不知　舍人者迷惑

右一三二頁に評釋了。

或書反歌一首

【三〇二】哭澤之　神社爾三輪須惠　雖禱祈　我王者　高日所知奴

右三七一頁に評釋了。

○

【巻二・二〇七】

天飛ぶや　輕の路は　吾妹子が　里にしあれば　ねもころに　見まく
欲しけど　止まず行かば　人目を多み　數多く行かば　人知りぬべみ
狹根葛　後も逢はむと　大船の　思ひ憑みて　玉かぎる　磐垣淵の
隱りのみ　戀ひつつあるに　渡る日の　暮れゆくが如　照る月の　雲
隱る如　奧つ藻の　靡きし妹は　黄葉の　過ぎて去にきと　玉梓の
使の言へば　梓弓　聲に聞きて（一に云ふ、聲のみ聞きて）　言はむ術　爲むすべ知らに
聲のみを　聞きてあり得ねば　吾が戀ふる　千重の一重も　慰むる
情もありやと　吾妹子が　止まず出で見し　輕の市に　吾が立ち聞け
ば　玉襷　畝火の山に　喧く鳥の　音も聞えず　玉桙の　道行く人も

一人(ひとり)だに　似(に)てし行(ゆ)かねば　すべをなみ　妹(いも)が名喚(なよ)びて　袖(そで)ぞ振(ふ)りつる（或本之を名のみを聞きてあり得ねばといへる句あり）

天飛也　輕路者　吾妹兒之　里爾思有者　懃　欲見騰　不止行者　人目乎多見　眞根久往者　人應知見　狹根葛　後毛將相等　大船之　思憑而　玉蜻　磐垣淵之　隱耳　戀管在爾　度日乃　晩去之如　照月乃雲隱如　奧津藻之　名延之妹者　黃葉乃　過伊去等　玉梓之　使乃言者　梓弓　聲爾聞而（一云聲耳聞而）　將言爲便　世武爲便不知爾　聲耳乎　聞而有不得者　吾戀　千重之一隔毛　遣悶流　情毛有八等　吾妹子之　不止出見之　輕市爾　吾立聞者　玉手次　畝火乃山爾　喧鳥之　音母不所聞　玉桙　道行人毛　獨谷　似之不去者　爲便乎無見　妹之名喚而袖曾振鶴（或本有謂之名耳聞而有不得者句）

題意　柿本朝臣人麿妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌といふ題がある。この題はこのやうにし

て傳はつてゐたものを編者が採用したものであらう。『妻死セシ後、泣血哀慟シテ作レル歌』と訓んでもよく、『メノスギニシノチ、ナキカナシミテヨメルウタ』と訓みくだしても好からう。泣血の語は漢文流に書いたもので、なほ卷二（一四三）の詞書に見結松哀咽歌とあり、（一六五）の詞書に哀傷御作歌とあり、（一七一）以下の詞書に慟傷作歌とあり、（二〇三）の詞書に悲傷流涕御作歌とあり、（二二八）の詞書に悲歎作歌とあり、卷三（四一五）の詞書に悲傷御作歌。（四一六）の詞書に流涕御作歌。（四二六）の詞書に悲慟作歌。（四六五）の詞書に悲嘆秋風作歌。（四七〇）の詞書に悲緒未息更作歌等の例は皆漢文流の熟語である。

次にこの長歌二首につき、契沖は、代匠記初稿本で、『これはさきに石見にてわかれけるを、都に仕つきて後よびのぼせて、輕の里におけるなるべし』と云つたが、眞淵は、二つの長歌を別々に考へ、『こゝの二首の長歌の意、前一首は忍びて通ふ女の死たるをいたみ、次なるは兒さへありしむかひ妻の死せるをなげゝるなり。然れば前なるをも妻とかきて、同じ端詞の下に載べきにあらず、又益なく泣血云云の言をいへること、此卷どもの例にたがへり。なま／＼なる人のさかしらなり』（考）と云つてゐる。この一人は妾、一人は正妻だといふ想像は、略解・攷證・古義・美夫君志等皆これを踏襲し、檜嬬手の如きは、代匠記の說をも容れて、『此二首の長歌同時によみたるにはあらず、

此一首は人麻呂主年弱き時、京に在ししほど忍びて通ひし女の死(ウセ)けるを悼めるうた也。次なるは石見より歸京の後、嫡妻の死(ウセ)けるを悲める歌也。』と云つて居る。然るに山田孝雄博士は、種々考證して、『余は、これは一人の妻の死を傷める一回の詠なりと信ず。その二首の長歌を以てせるものは、かの短歌の連作、又反歌の連作と同一の傾向にして、その二首にて一の意を完くするものなりといふを憚らざるなり。而してこの後に依羅娘子の歌あればこの死せしは前妻なりしことはいふまでもなし』（講義第二）と云つて居る。私はこれに從つて、總論篇にも一人の妻として記述して置いたのである。實際人麿は石見から上來の時の長歌でも、吉野宮行幸の時の長歌でも、内容を變へて二首にして詠んでゐる。これは長歌の長さは無制限だと謂つても、おのづからその本質といふものがあるから、濫りに内容を詰め込むといふことをしない。そこで一首の長歌で詠みきれない内容は、第二首に詠みこむといふことをしてゐるのである。人麿は實作家であるから、理論は云はぬが、その理論をば實際の作歌で示してゐるのである。かういふ點でも人麿は作歌意力の旺盛であつたことを思はしめるし、また極めて獨創的な歌人であつたことをも思はしめるのである。

語釋　**○天飛也・輕路者**　アマトブヤ・カルノミチハと訓む。天飛也(アマトブヤ)といふ枕詞は、空を飛ぶといふ意から、雁(カリ)に冠らせたのが本で、それから類音の輕(カル)といふ地名に冠らせるやうになつたもの

である。新撰姓氏錄に、雄略天皇御世獻ニ加里(カリ)乃郷一、仍賜ニ姓輕(カル)部君一とあるのが好例である。卷十(二二三八)に、天飛也(アマトブヤ)鴈之(カリノ)翅乃覆羽之(ツバサノオホヒバノ)。卷十五(三六七六)に、安麻等夫也可里乎都可比爾(アマトブヤカリヲツカヒニ)とあるのが證例である。なほ、卷四(五四三)に、天翔也(アマトブヤ)輕路從(カルノミチヨリ)玉田次(タマダスキ)畝火(ウネビ)乎(ヲ)見管(ミツツ)。卷十一(二六五六)に、天飛也(アマトブヤ)輕乃社之齋槻(カルノヤシロノイハヒツキ)などの例がある。このアマトブヤからカリに續けたのは意味の明かな枕詞で、卷五(八七六)に、阿摩等夫夜等利爾母賀母夜(アマトブヤトリニモガモヤ)。卷八(一五二〇)に、天飛也領布可多思吉(アマトブヤヒレカタシキ)とあるのも、やはり、鳥、翅、領布等に關聯してゐるので、意味の分かる用例である。『ヤ』といふのは、ニホテルヤ。タカユクヤ。オシテルヤ。サヒヅルヤ、タカミノヤ。アフミノヤ、などのヤと同じく咏歎助詞である。輕(カル)といふ土地は古事記に、輕之境岡宮、輕島之明宮、輕之酒折池、倭之市師池輕池などと見え、日本紀にも遷ニ都於輕地一。是謂ニ曲峽宮一。その他輕街、輕寺等が見え、萬葉にも輕路、輕乃社、輕市、輕池などと見えてゐる。畝傍山の東南、現在の高市郡畝傍町大字大輕を中心とする地で、石川、貝瀨、五條野あたり一帶の地に相當すると云はれて居る(辰巳・澤瀉・奥野・山田・豐田・大井)。昭和十年十月藤森朋夫氏同道にて踏査した。當時にあつては、神社があり寺があり市場があり大道路が通じ池があつたことが分かる(市に關しては、津田・西村・山本・本庄・福原氏等の著書參看)。『輕路者』は、舊訓カルノミチヲバであつたのを、玉の小琴でカルノミチハと訓んだ。『カルノミチハと六言に訓べし。ヲバと訓はわろし』(玉の小琴)。これは、輕

のうちの道路にも、輕に通ずる道路、つまり輕に行く道路にもあたり得るが、此處は輕の地域の道といふ意味であらうか。『輕といふ地の道路はなり』（古義）。『輕にかよふ路なり』（新考）。『カルノミチとは、輕の地内の道路をも、又輕に行く道路をもいふべし。諸家必ず一方にかたよせむとするはいかがなり』（講義）。

○吾妹兒之・里爾思有者　ワギモコガ・サトニシアレバと訓む。妻の里だからといふ意で、妻の生家の意、當時は女の家に男が通ふのだから、此處は妻の家といふのに落著く。『吾妹子が住し里なればと也。その人の本居をさして里といへり』（攷證）。『その妻の本つ家のある里をいふなり。今も嫁又聟のその生家を里といふは古の名殘なり』（講義）。卷二（一〇三）に、吾里爾大雪落有大原乃古爾之鄕爾落卷者後。卷五（八五九）に、波流佐禮婆和伎覇能佐刀能加波度爾波。卷六（九八六）に、愛也思不遠里之君來跡。卷八（一四八八）に、霍公鳥我家乃里爾今日耳曾鳴。卷十四（三四六三）に、己許呂奈久佐刀乃美奈可爾安敝流世奈可母。卷十七（三九五七）に、佐保能宇知乃里乎往過などの例がある。『里爾思』の『シ』は强めた辭で、卷二（八六）に、高山之磐根四卷手。卷三（三二四）に、河四淸之などとある、『シ』の用法と同じである。

○懃・欲見騰　ネモコロニ・ミマクホシケドと訓む。ねんごろに見たいのであるがといふ意。懃は

慇懃、丁寧、鄭重、懇切などに當て、力を盡し、身心を苦しめるやうの時にも用ゐ、思ふ、戀ふ、見る、聞く、約束する等の動詞に續けて居る。客觀的には徹底的、普遍的といふ程の意もあるもので、山田博士は、『ひきくるめていへば、「十分に……」といふ語を基として主觀客觀兩界に之をあてて前のいづれかの意に照して釋すべきなり』（講義）と云つて居る。この場合も、ようく、心をこめて、丁寧に、ひとへに、しみじみと等を大體當嵌めていいと思ふ。用例は、巻四（五八〇）に、菅根乃懃見卷欲君可聞。同卷（六一九）に、難波乃菅之根毛許呂爾君之聞四乎。同卷（六八二）に、將念人爾有莫國懃情盡而。同卷（七九一）に、奥山之磐影爾生流菅根乃懃吾毛不相念有哉。卷九（一七二三）に、六田乃河之川楊乃根毛居侶雖見不飽君鴨。卷十二（三〇五四）に、相不念有物乎鴨菅根之懃懇吾念有良武。卷十一（二四七二）に、見渡三室山石穂菅惻隱吾片念爲。卷十四（三四一〇）に、伊香保呂能蘇比乃波里波良禰毛己呂爾。卷十七（四〇一一）に、禰毛許呂爾奈孤悲曾余等曾とある如くである。ケドは、ケレドモの意で、卷六（九四六）の、深見流乃見卷欲跡。卷十七（三九六二）の、多麻伎波流伊乃知乎之家騰。卷五（八〇四）の、伊能知遠志家騰などはケドの用例である。

〇不止行者・人目乎多見 ヤマズユカバ・ヒトメヲオホミと訓む。舊訓ヤマズユカバであつたのを、考でツネニユカバとし、玉の小琴で二たび舊訓を是認した。しじゆう行くと人の目が多くての意。

不止は不斷だが、あんまりしじゆう行くとか、しよつちゆう行くとかの現代語になるだらう。卷三(三二四)に、玉葛絶事無在管裳不止將通。卷六(一〇一二)に、鶯之鳴吾島曾不息通爲。卷九(一六七九)に、城國爾不止將往來。卷九(一七六四)に、不息來益常玉橋渡須。卷十(二〇五六)に、妹之家道不止通。卷十一(二五七〇)に、足乳根之母毛告都不止通爲などの例がある。『行く』、『通ふ』は、道路を行く、通ふといふ意味と、妹の家に行く、通ふといふ意と相融合して居る。妹之家道不止通の例を參照すべきである。次に、ヒトメヲオホミ、ヒトメヲシゲミといふやうな表現の例は、卷十二(二九一〇)に、人目乎多見妹爾不相可母。同卷(二九一一)に、人目多見眼社忍禮。卷十二(三一〇四)に、人眼乎多戀乍衣居。卷十四(三四九〇)に、比等目乎於保美奈乎波思爾於家禮。卷十二(三一〇七)に、空蟬之人目乎繁。卷十一(二五六三)に、他眼守君之隨爾などとあるのが即ちそれである。

○眞根久往者・人應知見　マネクユカバ・ヒトシリヌベミと訓む。しげく度々行かば人に知られてしまふだらうからの意。マネクは物事の多いこと、行動のしげき事に使ふ。卷四(七八七)に、君之使乃麻禰久通者。卷十七(四〇一二)に、可良奴日麻禰久都奇曾倍爾家流。卷十九(四一六九)に、朝暮爾不聞日麻禰久安麻射可流夷爾之居者。卷十二(二八九二)に、不相數多月之經去者。卷十九(四一九八)に、不相日麻禰美念曾吾爲流等がある。次に、ベミはベクアルカラぐらゐの意。『べきによりて』(講義)。

卷七（二三八三）に、名毛伎世婆人可知見。卷九（一七八七）に、色二山上復有山者一可知美。卷十一（二五六六）に、色出而戀者人見而應知。卷十（二二九〇）に、秋芽子乎落過沼蛇手折持。卷十四（三四六八）に、可賀美可氣刀奈布倍美許曾などの例がある。

○狹根葛・後毛將相等　サネカヅラ・ノチモアハムトと訓む。サネカヅラは美男葛のことで、漢名南五味或は單に五味といふ。本草和名、五味に和名佐禰加都良と注してある。この植物は蔓であるから後に會ふと續けた。卷十一（二四七九）に、核葛後相夢耳受日度年經乍といふ例があり、なほサナカヅラとして、卷十二（三〇七〇）に、木綿疊田上山之狹名葛。同卷（三〇七三）に、白月山之佐奈葛後毛必將相等曾念などと用ゐてゐる。

○玉蜻・磐垣淵之　タマカギル・イハガキフチノと訓む。玉蜻は舊訓カケロフノであつたのを、考でカギロヒノと訓み、雅澄の玉蜻考でも美夫君志でもタマカギルとよみ、美夫君志は雅澄の說を補正した。玉蜻をタマカギルと訓んだのは、卷十一（二三九四）に、玉垣入風所見。また日本靈異記に、多萬可岐留波呂可邇美縁旦とあるのに據つたもので、タマカギルは夕、磐垣淵、髣髴、直一目等にかかる枕詞で、玉カガヤク、玉炫の意だとして居る。それを根本としてかけた語への關聯を考へるべきものか。イハガキフチに冠らせた例は、卷十一（二五〇九）に、玉限石垣淵乃隱而在孋。同卷（二

七〇〇）に、玉蜻(タマカギル)石垣淵之隱庭(イハガキフチノコモリニハ)等で、イハガキフチは山峡などの巖石で圍まれた淵のことで、從つてコモルと續けたのである。伴信友、玉蜻考（比古婆衣）。鹿持雅澄、玉蜻考（枕詞解附錄）。木村正辭、玉蜻考補正（美夫君志別記）等參照。

〇隱耳・戀管在爾　コモリノミ・コヒツツアルニと訓む。舊訓カクレノミであつたのを、契沖はコモリノミと訓んだ。公然でなく心に隱し忍んでの意。『忍びかくしつゝ戀るをいふ』（考）。『家に隱(コモリ)耳(ノミ)居て戀つゝ在と也』（攷證）。『表にあらはさぬよしなり。妻とはあれど、かよひ婚(スミ)し女なれば、人目を憚りしなるべし』（古義）。『これは心にこめてある事をいへるものにて、家に隱りてある事にはあらざるべし』（講義）。『表に出さず、下にのみ隱して』（新解）。卷六（九九七）に、隱耳哉戀度南(コモリニノミヤコヒワタリナム)。卷十（一九九二）に、隱耳戀者苦(コモリノミコフレバクルシ)瞿麥之花爾開出與(ナデシコノハナニサキデヨ)朝且將見(アサナサナミム)。卷十一（二七一五）に、神名火打廻前乃(カムナビノウチタムサキノ)石淵(イハブチノ)隱(コモリテ)而耳(ノミヤ)八吾戀居(ワガコヒヲラム)。卷十六（三八〇三）に、隱耳戀者辛苦(コモリノミコフレバクルシ)山葉從出來月之(ヤマノハユイデクルツキノ)顯者(アラハレバイカニ)如何などの例がある。卷十八（四一三八）に、波流佐米爾(ハルサメニ)許母理都追牟等(コモリツツムト)伊母爾都宜都夜(イモニツゲツヤ)とあるのも參考になる。卷十七（三九七二）の、許母里爲底(コモリキテ)伎彌爾故布流爾(キミニコフルニ)は籠居の意だから幾分意味がちがふ。併し、コモルといふ以上は是等の二つの用語例に共通の點があるわけである。

〇度日乃・晩去之如　ワタルヒノ・クレユクガゴトと訓む。日が暮れて行く如くの意。晩去之如は

考クレヌルガゴト（略解・檜嬬手・新訓・神田本ユフサレシゴト。舊訓クレユクガゴト（代匠記・攷證・古義・美夫君志・講義・新講同訓）。新解・全釋同訓）。古義に、『日の暮て、西山に隱れ行が如くといふなり』とある如く、太陽のことも寫象に入つてゐることが分かる。卷三（三一七）に、度日之陰毛隱比。卷二十（四四六九）に、和多流日能加氣爾伎保比弖等の例があり、ゴト・ゴトクの例は、卷十五（三六二五）に、布久可是能美延奴我其等久。卷九（一八〇七）に、昨日霜將見我其登毛等である。

○照月乃・雲隱如　テルツキノ・クモガクルゴトと訓む。照る月が雲に隱れる如くの意。卷三（四四二）に、此照月者滿闕爲家流。卷十（二〇二五）に、萬世可照月毛雲隱 苦物叙。卷十一（二四六四）に、若月 淸不見雲隱 等の例がある。

○奧津藻之・名延之妹者　オキツモノ・ナビキシイモハと訓む。海や河の水中に生ふる藻は靡くから、靡くの枕詞とした。卷十一（二七八二）に、奧藻之名延之君之言待吾乎の例がある。ナビクは臥す容子にも使ふし、相手と共に睦く寐ることにも、心になびき從ふことにも用ゐる。此處は吾に從つて共に寐たことに使つてゐる。ナビクの用例は、卷五（七九四）に、宇知那比枳許夜斯努禮。卷十七（三九六九）に、宇知奈妣伎登許爾己伊布之等とあるのは、寐るさまをあらはしてゐる。卷二（一三八）に、玉藻成靡吾宿之敷妙之妹之手本乎。卷三（四八一）に、袖指可倍氐靡寢等とあるのは、共に睦

び寐るさまをあらはして居る。

○黄葉乃・過伊去等　モミヂバノ・スギテイニキトと訓む。スギテイニキトは、死んでしまつたとの意。舊訓キテイユクト。代匠記スギテイユクト。童蒙抄チリテイユクト。考スギテイニシト（古義同訓）。攷證スギテイニキト（檜嬬手・美夫君志・註疏・新考・講義・新釋・新解・新訓・全釋等同訓）。モミヂバノは、黄葉は散るとも過ぐともいふから、人間の死すことをスグといふので同音關係で枕詞とした。巻三（四五九）に、見禮杼不飽伊座之君我黄葉乃移伊去者悲喪有香。巻四（六二三）に、黄葉乃過哉君之不相夜多鳥。巻十三（三三四四）に、何時可登吾待居者黄葉之過行跡などの例がある。

○玉梓之・使乃言者　タマヅサノ・ツカヒノイヘバと訓む。玉梓之は使の枕詞で、考で、『强ておもふに、玉はほむることば、津は助の辭、佐は章の字音にや、何ぞといはゞ、文章もて遠く傳る事は、本より皇朝の上つ代には聞えず、たゞから文字を借にし世より後に出來しことなり』と云つたのを玉の小琴に否定して云。『今按、上代には梓の木に玉を着たるを使の印に持てあるきしなるべし。そは思ひかけたる人の門に錦木を多くたてしと心ばへの似たることにて、凡て使を遣る音信の志を顯す印に玉付たる梓を持て行くなるべし。さて後に文字渡り來て書を通はす世になりて消息文は使のもて來るものなる故にかの玉梓に準へてそれを同じ玉づさと云るなるべし』と云ひ、山田博士の

講義に、『かく梓を以て使の枕詞とする所以は蓋し、その使たるものは古、梓の杖を携へしならむ。かくいふ由は古、ハセツカベといふものありしが、それは馳使部の意なるべきに、文字に丈部と書けり。而して丈は卽、杖なることは些の疑なければ、馳使部は必杖を用ゐしなるべく、この杖は通常梓にてつくりしなるべし』と考證して居る。玉梓之は使の枕詞とすること、卷二（二〇九）に、玉梓之使乎見者。卷四（六一九）に、玉梓之使母不所見。卷十一（二五四八）に、玉梓之君之使乎。卷十二（三一〇三）に、玉梓之使乎谷毛。卷十七（三九五七）に、多麻豆佐能使乃家禮婆等の如くなるが、稍轉じて、卷三（四二〇）に、玉梓乃人曾言鶴。同卷（四四五）に、玉梓乃事太爾不告。卷七（一四一五）に、玉梓能妹者珠氈。同卷（一四一六）に、玉梓之妹者花可毛の如くに用ゐたのもある。

○梓弓・聲爾聞而（一云聲耳聞而） アヅサユミ・オトニキキテ（一云、オトノミキキテ）と訓む。その言（通知）を聞いての意。梓弓を引くと弦音を發するので、音に冠らせた。聲爾聞而は、舊訓オトニキ、ツ、（美夫君志同訓）。略解オトニキキテ（攷證・檜嬬手・註疏・新考・講義・新解・新釋等同訓）。考では、一云の聲耳聞而を採り、オトノミキキテ（古義同訓）とした。又この聲をオトと訓んだ例は、萬葉卷四（七九〇）に、春風之聲爾四出名者。卷十二（三〇九〇）に、葦邊往鴨之羽音之聲耳の例がある。それから、卷四（五三二）に、梓弓爪引夜音之の例があるが、梓弓からオトに續けたのは、卷二（二一七）の、梓弓音聞吾母の例で、やはり人麿の作であるか

ら、この表現は人麿の造語だらうと考へることが出來る。枕詞にはその他にも例があることは既に云つた如くである。

○將言爲便・世武爲便不知爾　イハムスベ・セムスベシラニと訓む。言はむ術も爲む術も知らず、方法・手段を知らない、爲すところを知らず、茫然としてゐる意。卷三（三四二）に、將言爲便將爲便不知極。同卷（四八一）に、將云爲便將爲便不知吾妹子跡。卷五（七九四）に、伊波牟須弊世武須弊斯良爾石木乎母。卷八（一六二九）に、將言爲便將爲爲便毛奈之。卷十三（三三九一）に、言牟爲便將爲須便不知延津田乃。卷十七（四〇一一）に、伊敷須弊能多騰伎乎之良爾。卷十八（四〇七八）に、伊布須敝能多豆伎母奈吉波などの例がある。

○聲耳乎・聞而有不得者　オトノミヲ・キキテアリエネバと訓む。人の言傳ばかりを聞いてゐることが出來ないからといふ意。オトは、卷五（八四一）の、于遇比須能於登企久奈倍爾。卷十九（四二九一）の、布久風能於等能可蘇氣伎などの如く、音響・聲のことを直接いふのでなく、此處のオトは、通知、言傳・評判・噂・話等の意である。卷十七（四〇〇〇）に、於登能未毛名能未母伎吉底登母之夫流我禰。卷十八（四〇三九）に、於等能未爾伎吉底目爾見奴布勢能宇良乎。卷十一（二六五八）に、鳴神之音爾耳八方聞度南。同卷（二八一〇）に、音耳乎聞而哉戀などの例がある。

○吾戀・千重之一隔毛　ワガコフル・チヘノヒトヘモと訓む。わが戀ふる程度の千分の一もといふ意。舊訓ワガコヒノ。考ワガコフル（略解以下同訓）。卷四（五〇九）に、吾戀流千重乃一隔母名草漏情毛有哉跡。卷六（九六三）に、吾戀之千重之一重裳奈具佐米七國。卷七（一二一三）に、吾戀千重一重名草目名國。卷十三（三二七二）に、吾戀流千重乃一重母人不令知等の例がある。

○遣悶流・情毛有八等　ナグサムル・ココロモアリヤトと訓む。心を慰むることもあらうかとの意。遣悶流は舊訓オモヒヤルである（童蒙抄・考・講義同訓）のを、玉の小琴でナグサモルと訓み（略解・檜嬬手同訓）、攷證でナグサムルと訓んだ（古義・美夫君志・新考・新訓・新解・新釋・新講・全釋等同訓）。山田博士は舊訓のオモヒヤルを認容して居り、眞淵もさう訓んで味つてゐたから、この訓にも從つて味ふことも出來る。萬葉卷五（八九八）に、奈具佐牟留心波奈之爾。同卷（八八九）に、奈具佐牟流許許呂波阿良麻志。卷十三（三二八〇）に、多草武類心乎持而。卷十七（三九七三）に、奈具佐牟流己等母安良牟等。卷十八（四一二五）に、那具左牟流許己呂波安良牟乎などの例があり、なほ、既出（五〇九）に名草漏があり、卷九（一七五七）に、客之憂乎名草漏事毛有武跡がある。また、オモヒヤルの例は、卷十二（二九四一）に、念八流跡状毛吾者今者無。卷十七（四〇〇八）に、於毛比夜流許等母安利之乎等とあるから、兩方に言つたことがわかる。從つて思遣をオモヒヤルと訓み、遣悶をナグサムルと訓むのも、兩方あつていいとおもふ。情毛有八等

は、舊訓ココロモアレヤト（童蒙抄・玉の小琴・略解・攷證・檜嬬手・美夫君志等同訓）。考ココロモアルヤト。古義ココロモアリヤト（註疏・新考・新訓・講義・新解・新釋・新講・全釋等同訓）である。

○吾妹子之・不止出見之　ワギモコガ・ヤマズイデミシと訓む。妻が常に出でて見て居たところのといふ意。輕の市に續く。舊訓ヤマズイデミシ。考ツネニデテミシ。デテの例は、卷十四（三五六〇）に、伊呂爾低氏伊波奈久能未曾。同卷（三五〇三）に、宇家良我波奈乃伊呂爾氏米也母等とある如くであり、イデの例は、卷十五（三六九一）に、伊低見都追麻都良牟母能乎。卷十七（三九六九）に、故之乎遠佐米爾伊泥底許之。卷十八（四一〇一）に、伊泥氏許之月日余美都追。同卷（四一一三）に、開花乎移低見流其等爾などとある。よつて、當時は口調によつて、デテともイデとも云つたものと見えるのである。

○輕市爾・吾立聞者　カルノイチニ・ワガタチキケバと訓む。輕の市に來て見たがといふ意。聞くは下の句と連絡のために聞くと云つた。輕は既に云つた如く、懿徳天皇が曲峽宮を營んで都し給ひ、天武天皇の時には輕市・輕寺等があつた。輕の市は、大和の海柘榴市、河内の餌香市、攝津の難波市などと共に大きい市場であつた。そこに大路があつたものと見える。關市令に、『凡市恒以午時集。日入前擊鼓三度散。』とあり、令義解に、『謂日中爲市致天下之民是也』とある。

○玉手次・畝火乃山爾・喧鳥之・音母不所聞　タマダスキ・ウネビノヤマニ・ナクトリノ・オトモキコエズと訓む。玉手次・畝火乃山爾・喧鳥之序詞妻らしい音も聞こえずの意。舊訓オトモキコエズ。古義ではコヱモキコエズと訓んだ（音はオトとも訓べしとも云つた）。『音』字は類聚名義抄にコヱともオトとも訓んで居る。卷五（八四一）に、于遇比須能於登企久奈倍爾。卷十七（三九八八）に、保登等藝須奈久於登波流氣之とあるのは、鳥聲をオトと云つた例であり、卷十七（三九一五）に、今者鳴良武宇具比須乃許恵とあるのは、コヱと云つた例であり、卷十（一九五二）に、霍公鳥喧奈流聲之音乃遙左とあるのは二つとも入つてゐる例である。この場合はオトと訓む方がいいといふ説に從ふ。

○獨谷・似之不去者　ヒトリダニ・ニテシユカネバと訓む。ただの一人でも妻に似たものは行かないといふ意。ヒトリダニの例は萬葉にこの一つがあるのみである。そのほかに、卷十二（三一二三）に、直獨宿杼宿不得而。卷十六（三八八九）に、但獨相有之雨夜葉非左思（久）所念。卷十四（三四〇五）に、兒等波安波奈毛比等理能未思氐などがある。ダニの例は既に云つたが、卷十一（二七四四）に、外谷不見人故。卷十二（二八五〇）に、夢谷相見與の例があり、なほ、卷四（五三七）に、一日太爾君伊之哭者。卷十七（三九七〇）に、比等目太爾伎美等之見底婆などがある。

○爲便乎無見・妹之名喚而・袖曾振鶴　スベヲナミ・イモガナヨビテ・ソデゾフリツルと訓む。爲

様が無いので、妻の名を喚んで、袖を振つたといふことである。袖曾振鶴につき、『袖ゾ振ツルトハ、心マドヒシテ、生タル人ノ別ヲ慕フヤウニ招グ意ナリ。サハアルマジケレド、カクヨムハ歌ノ習ナリ。又揮涙ト云コトアレバ、妹ガ名ヲ云テ泣トニヤ』(代匠記精)。『あまりの悲しさにたへかねて、人めをもはぢず、妹が名をよびて、袖をふりぬと也。すべて袖をふるは、悲しみにまれ人にわかるにまれ、その事にたへかねしをりのわざ』(攷證)。『妹が名よびて、袖ふりて招ぎつるよと也』(檜嬬手)等の解釋があつて參考になる。卷六(九六五)に、恐跡振痛袖乎忍而有香聞。卷七(一〇八五)に、妹之當吾袖將振。卷九(一七四〇)に、立走叫袖振反側。卷十一(二四九三)に、袖不振來忘念勿。卷十二(三一八四)に、人目多袖不振爲而安萬田悔毛。卷十三(三二四三)に、白栲乃袖振所見津相思羅霜。卷十六(三八六〇)に、情進爾行之荒雄良奧爾袖振などがある。

○或本有下謂二之名耳聞而有不得者一句上 名耳聞而有不得者はナノミヲキキテアリエネバと訓む。この結句の位置に此句があるといふことであらうが、多分、上の聲耳乎聞而有不得者のところに入るべきものであつただらう。

大意 〔天飛也〕輕は妻の里だから、その路を行きつつ妻の家に通ひ、懇ろに妻を見たいけれども、餘り繁々と行つたら人目にかかる、餘り度々行つたら人に知られるとおもつて、それではい

づれ〔狹根葛〕後日に逢はうと、〔大船之〕心頼みにして、〔玉蜻〕磐で圍まれた深淵のやうに、獨り思ひを祕めて戀ひつつあると、天を渡る日が暮れてゆくやうに、照りかがやく月が雲に隱れるやうに、〔奥津藻之〕靡き寐た妻は、〔黄葉乃〕死んでしまつたと〔玉梓之〕使が來て知らせたので、〔梓弓〕その知らせを聞いて、云ふべき言葉もなく、施すべき方法もない。そこでただその人の言傳ばかりを聞いてゐることが出來ず、自分の戀ひおもふ思ひの千が一なりとも、心を慰めることが出來ようかと、妻が不斷に出懸けて行つてゐた、輕の市場の路に立つてゐても、〔玉手次・畝火乃山爾・喧鳥之〕妻らしいこゑも聞こえず、〔玉鉾〕道を往來する人々の、ただの一人も妻に似たものは通らないので、もはや致し方がない、妻の名を叫び喚んで、自分の袖を振つたのであつた。

鑑賞 この歌は、輕の里に通つてそこで夫婦になつたが、ひそかに通つてゐた趣で、そのため思ふ儘に度々通ふことも出來ず、思ひ潛めてゐたところが、急に妻が死んだといふ知らせを得たので、一層悲痛に心殘りの多いことを云ひあらはしてゐる。それから、其儘居たたまらぬので、妻がしじゆう行つてゐた輕の市場に出かけて、懊惱するところを敍して、『妹が名喚びて袖ぞ振りつる』と云つて結んでゐるのである。

右の如く大體意味は二段に分かれるのだが、その二つはやはり連續句法で、『爲むすべ知らに』か

ら直ぐ、『聲のみを聞きてあり得ねば、吾が戀ふる千重の一重も』と續けてゐる。卽ち、聲調からいへば、全部連續してゐるといふことになる。

この歌は、言語は相當に複雜であるが、內容は單純である。これは實際を歌つてゐるのだから、小說的戲曲的にすればもつと複雜になるのだが、それを單純化して樣式化してゐる。そして、一首で統一し切れない內容は第二の長歌に讓つてゐて、却つて單純化の效果をあげて居る。

『輕の市に、吾が立ち聞けば、玉襷、畝火の山に、喧く鳥の、音も聞えず、玉桙の、道行く人も、一人だに』のところの聲調は、深い悲哀の響を持つたもので、その愁緖には無限の餘響が隨伴して居る。私は此等の聲調に接觸しつつ人麿をおもふ。人麿は實に言語の音樂的要素を會得し、それを自在に自分の歌に織込ませ得た多力者であつた。そしてこれは人麿の全力的態度に本づくものである。さもなくて、ただの理論などでは決してこの哀韻は得られないものである。

然かも此等の句の中には、『玉だすき、畝火の山に、喧く鳥の、』までは、『音』と云はむとする序として用ゐてゐる。そしてまた、直ぐ『玉桙の』といふ枕詞を使つてゐる。單に此處ばかりでなく、疊句、繰返、枕詞、序詞は寧ろ人麿の好んで用ゐる技法の一つである。ただ言語の意味のみを以て詩歌を論じ、意味の簡淨を崇む人々は、人麿のこれらの技法を以て、無駄な技巧を弄するもの

となし、遊戯的分子と做し、内容の貧弱をば過技巧を以て糊塗するに過ぎぬものとなした。けれども、これらの技法のために却つて一種の不思議な深至悲情の調を現出し、交響樂的な複雜性をさへ成就せしめてゐるのである。たとへば、『吾が立ち聞けば』の、『聞けば』といつたのも誠に微妙だが、それから直ぐ、『たまだすき畝火のやまに喧く鳥の』といふ一見餘計な句が、非常な響を持つてゐて、これらの句の中にあつてはもはや無くて叶はぬものとなつて居るのである。その力ある所以のもう一つの原因は、『玉襷畝火の山に喧く鳥の』といふ句は、序でもあるが、また實際の寫實・寫生であつて、その實と非實と空と非空とが相交つて、微妙複雜な象徴的效果を齎してゐるためである。私は一たび畝火山に登り、輕の市の址を踏んで、是等の歌句の眞實性に驚いたのであつた。雅澄の永言格で、單に、『端文をおける例』としたのは鑑賞が未だしいのである。

此等の句は、前に種々の實相を敍して來て、感情が高潮に達したときの、流露的表現であるが、それゆゑ、一首の終に近くにその位置を占めて居る。

この句に似たものは、人麿の長歌には他にもあるので、前の歌（一九四）では、『玉だれのをちの大野の朝露に』あたり、後の歌（二一〇）では、『かぎろひの燃ゆる荒野に白妙の』、或は、『大鳥の羽易の山に吾が戀ふる妹は坐すと』などに相當するのであるが、皆、『輕の市に吾が立ち聞けば』のと

ころの沁み徹る哀韻にはつひに及ばない感がある。

次に、この歌の結句であるが、『妹が名喚びて、袖ぞ振りつる』といふ句は、なかなか強い響である。つまり結句としての貫祿ある据わりを有するのであつて、この特徴も、人麿長歌の中では注意すべきものの如くである。なほ、人麿長歌の結句を數例擧ぐれば次の如くである。

妹が名喚びて　袖ぞ振りつる　（二〇七）
ほのかにだにも　見えぬ思へば　（二一〇）
朝露のごと　夕霧のごと　（二一七）
かけて偲ばむ　恐かれども　（一九九）
わが王（おほきみ）の　かたみにここを　（一九六）
旅宿かもする　逢はぬ君ゆゑ　（一九四）
皇子の宮人　行方しらずも　（一六七）
妹が門見む　靡けこの山　（一三一）
旅やどりせす　古（いにしへ）おもひて　（四　五）
よりて仕ふる　神の御代かも　（三　八）

瀧の宮處は　見れど飽かぬかも　（三　六）

この歌でみると、人麿は妻にあふことを非常に遠慮してゐることが分かる。人に知られることを恐れてゐる。そこで眞淵は、妾で隱し妻だと考へたのであり、契沖も、『此ハ本妻ナレドモ、官人ノ身ニテ夙夜ニ公ニ在テ愼メバ、カヤウナルニヤ』（代匠記精）と云つてゐるが、これは當時の婚する有樣が、現今とちがふためで、また妻との愛情を保護するためにも、餘り大つぴらにしない方がよく、また、同時にひとの嫉妬を防禦する方法でもあつたのであらうから、餘り穿たずに、『さだまれる妻なれども、まなくかよふと人のおもはん事を遠慮するなり』（代匠記初）ぐらゐに解する方がいいとおもふ。

人麿が輕の市に行つて、妻を偲び、その名を喚んで袖を振つたと歌にはあるが、後世の人々、現代の吾等には、直ちに吾等の身の上に移入して鑑賞することが出來ない行爲である。そこで契沖は、『心まどひして、生たる人の別を慕ふやうに招ぐ意なり。さはあるまじけれど、かくよむは歌の習なり』と云つてゐるのは、さういふ、招ぐなどいふことをする行爲はあるまじきことだが、それは歌として咏んだのだといふのであるが、人麿當時の人々の死者に對する觀念は、この現世に居たときの連續乃至延長として、山の奥とか海邊とか洞窟とか島嶼とかに行つて居るものと信ぜられ、い

まだ盡くの人が常世の國、黄泉國に行くとは信ぜられてゐなかつたのである。この思想は、短歌の方の、『迷(まと)はせる妹(いも)を求めむ山道しらずも』といふ歌句を見ればよく分かり、また、次の長歌を見ればなほよく分かるのである。なほこの思想のことは總論篇にも觸れて置いた筈である。さういふ訣合であるから、『妹が名喚びて、袖ぞ振りつる』といふ句は、ただの、『歌の習なり』ばかりではなく、またただの美的表現ばかりではないことが分かるのである。現代の私等は、人麿の表現法につき、誇張と感じ、態とらしいと感じても、それを處理する前に、なぜ人麿はかういふ表現をせねばならなかつたかといふことに就いて用意を拂ふことが必要である。

あまとぶや　かるのみちは　わぎもこが　さとにしあれば
　ねもころに　みまくほしけど
　やますゆかば　ひとめをおほみ
　まねくゆかば　ひとしりぬべみ
　　さねかづら　のちもあはむと　おほふねの　おもひたのみて
　　たまかぎる　いはがきふちの　こもりのみ　こひつつあるに
わたるひの　くれゆくがごと
てるつきの　くもがくるごと

おきつもの　なびきしいもは
もみちばの　すぎていにきと
たまづさの　つかひのいへば　あづさゆみ　おとにききて
いはむすべ　せむすべしらに　おとのみを　ききてありえねば
わがこふる　ちへのひとへも　なぐさむる　こころもありやと
わぎもこが　やまずいでみし
かるのいちに　わがたちきけば
たまだすき　うねびのやまに　なくとりの　おともきこえず
たまぼこの　みちゆくひとも　ひとりだに　にてしゆかねば
すべをなみ　いもがなよびて　そでぞふりつる

小國重年に據ると、初句六句、次二句對、次八句、次二句對、次終句三十一句、合五十三句、大長歌といふことになる。

そのころ人麿は何處にゐて輕の里の妻のところに通つたか、辰巳利文氏等は卷向の穴師の里（今の纏向村字穴師）に人麿が住んでゐて其處から通つただらうと想像してゐる（大和萬葉地理研究）。或はそのころは、すでに藤原京の近くに住んで居たのかも知れない。いづれにしてもそんなに遠くはなく、

そのころの男子の足ならば通ふのになんでもない。ただ、妻の死を知らずにゐたところを考慮すると、穴師の里と輕の里ぐらゐの距離を想像する方が妥當のやうにおもへる。

参考 巻三（三一七）赤人作中、『わたる日の影も隱ろひ照る月の光も見えず』の句がある。恐らく人麿の此歌の影響であらう。巻十七（三九五七）に、『玉梓の使の來れば嬉しみと吾が待ち問ふにおよづれのたは言とかも』云々といふ大伴家持が弟の死を悲しんだ歌があるが、それには人麿の歌の調べの薫染があるやうである。なほ、巻十三（三三四四）の、『この月は君來らむと大舟の思ひたのみていつしかと吾が待ち居れば黄葉の過ぎて行きぬと玉梓の使の云へば螢如すほのかに聞きて大地を炎と踏み立ちて居て行方も知らに朝霧の思ひ惑ひて杖足らず八尺の嘆嘆けどもしるしを無みと』云々といふのにも、人麿の歌に類似のにほひがある。巻二十（四四六五）の家持の歌の句に、『山河を磐根さくみて履みとほり國覓しつつちはやぶる神をことむけ』云々などでも亦さうである。

短歌二首

【二〇八】秋山之　黄葉乎茂　迷流　妹乎將求　山道不知母（一云路不知而）

【二〇九】黄葉之　落去奈倍爾　玉梓之　使乎見者　相日所念

右一三六頁、一三九頁に評釋了。

【巻二・二一〇】

現身と　念ひし時に　一に云ふ、うつそみと思ひし　取持ちて　吾が二人見し　趍出の　堤
に立てる　槻の木の　こちごちの枝の　春の葉の　茂きが如く　念へ
りし　妹にはあれど　憑めりし　兒らにはあれど　世の中を　背きし
得ねば　かぎろひの　燃ゆる荒野に　白妙の　天領巾隠り　鳥じもの
朝立ちいまして　入日なす　隠りにしかば　吾妹子が　形見に置ける
みどり兒の　乞ひ泣く毎に　取り與ふ　物し無ければ　男じもの　腋
ばさみ持ち　吾妹子と　二人吾が宿し　枕づく　嬬屋の内に　晝はも
うらさび暮し　夜はも　息づき明かし　嘆けども　せむすべ知らに
戀ふれども　逢ふ因を無み　大鳥の　羽易の山に　わが戀ふる　妹は

坐すと　人の言へば　石根さくみて　なづみ來し　吉けくもぞなき

現身と　念ひし妹が　玉かぎる　ほのかにだにも　見えぬ思へば

打蟬等　念之時爾（一云宇都曾臣等念之）　取持而　吾二人見之　趍出之　堤爾立有
槻木之　己知碁智乃枝之　春葉之　茂之如久　念有之　妹者雖有　憑
有之　兒等爾者雖有　世間乎　背之不得者　蜻火之　燎流荒野爾　白
妙之　天領巾隱　鳥自物　朝立伊麻之弖　入日成　隱去之鹿齒　吾妹
子之　形見爾置　若兒乃　乞泣毎　取與　物之無者　鳥穗自物　腋挾
持　吾妹子與　二人吾宿之　枕付　嬬屋之內爾　晝羽裳　浦不樂晚之
夜者裳　氣衝明之　嘆友　世武爲便不知爾　戀友　相因乎無見　大鳥
羽易乃山爾　吾戀流　妹者伊座等　人之云者　石根左久見手　名積來
之　吉雲曾無寸　打蟬跡　念之妹之　珠蜻　髣髴谷裳　不見思者

題意　長歌第二首目で、前にも云つたごとく、內容を少し變へつつ同時に作つたものと考へた

のであるが、この長歌には、『輕(かる)』といふ地名がなくて、『羽易(はがひ)の山』といふ固有名詞と、反歌の方に、『引手(ひきて)の山』といふ固有名詞とがある。若し羽易の山が春日(かすが)にある山だとせば、輕との距離が相當にあるので、そこに疑問もあるわけであり、また歌の內容に、第一の長歌の內容と渾一に融合しない點もあるので、眞淵あたり以來別々に作つたものだらうといふ說もあり、また想像を逞うすれば、人麿自身の妻の死でなくて、人の妻の死を悼む歌を賴まれて作つたものだらうなどとも想像し得るのであるが、只今は大體山田博士の考に從つて題意を解し、それから語釋に進むこととする。

語釋 **○打蟬等・念之時爾** ウツセミト・オモヒシトキニと訓む。妻が此世に生きてゐたときにといふ意。前の明日香皇女の殯宮の時の歌（一九六）に、宇都曾臣跡念之時(ウツソミトオモヒシトキ)といふのがあり、オモヒシトキといふやうな表現は興味ふかいものだといふことは既に云つた。**○一云。宇都曾臣等念之**は、ウツソミトオモヒシと訓み、一はウツセミ、一はウツソミと云つたといふ異同を明にしたので、萬葉集編輯の用意周到なることが分かる。

○取持而・吾二人見之 トリモチテ・ワガフタリミシと訓む。妻を伴つて吾は二人で見たの意。取持而は舊訓トリモチテ（代匠記・講義・新訓・新解同訓）。童蒙抄タヅサヘテ（考・略解・檜嬬手・古義・註疏・全釋・總釋等同訓）。攷證タヅサヒテ（美夫君志・新考・新講等同訓）。このトリモツにつき、代匠記初稿本に、『とりもちては下にある槻の枝なり』とあ

るが、これは『妻を取りもつ』こととなるので、トリモツといふ他動詞は『吾は妻を取持ちて、吾は妻と二人して見し』といふ具合に使つて、主語と客語とを省略簡潔にして居るのである。卷二（二三〇）に、梓弓手取持而。卷三（四〇八）に、石竹之其花爾毛我朝旦手取持而不戀日將無。同卷（四四三）に、一手者木綿取持一手者和細布奉。卷十七（四〇〇八）に、乎須久爾能許等登里毛知底。卷十八（四一一六）に、於保伎見能末伎能末爾末爾等里毛知底都可布流久爾能年內能。卷十九（四一四二）に、春日爾張流柳乎取持而見者などとあるのを參考すればいい。この長歌は、はじめから、『妻』といふ主格を省略しつつ表現してゐるのだから、『妻を』といふ客語を省略して、『取持つ』と使つても不思議ではない。また、萬葉には、トリモツといふ用例はなかなか多い點を考慮すれば、文字面から見ても、タヅサフと訓むよりトリモツと訓む方が直接で恐らく正訓であらう。『結局舊本の如く、とりもちてとよまむ外あるべからず。然るときは、又考、攷證などにいへる如く、何をとりもつにかといふ難いでむ。然れども、これは契沖が、とりもちては下にある槻の枝なりといへることにて明かなるにあらずや』（講義）。『取り持つは物品器具などを携ふることをいふ。こゝでは妻を伴つての意』（新解）といふ參考文章がある。次にタヅサヘテ。タヅサヒテと訓む說であるが、タヅサフと訓むとせば、波行下二段の動詞があるから、『妻をタヅサヘテ』といふやうに解釋の付かぬことはな

いが、萬葉にはこの用例はないやうだから、根據は薄弱である。また波行四段に活用した例はない。(山田氏、講義)ただ、タヅサハルと良行四段に活用した例はなかなか多いから、卷四(七二八)の、吾妹兒與攜行而副而將座の『攜行』も、タヅサヒユキテではなく、タヅサハリユキテと訓むべきものと思へる。卷五(八〇四)に、余知古良等手多豆佐波利提。同卷(九〇四)に、伊射禰余登手乎多豆佐波里。卷十七(三九九三)に、宇麻宇知牟禮底多豆佐波理。卷十八(四一二五)に、多豆佐波利宇奈我既利爲氏。卷二(一九六)に、敷妙之袖攜。卷九(一七四〇)に、細有殿爾攜二人入居而などの例があり、この長歌の或本歌(二一三)には、『攜手』とあつて、タヅサハリと訓んでゐるので、この歌の場合も、タヅサハリと訓んでもいいのであるが、この歌の場合は、『而』文字があるから、さすれば、タヅサハリテと訓まねばならぬこととなるが、それでは調が惡いからして、此處は素直にトリモチテと訓んで、つまりは、『攜手』の意味に合致することとなるのである。

○趍出之・堤爾立有　ハシリデノ・ツツミニタテルと訓む。直ぐ近の堤に立つてゐるの意。趍は玉篇に趍走也。廣韻に俗趨字とある。趍出之。舊訓ワシリイデノ。考ハシリデノ。(略解・美夫君志・新考・新訓・新解等同訓)。攷證ワシリデノ(檜嬬手・古義・註疏同訓)。日本紀雄略卷御製歌に、和斯里底能與盧斯企野磨能とあり、卷十三(三三三一)に、隱來之長谷之山青幡之忍坂山者走出之宜山之出立之妙山敍とある走出は、ワシ

リデかハシリデか明かでない。類聚名義抄にワシルともハシルとも注してある。ところが萬葉には、巻五（八九九）に、出波之利伊奈々等思騰とあり、巻十五（三六一七）に、伊波婆之流多伎毛登杼呂爾。巻五（八九六）に、紐解佐氣弖多知婆志利勢武。巻二十（四二九八）に、霜上爾安良禮多波之利などとあつて、ハシルで、ワシルといふ假名書きの例が萬葉にないから、やはり此處は、ハシリデと訓んでいいのであらうか。また、巻十三の走出も萬葉ではやはりハシリデであらうか。『はとわとは、ことに近き音なれば、古へよりわしりとも、はしりともいひしならむ』（攷證）。趍出といふ意味は『まぢかき所』（代匠記）。『門ちかき所』（考）。『走り出るばかりに近きをいへる也』（攷證）。『家のはひ入より打ちわたさるゝ邊りを云ふ』（檜嬬手）。『走り出して居るやうに見える堤の、走り出は山などに用ゐる。横に突き出してゐる形をいふ』（新解）等の解釋があるが、暫らく、契沖・眞淵あたりの解に從つた。堤は、和名鈔に云。陂隄、禮記云、畜レ水曰レ陂、音碑、和名豆々三隄又作レ堤云々。また、營繕令に凡堤内外并堤上多殖ニ楡柳雜樹ニ充ニ堤堰用ニ云々とある。人麿の妻の家の近くに堤があつて、その上に樹木（槻）が植ゑてある趣である。

○槻木之・己知碁智乃枝之　ツキノキノ・コチゴチノエノと訓む。槻の繁つてゐる枝のといふ意。

槻は和名鈔に云。唐韻云、槻音規、都岐乃岐木名、堪レ作レ弓者也。豆木乃木。津紀。漢名は欅で、今のケヤ

キである。新撰字鏡には、槻、豆支とあり、和名鈔國郡部に都木。古事記には都紀、豆紀の名が見え、古事記雄略條に、天皇坐二長谷之百枝槻下一、爲二豊樂一之時、伊勢國之三重采女、指二擧大御盞一以獻。爾其百枝槻葉落、浮レ於二大御盞一云々。書紀皇極天皇卷に、偶預二中大兄於法興寺槻樹之下打毱之侶一云々。また、持統天皇紀に、二年十二月乙酉朔丙申、饗二蝦夷男女二百一十三人於飛鳥寺西槻下一云々。仁徳紀の歌に、伊莵岐餓宇倍能娑箒岐等羅佐泥。萬葉卷十三（三二二三）に、垣津田乃池之堤之百不足五十槻枝丹水枝指。そのほかの例がある。また、古事記允恭條の歌に、都久由美能許夜流許夜理母とあるツクユミは槻弓であらうし、延喜式に、甲斐國槻弓八十張云々とあつて、古は弓の材料にもしたのであつたことが分かる。現に正倉院の御物には槻弓が多くある。また、萬葉卷二十（四三〇二）の詞題に、三月十九日家持之庄門槻樹下宴飲云々とあるなどを綜合すれば、人麿當時に槻をば多く植ゑて居たことが分かるので、實用向にも街路樹のやうにしても用ゐたこととおもはれる。槻は前述の如く今の欅で楡科の落葉喬木で Abelicea serrata. *Mak.* (Zelkowa acuminata. *Lindl.*) 以外に別に異種は植物書に書いてない。山田博士の講義には、『欅に似て少しく異なるものにして』とあり、鴻巣氏の全釋にも、『欅の一種で、葉の鋸齒深く、葉裏と葉柄とに毛がある。つきげやきともいふ』とあるが（なほ、古事記傳卷四、十二、槻齋雜攷參照）、土屋文明氏に據れば、さういふ異種ではなく、『欅である。今

の俗、工人等は槻と欅を區別して居るが、それは決して植物學上の異種ではない。古くはそんな區別はなかつたものであらう。正倉院御物の文欟木厨子の材などは、今の區別で欅の方に屬すべきものであると云はれる』(總釋)なのである。己知碁智乃枝は、『かなたこなたの枝なり』(代匠記初)。『アチコチノ枝ナリ』(代匠記精)。『此彼也』(考)。『こちは此方也。ちはいづちの知に同じ。甲斐の國の此方、駿河の國の此方とふたつに分る言なり』(槻落葉)等、なほ、宣長、守部等の說もあるが、山田博士はコチゴチは、今いふアチコチと同じで、當時はコチといふのがあつたが、ソチ、アチといふのがなかつた。そこで、『その意は、今の語の、あちらやこちらのといふに異ならずと知るべし。こちごちのえとは多くある枝を總じていへるなり』(講義)といつてゐるのに從ふべきである。コチゴチの用例は、古事記雄略條に、幣具理能夜麻能許知碁知能夜麻能賀比爾。萬葉卷二(二一三)に、百兄槻木虛知期知爾枝刺有如。卷三(三一九)に、奈麻余美乃甲斐乃國打緣流駿河能國與己知其智乃國乃三中從。卷九(一七四九)に、許智期智乃花之盛爾等とあるのがそれである。

○春葉之・茂之如久・念有之・妹者雖有　ハルノハノ・シゲキガゴトク・オモヘリシ・イモニハアレドと訓む。春の若葉の繁き如くに繁くおもつてゐた妻ではあるがの意。卷十九(四一八七)に、念度知大夫能許能久禮繁思乎。卷七(一二八九)に、青山等茂山邊。卷九(一七七三)に、念母不過戀之茂爾。

卷十（一九二〇）に、春草之繁吾戀。卷十七（四〇一九）に、許己太久母之氣伎孤悲可毛。卷二十（四三三六）に、戀波思氣家牟などがある。

○憑有之・兒等爾者雖有　タノメリシ・コラニハアレドと訓む。心頼みにして居た妻ではあるがといふ意。コラのラはただ添へた助詞である。コは一般に親しんで呼ぶのである。卷一（一）に、菜採須兒といふのをはじめ、卷五（八四五）に、意母布故我多米。卷十一（二五六五）に、直一目相視之兒故などの例があり、卷十四（三四〇五）に、可波治爾毛兒良波安波奈毛等とあるほかにも例が多い。また、タノメリシに就いては、卷四（五四六）に、自妻跡憑有今夜。卷六（一〇四七）に、恃有之名良乃京矣などをはじめ例が多い。

○世間乎・背之不得者　ヨノナカヲ・ソムキシエネバと訓む。人の世のことわりに背き得ないからといふ意で、人世には避くべからざる生死の事柄のあることを云つて嘆いて居るのである。卷五（八〇〇）に、余能奈迦波加久叙許等和理。同卷（八〇四）に、余乃奈迦野都禰爾阿利家留。同卷（八一九）に、余能奈可波古飛斯宜志恵夜。卷五（七九四）に、加多良比斯許許呂曾牟企弖等の參考例がある。

○蜻火之・燎流荒野爾　カギロヒノ・モユルアラヌニと訓む。陽炎の立つ荒野にで、カギロヒは日光でも火氣でも空氣の中にゆらゆらと動くのをいふので、卷一（四七）の短歌の處で既に說いた。こ

こは廣々とした荒漠たる野の趣を云つてゐるので、恐らくは妻の葬送に關係ある野原であらうと云はれてゐる。古事記履中條に、迦藝漏肥能毛由流伊幣牟良。萬葉卷九（一八〇四）に、蜻蜓火之心所燎悲悽別焉。卷一（四七）に、眞草刈荒野者雖有。卷二（二二七）に、天離夷之荒野爾君乎置而。卷六（九二九）に、荒野等丹里者雖有などの例がある。

○白妙之・天領巾隱　シロタヘノ・アマヒレガクリと訓む。白い天衣の領巾の靡く中にかくれての意。この句に就き、契沖、眞淵、雅澄、守部等の說があるが、攷證に、『ここに天領巾隱といふは、すべて失し人は天に上るよしにいへる事、集中の常にて、こゝはいまだ葬りのさまなれども、はや失しかば天女にとりなして天つ領巾にかくるよしいへるにて』云々といひ、講義に、『天領巾といへるは天女の空を飛ぶにまとへる天衣をさしていへる爲に天領巾といひしなるべし。中略かくてそれにまとはれ身をかくして昇天せしものと見立てたるが爲に、天領巾がくりといひしものなるべし。さて又これを白妙といへるは如何といふに天女の比禮衣は五彩あるものなるべけれど、ここは葬式にてあればすべて白布を用ゐるが故にかくわざといひて暗にその實を示したるものなるべし』云々とあるのに據つていいであらう。

○鳥自物・朝立伊麻之弖　トリジモノ・アサタチイマシテと訓む。鳥のやうに朝立たれての意。妻

を葬つたことを、朝鳥の趣に歌つた。鳥自物は鳥といふ名詞から形容詞を作りその語幹の鳥ジを物といふ名詞に合成したもので、空し煙、かなし妹などと同じである。鴨じ物、狗じ物、馬じ物等の語例があり、宣長が大平の説として、鹿ジモノは鹿ザマノで、鹿ノサマシテといふことを報じてゐるごとく(續紀歷朝詔詞解)、さういふ物のさましたることをあらはすのである。朝立伊麻之弖は朝立行くといふのを敬語としたもので、卷三(三八一)に、風候好爲而伊麻世荒其路。卷四(六一〇)に、彌遠君之伊座有不勝自。卷二十(四四四〇)に、夜敝也麻故要氐伊麻之奈婆などがある。

○入日成・隱去之鹿齒 イリヒナス・カクリニシカバと訓む。入日の如くに隱れて行つたからの意。入日成は隱の枕詞に使つてゐる。このナスは卷一(一九)の、衣爾著成目爾都久和我勢などのナスで、卷五(八一三)に、麻多麻奈須布多都能伊斯乎。同卷(九〇二)に、水沫奈須微命母。卷六(九八八)に、巖成常盤爾座などがある。なほ、卷三(四六六)に、入日成隱去可婆の例がある。私は用語例を列記したが、その時代の關係にまで精査する暇がなかつた。然るに偶、此處で卷三の家持の作に、人麿と全く同じの、『入日なす、隱りにしかば』といふ句があることに注意すれば、人麿の歌が後進の萬葉歌人に與へたる影響について一の資料となり得るとおもふのである。此は未來の學者の業績のために殘して置いていい。その一部は土屋氏の年表が既に成就して居る。次に、意味上から行けば、

此句で一段落となつてゐるが、聲調上では、カバでやはり連續せしめて、其處に雅澄のいはゆる『意を含めた』技法が行はれて居るのである。

○**吾妹子之・形見爾置有・若兒乃・乞泣每**　ワギモコガ・カタミニオケル・ミドリコノ・コヒナクゴトニと訓む。妻が形見に殘して行つた孩兒が物乞ひて泣く每にといふ意。若兒乃は舊訓ミドリコノ。代匠記ワカコノ。古義ワカキコノ。古義の訓は若兒といふ字面と、日本紀齊明卷の、于都倶之枳阿餓倭柯枳古弘と、萬葉卷十七(三九六二)の、伊母毛勢母和可伎兒等毛波等の例にその根據を置いてゐるが、卷十六(三七九一)に、綠子之若子蚊見庭とある若子は卽ち綠子であり、卷三(四五八)の、若子乃匍匐多毛登保里朝夕哭耳曾吾泣君無二四天。卷十二(二九四二)の、小兒之夜哭乎爲乍にある、若子・小兒はまさしく孩兒卽ちミドリコのことを云つてゐるらしいから、此處の若兒もワカキコノと訓まずして、ミドリコノと訓んでもいいだらうといふのである(講義)。卷十八(四一二二)に、彌騰里兒能知許布我其登久といふ假名書の例もあり、或本歌(二一三)には『綠兒』とあるし、卷三(四八一)にも、綠兒乃哭乎毛置而とあつて、ミドリコといふのは常用語の一つなのである。

○**取與・物之無者・鳥穗自物・腋挾持**　トリアタフ・モノシナケレバ・ヲトコジモノ・ワキバサミモチと訓む。取り與へる物も無いから、男たるものが綠兒をば抱きかかへての意。與といふ動詞

は今は下二段に活用するが當時は四段に活用した。古事記上卷の『美所阿多波志都』につき、古事記傳に、『阿多比・阿多布など活用言なり』とあり、雄略條の與ニ一夜ニ而娠をも參考とすべきである。トリアタフルと下二段にも訓み得るが、下二段の例は萬葉には無い。此句は次に考に『物は人也』と解釋したが、玉の小琴にはそれを否定し、『考に物は人也とあれどいかゞ。兒を取與とは云べからず。物は玩物にて泣をなぐさめむ料の物也』といひ、古義に、『物は若子の弄物なり』とあるのが正しい。鳥穗自物は舊訓トリホシモ。代匠記精ヲホシモノ。童蒙抄トボシモノ(講義同訓)。考ヲトコジモノ(古義・檜嬬手等多く之に從ふ)。さて、その意味は、代匠記に、『此句心得ガタシ。下ノワキハサミ持トツドクルハ、若兒ヲワキハサムヲ、若彈丸ヲ腋挾ニ譬テ云カ。彈丸ハ鳥ノ欲サニ操バ愚推ナリ。又下ノ或本歌ニハ、男自物脅挿持ト云ひ、第三ニ高橋氏ガ歌ニモ、ヲノコジモノ負見抱見トヨメリ。カヽレバ若鳥ハ烏ノ字ヲ誤レルニテ、ヲホシモノニヤ』と云つた。考がそれから影響を受けて、鳥は烏の誤、穗は德の誤としてヲトコジモノとし、『或本に男自物とこゝをかき、卷十四、高橋朝臣の妻の死たる時の長哥は、こゝの言をまねびつと見ゆるに、腋挾、兒乃泣毎、雄自毛能、負見抱見といひ、卷四、面形之、忘戶在、小豆鳴、男士物屋、戀乍將居とあり。然れは雄も男もをとこと訓定めて、さてこゝも烏德の字なることを知也。且德の字の音、古へはとこと唱つ』と云ひ、諸家多くこ

れに從ひ、攷證の如きも、『いかにもさる事にてよくも考へられたり』と云つた。なほ武田博士の新解では、ヲトコジモノと訓み、『原文烏穗自物とある。その儘にてはトリホジモノと讀むより外はない。ジモノは犬じもの、鳥じものなどの例で、の如くの意であるとしても、穗や花を嘴に挾んでゐる鳥の圖案を思つて、鳥の持てる穗のやうにして、下の腋挾み持に懸かるものと見るのである。しかし、それも苦しいとして、解を誤字說に求めるとすれば、參考に出す別傳の方には、男自物脅挿持とあるので、萬葉考はこれによつて烏德自物の誤とし、ヲトコジモノと讀み、爾來概この說に從つてゐる。この說には烏をヲと讀む根據が危まれるが、外によい考もないので、止むを得ず從つておく』と云つてゐる。然るに童蒙抄では、これをトボシモノと訓み、『乏しもの也。珍敷ものゝやうに大切にして、わきばさみもつごとくに、みどりこをいだきと也』といふ說を出してゐる。山田博士の講義では從來の諸說を批判した後にこの童蒙抄の訓を取りあげ、若し原文其儘で訓むとせば、トボシモノとも訓まれないことがない。意味もさう取れないことはない。『この意にとるときは意義はまさしくいはれたり。されど、この頃にともしをとぼしといひしことの證なければ、この說も亦確實なりといひがたし。今姑くかくよみたれど、これも後の學者の考定をまつべきなり』と云つてゐる。私は以上諸先進の說をどう處理すべきかに就いて迷つたのであるが、訓詁の原理は能く分

からぬとして、童蒙抄の說だと、意味がよく分かるが、餘り寫實的過ぎる、此處は次の、『枕づく嬬屋』の如くに、何かもつと枕詞に近いやうな言葉で續ける句法であるし、且つ、自物といふ字面はやはり、鴨ジモノ、鳥ジモノなどといふのと同一らしく、且つ別傳の歌に男自物脅挿持とあり、蟲麿の歌にも類似の句があるのを見れば、さう訓む方が無理が尠いやうに思ふので、しばらくそれに從つて味ふことにした。腋挾は、攷證に、『腋挾は懷く意なり。そは古語拾遺に天照大神育ニ吾勝尊一特甚鍾愛常懷ニ腋下一稱曰ニ腋子一云々とあるにてこゝもただいだく事なるをしるべし。玉篇に挾懷也とも見えたり』と云つてゐるので大體が分かる。潘岳寡婦賦に鞠ニ稚子於懷抱一兮、嗟低徊而不レ忍とあるのを代匠記で引用してゐるが、人情の共通點を示したものである。

○枕付・嬬屋之内爾　マクラヅク・ツマヤノウチニと訓む。枕付といふ枕詞は、童蒙抄に、『夫婦枕を着ていぬる屋と云義』といひ、冠辭考に、『夫婦(メヲ)は房(ネヤ)に枕を並付(ナラベ)てぬるが故にいへり』といふので大體わかる。卷五(七九五)に、摩久良豆久都摩夜佐夫斯久於母保由倍斯母(マクラヅクツマヤサブシクオモホユベシモ)とある。ツマヤは妻屋にて閨、寢室のことである。卷十九(四一五四)に、枕附都麻屋之内爾鳥座由比(マクラヅクツマヤノウチニトグラユヒ)の例がある。

○晝羽裳・浦不樂晩之・夜者裳・氣衝明之　ヒルハモ・ウラサビクラシ・ヨルハモ・イキヅキアカシと訓む。晝は心さびしく暮らし、夜は歎きつつ夜を明かすの意。浦不樂晩之は舊訓ウラブレクラ

シ。代匠記ウラサビクラシ（考以下同訓）。玉の小琴ウラブレクラシ。『或本、浦不怜晩と書るも同し。こをうらぶれと訓はわろきよし別記にいふ』（考）。『考にウラフレと訓はわろしと有れと、卷々に浦觸裏觸と云ることいと多し。又五卷卅五丁十七卷三十二丁などにも、宇良夫禮とかければわろからず』（玉の小琴）。卷一（三二）に、國都美神乃浦佐備而。同卷（八二）に、浦佐夫流情佐麻禰之。卷二（一五九）に、暮去者綾哀明來裏佐備晩。卷十九（四二一四）に、君者比來宇良佐備氐嘆息伊麻須とある。ココロサビシクといふ意に落著く。氣衝は吐息を漏らす、歎息するといふ字に當る。卷五（八九七）に、夜波母息豆伎阿可志年長久夜美志渡禮婆。同卷（八八一）に、加久能未夜伊吉豆伎遠良牟等がある。

○**大鳥・羽易乃山爾**　オホトリノ・ハガヒノヤマニと訓む。大鳥は鸛でコウノトリである。和名鈔に、鸛古亂反和名於保止利　水鳥有二種似鵠巣樹者爲白鸛曲頭者爲烏鸛とあるもので、羽の枕詞とした。羽易山は大體大和添上郡春日の地にあつた山であるが、今は大井重二郎氏に從つて春日山の中峯・花山あたりの見當にして置く。總論篇の解說は簡單過ぎたから、此處では稍くはしく諸說を抄記する。今よりも廣地域の春日の地にあつた地名（名處考・講義・古語大辭典）。春日山左右の一峯（地名辭書）。御蓋・若草・高圓の三山の總稱（和州舊跡幽考）。その三山のいづれか一つ（新講）。春日の水屋峯（大和志・檜嬬手）。若草山か（辰巳）。高圓山卽ちヲドリ山（森口奈良吉・地理考）等の說で、奥野氏の萬葉大和志考に抄記されて

ある。今、大和志を抄すれば、『春日山、在ニ南都東ニ一名蓋山有ニ三峯ニ、曰本宮峯又名浮雲、曰水屋峯又名羽買、曰高峯又名香山、三峯層疊松杉蔭翳、靑蒼碧翠能耐ニ秋冬ニ』云々で、春日山の一峯だと考へてゐる。大井重二郎氏の萬葉集大和歌枕考を見るに、『羽易山は春日山の中峯・花山を稱したものであらうと考へられる。中峯は南北に花山よりやゝ低い高さの雙べる山を有して鳥の翼の如き形をなし、大鳥の羽易の山、の形容そのまゝの山である。元來羽易山は決して固有名詞ではなくその山容を美しく形容せられて生じたものであらう。』とあつて大に參考となつた。なほ大井氏は、卷十(一八二七)の春日有羽買之山從猿帆之內敝鳴往成者孰喚子鳥に就き、『猿帆は佐保である。春日の里と佐保の里との中間にあつてこの歌を味ふ時、その地勢歌意のいかに適切且自然なるかが判る。御蓋山の背後の羽買卽ち花山の南北に擴つて山峯鬱蒼と茂り、その後の高峯(香山)は中峯に遮られて全容を見せない。故に此地點に立つて眺める時、美しい春日の高峰は羽易の一部である』といひ、また、卷六(一〇四七)の長歌には、春日山、御笠の野邊、射鉤山、飛火が嵬などの固有名詞が咏み込まれてあるが、略解には、『宣長云、イコマ、ヤツリ皆ここに叶はず、羽飼の誤ならん。卷十に、春日なる羽買の山ゆ云云と詠めりと言へり。猶考ふべし』と云つて、射鉤が羽飼の誤だとし、大井氏もそれを認めてゐるから、若草、御蓋、春日を除けば大體、花山あたりの見當と看做していいであ

らうか。なほ、高圓山說を樹てた森口氏の根據をなしたものは、稱名院右府三條西公條の吉野詣記の中に、『これより高圓のかたはら羽買の山の下に、客養寺とて志深き人住みけり』とある文章である。併し、この『高圓のかたはら』は續いてゐる山と解せば、必ずしも高圓の山と解せなくともいいやうである。なほ、堀井甚一郎氏の說に、香山(かうせん)の名は今は殆ど用ゐられず、春日山東南の一支峰を指すやうであるが、花山をば、春日山の主峰、或は春日山の背面の峯、或は春日山東南の支峰とする三つの說のうちで、その第三說だとすると、カウセンは花山の音訓の類似から轉じた名ではなからうかと云つて居る。

○吾戀流・妹者伊座等・人之云者　ワガコフル・イモハイマスト・ヒトノイヘバと訓む。亡妻が其處に居るからと人がいふからといふ意で、羽易の山は、もつと古い時代からの風葬などの名殘があつて、共同葬地であつたのかも知れない。イマスは敬語だが、既に死した妻であるから、かく敬語を用ゐるので、既に解釋したとほりである。このヒトノイヘバの句に就き、檜嫣手に、『吾が戀ふる妹はいますと人のいへばなど、よそ〳〵しげに云へるは、是も私娉にて嫡妻にはあらざりしにや』と云つてゐるのは穿ち過ぎて居る。この、『人のいへば』と似た云ひ方は、卷三(四二〇)に、神(カム)左備爾伊都伎坐等(サビニイツキイマスト)玉梓乃(タマヅサノ)人曾言鶴(ヒトゾイヒツル)於余頭禮可(オヨヅレカ)吾聞都流(ワガキキツル)。卷十三(三三三四)に、枉言哉(タハコトヤ)人之言鶴(ヒトノイヒツル)。卷

十九（四二一四）に、枉言哉人之云都流逆言乎人之告都流とあるなど、皆似た表現で、特に挽歌に多いのは、ひよつとせば人麿のこの表現などが手本をなしてゐるのかも知れない。山田博士云、『その羽買の山といふ所今の何といふ所にか明ならぬ事なるが、春日附近の山なりしものと見ゆ。もとよりこの地の春日といふは、或は今の春日といふよりも廣き地域なりしならむ。ここにこの山の名を出せるは恐らくはその妻を葬りし地なるべし。當時の葬地は必ずしもその住宅附近に限らざりしことは春日宮におはしし志賀皇子即ち春日宮御宇天皇の田原山陵が、添上郡田原村矢田原の山中に營まれ、その妃紀橡姫の吉隱陵が、山邊郡初瀬町吉隱角柄の地に營まれしにても知るべし』（講義）。つまり博士も羽易の山をば人麿の妻の葬地と考へてゐるのである。私もさう解釋するのであるが、この長歌の反歌の、引手山とこの羽易山との關係で、この羽易山は葬地ではなく、人が死ねば誰もこの山に行つて居るものと信ぜられてゐたところと解釋せられても居る。當時の人は、死生の觀念がいまだ明瞭でないので、現世からの連續として、さう信ぜられたものとも考へられる。そして實際の葬地は引手山で、羽易山は實際の葬地ではないこととなる。土屋文明氏云、『之は次の短歌に見える引手の山とは別であらう。引手の山は墓所であつて、世を去れる妻は羽買の山に行つて居ると云ふのである。死後の行くべき所についての當時の人々の信仰の一端がうかがへる。云々』

（總釋）。若し、人が死ねば羽易山に行くといふ信仰があつたとせば、魏志の韓傳に、以二大鳥羽一送レ死、其欲レ使二死者飛揚一とあるのなどとも、一種の聯關があつて、いつの頃からか、羽易山は人々が死んで住むところと信ぜられたかも知れないが、これはただ『羽』からの私の聯想に過ぎぬであらう。

○石根左久見手・名積來之・吉雲曾無寸　イハネサクミテ・ナヅミコシ・ヨケクモゾナキと訓む。岩石の道を踏んで、難儀して來たが、何の好いことも無い、甲斐がないといふ意である。流布本手を乎に作つたのを代匠記で改めた。卷二十（四四六五）に、山河乎伊波禰左久美弖布美等保利久爾麻藝之都都。卷六（九七一）に、五百隔山伊去割見賊守筑紫爾至等の例がある。さてサクムといふ語原については、考に、『岩が根を踏裂てふ言なるを、其きを延て佐久美とはいへり』といひ、鴻巣氏の全釋に、『サクムといふ動詞は、裂くにムを附して活かしめたものであらう』といひ、古事記傳に、『或説に人面のたくぼくあるをしやくみづらと云に同じくて、岩の凸凹ある上を通行を云なり。馬ざくりと云も、能の面にさくみと云あるも同詞なりと云り。此意なるべし』と云つたが、講義に、『この語は今日に於いては未だ明かならぬ語なり』とある如く不明だが、意味は、檜嬬手に、『高低ある道をたどる／＼ゆくを云ふ』といふのに落著くのであらうか。ナヅミも卷三（三八二）に、雪消爲

山道尙矣名積敍吾來並二。卷十三（三二五七）に、石椅跡名積序吾來戀天窮見。卷十九（四二三〇）に、落雪平腰爾奈都美氐參來之等の例がある。澁滯する、難儀する、惱むの意がある。來之で連體形で一寸休止せしめた。これは、下の無寸の連體形で休止したのと同格である。この邊の技法は散文で律し得ざる含蓄であり、妙味である。散文でいへば、『なづみ來ぬ。さあれ』などの補充語が必要なところである。吉雲曾無寸は、『好けくもぞ無き』で、ヨケクの例は、卷五（九〇四）に、安志家口毛與家久母見牟登……我例乞能米登須臾毛余家久波奈之爾。卷九（一七五七）に、筑波嶺乃吉久乎見者。卷七（一二一七）に、玉津島見之善雲吾無等がある。好い事は何もない。甲斐がないといふ意味になる。古義に、『そのかひなしといふ意なり』といひ、攷證に、『それがよくもなく、いとわろしといふ意に見べし』とあるので大體がわかる。新訓、新解では、ヨクモゾナキと訓んでゐる。これも一訓で棄てがたい。檜嬬手ではシルシモゾナキと訓み、璽裳曾無寸と書改めて居る。そして意味を、『よりそひもなく、外々しくぞある』といふやうに解してゐる。

○珠蜻・髣髴谷裳・不見思者　タマカギル・ホノカニダニモ・ミエヌオモヘバと訓む。幽かにぼんやりとでも妻が見えぬのでといふ意。珠蜻は舊訓カゲロフノ（童蒙抄同訓）。考カギロヒノ（略解・檜嬬手等同訓）であつたのを、雅澄、信友等がタマカギルと訓んだことは既に云つた如くである。卷八（一五二六）に、

玉蜻蜒髣髴所見而別去者。卷十二（三〇八五）に、玉蜻髣髴所見而往之兒故爾の例もあり、なほ、卷七（一一五二）に、梶之音曾髣髴爲鳴。卷十二（三〇三七）に、朝霞髣髴谷八妹爾不相牟などの例がある。見えぬおもへばと云つて、ヨケクモゾナキに反して意味をとる。オモヘバは道理を云つてゐるのだが、今ならば、見えぬからと直接に云ふのに當る。現身とおもひし時に、逢はぬおもへばなどの、オモフといふことは種々の語感の色調を籠めて、輕くいろいろの場合に用ゐたことが分かる。

大意 妻がまだ在世の時に、二人が相携へて見た、家からほど近い堤の上に植ゑてある槻（欅）の木の、その彼方此方の枝に、春の若葉の繁りゐるが如くに、繁く戀しく思つてゐた妻であつたが、また賴りにしてゐた妻であつたが、この現世の生死のことわりには背き得ずに、陽炎のゆらめく廣い荒野に、白い天衣の領巾を靡かし、〔鳥自物〕鳥の如く朝立ち、〔入日成〕入日の入るが如く隱れて、死して葬られてしまつた』。それから、妻が形見に殘した孩兒が、物欲しく泣く度ごとに、與へる物もないので、〔男自物〕男手にそれを抱いては、嘗て二人で寐た〔枕付〕閨の中に、晝は心寂しく暮らし、夜は吐息をつきながら夜明かしつつ、歎くけれども、何とも爲樣がなく、戀思ふけれども、二たび妻に逢ふ因もない』。そして妻は今〔大鳥〕羽買の山に居ると人が云ふので、巖石の道を踏みつつ難澁して來た。それでも現身とおもふ妻の姿が、〔珠蜻〕影だに見えぬから、ただただ甲斐ない

ことであつた。』

鑑賞 この歌は、前の歌と同じ心持をば、稍別樣の內容を以て歌つたものである。そして內容を大體三段に分つことが出來る。はじめは妻の在世のことをいひ、妻在世のをり仲の好かつたことを云ひ、それが死んで行つて寂しい處に葬られたことを云つて一段としてゐる。次に、妻が遺した孩兒のことを云ひ、それを男手で懷いたりなどして、鰥夫としての寂しい悲しい生活のことを云つて二段としてゐる。それから次は、妻を葬つた羽易の山に難儀してたづねて行つたことをいひ、それでもつひに永遠に逢ふことが出來ないことを云つて結んでゐる。

內容からいへばさういふ區別があるが、その間は、言葉の上からは切れてゐずに連續句法である。卽ち第一段と第二段との間は、『隱りにしかば、吾妹子が』と連續せしめて居り、第二段と第三段との間は、『逢ふよしを無み、大鳥の羽易の山に』と連續せしめてゐる。これが卽ち、連續聲調を以てする長歌の特色なのである。これが散文とも違ふ點であり、西洋の詩などとも違ふ點である。

この歌は不用意に讀めば、ただ心持で言葉を運んでゐるやうにおもへるが、好く吟味すると實際を詠んでゐることが分かる。卽ち妻の家の近くには堤があつて、そこに槻の木が殖ゑてあり、春から夏にかけてその葉が繁つたことが分かる。それから羽易の山のあつた地、卽ち春日(かすが)の地にはまだ

荒涼たる野もあつたといふことが分かり、羽易の山には巖石の道のあつたことが分かる。また、妻との間には一人孩兒のあつたことも分かる。そこで眞淵もこの方を嫡妻とし、前の歌の妻を妾と考へたほどであるが、さういふ實際をも歌つてゐるのである。

さうであるから、一讀古くさい常套手段の歌のやうでありながら、熟讀すれば質實の度がだんだん發して來て、眞率にして心の痛切な人麿を目前に髣髴せしめることが出來る。また、これだけの構成をなし、骨折つてゐるところを見れば、人麿は力を傾倒して亡妻のために歎いてゐるのである。そして、もつと素朴的に歌へば、破調にしたりしてぽつりぽつりと歌ふところを、人麿の創造した連續的波動的聲調を以て歌ひあげてゐるのが、獨創だからいいので、そこで自然澁味もこもり、輕薄に辷つて行かない點が必ず存じてゐるに相違ないのである。

『念へりし妹にはあれど、憑めりし兒らにはあれど、世の中を背きし得ねば』と疊みかけて來て、直ちに、『かぎろひの燃ゆる荒野に、白妙の天領巾がくり、鳥じもの朝立ちいまして』と水の流るる如き、のびた調べで續ける。『晝はもうらさび暮らし、夜はも息づき明かし、嘆けどもせむすべ知らに、戀ふれども逢ふよしを無み』と疊みかけて來て、直ぐ、『大鳥の羽易の山に、吾が戀ふる妹は坐すと』と長い咏歎調で、絲を引くやうに續ける。この關係は殆ど同じであり、人麿の言語聲調に

關する鋭敏の度を示すものである。この邊の關係は前の歌ならば、『玉襷畝火の山に喧く鳥の』あたりと同じく、味へば味ふほど妙味のあるところである。

そして、さういふ長い咏歎があるかとおもへば、『石根さくみて、なづみ來し』と一寸休止し、『吉けくもぞなき』と休止し、『現身と念ひし妹が、玉かぎるほのかにだにも、見えぬ思へば』から反るやうにしてゐる。この休止と、轉倒は聲調を澁らせ、停滯せしめ、重厚にしてゐる。つまり雅澄のいはゆる『意を含ます』技法を實行してゐる。人麿の聲調は斯くのごとくであつて、特に、『見えぬ思へば』といふ結句などは、結句として据わりが好いために、かく『ば』などで止めてゐるのである。かういふところは極めて自然に流露して毫も無理窒滯がない。

現身と　念ひし時に　取持ちて　吾がふたり見し
趍出の　堤に立てる　槻の木の　こちごちの枝の　春の葉の　繁きがごとく
　おもへりし　いもにはあれど
　たのめりし　兒らにはあれど
世のなかを　背きし得ねば
かぎろひの　もゆる荒野に　白たへの　あま領巾がくり

鳥じもの　朝たちいまして
入日なす　かくりにしかば
吾妹子が　形見に置ける　みどり兒の　乞ひ泣く毎に　取りあたふ　物しなければ
男じもの　腋ばさみ持ち　わぎもこと　二人吾が宿し　まくらづく　嬬屋のうちに
晝はも　うらさび暮らし
夜はも　いきづき明かし
なげけども　せむすべ知らに
戀ふれども　逢ふよしをなみ
おほとりの　羽易のやまに　吾が戀ふる　いもはいますと
人のいへば　いはねさくみて　なづみ來し　吉けくもぞなき
うつせみと　おもひしいもが
たまかぎる　ほのかにだにも　見えぬおもへば

一首が、連續聲調だが、おのづから起伏曲折があるべきで、その具合は大體右の如き狀態であるのかも知れない。小國重年に據ると初句六句、次四句連對、次二十二句、次四句連對、次終句十一句、合五十五句、大長歌である。この歌の方が、前の長歌よりも內容が細（こま）かく、從つてその聲調にも幾らか細（ほそ）みがあるやうである。

次に、この歌の反歌に、『衾道平引手乃山爾（フスマヂヲヒキテノヤマニ）』とある、その引手山（ヒキテノヤマ）についても諸説があり、私は短歌評釋の方には、『長歌の羽易の山と同じ處、少くとも近處といふことになる』と解し、又前出のこの長歌の語釋に於ても述べたのであつたが、此處で繰返して少しく委しく書いて置きたい。この羽易山と引手山は同一處か或は近處だらうといふのは、全體の常識的解釋に本づくもので、『引手の山はまた羽易の山の別所の名なるべし。春日は添上郡、衾路は山邊郡なれど、山邊添上は、となりてちかければ、高市郡より衾路をへて引手の山には行なるべし。石上は山邊郡なるを、古今集にならのいそのかみ寺とかけるにて心得べし』（代匠記初稿）といふ考察、『長歌に合せ見るに、是も春日の内にある山とはしらる』（考）。『とかく同所異名と見ゆる也』（童蒙抄）。『この引手の山は羽易の山の一名か』（攷證）。『羽買山の中にあるなるべし』（古義）等に見る如く、衾田墓のある山邊郡の地をフスマとし、また古義の如く、そこの龍王山をフスマと考へて、理論上では、添上郡の春日にある羽易山と、山邊郡の衾田とは別處であることは分かつてゐても、長歌と反歌との意味を調和せしめて理會するには、羽易山と引手山とを同處にしたいのが人情であり、常識である。私の解釋結論などもその常識に本づいたのであり、古義に、『大和國の名處をしるせるものに、山邊郡中村の東に、龍王と呼ぶ山を引手山なりと云り。長歌によるに、添上郡春日の羽買山の中にありとせずしては、叶ひが

たし』（註疏從レ之）といふのもまたそれであらう。つまり、山邊郡の衾田を歌のフスマと同處だらうとは思ふが、それでは歌の解釋に無理があるので、結局、羽易の山と引手山とが同處若くは近處だらうといふことになる。さすれば引手山は山邊郡の龍王山ではないことになる。山田氏の講義には、『されど、衾田墓のある邊をフスマといへる事の證は一もなく地名說は信ずべからず。されば枕詞の方ならむが、如何にして引手の枕詞となるべきか、冠辭考の說あれど、おぼつかなし』といひ、『然らば、引手山、羽易山一所兩名か、若くは相接近せる地なるべき筈なり。ここはその妻の葬地なること著し』と云つてゐる。卽ち、博士の說も大體契沖以來の說と合致して居るやうである。

然るに近時の大和萬葉地理の研究家はなほこの二つを別處と考へてゐるのが多い。今大井氏を以て代表せしめれば次の如くである。大井氏はやはり諸陵式の、『衾田墓、手白香皇女、在二大和國山邊郡一』に據り、大和志の、『在二中村東一、呼曰二龍王一、高聳人以爲レ望』に據つたもので、この山邊郡朝和村萱生中山の東方に當る龍王山（高さ五八五米）をば引手山だとして、契沖・雅澄等の說をば妄斷と云つて、『奈良に行く道は引手山寄りの道を北に山中を越えたと思はれる。これが衾路である。名所圖會に、釜口山の一峯ならん、といつてゐるのは中山の東方に古墳の累積せる地があり、之が釜口山で龍王山の一支別であるから引手山はこの東方龍王にかけての地帶をも總稱したと思はれる』

（萬葉集大和歌枕考）。この羽易・引手二つの山を別處として、この歌を解した說も多いが今土屋文明氏の解釋を以て代表せしめれば次の如くである。『之は次の短歌に見える引手の山とは別であらう。引手の山は墓所であつて、世を去れる妻は羽買の山に行つて居ると云ふのである。死後の行くべき所についての當時の人々の信仰の一端がうかがへる。天上とか地下とかの外に水平的な山の彼方に、しかも比較的近距離のところに死後の國があると感じたのであらう。西方淨土なども距離は甚しく遠いが矢張り水平の地上に考へられたのであらう。羽買山を墓所として次の引手山と接した所とする說はどうであらう。皇親諸王等には住所よりやや遠い墓所もあるであらうが、輕に住んだ庶人の妻を春日に葬るとは考へられぬ。又墓所であるなら「人の言へば」が無意味になつてしまふ。此の長歌は人麿が妻の葬送のことを見て居るさまである』（總釋）。つまり、死後に人麿の妻の行つて居る場處は羽買の山で、妻の墓所は引手山で、二つは別々の場處だといふのである。

私は短歌評釋の折に、この羽易山・引手山の關係についても、種々思迷つて考へたのであつたが、若し、この二つが別處だとする說を肯定するには、既に鴨山考でも論じたごとく、死後に人間の行くべき場處は、つまり靈の休息處として、山奥、洞窟、海邊、沙漠などであつてよく、なほ進んで、高天原、夜見國、根國、黃泉國、常世國であつてよい。さうすれば、その安息所と墓所とは別々で

あつてもよいわけで、古代日本風俗に、二段の葬儀のことがあり、はじめ山林などの共同墓地に埋葬し、その後に家の近くの墓所に祭る場處を設けることがあり（柳田氏）、また古琉球では、はじめ山奥・海濱などで風葬し、次いでその乾燥した髑髏は自然の洞穴、或は人工的な横穴などに合葬されることがある（伊波氏）から、羽易の山には妻を葬り、數里隔つた引手山に墓所を置いたとせば、この長歌と短歌との關係を解釋出來ないことはない。

併しさう解釋するにしても、種々の問題が殘つてゐる。第一は死後に死人が現世の連續として行く處、葬所、墓所と三段に考へることがこの歌の場合にどうだらうかといふこと、この歌の場合に、そんなに面倒に區別したかどうかといふことが疑問である。第二に、この長歌の方が葬送のことを咏んだのだとして、反歌の方を墓所に改葬したとすると、その間に時間の隔りがあるわけである。それがこの長歌と短歌との間に明瞭に區別し得るや否や、それが疑問である。第三に、長歌の方の、『白妙の天領巾隱り鳥じもの朝たちいまして入日なす隱りにしかば』は、葬送の事であるとせば、『大鳥の羽易の山に吾が戀ふる妹は坐すと人の言へば』も、羽易の山に妻を葬送したことになるのではなからうか。この二つはどうも別々の事ではないであらう。さうすれば、この葬送の事と、引手の山の墓地のことを別々にしなくとも説明が付き、却つて別々に考へない方が好いのではあるま

いか。第四に、羽易の山に妻を葬つたのは、人麿自身ではなくて、妻の親近の者のやうである。人麿の知らぬうちに羽易の山に葬つた趣である。『人の言へば』といふのが卽ちそれである。そして、若し引手の山に改葬でもしたとすると、人麿自身がすることになるか、或は同じ親近者がすることになるが、人麿自身が改葬するとせば、穴師の里から龍王山の方は近く道順でもあり得るから不思議ではないが、改葬するまでに餘程の時の間隔が必要である。その時の間隔が前言の如くに長歌と短歌との間に認められない。また、妻の親近者が改葬したと想像するなら、これは場處上腑に落ちない。輕の里から一たび春日に葬送して二たび龍王山に持つて來るといふのはいかにしても不自然である。

羽易の山と引手の山とが別な處で、春日山の中峯花山あたりと龍王山とでは三里餘の距りがあるのだから、どうしても解釋が無理になるところが存じてゐるのである。童蒙抄には、『奥の歌に大鳥の羽易山に汝戀云々とあれば、大鳥の羽易の山に葬りたると見ゆるに、こゝにも〇引手山にも妹を置きてとあり。とかく同所異名と見ゆるなり。本集の長歌に、荒野に白妙の天ひれかくれとよめるは、野に葬りたるやうにもきこゆれども、上古の歌に野といふは、みな廓外をさしていひたれば、山岡林野相兼ねたる義也。しかれば天ひれがくれといひしは先みまかりたることをもいひて、葬りたる義

をもかねていひたるなるべし。衾路は衾田也。田は手也。既に諸陵式にも衾田と有。然れば手引とうけたる也。路を手と云也。行路の古詠に皆行手とよむは、たちつてと同音故也』とあるのは、なかなかよい解釋のやうにおもふ。ただこの解釋でも衾路と衾田とが關係が密接であるやうに纏はりついてゐるが、この衾といふ地が衾田墓のあるところを中心として、春日の方まで擴がつて居れば格別、さもなければ、羽易の山・引手の山同一處の結論にはならぬのである。

そこで、愚案などは、衾路といふのは、或は土地の名から來たものかも知れないが、引手山の枕詞の格に使はれて居り、或はひよつとせば、さういふ衾などといふ地名に關係のない枕詞で、單にヒクとフスマとの關係からの枕詞であるのかも知れない。現在の愚考は寧ろそれに傾いてゐるものである。そして、羽易の山が春日地方にあるといふことは、萬葉のほかの二首の歌によつて略動かすことの出來ない事實と考察すれば、引手の山をば、縱ひ現在の土地の名の中に發見し得ないとしても、大體羽易の山の近く、或はその一部と想像する方が一番無理なく解釋し得るやうにおもふし、『妹は坐すと人の言へば』といふ羽易の山と、『引手の山に妹を置きて』といふ引手の山とを同一處と看做す方が一番常識的にも無理が無いとおもふのである。ただ、フスマ或はヒキテといふ地名が現在見つからず、關聯のつながりを求め得ないのが缺點だけれども、それは犧牲にしても、解釋の

方に有力な點が存じてゐるから愚考はそれに據るに至つたのである。
また、諸陵式の衾田墓といふのも、ただその一例あるのみで、その邊が必ず衾(フスマ)といふ土地であつたかどうかといふことも積極的には證明出來ないのである。ただ春日山花山あたりには古墳の遺跡は著しくないのに反し、この邊の、名所圖會に『引手山卽釜口山の一峯』といふ釜口(カマグチ)山一帶は萓生千塚などといふ名の地がある如く古墳が纍々として居り(寫眞參照)、墓地であつた證據として十分であるから、羽易の山と關係なしに引手の山のみを考へる場合には、引手の山をばこの邊と想像しても人の腑に落ちないことはない。そこで、或はかうも考察することが出來る。人麿の妻は輕で死んで、春日の羽易の山で火葬にせられたのであらう。これは或本の歌(二一三)の結句に、『現身(うつそみ)と念(おも)ひし妹が灰(はひ)にてませば』とあるのを火葬と解釋すれば、さういふ想像が成立つのである。そして當時は火葬が行はれてから未だ間のない頃であるから、恐らく火葬處としても相當に山奥などを相し、共同的に春日の地にある山などを選んだものかも知れない。そして、屍は馬に乘せて運べば、短時間でよく、人々が徒歩で擔ひ運んでもさう長くはかからない。その火葬された羽易の山に人麿がたづねて行つて、其處から衾の方面をさして歸り、當時の墓地と考へられる引手の山に火葬にした灰をば葬つて、『引手の山に妹を置きて』云々と咏んだのだとすれば、解釋がさう無理でなく付くやうであ

る。今の龍王山・釜口山などのある朝和村は穴師村とは近く、春日方面から歸つて來る途中にある處だからである。

原始時代の風葬等に代用せられた、火葬の灰を以て二たび墓地に葬るといふことは不自然でないから、羽易の山・引手の山は同一處だらうといふ説に私も從つて居るけれども、また、この火葬の事を認容すれば、羽易の山・引手の山別處説をも顧慮していいとおもふのである。特に、(二一三)の『灰にてませば』を解釋するときにこの説が役立つのである。

以上は雜然冗漫であるから此處に結論をいへば、私は羽易の山と引手の山とは大體同一處と解釋して居るが、若し羽易の山で火葬してその灰を二たび引手の山の墓地に葬つたとせば、羽易の山と引手の山とは別な場處として解釋することが出來る。

短歌二首

〔二一二〕去年見而之(コゾミテシ)　秋乃月夜者(アキノツクヨハ)　雖照(テラセドモ)　相見之妹者(アヒミシイモハ)　彌年放(イヤトシサカル)

〔二一三〕衾道乎(フスマヂヲ)　引手乃山爾(ヒキテノヤマニ)　妹乎置而(イモヲオキテ)　山徑往者(ヤマヂユケバ)　生跡毛無(イケリトモナシ)

右一四一頁、一四四頁に評釋了。

○

【巻二・二一三】

現身と　念ひし時に　手携はり　吾が二人見し　出で立ちの　百枝槻の木　こちごちに　枝させる如　春の葉の　茂きが如く　念へりし妹にはあれど　恃めりし　妹にはあれど　世の中を　背きし得ねばかぎろひの　燃ゆる荒野に　白栲の　天領巾隠り　鳥じもの　朝立ちい行きて　入日なす　隠りにしかば　吾妹子が　形見に置ける　緑兒の　乞ひ哭く毎に　取り委す　物しなければ　男じもの　腋挿み持ち吾妹子と　二人吾が宿し　枕づく　嬬屋の内に　晝は　うらさび暮し夜は　息衝き明かし　嘆けども　せむ術知らに　戀ふれども　逢ふ縁を無み　大鳥の　羽易の山に　汝が戀ふる　妹は坐すと　人の云へば

石根さくみて　なづみ來し　好けくもぞ無き　現身と　念ひし妹が
灰にて坐せば

宇都曾臣等　念之時　携手　吾二見之　出立　百兄槻木　虚知期知爾
枝刺有如　春葉　茂如　念有之　妹庭雖在　恃有之　妹庭雖有　世中
背不得者　香切火之　燎流荒野爾　白栲　天領巾隱　鳥自物　朝立伊
行而　入日成　隱西加婆　吾妹子之　形見爾置有　綠兒之　乞哭別
取委　物之無者　男自物　脅挿持　吾妹子與　二吾宿之　枕附　嬬屋
內爾　日者　浦不怜晚之　夜者　息衝明之　雖嘆　爲便不知　雖戀
相緣無　大鳥　羽易山爾　汝戀　妹座等　人云者　石根割見而　奈積
來之　好雲叙無　宇都曾臣　念之妹我　灰而座者

題意　これは『或本歌曰』としてあるもので、大體に於て、(二一〇)の歌に甚だ似て居り、數句ちがふだけである。おもふにこの歌は、(二一〇)の異傳で、或本といふのにはこの一首の長歌と短歌

とが書かれてゐたものであらう。この歌の歌句の（三一〇）と相違してゐる個處は、歌の價値上では却つて下落してゐるが、解釋上には參考になる點がある。結句の、『灰而座者』などが即ちそれである。これに附屬してゐる『短歌三首』といふうち二首は前の長歌の短歌と相似し、第三首目は人麿の作に似ないこと既に短歌評釋の部で云つたごとくである。

語釋 **○携手・吾二見之** タヅサハリ・ワガフタリミシと訓む。舊訓タヅサヘテであつたのを、代匠記初稿本書入にテタヅサヒとあり（校本萬葉）、略解札記テタヅサヘ。新訓・新解はそれに從つた。攷證でタヅサハリと訓んだのに從ふ。例は、卷十（二〇二四）の、萬世携手居而相見鞆。卷十九（四二三六）の、鳴波多𡢳嬬携手共將有等などで、また携一字でタヅサハリと訓ませた例は、卷九（一七四〇）の、細有殿爾携二人入居而。同卷（一七九六）の、黄葉之過去子等携。卷十（一九八三）の、妹與吾携宿者等である。

○出立 イデタチノと訓む。門から出て近くのといふ意。舊訓イデタテルであるのを代匠記初でイデタチノと訓んだ。日本紀雄略卷に、擧暮利矩能播都制能野磨播伊底拖智能與廬斯企夜磨とあり、萬葉卷九（一六七四）に、我背兒我使將來歟跡出立之此松原乎。卷十三（三三三一）に、忍坂山者走出之宜山之出立之妙山叙。同卷（三三〇二）に、出立之清瀲爾朝名寸二等の例がある。

○百兄槻木　モモエツキノキと訓む。百枝の槻の木といふ意。古事記雄略條に、天皇坐長谷之百枝槻下爲豐樂之時とあり、萬葉卷八（一五〇七）に、吾屋前爾百枝刺於布流橘玉爾貫の例がある。

○男自物・脅挿持　ヲトコジモノ・ワキバサミモチ。舊訓ヲノコジモ。代匠記ヲノコジモノ。考ヲトコジモノである。この句があるので、前の歌の、鳥穗自物の語の訓を得たのであるが、この別傳の方を絶待信用も出來ないところがあるから、鳥穗自物の訓及び解釋は將來新に出來るやうになるかも知れないのである。

○灰而座者　ハヒニテマセバと訓む。代匠記に、『灰シテマセバ、火葬シテ灰トナリテイマセバナリ。此落句ニヨレバ、文武天皇四年以後、此妻ハ死セリ。其故ハ文武紀云。四年三月己未、道昭和尙物化云々。弟子等奉レ遺火ニ葬於栗原一、天下火葬從レ此而始也』とあり、なほ、前の歌の解釋のときにも、『陽炎ハ遠キ所ニ見ユル物ナレバ、カクツヾクルニヤ。又下ノ或本ノ歌ニヨルニ、火葬シタリト見ユレバカクイヘルカ。野ニ火葬シテ遺骨ヲ羽易ノ山ニハ納タルカ』と云つて、大體火葬の事に解し諸書これに據つてゐるが、井上通泰博士は、この『灰而座者』の句は、實際の寫實でなく、陸士衡の挽歌詩に、『昔爲ニ七尺軀一今成ニ灰與レ塵』に據つたものであらうといふ說をたてた（總論篇八九頁）。また眞淵は、反歌によるに、一周年の歌であるらしいのに、火葬の灰だとせば、骨をも收めず棄ておく

のはをかしいと云つて、灰の説を否定したが、攷證でそれを難じて、『こゝの文は、火葬して埋めしをたゞ大どかに灰になるとはいへるにて火葬せしまゝ捨おかずして埋めたりとも、一度火葬せしは灰ならずや。續日本紀、神護景雲三年十月詔に、體方灰止共爾地仁埋利奴禮止、名波烟止共爾天爾昇止云利云々などあるにても、埋みても猶灰とともにて灰にあるをしるべし』と云つた。また、山田博士は伊福吉部徳足比賣墓誌によつて、和銅元年秋七月一日に卒したのを、三年冬十月に火葬したことを報じてゐる。卽ち死去後時をおいて火葬したこともあつたのである。

序に云ふが、右にある如く、火葬は道昭和尙の火葬からはじまるといふ一般の説であるが、木村正辭博士は「火葬の始」（美夫君志卷二別記）といふ文で異説を云つてゐる。博士謂ふに、火葬の始は必ずしもさうでなく、既に眞淵も、道昭よりも『先なるもしるべからず』と云つた如くであらう。卷七（一四一五）の、玉梓能妹者珠氈足氷木乃清山邊蒔散染も、遺骸を火葬にして、其骨を搗き砕いて山野にまき散らしたものである。そして卷七の讀人不知の歌は恐らくは道昭以前に屬する歌であらうといふのであつて、博士は次の如くに結論して居る。『火葬の起りの甚古しとする一證とはすべし。但し續紀に道昭を以て火葬の始めとするもの、其最昞焉きものを表明したるなり。凡史に現はるゝもの、其事既に天下之を行ひ、稍盛なるに至て始て之を記する事往々あり』と云つてゐる。な

ほ、喜田貞吉博士も、道昭火葬以前に實際は火葬の行はれてゐたことを云つてゐる（鴨山考補註篇一二一頁参看）から、單に宗教上の關係のみでなく、實際の屍の處置としても便利だといふことが分かつたのであらう。令の制定後も庶民で墓を造ることを許されない場合でも、火葬して土中に埋めればとがめられなかつた。兎に角、人麿の妻はこの長歌に據ると羽易の山で火葬にされたやうである。さうすれば、羽易の山と引手の山とは同處でもよく、また別處としても解釋のつかないことがないから、却つて都合の好いことにもなることは、既に前の長歌の鑑賞のところで云つたごとくである。

鑑賞 この歌は、前の歌の別傳であらうが、幾らか通俗化せられてゐる。それは細かくなり却つて調子がくだけて、人麿調からは遠ざかる傾向になつてゐる。『現身とおもひし妹が玉かぎるほのかにだにも見えぬ思へば』と、『現身と念ひし妹が灰にて坐せば』との差別がその趣を示して居る。すべて流傳するときには、一般化し通俗化し、大衆の水準にしようしようとするものである。人麿の場合もまたその例に漏れない。

短歌三首

【二一四】去年見而之　秋月夜　雖度　相見之妹者　益年離

右一四九頁に評釋了。

【三一五】衾路(フスマヂヲ)　引出山(ヒキデノヤマニ)　妹置(イモヲオキテ)　山路念邇(ヤマヂオモフニ)　生刀毛無(イケリトモナシ)

右一五一頁に評釋了。

【三一六】家來而(イヘニキテ)　吾屋乎見者(ワガヤヲミレバ)　玉床之(タマドコノ)　外向來(ホカニムキケリ)　妹木枕(イモガコマクラ)

右一五二頁に評釋了。

【巻二・二一七】
秋山の したぶる妹 なよ竹の とをよる子らは いかさまに 念ひ
て居れか 栲縄の 長き命を 露こそは 朝に置きて 夕には 消ゆ
と言へ 霧こそは 夕に立ちて 朝には 失すと言へ 梓弓 音聞く
吾も 髣髴に見し 事悔しきを 敷妙の 手枕纏きて 劒刀 身に副
へ寐けむ 若草の その夫の子は 不怜しみか 念ひて寐らむ 悔し
みか 念ひ戀ふらむ 時ならず 過ぎにし子らが 朝露の如也 夕霧
の如也

秋山 下部留妹 奈用竹乃 騰遠依子等者 何方爾 念居可 栲紲之
長命乎 露己曾婆 朝爾置而 夕者 消等言 霧己曾婆 夕立而 明

者　失等言　梓弓　音聞吾母　髣髴見之　事悔敷乎　布栲乃　手枕纏
而　劍刀　身二副寐價牟　若草　其嬬子者　不怜彌可　念而寐良武
悔彌可　念戀良武　時不在　過去子等我　朝露乃如也　夕霧乃如也

題意　吉備ノ津ノ釆女死時柿本朝臣人麿作歌幷短歌といふ題がある。この題の吉備津釆女については、既に短歌の評釋の時にも言及した如く、諸前賢の研究があるが、近時山田博士の研究が精確であらうから、今その結論を摘記することとする。吉備は吉備の國で、津といふのはその郡名であらう。其名の一字なるところから推して和銅の國郡改字制以前に屬する名に相違ない。釆女は恐らく其處から貢せられた釆女であらうから、吉備ノ津ノ釆女と云つた。さて、歌に據るとこの女に夫があつた。また短歌の方には、『志賀津子』、『凡津子』とあるのはどうかといふに、これは死せし時には既に現職の釆女ではなく、その夫の住所、或は夫と婚してからの自分の住所は近江の大津あたりにあつたものと考ふべきである。短歌の方の樂浪之志我津といふのは、萬葉卷七（一三九八）に、神樂聲浪乃四賀津之浦能。同卷（一二五三）に、神樂浪之思我津乃白水郎者等とあつて、近江滋賀郡の津だといふことが明かである。

語釈　**○秋山・下部留妹**　アキヤマノ・シタブルイモと訓む。秋山の黄葉のにほふやうに美しい妹の意。舊訓アキヤマノ・シタベルイモ。略解アキヤマノ・シタブルイモ（諸家多從レ之）。シタブといふ語は、古事記應神條に、秋山之下氷壯夫。萬葉卷十（二二三九）に、金山舌比日下鳴鳥音谷聞何嘆とある如く、波行上二段の動詞である。その意は、古事記傳にある如く、『諸木の變紅したる秋山の色を云』ふのであつて、『紫草能爾保敝類妹』などと類似の表現で、その美しかつたことを形容したものである。

○奈用竹乃・騰遠依子等者　ナヨタケノ・トヲヨルコラハと訓む。女竹のやうになよやか（しなやか）な女がの意。舊訓ナユタケノ。拾穗抄ナヨタケノ。代匠記で、『奈用竹ハナヨタケト點ゼルニ從フベシ。俗に女竹ト云ナレバ、他ノ竹ヲ男竹ト云テ、ソレニ方レバ、ナヨ、カナル故ナリ』と云つてゐる。卷三（四二〇）に、名湯竹乃十縁皇子とあるから、用文字はヨの音だが、用例に據ればナユタケだから、講義では舊訓に從つた。騰遠依は、しなやかに撓み依る意で、美女の體つき乃至行爲を形容したものである。トヲは、卷八（一五九五）に、秋芽子乃枝毛十尾二降露乃、卷十（二三一五）に、白杜杙枝母等乎乎爾雪落者。同卷（一八九六）に、爲垂柳十緒妹心乘在鴨とあるトヲヲに通じ、『撓みよる』の意だから、此處は、講義の説に從つて『なよ竹の如きしなやかなる姿したる女とい

ふ義なれば、なよ竹のは主格にして、如きの意は、なよ竹のとをよるより、子等に接するその連體格として立つ爲に成立するものたるや明かなり』と解するが、この『の』は普通の主格の單純な『の』と違ふべきものであらう。子等のラは音調のために附けたので、單數である。これは卷十（二〇七〇）に、君待夜等者不明毛有寐鹿（キミマツヨラハアケズモアラヌカ）などの等（ラ）と同じである。トヲヨルにつき二三の文獻を引くなら、『とをゝにしなゆる竹もて妹が姿をたとふ。花にたとへ藻にたとふる類いと多し』（考）。『容貌のしなやかになよゝかなるよしなり』（古義）。『女のすがたの、なよゝかにたわみたるをいへる也』（攷證）等で、所詮同じところに落著くのであるが、『なよ竹の』を枕詞とする從來の說と、『なよ竹』を主語として、『なよ竹が撓みよる如くに撓む子等』と解するとの差別があるだけである。

○何方爾・念居可　イカサマニ・オモヒテヲレカと訓む。どう思つて居つてかといふ意。念居可は舊訓オモヒヲリテカ（代匠記・童蒙抄・考同訓）。略解オモヒヲレカ（檜嬬手・註疏・新解・新釋同訓）古義オモヒマセカ（新考同訓）。攷證オモヒテヲレカ（美夫君志・講義同訓）。今は攷證の訓に從つた。この句は、ずつと下にある『過ぎにし』といふのに續く意味だが、そんなに遠く隔てさせずに、一度そこに『時ならず過ぎにし』を置いて解すれば好く、攷證に、『いかさまに思ひをればか、かく失つらん』とあるごとく、一種の省略融合句法とすれば面倒ではない。

○栲紲之・長命乎　タクナハノ・ナガキイノチヲと訓む。まだうら若く、末ながき命をばの意。栲紲之は『長き』の枕詞で、栲繩は、楮又は穀の樹皮の纖維を以て綯つた白い繩をいふ。卷四（七〇四）に、栲繩之永命乎欲苦波。卷五（九〇二）に、栲繩能千尋爾母何等等の例がある。この枕詞の例を見ても、此處の『の』と、前の奈用竹乃の『の』との間に、さう嚴重な差別の無いことが分かる。そしてその差別の間にも多くの移行型の存じて居ることを知らねばならない。

○露己曾婆・朝爾置而・夕者・消等言　ツユコソハ・アシタニオキテ・ユフベニハ・キユトイヘと訓む。露は朝に置いて、夕には消えるといふがの意。舊訓キエヌトイヘ（童蒙抄・攷證・美夫君志同訓）考ケヌルトイヘ。略解キユトイヘ（檜嬬手・註疏・新考・講義・新釋・新解・新講等同訓）古義ケヌトイヘ。この朝と夕との對句は、既に抄出したが、卷一（三）に、朝庭取撫賜夕庭伊緣立之。卷三（四八一）に、朝庭出立偲夕爾波入居嘆會。卷九（一六二九）に、且者庭爾出立夕者床打拂。卷十三（三三二一）に、朝爾波白露置夕爾波霞多奈妣久。卷十九（四二〇九）に、安志多爾波可度爾伊氐多知由布敝爾波多爾乎美和多之等の例がある。『者』だけで、ニハと訓む例は、卷一（二九）に、夷者雖有とあつて、集中なほ例證が多い。また、普通、『露こそは』といへば、『消ゆれ』と結ぶのだが、此處は、『消ゆと云へ』で結んでゐる。『例外の一格と見るべきものなり』（講義）といふのであるが、これを見ても人麿の言語用法は自由であ

り、また係結の關係はいかに語調に根ざしてゐるか、從つて言語感覺と離るべからざるものだかが分かるのである。卽ちここでは、『イヘ』と据ゑた方が調を成すからで、これが主原因なのである。なほ山田博士に據れば如是の例は、『と』といふ助詞で續けた場合に限られてゐる。

○霧己曾婆・夕立而・明者・失等言　キリコソハ・ユフベニタチテ・アシタニハ・ウストイヘと訓む。霧は夕方に立つて朝には無くなるといふがといふ意。舊訓ウセヌトイヘ。略解ウストイヘ(諸書同訓)。言といふのは、『それが一般の道理だけれども』といふくらゐの意である。この言といふ語も廣い意味の範圍を有つて居り、人麿の妻死した時の、『妹は坐すと人の云へば』などの範圍までに至つて居る。卷七(一四〇六)に、秋津野爾朝居雲之失去者。卷十七(四〇〇〇)に、多都奇利能於毛比須疑米夜。卷十九(四二一四)に、立霧之失去如久置露之消去之如の例がある。

○梓弓・音聞吾母　アヅサユミ・オトキクワレモと訓む。釆女の死んだといふことをただ噂に聞いた吾もといふ意。このオトの如き例は、音響の意から噂とか評判とか通知とかいふ意味に擴めたもので、既に引用したが、二たび示すならば、卷五(八八三)に、於登爾吉岐目爾波伊麻太見受。卷六(九一三)に、鳴神乃音耳聞師。卷十一(二八一〇)に、音耳乎聞而哉戀。卷十七(四〇〇〇)に、於登能未毛名能未母伎吉底などの例がある。

○髣髴見之・事悔敷乎　オホニミシ・コトクヤシキヲと訓む。舊訓ホノニミシ（代匠記・童蒙抄同訓）。考オホニミシ（攷證・檜嬬手・古義・美夫君志・新考・講義・新釋・新講等同訓）略解ホノミシ（註疏・新訓・全釋等同訓）『打キクニハ、見ヌ人ニハカヽル事ヲ聞テモ悲スクナキ習ナレバ、見タル事アリシヲ悔ルヤウニ聞ユレド、第二ノ短歌ニ合テ見レバ、能見オカザリシガ悔シキ意ナリ』（代匠記）。『こゝはかの釆女失し事を、きゝしわれさへも、釆女が生てありしほど、おほよそに見すぐしたる事の、くやしきをかたらひて、そひ寝せし人はいかならんとおしはかるなり』（攷證）にて大體わかる。併し、古義では『かゝる事を聞ては、悲しまるゝ習なるに、ほのかにだにも見しことのありしを、悔しくおもふよしなり（委曲見おかざりしを、悔しむ意にはあらず）』と云ひ、總釋で土屋氏は、『前にほんの一寸見たことを思ひ出して悲しいのに』と口譯して居る。卷三（四七六）に、天所知牟登不思者於保爾曾見谿流和豆香蘇麻山。卷四（五九九）に、朝霧之欝相見之人故爾命可死。卷七（一二五二）に、人社者意保爾毛言目。同卷（一三三三）に、佐保山乎於凡爾見之鹿跡。卷十四（三五三五）に、於能我乎遠於保爾奈於毛比曾などの例がある。

○布栲乃・手枕纏而　シキタヘノ・タマクラマキテと訓む。釆女の手を枕にしての意。卷十七（三九七八）に、妹我多麻久良佐之加倍底。マクは枕にすることにて、卷二（二二二）に、奥波來依荒礒乎色妙乃枕等卷而の例がある。

○劒刀・身二副寐價牟　ツルギタチ・ミニソヘネケムと訓む。釆女を身に添へて寐たであつたらうとの意。巻十一（二六三五）に、劒刀身爾佩副流大夫也。同巻（二六三七）に、劒刀身副妹之。同巻（二六八三）に、霡霂零床共所沾於身副我妹。巻十四（三四八五）に、身爾素布伊母乎等里見我禰などの例があつて參考になる。

○不怜彌可・念而寐良武　サブシミカ・オモヒテヌラムと訓む。さびしく思つてか寐ることであらうといふ意。舊訓サビシミカ。考サブシミカ。巻一（二九）に、或云見者左夫思母。巻四（四八六）に、吾者左夫思惠。巻五（七九五）に、都麻夜佐夫斯久。巻十二（二九一四）に、夢見而起而探爾無之不怜。巻十六（三八六三）に、志賀乃安麻乃大浦田沼者不樂有哉。巻十八（四〇七四）に、我佐夫之毛伎美止之不在者等の例がある。

○時不在・過去子等我　トキナラズ・スギニシコラガと訓む。時ならず急に死んだ女はといふ意。舊訓トキナラヌ。代匠記トキナラズ（諸書同訓）。考トキナラデ。今代匠記に從つた。まだ年若く、死すべき年にもあらざるに死したといふことを云つてゐるのである。代匠記に、『時ナラズ過ニシト云ヒ、短歌ヲ思合スレバ、思フ故アリテ川ニ行テ身ヲ投ト見エタリ』と云つたが、これは、短歌の方に『川瀨の道』云々とあるからの想像であらうが、この想像がなくとも、味ひ得る歌である。死

することをスグと云つたのは、巻一（四七）に、黄葉過去君之。巻二（二〇七）に、黄葉乃過伊去等。巻三（四六三）に、過去人之所念久爾。巻五（八八六）に、道爾布斯弖夜伊能知周疑南などの例がある。この過去子等我を古義では我を香の字の誤にかとして、『過ぎにし子らか』と訓み、『死去し子等哉といふにて香は歎息ノ辭なり』といひ、新訓もそれに從つたが、ここは『子等が』と主格に取る方がいいやうである。

○朝露乃如也・夕霧乃如也　アサツユノゴト・ユフギリノゴトと訓む。誠に朝露の如くである、夕霧の如くであるといふ意。舊訓アサツユノゴトヤ・ユフキリノゴトヤと訓み、代匠記・考も其に從つたが、玉の小琴でアサツユノゴト・ユフキリノゴトと訓み、『如也はごとと訓べし。也の字は焉の字などの如く只添て書るのみ也。ごとやと訓てはや文字調はず』と云つた。そして、『さて此終りの四句は子等が露のごと夕霧のごと時ならず過ぬると次第する意、如此見ざれば語調はざる也。さて朝露夕霧は上に云置たる露と霧とを結べる物也』と云つた。併し、この結びの二句は殆ど獨立句と看做すべく、前に反るやうに、『夕霧の如くに過去く』といふやうにしては妙味がなくなる。これは鑑賞のところで再說する。漢語の助詞で訓まない例は、巻三（四一四）に、菅根乎引者難三等標耳曾結焉。巻四（七三六）に、夕占問足卜乎曾爲之行乎欲焉。巻七（一一〇二）に、細谷川之音乃清也。巻

八（一四四二）に、後居而春菜採兒乎見之悲也（オクレヰテワカナツムコチミルガカナシサ）。同卷（一五三六）に、隱野乃芽子者散去寸黃葉早續也（ナバリヌノハギハチリニキモミヂハヤツゲ）等とあるので明かである。攷證・美夫君志でゴトヤと訓むについては鑑賞のところで觸れることとする。結びの『夕霧乃如也』は、古寫本中、神田本・類聚古集では、『夕露乃如也』となつて居る。

大意　秋山の黃葉（もみぢ）のにほふやうに美しかつた女、女竹（めだけ）の如きしなやかな姿をして居つた女の、吉備の津の采女が、どう思つたことであらうか、〔栲紲之（たくなはの）〕まだうら若く末長かるべき命で、時ならず死んで行つた。』露は朝に置いて夕には消え、霧は夕に立つて朝には無くなるものであらうが、そのやうに果敢なくもかの女は死んで行つた。』かの女が亡くなつたといふ〔梓弓（あづさゆみ）〕噂だけを聞く自分でも、生前にしんみり見なかつたことを悔いる程だから、況して親しく〔布栲乃（しきたへの）〕手枕をかはして〔劒刀（つるぎたち）〕添寐した夫の身になつたら、どんなに淋しく思ひ寐ることであらう、どんなに殘惜しく戀ひ慕ふことであらう。』まだ死ぬ時でないのに思ひがけず彼の女は死んで行つた。朝露の如くに。夕霧の如くに。』

鑑賞　この歌は、賴まれて作つたのでなくて、遭遇によつて、自發的に作つたものであらうか。それから、近江の津、大津の名が出てくるので、人麿が近江に行つてゐたことが分かる。人麿にはこのほかにも近江に關係した歌があるから、さういふ點でも想像の範圍をひろめ得る一つの資料と

することが出來る。私は此歌は大寶元年ごろ、人麿の假定年齡三十九歲ぐらゐの時の作とした。歌の內容は、簡單であり、先づ、釆女の生前美人であつたことをいひ、その釆女が朝露のごとく夕霧の如くに、時ならずに死したことを敍べ、生前にかりそめに見たことを回想してその夫の心情に同情しつつ二たび、『朝露のごと、夕霧のごと』と云つて結んでゐるのだから、內容としては取り立てていふほどのものでなく、寧ろ常套手段と謂つてもいいほどのものである。

然るに一首全體は、淸澄のうちに渾沌があり、平調のうちに渦紋があり、省略があり、轉倒があつて、やはり前に評釋し來つた長歌同樣、相當の剖析が必要である。

この歌を簡單にすれば『秋山のしたぶる妹は、栲繩の長き命を、時ならず過ぎにし。朝露の如也。夕霧の如也』ぐらゐになる。それを種々に裝飾し、變化してゐるのだが、それも大體次の如き形態と看做すことが出來るだらう。

あきやまの　したぶるいも　なよたけの　とをよる子らは
いかさまに　念ひて居れか　たくなはの　ながきいのちを
　　　　　　　　　　　　　　　　　　――〔時ならず過ぎにし〕――
露こそは　朝に置きて　夕には　消ゆと言へ

――〔時ならず過ぎにし〕――

霧こそは　夕(ゆふべ)に立ちて　朝(あした)には　失すと言へ
あづさゆみ　音聞く吾も　髣髴(おほ)に見し　ことくやしきを
しきたへの　手枕纏きて　つるぎたち　身に副へ寐けむ　若草の　その夫の子は
さぶしみか　念ひて寐らむ
くやしみか　念ひ戀ふらむ

――時ならず　過ぎにし子らが――
朝露の如(ごと)也　夕霧の如(ごと)也

かういふ具合になるのを、長歌特有の連續聲調で行くために、切れるといふことはない。『消ゆと言へ』とか、『念ひて寐らむ』とか、文法的には切れるが、聲調からは切れてゐない。かくの如く切れてゐないから、其處におのづから、省略と壓搾とが行はれるのである。卽ち私の謂ふ省略融合の技法が行はれるのである。

從來の學者はこの事に就いても、種々研究せられた。澤瀉氏は省略法の文字を用ゐられ、山田氏次いで森本氏は飛躍の文字を用ゐられてこれらの技法を説明して居る。

『いかさまに念ひて居れか、栲繩の長き命を』から直ぐ、『露こそは朝に置きて』に續けてゐるの

で、香川景樹は、その『長き命を』の下に一二句落ちたのだらうといひ、井上氏も、『イノチヲとひさして之を受くる辭なし』といひ、山田氏は、『二十句を隔てて、時不在過去子等といふにつづくる格なり』と説明してゐる。語格の上からは正しくそれだが、『長き命を』のところに既に、『時ならず過ぎにし』を含蓄せしめたものとせねばならぬのである。

『霧こそは夕に立ちて朝には失すと言へ』から直ぐ、『梓弓音聞く吾も』に續けたところも亦同じである。攷證で此處の具合を説明して、『霧こそは夕べに立ちても明ぬればうせぬといへ、されども人はさあらざるものをといふ意なり』と説明してゐる程であるが、此處はそれよりも、『その如く、この釆女も時ならず過ぎにし』といふ句を含めて居るものと解釋すべきである。即ち、『時ならず過ぎにし』といふ句が二たびも壓搾せられて、終の方になつてはじめて、『時ならず過ぎにし』を表面に出してゐる手法は巧みであり、簡淨を極めてゐる。熟讀して居れば、自然に意味が通じ、『時ならず過ぎにし』のところに歸著して來るのは、前の含蓄の潛行的誘導があるためで、決して偶然でないことを知らねばならない。

次に、『時ならず過ぎにし』と云つて切るかとおもへば、其處でも切らずに、『過ぎにし子等が』と云つてゐる。そして、『朝露の如也、夕霧の如也』と云ひ、これも語格上からは、全く結ばずに、

上の『過ぎにし』に關聯してゐるやうな具合である。宣長が、『さて此終りの四句は、子等が朝露のごと夕霧のごと時ならず過ぬると次第する意。如此見ざれば語調はざる也』と云つてゐるのは卽ちそれである。宣長は語格上さういふ結論をしてゐるのである。

言語の斡旋を文法學的に、補充し剖析して解明すれば右の如くである。結びの、『朝露のごと、夕霧のごと』といふ句も、上に反つて關聯せしめるのであるが、聲調のうへからは、此處で落著くのである。さういふ結びとしての安定の響を自然持つてゐるのである。悲歎の感慨を其處で極まらせてゐるのである。そこで、守部の檜嬬手の訓は宣長に從つて居りながら、『まことに朝露の如く、夕霧の如くなるものかな』と解釋して、意味を落著かせて居り、攷證は舊訓に贊成し、『也もじは、ごとくやなどいふにて、歎息の意のや也。さて、この四句は、まへに露こそは、霧こそはといふをくりかへしいひて、その朝つゆのごとくやな、夕きりのごとくやなと、うちなげきたる事なり』と云つたのは、文法的には宣長の方が正しいが、攷證で結論したやうな根據が聲調のうへに自然に具備されてゐるからである。このことは、決して輕々に看過してはならないことであつて、舊訓の朝露ノゴトヤ。夕霧ノゴトヤの感慨をこれらの句が所有してゐるのである。そこで、自由なる鑑賞者は、『朝露のごとや。夕霧のごとや』としてもまた鑑賞し得る。これは訓詁的には、なぜ、『也』文字を

附加して書いたかといふ問題とも關聯してゐるのである。

次に、これは寧ろ從屬的なことかも知れぬが、『髣髴に見しこと悔しきを』をば、采女をば生前に、大凡に見た、十分に見なかつたのを今になつて悔しく思ふといふやうに解し、契沖の解以來それに從ふのだが、一考すれば、意味の上で、『身に副へ寐けむ若草のその夫の子は』への連續に、腑に落ちがたいものがある。そこで、古義で、『見もしらぬ人のうへにても、かかる事を聞ては、悲しまるる習なるに、ほのかにだにも見しことのありしを、悔しくおもふよしなり。(委細見おかざりしを、悔しむ意にはあらず)』と云ふやうに解し、土屋氏も總釋で、『前にほんの一寸見たことを思ひ出して悲しいのに』と口譯してゐるのである。實際この解釋の方が、意味のうへからは自然である。『生前に髣髴に、大凡に一寸見たことが、こんなに悔しませる、即ち悲しませるのだから』と解するので、『況んや、連れ添うて身に副へ寐た夫の悲歎はどのくらゐであらうか』といふ續きが自然に聞こえるのである。若し、この解釋が出來るとせば、短歌の、『天數ふ大津の子が逢ひし日におほに見しかば今ぞ悔しき』も、古義で解したやうに、『幽かにだにも其容を見ざらましかば、今かく死れるを聞て其面影の思出られて、忘れられず悲しくはあらじ、と思ふにも、そのかみ道の行あひにて、幽かに見てありしことさへ、今更悔しく思はるゝとなり』といふやうに解釋することとなる。或は、

この、『今ぞ悔しき』を後悔の意でなしに、『今ぞ悲しき』の意で、その日に逢つて、一寸でも見たために、このやうに悲しむのであるといふ解釋になるのである。私は、この解釋をも棄てずに鑑賞したいと思つて居る。或は、時には、オホニをば、オホヨソニ、ゾンザイニなどと解せずに、ホンノ一寸と解する方がいいのではなからうかと思ふこともあるが、未だ非力で斷定しかねてゐる。

解釋の諸問題は如上であり、古義で、『此歌今まで、熟解得たる人なし』などと云つてゐるのだが、大體の解釋は右で既に出來てゐると看做していい。そして吾等は、熟讀しつつ、その聲調の響に參加しつつ、飽くまで人麿の悲歎に同化することが出來る。感情が自然に流露し、感情さながらに、言語の聲調が進行しつつ、句々緊張し、壓搾せられ、簡潔に、無駄がなく、『大鳥の羽易の山にな戀ふる』(二一〇)。『時つ風雲井に吹くに奥見れば』(二二〇)の如き、長く息を吹くやうな句が無いが、飽くまで沈潛して悲歎を内に籠らせつつ歌ふといふやうな歌ひぶりで、その悲歎を、結びの、『朝露の如也。夕霧の如也』で据ゑてゐる。餘響は歌全體から傳はりくるが、特にこの結句に於て無限の餘響を聽くことが出來る。

この長歌は、人麿の長歌としては、短い部類に屬してゐる。それゆゑ、力量を惜しみ、潛ませたところがあり、吉野宮行幸時の歌(三六)などと共に、人麿傑作の一つであらう。この同一の價値を

ば、『樂浪の志我津の子らが罷道の川瀨の道を見ればさぶしも』の短歌に於ても認め得ることは、既に短歌評釋の方で言つた筈である。山田博士が、『技巧の極ここに達せるか、はた天來の妙音おのづからこれを爲せるか、われ未だこれを判するを得ず。人麿作歌中巧妙なるものの一なりといふべし』と云つたのは蓋し至言であらう。

人麿は、行幸に供奉して作歌し、皇子殯宮時に作歌し、妻と別れて旅に作歌し、妻の死を悲しみて作歌し、他人の死に同情して作歌し、大體に於て破綻がなく、人麿的力量をば後世に傳へてゐるのであるが、この原因は、作歌態度の純粹、その全力的な態度に存じてゐるのである。然かも、人麿の如き多力者にあつて、なほせいいつぱいの力を內にこもらせ得る、かういふ比較的短い長歌に於て最も光彩陸離たるもののあるのは何であるか。これは作歌態度の覺悟に於て、漫然と看過してはならぬ個處である。

なほ少しく云ふならば、この長歌には、『秋山の、したぶる妹』。『なよ竹の、とをよる子ら』といふ具合に、いまだ枕詞にならぬけれども、その傾向にあるもの、それから、『栲縄の』、『敷妙の』、『劒刀』、『梓弓』、『若草の』といふやうな枕詞となつたものが、一首の長さの割合には多く入つて居る。これも鑑賞上邪魔だといへば邪魔とも云へるのだが、これは前にも云つた如く、長歌聲調の

一つの特色でもあり、特に人麿長歌の特色であつて見れば、さう簡單に片付けてしまふのは惡いと私はおもふ。のみならず、對句で連續せしめて行つて居る關係上、却つて是等の言葉の配置が效果的だと謂ふことも出來るのである。

露と霧とを繰返して、『露こそは、朝に置きて、夕には、消ゆと言へ、霧こそは、夕に立ちて、朝には、失すと言へ』と云つて居るのも、空虛のやうであつて、『言へ』の繰返しによつて締つて居り、特に是等の句が前行してゐるために、『髣髴に見し事悔しきを』といふ實質的句が活躍して來るのである。これと同じ關係は、『不怜しみか、念ひて寐らむ、悔しみか、念ひ戀ふらむ』の句を前行せしめてゐるので、『時ならず、過ぎにし子らが』といふ實質的・具體的寫生句が活躍して來るのによつて認めることが出來るのである。

この實質的句、卽ち實際の寫生句の中で、『時ならず過ぎにし子』といふのは、細かくその內容を示さぬので、契沖は前後の關係から入水したのではなからうかと想像して居る。短歌の方に、『罷道の川瀨の道』といふのがあるので、その川瀨の道を通つて黃泉へ行くやうな氣持でさう解したのかも知れないが、これは必ずしも溺死とまでは見ずに、急に死したこと、思ひがけぬうちに、急な病に罹つて死したことぐらゐに解するのが穩當のやうである。當時は疫でも流行すれば醫術の力及ば

ずに死亡率の多かつたことは紀の文を見ても分かるのである。

次に、『時ならず』、及びその類似の用例を記せば、卷三(四四三)に、欝蟬乃惜此世乎露霜置而往監時爾不在之天とあるのは、大伴三中が丈部龍麿の自殺を悼んだもので或は人麿の歌を參考としたかも知れない。なほ、卷七(一二六〇)に、不時斑衣服欲香島針原時二不有鞆。卷十(一九七五)に、不時玉乎曾連有宇能花乃といふ例があり、なほ、卷九(一七五三)に、時登無雲居雨零。卷十二(三〇六〇)に、時常無念度者生跡文奈思。なほ、卷三(四六七)に、時者霜何時毛將有乎情哀伊去吾妹可。卷十(二一〇六)に、野邊乃秋芽子時有者今盛有の例がある。それから、トキジクといふ言方も時に關係したもので、表現に顧慮すれば參考になる。いづれにしても古語の微妙なところを表はすものである。

それから、種々想像して、人麿は自發的に作歌したのでなくて、依賴を受けてこの挽歌を作つたと假定するなら、どうしてこんなに自分の悲歎として表現出來るか、このやうに氣乘がして精根を盡すことが出來るか、これ等のことも作歌實行の問題として考へると決して輕い問題ではないと思ふのである。

短歌二首

【三一八】樂浪之　志我津子等何 一云志我津之子我　罷道之　川瀨道　見者不怜毛

右一五四頁に評釋了。

【三一九】天數　凡津子之　相日　於保爾見敷者　今叙悔

右一六〇頁に評釋了。

【巻二・二二〇】

玉藻よし　讃岐の國は　國柄か　見れども飽かぬ　神柄か　ここだ貴
き　天地　日月とともに　滿りゆかむ　神の御面と　繼ぎ來る　中の
水門ゆ　船浮けて　吾が榜ぎ來れば　時つ風　雲居に吹くに　奧見れ
ば　跡位浪立ち　邊見れば　白浪さわぐ　鯨魚取り　海を恐み　行く
船の　梶引き折りて　彼此の　島は多けど　名ぐはし　狹岑の島の
荒磯面に　廬りして見れば　浪の音の　繁き濱邊を　敷妙の　枕にな
して　荒床と　より臥す君が　家知らば　行きても告げむ　妻知らば
來ても問はましを　玉桙の　道だに知らず　欝悒く　待ちか戀ふらむ
愛しき妻らは

玉藻吉　讚岐國者　國柄加　雖見不飽　神柄加　幾許貴寸　天地　日
月與共　滿將行　神乃御面跡　次來　中乃水門從　船浮而　吾榜來者
時風　雲居爾吹爾　奧見者　跡位浪立　邊見者　白浪散動　鯨魚取
海乎恐　行船乃　梶引折而　彼此之　島者雖多　名細之　狹岑之島乃
荒磯面爾　廬作而見者　浪音乃　茂濱邊乎　敷妙乃　枕爾爲而　荒床
自伏君之　家知者　往而毛將告　妻知者　來毛問益乎　玉桙之　道太
爾不知　鬱悒久　待加戀良武　愛伎妻等者

題意　讚岐狹岑島視二石中死人一柿本朝臣人麿作歌一首并短歌といふ題がある。讚岐は讚岐國。狹岑は、『岑』字神田本『峯』となつてゐる。サミネノシマと訓むべく、代匠記に、『狹岑島ハ那珂郡ニアリ。所ノ者サミシマト云。反歌ニモ佐美乃山トヨマレタレバ、サネトハヨムマジキナリ』と云つてゐる。現在の仲多度郡與島村沙彌で、綾歌郡宇多津町の北方の沖合にある小島だといふことになつてゐる。『當時の航路にあたれる地なりしならむ』(講義)。視二石中死人一は考にイソノチニミ

マカレルヒトヲミテと訓み、古義にイソベノシニヒトヲミテと訓み、講義にイシノウチニミマカレルヒトヲミテと訓んだ。意味は、代匠記に、『石中トハ石ヲカマヘテ葬ルニハ非ズ。石ノ中ニ交ルナリ』といひ、古義に、『礒際などをいふべし』といひ、新考に、『石中は岩の間ならむ』と云つてゐる。歌の内容を見るに、溺死した旅人の趣で、人麿は船で此島に立寄つたことが分かる。なほこの航海につき、人麿西國往反の行路と考へ、土屋文明氏は總釋で、『作者人麿は何の爲めに此の邊を旅行したのであるか不明であるが、巻三に筑紫國に下る時の歌（三〇三・三〇四）があるから其下向或は上來の時の歌とも思はれるが、道順から云ふと、筑紫への通路は山陽道の海岸を傳はるので讃岐は通らぬのではないかと思ふ。殊に歌詞中に「中の水門ゆ船うけて」とあるのを見ると、この中の水門が船出の起點のやうに思はれ通過地ではないやうに思はれる。歌の初の數句の樣子などで或は人麿が讃岐に任を受けるか公の使などで行つたことがあるのではあるまいか』と云つてゐる。想像するに、人麿はただ一たびこの島に渡つて、偶然この行旅の死者を見たのではあるまい。少くとも數回の航海ぐらゐはしてゐるのであらう、さうすれば、その航海は、筑紫或は四國と何かの關係があるやうにおもへるが、或は四國に立寄る用向がなくとも、狹い瀬戸内海のことだから、狹岑島を經る航路もあつたのかも知れない。此は後考の增補を待つ。

【語釋】○玉藻吉・讃岐國者　タマモヨシ・サヌキノクニハと訓む。玉藻吉（枕詞）讃岐の國はといふ意。玉藻吉は舊訓タマモヨキ。代匠記タマモヨシ。これは在根良（アリネヨシ）、朝毛吉（アサモヨシ）、青丹吉（アヲニヨシ）などと同じ趣の語で、『玉藻よ、さ寝（ぬ）』から、同音のサヌキに冠せた（眞淵の冠辭考類似）ものか、或は、讃岐は海のある國だから海藻がとれるといふ意味で、（代匠記に、延喜式云、讃岐國中男作物云々、海藻トイヘリと注して居る。）萬葉にただこの一例あるのみだから、或は人麿の造語ででもあらうか。ヨシは青丹吉（アヲニヨシ）の條でも說いたごとく、ヨと歎辭を云つてシで强めたものであらう。この枕詞の諸說は、童蒙抄は、『尤延喜式にも讃岐國中男作物云々海藻とあれども、他國にも何程歟其類あれば、此一國に定めん事もいかが也。宗師案にも、さぬきといふこのぬきぬくといふは、玉にそふたる詞故、元此國石玉貝玉等のよき國なる故、玉の最上の國、その國をぬくと云意にて、如ㇾ此冠句を置きたるものと見えたり』と云ひ、冠辭考は、玉藻は藻には玉の如き實（み）があるからだとし、『玉藻與（ヨ）、といひて、奴（ヌ）とつゞけたり。奴（ヌ）とは玉藻の波にぬえ臥をいへり』と云つてゐる。なほ、古義は眞淵說を否定し、契沖說と、沈着（シヅク）とサヌキと通音だから、玉藻シヅクと續けた說を紹介してゐる。黑川眞頼の古今冠辭考は眞淵說に似、『玉藻よといひて、眞靡（さぬ）とかかれるなり』といひ、檜嬬手は『布裳（アサモ）よ着（キ）とかかる枕詞と合するに、是も、玉裳よさしぬぐと掛けたるならん』と云つてゐる。

〇國柄加・雖見不飽　クニカラカ・ミレドモアカヌと訓む。國柄であるか見れども飽かぬといふ意。國柄は人格、家柄などと現在いふのと同じくその由來・品位・性質等を示してゐる。語原は國故（古義）である。そこで、カラと澄んで訓ませる。卷三（三一五）に、芳野乃宮者山可良志貴有師水可良思淸有師。卷六（九〇七）に、蜻蛉乃宮者神柄香貴將有國柄鹿見欲將有などとある。

〇神柄加・幾許貴寸　カムカラカ・ココダ・タフトキと訓む。舊訓カミカラカ・ココハ・カシコキ。管見カミカラカ・ココタ・カシコキ。代匠記の一訓カミカラカ・ココタ・タフトキ。童蒙抄カミガラカ・ココラ・カシコキ。考カミカラカ・ココタ・タフトキ。略解カムガラカ・ココタ・タフトキ。今、略解の訓に從ふ。神ながらのためであるか、神の御品位のためであるか、尊い神だからか、非常に尊いといふ意になる。古事記上卷に、讃岐國謂二飯依比古一とあつて、神の生み給うた國だといふことが分かる。幾許の例は、卷五（八四四）に、許許陀母麻我不烏梅能波奈可毛。卷十四（三三七三）に、奈仁曾許能兒乃己許太可奈之伎等がある。カラと訓むか、ガラと濁つて訓むかといふに、例は左に示す如く兩方ある。卷四（六二四）の、咲之柄爾。卷十（一九四五）の、宇能花邊柄鳴越來等は澄んでゐる。しかし卷十三（三二七〇）の、夜者須柄爾は濁つて居る。今は多くの說に從ひ、澄んで訓み置く。

○天地・日月與共・滿將行　アメツチ・ヒツキトトモニ・タリユカムと訓む。天地日月と共に滿ち足り榮えゆかむの意。舊訓アメツチノ。童蒙抄アメツチト。考アメツチ。舊訓ヒツキトトモニ。考ツキヒトトモニ。舊訓ミチユカム。考タリユカム。同じ趣の表現には、卷三（三一五）に、天地與長久萬代爾。同卷（四七八）に、天地與彌遠長爾。卷十九（四二七三）に、天地與相左可延牟等。卷十三（三二五八）に、霞立長春日乎天地丹思足椅。同卷（三三二九）に、天地滿言。卷二（一六七）に、望月乃滿波之計武跡。卷九（一八〇七）に、望月之滿有面輪二等がある。

○神乃御面跡　カミノミオモトと訓む。神の御面として（と思つて）の意。これは古事記上卷に、次生ニ伊豫之二名嶋一、此島者身一而有ニ面四一、毎レ面有レ名、故伊豫國謂ニ愛比賣一、讃岐國謂ニ飯依比古一、粟國謂ニ大宜都比賣一、土左國謂ニ建依別一云々とある、その飯依比古の神の御面の意である。

○次來・中乃水門從　ツギキタル・ナカノミナトユと訓む。神代からうけ繼いで來た那珂郡の湊からの意。舊訓ツギテクル（代匠記・考・以下同訓）。攷證ツギテコシ（美夫君志同訓）。古義イヒツゲル。新考アフギクル。新訓ツギキタル（全釋・新釋・新講・總釋同訓）。その意味は考に、『神代よりいひ繼來る也』（檜嬬手・古義・美夫君志・全釋・新釋・新講同説）。童蒙抄に、『此義兩説あり、人麿西國にくだる行路の次第を、來るつぎ／＼といふ義、また神のおも跡の次／＼を來るに、さぬきは中にあたる國故、中のみとうけんための義ともきこゆる也』（攷證・講義は

此第一と同說）とあるが、前句の、『神の御面と』に續くのだから、大體考の說がいいやうである。近時諸註釋書多く之に從つてゐる。土屋氏も、『神の御面としてつづいて來た』と解して居る。ツグといふ例は、卷二（九一）に、妹之家毛繼而見麻思乎。卷四（七五六）に、次相見六事計爲與。卷五（八〇七）に、用流能伊昧仁越都伎提美延許曾。卷八（一六五一）に、沫雪乃比日續而如此落者。卷十八（四〇五七）に、都藝弖可欲波牟等がある。これらは攷證で、『道をつゞけて來しなり』と解したのに適當な例だが、卷一（七七）に、須賣神乃嗣而賜流吾莫勿久爾。卷三（三八二）に、神代從人之言嗣國見爲。卷四（四八五）に、神代從生繼來者。卷五（八一三）に、余呂豆余爾伊比都具可禰等等の氣持は、寧ろ考の說の方に當嵌まるやうにおもへる。中乃水門は、古の那珂郡（今は多度郡と合併して仲多度郡となつた）の湊といふことで、西讃府志に、『中津は丸龜市の西南櫛無川の東畔に在り、下金倉を中津とも稱す。謂はゆる中水門なるべし』とあるに據つて中津だとすると、六鄕村下金倉の湊であらう。そして沙彌島は其處から東北二里の海上にあるから、東行した趣である。

○時風・雲居爾吹爾　トキツカゼ・クモヰニフクニと訓む。潮時の强風が空に吹くにの意。時風の意は、代匠記に、『時ニ隨テ吹風ナリ。下ニ時ツ風トヨメル歌ドモ、イカサマニモ春ニマレ秋ニマレ、微風ヲ云事トハ見エズ。意ヲ著べシ』。童蒙抄に、『あらき風の事を云。旋風といふ意なるべし。今

時のときつかぜといふ意とは異意也』。考に、『うなしほの滿來る時は、必風の吹おこるを、ときつ風とはいへり』（略解・古義・檜嬬手・美夫君志等諸注釋書同說）。攷證に、『時風なり。こは思ひよらぬ時に、吹來る風をいへる也』。講義に、『これは略契沖のいへる如くなるべきが、意稍異にして、その時に當りて、吹く風の義ならざるべからず。而して相當に著しき風なるべきなり』、『人麿のその航海せる時に當りて吹ける風なるべし』と云つて居る。用例は、卷六（九五八）の、時風應吹成奴香椎潟潮干汭爾玉藻苅而名。卷七（一一五七）の、時風吹麻久不知阿胡之海之朝明之潮爾玉藻苅奈。卷十二（三二〇一）に、時風吹飯乃濱爾出居乍贖命者妹之爲社などである。この例では、時により、週期的に吹くやうな氣持もあり、また機に應ずる風のやうな氣持もある。雲居は既に解いた如く、天のことである。天は雲の居るところだから雲居といふ。卷六（九九八）に、如眉雲居爾所見阿波乃山。卷十一（二五一〇）に、雲居爾毛隱往序等用例が多い。

○奥見者・跡位浪立　オキミレバ・シキナミタチと訓む。沖を見れば頻浪が立ちといふ意。舊訓アトキナミ。代匠記アトクラナミ。新訓トキナミ。考の說は、跡位は敷坐といふ意味の字だから重浪の重に借りて書いたものである。卷十三（三三三五）に、立浪母疎不立跡座浪之立塞道麻。次の（三三三九）に、敷浪乃寄濱邊丹、…腫浪能恐海矣直渉異將等は皆重浪の意で、敷とも腫とも書いたもの

であるといふのである。講義でも大體これを肯定し、なほ跡位、跡座等は、『足を下してそを載する所の義』で、『くつのしき』だからシキの音を借りたのだと云つてゐる。シキは、繁、頻、重などの字に當り、引きつづき立つてくる浪のことである。卷十一（二四二七）に、是川瀨瀨敷浪布布。卷十三（三二五三）に、百重波千重浪敷爾言上爲吾等の例がある。

○邊見者・白浪散動 ヘミレバ・シラナミサワグと訓む。邊見者は舊訓ヘヲミレバ（代匠記・攷證同訓）。童蒙抄ヘタミレバ（考・古義の一訓同說）。檜嬬手ヘミレバ（古義同訓、一訓ヘタミレバ）。白浪散動、舊訓シラナミトヨミ。童蒙抄シラナミサハギ。考シラナミサワグ（略解以下諸書同訓）。古事記上卷に、奧疎神、邊疎神。萬葉卷二（一五三）に、奧放而榜來船、邊附而榜來船、奧津加伊痛勿波禰曾、邊津加伊痛莫波禰曾とあり、なほ祝詞に、奧津藻菜邊津藻菜等とある。散動の訓につき、攷證では、『とよむと、さわぐとは、いとちかく、いづれも古言にて、いづれにても聞ゆるやうなれど、よく／＼考れば、とよむは音につきていひ、さわぐは形につきていふとのわかち也けり』といつた。サワグの方は卷一（五〇）に、其乎取登散和久御民毛。卷六（九二四）に、幾許毛散和口鳥之聲可聞。卷五（八九七）に、五月蠅奈周佐和久兒等遠。卷八（一五二九）に、天河浮津之浪音佐和久奈里。卷十四（三三四九）に、布奈妣等佐和久奈美多都良思母。卷十七（三九五三）に、雁我禰波都可比爾許牟等佐和久良武。同卷（四〇〇六）に、都麻欲夫等須騰理

波佐和久。そのほか、卷六（九二七）に、御獵人得物矢手挾散動而有所見。同卷（九三八）に、鮪釣等海人船散動。卷七（一一八四）に、奥津浪驂乎聞者。卷九（一六九〇）に、阿渡河波者驟鞆。卷七（一二〇七）に、赤石門浪未佐和來。卷九（一七〇四）に、細川瀨波驟祁留などの例がある。攷證に、其等の一部の例につき説明して、『こはさわぐ音を聞といふにて、さわぐといふに、もとより音の意あるにはあらで、形につきていふことなり』といひ、反之、トヨムは純に音に關するものとなし、古事記中卷歌に、美夜比登登余牟。萬葉卷四（五七〇）に、野立鹿毛動而曾鳴。卷八（一四七四）に、霍公鳥鳴令響良武。卷十一（二七〇四）に、山下動逝水之等の例を引き、これらにつき、『皆音につきて、いへるにて、とゞろきひゞく意の言なり』と云つてゐる。なほ、古義に、『佐和久は形に就ても云ひ、音につきても云詞なればなり。驟字は、もはら形につきて云、佐和久なるべし。左傳に、驟顧ニ諸朝ニなどあれば、形につきて云る字なり。されど佐和久といふうへにては、字には、拘はらず、こゝは音につきて云るなり。字鏡に、嗸衆口也、佐和久とあるは、音につきて云るなれば、其意なり。三卷に、旦雲二多頭羽亂、夕霧丹河津者驟、七卷に、鳥自物海二浮居而奥津浪驂乎聞者とよめるなども、皆字には拘はらず、音につきてのみ云るをもおもへ』と云つて居る。なほ此處に、考の、『さやぐはこゑ、さわぐはかたちなり』といふ言をも參考し、卷二（一三三）の、小竹之葉者三山毛淸爾

亂友(ミダレドモ・サワゲドモ)の材料を供すれば、ミダル、サヤグ、サワグ、トヨムが問題になるのである。この精細な分類的研究は後日に讓るとして、大體について云へば、ミダルは視覺に關し聽覺をも交へていい。サヤグ、サワグは聽覺だが視覺を交へてもいい。トヨムは聽覺が主で、時に視覺をも交へ得る。そしてサワグの方は雜音雜響でもかまはぬが、トヨムの方は比較的調和音、或は同一音響の趣である。なほ實際に就ていへば、杜鵑(ホトトギス)、鹿、山彥、鶯等は大體トヨムでサワグではない。山河の音などはサワグ、トヨム兩方使つてゐる。その時の具合によつて違ふ。船から聞こえる群集のこゑは、場合によつてトヨムともサワグともいふ。幾許毛散和口鳥之聲(ココダモサワグトリノコヱ)は群集の小鳥のこゑで單一の鳥ではなく、また視覺の混入をある程度まで許すのである。船人動(フナビトサワグ)などもさうである。雁などは、トヨムともサワグともいふ、これも聲の狀態によつて使分けしてゐる。ミダルとなれば視覺が著しく入つて來、卷十五(三六〇九註歌)の、美太禮氏出見由安麻能都里船(ミダレテイヅミユアマノツリブネ)といふ具合になる。このミダル・サワグのことは既に短歌評釋の時にも觸れたが、機を得て此處にも少しく增補した。

○**行船乃・梶引折而**　ユクフネノ・カヂヒキヲリテと訓む。行く船の櫂(かい)(艕)を撓めつつといふ意。引折(ヒキヲリ)は引きをりといふこと、力漕といふことであらう。卷二十(四三三一)に、大船爾(オホフネニ)、末加伊之(マカイシ)自奴伎(ジヌキ)、安佐奈藝爾(アサナギニ)、可故等登能倍(カコトトノヘ)、由布思保爾(ユフシホニ)、可知比伎乎里(カヂヒキヲリ)、安騰母比弖(アトモヒテ)、許藝由久伎美波(コギユクキミハ)の

例がある。

○彼此之・島者雖多　ヲチコチノ・シマハオホケドと訓む。あちこちその附近に島は多いけれどの意。ヲチコチの例は、巻四（六七四）に、眞玉付彼此兼而。巻六（九二〇）に、百磯城乃大宮人毛越乞爾思自仁思有者。同巻（一三〇〇）に、遠近礒中在白玉。巻十七（三九六二）に、伊母毛勢母和可伎兒等波乎知許知爾。巻十九（四一五四）に、乎知許知爾鳥布美立などである。雖多。舊訓オホカレド。考オホケド。ケドの例は、古事記仁徳條に、久良波斯夜麻波佐賀斯祁杼。萬葉巻五（八〇四）に、伊能知遠志家騰世武周弊母奈斯。巻十七（三九六三）に、多麻伎波流伊乃知乎之家騰勢牟須辨能。なほ、巻六（九四六）に、深見流乃見巻欲跡。巻十（二一四九）に、山邊庭薩雄乃禰良比恐跡などの例がある。

○廬作而見者　イホリシテ（或はイホリテ）ミレバと訓む。舊訓イホリツクリテミレバ。代匠記イホリヲツクリテミレバ。童蒙抄イホリシテミレバ、ヤドリテミレバ。考イホリシテミレバ（攷證・美夫君志・講義同訓）。廬は、和名鈔に、毛詩云農人作廬以便田事（力魚反和名伊保）また、營。唐韻云營余傾反日本紀云（和名伊保利）軍營也とあり。玉篇に、廬（力於切寄也屋舎也）とあり、新撰字鏡には墟にも當ててある。ここの意味は、講義に、『これは既にもいへる如く、古は旅人宿といふものなかりしかば、旅人は至る所の山野海岸などに假廬を作りてやどりしなり。かくの如く假廬をその狹岑の島の荒磯のある邊につくりて見ればといふなり』云々と

あるので大體が分かる。なほ云はば、假廬は行幸などの時には簡單な小屋ぐらゐは造つたとおもふが、普通旅人の假廬には、雨降らぬ時には、樹かげ、石かげ、山の麓等にただ草を敷く程度のものもあつたであらう。雨雪の降つた時には、岩石、林間を利用し、人家あらば、やはり人家を利用したのではあるまいか。そして大體の行程を豫算して部落を目當にして宿つたと考へていいだらう。この歌の場合などは、船が碇泊期間であらうから、岩かげなどに簡單な寐る場處を作つた程度ではなかつただらうか。軍營をイホリと訓ませたのは、野營、假の屋舍の場合が多いからであらう。考で、イホリシテと訓んだのは、この廬作而見者につき宣長眞淵に問うて云。『こゝはいかに訓たまふや、とまりてみれば、いほりしてみれば、などよむべくや、はた上は字のまゝに訓て、見の上に一句半おちたるにや』。眞淵答へて云。『やどりて見れば、とも訓べけれど、猶、いほりしてみればと訓なり。落書ともいひがたし』云々といふ問答にも明かである。然るに、これをイホリテと訓む說がある。久老の槻落葉に、『いほりは、假りに造り設て、旅やどりする家をいふ。庵（イホ）と、いほりは、體用の言にて、宿（ヤド）とやどりに同じ。假りに造り設るよしは、集中の歌にて考しるべし。そが中に、卷ノ二には、廬作而見者（イホリテミレバ）と、作の字をそへ、卷ノ八には、廬入（イホリ）と入の字をも添へて書たり』と云つて、イホリテと動詞に活用せしめてゐる。次いで千蔭の略解もイホリテと動詞にし、檜嬬手・古義・註疏・

新考・新訓・新釋・全釋等それに從つた。そして古義でそれを說明して、『さて廬を作爲るをも、又卽その廬に宿るをも、古は直ちに用言に、イホリ、イホルと云り。ここは廬を作るよしを云るにて、やがてそれに宿る意はおのづからこもれり（岡部氏考に、廬入而を略きいへるなりといへるはひがことなり。十卷に、秋田刈借廬作五百入爲而とあるは、直に宿るをイホラスといへり。イホラスはイホルの伸りたるなり）』と云つて居る。また、藤井高尙の松の落葉卷の一「いほり」の項に、『前略今の世には菴廬のもじをもいほりとよむことなれど、和名抄に此ふたもじは、和名伊保とありて、いほりとはなく日本書紀宣化天皇の卷には遷二都于檜隈廬入野一と見え、萬葉集十の卷の歌には、客乃廬入爾といへるなど、いほりといふにはみな入といふもじをそへてかけるにて、廬はいほにていほりにはあらざることとさだかなり。さていほりといほとのけぢめをさだめいはん。もとは同じ詞にて、いほは體言、いほりはいほのはたらける言なるを（萬葉集の歌に廬入而見者といへり。）又ひとつの體言としていほよりは、ひときざみかろくつかひていほりてをるこゝろもて人のすみかならず、たゞかりそめにつくりてやどる小屋をいへり』と云つて、イホリはイホを動詞にして活用せしめたものだと云つてゐるのは古義の說と同樣である。

萬葉の用例は、卷一（六〇）に、隱爾加氣長妹之廬利爲里計武。卷三（二五〇）に、野島我埼爾伊保

里爲吾等者。卷三（二三五）に、天雲之雷之上爾廬爲流鴨。卷六（九二八）に、物部乃八十伴雄者廬爲而。同卷（一〇一七）に、手向乃山乎今日越而何野邊爾廬將爲吾等。卷七（一四〇八）に、隱口乃泊瀬山爾廬爲云。卷十（一九一八）に、春雨多零客爾也君之廬入西留良武。同卷（二二三五）に、秋田苅客乃廬入爾四具禮零。同卷（二二四八）に、秋田刈借廬作五百入爲而。同卷（二二四九）に、鶴鳴之所聞田井爾五百入爲而。卷十（二二五〇）に、春霞多奈引田居爾廬付而。卷十五（三五九三）に、許藝出而者伊都禮乃思麻爾伊保里世武和禮。同卷（三六〇六）に、野島我左吉爾伊保里須和禮波。同卷（三六二〇）に、比具良之能奈久之麻可氣爾伊保利須流可母等がある。以上はイホリをば名詞（體言）として使つたのは明かであるが、卷六（一〇二九）に、河口之野邊爾廬而夜乃歷者妹之手本師所念鴨の廬而は舊訓イホリテであるのを、攷證で、『文字を餘して、いほりしてと訓べし。二四十二丁に、荒磯面爾、廬作而見者云々ともあるにてしるべし』と云つて、人麿の此歌を例證としてゐる。このイホリを動詞にした例は、かくの如くに尠いのであるから、この『廬而』も字餘りにして、イホリシテと訓むのかも知れない。さすれば、除外例なく、この人麿の歌の、『廬作而見者』も、イホリシテミレバと字餘りに訓むこととなる。併し、槻落葉・略解・古義・松の落葉の說の如くに、動詞（用言）として許せるならば、イホリテとなつて、字餘りとならずに却つて調子が好いのである。そこで、若し、動詞

可能說がもつと有力に證據立てられれば、イホリテの方が好い。それまでは、考や童蒙抄の訓に從つて、イホリシテと訓み、イホリテをも保存して置くのである。校本萬葉を見るに、代匠記初稿本の書入に、三之曰、イホリテミレバとあると註してゐる。これは木瀬三之の說といふことであらうか。なほイホリを用言とすることを可能とするのは、類聚名物考・雅言集覽・倭訓栞・言海・大日本國語辭典等さうである。また、和名鈔に營をイホリと訓んでゐることは前言のとほりであるが、欽明紀の、河邊臣遂引ㇾ兵急營(イホル)二於野一。敏達紀の、乃營(イホリテ)二館於阿斗桑市一、等の營をば、イホルと訓ませてゐるが、上のはイホリスとも訓んで居り、下のはツクリテとも訓んでゐるから、イホルの訓は絕待では無い。また齊明紀の、屯二聚海畔一向ㇾ河而營(イホリス)はイホリスと訓んだ方が好いから、此處も是非イホル、或はイホリヌ等と訓まなくともいいやうである。また、人麿の語の使ひ方はなかなか獨創的な點があるので、聲調の上からイホリテと用言に使つたのかも知れない。さう思へば、イホリテの訓をも保存して置いていいのである。卷二（一八六）の、一日(ヒトヒ)者(ニ)千(ハチ)遍(タビ)參入(マヰリ)之(シ)も動詞の場合で、『入』を活用の方に入れてゐるから、『廬入而見者』の場合も、『廬(イホ)』が語根で、『入(リ)』を活用の方に入れたのだと看做せば、イホリテミレバと訓み得ることとなる。

○敷妙乃・枕爾爲而 シキタヘノ・マクラニナシテと訓む。枕としての意。舊訓マクラニナシテ

（諸書これに從ふ）。童蒙抄マクラニシツツ。新考マクラニシテ（新訓・新釋・新講同訓）。新考に、『マクラニシテとよむべし。ナスはツクリナスにてスといふとは別なればなり』と云つてゐる。私は音調の上から舊訓を取つた。卷十一（二六一五）に、敷栲乃枕卷而（シキタヘノマクラマキテ）。同卷（二五九三）に、敷細枕動而宿不所寢（シキタヘノマクラウゴキテイネラレズ）。卷十三（三三三六）に、奥藻麻枕所爲（オキツモナマクラニナシテ）などの例がある。

○荒床・自伏君之　アラドコト・ヨリフスキミガと訓む。荒床として寄り臥して居るこの旅人がといふ意。荒床は舊訓アラドコトと訓み、考はアラドコニと訓み諸註釋書それに從つたが、講義で舊訓を肯定し、『實際の床をさすか、又形容の語かと見るに、これは事實上さる床をさせるにあらねば、形容の語たること明かなりとす。然るときは、トといふ助詞にて導くを當れりとすべし』と云つた。自伏君之は、舊訓コロフスキミガで諸家これに從つたが、山田博士はこれをヨリフスと訓み、新訓・全釋・新釋・新講等近時の諸書それに從つた。卷十四（三四九〇）に、安都佐由美須惠波余里禰牟（アヅサユミスヱハヨリネム）の例がある。

○欝悒久・待加戀良武　オボホシク・マチカコフラムと訓む。心たよりなく覺束なく待つて居ることであらうといふ意。攷證に『おぼ〳〵しく分明ならざる意にて、かの人の出さりて、かへらざるを、かく失ぬともしらで、おぼつかなく待か戀ふらんとなり』と云つてゐる。欝、欝悒、不明、

不濤などの漢字に當て、卷二（一七五）に、欝悒宮出毛爲鹿作日之隅回乎。卷五（八八七）に、意保々斯久伊豆知武伎提可阿我和可留良武。卷十一（二四四九）に、於保保思久相見子等乎後戀牟鴨などの例がある。なほ萬葉にはオボツカナシの例に、卷八（一四五一）に、春山乃於保束無毛所念可聞。卷十（一八七五）に、夕月夜欝束無裳山陰爾指天といふのがある。對照參考すべきである。

○**愛伎妻等者**　ハシキツマラハと訓む。この旅人の愛する妻はといふ意。舊訓ヲシキツマラハ。代匠記ハシキツマラハ。『今ノ、ハシキハウルハシキ意ナリ』（代匠記）。『はしきはくはしきのくを略きたる言にて、うつくしむことなる故に愛の字を書たり。別記あり』（考）。『人を愛しうつくしむ意の言なり』（攷證）等でその大要が分かる。卷四（六六三）に、鳴鳥之音夏可思吉愛妻之兒。卷二十（四三九七）に、弖里氐多弖流婆波之伎多我都麻などの例がある。次に、妻等者の『等』について、攷證で、『妻等の、等もじは、などといふ意也』と云つて、複數のやうに聞こえるが、『等は助字なり』とも云つてゐるから、實際は攷證でも單數に解して居ることが分かる。實際この『等』は、音調のうへの添辭で、愛情・感情をこめるものの如く、單數に使つてゐる。卷十五（三六九一）に、多良知禰能波波母都末良母。卷二十（四三三一）に、奴婆多麻乃久路加美之伎弖奈我伎氣遠麻知可聞戀牟波之伎都麻良波とあるのは好い參考例である。その歌の都末良、都麻良は複數の意味ではないのである。

なほ、やはり人麿の作、巻二（二一七）の、騰遠依子等(トヲヨルコラ)。同巻（二一八）の、樂浪之志我津子等(ササナミノシガツノコラガ)何の中の『等』が複數を意味しないことが明瞭であり、なほ、巻六（一〇〇〇）の、兒等之有者(コラガアラバ)二人將聞乎(フタリキカムヲ)。巻九（一七九六）の、黄葉之過去子等(モミヂバノスギニシコラト)携(タヅサハリ)等は皆明かに單數のもののみである。この『ラ』の用法はなほ、巻十（二〇七〇）の、君待夜等者(キミマツヨラハ)不明毛有寐鹿(アケズモアラヌカ)の『夜ラ』などでも理會することが出來る。この長歌の場合も、妻知者(ツマシラバ)と單數に云つてゐるのだから、この結句も單數を意味して居るのである。

大意 〔玉藻吉(たまもよし)〕讃岐の國は、國柄が優れてゐるためか、幾ら見ても飽くことがない。また此國は、神柄が貴いためか、まことに貴くおもはれる。天地日月と共に、滿ち足り榮えゆかむ神の御(おん)面(おもて)として、昔から云ひ繼いで來た、那珂(なか)の湊から船を浮べて漕いで來ると、潮時の强風が天空を吹き、沖を見れば、頻波(しきなみ)が立ち、岸邊を見れば白浪が打寄せ騷いで居る。〔鯨魚取(いさなとり)〕海の模樣が恐ろしく、行く船の櫂が撓ふばかりである、この海中に、彼方此方に島は澤山にあるけれども、就中名の麗しい狹岑(さみね)の島の、荒磯の上に假廬して見れば、浪の音の絶えずしてゐる濱邊を〔敷妙乃(しきたへの)〕枕にし、この寂しい磯を荒床として、打臥して人が居る。家郷が知れるなら報知もしように、妻が知つたなら訪ね來るだらうに、〔玉桙之(たまほこの)〕來るべき道さへも分からず、おぼつかなくも待ちこがれて居ることであらう、此人のいとしい妻は。

鑑賞 これは島の荒磯に死んでゐる、一人の行旅者を悼む歌であるが、讃岐國の狹岑の島のことを云ふために、讃岐國を讃めたたへ、天地と共に滿足り行く神の御面だといひ、そこの湊から荒浪を漕いで來て、その島に船泊てて假廬を結んで見ると、そこに死人のゐることを云ひ、それを知らずに待つてゐる家郷の妻に同情して歌を結んでゐる。

この冒頭の事々しいのは、人麿長歌の常套手段とも謂ふことが出來、一種莊嚴な事柄と歌調とで、神々の世からの來歷を敍するのも、今まで評釋して來た長歌にも幾つかあつたものである。これは現代歌人の作歌態度觀からいへば、少し事々しく感ぜられるところであり、伊藤左千夫はじめ、幾人かさういふ批評をしてゐるほどである。

併し、この歌の場合の冒頭の莊重なのは、恐らく當時の人の死者に對する一つの信仰の如きものがあり、死者に對する行爲として、祓ひ(はら)のやうな動機が交つてゐるのかも知れない。それゆゑ、この小島を表はすのに極力尊び稱へて、古事記神話にある飯依比古(イヒヨリヒコ)のこと、その神の御面としての讃岐のことを極力云つてゐるのである。これは必ずしも、悲歎の意を强めようとする手段のみではあるまい。

そして、終の方はいよいよ死人のことを云つてゐるのだが、さういふ現實に接しても、『君』とい

ひ、短歌の方にあるやうに、『寢せる』といつて、敬語を使つてゐるのも、死者に對する當時の人の恐怖に本づく一の信仰と看做すべきもののやうである。

その間に、海の荒浪のことをいひ、湊をいでて漕いでくることをいひ、島がいろいろあるが、狹岑の島が一番いいといふやうなことをも云つてゐる。これも亦同一心理に本づくものである。要するに、神代から目前の現實まで、非空、非實の一構成から成立つてゐるところが注目に價するのである。

そして、大切な結びの情緒になると、『妻知らば來ても問はましを、玉桙の道だに知らず、おぼほしく、待ちか戀ふらむ、愛しき妻らは』といふのに落著いてゐる。この情緒は簡單で變化に乏しく、支那詩文の感想、佛敎經典の無常觀などから見ればいかにも物足りないところがあるに相違ない。併し、その覺官的であり、素朴的であり、人間的であるところがその情緒の特色で、長歌の方では、ただ、『來ても問はましを』と云つてゐるが、短歌の方では、宇波疑（うはぎ）、卽ち嫁菜のことを云つて、『妻もあらば採みてたげまし』と云つてゐるのが、當時の人の地金で、素朴純粹まことに愛すべく、この歌のいいところも亦さういふ點に存じて居り、事々しい架空のやうなことを云つて居りながら、現代の吾等にも眞實のこゑとして響いてくるのは、さういふ人間生活と不可分離の眞實が具備せら

れてゐるからである。

非空、非實と織り交ぜられてゐるが、吟味すれば、やはり寫實から成立つてゐることが分かる。那珂の湊でも、時つ風が雲居に吹くのでも、海波の強いことでも、假廬をしたことでも、荒磯に漂著した死人でも皆實物なのである。實物をばこんな具合にしてあらはしてゐるのである。作歌覺悟の原理は、おのづからこの歌の中に存じてゐるのである。

宇波疑、即ち嫁菜は、私は毎春これを、醬油等で味をつけずひたしにして食ふに、一種の香氣があり、新菊に似たところの芳香性の味がある。人麿時代には、鹽を以て輕く加味するぐらゐにして食つたものであつただらう。

それから、前の歌もさうである如くに、人麿はかういふ歌を作るにも決してぞんざいに取扱つてはゐない。いかにも克明で骨を折つて作つてゐる。同じやうな手法で、幾つも長歌を作り、同じ手法を繰返してゐるやうなところがあつても、常に遒潤敦厚で輕佻浮薄ではない。約めていへば人麿はいつも空に憑つて作歌してゐないといふ證據になるのである。

人麿が旅の途次たまたま此處に來て、この死者を見て感動して咏んだので、その奥底には死靈をはらひ祓ぎしようといふ心持はあつても、必ずしも其處にゐた人々に賴まれて作歌したのではある

まい。人麿を巡遊詩人（高崎正秀氏等の說）だとすると、さういふことも亦可能であるが、これはいまだ考慮の餘地があるから、やはり羇旅中の自發的な作歌として鑑賞する方がいいとおもふのである。

たまもよし　さぬきのくには　くにからか　見れども飽かぬ
かむからか　ここだたふとき
あめつち　ひつきとともに　たりゆかむ　かみのみおもと
つぎきたる　なかのみなとゆ　ふねうけて　わがこぎくれば
ときつかぜ　くもゐにふくに　奥見れば　しき浪たち
邊見れば　白浪さわぐ
いさなとり　うみをかしこみ　ゆくふねの　かぢひきをりて
をちこちの　しまはおほけど　なぐはし　さみねのしまの
ありそもに　廬してみれば　浪の音の　しげきはまべを
敷たへの　まくらになして
あらどこと　より臥すきみが　家知らば　行きてもつげむ
妻知らば　來ても問はましを
たまぼこの　みちだにしらず　おぼほしく　まちかこふらむ
はしきつまらは

聲調が、詰まつてゐるやうに感ぜられるのは、事柄が多いためである。また、いつもの人麿の長歌よりも、割合に枕詞が少く、四つか五つ程であるのに本づくかともおもふ。このことは或意味からいへば、聲調を重厚にしてゐるとも感ぜられるが、前の吉備津采女の歌のやうに、澄んだ細みがこの歌には少い。

併し、のびた歌句が全く無いかといふに、さうでなく『時つかせ雲居に吹くに』あたりで、これは前の、『たまだすき畝火の山に喧く鳥の』とか、『大鳥の羽易の山に吾が戀ふる』などの歌句に相當するので、人麿的な感慨表現の一つである。

吾が榜ぎ來れば、時つ風、雲居に吹くに、奥見れば。

盧して見れば、浪の音の、しげき濱べを、敷たへの。

これがやはり、對的傾向を持つたもので、詰まつた歌句を受けて、長く歎息する歌句を以て續けて居る。『來ても問はましを』と感情を壓搾しておいて、『玉桙の、道だに知らず』と永歎する。『彼此の、島は多けど』と云つて、『名ぐはし、狹岑の島の』と延ばす。これが人麿が一生を通じて用ゐた技法であつた。

『欝悒しく』は、覺束なく、心もとなくなどと口譯して居る。劇甚な感動ではないが、何か心中

に欝結してゐる、不安なやうなこだはりをいふのではなからうか。漢字で欝悒と書いてゐるのもそれを暗指し、新考で、『ウツウツトなり』と云つてゐる如き趣で、ただココロモトナクなどよりも、もつと積極的な苦しいやうな情調で滿たされてゐる趣かも知れない。それが、霧などのオボホシと同じに用ゐられるのも、心持に共通の點があるためだらうが、なかなか吾人にとつて有益な用法の一つである。

参考 卷三(三一五)の大伴旅人の歌に、『み吉野の芳野の宮は山からし貴かるらし川からし清けかるらし天地と長く久しく萬代に變らずあらむいでましの宮』といふのがある。また續日本紀の聖武天皇の御製に、『そらみつ倭の國は可未可良斯たふとくあるらしこの舞見れば』といふのがある。また、卷六(九〇七)の笠金村の歌に、『蜻蛉の宮は神からか貴かるらむ國からか見が欲しからむ』。卷十七(三九八五)の大伴家持の歌に、『神からや許多たふとき山からや見が欲しからむ』といふのがあり、卷五(八八六)の山上憶良の歌に、『歎き臥せらく國にあらば父とり見まし家にあらば母とり見まし世間は斯くのみならし犬じもの道に臥してや命過ぎなむ』といふのがある。卷二十(四三三一)の家持の歌に、『白栲の袖折り反しぬばたまの黒髪敷きて長き日を待ちかも戀ひむ愛しき妻らは』とある。なほ、卷十三(三三三五)に、『玉桙の道行き人はあしひきの山行き野往き直海に川往き渡り鯨魚取り海道に出でて惶きや神の渡は吹く風も和には吹かず立つ浪も凡には立たず跡座浪の立ち塞ふ道を誰が心いとほしとかも直渡りけむ直渡りけむ』。同卷(三三三九)の中に、『重浪の寄する濱邊に高山を隔に置きて汭潭を枕に纏きてうらも無く偃せる君は母父の愛子にもあらむ稚草の妻もあらむと家問へど家道もいはず名を問へど名だにも告らず誰が言をいとほしみかも腫浪の

恐き海を直渉りけむ』があり、反歌（三三四一）に『家人の待つらむものをつれもなき荒磯を纏きて偃せる公かも』があり、兎に角此處に並んでゐる八九首の歌は、人麿のこの狹岑の嶋の歌をおもはしめる。

反歌二首

〔二二一〕妻毛有者　採而多宜麻之　佐美乃山　野上乃宇波疑　過去計良受也

〔二二二〕奥波　來依荒磯乎　色妙乃　枕等卷而　奈世流君香聞

右一六五頁、一六九頁に評釋した。

【巻三・二三九】

やすみしし　吾大王　高光る　わが日の皇子の　馬並めて　み獵立た
せる　弱薦を　獵路の小野に　猪鹿こそは　い匍ひ拜がめ　鶉こそ
い匍ひもとほれ　猪鹿じもの　い匍ひ拜がみ　鶉なす　い匍ひもとほ
り　かしこみと　仕へ奉りて　ひさかたの　天見るごとく　眞十鏡
仰ぎて見れど　春草の　いやめづらしき　わが大王かも

八隅知之　吾大王　高光　吾日乃皇子乃　馬並而　三獵立流　弱薦乎
獵路乃小野爾　十六社者　伊波比拜目　鶉己曾　伊波比回禮　四時自
物　伊波比拜　鶉成　伊波比毛等保理　恐等　仕奉而　久堅乃　天見
如久　眞十鏡　仰而雖見　春草之　益目頬四寸　吾於富吉美可聞

題意　長皇子、遊二獵路池一之時、柿本朝臣人麿作歌一首并短歌といふ題がある。長皇子はナガノミコと申し、天武天皇第四皇子にまします。續日本紀、靈龜元年六月のくだりに、『甲寅一品長親王薨天武天皇第四之皇子也』とある。遊はアソビマスと訓む。この遊獵の場處の獵路池につき、眞淵は『此歌は獵路の池邊のさまなれば』(冠辭考)といつて『池』を認容したが、槻落葉では池を野に改め、『野は私に改つ。さるは、池に遊獵すといふ事のあるべくもあらず。歌にも小野(をぬ)とよみたればなり』と云ひ、略解・檜嬬手・古義等がそれを踏襲したが、攷證で、『さて左の歌には獵路小野(カリヂノヲヌ)と見え、十二に遠津(トホツ)人獵道(ヒトカリヂ)之池爾(ノイケニ)住鳥之(スムトリノ)云々とも見えたれば、この野にも池ありて、野にもいけにも名づけしなるべし。されば久老が考に、この獵路池を強て獵路野と改めしは非なり』と云つて居る。近時の考證にも『池』のことを云々せられてゐるから原文の儘にして置いた。この獵路の所在地については語釋の部に、作歌年代については鑑賞の部に記した。

語釋　**○八隅知之・吾大王・高光・吾日乃皇子乃**　ヤスミシシ・ワガオホキミ・タカヒカル・ワガヒノミコノと訓む。語の一々の解釋は既出の歌で濟んでゐる。ここは皆、長皇子のことを申して居るのである。

○馬並而・三獵立流　ウマナメテ・ミカリタタセルと訓む。馬を並めて御獵に立ち給ふ、御獵を爲たまふといふ意。馬並而は古寫本の訓は、コマナヘテ（神）。コマナメテ（細）。三獵立流の古寫本の訓はミカリニタテル（神）。その他は流布本どほりにミカリニタタルである。代匠記精にミカリタタセルと訓み、諸家それに從つた。卷一（四九）に、人麿作の日雙斯皇子命乃馬副而御獵立師斯時者來向といふのがある。そのほか、卷一（四）に、玉刻春内乃大野爾馬數而。卷六（九二六）に、馬並而御獦曾立爲春之茂野爾。同卷（九四八）に、馬名目而往益里乎待難丹。卷七（一一〇四）に、馬並而三芳野河乎欲見打越來而曾。卷九（一七二〇）に、馬屯而打集越來今日見鶴。卷十七（三九五四）に、馬並底伊射宇知由可奈。卷十九（四二四九）に、馬並始鷹獵太爾不爲哉將別などの例がある。なほミカリの例には、卷六（一〇〇一）に、大夫者御獦爾立之未通女等者赤裳須素引がある。

○弱薦乎　ワカゴモヲと訓む。カリに係る枕詞。流布本の訓ワカクサヲ。管見ワカゴモヲ。童蒙抄ワカカヤヲ。古寫本では既にワカコモと訓んだのがある（神・古）。冠辭考に、『こは菰を苅といひかけしのみにて、小野までにかゝらず。且老ごもは用るに堪ねば、まだわかきほどに苅もの故に、わかごもとはいへり』とある。

○獵路乃小野爾　カリヂノヲヌニと訓む。獵路の小野にである。獵路は現在磯城郡多武峰村大字

鹿路(ろくろ)だといひ、此地は山間の小部落であるが、往古は、範圍がもつとひろく高市村冬野に連る一帶をも稱したものであらう。またここは上古以來吉野に越える要所に當つてゐるから、このあたりで獵をしたものと見える。(大和志・名處考・檜嬬手・古義・新講・地理考・全釋・辰巳・大井氏歌枕考等)第二説は高市郡畝傍町大輕を中心とする輕(かる)の地とする説で(考・槻落葉・地名辭書・攷證・奥野氏志考等)、冠辭考頭注に、『加里と加留と通はしていひし事、又かりぢの池輕の池も、同じてふことも前にいへり』といひ、槻落葉に『鹿路の名の近きによりての押當にはあらぬにや』といひ、地名辭書に、『萬葉集獵路は輕路の假借なり』といひ、奥野氏の大和志考でこの説に同意して、『此説前者より優れたり』と云つてゐる。第三説は宇陀郡榛原(はいばら)町を中心とする盆地で、昔は此處が卽ち獵路の池であつたといふのである。(山田楳吉・辻村精介・伊達市太郎氏等)今にはかに私見で決定しかねるから、かりに鹿路(ろくろ)説に從つて置く。獵の心持を尊重せむがためである。

○十六社者　シシコソハと訓む。鹿猪(しし)はといふ意で、シシは獵の主なる動物、鹿とか猪とかの總稱であることは既に云つたごとくである。それから、十六をシシと訓むのは四四の義訓で、重二、並二をシと訓み、八十一をククと訓むのと同樣で、卷六(九二六)に、朝獵爾十六履起之(アサカリニシシフミオコシ)。卷十三(三二七八)に、高山峯之手折丹射目立十六待如(タカヤマノミネノタヲリニイメタテシシマツゴトク)とあるのも皆同じである。社をコソと訓むのも義訓で、これは既に説明した。卷十二(二九三一)に、夜爾至者吾社湯龜(ヨルニナリナバワレコソユカメ)。卷十一(二六九七)に、惜社布仕能高(ヲシミコソフジノタカ)

嶺之燒乍渡(ネノモエツツワタレ)などの例がある。

○伊波比拜目　イハヒヲロガメと訓む。い這ひ拜(をろが)めで、畏(かしこ)み恐れて這ひ伏すさまを云つて居り、前のコソの係でヲロガメと結んで居る。古鈔本中ヲカマメ（神・細）。フセリメ（温）。舊訓フセラメ。童蒙抄ヲガマメ。玉の小琴ヲロガメ。眞淵全集本の考には一訓ヲロガメとあるのは玉の小琴に據つた後記であらうか。玉の小琴には、單に、『拜目。ヲロガメ』とある。推古紀の歌に、訶之胡彌弖(カシコミテ)伽倍摩都羅武(カヘマツラム)、烏呂餓彌弖菟伽倍摩都羅武(ヲロガミテツカヘマツラム)云々とあり、古事記神武條の、弟宇迦斯(オトウカシ)先參向(マヅマヰムカヒテ)、拜(ヲロガミテ)曰(マウサク)。垂仁條の令拜(ヲロガマシメニ)。因拜(ヲロガムニヨリテ)などがあり、なほ書紀では頓首、頂拜、稽首、再拜、顙致地等と書いてヲロガムと訓ませてゐる。萬葉卷二（一九九）の、鹿自物伊波比伏管(シシジモノイハヒフシツツ)はやはり人麿の用例であり、卷三（三七九）の、十六自物膝折伏(シシジモノヒザヲリフセ)は大伴坂上郎女の作である。

○鶉己曾・伊波比回禮　ウヅラコソ・イハヒモトホレと訓む。鶉は這ひまはりといふ意。伊(イ)は接頭辭。コソで係つてモトホレで結んでゐるのは前との對句である。鶉の如き鳥も飛去ることなく、皇子を敬ひ奉つて、這ひめぐるさまをあらはしたもので、卷二（一九九）でも人麿は同じやうな表現をしてゐるのは、同一歌人の手法である。

○四時自物・伊波比拜・鶉成・伊波比毛等保理　シシジモノ・イハヒヲロガミ・ウヅラナス・イハ

ヒモトホリと訓む。鹿猪の如くに這ひ伏し、鶉の如くに這ひめぐつてといふ意。これは聲調の關係で前の言葉を繰返してゐるのである。自物はノゴトクで既に說明した。伊奴時母能、馬自物、鹿兒自物、鳥自物、鴨自物など皆同樣の用ゐざまである。

○恐等・仕奉而　カシコミト・ツカヘマツリテと訓む。恐れ謹んで奉仕しての意。恐等は古寫本中カシコミト（西、細、温）。流布本カシコシト（代匠記・考同訓）。玉の小琴カシコケド。槻落葉カシコミトを採用し、『卷七に、奥山の岩に苔むしかしこみとゝあり』と云つた。（略解・檜嬬手・古義等同訓）卷六（九六五）に、恐跡振痛袖乎忍而有香聞。卷十一（二五〇八）に、皇祖乃神御門乎懼見等侍從時爾。卷十五（三六四四）に、於保伎美能美許等可之故美於保夫禰能。同卷（三六七三）に、可是布氣婆於吉都思良奈美可之故美等。同卷（三七三〇）に、可思故美等能良受安里思乎等の例があるので、今カシコミトの訓に從つて置いた。然るに攷證では舊訓カシコシトを認容し、『久老はかしこみとゝ訓たれど、そは七卷なる恐常をよみ誤れるより、こゝをも誤れるにて非也』と云つた。萬葉には、カシコシと終止した例があるが、カシコシトといふ假名書の例は無いやうである。併しカシコシトと訓んでも差支は道理上無い筈だが、用例の多少に從へばカシコミトであらうか。

○久堅乃・天見如久　ヒサカタノ・アメミルゴトクと訓む。天空を仰ぎ見る如くといふ意。同じや

うな表現は、卷二（一六八）に、久堅乃天見如久仰見之皇子乃御門之荒卷惜毛といふのがあり、やはり人麿が日並皇子尊殯宮時に作つたものであることを思ふと、發想でも表現でも、同一人にとつてはさう急な變化の出來ないものだといふことも分かり、また他人の模倣しない歌人ならば、おのづから自分のものを繰返して用ゐるやうになるといふことも分かつて興味あるものである。卷二（一九九）にも、天之如振放見乍といふのがやはり人麿の句であり、卷十三（三二四六）の、天有哉月日如吾思有なども同一の手法と謂つていい。

○眞十鏡・仰而雖見　マソカガミ・アフギテミレドと訓む。皇子をば仰ぎ見奉れどもといふ意。幾たび仰ぎ見奉れどといふ意がこもつて居る。眞十鏡は眞淸の鏡といふ意から來て、見にかかる枕詞となつたものである。卷四（五七二）に、眞十鏡見不飽君爾。卷六（一〇六六）に、眞十鏡見宿女乃浦者。卷九（一七九二）に、眞十鏡直目爾不視者。卷十（二〇六六）に、眞十鏡見名淵山者。卷十一（二三六六）に、眞十鏡見之賀登念妹相可聞。同卷（二六三二）に、眞素鏡直二四妹乎不相見者我戀不止。同卷（二五〇九）に、眞祖鏡雖見言哉。卷十九（四二一四）に、眞鏡見禮杼母不飽。卷十三（三二五〇）に、犬馬鏡正目君乎相見天者社などの例がある。そのほか麻蘇鏡、淸鏡、白銅鏡、銅鏡、喚犬追馬鏡、末蘇可我彌、麻蘇可我美などとも書き、淸き月夜、かけて忍ぶ、床の邊、とぎし心、二上山等に冠

らせてゐる。

○春草之・益目頰四寸　ハルクサノ・イヤメヅラシキと訓む。萌出づる春草の見れど飽かずうるはしい如くに、ますます尊くもうるはしいといふ意。春草は古寫本中ハルクサノと訓んだのは古・神・細で他はワカクサノと訓んで居る。流布本ワカクサノ。代匠記精一訓ハルクサノ。童蒙抄・考ワカクサノ。槻落葉ハルクサノ（玉の小琴・略解・古義・檜嬬手等同訓）。槻落葉で、『春草は字のまゝによむべし』と云つたのに對し、攷證では、『久老は、文字のまゝに、はるくさとよむべしといへれど、いかが、そはいかにとなれば、わかくさのつま、若草のにひ手枕、若草の思ひつきにしなどつゞくるもみなめづらしき意もていへるなれば、こゝもわかくさとよむべし』と云つてゐる。枕詞としてのワカクサの用字は若草、青草、稚草、穉草などで春草といふのは無いやうであるし、此處はハルクサと訓んでも意味を破ることがないから、强ひてワカクサと訓まずともいいのであらう。益目頰四寸の益は舊訓マシであるのを童蒙抄でも玉の小琴でも槻落葉でもイヤと訓んだ。考の訓もさうであつたかも知れない。もつとも既に古葉略類聚抄にはイヤと訓んでゐる。メヅラシキは既に人麿に三五月之益目頰染所念之君與（卷二。一九六）とあつたので明かであるが、そのほか、卷三（三七七）に、恒見杼毛目頰四吾君。卷七（一一四六）に、目頰敷人乎吾家爾住吉之。卷八（一五八四）に、希將見跡吾念君者。卷十

（一八八六）に、春花乃益希見君相有香聞。卷十一（二五七五）に、希將見君乎見常衣。同卷（二六五一）に、酢四手雖有己妻許増常目類次吉。卷十九（四一六七）に、毎時爾伊夜目都良之久などの例があり、參考すべきである。語原は目難で種々に意味が分化してゐるのであらうか。

○吾於富吉美可聞　ワガオホキミカモと訓む。吾が大王かも、即ち長皇子かなと讃歎してゐるのである。オホキミも天皇・皇太子・皇子・皇女等に用ゐた例は既に評釋したごとくである。

大意　〔八隅知之〕わが大王〔高光〕わが日の皇子の長皇子が、馬を並べて、獵をせられる〔弱薦乎〕獵路の野に、鹿猪どもは這ひ伏し、鶉等は這ひまはつてゐて、逃げ去ることがない、〔四時自物〕その鹿猪のひれ伏し拜するごとく、〔鶉成〕鶉の這ひめぐるごとく、吾等もおそれ謹みて仕へ奉つて、〔久堅乃〕天をあふぎ見るごとくに、〔眞十鏡〕皇子をあふぎ見奉るけれども、〔春草之〕春の若草のごとくいよいよありがたくうるはしく、めづらしく見えたまふことである、われ等が長皇子さまは。といふぐらゐの歌である。

鑑賞　語釋の條で既に云つた如く、皇子のことを、八隅しし吾大王、高光る吾が日の皇子と云つて居る。これは前の歌の時にも數回云つたが、二たび注意していい表現である。

次にこの歌は、日並皇子或は高市皇子殯宮時の歌などに較べて短い。この歌は恐らく、前以て考

へてゐたものでなく、長皇子遊獵に供奉して、その場で作歌して奉つたものではなからうかとおもへる。

從つて氣も樂々として居り、そんなに苦心して骨折つてゐるやうには見えない。また、『わが日の皇子の馬並めてみ獵立たせる』の句は、既に、人麿に、『日並の皇子の尊の馬竝めて御獵立たしし時は來向ふ』（卷一。四九）の歌があり、『ひさかたの天見るごとく眞十鏡仰ぎて見れど』といふやうな句も、高市皇子殯宮時の歌（卷二。一九九）の、『天の如ふり放け見つつ玉襷』云云といふのに既にあり、『猪鹿じものい匍ひ拜がみ鶉なすい匍ひもとほり』の句も、やはり高市皇子殯宮時の歌に、『鹿じものい匍ひ伏しつつぬばたまの夕に至れば大殿をふり放け見つつ鶉なすい匍ひもとほり』云云とあるのだから、人麿はこの遊獵に際して卽座に從來の手法、常套手段を用ゐて、一氣に樂々と作つたものと想像することが出來る。併しこの常套手段もひとからの借物でなく、自分で築きあげた力量なのだから人麿にとつて毫も恥とするに當らない。のみならず、吾々にとつては人麿の如き多力者でもかういふことのあるといふことは大に有益でもあり勵みにもなるとおもふのである。

そして、この『猪鹿こそはい匍ひ拜がめ鶉こそい匍ひもとほれ』の句は、高市皇子殯宮時の歌の場合よりも、遊獵時の歌であるだけ却つて適切であるから、人麿は一定の年月を費して溜めて置い

た力量で、これらの表現をなし得たのかも知れない。高市皇子殯宮時の歌とこの歌とどちらが先かといふに、その事は斷定出來ないが、私は文武天皇の三年にこの歌を排列して置いたのは、土屋氏萬葉集年表の、『文武三年と見ゆる(二三八)の歌につづき其後には文武三年薨去の弓削皇子の歌(二四二)あればおそらく文武三年の作なるべし』に據つたものであるが、さうすれば高市皇子殯宮時の歌と數年を隔てるわけであるが、或はその距離をもつと短縮して相前後した歌と想像してもかまはない。

次に、『い徊ひもとほり』といふ句も、古事記神武天皇の條に、『神風の伊勢の海の大石にはひ廻ほろふ細螺のいはひ廻ほり撃ちてしやまむ』といふのがあり、鹿猪の歌には、雄略天皇(泊瀬朝倉宮)の條に、『み吉野の小室が岳に志斯布須登(鹿猪伏と)誰ぞ大前に申す安見しし我が大君の斯志麻都登(鹿猪待と)呉床にいまし』云云といふのがあり、また『百敷城の大宮人は宇豆良登理(鶉鳥)領巾取懸けて』云云といふのがある。これらも、人麿の歌の發育史の研究のうへに何かの參考となるとおもふ。

以上の如くであり、なほ、この短い長歌の中にあつて、『やすみしし』、『高光る』、『わか薦を』、『ひさ方の』、『眞十鏡』といふ五つの枕詞があり、なほ說によつては、『春草の』、『猪鹿じもの』、『鶉なす』も枕詞となるのであるから、その數が相待上なかなか多いと云はねばならない。人麿は

技巧上意識してそれを使つてゐるのである。また、さういふ枕詞の多いことのみならず、『やすみししワガ大王高ひかるワガ日の皇子』といふ具合にワガを繰返したり、『アメ見るごとく眞十鏡アフぎて見れど』といふ具合にアの音を繰返したり、對句と繰返しと枕詞と、誠に餘計なことのみを爲してゐるやうにおもはれる。

けれども、さういふ穿鑿的剖析に本づかずに、ただ幾たびも吟誦してゐると、この歌の技巧といふものは、そんなにうるさくは感ぜられない。讀んで浮ぶ寫象はおつとりとした或る形態のごときものである。これはこの歌の制作動機が然らしめるもので、人麿の妻を悼む歌とか吉備津娘子を悼む歌などとちがふ所以である。いづれにしてもさういふ關係上この歌は人麿の作中にあつて上乘のものとは謂はれないであらう。

長皇子は歌人におはし、『暮に逢ひて朝面なみ名張にか日ながき妹が廬せりけむ』（巻一、六〇）。『秋さらば今も見るごと妻ごひに鹿鳴かむ山ぞ高野原のうへ』（巻一。八四）などの歌をお詠みになつて居り、人麿のこの作歌當時は二十五六歳で、お若いが歌をお好みになり、人麿の歌をも相當に理會なされたこととおもふのである。

反歌一首

【二四〇】久堅乃　天歸月乎　網爾刺　我大王者　蓋爾爲有

右一九五頁に評釋した。

或本反歌一首

【二四一】皇者　神爾之坐者　眞木之立　荒山中爾　海成可聞

右二〇〇頁に評釋了。

○

【巻三・二六一】

やすみしし　吾大王（わがおほきみ）　高耀る（たかひかる）　日の皇子（ひのみこ）　敷（し）きませる　大殿（おほとの）の上（うへ）に
ひさかたの　天傳（あまづた）ひ來（く）る　雪（ゆき）じもの　往（ゆ）きかよひつつ　いや常世（とこよ）まで
八隅知之　吾大王　高輝　日之皇子　茂座　大殿於　久方　天傳來
白雪仕物　往來乍　益及常世

題意　柿本朝臣人麻呂、獻二新田部皇子一歌一首并短歌といふ題がある。新田部皇子（ニヒタベノミコ）は天武天皇第七の皇子で、生年月は審でない。天平七年に薨ぜられた。天武天皇紀に、次ニ夫人氷上（ヒガミノ）娘弟五百重（イホヘ）娘、生二新田部皇子一。續日本紀に、文武天皇四年正月丁巳、授二新田部皇子淨廣貳一云云。慶雲元年正月丁酉、三品新田部親王、益二封一百戸一云云。和銅七年正月壬戌、二品新田部親王、益二封二百戸一云云。養老三年十月辛丑、詔曰、舍人新田部二親王、百世松桂、本枝合二於昭穆一、萬雉城石、維磐

重二平國家一（中略）其賜二一品新田部親王内舍人二人大舍人四人衞士二十人一、益二封五百戸一、通レ前一千五百戸云云。四年八月甲申、詔、知二五衞及授刀舍人事一云云。神龜元年二月甲午、授二一品一云云。天平三年十一月丁卯、始置二畿内惣管諸道鎭撫使一、以二一品新田部親王一、爲二大惣管一云云。七年九月壬午、一品新田部親王薨、親王天渟中原瀛眞人天皇之第七皇子也云云とある。どういふ時、どういふ意味でこの歌を獻つたかについては、童蒙抄に、『新田の皇子の方へ、雪の降ける日、人丸參り合てよみて奉れると聞えたり。されば反歌にその意あらはれたり。よりて此長歌の雪じものとよみ出たる義も、その當然の實事をよめる歌と聞ゆる也（中略）到て祝讃し奉れる歌なるべし』といひ、攷證に、『さてこの皇子に歌を獻れるは、何のよしにてかしられざれど、右の歌もて思ふに、八釣山に大殿を作り給ひしをり奉れるなるべし』と云つてゐるのを參攷すべきである。

語釋 **○八隅知之・吾大王・高輝・日之皇子**　ヤスミシシ・ワガオホキミ・タカヒカル（テラス）・ヒノミコと訓む。新田部皇子のことを敬讃するのでかういふ表現を取つた。高輝は古寫本中タカテル（神）。タカクテル（細）等でタカテラスと記入したものがある。流布本タカテラス。代匠記初書入タカヒカルヒノヒコミコノ。考タカヒカルヒノミコ（略解・槻落葉・古義・檜嫣手等多く之に從つた）。私も其に從つて訓んだが、これは既に前にも説明したやうに、タカテラスと訓んでも差支ないのである。前（卷一。四五等）

の歌の例にならへば人麿はタカテラスと訓ませたのかも知れないが、今回はタカヒカルとして置く。古事記に多迦比迦流比能美古（タカヒカルヒノミコ）の例がある。

○**茂座**　シキマセルと訓む。領したまふといふ意。古寫本中シキイマスと訓んだ(西・温)ものがある。流布本訓シゲクマス。童蒙抄サカエマス。代匠記初シキマセル(諸書之に從つた)。『しげくますはあやまれり。しきませるとよむべし』(代匠記初)。『敷の誤ならんかといふ説もさる事なれど、言の同しかれば敷の言に借て書なり』(考)。『敷座の借字也』(玉の小琴)。『舊訓しげくますと訓るは、いふにもたらぬ誤りにて、茂はしげき意なれば借字して茂座とはかけるにて、敷座と書るに同じく、敷座は知り領します意にて、大殿を知り領しますと申す也』(攷證)等の諸家の言にてその要領を知ることが出來る。

○**大殿於**　オホトノノウヘニと訓む。大殿の上にで、新田部皇子の矢釣の御家殿にといふことになる。舊訓ホホトノ〱ウヘニ。代匠記精でオホトノノウヘハ。童蒙抄オホミアラカノウヘニ。考オホトノノベニ。『大殿ヲホホトノヽト點ゼルハ書生ノ誤ナリ。オホトノヽト改タムベシ。此大殿トイヘルハ、反歌ニヨルニ矢釣山ノ山本ニアル親王ノ宮ナルベシ』(代匠記精)『於をうへと訓は集中に多し』(考)。古寫本中、神田本はオホキミトノと訓み、漢字の左に朱でオホトノノウヘニと書きあ

り、西・温・矢等はオホトノノウヘニと訓んで居る。

○久方・天傳來　ヒサカタノ・アマヅタヒクルと訓む。空から降つて來るといふ意。舊訓アマツタヒコシ。考でアマヅタヒクルと訓み諸家これに從つた。古寫本中ソラツタヘクル(神)。アマツタヘコシ(細)等の訓がある。契沖が、『天傳來自ハ、天傳ハ日ノ異名ナリ。第二ニ天傳入日刺奴禮トアルニ付テ注セシガ如シ。凡第二第七第十三第十七、今ト五處ニ天傳ト云ヘルハ皆日ニ付ル詞ナリ。來自ハ不來ナリ。山ニ礙ラレテ、日影ノアタラジトナリ。然レバ於ノ字ノ點ヲ、ウヘハト改タムベシ』(代匠記精)と云つてゐるのは少し思案し過ぎたもので、『そらより流れ來るを云』(考)。『雪は空よりふり來るものなれば、霜雪雨の冠句に多くかくよめる也』(童蒙抄)などの方が簡單で却つて正しい。

○白雪仕物　ユキジモノと訓む。雪のことである。流布本自雪仕物とあるが、古寫本中白(類・神・細・無)とあるから改めた。續日本紀神龜六年八月詔に、恐古士物進退匍匐廻保理(カシコジモノシジマヒハラハヒモトホリ)。天平勝寶元年七月詔に、畏自物受賜理(カシコジモノウケタマハリ)などがあり、ただ添へていふのである。或は、『雪などのごとく』といふ意が籠つてゐると看做してもいい。そして、ユキじもの、ユキかよひつつと續けた句法で、類音で連續せしめてゐる。形式からいへば序詞であるが、實際雪が降つてゐる光景であることを念頭に置いて味ふべきである。

○往來乍　ユキカヨヒツツと訓む。行き通ひつつ、卽ち皇子が行き通ひ給ひつつの意となる。此處は往來乍益及常世とあるので、難訓の一つで、舊訓ユキキツツマセで、代匠記も考も同訓。童蒙抄ユキキツツマスと訓んで、『ゆきゝつゝますとは、人丸の當然行き通ふ事によみなして、扨多くの人の遠近となく天より雪のみあらかの上にふりつむ如く、みこを尊み慕ふて、行きかふ人のますと云事』（童蒙抄）と說明したのを、槻落葉でユキカヨヒツツと訓み、『この宮所は八釣山（ヤツリヤマ）のほとりに新に造らししとみえたり。そこに行ｷかよひつゝませとなり』と云つた。この訓に古義・檜嬬手等の諸書が從つてゐる。

○益及常世　イヤトコヨマデ（註疏の訓）と訓む。ますます永久までにの意。舊訓トコヨナルマデで、益を上に附けてマセと訓んだから、及常世をばさう訓んだのである。童蒙抄トキハナルヨト。考ヨロヅヨマデニ（常は萬の誤。攷證同訓）。槻落葉イヤシキイマセ（常は座の誤。古義・檜嬬手・新考等同訓）。『益をいやとよむ例は既にいへり。座を今本常に誤れるは、草の手の似たればなり。卷十八ノに、わがせこが琴とるなへに常人（ツネヒト）のいふなげきしもいやしきますも。卷二十ノに、あらたしき年の始の初春のけふ降雪はいやしけよごと、などある結句のさまこゝによく似たり。いませは卷五ノに、都知奈良婆（ツチナラバ）大王伊麻周（オホキミイマス）と見え、卷十九に天地爾（アメツチニ）足之照而（タラハシテリテ）吾大皇（ワゴオホキミ）しきませ婆かもたぬしき小里（チサト）とあるしきませ婆に同じ。及（シキ）と書るは假字（カナ）。

敷いませ也。』(槻落葉)。『久老の訓によるべし。イヤシキイマセは彌敷座にてシキイマセは上なるシキイマスと照應せるなり。雅澄がイヤシキは彌重なりといへるは非なり』(新考)と云つた。これに就いて攷證は舊訓を認容し、『さて久老はこの益を次の句へつけて、益及座世と文字をも改めて訓りしかど、例の古書を改むるの僻なればとらず』(攷證)と云つてゐる。然るに註疏でこれをイヤトコヨマデと訓み、新訓もそれに從つた。『故に芳樹はユキカヨヒツツイヤトコヨマデと訓て、常世は萬代といはむもおなじければ、久しくいつまでもましませと云意なるべくおぼゆ。記に、儛するをみな登許余爾母加母とあるも、萬世まで若くてあれかしとよみたまへるなればここに同じ』(註疏)。トコヨは、萬世と常世の國と二とほりの意味あることがこれで大體わかるが、なほ攷證を引けば次の如くである。『常世といふに二つあり。一つは常世の國をいひ、今一つは文字の如く常とはにしてかはらぬ世といふ意に用ひたり。こゝなるも常とはにかはらで、久しくなれるまでにといふ意にて、常世なるまでとはいへり。そは、書紀神功紀に、區之能伽瀰等虛豫珥伊麻輸云々。本集一廿二丁に、我國者常世爾成牟云々。此卷五十二丁に、天木香樹者常世有跡見之人曾奈吉云々などあるは、常とはにかはらぬをいふなれば、これらにても思ふべし』(攷證)。次に、『及』をマデと訓む例は、卷九(一七四〇)に、及七日家爾毛不來而。同卷(一七四七)に、客去君之及還來。卷十(二〇〇九)に、袖振所

見都及雲隱。卷十二（二八四六）に、白細布衣不脱及直相などによつて明かである。

大意 〔八隅知之〕吾が大王、〔高輝〕日の皇子、新田部皇子の、領したまへる、八釣山の宮殿に、〔久方〕空から白雪が斯くもやまず降るごとく、やまずお通ひになつて、永久にお榮えたまふことであらう。或はさうあれかし。といふほどの大意である。

鑑賞 飛鳥の八釣山（現在飛鳥村八釣）の麓或は中腹あたりに新田部皇子の御殿（別莊）があつて、皇子が藤原都あたりからお通ひになるのに人麿も供奉して來、あだかも雪がさかんに降る朝であつたその時に、獻つた歌だと大體想像し得る。

そして人麿のこれまでの長歌に比して短くて簡潔である。併し短くとも、依然として、『やすみしし、わが大王、高輝る、日の皇子』といふ常套句を用ゐるほかに、枕詞さへ用ゐてゐるのであるから、實質的な句といへば、『敷きませる大殿の上に』とか、『往きかよひつつ、いや常世まで』ぐらゐなものになるのである。それに、實際から來てはゐるが、序詞のやうな形としての、『天傳ひくる、雪じもの』といふ句が入つて居るのである。

然かも一首として見れば、誠に簡潔を極めた、毫末も無駄のない、渾一體として受納れねばならぬものとなつて居る。高調にして質實であり、古簡のうちに淨妙がある。つまり、『ひさかたの、天

傳（づた）ひ來る、雪じもの』といふ句だけでも、實に何ともいへぬ高いもので、ほかの萬葉の天傳日笠（アマヅタフヒガサノ）浦（ウラニ）。天傳日能久禮由氣婆（アマヅタフヒノクレユケバ）。天傳入日刺奴禮（アマヅタフイリヒサシヌレ）などの用例以外にアマヅタヒクルと變化せしめて此處に一つの言語表現の世界を創造してゐるのも注意すべきで、かういふ變化は、サニヅラフといふ枕詞が、妹、君、色、紐、黄葉、大王などと變化して冠らせるやうになるのと趣が似て居り、枕詞を動詞として用ゐる如き一見些細な變化でも、やはり言語表現の一の創造と看做していいのである。

この長歌は短いが、やはり長歌の特色を沒却せずに、短歌に見られない聲調を有つて居り、雄大な長歌をも作り得る氣魄を惜しみつつ、一見無造作に見えるが、複雜を籠めてしまつたところにこの歌の價値があるのではなからうか。

私は前からも、また現在も、この歌を愛しこの歌を尊敬して居り、同時に反歌一首をも尊敬して居ることは既に短歌の部で言及したごとくである。

人麿は高市皇子尊殯宮時の歌の如き長大なものを作ると共に、この歌の如き短いものをも作つて居る。そして簡極高極の效果を成し遂げてゐるのは彼の作歌態度の眞氣に本づくものだといふことは既にくどい程云つてしまつた。けれども善言は繰返しても邪魔にならぬものだから、敢て此處でもいふのである。

反歌一首

【二六二】矢釣山　木立不見　落亂　雪驪　朝樂毛

右二七四頁に評釋了。ユキニコマウツ。ユキニウマナムル等に從つたが、卷十七（三九五四）に、馬並底伊射宇知由可奈思夫多爾能伎欲吉伊蘇末爾與須流奈彌見爾といふのがあり、ウマウツといふのが參考になるだらう。

【巻九・一七六二】

三諸の　神奈備山に　立ち向ふ　三垣の山に　秋萩の　妻をまかむと　朝月夜　明けまく惜しみ　あしひきの　山びことよめ　喚び立て鳴くも

三諸之　神邊山爾　立向　三垣乃山爾　秋芽子之　妻卷六跡　朝月夜　明卷鴦視　足日木乃　山響令動　喚立鳴毛

題意　この歌は巻九の、詠鳴鹿歌一首幷短歌といふ題があつて作者不明のものであるが、右件歌或云、柿本朝臣人麻呂作とあるので、人麿に一定の關係を有つこととなるのである。

語釋　**○三諸之・神邊山爾**　ミモロノ・カムナビヤマニと訓む。三諸の神奈備山、即ちここは飛鳥の神奈備山（雷岳）のことであらう。古寫本中ミツモロノ・カミヘノヤマニ（元・神）と訓んで

ゐたのを、仙覺が、『此句古點ニハ、ミムロナルカミノヘヤマニト點ズ。ミムロノカミノヘヤマイマダキキヲヨバズ。オボツカナシ。ヨリテ和換云、ミムロノカミナビヤマトイフベシ。』と云つて訓み換へた。それをカムナビヤマと訓んだのは古義だが、既に評釋した他の歌で諸注釋書がさう訓んで居ることは前に記したごとくである。

○立向・三垣乃山爾　タチムカフ・ミガキノヤマニと訓む。神奈備山と相對して居る三垣の山にである。立向は舊訓タチムカヒであつたのを、代匠記初稿本でタチムカフと訓んだ。この三垣の山は神奈備山の近くにある山らしいが未詳である。鴻巣氏の全釋では、『神南備山の御垣をなす山の意か。位置を以て推すに甘樫の岡か』といひ、奥野氏の大和志考には、『恐らく三垣は山の形容に過ぎざるべし』と云つてゐる。推するに、御垣をなす山といふ考は當つてゐるらしく、さすれば、あの邊の小山をいふものと見て差支がないやうである。ゆゑに甘樫の岡も含まつて居るのだかも知れない。代匠記初稿本に、『三垣山とて、神なび山にむかへる山の有なるべし。それを神なび山は神のます山なれば、いがきにたとへて、名はおふせけるにこそ』とある。

○秋芽子之・妻巻六跡　アキハギノ・ツマヲマカムトと訓む。秋萩をば妻として添寢をしようといふ意。卷八（一五四一）に、吾岳爾棹牡鹿來鳴先芽子之花嬬問爾來鳴棹牡鹿。卷九（一七九〇）に、秋

芽子乎妻問鹿許曾一子二子持有跡五十戸などの例があるのを見ても分かるやうに、鹿は萩原を臥處とするところからかういふ表現が出て來たものであらうか。然るに代匠記精撰本に、『是ハ芽子ヲ鹿ノ妻トヨメルニハ替リテ秋芽子ノ如クメヅラシキ妻ヲ卷寢ムト、云ナリ』と云つてゐるのは奈何であらうか。古義に、『秋芽子之妻とは、鹿は萩原にむつれてよく鳴ものなれば、萩を妻と云り。今は鹿のまことの妻を、なぞらへていへるなり』と云つてゐるのは、代匠記初稿本の文に據つたやうに見える。おもふに、此處は萩が妻であり、牝鹿の寫象が無くて濟ませてゐるやうにおもへる。つまり二つが別々でない狀態として感じてゐるのである。それだから、『秋萩の』といふのは、『妻』に係る枕詞でもなければ、比喩でもないのである。此處の關係を從來明快に解釋し得なかつたために、井上博士の如く、『よりて更に思ふにアキハギノと妻ヲマカムトとの間にサキノサカリニ、サヲシカノなどいふ二句のおちたるならむ』(新考)と云ひ、本居宣長の如く、『六跡二字は鹿の一字の誤れるならん。ツママクシカノとよむべし』(略解)などと云ふやうになるのである。よつて、此處は、『萩を鹿の妻と言ふ』(略解)やうに平凡に解していいのである。

○朝月夜・明巻鴦視　アサヅクヨ・アケマクヲシミと訓む。朝月夜明けまく惜しみ、夜の明けるのを惜しんでといふ意味になる。朝月夜は曉の月卽ち在明月のことであるが、既に枕詞になつて、

『明く』につづけてゐるのである。卷一（七九）に、我宿有衣乃上從朝月夜淸爾見者とあるのも、曉にある殘月といふ意味よりも、『淸かに』につづける枕詞化して居る例である。卷九（一六九三）に、玉匣開卷惜恡夜矣といふ例がある。

○山響令動・喚立鳴毛　ヤマビコトヨメ・ヨビタテナクモと訓む。山彦を響ませて、相手を喚びおこすやうに切に鳴くといふ意である。トヨメは此處は下二段に活用した。卷六（一〇五〇）に、左男鹿者妻呼令響とあるのは好い例である。なほ、卷十五（三六八〇）に、安之比奇能山妣故等余米佐乎思賀奈君母。卷十九（四一八〇）に、足檜木乃山呼等余米左夜中爾鳴霍公鳥などの例があり、ヨビタツの例は、卷七（一一六二）に、妻唱立而邊近著毛。卷八（一五五〇）に、秋芽子之落乃亂爾呼立而。卷九（一七八〇）に、三船子呼阿騰母比立而喚立而三船出者。卷十一（二八〇三）に、里中爾鳴奈流雞之喚立而甚者不鳴。卷二十（四三二〇）に、麻須良男乃欲妣多天思加婆などの例があり、互に呼かはす、急立つ、促す、誘ふなどの語感を有つて居る。

大意　三諸の神奈備山（卽ち飛鳥の雷岳）と相むかひ合つてゐる三垣山で、牡鹿が萩の花妻と共に添寢をしようと、（朝月夜）夜の明けるのを惜しんで、（足日木乃）山こだまを響かせつつ、妻をば喚び促しつつ鳴いて居る。といふぐらゐな意味である。妻は萩の花と牝鹿と一しよに融合してゐる

感じだから、科學的に穿鑿せぬがいい。

鑑賞 短い長歌で、從つて內容も單純であるが、古調のいいところがあつて棄てがたい。ただ人麿の作としては稍安易であり、一般化してゐる傾向の歌である。眞淵の考で、『今本こゝに右件歌或云柿本朝臣人麻呂作とあるは、時代のしらべあるとも歌のことしらぬ後世人のひがわざなり。此あつめ主家持卿のしらべには近きものをよてすてつ』と云つてある。つまり眞淵の意見では、この歌は人麿よりも後で、寧ろ家持の歌調に近いといふのであらう。餘り短いので人麿的特徵はよく出てゐないが、縱しんば人麿でも氣樂に作れば、この程度のものをも作ることとなるから、そのへんは絕待には片付けてしまはれない。よつて今は左註をも尊重して此處に評釋したのである。

反　歌

【一七六二】明日之夕（アスノヨヒ）　不相有八方（アハザラメヤモ）　足日木之（アシヒキノ）　山彥令動（ヤマビコトヨメ）　喚立哭毛（ヨビタテナクモ）

右三七九頁に評釋了。

【巻三・四二三】

○

つぬさはふ　磐余の道を　朝さらず　行きけむ人の　おもひつつ　通ひけまくは　霍公鳥　鳴く五月は　菖蒲　花橘を　玉に貫き（一に云ふ、貫き交へ）　延ふ葛　蘰にせむと　九月の　時雨の時は　黄葉を　折り挿頭さむと　延ふ葛の　いや遠永く（一に云ふ、葛の根のいや遠長に）　萬世に　絶えじと念ひて（一に云ふ、大船の思ひたのみて）　通ひけむ　君をば明日ゆ（一に云ふ、君を明日ゆか）　外にかも見む

角障經　石村之道乎　朝不離　將歸人乃　念乍　通計萬口波　霍公鳥　鳴五月者　菖蒲　花橘乎　玉爾貫（一云貫交）　蘰爾將爲登　九月能　四具禮能時者　黄葉乎　折挿頭跡　延葛乃　彌遠永（一云田葛根乃彌遠長尓）　萬世爾　不絶等念而（一云大船之念憑而）　將通　君乎婆　明日從（一云君乎從明日香）　外爾可聞見牟

題意 同石田王卒之時、山前王、哀傷作歌一首とある。石田王は傳記不明であるが、攷證に、『この王は藤原宮のころの人なるべし。しかいふよしは、この次の山前王の長歌に、石村之道乎朝不離將歸人乃とあるにて、この王の家、磐余のほとりにありて、藤原の京へ、朝毎に出仕せられし事しらる』と云つてゐる。山前王は代匠記で訓んでゐる如くヤマクマであらう。クマと訓む例は、萬葉十三（三二四〇）に、道前八十阿每。和名鈔鄕名に大和國高市郡檜前（比乃久末）。但馬氣多郡樂前（佐々乃久萬）がある。山前王は天武天皇の皇子忍壁親王の御子である。續日本紀文武紀に、慶雲二年十二月癸酉、無位山前王授從四位下。養老七年十二月辛亥、散位從四位下山前王卒云々。天平寶字五年三月己酉、芽原王坐以刀殺人。賜姓龍田眞人、流多褹島。芽原王者、三品忍壁親王之孫、從四位下山前王之男云々。また懷風藻に從四位下刑部卿山前王、五言侍宴一首。至德洽乾坤、淸化朗嘉辰、四海既無爲、九域正淸淳、元首壽千歲、股肱頌三春、優優沐恩者、誰不仰芳塵が載つてゐる。

さて右の如くに、山前王の歌と明記してある歌であるが、左註に、『右一首、或云、柿本朝臣人麻呂作』とあるので、問題となるのだが、代匠記は、ただ、『異說ヲ注セリ』と云つたが、考の頭注には、『人麻呂の歌しらぬものの注なり。次の或本の反歌は人麻呂の歌に似たり。此長歌は調もいまだ

しきをや』と云つた。併し、古くから人麿の作だと言傳へられたものと見える。また、石田王が藤原宮の頃の人とせば、人麿の手がかかつてゐるので、さういふ言傳があつたのかも知れない。

眞淵が、『却つて此二首こそはいさゝか人麻呂に似たる事はあれ』と云つた或本反歌二首といふのは、隱口乃泊瀬越女我手二纏在玉者亂而有不言八方（四二四）。河風寒長谷乎歎乍公之阿流久爾似人母逢耶（四二五）である。

鑑賞 この一首はいままでの人麿の長歌を標準として見れば、少し細か過ぎるやうで、『菖蒲花橘を玉に貫き縵にせむと』あたりも、手法がちがふやうである。さう剖析して見てゆくと、巧でない個處が目について來るので、恐らく人麿自身の作ではあるまいとおもふ。

この歌に人麿が手を入れたとせば、この歌の前の石田王の卒せし時丹生王の作つた歌の方が餘計に人麿の手が入つてゐるのかも知れない。『齋き坐すと、玉梓の、人ぞ言ひつる、妖言か、吾が聞きつる、枉言か、我が聞きつるも』あたりの調子は人麿の語氣といはば云はれないこともないやうにも思へる。併しよく吟味するときに、やはり調べがもろく、拙いところが目につくので、これも人麿自身の作でないやうに思つて鑑賞して來た。

併し、人麿の補助手法が這入つて居るとせば、『高山の巖の上に坐せつるかも』とか、『高山の巖

の上に君が臥せる』あたりのいひあらはし方は、人麿の、『鴨山の巖根しまけるわれをかも』を理會するに、好例であること既に鴨山考の中で云つたごとくである。

附錄

○

藤原宮之役民作歌

【巻一・五〇】

やすみしし　わが大王　高照す　日の皇子　荒妙の　藤原がうへに食國を　見し給はむと　都宮は　高知らさむと　神ながら　思ほすなべに　天地も　依りてあれこそ　磐走る　淡海の國の　衣手の　田上山の　眞木さく　檜の嬬手を　もののふの　八十氏川に　玉藻なす浮べ流せれ　其を取ると　さわぐ御民も　家忘れ　身もたな不知　鴨じもの　水に浮きゐて　吾が作る　日の御門に　知らぬ國　依り巨勢路より　我が國は　常世にならむ　圖負へる　神龜も　新代と　いづみの河に　持ち越せる　眞木の嬬手を　百足らず　筏に作り　泝すらむ　勤はく見れば　神ながらならし

八隅知之　吾大王　高照　日之皇子　荒妙乃　藤原我宇倍爾　食國乎
賣之賜牟登　都宮者　高所知武等　神長柄　所念奈戸二　天地毛　縁
而有許曾　磐走　淡海乃國之　衣手能　田上山之　眞木佐苦　檜乃嬬
手乎　物乃布能　八十氏河爾　玉藻成　浮倍流禮　其乎取登　散和久
御民毛　家忘　身毛多奈不知　鴨自物　水爾浮居而　吾作　日之御門
爾　不知國　依巨勢路從　我國者　常世爾成牟　圖負留　神龜毛　新
代登　泉乃河爾　持越流　眞木乃都麻手乎　百不足　五十日太爾作
泝須良牟　伊蘇波久見者　神隨爾有之

右日本紀曰朱鳥七年癸巳秋八月幸藤原宮地八年甲午春正月幸藤原宮冬十二月庚戌朔乙卯遷居藤原宮

題意　藤原宮は持統・文武の皇居で、持統天皇紀に、四年冬十月甲辰朔、壬申、高市皇子觀二藤原宮地一公卿百寮從焉。十二月癸卯朔、辛酉、天皇幸二藤原一觀二宮地一公卿百寮皆從焉。六年五月乙丑

朔、丁亥、遣二淨廣肆難波ノ王等一鎭二祭藤原宮地一。庚寅、遣二使者一奉二幣于四所伊勢大倭住吉紀伊ノ大神一告以二新宮一。六月甲子朔、癸巳、天皇觀二藤原宮地一。七年八月戊午朔、幸二藤原宮地一。八年春正月乙酉朔、乙巳、幸二藤原宮一、即日還レ宮。十二月庚戌朔、乙卯、遷二居藤原宮一とある。よつて營宮は持統八年十二月までに完成したもので、この歌は、遷都の賀の時にでも讀みあげられたものであつたゞらうか。

藤原宮城跡については、『宮の所は十市郡にて、香山耳成畝火の三山の眞中なり。今も大宮殿ドノと云て、いさゝかの所を畑にすき殘して、松立てある是なり』（考）と云つて、略解なども其に從つてゐた。喜田博士は、鷺栖神社と耳成山との中間と考へた（帝都）のは釋日本紀引くところの氏族略記に、高市郡鷺栖坂の北地にありとあるのに本づいてゐる。然るに、近時高市郡鴨公村大字高殿、鴨公小學校、鴨公村役場を中心として、礎石が發掘せられ、研究が漸く具體化しつつある。そして小學校東方の土壇が大安殿に該當し、東に東安殿、西に西安殿、北方に小學校の校舎にかけて小安殿、北門から一直線に耳成の中腹に視線が到達するやうになつてゐる。この發見は明治四十四年、大正四年、昭和八年、昭和十年と漸次に進められたものである。そして史に見えた、南門、海犬養門、大殿垣、大極殿（大安殿）、東樓、西樓等もその位置が確定せられつつある。大安殿のあつた土壇は從來神聖

地とせられ、兒童と雖も入つて遊ぶことが出來なかつた。また鴨公村には字名に宮所、大宮、京殿、大君、倉町、宮ノ口、南京殿、北京殿等があつて、藤原皇居の敷地を暗指してゐたものであつた。斯く明かになつたから、飛鳥村東方の小原、即ち鎌足の住居の地に宮趾を求めようとした說も、喜田博士の鷺栖神社北方說も自然に動搖することとなり、また、持統天皇の、『春過而夏來良之白妙能衣乾有天之香來山』(卷一。二八)といふ御製の、天皇の御位置につき從來諸說があつたが、大安殿においでになつての吟咏と確定してかまはぬやうになつたと思ふ。

次に、『役民』の訓につき、古くエタスタミと訓み、考でタテルタミと訓み、(攷證、美夫君志同訓)『役の字を今はえだちとよめど、えは役の字音にて古言にあらず、集中にたつたみとよめるぞ、これにはかなへり』と云つたが、古義は、『エは役の字音にて古言にあらずといへるは、例のいとかたよれる論なり』とし、タテルタミ、又はエダチノタミ(註疏同訓)と訓み、檜嬬手はエダテルタミ、講義はエニタテルタミと訓んだ。山田博士の訓の理由は、役として出づるを役に立つといふ。古語に之をエニタツと云つた。今の俗語に、役ニ立ツといふのはその名殘であり、エは恐らく古言であらうといふのである。役は令義解賦役の條に、役者使也。歳役雜徭等爲レ役也とある。

この長歌の作者につき、『役民作歌とは、藤原宮を經營の時、課役之民の中に此歌を作りてうたひ

たるべし。作者の名闕たる、をしむべし』（僻案抄）の如く、詞書どほりに解釋してゐたのであるが、本居宣長が玉勝間（卷十三）で、『萬葉集一の卷に、藤原ノ宮之役民ノ作歌とある長歌は、役民作歌とあるによりて、たれも、たゞその民のよめると心得ためれど、歌のさまをもて思ふに、然にはあらず、こはかの七夕の歌を、彦星棚機つめになりてよめると同じことにて、かの民の心に擬(ナズラ)へて、すぐれたる歌人のよめるなり。その作者(ヨミビト)は、誰ともなけれど、歌のさまの、いと／＼めでたく、巧の深きやう、人麻呂主の口つきにぞ有ける』云々と云ひ、守部も其に贊成して、『柿本ノ朝臣の口つきと、心の底ひに聞き知りたる、もし善本出でば、後に思ひ合する事ありなむ』（檜嬬手）と云ひ、雅澄も、『そも／＼此ノ歌巧のことに深切(フカ)く、句法のいとも奇妙(タヘナル)など、人麻呂ノ朝臣の長歌の口風(クチツキ)に、をさをさ立おくれたるすぢなきをおもへば、役民の意に擬へて、さばかり上手の作るなるべし』（古義）と云ひ、井上博士も、『名ある歌人の名を役民に托して作れるものなる事言ふを待たず。おそらくは柿本朝臣人麿の作ならむ』（新考）と云つた。

併し、必ずしも人麿作とせない説もある。例へば、『その宮つくる時の役民がよめる也となり。されど、古言はたゞ、表のみをたのみがたきもの也。この歌のよみざま、いふかひなき役民のよめりともおぼえぬ詞づくりなれば、誰かは知らねど、役民が歌になしたるにもあるべし。かくいふは、

はゞかる所あればなり。下にいふをみて思ふべし。されどなほ、役民がうちにも心あらむは、かかる歌よむまじきにもあらねば、ひとへにはいひがたし』（燈）。『宣長が玉勝間に、……人麿主の口つきにぞありける云云といはれしは、さることながら、農民なりとも、よき歌よむべからずとは、いひがたければ、役民がよめる歌と見てあるべきなり』（攷證）。『この長歌の如きはその役民の内ながら作者の名を隱せるゆゑに、たゞ役民としるせるなり。役民とて賤しき者にはあらず、みな良民なれば多かる中には歌よむ人もあるべきこと外にも例あれば、さらに辨を竢つべからず』（註疏）。『これは是其役に從へる民の自ら詠じたるものにて、靈臺の詩にまさること幾許（イクバク）ぞや。此歌忽に讀過する事勿れ』（美夫君志）。『其の役に使はれた民の作つた歌であるから、其の大體を心得置いて、歌のさまを味ふべきである』（左千夫新釋）。『この歌詞書のままにてはその役に立てる民のうちの或人がよめる歌なるなり。或は實際の役民がよめるにあらで、役民の心になりて當時の歌人のよめるにてもあるべし。實際につきて見るに、この歌甚だ巧みにして尋常人の口つきにあらず。されどその作者の誰なるかは素より今に於いて知るべからず。然るを本居宣長は人麿の作なるべしといひ、橘守部は標題にさへ人麿の名を揭げたり。武斷甚しといふべく、かくの如きは古典を論ずるものの最も戒愼すべきことにして毫も隨ふべきものにあらず』（講義）。

以上の如き文獻がある。即ち、詞書どほりに解釋すれば、無論、役民の誰かが作つたことになる。併し、この歌の力量を標準にして作者を推測するとせば、役に直接たづさはる勞働者を以て作者とするのも穩當でない。そこで誰か當時の力量ある個人的歌人を想像し、宣長は先づ人麿だらうと考へたのであるが、學者によつては必ずしも人麿と考へずとも好く、役民のうちにもこれくらゐの作者が居つてもよいとし、左千夫の如きは、この長歌の技法から觀て人麿や赤人と違ふと云つてゐるのである。私は、若し個人の作者を想像するとせば、役に携はつたものの中の個人と、人麿とを想像し、それも役民歌人の助力者として、或は共同作業者としての人麿を想像して居る。即ち愚案では、この長歌を單に人麿代作とは考へないのである。この結論は既に總論篇でも云つて置いたが、一々細かい點になると、人麿一人の作としては何處かに違ふ點のあることを直觀してゐるものである。

語釋　**○八隅知之・吾大王・高照・日之皇子**　ヤスミシシ・ワガオホキミ・タカテラス・ヒノミコと訓む。大王も日之皇子も共に此場合は天皇即ち持統天皇を申し奉るのである。

○荒妙乃・藤原我宇倍爾　アラタヘノ・フヂハラガウヘニと訓む。藤原の土地にといふ意。荒妙は和妙に對した語で、麁い布の總稱である。古語拾遺に織布に注して古語阿良多倍といひ、祝詞式

に荒多閇(アラタヘ)、延喜式踐祚大嘗祭式に麁妙服(神語所謂阿良多倍是也)とある。絹や麻(あさ)の布の好いのは和妙(にぎたへ)で、麻の布の麁いのや葛(くず)や藤(ふぢ)で織つた布は荒布(あらたへ)であつた。そこでフヂハラのフヂにかかる枕詞とした。字彙に藤可レ作レ布。古事記に、卽其母取ニ布遲葛(フヂカヅラ)一而一夜之間織ニ縫衣褌及襪沓一云々とある。ウヘニは、そのホトリといふぐらゐの意で、その藤原の地にといふ意味に落著く。卷二十（四三一九）に、多可麻刀能(タカマトノ)秋野乃宇倍能安佐疑里爾(アキヌノウヘノアサギリニ)。卷八（一六一〇）に、高圓之(タカマドノ)秋野上乃(アキヌノウヘノ)瞿麥之花(ナデシコノハナ)等がある。『藤原ガうへに』と、『藤原ノうへに』との比較では、がは、上の語を主とすると解かれてゐるが、此は麁妙乃(アラタヘノ)藤井我(フヂヰガ)原爾(ハラニ)（卷一。五二）などと同じく口調の關係が主だとおもふ。武田博士の新解に、『フチは植物の蔓あるものの總稱。狹義には春の終に咲く美しい豆科の房花の咲く植物。今いふ藤の花。ここの藤原は、蔓生植物の生えてゐる原の義であらう。フチのチは淸音が古い』とある。

○食國乎・賣之賜牟登　ヲスクニヲ・メシタマハムトと訓む。天皇の統御したまふ天の下を御覽にならうとの意。食國は舊訓ヲシクニヲであつたのを考でヲスクニヲと訓んだ。卷五（八〇〇）に、企許斯遠周久爾能麻保良敍(キコシヲスクニノマホラゾ)。卷十七（四〇〇六）に、須賣呂伎能乎須久爾奈禮婆(スメロギノヲスクニナレバ)がある。メスは考に、『召給』と解したが、これは、『見させ給ふ事也』（略解）。『賣之(メシ)は見なり』（古義）。『めし、めすも同じ、見すにて、めし給ふ、みたまふ意』（攷證）といふので、見るの敬語である。卷一（五二）に、埴(ハニ)

安乃堤上爾在立之見之賜者。卷六（一〇〇五）に、我大王之見給芳野宮者山高雲曾輕引。卷十八（四〇九九）に、余思努乃美夜乎安里我欲比賣須。卷二十（四三六〇）に、賣之多麻比安伎良米多麻比。同卷（四五〇九）に、於保吉美能賣之思野邊爾波等がある。

〇都宮者・高所知武等　ミアラカハ・タカシラサムトと訓む。宮殿を高大に御營みにならうとの意。『都宮者』は、舊訓ミヤコニハ。元・神ミヤコヲハ（代匠記精同訓）。僻案抄オホミヤハ（燈・古義・新訓同訓）。考ミアラカハ（略解・攷證・檜嬬手・美夫君志・註疏・講義同訓）。『ここは專ら宮殿の事なれば、卷二に御在香乎、高知座而と有に依てよみつ。みあらかは御在所にて卽宮をいふ』（考）。大殿祭祝詞に、瑞之御殿、古語云二阿良可一。遷却祟神祝詞に、天御舍。古事記に、天皇之御舍。古語拾遺に、瑞殿（古語美豆能美阿良可）麁香（古語正殿謂二之麁香一）とある。眞淵はアラカは在處の轉とし、アラカとなつて宮殿の意味になつたと解し、宣長は在所又は在波訶だらうとしたが、山田博士はアラは現のアラで、『天皇の現れます處の義』であらうとした。『高所知武等』は、舊訓タカシルラムト。代匠記精タカクシラムト又はタカシラサムト。僻案抄タカシラレント。占め給ふ、領し給ふ、治め給ふのシラスと同義で、此處は造營になつて御住ひになることをいつてゐる。『ハ』は『ヲバ』と同義の助詞（講義）といふ說である。現在の口語譯にするならそれでも好からうが、この『ハ』は、意味と感とを籠らせるものではなからうか。

○神長柄・所念奈戸二　カムナガラ・オモホスナベニと訓む。神その儘に、神として御思召すに連れて、その御考と共に、同時に、といふ意で、これは次の句々に連續するのである。ナベニは並ニであつて、共に、に連れてと解くこと、人麿歌集の歌の足引之山河之瀨之響苗爾（卷七。一〇八八）のところでも解釋したとほりである。

○天地毛・緣而有許曾　アメツチモ・ヨリテアレコソと訓む。天神地祇も共に相寄つてあればこそといふ意。山川毛因而奉流（卷一。三九）は、山神河伯も相寄つて仕奉る意で、天地乎歎乞禱（卷十三。三二四一）。天地能加多米之久爾曾夜麻登之麻禰波（卷二十。四四八七）は天神地祇の意となるのである。アレコソは、古昔母然爾有許曾（卷一。一三）のナレコソと同じい。そして、この係は下の浮倍流禮で結んで居るのである。

○磐走・淡海乃國之　イハバシル・アフミノクニノと訓む。淡海の國のといふ意。磐走（石走）といふ枕詞は、既に云つたが、イハバシルと訓んで、石を走る水が泡となるから、或は石を走る水は溢水だから、アフミに冠したといふのと、眞淵の說の如く、イハバシノと訓んで、イハバシは石橋で、『いはばしの間といふを、あはうみのあはにいひかけしなるべし』（冠辭考）といふのとあるが、これは泡と淡とを同一視した點は從へないとして、兎に角石を走る水と解する說の方が好い。眞淵說

は少し面倒で從つて不自然である。また音調から云つても、イハバシルの方を自分は好んでゐる。

○衣手能・田上山之　コロモデノ・タナカミヤマノと訓む。衣手の手と手と同じだから、田上のタ音に續けたのである。この例は一例のみで、あとは、許呂毛泥乃和可禮之等吉欲（卷十八。四一〇一）。衣手乃名木之河邊乎（卷九。一六九六）。衣袖之眞若之浦之（卷十二。三一六八）等の用例である。田上山は近江栗太郡上田上、下田上二村にわたる山で、太神山とも書く。當時は天然の木立が茂つて、木材の產地であつたことが分かる。また、山田博士に據れば、今謂ふ、製材所の所在地であつた（講義）。

○眞木佐苦・檜乃嬬手乎　マキサク・ヒノツマデヲと訓む。眞木拆く（枕詞）檜を麁木づくりにした材をといふ意。なぜ眞木拆くから檜に續けたかといふに、契沖は、『マキハ檜ノ木ヲホメテ云。サクハ斧ナドニテ割ヲ云也』（代匠記精）といひ、眞淵は、『佐苦とは古へは木を斧もて析て、板とも何ともせればしかいひて、こゝは柝たる檜てふ事なるを、用を冠辭として體にかけたるなり』（冠辭考）と云ひ、『檜は良材なる故に、眞木さく檜とはつゞけし也』（攷證）の如く、諸注釋書それに從つたが、前に、僻案抄では、『佐苦は割也。木を割切は刃なれば、刃の冠辭に眞木佐苦と云。刃の古語をひといふ。今は通音にて、身と云。刃と檜と同音なれば、眞木さくを檜の冠辭とす』と云ひ、また、後に、古義では、『佐苦は幸にて幸はふと云に同じ。その幸はふとは、言靈の幸はふなど云と同言にて、何

にても其物の功用をなすを云言なり』と云つた。折口博士も一部其に據つて居る。然るに近時山田博士は、ヒは割目といふ意で、古事記の氷目矢は大木の割目に矢といふものを茹めたのをいふ。眞木を拆けば割目卽ちヒが出來る。それが檜のヒと同音だからヒの枕詞としたので、契沖眞淵等の說の如く、『檜といふ木材の實義にとりて枕詞とせるにはあらざるべし』（講義）と云つた。その他の用例は、繼體紀に、莽紀佐倶避能伊陀圖嗚。古事記雄略條に、麻紀佐久比能美加度がある。今、山田說に從ふが、未來になほ善說の出來るやうな氣もしてゐる。次にツマデは、あら木づくりには稜柧がある、そのツマのある木材の意で、『柧は、古今韻會引ニ通俗文ニ云、木四方爲レ稜、八稜爲レ柧云々とありて、削りたる木をいへる也』（攷證）とあるによつて大體の意味が分かる。テは『料』に相當する語である（山田氏）。

○物乃布能・八十氏河爾　モノノフノ・ヤソウヂカハニと訓む。宇治河にの意、物部、卽ち朝廷に仕へる百官の氏が多くあるから、八十氏と云つた、卷三（四七八）に、物乃負能八十伴男乎。卷十八（四一〇〇）に、物能乃布能夜蘇氏人毛などがある。モノノフノはヤソにかかり、そのヤソウヂを、ウヂガハに言掛けて連續せしめてゐる。枕詞の長い、序詞の短いのであるから、その移行型としておもしろい形である。この形は、既に人麿作の、物乃部能八十氏河乃阿白木爾（卷三。二六四）の處で

評釋した。宇治河は、近江の湖から勢田河になり、大戸(だいと)川を合して、宇治郡を流れるところを宇治河といひ、木津河(泉河)を合して淀川に入るのである。

○**玉藻成・浮倍流禮**　タマモナス・ウカベナガセレと訓む。玉藻の如くに、木材を浮べ流したといふ意。水流によつて重い木材を運ぶのを神の力による如くに表はしたもので、前の句の、ヨリテアレコソをば、此處のウカベナガセレで結んでゐるのである。ここで文法的にも切れ、意味もここで休止となつて、次の句が起るのである。そしてその休止が極めて小さく、直ぐ、『そを取ると』で連續せしめて居る。

○**其乎取登・散和久御民毛**　ソヲトルト・サワグミタミモと訓む。その木材を取らうとして、骨折り騷ぐ人民等もといふ意。御民(ミタミ)といふのは、天皇の大御寶だから尊んでかくいふので、卷六(九九六)に、御民吾生有驗在天地之榮時爾相樂念者(ミタミワレイケルシルシアリアメツチノサカユルトキニアヘラクオモヘバ)がある。サワグは、卷三(四七八)に、五月蠅成騷騷舍人者(サバヘナスサワグトネリハ)。卷五(八九七)に、五月蠅奈周佐和久兒等遠(サバヘナスサワグコドモヲ)。卷六(九二四)に、幾許毛散和口鳥之聲可聞(ココダモサワグトリノコヱカモ)などがある。此處のサワグは、いそしみ働くさまに用ゐたから、その聲々をも含んでゐる。視覺も聽覺も一しよなのである。

○**家忘・身毛多奈不知**　イヘワスレ・ミモタナシラズと訓む。新訓・新解ではタナシラニと訓ん

だ。家の事も忘れ、自分の身のこともまるで忘れて働く意である。卷九（一七三九）に、金門爾之八乃來立者夜中母身者田菜不知出曾相來。同卷（一八〇七）に、何爲跡歟身乎田名知而。卷十三（三三七九）に、人丹勿告事者棚知。卷十七（三九七三）に、伊謝美爾由加奈許等波多奈由比等の例がある。『多奈といふ語、思ひ得ず』（攷證）。『諸説あれど、いづれも首肯し難し。後賢の考をまつものなり』（講義）とあるが、古義引用の宣長の説に、『我身の事をも意得無シに、打わすれて』といひ、新考に、『夢中ニナツテ、己ヲ忘レテなどいふ意』とある如く、兎に角、副詞的に、動詞の意味を強め、誇張する意味の接頭辭らしいといふことも大體分かる。そして、今までの用例では、『身』『事』に關係し、『知』に關係してゐる。その語原は未だ確然としないが、諸説を手抄しよう。契沖は、『身毛多奈不知ハ下ニモ棚知、多奈由比ナドヨメリ。棚、々橋、日本紀ノ仁德紀ニ機ヲ棚機ト云モ皆空中ニアル心ナレバ、身ヲ傷損セム事ヲモソラニシラズト云ニヤ。君ノタメニ身ヲ忘テ顧ヌナリ。又輕引ト書テタナビキトヨメリ。然レバタナハ輕シト云古語カ。是ハ毛詩ニ、經始勿亟、庶民子來トイヘルニ似タリ』（代匠記精）。春滿は、『多奈は發語辭。多奈不知は、たゞしらずといふにおなじ』（僻案抄）といひ、眞淵は、『多奈は多禰てふ言にて、物を心にたねらひ知得る事なり。こゝは民どもの水に浮居などして身の勞もたねらひしらず仕奉をいへり』（考別記）といひ、守部は、『多奈は御倉板擧、天湯

河板擧（カタナ）垂仁紀等を始め、凡て物を置くを棚と云へば、身の置き所もしらずと云ふ意也』（稜威言別手）といひ、芳樹は、『吾身のうへをも尋ねしらずといふこと』（註疏）といひ、武田博士は、『タナは、動詞について悉く、すべての意を表す。タナ知るの例は、中略たな曇るは、「たな曇り雪は降り來ぬ」、たな引くは極めて多い。タナ曇るを、トノ曇るともいふから、タナとトノと、通ずるのであらう』（新解）と云つて居る。

○鴨自物・水爾浮居而　カモジモノ・ミヅニウキヰテと訓む。ジモノは、××ジキ、ジクの語幹××ジが直に名詞モノに熟合して一の名詞となつたもの（日本文法論）で、鴨であるかのやうに、木材が水上に浮き居ての意。カモジモノは、『鴨のさましたる物の意にて水に浮きゐての形容をあらはしたり。從來これを枕詞といへれど枕詞にあらで、鴨といふものの如くの意にて實際の形容に用ゐたるなり』（講義）。併し、發達史はさうでも、使用の氣持は既に枕詞への移行型を示してゐるとおもふ。可母自毛能宇伎禰乎須禮婆（カモジモノウキネヲスレバ）（卷十五。三六四九）の如きは既に枕詞化してをり、ササナミノが地名からいでて、枕詞化したのと同樣ではなからうか。

○吾作・日之御門爾　ワガツクル・ヒノミカドニと訓む。役民の私どもの造營する皇居にの意。日は日神のことで、日神の子である天皇のおいでになる宮城の御門（みかど）といふことから、宮城、皇居と

いふ意味になつたのである。古事記雄略條に、麻紀佐久比能美加度（マキサクヒノミカド）。萬葉卷五（八九四）に、高光日御朝庭神奈我良愛能盛爾（タカヒカルヒノミカドカムナガラメデノサカリニ）がある。

○不知國・依巨勢道從　シラヌクニ・ヨリコセヂヨリと訓む。巨勢の道からといふ意であるが、『不知國』は古寫本にはシラヌクニ。イソノクニの二とほりの訓があつたのを仙覺がイソノクニを採つた。それを代匠記以來シラヌクニの可なることを諸學者が認めるやうになつた。知らぬ國卽ち外國から日本の德化をしたひて寄りコス、コセヂと續けて序詞としたものである。コスもコセも『來』の敬語に使つたので、意味のある序詞で、契沖が、『三韓等ノ外名モ知ラヌ國々ヨリ德化ヲ慕テ依來ルト云フコトヲ高市郡ノコセト云所ノ名ニ云ツヾケタリ』（代匠記精）と云つた如くである。巨勢は今の南葛城郡葛村古勢にその名の名殘をとゞめ、巨勢山、巨勢野はそのあたりにある。和名鈔の巨勢鄕は今の葛村よりももつと範圍の廣かつたこと無論である。巨勢道は藤原飛鳥方面から吉野及び宇智を經て紀伊へ通ずる重要な街道であつた。かかる言掛の用法は、集中、卷七（一〇九七）に、吾勢子乎乞許世山登（ワガセコヲコチコセヤマト）。卷十三（三二五七）に、直不來自此巨勢道柄石椅跡（タダニコズコユコセヂカライハバシフミ）等がある。武田博士の新解に、新訓のごとくヨリコセヂユと訓み、『知らぬ國寄り來せと、外國も歸伏せよと祝の意を表し、さて地名の巨勢に掛けてゐる。吾が作る日の御門に、知らぬ國寄りまでは、巨勢と云はむが爲の序となつ

てゐる。知らぬ國は外國で、まだ見聞にも入らぬやうな國の意。コセは來るの敬語の命令法で、希望の意を表す。やがてコソの語原である』と云つて居る。

○**我國者・常世爾成牟・圖負留・神龜毛**　ワガクニハ・トコヨニナラム・フミオヘル・アヤシキカメモと訓む。我國は常世すなはち仙境になるだらう、文を負うて居る神龜もといふ意。神龜はカミナルカメ（元）と訓んだ古鈔本もあるが、多くはアヤシキカメと訓んで居る。新訓ではクスシキカメモと訓んだ。尙書に、天乃錫禹洪範九疇彝倫攸敍とあつて、孔安國のその註に、疇類也。天與禹洛出書神龜負文而出列於背有數至于九、禹遂因而第之以成九類とある。なほ、易繫辭に、河出圖洛出書。史記に、神龜者天下之寶也。天智紀に、九年六月邑中獲龜背書申字上黃下玄長六寸許。天平元年八月詔に、負圖龜一頭獻止奏賜不爾云々。

○**新代登**　アラタヨトと訓む。古寫本中、アタラヨ、ニヒヨと訓んだのがあり、舊訓もアタラヨであつたのを、古義で久老訓のアラタヨを好いとした。古事記上卷に、阿多良斯登許曾。日本紀雄略卷に、婀拕羅斯枳。萬葉卷十三（三二四七）に、安多良思吉君之老落惜毛とある。アタラシは皆、惜しいといふ意味に使つて居る。そして、卷十八（四一〇六）に、春花能佐可里裳安良多之家牟等吉能沙加利曾は新しといふ意に用ゐた例で、卷二十（四二九九）の、年月波安多良安多良爾は、一本に安良多

安良多爾となつてゐる方が好いと久老が云つた（古義引用）し、山田博士も古寫本の多くがさうなつてゐるから其を採るべきことをいひ、琴歌譜の阿良多之支止之乃波之女爾をも其一證とした。面目を一新した時代の、新時代の、新世のといふ意味で、盛世を祝賀するためにこの句を置いた。『新代と、神龜も、出づ』から同音のイヅミノカハに續き、イヅミノカハは、ずつと前の、『水に浮居て』に意味が關聯して居る。

○泉乃河爾・持越流　イヅミノカハニ・モチコセルと訓む。泉の河（木津川）へ木材を運んで來たの意で、はじめ宇治河を筏で木材を運び、泉河（木津川）と宇治河の合する點で、泉河を筏で溯らせたものである。共に水流を利用したので、陸地を運搬したのではない。『モチコセルはモチキタレルなり。自然に任せなば淀河の川下へ流れゆくべきによりて、人の力にていづみ川の川口へもちゆくなり。このモチコセルをあしく心得て略解古義などに一旦陸に引上げて更に泉川に浮ぶる事としたるなり。水利のよきに從はずして何ぞ煩しく陸上を運搬せむや思ふべし』（新考）によつてその趣が明かである。

○眞木乃都麻手乎・百不足・五十日太爾作　マキノツマデヲ・モモタラズ・イカダニツクリと訓む。眞木即ち檜の木材をば筏に組んでの意。百不足は百に足らぬから、五十、八十などの枕詞にし

た。巻三（四二七）に、百不足八十隅坂爾。巻十三（三二二三）に、百不足五十槻枝丹がある。筏は和名鈔に、桴筏、論語注云、桴、編ニ竹木一、大曰レ筏音伐字亦作橃 小曰レ桴音浮玉篇字亦作艀、在舟部和名以加太 巻十三（三三三二）に、木折來而機爾作。巻十九（四一五三）に、漢人毛栰浮而遊云がある。

○泝須良牟・伊蘇波久見者・神隨爾有之　ノボスラム・イソハクミレバ・カムナガラナラシと訓む。泉河をば筏で溯る（木材を組んだ筏を溯らせる）、その勤勞の競ひのさまを見れば、誠にわが天皇は神そのままにましますことであると讃稱し奉るのである。イソハクといふ語は、伊呂波字類抄に爭競角の三字をイソフと訓んで居る。卽ち四段活用である。また、皇極紀に爭陳をイソヒテマウスと訓み、萬葉巻十三（三三二五）の諍榜を舊訓にイソヒコギと訓んでゐる。イソフにクがついて體言化しイソハクとなる。卽ちイソハクは、『爭也。競ひ勤るをいふ』といふ美夫君志の說（講義同說）を引いて置く。なほ、書紀仲哀天皇巻の、伊蘇志。聖武天皇巻の、伊蘇之美。文德實錄の、勤哉臣のイソシも同語原であらう。恪勤、勤和等をもイソシと訓ませて居る。さて、ノボスラムは普通此處で切れるやうに取扱ひ、終止言と解してゐた。それは、このノボスラムをば作者が藤原の宮地にあつて、想像して作つたと解釋したからで、この考は、眞淵・宣長あたりの考に本づいてゐる。『此泝すらんにて結びたるもの也。辭のはこびを、熟く尋ねてさとるべし。なほざりに見ばまがひ

ぬべし。さて、良牟と疑ひたるは、この作者は宮作リの地にありてよめるよしなれば、はじめ田上山より伐出せるより、巨勢路を運ぶまでは、皆よその事にて、見ざる事なれば也。さて伊蘇波久見者とは宮地へ運び來たるを目のまへに見たるをいへり』（玉勝間）といふのを見れば分かり、古義も燈も攷證も美夫君志も註疏も大體それに從つてゐる。然るに、御杖は、『これは、中の良牟の例にて、次のいそはくに上の義をつゞけて心うべき法なり』（燈）といひ、井上博士は、『モモタラズイカダニツクリノボスラムイソハク見レバと續きたる辭を斷切りてノボスは他處にての事、イソハクは藤原にての事とは見るべからず』（新考）と注意し、山田博士は、『この「らむ」を終止形と見る說多けれど、これは連體格にて次の「いそはく」につづけたるなり』。『〔イソハクに就いて〕ここは體言として取扱はれたるものなれば、競ひ勵む事をいへるなり。かくて上の「らむ」よりのつづきをよく了解しうべし』（講義）と云はれたのは發明であつた。

○左注。『右日本紀曰朱鳥七年癸巳秋八月幸藤原宮地。八年甲午春正月幸藤原宮。冬十二月庚戌朔乙卯遷居藤原宮』とある。日本紀の文は、題意のところに記した如くである。この左注の『朱鳥』は、持統元年を以て、『朱鳥元年』としてゐる。そこに留意すれば足るのである。なぜ、『朱鳥』としたかは審でない。

大意 〔八隅知之〕わが大君〔高照〕日の御子であらせられる天皇持統が、〔荒妙乃〕藤原の土地に、統治したまふ天が下を御覧にならうと、御宮殿を高大に御營みにならうと、神である儘に、神として思召すにつれて、天神地祇も共に相依つて仕へ奉つて居ればこそ、〔磐走〕近江國の、〔衣手能〕田上山の、〔眞木佐苦〕檜の木材をば、〔物乃布能〕〔八十氏〕宇治河に、〔玉藻成〕浮べ流した。その木材を取らうとして骨折り騷ぐ人民どもも、家を忘れ、身をもまるで忘れて、〔鴨自物〕水上に木材が浮んで、【役民の私どもが造營し奉る宮殿に外國までも德化を慕ひて寄り來る巨勢の道から、この吾國は仙境卽ち常世の國となるであらう瑞祥として圖を背に負うた神龜〔靈龜〕も新世のために出現する、卽いづる】その、いづみの河に、宇治河から持ち運んだ檜の木材を〔百不足〕筏に組んで、その泉の河を溯らせる勤勞の競ひのさまを見れば、まことにわが天皇は神であられる儘の神わざをなされるのであらう。

大意は以上の如くであるが、田上山から木材を藤原宮の地に運ぶのに、どういふ徑路によつたかといふに、先づ近江の田上山及び附近の山で、伐採した木を粗く製材にし、大戸川から瀨田川、宇治川に流し、宇治川が泉川（今の木津川）と合する處から、泉川へ溯らせ、今の木津町の邊でそれを陸へ荷揚げし、奈良山を越え、佐保に運び、佐保川を筏で下して、藤原の地に運んだものであ

る。

今の學說は概ねさうであるが、宣長が玉勝間で、「萬葉集なる藤原宮之役民作歌」でこの徑路を論じた時には、木材を宇治川から上げ、陸路を泉川まで持つて來て二たび流し、それから淀川を經て、難波海に行き、更に紀の川を溯つて、巨勢路を經て藤原の地へ到達するやうに考へて居る。古義・攷證等がこの宣長の說に從つた。

それでもこの說に、人々の腑に落ちない點があると見え、略解では、『もちこせるは上の宇治川へ流したる材を泉河にて筏として、藤原の宮所へ川のまに〳〵上す也』といひ、檜嬬手では、巨勢路で造つた筏をば泉河まで運んで其を用ゐたことにしてある。美夫君志でも、『今少し地理などの考へあらまほし』といひ、註疏では、宇治川から泉川を上らせ、奈良阪の麓に近き木津にてその筏を解き、そこから宮地まで陸路を運んだやうに解し、『藤原の地、紀の川のほとり近き所ならば、陸路に人力を費さむもあぢきなしとて、さる運ばし方をも行ふまじきにあらねど、紀川より藤原に至らんにはその里程も近しといふにもあらず。且信土山などの山路もおほければ、攝津の海上を經、あら波に筏をうかべて、紀川にのりいれ、さかのぼりなどのやうの迂遠なることをすべきにあらず。この說はいみじき誤解なり。これ巨勢路ヨリといふに惑へるよりおこれるものなれど、こは上にいへ

る如く、この材木を運ぶ事にはあらざるなり。よくよく語脈をたづねて辨ふべし。古義も宣長の説によればこゝに取らず』と批評してゐる。

なほ、新考では、『運送の便否は必しも途の遠近によらねば、大まはりにまはりたる方或は便よきにや知らねど、イヅミノ河ニモチコセルマキノツマデヲイカダニツクリノボスラムとあるを、いかでか紀河ヲノボスラムとは釋かむ。又泉川にて筏を作り淀川、海路、紀ノ川を經て巨勢より藤原に運ぶならむにはコセヂヨリといふ事最後にこそあるべけれ。いかでイヅミノ河より前に云はむ。されば宣長の説は例にはたがひて穩健ならず。』と評し、講義でも、『この説の如くならば、非常識も甚しきことにて（中略）殆ど狂人のしわざに似たりといふべし』と評してゐる。而して、近時の學者によつて著はされた、新解・全釋・新講等も概ねさういふ具合に解釋するやうになつた。

鑑賞　この長歌は大體二段から成つて居る。

【第一段】

やすみしし　吾大王（おほきみ）　高照らす　日の皇子（みこ）

あらたへの　藤原が上に ─┬─ 食國（をすくに）を　見し給はむと　神ながら　思ほすなべに
　　　　　　　　　　　　 └─ 都宮（みあらか）は　高知らさむと

天地も　寄りてあれこそ　磐ばしる　淡海の國の　衣手の　田上山(たなかみやま)の　眞木さく　檜の嬬手(つまで)を　もののふの
八十氏(やそうぢ)川に　玉藻なす　浮べ流せれ

【第二段】

そを取ると　騷ぐ御民も　家忘れ　身もたな知らず　鴨じもの　水に浮きゐて
吾が造る　日のみかどに　知らぬ國　依り巨勢路より
我が國は　常世にならむ　圖(ふみ)負へる　神龜(あやしきかめ)も　新世(あらたよ)と
いづみの河に　持ち越せる　眞木(まき)の嬬手(つまで)を　百足らず　筏に作り　泝すらむ　勤(いそ)はく見れば　神ながらならし

右の如くで、内容をいへば、天皇が藤原の地に新に宮殿を造營したまふ御思召の事をいひ、それが冒頭で、この冒頭が第一段中の天神地祇の神業と身命を捧げる臣民との共同作業のありさまに響きわたつてゐるのである。さて第一段の冒頭以下の、『玉藻なす浮べ流せれ』までは、天神地祇の神業をいつてゐるので、木材を川に浮べ流すのは、神の爲事と見立てたのである。次に、第二段になると、『そを取ると騷ぐ御民も』から、『泝(のぼ)すらむ勤(いそ)はく』までは、臣民の勤勞を敍してゐる、即ち人力を云つて居る。神と人との共同作業によつて、造營の成就せられることをあらはしてゐるのである。そして、結びの、『神ながらならし』は、前の、『神ながら思ほすなべに』に響應聯結してゐ

るので、さういふ點だけでも、作歌實行上の苦心が見える。

それから、第二段に、『吾が造る日の御門に……神龜も新世（あらたよ）と』までの九句を挿入してゐるのであるが、なぜこの九句を挿入したかといふに、この長歌の大體は木材運搬の作業を敍してゐるのであるが、單にそれだけでは、主觀的に祝賀の意を表し切れないと感じたのであらう。つまり第一段の冒頭に對するやうな、一般的な主觀語で、何か力強い句を欲したのであらう。そこで此處に挿入した。併し、長歌聲調の特質として、聲調の連續性といふことを要求するから、ややともすれば、意味或は聲調の破綻を來し易い。此處でも幾分その無理があつたと謂ふべきである。

即ち古來學者は隨分此等の句を解釋するのに迷つた。宣長は、『さてかの主の長歌は、いづれも巧ふかき故に、詞のつゞきの、まぎらはしく聞ゆるが多きを、此歌は、殊にまぎらはしきつゞき多くして、物しり人たちも、皆解（トキ）誤れるを、今よく考ふれば、語のつゞきも、いと明らかにして、まぎるゝことなく、いともめでたく、すぐれたる歌なり』（玉勝間卷十三）と云つて解釋したが、却つて面倒になつて契沖・眞淵等の言を改惡したところもあり、また、宣長は優れた學者であつたために、古義等にも働きかけて後人を惱ましたが、後、美夫君志・註疏・新考・講義等によつて說が改められた。『その間に吾作（ワガツクル）より新代登（アラタヨト）までの九句は宮地の現在の狀を云て神龜（アヤシキカメ）も出づと泉川にかけて

御代を壽ぶけるなり』(註疏)。『いで余の說を述べむに、ワガツクル、日ノ御門ニ、シラヌ國、ヨリコセヂヨリ、ワガ國ハ、トコ世ニナラム、フミオヘル、アヤシキ龜モ、新代ト以上九句は、イヅミノ河の序、その中にて更にワガツクル、日ノ御門ニ、シラヌ國、ヨリの三句二言はコセヂの序なり。日本紀には見えざれど持統天皇の御治世の初に大和の巨勢路より神龜の出でしことあるなり。今は其事實を述べてイヅミノ河の序とし更に外蕃來貢といふ祝意をコセヂの序としたるなり』(新考)。

『寄りこす、こせ路』と言掛けて續けた點は分かるが、なぜ巨勢路を點出したかにつき、新考は巨勢路から神龜が出たことがあるからだといひ、講義も、神龜が出づといふのに續くやうに解してゐるが、このあたりの續きは不卽不離で、私の謂ふ省略句法を用ゐてゐるのであるが、作者が巨勢路を持つて來た心理は、神龜出現よりも、寧ろ、當時の巨勢路は交通上大切な道筋であつたからではなからうか。さすれば、此處は、『巨勢路より』の『より』は來貢することにかかつて、上にかへるのである。卽ち、『これは其諸の不レ知國々より奉る中に、一つの道の事をいひて、他の道々よりもまゐるをしらせたり。故に從の下に陸より奉る事をば惣て略』(考)。『芳樹おもふにこゝの意は四方のしらぬ國々より役にさゝれて上る民また造營用度の品など運ぶがそのうちにて紀伊は近國なるゆゑに巨勢路をへて民を上せもし物を運びもするがことさらに多きまゝに拔き出てかくいへるな

り』（註疏）といふ意中があつたのではあるまいか。註疏の說は少し細か過ぎるから、大體考の說ぐらゐに解していいとおもふ。

次に、この長歌の聲調は一大連續であること、人麿作と明記された他の長歌の場合と類似して居る。そして、『給はむと』。『知らさむと』。『そを取ると』。『思ほすなべに』。『浮きゐて』などの如くにして連續せしめてゐるが、『浮べ流せれ』の如く文法上には切れる場合でも、直ぐ『そを取ると』といふから、その間の休止は甚だ短いのである。『泝すらむ』の『らむ』が連體形で、『いそはく』の名詞形に續くといふ文法的解釋（山田氏）の好いのも亦この連續的聲調を可能ならしめるからである。また、第二段の挿入九句のうち、『巨勢路より』『新世と』の如く、『より』、『と』と何故したかといふに、やはり連續聲調を完からしめむためであつた。この邊のところは、作者の用意がなかなか細かく、骨折つてゐることが分かる。併し、この『より』、『と』の續け、言掛けは、上乘というわけには行かぬだらう。學者を苦しめたのも、その技法の缺點に本づくもののやうである。

併し全體から見て、一首の聲調には誠に旨いところがある。『天地も寄りてあれこそ』が、『御民も家忘れ』と相應じ、『玉藻なす浮べ流せれ』が、『鴨じもの水に浮きゐて』に相應じ、『神ながら思ほすなべに』が、結句の、『神ながらならし』と響き合つてゐるところなどは凡庸歌人の決してよく

するところではない。また、冒頭の主觀句に對して、第二段の主觀的九句の挿入なども、長歌聲調の『構成』上の工夫が自然其處に實行されてゐるのであつて、不即不離のうちに、波うつて進んでゆく長歌の聲調と、立體的に築きあげてゆく長歌内容の特質とが、やはり骨折つてこの一首に表はされてゐるのである。山田氏が『げにも凡庸の歌よみのよくする所にあらざるなり。かく技巧を十分に用ゐたれども、その圓熟せる手腕によりて天衣無縫の巧妙さをあらはせり』（講義）と云つたのは、その構成の特徴の一面を道破してゐる。

この長歌のもう一つの特色は、木材運搬の活動が主要部分をなして居ることで、それが枕詞など、後代人の考からいへば無駄な詞を使ひながら、簡潔のうちに、その活動を表現してゐる手際を味ふべきである。『もののふの八十氏川に玉藻なす浮べ流せれ』でも、『騷ぐ御民も家忘れ身もたな知らず鴨じもの水に浮きゐて』でも、實に旨いものである。纖細に寫實せずに、骨髓を表現してゐるから、寫生の眞諦に達し、象徴的にもなるのである。

この歌は、詞書に從へば、藤原宮造營に從事した役民が一團となつて、新皇居を頌し奉る詞章として公表したことに解釋せねばならない。また實際役民の團體作として當時の人も受入れてゐたと見える。それゆゑ、役民作歌となつてゐるのである。然るに後代の私等がこの歌を味つて見るに、

その力量に非凡なところがあり、その聲調に人麿的なところがあるので、人麿の作、人麿の代作、宮廷歌人、御用歌人であつた人麿が作つたものといふやうにも解釋せられるに至つた。その大體は既に、題意の條に記したとほりである。

併し、この歌を人麿作だらうと云つたのは、宣長（玉勝間）以來で、眞淵などは、『このたびの民どもの中に、いかなる人の隱れをりて、かゝる歌をしもよみけん。時なるかな』（考）と云つてゐるのである。また、近時、芳樹なども、『よりておもへば宮材の運送（モチハコビ）を掌る小吏などの名を隱してただ役民の作（ヨメ）るとなせる者か』（註疏）とも云つてゐる。そしてこの解釋も一概にしりぞけられないのであつて、持統の御代には人麿以外にも優れた歌人があのとほりに居り、天皇自ら、『春すぎて』の御製をお作りになつたくらゐである。もつとも、この御製をも人麿の代作だと論じてしまふやうなら問題は簡單であるが、人間の所業は決してさう簡單には片附けてしまはれないところがある。

それにも拘らず、この歌から人麿を除去してしまはれない點がある。詞書に從へば役民作歌であると結論してしまつて、何等の煩悶もないわけであるが、實際の作歌活動について常に思惟する人人は、このくらゐの力量のある歌よみが、容易に役民の中に居ただらうかといふ問題に逢著する。眞淵は、『時なるかな』と歎賞したが、眞淵の心中にもこの歌の作者として人麿が去來したのではな

からうか。それほど人麿的な部分がこの歌にあるのである。『天地も寄りてあれこそ』と、稍堅いつまつたやうなことを云つてゐて、直ぐ、『磐ばしる淡海の國の衣手の田上山の眞木さく』と續ける手法などは、人麿そつくりといつてよく、當時の、人麿以外の歌人に、かういふ聲調の長歌を作る歌人は先づ見當らないのである。そこで、文獻の考證をとほり越して、もう一歩この歌の作者を追究することになれば、人麿を除去することは出來ないといふことになるのである。

然るに、一方には、先師伊藤左千夫の如き見解もある。（左千夫新釋）左千夫は、『其の役に使はれた民の作つた歌であるから、其の大體を心得置いて、歌のさまを味ふべきである』と云ひ、『何と云うたら思ふだけが現せるか、如何に云うても其の感激を滿足させ得ないもどかしさの狀態で作られた趣が十分に味はれるのである。言語を四方に放散して感ふ所を盡したくあせつても、どの方面でも、思ふ所まで言語がとどかない感じで出來上がつて居る。そしてそこが溜らなく味のある所である。人麿や赤人や家持やが有餘る詩才を振つて、容易に作り得た作歌とは、頗る趣を異にして居る點に注意して見るべき歌である』。『此の歌の作風は、上卷の始めにある、軍王の長歌に近い。此の作者も軍王も、共に集中に一首しかない作者である。詩人など云ふ側の人では無く、歌に就いては寧ろ門外の人であつたらうと思ふ。兩者共に吶辯者が思ひをこめて物を云ふ如き趣のある作風が、

自ら醇朴な調子をなして居るのである。吶辯者が洒落を云ふと、また一種の可笑しみがある如く、軍王の歌にも此の歌にも、廻らぬ舌で云はないでもよい事を云うて居て、それがまた不思議に成功して一篇の色彩を爲して居る』と云つてゐる。即ち、左千夫はこの歌を激賞してゐるのであるが、それが腕達者な詩人的技巧がなくて、吶辯者が全力的に努力してゐるのが好いと云つてゐるのである。

私も、この長歌を歎稱する一人であるが、然かも、第二段の挿入句の續きあたりに、一種のたどたどしさを感ずること既に久しいものである。さういふことを綜合して、この歌は人麿一人の作、即ち人麿が役民に代つて作つたのでなく、人麿は助力者であらう。共同作業者であらうと想像してゐるものである。もう一歩想像を進めるなら、この歌の素材は現地にのぞんだ役民の誰か（即ち官吏）によつて作られたものでもあらうか。この一篇の現實性がそれを證據だててゐる。これは、空想では到底出來得ない好いものを持つて居るのである。併し表現の技倆が足りないから、當時最も力量ある歌人と目されてゐた人麿が助力したものであらう。九句の挿入の如きも、相談の結果、助力者によつて挿入せられたものであらう。言掛の續きが巧妙のやうで無理があり、後世の學者を惱したのも、さういふ點で、渾一體となり得ない、微細な點があつたものに相違ない。それだから、

役民の作つた素材は、『鴨じもの水に浮きゐていづみの河に持ち越せる眞木の嬬手を』といふやうなものであつただらう。以上は現在に於ける私見の結論である。よつて、本書の總論篇に於て、助力者としての人麿のことに觸れ、代作說を否定して置いたのであつた。

先師は、この歌を評した中に、『言語が廻り足らぬ様な中に於て、表面少しも齷齪たる趣が見えない。一讀して苦も無く作れた様に見えてる。此作者の天分の尋常ならぬを知り得らるるのである』（左千夫新釋）とあるのは流石に知己の言とおぼえるが、『天分の尋常ならぬ』と感じたのは、人麿が入つてゐるからであらう。『言語が廻り足らぬ』といふのは、役民の素材だからであらう。實に爭はれぬものだといふことが分かる。抒情詩の妙味は這般のところまで行き渡つてゐるといふことを深く心に銘すべきである。

この、『知らぬ國、より巨勢路より』の五七の音をも、『知らぬ國より、巨勢路より』と七五音に訓み、それをも一格として、却つて調が好いとし、卷十六（三七九一）の、童兒丹成見、羅、丹津蚊經色丹、名著來、紫之、大綾之衣をその例としてゐる（註疏）が、此處はやはり五七の調子であらう。

この歌は、天皇の御民が天神地祇山神河伯の助力のもとに新時代の皇居造營に勤勞してやまないところを讃美し、新都を頌したものであるが、富士谷御杖は次の如くに解釋してゐる。『此歌、表

はこのみかど遷都したまふにつきて、天地・神祇も御心をよせ給ひ、諸民も身をもいとはずつとむるさまをみれば、帝の御徳今ひときはめざましくますを、驚き歎じたるによみふせたる也。されど、これもし倒語にあらずば必諂諛におつべし。古人さるいたりなき事を直言する物にあらねば、これ疑なく此遷都に役せらるゝ諸民、外見こそ家をも身をも忘れてつかふまつるやうにはみゆれ、實は家をはなれ、身を勞して、よろこばしきわざにあらねば、その心中には遷都の役をわぶる心必然なる事なり。しかれども公をおそりて、いさゝかもさるけしきをみせぬ、いかに心くしかりけむ。此歌よめる役民、みづから深くわびしく思ふ心をば諸民のうへに恕して詞をつけたる歟。又は前にいへるが如く、役民の名をかりての歌ならば、ふかく民をあはれめる心なり。大かた遷都に民を困しむる事甚しきを歎きたる、げにその歎ことわりなる事也。もし此歌實に役民ならば、役民いかなりしものぞ。此詞のつけざまに、その人ざまのめでたさもおしはからるゝ也。うはべは、ひたぶるに帝の御徳をたゝへ奉りて、ふかく遷都の弊をなげきたる詞のつけざま、よく〳〵めをとゞむべし』

（燈）と解釋して居る。

燈のこの說は、彼のいはゆる『靈』といふもので、『言』の解釋以外に、その奧にある『靈』を知れといふのだから、御杖にとつては實は得意の說なのである。けれども具眼の士から見れば、その、

『穿ち』の程度が淺薄で誠に噴飯に堪へぬものである。御杖等が人類勤勞に對する思考の程度は、廢頽國の老殘、怠惰、肉欲安住者等の、持つ思考の程度である。少しく近代的に同情して見ても、せいぜい入門書をかじつた社會主義者の程度である。それだから、遷都の弊の何のと云つても、その根據とするところは、大津宮當時の記事とか、持統天皇伊勢行幸時の記事とかに過ぎない。御杖は、氣の利いた風な口吻で、『役をわぶる心』の何のと云ふが、勞働者の勞働力といふものは、そんな消極的な、腑甲斐ないものではない。もつと、能動的、積極的、進擊的である。御杖のごとく安閑と火桶を抱いて知つたか振をするのとは本質がちがふのである。現に今でも山國の樵夫等がいかに能動的に勇猛に、この木材運搬の作業に從事してゐるか。

この勤勞の實相は、日本建國以來の創造的能動の實相と融合すべきであつて、これがまた人類の本態であり、人類のみならず、生物・無生物を籠めた萬有の本態である。それだから、この長歌の聲調といふものは、能動積極的で、寫實でなければ到底あらはしきれないものを持つてゐる。即ち、『もののふの八十氏川に玉藻なす浮べ流せれ其を取るとさわぐ御民も家忘れ身もたな知らず鴨じもの水に浮きゐて』の聲調の何處を叩けば、めそめそした、あくどい、怨嗟の呟などを聞くことが出來るか。そして、この直接表現のうちの何處から、『外見こそ家をも身をも忘れてつかふまつるやう

には見ゆれ、實は家をはなれ、身を勞して、よろこばしきわざにあらねば、その心中には遷都の役をわぶる心必然なる事なり』などといふ、ふざけた結論を引出すことが出來るか。

萬葉の歌の力は、直接的表現に本づいてゐる。眞淵のいふ、『古の世の歌は人の眞心なり』に本づいてゐる。御杖がともがらの知つたふりする、『靈』とかいふ、裏の裏の、ペテン、虚僞の無いのに本づいてゐる。それに何ぞや、この歌にむかつてペテン呼はりをして、『これもし倒語にあらずば、必諂諛におつべし』といふ如き言を弄する御杖輩の、その根源は一體どこにあるとおもふのであるか。返事は極めて簡單である。御杖の地金が端的にそこに反映したのである。卽ち、彼は、萬葉の歌の言語聲調を直ちに感ずることが出來ずに、その反對、裏、ペテンとして感ずるところに、御杖の地金が露骨に暴露せられてゐるのである。

當時の、廣義に於ける勞働階級は、既に種族的に純一ではなかつたが、それが一集團として勞働する場合は、その活動力は純一であつた。統一せられてゐた。それに加はる小數反動力の如きは、寧ろ問題では無かつた。これは現實であつて、理窟ではない。現實だからして、事實として出現し、後世に傳はつてゐるのである。現に、鴨公村小學校を中心とする藤原宮の礎石を目擊するものは、あれが一體、ぬそぬそ、いやいや、不平、怨嗟などによつて出現し得るものか奈何か。少くとも眞

面目な學者はそれを考へねばならない。

追記。 萬葉集の綜合研究（短歌研究五ノ一 昭和十一年一月）に、折口・遠藤・西角井三氏の研究があるから、少しく手抄する。〇折口博士云。『藤原もと大和ノ國高市郡飛鳥の丘陵によつて、大原と稱へた地。特に、その地に居住した一族の聖職の名と思はれる藤原といふ名を稱する樣になつた』。『飛鳥の藤原それ自身が、水の聖職に基く、「藤井」の淸水のあつたのと一つ理由の名であらう』。〇檜のつまでにつき折口博士云。『つまでといふのは、材木を意味するのでなく、榑(クレ)をいふのでありさうだ。さすれば、檜・杉・樅等の榑木(クレキ)もあり、細いのも短いのも色々あつたし、ひのつまでとも、まきのつまでとも言ふに當る。又、榑とすれば、丸太を選りすぐつたものだから、先に引いた方言のつまでに近い內容をもつてゐる訣だ。ともかく、この語は、柱・梁等に用ゐる材を言ふものと思ふから間違ひを起すのではないか』〇作者につき折口博士云。『此歌果して、藤原宮造營の時の役民の作歌か、どうかは頗疑問がある。その諸點は、後に述べるが、作者が別にあつて、役者の謠ふ所の詞章を與へたとも思はれるのである』。〇歌の中の、巨勢(コセ)を大和南葛城郡葛村古瀨附近だとすると、材木運搬の徑路の說明に、宣長のやうに無理をするやうになるので、或人等は巨勢を大和とせずに、淀川から木津に溯るあたりと想像する說を立てるやうになつたが、遠藤嘉基氏は上代特殊假名遣上の研究から、巨勢のコは乙類に屬するもので、卷三（三一四）の、磯越路。卷十（一八二二）の、莫越山などの越の甲類の假名とは違ふから、この混同を避け得ることを證してゐる。つまり巨勢を大和として差支ないと云つてゐる。然るに、巨勢が現在の古瀨だとすると、巨（乙類）。古（甲類）で二つは一致しないことを注意してゐる。これは極めて有益な注意であるが、巨勢(コセ)は『來(コ)せ』として乙類で充分說明出來るが、現在の『古瀨』といふ書き方は、後世のもので、奈良朝末期以後はこの上代特殊假名遣の使用法は亂れてしまつたのだから、それを以て說明することが出來るやうに思ふのである。〇短歌研究第五卷第二號に、長谷川如是閑氏の、この歌

に對する意見がある。『課役に應じた人民に對する同情同感の發展ではなく、課役を命ずる側の意圖による、役民道德の儀式的表現である』などといふのは、燈の末流の如き觀を呈してゐた。

藤原宮御井歌

【巻一・五二】

やすみしし　わご大君　高てらす　日の皇子　麁妙の　藤井が原に
大御門　始め給ひて　埴安の　堤の上に　在り立たし　見し給へば
大和の　青香具山は　日の經の　大御門に　春山と　繁みさび立てり
畝火の　この瑞山は　日の緯の　大御門に　瑞山と　山さびいます
耳成の　青菅山は　背面の　大御門に　宜しなべ　神さび立てり　名細し
吉野の山は　影面の　大御門ゆ　雲居にぞ　遠くありける　高知るや
天の御蔭　天知るや　日の御影の　水こそは　常しへならめ
御井のま清水

八隅知之　和期大王　高照　日之皇子　麁妙之　藤井我原爾　大御門
始賜而　埴安乃　堤上爾　在立之　見之賜者　日本乃　青香具山者
日經乃　大御門爾　春山路〔跡〕之美佐備立有　畝火乃　此美豆山者
日緯能　大御門爾　彌豆山跡　山佐備伊座　耳高〔無〕之　青菅山者　背
友乃　大御門爾　宜名倍　神佐備立有　名細　吉野乃山者　影友乃
大御門從　雲居爾曾　遠久有家留　高知也　天之御蔭　天知也　日御
影乃　水許曾波　常爾有米　御井之淸水

題意　藤原の新皇居にある御料の井泉を頌して、皇居の永遠に榮えたまふことを祝賀したものである。井泉は、『御井は大宮造營の時掘たる井にはあらず。上古より有し井也。朝廷に用ひらるゝ故に御井とは云也』(僻案抄)。『藤原宮の御井を題してよめるは、初に藤井我原に大御門始賜而とよみて、此井のもとより有て、地名にもよぶことをあらはし、しかもその名井有地に皇居と定め給へば、此井の嘉名天下に及ぶ淸水の德を顯はし、中にはその藤井我原の四面鎭護の山をめぐらして、御門

のかためとなる地なれば、此井の有地は、皇居の地に相かなふことわりを述たり』(同上)とあるのを參照すべきである。當時は天然の井泉を利用し其を手入したものである。記・紀・祝詞等に散見する記事が其を證して居る。

語釋 **○八隅知之・和期大王** ヤスミシシ・ワゴオホキミと訓む。八隅知し(枕詞)我が天皇、卽ち持統天皇を申奉る。ワゴといふのは、ワガオと續くのでワゴとなつた。昔も發音上の便利に從つて、今の音聲學上の理論をどしどし實行してゐる。この場合は、ワゴーキミとその儘延ばすやうに聞こえたものであらう。略解に、『和期は卽我にて、下の大へつゞく音便也。わがのがの言よりおへつゞけいへば、おのづからごとなれり』と說明してゐる。講義に、『集中の吾大王とかけるはすべてワゴオホキミとよめといふ說あれどそは强ひ言なり』と云つて居る。

○麁妙乃・藤井我原爾 アラタヘノ・フヂキガハラニと訓む。荒妙の(枕詞)藤井が原にで、このフヂキガハラにつき、僻案抄に、『此原にむかしより名井有が故に藤井が原とも云。ことに此歌は御井を詠る歌なれば藤原を藤井が原とはよめる也』といひ、古事記傳三十四に、『藤原宮はもと藤井が原と云地なればそを略きて藤原とも云しなるべし』とあるのは、此處に元から名高い淸水があつて、それがフヂキで、そのためにフヂキガハラといふ名が出來て、それが略されてフヂハラとなつたとい

ふので、燈・攷證・美夫君志・新考・講義等其に從つてゐる。武田博士の說は、蔓草の生えてゐる原が原名のやうにいふのであるが、いづれが先か。或は、古義の如くに、『藤原なる地ノ名なり。卽チ御井ある故にかく名を負るなるべし』として、藤井が原を藤原の地の一部と看做すか。併し、歌を讀めば藤原と藤井が原と同意義に使つてゐるから、やはり僻案抄を代表とする說の方が正しきに近いのではなからうか。

○大御門・始賜而　オホミカド・ハジメタマヒテと訓む。宮城を造營し始め給ひてといふ意。大御門は宮城の御門を尊み形容して大を附した。前の役民作歌の方では、日之御門と形容して居る。この長歌には、門の意味の大御門といふ語が幾つか用ゐられて居り、萬葉集には、その他に用例の少いのは注意すべきである。

○埴安乃・堤上爾　ハニヤスノ・ツツミノウヘニと訓む。埴安の堤の上にの意。埴安の池は、香具山の北麓にあつて、現在は小さくなつてその名殘をとどめてゐるに過ぎないが、そのころはもつと大きかつたことは、巻一（二）の、海原波加萬目立多都を見れば分かる。なほ、巻二（二〇一）に、埴安乃池之堤之隱沼乃去方乎不知舍人者迷惑といふ人麿の歌がある。なほ、神武紀に、天皇以ニ前年秋九月一、潛取ニ天香山之埴土一、以造ニ八十平瓮一、躬自齋戒、祭ニ諸神一、遂得レ安ニ定區宇一、故號ニ取レ土

之處ニ曰ニ埴安ニ云々とある。ハニは黏土。ハニヤスは埴黏スの意で、土器をつくることであらう。

○在立之・見之賜者　アリタタシ・メシタマヘバと訓む。舊訓ミシタマヘバであつたのを、考でメシタマヘバと訓んだ。時々此處にお立になつて眺めたまへばの意。アリは、『その事の引つづきてあるを云ふ語』(講義)。アリフル、アリワタル、アリカヨフなどのアリと同じである。『むかし今と絕せず在ことを、在通ふ、在乍などいへり。然ば天皇はやくより此堤に立して、物見放給へりしをいふなり』(考)。そのアリの用例は、古事記上卷に、佐用婆比爾阿理多多斯用婆比爾阿理迦用婆勢。萬葉卷十三(三二三九)に、島之埼邪伎安利立有花橘乎末枝爾毛知引懸。卷十七(四〇〇八)に、麻佐吉久毛安里多母等保利都奇多々婆等伎毛可波佐受。卷十八(四〇九〇)に、由具敝奈久安里和多流登毛保等登藝須奈枳之和多良婆。卷二十(四四〇八)に、之麻豆多比伊己藝和多利弖安里米久利和我久流麻泥爾。

○日本乃・靑香具山者　ヤマトノ・アヲカグヤマハと訓む。大和の靑香具山はの意。大和の國を日本と書いたのは借字で、卷一(四四)に、去來見乃山乎高三香裳日本能不所見。卷六(九六七)に、日本道乃吉備乃兒島乎過而行者。日本紀神代卷に、日本國之三諸山とある。その用法と同じい。香具山は大和三山の一で、磯城郡香久山村にある。古事記中卷に、比佐迦多能阿米能迦具夜麻。書紀神武卷に、香山此云ニ介遇夜麼ニ云々。萬葉にもこの山を咏んだ歌が可なりある。『靑』の字を冠した

のは、青々と樹木の茂つてゐるのをあらはしてゐるのである。

○日經乃・大御門爾　ヒノタテノ・オホミカドニと訓む。東の御門にむかつての意。ニは場處をあらはすから、字義に據れば、『東の御門に』となるが、實際は、御門に相對して、御門にむかつての意である。四方をいふに、日竪(東)、日横(西)、陰面(南)、背面(北)と用ゐたので、本朝月令引用の高橋氏文に、『日竪日横陰面背面乃諸國人乎割移天』とある。別に日經、日緯は東西、及南北を示してゐる場合もあつて、書紀成務巻に、隨二阡陌一以定二邑里一因以二東西一爲二日縱一南北爲二日横一山陽曰二影面一山陰曰二背面一とある。然るに、說文に、路東西爲レ陌、南北爲レ阡とあるし、周禮天官の疏に、南北之道謂二之經一東西之道謂二之緯一。漢書五行志注に、晉灼曰、南北爲レ經、東西爲レ緯とあるから、日本と支那とにてその趣を異にしてゐる。これに就き、註疏に、『これをもてわが古への制をたがふる事なかれ。これのみならず、支那の字を借て、此間の名稱にあてたる物のかれとこれとたがへること多かるをさもしらで猥に彼方の字義によりて誤ることいと多かり』といひ、講義に、『本邦にては朝日に向ひて縱横を定め支那は日中を基として經緯を定めたるにて國情の相違といふべし』と注意してゐる。攷證では、直ちに支那の用例に據つたから、『こゝに日の經とあるは南北といふ事なり。香山は大御門の南か北に當れるなるべし。予いまだ界をこえざれば知らず』と云ふ解釋にな

つたのであつた。

○春山路〔跡〕・之美佐備立有　ハルヤマト・シミサビタテリと訓む。春山として青々と繁り立つてゐるの意。『春山路』と流布本にあつたが、僻案抄で「春山跡」と改め、考で、『今本跡を路に誤』と指摘した。これは古葉略類聚鈔に跡の草體に書いて居るし、下の彌豆山跡と相對する句だから、跡と改める方がいい。春山は古事記應神條に、春山之霞壯夫。萬葉巻八（一四五二）に、水鳥之鴨乃羽色乃春山乃。巻十三（三二三四）に、春山之四名比盛而秋山之色名付思吉等がある。此處のトは、其物に譬へていふ格助詞で、『春山どほりに』。『春山として』ぐらゐに口譯してはどうか。巻三（四六〇）に、足氷木乃山邊乎指而晩闇跡隱益去禮の例がある。玉の小琴に、『春山は青山の誤なるべし。此歌の凡ての詞どもを思ふに、分て春と云むこといかが。其上畝火乃此美豆山者彌豆山跡と云るに對へても、青香具山者青山跡と有べきもの也』といひ、略解・攷證・古義・檜嬬手・新考等も其に從はうとしたが、これは原文の儘の方が却つて變化があつていい。シミは繁る意の副詞で、巻十（二一二四）に、秋芽子者枝毛思美三荷花開二家里。巻十一（二七四八）に、大舟爾葦荷刈積四美見似裳。巻九（一七九五）に、今木乃嶺茂立嬬待木者等の參考例がある。サブは翁サビ、神サビ等のサビ・サブで、それが合して上二段の一動詞となつたものである。

○**畝火乃・此美豆山者**　ウネビノ・コノミヅヤマハと訓む。畝火の此の瑞山はの意。畝火山も大和三山の一で、高市郡畝傍町にある。ミヅは瑞枝、瑞籬、瑞穂などのミヅに同じく、みづみづしく新緑の繁つた山といふ意味であらう。卷六（九〇七）に、御舟乃山爾水枝指四時爾生有刀我乃樹能の例がある。

○**日緯能・大御門爾・彌豆山跡・山佐備伊座**　ヒノヨコノ・オホミカドニ・ミヅヤマト・ヤマサビイマスと訓む。西の方の門に對して、瑞山として神々しく立つて居られるといふ意。畝火山は藤原宮地からは西に當つて居る。そこで、日本紀の南北爲ニ日横ニではなく、高橋氏逸文の如く日横は西といふことになるのである。美豆山者といつて、彌豆山跡と繰返して調子を取つて居る。『山さび』は、いかにも山らしく、深山のやうに神々しく茂つてゐる趣に表はして居り、注意すべき表現である。

○**耳高（爲・無）之・青菅山者・背友乃・大御門爾**　ミミナシノ・アヲスガヤマハ・ソトモノ・オホミカドニと訓む。耳成（耳梨）の青く山菅の茂つてゐる山は北門に相對しての意。原文は皆、『耳高』であるが、考で『爲を高に誤し事定か也』といひ、頭注で、『（卷十五）都禮母無の無を爲に誤し類なり』とも云ひ、古義では、『耳無之、無ノ字、舊本高と作るは誤なり。十六に、無耳之池とある

に從て今改つ』と云つてゐる。併し古寫本の盡くが『耳高』に作つて居るのを見れば、既に古く、『耳高』と記されてゐたことが分かる。青菅は青く山菅の生ひ繁つてゐるのをいふのであるが、代匠記精には、『耳高ノ青菅山トハ此耳高モ地ノ名ニテ假令三吉野ノ象山ナド云ニ同ジキ歟』などと云つたが、考では、『こは山の名にあらず。上の二山にほめたる言有が如く、常葉なる山菅もて耳成の茂榮るをいふ』と正して居る。

○宜名倍・神佐備立有　ヨロシナベ・カムサビタテリと訓む。丁度よく神々しく立つて居るといふ意。宜名倍につき、考別記で、『與呂志てふ言は、物の足そなはれるをいふ。よろづ、よろこび、よろひなどいふ皆同じ言より別れたるなり。故此卷に、取與呂布、天香具山てふは、山のかたち、麓の木立、池のさまゝでとゝのひ足たる山なればなり。耳爲の、青菅山は、宜奈倍てふも、山の像のそなはれる事、香具山にいへるが如し』と云つた。此處のヨロシにつき、燈に、『里言に、チヤウドヨイといふほどの心也』とあり、美夫君志に、『宜は俗にチヤウドヨイと云意にて、其事其物の相應したるをいふ。名倍は、考の別記に並の意なりされども別々に並ぶるにあらず、譬ば身一つに數の相を具と云が如し』とあり、講義にやはり、ナベを『ここには一の物に多くの事を兼ね備へたる如き意にいへり。』と云ひ、『譯してチヤウドヨクなどすべし』とある。卷三(二八六)に、宜奈倍吾背

乃君之負來爾之此勢能山乎妹者不喚。卷六（一〇〇五）に、神佐備而見者貴久宜名倍見者淸之。卷十八（四一一二）に、之可禮許曾神乃御代欲理與呂之奈倍此橘乎等伎自久能可久能木實等名附家良之母などの例がある。

○名細・吉野乃山者・影友乃・大御門從　ナグハシ・ヨシヌノヤマハ・カゲトモノ・オホミカドユと訓む。名細枕詞實に立派に吉野の山は、南門からといふ意。クハシは精細といふ意味を語原とし、連續によつて種々の色調の語となり得る。ナグハシ、ウラグハシ、カグハシ等である。古事記、八千矛神の歌の、久波志賣遠阿理登伎許志亘は麗し女を有りと聞こしてである。卷十三（三二二二）に、本邊者馬醉木花開末邊方椿花開浦妙山曾泣兒守山。同卷（三二三四）に、朝日奈須目細毛暮日奈須浦細毛。卷二（二二〇）に、名細之狹岑之島乃荒磯面爾。卷三（三〇三）に、名細寸稻見乃海之奥津浪の例あることは既に記述した如くである。

○雲居爾曾・遠久有家留　クモヰニゾ・トホクアリケルと訓む。雲際に遠く聳えてゐるの意。クモヰは雲の居るところ、雲際、空のこととなる。卷二（一三六）に、雲居曾妹之當乎過而來計類。卷六（九九八）に、如眉雲居爾所見阿波乃山。卷七（一二七一）に、遠有而雲居爾所見妹家爾早將至步黑駒などの例がある。

○高知也・天之御蔭　タカシルヤ・アメノミカゲと訓む。『高知也』は天を領するどいふ意に咏歎のャを添へて枕詞とした。『天之御蔭』は、舊訓アメノミカゲ。古寫本中アマノミカゲ（元・神）。アメノミカゲ（古・文・細）の兩訓がある。村田春海（天字讀法考）はアマノと訓むことを主張し、飯田武郷が其を踏襲したのを木村正辭がまたそれを駁して居る。嘗て先師伊藤左千夫が、これは、用例と聲調とに據つて定めるべきだと云つたことがあるが、講義にも然か論じ、なほ天を主體とする時にはアメといひ、連語熟語とする時にはアマとかはるものと見えるといひ、日本紀推古卷に、夜須彌志斯和餓於朋耆彌能訶句理摩須阿摩能椰蘇訶礙異泥多多須彌蘇羅鳴彌禮麼とある中の、アマノヤソカゲを旁證とせば、アマノミカゲと訓むのであらうと云つてゐる。併し、アマノミカゲといふ假名書の例はなく、安麻乃可波。安麻能波良。安麻能日繼ともいふが、安米乃美加度。安米能火。安米比度。安米能之多。阿米能迦具夜麻等の例があるから一様には律せられない。よつてアメノミカゲと訓むのに從つた。

○天知也・日御影乃　アメシルヤ・ヒノミカゲノと訓む。天を領する日といふ意味で日の枕詞とした。さて、此處の、天の御影、日の御影の、といふのは、一口にいへば、藤原の宮殿に屬してゐるといふ意味になる。元來この語の解釋は區々であつたので、『高キ天ノ影日ノ影モ移ル水ナレバ天

ノ久シキトトモニ日ノウセヌトトモニトキハニスミタ、ヘテアラム淸水トヨメリ』（代匠記精）。『天の御蔭、日の御影の成出る水といふのみ』（考）。『天の影日の影のうつる淸水といへる也』（略解）。古義・攷證等も大體略解說だが、古義には、一說として、『正しく云ば、此ノ天皇の天の御蔭日の御蔭と隱坐、此美豆の御舍の水こそはといふ』を記載し、美夫君志もそれに從ひ、『宮殿の事をかくいへり。殿屋は雨露を覆ひ日を覆ふが爲のものなれば、詞をあやなしてしかいふなり。諸注にこゝなるは祝詞とは別にて天の影日の影のうつる水といふ意なりといへるは非也』といひ、新考も古義の一說を引いて、『案ずるに天ノミカゲ日ノミカゲは天ニ對スル陰、日ニ對スル陰にて井に屋を設けたるを云へるならむ』といひ、講義も大體美夫君志と同說で、『天の御蔭、日の御蔭とは本來屋をいへるにて殿舍の上を覆ひて天日を避けて蔭をつくるによりいへる語なるが、後には汎く殿舍をさす語となれるなり』と云ひ、新解も、『天から隱れるところの義で、宮殿をいふ。日から隱れるところの宮殿の意』と解して居る。其等を綜合すれば、御舍の淸水、殿舍の淸水、御宮殿の淸水といふことに歸著するのであらう。そしてこの說を得た根據は、延喜式祝詞の用例で、例へば祈年祭の祝詞に、皇神能敷座下都磐根爾宮柱太知立高天原爾千木高知氐皇御孫命乃瑞能御舍乎仕奉氐天御蔭日御蔭登隱坐氐四方國乎安國登平久知食故爾云々とある。なほ燈では、『天の御蔭とは、天の上を覆ふその蔭

をいひ、日の御蔭とは日の上にてらし給ふその蔭をいふ也。天とさしたるは天津神もろ〳〵の御蔭をいひ、日とさしたるは天照大御神の御蔭をいふにて、前に四方四山の神の此御井をまもりますよしをいひて、さてまたこの天日をここにいふは、中央よりまもります神たちをいふ也。御蔭とは、天日の御うつくしみの下にあるよしをいふ也としるべし』とも云つて居る。

○水許曾波・常爾有米・御井之淸水　ミヅコソハ・トコシヘナラメ・ミキノマシミヅと訓む。水即ち藤原の御井の水こそは永遠に淸く湧くことであらう。あはれ御井の眞淸水！といふ意である。

『常爾有米』は、舊訓トキハニアラメ（古義・新講同訓）。古寫本中（元・神・古）ツネニアルラメ（攷證同訓）と訓んだのがある。考トコシヘナラメ（美夫君志・註疏・新考・講義同訓）又はツネニアリナメ。燈ツネニアラメ（捃解・新訓・新解・全釋同訓）。檜嬬手トハニアリナメ。以上の諸訓があるが、眞淵の二訓のいづれに從つても調をなす。或は元暦本等の如くツネニアルラメと訓んでもいい。此處は捃解・燈の如くツネニアラメと六音にするのは些か物足りない。そして、燈の如く、ミヅコソハツネニアラメを一句と考へても調をなさないことは無いが、これもどうかと思ふ。日本紀允恭卷に、等虛辭陪邇枳彌母阿閇椰毛。萬葉卷九（一六八二）に、常之陪爾夏冬往也。卷十八（四一〇六）に、等己之部爾可久之母安良米也天地能可未許等余勢天等がある。『淸水』は、舊訓キヨミヅ。僻案抄シミヅハ。考マシミヅ（諸注釋書從之）。『しみづ

を常の例によりて、眞の言をそへて調べをなしぬ』（考）とあるが、講義では、淸水をシミヅと訓むのは論は無いが、マシミヅと訓むことは、『未だ證を見ず』と云ひ、併し、『他によしと思ふ訓み方もなければ姑く之に從ふべし』と云つてゐる。新訓・新解・新講等は、マの音を嫌つて、シミヅだけにして居る。シミヅは、日本紀に寒泉・好井・寒波。古事記に淸水・寒泉とも書き、和名鈔水土類に、日本紀私記云、妙美井（之美豆）。また、石淸水（以波之三豆）とある。シミヅはスミミヅの約まつたのだと云はれてゐる（攷證其他）が、また、シミイヅルミヅの義だと云つてゐる（講義）。卽ち岩シミヅは岩からしみいづる水の義だといふのである。マを添へたのは、マガキ、マカイ、マカヂ、マクサ、マグシ、マクズ、マグヒ、マコモ、マカモ、マタマ、マハリ、マハニ等の用例がある。

大意 〔八隅知之〕わが大君、〔高照〕日の皇子たる天皇（持統）は、〔麁妙乃〕藤井が原に新に皇居を創め給うて、埴安の池の堤の上にお上りになり展望し給へば、大和の木々茂つた青い香具山は、東の方の御門に對つて春山として茂り榮えて居る。若く瑞々した畝火山は、西の方の御門に對つて若く榮ゆる山らしく御いでになる。青菅の茂つた耳成山は、北の方の御門に對つて貌好く神々しく立つて居る。また、〔名細〕吉野の山は、南方の御門から雲際遠く聳え見えて居る。〔高知也〕天を蔽ふ蔭、〔天知也〕日の光を蔽ふ蔭としての宮殿に、湧くこの水こそは、永遠に湧き榮えることであらう。あ

はれこの御料の井の眞清水よ。

鑑賞 この歌は大體三段から成り、第一段で天皇が新に造營し給うた皇居を眺めたまふことをいひ、第二段でその皇居の有樣を云ふのに、御門と名山との關係を以てし、第三段に於て、宮殿内の御井の眞清水を以て新皇居を頌讃し、一篇を結んで居る。

第二段の宮殿の御門とそれを守る周圍の山々の關係を敍するのに、東門に對して香具山、西門に對して畝火山、北門に對して耳成山、南門に對して吉野山といふ具合に、守護する靈山を以て四方を圍んで居るものとなし、その中央の宮殿に永遠の清泉を湛へて聖壽萬歲を象徵するといふ一篇の構成であるから、全體が幾何學的、立體的、直線的で、且つ、求心的（ツエントリペタール）である。整正端嚴の特徵は、この幾何學的・求心的構成に本づくものである。その幾何學的に精微なことは、昭和十年十月、鴨公小學校の境内に發掘せられた、藤原宮殿の北門趾に立つて直線を北方へ引けば、耳成山腹の中央點に到達するやうになつて居ることを、私自身目測して、この長歌の寫生に驚歎したのであつた。それ程藤原宮殿の構成が幾何學的なのである。

そして、その幾何學的構成をあらはすに、『大和の青香具山（あをかぐやま）は日の經（たて）の大御門に春山と繁みさび立てり』と云つてゐる。單に靑く茂つた香具山を云ふにこれだけの事をいつてゐる。その言語は秀潤

豐腴で、單に乾燥した立體といふやうなものでは無い。『畝火のこの瑞山は日の緯の大御門に瑞山と山さびいます』でもさうである。『耳成の青菅山は背面の大御門に宜しなべ神さび立てり』でも、『名ぐはし吉野の山は影面の大御門ゆ雲居にぞ遠くありける』でもさうである。言葉を繰返して調子をとりつつ、一つの波動形をなしてゐるところは、決して堅い直線的立體的では無い。この二つの融合があるので、沙漠國の城廓のやうな、或は南方歐羅巴に見る宮殿のやうな、乾燥した立體感と大にその趣を異にするのであり、また、一篇の主眼たる、永遠の淸泉を導き來るのに大きい力として役立つてゐるのである。

また、當時の都市計畫は支那の制にならつた點があるので、文選の例へば東都賦・西京賦・南都賦等を見れば類似の表現のあることは直ちに氣づくけれども、『東には則ち、洪池淸籞あり、淥水澹澹たり、內には川禽早く、外には葭菼豐なり。鼉黿と龜魚とを獻じ蝸蠯と菱芡とを供す。其西には即ち、平樂都場の遠きに示す觀あり、龍雀蟠蜿し、天馬半漢たり。瑰異譎詭燦爛炳煥たり。奢るも未だ侈に及ばず、儉なるも陋ならず、規王度に遵ひ、動もすれば』(東京賦)『南のかた、蒼梧漲海に馳せ、北のかた、紫塞鴈門に走き、柂くに漕渠を以てし、軸するに崑崗を以てし、重江複關の隩、四會五達の莊あり』(蕪城賦)といふやうな、くどいものである。文學發達史を初歩的に解釋すれば、

支那の方が發達の程度が日本のこの長歌などよりも進歩してゐるといふことになる。併し、藝術の高級批評になるとあべこべである。卽ち結果からいつて、さういふ惡くどい支那の美辭麗句は、到底日本のこの長歌の簡淨なものには及ばないといふことになるのである。

次に第三段に移つて、『水こそは常(とこし)へならぬ御井の眞淸水』といふ、全體の眞髓であり結末であるこの句も、惡くどくない淸麗な句である。そして、日本語としては最上等の部類に屬するものである。『醴泉溜を陰渠に湧かし建木景を千尋に滅し琪樹璀璨として珠を垂れ』といふのも棄て難いが、日本語のこの簡素單純は、つまるところ抒情詩としては高級である。

今、この一篇の長歌を形態として示すときは、次の如きものになるのであらう。

「やすみしし　わご大君」
「たかてらす　日の皇子」　あらたへの　藤井が原に　おほみかど　はじめ給ひて
　　　　　　　　　　　　はにやすの　堤のうへに　あり立たし　見し給へば

大和の　青香具山は　日の經の　大御門に　春やまと　繁さびたてり
畝火の　この瑞山は　日の緯の　大御門に　瑞やまと　山さびいます
耳成の　青すが山は　そともの　大御門に　宜しなべ　神さびたてり
名細し　吉野の山は　影ともの　大御門ゆ　雲居にぞ　遠くありける

「たかしるや　天のみ蔭」
「あめしるや　日のみ影」の　水こそは　とこしへならめ　御井のま淸水

「長歌詞珠衣」に據れば、初句二句對、次八句、次六句長對、次同長對、次二句對、次終句三句、合四十三句、中長歌といふことになる。

さて、この結末の、『水許曾波、常爾有米、御井之淸水』の訓であるが、『水こそは、常にあらめ、御井の淸水』と、五・六・六の音に訓むのは、前からの聲調を受けて來ての結末としては何處かに不滿を感ぜしめる。また、『水こそは常にあらめ、御井の眞淸水』と、十一、七と訓むのも、雄略天皇の御製（卷一。一）の、我許曾者背齒告目の十一音（五、六音）の例を參照すればするのであるが、それにしてもやはり不調和を感ぜしめる。もつとも、この長歌には、日之皇子（四音）。日本乃（四音）。畝火乃（四音）。背友乃（四音）。名細（四音）。見之賜者（六音）。大御門爾（六音）。天之御蔭（六音）。日御影乃（六音）などとあつて、必ずしも五・七でない處があるから、結末も、ツネニアラメ。ミヰノシミヅの六音・六音を絶待に否定し得ないが、『かげともの、大御門ゆ、雲居にぞ、とほくありける』の調べを受けるには、やはり、『とこしへならめ、みゐのましみづ』の七音・七音調がやはり好いのではあるまいか。淸水に、マの音を加へず、僻案抄で、ミヰノシミヅハとハを加へて七音に訓んだのも、自然の聲調に隨順したものと解釋することも出來るのである。

次に、この淸水に冠した、『高知るや、天の御蔭、天知るや、日の御影の』といふ句の解釋も、種

種あつたが、やはり上に解したやうで好いと思ふ。卽ち、祝詞の、『天御蔭日御蔭』と同意義に解するので、結局、皇居、宮殿にあるといふ意味になり、皇居の鎭護となる四山に圍まれて、その中に籠りつつ瑞泉が永遠に湧く趣となるのである。

この歌は、御井を歌つたものであるから、最も大切な御井の水はやがて聖壽萬歳の象徵ともなり、また實用的にいへば、無くて叶はぬ生活の根源をなすものであるから、その大切な瑞泉を取扱ふのに、樹木の繁つた神山を以て保護したやうにしたのも、最も自然的な表現といふことも出來るので、さういふ點でも、この歌は極めて巧妙である。

次に、この歌は、文法的に切れてゐるところがある。『しみさび立てり』。『山さびいます』。『神さび立てり』。『遠くありける』。『常へならめ』の如きである。これは前にも云つた如く、內容が幾何學的だからで、整正の氣が其處から出て來てゐるのである。然るに、文法的にこの切れるのは、全體としては決して分離して居らずに、やはり連續聲調を成就してゐるのは、『しみさび立てり』。『神さび立てり』。『山さびいます』。『遠くありける』と、おのづから繰返しになつて居るからであつて、それゆゑ、後世の長歌の如くに、ぼろぼろに脆くなつて切れるやうなことは決して無いのである。

次に、この歌の中で、靑香具山といふ語なども誠に旨いもので、語としては正に神品といふべきである。畝火の靑菅山に相對したものだが、直ちに靑香具山といつたのは大膽でもあり巧緻でもあり、後代の吾等の大に學ぶ點のある造語方法である。『靑香具山とは無造作で働いた詞使である』（左千夫、新釋）。また、『徒言（ただごと）の如くにして善く見れば心高き』（眞淵）ものである。

この歌につき、講義では、『この歌そのいふ所簡素にして、しかも聲調堂々たり。王者の居にふさはしき歌といふべく、集中稀に見る傑作なりとす』と評してゐるが、自分もまたこの長歌を高く評價する一人で、ある意味での形式化の極致だとさへ思つて居るものである。

先師伊藤左千夫は、『此の歌の内容を檢して見ると、頗る單純なもので、思想も又平凡極つたものである』と云つて居るが、此歌については隨分多くの言辭を費して居る。そして、『かう貶し去つて終へば、此の歌の價値は甚だ少くなる譯であるけれど、一面から見ると、此の歌は萬葉集幾百篇の長歌中に於て、只一つしか無い形と着想とを持つた歌である。多くの詩篇中に異彩を有して居るとも云へるのである。子規先生の存生中、予は一夜先生と此の歌に就いて話合うた事があつた。予は此の歌の内容が甚だ單純なものであるのに、餘りに形容が事々しいのが厭だと云ひしに、先生は萬葉集中に只一つかういふのがあるのは面白いと云はれた。當時の予は予の批評眼其の物が此の歌よ

りも更に單純であつたのである。先生は別に考ふる處あつたのであらうけれど、其の後予は先生より聞くところ無くて終つた』といふごとき興味ある述懐をも漏らして居る。

この御井は、どういふ形式のものだつたらうか。此は恐らく清泉で、水量も豊かに涌流れてゐたものであらう。攷證に、『いにしへ井といふに二つあり。一つは、今のごとく底深く掘たるをいひ、一つは飲べき水にまれ、田に引水にまれ、用る水に汲んとて水を引て取る流をも井とはいひし也。中略こゝなる御井も、下に御井之清水とよめれば、藤原宮の大御水に汲んとて外より流を取入られたるその流をいへるなり。この御井は山の井のごとく、わき流るゝ井なるべし。歌の末に御井之清水とよめり。今の世の心にて思へば、井と清水と別なるやうなれど、清水とは流るゝ水をいひ、井とは人の手にて掘たるをいへる名也。おのづからに出る水を泉といひ、人の掘たるを井といふのみ。物は井も泉も一つもの也。されば井よりわき流るゝ水なれば井の清水といはん事論なし。釋名釋宮室に、井清也、泉之清潔者也云々とあるにても、井と泉と一つ物なるをしるべし。さて井に二つあり。一つは水あさくわき流るゝあり。そこふかく水ありて流れぬもあり、こそ(は)その所々にいふべし。』と云つてある。おもふに、從來の說のやうに、天の御蔭、日の御影をば、天日が映る井といふやうに解せば、深く掘つた井のやうにも思はれるが、此處は恐らく宮の境域中にこもらせた感じ

で、天の御蔭日の御影と云つたものであらう。石見國府趾の伊甘池などは今でもあんなに清い水が豊かに湧いてゐるのだから、此處の御井といふのも、大體あゝいふものであつただらうと想像することが出來る。山田博士の談に、櫻井は今でも水量豊かな露天清泉で、古へを偲び得るといふことである。

次に、この藤原の御井の趾は現在の何處の邊であらうかといふ問題で、これは誰でも一たびは通過する一出題であらう。昭和十年十月、藤森朋夫氏と共に藤原宮趾を訪うた時にも、しきりにこの問題が頭の中を往來した。考に、『香山の西北の方に今清水有といふは是にや』といひ、檜嬬手は、大和名勝志に引いた多武峯廟記の『往古藤井と云ふ名水あり。清水の上に松栢掩ひたるに、丈(タケ)なる藤はひかゝりて、日の影を見ざりければ、みな月の望(モチ)にも歯にしむばかりなりき。其藤の古株鷺栖(サギスノ)杜(モリ)の傍に近來までも遺りてありと云々』といふのを記入してゐる。これで見れば、御井趾は鷺栖杜の邊にあつたといふことになる。また、鴨公小學校長吉田宇太郎氏から話を聞いて、高殿の常願寺境内の井戸をも見た。また、燈には、『此藤原ノ御井といふは、宮中にありける井にや』とあるのを讀めば、その想像は、鴨公小學校の近くにあつたといふ想像になる。私は、小學校から高殿に通ずる小道路を行きつつ、稲田の隅に井戸二つを發見して、非常に喜んだのであつたが、此は土地の習

慣で、水を溜めるために掘つて置く井であつた。併し、その邊には、地下水が豊かで、掘れば清い水が湧き出づるといふことを證明するものであるから、私はひそかに、御井はやはり、大安殿の近くの宮中にあつたので、常願寺或は鷺栖神社の方では無かつただらうと空想しつつ暫く其處に佇立してゐたのであつた。

終りに、この歌の作者の問題であるが、短歌の次に、『右歌作者不詳』と明記してあるのだから、當時既に作者の不明であつたことが分かる。併し、誰かが作つたものに相違なく、後世になつて、個人の作者といふものを重んじ、また明記する時代の學者にとつては、この作者が誰であつただらうかと追究することもまた無理でない心境の一つである。そこで、美夫君志に、『此歌のいとたくみなるは、上の役民の歌と共に、人麻呂朝臣などの作にやとぞおぼゆる』といひ、安藤野雁の新考にも、『さて此歌も作者知られねども人麻呂主の口つきに似たり』と云つて居る。檜嬬手の如きは、題詞まで、『柿本ノ朝臣人麻呂、詠ニ藤原宮御井ニ歌一首並短歌一首』と直し、『是をも柿本ノ朝臣ノ歌とすること聞知る人は知るべければ、餘りふかく憚るべきわざにはあらざるべし』とも云つて居るのである。併し斯ういふ說は通用したのではなく、僻案抄には、『長歌の作者は男女わかちがたし。短歌はきわめて女子の作なるべし』といひ、左千夫新釋には、『是は必ず萬事おほまかに泰平を樂しめる

高貴の人の作であること疑ふ餘地もない』と云つてゐる程である。

右の如く、人麿作だらうといふ想像說もあるので、この歌をも附錄として評釋したのであるが、實際、この時代の人々は皆優れた歌を作るので、縱ひ、人麿を否定し得ないとしても、躊躇なく人麿作と斷定することは無論出來ない。斷定に鋭い眞淵でも、『時なるかな』と云つて居り、左千夫も、『藤原宮時代卽ち此の持統天皇の御世は、普通なる歷史家の嘗て注意せざりし、從て世に知られざりし、多くの光明を包んだ御世であるらしいのである。次の集に傳へられた、各種類を異にせる數篇の長短歌に、其の時代的光明のにほひを明に見ることが出來るのである。此の長歌の如きも、其の時代の光明を認め得る有力な一篇であるから、其の點に於て此の歌の上に大なる意義を發見し得るのである』と云つて、人麿作でないものとして鑑賞してゐる。

私は以上の如き諸說をも念頭に置いてこの歌を味つたことがある。併し、味ふうちに、いつしかに人麿的なにほひの體に傳はつて來るのを覺ゆるのであつた。鑑賞の主觀的境界に入れば、何人の拘束をも受けずに獨りしづかにその想像に浸ることが出來る。ただ客觀的事實として、檜嬬手の如き態度に出づることを避けつつ、そして、みづから個人としての作者の名を沒せしめた當時の人々を懷しく思ふのである。

追記。『天の御蔭、日の御蔭』につき、中島光風氏は、次の如くに解釋して居る。『私思ふに、「天のみ蔭」とは、推古紀の歌に、「天の八十蔭」とあるのと同じくして、元來は文字通り、天のいくへもの蔭、すなはち、高天原の奥の奥をさしたものであり、「日のみ蔭」とは、日の神のみ惠みの蔭といふ程の意味で、やがてそれは「天のみ蔭」と同じ内容のことばであると思ふ。さて高天原の奥の奥とか、日の神のみ惠みの蔭とかは、具體的に何を意味するのかといへば、それはすなはち皇孫命(スメミマノミコト)の天(アマ)つ高御座(タカミクラ)のあるところである。元來の意味はさうであるが、それを現實世界に移してその天上なる天つ高御座の延長としての地上なる皇孫命の御舍(ミアラカ)をさすことになつたので、それはなほ、「天つみかど」、「日のみかど」などのことばが、同じく皇宮の義に用ゐられるのと同じ意味合のものである』(短歌研究第五巻の二)。

短歌

【巻一・五三】

藤原(ふぢはら)の大宮(おほみや)づかへあれつぐや處女(をとめ)がともは羨(とも)しきろかも

藤原之　大宮都加倍　安禮衝哉　處女之友者　之(乏)吉召(呂)賀聞

語釋　**○安禮衝哉**　舊訓アレセムヤ。代匠記初アレツゲヤ(考・略解・註疏同訓)。僻案抄アレセメヤ。又は哉は武の誤でアレツガム。玉の小琴、哉は武の誤でアレツガム(燈・攷證・檜嬬手・新考同訓)。古義アレツクヤ。

美夫君志、哉の儘でアレツガム（講義・全釋同訓）。新訓アレツグヤ（新解・新講同訓）。〇之吉召賀聞　もとシキリメスカモなどと訓んで居り、代匠記シキメサンカモ。僻案抄シキメサルカモ（考同訓）。攷證シキメセルカモ。美夫君志シキメスカモ。玉の小琴に、『召の字は必呂の誤にて何しきろかも也。之吉の上に言落たる也。其言は未思ひ定めず。其言に從ひて、上の哉字も、武の誤にてあるべし、道麻呂云。結句の之の字は乏の誤、召は呂の誤也と云り。此考宜し』といひ、爾來諸家この說に從つたが、攷證・註疏等は必ずしも其に從はないで、『召』の字義に據つて解釋して居る。トモシは、ウラヤマシといふ意の古言で、古事記雄略條に、微能佐加理毘登登母志岐呂加母といふ例がある。なほ、トモシの例は、卷一（五五）に、朝毛吉木人乏母亦打山行來跡見良武樹人友師母。卷三（三五八）に、武庫浦乎搒轉小舟粟島矣背爾見乍乏小舟。卷十七（三九七二）に、夜麻扶枳能之氣美登毘久久鶯　能許惠乎聞良牟伎美波登母之毛等がある。

大意　この藤原の宮殿に奉仕する處女らは、次ぎ次ぎに生れいでて、この榮ゆる宮殿に奉仕することであらう。誠に羨しいことであるといふので、これは御井の歌の反歌であるから、采女として御料の水の事に奉仕するのを云つてゐるのである。

鑑賞　この歌は、前の御井の歌と直接意味の上の連關が無いやうに見えるので、眞淵も、『右の

長歌の反歌とせしは、歌しらぬものゝわざにて、左の歌は必右の反歌にはあらぬ也』（考）と云つたが、御杖は、『古來註者これをうたがひて長歌とはことすぢの歌ならむといへるは、例の後世ひがみ也』と云つた。山田博士も、此處の處女といふのは多くは采女を指せるものだらうから、おのづから水に縁故がある、令集解に、水司膳司二司必以二采女一とあり、水司の采女六人、膳司の采女六十人ともあり、また、采女者必令レ仕二主水司主膳司一耳とある。『されば御井につかへ奉る采女を見て主としてそれをさしてうたへるがこの反歌なるべければ、御井歌の反歌としては決して唐突にあらざるなり。』（講義）と云つてゐる。

長歌で、莊嚴に形式的にいひあらはして來て、此處は、麗しい采女の處女群について歌ひ、然かも、『羨しきろかも』と云つてゐるのは、めづらしくもあり、女體に即してゐるやうでもあり、空虛でなく、實質的に『生』のあらはれてゐる點で、私の愛誦してやまない歌の一つである。新皇居の頌歌としても、空々しくなく、いかにも親密で、人間的である。第三句をアレッグヤと訓むにしても、そのヤは咏歎の助詞で、やはり、處女に續くのである。アレッガムの方は平凡のやうだが、聲調も順直である。この訓は、讀み馴れた方に傾くから、新訓に馴るればその方の訓に據つて鑑賞することもまた可能である。

アレツグは生れ繼ぐで、卷四（四八五）に、神代從生繼來者人多國爾波滿而。卷六（一〇五三）に、八千年爾安禮衝之乍等の例がある。『衝』をツグと訓んで好いことは、卷六の例を見ても分かるし、美夫君志・講義等にもつと精細にその根據が云つてある。

この歌の結句は、『之吉召賀聞』となつてゐたので、誤字とせずに、『天子女帝ニテマシマセバ、生ツガン處女ハシキリニ召給ンカト云心也』（代匠記精）等と解し、僻案抄・考・攷證・註疏等の解も同一系統に屬して居る。そして、卷八（一五八四）の、布將見跡吾念君者。卷十一（二六四三）の、敷而毛君乎將見因母鴨などの例をその證としてゐる。併し、シキリメスカモでも、シキメサルカモでも、ちつとも自然の御行動でなく、從つてちつとも詩的ではないのである。即ち、鑑賞の場合に、シキメサルカモと、トモシキロカモとの價値の差別について熟慮すれば大に有益であるから、さういふ點では、シキメサルカモ等の訓もまた無駄では無いといふことにもならうか。

皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十三首

○

題意 皇子尊は、日並知皇子を申す。皇子尊宮舍人は、東宮の舍人で、東宮職員令に、舍人六百人とある。此は宮中に於ては其の内舍人と大舍人とに相當するものであらう。宮中内舍人の職分は、『掌ニ帶レ刀宿衞供奉雜使ニ若駕行分ニ衞前後ニ』であり、大舍人の職分は、『掌ニ左大舍人名帳、分番宿直假使容儀事ニ』であるから、東宮舍人も大體其に準じて理解することを得る。『慟』は、説文に大哭也。玉篇に哀極也。類聚名義抄にイタムと訓じて居る。『傷』は、爾雅に憂思也。類聚名義抄にイタムの訓がある。二つを熟字にして、イタミテ、或はナゲキイタミテと訓むか（講義）。『その人々分レ番（チ）て宿直（トノイ）するに、今尊の薨ましゝ後も、島宮の外重（トノ）を守ると、佐太岡の御喪舍（ミモノヤ）に侍宿（トノイ）すると有故に、こゝかしこにての歌どもある也』（考）。六百人の舍人のうちに、挽歌を作つたものがもつと數多くあつたものを選拔して二十三首としたものであらうか。歌の内容は、眞淵の言の如く、『こゝかしこの歌ども』で、時の關係もまちまちであるが、同時に纏めて讀みあげたものであらうと思ふ。

【巻二・一七一】

高光る我が日の皇子の萬代に國知らさまし島の宮はも

高光　我日皇子乃　萬代爾　國所知麻之　島宮婆母

○

語釋　**○高光・我日皇子乃**　タカヒカル・ワガヒノミコノと訓む。我が皇太子のといふ意。『高光』は舊訓タカテラス。代匠記初タカヒカル。古寫本中タカクテル（金・類・古・神）。古事記景行條に、多迦比迦流比能美古。雄略條に、多加比加流比能美古の例がある。『日皇子』は、日神の子孫を意味し、天皇・皇太子・皇子にも廣く用ゐた例のあることは、前に既に解釋したとほりで、此處では、日並皇子尊卽ち皇太子に用ゐて居る。**○萬代爾**　ヨロヅヨニと訓む。萬代に、永久にの意。巻五（八一三）に、余呂豆余爾伊比都具可禰等。同巻（八七三）に、余呂豆余爾可多利都夏等之。同巻（八七九）に、余呂豆余爾伊麻志多麻比提。巻十七（三九一四）に、餘呂豆代爾可多理都具倍久。同巻（四〇〇三）に、與呂豆余爾伊比都藝由加牟等の假名書きの例があり、なほ、漢字の例は、巻一（八〇）の、寧

樂乃家爾者萬代爾吾母將通。卷七（一一四八）の、住吉之岸之黃土於萬世見。卷十三（三二三六）の、千歲爾闕事無萬歲爾有通將得等のほか用例が多い。○**國所知麻之**　クニシラサマシと訓む。御治にならうと思つてゐた（連體形で下の島の宮に續く）の意。シルの敬語シラスの將然形に假定のマシを附けたもので、皇太子が此處においでになつて、『天下をしろしめし給はましと思ひゐたる島の宮』云々と續く句法である。卷三（三八七）に、此間毛有益柘之枝羽裳。卷六（九四八）に、友名目而遊物尾馬名目而往益里乎。卷十五（三七三七）に、故非毛奈久安良末思毛能乎。古事記履中條に、多都碁母母母知弖許麻斯母能等がある。○**島宮婆母**　シマノミヤハモと訓む。島の宮は、噫といふぐらゐの意。『婆』字は古寫本中（類・金・古・神）には、『波』に作つたのがある。結句のハモは、ハは係助詞で、下に述語があつて結ぶのが普通なのを、モといふ咏歎助詞を加へ、述語を省略して感慨を籠らせたものである。それゆゑ用例の多くは結末に使つて居るし、感動と聲調との必然的な要求から斯る省略法が出來たものであらう。古事記倭建命の、阿豆麻波夜。現代語の、『今日は』なども同樣系統の用例である。卷二（二一〇）の、嬬屋之内爾晝羽裳浦不樂晩之。卷四（七三一）の、吾名者毛千名之五百名爾雖立。卷五（八九七）の、晝波母歎加比久良志夜波母息豆伎阿可志は、係と結とあつて述語の具はつた例であり、卷三（四五五）の、芽子花咲而有哉跡問之君波母。卷五（八九〇）の、阿袁麻多周良武知知

波波良波母。同卷（九〇〇）の、久多志須都良牟絁綿良波母。卷十四（三五一・三）の、爾努具母能安是可多要牟等伊比之兒呂婆母。卷二十（四四三一）の、奈奈弁加流去呂毛爾麻世流古侶賀波太波毛等は述語を省略した例である。述語を略して感慨を籠めたといふ證は、卷四（七六一）の、早河之湍爾居鳥之緣乎奈彌念而有師吾兒羽裳何怜といふので明かである。島の宮は現在の高市郡高市村島莊を中心としたあたりにあつたと考へていい。天武天皇紀に、五年春正月庚子朔。乙卯。是日天皇御㆓島宮㆒宴之。十年九月丁酉朔。辛丑。周芳國貢㆓赤龜㆒乃放㆓島宮池㆒等と見えて居る。

大意 わが皇太子の、永久にお住ひになつて、國を御治めになるものと思つてゐた、その島の宮は、噫。と歎じて、皇子薨去後の、昔に變る有樣を悲しむ氣持を籠らせた歌である。

鑑賞 この歌は、配列の順序から云ふと、第一番目のものだからであらうが、謂はば冒頭のやうなもので、稍概括的に歌つたものを此處に置いてある。此は、人麿が代作したものだといふ說に從ふ場合には、無論意識してさう作つたものとならうが、代作說を否定しても、舍人等が作つた多くの歌の中から廿三首だけ選拔してそれを配列した時に、先づ此歌を最初に持つて來たと解釋していいと思ふのである。

そこで、二十三首讀みあげるやうな場合には、自然かういふ歌が好いのであつて、長歌ならば、

はじめの方の數句に相當するのである。併し、概括的だといつても、結句には、强い感慨を籠め、餘情を籠めた句を持つて來たもので、既に類例を示した如く、三十一音律の歌の結句としては、優秀なものの一つである。

それから、第四句の、『國しらさまし』といふのは、其處で切れて休止となるやうに思はれるが、さうでなくて、『島の宮』といふ名詞に續けた連體形であることも、既に前に云つたとほりである。さすれば、シラサマシ・シマノミヤハモと連續して、息を切らずに讀む方が好い。

一首は、初句から結句に至るまで、心の動くままに歌ひ、無理な曲折や、奇態が無く、結句にその中心感動を置いたのが、一首を安定せしめ、餘響を持たせた所以でもある。

此一首は、人麿の力量を待たずとも、人麿の一寸した補助ぐらゐを豫想するならば、六百人も居る舍人中に、この程度の歌を作り得るものは居たのであつただらう。さう私は祕かに思ふものである。それだけまたこの歌は平凡だといふことにもなるが、人麿の代作説を信ずる人々は、人麿が餘り骨折らずに、腕に任せて樂々と作つたから、この程度のものになつたと解釋するのかも知れない。

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも（古事記景行條）

燒津邊に吾が行きしかば駿河なる阿倍の市道に逢ひし兒らはも（卷三。二八四）

天地と共に久しく住まはむと念ひてありし家の庭はも（巻四。五七八）
かういふ結句の歌を參考歌として味ふことが出來る。

○

【巻二・一七二】

島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君坐さずとも

島宮　上池有　放鳥　荒備勿行　君不座十方

○島宮・上池有　シマノミヤ・ウヘノイケナルと訓む。島の宮にある上の方の池のといふ意。島の宮は今の高市郡大字島莊の地で、其處に池田といふ名が殘つてゐるあたりが池であつたらうと云はれてゐる。『上池』は、舊訓ウヘノイケナル（美夫君志・講義・新訓・新解同訓）。考池上の誤としてイケノウヘナル（略解・攷證・檜嬬手・新考同說）。童蒙抄上は勾の誤としマガリノイケノ（古義同說）。古寫本中、神田本のみ『池上』とあつて、『上池』といふ左記がある。さて、ウヘノイケをば、イケノウヘ、卽ちイケのことと同義にも解してゐるが、新解には、『上にも下にも池があつて、段々に水が流れ下るのであらう』と解し

てゐる。また、美夫君志には、『按に、島宮の山上にある池にて、勾乃池とは別なるべし』と云つたが、講義では、『下にある勾池と同じきか別なるかを知るに由なきことなり』と云つて居る。このウヘノイケといふ語は、卷十五(三七〇三)の、多可思吉能宇敝可多山者久禮奈爲能也之保能伊呂爾奈里爾家流香聞などが參考となるであらう。○**放鳥** ハナチドリと訓む。此は、放ち飼ひにしてゐた水禽類のことで、既に契沖が云つた如く、『放鳥トハ、モトヨリ翅ナド切テ放置セ給ヘル水鳥ナリ』(代匠記精)である。然るに、考で、『飼せ給ひし鳥どもを薨まして後に放たれたるが、猶こゝの池にをる也』といひ、古義なども其に從つたが、この放生の事は時代が下るので、此歌に應用が出來ない。

○**荒備勿行・君不座十方** アラビナユキソ・キミマサズトモと訓む。疎く遠ざかりゆくな、縱ひ皇子尊がおいでにならずともといふ意。アラブの同義の例は、卷四(五五六)に、筑紫船未毛不來者豫荒公平見之悲左。卷十一(二八二二)に、栲領巾乃白濱浪乃不肯緣荒振妹爾戀乍曾居。同卷(二六五二)に、妹之髮上(小)竹葉野之放駒蕩去家良思不合思者等の例がある。

大意 島の宮の、上の池に放ち飼ひにしてゐる水禽どもよ、皇子尊が御かくれになつた後でも、疎く遠ざかり行くなよ。汝等をば皇子尊の御形見として偲び奉らうとおもふから、といふぐらゐの意である。

鑑賞 前の歌の結句が、『島の宮はも』であるから、この歌の初句で、『島の宮』と云つたのは、同題幾首の歌として連續して味ふ場合には、當を得た配列の爲方でもある。併し、音が餘り卽き過ぎて居るといふ說もあり得るけれども、そのかはり、この歌は概括的でなく、もつと細かい寫生に入つてゐる。

この『放ち鳥』の句は前の人麿の歌にもあつたが、放ち飼にしてゐた鳥で、一々の名を云はずとも、種々の水禽が居たものであらう。それに向つて、『荒びな行きそ』と云つて愬へてゐる。その心持は自然で且つ切實である。これならば現代人が如是に愬へてもさう態とらしく聞こえぬほどで、疎く遠ざかり、心の離れてゆくことをアラブといつたのなども、原始的で直接で誠に感が好い。このアラブの語は、天然現象の表現から此處に移つたもののやうに思へるが、歌のうへの造語を考へる時のよい參考になるものとおもふ。

この歌の方は、前の歌よりも、もつと具體的で、聲調にも稍細味が出來、緊密になつてゐる。第四句で切れて、結句から還るやうになつてゐるが、其は意味のうへのことで、聲調のうへからいへば、トモといふ音は、前の歌のハモなどと同樣の效果を持つてゐるのである。かういふ實際を見れば、必ずしも意味のうへの、咏歎語を必要とせずに、音的に咏歎となり得ることが明瞭である。

この歌は、前の歌よりも好いのは、具體的だからである。ただ、『君まさずとも』といふ結句は稍輕いといへばいへるので、若し人麿が苦心して作るならば、もつと重厚沈痛の調べを成すところだと思ふのだが、どういふものだらうか。

○

【卷二・一七三】

高光るわが日の皇子の坐しせば島の御門は荒れざらましを

高光　吾日皇子乃　伊座世者　島御門者　不荒有蓋（益）乎

語釋　**○伊座世者**　イマシセバと訓む。御存命でおいでになるならばといふ意。イマスから、左行變格の爲に續けた語法で、卷三（四五四）に、愛八師榮之君乃伊座勢波昨日毛今日毛吾乎召麻之乎とあるイマシセバと同じである。**○不荒有蓋（益）乎**　アレザラマシヲと訓む。『蓋』は、古寫本中、『益』に作つたものが多い（金・類・古・神・西）から改めた。此處のアルは、荒廢する意味で、卷一（三三）に、浦佐備而荒有京見者悲毛。卷六（一〇四七）に、馬裳不行人裳往莫者荒爾異類香聞等用例が

多い。

大意 高光（たかひかる）（枕詞）わが日の皇子にましますゝ皇子尊が今も御在世であるならば、この島の御殿は荒れ行くことが無からうものを、と云つて、日毎に荒廢する氣はひを歎じたものである。

鑑賞 この歌も、第一の歌の如くに稍概括的に歌つてゐる。そして此は、既に皇子の宮殿がどしどし荒れ廢れた樣を直寫したといふよりも、近き將來のことを豫想し、人生の經驗に本づく心情によつて斯く云つたものと思へる。

この歌などになると、普通の歌で、あへて人麿の代作を必要としないやうに思へるのであり、また、代作だとせば、第一の歌に既に、『高光る吾が日の皇子の』と云つてゐるから、此處に二たび繰返すのは手際の惡いことを示すのであつて、かういふ點でも、私は人麿代作說よりも人麿補助說を云はうとしてゐるのである。

この歌につき、眞淵は、『くやしとも悔しきまゝによめる也』（考）といひ、守部も、『その宮に年來仕へ奉りし心には其宮の荒れゆく事の悲しきあまりに云へる也』（檜嬬手）と云つて、讚歎してゐるやうだが、其は意味のうへの同情で、一首全體としてはさう優秀な歌と云ふことは出來ぬであらう。

【卷二・一七四】

外に見し眞弓の岡も君坐せば常つ御門と侍宿するかも

外爾見之　檀乃岡毛　君座者　常都御門跡　侍宿爲鴨

○

語釋 **○外爾見之** ヨソニミシと訓む。かかはり無いものに見て居つたの意。卷三(三八三)に、筑羽根矣四十耳見乍有金手。卷十四(三四一七)に、與曾爾見之欲波伊麻許曾麻左禮。卷十五(三五九六)に、之良奈美多加彌與曾爾可母美牟。同卷(三六二七)に、與曾能未爾見都追須疑由伎。同卷(三六三二)に、與曾爾也故非無由久與思乎奈美。卷十七(三九七八)に、宇乃花乃爾保弊流山乎余曾能未母布里佐氣見都追。卷十九(四一六九)に、山乃多乎里爾立雲乎余曾能未見都追。卷二十(四三五五)に、余曾爾能美美弖夜和多良毛等の例がある。また、『外』と書いた例は、卷三(四二三)の、君乎婆明日從外爾可聞見牟等用例が多い。さて、このヨソといふ語は、山田博士に據れば、純粹な國語でなく、『餘處』といふ漢語が輸入せられて、それが國語化したものであらう。**○檀乃岡毛・君座者** マユミノヲカモ・

キミマセバと訓む。眞弓の岡だけれども、御陵所として君がおいでになるからといふ意。卷一（三六）に、宮柱太敷座波（ミヤバシラフトシキマセバ）。卷九（一八〇九）に、虚木綿乃牢而座在者（ウツユフノコモリテマセバ）等、多くの例がある。○**常都御門跡・侍宿爲鴨** トコツミカドト・トノヰスルカモと訓む。永久においでになる宮殿（卽ち御墓所）として奉仕することであるといふ意。『侍宿』は、漢文の熟語で、日本紀等にも使つてゐる。古來トノヰの假名であつたのを、眞淵は、『侍宿と書からは、こは殿宿（トノイ）也。然は假字は止乃伊（イ）也。後世とのゐと書はおしはかりのわざぞ』（考頭注）と云つて、トノイと直したが、宣長は、『侍宿の假字を師の考に、トノイと定められたるはわろし。殿居の意にて、ヰの假字なり。若宿の字によりて、イの假名也とせば、トノネとこそ云べけれ。ネとイとは聊意異也。ネは形につきていひ、イは睡眠の方に云也。侍宿は形につきて、殿にてヌルとは云べけれど、殿にて睡眠するとは云べきことに非ず』（玉の小琴）と云つて訂正した。書紀雄略卷に、『信濃國直丁與二武藏國直丁一侍宿相謂曰』云々とあるが、攷證は、それに注して、『殿に起居てかたらふ也。寐てはかたらふ事なるまじきをや』と云つて居る。

大意 これまでは無關心にのみ見て過ぎた眞弓の岡も、君の御陵所となつたから、永久の御所（ごしよ）として殿居（とのゐ）し、奉仕するのだ、と云つて皇子尊の薨去を歎いた歌である。

鑑賞 此歌は前の歌よりも、切實に響き、言ひ方も巧みなところがある。皇子尊が、御いでに

なるかのやうに思つて物言つてゐるのが、此歌をして現實的ならしめ、形式的な空虛から脫却せしめてゐる。もつとも、當時の舍人等は、眞に現實的と思ひ沁みて斯ういふ言方をしてゐるのだから、自然に現實的な響を得たものに相違ない。『常つ御門と侍宿するかも』の句が卽ちそれで、終の方に、この重大な句を持つて來てゐる。

ヨソニミルのヨソは、漢語『餘處』から來ただらうと山田博士が考へてゐること上記の如くであるが、さすれば、新語ともいふべきもので、當時の人々の間には、今までに無かつた特別の感情をあらはすに、この語を使つたものかも知れない。前出の、『よそに見しよは今こそ優され』のヨソニミシでも、新しい特殊の情調を盛り得たと當時の人々は思つてゐたのであつただらうか。

○

【巻二・一七五】

夢にだに見ざりしものを鬱悒しく宮出もするか佐日の隈回を

夢爾谷　不見在之物乎　鬱悒　宮出毛爲鹿　作〔佐〕日之隅回乎

語釋 **○夢爾谷・不見在之物乎** イメニダニ・ミザリシモノヲと訓む。舊訓ユメニダニであつたのを考でイメニダニと訓んだ。卷四(四九〇)に、伊米爾之美延牟等がある。夢にでも見なかつたのに、誠に意外にもといふ意。**○欝悒** オボホシクと訓む。愁鬱不安にもの意。舊訓オボツカナ。代匠記精オホホシク。童蒙抄コ、ロウク。オボホシの例は、卷五(八八四)に、於保保斯久許布夜須疑南。同卷(八八七)に、意保々斯久伊豆知武伎提可阿我和可留良武。卷十一(二四五〇)に、於保保思久相見子等乎。卷十七(三八九九)に、於煩保之久都努乃松原於母保由流可聞等があり、漢字には、欝、欝悒、不明、不清等を當てて居る。前後の關係によつて、意味色調に變化があり、活きのある語である。**○宮出毛爲鹿** ミヤデモスルカと訓む。舊訓ミヤイデモスカ。代匠記精ミヤデモスルカ。卷十八(四一〇八)に、佐度波須伎美我美夜泥之理夫利があり、宮出後風卽ち出仕して行く後姿のことであらうから、ミヤデといふ語が證明せられる。ミヤデは宮殿に出入する、卽ち出仕する、勤務することである。**○作(佐)日之隅回乎** サヒノクマミヲと訓む。『作日』は、古寫本の多く(金・類・古・神・西・細・溫・矢・京)『佐日』に作つてあるからさう改める。宣長は、『作日は一本佐田とあるを用べし』(玉の小琴)と云ひ、校本萬葉によるに、代匠記初稿本書入にも佐田の誤としてある由であるが、卷七(一一〇九)に、佐檜乃熊檜隈川之瀨乎早。卷十三(三〇九七)に、佐檜隈檜隈河爾

馬駐馬爾水令飲等とあり、サヒのサは發語であるから、此處も必ずしも、『佐田』とせずとも好いのである。ヒノクマはずつと區域が廣く、今の野口・栗原・平田等までをも含んでゐると云はれてゐる(講義)。その、檜隈のあたりを通ることを、檜の隈のクマミを通ると云つたのである。卷二(一一五)に、道之阿回爾標結吾勢。卷五(八八六)に、玉桙乃道乃久麻尾爾等がある。

大意 かういふことにならうとは、夢にでも見たことがなかつたのに、今や檜隈のあたりを通つて、眞弓の山陵に宮出(出仕)するやうになつたのは、何といふ悲しいことであるか。

鑑賞 この、『夢にだに見ざりしものを』は、前の、『よそに見し』の句と類似の心境で、それよりも強いやうである。そして、この一首は悲哀の調べが緊々と迫つてくるものがあつて注意すべき歌である。

そして、この一首にあつて、『おぼほしく』の語は、音が延びて居るので、息を長くして嗟歎することを直寫して居り、意味は、支那の鬱悒に當るのだから、何か悲しく苦しく鬱結する不透明な趣で、誠に適切ないい語であるとおもふ。そしてこの息の長い語を隔てて、前には、『見ざりしものを』があり、後には、『宮出もするか』がある。この二つの句の、『を』、『か』の助詞には、感動が籠つて居るから、中間の、『おぼほしく』で、この二つの句の切迫し詰まり過ぎるのを調節して居る

といふことにもなる。さもないと、この二句の、『を』、『か』と、結句の、『を』とで、一首の聲調が小きざみになり過ぎるところであつた。さういふ點でこの歌は注意すべきものである。

この中で、『宮出もするか』の『か』は疑問が本だらうが、全體としては、強い咏歎に響く。これは人間の心の根原に溯れば、疑問が強ければ從つて咏歎も強いのであつて、そのために、疑問と咏歎と融合して居る用例が多いのである。

また、結句の、『さ日の隈囘を』の『を』は、場處をあらはす助詞で、『宮出する』に還るのだとするのが文法的意義であるが、前から屢いふ如く、結句として用ゐる場合には、咏歎が籠るのである。そこで始めて結句としての役目を果すことにもなるのである。

○

【巻二・一七六】

天地と共に終へむと念ひつつ仕へまつりし情違ひぬ

天地與　共將終登　念乍　奉仕之　情違奴

語釋 ○**天地與・共將終登** アメツチト・トモニヲヘムトと訓む。天地と共に終らうと。天地のあらむ限り變ることなく、天地と共に久しくなどの意。舊訓ヲヘムト。古寫本中ハテムト（類・古）。オハラムト（神）等の訓もある。このヲフ（波行下二段）は、事を爲竟ふることで、此處では下のツカフに連關する。『ヲヘムは仕ヲ終へムなり（芳樹同說）』（新考）である。然るに、『皇子を天地とともに久しからむとおもひしと也』（略解）。『君が代、天地と共にこそ終らんと思ひつつ』（攷證）。『今も皇子を天地とともに久しからんとひたぶるにおもひたのみゐたる心たがひはてて、當惑せるよし也』（檜嬬手）等と諸注釋書に解したのは、思ひ違ひである。卷五（八一五）に、武都紀多知波流能吉多良婆可久斯許曾烏梅乎乎利都都多努之岐乎倍米。卷十九（四一七四）に、春裏之樂終者梅花手折乎伎都追遊爾可有の例がある。○**情違奴** ココロタガヒヌと訓む。豫想が違つた。當がちがつたといふ意。卷十九（四二三六）に、光神鳴波多媙嬬携手共將有等念之爾情違奴の例がある。また、卷十四（三三五九）の、伊麻思乎多能美波播爾多我比奴なども稍意味が違ふが同原の語である。

大意 わが皇子尊に、天地のあらん限り仕へ奉らうと覺悟してゐたのに、豫期がはづれてしまつた。誠に悲しいことである。

鑑賞 この歌の、『天地と共に終へむと思ひつつ』といふ主觀句は、前の、『夢にだに見ざりし

ものを』などとは、別様であるが、強い主觀句を以て起してゐる點は同じである。そして、天地のあらむ限り奉仕しようと思つてゐた、といふのは當然のことで、現今の私等にとつては平凡な句に思へるのだが、作歌當時の人心を離れないやうに努力して鑑賞するなら、決して凡句では無い。特に、『共に終へむ』と直接に續けたのも、古い日本語の用法として尊敬すべきである。

併し、現在の私等の作歌稽古のためには、寧ろ結句の、『心たがひぬ』の方に注意すべきで、この、『ぬ』止めの結句は、『舟近づきぬ』。『濱にかへりぬ』等のごとく、やはり抒情詩の結句としての役目を果すだけの感嘆を籠めてゐるのである。單に半過去の助動詞として解釋する以上に、このやうな一家言を私は常に持つてゐるから、ここにも繰返すのである。

○

【巻二・一七七】

朝日照る佐太の岡邊に群れゐつつ吾が哭く涙やむ時もなし

朝日弖流　佐太乃岡邊爾　羣居乍　吾等哭涙　息時毛無

語釋 **○朝日弖流・佐太乃岡邊爾** アサヒテル・サタノヲカベニと訓む。朝日の照つて居る佐太の岡にの意。朝日弖流（アサヒテル）につき、代匠記精に、『朝日テル佐太ノ岡トツヾケタルハ、古今ニ、夕月夜サスヤ岡邊ト云ヒ、拾遺ニ、朝彦ガサスヤ岡邊トイヘル如ク、岡トイハンタメナリ。朝日ノ光イヅクハアレド、先岡ニアタリタルガハナヤカニ見ユル故ナリ。下ニ朝グモリ日ノ入ユケバトヨメルニ思ヒ合スレバ、東宮ヲ朝日ニヨソヘテ、日ノ替ラズ照ニツケテ、東宮ノカクレ給ヘルヲ嘆ク意ニヤトオボシキヲ、又下ニ朝日テル佐太ノ岡邊ニ鳴鳥トヨメルハ、其意ナケレバ、唯初ノ義ナルベシ』といひ、考に、『朝日夕日をもて、山岡宮殿などの景をいふは、集中また古き祝詞などにも多し。是に及（シク）ものなければ也』とあるが、これはただ儀容を正すのみの語でなく、實際に本づく形容から、稍様式化したものであらう。佐太乃岡（サタノヲカ）は今は眞弓の岡と相對し、地續きのやうな地勢にあるが、古へは眞弓の岡は廣く、その一部を佐太の岡と云つたものであらう。そこで、眞弓の御陵は今の佐太岡にあつて、それに奉仕するのに、佐太の岡べに侍宿（とのゐ）すると云つても差支ないことになるのである。辰巳利文氏は、『島の宮から見ると、眞弓の岡も佐田の岡も一目であつて、朝日のさしかかるさまがまともに見えるのであります。こんなところからこの言葉が出來たのでありませう。佐田の岡までは、島の宮からは約二十町であります』（大和萬葉地理研究）と云つてゐる。**○羣居乍** ムレヰツツと訓

む。舍人等が多勢むらがつての意。卷十三（三三二六）に、遣之舍人之子等者行鳥之羣而侍有雖待不召賜者がある。**○吾等哭涙・息時毛無**　ワガナクナミダ・ヤムトキモナシと訓む。我等の泣く涙がとどまることがないの意。『我等』と書いてワレと訓んでいいのは日本語の一性質で、卷三（二五〇）に、野島我埼爾伊保里爲吾等者。卷六（一〇一七）に、何野邊爾廬將爲吾等。卷七（一二六九）に、三名沫如世人吾等者などの例がある。また、ヤムトキモナシといふ句は、卷十一（二七八五）に、心中者止時毛梨。卷十二（二八七八）に、割西胷者息時裳無。同卷（三一八九一云）に、君乎思苦止時毛無。卷十三（三二六〇）に、吾戀良久波已時毛無等がある。

大意　朝日の照つて居る佐太の岡の御陵所に舍人の吾等が群居して、泣く涙が止むときもない、打群れて悲歎に暮れて居る。といふ意である。

鑑賞　この歌も、透つて居て、作者の心持を理窟なしに受納れることが出來る。それからこの歌で特殊なのは、舍人等が大勢群れて悲歎に暮れ、啼泣してゐるやうな趣に歌つてゐる點である。この前の歌の、『仕へ奉りし心たがひぬ』でも、一人の心を咏じたのでなく、やはり複數の舍人を云つてゐるのだが、明らさまに複數をあらはしてゐない。然るにこの歌では、『群れゐつつ』といひ、また、『わが哭く涙』でも『吾等哭涙』と、明かに複數に書いてゐるのは、特に群衆の舍人のさまを

示さうとした歌だといふことが分かる。ただ、古代の日本語は、特に、『われら』と云はずとも、『われ』で好かつたものである。

『朝日てる』といふのと、『わが哭く涙』と對照せしめたやうにもおもふが、さうすると意圖が目立ち、技巧が目立つて却つて具合が惡い。此處は、さういふ理窟の挿入なしに、もつと直接的に、奥底に横はるその技法が感納せられるやうにありたいものである。卽ち此處の、『朝日てる』は、『佐太の岡邊』に附くので、無心にも佐太の岡には日光が照つて居る、その岡のところに舍人等が群れて悲歎してゐるところの寫象が、素直に讀者の心に浮んで來れば好いのではあるまいか。

それから、音調の事になると、『群れ居つつ・わが哭くなみだ』の續きが旨い。『つつ』などの使ひざまも、現在の私等には既に陳腐のやうに思はれがちになつたが、此處の『つつ』は誠に旨いもので、これは直ぐ、『哭く』にも響きが連續するからではなからうか。また、結句の、『やむ時も無し』と止めたのも、据わりが好くして、悲歎の餘韻が籠つてゐる。『無し』は、ただ形容詞の終止言でなしに、咏歎の助詞・助動詞などのあるものと效果からいへば毫もかはりは無いのである。

この歌は、皇子尊を悲しむのに、自分等の行動を云つてゐる。それが何等の計らひが無いごとくに、それだけ強く心持が私等に傳はつて來るのである。

【巻二・一七八】

御立の島を見るとき行潦ながるる涙とめぞかねつる

御立爲之　島乎見時　庭多泉　流涙　止曾金鶴

○

語釋　**○御立爲之**　此は舊訓ミタチセシ。考ミタタシシ。山田博士講義ミタタシノ。この三つの訓が問題になるが、ミタタスといふ用言の上にミを附したものは當時に例がなく、また、ミタチセシと訓むことも可能であるが、他に當時の用例に見當らない。そこで、ミタタシを名詞として、ミタタシノと訓むとせば、巻一（三）の、御執乃梓弓。巻三（三一五）の、行幸之宮。日本紀天智巻の、伊提麻志能倶伊播阿羅珥茹等の用例が參考になるといふのである。ミタタシシ（古義・攷證・檜嬬手・美夫君志・新考・全釋等）。ミタチセシ（新訓・新解）。講義の訓に從ふと、下に見える歌の場合にも調がととのふので其に從ふことにした。**○島乎見時**　シマヲミルトキと訓む。宮の庭にある池島を見る時の意。『島ハ宮ノ名ニハ非ズ。ヤガテ下ニ見ユルモ、勾池ノ中島ナリ』（代匠記精）。『もと此池島に

依て所の名ともなりつらめど、こゝによめるは所の名にはあらで其池島也。且此下に、御立しゝ島に下居てなげきつるかもてふ、下居を思ふに、宮の外に在池島なるべし』(考)。『この島は、作り庭の池島也。宮の外にある池島といはれしはいかゞ』(攷證)。つまり、宮の境内にある庭の池島の意味に解していいのであらう。**〇庭多泉・流涙**　ニハタヅミ・ナガルルナミダと訓む。ニハタヅミはナガルの枕詞で、『俄泉の流るるといひかけたる也』(冠辭考)。和名鈔に、唐韻云、潦音老、和名爾波太豆美、雨水也とある。雅澄は、庭潦水の義とし、大原恵敏の言として、庭に雨水の走るをタヅミガハシルといふを引用して、冠辭考の俄泉の説を排してゐる。然るに檜嬬手は、タツミは『立水』の義だとした。講義は、眞淵の『俄』説と、この『立水』説とを採用した。それ故講義の説によれば、ニハタヅミは『俄立水』の義となる。卷十九(四一六〇)に、爾波多豆美流涕等騰米可禰都母。同卷(四二一四)に、涏多豆水流涕留可禰都母といふ例がある。**〇止曾金鶴**　トメゾカネツルと訓む。涙の出づるのを止めかねたといふ意。卷三(四七八)に、大御馬之口抑駐御心乎見爲明米之。卷十五(三六二七)に、布禰等米弖宇伎禰乎詞都追とある、此等のトムといふ動詞と同じであらうから、涙の流れ出づるのを抑へることの出來ないのにも、トムとこの麻行下二段の動詞を用ゐたのであらう。なほカネツルの例は、卷三(二七六)に、三河有二見自道別不勝鶴。卷四(六一三)に、

常念弊利在曾金津流。同（六一七）に、彌益荷念歟君之忘金鶴。巻二十（四三四六）に、伊比之古度婆曾和須禮加禰津流等とあるたぐひである。

大意 今、宮の庭園の池島を見れば、御在世のをり皇子尊が、常々お立ちになつて御覧になられたことなどが思ひだされ、流れ出る涙をとどめようとしても止めることが出來ないのだ、といふ意である。

鑑賞 この歌も、慟哭の歌だから、前の慟哭の歌の次に配列したのかも知れないが、若し人麿が代作したのだとすると、餘り接近し過ぎてゐて上手といふことが出來ない。また、一首は直線的に表現して強いけれども内容が稍單純過ぎないだらうか。

併し、この一首で注意すべき句は、『島を見る時』の、『とき』にある。この、『とき』が適切であるから、以下の句が無理なく活躍して居るやうにも思ふ。つまり以下の句の原因をあらはすのに、『とき』を以て表はしてゐるのが好いので、古調の歌の驚くべき點は此處にも存じてゐた。

この歌の結句は、ツルで止めてゐる。此は、『止めゾ』で係つて、『かねツル』で結んだ係結の例に過ぎないのだが、結句の聲調としては、極めて重厚な響で、悲歎の心を其處に蓄積して居るのである。

【巻二・一七九】

橘の島の宮には飽かねかも佐田の岡邊に侍宿しに行く

橘之　島宮爾者　不飽鴨　佐田乃岡邊爾　侍宿爲爾往

語釋　**○橘之・島宮爾者**　タチバナノ・シマノミヤニハと訓む。橘は橘寺のある場所だとすると島の莊とは離れてゐて具合が惡いやうに思ふが、島の莊といふ名は馬子の島の邸、即ち島の宮があるために附いた名であらうから、『橘の島の宮』といふ句がある以上は、島の宮のあつた處をも橘といひ、現在の高市郡高市村大字橘よりももつと範圍が廣かつたと看做すべきである。講義に、『かく考ふるときは、この橘の島の宮といふ語によりて、橘がその本來の地名なりしことを想像すべく、かくて古、橘といひし地は今の島莊までも包含せしものなるべく思はる。而して飛鳥川は恐らくは今の地よりも東方を流れてありしならむと思はるるふしあり』とあり、辰巳氏も、『また別に、橘の島云々と詠まれてゐるところから推して、島の池はどうしても、今の島の庄から川一つへだてたる

橘の山裾にかけてひろがつてをつたものと見なければなりますまい。私は、さう信じてうたがはないのでありますす』（大和萬葉地理研究）と云つてゐる。○不飽鴨　アカネカモと訓む。舊訓アカズカモ。古寫本中アカヌカモ（類・古）の訓があり、代匠記アカズカモ。考アカヌカモ（攷證同訓）。略解アカネカモ（古義・檜嬬手・美夫君志・新考・講義・新訓）。『アカネのネは、打消の複語尾の已然形なるが、一般にこの頃の語遣として、已然形を以て下に接續して條件を示すこと後にバの接續助詞を以てつづくると同じ趣の語遣たること屢いひし所なるが、その已然形にて接續せる下に、カモといふ係助詞を加へて、下との意を一層委しく結びつけたるものなり』（講義）。○佐田乃岡邊爾・侍宿爲爾往　サタノヲカベニ・トノヰシニユクと訓む。島の宮殿と、佐田の岡の陵所との距離は約二十町ばかりである（辰巳氏）。そこで、この歌では、二所の關係をば、『飽かねかも』で續けてゐる所以も分かるのである。

大意　皇子尊の御在世中、橘の島の宮殿に仕へ奉つたのであるが、それでも奉仕し足らぬといふのか、また、島の宮から程遠い、佐田の岡邊にまで侍宿（とのゐ）しに行くのであるといふ意で、皇子尊が薨去になつたから、今度は御陵所の方に詰めきつて居る歟を、かういふ風に云ひあらはしたものである。

鑑賞 橘の島の宮は皇子尊の宮で、佐太の岡は御陵所で、其處までは二十町程も距つて居る。御生前仕へ奉つただけでは仕へ足らず、いつまでも仕へ奉らうとする心が續くので、といふのをば、『飽かねかも』といふ語であらはした。『飽き足りないのか』といふ疑問であるが、これは、自分等の行動をば稍批判的に看たのか、或は侍宿しに行く舍人等をば稍客看してかくあらはしたものともいふことが出來る。客看したのだとせば、『飽かねかも』をば疑問としても、毫も不審な點はなく、ただ素朴な言方だといふことに留意すれば事足りるのである。

この、『飽かねかも』について、武田博士の新解に、『飽かねばかの意であるが、ネバに、已然順態條件法のと、逆態條件法にヌニの意に解すべきがある如く、こゝのネバは、ヌニと解すべき方である。すなはち飽かぬにかと譯すべきものである。飽きないのに侍宿しに行くことかの意』と解してゐる。そして、『橘の島の宮には飽きないのに、佐太の岡邊に侍宿しに往くことであるか』と口譯してゐる。このノニと解するとせば、自分の行動としても解釋が附く。併し、いづれにしても現代の吾等には、心の準備を經てからはじめて鑑賞し得る表現法であり、この種のものは萬葉には他にも幾つもある筈である。

【巻二・一八〇】

御立の島をも家と住む鳥も荒びな行きそ年かはるまで

御立爲之　島乎母家跡　住鳥毛　荒備勿行　年替左右

【語釋】○島乎母家跡・住鳥毛　シマヲモイヘト・スムトリモと訓む。島の宮殿の御池の島をも自分の住家として居る鳥等もといふ意である。『島をも家と』とは、天然の水邊に居るのが水禽の常だが、宮殿の池にも久しく放ち飼にされて住んでゐたので、かく云つたものである。○年替左右　トシカハルマデと訓む。年替るは新年になることであるが、この場合は、舍人等も皇子尊薨去後一年間は島の御殿に住む習ひだからさう云つたので、考に、『來らん年の四月までも、かくて在て御あとしたへと思ふなり』といふのは、皇子の薨去は四月十三日だからである。『左右』を、マデと訓むは、兩手のことを片手に對してマテといふので、助詞のマデに借りて使つたのである。巻二（二三〇）に、春野燒野火登見左右。巻三（三一〇）に、市之殖木乃木足左右。巻四（五四九）に、羇行君之至

家左右等(イタルマデ)の例がある。

大意 皇子尊が御在世のをりよく逍遙なされた、御池の島をも長らくお前等の住家(すみか)として飼はれてゐた鳥等よ、お前たちも、せめて一周年の過ぐるまでは、ここを離れ去らずに居よ。そして此處を去りかねてゐる吾等と歎を共にせよ。といふのである。

鑑賞 これは、前の歌の、『放ち鳥荒びな行きそ君坐(ま)さずとも』と甚だ類似してゐる。そして、この、『君坐さずとも』といふ結句が稍輕かつた如くに、この、『年かはるまで』といふ結句が稍輕い。祕かにおもふに、此は決して人麿の力量ではあるまい。この差別は、『放ち鳥人目に戀ひて池に潛かず』といふのと比較すれば容易に納得が行くので、人麿ならば、いかに騒々しく作つても、かう安易にはならぬのではあるまいか。

また、人麿が名を祕して代作したのだとせば、かうも同じやうな技巧を並べずに濟ますところではなかつただらうか。それが、六百人もゐる舍人のうちで作歌した者が居つて、其中から出來の比較的好いものを選抜したものだから、自然類似のものがあつて斯く重複することになつたと解釋すべきものではなからうか。

○

御立(みたたし)の島(しま)の荒磯(ありそ)を今見(いまみ)れば生(お)ひざりし草生(くさお)ひにけるかも

御立爲之　島之荒礒乎　今見者　不生有之草　生爾來鴨

語釋　**○島之荒礒乎**　シマノアリソヲと訓む。御池の岸に海岸のやうな趣に岩石などを据ゑて作つたのを、アリソと謂つたものであらう。代匠記に、『礒ハ海ニ限ラズ、川ニモ池ニモヨメリ。サレバ歌ノ習ナレバ必アラ浪ヨスル所ナラズトモ大形ニ礒ヲアライソトイヘルカ、若クハ海邊ヲ學ビテ作ラセ給ヘバ云カ』といひ、考に、『御池に岩をたて瀧おとして、あらき礒の形作られしをいふなるべし』といつてゐるが、山田博士は、アリソは現礒(アライソ)の義だから、『荒浪のよする礒の義とするに及ばざること上にいへる如く、ただ庭の立石飾石などをすべていふと心得て十分なり』（講義）と云はれた。私は暫く舊說の荒礒(アライソ)說に從つて解釋した。**○今見者**　イマミレバと訓む。舊訓ケフミレバ。古寫本にはイマ（類・古・神・西・細）。ケフ（細の一訓）であるが、代匠記精イマミレバ（考・略解・古義・新考・講義同訓）。

檜嬬手ケフミレバ（美夫君志同訓）。美夫君志でケフミレバ訓に從つたのは、卷六（九三一）の、今耳二秋足目八方を證にしたのであるが、此處はイマでも意味が好く通ずるから敢へてケフと訓まない。卷三（三一六）の、昔見之象乃小河乎今見者彌淸成爾來鴨。卷八（一六二二）の、吾屋戶乃秋之芽子開夕影爾今毛見師香妹之光儀乎などの例を參考にすべきである。**○不生有之草・生爾來鴨**　オヒザリシクサ・オヒニケルカモと訓む。『來』をケリ・ケルと訓む例は、卷三（二六七）に、山能佐都雄爾相爾來鴨等で分かる。『君のましましたるほどは、草などをも苅はらふ人ありしかば、草も生ざりしかど、君うせ給ひて、今見ればその生ざりし草も、かく生にけるは、いとあはれ也』（攷證）といふのである。卷三（三七八）に、昔看之舊堤者年深池之瀲爾水草生家里。卷六（一〇四八）に、立易古京跡成者道之志婆草長生爾異梨の例がある。

大意　君が御存命の節に常々御立ちになつた島の宮にある池あたりの荒磯に似かようた石の間などに、これまでは能く手入掃除をしたので草なども生えなかつたのが、君が薨去せられた後の今見ると、草も生えて荒れたことだといふのである。

鑑賞　此歌の下半に誇張のやうなところもあるが、空想でない實際を詠じたから響が強いものとおもふ。それに結句の、『生ひにけるかも』は強く咏歎してゐるからでもある。併し、私は、この、

『生ひざりし草生ひにけるかも』に稚拙を感ずるもので、人麿自身の作とはどうしても思へない。
この一首で注意すべきは、『今見れば』といふ句である。この句は併し愛すべき素朴な古調といふ點で注意するので、あへて人麿の歌調を髣髴せしめるといふ意味ではない。
既出の、『昔見し舊き堤は年深み池のみぎはに水草生ひにけり』（卷三。三七八）といふ赤人の歌は、眞淵も其を引合に出して居るが、この舍人の歌の方が赤人のよりも素朴で且つ重厚である。赤人のは、第三句の、『年深み』あたりから調が弛んで具合が惡い。

○

【卷二・一八二】
鳥塒立て飼ひし鴈の兒巢立ちなば眞弓の岡に飛びかへり來ね
鳥埘立　飼之鴈乃兒　栖立去者　檀崗爾　飛反來年

語釋　○鳥埘立　トグラタテと訓む。鳥塒を立てての意。舊訓トクラタチ。古寫本中トカキタテ（類・神）。トクラタテ（温・矢・京）。管見トクラタテ（代匠記以下同訓）。『埘』は、代匠記に栖の誤とし

たが、美夫君志（文字辨證上卷同上）に、『此堩の字は、栖の俗字にて、類聚名義抄に、栖棲（二正、音西、スミカ○ヤドル○ス○鳥ノス）、栖俗。字鏡集に、棲栖同と見え、これを手偏に作は、龍龕手鑑（手部）に、捿（俗、音西正作棲、鳥捿）、⿰扌西（同上）とある是也。かゝれば、堩は栖の俗體なる事明らけし』とある。次に、講義が、類聚名義抄のトクラの訓ある塒を、榯とも⿰扌時とも書いてあるのに注意し、栖⿰扌西堩は通用したものであらうといひ、また、『類聚名義抄には、棲字に明かにトクラの訓を加へたり。さればその別體たる堩にトクラの訓あること疑ふべからず』と論じてゐる。さて、トグラは、和名鈔に、毛詩云雞栖于塒、注云鑿墻而棲曰塒（音時訓止久良）とあるので大體わかる。鳥が宿り休む座といふ意で、此處は水禽の塒であらう。此處は塒を作るのだから、タテと他動詞に訓む。卷十八（四一五四）に、枕附都麻屋之内爾鳥座由比須恵氐曾我飼眞白部乃多可の例がある。**○飼之鳫乃兒**　カヒシカリノコと訓む。飼つてゐた鳫（鴨の類）の雛といふ意。これは、當時は水禽の摠名でカモをもカリと云つたから、『鳫乃兒ハ鴨ノ子ヲ云』（代匠記精）と解していい。また、新撰字鏡、類聚名義抄によるに、鳫・鴻・鳿・鴨・鷀・鵝等にカリの訓があるのを見ても一鳥に限らぬことが分かる。然るに、やはり代匠記で、鳫は雁の誤で、雁は卽ち鷹だから、タカノコだらうといひ、攷證・新考・新訓・新解等もそれに從つてゐるが、雁と書いた古鈔本が一つも無く、鳫で解釋が附くから、カリノコとして解釋し、鑑賞することにする。**○栖立去者**　スダ

チナバと訓む。雛が巣から飛たち得るやうになりなばといふ意。『去者』をナバと訓む例は、巻三（二七五）に、勝野原爾此日暮去者。同巻（三六〇）に、鹽干去者玉藻苅藏等で、山乎君之越去者（巻九。一七七一）等とは別に、ナニヌの音に用ゐて居るので、例へば巻三（二七四）の、左夜深去來はニの音に用ゐたたぐひである。スダチの例は萬葉にこの一例あるのみである。**○飛反來年** トビカヘリコネと訓む。鳥の宮の鳥塒で巣立つたならば、御陵所の檀の崗に飛んで來いといふ意である。『きみのますところへ來れ也』（考）。『巣を立去らば皇子の御陵へ來れと也』（略解）。『再案ずるに九卷なる詠霍公鳥歌にウノ花ノサキタル野邊ユ飛翻來ナキトヨモシとあるを見ればトビカヘリは飜り飛ぶ事ならむ。さらば結句はただ飛ビ來ヨと心得べし』（新考）。以上で大體分かるが、このカヘリはただ羽翼を翻すことでなく、やはり一定の距離を飛來ることをトビカヘルと云つたものであらう。美夫君志のトビウツリコヨといふ訓は、贊成出來難いやうに思ふ。全釋では、『飛反は幾度も飛び返り、往返するをいふ』と解して居るが、恐らくは往反を繰返す意味ではあるまい。

大意 鳥の宮に鳥塒をこしらへて飼育してあつた鳫（鴨）の兒よ、若し汝等が巣立つやうになつたなら、此の御陵所の眞弓の崗まで飛び來れよ。

鑑賞 この歌の心境は幼稚素朴であるが、それだけ純粋で却つてよいのではなからうかとおも

へる。特に、『雁の子』云々といふのは、實際池にカリが飼つてあり、鳥塒があり、卵を生み、卵が孵化して居つたものであらう。そこで栖立といふことも利くのであり、『飛びかへり來ね』といふ句も利くのである。

かういふ歌を讀むと、その純粹素朴に打たれる。そして、どうしてもこの歌は、或はこの歌の素材は、舍人の誰かのものだらうといふ心を起させるものである。

この歌のよいのは、大づかみにせずに、具體的の事實を以て感慨に移した點にある。從つて、二十三首の中の優れたものの一つであるとおもふ。

代匠記で、なぜ、鴈(雁)が雁(鷹)の誤だとしたかといふに、『鴨ノ子ナラバ、唯島ノ宮ノ池ヲ去ラデスメトコソ云ベケレ。彼ニ似ツカヌ眞弓ノ岡ニコヨトイハヾ、是ゾ誠ノ由モナキ事ナルベキ。阿騎野ニ狩シタマヒシ事ハ第一ニ見エ、下ニハ宇陀野ニ狩シタマヒシ由ヨミタレバ、其料ニ鷹ノ子ヲ飼置セ給ヘルニツケテヨメルニコソ』といふ想像の根據に本づいたのである。また、童蒙抄に、『鴈に鳥埘を立べき理なし。雁は水鳥にて鳥屋に飼ふべきものならず。日並皇子狩を好ませ給ふなれば鷹にてあるべき也。』といふのもさうである。なほ、『案ずるにカモの類は直に水に放つべく鳥座を立てては飼ふまじく結句などの調もカモめかねば雁の誤といふ說に從ふべし』(新考)といふ如

き說もあるのであるが、これは前出の、『荒びな行きそ』といふやうな感慨をば、別ないひ方であらはしたもので、日常親しんでゐた水禽の雛に向つて、かういふ言ひ方をしてゐるので、決して不自然ではないと思ふのである。契沖以下の說は、平俗的に合理化せられたものに過ぎないのではなからうか。鷹の子と解釋して歌柄が一段と下ると思ふのは、却つて平俗的に尤もに聞こえるからである。

○

【巻二・一八三】

吾が御門千代常磐に榮えむと念ひてありし吾し悲しも

吾御門　千代常登婆爾　將榮等　念而有之　吾志悲毛

語釋 ○**吾御門・千代常登婆爾**　ワガミカド・チヨトコトハニと訓む。皇子尊の宮殿が永久不變にの意。萬葉には、卷十四（三四三六）に、登許波爾毛我母。卷十八（四一〇六）に、等己之部爾可久之母安良米也の如き例があるが、トコトハニの例は他に無い。佛足石歌に、止己止婆爾佐乃己利伊麻

世の例がある。

大意 わが皇太子の御殿が永久不變に榮えたまふと思うてゐたのに、今かかる有様となつて、吾等は悲しくて致し方が無い、といふのである。

鑑賞 此は一首に無理がなくて始から結句に至るまで順直に歌つて居る。併し、大體が大づかみであるし、吟味すれば、初句ワガ結句ワレのあたりも巧みでないところがあり、少し手を入れて貰へば、舍人にても作れる程度のものである。併し、調に手堅い點のあるのは二十三首を通じて共通である。

○

【卷二・一八四】
東の瀧の御門に侍へど昨日も今日も召すこともなし

東乃　多藝能御門爾　雖伺侍　昨日毛今日毛　召言毛無

語釋 **○東乃・多藝能御門爾** ヒムガシノ・タギノミカドニと訓む。童蒙抄にヒガシノと四音

に訓んだ。東方の正門である瀧の御門にの意。そしてタギの名は、飛鳥川或はその支流の細川が宮殿の東方を流れてゐて、それから庭園に水を引き入れて瀧を作つたので、それに本づくだらうと云はれて居る。なほ、『支那は南北を經とし、東西を緯としたるに反し、本邦の古は東西を經とし南北を緯としたること卷一（五二）に述べたる如くなるが、その日經のうちにては、東を主とすべきは勿論なれば、古は東の門を最も重んぜしものなるべく、南を重んぜしは恐らくは支那式宮城のはじめられし後の事なるべく、それもなほ事實の上にては、古來の如く、東面の御門を重んぜしなるべし。果して然らば、ここに東の瀧の御門といへるは偶然の事にあらで、これ卽ち當時の正門なりしなるべければ、特にこれをいひて、舍人の出入する處、又護衞する重要なる場所の代表としていへるなるべし』（講義）によつて、意味明快である。**○雖伺侍**　サモラヘドと訓む。舊訓サモラヘド。古寫本サフラヘト（金・類・古・神）。卷二（一九九）に、鶉成伊波比廻雖侍候佐母良比不得者。卷七（一一七二）に、大御舟竟而佐守布高島之。卷二十（四三九八）に、佐毛良布等和我乎流等伎爾の例があり、其他は、候、伺候、侍、侍從、侍候等の文字を用ゐて、サモラフと訓んでゐる。**○昨日毛今日毛**　キノフモケフモと訓む。もう幾日もといふ感慨であるが、それを斯く現實的に云つたのは、既に慣用に順つたので、卷六（一〇一四）に、前日毛昨日毛今日毛雖見。卷七（一四〇六）に、前裳今裳無人所念。

巻八（一四二七）に、昨日毛今日毛雪波布利管。巻十七（三九二四）に、昨日毛今日毛由吉能布禮禮婆の例がある。〇**召言毛無**　メスコトモナシと訓む。御召しになることも無い。召し給はないといふ意。巻三（四五四）の、愛八師榮之君乃伊座勢波昨日毛今日毛吾乎召麻之乎が參考になる。なほ、巻十六（三八八六）に、葦河爾乎王　召跡何爲牟爾吾乎召良米夜明久吾知事乎歌人跡和乎召良米夜笛吹跡和乎召良米夜琴引跡和乎召良米夜の例がある。

大意　島の宮殿の東門である瀧の御門に、御用をうけたまはらうと伺候して居るが、昨日も今日もお召しになることは無い、といつて寂しく悲歎にくれるさまである。

鑑賞　これも空想的悲歎ではなく、瀧の御門に伺候してゐたこと、常には御召しになられたこと、今はもはや御召しにならぬこと、さういふなかなか複雜した心理を、斯くの如く直接單純にいひあらはしたものである。

この一首は斯く直線的な透徹した聲調を持つてゐて、毫もたどたどしく難澁したやうな痕が見えない。そして一首は飽くまで緊張して、結びも、『無し』といふやうな語を以てして居る。一首は飽くまで強く鋭い感動の直接的表現をしてゐるのだから、結びも亦斯くのごとくになつて、咏歎の助詞などを以て止めないのであるが、然かも結句としてこれだけのものを成就して居るのである。

それから、第三句の、『ど』などは、其處で心が一時つまる狀態で、『志賀の辛崎さきくあれど』などの『ど』と同樣である。また、この歌には、『も』が三つもあつて、それで連續的聲調を成して居る。これも强い感動をあらはしたのだから、自然にさういふ技法となつたものであらうか。

この歌の聲調はかくの如くに直線的であるから、陰鬱な細かい顫動を聞くことが出來ない。また、聲に濁がなく飽くまで太く强く行つてゐる。これは寧ろ人麿的聲調に似てゐると謂つてもいいが、何か物足りないところもあるやうである。これなどはひよつとせば人麿の息のかかつた歌らしくもあるが、何か實際の人麿作との間に差別點があり得るやうにもおもふのである。

この歌は古來人々の注意を牽き有名にもなつたごとく、舍人の歌二十三首中の佳作である。

○

【卷二・一八五】

水傳ふ磯の浦回の石躑躅もく咲く道をまた見なむかも

水傳　磯乃浦回乃　石乍自　木丘開道乎　又將見鴨

語釋 **○水傳・礒乃浦囘乃**　ミヅツタフ・イソノウラミノと訓む。水の流れて居る、庭園の石のあひなどをいふのである。この語だけを見れば海濱のやうでもあるが、海から遠い處では、海邊を聯想しつつ、イソとかウラとか云つたものであらう。『水傳』は舊訓ミヅツテノ。管見ミヅツタフ（諸書從之）。眞淵は冠辭としたが、『これは島の宮につくらせたまへる庭の泉水のあたりの事をよめり。』（代匠記初）。『水傳（ミツツタフ）は、御庭の池の、島のめぐりに走らせたる水の、礒間々々をつたひて、流るをいへり』（古義）の說の方が好い。**○石乍自**　イハツツジ、即ち羊躑躅である。和名鈔に、陶隱居曰、羊躑躅（擲直二音、伊波都々之、一云毛知豆々之）『いはつゝじは、羊躑躅とかきて、いはつゝじとも、もちつゝじともよむは、つゝじの中の一種の名なれども、惣じてつゝじはよくいはねにさく物なれば、あいつゝじ、をかつゝじをもすべていはつゝじといふべし』（代匠記初）。**○木丘開道乎**　モクサクミチヲと訓む。茂（しげ）く咲く道の意。舊訓モクサクミチヲ。童蒙抄開は闕の誤でコヽセキミチヲ。考木丘は森の誤でシジニサクミチヲ。『モクサクハ仙覺ノ新點ナリ。禹貢云、厥草惟繇（ノハレモシ）、厥木惟條（ノハレナガシ）。日本紀ニ蒼ヲモシトヨミ、扶疏ヲ、シキモシトヨメリ。モシハシゲキ意ナレバ、此點尤好』（代匠記精）。モシ、モク、モキと活用する形容詞で、國語だらうと云はれてゐる。色葉字類抄に、茂（モシ 莫候反 卉木盛也）とあり。さて、なせ羊躑躅を點出して來たかといふのに、『而して、四五月の頃はつつじの花盛なれば實感を甚として

よめるなり』（講義）といふによつて明瞭である。新考は、信友・義門の説に從つて、ムクサクと訓んで同じ意味に解した。〇又將見鴨　マタミナムカモと訓む。二たび見得るだらうか。さうではないといふ意になる。『カモは疑問をあらはすものなるが、ここは反語に用ゐられたり』（講義）。卷十二（二九二一）に、幼婦者同情　須臾　止時毛無久將見等曾念の例がある。

大意　島の宮の庭園の水の傳ひ流れる磯のやうな岩石に、美しく羊躑躅が咲き盛つて居るが、この池のほとりの道をば私等は二たび見ることが出來るであらうか、さうではあるまい。間もなく此處を去らねばならぬ悲歎をのべたものである。

鑑賞　この歌は、放ち鳥などと違つて羊躑躅のことを咏んで居る。それゆゑ歌柄は細かいが、それがただの風流的感懷でなく、もつと實際的に生活に卽した悲歎である。そこで、寫象の明瞭を欲するのも自然的要求であるから、『水傳ふ礒の浦回の』といふ具合に、細かに寫生してゐるのである。前の『草生ひにけるかも』といひ、この歌といひ、初夏の趣を實寫してゐるのであらう。

『もく咲く道をまた見なむかも』は、二たび未來にわたつて見ることがあらうか。と疑問に云つてゐるが、それが否定せられるから、結果は反語となるのである。そして、この結句の、『かも』は強い疑問だが、結句として据わる時には、ほかの場合と同じく、感動が籠るのである。『道を』と

ことわつたのも求心的で好い。

この歌は、前の『東の瀧の御門に』の歌よりも柔かで、哀れが深い。そしてその古調誠に尊敬すべきである。二十三首中では優れた歌であつて、作者の面影をも偲ぶことが出來るほどである。

○

【巻二・一八六】

一日には千遍參入りしひむがしの大き御門を入りがてぬかも

一日者　千遍參入之　東乃　大寸御門乎　入不勝鴨

語釋　**○一日者・千遍參入之**　ヒトヒニハ・チタビマヰリシと訓む。一日に幾遍も伺候したといふ意。者をニハと訓む例は、巻一（四七）に、荒野者雖有がある。なほ、千遍は巻四（七三二）に、妹丹因者千遍立十方。巻七（一三一八）に、千遍曾告之潛爲白水郎。巻十一（二五六五）に、直一目相視之兒故千遍嘆津等の例がある。チタビは、必ずしもヒトヒと相對せしめたものでないのは之を見ても分かる。**○大寸御門乎**　オホキミカドヲと訓む。大き御門をの意。此は舊訓タキノミカドヲ

（代匠記・攷證・古義・檜嬬手・美夫君志・新考）。考オホキミカドヲ（略解・講義・新訓・新解）。考の訓の根據は講義によつて定められた。卽ち大は夕と訓んだのは異例で、古寫本には太に作つてゐる。そこで、大とあらばその儘オホと訓んで好いといふのである。〇**入不勝鴨**　イリガテヌカモと訓む。カツは勝、堪などの意味、それにヌがついて打消となる。カモは咏歎の助詞で、入るに勝へぬといふ意味になる。

大意　一日に幾遍も伺候した東の大きな御門（卽ち瀧の御門）をば、皇子尊が薨ぜられた後は、入るに勝へかねることである。『かなしきゆへに入るにたへぬなり』（代匠記初）。『入カテヌハ入アヘヌナリ。物ハ是ニシテ皇子ハ非ナル故ニ悲ニタヘヌ心ナリ』（代匠記精）。

鑑賞　『一日には千遍まゐりし』は、一種の誇張的表現であるが、感動のいきほひで自然にさうなつたものである。一首の主眼は、『大き御門を入りがてぬかも』にあるので、現代の私等は、直ぐ斯ういふ言ひ方をし得るのに強く感服するのである。當時にあつては、常識的な言語使用の分化が未だ發達しなかつたために、却つて詩的にはその眞髓を傳へて居るのである。入るのに堪へ得ない、堪へ難い、堪へられない、入ることが出來ない。さういふ意味に加ふるに、主なき門であるからといふやうな主觀的原因をも籠めてゐるのだが、ただ、ずばりと、『入りがてぬかも』の如くに云つて居る。誠に及び難い手法であるが、當時にあつては、これが普通であつたのだらうと思ふと、

眞淵のごとく、『時なるかな』と云はねばならぬこととなるのである。

○

【巻二・一八七】

由縁もなき佐太の岡邊に反りゐば島の御階に誰か住まはむ

所由無　佐太乃岡邊爾　反居者　島御橋爾　誰加住舞無

語釋　**○所由無**　ツレモナキと訓む。由縁も關係もないの意。舊訓ヨシモナク。古寫本中ヨシモナキ（類・西）。童蒙抄ユヱモナキ。略解宣長説ツレモナキ（諸書從之）。**○反居者**　カヘリヰバと訓む。『行かへりつつ分番交替してゐるをいふ』（考）の意。古義反は君の誤でキミマセバ。美夫君志ウツリヰバ等の訓があるが妥當でない。なほ、山田博士に據ると、この往反は島の宮と眞弓の御陵所との間を往反するのではあるまい。舍人等の本居は島の宮ではなく、恐らくその附近に賜はつた舍屋であらう。其處と眞弓の岡との間を往反するので、そのために島の御門には出入しなくなつたのだと説明して居る。**○島御橋爾・誰加住舞無**　シマノミハシニ・タレカスマハムと訓む。島の宮

の御階(みはし)の意。從來、『御橋トハ書タレド御堦ナルベシ。我等コソ御堦ノモトニ有テ仰事ヲモ承ツレ、誰カ今ヨリハスマムトナリ』（代匠記精）とあつて、御橋を御階と解したのを、新考に、『案ずるにシマノミハシは勾の池の中島に渡せる橋にて』と云ひ、講義も其を認容した。然るに、新考では、スマハムを、『かのをかしき島の御橋にも誰かとどまらむと云へるなるべし。スマハムはトドマラムといふ意にこそ。住居の意とすれば御階にてもかなはず』と云ひ、講義も、『これは島の池上の景色を賞すべく御橋に立つことありしを思へるならむ』と云つたので、全釋などではこのスマフの解釋が腑に落ちぬといふので、契沖說に從つて居り、新解も、御殿から庭上に下りる階段と解してゐる。併し、スマフをば、伺候するぐらゐに解し、『何人が落ついて居るであらう。何人も居なくなるであらうの意』（新解）と解せば、御橋のほとりと解釋しても意味の通せぬことは無いが、やはり何處かに無理がある。卷四（五七八）の、天地與共久住波牟等念而有師家之庭羽裳(アメツチトトモニヒサシクスマハムトオモヒテアリシイヘノニハハモ)でも、スムのは家に住むことに使つてゐるのがやはり自然だし、卷九（一七五五）の、吾屋戶之花橘爾住度鳥(ワガヤドノハナタチバナニスミワタレトリ)でも、卷六（一〇四七）の、里見者里裳住吉(サトミレバサトモスミヨシ)でも、住居する意味で、ただとどまるといふ意味ではないから、私も契沖以來の舊說に從ふことにした。

大意 これまでは何の緣故も關係も無かつた佐太の岡べに御陵所となつてからは分番宿侍する

ために往復して居るので、島の御殿の階のあたりには誰も居らないことであらう。いつたい誰が住むことであらうかといふ意である。

鑑賞 この歌も、感情が細かく働いてゐて、今の私等の眼から見ても、ただの原始的と思はれない、いいところがある。それのみでない、沈痛悲哀のひびきが一首の奥底から聞こえ來て、實に言語には云ひ盡せないものがある。この聲調は、平俗凡庸な歌人、特に古今集以後の專門歌人などの到底企て及ぶところではない。それ程のものである。

古來、萬葉の歌を研究した先進が、かういふ歌に逢著し、その優秀な歌調に參入し、驚愕のあまり、先づ念頭に浮んだのが人麿のことであつただらう。そこで人麿代作の想像說も出來たわけであるが、今は、かういふ優れた歌を作る者も、六百人中の一人ぐらゐにゐたと想像し、某舍人の作として味ふことの方が却つて實質的であるともおもふ。そして作歌態度が眞劍ならば、あへて專門の名を必要としないといふことをもこの歌を通じて悟入してかまはないのである。

一首の主眼は、やはり、『島の御階に誰か住まはむ』に置かれてある。

【巻二・一八八】

旦覆(たなぐもり)日(ひ)の入(い)りぬれば御立(みたたし)の島(しま)に下(お)りゐて嘆(なげ)きつるかも

且〔旦〕覆　日之入去者　御立之　島爾下座而　嘆鶴鴨

語釋　○且〔旦〕覆　タナグモリと訓む。舊訓アサグモリ。童蒙抄〔且の儘で〕アサクモリ。考〔天覆の誤とし〕アマグモリ。檜嬬手アサカヘリ。古義〔茜指にて〕アカネサス。美夫君志〔且は旦の誤〕タナグモリ。豐田新釋ユフサリテ。『旦覆はタナグモリと訓べし。旦(タン)今本に且(シャ)とあるは誤なり、今改む。撥假字のンは奈行の通にてナと轉じ用ゐる例なり。諸注皆旦を舊訓によりて、アサと訓るはわろし、音にてタン卽(チ)タナと訓べし』〔美夫君志〕とあるに從ふ。また、『覆』をクモルと訓むにつき、『覆は釋名釋言語に覆蓋蔽也云々とあるごとく、おほふ事にて空をおほふ意なればくもりとはよめるなり』〔攷證〕とあるのを參考とすべく、卷十三〔三三一〇〕に、棚雲利雪者零來奴(タナグモリユキハフリキヌ)の例があり、卷八〔一六四二〕に、棚霧合雪毛零奴可(タトギラヒユキモフラヌカ)があり、卷十八〔四一二三〕に、許能美由流久毛保妣許里弖等能具毛理安(コノミユルクモホビコリテトノグモリア)

米毛布良奴可(メモフラヌカ)とあるのをはじめ、トノグモリの例がまだ五六ある。タナとトノと類してゐるので參考となるべく、次の句のヒノイリヌレバと續けるためには、アサグモリでは調和がとれない。〇**日之入去者** ヒノイリヌレバと訓む。舊訓ヒノイリユケバ。古義ヒノイリヌレバ。日の沒しぬればの意。卷二(一三五)に、天傳入日刺奴禮(アマヅタフイリヒサシヌレ)。同卷(二一〇)に、入日成隱去之鹿齒(イリヒナスカクリニシカバ)。卷三(四六六)に、入日成隱去可婆(イリヒナスカクリニシカバ)。卷十九(四二四五)に、日入國爾所遣(ヒノイルクニニツカハサル)等の例がある。この句をば、皇子尊の薨去に譬へたとするのは穿ち過ぎた說である。

大意 日も沒して天地がほのぐらくなれば、皇子尊を偲びまつりつつ御生前に御立になつた池の邊に下りたつて悲歎にくれたといふのである。

鑑賞 この歌も、自分の行爲を云つてゐるが、『わが哭く涙やむ時もなし』といふのとは違つて、ただ、『嘆きつるかも』と云つて居り、自分の行爲としてまた、『島に下り居て』を前驅せしめてゐる。この云ひ方も前の歌などと別樣の味ひがあり、また、初句第二句に、『たなぐもり日の入りゆけば』と、環境の狀態をあらはして、『歎く』感動を强調し、調和せしめてゐる。

併し、さういふ特色は意味內容のことであつて、それよりも私等は一首の『聲』に同化せしめられる。その自然流露の嗟歎の聲に移入せしめられるので、タナグモリ・ヒノイリヌレバといひ、シ

マニオリキテといふ沁みとほるやうな細いこゝろに調和して、『み立の』、『なげきつるかも』の句があるのである。この關係が誠に微妙だが、此は幾遍も吟誦しつつ悟入するより途は無い。また、作歌の覺悟としては、やはり自然流露といふことになるのであらうか。この歌は佳作である。

○

【巻二・一八九】

あさ日照る島の御門におぼほしく人音もせねばまうらがなしも

旦〔旦〕日照　島乃御門爾　欝悒　人音毛不爲者　眞浦悲毛

語釋　○**旦〔旦〕日照・島乃御門爾**　アサヒテル・シマノミカドニと訓む。此は朝日の當つて居る島の御殿にの意。初句は幾らか樣式化してゐるが、寓意などの無いやうに解したい。卽ちその時は朝日が當つてゐた趣の歌である。○**人音毛不爲者**　ヒトオトモセネバと訓む。舊訓ヒトオトモセズバとあつたのを代匠記で斯く訓んだ。古義のヒトトモセネバの訓は調べが詰まつて惡い。人の音、人の聲、人のけはひもしない意で、巻七（一一七六）の、鳥者簀竹跡君者音文不爲。巻十（二三四七）の、

消長戀師君之音曾爲流等はオトヅレの意があり、後世の用例に連續するのだが、ここの用例はもつと素朴で直接な使ひ方である。〇**眞浦悲毛**　マウラガナシモと訓む。マは接頭辭でそれのついたウラガナシにモといふ咏歎の助詞の添はつたものである。卷十五（三七五二）に、波流乃日能宇良我奈之伎爾於久禮爲弖。卷十九（四一七七）に、宇良悲春之過者霍公鳥伊也之伎喧奴。卷二十（四四一三）に、麻可奈之伎西呂我馬伎己無等がある。

大意　朝日の當つてゐる島の宮は、皇子尊もいまさねば、今は出入の人もなく人ごゑも絶えて、ただ頼りなく心もおぼろに、悲しみに堪へぬ、といふのである。

鑑賞　初句、第二句は前の歌にもあつたが、この『朝日照る』は無意味ではなく、やはり意味の上の暗指を含んでゐるものと解すべく、それが、『おぼほしく』と『まうらがなしも』等の語に響應するのである。

この一首では、『おぼほしく人音もせねば』に注意すべく、この、『おぼほしく』は、前の歌では、『おぼほしく宮出もするか』と云つてゐるが、此處では、『おぼほしく人音もせねば』と續けてゐる。そして意味の上では、結句の、『まうら悲しも』に續くのであるが、聲調上からは、一句を隔ててかくいふのが自然であらう。また、かうするのが平板に流れずに重厚になつたのであらう。

或は、『人音もせねば』といふ句は、『まうら悲しも』にどうしても直接に連續せしめたかつたのでもあらう。そして、この、『おぼほしく』といふ語は、前でもさうであつた如く、此處でも第三句に使つて居る。さういふところに種々學ぶ點が多い。

○

【卷二・一九〇】

眞木柱太き心はありしかどこの吾が心しづめかねつも

眞木柱　太心者　有之香杼　此吾心　鎭目金津毛

語釋　**○眞木柱・太心者**　マキバシラ・フトキココロハと訓む。眞木卽ち檜で作つた柱で、立派であるからフトシの枕詞とした。卷六(九二八)に、長柄宮爾眞木柱太高敷而。卷七(一三五七)に、眞木柱作蘇麻人の例がある。『太心』は、強く動かぬ丈夫の心といふぐらゐの意味である。**○鎭目金津毛**　シヅメカネツモと訓む。鎭靜し兼ねたといふ意。卷五(八一三)に、彌許々呂遠斯豆迷多麻布等。神功皇后紀に、請二和魂一爲二王船鎭一。顯宗紀に、築立柱者此家長御心之鎭也。とある。モ

は咏歎の助詞で、結句に使つたのが誠に多い。

大意 眞木の柱の如くに太く強い、丈夫の心を持つてゐた自分であつたが、皇子尊の薨去に會ひ奉り、この悲しい心を靜めようとしてもどうしても靜めることが出來ないといふのである。

鑑賞 この歌は、稍概括的に、太く強く主觀を吐露して居るので、例へば、戀歌でいへば、『天地（あめつち）に少し至らぬますらをと思ひし吾や雄心（をごころ）もなき』（巻十二。二八七五）などと相似たものである。それだけ、内容が空虚のやうにも思へるが、二十三首の中にあつては、このやうな變化もまた大切である。

一首の句にあつては、『靜めかねつも』といふ句に注意すべきで、前の、『とどめかねつる』などのほか、『おもひかねつも』（巻四。五〇三）。『とどみかねつも』（巻五。八〇五）。『しのびかねつも』（巻十七。三九四〇）等の用例をも合せ味ふべきである。

○

【巻二・一九一】

毛衣を春冬片設けて幸しし宇陀の大野は思ほえむかも

毛許呂裳遠　春冬片設而　幸之　宇陀乃大野者　所念武鴨

語釋　**○毛許呂裳遠**　ケゴロモヲと訓む。獸の毛皮で作つた衣で、衣を張るから、春へ續ける枕詞としたのであるが、また、遊獵にも自然關係せしめて斯く使つたことが分かる。古今集春上の、『わがせこがころもはるさめ』の句は、衣を張ると春につづけた例で、又毛衣に就いては和名鈔に、音求、加波古路毛、俗云、加波岐奴。卷九（一六八二）に、裘　扇　不放山住人。卷十六（三八八四）に、鹿乃伏良武皮服著而等がある。**○春冬片設而**　ハルフユカタマケテと訓む。舊訓ハルフユマケテ。代匠記精ハルフユカタマケテ（古義・攷證・檜嬬手・美夫君志・講義・新訓）。童蒙抄ハルフユカケテ。考（片は取の誤で）ハルフユトリマケテ。新考（冬は衍で）ハルカタマケテ。卷五（八三八）に、宇具比須奈久母波流加多麻氣弖。卷十五（三六一九）に、麻多母安比見牟秋加多麻氣低。卷十（二一三三）に、雁之喧所聞冬方設而等の例がある。これは春・秋・冬・時等がみづから用意（設く）して近づき來る意で、春かたまけは、春の近づいて來ることとなる。講義に、『春片設而は春が近づきてといふことにて、なほ冬の時なるをいへるか』と云はれたが、この句は、或は、春の時も冬の時もといふ意で作者が使つたのかも知れない。

○宇陀乃大野者・所念武鴨　ウダノオホヌハ・オモホエムカモと訓む。巻一（四五）にある阿騎の大野と同處で、阿騎野は宇陀郡だから、宇陀の大野と云つたものである。眞淵は、『上の巻に宇陀の安騎野にて、日並斯（ヒナメシ）、皇子命（ミコノミコト）の、御狩たゝしゝ時は來向（キマケリ）と人万呂のよみし、同じ御狩の事をこゝにもいふ也』（考）と云つてゐる如くである。また、結句につき、『今よりは此有し御狩の事を、常の言ぐさ、思ひ種として慕奉らん哉と歎ていふ也』（考）とも云つてゐる。

大意　これから毎年、春にも、冬にも、狩獵の季節に近づく毎に、皇子尊が獵においでになつた宇陀の大野のことが思ひ出されて、何時までも忘れることがないであらうといふのである。

鑑賞　此歌は、前の歌等と稍趣を異にし、皇太子が宇陀の安騎の大野に遊獵し給うたことを追憶しつつ悲歎するさまに歌つて居る。その狩獵の追憶だから、自然に、『毛衾を春冬片まけて』といふやうに、具體的にあらはすやうになつたのであらう。また、多く居る舍人の中には、かういふ聯想からの歌を試みた者もゐたので、其を選んで此處に配列したものであらう。

この、『春冬片設而（ハルフユカタマケテ）』は九音になるので、聲調上一字衍だらうといふ説もあり得るのだが、荒木田久老の信濃漫錄には、アイウオ等の母音の入らぬ字餘の例として之を引用し、『九言一句とせり、此余あいうおのもじなき八言の句六言の句等萬葉集中には多し』と云つてゐる。然るに久老は、この

歌をば、『柿本大人哥』と明記してゐるのは、縦ひおもひちがひにせよ興味あることである。

○

【巻二・一九二】

朝日照る佐太の岡べに鳴く鳥の夜鳴かはらふこの年ごろを

朝日照　佐太乃岡邊爾　鳴鳥之　夜鳴變布　此年己呂乎

語釋　**○鳴鳥之**　ナクトリノと訓む。これはただ、『鳴く鳥の』といふ意味で、巻二（二〇七）の人麿の作に、喧鳥之音母不所聞とあるのと同じである。**○夜鳴變布**　ヨナキカハラフと訓む。夜毎に鳴く鳥の聲が何となく悲しく變つて聞こえる意。舊訓ヨナキカヘラフ（仙覺點・古義從之）。拾穗抄ヨナキカヘソフ。管見ヨナキカハラフ（代匠記・考以下從之）。童蒙抄ヨナキワビシキ。この意味につき、長流は、『鳥のかなたに飛び、こなたに飛びて泣ごとく、人々も行かふに皆泣くよし也』（管見）といつたが、契沖は、『年比此サタノ岡邊ニ凶鳥ノ夜鳴ニアシキネ鳴ツルハ、カ、ラムトテノサトシナリケルヨト思ヒ合テナゲク意ナリ』（代匠記精）。と云つて、美夫君志等も一部それに贊成してゐる。ま

た、『舍人等のかはる〴〵夜のとのいを嘆つゝするを、此岡による鳴鳥に譬へていひ下したり。かはらふは、上に反居者といへるに同じく、侍宿の交替をいふ』（考）とあつて、攷證・檜嬬手等もそれに從ひ、また、『幾度も〳〵鳴て居る意なり、中略幾遍も幾遍も、絶ず鳴て居るよしなり』（古義）といふ說もあり、『變布は度布の誤にて夜毎ニナキテ此年ゴロヲワタルコトヨ』（新考）といふ說もある。然るに豐田八十代氏は、『岡のほとりに鳴く鳥の夜の鳴聲が、この頃は前とは變つて悲しく聞えることである』（新釋）と譯し、講義が其を認容してゐる。つまり、鳥も鳴聲が變つたといふことになる。カハラフと云つたのは、事柄の引續くことをいふので、前の、ハナチラフの條で說明した如くである。時間の續く氣持だから、次の、『その年ごろを』といふのによく當嵌るのである。**○此年己呂乎** コノトシゴロヲと訓む。このごろといふ意になるのだが、語どほりにいへば、この一年ほどといふのである。結びの『を』は、『よ』にかよふ咏歎の助詞といふ說もあつたが、これは、『この年ごろを、夜鳴きかはらふ』とかへる格助詞である。卷一（四二）に、五十等兒乃島邊搒船荷妹乘良六鹿荒島囘乎とある如くである。ただ結句としての聲調を論ずる場合は、一言を費す必要があるので、鑑賞の部に述べて置いた。つまり、卷一（二六）の、隱毛不堕思乍敍來其山道乎の如き場合と等しいのである。卷十二（二八六〇）に、八釣河水底不絶行水 續戀 是比歲。同卷（三一四六）に、草枕旅之

衣紐解所念鳴此年比者がある。

大意 朝日の照つてゐる佐太の岡邊に鳴いて居る鳥のこゑが、皇太子がおかくれになつてからは、この頃は、前と變つて悲しく聞こえて來る、といふのである。

鑑賞 ここでは、『夜鳴變らふ』といふ句に注意すべく、古語の不思議な魅力を感ずることが出來る。前とは夜鳥の鳴聲も變つて悲しく聞こえるといふことを、『夜鳴變らふ』の一句であらはしてゐる。そして、この一語で時間的經過をも示してゐるのだから、かういふ簡淨な技法を前に置いて、現代の言語を驅使するのに、どう學ぶべきかといふことが大切になつて來るのである。

第一句から第三句までは直線的にのびのびと云ひくだして、且つ、『鳴く鳥の夜鳴き』と音を重ねなどして來て、さて、其處で、『かはらふ』と曲折變化せしめ、結句でまた、重く、辷らぬやうにして結んで居る。

次に、この結句の、『年ごろを』の、『を』は、一つの格助詞で、新考・講義等で論じた如く、『この年頃の間をかはらふといへるなれば格助詞のを』となるのであるが、前々から云つてゐる如く、この句を結句に持つて來たのは、其處に咏歎を籠めてゐるので、それが自然に、攷證・檜嬬手の著者などの心に感得せられたので、『よといふに似て助辭也』（攷證）と云つたものであらう。併し、此

處は、『八重垣つくるその八重垣を』の、『を』とは違ふので、この一首中にあつては、『この年ごろを』が主眼ではないので、『夜鳴變らふこの年ごろを』までを含めてゐるものとして味ふべきである。そして、『夜鳴き變らふ』で切れるので、一たび其處で据わるのだから、結句の『を』は格助詞であつても、咏歎を籠めなければ、尻輕になつて具合がわるいのである。

○

【巻二・一九三】

奴らが夜晝といはず行く路を吾はことごと宮道にぞする

八多籠良家　夜晝登不云　行路乎　吾者皆悉　宮道叙爲

語釋　○八多籠良家　ヤタコラガと訓む。奴等がといふ意。舊訓ヤタコラガ。代匠記初ヤタコラガ。或はハタゴラガ。考ヤタコラガ。或は〔多は豆の誤とし〕ヤツコラガ。玉の小琴〔良は馬の誤〕ハタコウマ。檜嬬手〔多は箇の誤、家は我の誤〕ヤツコラガ。意味は『奴等』といふ意（管見・代匠記・考・略解・檜嬬手・攷證・美夫君志・新考等）と、やはり代匠記の一說で、『旅籠』といふ意（代匠記・講義・全釋）。『旅籠馬』といふ意（玉の小琴）。今、契沖の第

一説に従ふ。『奴等之なり。紀に（神功）、宇麻比等破、于摩臂苦奴知、野伊徒姑播茂、伊徒姑奴池、このやいづこに同きを、こゝに八多と有は、づと多の音通へば、やたこともいひしにや。もし又豆を多に誤れるか』（考）。『旅人ニ宿カス所ヲ俗ニハタコ屋ト云ヲ思フベシ。八多籠トカケル籠ノ字モ此意ニヤ。馬追フ男ハ詞ナメゲニテ賤シキ者ノ限ナレバ、ソレラノミ行道トイヘルカ、夜トイハズ行ミチトハ官路ニハ道守アリテ、夜行ナドユルサヌ事アリ。是ハサル道ナラネバ賤シキ者モ恣ニ行ナリ』（代匠記精）。『ヤタコラと訓て奴等とするも去ことなれども、奴ならば、ヤツコと云べきをや。タコと云るもいかゞなる上に、籠の字をしも書むことといかゞなれば旁心ゆかず。故思ふに、良は馬の誤にて、ハタゴウマなるべし。旅籠馬と云こと蜻蛉日記にも見えたり』（玉の小琴）。なほ、異説をいへば、管見の初説は、『もののふの名也。やたは八尺の心也。』である。また、野雁の新考には、『畠子等之なり。田子と云に同じ』とある。**○夜晝登不云**　ヨルヒルトイハズと訓む。晝も夜もの意。巻四（七一六）に、夜晝云別不知吾戀。同巻（七二三）に、野干玉之夜晝跡不言。巻九（一八〇四）に、味澤相宵晝不云。巻十一（二三七六）に、夜晝不言戀度。同巻（二五六九或本歌）に、夜晝不云吾戀渡の例がある。**○吾者皆悉・宮道叙爲**　ワレハコトゴト・ミヤヂニゾスルと訓む。吾等の悉く（吾等が皆）が、宮に出仕する通路にするの意。舊訓ワレハサナガラ・ミヤカトゾスル。代匠記初書入

三之曰ミナガラ。考コトゴト・ミヤヂニゾスル（略解・古義・檜嬬手・講義・新訓・新解・全釋）。拾穗抄ミヤヂトゾスル（攷證・美夫君志）。この『皆悉』は、『吾』につくか、『宮道に爲る』に附くかといふに、『吾』に附く（講義參照）。然るに、新解では、『コトゴトハ悉皆で、その奴の通路を全くの意』と解して居る。

大意　これまではただ奴婢どもが夜晝となく往來したやうな、佐太岡のあたりをも、吾等の悉くが、宮に仕へるための通路とするやうになつてしまつた。『賤き里人どもが通ひ路を、吾等が宮づかへの道とするは、思ひかけぬ事かなとなげく也』（考）。

鑑賞　この歌には奴隷階級のことを點出してゐるが、これなども實際の寫生であるべく、奴婢等が常に通ひ得た道を、今は、『宮路にする』といふのは、さういふ變化したことを以て、直ちに悲歎の心として歌つてゐるので、材料から云つても特殊なものである。

さて、此歌は、二十三首中の一番終のものであるが、若し人麿が二十三首を代作したものとしたら、一番終にこの歌を置くのはどうかとおもふ。人麿の長歌・反歌等の結末を參照して考察するならば、人麿はもつと結末的な歌を此處に置くやうな氣がしてならない。そして、多くの舍人の歌から廿三だけ選拔してそれを手入し、整理したのだから、この歌が一番終にあつてもあへて不思議では無いといふことになるのである。

以上の二十三首を通覽するに、聲調は一般に古樸、確實であつて、中には實に驚くべき力量を示したものがある。これは選拔したためであらう。また、同じやうな語句、同じやうな材料、同じやうな語氣の重複のあるのも、舍人等が銘々作つた證據と看做すべく、人麿が代作したのだとすると、却つてかかる重複は無くなつたのではあるまいかと想像せられる。

それにも拘らず、一首一首に、驚くべき聲調の響があつて、これがおのづから人麿を聯想せしめるものであるから、私は祕かに人麿補助說をいだいて居ること、既に總論篇で論じたごとくである。併し、人麿代作說を抱き居る學者も可なり多くあるのだから、其等をも參照してかまはないのである。

この二十三首は、舍人等の作と明記せられてゐるのだから、舍人等の作に相違ない。これは何人も容喙を容さないであらう。そして、それ等の歌に對つて、人麿代作說、或は人麿補助說の出現するのは、文獻・記錄の背後にまで想像を逞しくして居るためである。考證もこの境界に入ればもはや心理小說の部類に編入せしめても、あへて輕蔑にはならぬのである。そしてどういふ說を立てるにしても、究竟は、『眞』に到達すれば好いといふことになるのである。

賀茂眞淵この二十三首一聯につき、『右は六百の舍人なれば、歌もいと多かりけんを、撰みて載られしなるべし。皆いとすぐれて、嘆を盡し事をつくせり。後にも悲みの歌はかくこそあらまほしけれ』(考)と云つた。蓋し名言と謂ふべきである。

ついで、安藤野雁の新考を見たるに、『然て此歌等は舍人の誄哥なり。故島の東宮の朝廷また各々其掌となる處々乎作て誄奉り、又御陵にて誄奉れるも有なり。』『許多の人等の廬舍り居ける其處ら邊の地にて各かしこの廬舍々々にて作て卽此詠哥等を歌ひて御哭泣つる挽哥なりければなり。今に東宮大舍人は職員六百人と所見るを其か盡一年更番々に日夜旦暮この哥等乎以誄奉れる一部の物なり』とある。考の說に大體似てゐて、一歩出たものである。

二十三首を斯く整理して、それを綜合的に鑑賞するときには、この二十三首の歌をば一大連作と謂ふこともまた可能である。伊藤左千夫がはじめて連作論を唱へたときには、もつと特殊な綜合上の要約があつたのであるが、今はその要約を餘り嚴格にせずに、廣義の連作と看做さうといふのである。さうすれば、一首一首の味ひのほかに、綜合上の味ひとして新しいものが生じて來るのである。

索引

凡例

一、**索引**は事項索引と歌句索引とに分かち、歴史的假名遣による五十音順に配列した。但し事項索引に於いては檢索上の便宜のため、小範圍に限り必ずしも五十音順によらない箇處もある。

一、**事項索引**は語句・人名・地名・書名の索引を兼ね、人名・書名等は比較的重要なる頁のみを擧げて簡略に從つた。

一、事項索引に於いては、**語句**は平假名を以て出し、下に漢字を注した。**書名**には「 」を附し、**地名**には平假名の傍訓を附した。**人名**の難讀のものにも同樣に平假名の傍訓を施したが、其他の傍訓には片假名を用ゐた。

一、**歌句索引**は本書に評釋した人麿作の長短歌及び附錄に評釋した長短歌の各句を出し、一云・或云等の歌句をも擧げた。但し本文に引用された人麿作歌以外のものは之を略してゐる。

事項索引

ア

あがき（足搔）……九一
アガキ用例……九三
明石……二四七
明石大門……二四八
明石の門……二五九
あかねさす（枕詞）……一〇三・七〇七
あかも（赤裳）
あかものすそ……四三
あかもひづちて……三七五
秋津野……四五九
安騎野……五四・五〇五
「安藝より石見を通過する道の記」……五四六
あく（飽・厭）
あかねかも……九七五
みれどあかざらむ……三五〇
みれどあかぬ……二二
ミレドアカヌカモ結句例……三七八
英虞浦……三九
あさ（朝・旦）
あさかは……四六一
あさごと……五九二
あさこゆ……五〇八
あさたつ……五九二
あさづくよ（枕詞）……八七五
あさつゆ……八一三
あさどりの（枕詞）……六四四
あさはふる……五二七
あさひてる……九六八・九九九
あさみや……六三八
あさごろも（麻衣）……七〇六
あさもよし（枕詞）……七一三
葦原の水穂の國……五八二
網代木……二八二
明日香（飛鳥）……六一二

飛鳥の浄の宮……五八五
明日香川(飛鳥河)……一一五・六一三
明日香皇女……一一四・六三〇
あたふ(與)……七七五
あたむ(怒)……六八五
あたらし……九〇一
あたり(邊・方)
　アタリ用例……九五
　　いへのあたり……二五〇
　　いもがあたり……九一・九五
あぢさはふ(枕詞)……六四三
あづさゆみ(枕詞)……七五〇
あづまのくに(東國)……六七九
あともふ(誘・率)……六八三
淡路……二一七
粟小島……三七七
あひみる(相見)……一四二
近江大津宮……四二一
　近江大津京址……三・四四九
　近江遷都の評……四四〇
淡海の海……二九三
あま(白水郎・海人)……二二九
あまのつりふね……二六六
アマトカミラム用例……二三〇
あま(天)
あまかぞふ(枕詞)……一六〇
あまぐも……一八九・五八四・六九六
あまざかる(枕詞)……二五六・四三〇
あまつたひくる……八六七
あまづたふ(枕詞)……五五八・八七一
あまつみかど……六七二
あまつみづ(枕詞)……五九〇
あまてらす……五八一
あまとぶや(枕詞)……七四一
あまのかはら……五七九
あまのみかげ……九三二
あまひれ……七七三
あめ(天)
あめしらす……一二九
あめしるや(枕詞)……九三二
あめのごと……七一六
あめのした……四二五・四三三
あめのみかげ……九三二
あめゆくつき……一九五

あめつち（天地）
あめつち（天神地祇）……八九四
あめつちとともに……九六六
あめつちひつきとともに……八三〇
あめつちのはじめのとき……五七九
あもる（天降）……六七八
網
あみにさす……一九五
嗚呼見浦（あみのうら）……三九
あやに（副詞）……六四三・六六九
あらか（宮殿）
みあらか……五九一・八九三
荒木田久老
網衛刺（アミニサシ）の訓（槻落葉）……一九六
宇治河歌の評（槻落葉）……二九〇
字餘歌の例（信濃漫録）……一〇〇四
舍人等慟傷歌の作者（信濃漫録）……一〇〇五
千重衛隠奴（チヘニカクリヌ）の訓（槻落葉……三〇五
ヨリ・ユ・ヨ論（槻落葉）……二六三
殯宮（あらきのみや）……五七八
荒木良雄……二三四
あらし（在）……二六五
あらそふ（競）……六九三
あらたし（新）……九〇一
あらたよ……九〇一
あら（荒）
あらたへの（枕詞）……二二八・八九一
あらどこ……八四一
あらぬ……七七二
あらやまなか……二〇一
あらやまみち……五〇七
あらぶ（荒）……九五六・九五七
ありがよふ（在通）……三一二
アリガヨフ用例……三一四
ありたたす（在立）……九二六
ありそ（荒磯・現磯）
荒磯（通説）……五二六・九七九
現磯（講義説）……五二六・九七九
ある（生）……四二四
あれつぐ……九四六
ある（荒）……六一七・九五八
あを（青）
あをがきやま……四八一
あをかぐやま……九二六

あをすがやま……九二九
あをごま……九一
　かあを……五二七
あをによし(枕詞)……四二七
安藤野雁
　日並皇子舎人誄歌の説（新考）……一〇一三

イ

い（接頭辭）
　いはふ(餔)……七〇八・八五五
　いまく(巻)……六八九
い（寐）
　いもぬらめやも……五六
　いをぬ……五六
「遊仙窟」……五四一
いかさまに……四二九・五九〇
筏(イカダ)……九〇三
いかづち（雷）……七二五
雷(いかづち)……一八九
　雷岳(いかづちのをか)……一八六
いきづく（息衝）……七七九
いく（生）
　いくるともなし……一四五
　いけりともなし……一四五・一五一
いくさ（軍）……六七九
いくだ（幾）……五五一
生田耕一
　舟公宣奴島爾の訓（難語難訓考）……二〇九
　雪驪の訓（難語難訓考）……二八〇
いくり（伊久里）……五四八
いさなとり(枕詞)……五二五
いさよふ……三三〇
　イサヨフ用例……三三〇
　いさよふなみ……二八二
いさり（漁）……二三三
石川(いしかは)……一八二
いしなみ（石並）……六三一
いそ（磯）
　いそのうらみ……九九〇
　ありそ……五二六・九七九
いそふ（競・爭）
　いそはく……九〇三
いづ（出）
　いでたち……八〇〇

いでみる……七五三
　みだれいづ……二六六
齋宮（イツキノミヤ）……六九四
いつく（齋）……六九四
泉の河（いづみのかは）……九〇二
出雲娘子……三三三
伊藤左千夫
　安騎野歌の評（新釋）……七〇・七四・五一五
　近江荒都歌の評（新釋）……二〇・四四八
　伊勢行幸歌の評（新釋）……四二・四六
　人麿評（新釋）……四四三
　藤原宮役民歌の作者（新釋）……九一四
　藤原宮御井歌の評（新釋）……九四一
　吉野宮歌の評（新釋）……二六・三五・四七〇・四九一
稻日野（いなびぬ）……二三四
稻見の海（いなみのうみ）……三〇五
いにしへ（古）
　いにしへおもふ……五七・二九七
　いにしへにありけむひと……三四三
　　イニシヘニアリケム（ケル）用例……三四三
いのる（禱）……三七三
　イノル用例……三七三
いは（石・磐）
　いはがきふち……七四七
　いはがくる……六七五
　いはがね……五〇七
　いはかまふ……六七五
　いはと……五八七
　いはねまく……一七五
　いはねさくむ……七八三
　いははし（石橋・石走）……六三一
石田王（いはたのおほきみ）……八七九
いはつつじ（羊躑躅）……九九〇
いはばしる（枕詞）……四三一・四六三・八九四
　石走……四三一
　珠水激……四六三
齋宮（イハヒノミヤ）……六九四
石見の海（いはみのうみ）
　いはみのうみ……五四六
　いはみのみ……五二二
「石見國明細書留」……五二二
「石見八重葎」……五六六
言掛の技法……二五五・三六一
飯田武郷

神ナガラの解（書紀通釋）……三六
いふ（言）……八一〇
　ひとのいふ……七八一
いふき（息吹）……六九五
いへ（家）
　いへのあたり……二五〇
　いへひと……三三〇
いほり（廬）……一九〇・八三六
　いほりす……二一六・八三六
　いほりする……一八九
　いほりせる……一八九
いほる（廬）……八三六
いま（今）……九八〇
　イマゾクヤシキ結句例……一六三
　イマモカモ用例……四四
います（往・坐）……五八七・七一二
　いましせば……九五八
いまだ（未）……七一一
いめ（夢）……九六三
いも（妹）……四九
　いもがあたり……九一・九五
　いもがかど……五三二
　いもがそで……五五四
　いもがな……七五五
　したぶるいも……八〇七
いや（彌）……一四二
　イヤ用例……一四二・四六二
　いやたかからし……四六二
　いやたかに……五三一
　いやつぎつぎに……四二四
　いやとしさかる……一四二
　いやとほに……五三〇
　いやめづらしき……八五八
伊良虞島（いらごのしま）……四八
いる（入）
　いらむひ……二四九
　いりがてぬ……九九三
　いりひなす（枕詞）……七七四
　ひのいる……九九八

ウ

うかは（鵜川）……四八五
うぐひす（春鳥）……七〇九
うす（失）……八一〇

宇陀の大野（うだのおほの）……一〇〇四
宇治河（うぢがは）……八九七
　もののふのやそうぢがは……二八二・八九六
うちなびき（打靡）……五五
うちはし（打橋）……六三三
うつ（打）
　うまうつ……二八〇・八七二
　こまうつ……二七六・二八〇・八七二
うつせみ（現身）……七六六
うつそみ（現身）……六三九
打歌山（うつたのやま）……九八・五七三
鵜……八五五
畝火山（うねびのやま）……四二三・九二八
うはぎ（宇波疑）……一六七
うへ（上）
　うへのいけ……九五五
　いかづちのうへ……一八九
　ふぢはらがうへ……八九二
上田秋成
　近江海歌の評（楢の杣）……三〇二
　宇治河歌の評（楢の杣・金砂）……二九〇
うま（馬）
　うまうつ……二八〇・八七二
　うまなむ……七一・八五三
うみ（海）
　うみべ……五二五
　うみをなす……二〇一
うら（浦）
　うらなし……五二三
　うらみ……五二二・九九〇
うら（心）
　うらさぶ……七七八
　まうらがなし……一〇〇〇

エ

え（枝）
　ももえつきのき……八〇一
「永言格」（雅澄）
　長歌説……四〇六
役民……八八八

オ

おき（沖・奥）……三三六・五二七
　おきつなみ……三〇五

おきつも……五二七
おきつもの(枕詞)……七四八
おく(置)……四二六
いもをおく……一四五・五三〇
やまとをおきて……四二六
奥野健治(萬葉大和志考)……六六八
忍坂部(おさかべ)皇子……一〇九・六一一
おつ(落)
おつるもみぢば……九四
おと(音・聲)……七五〇・七五四・八一〇・九九九
おときく……八一〇
おとにきく……七五〇・八一〇
おとのみ……六四七・七五一
ひとおと……九九九
磤稲綺道秀
高市皇子殯宮歌の評(長歌軌範)……七三一
長歌形態考(長歌軌範)……四〇九
おびゆ(脅)……六八六
おふ(生)
くさおふ……九八〇
おほ(大)
殯宮(オホアラキ)……五七八
おほきみ……一八八・三七三・四五五・五〇五
オホキミハ神ニシマセバ用例……一九三
おほと……二四八
おほとの……四三四・八六六
おほふねの(枕詞)……五五三・五九〇・六四五
おほみかど……九二五
おほみけ……四八四
おほみや……四三四
おほみやどころ……四三七
おほみやびと……五・四四
おほゆき……六九〇
おほ(凡)
おほにみる……一六二・八一一
大内陵……六七二
大島幾太郎
屋上山の説……五五五
大津(おほつ)……一六三
大津宮(近江京)……四二一
大津京址(近江京址)……三・四四九
大津遷都の評……四四〇
「大津京阯の研究」(肥後和男)……四四九
鵠(オホトリ)……七七九

おほとりの（枕詞）……七七九
おぼほし（鬱悒）……八四一・九六三
溺死（オボホレシニ）……三三三
大村光枝……四七四
大井重二郎
羽易山説（大和歌枕考）……七八〇
おも（面）
かみのみおも……八三〇
澤瀉久孝
宇治河歌の評（人麻呂歌集講話）……二九一
紐吹返（ヒモフキカヘス）の説（新釋）……二二三
吉野離宮説（新釋）……四五三
ヨドムトモの解（新釋）……二〇
おもふ（思）
オモフ用例……二三六・二六二
オモヘカモ用例……一二四
おもひかぬ……三六八
おもひしなゆ……五三一
おもひつつ……五五二
おもひやる……六四六
おもへれば……二三六
おもほす……六四二
おもほしめす……四二九・七一五
いにしへおもふに……五〇七
いにしへおもほゆ……二九七
いもおもふ……八四

カ

か（接頭辭）
かあを（青）……五二七
かかす（懸）
みなにかかせる……六四八
かく（掛・懸）
かけてしぬびつ……七一七
かけまくも……六六八
香川景樹……八一七
かがみなす（枕詞）……六四〇
柿本人麿（「人麿」ヲ見ヨ）
「柿本人麻呂事蹟考辨」（熊臣）……一七三
かぎろひ（炎）……六四・七七二
かきわく（掻別）……五八四
香具山（かぐやま）
香具山（かぐやま）の宮（みや）……七一五
青香具山……九二六

かくる（隱）……六七五・七七四
かくらく……一〇三
かくろふ……五五七
いはがくる……六七五
くもがくる……一九四
ちへにかくる……三〇五
可古の島……二三七
かざす（插）
はなかざしもち……四八三
もみぢかざせり……四八三
かしこし（畏・恐）……六七〇・七一七
かしこかれど……七一七
かしこみ……二〇三
かしこみと……八五六
橿原……四二三
春日政治
觸經の訓……六一四
かぜ（風）
ときつかぜ……八三一
はまかぜ……二一八
かた（潟）……五三三
荷田春滿（東滿）
近江荒都歌の評（僻案抄）……四四七
近江遷都の評（僻案抄）……四四〇
宇治河歌の評（童子問）……二九〇
羇旅歌の評（童子問）……二六〇
荷田信名
宇治河歌の評（童蒙抄）……二九〇
羇旅歌考（童蒙抄）……二一五
鳥穂自物の訓（童蒙抄）……七七
靡此山の評（童蒙抄）……五三五
かたこひづま（片戀夫）……六四四・六五三
かたぶく（傾）
ツキカタブキヌ結句例……六八
かたまく（設）
カタマケテ用例……一〇〇三
はるふゆかたまけて……一〇〇三
かたみ（形見）……六四八・七七五
がて（堪・敢）
いねがてずけむ……三四四
いりがてぬかも……九九三
ゆきすぎがてに……二三五・二四〇
かど（門）
いもがかど……五三二

加藤千蔭(橘千蔭)
　羇旅歌の説(略解)……二五六
　下部留妹(シタブルイモ)の訓(略解)……八〇七
　常滑の説(略解)……四七三
かなし(悲)
　ミレバカナシモ(キ)結句例……四四六
かぬ(難)
　カヌ用例……一一
　おもひかねつも……三六八
　とめぞかねつる……九七二
　なぐさめかねて……六一八
　まちかねつ……五
かは(河・川)
　かはのかみ……四八三
　かはせのみち……一五六
　かはも……六三五
　　あさかは……四六一
　　やまかは……二九・四八六
　　ゆふかは……四六一
かはる(變・替)
　かはらふ……一〇〇六
　としかはる……九七七
かふち(河内)
　きよきかふち……四九七
　たぎつかふち……三三
かへす(反)
　ふきかへす……二一九・二二五
かへりみ(顧)……五三〇・五五二
かへる(歸・還)
　かへりみむ……二二五
　とびかへりこね……九八三
釜口山(かまぐちやま)……七九一・七九六
かみ(上)
　かみつせ……四八五・六一三
かみ(神)
　かみのみおも……八三〇
　かみのみこと……四三三
　かみのみよ……四八七
　かみよ……三一一
　あれまししかみのことごと……四二四
　かはのかみ……四八三
　ちよろづかみ……五八〇
　やほよろづかみ……五八〇
かむ(神)

かむあがり……五八七
かむかぜ……六九五
かむから……八二九
かむさび……四七八
かむさぶ……六七五
かむつどひ……五八〇
かむながら……三一・五八六
かむのぼり……五八八
かむはかり……五八一
かむはふり……七一一
かむみや……七〇五
神奈備山(かむなびやま)……八七三
かめ(龜)
　ふみおへるあやしきかめ……九〇一
かも(助詞)……一七七・三五二・四三九・六六九
　あかねかも……九七五
　いまもかも……四四
　けふもかも……四四
　オモヘカモ用例……一二四
　ミレドアカヌカモ結句例……三七八
かもじもの(枕詞)……八九九
鹿持雅澄
　玉蜻(タマカギル)の訓(玉蜻考)……五〇九・七四六
　長歌説(永言格)……四〇六
　濱風爾紐吹返(ハマカゼニヒモフキカヘス)の說(古義)……三二一
賀茂眞淵
　珠水激(イハバシル)の訓(冠辭考)……四六三
　宇治河歌の評(考・新採百首解)……二八四・二八七
　打歌山の説(考)……九八・五七四
　舍人等慟傷歌の評(考)……一〇一三
　靡此山(ナビケコノヤマ)の評(考)……五三六
　人麿長歌の評(考)……四一五
　東野炎立所見而(ヒムガシノヌニカギロヒノタツミエテ)の歌の訓(考)……六四
　烏穂自物(ヲトコジモノ)の訓(考)……七七六
鴨山(かもやま)……一七三
かよふ(通)
　ありがよふ……三一三・三一四
かよりかくより……五三八
から(故・柄)
　かむから……八二九
　くにから……八二九
辛崎(からさき)……五
辛(から)の崎(さき)
託野韓島説……五四六

唐鐘浦説……五四六・五六六
かり（獵）
　みかり……七二・八五三
獵路(かりぢ)……八五四
獵路(かりぢ)の池(いけ)……八五二
獵路(かりぢ)の小野(をの)……八五四
かりごもの（枕詞）……二六六
かりのこ（雁兒）……九八二
かりみや（行宮）……六七七
輕(かる)……七四二
　輕の市……七五三
　輕の道……七四二
かる（刈）
　たまもかる……四五
　まくさかる……五九
　みくさかる……五九
輕皇子(かるのみこ)（文武天皇）……五四・五〇五
漢語助詞不讀の例（也・焉）……八一三
漢文流の詞書……七四〇

キ

きく（聞）
ききのかしこく……六九〇
きこす（聞）
　きこしめす……六七六
　きこしをす……四五六
岸本由豆流
　網爾刺(アミニサシ)の訓（攷證）……一九六
　霞立(カスミタチ)の訓（攷證）……四三六
擬人法的表現……七・一六
喜田貞吉
　火葬説（古代墳墓の沿革）……三二九・八〇三
　藤原宮址考（帝都）……八八七
　眞神原皇都説（帝都）……六七三
北村季吟
　家當不見(イヘノアタリミズ)の訓（拾穂抄）……二五〇
北村庸夫……四四九
きぬがさ（蓋）……一九七
城上(きのへ)（木瓱）……六三〇
　城上殯宮……一・四・六六八
吉備津釆女(きびのつのうねめ)……一五四・八〇六
きほふ（競）
　ふなぎほひ……四六一
きみ（君）……一二九・三五〇

よろしききみ……六三六
きむかふ（來向）……七三
木村一郎……四四九
木村正辭
火葬說（美夫君志）……三三九・八〇三
ヒジリの說（美夫君志）……四二三
きもむかふ（枕詞）……五五二
きよし（淸）
きよきかふち……四五七
淨の宮……五八五
きり（霧）……三三三
ゆふぎり……六二一・八一三
きる（霧）……四三六
羇旅歌八首考……二〇二・二一五
「金砂」（秋成）
羇旅歌の說……二〇九

ク

くさ（草）
まくさ……五九
みくさ……五九
草壁皇子（日並皇子）……五四・一〇〇・五七八
くしろつく（枕詞）……四三
くだ（小角）……六八五
百濟の原……七一一
くに（國）……三一七・四九八
くにから……八二九
くにしらす……九五三
くにはしも……四五七
くにみ……四八〇
しらぬくに……九〇〇
そとものくに……六七六
よしぬのくに……四五八
をすくに……六七九・八九二
くはし（細）
なぐはし……三〇四・九三一
熊谷直好
高角山歌の解……七九
熊野……三三九
くまみ（隈回）……九六四
くも（雲）
くもゐ……九一・九三一
あまぐも……一八九・五八四・六九六
くもる（曇）

たなぐもり……九九七
くやし（悔）……八一一
いまぞくやしき……一六三
倉無(くらなし)の濱(はま)……三七六
繰返の技法……三八六
くる（來）
くれば……五五七・五七二
こひくる……二五九
「懷風藻」（吉野の詩）……四六八・四七四
火葬
出雲娘子吉野火葬……三三三
火葬の起原……三二八・八〇二
火葬の烟……三三一
土形娘子泊瀨山火葬……三二八
訛傳歌……八九・一五一
「冠辭考」（眞淵）
珠水激(イハバシル)の訓……四六三

ケ

契沖
東野炎立所見而の歌の訓（代匠記）……六三
近江遷都の評（代匠記）……四四〇
屋上山の說（代匠記）……五六五
烏穗自物(ヲホシモノ)の訓（代匠記）……七七六
けく（形容詞ク形名詞法の語尾）……六九〇
けごろもを（枕詞）……一〇〇三
けだしくも（蓋）……六一八
結句
イマゾクヤシキ結句例……一六三
コヒワタルカモ結句例……一三〇
シラズモ結句例……一三七
ズ止結句例……二五三・二五五
ズテ・ズシテ・ズトモ止結句例……二六四
ツ止結句例……一〇
ツキカタブキヌ結句例……六八
ナクニ止結句例……三二三
ヌ止結句例……二一三
ハモ止結句例……九五四
ミレドアカヌカモ結句例……三七八
ミレバカナシモ（キ）結句例……四四六
ヲ止結句例……二三〇・二三二
ヲシモ結句例……一〇一
人麿長歌の結句……七五九
飼飯海(けひのうみ)……二六四

「犬雜隨筆」……七一二
顯昭……一八五

コ

こ（子・兒）……五五〇・七七二
こら……三三三・七七二・八〇八・八四三
古泉千樫
名細寸稻見乃海之（ナグハシキイナミノウミノ）の評……三〇七
トホノミカドの解……三一〇
幸田露伴
遊副川の訓……五〇〇
遊仙窟論……五四一
鴻巣盛廣
宇治河歌の評（全釋）……二九一
こぎわかる（榜別）……二四九
「國歌八論」（田安宗武）
長歌說……三八九
こころ（心・情）
こころこほし……二三七
こころたがふ……九六六
こころもしぬに……二九六・三〇一
なぐさむるこころ……七五二
ふときこころ……一〇〇一
ここだ（多）……八二九
「古語の新研究」（佐藤仁之助）
掛卷母畏支（カケマクモカシコキ）考……六七一
「古事記傳」（宣長）
伊久里考……五四九
小篠大記
辛乃埼考……五六六
こす（來）……九〇〇
巨勢道（こせぢ）……九〇〇
こそ（係助詞）
よりてあれこそ……八九四
こぞ（去年）……一四一
こだち（木立）……二七五
こち（此方）
こちごち……七七一
をちこち……八三六
ことごと（悉皆）……四二四・七〇七・一〇〇九
ことさへぐ（枕詞）……五四六・七一一
詞書（漢文流の）……七四〇
こふ（戀）
こひくる……二五九

こひわたる……一三〇
いもにこふ……三四三
こもりこふ……七四七
ひとめにこふ……一〇七
こほし（戀）……二三七・二四六
「古風三體考」（近藤芳樹）
長歌の説……四一九
こま（馬・駒）
こまうつ（馬打）……二七六・二八〇・八七二
あをごま……九一
雪驪の訓……二七六・二七七・二八〇
こまくら（木枕）……一五二
こまつるぎ（枕詞）……六七七
こもる（隱・籠）……七四七
こもりえ……二〇四
こもりぬ……一三二
こもりくの（枕詞）……三二九・五〇六
こもりこふ……七四七
こやす（臥）……六三五
こゆ（越）
あさこゆ……五〇八
ころもでの（枕詞）……八九五
近藤芳樹（田中）
長歌の説（古風三體考）……四一九
藤原宮木材運輸徑路考（註疏）……九〇六

サ

齋藤孝治
伊久里考……五四九
齋藤茂吉
伊久里考……五四九
鴨山考……一七五
幸乃崎考……五四六・五六六
長歌連續聲調説……三八五
阪口保……二三四
さかとりの（枕詞）……五〇八
さかゆ（榮）……七〇三
さかる（離）
さとはさかりぬ……五三〇
としさかる……一四二
さきく（幸）……五
サキク用例……八
さくむ……七八三
佐佐木信綱

近江海歌の評（選釋）……三〇二
廬爲流鳴の訓（選釋）……一八九
常滑の説……四七三
雪驪の訓（新訓萬葉集）……二七六
ささぐ（捧）……六八六
樂浪……三・一五五
　ささなみの（枕詞）……三・一五五
ささのは（小竹葉）……八二
さす（刺）
　あみにさす……一九五
さすたけの（枕詞）……七〇五
佐太の岡……九六八
さで（小網）……四八六
さと（里）……七四三
佐藤仁之助
　掛卷母畏支考（古語の新研究）……六七〇
讃岐國……八二八
さねかづら（枕詞）……七四六
さは（多）
　さはにあれども……四五七
佐日の隈（檜隈）……九六三
さぶ（接尾辭）
　かむさぶ……四七八
　しみさぶ……九二八
さぶ（寂）
　うらさぶ……七七八
さぶし（寂）……一五八・八一二
さへ（助詞）……三四七
佐伯梅友……四六
狹岑島……一六五・八二六
佐美の山……一六六
さもらふ（侍）……七〇九・九八七
さや（清）……八二
さやぐ（騒）……八三・八三五
さわぐ（騒）……六八八・八三三・八九七
サワグ用例……八九七
さゐさゐ（擬音）……三六六

シ

死
　上代の死後觀……七六〇
　死去に用ゐたるスグ（過）……六〇・一一〇
　溺死……三三三
　死の稱別（位階による）……一七三

し（助詞）……五七九
しか（然）
　しかしも……七〇二
　しかれども……七一五
志賀（しが）
　志賀津（つ）……一五五
　志賀の大曲（おほわだ）……一三
　志賀の辛崎（からさき）……五
しかば（キの已然形＋助詞）用例……一六四
しがらみ（水柵）……一一五
しきたへの（枕詞）……一〇九・五五九・六四〇・八一一・八四〇
しきなみ（頻浪）……八三二
しく（敷・治）……八六六
　ふとしく……四六〇・五八六・五九一
しく（及）……三四九・三五一
しげし（繁・茂）
　しげき……七七一
　しげけく……六九〇
　しげみ……一三六
しし（鹿・猪）……八五四
　ししじもの（枕詞）……七〇七
しじぬく（繁貫）……三八一
したぶ……八〇七
しづむ（鎮）
　しづまる……七一四
　しづめかねつも……一〇〇一
しづむ（沈）
　こひにしづむ……三六九
　さゐさゐしづむ……三六七
「實用帝國地名辭典」……五四八
「信濃漫錄」（久老）
　字餘歌の例……一〇〇四
　舍人等慟傷歌の作者……一〇〇五
しなゆ（萎）
　おもひしなえて……五三一
しぬに（萎）
　こころもしぬに……二九六
　ココロモシヌニ用例……三〇一
しぬぶ（偲）……五三二・六四八・七一七
しの（篠）……五一一
「袖中抄」
　伊久里の說……五四八
しほさゐ（潮騷）……四七
しま（島）

しまと……三一一
しまみ……四九・三七七
しま(島・庭池島)……一〇七・九七一
島の宮……一〇七・九五三・九七四
しまのみはし……九九四
島木赤彦
敷妙乃袖易之君の歌の評(鑑賞及び其批評)……一一一三
斂馬乎過訓の評(短歌輪講)……二一五
しましく(暫)……九五
じみさぶ(繁)……九二八
しみづ(清水)……九三五
　ましみづ……九三四
下河邊長流「萬葉集管見」……三一〇・一〇〇五
しもつせ(下瀬)……四八六
しもと(楚樹)……五〇七
じもの
　かもじもの(鴨)……八九九
　ししじもの(猪)……七〇七・八五六
　とりじもの(鳥)……七七四
　ゆきじもの(雪)……八六七
　をとこじもの(男)……七七六
「上代日本文學史」(武田祐吉)
　依羅娘子の説……一八五
省略(省略融合)技法……三七・二二三・六〇一・六五四・七一六・七二六
序歌(序詞)……二五・二八二・三六三
しらす(治)
　しらしめす……四二五・四三三・五八二
　あめしらす……一二九
　くにしらす……九五二
　たかしらす……八九三
しる(治)
　たかしる……四八〇
しる(知)
　しらずも……一三七
　しらにと……一七七
　しらぬくに……九〇〇
しろしめす(治)……四二五
しろたへ(白妙)……七〇六

ス

す(爲)
　すらむ……三九
　するかも……三三・一八九
　せるかも……八九

ず（助動詞）
　ズ止結句……二五三・二五五
　ズテ・ズシテ・ズトモ止結句……二五四
すぐ（過・通過）
　すぎがたし・すぎかぬ・すぎがてず……二四一・二四二
　すぎて……九一・二一〇
すぐ（過・死去）……六〇・二一〇・八一三
　すぎていにき……七四九
　すぎにしきみ……六〇
　すぎにしこら……八一三
　すぎぬ……二一〇
　すぎゆく……二一〇
すぐ（過・過去）……七一〇・七一五
鱸（スズキ）……二二九
鈴木重胤「日本書紀傳」……六八八
鈴木虎雄……七三三
すそ（裾）
　たまものすそ……四〇
すだつ（巣立）……九八三
すべ（便・術）
　いはむすべ……七五一
　せむすべ……七五一
すまふ（住）……九九五
すめろぎ（天皇）……四三三
すら（助詞）……六一六
すう（据）……三七二

セ

せ（瀬）
　かみつせ……六一三
聲調
　長歌の内容と聲調との關係……三九〇
　長歌連續聲調說……三八五
關谷眞可禰
　近江上來歌の年代（人麿考）……二八八
　東野炎立所見而（ヒムガシノヌニカギロヒノタツミエテ）の歌の說（人麿考）……七〇
　人麿臨死時歌の評（人麿考）……一八〇
せく（塞）……一一五
接頭辭（接頭語）
　い……七〇八・八五五
　か……五二七
　ま……九三五・一〇〇〇
　み……六八九
接尾辭（接尾語）

ら……八〇八・八四二・八四三
「仙覺抄」（仙覺）
露霜の解……五二九
常滑の說……四七三
ヤスミシシの說……四五五
伊久里の說……五四八

ソ

そ（禁止のナに對する）……九五
ぞ（係助詞）
もぞ……六三三
そこ（其）
そこもふ……五九三
そこゆゑ……五九三
そで（袖）
そでかふ……一一〇
そでふる……七八・三六一・七五五
いもがそで……五五四
ころものそで……五五九
ふるそで……七八
そとも（背面）……六七六・九二九
そとものくに……六七六

そふ（副）
みにそふ……六一六・八一二
そらにみつ（枕詞）……四二六

タ

題詞（漢文流の）……七四〇
「大日本風土記」……五四七
たかのこ（雁兒）……九八四
高崎正秀……八四七
たかしる（高治）
たかしらす……八九三
たかしります……四八〇
たかしるや（枕詞）……九三一
たかてらす（枕詞）……五〇五
高照日皇子（天武天皇說）……五七五・六〇〇
高照日皇子（日並皇子說）……五七五・五九七
たかどの（高殿）……四八〇
たかひかる（枕詞）……八六六
たかひしる（高日知）……三七三
高角山（たかつぬやま）……七七
高橋殘夢……五七九
たがふ（違）

　ころたがふ……九六六
たぎつ（激）
　たぎつかふち……三二
瀧の御門……九八七
瀧の都……四六三
たぐ（哭）……一六六
たくなはの（枕詞）……八〇九
武田祐吉
　彌高良之珠の訓（新解）……四六二
　宇治河歌の評（新解）……二九一
　雪驪の訓（新解）……二八一
　珠藻苅敏馬乎過の歌の評（新解）……二一五
　嬬ノミコトの説（新解）……六二六
　遠ノ朝庭の説（新解）……三一一
　紐吹返の説（新解）……二二二
　山川毛の歌の解（新解）……三六
　依羅娘子の説（上代日本文學史）……一八五
　越野過去の訓（新解）……一一三
高市皇子……六六七
ただ（直）……三四〇
　ただにあふ……三四二
たたす（立）
　ありたたす（在立）……九二六
たたなづく（枕詞）……六一五
たたなはる（疊）……四八一
たたはし（偉・滿）……五八九
たちとりはく（太刀取帶）……六八三
橘の島の宮……九七四
橘守部
　宇治河歌の評（檜嬬手）……二九一
　長歌説（長歌撰格）……四〇〇
　長歌形態考（長歌撰格）……四〇七
　長歌（憶良）評（長歌撰格）……四一五
　長歌（人麿以前）評（長歌撰格）……四一六
　人麿上來經路説（檜嬬手）……五六五
たちむかふ（立向）……六九三・八七四
たつ（立・自動詞）
　あさたつ……五〇九
　いでたち……八〇〇
　かぎろひのたつ……六五
　すだつ……九八三
　みたち……九七一
　みかりたつ……七二・八五三
たつ（立・他動詞）

うかはをたて……四八五
　とぐらたて……九八二
たづさはる（携）……六四〇・七六八・八〇〇
辰巳利文「大和萬葉地理研究」……七六二
伊達市太郎……八五四
田上山（たなかみやま）……八九五
たなぐもり（棚曇）……九九七
たなしらず（不知）……八九八
たなびく（靡）……三三三
だに（助詞）……一一八・七五四・九六三
たぬし（樂）……二七八
たのむ（憑）……七七二
たび（旅）
　たびのやどり……三一六
　たびやどり……五一一
　たびびと……五四
　たびゆく……二二九
丹比眞人名闕……一八三
答志の崎（たふしのさき）……四四
たふとし（尊）……五八九
たへ（布）
　あらたへ……八九一
　しろたへ……七〇六
たま（玉・美稱）
たまかぎる（枕詞）……五〇九・七四六・七八四
たまぎぬ……三六六
たまだすき（枕詞）……四二二・七一七・七五四
たまだれの（枕詞）……一一〇・六一九
たまづさの（枕詞）……七四九
たまどこ……一五二
たまも……四〇・四二・六二〇
たまも……四五・五二七
たまもかる（枕詞）……二一〇
たまもなす（枕詞）……五二九
たまもよし（枕詞）……八二八
「玉勝間」（宣長）
　藤原宮役民歌の作者……八八九
たまくら（手枕）……八一一
田安宗武
　長歌説（國歌八論）……三八九
たゆ（絶）
　たゆることなく……二五・四六二
たゆたふ……六四五
たる（足）

たりゆく……八三〇

チ

ちたび（千遍）……九九二
持統天皇
　雷岳御遊……一八六
　伊勢行幸……三八
　吉野行幸……二三・二九・四五三
千鳥（チドリ）……二九五
　夕波千鳥……二九四
ちはやぶる（枕詞）……六八〇
ちへ（千重）
　ちへにかくる……三〇五
　ちへのひとへ……七五二
長歌
　繰返の技法……三八六
　形態……四〇七
　大長歌・中長歌・小長歌（重年長歌說）……三九三
　疊句（守部長歌說）……三九四
　對句（重年長歌說）……三九四
　內容と聲調との關係……三九〇
　連續聲調說……三八五
　文獻一覽……四一九
「長歌軌範」（磤稻綺道秀）
　高市皇子殯宮歌の評……七三一
　長歌形態考……四〇九
「長歌詞珠衣」（小國重年）
　長歌說……三九三
「長歌撰格」（橘守部）
　長歌形態考……四〇七
　長歌說……四〇〇
長歌（憶良）評……四一五
長歌（人麿以前）評……四一六
ちよろづかみ（千萬神）……五八〇
ちる（散）
　ちりのまがひ……五五三
　ちりのみだり……五五三
　ちりみだる……九五
　はなちらふ……四五八

ツ

つ（助詞）……四七九・四八五・四八六
つ（助動詞）
　ツ止結句……一〇

　かねつる……九七二
樛木(ツガノキ)……四二四
　つがのきの(枕詞)……四二四
つかのま(束間)……三六四
つかはす(遣・使)……七〇五
つかひ(使)……三五〇・七四九
つかふ(奉)……二九・四八六・四九五
　つかへまつる……三〇
つき(月)
　ツキカタブキヌ結句例……六八
　つきひとをとこ……三八二
　あさづくよ(枕詞)……八七五
　あめゆくつき……一九五
　　よわたるつき……一〇二
槻(ツキ)(欟)……七六九
　ももえつきのき……八〇一
次田潤……二四〇
つぐ(繼)
　つぎきたる……八三一
　つぎつぎに……四二四
　　あれつぐ……九四六
辻村精介……八五四
つたふ(傳)
　あまづたふ……五五八・八六七・八七一
　　みづつたふ……九九〇
土田杏村
　宇治河歌の評(上代の歌謠)……二九二
　遊仙窟模倣説(文學の發生)……五四一
土屋文明
　安騎野歌作歌時考(年表)……五〇五
　近江上來歌年代考(年表)……二八七
　高照日皇子の説(總釋)……五九九
　羽易山・引手山の説(總釋)……七八二
　吉野行幸時考(年表)……二九・四五四
躑躅(ツツジ)
　いはつつじ(羊躑躅)……九九〇
つつみ(堤)……七六九
つづみ(鼓)……六八四
つどふ(集)
　　かむつどひ……五八〇
つなさす(綱刺)……一九六
つぬさはふ(枕詞)……五四四
角(つぬ)の浦回(うらみ)……五二二
つま(妻・孋)

ツマ詣說……五二〇
つまら……八四二
つまや……七七八
つまごもる(枕詞)……五五四
つま(夫)
　つまのみこと……六一四
　　かたこひづま……六四四・六五三
つまで(抓手)……八九六
　ひのつまで……八九五
つむじ(飈)……六八九
つゆ(露)
　つゆじも……五二九
　つゆじもの(枕詞)……五二九
　あさつゆ……八一三
つるぎたち(枕詞)……六一六・八一二
つれ(由緣)
　つれもなき……五九〇・九九四
對句(重年長歌說)……三九四

テ

朝集使……五一九
溺死……三三三
疊句(守部長歌說)……四〇一
てる(照)
　あさひてる……九六八・九九九
天智天皇……三・四二一

ト

と(格助詞)……一四六・三一四
　トシテの意のト……三一四
　と・も……一四五・一五一
ど(接續助詞)……五
と(門)
　あかしおほと……二四八
　あかしのと……二五九
とき(時)
　ときつかぜ……八三一
　ときどき……六四二
　ときならず……八一二・八一三
土岐善麿……三九〇
德田淨
　常滑考……二七
德富蘇峰……七三三
とぐら(鳥塒)……九八二

とこ（常）……二四
　とこつみかど……九六一
　とことは……九八五
　とこみや……六四二・七一三
　とこやみ……六九六
　とこよ……八六九・九〇一
とこ（床）
　あらどこ……八四一
　よどこ……六一七
とこしへ（常）……九三四
とこなめ（常滑）……二三・二七・四七三
とし（年）
　としかはる……九七七
　としごろ……一〇〇六
ととのふ（齊）……六八三
舍人（トネリ）……一三四
　内舍人……九五〇
　大舍人……九五〇
　舍人（日並皇子の）等慟傷作歌……九五〇
との（殿）
　おほとの……四三四・八六六
とのゐ（侍宿）……九六一
とぶ（飛）
　とびかへる……九八三
　とぶとりの（枕詞）……六一三
とむ（止）……九七二
とも（助詞）……一四・一一九
ども（助詞）
　形容詞語尾ケにつくドモ……五五七
　ドモ用例……八五
ともに（共）
　あめつちとともに……九六六
ともし（羨）……九四七
ともしびの（枕詞）……二四七
豐田八十代
　常滑考（基礎的研究）……二七
　人麿上來經路考……八八
　屋上山の說（基礎的研究）……五五五
　吉野行幸の說（地理考）……二二
　吉野離宮考（地理考）……二二・四五四
とよむ（響）……八三五・八七六
虎……六八五
とり（鳥）
　とりがなく（枕詞）……六七九

とりじもの(枕詞)……七七三
　はなちどり……一〇七・九五六
とる(取)
　とりあたふ……七七五
　とりはく……六八三
　とりもちて……七六六
とをよる(撓依)……八〇七
とをを(撓)……八〇七

ナ

な(助詞・禁止)
　なちりみだれそ……九五
な(汝)
　ながなけば……二九六・二九九
　　ナガナケバ用例……二九六・三〇二
な(名)
　なぐはし……三〇四
　なぐはし(枕詞)……九三一
　　いもがな……七五五
中島光風……九四五
ながぢ(長路)……二五七
ながて(長手)……二五八
長皇子(ながのみこ)……一九五・八五二
中の水門(なかのみなと)……八三一
那珂通高
　安騎野歌の説……七五
中村知至「長歌規則」……四一九
ながら(随)
　かむながら……三二
　みこながら……六八一
「長等の山風」(信友)……六八七
哭澤の神社(なきさはのもり)……三七二
なく(鳴・泣)
　しかなく……三八〇
　ねになく……三四七
　よなき……一〇〇五
なぐさむ(慰)
　なぐさむる……六四五・七五二
　なぐさめかね……六一八
なくに
　ナクニ肯定説(宣長)……三一八
　ナクニ用例……三三三
　いへまたなくに……三一七
なす(爲・成)

うみをなす……二〇一
なす（鳴）
ふきなす……六八四
なす（寢）
なせる……一七〇
なつくさの（枕詞）……二一一・二一三・五三一
なづさふ……三三六
ナヅサフ用例……三三六
なづむ
なづみく……七八三
なびく（靡）
なびかひし……六一四
なびきしいも（きみ）……七四八
なびけこのやま……五三三
うちなびき……五五
たなびく……三三三
なべに（並）……一三九・八九四
なみ（波・浪）
いさよふなみ……二八二
ゆふなみ……二九四
しきなみ……八三三
なむ（助動詞）
みなむかも……九九一
なむ（並）
うまなむ……七一・八五三
ふねなむ……四六一
なよたけ（女竹）……八〇七
平山（ならやま）（奈良山）……四二八

ニ

に（助詞）
ニ戀ふ……三四三
濱風ニ……二三三
にぎはだ（柔膚）……六一五
西田直養「萬葉集長歌格」……四一九
西村眞次
宇治河歌の評……二八八
には（庭）……二六五
にはたづみ（枕詞）……九七二
新田部皇子（にひたべ）……二七四・八六四
丹生川上（にふのかはかみ）（吉野離宮說）……二三
「日本書紀通釋」（飯田武鄕）……三六
「日本書紀傳」（鈴木重胤）……六八八
「日本地誌提要」……五五五

ヌ

ぬ（野）
　あらぬ……七七二
ぬ（寐）
　いもぬらめやも……五六
いをぬ……五六
　なびきぬ……五五〇
ぬ（助動詞）
　ヌ止結句……六八・二一三
ぬれ（バを伴はざる）……五五八
鵼鳥……六四三
　ぬえどりの（枕詞）……六四三
ぬく（貫）
　しじぬく……三八一
野島の埼……二一・二一八
ぬばたまの（枕詞）……一〇三・六一七
ぬる（沾）……五五九

ネ

ね（音）
　ねになく……三四七
　ねをなく……三四七
ねもころ（懃）……七四三

ノ

のど（長閑）……一一五
のる（乘）
　ふなのり……三九

ハ

は（助詞）
　はも……九五一
　ハモ止結句……九九四
ば（助詞）……二四九
　バを伴はぬ已然形條件法……五八・六九一・七三二
羽易の山……七七九
はかる（分）……五八一
萩（芽子）
　萩の妻……八七四
はく（帶）
　たちはく……六八三
　とりはく……六八三
はし（愛）

はしきつま……八四二
はしきやし……五七三・六四八
はし（端・間）……六九三
はし（橋）
いはばし……六三一
うちはし……六三三
みはし……九九四
橋本進吉
「がてぬがてまし考」……二三五
如許呂の訓……六三五
はしら（柱）
まきばしら……一〇〇一
みやばしら……四六〇・五九一
はしりで（趍出）……七六八
長谷川如是閑
宇治河歌の評……二九二
はた（旗・幡）……六八六・六八七
はたすすき……五一一
泊瀬の山……三三〇・五〇六
泊瀬部皇女……一〇九・六一一
はな（花）
はなちらふ……四五九・四六七
はるばな……五八九
はるばなの（枕詞）……五八九
花田比露思
雷岳の説（私解）……一九四
稲見野歌の解（私解）……二四六
はなちどり（放鳥）……一〇七・九五六
埴安……七〇七
埴安の池……一三二
埴安の堤……九二五
はひ（灰）……八〇一
はふ（匍）……七〇八
はふつたの（枕詞）……五五一
いはふ……七〇八・八五五
はふり（葬）……七一三
かむはふり……七一一
はふる（羽振）
あさはふる……五二七
ゆふはふる……五二八
はまかぜ（濱風）……二一八
濱木綿……三三九
林古溪
宇治河歌の評（外來文學考）……二九二

羇旅歌の評（外來文學考）……一二七
法華經影響說（外來文學考）……五四二
はゆ（生）……六三四
はる（春）
はるくさ……四三五・八五八
はるくさの（枕詞）……八五八
はるとりの（枕詞）……七〇九
はるのは……七七一
はるばな……五八九
はるばなの（枕詞）……五八九
はるび……四三五
はるふゆかたまけて……一〇〇三
はるべ……四八三
はるやま……九二八
「欒游餘錄」……五六六
伴信友
高照日皇子の說（長等の山風）……五九八
玉蜻考（比古婆衣）……五一〇

ヒ

ひ（日）
ひつき……一三〇・五九二
ひのいる……九九八
ひのたて……九二七
ひのよこ……九二九
ひのことごと……七〇七
ひのみかげ……九三三
ひのみかど……八九九
ひのみこ……五〇五・五八五
日皇子（天武天皇說）……五八五・六〇〇
日皇子（日並皇子說）……五八五・五九七
ひのめ（日目）……六九六
あさひてる……九六八・九九九
わたるひ……七四七
ひかる（光）、
たかひかる（枕詞）……八六五
引手(ひきで)の山(やま)……一四四・七九〇
樋口功「人麿と其歌」……一七七
肥後和男……四四九
「比古婆衣」（信友）
玉蜻考……五一〇
ひさかたの（枕詞）……五七九・六七二
久松潜一「長歌の本質」……四一九

ひじり（聖帝）……四二三
土形娘子（ひぢかたのをとめ）……三二八
ひづち（濡）……三七六・六二〇
ひと（人）
　ひとおと……九九九
　ひとのいふ……七八一
　ひとめ……七四五
　　むかしのひと……一一五
　　もろひと……六八六
　　よものひと……五九〇
ひとへ（一重）……七五二
ひとり（一人）……七五四
人麿
　羇旅歌八首……二〇二・二一五
　後進への影響……四五〇・四九四・五四三・六〇七・六六一・七三五・七六三・七七四・八四九
　長歌主要結句一覽……七五九
　上來（從石見）徑路……八八・五二〇・五六四
　人麿時代の死後觀……七六〇
　人麿時代の勞動……九一八
　人麿と漢文學……五四一・七二三
　人麿と佛典……五四二
　人麿の妻（死せる）……七四〇
　人麿の妻（依羅娘子）……五七四
「人麿考」（關谷眞可禰）
　近江上來歌の年代……二八八
　東野炎立所見而（ヒムガシノヌニカギロヒノタツミエテ）の歌の説……七〇
　人麿臨死時歌の評……一八〇
「人麿と共歌」（樋口功）……一七七
ひな（夷）……二五七・四三一
日並皇子（ひなみしのみこ）（草壁皇子）……五四・七一・一〇〇・五七八
檜隈（ひのくま）……六七二
　檜隈大内陵……六七二
檜隈女王……三七二
ひのつまで（檜孀手）……八九五
ひむがし（東）……六三
日女命（ひるめのみこと）……五八一
ひも（紐）……二一九
　ひもむすぶ……二一八
殯宮……五七八

フ

ふかみる（深海松）……五五〇
　ふかみるの（枕詞）……五五一
ふく（吹）

ふきかへす……二一九
複合名詞（夕浪千鳥等）……三〇〇
福井久藏
　トリガナクの說（枕詞の研究と釋義）……六七九
富士谷成章
　モ（終助詞）の解……四四三
富士谷御杖
　近江荒都歌の評（燈）……四四七
　藤原宮役民作歌の解（燈）……九一六
　吉野宮歌の評（燈）……四七二
ふす（伏）
　よりふす……八四一
衾道（ふすまぢ）……一四四・七九五
　衾田墓……七九六
ふち（淵）
　いはがきふち……七四七
藤江（ふぢえ）の浦（うら）……二二九
藤田淸……四四九
藤田德太郎「萬葉集の韻律」……四一九
藤原宮……八八六
　藤原宮役民作歌……八八五
藤原宮役民歌の作者……八八八・九一三
藤原宮御井……九二三・九四三
　藤原宮御井歌……九二二
　藤原宮御井歌の作者……五四四
藤原武良由……五七九
藤森朋夫……七四二
藤井が原（ふぢゐがはら）……九二四
藤井高尙
　羇旅歌の評……二三一・二六〇
ふとし（太）
　ふときこころ……一〇〇一
　ふとしく……四六〇・五八六・五九一
ふね（舟）……五
　ふなぎほひ……四六一
　ふなで……三三
　ふなのり……三九
　ふねこぐきみ……二〇四
　ふねちかづく……二二
　ふねなむ……四六一
不破山（ふはやま）……六七六
ふゆごもり（枕詞）……六八七
ふりさく（振放）……七一七
ふる（散・落）

ふりみだる……二七五
　みゆきふる……六八九
ふる（觸）
ふらばふ……六一四
ふらふ……六一三
ふる（振）
ふりふる……六一四
ふるそで……七八
　そでふる……七八・七五五
振山（ふるやま）……三六二

へ

へ（邊・方）……八三三

ホ

ほのか（髣髴）……七八四
堀井茜一郎……七八一

マ

ま（接頭辭）……九三五・一〇〇〇
ま（間）
　やまのま……三三〇・三三三
まがひ（亂）……五五三
眞神の原（まがみのはら）……六七一
勾の池（まがりいけ）……一〇七
まかる（罷）……一五五
　まかりぢ……一五五
まき（眞木）……二〇〇・五〇六・六七六
まきたつ……五〇六
まきばしら……一〇〇一
まきさく（枕詞）……八九五
まく（纏）……八一一
　いはねまく……一七五
　いまく……六八九
　まくらとまく……一七〇
まくに……三三三
まくさ（眞草）……五九
まくら（枕）……八四一
まくらづく（枕詞）……七七八
まくらとまく……一七〇
　たまくら……八八一
枕詞
　あかねさす……七〇七
　あさづくよ……八七五

あさどりの……六四四
あさもよし……七一三
あぢさはふ……六四三
あづさゆみ……七五〇
あまざかる……四三〇
あまづたふ……五五八
あまつみづ……五九〇
あまとぶや……七四一
あめしるや……九三二
あらたへの……二二八・八九一
あをによし……四二七
いさなとり……五三五
いはばしる……四三一・四六三・八九四
いりひなす……七七四
おきつもの……七四八
おほとりの……七七九
おほふねの……五五三・五九〇・六四五
かがみなす……六四〇
かもじもの……八九九
かりごもの……二六六
きもむかふ……五五二
くしろつく……四三

けごろもを……一〇〇三
ことさへぐ……五四六・七二
こまつるぎ……六七七
こもりくの……三二九・五〇六
ころもでの……八九五
さかとりの……五〇八
ささなみの……三・一五五
さすたけの……七〇五
さねかづら……七四六
しきたへの……五五九・六四〇・八二一・八四〇
ししじもの……七〇七
そらにみつ……四二六
たかしるや……九三一
たかてらす……五〇五
たかひかる……八六六
たくなはの……八〇九
たたなづく……六一五
たまかぎる……五〇九・七四六・七八四
たまだすき……四二二・七一七・七五四
たまづさの……七四九
たまもかる……二一〇
たまもなす……五二九

たまもよし……八二八
ちはやぶる……六八〇
つぬさはふ……五四五
つまごもる……五五四
つゆじもの……五二九
つるぎたち……六一六・八一二
とぶとりの……六一三
とりがなく……六七九
とりじもの……七七三
なぐはし……九三一
なつくさの……二一一・二一二・五三一
にはたづみ……九七二
ぬえどりの……六四三
ぬばたまの……六一七
はふつたの……五五一
はるくさの……八五八
はるとりの……七〇九
はるばなの……五八九
ひさかたの……五七九・六七二
ふかみるの……五五一
ふゆごもり……六八七
まきさく……八九五
まくらづく……七七八
まそかがみ……八五七
みけむかふ……六四二
みこころを……四五八
もちづきの……五八九
もののふの……八九六
もみぢばの……五九・七四九
ももしきの……四三七・四六〇
ももたらず……九〇二
ももづたふ……三七七
やくもさす……三三五
やすみしし……四五五
ゆくとりの……六九三
ゆふづつの……六四五
ゆふはなの……七〇三
わかごもを……八五三
をとこじもの……七七五
「枕詞解」(雅澄)……五一〇
「枕詞の研究と釋義」(福井久藏)
　トリガナクの説……六七九
まけ(任)……六八二
正宗敦夫

楚樹の訓……五〇八
正岡子規
宇治河歌の評……二八五
ましみづ（淸水）……九三四
增田德二……二三四
ますらを（丈夫）……五五八
まそかがみ（枕詞）……八五七
まつ（待）
マツ用例……三二一
またなくに……三一七
まちかねつ……五
まつる（奉）……四八二
まつれる……三〇・四八七
つかへまつる……三〇
まつろふ（服）……六八〇・六九二
まで（助詞）……九七七
まどふ（迷）……一三四
まどはす……一三七
まねく（遍）……五九二・七四五
眞弓の岡……五九一・九六〇
まをす（申）……六九八
「萬葉考」（眞淵）
宇治河歌の評……二八四・二八七
打歌山の說……九八・五七四
舍人等慟傷歌の評……一〇一二
靡此山の評……五三六
人麿長歌の評……四一五
東野炎立所見而の歌の訓……六四
烏穗自物の訓……七七六
「萬葉考槻落葉」（久老）
網爾刺の訓……一九六
宇治河歌の評……二九〇
千重爾隱奴の訓……三〇五
ヨリ・ユ・ヨ論……二六三
「萬葉集燈」（御杖）
近江荒都歌の評……四四七
藤原宮役民歌の解……九一六
吉野宮歌の評……四七二
「萬葉集講義」（山田孝雄）
安騎野歌の說……七五
朝越座而の解……五〇九
生跡毛無の訓……一四五
過（死去）の說……六〇
觸經の訓……六一四

屋上山の說……五五五
ヲトメガトモの解……九四八
「萬葉集攷證」(由豆流)
網爾刺(アミニサシ)の訓……一九六
霞立(カスミタチ)の訓……四三六
「萬葉集外來文學考」(林古溪)
宇治河歌の評……二九二
羇旅歌の評……二二七
法華經影響說……五四二
「萬葉集管見」(長流)……三一〇・一〇〇五
「萬葉集古義」(雅澄)
玉蜻考……五〇九・七四六
濱風爾紐吹返(ハマカゼニヒモフキカヘス)の說……二二一
「萬葉集誤字愚考」(光枝)……四七四
「萬葉集雜攷」(井上通泰)
戰國策影響說……七三三
「萬葉集私解」(花田比露思)
雷岳の說……一九四
稻見野歌の解……二四六
「萬葉集辭典」(折口信夫)……六六八
「萬葉集新解」(武田祐吉)
彌高良之珠(イヤタカシラス)の訓……四六三
宇治河歌の評……二九一
珠藻苅敏馬乎過(タマモカルミヌメヲスギテ)の歌の評……二一五
嬬(ツマ)ノミコトの說……六二六
遠ノ朝庭(トホノミカド)の說……三一一
紐吹返(ヒモフキカヘス)の說……二三三
山川毛(ヤマカハモ)の歌の解……三六
雪驪の訓……二八一
越野過去(ヲチヌスギユク)の訓……一一三
「萬葉集新考」(野雁)
日並皇子舍人誄歌の說……一〇一二
「萬葉集新考」(井上通泰)
木際從我振袖(コノマヨリワガフルソデ)の解……七九
常滑考……二三
トホノミカドの說……三一〇
濱風爾紐吹返(ハマカゼニヒモフキカヘス)の說……二二一
「萬葉集新釋」(伊藤左千夫)
安騎野歌の評……七〇・七四・五一五
近江荒都歌の評……二〇・四四八
伊勢行幸歌の評……四二・四六
人麿評……四四三
藤原宮役民歌の作者……九一四
藤原宮御井歌の評……九四一

吉野宮歌の評……二六・三五・四七〇・四九一
「萬葉集新釋」（澤瀉久孝）
紐吹返の説……二二二
吉野離宮説……四五三
ヨドムトモの解……二〇
「萬葉拾穗抄」（季吟）
家當不見の訓……二三〇
「萬葉集選釋」（佐佐木信綱）
近江海歌の評……三〇三
蘆爲流鴨の訓……一八九
「萬葉集全釋」（鴻巣盛廣）
宇治河歌の評……二九一
「萬葉集總釋」（土屋文明）
高照日皇子の説……五九九
羽易山・引手山の説……七八二
「萬葉集代匠記」（契沖）
東野炎立所見而の歌の訓……六三
近江遷都の評……四四〇
屋上山の説……五六五
烏穗自物の訓……七七六
「萬葉集玉の小琴」（宣長）
不知等の訓……一七七
高照日皇子の説……五九八
「萬葉集註疏」（近藤芳樹）
藤原宮木材運輸徑路考……九〇六
「萬葉集童子問」（春滿）
宇治河歌の評……二九〇
羇旅歌の評……二六〇
「萬葉集檜の杣」（秋成）
近江海歌の評……三〇二
宇治河歌の評……二九〇
「萬葉集難語難訓考」（生田耕一）
舟公宣奴島爾の訓……二〇九
雪驪の訓……二八〇
「萬葉集年表」（土屋文明）
安騎野歌作歌時考……五〇五
近江上來歌年代考……二八七
吉野行幸時考……二九・四五四
「萬葉集の基礎的研究」（豐田八十代）
常滑考……二七
屋上山の説……五五五
「萬葉集の鑑賞及び其批評」（島木赤彥）
敷妙乃袖易之君の歌の評……一一三
「萬葉集檜嬬手」（守部）

宇治河歌の評……二九一
人麿上來經路說……五六五
「萬葉集僻案抄」(春滿)
近江荒都歌の評……四四七
近江遷都の評……四四〇
「萬葉集美夫君志」(木村正辭)
火葬說……三二九・八〇二
ヒジリの說……四二三
「萬葉集略解」(千蔭)
羇旅歌の說……二五六
下部留妹(シタブルイモ)の訓……八〇七
常滑の說……四七三
「萬葉集大和歌枕考」(大井重二郎)
羽易山の說……七八〇
「萬葉新採百首解」(眞淵)
宇治河歌の評……二八七
「萬葉地理考」(豐田八十代)
「吉野離宮考」……二三・四五四
「萬葉童蒙抄」(信名)
宇治河歌の評……二九〇
羇旅歌考……二一五
鳥穗自物(トボシモノ)の訓……七七七

靡此山(ナビケコノヤマ)の評……五三五
「萬葉大和志考」(奥野健治)……六六八

ミ

み(身)
みにそふ(身副)……八一二
み(廻)
うらみ……五二二・九九〇
くまみ……九六四
しまみ……四九・三七七
み(形容詞ミ形)……六四一
み(接頭辭)……八二・三三九・六八九
みあらか(宮殿)……五九一・八九三
みおも(御面)……八三〇
三垣(みかき)の山(やま)……八七四
みかげ(御蔭)
あめのみかげ……九三三
ひのみかげ……九三三
みかど(御門・御殿)……一〇一・三〇九・七〇四
あまつみかど……六七二
おほみかど……九二五
とこつみかど……九六一

　とほのみかど……三〇八
　ひのみかど……八九九
みかり（御獵）……七二・八五三
みくさ（草）……五九
みくまぬ（熊野）……三三九
みけむかふ（枕詞）……六四二
みこ（御子）
　ひのみこ……五〇五・五八五
みこころを（枕詞）……四五八
みこと（命・尊）
　かみのみこと……四三三
　つまのみこと……六一四
みたち（御立）……九七一
みたたし……九七一
みたみ（御民）……八九七
みだる（亂）……二六八・六九〇・八三五
みだれいづ……二六六
みだれども……八三
　ちりみだる……九五
　ふりみだる……二七五
みち（道）
　みちのながぢ……二五七
　みちのながて……二五八
　　あらやまみち……五〇七
みづ（瑞）……三六二
　みづがき……三六二
　みづほのくに……六九七
　みづやま……九二八
みつぎ（御調）……四八二
みづつたふ（水傳）……九九〇
三津（みつ）の埼（さき）……二〇三
みどりご（若兒）……七七五
みな（御名）
　みなにかかす……六四八
　みなわする……一一九
南方熊楠……四二三
敏馬（みぬめ）……二一〇
みはし（御階）……九九四
耳無山（みみなしやま）……九二九
三諸（みもろ）の神奈備山（かむなびやま）……八七三
みや（宮）
　みやぢ……一〇〇九
　みやで……九六三
　みやばしら……四六〇・五九一

みやびと……五九三
　あさみや……六三七
　おほみや……四三四
　おほみやびと……四三七
　おほみやどころ……五・四四
　かむみや……七〇五
　かりみや……六七七
　とこみや……六四二・七一三
　ゆふみや……六三八
宮瀧(みやたき)（吉野離宮説）……一二
みやま（山）……八二
みゆき（雪）……五一〇・六八九
みる（見）
　みなむ……九九一
　みるとき……九七一
　みれどあかず……一三・三五〇・三七八
　あひみる……一四二
　いでみる……七五三
　おほにみる……一六二・八一一
　かへりみる……一二五
　よそにみし……九六〇
海松(ミル)……五五〇
　ふかみる……五五〇
みわ（御酒）……三七三
御井（藤原宮御井）……九二三・九四三

ム

むかしのひと（昔人）……一五
むかふ（向）
　きむかふ……七三
　たちむかふ……六九三・八七四
武庫(むこ)の海(うみ)……二七一
むすぶ（結）
　いもがむすびしひも……二一八
むた（共）……五二八
村田春海……九三三

メ

め（目）
　めごと……六四三
　ひのめ……六九六
めす（見）……八九二
　きこしめす……六七六
めす（召）……九八八

めづらし……六四一・八五八

モ

も（係助詞）……四四・二四四・六三三
も（終助詞）
　ミレバカナシモ結句例……四四六
も（裳）
　あかも……四三・三七五
　たまも……四〇・六三〇
も（藻）
　おきつも……五二七
　かはも……六三五
　たまも……四五・五二七
もころ（如）……六三四
もし（茂）
もくさく……九九〇
もちづき（望月）……五八九・六四一
もちづきの（枕詞）……五八九・六四一
もつ（持）
　とりもちて（取持）……七六六
もとほる（廻）……七〇八
もとむ（求）……一三七
本居大平……七七四
本居宣長
　伊久里考（古事記傳）……五四九
　入日哉（イリヒヤ）の訓……二四九
　不知等（シラニト）の訓（玉の小琴）……一七七
　高照日皇子の説（玉の小琴）……五九八
　藤原宮役民歌の作者（玉勝間）……八八九
もののふの（枕詞）……二八二・八九六
　もののふのやそうぢがは……二八二・八九六
もみぢば（黄葉）
　もみぢばの（枕詞）……五九・七四九
　おつるもみぢば……九四
もも（百）
　ももえつきのき……八〇一
　ももしきの（枕詞）……四三七・四六〇
　ももたらず（枕詞）……九〇二
　ももづたふ（枕詞）……三七七
ももへ……三四〇・三四八
もり（神社）……三七二
森口奈良吉
　吉野離宮説……四五四
森本治吉

逝副川（ユキソヘルカハ）の訓……五〇〇
もろひと（諸人）……六八六
文武天皇（輕皇子）……五四・五〇五

ヤ

や（間投助詞）……七七・七四二
や（反語・疑問）……一六七・二四九・三六五
やも……一五・五六・二一一・二一八
ヤモ用例……一六・一三二
矢……六九〇
屋上（やがみ）の山（やま）（室上山）……五五四
やくもさす（枕詞）……三三五
やすみしし（枕詞）……四五五
やそ（八十）……三七七
もののふのやそうぢ……二八二・八九六
やたこ（奴）……一〇〇八
矢釣山（やつりやま）……二七五
彌富破摩雄……七〇三
やどり（宿）
たびのやどり……三一六
たびやどり……五一一
柳田國男
ヒジリの説……四二三
やはす（和）……六八〇
やへ（八重）……五八四
やほよろづかみ（八百萬神）……五八〇
やま（山）
やまかは……二九・四八六
やまぢ……一三七
やまつみ……四八二
やまのま……三三〇・三三三
あらやまなか……二〇一
あらやまみち……五〇七
あをがきやま……四八一
あをかぐやま……九二六
あをすがやま……九二九
みづやま……九二八
みやま……八二
山前王（やまくま）……八七九
山田楳吉……八五四
山田孝雄
安騎野歌の説（講義）……七五
朝越座而（アサコエマシテ）の解（講義）……五〇九
「伊久里考」……五四九

生跡毛無の訓（講義）……一四五
過（死去）の説（講義）……六〇
觸經の訓（講義）……六一四
如許呂の訓（訓義考）……六三五
屋上山の説（講義）……五五五
ヲトメガトモの解（講義）……九四八
やまと（倭）……四二六
やまとしま……二五九
やまとしまね……三〇五
「大和萬葉地理研究」（辰巳利文）……七六二
やまびこ（山彦）……三七九・八七六
やみ（闇）
　とこやみ……六九六
やむ（息）
　やまず……七四五
　やむときもなし……九六九
やる（遣）
　おもひやる……六四六

ユ

ゆ（助詞）……一六八・二六二・二七一・三三三
ユ用例……二六二
融合（省略融合）の技法……六〇一・六五四・七二六
ゆき（雪）
　ゆきじもの……八六七
　みゆき……五一〇・六八九
ゆく（行）
　ゆきすぎがてに……二三五・二四〇
　ゆくとりの（枕詞）……六九三
　ゆくへしらず……一三三・二八三・五九三
　あめゆく……一九五
　たびゆく……二二九
　やまずゆく……七四五
弓弭……六八八
ゆふ（夕）
　ゆふかは……四六一
　ゆふぎり……六二一・八一三
　ゆふづつ……六四五
　ゆふづつの（枕詞）……六四五
　ゆふはふる……五二八
　ゆふみや……六三八
木綿……七〇三
　ゆふはなの（枕詞）……七〇三
遊副川諸訓……四八四・四九七・五〇〇・五〇一・五〇二

ゆゆし（忌）……六六九
ゆゑ（故）……一二九・六三三

ヨ

よけく（吉）……七八四
よさす（依）……六八一
依羅娘子……五七四
吉田東伍
　吉野離宮説……四五四
吉田増蔵
　舟公宣奴島爾の訓……二〇九
　雪驪の訓……二八一
吉野宮
　丹生川上説……二三・四五四・四七四
　宮瀧説……四五三・四五四
吉野行幸（持統天皇）……二三・四五三
よしゑやし……五二四
よそ（外）……九六〇
　よそにみし……九六〇
よそふ（装）……七〇五
よど（淀）……一一七
よどむ（淀）……一四
よ（夜）
　よどこ……六一七
　よなき……一〇〇五
　よるひる……一〇〇九
　よわたるつき……一〇三
よのなか（世間）……七七二
よぶ（呼）
　よびたつ……八七六
よものひと（四方人）……五九〇
より（助詞）……五五六
よる（寄・依）
　よりあひ……五八三
　よりてつかふる……一二九
　よりふす……八四一
　あめつちもよりて……八九四
　かよりかくより……五二八
　とをよる……八〇七
　やまかはもよりて……一二九
よろし（宜）
　よろしききみ……六三六
　ヨロシキキミの説……六三六・六五三
　よろしなべ……九三〇

よろづよ（萬代）……七〇二・九五一

ラ

ら（接尾辭・單數）
　こら……一五五・三三三・八〇八
　つまら……八四二
　をとめら……五三
ら（接尾辭・複數）
　やたこら……一〇〇八
　をとめら……四〇
らし（助動詞）
　あらし……二六五
らむ（助動詞）……九〇四
　みらむ……二二九
　みらめ……五二三

リ

龍王山（引手山説）……七九一
陵墓
　いはかまふ（石槨）……六七五
　檜隈大内陵……六七三

ワ

わかごもを（枕詞）……八五三
わかる（別）
　こぎわかる……二四九
わきばさむ（腋挾）……七七八
わく（分）
　かきわく……五八四
和射見が原（わざみがはら）（和暫原）……六七七
わた（曲）……一三
渡津（わたつ）……五二六
渡會（わたらひ）……六九四
　渡會の齋宮……六九四
渡の山（わたりのやま）……五五三
わたる（渡）
　わたらふ……五五六
　わたるひ……七四七
　よわたるつき……一〇二
われ（吾）
　吾等（ワレ）……九六九
　吾大王（ワガオホキミ）（持統天皇説）……六九九
　吾大王（高市皇子説）……七〇〇

ヰ

ゐ（井）……九四三

井上通泰

　木際従我振袖の解（新考）……七九

　戰國策影響説（雜攷）……七二三

　常滑考（新考）……二三

　トホノミカドの説（新考）……三二〇

　濱風爾紐吹返の説（新考）……二二一

井乃香樹

　舟公宣奴島爾の訓……二〇九

ヱ

遠藤嘉基……九二〇

ヲ

を（格助詞）……二二九・六四九・一〇〇六

を（間投助詞）……六四九

ヲ止句用例……二三〇・二三二

岡熊臣「柿本人麻呂事蹟考辨」……一七三

小國重年

　長歌説（長歌詞珠衣）……三九三

をし（惜）

　ヲシモ止結句……一〇一

　をしけども……五五六

をじかのつぬ（牡鹿角）……三六四

をすくに（食國）……六七九・八九二

をちこち（彼方此方）……八三六

越智野（をちぬ）……一一〇・六二〇

をとめ（處女）……二一六

　をとめがとも……九四八

　をとめら……四〇・五三

をとこじもの（枕詞）……七七六

をふ（終）

　ともにをふ……九六六

折口信夫

　雷岳歌の評……一九三

　紐の説……二一九

　モノノフの解……二八八

をろがむ（拜）……八五五

ををる（撓）……六三三

歌句索引

ア

あがきをはやみ……九〇
あかしおほとに……二四七
あかしのとより……二五六
あかねかも……九七四
あかねさす……一〇三・六六五
あかもひづちて……三七五
あがりいましぬ……五七六
あきたてば……四七七・六二八
あきつのぬべに……四五二
あきのおほぬに……五〇四
あきのつくよは……一四一・一四九
あきのぬに……五四
あきはぎの……八七三
あきやまに……九四
あきやまの……一三六・八〇五
あけくれば……五六八
あけまくをしみ……八七三
あごのうらに……三八
あさかはわたり……四五二
あさこえまして……五〇四
あさごとに……五七七
あさごろもきて……六六四
あさじもの……六六四
あささらず……八七八
あさたちいまして……七六四
あさたちいゆきて……七九八
あさづくよ……八七三
あさつゆに……六一〇
あさつゆの……六二九
あさつゆのごと……八〇五
あさどりの……六二九
あさはふる……五一八
あさひてる……九六七・九九九・一〇〇五
あさみやを……六二八

あさもよし……六六五
あしたたぬしも……二七四
あしたにおきて……八〇五
あしたには……八〇五
あしはらの……五七六
あしひきの……三七九・八七三
あじろぎに……二八二
あすかがは……一一四・一一七・六二九
あすかの……五七六・六六三
あすかのかはの……六一〇・六二八
あすさへみむと……一一七
あすだにみむと……一一七
あすのよひ……三七九
あそびたまひし……六二八
あたみたる……六六四
あぢさはふ……六二八
あづさゆみ……七三八・八〇五
あづまのくにの……六六三
あともひたまひ……六六三
あはざらめやも……三七九
あはぢの……二一七
あはぬきみゆゑ……六一〇
あはのをじまし……三七七
あはむともへや……一一三
あひしひおもほゆ……一三九
あひしひに……一六〇
あひみしいもは……一四一・一四九
あふぎてまつに……五七六
あふぎてみれど……八五一
あふぎみし……一〇〇
あふみのうみ……二九三
あふみのくにの……四二〇・八八五
あふやとおもひて……六一〇
あふよしをなみ……七六四・七九八
あまかぞふ……一六〇
あまぐもの……一八六・五七六
あまぐもを……六六四
あまさかる……二五六・四二〇
あまづたひくる……八六四
あまづたふ……五四四
あまつみかどを……六六三
あまつみづ……五七六
あまてらす……五七六
あまとかみらむ……二二八

あまとぶや……七三八
あまのかはらに……五七六
あまのつりぶね……二六四・二七〇
あまのはら……五七六
あまひれがくり……七六四・七九八
あみにさし……一九五
あめしらしぬる……一二八
あめしるや……九二二
あめのした……四二〇
あめのしたに……四五二
あめつち……八二五
あめつちと……九六五
あめつちの……五七六・六二九
あめつちも……八八五
あめのごと……六六五
あめのした……五七六・六六三・六六四
あめのみかげ……九二二
あめみるごとく……一〇〇・八五一
あめゆくつきを……一九五
あめをば……五七六
あもりいまして……六六三
あやしきかめも……八八五
あやにかしこき……六六三
あやにかなしみ……六二八
あやめぐさ……八七八
あらきしまみを……四七
あらそふはしに……六六四
あらたへの……二二八・八八五・九二二
あらたよと……八八五
あらどこと……八二五
あらぬにはあれど……五九
あらびなゆきそ……九五五・九七七
あらやまなかに……二〇〇
あらやまみちを……五〇四
あられなす……六六四
ありえねば……七三九
ありがよふ……三〇八
ありけむひとも……三四三
ありしかど……一〇〇一
ありそにぞ……五四四
ありそのうへに……五一八・五六八
ありそもに……八二五
ありたたし……九二三
あれざらましを……九九八

あれつぐや……九四六
あれまくをしも……一〇〇
あれましし……四二〇
あをがきやま……四七七
あをかぐやまは……九二三
あをごまの……九〇
あをすがやまは……九二三
あをによし……四二〇

イ

いかさまに……四二〇・五七六・八〇五
いかだにつくり……八八五
いかづちの……六六三
いかづちのうへに……一八六
いきづきあかし……七六四・七九八
いくだもあらず……五四四
いくりにぞ……五四四
いけにかづかず……一〇七
いけのつつみの……一三二
いけりともなし……一四四・一五一
いさなとり……五一八・五六八・八二五
いさよふくもは……三二八
いさよふなみの……二八二
いさりする……二二八・二七〇
いそはくみれば……八八五
いそなしと……五一八
いそのうらみの……九八九
いつきのみやゆ……六六四
いづみのかはに……八八五
いづものこらが……三三五
いづものこらは……三三二
いでたちの……七九八
いでましし……一〇〇三
いでまして……六二八
いなびぬも……二二四
いなみのうみの……三〇四
いにしへおもひて……五〇四
いにしへおもふに……五四
いにしへおもほゆ……二九三
いにしへに……三四三
いにしへの……三四六
いねがてずけむ……三四三
いのれども……三七一

いはがきふちの……七三八
いはがくります……六六三
いはがねの……五〇四
いはつつじ……九八九
いはとをひらき……五七六
いはなみに……六二八
いはなみわたし……六二八
いはねさくみて……七六五・七九九
いはねしまける……一七二
いはばしに……六二八
いはばしる……四二〇・四五二・八八五
いはばしわたし……六二八
いはひふしつつ……六六五
いはひもとほり……六六五・八五一
いはひもとほれ……八五一
いはひをろがみ……八五一
いはひをろがめ……八五一
いはまくも……六六三
いはみなる……八九
いはみのうみの……五四四
いはみのみ……九八・五一八・五六八
いはみのや……七七
いはむすべ……七三八
いはれのみちを……八七八
いふきまどはし……六六四
いへしらば……八二五
いへにきて……一五二
いへのあたりみず……二四七
いへのいもに……三六六
いへまたなくに……三一六
いへわすれ……八八五
いほりしてみれば……八二五
いほりすわれは……二一〇
いほりせるかも……一八六
いまきわたると……六六四
いましせば……九五八
いましにしかば……五七六
いませまつりし……五七六
いまぞくやしき……一六〇
いまだすぎぬに……六六五
いまだつきねば……六六五
いまのみの……三四六
いまみれば……九七九
いまもかも……四三

いめにだに……九六二
いもがあたりは……九〇
いもがあたりみむ……九四
いもがあたりを……九〇
いもがかどみむ……五一八
いもがこころを……三六四
いもがこまくら……一五二
いもがそで……五四四
いもがたもとを……五一八・五六八
いもがなよびて……七三九
いもがむすびし……二一七
いもにかもあらむ……三二八
いもにこひつつ……三四三
いもにはあれど……七六四・七九八
いもぬらめやも……五四
いものるらむか……四七
いもはいますと……七六四・七九八
いもみけむかも……八九
いもみつらむか……七七・九八
いもをおきて……一四四・一五一
いもをもとめむ……一三六
いやたかからし……四五二
いやたかに……五一八・五六八
いやつぎつぎに……四二〇
いやとこよまで……八六四
いやとしさかる……一四一・一四九
いやとほながく……六二九・八七八
いやとほながに……八七八
いやとほに……五一八・五六八
いやめづらしき……八五一
いやめづらしみ……六二八
いらごのしまべ……四七
いらむひや……二四七
いりがてぬかも……九九二
いりひさしぬれ……五四四
いりひなす……七六四・七九八

ウ

うかはをたて……四七七
うかべながせれ……八八五
うすといへ……八〇五
うだのおほぬは……一〇〇三
うちなびき……五四
うちはしに……六二八

うちはしわたす……六二八
うつせみと……六六四・七六四・七六五・七九八・七九九
うつそみと……六二八・七六四
うつたのやまの……九八
うづらこそ……八五一
うづらなす……六六五・八五一
うなばらを……三八一
うねびの……九二三
うねびのやまに……七三八
うねびのやまの……四二〇
うへのいけなる……九五五
うまなめて……七一・八五一
うみべをさして……五一八・五六八
うみをかしこみ……八二五
うみをなすかも……二〇〇
うらさびくらし……七六四　七九八
うらのはまゆふ……三三八
うらはなくとも……五一八・五六八
うらなしと……五一八・五六八
うゑしたを……三七五

エ

えださせるごと……七九八

オ

おきつなみ……一六九・三〇四
おきつもの……七三八
おきてしくれば……五一八・五六八
おきになづさふ……三三五
おきみれば……八二五
おすくに……五七六
おつるもみぢば……九四
おときくわれも……八〇五
おとにききて……七三八
おとのみききて……七三八
おとのみも……六二九
おとのみを……七三八
おともきこえず……七三八
おひざりしくさ……九七九
おひなびける……六二八
おひにけるかも……九七九
おびゆるまでに……六六四
おひをれる……六二八
おふるたまもは……六一〇

おほきみかどを……九九二
おほきみの……三〇八
おほきみは……一八六・二〇〇
おほつのこが……一六〇
おほつのみやに……四二〇
おほとののうへに……八六四
おほとのは……四二〇
おほとのを……六六五
おほとりの……七六四・七九八
おほにみし……八〇五
おほにみしかば……一六〇
おほひたまひて……六六四
おほふねに……三八一
おほふねの……五四四・五七六・六二九・七三八・八七八
おぼほしく……八二五・九六三・九九九
おほみかど……九二二
おほみかどに……九二二
おほみかどゆ……九二二
おほみけに……四七七
おほみてに……六六三
おほみみに……六六三
おほみやづかへ……九四六
おほみやどころ……四二〇
おほみやは……四二〇
おほみやびとの……三・四三
おほみやびとは……四五二
おほゆきの……六六四
おもひかねつも……三六六
おもひきわれは……三六一
おもひこふらむ……八〇五
おもひしいもが……七六五・七九九
おもひしときに……六二八・七六四・七九八
おもひしなえて……五一八・五六八・六二九
おもひたのみて……五七六・七三八・八七八
おもひつつ……五四四・八七八・九六五
おもひてありし……九八五
おもひてぬらむ……八〇五
おもひてをれか……八〇五
おもひも……六六五
おもふまで……六六四
おもへかも……一一七・三四八
おもへやも……一一七
おもへりし……七六四・七九八
おもへるわれも……五四四

おもへれば……二三四
おもほえむかも……一〇〇三
おもほしけめか……四二〇
おもほしし……六二八
おもほしめして……六六五
おもほしめせか……四二〇・五七六
おもほすなべに……八八五

カ

かあをなる……五一八・五六八
かがみなす……六二八
かぎろひの……七六四・七九八
かくもあらむと……六六四
かぐやまのみや……六六五
かくりきにける……九〇
かくりにしかば……七六四・七九八
かくらくをしも……一〇二
かくろひくれば……五四四
かけてしぬばむ……六六五
かげともの……九二二
かけまくも……六六三
かこのしまみゆ……二三四
かこのみなとみゆ……二三四
かしこかれども……六六五
かしこくも……六六三
かしこみと……八五一
かしはらの……四二〇
かすみたち……四二〇
かぜこそきよれ……五六八
かぜこそよらめ……五一八
かぜのむた……六六四
かたこひしつつ……六二九
かたこひつま……六二九
かたなしと……五一八・五六八
かたはなくとも……五一八・五六八
かたみとぞこし……五九
かたみにおける……七六四・七九八
かたみにここを……六二九
かぢひきをりて……八二五
かづらにせむと……八七八
かはせのみちを……一五四
かはものごとく……六二八
かはももぞ……六二八
かひしかりのこ……九八一

かへりみすれど……五一八・五四四・五六八
かへりみすれば……六三
かへりゐば……九九四
かみつせに……四七七・六一〇・六二八
かみにしませば……一八六・二〇〇
かみのことごと……四二〇
かみのみおもと……八二五
かみのみことと……五七六
かみのみことの……四二〇
かみのみよかも……四七七
かみよしおもほゆ……三〇八
かむあがり……五七六
かむかぜに……六六四
かむからか……八二五
かむくだし……五七六
かむさびせすと……四七七・五〇四
かむさびたてり……九二二
かむさぶと……六六三
かむつどひ……五七六
かむながら……二九・四七七・五〇四・五七六・六六四・六六五・八八五
かむながらならし……八八五
かむなびやまに……八七三
かむのぼり……五七六
かむはかり……五七六
かむはふり……六六五
かむみやに……六六四
かもじもの……八八五
かもやまの……一七二
かゆきかくゆき……六二九
かよはすきみが……六二九
かよひけまくは……八七八
かよひけむ……八七八
かよりかくより……五一八・六一〇
かよりかくよる……五六八
からのさきなる……五四四
かりごもの……二六四
かりぢのをぬに……八五一
かりてをさめむ……三七五
かりみやに……六六三
かるのいちに……七三八
かるのみちは……七三八
かるればはゆる……六二八

キ

ききてありえねば……七三八
ききのかしこく……六六四
ききまどふまで……六六四
きこしめす……六六三
きこしをす……四五二
きしかむかもと……三四八
きてもとはましを……八二五
きぬがさにせり……一九五
きのふもけふも……九八六
きのへのみやを……六二八・六六五
きみがつかひの……三四八
きみとときどき……六二八
きみまさずとも……九五五
きみませば……九六〇
きみもあふやと……六一〇
きみゆゑに……一二八
きみをあすゆか……八七八
きみをばあすゆ……八七八
きもむかふ……五四四
きゆといへ……八〇五
きよきかふちと……四五二
きよみのみやに……五七六
きよるありそを……一六九
きりこそは……八〇五
きりなれや……三三二

ク

くさまくら……三一六・五〇四・六一〇
くしろつく……四三
くすしきかめも……八八五
くずのねの……八七八
くだのおとも……六六三
くだらのはらゆ……六六五
くにからか……八二五
くにしらさまし……九五一
くにはしも……四五二
くにみをすれば……四七七
くにわすれたる……三一六
くにをはらへと……六六三
くにをさめと……六六三
くもがくるごと……七三八
くもまより……五四四
くもゐにぞ……九〇・九二二
くもゐにふくに……八二五

くやしみか……八〇五
くらなしのはま……三七五
くれゆくがごと……七三八
くろかみは……三三五

ケ

けごろもを……一〇〇三
けだしくも……六一〇
けなばけぬべく……六六四
けなばけぬとふに……六六四
けひのうみの……二六四

コ

こぎくれど……三七七
こぎでてわたる……三八一
こぎわかれなむ……二四七
こぐふねに……四七
ここだたふとき……八二五
こといへども……四二〇
ことときけども……四二〇
こころこほしき……二三四
こころたがひぬ……九六五
こころはもへど……三三八
こころもあらず……六二九
こころもありやと……七三八
こころもしぬに……二九三
こころをいたみ……五四四
こぞみてし……一四一・一四九
こだちもみえず……二七四
こちごちに……七九八
こちごちのえの……七六四
ことくやしきを……八〇五
ことさへぐ……五四四・六六五
このかはの……四五一
このとしごろを……一〇〇五
このまゆも……八九
このまより……七七・九八
このみちの……五一八・五六八
このみづやまは……九二二
このやまの……四五二
このわがこころ……一〇〇一
こひくれば……二五六
こひつつあるに……七三八
こひなくごとに……七六四・七九八

こひのめど……三七一
こひわたるかも……一二八
こふれども……七六四・七九八
こまつるぎ……六六三
こもりえの……二〇二
こもりくの……三二八・五〇四
こもりぬの……一三二
こもりのみ……七三八
こやせば……六二八
こらにはあれど……七六四
ころもでの……八八五
ころものそでは……五四四
ころもはぬれて……六一〇
こゑときくまで……六六三

サ

さかとりの……五〇四
さかえむと……九八五
さかゆるときに……六六四
さきくあれど……三
ささげたる……六六四
ささなみの……三・一三・一五四・四二〇
ささのはは……八一
さしのぼる……五七六
さすたけの……五七七・六六四
さたのをかべに……九六七・九七四・九九四・一〇〇五
さだめたまひて……六二八・六六三
さだめたまふと……六六三
さだめてし……六六四
さだめまつりて……六六五
さでさしわたす……四七七
さとさかりきぬ……五六八
さとにしあれば……七三八
さとはさかりぬ……五一八
さぬきのくには……八二五
さねかづら……七三八
さねしよは……五四四
さはにあれども……四五二
さひのくまみを……九六二
さぶしみか……八〇五
さまよひぬれば……六六五
さみねのしまの……八二五
さみのやま……一六五
さもらひえねば……六六五

さもらへど……六六五・九八六
さやにもみえず……五四四
さわぐみたみも……八八五
さゐさゐしづみ……三六六

シ

しかしもあらむと……六六四
しがつのこが……一五四
しがつのこらが……一五四
しがのおほわだ……一三
しがのからさき……三
しがらみわたし……一一四
しかれかも……六二八
しかれども……六六五
しきたへの……一〇九・一六九・五四四・五六八・六二八・八〇五・八二五
しきなみたち……八二五
しきますくにと……五七六
しきませる……八六四
しぐれのときは……八七八
しげきがごとく……七六四・七九八
しげきはまべを……八二五
しげくおひたる……四二〇
しげくなりぬる……四二〇
ししこそは……八五一
ししじもの……六六五・八五一
したぶるいも……八〇五
しづまりましぬ……六六五
しづめかねつも……一〇〇一
しぬびゆかむ……六二九
しぬぶらむ……五一八
しのをおしなべ……五〇四
しほさゐに……四七
しほみつらむか……三八
しましくは……九四
しまとをみれば……三〇八
しまにおりゐて……九九七
しまのありそを……九七九
しまのみかどに……九九九
しまのみかどは……九五八
しまのみはしに……九九四
しまのみや……一〇七・九五五
しまのみやには……九七四
しまのみやはも……九五一
しまはおほけど……八二五

しまをみるとき……九七一
しまをもいへと……九七七
しみさびたてり……九三三
しもつせに……四七七・六一〇・六二八
しもとおしなべ……五〇四
しらしめしけむ……四二〇
しらしめしける……四二〇
しらしめししを……四二〇
しらしめしせば……五七六
しらしめす……五七六
しらしめすと……五七六
しらなみさわぐ……八二五
しらにといもが……一七二
しらぬくに……八八五
しろたへの……二二八・六六四・七六四・七九八

ス

すぎていにきと……七三八
すぎてきにける……九〇
すぎにけらずや……一六五
すぎにしきみが……五九
すぎにしこらが……八〇五
すぎむとおもへや……六六五
すずきつる……二二八
すだちなば……九八一
すべしらましや……六二九
すべをなみ……七三九
すむとりも……九七七
すめろぎの……四三〇・五七六

セ

せかませば……一一四
せむすべしらに……七三八・七六四・七九八

ソ

そこゆゑに……五七七・六一〇　六二九
そこをしも……六二八
そちよりくれば……六六四
そでかへしきみ……一〇九
そでぞふりつる……七三九
そでたづさはり……六二八
そでふるやまの……三六一
そともの……九三三
そとものくにの……六六三

そのつまのこは……八〇五
そむきしえねば……七六四・七九八
そむきたまふや……六二八
そらにみつ……四二〇
そらみつ……四二〇
そをとると……八八五

タ

たえじとおもひて……八七八
たかしらさむと……八八五
たかしりまして……四七七・五七七
たかしるや……九二二
たがつまか……三一六
たかつぬやまの……七七・八九
たかてらす……五〇四・五七六・八八五・九二二
たかどのを……四七七
たかひかる……八五一・八六四・九二一・九五八
たかひらしぬ……三七一
たぎつかふちに……二九・四七七
たぎのみかどに……九八六
たぎのみやこは……四二二
たくなはの……八〇五
たたせば……六二八
たたなづく……六一〇
たたなはる……四七七
ただにあはぬかも……三三八
たたはしけむと……五七六
たちとりはかし……六六三
たちばなの……九七四
たちむかひしも……六六四
たちむかふ……八七三
たづさはり……七九八
たつみえて……六三
たなかみやまの……八八五
たなぐもり……九九七
たのめりし……七六四・七九八
たびねかもする……六一〇
たびのやどりに……三一六
たびやどりせす……五〇四
たびゆくわれを……二二八
たふしのさきに……四三
たふとからむと……五七六
たまかぎる……五〇四・七三八・七六五
たまぎぬの……三六六

たまくらまきて……八〇五
たまだすき……四二〇・六六五・七三八
たまだれの……一〇九・六一〇
たまづさの……一三九・七三八
たまどこの……一五三
たまにぬき……八七八
たまぼこの……七三八・八二五
たまもおきつも……五一八・五六八
たまもかる……二一〇
たまもかるらむ……四三
たまもなす……五一八・五四四・五六八・六一〇・八八五
たまものすそに……三八
たまものもころ……六二八
たまもはおふる……五四四
たまもはひづち……六一〇
たまももぞ……六二八
たまもよし……八二五
たゆたふみれば……六二九
たゆることなく……二三・四五二
たゆればおふる……六二八
たりゆかむ……八二五
たれかすまはむ……九九四

チ

ちたびまゐりし……九九二
ちへにかくりぬ……三〇四
ちへのひとへも……七三八
ちはやぶる……六六三
ちよとことはに……九八五
ちよろづがみの……五七六
ちりなみだれそ……九四
ちりのまがひに……五四四
ちりゆくなべに……一三九

ツ

つがのきの……四二〇
つかのまも……三六四
つかはしし……六六四
つかひのいへば……七三八
つかひをみれば……一三九
つかへまつりし……九六五
つかへまつりて……八五一
つかへまつると……四七七
つきかたぶきぬ……六三

つぎきたる……八二五
つきてあるひの……六六四
つきのきの……七六四
つきひとをとこ……三八一
つくらしし……六六五
つつみにたてる……七六四
つつみのうへに……九一二
つづみのおとは……六六三
つどひいまして……五七六
つぬさはふ……五四四・八七八
つぬのうらみを……五一八
つぬのさとみむ……五六八
つのうらをなみ……五六八
つまごもる……五四四
つましらば……八二五
つまのみことの……六一〇
つまもあらば……一六五
つまやのうちに……七六四・七九八
つまをまかむと……八七三
つみてたげまし……一六五
つむじかも……六六四
つゆこそは……八〇五
つゆじもの……五一八・五六八・六六四
つるぎたち……六一〇・八〇五
つれもなき……五七六・九九四

テ

てらせども……一四一
てるつきの……七三八

ト

ときつかぜ……八二五
ときならず……八〇五
ときはきむかふ……七一
とぐらたて……九八一
とこしへならめ……九一二
とこつみかどと……九六〇
とこなめの……一二
とこみやと……六二八・六六五
とこやみに……六六四
とこよにならむ……八八五
としかはるまで……九七七
とののふる……六六三
とねりはまどふ……一三二

とのゐしにゆく……九七四
とのゐするかも……九六〇
とびかへりこね……九八一
とぶとりの……六一〇・六二八
とほくありける……九二二
とほのみかどと……三〇八
とほりてぬれぬ……五四四
とめぞかねつる……九七一
ともしきろかも……九四六
ともしびの……二四七
ともにをへむと……九六五
とらかほゆると……六六四
とりあたふ……七六四
とりがなく……六六三
とりじもの……七六四・七九八
とりまかす……七九八
とりもちて……七六四
とりもてる……六六四
とをよるこらは……八〇五

ナ

ながきいのちを……八〇五
ながこふる……七九八
ながつきの……八七八
ながなけば……二九三
なかのみなとゆ……八二五
ながるるなみだ……九七一
ながるるみづの……一一四
ながるるみづも……一一四
ながれふらふ……六一〇
なきさはの……三七一
なくさつきは……八七八
なぐさめかねて……六一〇
なぐさむる……六二九・七三八
なくとりの……七三八・一〇〇五
なぐはし……八二五・九二二
なぐはしき……三〇四
なげきつるかも……九九七
なげきも……六六五
なげくらむ……五六八
なげけども……七六四・七九八
なせるきみかも……一六九
なちりみだれそ……九四
なつくさか……四二〇

なつくさの……二一〇・五一八・五六八・六二九
なつぬゆく……三六四
なづみこし……七六五・七九九
なにしかも……六二八
なのみもたえず……六二九
なのみをききて……七三九
なびかひし……六一〇・六二八
なびきしいもは……七三八
なびきねしこを……五四四
なびきわがねし……五六八
なびくがごとく……六六四
なびけこのやま……五一八・五六八
なみこそきよれ……五一八・五六八
なみのうへゆみゆ……二七〇
なみのとの……八二五
なみのむた……五一八・五六八
なみをかしこみ……二〇三
なよたけの……八〇五
ならやまこえて……四二〇
ならやまをこえ……四二〇

ニ

にぎたづの……五六八
にぎはだすらを……六一〇
にてしゆかねば……七三九
にはたづみ……九七一
にはよくあらし……二六四・二七〇

ヌ

ぬえどりの……六二九
ぬきかへ……八七八
ぬごとに……六六四
ぬじまがさきに……二一〇
ぬじまのさきに……二〇三・二一〇
ぬじまのさきの……二一七
ぬにかぎろひの……六三
ぬのへのうはぎ……一六五
ぬばたまの……一〇三・六一〇・六六五

ネ

ねにさへなきし……三四六
ねもころに……七三八

ノ

のちもあはむと……七三八
のどにかあらまし……一一四
のぼすらむ……八八五
のぼりたち……四七七

ハ

はがひのやまに……七六四・七九八
はかりしときに……五七六
はしきつまらは……八二五
はしきやし……五六八・六二九
はしきよし……五一八
はじめたまひて……九二三
はじめのときし……五七六
はしりでの……七六四
はたすすき……五〇四
はたのなびきは……六六四
はつせのやまの……三二八
はつせのやまは……五〇四
はなかざしもち……四七七
はなたちばなを……八七八
はなちどり……一〇七・九五五
はなちらふ……四五二
はなをりかざし……六二八
はにやすの……一三二・六六四・九二二
はひにてませば……七九九
はふくずの……八七八
はふつたの……五四四
はふりいまして……六六五
はまかぜに……二一七
はらひたまひて……六六三
はるくさの……四二〇・八五一
はるさりくれば……六六四
はるとりの……六六五
はるぬやくひの……六六四
はるのはの……七六四・七九八
はるばなの……五七六
はるひかきれる……四二〇
はるびのきれる……四二〇
はるふゆかたまけて……一〇〇三
はるべは……四七七・六二八
はるやまと……九二二

ヒ

ひきてのやまに……一四四

ひきでのやまに……一五一
ひきはなつ……六六四
ひさかたの……一〇〇・一二八・一九五・五七六・六六三・八五一・八六四
ひさしきときゆ……三六一
ひじりのみやゆ……四二〇
ひじりのみよゆ……四二〇
ひつきとともに……八二五
ひつきの……五七七
ひつきもしらず……一二八
ひとおともせねば……九九九
ひとこそみらめ……五一八・五六八
ひとしりぬべみ……七三八
ひとぞまさりて……三四六
ひとのいへば……七六五・七九八
ひとひには……九九二
ひとめにこひて……一〇七
ひとめをおほみ……七三八
ひとりだに……七三九
ひとをやはせと……六六三
ひなにはあれど……四二〇
ひなのながぢゆ……二五六
ひなみしの……七一
ひのいりぬれば……九九七
ひのことごと……六六五
ひのたての……九二三
ひのつまでを……八八五
ひのみかげの……九二三
ひのみかどに……八八五
ひのみこ……五〇四・八六四・八八五・九二三
ひのみこは……五七六
ひのめもみせず……六六四
ひのよこの……九二三
ひはてらせれど……一〇三
ひむがしの……六三・九八六・九九二
ひもふきかへす……二一七
ひらのおほわだ……一三
ひるは……七九八
ひるはも……七六四
ひるめのみこと……五七六

フ

ふえのおとは……六六四
ふかみるおふる……五四四
ふかみるの……五四四

ふかめてもへど……五四四
ふきなせる……六六三
ふすまぢを……一四四・一五一
ふたりわがねし……七六四・七九八
ふぢえのうらに……二二八
ふぢはらがうへに……八八五
ふぢはらの……九四六
ふぢゐがはらに……九二二
ふときこころは……一〇〇一
ふとしかす……五〇四
ふとしきまし……五七六
ふとしきまして……五七六・六六四
ふとしきませば……四五二
ふなぎほひ……四五二
ふなでするかも……二九
ふなのりすらむ……三八
ふねうけて……八二五
ふねちかづきぬ……二一〇
ふねなめて……四五二
ふねまちかねつ……三
ふねよせかねつ……二〇二
ふはやまこえて……六六三
ふみおへる……八八五
ふゆごもり……六六四
ふゆのはやしに……六六四
ふりさけみつつ……六六五
ふりみだる……二七四

ヘ

へみれば……八二五

ホ

ほかにむきけり……一五二
ほととぎす……八七八
ほのかにだにも……七六五

マ

まうらがなしも……九九九
まかぢしじぬき……三八一
まがみのはらに……六六三
まかりぢの……一五四
まがりのいけの……一〇七
まきさく……八八五
まきたつ……五〇四・六六三

まきのたつ……二〇一
まきのつまでを……八八五
まきばしら……一〇〇一
まくさかる……五九
まくらづく……七六四・七九八
まくらとまきて……一六九
まくらになして……八二五
ますらをと……五四四
まそかがみ……八五一
またかへりみむ……二三
またみなむかも……九八九
またもあはめやも……一三・一〇九
まちかこふらむ……八二五
まちつつあらむ……一七二
まつるみつぎと……四七七
まつろはず……六六四
まつろはぬ……六六三
まどはせる……一三六
まねくなりぬる……五七七
まねくゆかば……七三八
まゆみのをかに……五七六・九八一
まゆみのをかも……九六〇
まをしたまへば……六六四

ミ

みあらかは……八八五
みあらかを……五七六
みいくさを……六六三
みえぬおもへば……七六五
みがきのやまに……八七三
みかどのはらに……六六四
みかどのひとも……六六四
みかりたたしし……七一
みかりたたせる……八五一
みくまぬの……三三八
みけむかふ……六二八
みこころを……四五二
みこととはさず……五七七
みこながら……六六三
みこのみかどの……一〇〇
みこのみかどを……六六四
みこのみことの……七一・五七六
みこのみやびと……五七七
みざりしものを……九六二

みしたまはむと……八八五
みたたしの……九七一・九七七・九七九・九九七
みだれいづみゆ……二六四
みだれてきたれ……六六四
みだれども……八一
みちしらずして……一三六
みちだにしらず……八二五
みちゆくひとも……七三八
みづがきの……三六一
みづこそは……九二二
みづつたふ……九八九
みづにうきゐて……八八五
みつのさき……二〇二
みづほのくにを……五七六・六六四
みづやまと……九二三
みどりこの……七六四・七九八
みなにかかせる……六二九
みなわすらえぬ……一一七
みなわすれせぬ……一一七
みにそへねけむ……八〇五
みにそへねねば……六一〇
みぬめをすぎて……二一〇

みねにたなびく……三三二
みまくほしけど……七三八
みまどふまでに……六六四
みみなしの……九二二
みもたなしらず……八八五
みもたなしらに……八八五
みもろの……八七三
みやこをおきて……五〇四
みやぢにぞする……一〇〇八
みやでもするか……九六二
みやばしら……四五二・五七六
みやまもさやに……八一
みゆきふる……五〇四・六六四
みれどあかざらむ……三四八
みれどあかぬ……二二
みれどあかぬかも……三七七・四五二
みれどもあかず……六二八
みれどもあかぬ……八二五
みればかなしも……四二〇
みればさぶしも……一五四・四二〇
みゐのましみづ……九二三

ム

むかしのひとに……一三
むこのうみの……二七〇
むれゐつつ……九六七
むろがみやま……五四四

メ

めごともたえぬ……六二八
めしたまひて……六六三
めしたまへば……九二三
めすこともなし……九八六

モ

もくさくみちを……九八九
もちこせる……八八五
もちづきの……五七六　六二八
ものいはずきて……三六六
ものしなければ……七六四・七九八
もののふの……二八二・八八五
もみぢかざし……四七七
もみぢかざせり……四七七
もみぢばかざし……六二八
もみぢばの……五九・一三九・五四四・七三八
もみぢばを……八七八
もみぢをしげみ……一三六
ももえつきのき……七九八
ももしきの……四二〇・四五二
ももたらず……八八五
ももづたふ……三七七
ももへなす……三三八
ももへにも……三四八
もゆるあらぬに……七六四・七九八
もりにみわするゑ……三七一
もろひとの……六六四

ヤ

やがみのやまの……五四四
やくもさす……三五五
やすみしし……四五二・四七七・五〇四・六六三・六六四・八五一・八六四・八八五・九二二
やそうぢがはに……八八五
やそうぢがはの……二八二
やそくまごとに……五一八・五六八
やそのしまみを……三七七

やたこらが……一〇〇八
やつりやま……二七四
やどるたびびと……五四
やのしげけく……六六四
やへかきわけて……五七六
やへぐもわきて……五七六
やほよろづ……五七六
やまかはの……四五二
やまかはも……二九・四七七
やまさびいます……九二二
やまずいでみし……七三八
やまずゆかば……七三八
やまぢおもふに……一五一
やまぢしらずも……一三六
やまぢをゆけば……一四四
やまつみの……四七七
やまとしまねは……三〇四
やまとしまみゆ……二五六
やまとの……九二三
やまとをおき……四二〇
やまとをおきて……四二〇
やまのまに……三二八
やまのまゆ……三三二
やまびことよめ……三七九・八七三
やまもこえきぬ……五一八・五六八
やむときもなし……九六七

ユ

ゆきかよひつつ……八六四
ゆきけむひとの……八七八
ゆきじもの……八六四
ゆきすぎがてに……二三四
ゆきてもつげむ……八二五
ゆきにこまうつ……二七四
ゆくとりの……六六四
ゆくふねの……八二五
ゆくへしらずも……二八二・五七七
ゆくへしらにす……五七七
ゆくへをしらに……一三二
ゆくみちを……一〇〇八
ゆはずのさわぎ……六六四
ゆふかはのかみも……四七七
ゆふかはわたる……四五二
ゆふぎりに……六一〇

ゆふぎりのごと……八〇五
ゆふさりくれば……五〇四
ゆふされば……五六八
ゆふづつの……六三九
ゆふなみちどり……二九三
ゆふのはやしに……六六四
ゆふはなの……六六四
ゆふはふる……五一八
ゆふべにたちて……八〇五
ゆふべになれば……六六五
ゆふべには……八〇五
ゆふみやを……六二八
ゆみとりもたし……六六三
ゆゆしきかも……六六三
ゆゆしけれども……六六三

ヨ

よけくもぞなき……七六五・七九九
よさしたまへば……六六三
よしぬがは……四七七
よしぬのかはの……二三・三三五
よしぬのくにの……四五二
よしぬのやまの……三三二
よしぬのやまは……九二二
よしゑやし……五一八・五六八
よそにかもみむ……八七八
よそにみし……九六〇
よそひまつりて……六六四
よどこもあるらむ……六一〇
よどこもかれなむ……六一〇
よどにかあらまし……一一四
よどむとも……一一三
よなきかはらふ……一〇〇五
よのなかを……七六四・七九八
よびたてなくも……三七九・八七三
よものひとの……五七六
よりあひのきはみ……五七六
よりこせぢより……八八五
よりてあれこそ……八八五
よりてつかふる……二九・四七七
よりねしいもを……五一八
よるは……七九八
よるはも……七六四
よるひるといはず……一〇〇八

よりふすきみが……八二五
よろしききみが……六二八
よろしなべ……九二三
よろづたび……五一八・五六八
よろづよと……六六五
よろづよに……六六四・六六五・八七八・九五一
よろづよまでに……六二九
よわたるつきの……一〇二

ワ

わがおほきみ……五〇四・五七六・六六四・八五一・八六四・八八五
わがおほきみかも……八五一
わがおほきみの……一一七・四五二・四七七・六二八・六二九・六六三・六六四・六六五
わがおほきみは……一九五・三七一
わかくさの……八〇五
わがくには……八八五
わがこぎくれば……八二五
わがごとか……三四三
わがこふる……七三八・七六四
わかごもを……八五一
わがそでふるを……八九
わがたちきけば……七三八
わがつくる……八八五
わがつまのこが……五六八
わがなくなみだ……九六七
わがひのみこの……八五一・九五一・九五八
わがふたりみし……七六四・七九八
わがふるそでを……七七・九八
わがみかど……九八五
わがやをみれば……一五二
わかれきぬれば……八一
わかれしくれば……五四四
わきばさみもち……七六四・七九八
わぎもこが……三七五・七三八・七六四・七九八
わぎもこと……七六四・七九八
わごおほきみ……九二二
わざにはあらず……三四六
わざみがはらの……六六三
わすれたまふや……六二八
わすれておもへや……三六四
わたづの……五一八
わたらひの……六六四
わたらふつきの……五四四
わたりのやまの……五四四

わたるひの……七三八
わたれども……一四九
われしかなしも……九八五
われはいもおもふ……八一
われはことごと……一〇〇八
われをかも……一七二

ヲ

をさめたまひ……六六三
をじかのつぬの……三六四
をしけども……五四四
をすくにを……六六三・八八五
をちこちの……八二五
をちぬすぎゆく……一〇九
をちぬにすぎぬ……一〇九
をちのおほぬの……六一〇
をとこじもの……七六四・七九八
をとめがともは……九四六
をとめらが……三八・三六一
をとめをすぎて……二一〇
をりかざさむと……八七八

昭和十二年五月五日印刷
昭和十二年五月十日第一刷發行
昭和十二年十月五日第二刷發行

柿本人麿 評釋篇卷之上
定價五圓五拾錢

著者 齋藤茂吉

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者 白井赫太郎

精興社印刷

發行所 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波書店
電話九段(33)〈一一八七番 一一八八番 一一八九番 一一八〇番 一〇二二番(小賣部專用)〉
振替口座東京二六二四〇番

(大森製本)